國文註釋全書

文學博士　本居豐穎
文學博士　木村正辭　校訂
文學博士　井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

緒言

一大和物語虚靜抄ハ木崎雅興ノ著ニシテ上下二卷ニ分テリ、大和物語ヲ解釋セルモノナリ、著者ノ直筆本ノ寫ヲ松井簡治氏秘藏セル、ガ、未ダ多ク世間ニ知レザル珍本ナリ、本書ハ之ヲ底本トセリ、

一大和物語錦繍抄ハ前田夏蔭ノ著、一名大和物語纂注トモ云ヘリ、上下二卷ナリ季吟ノ大和物語抄、眞淵ノ直解、井上文雄ノ冠注、清水濱臣ノ説共ヲ書キ集メ、且著者ノ説ヲモ加ヘタルモノ、寫本萩野博士秘藏セラル、本書ハ之ヲ底本トシ、本文ハ中略シタレドモ、異本對照ノ箇所ハ一モ之ヲ洩ス事ナシ、

一宇津保物語玉松ハ細井貞雄ノ著ニシテ五卷ナリ、宇津保物語ノ校訂本ニシテ、卷首ニ總論、年立、系圖、目錄等ヲ掲ゲタリ、本書ハ井上頼圀博士、所藏ノ寫本ニ據レリ、

一宇津保物語二阿抄ハ細井星阿山岡明阿ノ合著ナルガ故ニ二阿抄ト呼べり五卷

アリ、宇津保物語ノ難語ヲ摘出シテ注解シタルモノ、細井貞雄ノ奥書ニ文化十二年六月五日借得片山氏之許而起筆今玆十三年五月七日未後令抄出畢雖非無不審之事其儘存書焉他日可令追考者也ト云ヘリ、井上博士著者直筆ノ稿本ヲ秘藏セラル、本書ハ之ヲ底本トセリ、

一宇津保物語考證ハ淸水濱臣ノ著ニシテ一卷ナリ、宇津保物語ノ語句ヲ抄出考證シタルモノ、本書ハ井上博士所藏ノ寫本ヲ底本トセリ、

一落窪物語證解ハ甫喜山景雄ノ著ニシテ六卷ナリ、落窪物語ノ語句ヲ注解スルニ當リ、一々證據ヲ擧ゲテ詳解セリ、本書ハ學習院圖書館ノ寫本ニ據レリ、

明治四拾貳年八月

編者識ス

目録

以　上

大和物語虚静抄

大和物語錦繍抄

全

大和物語虛靜抄

凡書を釋するならひ先題號の心を述る定れる義也といへり此物語をやまと丶號する事或書云此物語は敦慶親王（宇多皇子）侍女に大和といふもの美色有て和歌をよくす藤實頼（號小野宮）歌を好む履敦慶親王に請て大和とむつまし所謂大和物語は此女の筆也云々やまとと云る女房の作なるゆへ此物語の題號とすといは丶伊勢物語は伊勢の筆作故に伊勢物語と云るに准ずべきにや又袋草紙（清輔朝臣作）云其名目和語之由歟云々此國をやまと丶號する事其義まち／＼也神代卷口訣（忌部正通作）云耶麻止者山跡也云々又曰神武天皇都開大倭國以本處之名總稱大八州（天平勝寶改爲大和）或説云やまとは山戸也延喜開題記に上古は居所を戸といふとあるよしなれば人家の事なり上古天先なり地のちにかたまり國のうち水おほく土すくなきときにあたりて人はしめて出生せしかば平地は水澤汚池にして泥土かはかす盧原なとのみにて水難に不堪人々高阜の燥乾なる方にかたまり居らされば安する事なしゆへに諸人と／＼く山に住しなり後になりてやう／＼智量も出來て己／＼か居所を定て穴處巢居の營をしれりはしめかの高燥によりて山に居所を定たる事なれば山戸と名つけたるへし是は日本にもかきらされともとりて此國の名とせり云々案するに戸は人家也民居を戸といふ歌にも松の戸草の戸なといひつれは人家になる也明曆帝御製にあし曳のやまと丶いふも山の跡これよりなれる此國の名そとよませ給へるは山の跡といふ義によりてあそはされしにや侍らん猶説々多し

作者の事袋草紙には作者不審云々歌林良材（一條禪閤御作）云花山院の作らせ給へる大和物語にも此事見えたり云々此御説によらば花山院御作無異論にや花山帝と稱し奉るは大鏡（藤爲業作）云御いみなもろさた冷泉院第一皇子也御母贈皇后宮懷子と申太政大臣伊尹の第一の女也此みかと安和元年つちのえたつ十月廿六日御母かたのおほち一條の御家にて生れさせ給ふ同二年己巳八月廿二日東宮にた丶せ給ふ御年二歳天元五年壬午二月十五日御元服せさせ給ふ御歳十五永觀二年甲申八月廿八日位につかせ給ふ御年十七寛和二年丙戌六月廿三日夜あさましく候し事は人にもしらさせ給はてみそかに花山寺におはしまして御出家入道せさせ

給へりしとぞ御年十九世をたもたせ給ふ事二年そのゝち廿二年おはしましき云々又云寛弘五年二月八日にうせさせ給ふ御年四十一云々又或説に在原滋春（業平朝臣男號在次君）の所作といへり此説又いふかしくおほえ侍る此物語云かくて人の國にありき〳〵てかひの國にいたりてすみける程にやまひしてしぬとてよみたりけるかりそめの行かひちとぞ思ひしを今は限りのかとてなりけりとよみてなんしにける云々本文にも如此あるうへは滋春の一筆にあらさる事推て知るへし然とも彼人の作といへるもゆへあるにや先哲の説なれはしゐていひかたし又前にもいへる敦慶親王の侍女大和の作といへるも其明證侍る歟伊勢物語は業平朝臣の日記とも又伊勢の筆作とも一定しかたきによりて樣々の異説あり京極黄門御自筆本奧書云加之此物語名字非彼筆者何稱伊勢乎云々伊勢物語の作者定家卿は伊勢の筆といふに御心よせにて此物語の題號伊勢の筆ならずは何ぞいせものかたりといはんやとかき給へるなれは此物語も其類にて大和といふ女房の作なるゆへ大和物語と稱し侍るならん此物語大和の作といふによりて猶考へ侍るに此物語のうちにも此女房わりなき色好みにて小野宮殿を戀奉りうちに

おはしけるに夜中人にもしらせず車に乘てうちに參り左衞門の陣に車をたてゝわたる人を呼てみつから聞えさせん事ありとて小野宮殿をかの陣まて呼出し奉りし事ありその次にいかてかくはとの給ひけれは何かはいとあさましう物のおほゆれはとまてかきて筆を留たり案するに大和久しく小野宮殿の參り給はぬを戀わびて夜中車にのりて左衞門の陣まて來り小野宮殿を呼出しまいらせすてに對面せしうへとたえ給へる恨をのへんとする所にいたりてかく筆をとゝめけるは我餘りわりなきすき心の世に露顯せん事を耻らひて此所にいたりて書さしけるならん是等の趣を見れはかの女房の筆といはんもつきなきにはあらさるへし又袋草紙に其名目和語之由歟とあるも愚見にはいかにぞやおほえ侍る又大和の書る故大和物語と號する事は伊勢の筆作故伊勢物語といふ類にて其義はよくかなひ侍れとも大和の作といへる事たゝ或書のうちにて見出たるはかりにてその書も慥ならすそのうへ舊記にもあらねはしゐてとり用ひかたしたゝかの書によりて愚意の了簡をしるし置迄也凡此物語にかきらす世に翫ふ物語の作者も異說さま〳〵あ

る事也源氏五十四帖の作者も紫式部一筆に決すへき由古實の說なれとも宇治大納言物語云越前守爲時こて才ありて世にめてたくやさしかりける人は紫式部か親也此爲時源氏は作りたる也こまかなる事ともをむすめにかゝせけるとそ云々此說による時は爲時作也又或書に云御堂殿（道長公）御本源氏物語奥書（權大納言行成に淸書させられ大齋院進せられし書也）云此物語世にみな式部か作とのみ思へり老比丘筆を加る所也云々此趣ならは式部の一筆とも定かたしまた榮花物語は赤染右衛門一筆のやうにいふあれと鶴のはやしの卷まては赤染の筆にて殿上の花見の卷より以下は出羽辨あひついて書りとそ是等の類もあれは此物語もあなかち誰一筆と治定しかたし猶いはまほしき事も侍れと事なかけれは略す師傳をうけて一決すへしといへり

物語時代の事袋草紙云先つ朱雀院の御時天暦の始事歟先帝は延喜の御字也大きおほいまうちきみと號は貞信公也有兼盛幷檜垣嫗等哥也云々

此物語を伊勢源氏なとにくらへてはをとりさまに沙汰し侍る說もあるよしなれと八雲御抄（順德院御記）學書の部に物語伊勢上下大和上下源氏五十四帖と次第して此外物語非二强最要一とかゝしめ給へば伊勢源氏にもおしならひて古人も稱美ありし事しられ侍る和歌作者は人丸業平忠岑遍昭伊勢小町なと世にすくれたる堪能也又此物語を本據にて先達の詠作もあまた侍るにや井手の下帶にかけてはあふせうれしき心をつらね姨捨山の月によせてはなくさめかたき思をのふるにいたるまてすへてこの物語より出すといふ事なしされは和歌の浦波に心をよせん人は熟讀翫味すへきものをや

此物語數本あり淸輔朝臣說にも本々不同云々又歌林良材井手の下帶の段にも諸本如此とかゝしめ給へは本々數多ある事しられ侍る六條家本といふものあるよしなれといまた見出侍らすと註する所の本はやつかれ少年の時京師に遊ひ侍りし折定家卿御自筆本の寫し也とて或人の傳へられしを用ひ侍りて註釋を加へ侍る定てひか事のみそ侍らんもとより身におはぬ抄出なれははたけすいれんとかやの風情にてかたはらいたくおこかましけれとやう／＼齡も耳順にかたふき淺生今いく程かと思へは年來聞をきつる事のむなしく朽はてんもほゐなく又子弟等か形見にとゝめ

をくへき一ふしもなけれはせめては此物語のほゝゆかみたる註釋をなりともなからん跡にのこさまほしくけふの我身を忘れてあすの嘲をかへり見さるなるべし

凡和語のならひこと葉は同しくてその用ひ所によりて心かはる事まゝ多したとへはかたみといふ言葉は筐筐形見同訓なるうへ又かたみに袖をしほりつゝとよめる歌にては互にといふ心也猶委奥に注これらのおもむきをよく辨へしらされは古歌を見又自歌をよむうへにも心得違ひすくなからす故に此物語のうち管見の及ふ所は逐本文てその下に註し侍る

名所枕こと葉草木なとの類たゝ大やうを註してしゐて不及沙汰歌をよむに其詮なきゆへ也されは京極黄門も異説には山をはあしひき空をは久かたとよむとはかりにて凶日來滕の形なといふことはしらすと僻案抄にも記し給へり又五條三位しのゝはくさのかりにてもといふ歌をよみ給へるをある人しのゝはくさとはいかなるものそと尋ね侍りしにたゝやさしき草の名なれはよみ侍るとこたへ給ひしとかや新古今東野州抄の趣侍れはたゝその梗概をしるし侍る近來好事の者歌書なと註するにさま〱の異説をいひとり〱に沙汰してふかく鑿するかゆへに却て和歌の本意をうしなふ事多しされはよしの山はいつくそと人尋ね侍らはたゝ花にはよし野もみちにはたつたをよむ事と思ひ侍りてよむはかりにて伊勢やらん日向やらんしらずとこたふへき也いつれの國と才覺はおほえて用なしおほえんとせねともをのつからおほえらるれはよしのは山としる也と正徹の記しをける跡にならひてしゐて是を沙汰せす

凡此物語にいつる人々の世系家譜疑はしき事まゝありといへとも系圖等の書博く閲せされは筆をさしをく事多し猶かさねて考へしるすへし

此抄引用する所の諸書の題毎度出るものは厭長て纔に一二字を記す古今集を古新古今集を新古伊勢物語を伊物とはかり書て餘は準して知へし源氏物語は巻の名はかりを記す紛なき故也又此抄に源氏物語を取分て引用するは八雲御抄云詞につきて不審をもひらく方には源氏物語に過たるはなしとあるによれりおなしく引用る所書籍のうち題名多憚ものもまゝ有之故にその類は題號を不出只或書或史或抄なとゝ書

之

凡世に翫ふ物語あまた有か中に伊勢源氏此物語を勝れたりとす伊勢源氏は先哲の註釋數多ありて世上に流布するもの棟にみち牛に汗する類ひなるへししかあれは此物語にも先哲の抄物なくやはあるへきなれともふかく函底にひめをくにやいまた見出侍らす纔に北村氏の一抄ありて世に傳へり彼抄のおくにかゝるあらまし事たに此物語に侍らねはと有彼作者もいまた見及はさるよしなれは彼抄の外には世に流布する物なきにやあらむされはいとゝしるへ闇なきにたとる心ちしておほつかなき事のみ多かれとよしやものしれるますらおのまへに出すへきにもあらすもし世におちゝる事もあらはわらはへのもてあそひ草ともなりねかしとてなん時に安永五年のとし中冬下浣凍れる硯を叩て此廬靜稿に筆をとりぬ

在原滋春系圖

桓武第一人皇五十一代

平城天皇　阿保親王（三品贈一品）　在原業平（從四上 右馬頭 右中將）

棟梁　筑前守　左衛門　從五位上　歌人

師尚　右少將　從四位上　母齋宮恬子　高階茂範爲子

○滋春　號在次君　高階岑緒爲子　歌人　大和物語作者

○大和　敦慶親王　侍女　不詳其出自

大和物語廬靜抄卷上之一

若州小濱　木崎雅興著

亭子院のみかどいまはおりゐ給ひなんとするころ弘徽殿のかへにいせのこのかきつけゝる

亭子院（拾芥云七條坊門北南西洞院西二町 寛平法皇御所元東七條后温子家）宇多帝の御事也此院にまし〳〵けるゆへかく稱し奉る大鏡云小松帝第三の王子也御いみな定省御母太皇后宮班子と申き二品式部卿贈一品太政大臣中野親王の御女也此帝貞觀八年丙戌五月五日生れ給ふ云々又云仁和三年戊申八月廿六日東宮にたゝせ給ひて同日位につかせ給ふ御歳廿三云々又云寛平九年丁己七月五日おりゐさせ給ふ昌泰申三年（ニイ未）つちのとのひつじ十月十四日出家せさせ給ふ御名こんかうかく（金剛覺）と申き承平元年七月十九日うせさせ給ひぬ御歳六十六云々おりゐさは御位をすへらせ給ふ御事也紅葉賀云みかさおりゐさせ給はんの御心つかひちかうなりて云々　弘徽殿（拾芥云七 閑院西）伊勢のごさはかしつきていふ也此物語にも五條のこすけのこなどあり總角云いせのこもかうこそはありけめと書り御の字也大鏡には此所いせの君と書り伊勢は大和守繼蔭（眞夏ノ末 家宗ノ男）の女也七條后温子にみやつかへし寛平法皇祚にまし〳〵ける時にもなれつかへ奉りて行明親王を生り三代實錄四十九に伊勢守從五位上藤原繼蔭と有伊勢父の此時に生れしゆへかく名つけたる歟　かへに歌書事（後撰 廿）女の身まかりてのちすみ侍りける所のかへにかの侍りける時書つけて侍りける手を見て云々壁にかくとあれはとて直にかへに書にあらす物に書ておしつけたるなるへし伊物に狩衣のすそをきりて歌をかきてやると有其類ならん

わかるれとあひもおしまぬもゝしきを見ざらん事の何か悲しき

帝おりゐさせ給へば我も内裏を退出すべければ名殘をおしみてよめる也我はかくなごりおしく思へとも内裏は無心にして我まかつるをおしむ心も有へからずされはあひもおしまぬもゝしきや然るを何とてさのみ見ざらん事のかなしきそやさはあるましきものなれども年頃住なれしなごりはせんかたなく悲しきとの心也無情の物に對して心あるや

うによむ此道のならひ也槇柱云つねによりゐ給ふひんかしおもての柱を人にゆづる心ちし給ふも哀にて姫君ひはた色の紙のかさねたゝいさゝかに書て柱のわれたるはざまにかうかひのさきしておし入給ふ今はとて宿かれぬともなれきつる槇の柱は我をわするな　うたゝね作阿佛云常によりゐつる柱のあら〳〵敷かなつかしからざりつるも立はなれんはさすがに心ぼそくて人見わくべくもあらずちいさくかきつくれとめはやき山かつもやとつゝましながら　忘るなよあさ木の柱かはらすは又きてなるゝ折もこそあれ　是等引合て見るべし

もゝしきは禁中を申百官の座を敷所なれば也とぞ或書云もゝしきといふ和語の心は内裏は百官の座ある故に百敷の心也といふ是は常の説也然ども萬葉を考るに此詞數しらぬ中に多く百礒城と書その外は百師木百師記など書て一所も百敷百舗などかく事なし況や古事記に雄略天皇もゝしきの大宮人とよませ給へる御歌有彼頃までは百官の沙汰なければ上の説おほつなし

百礒城と書につけて案ずるに崇神天皇礒城瑞籬の宮にまし〳〵て世をしろしめす事六十八年めでたき御代なれは此宮を祝て百しきとはいひ初けるにや古事記に礒城を師木とかゝれたるに萬葉にも百師木とかけれは彌此義にやと心よせ侍り云々此説[illegible]せろに叶たりといへとも違ふ所あれば書加へ侍る　榮花松のしつえ云まことや此しはす八日おりゐさせ給ふ此ちかく成てはおもくわつらはせ給ひておりさせ給ふにいとあはれ也あびもおもはぬとこきてんのかべにいせか書つけけんなど思ひ出られて何事もめとまる云々是は後三條院御譲位の折の事也　後撰十八　昔あひしりて侍ける人のうちにさふらひけるもとに遣しける　山川の音にのみ聞もゝしきを身をはやなから見るよしも哉　いせの歌也　又亭子院おりゐ給はんとしける秋よみてける　白露はをきて變れと百草のうつろふ秋は物そ悲しき　是もいせの讀る此物語と同時の作なるへし引合てみるへし新古雜下に入

とありけれはみかと御らんしてそのかたはらにかきつけさせ給ふける

身ひとつにあらぬはかりををしなへて行めくりてもなにか見さらん

身とは御みつから玉體をさしてよみ給り帝は御身のみにもあらすつき〳〵もましますなれはをしなへて宮つかへし奉り內裏を見奉れとの御製也後撰十九亭子院のみかとおりゐ給ふける秋弘徽殿の壁にかきつけけるいせ　別るれとあひもおしまぬもゝしきをみさらん事や何か悲しきみかと御覽して身ひとつにあらぬはかりをしなへて行めくりてもなとか見さらん（いせ集には第四句行かへりてもと有）大鏡ニ云寛平延喜なとの御讓位の程の事なとはいとかしこくたしかにおほえ侍るをやいせの君の弘徽殿のかへにかきつけ給へり歌こそは哀なる事と人申し別るれとあひも思はぬ百敷を見さらん事の何か悲しきほうわうの御かへし身ひとつにあらぬはかりをしなへて行めくりてもなとかみさらんといへはかたはらなる人法皇のかゝせ給へりけるを延喜の後に御覽しつけてかたはらにかゝせ給へるとも承るはいつれかまことならん云々

となんありける

みかとおりゐ給ふて又のとしの秋御くしおろし給ふて所〳〵山ふみし給ふておこなひ給ふけり

宇多帝御讓位御落飾の事大鏡の說前に出秋とは大やうに書るなるへし　山ふみ　高野熊野なとへ御參詣有し事なるへし玉薹云山ふみし侍りてあはれなる人をなんみ奉りつけたりし云々初瀨寺に詣し事をいふ也高野初瀨寺なとの名山靈跡を尋ぬるを山ふみといふなるべし又玉二尋花といふ事を　鳥の聲霞の色をしるへにて面影匂ふ春の山ふみ定家卿是は常の山路を行意也同し詞にても遣ひ所によりて心變るへし後撰十五法皇はしめて御くしおろし給ひて山ふみし給ふあひた后をはしめ奉りて女御更衣なをひとつ院にさふらひ給ひけるみとせといふになんみかとかへりおはしましける云々

ひせんのせうにてたちはなのよしとしといひける人うちにおはしける時殿上にさふらひて御くしおろし給ふければやかて御ともにかしらおろしてける人にもしられ給はてありき給ふ御ともにこれなんをくれ奉らてさふらひける

花鳥餘情云備前掾橘良利肥前國藤津郡大村人也出家して名寛蓮爲亭子院殿上法師云々大鏡には肥前掾と有兩說也　　うちにおはしける時とは法皇

御在位の折をいふ　殿上禁秘抄に見ゆ人々の候せらるゝ所也
かゝる御ありきし給ふいとあしき事なりとてうちより少將中將これかれさぶらへとて奉らせ給ふけれとたかひつゝありき給ふ
うちより　内裏を申延喜帝の御事なるへし少將中將誰ともなし　たかひつゝ　違ひつゝ也
法皇のおもき御身にてかろ／＼敷遠路をありかせ給ふ事まことによからぬ御ふるまひなれは中少將なと供奉の爲奉らしめ給ふなるべし
いつみの國にいたり給ふてひねといふ所におはします夜ありいと心ほそうかすかにておはします事を思ひてかなしかりけりさてひねといふ事を歌によめと仰ことありければ此よしとし大とく
ひね　舊は河内國也或史云元正天皇靈龜二年四月割河州大島日根和泉三郡始置和泉國云々續日本紀七云靈龜二年三月癸卯割河内國和泉日根兩郡令供珍努官云々　大とく　大とこともいへり五音通也法師をいふ此良利大德は無双圍碁達人也因て碁聖大德とも稱す延喜十三年五月三日奉勅作碁式獻之といへり抱朴子云善圍棊之無○者則謂之棊聖故嚴子卿馬綏明于今有棊聖之名焉云々
ふるさとのたひねの夢にみえつるはうらみやすらん又さとはねは
旅ぬにひねをそへてよめり新古十亭子院御くしおろして山々寺々修行し給ひける頃御ともに侍りていつみの國ひねといふ所にて人々歌よみ侍りけるによめる云々
とありけるにみな人なきてえよます成にけり其名をなん寛蓮大とくといひてのちまてもさふらひけり
みな人なきて感涙也伊物に船こそりてなきけりとも又かれいゐのうへに涙おとしてほとひにけりともあり　えよます成にけり　是も同物語にとよめりけれはみな人よます成にけりといひ又わらふ事にや有けん此歌にめてゝやみにけりなとある類也此大とくの歌不思議の秀逸なれは一座感涙におほれて歌もえよまてやみたりと也大鏡云肥前橡橘のよしとし殿上にさふらひける入道すけの御ともにこれのみつかふまつりけるされはくま野にてもひねといふ所にてたひねの夢に見えつるはともよむ

そかし人々なみだ落すことはりにあはれなる事哉云々

故源大納言宰相におはしける時

故は過去し人の事をいふ　紹運錄云大納言正三位（ニイ）源淸蔭陽成皇子母紀氏（[illegible]）天暦四年七月三日薨云々

京極のみやす所より亭子院の御賀つかふまつり給ふとてかゝる事をなんせんと思ふさゝけもの一えた二えたせさせて給へときこえ給ふけれは

京極（拾芥抄云土御門南京極西南北二町）御息所は本院左大臣時平公女（褒子）源氏註（稱名院殿御説）云御子をうみ奉りて後御息所と號するやうに此物語にはいつくにも見えたり云々又春宮の妃を御息所とも申六條の御息所は先坊の妃にて秋好中宮をうみ給へり一古二條の后の春宮の御息所と聞えける時云々榮雅抄云淸和春宮の御時也春宮まては后女御なといふ事なしされは御息所と號する也夢庵云御息所と號する事更衣をも女御をもいへり又明石中宮をも申き懐胞あるより御子を生給へるをは御息所と號するかと見えたり一禪はそれによるべからずとの給ひし也云々榮花月宴云此かた〳〵みな御子生れ給へるも有生れ給はぬ御息所たちもあまたさふらひ給ふ云々是によれは一條禪閤の御説よくかなへり褒子は宇多帝おりゐの後院に參り給ひて雅明親王載明親王なとうみ給ひて御息所と申き竹川に鬚黒の女（母玉鬘内侍）冷泉院の女御に參り給ひて程なく懐姙し給ひ御息所と申けるも此京極の御息所の例也とそ亭子院の御賀六十御賀也（拾遺十六）延長四年九月廿八日法皇六十賀京極御息所のつかふまつりける屛風の歌云々貫之集には延長四年九月とはかり有て何かとも見えす此御時御屛風歌十一是貫之つかふまつれり彼集に見ゆ年賀は四十歳よりはしめて十年に滿る毎に祝壽する也かゝる事をなんせんと思此御賀をし給はんとおほすゆへさゝけ物の事を淸蔭卿へあつらへ給へる也一えた二えた若菜上云こものよそえたおりひつものよそち云々四十賀なれはその數を用ひらるゝ也是は源氏四十賀を玉かつらのし給ふ時の事なり花鳥餘情云外記云延長二年正月廿五日御賀中務卿敦慶親王以下同兼輔朝臣執捧物惣卅捧（筝蕨之類或是預養之物盛小籠盛梅柳枝）次侍從以下執折櫃物惣卅捧（菓子等之類也）さゝけもの

入たるひけこを梅柳なとの枝につくるゆへ一えた二えたなといふなり初音云ひけこともひはりこなと奉れ給へりえならぬ五葉の枝にうつれる鶯も思ふ心あらんかし云々此ひけこは鶯の巣くへるかたをつくりてその枝につけたる也

ひけこをあまたさせ給ふてとしこに色々にそめさせ給ふけり

髭籠は御賀の捧物也　色々に染させ　髭籠を彩色する也枕草紙云ひけこのおかしう染たる五葉の枝につけたる云々　としこ後撰作者承香殿の俊子と今遣の詞書に在不詳其出自藤原千兼の妻なりし事此おくに見えたり

しきものゝをり物とも色々にそめよりくみなにかとみなあつけてせさせ給ふけりそのものともを九月つこもりにみないそきはてゝけり

敷物は洲濱なとのしきもの也　くみは糸也心はなとの糸なるへし緒をくみといふ也　橋姫云ほそくみしてはしのかたをゆひたる云々拾遺五天暦のみかと四十になりおはしましける時山科寺に金泥壽命經四十巻をかき供養し奉りて御巻數籠にくはへさせてすはまにたてたりその洲濱の敷物にあまたの歌めしてあしてにかける云々　みなあつけてとは俊子に清蔭卿のあつらへてせさせ給へる也いつれも九月晦日に出來たる也

さてその神無月ついたちの日此ものいそき給ふける人のもとにをこせたりける

物いそき給ふける人清蔭卿也としこのかたより歌ををこせたる也

千ゝのいろにいそきし秋は過にけり今は時雨に何を染まし

上句はかの御賀のまうけに色〳〵にそめよりくみなといそきし心也時雨は木の葉なとそむる物也今神無月に成て時雨する時節なれとちゝの色に急し秋も過ぬれはそのかひもなしいまはしくれに何をかは染ましと讀り新勅六大納言清蔭亭子院御賀のため長月の頭としこに申つけて色々にいとなみいそきける事過にける神無月の朔日申遣しけると有て此歌入たり

その物いそき給ふける時はまもなくこれよりもかれよりもいひかはし給ふけるをそれよりのちはその事

とやなかりけんせうそこもいはてしはすのつこもり
に成にけれは
せうそこ消息と書音信也文選七發云消息陰陽善曰消滅也息生也消曰消息謂寢也　文通にかきらす言傳なとするをもいふ
又案内する心に用ゆる所も有若紫云少納言にせう
そこして逢たり云々又同巻云入てせうそこせよと
の給へは云々是等あないの意也明石云ことなるせ
うそこもかよはさて云々是は文通なるへし
かたかけの船にそのりしらなみのさはく時のみ思
ひける君
又俊子歌也かたかけの船片欠にてかたわれ舟をい
ふ歟かとわとけされと五音通ず白波はさはくとい
ん爲にいつる也まもなくこれよりもかれよりもい
ひかはし給ふとある事也そのさはく時のみ思ひ出
給ひて事はてぬれは消息もし給はぬと恨てよめる
心なるへし
となんいへりけるをそのかへしをもせてとしこえに
けりさてきさらきはかりに柳のしなひ物よりけにな
かきなん此家にありけるをおりて
俊子別に千ゝの色にと讀て贈りたれと返歌なし此
度又歌よみてをくれとも返しなけれはそのかへし
をもせてといへり　さてとありて也　二月はかり
はかりといふ事所によりて心かはれり伊勢云彌生
はかりにかえての紅葉のいとおもしろきを折て云
々同し心也　柳のしなひ　催馬樂大路云あをやき
かしなひをみれは云々愚案抄云柳の糸のなかくう
つくしき心也云々　物よりけにとは伊勢歌に忘る
らんと思ふ心のうたかひにありしよりけに物そ悲
しきとある同意にて勝たる心也け文字すみてよめ
り
青柳の糸うちはへて長閑なる春日しもこそおもひ出
けれ
優なる歌也あをやき榮雅古今抄云あをやなきとい
ふへきを中略したる也云々又云うちはへてとは打ウ
延ニとかく折はへてと同し云云連續するやうの心也
されはその末になかくなとつゝくる歌多し　古七四
夕にかしつる糸のうちはへて年の緒なかく戀やわ
たらん　新勅六　うちはへて冬はさはかり長き夜に猶
殘りける有明の月　此のとかは暖和の意にあらす
長閑の心なるへし俊子のさはく時のみ思ひ出るさ

いふに答へてさはく時は勿論今又年かへり春に成て遲日の頃は物にまきるゝ事もなくつれ／＼なるまゝに一入思ひ出まいらするとの心也　しも此歌にては此詞心なし歌により力を入て見る所有此末に君は君にと今宵しも行とあるは氣味少しかはるへし

さてなんやり給へりけれはいとになくめてゝのちまてなんかたりける

になく　無二也　桐壺云になうあらためつくらせ給ふ云々　めてゝ　愛し賞美する心也

野大貳すみともかさはきの時うてのつかひにされて少將にてくたりけり

野大貳　小野好古也略して野とはかりいへり小野篁を野宰相といへり高階を高良峰を良といふかごとし　大貳は大宰帥の次官なり系圖云敏達御末篁孫小野葛繪男參議左大辨從三位康保五年二月十四日薨云々　すみともかさはき神皇正統紀云藤原の純友といふもの將門に同意して西國にて叛亂せしを少將小野好古をつかはして追討せらる天慶四年に純友はころさるこそ云々　扶桑略記云于時公家遣追捕使左近衞少將小野好古爲長官以源經基爲次官以右衞門尉藤原慶幸爲判官以右衞門志大藏春實爲主典卽向播磨讃岐等二國云々或史云承平四年甲午五月山陽道南海道賊起頃年國守驕逸視民如土芥衆皆怨之相謀作亂有藤純友者常歎不遇時至此欲乘亂而邀幸乃請爲伊豫掾以抑亂賊詔許之純友赴任私招賊徒誘曰汝等一旦勢窮何處保生不如從我賊欣然率噉純友卒之日以掠奪爲業時人謂之海賊純友贈太政大臣長良曾孫外師良範之子也云々　うてのつかひ　討手使也凰十九暦應元年つの國のうてのつかひにまかりて云々　禁秘抄追討宣旨云有僉議三關警固諸衞帶弓箭追討使給宣旨於陣邊大外記給其人作立給之歟又被召御前之時開弓場南戸參入也只時不開之直職事給宣旨云々

おほやけにもつかふまつり四位にも成ぬへきとしにあたりけれはむつきのかゝゐたふはりの事いとゆかしうおほえけれと京よりくたる人もおさ／＼きこえす

おほやけにもつかふまつり　内裏のみやつかへをいふ也此時好古五位の少將なれば四位にも成ぬへ

き年といふ也　むつきのかゝゐたふはり　正月の加階給也春は縣召と申て外國の人々をめして官に任せらるゝ也源氏抄云春の除目は縣召也そのうちにも京官を任する事は有也云々されは好古の加階の事いかゝあらんと思ひ給つるなるべし加階は位階を加ふるをいふ也匂宮云中將になりて御たふはりのかゝゐをさへ云々　おさ〳〵　箒木云おさ〳〵立をくれす云々註云治定の心也　伊物云文もおさ〳〵しからず云々闕疑抄云優也治也長也とあり

ある人にとへとしゐになりたりともいふある人はさもあらすともいふさたかなる事いかて聞むと思ふ程に京のたよりあるに近江守公忠の君の文をなんもてきたりけりいとゆかしううれしうてあけれはみれはよろつの事ともかきもてきて月日なとかきておくに

いかて　何とそしていふ意也　幻云まろか櫻は咲にけりいかて久しくちらさし云々續後拾十三　いかてと思ふ人に卯月のみあれの日はつかに逢て云々　近江守公忠系圖云大藏卿源國紀男從四位下近江守右大辨天慶九年卒云々拾芥云號滋野井辨云々歌仙三十六人のうち也放鷹のかたにも能心得たる人にて有しよし諸道に達せし人也

玉くしけふたとせあはぬ君か身をあけながらやはあらんと思ひし

玉くしげ　玉とは物をはめていふ心也又玉もて餝れる心も有へし　ふたみあけなどくしげの緣にて讀つねの事也　くしげは匣也匣と同し筥也禁中内藏寮の外に御服裁縫所を御匣殿と申也行幸にふたかたにいひもて行は玉くしげ我身はなれぬかけこなりけり是は大宮より玉鬘へ櫛筥を贈り給ふ時の歌なれば櫛筥勿論なれどもそれに不限大將辭しける表函を玉くしげと讀る事玉葉集十六に見えたり又人にたなこひの箱遣すとて玉くしげとよめるうた續後拾遺八にも入たりされば櫛箱に不可限すべて貝箱の惣名と見て無難歟新千八　玉くしげふたとせにはや成にけり明暮旅のなけきせしまに　あけは五位の袍色緋なればかくよめり　歌の心は遠くうてのつかひに出立給ひしよりはや二とせになれども位階升進もなくもとのまゝ五位の袍にておはせ

んとは思はざりしと也やはかへる心也後撰十五小野好古朝臣西の國のうてのつかひにまかりて二とせといふ年四位にもかならずまかりなるへきをさもあらずなりにければかかる事にしもさゝれたる事のやすからぬよしをうれへをくりて待りける文の返事のうちに書つけて遣しけると詞書有て此歌入たり

これを見てかきりなくかなしくてなんなきける四位にならぬよし詞にはなくてたゞかくなんありけり

これを見て好古の見て也　後撰には返歌ありあげなから年ふる事は玉くしけ身のいたつらになれはなりけり公忠集には此物語におなじくかへしは見えず

前坊の君うせ給ひにければ大輔かぎりなくかなしくのみおほゆるにきさいの宮きさきに立給ふ日に成にければゆゝしとてかくしけりさりければよみて出しける

先坊の君とは薨去ありし春宮の御事を申也坊とは春宮のおはします宮をいふ唐名にも春坊と申よし賦原抄に見ゆ延喜の皇子保明親王の御事也御母は中宮穏子昭宣公基經の御女なり保明親王延長元年三月廿一日薨し給ふ諡文彦太子立后は延長元年四月廿九日女御穏子中宮に立給ふ　大鏡村上天皇紀云御母后穏子延喜三年癸亥　前坊生れさせ給ふ御年十九同廿年女御宣旨くたり給ふ御年廿六同廿三年延長元年也みつのとのひつし朱雀院生れさせ給ふ同四月廿九日后の宣旨かうふらせ給ふ御年卅九やがてみかとうみ奉り給ふおなし四月に后にもたゝせ給ひけるにや四十にて村上は生れさせ給ひけり云々又云太政大臣基經大臣は長良中納言の三郎におはす此もとつねのおとゝの御むすめ醍醐の御時の后朱雀院天皇ならひに村上二代の御母后におはします云々　ゆゝし　忌々敷也相壺云ゆゝしき身に侍れは云々立后のめてたき時節なれば忌はしきとて大輔にはかくせる也大輔は古今後撰等の作者從四位下宮内卿源弼の女なるよし系圖に見ゆ

わびぬれは今はと物を思へども心ににぬはなみたなりけり

切なる初五字也わびぬれば身のうき草のねをたえて　わびぬれば今はた同じなにはなるなどの歌見合て味ふべし　今はと物をといへるは先坊の御事

も歎てかへらぬ事なれば今はおもひきられぬと思へども泪は我心にも似ずなかれ出ると也尤哀ふかし大鏡云后にたゝせ給ふ日前坊の御事を宮のうちゆゝしかりて申出る人もなかりけるにかの御めのとこに（御めのとさも）大輔の君といひける女房のかくよみ出したりける　わびぬれば今はたものを（以下此物語に同じ）新勅十四わびぬれば今はと物を思へども心しらぬは泪也けり　かの集にて戀の部に入作者躬恒とありいかゞ　續古十六延長元年三月文彦太子の事を歎き給ひてよませ給ける延喜御歌　春ふかきみやま櫻もちりぬれは世をうくひすのなかぬ日そなき　是も同時の御製なるへし

あさたゝの中將人の女にてありける人に忍ひてあひわたりけるを女も思ひかはしてすみけるほとにかの男人の國のかみになりてくたりけれはこれもかれもいとあはれと思ひけりさてよみて遣しける

朝忠系圖云三條右大臣定方公男中納言從三位母は中納言山蔭卿女康保三年十二月薨五十七云々天慶五年正月任左中將　人の國他國をいふ　此女の夫受領になりて任國にくたるゆへ此女をも具して行也　これもかれも　朝忠卿も女も也

たくへやる我玉しゐをいかにしてはかなき空にもてはなる覽

たくへやるとはそへてやる也古一花の香を風の便にたくへてそ鶯さそふしるへにはやる　榮雅抄云たくへてそとはくはふる加の字也云々　歌心切になこりのおしければ我玉しゐをそなたの身にそへてやる也然ともそなたには相思ひ給ふましければ我そへやる魂をもうはの空にもてはなれて何とも思ひ給はし我は實に魂をそへてやる事なれば等閑に思ひ給ひそとの心なるべし古十八女ともたちと物語して別て後に遣しけるみちのくあかさりし袖のなかにや入にけん我玉しゐのなき心ちする竹取物語云かくや姫をとゝめてかへり給はん事をあかすくちおしとおほしければ玉しゐをとゝめたる心ちしてかへらせ給ひける云々新千七いと忍ひて通ひける女の男受領になりてくたりければかの女もまかりけるに遣しける謙德公たくへやる我玉しゐをいかにしてはかなき空にもてはなるらんとありいかゝ作者幷歌第四句異也

となんくだりける日いひやりける
男女あひしりてとしへけるをいさゝかなる事により
てはなれにけりあくとしもなくてやみにしかはにや
あらんおとこもあはれと思ひけりかくなんいひやり
ける
　いさゝかなる事ぞとしたる事也男もとあれば女の
　心もしられ侍る
逢事は今は限りと思へども泪はたへぬものにぞ有け
る
　逢事の絶る限りあらば涙もはてのあるべきをいか
なれば涙はたえず落るぞと也　幻に君戀ふる涙は
きはもなきものをけふをは何のはてといふ覽
　拾十 限りあればけふぬきかへつ藤衣はてなきものは
泪也けり是等哀傷の歌なれど其心は同じ
女いとあはれと思ひけり
監の命婦のもとに中務宮おはしまし通ひけるをかた
のふたかれはこよひはえなんまうてぬとの給へりけ
ればその御かへりとに
　監命婦　河海抄云命婦は今の世に内侍の外織物を
　着せぬ中臈を昔は命婦と號せり殿上人以下のむす
め也云々監といふは將監などの女の命婦なるゆへ
かくいふ歟　若紫に王命婦有王氏の命婦也といへ
り又末摘に大輔の命婦とて内にいさふらふわかん
とをりの兵部大輔がむすめ也と有是等によりて見
ればその氏又は父の官をもよぶかと見えたり
此女誰としらず　中務宮兼明親王なるべし　花鳥
云醍醐天皇第十六御子中務卿兼明親王山莊在大井
川畔號雄倉宮云々稱前中書王文才世にすぐれ給へ
るみこ也　かたのふたかれは天一神の有かたへは
行ぬを方ふたかるといふ
逢事のかたはさのみぞふたからん一夜めくりの君と
なれゝは
　天一神を一夜めぐりの神ともいふ 金八 男のかたゝが
へにものへまかるといはせ侍りければつかはしけ
る君こそは一夜めぐりの神ときけ何逢事のかたゝ
かふらん 後十二 逢事のかたふたかりて君こすは思ふ
心のたかふ計ぞ歌心は逢事のかたふたかりて此方
へおはすましきとおほせあるも理りにてこそあれ
一夜廻りの神の如く方〳〵巡行して御寢なり所も
數多なればと道理をつけて恨まいらする心也

とありければかたふたかりけれとおはしましておほとのこもりけり

おほとのこもり御寝なるをいふ此歌に感じ給ひて也

かくて又久しくをともし給はざりけるにさかのゐんにかりすとてなんひさしくせうぞこなともものせざりけりいかにおぼつかなく思ひつらんなどの給へりける御かへしに

おほさはの池のみつくき絶ぬとも何か恨んさかのつらさは

是も命婦歌也水莖たえぬともとは御消息の絶ぬともといふ心也水莖は筆の事也則文也さかの院により以下は宮の消息の詞也歌心は宮の御文に久しくせうそこなとも物せざりけるとあるによりて其御消息は絶給ふとも何かうらみまいらせんかやうに御音信の遠ざかりて我につらさを見せ給ふは是までもならひ侍るなれば今さら恨まいらするやうもなしと也かくいふうちに深く恨むる心有　さか爰は惡の心にあらず奥儀抄云さかくせなといふ心也云々嵯峨にそへてよめる也[後撰二]もえわたるなけきは春のさかなれば大方にこそ哀ともみれ[千四]花すゝきまねくはさかと知なからとゝまる物は心也けり[續古十六]けふといへはあきのさかなる白露もさらにや人の袖ぬらすらん　葵云をくれ先たつほどの定なさは世のさかと見給へしりながら云々是等にて心得べし　大澤池は山城嵯峨にあり

御返しはこれにやをとりけん人忘れにけり

もゝそのゝ兵部卿のみやうせ給ふて御はてなか月つもりにし給ふけるに

桃園　河海云一條北大宮西一條面中許世尊寺南師氏大納言宅也保光中納言[代明親王男]傳領仍號桃園中納言云々稱名院殿御説云桃園は今の佛光寺その跡也云々　兵部卿の宮　敦固親王也紹運錄云宇多皇子二品兵部卿母內大臣高藤公女延長元年十二月八日薨云々　はて一周忌也喪のはてといふ心也

としこかの宮の北のかたに奉りける

北のかた紹運錄云延喜皇女慶子內親王母女御和子光孝皇女配敦固親王云々此御事歟

大方の秋のはてたに悲しきにけふはいかて君くらすらん

大方大半といふに同じ文選西都賦注韋昭曰凡數三分有二爲大半云々九月盡といへばたゞ大方の秋の名殘だにかなしきならひなるを過給ひし宮の御事など思ひ遣給はゞ取あつめいかばかりの御物おもひにこそおはしますらめけふはさぞ暮し侘給ふらんと北の方の心中を思ひやりてとふらひ申心也秋の果をそへて也後撰十八兵部卿敦固親王身まかりにける秋かの跡に申をくりけるとしこと有て此歌入たり

かぎりなくかなしと思ひてなきゐ給へりけるにかくいへりければあらばこそはじめもはてもおもほえめけふにもあはて消にし物を

初五文字あらばこそといふはみこの世におはしまさばこそといふにはあらず北の方よにおもひきえ給へる餘りに我身もなきにひとしき物をといふ心也といふ說ありされど下句へかけてみればみこの御事なるべしけふは御喪のはて又秋のはてなればかた〲いかに暮しおはしますぞと讀るにこたへてみこおはします世ならばこそ何事もおぼえめ今日にも逝給はてうせ給へば何事もおぼえずかなしきとの心なるべし

監の命婦つゝみにありける家を人にうりてのちあはたといふ所にいきけるその家のまへをわたりければよみたりける

加茂川堤なるべし夕顔云堤の程にて馬よりすへりおりてと有も加茂川堤也　粟田　山城也　關東へ通路の所にては粟田口といふ也

ふるさとを川とみつゝもわたる哉ふちせありとはむべもいひけり

古今十八家をうりてよめる　いせ　飛鳥川ふちにもあらぬ我宿もせにかはり行物にぞありける　榮雅抄云飛鳥川の淵にもあらぬ宿もせにかはりて定なき世のならひなれば人に恨もなく物に執心もなかれと也瀨にかはるを錢によせたり家をうりたるによりて也云々歌心は全體此いせの歌を本歌にて讀り淵ならねどせにかはるとあるをうけてけにも世中は盛衰ある事なれば此河の淵瀨さだまらぬによそへていせのよめる理り也といふ心也　むべはけにも尤なといふ意也宜應諾の字也古鄕とはもとすみし所をいふ堤の家也川とみつゝとは加茂川の邊なれば

にやわたる哉とはまへわたりをするをいふ奥儀抄には川とみつゝも過る哉とあり九金家を人にはなちてたつとて柱に書つけ侍りける周防内侍住わひて我さへ軒の忍ぶ草忍ぶかた〳〵おほき宿哉いせ歌せにかはるとあるを軒によせて讀といふ說甚不可然といふは周防内侍のかひなくたゝんとよめるを院をたち入て見るは不宜といふに同日の談也是も又一說とみて可ならん歟

故顯大納言の君たゝふさのぬしの御むすめひがしのかたをとし頃おもひですみわたり給ふけるを亭子院のわか宮につき奉らせ給ひてほとへにけり子ともなどありければこともたえずおなじ所になんすみ給ふけるさてよみてやり給ふける

忠房系圖云參議兵部卿麿藤不比等四男末信濃大掾興詞男也大和守左少將右兵衛佐云々ぬしとは四阿云かんのぬし註云守のぬし也常陸守事也うやまひたる詞也云々ひがしのかた此女のすめる方をいふ也亭子院の若宮皇女あまたおはしませばいづれとも知がたし或說に非亭子院皇女延喜帝皇女也といへり紹運錄云韶子內親王配大納言清蔭并河內守惟風云々子ともなど有ければこともたらず　かく清蔭の若宮につき給へとも忠房の女のはらに清蔭の息もあれば消息なども絕ざりし也

すみの江の松ならなくに久しくも君とねぬ夜の成りにける哉

歌心かくれたる所なし古十八我見ても久しくなりぬ住吉の岸のひめ松いくよへぬらん此歌を本歌なるべしねぬ松の根をそへたり

とありければかへし

久しくはおもほえねとも住の江の松やふたゝひ生かはるらん

此贈答二十拾忠房か女のもとに久しくまからて遣しけると詞書有新古十九いかばかり年はへねども住吉の松ぞふたゝひ生かはりぬるといふ歌入て此歌ある人住吉にまうてゝ人ならばとはまし物を住の江の松は幾度生かはるらんと讀で奉りける御かへしとなんいへる云々此歌に似たりきはめて久しき絶まをいはんとてかくよめり後撰十久しくも戀わたる哉住の江の岸にとしふる松ならなくに

となんありける

おなじおとゝかの宮をえ奉り給ふてみかどのあはせ奉り給へりければはじめ頃忍びてよる〳〵かよひ給ふけるころかへりて

清蔭の傳前に出おとゝとは大臣を申也此卿官三公ならねどもその殿なといふ意にておとゝといふなるべし殿をおとゝとよむ也大臣といふ事にはあらず若紫云おとゝのつくりさま云々河海云殿の字をおとゝよむ也家の事也野分にもおとゝの庭など有又春のおとゝなどもあり大臣ならぬ人をもその殿といふ心にておとゝと書也うつほ物語にも大將のおとゝなどあり又此物語にもあねおとなどゝ有云々葵に源内侍をおばおとゝと源氏の給ふ事有又枕草紙にも命婦のおとゝ呼し猫あり　かの宮　亭子院の若宮也

あくといへばしつ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見ん

新古十三女みこにかよひそめてあしたにつかはしけるとありて此歌入たり　あくといへば明るといへば也しつ心なきは靜なる心なき也しつ心なく花のちるらん同意也夜のみかよひて逢見給へばたゝ春宵の夢のやうなると也一二句は春夜明やすきといふなれば逢みるうちにもかねて短夜のおもはれて心あはたゝしく靜なる心なきと也新勅十五あはれ〳〵はかなかりける契哉たゝうたゝねの春の夜の夢

大和物語虚靜抄巻之上二

むまのせう藤原のちかぬといふ人の女にはとしこといふ人なんありける子ともあまたいてきて思ひてすみけるほとになく成にければかなしくのみ思ひありくほとに

藤原千兼系圖云大和守左少將忠房一男肥後守從五位下なく成にければとしこのなく成し也

内の藏人にてありける一條の君といひける人はとしこをいとよくしれりける人なりけりかく成にける程にしもとはさりければあやしとおもひありくほとにとはぬ人のすさの女なんあひたりけるを見てかくなん

うちの藏人は女藏人なるべし　一條君紹運錄云清和第四皇子貞平親王女母神祇伯良涯女後撰拾遺作者云々陽成院の一條の君とおくにあるも同人也とそ　すさの女一條の君のめしつかひの女也此女にことをつけて千兼の歌を一條の君へ贈れる也　すさは從者也

おもひきや過にし人のかなしきに君さへつらくならんものとは

過にし人は俊子也君さへつらくとは一條の君のとはぬ事をふかく恨てよめる也

ときこえよといひければ返し

一條の君の返歌也

なき人を君かきかくにかけしとてなく〳〵忍ふほとなうらみそ

なき人とはとしこ也　きかくにとは聞んにといふ同心也くとむと五音通す君かきかくにかけしとは過去し俊子の事をいひ遣して君に聞れまいらせは又今さらにかけて悲しひ給ふらんなればわさととふらひ侍らすたゝ我ひとりなき人を戀忍ふ程にてあればとはぬとてもさのみなうらみ給ひそとことはれる心なるへし新古八なけく事侍りける人とはすとうらみ侍ければ哀とも心に思ふほとはかりいはれぬへくは思ひもこそせめと西行法師のよめる是もとはぬことはりを讀る也

本院の北のかたの御をとうとのわらはなをおほつはねといふいまそかりけり

本院拾芥云中御門北堀河東一町右大臣時平家云々 時平公北の方は業平息棟梁

也　御をこうとおほつほね是又棟梁の女也僻案抄云清輔朝臣本にはおほつ少將家本にはおほつふね也敦忠中納言の姉をは中納言おさなくてよひつけられたる名をやかてかく書たりといふもまことにむけにうちとけ事也名なくは棟梁かむすめともかくへけれと勅撰作者にかくてのせたれはよく定りにける名と聞ゆ大納言本にもおほつふねと有云々作者部類云後撰作者敦忠卿母弟棟梁女云々妹ををとうととちいふ也いまそかりけりおはしましけりに同し　伊物にたかひこと申すいまそかりけりとありそもし濁てよむ

陽成院のみかとに奉りけるにおはしまさヽりけれはよみて奉りける

陽成院のみかと御諱貞明清和第一皇子御母皇太后高子號二條后藤長良公女 大鏡云 此帝貞觀十年つちのえね十二月十六日染殿にて生れさせ給へり同十一年つちのとうし二月一日二歳にて東宮にたヽせ給ひて同十八年丙申十一月十一日位につかせ給ふ御とし九歳元慶六年壬寅正月二日御元服御とし十五世をしらせ給ふ事八年のかせ給ふて六十五年なれは八十一にて天暦三年九月廿九日かくれ給ふ云々

あらたまのとしはへねともさるさはのいけのたまもはみつへかりけり

ならのみかとを恨奉りてさるさはの池に身なけし采女か事を我身によそへて讀るにや一二句は年へてみやつかへせし身にはあらねともといふ心なるへし采女か事おくに見えたり

またつりとのヽ宮にわかさのことヽいひける人をめしたりけるか又もめしなかりけれはよみてたてまつりける

釣殿のみや或書云釣殿院は光孝天皇御所の名也六條北東洞院東に在拾芥同之これを綏子内親王にゆつらせ給ふゆへに釣殿のみことは申也綏子内親王は光孝第一皇女御母女御班子 仲野親王女配陽成院云々わかさのこ伊勢のこに同じかしつきていふ也誰と不知

かすならぬ身にをくはひのしら玉はひかり見えさすものにそありける

後撰十六陽成院のみかと時々とのゐにさふらはせ給ひけるを久しうめしなかりけれは奉りける　武藏釣殿のみ

こゝろとに侍ると有て此歌有むさしわかさこのこ同人歟
数なら身　作者自云也しら玉は帝をそへ奉るへし
見えさすとはその光の見えとげもせすはやめしも
なき心をよめる也さすはやむ心也聴雪集逍遥院殿集螢
火透簾といふ題にて　行衛なき思ひそへてや玉す
たれ光見えさすよひの螢は
とよみて奉りけれは見給ふてあなおもしろの玉の歌
よみやとなんのたまふける
清歌なとを褒美して金玉の聲なといふ也此歌殊に
しら玉なとあれはかた〳〵かくの給へるなるへし
陽成院のすけのこまゝちゝの少將のもとに
陽成院拾芥云大炊御門南西洞院西作院御誕生云々　宇治拾遺云今はむかし陽
成院おりゐさせ給ひての御所は大宮よりは北西洞
院よりは西油小路よりは東にてなんありける云々
すけのこ異本書寫紹運録云陽成院皇子元長親王母
出羽守遂長女典侍有子云々是歟　まゝちゝの少將
未考
春の野ははるけなからもわすれ草おふるは見ゆるも
のにそありける
春の野は草の生けるゆへかくよめり遙けなからも
とは少將と我中の遠く隔りたる心をそへしなるへ
し程は遠くへたゝれとも忘れ給ふけしきはしるく
見ゆるとにや　忘草説々多し萱草をもいふ又忘草
忍草一草二名ともいへりたゝ忘るゝ事によみなら
はせりしゐて本名をたゝして無益歟
少將かへし
春の野に生しとそおもふわすれ草つらき心のたねし
なけれは
生るはみゆるといふにこたへてさはおほせらるれ
とも忘草はおひ申さし我につらき心の程もなけれ
は忘草生すへきやうはあるへからすと也草木は種
ありて生する物ゆへかくよめり古十五忘草何をか種
と思ひしはつれなき人の心也けり
故式部卿の宮のいてはのこにまゝちゝの少將すみけ
るをはなれてのち女すゝきに文をつけてやりたりけ
れは女將
故式部十五河海云亭子院第四の皇子敦慶親王號玉
光宮好色無双之美人也云々　延長八年二月廿八日
薨　出羽のこ敦慶の侍女なるへし
秋風になひくおはなはむかしみし袂ににてそこひし

かりける
尾花は薄の穂に出たる也白馬の尾に似たる故とそ
尾花を袖に見たつる事常の事也秋風になひく尾花
をみても昔みし君か袂に似て面影戀しきと也
いてはのこかへし
たもとゝもしのはさらまし秋風をなひくおはなのお
ころかさすは
袂に似てそ戀しかりけるといふをうけて此方より
せうそこしておとろかしまいらせたれはこそ袂に
にてそなとも承れさもなくは尾花を我袂とも戀忍
ひ給はしと也こなたより催しまいらせすとも昔の
契をおほし出給へかしとの心を含みたるへし
故式部卿二條の御息所に絶給ふて又のとしのむつき
の七日のひわかな奉り給ふけるに
二條の御息所諸本如此案に三條の御息所なるへし
右大臣定方公女延喜女御也考系圖定方公女十四人
まて見ゆれとも二條御息所といふは見えす定方公
の息女延喜の女御は號三條御息所仁善子傳寫誤な
らん　むつき正月をいふ也　わかな拾芥云正月七
日俗以七種菜作羹食之人無萬病也荊楚歳時記　七種は河
海云薺蘩蔞芹菁御形湏々代佛座云々若菜の事諸書
に見えたれは委く不及記若菜を摘て贈るはその人
を祝する心也手習に小袖の尼若菜を手習君にをく
るとて　山里の雪まのわかなつみはやし猶おひさ
きのたのまるゝ哉　手習君かへし雪ふかき野への
わかなも今よりは君かためにそとしもつむへき
君か爲にそといへるそもしのてにをは尼公の外に
は祝せん人なしといへる心顯れて哀なる歌也とそ
わかな奉り御息所より式部卿宮へ贈り給ふなるへ
し
ふるさとゝあれにし宿の草のはも君か爲にそまつは
つみける
若菜にそへ給ふ歌也一二の句宮のふるさせ給へる
述懐のこゝろもあるへし
とありけり
おなし人おなしみこの御もとに久しくおはしまささ
りけれは秋の事成けり
式部卿宮中絶て久しくおはしまさゝりける頃御息
所より音信し給へる也
世にふれと戀もせぬ身の夕されはすゝろにものゝか

なしきやなそ

こひもせぬ身とは心なき身といふやうなる心なるへし我木石の如き無情の身なれはものゝあはれも知ましけれとかくふるされまいらせしうへ時も秋の夕なれは時節に催されて物かなしく侍るとの心なるへしすゝろ所によりてこゝろかはる也愛の心は物に催されたるやうの心なり若紫に源氏北山にて紫上を垣間見給ふ段に云たゝ今をのれ見すて奉らはいかて世におはせんとすらんとていみしうなくを見給ふもすゝろにかなしとあり尼公のあはれなる事をの給ふを立聞給ひて源氏もそれに催されて悲しみの生したる心也此歌も時節の感に催されて悲しき心也此歌のすゝろ若紫の心によくかなへりなそは何そ也我ことゝかめていへるなり

とありけれはかへし

夕暮にものおもふ時は神無月我も時雨にをとらさりけり

我も夕は一しほものおもひあれは時雨にもをとらす涙のふりけるとの心也此贈答秋の事成けりと書て神無月と侍る時節相違のやうに申人も侍るにや時雨は秋の末よりふれともうちまかせては十月の物なるゆへ神無月時雨とつゝくるならん古五神無月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふかみなひの森此歌秋の部に入時は秋なれとも時雨は十月必降ものなれはかくよめるにやされは此古今の歌の類まて秋の事なれとも神無月我も時雨にとつゝけさせ給へるなるへし又按るに夕貌にけふは冬立日也けるもしるくうち時雨て空のけしきいとあはれ也詠くらし給ひて過にしもけふ別るゝもふたみちに行方しらぬ秋の暮哉称名院殿御説云是は十月の歌なるを秋のくれ哉とよめる餘情無類也歌の道かやうの所に心をつくへき也惣しては春と秋との中に夏冬はこもる也拾遺集にも雑の春秋の中に夏冬はこもれり云々此歌も秋のうたなるに神無月とよみへ給るは源氏の歌の如く秋には冬もこもるゆへかく大やうに讀給ふにや又秋も時雨は降とも時節程には無ものなれは泪の多きをつよくいはんとて神無月の時雨にもをとらすとの心もあるにやとなんありける心にいらてあらくよみ給ふけるとそ

故式部卿の宮をかつらのみこせちによはひ給ふけれ

さおはしまさゝりける時月のいさおもしろかりける
夜御ふみ奉り給へりけるに
かつらのみこ紹運錄云孚子內親王寛平皇女母參議
十世王女云々桂宮拾芥云六條北西洞院西今昔物語云桂宮さ申は
五條西洞院に桂宮さ申人おはしますその前に大な
る桂の木ありけるゆへに名付まいらせたり云々せ
ちには切に也　よはひ竹取物語云夜はやすきいも
ねすやみの夜にもこゝかしこよりのそきかいまみ
まさひあへりさる時よりなんよはひさはいひける
云々かくや姫をけさうする人々のありさまなり玉
篁云けさう人は夜にかくれたるをこそよはひさは
いひけれさまかへたる春の夕くれ也云々此詞は竹
取よりはしまるさそ
ひさかたのそらなる月の身なりせは行さも見えて君
は見てまし
桂宮の歌也そらなる月の如き我身ならは行さも見
えすして君をも見我らも見えましを世を憚る身なれ
は是非なしさ歎く心也桂宮さあるによりて月の身
なりせはさ讀給へるなるへしさもいへりひさかた
榮雅抄云空の物をつゝくる詞也云々　月のゝのゝ
宇知くさいふ心を含めり古 秋風にあへすちりぬる
紅葉はの行衛さためぬ我そかなしき一古十 夕つくよ
さすや岡への松の葉のいつさもわかぬ戀もする哉
是等の類也
さなんありける
式部卿宮は前にもいふこさく寛平第四皇子也桂宮
孚子さは別腹の御兄弟也その折は密たる密事にて
人しれぬ事なるへけれさかく物語にも書さゝめた
れは後世にては顯然也傚むへし野分云けにはらか
らさいふさも立のきてことはらそかしさ思はんはな
さかあやまちもせさらんさおほゆ云々夕霧玉鬘の
うへを見給ふ所のことは也注云打任て他腹の兄弟婚
合を許すへきにあらす上古の事は例さするに不是
律令格式定りて以來父子兄弟さ遠さかる道諸人所
守也云々案に木梨輕太子允恭皇子同母妹輕大娘皇女さ
もに容姿佳麗也太子恒大娘皇女に逢見ん事を願ひ
給へさも罪を畏れて默し給へりされさ戀慕の情不
堪遂に竊に通し給へり後露顯して輕大娘を流罪せ
るよし日本紀に見えたり凡兄弟通寄の事神代はし
らす本朝もさより禮儀を貴ひ上古習これを悪み是

を罪せり豈律令格式の定るをまたんや
良少將兵衛の佐なりける頃監命婦になんすみけるを
んなのもとより
此良少將良峯宗貞にはあらす良峯義方也と云說有
信しかたし良峯宗貞也宗貞出家して遍昭と云桓武
御孫良峯安世子也此贈答續古今第十二に入て詞書
云兵衛佐に侍ける時遣しける監命婦かしは木の歌
此物語に同しかへし僧正遍昭と有て歌又此物語に
異なる事なし勅撰に如此慥に作者の名を出されたる
るうへは此物語の良少將宗貞なる事無疑にや
かしは木の森の下草おはぬとも身をいたつらになさ
すもあらなん
左右の兵衛をかしは木といふ事八雲御抄異名部見
えたり嵩山の古柏を漢武帝大將軍に封するよしあれは兵衛の異名とせし歟將軍も兵衛もともに武官なれはなり拾
遺に右近人しれすたのめし事は柏木のもりやしに
けん世にふりにけりと讀るも敦忠兵衛佐成ける頃
忍ひていひ契れる事の世に聞えけれはよめる也又
後拾遺に左兵衛督經成身まかりにける其いみにい
もうとの扱ひなとせんとて師賢朝臣こもり侍りけ
るに遣しける小左近よそにきく袖も露けき柏木の
本の雫をおもひこそやれ森の下草とは老ぬる事を
いふ也古十七大荒木の森の下草おいぬれは駒もすさ
めすかる人もなし此歌より出たり續後撰四いたつらに
老にける哉哀我友とはしるやもりの下草新後撰十七我
袖の類ひとみるも悲しきはおいて露けき森の下草
歌の心は我身年老かたちみくるしくともいたつら
にふるしはて給ふなとの意也此なんを下知のなん
といふ也
かへし
かしはきの森の下草おいのよにかゝる思ひはあらし
とそおもふ
命婦の我身をいたつらになし給ふなと讀るに答て
その身年老ぬるならはさやうに若々敷もの思ひは
有ましき物を似合しからす定て僞ことにて有へし
とよめるにや後拾遺十四つらかりける女に難波潟汀の
蘆のおひのよに恨てそふる人の心を
となんいひける
良小將たちのをにすへきかはをもとめけれは監命婦
我かたにありといひて久しく出さゝりけれは
横刀には緒あり萬十二他國爾結婚爾行而太刀之緒毛

未解左夜會聞家流
與儀抄云かしはきとは兵衛のつかさ也そのたちのをゝは紫にそむる也と或物に書り云々栴中抄云かしはきのゆはたそむてふむらさきのといふはかしはきとは兵衛のつかさをいふかの府のたちのをは紫革也云々

あた人のたのめわたりしそめかはのいろのふかさを見てややみなん

染川は筑前の名所也伊物にそめ川をわたらん人のとよめる所也それを太刀の緒の染革にそへたり紫革藍革なと也あた人とは心あた／＼敷て頼しからぬ人命婦をさしていへり　たのめは契約をいふわたりしは程へたる心也久しく出さゝりけれはとあるゆゑかくよめり若菜に年比はなをよのつねに思ふ給へわたり侍りつる又年をへて思ひわたりける事のなとありみな程をへたる心也又川なれはその縁もあり歌の心は契約せしまゝにて給らねは染革の色のふかきをも終にみすしてやむへきかと也

といへりけれは監命婦めてくつかへりてもとめてやりけり

末摘花云されくつかへるいまやうのよしはみ云々又繪合にしにかへりゆかしかれと云々覆の字也身に入かへるなといふも身に入事の深切なる也感心する事の切なるをいふ也(くつかへるのか文字濟てよむ)　此歌詞書とも續後拾遺十六入て作者良峯宗貞とあれは此良少將も義方にはあらす

陽成院の二のみこ倭蔭の中將のむすめにとしころすみ給ふけるを女五のみこをえ奉り給ふてのちさらにとひ給はさりけれは今はおはしますましきなめりと思ひたえていとあはれにてゐ給へりけるに

陽成院の二のみこ　元平親王也紹運錄云陽成第二皇子三品彈正尹母主殿守遠長女　倭蔭作者部類四位部に藤原倭蔭中納言有穗男　古今後撰金葉作者至延喜廿一年云々女五のみこ依子内親王也紹運錄云寛平皇女御母更衣源貞子民部卿昇女云々

いとひさしくありて思ひかけぬほとにおはしましけれはえものもきこえてにけてとのうちに入にけりかへり給ふてみこあしたになとかさしころの事も申さんとてまうてきたりしにかくれ給ひにしとありけれはとははなくてかくなん

せかなくにたえさたえにし山水の誰しのへさかころ
をきかせん

せかなくにとは此方よりせきとむる事もなきにさいへる心也たえとたえにしとは絶し事をつよくいはんとて詞をかさねたる也たゝなきになきてなといふ類也歌心は此方より來り給ふなとせきとめしにもあらずみこの御心より中絶はて給ひぬれはかく不意におはしたれとても忍はるへき我身にもあらねは物をも申さてにけ入しとの心也 續後撰十五 彈正尹元平親王久しく通ひたへてのち立よりて侍りけるに逢侍らさりけれは歸りて恨遣したりける返事に藤原俊蔭女と有て此歌いれり

先帝の御時に右大臣の女御うへの御つほねにまうのほり給ふておはしましやするとしたまち給ふけるにおはしまさゝりけれは

先帝袋草紙云先帝は延喜御宇也云々此物語に先帝と稱奉るは延喜の御事とそ右大臣女御三條右大臣定方公女前にも出る三條御息所同人なるへし　うへの御つほね　禁秘抄云　后　女御　更衣　參上所也近代爲御所云々花宴云女御はうへの御つほねにやかてまうのほり給ひにけれは云々后女御なとのまうのぼり給ふ時かりそめの休息所也藤壺のうへの御つほね弘徽殿の上御局なと禁秘抄にもありしたまち御心のうちに帝の渡御をまち給ふ也　末摘花云かへりや出給ふとしたまつ也けり云々

ひくらしに君まつやまのほとゝきすとはぬ時にそ聲
もおしまぬ

ひくらし終日也くもしすみてよむ終日帝のおはしましやするさ侍給へとわたり給はねは松山の時鳥にそへてころもおしますなけくよしを讀給ふ也
松山　陸奥又讚岐にもあり

となんきこえけり

ひえの山にねんかくといふほうしの山こもりにてありけるにしとくにてまし〳〵ける大とくのはやうしにけるかむろに松の木かれたるをみて

念覺俊子の兄なる事本文にみゆ俊子前に出たり山こもり山にこもりて行也枕草紙云十二年の山こもり云々しとく師德なるへしむろは室也ひきこもりて佛道修行する所をいふはやう先になといふ心也

ぬしもなき宿のかれたる松見れは千代過にける心ち

こそすれ
歌心明也後拾遺十八みちのくにゝふたゝひくたりて後
のたびたけくまの松も侍らさりけれはよみ侍りけ
る能因法師　武隈の松は此度跡もなし千とせをへ
てや我はきつらん土佐日記云水つける所有邊に松
もありき五とせ六とせのうちに千とせや過にけん
かた枝はなく成にけり云々是等引合みるへし
とよみけれはかのむろにとまりたりける弟子とも哀
かりけり此念覺はとしこかせうと成けり
けせうと兄をいふ
かつらのみこみそかに逢ましき人にあひ給ひたりけ
り男のもとによみてをこせ給へりけり
　みそか密也ひそかといふに同し五音通す
それをたに思ふ事とて我やとを見きとないひそ人の
きかくに
　此歌古今十五に入題しらす讀人しらすとあり
　榮雅抄云我宿を見たるとないひそ人の聞にそれを
　かくすをたにも我をおもふ事とてあるへきにと也
　人の聞にといふきかくはさむきを寒けくうきをう
　けしといふになし云々誰も心に思ふ事は必言に
出るものなれば戒ていへるなるへし帚木に源氏空
蟬に逢給ひての段によし今はみきとなかけそとて
思へるさまいとことはりなり云々源氏にかけそと引
かへて用ひたる面白と古人も評せり此歌にて源氏
の詞は書る也
となんありける
かいせうといふ人法師になりて山にすむあいたにあ
らばひなとする人のなかりければおやのもとにきぬ
をなんあらひにをこせたりけるをいかなる折にかあ
りけん
　かいせう未考　父は兵衛佐なるよし本文に見ゆ
　山は比叡山也　あらはひ洗濯也
むつかりておやはらからのいふ事もきかでほうしに
成ぬる人はかくうるさき事いふものかといひければ
よみてやりける
　むつかり怒腹立をいふかいせうの出家せしを先だ
　ちて親族の者とゝめたる事も有べきを不用して法
　師になれるゆへかくいへるなるへし
いまは我いつちゆかまし山にても世のうき事は猶も
たえぬか

古十八山のほうしのもとへ遣しける躬恒　世をすて
ゝ山に入人山にてもなをうき時はいづち行らん此
歌よく似たり山林に塵を出ても猶人間のことはさ
まぬかれぬを歎息する心なるべし
おなし人かのちゝの兵衛佐うせにけるとしの秋家に
これかれあつまりてよひより酒のみなどすいますか
らぬ事のあはれなる事をまらうどもあるしもこひけ
り朝ぼらけに霧たちわたれりまらうど
いますからぬ　おはしまさぬといふに同じ兵衛佐
のうせたるを云　まらうどは客人也　あるしはか
いせうを云　朝ぼらけ朝朗朝旦明旦などかけり
朝霧のなかに君ますものならばはるゝまに〳〵うれ
しからまし
君は兵衛佐をさしていふ　はるゝまに〳〵とはか
ら（本ノマヽ）ましまゝに君を見んと也　朝霧は日出れば必は
るゝものなればかく讀り
といひけりかいせうかへし
とならばはれずもあらなん朝霧のまぎれに見えぬ君
とおもはん
ことならばとは如此ならばといふ心なり如の字なり

續古十四ことならば雲ゐの月と成ならん戀しきかげや空
に見ゆると續千一とならば色をも見せよ梅の花香は
かくれなき夜半の春風　あさ霧のなかに君ますと
讀るをうけての給ふとの如く霧の中に君いますな
らば晴るを待に不及霧に隠れて見え給はぬと思ひ
てなぐさみ侍らんとよめる也
まらうどは貫之友則などになん有ける
貫之友則同紀氏にて親族なれば會集せしなるべし
貫之　紀本道孫望行男也　友則　是も本道孫にて
有友子也貫之とは従兄弟也
故式部卿の宮に三條の右のおとゝと上達部などるい
してまいり給ひて碁うち御あそびなどし給ふて夜ふ
けぬはこれかれえひ給ふてものかたりしかつけもの
などせらるをみなへしをかざし給ふて右のおとゝ
故式部宮　敦慶親王也前に注三條右大臣は定方公
也勧修寺元祖良門孫内大臣高藤公二男母宮内大輔
彌益女　公卿補任云延長二年正月任右大臣云々
と上達部　異上達部也上達部は公卿を申也るいし
ては類して也うちつれてなどいふにおなし御あそ
びは糸竹の御遊也かつけもの引出ものなり三代實

錄に祓禊の字ともにカツケモノと讀めり
をみなへし折手にかゝるしら露はむかしのけふにあ
らぬなみだか
新勅四 式部卿あつよしのみこの家に人々まうてきて
あそびなとし侍りけるに女郎花をかざしてよみ侍
りけりと有て此歌入りをみなへしの露は懷舊の涙
かとの心なるべしなみだかのか留り疑ひの心歟
となんありけると人々のおほかれとよからぬはわす
れにけり
故右京のかみ宗于の君なり出べきほどにわが身のえ
なり出ぬ事を思ひ給ひけるころほひ亭子のみかとに
紀伊國より石つきたるみるをなん奉りけるを題にて
人々歌よみけるに右京のかみ
宗于の君三光院殿御說云光孝天皇孫一品式部卿是
忠親王子也云々紹運錄不載之不審拾芥云右京太夫正四位上兵
部大輔天慶二年卒云々海松和名抄云崔禹錫食經云
水松狀如松而葉和名美流楊氏漢語抄云海松和名同上俗用之
撰古二十石にみるの生たるを見て惠慶法師動きなきい
はほに根さすうみまつの千とせを誰に浪のよすら
ん　身のなり出ぬ事を官位昇進もせぬ事を歎給へ
る頃なるべし
沖津風ふけゐの浦にたつ浪のなごりにさへや我はし
つまん
沖津風は吹井といはん爲也又浪は風にたつ物なれ
は也吹井浦和泉國也新古十八殿上はなれ侍りてよめる
藤原清正天津風吹井の浦にゐる寉のなとか雲井に
かへらさるへきなこり萬六難波潟汐干のなこりまく
はしみ云々見安云なこりは殘りの浪也云々明石云
かへりてはかこそやせましあらかりし名殘に袖の
ひかたかりしを花鳥云後撰いたつらに立かへりに
し白波のなこりに袖のひる時もなし今案よせたり
しなこりは波をいへり後撰の歌をとりて讀る也云
々たゝ殘りといふ意にもよむ歌多し又形見なとい
ふ方にも用ゆる所あり紅梅云佛のかくれ給ひにけ
んなこりには阿難か光はなちけんをふたゝひ出給
へるかと疑ふ云々續千十三いたつらに立かへりにし白
浪の名殘に袖のひる時そなき下句は身のなり出ぬ
事をふかく歎息し給ふ心見え侍るにや
おなし右京のかみ監の命婦に
よそながらおもひしよりも夏の夜の見はてぬ夢そは

かなかりける
夏の夜の見はてぬ夢そとはそと逢みたる心也いまた逢みるよすかもなくてよそなから思ひこかれしよりも夢のやうなるあふせははかなきと也
亭子のみかとに右京のかみ讀て奉りける
あはれてふ人もあるへくむさし野の草とたにこそおふへかりけれ
伊物にむらさきの一本ゆへにむさしのゝ草はみなから哀とそみるといふ歌を本歌にて讀る也我身せめて武藏野の草ならは哀をかくる人も有へきにさもなけれは是非もなしとの述懐也[古三]哀てふ事をあまたにやらじとや春にをくれてひとり咲らんてふとはといふ心也てへといふもといへといふ心也[古十四]君といへはみまれみすまれとある歌を榮雅抄に君てへはと書る本も有云々又同集には八重葎して門させりてへともあり同抄云門させりてへは門させりといへといふ詞を略したる也まてといはゝをまてへはともいへり云々といふをてふといふは登以切知なれはちふともいへりちとてとは五音通なれはてふともいふ也[萬十四]からすとふ おほおそ鳥のまさてにもとあり又同集五ふみぬきて行ちふ人は岩木より云々萬葉にはとふともちふともてふともいへりいつれもといふといふ意也又なるといふ意に聞ゆる所も有此歌も身のなり出ぬ事を帝へ愁へし給ふ心なるへし
又
時雨のみふる山里の木のしたはおる人からやもりすきぬらん
是も宗干の歌也頼む木の下に雨もるといふ心也ぬれじと木陰をたのみてたちよれとも我身のうきからにやそのかひもなくて雨の漏といふ心也[古五]侘人のわきて立よる木の下はたのむかけなく紅葉ちりけり[後撰八]たのむ木も枯はてぬれは神無月時雨にのみもぬるゝ袖かな[新古十一]雨こそはたのまはもらめたのますは思はぬ人と見てをやみなん[風十]木の下をむかしのかけとたのめとも泪の雨にぬれぬ日そなきしゐかもと云いかなる木の下をかたのむへく侍らんと申ていとゝ人わろけ也云々總角云何のたのもしけある木のもとのかくろへも侍らさりき云々是等みな同し心也

とありけれはかへりみ給はぬ心はへ成けりみかと御らんしてなに事ぞ是を心えぬとてそうつの君にみせ給ふけるときゝしはかひなくなんありしとかたり給ふける

かへりみ給はぬとは帝の願給はぬゆへ述懐してかくよみ給ふ歌の心はへ也と此物語の作者のいへる也何事ぞこれを心えぬとはみかとの空おほれし給ふ也　そうつの君誰とも不知　枕草紙云そうつの君のそれは隆圓にたふへ云々かたり給ふけるとは宗于の人にかたり給ふなるへし

みつねか院によみて奉りける

躬恒　作者部類五位部云延喜廿一年正月晦日任淡路權掾云々拾芥云古傳云先祖不見甲斐權少目淡路掾云々宗祇云行氏孫諶利子　院は宇多帝を申奉るなるへし

たちよらむこのもともなきつねの身はときはなからに秋ぞかなしき

つたかつらは梢岩ほなとにかゝりてよるかたもあれと我身はつたの如に立よりてかゝらん木の本もさき歎きをよみて院へうれへ申心なるへし文選樂府詩悲哉行云女蘿亦有託蔓葛亦有尋傷哉遂客士憂思一何深善曰言已客遊不如蔓葛故憂思逾深此詩の心に似たるべし和名抄云絡石一名領石和名豆太蘊敬曰此草也石木而生故以名之云々ときはながらに凡つたに數品あり一種冬も凋まぬものあり俗に冬つたといふ本草綱目云此物生陰濕處冬夏常青實黑圓其莖蔓延遶樹石側若在石間者葉細厚而圓短遶樹生者葉大而薄人家亦種之爲飾云々

右京のかみのもとにをんな

いろそとはおもほえすとも此はなはときにつけつゝ思ひ出なん

女我身を花によそへてよめるにや艶色ありとは見給はすとも折々はおもひ出てとひ給へとの心なるべし此歌花などにつけてやりしにや

つゝみの中納言内の御つかひにておほうち山に院のみかどおはしますにまいり給へりもの心ほそけにておはしますいとあはれなりたかき所なれば雲はしもよりいとおほく立のぼるやうに見えければかくなん

堤の中納言兼輔卿也系圖云左大臣冬嗣公曾孫勸修寺良門孫利基男左中將參議從三位中納言號堤中納う言母作氏

ちの御使　勅使也　大内山　嵯峨仁和寺の山也寛平法皇此所におはしますいまに御室と申なり　もの心ほそけにておはしますいと哀也　伊物にしゐてみむろにまうでゝおかみ奉るにつれ〴〵といと物かなしうておはしましければなとかける段に似たり

しら雲の九重にたつみねなれば大内山といふにぞありける

此歌下句花鳥餘情には大内山とむへもいひけりと有内裏は九重のうちなればかくつゝけたり　一詞遠山の櫻といふ事をよめる　九重にたつ白雲と見えつるは大内山の櫻なりけり　此段詞書歌とも新勅撰十九に入たり　又帝闕をも大内山とよむ也末摘
もろともに大内山は出しかと入方みせぬいさよひの月

いせの國に前齋宮おはしましける時に堤の中納言勅使にてくだり給ふて

前齋宮字多皇女柔子内親王なるべし御母は贈太后藤原胤子内大臣高藤公女　齋宮の事日本紀第六垂仁紀に見えたり故隨大神敎其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上云々延喜齋宮式云凡天皇即位者定大神宮齋王仍簡内親王未嫁者卜之若無内親王者依世次簡諸女王卜之訖即遣勅使於彼家告示事由云々卜訖の卜の字世間流詣の印本になし以他本補ひ侍る又齋宮の始は倭姫命也後鳥羽院皇女粛子内親王にいたりてその事絶ぬるよしなれど紹運錄を見るに後嵯峨院皇女愷子内親王なども齋宮に立給へるよし侍ればその頃までも絶ざりしにや

くれ竹のよゝのみやことききくからに君は千とせのうたかひもなし

竹のみやこといふゆへよし又千とせなどよみて齋宮を祝し侍る也此歌新勅撰七に入て侍る

御かへしはきかすかの齋宮のおはします所はたけのみやことなんいひける

多氣は伊勢國郡の名也後撰十三忍びてかよひ侍りける人今かへりなどたのめをきておほやけの使にいせの國にまかりてかへりまうてきて久しうとはす侍りければ少將内侍人はかる心のくまはきたなくて清きなきさをいかで過けん返し兼輔朝臣たかために我は命をなか濱の浦にやとりをしつゝかはこしとあり此時の事なるべし

いつもかはらからひとりは殿上して我はえせさりける時よみたりける

出雲　未考　はらから兄弟をいふ

かく咲る花もこそあれ我ためにかなし春とやいふべかりける

獨は殿上して榮花の春にあへども我はさもなしさればおなじ春とやはいふべきさはいふまじきと也春とや　春とやはといふ心也はを略せる也古今に秋の田のほのうへてらす稲妻の光のまにもわれやわする丶とあるも我やは忘る丶といふ心なれは其格也

先帝の五のみこの御むすめは一條の君といひて京極のみやす所の御もとにさふらひ給ふけりよくもあらぬ事ありてまかて給ふてゆきのかみのめにていますかりて

五のみこの御むすめ　此物語に先帝と稱し奉るは大方延喜帝の御事なれば紹運録など考侍れと此みかどの御しもに此名見え侍らす前に一條の君とあるは清和のみこ貞平親王の御女なり作者部類に此名あるも貞平親王の女とありて外に一條といふ名見えすたゝし此物語に先帝とあるも延喜のみこにもかきるへからねはおなし女にやゆきのかみ壹岐守也誰と不知

たまさかにとふ人あらはわたのはらなけきほにあけていぬとこたへよ

古八わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよとある行平の歌に同心也なけきほにあけてとはねをたゝてなく心なるべしすべて物の現形するをほにといふ也古四秋風に聲をほにあけてくる船はあまのとわたる雁にぞ有ける和田原帆にあけてなど船をおもはせてよめるにや

いせのかみもろみちのむすめをたゝあきらの中將の君にあはせりたりける時に

伊勢守もろみち　未考　式云もろみちはもろふちの誤歟三代實錄卅四云元慶二年八月十四日從五位上守大藏大輔藤原朝臣諸藤爲伊勢權守云々十四巻系圖云諸藤從四位下伊勢守（右大臣三守孫從五位下侍從有統男母百濟王曹義女）みちふちかな似たれば傳寫の誤なるべし　正明異本に忠明とあり本名齊明參議正四位下彈正大弼光孝皇子南院式部卿是忠親王男公卿補任云承平四年十

二月廿八日右中將天慶八年十一月廿五日轉左云々
そこなりけるうなひをは右京のかみよひいてゝかたらひてあしたによみてをこせたりける
そこなりける　齋明のもと也　うなひわかき女をいふ土佐日記云うなひもかなせにこはん云々右京のかみは宗干なりこれも是忠親王の息なれば齋明とは兄弟なるゆへ行かよへるならん
をく露のほとをもまたぬあさかほは見すそ中々あるへかりける
此歌新勅撰戀三に入題しらすしら露のをゝをまつまの朝かほはとあり一二句の意はたゝまもなくはかなき事をいへる也そとのまゝ逢たるはをく露のほとをもまたぬはかりのあさかほなれは見ぬかたこそましならめと讀るなり中々は源氏物語にもおほく却てといふ心に用ひたり桐壺に中々なるものおもひをそし給ふなとかけり　あさかほは人の顔にそへてよめり榊云ましてあさかほもねひまさり給へらんかし云々枕草紙云ねくたれのあさかほも時ならずや御らんせん云々萬八よひにあひて朝かほはつるかくれ野のはきはちりにきもみちはやつけ後拾

廿人の草あはせしけるに　朝貌鏡草なとあはせけるにかゝみ草かちけれは　まけかたのはつかしけなる朝かほをかゝみ草にも見せてける哉新千四　たとふべきかたこそなけれわきもこかねくたれかみのけさのあさかほ
かつらのみこに式部卿のみやすみ給ふける時そのみやにさふらひけるうなひなん此おとこ宮をいとめでたしと思ひかけ奉りけるをもえしり給はさりけり
桂のみこ　式部卿宮　前に出る此宮玉光宮とも申好色無双の美人なるよし河海抄にもあれはうなひも思ひかけ奉りけるにや
螢のとひありきけるをかれとらへてと此わらはにの給はせけれはかさみの袖に螢をとらへてつゝみて御らんせさすとてきこえさせける
かさみ繪合云櫻かさねのかさみ牡丹花云かさみは童女のうへにきる物也水干のかみのやうなるもの也云々新續古六雲の上天津ひれふる乙女子かかさみの袖にあられ玉ちる
つゝめともかくれぬものは夏むしの身よりあまれる思ひなりけり

うすきかみの袖より螢の光のもるゝにそへて我思ひのつゝむにあまる心をほのめかしたる也此歌後撰四に入詞書云かつらのみこ螢をとらへてといひ侍りければわらはのかさみの袖につゝみてとあり此物語にては式部卿宮の螢をとらへてと童にの給ふやうなり夏むし此歌にては螢勿論也歌によりてかはるべし古十一夏むしの身をいたつらになす事もひとつ思ひによりてなりけり是は夏夜灯に入て死る蟲也今は螢を夏蟲とは不讀也新古十一思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物をとふ人はなし續千十一入しれすもゆる思ひはそれとみよ袖につゝまぬ螢なりとも是等の歌此歌より出るといへり

源大納言の君の御もとにとしこはつねに參りけりさうしてすむ時もありけりおかしき人にてよろつの事をつねにいひかはし給ひにけりつれ〳〵なる日此おとゝとしこ又むすめあねにあたるあやつこといひて有けり母ににて心もおかしかりけり又おとゝのもとによふてといふ人有けりそれもものゝあはれしりていと心おかしき人なりけりこれ四人つといひてよろつの物かたりし世の中のはかなき事せけんのあはれなる事いひ〳〵てかのおとゝよみ給ふける

大納言清蔭卿のもとへとしこしたしく參りし也曹子して彼家に住時もありしと也曹子はつほねをいふ　つれ〳〵なる日徒然と書閑暇なる日也又むすめ俊子の女也名をあやつこと呼し也後撰作者にちかぬがむすめといふ有此女か千兼は俊子の夫也よふこは清蔭卿のもとに召遣の女なるへし拾遺八世の中をかくいひ〳〵のはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん玉十七さきたつを哀々といひ〳〵てさまる人なき道そ悲しき　狭衣云いひ〳〵のはて〳〵はうしろめたうそ思ひつゝけらる云々

いひつゝも世ははかなきをかたみにはあはれといかて君に見えまし

かたみといふ詞此歌にては互といふ心也四人さしつといひて世のはかなき事をいひもてゆくに畢竟はみな世にとゝまらぬならひなれは我も人に哀れと忍はれ人も又我に哀と思はれ給ふへしされは我もたかひに哀と人に忍はるゝ程の事を見えをかまほしきと也いかでは何とそしてといふ心也後拾遺十七世の中常なく侍りける頃よめる　忍ふべき人もなき

身はあるおりに哀々といひやをかまし和泉式部歌なり此歌に同意なるへし或説に此かたみを形見の心に見てはかなき世のならひなれは我もほとなく身まかりぬへしされは人に哀と思はれん程の事をなからん後のかたみに人に見え置まほしきといふ心也とも有いかゝ此歌新勅撰十八に入詞書にとしころ物語して世のはかなき事なと申てよみ侍りけるとあり　葵云さま〲のすき事ともをかたみにくまなくいひあらはし給ふはて〲は哀なる世をいひ〲てうちなきなともし給ひけり云々此段に似り又かたみといふ事歌よにりて心さま〲かはる也千六かたみにや上毛の霜をはらふらんともねのをしの諸聲になく〱　榮花月宴云みなかたみになさけをかはし云々是等互の心也古四やとりせし人のかたみか蘭わすられかたき香に匂ひつゝ是は常にいふ形見也新古一行て見ぬ人も忍へと春の野のかたみにつめる若菜也けり是は筐笭也小籠をいふよし和名抄に見えたりわかななとを摘入るゝ籠也後撰一君のみや野べに小松を引にゆく我もかたみにつまんわかなを是は互といふに又筐笭を兼たり拾遺廿いかにせん忍ふの草もつみわひぬかたみと見てしこたになけれは是は形見の子に筐笭の籠をそへたり又萬十六長歌にいにしへのかしこき人ものちの世のかたみにせんと老人を送りし車もてかへりこね上略堅監の二字を書り監字彙云與レ鑑同此歌周文王大公望を車にのせてともにかへりける車をよむされはこゝにては鑑といふ心也といへり後代の明鏡にといへる心なるへしとぞ續千廿法性寺入道前關白内大臣に侍りける時家の歌合に藤原顯仲萬代の秋のかたみとなるものは君か齢をのふる白菊このかたみ萬葉の歌とおなしく鑑といふ心にや　かやうに歌によりて心さま〲かはる也能々分別すへきものをや

とよみ給ふければたれも〲返しはせてあつまりてよゝとなんなきけるあやしかりけるものともにこそはありけれ

よゝとなんなきける　夕顔云いとかなしくてをのれもよゝとなきぬ云々　よゝとは涙のたふ〲と落る體をいふなるへし　横笛に御歯の生出るにくひあてんとてたかうなをつとにきりもちてしつくもよゝとくひぬらし給へは云々薫大將の幼き時筝

をもてあそひ給ふ體也よたれなどの落るさま也
あやしかりける以下の詞は物語作者の評也
ゑしうといふほうしのある人の御けんさつかふまつりけるほとにとかく世の中にいふ事有ければよみたりける
ゑしう　十四巻譜云惠秀法橋山太宰少貳輔道孫從五位下爲國子藤原氏日野流　けんさ驗者也祈の師をいふ葵云いみしきけんさともにもしたかはす云々
此法師ある女とうき名の立しなるへし
さとはいふ山にはさはくしらくもの空にはかなき身とや成なん
一二の句うき名の里にも山にも立さはきてとかく世上の人にいはるゝ事を對句のやうによめる也されは浮雲の如く行衛なき身とならんと也後撰十六人のめにかよひける見つけられて身なくとも人にしられし世の中にしられぬ山を知よしも哉と賀朝法師のよめる類也
となんありける又此人の御もとによみたりける
朝ほらけ我身は庭のしもなから何をたねとて心おひけん
是もゑしう歌也下を霜にそへてよめるなるへし拾遺八限なき涙の露にむすはれて人のしもとは成にや有らんとよめる類也我部賤の身にて何とてかくやむことなき人を思ひかくる心の生出けんとよめるにや
此大とく坊にしける所のまへにきりかけをなんせさせけるそのけつりくすにかきつけける
きりかけ　夕顔云きりかけたつもの云々　さらしなの日記云山つらにかりそめなるきりかけといふ物したる云々　宇治拾遺云きりかけのうへよりなけこして云々板をならへて垣にしたるをいふとそ
まかきするひたのたくみのたつき音のあなかしかましなそや世の中
是もまへの歌の心とおなしく里はいふ山にはさはくの心を讀るなるへし序歌躰也　ひたのたくみ番匠也昔はみな飛驒の國より出し也延喜民部式云凡飛驒國毎年貢匠丁一百人云々　東屋云ひたのたくみもうらめしきへたて哉云々　花鳥云番匠の惣名也云々たつき音は伐木の聲也　あなはあらと俗にいふにおなし

なといひて行ひしにふかき山に入なんとすといひて
いにけりほとへていつくにかあらんといひてふかき
山にこもり給ひぬとありしはいつくそといひやり給
ひたりければ

惠秀のふかき山に入なんとありしはいつかたにと
かの名立し人のもとより尋ねしなるへし

なにはかりふかくもあらすよのつねのひえをとやま
とみるはかり也

横川は比叡山のおくなればひえを外山とはよめる
也ふかき山とてさのみもあらすたゝひえの山を外
山とみるはかり也といへるは至てふかき事をいふ
心也外山は端山なり高砂のおのへの櫻咲にけり外
山の霞たゝずもあらなん

となんいひたりけるよかはといふ所にある也けりを
なし人にある人山へのほり給ふへき日はとをくやあ
るいつそといへりければ

のほり行山のくもゐのとをければ日もちかくなるも
のにそありける

高山は天の日輪にもちかきゆへそれにそへて登山
の時日の近きをよむ也　草庵集に　分てなとつれ
なかるらん出る日の光にちかき峯のしら雪

とそいひをこせたりけるかくのみよからぬ事のある
かうへにいてきにければ

のかるとも誰かきさらんぬれ衣あめのしたにしすま
んかきりは

天下を降雨のしたにそへてよめる也　ぬれ衣なき
名をいふ歌林良材云ぬれ衣なき名をいふといへと
其歷たしかならすぬれ衣と人にはいはんむらさき
のねすりの衣うはき成とも右歌たしかになき名を
よめると聞ゆ云々　紅葉賀云にくからぬ人ゆへは
ぬれ衣をたにきまほしかる類ひもあればにや云々
きぬところも同事なれと多はきぬとよみてころもと
讀る歌は稀也狹衣歌におなしくはきせよなあまの
ぬれころもよそふるからにくからすやと一千十女
のなき名たつよし恨て侍りければ遣しける隆房
おなしくはかさねてしほれぬれころもさてもほす
へきなきならぬに　返し讀人不知なかれてもす
ゝきやするとぬれころも人はきすとも身にはなら
さし　是等ぬれてろもと讀り

大和物語虛靜抄卷上之三

つゝみの中納言の君十三のみこのはゝみやす所をうちに奉りけるはしめにみかどはいかゞおほしめすらんなどいさかしこく思ひなげき給ふけりさてみかどに讀て奉り給ふける

堤中納言　兼輔卿也十三のみこ延喜皇子章明親王三品彈正尹母更衣桑子兼輔卿女　うち　內裏をいふ我はあかぬ所なく思へども叡慮いかゞあらんと氣遣ひ給ふ也　かしこく　畏也橋姬に八宮の姬君達の御事を思ひの給ふ段云この道のやみを思ひやるにもおのこはいとしもおやの心みたさずやあらん女は限りありていふかひなき思ひすつべきにもいと心くるしかるべきなど大方の事につけての給へるいかゞさおぼさゞらんと心ぐるしく思ひやらるゝ御心のうち也云々引合てみるべし

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまよひぬる哉

歌心かくれたる所なし此歌後撰に入詞書此物語の趣とは聊かはれり後撰十五太政大臣の左大將にてすまひのかへりあるじし侍りける日中將にてまかりて事終てこれかれまかりあがれけるにやむ事なき人二三人とゞめてまらうどありしさけあまたゝびの後ゑちにのりて子供の上など申けるついでにと有

先帝いとあはれにおぼしめしたりけり御かへしはありけれど人えしらず

平仲かんゐんのごにたえてのちほどへてあひたりけりさてのちにいひをこせたる

平仲平貞文也正四位下茂世王桓武皇子仲野親王ノ子の孫右中將平好風男字仲四號平仲閑院古今作者作者部類云延喜頃之人云々

うちとけて君はねつらん我はしも露のおきゐてこひにあかしつ

歌心明也寡婦賦云烱々而不レ寢云々

我はしものしも此歌にては心なし月前花といふ題にていつよりと花をそ見つる此春は月の頃しも咲を待えてと讀る頓阿歌などにては心あるてにをは也新千十四物申ける女のもとに久しくまからで後あしたに申遣しける平貞文うちとけて君はねぬらん我はしも露とおきゐて思ひ明しつとありて女の返歌

はなし

女かへし

しら露のおきふし誰を戀つらん我はきゝおはずいそのかみにて

一二句露のおきゐてとあるをうけて白露のおきふしとつゝけたりきゝおはすは聞不レ負也負は擔心也我身はいそのかみにてふるされまいらせつる身なれば露のおきゐて戀あかし給ふなど承れどもそれは誰ぞ外人の上なるべしと也いそのかみとはふるき事をいふ新拾十四平貞文たらてのち程へてあひて露のおきゐてと申ける返事にと詞書有て此歌入たり

陽成院の一條のきみ

まへに先帝の五のみこの御むすめ一條の君と有同人なるべし

おく山に心をいれてたつねずはふかきもみちの色を見ましや

此歌ひとへに秋のもみちをよめる歟また戀の心をそへたるにや前文見えねばその心はかりかたし惣して紅葉は深山ほと色ふかく染るもの也續後撰七爰にだに淺くはみへぬもみぢはのふかき山路を思ひこそやれ玉五秋深き山より山に分入ば猶色そへる紅葉をそみる此歌戀歌ならばいかなる強面き人なりとも年月心をつくしふかく思ひ入侍らばそのしるしありて逢見る事も有ぬべし何の道も志だにふかからば其望は遂侍りなんといふ心なるべし詞九戀の歌に住吉のほり江に立るみをつくしふかきにまけぬ人はあらしな相摸歌也此心にや

先帝の御時刑部の君とてさふらひ給ふけり更衣の里にまかり出給ふてひさしうまいり給はざりけるにつかはしける

刑部君更衣の名也更衣職原抄追加清原秀賢作云女御御息所更衣と次第す天子御裝束を召更る所あり此局を掌る上﨟を更衣といふ公卿の女任レ之多くは女御に轉す云々稱名院殿御說云便宜の御殿にさぶらふしかるべき上達部などの女也云々花鳥云女御よりは次の人也云々

桐壺の更衣は按察大納言の女也

おほそらをわたる春日のかけなれやよそにのみしてのどけかるらん

春日の遲くたるにそへて里住の寛々をいかゝとか
こちやらせ給ふ心なるへしはやく出仕もあれかし
この御製也此御歌新古十一戀の部に入て題しらす
亭子院御歌と有されは爰にいへる先帝は寛平帝を
申へくや

おなしみかと齋院のみこの御もとにきくにつけて

齋院は宇多皇女君子内親王なるへしとそ　延喜式
云凡天皇即位定ニ加茂大神齋王ニ仍簡ニ内親王未
嫁者ニトレ之若無ニ内親王ニ者依ニ世次ニ簡ニ諸女王ニトレ之云々或記云五十一代
平城帝五十二代嵯峨帝爭ニ於帝位ニ時嵯峨帝爲ニ祈
願ニ以ニ皇女有智内親王ニ始立ニ齋院ニ也云々　河海
云嵯峨天皇弘仁元年置ニ齋院司ニ以ニ皇女有智内親
王ニ（母ハ交野女ノ王）爲ニ齋王ニ云々

行てみぬ人のためにとおもはずはたれかおらまし我
宿の菊

行てみぬ人とは齋院をさしてよみ給へる也帝の御
身おもくわたらせ給へば日頃ゆかしくおほしめせ
とも御心のまゝに臨幸も有かたければかくよみ給
へる也さて此菊は御賞愛の花なれともかく折てま
いらせ給ふ事は齋院を思召事の切なる故也もしさ
もあらずは誰かおらましとよませ給へる心とそ

さいゐんの御返事（かへりごと イ）

我宿に色おりとむる君なくばよそにも菊の花を見ま
しや

かゝる色よき花を折てをくらせ給ふ君のおはしま
さすば花の美なる事もたゞよそにのみ開てまのあ
たり見給ふ事もあるましきを君の折てをくらせ給
ふゆへ御覽し歎ひ給ふ心也菊に開をそへて也結句
のややはの心にてかへしてみるてにをはなり伊物
にけふこすはあすは雪とそふりなまし消すは有と
も花と見ましや此格也

かいせん山にのほりて

戒仙作者部類云仙（イ善）後撰作者

雲ならてこたかきみねにゐるものはうき世をそむく
我身也けり

歌心明也

齋院よりうちに

齋院是も君子内親王なるへし

おなし枝を分て霜をく秋なれはひかりもつらくお
ほゆる哉

おたしえは兄弟連枝の御事也霜は物を枯すものなれは霜をく方はかれたころへ霜をかぬ方は榮ふる也榮枯かはる事を分て霜をくとは讀給へる也ひかりに日をもたせて日光をひかりとはかりもいふ也天子の御德を日にたとへ霜は日影のうつりうつらぬ所によりてかはれば御身の述懷をそへて帝へ愁へ申させ給ふ心なるへし

御かへし

花の色を見てもしりなん初霜の心わきてはおかしとそおもふ

おなし花なれば分てはをかしとの御返しなるへしこれもうちの御イ御返しわたつ海のふかき心ををきなからうらみられぬるものにそ有ける

至公無ニ私親一なればいつかたも〳〵帝の御恩澤は平等なれとも猶分て霜をくなどうらみらるゝはそのかひもなしとの御製なりうらみ浦にそへて也沖も海の緣ある詞也

陽成院にありける坂上のとをみちといふおとこおなし院にありける女さはる事ありてあはざりければ

さかのうへのとをみち　父祖未考或云官史記云承平九年條瀧口坂上遠道是歟

秋の野をわたらん鹿も我ことやしけきさはりにねをはなくらん

我こさやは我如や也下路の詞也古十あし曳の山時鳥我如や君に戀つゝいねかてにする

右京のかみむねゆきのきみ三郎にあたりける人ばくやうをしておやにもはらからにもにくまれけれはあしのむかん方へゆかんとて人の國へいきけるさて思ひける友たちのもとへよみてをこせたり

三郎未考　ばくやう博奕也やうは様か文選博奕論云今世之人多不レ務ニ經術一好ニ翫博奕一廢レ事棄レ業忘ニ寢與食一云々

しをりして行たひなれとかりそめのいのちしらねはかへりしもせし

しをり枝折也木の枝なと折かけて道のしるへとする也栞の字也周伯温曰禹貢ニ隨レ山栞レ木宜レ用ニ此字一謂下隨ニ所レ行林木一斫ニ其枝一爲中道記識上也　又たちかへらん爲しをりはして行旅なれともと也

おとこかきりなく思ひける女ををきて人の國へいにけりいつしかとまちけるにしにきといひ來りけれは

女のまちけるに男のしにきといひ來れはと也

今こんといひてわかれし人なればかぎりときけど猶ぞまたるヽ

今こんとは頓てこんといふ心也やがて歸りこんといひつればしにきといへど實しからず猶待るヽと也此歌續後拾遺十八に入たのめたる男の遠き所にてなく成ぬと聞て讀人しらず今こんといひて別し君なればなき世と聞ど猶ぞまたるヽとあり哀ふかし

となんいひける

越前の權の守かねもり兵衛の君といふ人にすみけるをとし比はなれて又いきけりさて讀ける

兼盛　紹運錄云興我王或作二興雅一是忠親王男孫平篤行男云々拾芥云兵部大輔篤行男興雅王孫駿河守五位正暦元十二月卒云々　兵衛の君　作者部類云參議兼茂女後撰拾遺作者云々考二系圖一兼茂は利基男兼輔卿兄也

夕されば道も見へねど古鄕はもとこしこまにまかせてぞゆく

古鄕とは兼盛のもとかよひすみ給へる處なれば也此歌は蒙求云韓非子曰管仲隰朋從二桓公一伐二孤竹一春往冬返迷惑失レ道管仲曰老馬之智可レ用也仍放二老馬一而隨レ之遂得レ道云々此心也猶奥儀抄などにも見へたり後十七尋ねつる雪のあしたの放駒君ばかりこそ跡をしるらめ千六下みやま路はかづふる雪に埋ていかでか駒の跡を尋ねん續千八雪のうちに昔のみちを尋ぬれば迷はぬ駒のあとぞしらるヽ是等みな此故事にて讀り

女かへし

こまにこそまかせたりけれはかなくも心のくるとおもひける哉

けふおはしたるは駒の道しるべせしゆへに侍るを愚にも心からとひ給へると思ひしよと也此哉かへる哉也此贈答後撰十三に入第三句あやなくもとあり彼集にては讀人不知と書り

近江のすけ平中興のむすめをいといたうかしつきけるをおやなくなりてのちとかくはふれて人のくにヽはかなき所にすみけるをあはれかりて兼盛がよみておこせたりける

平中興　桓武の御末高棟王の孫季長男左衛門權佐

はふれ　古今歌に　身はすてつ心をたにもはふら

さしつゐにはいかゞなるとしるべく　榮雅抄に心をたにもうるはしくして放埓にもたじとあればはふれとは放埓なるをいふ歟こゝはおちぶれし心なるべし

おちこちの人めまれなる山里に家ゐせんとはおもひきや君

遠近のたつきもしらぬ山中とよめる歌の上句に同意なるべし〔後撰十六〕むかし　おなじ所に宮づかへし侍る女の男につきて人の國におちゐたりけるを聞つけて心ある人なりければいひ遣しけるとありて此歌いれり返しもあり身をうしと人しれぬ世を尋ねこし雲の八重たつ山にやはあらぬ此贈答兩首とも彼集にてはよみ人不知とあり

とよみてなんおこせたりければ。〔見てイ〕かへりこともせでよゝとぞなきける女もいとらうある人也けり

らうある　勞ある也

おなじかねもりみちのくにゝてかんゐんの三のみこのむすめにありける人くろ塚といふ所にすみけりそのむすめどもにをこせたりける

清和第三皇子貞元親王を閑院と號すその三のみこは源兼信〔從五位下侍從貞元親王三男源重之父〕

みちのくのあたちが原のくろづかにおにこもれりときくはまことか

此歌拾遺九に入詞書云みちのくになとりのこほりくろつかといふ所に重之がいもうとあまた有と聞ていひつかはしけると有て結句いふはまことかとあり

おにこもる八雲御抄云心にくき也云々奥儀抄も是に同じ歌の心は兼信の女黒塚といふ所におくふかく住るよしを聞く心にくければ行ても見まほしきまゝきくはまことかと讀て贈るなるべし

凡おにといふ事伊物におにある所鬼一口かりにも鬼のなとあるは此兼盛の歌におにこもれりと讀るにはみな同じかるべからず同物語にかりにもおにのすたく成けりとある歌諸抄に女を鬼といふ證に此兼盛の歌幷に阿含經の外面似菩薩内心如羅刹の文をひきて女を鬼と注せりいかさまかりにもおにのとある歌にてはさもやとも見ゆれど此兼盛の歌にてはたゞ奥ふかくかくれたもるが心にくき事をかくよめるなるべし八雲奥義なとにおにこもる心

にくき也と有も此歌をもて注し給へるにや新撰六帖あたち野の原の黒塚おにこめて心にくゝも世を過さはや為家卿歌也あなかち女をこめてといふにはあらすたゝ心にくゝもといはん序に上句をかくつゝけ給へるなるへし又若狭守勝俊長嘯子後陽成院崩御をいたみ給へる挙白集に出言葉にも御位さらせ給ひて後はしけかりしあさまつりことをのつからよそにのかれおはしましのこやかなる御すまゐおくゆかしくまことにおにこもれる大宮のうちなりけり云々引合てそ知るへし

といひたりけりかくてそのむすめをえむといひけれはおやまだいとわかくなんあるいまさるべからんおりにをといひけれは京にいくとて山吹につけて

おりにをのをもし助字也

花ざかり過もやするとかはつなく井手の山吹うしろめたしも

今さるべからん折になど親のいひのぶるによりてとやかくいふ程には女のさかりも過なんかとうしろめたく心もとなしと思ふ心を山吹にそへてよめる也山吹は昔より女にたとふる也萬十九妹に似る草と見しより我しめし野への山吹誰か手折し井出山城國也　蛙山吹由緒ありて此所に讀ならはせり

といひけりかくてなとりのみゆといふ事をつねたゝのきみのめよみたりけるといふなん此くろづかのあるしなり

名取御湯　陸奥也　恒忠　系圖云左大臣武智麻呂末左少辨有蔭三男從五位上日向守母名治共縄主女なとりのみゆといふ事をかくし題にてよめるは恒忠の妻にて兼盛の心かけし黒塚にすみし女也といふ心也

大ぞらの雲のかよひぢみてし哉とりのみゆけはあとはかもなし

なとりのみゆを隠し題にてよむ也雲の通路は鳥ならてはゆきゝせぬものゆへ跡もなしとよめる也はかは助字也そこはかなといふに同し天を鳥の道といふ鳥ならてはかよはぬゆへ也杜詩に闕塞極レ天唯鳥道とあり此歌拾遺七物名の部におほつかな雲のかよひちみてし哉とりのみ行は跡はかもなしとありて兼盛の歌也

となん（イナシ）よみたりけるをかねもりのおほきみをなし所

を
兼盛は光孝の御末にて王孫なれども父篤行平姓を給はりたればおほきみとはいふましけれども大やうにかけるなるへし

しほかまの浦にはあまやたえにけんなどすなどりのみゆる時なき

すなどり漁なり魚とるをいふ鹽竈浦是も陸奥にて名高き所也などりのみゆをかくせり

となんよみけるさて此心かけしむすめこと男して京にのほりたりければきゝてかねもりのほりものし給ふなるをつげ給はでといひたりければゐてつ山吹うしろめたし[illegible]つく

にのつとゝてをこせたりければおとこ

恒忠の妻に成たるをこと男してといふ歟聞てとは兼盛の聞てなりのほり物し給ふは女の京へのほりたるをいふ也のほり給ふを我に告給はでと兼盛のもとよりいひ遣すなるへし井手の山吹うしろめたしとはかの前に有花盛過もやするとの歌の事也つと土産をいふ都のつとにいさといはましをなど伊物にもあり

年をへてぬれわたりつる衣手をけふの涙にくちやしぬらん

此女のぬし定りし上我贈し文をみちのくにのつとゝてかへせし事かた〳〵女のつらさのみ數そひぬれは歎もいやまさりて袖もいとゝ朽はつるはかり也との心なるへし此歌の次にといへりけりと異本にはあり

世の中をうんじてつくしへくたりける人女のもとにをこせたりける

うんして恨はてたやうの心也藁云いかにおほしうむしけん云々河海云惱(ウンシ)の字也[illegible]ハ怒つくし筑紫也神代卷[illegible]云々九州の惣名なり本見ゆみゝつくといふ鳥也其形かの鳥に似たるゆへかく名つけしとぞ

わするやと出てこしかといづくにもうさははなれぬものにさりける

憂(ウサ)に筑紫の字佐をそへてよめり字佐は名寄に豊前國に入ものにざりけるとは物にぞありけるといふに同し曾阿切左なるゆへ也ぞあと有べき所をざとばかり約していふ也

五條のごといふ人ありけり男のもとにわがかたをゐにかきて女のもえたるかたをかきてけふりをいとおほくゆらせてかくなんかきたりける

五條のご　或云參議藤伊衡女にや伊衡家五條東洞院と見ゆ疑は是歟

君をおもひなま〲し身をやくときはけふりおほかる物にぞ有ける

思ひに火をもたせてやくなといふ事常の事也　文選幽通賦云紀焚レ躬以衛云々おほかるはおほくあるといふに同しこれも久安切可なる故也　柏玉集後柏原院御製寄大和物語戀うつしゐのまことは見えじかくはかり思ひにもゆる身とはいふとも此段をよみ給へるなるへし

亭子院にみやす所たちあまた御さうし〻てすみ給ふにとしごろありてかはらの院のいとおもしろくつくられたりけるに京極の御息所ひと〻ころ御ざうしをのみしてわたらせ給ひにけり

かわらの院六條河原院也宇治拾遺十二云今はむかし河原院は融の左大臣の家也みちのくのしほかまのかたをつくりてうしほをくみよせて鹽をやかせなござま〲のおかしき事をつくしてすみ給ひけるおと〻うせて後宇多院に奉りたる也延喜御門たひ〱行幸有けり云々或記云天皇醍醐幸ニ六條院ニ謁ニ法皇ニ此院故左大臣源融宅所謂河原院也先レ是參議昇融之子獻ニ之法皇ニ云々延喜御記云此日參ニ六條院ニ此院故左大臣源融朝臣宅也大納言源朝臣奉レ進ニ故院ニ云々案ニ系圖ニ昇は融公の男大納言正三位也此卿の時宇多帝へ奉り給ふ也是より法皇此院にもおはしまし〻也此時融公の靈いで〻御息所を魘し事河海抄に有

春の事なりけりとまり給へるみざうしどもいとおもひのほかにさう〲しき事をおぼしけり殿上人なごかよひまいりて藤の花のいとおもしろきをこれがさかりをだに御らんせてなといひて見あるくにふみをなんむすびつけたりけるあけてみれは

さう〲敷はさひしき也亭子院にとまり給へる御息所達の心也おもほしはおぼしに同しこれがさかりをたにのてには面白し心をつけてみるへし

世の中のあさきせにのみなりゆけはきのふのふちの花とこそ見れ

上句京極の御息所参り給ひてより院の御心かはらせ給ふ事をそれとはいはでひろく世上の事にいへる心つかひ面白し下句藤を淵にそへたり古十八世の中は何か常なる飛鳥川昨日のふちそけふはせとなる後撰九外のせはふかく成らし飛鳥かはきのふの淵そ我身なりける是等の心にてよめり後撰三棹させど深さもしらぬふちなれは色をも人はしらしとそおもふ此歌藤を淵にそへたる證也

とありければ人々見てかぎりなくめてあはれがりけれどたがみさうしのし給へるともえしらざりけりおとこどものいひける

おとことも　殿上人などなるべし

藤の花色のあさくも見ゆる哉うつろひにけるなこりなるべし

院の御心のうつろひけるなこりゆへや此院の藤も色あさくみゆると詠る也古今栄雅抄云　衰将黄變　花のうつろふは散にあらず散ぬべき色のつくをいふ云々

のうさんのきみといひける人淨藏とはいとになう思ひかはす中なりけりかきりなくちぎりておもふ事をもいひかはしけりのうさんの君

のうさんの君未考　淨藏　作者部類凡僧都云三善清行子云々になう無二也　細註云になうあらためつくらせ給ふ云々

おもふてふ心はことにありけるを昔の人に何をいひけん

歌心君と我心友の情は世上の義をなす類ひにはあらず格別深切なる中也されは我昔もと人に交りしに其時も朋友の親みは淺からすおほえしかと今此淨藏と親みの厚にくらへては昔の友には何をかたらひけんとの心にや又昔の人にとあるを前世の事に見る説もありいかゝ侍らん

といひをこせたりければ淨藏たいさくの返し

行末のすくせをしらぬこゝろには君にかきりの身とそいひける

此世に出生する人前世の宿縁によりて苦樂さまさまな果報を受るならひなれば行末の宿縁はいかゝあらんもしりかたしたゝ心友の情は君に盡す我身なりとの心なるべしのうさんは昔の人に今過去の事をいへるに淨藏は行末のすくせをしらぬと未來の

事をよめり
故右京のかみ人のむすめを忍ひてえたりけるをおや聞つけてのゝしりてあはせさりければわびてかへりにけりさてあしたに讀てやりける
故右京のかみ　宗于也
さもこそは峯のあらしはあらからめなびきし枝をうらみてぞこし
おやののゝしりたるけしきは嵐の烈しく吹が如く成ともあひ思ふ心ならばさのみは有まじきを親の制するになびき從て我にあはざりしを恨てよめる也俊頼朝臣人をはつせの山おろしよとよめるも人の心あらく烈を山おろしに比して讀る也(堀河院後百首)さもこそはけさの嵐のあらからめあなはしたなの槇の板戸や忠房
平仲にくからず思ふわかき女をゐのもとにゐてきてをきたりけりにくげなる事ともをいひてゐつゐにおひ出しけり此めにしたがふにやありけんらうたしと思ひながらえとゞめずいちはやくいひければ近くたにえよらで四尺の屏風によりかゝりてたてりていひけるよのなかのおもひのほかにある事こそせかいにものし給ふともわすれでせうそこし給へをのれもさなんおもふといひけり
にくげなる事ともをいひて　本妻のいひたる也
らうたしと平仲心にいたはしく哀には思ひながら妻の歸るをえとゞめざりし也いちはやく伊物闕疑抄云早速也云々すみやかなる心也本妻を恐て近くもえよらざりし也四尺の屏風やさり本云四尺の屏風に此障子をそへて云々枕草紙云四尺の屏風東西にへだてゝ云々榮花御賀云四尺の屏風の繪めきたり云々物語にあまた見えたり
此女つゝみにものなど入て車とりにやりてまつほどなりいとあはれと思ひけりさて女いにけりとばかりありてをこせたりける
つゝみ裹也　衣類などいるゝ也　とばかり　しばしばかり也
わするゝなわすれやしぬるはるかすみけさたちながら契りつると
妻の歌也　春霞はけさたちながらといはんためなり心明也
南院の五郎みかはのかみにてありける

南院拾芥云六條ノ北烏丸ノ西、小一條院御領光孝皇子是忠親王家也考ニ紹運錄ニ是忠親王男あまた見えたり五郎は今扶王と有是歟

承香殿にありけるいよのこをけさうしけりこんといひけれは御息所の御もとにうちへなんまいるといひをこせたりけれは

承香殿拾芥云仁壽殿北九間四面源氏抄云紫宸殿の後仁壽殿ありそのうしろに有殿也云々御息所誰としらす伊豫のご御息所の侍女なるべし　こんといひけれはいよのこのもとへ五郎のこんといひやりしなるへしたますたれうちとかくるはいとゝしくかけをみせしと思ふなりけり

玉簾は内外かくるといはん爲におくなりうちへまいるといふ詞をとらへて讀出したる歌也さやうにうちのとのと承るはいよ〳〵すきかけも見せまじきとや扨もつれなき心哉とかこちたる歌なるへし内外歌にてはうちとゝよみ詞には内外(ナイケ)と音によむとぞ拾遺十四うちとなくなれもしなまし玉たれのたれとし月をへたて初けん

といへり叉

なけきのみしけきみやまの時鳥こがくれゐてもねをのみそなく

なけきに木をそへ人しれすねをなく心を木茂き山のほとゝきすによせてよめり須磨「蟹かつむなけきのなかにしほたれていつまてすまのうらとなかめん是等もなけきに木をもたせたり

なといひけりかくてきたりけるをいまはかへりねとやらひけれは

やらひは追心也夕霧云霧のまかきは立とまるへうもあらすやらはせ給ふ云々かへりねとはかくれよといふに同し

しねとてやとりもあへすはやらはるゝさもいきかたき心こそすれ

第四句生(イキル)に往をそへたり拾遺六みちのくにのかみこれともかまかりくたりけるに彈正のみこのかうやく遣しけるに戒秀法師　龜山にいく藥のみありけれはとゝむる方もなき別哉此類なり

返しおかしかりけれとえきかす叉雪のふる夜きたりけるを物はいひて夜更ぬかへり給ひねといひければ歸りける程に戸をさしてあけざりければ

かへる道にある戸なるへし
我はさは雪ふる空にきへねとやたちかへれともあけぬ板戸は
さは　さらば也
となんいひてゐたりけるかく歌もよみあはれにいひゐたればいかゞ（いかにイ）せましと思ひてのそきてみればかほこそ猶いとにくけなりしかとなんかたりしとか
いよのごの語りしとか聞しと作者のいへる也
としこちかぬをまちける夜こざりければ
さよふけていなおふせ鳥のなきけるを君かたゝくと思ひける哉
いなおふせ鳥は古今三鳥のひとつにて深秘也とぞ
又としこ雨のふりける夜ちかぬをまちけり雨にやさはりけんこざりけりこぼれたる家にていだく（いとだつイ）もりけり雨のいたくふりしかばえまいらず成にきさる所にいかてものし給ひつるといへりければとしこ
雨のいたくふりしかば　千兼よりいひやる詞也
君をおもひひまなき宿と思へどもこよひのあめはもらぬまそなき
君を思ひのひますきまもなき宿なれど雨はもらぬまもなしと也ひまなくは雨も漏ましきにとの心也
ひまはやねの板間也後拾十二つの國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ蘆の八重ふき
枇杷殿よりとしこか家にかしは木のありけるをおりに給へりけりおらせてかきつけて奉りける
枇杷殿拾芥云左大臣仲平公ノ宅昭宣公ノ家近衛ノ南室町ノ東洞院ノ西一町　大鏡云左大臣仲平公これ基經の次郎御母は本院大臣時平公におなじ大臣の位にて十三年をおはせし枇杷左大臣と申す子もたゞ[illegible]人にゆす[illegible]にけりさて[illegible]給へる此人におはす[illegible]花月宴云次郎仲平と聞へける左大臣まで成給ひて七十一にてうせ給ひにけり云々
我宿をいつかは君かならしばのならしかほにも折にをこせる
後撰十六ひわの左大臣よう侍りてならの葉をもとめ侍りければ千兼があひしりて侍りける家にとりに遣したりければとしこ我宿をいつならしてかなら柴のならしかはにも折におこする返し枇杷大臣ならの葉には守の神のましけるをしらてそ折したゝりなさるなと有いつかは君かなら柴いつならしてか

なら柴ともに馴る心にいへり歌の心は我宿にいつ君か來馴給ひてなれがほにかゝるものを御所望そやとの心也新千十三 みかり野のかりそめ人をならしはに我そふみたし道はくやしき

御かへし

かしは木にはもりの神のましけるをしらてそたりしたゝりなさるな

葉守神　樹神也　八雲御抄　柏の下云はもりの神在此木云々　としこのいつならしてかとゝがめたるに答へて猶はぬしある宿の樹なるものをさはしらて折に遣はせしは遠慮なき我あやまり也ゆるし給へとの心也神といふよりして祟なさるなとよめり此歌うへは柏の事にてとしこには千兼といふぬしのある事をしらて楚忽の事申つるといふした心也柏木かしは木にはもりの神はまさすとも人ならすへき宿の梢か枕草紙云かしは木いとおかしはもりの神のますらんもいとかしこし云々新古六 時しもあれ冬は葉守の神無月まはらに成ぬ森の柏木又柏ならても葉守神を讀り金三 月前落葉といふ事をよめる源俊頼嵐をや葉守の神もたゝるらん月に紅葉の手向し

つれは

忠文かみちのくの將軍になりて

忠文　系圖云式部卿宇合の末參議從四位上枝良男參議正四位下將門追伐之時天慶三年正月十九日任ニ征夷將軍ニ云々將門叛逆は神皇正統記云此御時朱雀平の將門といふものあり上總介高望か孫也高望は葛原の親王の孫平の姓を給る桓武四代の御苗裔也とそ 執政の家につかふまつりけるか使の宣旨を望み申けり不許なるによりていきとをりをなし東國に下向して叛逆をおこしけり先伯父常陸國の大掾國香をせめしかば國香自殺しぬ是より坂東をおしなびかし下總國相馬郡に居所をしめ都と名つけみつからも平親王と稱し官爵をなしあたへけり是によりて天下騒動す參議民部卿惡右衛門督藤原忠文朝臣を征夷大將軍とし源經基清和の御末六孫王といふ頼義義家等か先祖也 藤原仲舒忠文の弟なりを副將軍として差つかはさる平貞盛國香か子也 藤原秀鄉等心をひとつにして將門を亡して其首を奉りしかは諸將道よりかへりまいりき將門は承平五年二月に事をおこし天慶三年二月に滅ぬ其間六年を經たり云々　源親行關東紀行云昔朱雀天皇の御時將門といふもの東にて謀反起したりけり是を平けん爲に民部卿忠文

を遣しける此關清見關也にいたりとゞまりけるか清原
滋藤といふ者民部卿にともなひて軍監といふ官に
て行けるか漁舟の火の影は寒くとて浪を焼き驛路
の鈴の聲は夜山を過るといふ唐の歌を詠ければ民
部卿涙をなかしける云々
くだりける時それがむすこなりける人を監の命婦し
のひてあひかたらひけりむまのはなむけにめとりぐ
ゝりのかりきぬうちきぬさなとやりたりけるかのえ
たるおとこ
くたりける時それかむすこ大七也父に伴ひて下り
しにや忠文男備後守滋望也　大七は字也とぞむま
のはなむけ　餞也　めとりぐゝりの狩衣　枕草紙
云まき染むらごくゝりものなとそめたる云々闕屋
云色々のあをのつき／＼しきぬひものくゝりそ
め云々めとりぐゝりは狩衣の縫様にはあらす染模
様をいふにや或書云今の世には常の裳の中に纐纈
といひて各別の物あり是も其子細はしらず昔の纐
纈といへるはくゝり染の事也雌纈雄纈ありて纐と
纈と別なる事延喜縫殿寮式に見えたり云々うちき
袿大小あり花鳥云小袿は女房ならては着せぬ也色

はさたまらぬ也云々ぬさ道祖神の手向の爲に餞に
贈る也ぬさを花紅葉の形にもする事あり後撰の詞書にも見えた
り
よひ／＼に戀しさまさるかりころも心つくしのもの
にそありける
古十二 よひ／＼にぬきて我ぬる狩衣かけて思はぬ時
のまもなし 同十四 かたみこそ今はあたなれこれなく
は忘るゝひまもあらまし物を是等の歌をとりあは
せてよめるなるへし
とよみたりけれは女めでゝなきけり
おなし人に監命婦やまもゝをやりたりけれは
みちのくのあたちの山もろともにこえはわかれの
かなしからしを
あたち　安達なるへし　楊梅をかくしたり
となんいひけりさてつゝみなる家にすみけるさてあ
ゆをなんとりてやりける
つゝみなる家　監命婦の家なるへし前にもあり
加茂川のせにふすあゆのいをとりてねでこそあかせ
夢に見えつや
鮎をとりてまいらせんとて夜もいをねす夜を明し

など勞し侍る此心は君か夢にも見えつるやとなり
あゆは夜川などいゝておほくは夜とるゆへかくよ
めり加茂川東川とも堤川ともいふ專あゆをとる也
花鳥云西宮抄云禁川堤川左衛門府撿知葛野川右
衛門府撿知已上夏供レ鮎云々今按堤川東川葛野川桂
川也云々常夏云ちかき川のあゆ云々加茂川のあゆ
をいふとそ

かくて此おとこみちのくへくだりけるたよりにつけ
てあはれなるふみともをこせけるを道にてやまひし
てなんしにけると聞て女いとあはれとなん思ひける
かくきゝてのちしのづかのむまやといふ所よりたよ
りにつけてあはれなる事ともをかきたるふみをなん
もてきたりけるいとかなしくてこれはいつのそとと
ひければつかひの久しくなりてもてきたるになんあ
りける女

篠塚驛　歌枕名寄未勘國の部に陸奥歟云々此物語
の歌を出して下句人はむなしく成にける哉とあり
しのつかのむまや〳〵とまちわびし君はむなしくな
りぞしにける

むまや　八雲御抄云いまやといふこゝろ也在二俊
賴口傳一又旅の道のむまやなといはんは別事也云々
今や〳〵と待わひし心を行路の驛にそへて讀る也
和名抄云驛（音驛 和名無末夜）若地勢險阻及無二水草一處隨レ緣
置レ之云々或書云今の東海道從レ京江戸迄の道中ノ置
驛五十三次と定められしは山谷詩集第十二卷に鬼
門關外莫レ道レ遠五十三驛是皇州とある詩によれり
云々萬葉には驛路驛使など書り神功皇后紀云增二賜
多次城一爲二往還路驛一云々

とよみてなんなきけるわらはにて殿上して大七とい
ひけるをかうふりしてくらうと所におりてかねのつ
かひかけておやのともにいくになんありける

わらはにて殿上して帚木云童なる殿上のほとに御
らんしなれたるもあり云々　注云童殿上とて昇殿し
たる人也云々　禁秘抄云近代童殿上希代躰也云々　か
うふりして元服敍爵いつれにてもなるへし藏人所
校書殿にあるよし拾芥にみゆ所とは官舍をいふ藏
人等の集會する所也職原抄云嵯峨天皇御宇弘仁年
中初置レ之摸二異朝ノ侍中內侍等職一歟彼侍中尤爲二
重任一內侍者宦者之任也或有二卑レ之代一或有二貴レ之
時一古來宦者知レ事先賢之所レ謗也云々猶彼抄に委し

かねのつかひかけて續日本紀十七云天平廿一年二月陸奥國始貢ニ黄金ー云々 萬葉十八賀ニ陸奥國出レ金詔書ニ歌一首并短歌 大伴宿根家持 あつまの國のみちのくの小田なる山にこかねありと云々上下略之反歌すめろきの御代さかへむとあつまなるみちのく山にこかねはなさく歌林良材云右聖武天皇天平感寳元年みちの國の小田といふ山にして始て金をほり出し侍りし時大伴の家持長歌をよみて奉りしその返歌三首の一なり是によりて年號に感寳の二字をかへられ侍り云々 昔は奥州より金を貢せし也その使也とそ此段大七の奥州へ下向ありしゆへをいふ也かけては兼て也

故式部卿のみやうせ給ふ時はきさらきのつこもり花のさかりになんありけるつゝみの中納言のよみ給ひける

敦慶親王延長八年二月晦日薨し給ふ紹運録に見えたり

咲にほひ風まつ程の山さくら人のよよりは久しかりけり

新勅十八 式部卿敦慶のみこかくれ侍りにける春よみ侍りけると詞書ありて此歌入り返歌は見えす歌心は古十六 花よりも人こそあたに成にけれいつれを先に戀んとかみしとある歌の類ひなるへし

三條右のおとゝの御返し

定方公也

はる〳〵の花はちるとも咲ぬへし又あひかたき人のよそうき

續古十六 式部卿敦慶のみこなくなりて右衛門督兼輔とふらひて侍りける返事に三條右大臣春毎に花はちるともと初五文字かはりて入たり萬十 としのはに梅は咲ともうつせみの世の人君し春なかりけり千五 春くれは散にし花も咲にけり哀別のかゝらましかは唐詩に年々歳々花相似歳々年々人不同引合てみるへし敦慶親王は宇多皇子御母は贈皇太后胤子内大臣高藤公の御女にて右大臣定方公の御妹君なれは親王と定方公とは叔甥の御よしみあれは兼輔卿もとふらひ給へるなるへし

おなし宮おはしましける時亭子院にすみ給ふけり此宮の御もとに兼盛まいりけりめしいてゝものゝたまひなとしけりうせ給ひてのちかの院を見るにいと

あはれ也池のいとおもしろきにあはれなりけれはよ
みける
ものらの給ひら文字ある本にはなしといへりたゞ
ものなとといふに同し
池はなをむかしなからのかゝみにて頼みし君かなき
そかなしき
榊に桐壺帝崩し給ひて後彼院の池ひまなうこほれ
るを見給ひてさえ渡る池の鏡のさやけきに見なれ
し影をみぬそかなしきと源氏よみ給へる心かよへ
るにや玉十七 昔にもかはらすすめる池水に影たに見
えぬ君そかなしき是等の類也
人の國のかみにてくたりけるむまのはなむけを堤の
中納言してまち給ひけるにくるゝまてこさりけれは
いひやり給ふける「わかるへき事もあるものをひね
もすにまつとてさへもぬるゝ袖哉
他國へ遠く行人なれは別て程久しく隔りかなしか
らん事もあるものをけふ一日をさへ待わひて歎き
つる事よと也さへの詞心をつくへし異本には此歌
の次にとありけれはまこひきにけりとあり
おなし中納言かのとのゝしんてんのまへにすこし遠
くたてりける櫻をちかくほりうへ給ひけるがかれさ
まに見えけれは
やどちかくうつしてうへしかひもなくまちとをにの
み見ゆる花哉
後撰一 前栽に紅梅をうへて又の春おそく咲けれはさ
詞書あり近きに遠きを對して也こゝも異本には此
歌の次にとよみ給ふけるとあり
おなし中納言くらうとにて有ける人の加賀のかみに
てくたりけるにわかれおしみける夜中納言
君かゆくこしのしら山しらねともゆきのまに〳〵跡
はたつねん
古八 詞書云大江千古かこしへまかりける馬のはなむ
けによめる云々 榮雅抄云こしのしら山しらねとも
雪のひま〳〵跡はたつねんと也雪のまに〳〵は雪
の間々の心也云々雪に行心をそへたる也古八よそに
のみ戀やわたらん白山のゆき見るへくもあらぬ我
身は此類也
となんよみ給ひける
かつらのみこの御もとによしたねかきたりけるを母
みやす所聞つけ給ふてかとをさゝせ給ふけれは夜ひ

とよたちわつらひてかへるとてかくきこえ給へとて
かとのはさまよりいひいれける
源嘉種　作者部類云美作介從五位下從三位刑部卿長猷子云々長猷は紹運錄云清和皇子云々字子内親御母前に見えたり

こよひこそなみたの川にゐる千鳥なきてかへると君はしらすや

千鳥にそへて思ふ心をのへし歌なるへし
これもおなしみこにおなしおとこ

なかき夜をあかしの浦にやくしほのけふりは空にたちやのほらん

續後撰十二　亭子院にさふらひける女に遣しける源嘉種とありて此歌入たり夜をあかすといひかけて也長き夜めもあはす歎きあかす思ひの煙は大空にも立のほるへきを君は見給はずやとの心なるへし
かくて忍ひてあひ給ふける(はるにイ)に院に八月(ハツキ)十五夜せられけるにまいり給へとありければまいり給ふに院にてはあふましければせめてこよひはなまいり給ふそととゝめけりされとめしなりければえとゝまらていそきまいり給ふければ嘉種

八月十五夜せられ宇多帝亭子院にて月見の御遊あるなるへし　とゝめけり嘉種のとゝめしならん

たかとりかよゝになきつゝとゝめけん君は君にとこよひしもゆく

此歌難解ゆへ異説樣々あり是は全體竹取物語の心にてよめると見えたりたかとりはたけとり也五音通すよゝになくはよゝとなく也前に註す彼物語にかくや姫八月十五夜天上にのほりしを竹取の翁とゝめかねてたゞさしあふきてなきをりとも又翁女ちのなみたをなかしてまとふとも見えたり下句君は君にとといふは初の君は桂のみこの事後の君は宇多帝をさしてよめると見ゆ歌心は時しもあれ今宵八月十五夜しもめしなりとて亭子院に行給へは昔竹取の翁かかくや姫をとゝめかねてちの涙をなかし歎しにもかはらぬ思ひゆへなきつゝとゝめけん翁か心まて思ひしらるゝといふ心なるへしこよひしも行といへるしものてにをは意味あり今夜八月十五夜竹取の翁と我もひとしく君をとゝめかねて歎きつれは也　彼物語云八月十五日はかりの月に出ゐてかくや姫いといたくなき給ふ云々又云此月の

りけるを宮にまいる事たえて里にありけるにさらにとひ給はさりけり内わたりの人來りけるにいかにぞまいり給ふやととひけれはつねにさぶらひ給ふといひければ御文奉りける

季繩系圖云左大臣武智麻呂（號南家）不比等ノ男末岳雄ノ孫千乘ノ男右近將監從五位下世號竹野作者部類同レ之

右近作者部類庶女ノ部云右近ノ少將季繩女云々

系圖云季繩妹穩子大后ノ女房此季繩ノ女云々故きさいの宮穩子（昭宣公ノ女延喜ノ后朱雀村上二帝ノ母）故權中納言の君敦忠（本院左大臣時平之男中納言從三位母ハ在原棟梁女號枇杷又本院）内わたりの人　禁裡むきへたちいる人也

いかにぞ參り給ふや　右近のたつぬる也

わすれじとたのめし人はありと聞いひしことの葉いづちいにけん

たのめしは約束せし也その人はつねにさふらひ給ふときけど契約せしことははは跡かたもなしと恨てよめる也　いつちは何地也　後撰十人の心かはりけれはと詞書有て此歌入　初五文字おもはんとゝあり同心也

となんありける

おなし女のもとにさらにをともせできじをなんおこせ給へりけるかへりことに

敦忠の贈り給へる也

くりこまの山にあさたつきじよりもかりにはあはじとぞおもひしものを

歌枕名寄廿七陸奥栗駒山六帖くりこまの山に朝たつきしよりも君をはかりに思ひける哉とあり歌心は朝たつ雉子の狩にあはじとするにそへて最初にはあはじとおもひつるものを我心あさく一度見えそめて程なく忘られぬる後悔の心をよめる也異本に此歌の次にとなんありけるとも有

おなし女うちのさうじにすゝみける時しのひてかよひ給ふ人有けり頭（トウ）なりければ殿上につねにありけり雨のふる夜さうじのしとみのつらに立より給へりけるもしらて雨のもりければむしろをひきかへすとて

頭は藏人ノ頭也職原抄藏人所ノ下云四位侍臣ノ中殊撰ニ其人ニ爲レ頭（四上古ハ有ニ五位頭ニ近代無レ之云々）裏書云四位者常侍ニ于殿中ニ執敷ニ於其人ニ爲レ頭也自ニ正四位上ニ至ニ從四位下ニ也頭ノ字於ニ諸官ニ謂ニ推美ニ於ニ當官ニ唱ニ論ス登字ニ此古實也云々

同抄云凡殿上ノ事頭以下職事所ニ奉行ニ也依レ之聽ニ昇殿ニ者皆以レ頭爲ニ貫首ニ與ニ位階上﨟ニ必著ニ其座

下ニ是流例也云々藏人ノ頭は殿上の貫首なればつねに殿上にありけりといふなり貫首は高座の任也其人誰と不知

おもふ人雨とふりくるものならは我もるとこはかへさゞらまし

守を漏に返すを歸さゞらましとそへてよめるなるへし異本此歌の次にとなんうちいひければあはれと聞てふとはひ入給にけりとあり

おなし女男の忘れしとよろつの事をかけてちかひけれと忘れにける後にいひやりける

わすらるゝ身をはおもはすちかひてし人のいのちのおしくもある哉

此歌拾遺十四に入題しらすと有百人一首抄云これはたゝ人の千々の社をひきかけてもし心かはらは命もたへなんと誓し事の變したる時によめり心は明也云々續古十五 誓てし命にかへて忘るゝはうき我からに身をやすつらん新續古十四 過不逢戀ちかひてし人の命のかなしきはたのむ心や猶殘るらん明石云身をはおもはずなどほのめかし給ふぞおかしうらうたく思ひきこえ給ふ云々 みな此歌より出たり

返しはえきかす

おなし右近もゝそのゝ宰相の君なんすみ給ふなといひのゝしりけれどそらことなりければかの君によみて奉りける

桃園前に出 宰相ノ君源保光卿代明親王ノ三男號ニ桃園ノ中納言ニよし紹運錄に見えたり

よしおもへあまのひろはぬうつせかいむなしき名をはたつべしや君

うつせ貝 實なき貝をいふされは蜑の拾はぬといふ也空貝なればむなしとつゞくるなり歌心かく名立たるうへはいかにいふともそのかひも有まじければ世にいひのゝしるまゝにしてよく／＼あひ思ひ給へとの義成へし異本此歌の次にとなんありけるとあり

むつきのついたちごろ大納言殿に兼盛參りたりけるにものなどの給はせてすゞろに歌よめとの給ふければふとよみたりける

大納言誰ともなし すゝろ所によりて心あまたあり 若紫云すゝろなる人はかうはありなんや云々爰は大方なる人はといふ意也と云り 类云すゝろ

なる車のとうにうちかけたれは云々　心にもあらぬやうの心也とぞ不意とも書り

けふよりは萩のやけ原かきわけて若菜つまんと誰をさそはん

萩のやけ原は萩の生たる野原の燒すてられたる所をいふ萩の燒原に若菜を求る也「打むれて若菜つみにとこし物をまた雪ふかし萩の燒原と頓阿もよめり此歌後撰一に入詞書に春立ける日よめるとあるみつねの歌とならび入たり　作者兼盛王とありたゝし後撰異本には作者兼覧王とありとぞ

とよみたりければになくめて給ふて御返し

かた岡にわらびもえすは尋ねつゝ心やりにやわかなつまゝし

かた岡のわらひを折むと思へともいまた初春なれは萠出侍らしよしいまた蕨もえ出すは心やりに若菜を尋ねてつまんとにや時節も春に成ぬれは野山の遊ひもおかしからんとの心なるへしかた岡名所又さならでもよむ也八雲云たゝかた〳〵の岡の心にても有云々詩云陟二彼阿丘一言采二其蝱一注云偏高ヲ曰二阿丘一云々帚木云をのかしゝ心をやりて云々心のなくさめになとゝいふ心なるへし後撰には返歌見えす

たしまの國にかよひける兵庫のかみなりける男のかの國なりける女をおきて京へのほりければ雪のふりたるにいひおこせたりける

兵庫守誰と不知

山里に我をとゝめてわかれしのゆきのまに〳〵ふかくなるらん

但馬國にある女の歌也別路のゆきとつゝきたれは行を雪にそへたる歟男の京に行まゝに遠くへたゝらんと名殘をおしむ心を雪といふよりふかく成らんと讀るなるへし

といひたりければ　かへし

山里にかよふ心もたへぬべし行もとまるもこゝろぼそさよ

山里に我をとゝめてと女の讀るによりて我は又そなたのすむ山里に心かよへとも行我もとまるかなたも心ほそければ終には戀死をもすへきかと讀るならん此歌心といふ字二つ有昔はかやうの事も大樣なりしとかや

となんかへしたりける
おなし男きの國にくだるにさむしとてきぬをとりに
おこせたりければ女
きの國のむろのこほりにゆく人は風のさむさも思ひ
しられし
牟婁郡　紀伊七郡のうち也むろはかこひ廻してあ
たゝかなるものなれはかくよめり牟婁を室にして
也詩云無レ毀ニ我室一注云室猶レ巣とあり
かへし男
きのくにのむろのこほりに行なから君とふすまのな
きぞかなしき
むろといふ暖なる所へ行なれど君とゝもに臥にあ
らねは寒しく侘しきなりそれゆへきぬを乞に遣し
たるとはれり君とふすまは臥へいひかけたる也
修理の君にむまのかみすみける時かたのふたがりけ
ればかたゝかへにまかるとて。えまいりこめといへ
りければ
修理作者部類云内匠允藤原ノ直行ノ妹拾遺新勅撰作
者云々右馬頭誰と不知
これならぬこともおほくたがふれはうらみんかた
もなきぞわひしき
かたゝかへのみにもあらす常に約を變する事おほ
き人なれは今更恨んよしもなしと也ふかき恨をふ
くめたりはては又つらしとたにもいはれぬやせめ
て恨のあまり成らん爲世卿歌也
かくてむまのかみゆかず成にける頃讀ておこせたり
ける
是も修理のよめる也
いかてなをあしろのひをにことゝはん何によりてか
我をとはぬと
網代をうちてひをゝとるに其網代にひをの集るを
よるといふゆへ何によりてかと氷魚の縁にてよめ
る也此歌拾遺十七に入詞書に藏人所にさふらひけ
る人のひをのつかひにまかりけるとて京に侍りな
がらをともし侍らざりければ云々返しは見えす
といへりければ返し
あしろより外にはひをのよるものかしらすはうちの
人にとへかし
何によりてかと讀るに答へたる心也　橋姫云され
どひをもよらぬにやあらん云々　和名抄云陸考聲

切韻魦音小今按俗云氷魚是也初學記冬事對雖レ有ニ氷魚ノ霜鵠之文ニ而尋ニ其義ニ非也云々 白小魚名也似ニ伯魚ニ長一二寸者也云々延喜內膳式云山城ノ國近江ノ國氷魚ノ網代各一處其氷魚始ニ九月ニ迄ニ十二月卅日ニ貢レ之云々 宇治の網代昔は京より見物に行し也 橋姬云網代をこそ此ころは御らんせめと聞ゆる云々 元文の頭 都人よする車も同し名の網代をやみる宇治の川へにさ西三條殿よみ給へるも見物に行しゆへ也

又おなし女にかよひける時つとめてよみたりける

早朝をつとめてといふ別て歸る朝なるへし

あけぬとていそきもそするあふ坂のきりたちぬとも人にきかすな

逢坂をあひみる事によむ常の事なりたちぬといはんとて霧とよめり別て出るなり人にきかれしとおもへはいそぎてたちかへるぞとの心なるへし

おとこはしめころよみたりける

かよひはしめたる頃歟

いかにして我はきへなんしら露のかへりてのちの物はおもはし

後朝の心也

かへし

かきほなる君かあさかほ見てしがなかへりてのちは物やおもふと

朝かほといはんとて垣ほなるとおけり朝かほは人のあしたのかほをいふ前にも見えたり

おなし女にけちかく物なといひてかへりて後によみてやりける

心をし君にとゝめてきにしかはものおもふ事は我にや有らん

心をしのし助字也我心を全く君にとゝめてかへりきにしなれは我身物おもふ事はあるましきを我心は我身を離れて君にとゝめなから猶物おもふは不審と讀るなり後朝の心さも有へし 忙然たる體也

古十八 あかさりし袖のなかにや入にけん我玉しゐのなき心ちする 若菜云玉しゐはまことに身をはなれてとまりぬる心ちす云々

修理か返し

玉しゐはおかしき事もなかりけりよろつのものはからにそ有ける

心を我にとゝめてこしとあれとも其魂はよき事も

なし御身をとゝめられてこそおかしからめと也か
らは形體をいふかたち也
おなし女に故兵部卿のみや御せうそこなとし給ふけ
りおはしまさんとの給ふければきこえける
故兵部卿の宮　元良親王也
たかくとも何にかはせんくれ竹の一よふたよのあた
のふしをは
初五文字親王は高貴の御身なればかく讀り親王を
竹園と申事は史記梁ノ孝王世家云於レ是孝王築ニ東苑
三百里ニ正義云括地志云竹園在ニ宋州ノ宋城縣ノ東南
十里ニ葛洪ガ西京雜記曰梁ノ孝王苑中有ニ落猿巖栖龍
岫雁池鶴州鳧渚諸宮觀一相連云々俗人言ニ梁ノ孝王
竹園ト也云々
大明一統志云脩竹園ハ在ニ今ノ河南開封府歸德州ノ城
東南十一里ニ亦孝王所レ置云々よとは竹のよ也和名
抄云兩節間俗云與節と節との間也それを一夜二夜と
夜にとりなしたる也歌心明也
三條の右のおとゝ中將にいますかりける時まつりの
使にさゝれて出たち給けりかよひ給ふける女の絕て
久しく成にけるにかゝる事なんいてたつ扇もたるべ
かりけるをさはがしうてなんわすれにけるひとつ給
へといひやり給へりけりよしある女なりければよく
ておこせんと思ひ給けるにいろなとももいときよらな
る扇のかなどもいとかうはしうておこせたりひきか
へしたるうらのはしのかたにかきたりける
三條の右のおとゝ定方公延喜六年三月左中將九年
四月參議（中將如元）祭の使加茂祭の使也當日の使は近衛
の中將つとむるよし公事根源に見ゆ四月中ノ酉日
也扇の香夕顏云しろき扇のいたうこかしたるを
云々香のにほひに焦したる也
ゆゝしとていむとも今はかひもあらし（なしイ）うきをはこれ
に思ひよせてん
（拾遺十九）女のもとに扇を遣したりければいひ遣しける
「ゆゝしとていむとも今はかひもあらしうきをは
風につけてやみなん讀人不知の歌也拾遺のおもむ
きにては男のかたより扇を女に遣しければ女のよ
める也此物語とは相違す袖中抄（顯昭作）云名にしおへ
はたのみぬへきをなそもかく扇ゆゝしと名つけそ
めけん昔は扇を人にとらする事をは忌事にてあり
けれはゆゝしとはよみそめたる也云々（後撰十三）男の心

かはるけしきなりければたゞなりける時男の心させりける扇にかきつけて侍りけるよみ人しらす人をのみうらむるよりは心からこれいまさりしつみと思はんとあり此歌のこれと此物語のこれにと有いつれも扇をさしていへりゆゝしきとは忌々しき也扇を人にとりかはす事をいむは秋風吹は捨らるゝ物ゆへ也班婕妤か怨歌行に常ニ恐ル秋節ノ至テ涼飈奪ニ炎熱ヿ棄ニ捐篋笥ノ中ニ恩情中道ニ絶ヿナとの心にて忌事には成たるへし又花鳥云唐にては夫婦の約をなすしるしに扇をとりかゆる事有東坡詩云換レ扇惟逢ニ春夢婆ヿと作れり春夢婆は女の異名也源氏も朧月夜と扇をしるしにとりかへ給ふ也云々歌の心かく契も中絶たるうへは今更扇をいむなといふ事もあらし忌へき扇を取にこされかくまいらするうへはうきをもこれにかこちよせんとなるへし

とあるを見ていと哀とおほして返し

ゆゝしとていみけるものを我ためになしといはぬぞたかつらきなる

忌べき扇ならは乞に遣すともなしといひてをこせまじきものをさもいはでをこせたる心は誰つらきぞやそなたの心こそつらけれと也

故権中納言左のおほいとのゝ君をよばひ給ふとしのしはすのつこもりに

故権中納言敦忠卿左のおほいとのゝ君小野宮實頼公の女　後撰にみくしげとのゝ別當とあり

ものおもふと月日の行もしらぬまにことしもけふにはてぬとかきく

ことしもけふにはてぬとか聞といふ下の句尤哀ふかし伊物云むかし月日の行をさへなけく男三月つこもりがたに「おしめとも春のかきりのけふの日の夕暮にさへなりにける哉

闕疑抄云「おもふ人にあはずしてすぐる月日はおしかるへし夕暮にさへ成にける哉といへる所尤切也云々此歌と同心なるへし後撰八みくしげとのゝへとうにとしをへていひわたり侍りけるをえあはすしてそのとしの師走の晦の日つかはしけると詞書ありて第二句過る月日もとかはりて入たり幻物思ふと過る月日もしらぬまにとしも我よもけふや盡ぬる源氏紫上の哀傷によみ給へる歌也千六さりともと

歎き〳〵て過しつる年もこよひに暮はてにけり是等引合て味ふへし

となんありける又かくなん

いかにしてかくおもふてふ事をたに人つてならて君にかたらむ

後撰十三 しのひてみくしけとのゝへとうにあひかたらふとき丶て父の左大臣せいし侍りけれはと詞書有歌心明也後撰十三 今はたゝ思ひたえなむとはかりを人つてならていふよしも哉

かくいひ〳〵てつゐにあひにけるあしたに

けふそへにくれさらめやはとおもへともたへぬは人の心なりけり

けふそへにはけふさへに也そとさと五音通す萬十月日えりてあひとしあへは別路のおしかる君はあす副も哉副の字さへと訓せりさへそへ同事也歌心は夜明ぬれば必日暮るといふ事は古より定りたる事なれと餘り名殘のおしさにけふはもし暮ましきやと氣遣なれと夜明れば又暮るならひなればけふさへくれましきやは暮ぬへしとは思へとも堪忍しかたきは人の心にて猶待わふるとの心なるへし切なる歌也後拾十二 明ぬれは暮る物とはしりなから猶うらめしき朝ほらけ哉續後十七 夕されは逢みるへきを春の日のとく暮ぬこそくるしかりけれ夕貌云あやしうけさの程ひるまのへたてもおほつかなく云々此歌後撰十二みくしけとのにはしめて逢て遣しけると詞書あり

これもおなし中納言齋宮のみこをとしごろよばひ奉り給ふてけふあすあひなんとしける程に伊勢の齋宮のみうらにあひ給ひにけりいふかひなく口おしと男思ふ給ふけりさてよみて奉り給ふける

齋宮のみこ延喜皇女雅子内親王也紹運錄云配二九條殿一公季母云々承平二年十二月廿五日卜定御占卜定の事也延喜式の説前に記

いせの海千尋の濱にひろふとも今はかひなくおもほゆる哉

後撰十二 西四條の齋宮またみこにものし給ひし時心さしありて思ふ事侍りけるあいだに齋宮に定り給ひけれはそのあくるあしたに榊の枝にさしてさしをかせけるとありて下句今は何てふかひかあるへとかはりて入たり千尋濱伊勢國名前也紀伊國同名

あり後拾遺に見えたりかひなく貝をそへたり千尋といふ廣き濱をたつねて拾ふとも今はそのかひもあらしとなりかひなきことをつよくいはんとて伊勢の縁もありかた〳〵此濱をよみたまへり歌心今は齋宮に定り給へはいかほど戀慕ひまいらすとも其かひあらしとの心なり新古十八しほのまに四方の浦々尋れと今は我身のいふかひもなし須磨いせ嶋や汐干のかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけり

となんありける

故中務の宮北の方うせ給ふてのちちいさききんたちをひきくし三條の右大臣殿にすみ給ふけり御いみなと過してはつゐに獨は過し給ふましかりければかの北の方の御をとうと九の君をやかてえ給はんとおほしけるを何かはさもとおやはらからもおほしたりけるに

故中務の宮代明親王也紹運録云延喜第三ノ皇子三品中務卿母ハ更衣鮮子伊與介連永ノ女云々北の方考ニ系圖ニ三條右大臣定方公第二の姫君とみゆ中務宮君連ひきくして舅家へおはしてすみ給ふ也御をとうと女をもをとうと〵いふ事前に記九の君系圖に定方公息女十四人まて見えたり第九に當り給ふは左大臣師尹公室と見えたり何かはさも何かはくるしからんさもあるへからんとの心にや

いか〵ありけん左兵衛のかみのきみ侍從にものし給ふける頃その御文もてくとなんき〵給ふけるさて心づきなしとやおほしけんもとの宮になんわたり給ひにけるその時にみやす所の御もとより

左兵衛のかみ小一條左大臣師尹公也系圖云貞信公忠平四男母ハ右大臣源能有公ノ女侍從にものし給ふける頃延喜廿二年五月任ニ侍從ニとぞ左兵衛督の文を九の君にまいらせ給ふと中務宮聞給ふ也それゆへ心よからすおほしてもとの宮に歸り給ふなるへし御息所　定方公ノ女延喜ノ女御三條御息所と申仁善子の御事也うせ給ひし北の方九の君なとの姉君也

なき人のすもりにたにもなるへきにいまはとかへるけふのかなしさ

なき人とは北の方也うせ給ふてのちもなを宮の右大臣殿に殘りおはしますを鳥の巣守にそへてよみ

給ふ也鳥の巣に卵のかへらずして稀にのこるを巣守といふ拾遺七 鳥のこはみなひななからたちていぬかひのみゆるやすもり成らん金九 鳥のこのまたかひながらあらませはおはといふものは生ずそあらましかひは卵也橋姫なく／＼もはねうちきする君なくは我そすもりになるへかりける

みやの御かへし

すもりにとおもふ心はとゞむれとかひあるべくもなしとこそきけ

下句左兵衛の督の文九の君にもれくと聞給ひし心をよみ給へる也巣守となりても北の方の名残なれはこゝにすまゝほしけれども也第四句卵をそへて也

となんありける

おなしおほいとのゝ御息所みかとおはしまさす成てのち式部卿の宮なんすみ奉り給ふけるをいかゝ有けんおはしまさゝりける頃斎宮の御もとより御文奉り給へりけるに御息所宮のおはしまさぬ事なときこへ給ふておくに

みかと　延喜帝なるへし式部卿のみや敦實親王也

斎宮は柔子内親王也御母は贈皇太后胤子内大臣高藤公女 共に宇多皇子にて一腹の御兄弟也

しら山に降にし雪の跡たえていまはこし路の人もかよはす

歌心明也越路を来し路にいひかけたり後撰十四 いとはれてかへりこし路のしら山はいらぬにまとふものにそありける此類也白山加賀也此歌後撰八に入詞書に式部卿敦實のみこ忍ひてかよふ所侍りけるをのち／＼たえ／＼に成にける頃ほひいもうとの前斎宮のみこのもとより此頃はいかにぞと有ければそのかへりごとに女しら山に雪ふりぬれは跡たえて今はこしちに人もかよはすとあり

となんありける御返あれと本になしとあり

後撰にもかへしは見へず

かくて九の君侍從の君にあはせ奉り給ふてけり

侍從君師尹公也九君は系圖にも左大臣師尹室とあり

おなし頃みやす所をみやおはしまさすなりにけれは左のおとゝの右衛門督におはしける頃御文奉り給けりかの君むことられ給ひぬときゝ給ておとゞ御息所

に
みやおはしまさす敦實親王也左のおとゝ貞信公嫡
男左大臣實頼公（號小野宮 諡清愼公）承平三年五月廿七日兼右衛
門督于時參議從四位上かの君むことられ侍從の君
九の君をえて定方公の聟になり給ふをいふ也それ
をうらやみて實頼公讀贈り給へるにや
御息所號ニ三條御息所一後配ニ遇清愼公一と系圖にも
見ゆ

波のうつかたもしらねとわたつ海のうらやましくも
おもほゆる哉

波のうつかたとは心のよるかたなるへしかたうら
なと海の縁也　御息所の心のよるかたはいかゝあ
らんしらねとも我は侍從の君の定方公の聟に成給
ふを羨敷おもふとの心也

おほきおとゝの北の方うせ給ふて御はての月になり
て御わさの事いそかせ給ふころ月のおもしろかりけ
るにはしに出ゐ給ふてものゝいとあはれにおほされ
けれは

おほきおとゝ貞信公也攝關御傳抄云號ニ小一條太
政大臣一昭宣公（基經公）四男母ハ彈正尹人康親王ノ女元慶
四年誕生承平六年八月十九日任ニ太政大臣一云々北
のかた寛平ノ皇女又右大臣能有公ノ女なとあまた有
し也此北のかたいつれとも分かたし案に此北の方
も次にいへるすかはらの君（寛平皇女）も同人にて左大臣
實頼公の母上也此段の歌續後撰十八に入て詞書云
清愼公の母身まかりにけるはてのわさいとなみ侍
りける頃月を見て貞信公とありて歌此物語に同し
されは爰にいづる北の方も實頼公の母上にてすか
はらの君源傾子なる事明けし貞信公息男のうちに
も師輔師氏師尹なとの母上は右大臣能有公の女な
るよし系圖にも見え侍る實頼公とは異母兄弟也

かくれにし月はめくりてきにしかとかげにも人は見
えずぞありける

歌心明也月はといふゆへかけにもとよみ給へりか
けは面影の心なるべし

おなしおほきおとゝ左のおとゝの御母すかはらの君
かくれ給ひにける御ぶくはて給にける頃

左のおとゝ清愼公也御母すかはらの君菅丞相の御
女寛平の女御に參り給ひその御腹に生れ給ふ源ノ傾
子貞信公に配するよし紹運錄に見へたり前に北の

方うせ給ひてと書て奥にて左のおとゝの御母すか
はらの君と改て書るをみれは前に書る北の方とは
別人のやうなれども勅撰にもまへの如く入しうへ
は不レ及二異儀一歟御母かた菅原氏なれは傾子をす
かはらの君と申前段と同時の事ゆへ書つゞけたる
なるべし

亭子のみかとうち(なんイ)に御せうそこきこへ給ふて色ゆる
され給けるさりけれはおとゞいと(いとゞイ)きようにすはうか
さねなどき給ふてきさいの宮にまいり給ふて院の御
せうそこのいとうれしく侍りてかく色ゆるされ侍る
事なときこえ給ふさてよみ給ふける

聴色の事を寛平法皇内裏へとり申させ給ひて勅許
ありし也桃華蘂葉に打下襲張下襲染下襲夏下襲な
と見ゆ其うち夏下襲の下云蘇芳(薄物遠菱ノ文聴ニ禁色一人常に着レ之云々)
又云蘇芳にて黒むほと是をそむ夏の下襲をは蘇芳
の下かさねとなつけ侍る云々　枕草紙云すはうかさ
ねくろはんひ云々、されは貞信公も色ゆるされ給ひ
しゆへすはうかさねを着し給ひし也聴色の事延喜
弾正式なとにも見へたり
きさいの宮七條后温子也寛平后基經公ノ女貞信公
の姉　温子は寛平の后宮なれは此度院の御せうそ
こきこえ給ひしにより色ゆるされ給ひしよろこひ
申させ給ふ也
ぬぐをのみかなしと思ひしなき人のかたみの色はま
たもありけり

ぬくとは服衣をぬく也服衣はなき人のかたみなれ
はぬくをかなしむ也(新古八)露をたに今はかたみの藤
衣あたにも袖をふく嵐哉妻ノ服三月服廿日服ぬき
の事猶奥に記なき人とは北の方すかはらの君をさ
して也此度禁色を聴され給ふてすはうかさねなと
着給ふも此すかはらの君は寛平の皇女にてましま
すゆへ法皇のとりもち申させ給へるによれるなれ
はなき人のかたみの色は又もありとよみ給へるな
るへし又もとは服衣をなき人のかたみといへとそ
れのみにもあらす此すはうかさねなとも、すかはら
の君のかたみにてこそあれとにや
さてなんなき給ひける其ほとは中辨になんものし給
ふける
貞信公中辨の事未レ考　攝關御傳抄云寛平七年八
月廿二日叙二正五位下一(今日元服年十六)同　九月十五日聽二雜

袍ニ同八年正月十六日任ニ侍從ニ同　九年二月十四日
兼肥後ノ權ノ守昌泰元年十一月廿一日叙ニ從四位下ニ
朔日叙位十九　同三年正月廿八日任ニ參議　兼侍從年廿一　二月廿日
以ニ參議ニ讓ニ與叔父右兵衛督從四位上清經ノ朝臣ニ
四月如レ舊還昇ス五月十五日任ニ右大辨ニ侍從如レ元　云々
貞信公任ニ中辨ニ事見えす直に右大辨に任するよし
此物語に中辨と書るは傳寫の誤ならん歟
亭子のみかどの御ともにおほきおとゝ大井につかふ
まつり給へるにもみちをくらの山にいろ〳〵いとお
もしろかりけるをかきりなくめで給て行幸もあらん
にいとけうある所になんありけるかならす奏してせ
させ奉らんなと申給ふてついてに
亭子院大井御幸は昌泰元年九月の事とぞ貫之大井
川御幸和歌序云あはれ我君の御代なか月のこゝの
ぬかと昨日いひてのこれる菊おこし見給はんまた
くれぬへき秋おしみ給はんとて月の桂のこなた春
の梅つより御舟よそひしてわたしもりをめして夕
月夜をくら山のほとり大井の川へに御幸し給へれ
は云々　大鏡云大井の御幸も侍りしぞかしさてみゆ
き有ぬべき所と申させ給ふ事のよし奏せんとて小
一條のおほいまうちぎみぞかし小倉山もみちの色
も心あらは今一たひのみゆきまたなんあはれいふ
にも候し物哉さてみゆきにあまたの題を給はりて
やまとうたつかふまつりしなかに猿山のかひにさ
けふといふ題を躬恒わひしらにましらななきそ足
引の山のかひあるけふにやはあらぬその日の序題
は貫之のぬしつかふまつりしか云々　行幸は延長四
年八月となん院のを御幸といひ天子のをは行幸と
いふともにみゆきと訓する也
をくら山みねのもみちはこゝろあらは今一たひのみ
ゆきまたなん
拾遺十七亭子院大井川に御幸ありて行幸もありぬべき
所なりとおほせ給ふに事のよしそうせんと申て小
一條太政大臣と有小倉山大井川の邊也歌心は榮雅
抄云是は亭子院大井川に御幸ありて行幸もありぬ
へき所なりと宣へは事のよしを奏せんとて此歌を
よめり直に行幸の事をおそれて紅葉におほせてよ
める心尤珍重也といへり歌のやう凡俗をはなれて
聞ゆ云々續後撰七太上天皇いにしへの跡をたつねて小倉
山峯のもみぢや行ておらまし此御歌昌泰御幸の例

をおほしめしての御製なるへし
となんありけるかくてかへり給ふてそうし給ふけれはいとけうある事なりとて大井の行幸といふ事はじめ給ふける
おほゐに季縄の少將すみける頃みかとの給ふける花おもしろくなりなはかならす御らんせんとありけるをおほしわすれておはしまさゝりければ少將
ちりぬれはくやしきものを大井川岸のやまふきけふさかり也
拾遺二 大井にすみ侍りける頃花おもしろく成なば必御らんせんと御門仰事有けるをおほしわすれておはしまさゝりければ奏し侍りけると詞書有て第五句とさかり也とあり歌心明也
とありければいたうあはれがり給ふていそぎおはしましてなん御らんじける
おなし少將やまひにいたうわつらひてすこしおこたりて内にまいりたりけり近江守公忠の君掃部助にて藏人なりける頃なりけり
すこしおこたりて少し病のひまあるをいふなり公忠　延喜十八年正月掃部助三月藏人

そのかもりのすけにあひていひけるやうみたり心ちはまたおこたりはてねといとむつかしう心もとなく侍れはなんまいりつるのちはしらねどかくまで侍る事まかり出てあさてばかりまいりこんよきにそうし給へなどいひおきてまかんぬ三日はかり有て少將のもとより文をなんおこせたりけるを見れは
みだり心ち　河海抄云みたりは病の惣名歟云々　いとむつかしう心もとなく久しく所勞にひきこもりし事をいふ季縄の詞也かくまて侍る事こゝにて何を切てよむへし
くやしくそ後にあはんと契りけるけふをかぎりといはましものを
新古八 やまひにしつみて久しくこもりゐて侍りけるがたま〳〵よろしうなりてうちにまいりて右大辨公忠藏人に侍りけるに逢て又あさてばかり參るべきよし申てまかり出にけるまゝに病おもく成てかぎりに侍けれは公忠朝臣に遣しけるとありて此歌入れり宇治拾遺にも出る歌異なる事なし
とのみかきたりいとあさましくてなみたをこほしてつかひにとふいかゝものし給ふといへば使もいとよ

はく成給ひにたりといひてなくをきくにさらにも聞へずみつからたゞいままいりてといひてさとに車とりにやりて待ほどいと心もとなしこの爲のみかごに出立てまちつけてのりてはせ行五條にぞ少將の家あるにいきつきて見れはいといみじうさはぎのゝしりて門さしつしぬるなりけりせうそこいひいるれど何のかひなしいみしうかなしくてなく〳〵かへりにけりかくてありける事をかんのくたりそうしけれはみかどもかぎりなくあはれがり給ける

さらにもきこえずさだかにもきこえやらぬ心にやそれゆへ公忠直に行てありさま見むとなるへし

里に車　此時公忠內裡におはせしゆへ也　近衞の御門陽明門をいふ也（拾芥云東面山氏造レ之五間戸三間號ニ近衞御門一北端也）枕草紙云家は近衞御門云々

しぬる成けり季繩の終焉とおしはかるなり親友の情おもひやるへし季繩は延喜十九年卒せられしとかやかんのくたり上の件也

土佐のかみにありけるさかゐのひとさねといひける人やまひしていとよはくなりてとばなりけるいゑに行てよみける

酒井ノ人眞古今作者　榮雅云左大史土佐守或云酒井は境部氏歟坂合部見ニ姓氏錄一

ゆく人はそのかみこむといふものをこゝろほそしやけふのわかれは

奥義抄云問云そのかみとは過にしかたをいふ也文字にも當初と書るに酒井人眞がやまひだいじにて山里へ行時の歌云行人はそのかみこんといふ物を心ほそしやけふの別よとよめるはいかに答云そのかみとは當時とも書りその折といふ也されは過にしかたをもいはんにとがなし大和物語に生田浦に身なけたる女の詞にもそのかみおやいみじうさはぎてと有當時の事と聞ゆこれならすあまた侍り云々箒木云そのかみ思ひ侍りしやう云々　注云當時也その折といふ意也抑そのかみをけふはかけしと忍ふれと心のうちに物ぞかなしき是は昔の事のやうに見ゆれとその折といへは同心也萬葉には登時（ソノカミ）とも書り歌ノ心は世間にすみかを出て他行する人おほくはその折必かへりこんなといひ契りて出行なれども我は病だいじにて山里へゆく事なれば歸らんほどもはかりがたしされはけふの別とりわき心

ぼそしとの心なるべし
平仲か色このみけるさかりに市にいきけりなかごろ
はよき人々いちにいきてなん色好むわさはしける
　市は人多くあつまるゆへに市に出てみる也
それにこきさいのみやのごたちいちに出ける口なん
ありける平仲色このみかゝりてになうけさうしけり
のちにふみをなんおこせたりける女とも車なりし人
はおほかりしをたれにあるふみにかとなんいひやり
けるさりければ男のもとより
　こきさいの宮　温子也　ごたち　後達と書女房達
也はゝきゝ云つかふ人ふるごたち云々
もゝしきの袂のかずはみしかともわきておもひの色
そこひしき
　もゝしき内裏をいふ后宮の女房達なればなるべし
思ひに緋のいろをそへて讀る也ことはり次にみゆ
後撰十三　しろききぬとものあまた月あか
きに侍りけるを見て朝にひとりがもとに遣しける
藤原有好しらくものみな一むらにみえしかとたち
出て君をおもひそめてき此類也此歌續後撰十一に
入第二句あまたの袖はとあり

といへりけるはむさしのかみのむすめになんありけ
るそれなんいとこきかいねりきたりけるそれをと思
ふなりけりされはそのむさしなんのちはかへりこと
していひつきにけるかたちきよげに髪ながくなとし
てよきわかうどになんありけるいといたう人々けそ
うしけれど思ひあかりておとなともせでなん有ける
されどせちによはひけれはあひにけり
　むさしの守　誰と不知　かいねり搔練也こきとは
紅色の濃也桃華蘂葉打下襲下云搔練表裏紅打或裏張又云火色白レ冬平レ夏
末摘云かいねりこのめる花の色あひや云々　河海云
かいねりは搔練兩面ふくさはりにて中重なし紅の
色也云々　いひつきにけるとはかたらひつきたる也
髪長くこれ尼になるべき女故に先美髪を書出せり
女は髪うるはしきを稱する事和漢同事也文選西京
賦云衛后興ニ於鬒髮ニ云々注漢武故事曰子夫得レ幸頭
解上見ニ其美髮ニ悅之毛詩鬒髮如レ雲云々　子夫衛后ノ
字也思ひあがりて身を高く思ひあかりたる也
そのあした文をもおこせず夜までおともせず心うし
と思ひあかして又の日まてと文もおこせす
　後朝の文おそきをいふ也枕草紙云むねつぶるゝ物

よへきたる人のけさの文のおそき聞人さへつぶる
思ふ人の文とりてさし出たる又つぶる云々
その夜したまちけれとあしたにつかふ人なといとあだにものし給ふと聞し人をあり〱てかくあひ奉り給てみつからこそいとまもさはり給ふ事ありとも御ふみをだに奉り給はぬ心うき事などこれかれいふ心ちにも思ひゐたる事を人もいひけれは心うくくやしと思ひてなきけりその夜もしやと思ひてまてど又こず又の日も
文もおこせずすべてをともせず五六日(イツカムユカ)に成ぬ
その夜したまちけれどこゝにて句を切てよむべし
又あひ奉り給ひてとある所にても句を切へし五六日いつかむゆかとよむ
此女ねをのみなきて物もくはずつかふ人などおほかたはなおほしそかくてのみやみ給ふべき御身にもあらず人にはしらせでやみ給ふてことわざをもし給ひてんといひけり
ねをのみなきてたゞなく事をいふねをこそなかめ世をはうらみしなども讀り大方はな是より以下つかふる人の詞也さのみなおほし入そ此まゝにてやみ給ふへきにあらず平仲に一度逢給ひし事を外へはかくして又こと男もし給へといへるにや卑賤なる女のいさめけにさもあるべくや
ものもいはでこもりゐてつかふ人にも見へでいとながゝりけるかみをかひきりて手つから尼に成にけりつかふ人あつまりてなきけれどかひもなしいと心うき身なればしなんと思ふにもしなれずかくだに成ておこなひをだにせんかしかましくかくなん人々いひさはぎそとなんいひける
髮をかひきりてまへに髮なかくなどしてとありし首尾也かくだに行をたにとかさねていへる切なる心也
かゝりけるやうは平仲その逢けるつとめて人をこせんと思ひけるにつかさのかみにはかにものへいますとてよりいましてよりふしたりけるをおひおこしていまゝでねたりけるとてせうえうしに遠き所へゐていまして酒のみのゝしりて歸し給はすからうして歸るまゝに亭子の御かどの御ともに大井にゐておはしましぬそこに又二夜さふらふにいみじうえひにけり
かゝりけるやうは平仲後朝の文をもやらすみづか

らも行給はざりしゆへを是よりかきのぶる也つか
さのかみ平仲左兵衛佐なれば其時の左兵衛督をつ
かさのかみといふべし左右の兵衛府に督佐尉志な
と有職原抄に見へたりせうえう逍遥也須磨云浦づ
たひにせうえうしつゝ云々文選秋興賦云逍ニ遥平
山川之間ニ云々あそひありく事也
夜ふけて歸り給ふに此女のがりいかんとするにかた
のふたがりければ大かたみなたがふ方へ院の人々る
いしていにけり此女いかにおほつかなくあやしと思
ふらんと戀しきにけふだに日もとくくれなんいきて
ありさまもみづからいはんかつ文をやらんとえひさ
めて思ひけるに人なんきてかとうちたゝく
夜ふけてかへり給ふ亭子院、還御也がりは許の字
也女のもとゝいふ心也若菜云小侍従がりれいのふ
みやり給ふ云々萬八久かたの天の川原に船うけてこ
よひや君が我許きまさん
たそとゝへはなをざうの君にものきこえむといふさ
しのそきて見れば此家の女也むねつぶれてこちこと
いひて文をとりて見ればいとかうはしきかみにきれ
なるかみをすこしかひわかねてつゝみたりいとあや

しうおほえてかいたる事を見れは
さうの君　曹の君號平仲の舎官にや將曹の次官に
將曹あり　こちこ　こなたへ來れといふに同し
あまの川そらなるものと聞しかと我めのまへのなみ
た也けり
歌心明也あまの川は尼にそへたり
とかきたりあまに成たるなるへしとみゆるにめもく
れぬ心ぎもをまよはして此つかひにとへばはやう御
ぐしおろし給ふてきかゝれはごたちもきのふけふい
みじうなきまどひ給ふ下すの心ちにもいとむねいた
くなんさばかりに侍し御ぐしをといひてなく時にお
との心ちいといみしうなでうかゝるすきありきを
してかくわびしきめを見るらんと思へとかひなしな
く〳〵かへりこさかく
はやう御ぐし是より使の詞也げすの心ち使みづか
らの事をいふ也すきありき市に出などして色好み
し事を悔む也すくとは好色也伴書物語云おかしき
聲にてうたひて袖のしほるはかりにてすきありき
給ひける云々
世をわぶるなみだながれてはやくともあまの川には

さやはなるへき
我ゆへ身をわびて尼に成たれどもさはいはずして
大やうにおける初五文字也下の句何ほど世を侘る
とても尼に成ほどの事は有まじきものをとの心也
さやは成へきとは左やうにやはなるべきさは有ま
しき物をとよめる也
いとあさましきにえものも聞えずみづからたゞ今ま
いりてとなんいひたりけるかくてすなはち來にけり
そのかみ女はぬりごめに入にけり
そのかみ　其時也　ぬりごめ　牡丹花云ぬりこめ
は寢殿などのかたはらにかべぬりまはして妻戸を
たてゝ調度なとおく所也云々榊云ぬりこめの戸の
ほそめに明たるを云々
事のあるやうさばかりをつかふ人々にいひてなく事
限りなし物をだにきこえむ御こゝろをだにし給へとい
ひけれどさらにいらへをだにせずかゝるさはりをば
しらでなをたゞいとおしさにいふとや思ひけんとて
なん男はよにいみしき事にしける
事のあるやうさはかりを　平仲此ほどえさらぬ障
有て來ざりし事をいひことはる也女はぬりこめに
かくれて出逢ねば女の本意人に云也　たゝいとお
しさに　かゝる故障をしらで女はたゞ我をなぐさ
むる挨拶に云こそ思はんとて男はよにいみしう迷
惑なる事にしけると也帚木云心ぶかしやなどほめ
たてられてあはれすゝみぬればやがて尼に成ぬか
し思ひたつ程はやがて心すめるやうにて世にかへ
りみすべく思へらずいであなかなしかくはたおほ
し成にけるよなどやうにあひしれる人來とふらひ
ひたすらにうしとも思ひはなれぬ男聞つけてなみ
た落せはつかふ人ふるごたちなど君の御心は哀也
ける物をあたら御身をなといふにみづからひたひ
がみをかきさくりてあへなく心ぼそければうちひ
そみぬかし忍れど涙こぼれそめぬれば折々ごとに
ねんじえずくやしきこともおほかめるに佛も中々
心ぎたなしとみ給つべしにごりにしめるさよりも
なまうかひにてはかへりてあしき道にもたゝよひ
ぬべくぞおぼゆる云々武藏行末の事はしらず後朝
の文などかりしに書かねて手つからかみかひきり
尼となりしふるまひいかにも心あさきやうなれば
帚木にかけるなまうかひの類ひならんかし

大和物語虛靜抄上卷之五

しけもとの少將に女

藤滋幹 系圖云 長良公（閑院左大臣冬嗣公一男）孫大納言國經卿男母ハ在原棟梁ノ女從五位上左少將

女誰ともなし

戀しさに立ぬるいのちを思ひ出てとふ人あらばなしとこたへよ

戀しぬる身なればとふ人ありとも今は世になしとこたへよと也此歌新古十四に入返歌は見えす

少將かへし

からにたに我きたりてへ露の身のきえはともにとちきりをきてき

女のなしとこたへよと讀るによりて女をはやなきものにしてよむ也女のいふにたかはす戀しなはせめてそのなきからにたに我來りしといへかねて死をともにせんと約し置し程にと也てへはといへといふに同し登伊切天なれは也といふ事をてふとよむにおなし古十八 今さらにとふへき人もおもほえすやへむくらこそ門させりてへ

中興のあふみのすけがむすめ物のけにわづらひてしやうざう大とくをげんざにしける程に人とかくいひけりなをしもはたあらさりけりしのびてありへてのち人のものいひなともうたてあり猶世にへしなと思ひいひてうせにけりくらまといふ所にこもりていみしうをこなひをりさすがにいと戀しうおほえけり

中興の近江のすけかむすめ 平中興かむすめと後撰に有系圖云葛原親王（桓武皇子）の御末從四位下右大辨季長男云々 ものゝけ 靈氣也げんざ驗者也祈の師を云人とかく此女淨藏と名のたつ也なをしもはた伊物云たゝなをやはあるへき云々闕疑抄云直の字の心也云々世に人のいひさはく如く直にもなかりしと也はたは助の詞也 鞍馬 山城也緣起元亨釋書なとに見えたりさすかにいと戀しう世にへじなと思ひ切て山ふかくこもれともさすかに愛執の情難遣也

京をおもひやりてよろつの事いとあはれにおほしておこなひけりなく／＼うちふしてかたはらを見れば文なん見えけりなぞの文そと思ひてとりてみれは此我おもふ人の文なりかけることば

女の文をおこせし也なぞは何ぞ也
すみぞめのくらまの山にいる人はたどる〱もかへりきなゝん
初五文字は闇き心にてくらまの枕詞也たどる〱もとは尋ね〱もと云か如したどるはたつぬる心也古十八 あまひこのをとつれしとぞ今は思ふ我か人かと身をたどる世に明石云おさ〱とゞこほることなうなつかしきてなどすぢことになんいがてたさるにか侍らん云々明石の入道我むすめ明石の上のひわの事をいふ詞也此歌後撰十二入淨藏くらまへなん入るといへりければと詞書あり後撰十 暮ぬとてねて行へくもあらなくにたどる〱も歸るまされり　なんは下知の心也
とかけりいとあやしくたれしてをこせつらんと思ひをりもてくべきたよりもおぼえすいとあやしかりければ又ひとりまどひきにけりかくて又山に入にけりさてをこせたりける
もてくへき人もなき文のありしを怪て京へ出又山にかへり入し也
からくして思ひわするゝ戀しさをうたてなきける鶯の聲
からくして　前に注すやう〱となくさめて戀しさを思ひ忘れしに文なとをこして音信し給へばまたそれに催されてかなしきとの心也うたては憂也古一「ちるを見てあるへき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる　思ふ人の聲を鶯の音に比してよめる事は後撰三 贈太政大臣あひわかれて後ある所にてその聲を聞て藤原顯忠朝臣母 鶯のなくなる聲はむかしにて我身ひとつのあらずもある哉
返し
さても君わすれけりかし鶯のなくおりのみやおもひ出へき
さてもといふ詞歌によりその心かはるべし此歌にては俗にさても〱なといふ心也又さありてもといふ心によめる歌多し詞十かはらんと祈る命はおしからてさてもわかれん事そかなしき千十三 思ひわびさても命はあるものをうきにたへぬは泪なりけり新古十四 さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲吹風も峯にみゆらんかしは詞の助也　のみや　やはの心也淨藏の思ひ忘るゝ戀しさをとよめるをとかめてこな

たより音信すとも常に忘れ給ふへきにあらすおとつるゝ折のみおもひ出給ふか扨も淺き御心哉とうらむる心也

といへりける又しやうさう大とく

我ためにつらき人をはおきなから何のつみなき世をやうらみん

つらき人とは戀人をいふ也戀路のならひ思ふ人ゆへとかくくるしむ事なれは也かの中興の女をさしていふべし世を恨み身をかこつもみなうき人ゆへなれば罪なき世を恨むべきにあらずたゞそなたこそ恨めしけれとの心なるへし世をやのややはの心也此歌詞花七に入題しらすとあり前の歌と同時の作とは見えす

ともいひけり此女はになくかしづきてみこたちかんたちめよばひ給へどみかどに奉らんとてあはせさりけれど此事いてきければおやも見ず成にけり

みこは皇子かんたちめは上達部公卿をいふ桐壺云はしのもとにみこたちかんたちめ云々

おやも見すもの字心をつくへし法師に名立たる女なれは親さへ見放ちたると也

まことに後世女のいましめとすへし又淨藏も有驗の事は世に聞へしかど此段のおもむきをみれば破戒の僧なりし事顯然也末代懲悪の爲此物語にも書とゝめけるにや　庭の訓（作阿佛）云いかなる貴きひじりかしこき僧なども申候とも事しげく仰かはす事あるまじく候御佛事など候はん時はこと〳〵敷佛の御まへにて人々多く御まへに候はせて一日に一時をさだめてかひをもたもたせ御はしませかりにもそのひじりこそかの御所のきえんなどいはれさせ給はん事あさましき御事にて候物しりたる尼を法の師とはたのませおはしませ云々此淨藏などのみだりかはしき事を思ひて阿佛も教訓を申されしにや阿佛は平度繁女安喜門院の侍女（號四條）爲家卿室爲相卿母也

故兵部卿のみや此女のかゝる事まだしかりける時よばひ給ふけりみこ

まへにみこたちかんたちめよばひ給へどゝ有その折の事なるべし淨藏と名のたゝぬさき也

荻の葉のそよくことにぞうらみつる風にうつりてつらき心を

荻のはの風にしたかひてあなたこなたなひくがことくうつりやすき人の心を葉風の戰く毎にうらめしく思ふとの心なるへし

これもおなじ宮

あさくこそ人は見るらめせき川のたゆる心はあらじとぞおもふ

此歌新勅撰十四に入詞書に女に遣しける元良親王第二句人は見るともとあり　關川近江の名所也八雲云寛平菊合にあふさかに讀り云々名寄に關川關の小川あり名所方角抄（宗祇作）關の小川相坂の山中也關の清水とも關川ともいふ云々關川は纔なる流にて淺けれども絕る事なきにそへて我志も淺きやうには見ゆらめどもたゆる心はあらじと也　關川關の小川ともいひていさゝかなるながれなれとも絕る事なきゆへに此川にそへてよみ給へる也

かへし

せき川の岩間をくゝる水をあさみたへぬべくのみ見ゆる心を

たへぬべくのみ見ゆるそなたの御心をいかであさからずとは見侍らんと也

かくて此女いでゝ物きこへなどすれどあはてのみありければみておはしましたりけるに月のいとあかゝりければよみ給ふける

よな／＼にいづと見しかどはかなくて入にし月といひてやみなん

此女出てものきこへなどはすれど交會もなき事をはかなく月の入しにそへてよみ給ふ也此なん心なしたゞやまんといふまで也

との給ひけりかくて扇をおとし給へりけるをとりて見ればしらぬ女の手にてかくかけり

わすらるゝ身は我からのあやまちになしてだにこそ君をうらみめ

人に忘らるゝは我身のあやまちあるゆへとは思ひしれとも猶人を恨るはなべて世の人情にこそあめれ

とかけりけるを見てそのかたはらにかきつけて奉りける

ゆゝしくもおもほゆる哉人ごとにうとまれにける世にこそありけれ

扇に書る歌のぬしはしらねどもみこに忘られたる

女のかけると見ゆる歌なるゆへさては此女も忘られしにやされはかく人毎に末とげず忘れ給ふみこなればたとへ一度逢奉るとも哉も又ほどなくうとまれぬべければたのみかたくいまはしきと也

となん又此女

わすらるゝときはの山のねをそなく秋野のむしの聲にみだれて

忘らるゝ時とうけたり常盤山　山城也[一十]　思ひ出るときはの山の岩つゝじいはねはこそあれ戀しき物を　山の峯をねともいふみねの上略也音をなくといひかけたり此歌一度は逢奉て中絶の後讀るやうなり

かへし

なくなれどおほつかなくぞおもほゆる聲きく事の今はなければ

聲にみだれてと女の讀るにこたへてねをなくなど承れども今は中絶たれば聲聞事もなしされはねをなくとあるもそら事にやおぼつかなしとの心也

又おなしみや

雲ゐにてよをふる頃はさみだれのあめのしたにそいけるかひなき

一二句は遙にへだゝりたる心也程は雲井に成ぬさもなどもよめり程遠く隔りて逢事もなければ此世に生るかひもなしと也此齋宮梅雨の頃賦ふるは雨の縁也

かへし

ふればこそ聲も雲ゐに聞えけめいとゝはるけき心ちのみして

宮の御歌雲ゐにてよをふるなどあるをうけて雨のふればこそその聲も聞へめ雲ゐなど承るにつけてもいとゝ遠ざかる心ちするとよめる成べし

おなじ宮にこと女

逢事のねがふばかりになりぬればたゞにかへせし時ぞ戀しき

今は夜かれかちにて逢みる事をねがふ程になれば不逢して空しくかへしまいらせし時節の戀しく悔しきと也

南院の今君といふは右京のかみ宗于の君のむすめなりそれおほきおとゞの内侍のかんの君にかたにさふらひけりそれを兵衛の君あや君ときこへける時さう

じにしば〳〵おはしけりおはしたえにければ常夏の
かれたるにつけてかくなん
南院の今君後撰作者集には南院式部卿のみこのむすめと有　南院式部卿のみては光孝皇子是忠親王也　むすめ考ニ紹運錄ニに是忠親王の子に娘後撰作者とあり是なるへし然れは此今君は是忠親王の子にて宗于とは兄弟なるを此物語に如此書るおぼつかなしゆへ有歟おほきおとゝの內侍のかんの君
藤原貴子也
貞信公(忠平公)　女　系圖云保明親王室後重明親王北方云々　兵衞の君　忠君(童名阿耶君)左兵衞督從四位下忠平公ノ末男
かりそめに君かふし見しとこなつのねもかれにしを
いかで咲けん
瞿麥撫子(トコナツナデシコ)一草二名也家經朝臣和歌序云鍾愛抽ニ衆草ニ故ニ曰ニ撫子ニ艶色契ニ千年ニ故曰ニ常夏ニ(古今栄雅抄にも出)とこなつを床にとりなしてよむ常の事也(古三)塵をたにすへしとぞ思ふ咲しよりいもと我ぬる常夏の花
ふしみし床の緣也　ねもかれにし　根を寐にそへて契のかれにしを云也歌の心は君かおはして臥給ひし床にも今はね給ふ事もなきを花はいかでさきけんと也根の枯たる草木は花咲事なきゆへかくよめるなるべし
となんありける
おなし女おほきが牛をかりて又のちにかりたりければ奉りし牛はしにきといひたりけるかへりことに
おほき　源ノ巨(オ)城(ホキ)後撰作者或云仁明源氏云々諸系圖無ニ考所ニ疑多(ハナホキ)歟仁明第一源氏右大臣也又のちに再ひからんといひ遣しける也奉りしうしはおほきの詞也
我のりし事をうしとやきえにけん草にかゝれる露の
いのちは
憂に牛をそへてよむ也草にかゝれるとは牛は草を食して生るものなれはなり此歌後撰十六に入詞書云人のうしをかりて侍りけるにしにけれはいひ遣しける閑院のごとありて第四句草葉にかゝるとあり新拾二十俊賴朝臣藤原仲實のもとへ牛をかりに遣すとてうししばしといふ事を折句に讀て萩の枝につけておくられければうしはかすといふ事を又折句にて仲實の返歌ある事見えたり

おなし女人に
おほそらはくもらすなから神無月さしのふるにも袖はぬれけり
神無月は時雨の時節なれは空はくもらねとも袖のぬるゝにそへてあはて年ふる歎の泪をよめり神無月陽月と書字彙云十月為ニ陽月ニ十月は坤用ㇾ事嫌ニ于無ㇾ陽故名ニ陽月ニ云々又奥儀抄云天下もろ〳〵の神出雲の國に行てこと國に神なきかゆへにかみなし月といふをあやまれり云々此説難ㇾ信といへとも此心をよめる歌有和俗の説にしたかへる也新續古九十月はかり女の遠き所へまかりけるに橘ノ則長逢事を何にいのらん神無月おりわひしくも別ぬる哉
此歌奥儀の説に同意也
大膳のかみきんひらのむすめあかたの井戸といふ所にすみけりおほいこはきさいの宮に少將のこといひてさふらひけり三にあたりにけるは備前のかみさねあきらまたわかおとこなりける時になんはしめのおとこにしたりけるすまさりけれはよみてやりける
きんひらの女　橘ノ公平ノ女後撰作者或云大膳大夫也系圖作ニ公彥ニ左大辨廣相ノ男也　あかたの井戸縣の井戸也一條北東洞院ノ西角といへり後撰三　あかたの井戸と云家より藤原治方につかはしける橘ノ公平ノ女
都人きてもをらなん蛙なくあかたのゐとの山吹の花
おほいこ姉ノなり　三にあたり第三の女なり　信明　源公忠男後撰作者
この世にはかくてもやみぬわかれちのふちせをたれにとひてわたらん
世俗に女の初あひたる男に死して後三途川にて手をひかるゝといひならはせり別路の淵瀬とは三途川をいふなるへし此世はかくてやみぬとも來世のわたり川をいかにせんと讀る也槇柱云よそに見はなつも余りなる心のすきみそかしと口おし　おりたちてくみは見ねともわたり川人のせとはた契らさりしを　思ひの外なりやとてはなうちかみ給ふけはひなつかしうあはれ也女はかほかくして　みつせ河わたらぬ先にいかてなを涙のみおのあはときえなん　心おさなの御きえ所やとてもかのせはよき道なるを御手の先はかりはひきたすけきこえてんやとほゝえみ給ひてまめやかにはおほししる事もあらんかし云々源氏君と玉鬘上贈答也

河海云源氏玉鬘と本意をとけたる數最初嫁合の男
此川をひきこすと有云々
となんありける
おなし女のちに兵衛の尉もろたゝにあひてよみてお
こせたりける風吹雨ふりける日の事になん
もろたゝ　右兵衛尉　庶忠　堤中納言兼輔卿四男
系圖云庶正天暦元年三月卒云々
こち風はけふ日くらしにふくめれとあめもよにはた
よにもあらしな
詩衞風云習々谷風以陰以雨（朱注曰習々和舒也東風謂之谷風）こち吹
は雨ふるといへりあめも夜は雨の夜也榫歌に　かき
つめて昔戀しき雪も夜に哀をそふるおしのうきね
か花鳥云かきつめてはかきあつめて也雪も夜は雪
の夜也雨も夜も雨の夜也云々歌、心はこち風はけふ
終日吹て雨ふれとも夜にいたらは晴て雨夜にはよ
もあらし夜にならは必來り給へといふ心なるへし
はたよにもは語の助也（後撰十四）月にたに待ほとおほく
過ぬれは雨もよにてしとおもほゆる哉　東風をこ
ちとよめり
よよみけり

兵衛のせうはなれてのちりんじのまつりの舞人にさ
られていきけり此女とも物見に出たりけりさてかへ
りてよみてやりける
兵衛のせうはなれてこれも庶忠也　凡りんじの祭
といふ事石清水臨時祭（三月中午日）加茂臨時祭（十一月下酉日）此
外も日吉臨時祭祇園臨時祭など公事根元にあれど
此臨時祭は舞人の沙汰あれは石清水か加茂兩所の
うちなるへし
むかしきてなれしをすれる衣手をあなめつらしとよ
そに見る哉
なれしをすれるとは昔此女兵衛尉にあひ馴しか今
は中絶たれともかく舞人にて出立たるをみるに昔
逢なれける時の心ちするゆへかくよめる也なれし
は衣の縁語也　摺衣は舞人の裝束也（新古十九）臨時祭を
よめる　宮人のすれる衣にゆふたすきかけて心を
誰によすらん
かくて兵衛の尉山吹につけておこせたりける
もろともにゐての里こそ戀しけれひとりおりうき山
吹のはな
むかし逢なれし時を戀忍ふ心なるへし居に折をそ

へたり大鏡にさはとをくうつろひとかきくの花お
りてみるたにあかぬ心を
となん返しはしらすかくてこれは女かよひける時に
おほぞらもたゞならぬ哉神無月われのみしたにしぐ
ると思へば
神無月の頃時雨るゝ空を詠て時節の景氣に感じて
女の讀る也したにしくるとは心中に物おもひ歎く
心なるへし
これもおなし人
逢事のなみの下草みかくれてしづ心なくねこそなか
るれ
逢事のなみは逢事無也なきをなみともいふさて波
にいひかけたり　みかくれ水隱なり水を下略して
みとも云也水かさをみかさといふ類也音になくを
草の根にそへたり　しつ心なくとは靜なる心なく
也しつ心なく花の散らんとよめるに同し
かつらのみこ七夕の頃忍ひて人に逢給へりけりさて
やり給へりけり
袖をしもかさゝりしかどたなはたのあかぬわかれに
ひちにけるかな

織女に衣糸なとかすと歌によむ常の事也たなはた
にけふ袖はかさゝりしかど二星の如くあかぬ別に
袖のぬれしと也ひちぬるゝをいふ　袖ひちてむす
ひし水のこほれるをなとよめり　古四七夕にかしつ
る絲のうちはへて年のをなかく戀やわたらん
右のおとゝ頭におはしける時に小貳のめのとのもと
によみて給ひける
右のおとゝ　三條右大臣定方公にや　小貳のめの
と　後撰作者誰と不知
秋の夜をまてとたのめしとの葉に今もかゝれる露の
はかなさ
たのめし　約束せしをいふ露は草木の葉に置もの
なれはとの葉にかゝるとよめり秋の夜必逢みんと
契約せし故そのとのはにかゝりてなからふる露の
命のはかなさよとの心なるへし
となん
秋もこす露もおかねととのはゝ我爲にこそ色かはり
けれ
秋は草木の色かはる折なれとも此たのめしとのは
は草木の葉にもあらすされは露も置事なけれとた

のめしとの葉のかくいろ變したるは我うきからにやと歎く心なるへし
きんひらかむすめしぬとて
なかけくもたのみける哉世の中を袖になみたのかゝる身をもて
なかけくもはかなくもなりけは助字也憂をうけくと云におなし萬十二今は我しなんにわきも逢ずして思ひわたれはやすけくもなし　たのみける哉はかへる哉也
かつらのみこよしたねに
露しけみ草のたもとをさくらにて君まつ虫のねをのみそなく
草の袂　薄をいふ歟又草枕草莚なとの類ひと見てもしかるへし古四秋の野の草の袂か花すゝきほに出てまねく袖とみゆらん露は泪をそへたり
かんゐんのおほいきみ
後撰作者
むかしよりおもふ心はありそ海のはまのまさごは數もしられす
有磯海　越中也　古序我戀はよむともつきしありそうみの濱の眞砂はよみ盡すとも
歌心明也
おなし女にみちのくにのかみにてしにし藤原のさねきかよみてをこせたりけるやまひいとおもくしてをこたりける頃也いかてたいめん給はらんとて
藤原眞樹大系圖作眞材系圖云乙麻呂ノ不比等一男八男是公ノ末彌正忠保生男刑部少輔從五位下母惟宗眞治ノ女
からくしておしみとめたるいのちもて逢事をさへやまんとやする
上の句は病おもかりし心をいふ下句は病に止をそへてよめり
といへりけれはおほいきみかへし
もろともにいざとはいはてしての山なとかはひとりこえむとはせし
歌心明也後撰十七人のもとより久しう心ちわつらひてほと〳〵しぬへくなん有つるといひて侍りけれは閑院大君歌此物語におなしたゞし第四句いかてかひとりとあり同十三公頼朝臣のむすめに忍ひてすみ侍りけるにわつらふ事ありてしぬへしといへりければあさたゝの朝臣　もろともにいざとはいはてし

ての山こゆともこさん物ならなくに　よく似たる
歌也

といひたりさてきたりける夜も逢ましき事や有けん
えあはざりければかへりにけりさてあしたに男のも
とよりいひおこせたりける

あかつきはゆふつけ鳥のわび聲におとらぬ音をぞな
きてかへりし

　鷄に木綿をつくる事有ゆへゆふつけ鳥といふわひ
　こゑとはもの侘しく聞ゆる聲をいふなるへし

おほいきみかへし

あかつきのねさめのみゝにきゝしかと鳥より外の聲
はせさりき

　おとらぬ音をなきしと男のよめるを不審して曉に
　は鷄より外の聲はせさりしものをいかゝとゝがめ
　し心也

おほきおとゞは大臣になり給ひてとしころおはする
に枇杷のおとゞはえなり給はでありわたりけるをつ
ゐに大臣になり給ひにける御よろこびにおほきおと
ゝ梅を折てかさし給ふて

　おほきおとゝ　貞信公（忠平公也）　攝關御傳抄云延喜十四
年八月廿五日任二右大臣一云々　枇杷の大臣　仲平
公也承平三年二月十三日任二右大臣一大鏡云左大臣
仲平此おとゝこれもとつねの次郎御母は本院大臣
に同し云々又云　貞信公よりは御兄にわたらせ給へ
と廿年まて大臣になりおくれ給へりしつゐに成給
へれはおほきおとゞ御よろこひの歌云々とありて
此歌有（今考自延喜十四年至承平三年二十年也）又云此殿の御心そまことに
うるはしくおはしましける云々宇治拾遺云是も今
は昔月の大將星を犯すといふ勘文を奉れりよりて
近衛大將れもくつゝしみ給ふへしとて小野宮右大
將はさま／＼の御祈ともありて春日社山階寺なと
にも御祈あまたせらるその時の左大將は枇杷左大
將仲平と申人にぞおはしける東大寺の法藏僧都は
此左大將の御祈の師也さためて御祈の事有なんと
待にをともし給はねはおほつかなさに京にのほり
てひわ殿に參りぬ殿逢給ひて何事にてのほられた
るそとの給へは僧都申けるやう奈良にて承れは左
右大將つゝしみ給ふへしと天文博士勘申たりとて
右大將殿は春日社山階寺なとに御祈さま／＼に候
へは殿よりもさためて候ひなんと思ひて案内つか

ふまつるにさる事も承らすとみな人はおほつかなく思ひ給ひて參り候つる也猶御祈祷はんこそよく候はめと申けれは左大將殿の給ふやう尤しかるへき事なりされとおのれか思ふやうは大將のつヽしむへしと申なるにおのれもつヽしまば右大將の爲にあしうもこそあれかの大將は才もかしこくいますかり年もわかしながくおほやけにつかふまつるへき人也おのれにおきてはさせる事もなし年も老たりいかにもなれ何條事かあらんと思へは祈らぬ也との給ひけれは僧都いろ／＼うちなきて百千の御祈に增るらん此御心の定にては事のおそり更に候はじといひてまかてぬされは實に事なくて大臣になりて七十餘まてなんおはしける云々

そそくとくつゐに咲ける梅のはなたかうへおきしたねにかあるらん

任大臣の遲速ありしを梅花にそへてよみ給ふ也此歌新古十六に入續後撰十六　枇杷大臣はしめて大臣になりて侍りけるよろこひにまかりて貞信公　折てみ、るかひも有哉梅のはなふたヽひ春に逢心ちして返し枇杷左大臣　埋木に花さく春のなかりせばまちかき枝も誰かおらまし　同時の歌なるへし

とありけりその日の事ともを歌なとかきて齋宮に奉り給ふとて三條の右の大殿の女御やかてこれにかきつけ給ふける

齋宮　柔子　寛平皇女　女御　定方公の女三條の女御也

いかてかくとしきりもせぬたねも哉あれゆく庭のかけとたのまん

後撰十七逢事のとしきりしぬるなけきには身のかすならぬものにそありける　としきりとは　菓の年によりてなりならすするをいふ也誰うへおきし種と基經公の御子孫の事を貞信公よみ給ふによりて女御のうらやみてよみ給へるなるへし後撰十五三條右大臣身まかりてあくる年の春大臣めし有と聞て齋宮のみこに遣しけるむすめの女御　いかてかのとしきりもせぬたねも哉あれたる宿にうへてみるへく

とあり

とありけりその御返し齋宮より有けりわすれにけりかくてねかひ給ふけるかひありて左のおとヽの中納言わたりすみ給ふければたねみなひろごり給ふてか

けおほくなりにけりさりける時に齋宮より
左のおとゝの中納言　清愼公也小野宮實頼公 中納言の官
にておはせし時此女御のもとへかよひそめ給ひし
也系圖云號三條御息所ㇾ後配ニ適清愼公ㇾ云々
花さかり春は見にこんとしきりもせすといふたねは
おひぬとかきく
後撰十五 かの女御左のおほいまうちきみに逢にけりと
聞て遣しける齋宮のみことありて一二句
春毎に行てのみ見んとかはりて入たり見にこんと
は見にゆかむといふ心也此齋宮の御母は內大臣高
藤公の女にて右大臣定方公の兄弟なれはしたしく
かたらひ給ひけるなるへし
さねたうの小貳といひける人のむすめの男
さねたうの小貳　未考
笛竹のひとよも君とねぬときはちくさのこゑにねこ
そなかるれ
ちくさの聲とは千種か一夜といふに對せる也よは
竹の緣也
といへりけれは女かへし
ちゞのねはとはのふきかふえ竹のこちくの聲もきこ
ねこなくに
詞のふきは詞の吹(フキ)にて口笛をいふなるへし延喜式
にも調歌吹と有て吹の字をふえと訓せり鄭玄毛詩
箋云嘯蹙ㇾ口而出ㇾ聲也云々俗云口笛也文選嘯賦云
發ニ妙聲於丹脣ニ一哀音於皓齒ニ云々　こちくは胡
竹也ふえ竹を云後撰十八いつか又こちくなるべき鶯の
さへづりそめし夜半のふえたけ 千十八 笛竹のこちく
となにゝおもひけん隣に音はせしにぞありける歌
心は千種の聲なとうけ給はれどもそれは口笛にて
實の笛にはあらざるべしこちくの笛の音はせざり
しものをとなりこちくをこちへ來るといふにそへ
てよめる也
としこか志賀にまうてたりけるにそうきぎみ(ぞうきのきみイ)といふ
ほうしありけりそれはひえにすむ陸の殿上をもする
法師になんありけるそれ此としこのまうでたる日志
賀にまうてあひにけりはしごのにつぼねをしてゐて
よろづの事をいひかはしけりいまはとしこかへりな
んとしけりそれにそうきのもとより
袋草紙云彼後撰作者の增基は者し大和物語に侍る
增基君歟件人は殿上法師也云々　釋 增喜　扶桑拾

葉集云叡山僧不詳其氏族其事跡出大和物語
云々基或作喜熊野紀行遠江道紀彼集にみゆはし
ごの大宮権現跡たれ給へるといふ波止士濃歟又端
つかたの殿をいふ歟

あひみてもわかるゝ事のなかりせはかつ〳〵物はお
もはさらまし

かつ〳〵　かくと云をかさねたるにてかくといふ
に同じ古八かつこえてわかれも行か逢坂は人たの
めなる名にこそありけれと同心也又逢みるうちに
もかつ〳〵わかれむ事の思はれてかなしき心とも
見る説あり後撰十一あひかたらひける人これもかれも
つゝむ事ありてはなれぬへく侍ければ遣しけるよ
み人しらすと有て此歌入たり

かへし（イはなし）さしこ

いかなればかつ〳〵ものをおもふらんなごりもなく
ぞ我はかなしき

此かつ〳〵前の歌とは意味すこしかはるべき歟
新勅十秋の月もちは一夜のへたてにてかつ〳〵影そ
のこるくまなきなこりもなくとは殘る方もなくと
いふ心なるへしともに別をおしむ心也

となんありけるとばもいとおほくなん有ける
おなしぞうき君やれる人のもとはしらすかうよめり
けり

草の葉にかゝれる露の身なれはや心うごくに涙おつ
らん

草葉の露はそのはのうごくにつけてこぼるるゆへ
そへてよめる也

本院の北のかたまだ帥の大納言の女にていますかり
けるおりに平仲がよみてきこえける

本院　左大臣時平公也　北の方　在原棟梁女帥
大納言國經卿也長良公一男贈太政大臣　此北方ははしめ國經卿の
妻にておはせし程に敦忠をはらみ給ひしを其頃時
平公國經卿のもとにおはして酒のみ遊び給へるに
國經卿此北の方の手を取て時平公に進せられし也

春の野にみどりにはへるさねかつら我君さねとたの
むいかにぞ

さねかつらは五味子といふ草也我君さねといはん
ためにかくおけり序歌也我君ざねとは我君實也伊
物につかひざねまらうどざねなと有に同じ又むこ
がね后がねなといへるも同事也かさと五音通

乙女云　后がねこそ又おひすがひぬれ云々　九條植通公　御說云后がねは實也云々眞實に我君と賴むはいかゞおほすぞとの心なるべし

といへりけるかくいひ／＼てあひちぎる事ありけりそのゝち左のおとゞのきたのかたにてのゝしり給ひける時よみてをこせたりける

ゆくすゑのすくせもしらず我むかし契りし事はおもほゆや君

すくせは　宿世又宿緣也帚木云すくせのひくかた侍めれは云々かくやんごとなき左大臣殿の北方に成給ふべき宿緣おはすべきとはしらざりしとの心也

となんいへりけるそのかへしそれよりまへ／＼も歌はおほかりけれどえきかす

後撰十一大納言國經朝臣の家に侍りける女に平貞文といと忍びてかたらひて行末まで契侍りける頃此女にはかに贈大政大臣にむかへられたりければ文たにもかよはす事なく成にければかの女の子の五ばかりなるが本院の西のたいにあそびけるをよびよせて母にみせ奉れとてかひなに書つけ侍りける

昔せし我かねごとのかなしきはいかに契りし名殘なるらん　返し　よみ人しらず　うつゝにて誰契りけん定なき夢路にまよふ我はわれかは　後撰に女とあるは此北の方の事也

いづみの大將故左のおほいとのにまうで給へりけりほかにて酒などまいりえひて夜いたく更てゆくりもなくものし給へりおとゞ驚き給ひていづくにものし給へるたよりにかあらんなどきこえ給てみかうしあげさはくにみふのたゞみね御ともにおりみはしのもとに松ともしながらひざまづきて御せうそこ申す

いづみの大將　定國卿也（右近大將大納言從二位）閑院左大臣冬嗣公ノ孫内大臣高藤公三男三條右大臣定方公ノ兄也

左のおほいとの　時平公也

ゆくりもなく　夕貌云いさよふ月にゆくりもなくあくがれんことを云々注云不意也思ひかけずとりあへぬ心也　みふのたゞみね　父祖不詳

作者部類六位部云從五位下安綱男云々

泉大將の隨身也階下に續松ともしながら大將のせうそこを申也

かさゝぎのわたせるはしの霜のうへを夜半にふみわけことさらにこそ

かさゝぎのわたせるはしにをく霜のしろきをみれば夜ぞ更にけるとある家持卿の歌を本歌にてよめる也かさゝきの橋とは淮南子に烏鵲塡レ河成レ橋渡ニ織女一とあり織女をわたすとあれは七夕の事なれども爰にかり用ひてはしに置わたしたる霜のけしきを天上の烏鵲橋に思ひよそへてよむ也又橋階同訓にてまへの詞に御はしのもとになとあれはその心もをのつからかよふべし歌心はいづくに物し給ふたよりにかなごとはせ給ふによりて事の序にはおはしまさす夜ふかき霜をふみ分てわさと此殿へとておはせしと深切なる情をあらはし侍る也ことさらはわざと也

となんの給ふとまうすあるしのおとゝいとあはれにおかしとおほしてその夜一夜おほみきまいりあそひ給ふて大將にものかつきたゞみねもろく給りなとしけり

おほみき　御酒也　忠岑の高名大將も又面目なるへし末摘云まことはかやうのみありきにもずいしんがらこそはかゝしき事も侍るへけれ云々是等の事を思ひて式部も書るにやと古人も評せり

そのたゝみねかむすめありときゝてある人なんえとよりかのたのめ給ひし事此頃のほどにとなん思ふといひけるをいとよき事なりといひけりおとこのもといへりけるかへりとに

たのめ給ひし　約束せし事也

我やどの一本すゝきうらわかみむすひ時にはまだしかりけり

是もたゞみね歌也後撰十またとしわかゝりける女に遣しける源中正葉をわかみほにこそ出ね花すゝきしたの心はむすはさらめや　うらわかみ　伊物にうらわかみねよけにみゆる若葉をとよめる同心也たゝわかきといふまで也むすひ時とは人の寶ともなるへき齢の時節也

となんよみたりけるまことにまたいとちいさきむすめになんありける

まことには忠岑の歌の心をうけていふ詞也

つくしにありけるひかきのごといひけるはいとらうありおかしくて世をへけるものになんありけるとしつきかくてありわたりけるをすみともがさはきにあひていゑもやけほろびものゝくもみなとられはて

ゝいといみじうなりにけり

ひかきのご　袋草紙いふ肥後國遊君檜垣老後に落魄者也云々　らうあり勞有なり　すみともがさはき前に見えたり　物の具萬の道具を云なるへし

かゝりともしらで野大貳うてのつかひにくたり給てそれか家のありしわたりをたつねてひかきのごといひけん人にいかてあはんいづくにかすむらんとのたまへは此わたりになんすみ侍しなどともなる人もいひけりあはれかゝるさはきにいかに成にけん

野大貳　小野好古也　純友かうてのつかひに下向ありし事前にもみゆ野大貳を後撰には大貳藤原興範とありそれにつきて說々多し無益の事也たゞ兩說と見て置へし　檜垣家集にはたゞ國の守とはかりありて誰ともなし

たつねてし哉とのたまひけるほとにかしらしろきをうなの水くめるなんまへよりあやしきやうなるいゑに入けるある人ありてこれなんひがきのごといひけりあはれかゝり給ふてよばすれとはぢてこでかくなんいへりける

をうな嫗の守にてとし老たる女をいふといへりたゝし玉鬘云をうなになるまて過にけるを云々是は玉かつらの事を源氏の宣ふ詞也此時玉鬘の年齡凡廿一二才はかり也おうなといふ事いかゝとおほえ侍るに　花鳥云をさなき姫君のおとなしくなるををうなになるといふ也と有又藤袴云年の程みつよつがこのかみはこさなるかたわにもあらぬを人からやいかゝおはしけんをうなとつけて心にもいれず云々是は髭黑の北の方をいふ也髭黑よりも年まさり也河海云老嫗の心也云々

むは玉の我くろかみはしら川のみつはくむまて成にける哉

初五文字後撰にはとしふれはと有むは玉うは玉ともかくたゞ黑き事につゞくる枕詞也連歌に烏に折を嫌ふといふは烏羽玉とかくゆへなるへしかやうの類その故を歌によむ事なければ穿鑿して益なし我黑髮もしら川とは白髮になれるをいふ也白川肥後國也みつはくむとは年老て腰かゝまるをいふ也夕貌云ちゝの朝臣のめのとに侍りしものゝみつはくみてすみ侍るなり云々年よりぬれは腰かかまりせくゞまりて二の膝のとがり出たる事にかしら交

りて三の輪をくみ入たるか如也とぞ老てみつはくむを水は汲さそへて讀り後拾十九年をへてすめるしみつに影みれはみつはくむまて老そしにける　又みつはさすさも讀り袋草紙云　増賀上人みつはさす八十餘りの老のなみくらけのほねに逢にける哉云々檜垣家集云老にきはめてすみかもなくなりて手づから水くむきはになりてをけをひきさげて出るにしも國のかみしばし出らるゝ道にさしあひてめかざなるもの見つけてなさかくはなど見とかむるに名たかきひがきなりと人のいへばはたかへるゝによひいづはづかしけれどかくれ所もなくてをけをきしにをきてゐたればいかでいとかくはありしぞあはれなどあれば思わびて

老はてゝかしらのかみはしら川のみつわくむまて成にける哉云々後撰十七つくしの白川といふ所にすみ侍りけるにまへより大貳藤原興範朝臣のまかりわたるつゐでに水たへんとてうちよりてこひ侍りければ水をもて出てよみ侍るけるひかきの嫗　年ふれは我黒かみも白川のみつわくむまて老にける哉かしこに名たかく事好む女になん侍りける云々

とよみたりければあはれがりてきたりけるあこめひとかさねぬきてなんやりける

野大貳哀がりてひがきにおくられたる也あこめ和名抄云　衵アコメキヌ　女人近レ身衣也云々　延喜縫殿式に䙓アコメの字をもあこめと讀り

又おなし人大貳のたちにて秋のもみぢをよませければ

たちは　館也

しかのねはいくらはかりの紅そふり出るからに山のそむらん

紅はふり出してそむる物ゆへかくよめり古十二紅のふり出つゝなく涙には袂のみこそいろ増りけり鹿の音に山のもみぢするとよめるは同時のものゆへとりあはせて讀るなるへし

此ひがきのご歌なんよむといひてすきものどもあつまりてよみかたかるへき末をつけさせんとてかくいひけり

よみがたかるへきとはつけにくかるへきといふに同し末は下句也伊物についまつのすみして歌の末を書つぐとあるも下句の事也

わたつ海の中にそたてるさをしかは
　わたづうみとよむ殊の外成難句也
とてするをつけさするに
秋の山へやそこに見ゆらん
　秋の山水底にうつれは鹿も海中に立る様なるへし
とそつけたりける
つくしなりける女京に男をやりてよみける
人をまつ宿はくらくそ成にける契りし月のうちに見
えぬは
　夜とても月夜には我宿のくらからねとも月のうち
に見えねばくらしといひてその月の中には男の心
かへらんなといひたのめしがその月の中にも見え
ねば宿はくらしと讀る也此歌も檜垣家集に見えた
ればこの女とあるも檜垣の嫗歟
となんいへりける
これもつくしなりける（イになし）女
秋風の心やつらき花薄ふきくる方をまつそむくらむ
　此歌も檜垣家集に入題しらすと有疑は此歌前の歌
と同時の作なるへし歌心は前に契し月のうちに見
えねはと男の心がはりを恨てよめりされは此女男
の心の秋をうらむる折ふし庭前の薄秋風の吹くる
かたをそむき靡くを見て薄も秋風の心を恨るにや
かく吹くる方をそむくならんと我身をつみてよめ
る心なるへし戀の歌に人の秋なとよむは人の我を
他意（アダ）にとりなしていふ也聽雪集に暮秋戀　おしむ
らん人のとへかし秋はたゝ我をふるせる名に殘り
ける此類多し
先帝の御時うづきのついたちの日鶯のなかぬをよま
せ給ふける公忠
春はたゞきのふばかりをうくひすのかぎれるともな
かぬけふ哉
　限る如く也　公忠集云　延喜御時四月一日鶯のな
かぬとしのうたつかふまつれとおほせらるゝにと
詞書ありて此歌入たり
となんよみたりける
おなしみかとの御時みつねをめして月のいとおもし
ろき夜御あそひなとありて月を弓はりといふは何の
心そそのよしつかふまつれとおほせ給ふければみは
しのもとにさふらひてつかふまつりける
てる月をゆみはりとしもいふ事は山へを（のにイ）さしていれ

ばなりけり
弦月　和名抄云劉熈釋名云弦月月之半名也其形一旁曲一旁直若レ張ニ弓絃一也弦（和名由美八利　有ニ上弦下弦一）弦月の事は其釋如斯なれども さはいはずして弓に射るといふ縁も有り又山へをさして月はいるゆへしか申也とよめる新しく面白しと也花宴　心いるかたならませはゆみはりの月なき空にまよはましやは花鳥云圓融院御集に弓結の頭宮わたらせ給ふて　弓張の山のはさして入時はあやしくものぞかなしかりける

ろくにおほうちきかつきて
袿花鳥云大小有小袿は女房ならてはきせぬ也色はさだまらぬ也云々後撰祭頭敏行朝臣歌の詞書に元日に二條のきさいの宮にてしろき大うちきを給はりて有
しら雲のこのかたにしもおりゐるは天津風こそ吹てきつらし
帝より下し給はる御衣なれはかくよめる也
延喜式八祝詞に白雲能墜坐向伏限云々此詞を用る歟又御門よりの恩賜ならでも人の賜る衣なとを貴て天の羽衣なともよむ也伊物に　是や此天の羽衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけれと有常のよめるは業平のもとより賜られたる衣を貴て也此段又大鏡にも見ゆ此歌の頭に云いみしう侍る哉とはかりのものをちかうめしよせて勅録給はすべきならねとそしり申人のなきも君のおもくおはしましみつねか和歌の道にゆるされたる事とぞ思ひ給へしか云々

おなしみかと月のおもしろき夜みそかに御息所だちの御さうしともを見ありかせ給ふけり御ともに公忠さふらひけりそれにあるみさうしよりこきうちきひとかさねきたる女のいときよげなる出きていみじうなきけりきんたゞをめしてみせ給ふければかみをふりおほひていみじうなくなどて。なくぞといへどいらへもせすみかといみしうあやしかり給ひけり公忠
こきうちき紅の色こき袿也公忠をめして公忠は諸道堪能なるうへ生得剛勇なる人にて油を盗める化物を蹴たをしたる事今昔物語にも有さればとりわき勅ありて此人をのしけるにや　髪をふりおほひて　若菜下云髪をふりかけてなくけはひ云々（續千俳諧）

ふりかへるひたひのかみのかたみたれとくとたのむるけふの暮哉

おもふらんこゝろのうちはしらねともなくを見るこそわひしかりけれ（かなしイ）

人のかなしみを見て悲しむは仁者の心なり歌心かくれたる所なし　白氏文集十夜聞ニ歌者一詩泣聲通復咽尋レ聲見ニ其人一有レ婦顏如レ雪獨倚ニ帆檣一立娉婷十七八夜淚如ニ眞珠一雙々墮ニ明月一借問誰家婦歌泣何淒切一問一沾レ襟低レ眉終不レ說云々是等の面影なり

とよめりければいとになくめで給ふけり

大和物語虚靜抄下卷之一

若州小濱　木崎雅興著

先帝の御時にあるみさうしにきたなげなきわらはありけりみかど御らんじてみそかにめしてけりこれを人にもしらせ給はでとき〴〵めしけりさての給はせける

あかでのみふればなるべしあはぬよもあふよも人をあはれとぞ思ふ

　あはぬ夜も逢夜も人をおもふは見るにあかぬゆへなるへしとの御製なり此御歌新勅十三に入題不知

　延喜御製と有て第二句ふればなりけりとあり

との給はせけるをわらはの心ちにもかきりなくあはれにおほへければしのひあへでともだちにさなんのたまひしとかたりければ（此イ）。しうなる御息所き〻てをひいで給ひけるものかいみじう

　しのびあへで　忍ひかねたるなり　しうなる　主なり　ものか　心なし花宴云おほろ月夜ににるものぞなきとうちすしてこなたさまにくるものか云云榮花花山尋る中納言云ほうしにてついゐさせ給へるものか云云是等の類也　をひいて　追出也　いみしう　何にても物の甚敷心也此御息所物嫉の心甚敷擧動(フレマヒ)也と心をふくめて書残したり　若菜の巻の終に又かのおはします寺にもまかひるさなのと書留たるは摩訶毘盧遮那(マカビルサナ)の御誦經有といふ事なり又柏木の巻の終にも此君ははひいざりなど〻留たり此類ひなるべし

三條右大臣のむすめつ〻みの中納言にあひはじめ給ふけるあいだくらのすけにて内の殿上もなんし給ふける女はあはんのこ〻ろやなかりけん心もゆかずなんいますかりける男も宮つかへし給ふければえつねにもいまさゞりけるころ女

　定方公息女あまた有第三の方兼輔卿の室なるよし系圖に見へたり　内藏助　内藏寮の助なり内藏寮　百寮訓要抄云金銀珠玉綾をつかさどる又天子の御服を奉行する所なりと云々　助　同抄云是も地下の五位六位今は沙汰に不及事なり云云

たきもの〻くゆる心はありしかとひとりはたへてねられざりけり

　薫るに悔る火取に獨をそへてよめり兼輔卿いまた

下﨟の折なれば逢神事は悔しけれども獨寐はしかたきさなり　槇柱　ひとりゐてこかるゝむねのくるしきにおもひあまれるほのほとぞ見しと木工君のよめるも火取に獨をそへたり新拾十四中納言兼輔にあひはしめける頃はいまた下﨟に侍りけれは女はあはむの心やなかりけんおとこも宮つかへにひまなくてつねにもあはざりける頃讀る三條右大臣の女とありて此歌入

返しは上手なればよかりけめどえきかねばかゝす又おとこひごろさはがしくなんえまいらぬかくいそぎまかりありくうちにもえまいりこぬ事をなんいかにとかきりなく思給ふるとありけれは女（イになし）

さはくなるうちにもものはおもふなり我つれ／＼を何にたとへん

歌のこゝろ明也異本此歌の次にとなんありけるとあり

志賀の山越の道にいはえといふ所に故兵部卿の宮家をいとおかしうつくりて時々おはしましけりいとしのひておはしまして志賀にまうつる女どもを見給ふときもありけりおほかたもいとおもしろういゑもいとおかしうなんありけるとしこ志賀にまうてけるついてに此家にきてめぐりつゝ見てあはれかりめでなどしてかきつけたりける

志賀の山越　袖中抄の説に北白川の瀧のかたはらよりのほりて如意の嵩越て志賀に出る道なりといへり或云今の白川越の南にあり云々

又云今は山中越といふなり山中村といふ人家かの道に有云々　いはえ…………故兵部卿宮　元良親王なり

かりにのみくる君まつとふり出てなくしか山は秋そかなしき

かりにのみくる君は元良のみこをいふなりかりに狩をもそへたり　ふり出てなくとは鹿の心をおこしてなく心なり此物語檜垣嫗の歌にも鹿の音はいくらはかりの紅そふり出るからに山のそむらんとあるに同し志賀を鹿にそへたり結句猿丸大夫の聲きく時ぞ秋はかなしきとよめる同心か新勅五兵部卿もとよしのみこ志賀の山越のかたに時々かよひすみ侍ける家を見にまかりて書つけ侍りけると詞書有て此歌いれり

さなんかきつけていにける
こやくしくそといひける人ある人をよばひておこせたりける
　こやくしくそ　未考或云故は死者をいふ詞なり薬師は姓糞は名なるべしとぞ
かくれぬのそこのした草みがくれてしられぬ戀はくるしかりけり
　かくれぬは　隠沼也しられぬといはんために上句はおけり序歌なり　みかくれ　水隠也又只かくるヽ事をもいふ續古十九いせにくたりて侍りける頃顯季卿のもとに遣しける俊頼朝臣とへかしな玉くらのはにみがくれてもすの草くきめぢならすとも袖中抄云俊頼歌は身がくるとよめり云々
かへし女
みかくれにかくるばかりのした草はながからじともおもほゆるかな
　水かくれたる程の草は短き物ゆへ契の長かるまじきにそへて此薬師のせいたけみしかきを諷してよめるなるへし
此こやくしといひける人はたけなんいとみじかかりける
　此贈答新千載十に入作者有相違女何集のおもむき左に記
　　女に遣しける　　枇杷左大臣
かくれぬの底の下草みかくれてしられぬ戀はくるしかりけり
　　返し　　伊勢
みかくれに隠るはかりの下草はなかからしともおもほゆるかな
先帝の御時に承香殿の御息所の御そうしに中納言の君といふ人さふらひけりそれを故兵部卿の宮わかおとこにて一の宮と聞えて色このみ給ふける頃承香殿はいとちかき程になんありけるらうありおかしき人々ありときヽ給ふてものなとの給ひかはしけりさりけるころほひ此中納言の君に忍ひてね給ひそめてけり時々おはしましてのち此宮おさ／＼とひ給はさりけりさる頃女のもとよりよみて奉りたりける
　承香殿の御息所　拾遺詞書には承香殿の女御と有延喜ノ御母宇多ノ女御内大臣高藤公女　中納言の君
　作者部類云後撰拾遺作者云々承香殿の御息所の

女房なるへしわかおとこ　若男なり
人をとくあくた川てふつのくにのなにはたがはぬ君
にぞありける
拾遺十五延喜御時承香殿女御のかたなりける女にもと
よしのみこまかりかよひ侍けるたへてのちいひ遣
しけると詞書ありて此歌入たゝし結句物にそあり
けるとあり歌ノ心は此みこ世にかくれなき色好に
てあた〳〵敷ましますと御名のかくれなきにたか
はずあたなる君ぞとなり芥川を俑に難波を名には
と地名ふたつをそへてよめるなり両所ともつの國
の名所なり古十四津の國のなにはには思はす山城のとは
に逢ひみん事をのみこそ　此格也
かくてものもくはでなく〳〵やまひになりてこひ奉
りけるかの承香殿のまへの松に雪のふりかゝりたり
けるをおりてかくなんきこえ奉りける
こぬ人をまつの葉にふるしら雪のきへこそかへれあ
はぬおもひに
歌心明なり後撰十二忘れがたになり侍りけるおとこに
遣しけると詞書ありて下句きへこそかへれくゆる
思ひにとあり

とてなんゆめ此雪おとすなとつかひにいひてなん奉
りける
ゆめは　努々なり
故兵部卿の宮のほるの大納言のむすめにすみ給ふけ
るをれいのおまし所にはあらでひさしにおまししき
ておほとのこもりなどしてかへり給ふてほど久しう
おはしまさゞりけりかくての給へりけるかのひさし
にしかれたりしものはさなからありやとりたてやし
給ひてしとの給へりければ御返事に
源昇　融公男正三位大納言　おまし御席なり　さ
ながらはそのまゝ也　とりたてやとはとりて外へ
うつされしやなと尋給ふ消息の詞なり
しきかへずありしながらにくさまくらちりのみそゐ
るはらふ人なし
草枕は旅寐に不限たゞさしたる枕をもいふなり
我宿の具なれは卑下の心もあるへし　はらふ人な
ければ塵のみゐると也なみはなきなり明石いふせ
くも心にものをなやむかなやよやいかにととふ人
もなみ
とありければ御かへしに

草枕ちりはらひにはから衣たもとゆたかにたつをまゝてかし

はらふ人なみとかこつをうけてその塵大方の袖にてははらはれまじ袂を廣くゆたかに裁てのちまいりて拂ふへし先それまでは暫し待給へとの心にや古十七うれしさを何につゝまんから衣袂ゆたかにたてといはましを　ゆたか　寛(ユタカ)と書

とあれは又

から衣たつをまつまの程こそは我しきたえの塵もつもらめ

から衣袂ゆたかにたち給ふをまつ程にはいよ〳〵塵もつもるへきまゝたゝいまの間におはして枕の塵をはらひ給へと也　しきたへ奥儀抄云　しきたへの衣手かれて我待とあらんこともはおもかけに見むしきたへといひては枕とこそよむに此歌心得すもしもひかことにやとおもへど此集に眞名にたしかに書たるはいかに　答云しきたへは必まくらにあらすたゝぬる所の物をばしきたへといふしくといふ心にやしきたへのむしろなともよめり云々しきたへの袖しきたへの枕なとよむつねの事なり

この歌しきたへの塵とよめると心はしきたへの枕の塵といふに同事なり

となんありければおはしまして又宇治へ狩しになんいくとの給ひける御返事に

みかりするくりこま山の鹿よりもひとりぬる夜ぞわびしかりける

狩にあふ鹿よりも獨寐はわびしきとなりくりこま山まへに出る

よしいゑといひける宰相のはらからやまとのぞうといひてありけり

よしいゑ或云よしうえとあるへきを傳寫の誤なるへし云々　公卿補任云從四位上橘ノ良殖(ヨシウエ)參議常主ノ孫從五位上安吉雄三男母飛鳥廣繼女延喜十九年正月二十八日任ニ參議ニ云々　やまとのぞう　大和椽なり良殖の弟良基良根なとあり是等のうちをはらからといふなるへし

それもとのめのもとにつくしより女をゐてきてすへたりけりもとの女も心よくかたらひゐたりけりかくて此男はこゝかしこ人の國がちにのみありきければふたりのみなんゐたりける此つくしの女忍ひておさ

こしたりけりそれを人のとかくいひけれはよみたりける

人の國がちに任國に下りて他國のみ有しなるへし

夜半に出て月たに見すはあふ事をしらすがほにもいはましものを

此歌檜垣家集には第二句月に見えずはとあり我密夫せし事を月に見えぬればさもあらすといひのかれんやうもなしとの心なり此歌つくしの女よめるとも又本妻の歌とも兩説なり

となんかゝるわざをすれどもとの女心よき人なれば男にもいはでのみなんありわたりけれどもほかのたよりよりかく男すなりと聞て此おとこおもひたりけれど心にもいれでたゞさるものにておきたりけりさて此男女も人にものいふときゝてその人とわれといつれをかおもふとひけれは女

心にもいれて　密夫ある事をきゝてはじめの心さしのやうにもなきなり

花すゝき君かかたにぞなびくめるおもはぬ山の風はふけども

密夫するなど世にさま〲いひさはがるゝなれどもとかく心は君になひくとなり

となんいひけるよばふ男もありけり世の中心うしなをおとこせじなどいひける物なん此おとこをやう〲おもひやつきけん此男の返事などしてやりて此もとの女のもとに文をなんひきむすびておこせたりけるみればかくかけり

よはふ男檜垣家集には又よはふ男とありつくしの女好色の名あるゆへ又こと男のよばふもある也

世の中心うし　つくしの女の心也我好色なるゆへ本の夫にも疎れたればとかく世の人の心はうき物なりされば此密夫も今は志ふかきやうなれどもたのみかたき事なれば又こと男はせしと也　物なん助辭なるべし此男の返事なをおとこせしといふものゝ懲ず返事などせしとにや

身をうしとおもふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらん

本の夫にうとまれて我身をうしとおもへども猶こりぬ心にて密夫を哀とおもふとなり檜垣家集には第二句おもふ心にとあり

となんこりずまによみたりける

こりずま　懲すなり　古十三 こりずまに又もなき名立は立ぬべし人にくからぬ世にしすまへば

かくて心のへだてもなくて哀なればいとあはれとおもふ程に男は心かはりにければありしごともあらねばかのつくしにおやはらからなどありければいきけるをおとこも心かはりければとゞめてなんやりけるもとの女なんもろともにありならひにければかくていふ事をいとかなしと思ひける

男は心本の夫なり　いきけるを檜垣家集にはいなんといひければと有

山崎にもろともにいきてなん船にのせなどしける男もきたりけり此うはなりこなみひと目ひとよろづの事をいひかたらひてつとめて船にのりぬ今は男もとの女はかへりなんとて車にのりぬこれもかれもいとかなしとおもふほどに船にのり給ひぬる人の文をなんもてきたるかくのみなんありける

山崎に昔は山崎より舟にのりて淀川を下り西國へおもむきしなり　古八 詞書に源のさねかつくしへゆあみんとてまかりける時に山崎にて別おしみける所にてよゝるとあり船にのせかくはあれども爰にて船にのりたるにはあらずされば次の詞に一日一夜かたらひてとありてつとめて船にのりぬとかけりかやうの文體物語にあまた有桐壺更衣病により内より退出の段に忍びてぞ出給ふと書て猶内裡にて帝の別をおしみ歎給ふことなど有て又まかでさせ給ひつと書る類也　うはなり　和名抄云後妻 和名宇波奈利　こなみ　前妻 和名毛止豆女 一云古奈美　神武紀歌に固奈瀰餓那古波とあり是も前妻をいふとぞ船にのり給ひぬる人つくしの女なり

ふたりこし道とも見えぬなみのうへを思ひかけてもかへすめる哉

檜垣家集には第三句波の上に結句かへるめる哉とありふたりこし道とは大和様にいさなはれてこしの海路也今かへるもおなじ波路なれど思ひか時けず獨かへれば悲しき心なり　萬三 大伴卿妻におくれて京へかへる時　妹とこしみぬめの崎をかへるさにひとりしてみれば泪ぐましもとよめる同意なるべし此段の歌夜半に出てとよめるなり　此歌まで四首みな檜垣家集に有此つくしの女は檜垣嫗歟詞もよく彼集に似り

といへりければ男ももとの女もいといたうあはれがりなきけりこき出でいぬればえかへりこともせず車は船の行をみてえいかず舟にのりたる人は車を見るとておもてをさし出てこき行ば遠くなるまゝにかほはいとちくさくなるまで見おこせければいとかなしかりけり

文選別賦舟凝滞於水濱車遷延於山側櫂容與而詎前馬寒鳴而不息云々（向曰凝滞遷延ハ少留ル皃将為水陸之別輸曰櫂ハ船也容與ハ不進皃皆惜別之意云々）土佐日記云かくてこき行まに〱海のほとりにとまれる人も遠く成ぬ船の人も見えず成ぬ岸にもいふ事有へし舟にも思ふ事あれどかひなし云々遊仙窟にて文成十娘に別れんとする時の辭に忽把十娘手子而別行至二三里迴頭看數人猶在舊處立余時漸々去遠聲沉影滅顧瞻不見惻愴而去行到山口浮舟而過云々是等の係なり聽雪集八文集句題百首の中行客舟已遠　見るまゝに漕消て行船の中の心もさそな跡のしら波此段の心をよみ給へるなるべし

故みやす所の御あねおほいこにあたり給へるなんいこらう〱しく歌よみ給ふこともおさうとたち御息所よりもまさりてなんいますかりけりわかき時にめおやうせ給ひにけりまゝはゝのてにいますがりければ心にものゝかなはぬ時もありけりさてよみたまひける

おほいこ藤袴云紫の上の御あねぞかし式部卿の宮の御おほいきみよ云々髭黒の北方をいふなりおほい君とはかしつきていふおほいこの事なり嫡女也らう〱しく上臈しきなり　花宴云あいきやうつきらう〱しき心ばへいとことなり云々

ありはてぬいのちまつまのほどばかりうき事しげくなけかずも哉

古十八　平貞文　うき世には門させりとも見えなくになとか我身の出かてにそするこ有歌の次にいれり歌心明なり古今には結句思はすも哉と有

となんよみ給ふげる梅の花を折て又

かゝる香の秋もかはらすにほひせば春こひしてふなかめせましや

必定春ならて咲匂はぬ梅なればなり

とよみ給へりけるいとよしづきておかしくいますかりければよばふ人もいとおほかりけれどかへり事も

せさりけり女といふものつゐにかくてはて給ふへきにあらず時々はかへりこさし給へとおやもまゝはゝもいひければせめられてかくなんいひやりける
よしづき　ゆへ〳〵しくたゝならぬなり萬葉に風流字よしとよむ
おもへともかひなかるべみしのふれはつれなきともや人の見るらん
歌の心我もおもはぬにはあらねどもふかく世のつゝましければ返事なともせぬを強面（ツレナキ）ものと人は見給ふべしとなりへみはへきなりみときと五音通す伊物に出ていなん限りなるへみとあるに同し
とばかりいひやりて物もくはざりけりかくいひける心ばへはおやなど男あはせんといひけれど一生におとこせでやみなんといふ事をよとゝもにいひけるさいひけるもしるく男もせで廿九にてなんうせ給ひける
よとゝもに世とともになり　後撰十　我のみやもらて消なんよとゝもに思ひもならぬふしのねのこと
むかし在中將のみむすこ在次君といふが女なる人なんありける女は山陰の中納言のみめい（みひあイ）にて五條のごとなんいひけるかの在次君のいもうとの伊勢守の女にていますかりけるかもとにいきて守のめしうとにてありけるをこの女のせうとの在次君はしのひてすむになんありける
在中將　業平なり在原氏の中將なるゆへなり
御むすこ　滋春なり系圖前の出在原の業平の次男ゆへ在次君といふとなん
山陰中納言　系圖云從三位中納言山陰左大臣魚名公末正四位下藤ノ高房男
みめい　御姪也　伊勢守　誰と不知此守の妻に業平の女のなれる有にや　かみのめしうと　いせのかみの妾なりし歟　小蝶云めしうとゝかにくげなるなのりする云々　注云召人なり手かけものなり云々　その女の在次君の密通なり　五條のごの事なり
我のみと思ふに此男のはらからなん又あひたるけしきなりけるさりければ女のもとに
此男滋春なり　兄弟みな前に見ゆ
わすれなんとおもふ心のかなしさはうきもうからぬものにそありける

此女こと男するにつけては我をわすれやしぬらん
と思ふ心の切にかなしければこと心あるうさもさ
のみはおぼえすとの心にやたとひこと心は有とも
我をな忘れ給ひそとの意なるへし此歌新勅十四に
入題しらすとありて第三句悲しきはとあり
となんよみたりける今はみなふることに成にたる事
なり
此在次君在中將のあづまにいきけるけにやあらんこ
のこどもゝ人の國かよひをなん時々しける心あるも
のにて人の國のあはれに心ほそき所々にては歌よみ
てかきつけなとなんしけるおぶさのむまやといふ所
は海邊(うみべ)になんありけるそれによみてかきつけたりけ
る
業平朝臣東國下向の事古今伊物等に見ゆおぶさの
むまや尾總驛歟歌枕名寄未勘國ノ部に尾總の橋あ
りて驛は見えずもし此所にや名寄云或美濃或信
濃玩六かり　そめにみし　はかりなる　はし鷹のおふ
さの橋を戀やわたらん　衣笠内大臣
わたつ海と人や見るらん逢事のなみだをふさになき
つめつれは

逢ことのなみだとは逢事無にいひかけたるなり涙
をふさにとは涙の垂るゝ貌を總に見たてたるなる
べし總は禮ノ檀弓ニ榛以爲レ笄長尺而總八寸云々
總は髮を束ぬるもの布にて作るといへり注云束ニ
其本末ニ而總之餘ル者垂ルニ於髻ノ後ニ其長八寸云々今
絲などにて物を束ねて餘りのたるゝ物を總といふ
其總のごとくなみだの垂るかたちを涙をふさにな
くとよめるなるべし涙を糸に見たてたる事もあれ
ばその類ひにや文選雜擬下云絲涙毀ス金骨ヲ云々
注云下ニ如レ絲之涙ニ而金骨爲レ之傷毀也云々又詠
史詩ニ涕下コト如ニ綆縻ーともあり注に綆縻者繩索也とい
へり長頭とやらんの説とて涙をふさになくとは涙
を久になくといふ事なり五音通なりなどいふ說有
いかゞ侍らんなきつめつればとはなく事の切なる
心なるべし歌の心はとしをへて逢事なき涙のつも
りぬればわたつ海とも人や見んとなりおぶさの驛
海邊のよしなればそのよせもあるなりおぶさの名
をかくしてよめり
又みのわの里といふむまやにて
とみのわのさ

いつはとはわかねとたへて秋の夜ぞ身のわびしさは
しりまさりける
古四いつはとは時はわかねと秋の夜ぞ物おもふ事の
限りなりける是もみのわをかくしてなり
とよみてかきつけたりけりかくて人の國ありき〳〵
てかひの國にいたりてすみける程にやまひしてしぬ
とてよみたりける
かりそめのゆきかひちとぞ思ひしをいまは限りのか
とてなりけり
此歌古今十六に入詞書に云かひの國にあひしりて
侍ける人とふらはんとてまかりける道なかにて俄
にやまひをしていま〳〵となりにければよみて京
にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍
ける歌とあり榮雅抄云かりそめに行てやがてかへ
らむと思ひきたりしかど今は限りの門出にてあり
つるぞとなりゆきかひぢはゆきかよひぢなり然る
を甲斐地とそへてよめり是は滋春甲斐の國に有常
ありしをとふらはんとてくだりける道にてやまひ
をしてよめる歌なりゆきかよひぢをゆきかひちと
よめるまことに業平朝臣の子なりされはにや哀傷
のとぢめに入たるにや云々
とよみてなんしにける此在次君のひと所にぐしてし
りたりける人のみかはの國よりのぼるとて此むまや
ごもにやどりて此歌ともをみて手は見しりたりけれ
ばみつけていとあはれと思ひけり
ひとゝころにぐしてあひともなひしをいふなり古九
北へ行く雁ぞなくなるつれてこし數はたらでぞ歸
るべらなると有歌榮雅抄云是は滋春甲斐國へ女と
くだりけるが男死してのぼるとて歸る雁のなくを
我身におもひあはせてよめる哀なる歌なり云々さ
れば此物語に一所にぐしてしりたりける人みかは
の國よりのぼるとあるは此女にや
亭子のみかど河尻におはしましにけりうかれ女にし
ろといふものありけり
河尻　攝津也榮花殿上の花見に加茂川尻と有此邊
むかし遊女ありしなり住吉物語云川尻を過ればあ
そびものどもあまた船につきて心からうきたる舟
にのりそめてひとひも波にぬれぬ日ぞなきなどう
たひて淀までぞつきにける云々
しろ　古今作者しろめなり　作者部類云大江玉淵

女云々
めしにつかはしけれはまいりてさふらふかんたちめ
殿上人みこたちのあまたさふらひ給ひけれはしもに
とをくさふらふかうはるかにさふらふよし歌つかふ
まつれとおほせられけれはすなはちよみて奉りける
しもにとをく　遥の末座にゐるなり
はまちどりとび行かぎりありければ雲たつ山をあは
とこそ見れ
千鳥といふもの遠くは行ども高く飛事なしされは
とび行限りありければといひて我身の卑賤なる
事を此鳥によそへてよめるなりあはとこそ見れと
ははるかに見るをいふ明石あはと見るあはぢの嶋
のあはれさへのこるくまなくすめる月哉　雲たつ
山とは上達部殿上人など座上にいます高位の公卿
をそへたるへし
とよみたりけれはいとかしこくめで給ふてかつけ物
給ふ
此段大鏡にも見えたり
いのちたに心にかなふものならば何か別のかなし
からまし

古今八　詞書云源の實かつくしへゆあみんとてまかりけ
るときに山崎にてわかれおしみける所にてよめる
云々棠雅抄云いのちのあるによりて別の悲しきな
り云々堯恵法印云たかひに長命にして心のまゝな
る世間ならはたとへ一旦わかるゝとも終には逢へ
きあいたかなしむへからす此南贍浮州は不定世界
にて朝より夕をまたぬことはりなれはなかき別に
もやなり侍らんと悲しめるなり云々両説なり　詞六
月頃人のもとにやどりけるか歸りける日あるしに
逢てよめる玄範法師又こんと誰にもえこそいひお
かね心にかなう命ならねは引合せて見るへし
といふ歌も此しろかよみたる歌なりけり
亭子のみかど鳥かひの院におはしましにけりれいの
ごとみあそびあり此わたりのうかれめどもあまたま
いりてさふらふなかに聲おもしろくよしあるものは
侍りやとゝはせ給ふにうかれめばらのまうすやう大
江のたまふちがむすめといふものなんめつらしうま
いりて侍ると申けれは見させ給ふにさまかたちもき
よげなりけれはあはれがり給てうへにめしあげたま
ふ

島養　津の國也　昔は牧ありし所なり
大江玉淵　系圖云阿保親王の末文章博士參議從三位音人（號江相公）の男なり（後撰十五）大江玉淵朝臣女をんなともだちのもとにつくしよりさしくしを心ざすとてよめる歌いれり此段の女同人か又別段に出るしろも作者部類には大江玉淵女とありしからば此段の遊女も又同人なるへきを物語の書さまおなし女とも見えす猶追て考ふへし遊女となりしは此女落䰟せし事ありしなるへし

そも〳〵まことかなどとはせ給ふにとりかひといふ題を「人々に（イになし）よませ給ひにけりおほせ給ふやうたまふちはいさらうありて歌なとよくよみき此とりかひといふ題を」よくつかうまつりたらんにしたかひてまことの事はおもほさんとおほせ給ひけりうけ給はりてすなはち

そも〳〵　抑反語辭又亦然之辭又發語辭といへり
いさらうありて　勞也　玉淵系圖云從四位下少納言云々參議朝綱父なり玉淵か女ならば歌もよくよまんとの勅なり

あさみどりかひある春にあひぬればかすみならねどたちのぼりけり

あさみどりは春の色なり春を青陽とも青春ともいへばかくつゞくるなりさてとりかひをよみ入たり
大鏡にはふかみどりかひある春にあふ時はとあり

とよむ時にみかどのゝしり哀がり給ふて御しほたれ給ふ人々もよくゑひたるほどにてゑひなきいとになくすみかど御うちき一かさねはかま給ふありとあるかんたちめみこたち四位五位これにものぬぎてとらせざらんものは座よりたちねとの給ふければかたはしよりかみしもみなかづけたればかつきあまりてふたまばかりつみてぞおきたりける

御しほたれたまふ　哭（ナク）をしほたるゝといふ延喜式齋宮忌詞に見えたり　須磨しほたるゝ事をやくにて松島にとしふるあまもなげきをそつむ寂感の餘り御落涙也　かづきあまりてふたまばかりつみて　座敷二間ほどゝいふ意か祿物の夥しきを云

かくてかへり給ふとて南院の七郎君といふ人ありけりそれなん此うかれめのすむあたりに家つくりてすむときこしめしてそれになんの給ひあづけゝるかれか申さん事院にそうせよ院より給はせんものもかの

七郎君がりつかはさんすべてかれにわびしきめな見せそと仰られければつねにとふらひかへりみける

かくてかへり　鳥養より還御なり南院七郎君　紹運錄に是忠親王〔光孝第一皇子號二南院一〕男あまたみゆ參議從四位下源淸平弟七郎にあたり給へり是をいふかがりはもとへといふ事なり若葉云小侍從がり例の文やり給ふ云々

むかし津の國にすむ女ありけりそれをよばふ男ふたりなんありけるひとりはその國にすむ男姓はむばらになん有けるいまひとりはいづみの國の人になん有ける姓はちぬとなんいひける

姓はむばら　津の國菟原郡有地名を姓とする歟姓はちぬ是も地名をよぶなるへし同し津の國に珍といふ所あり萬十一珍海の濱邊の小松根ふかめてとよめり血沼とも陳努ともかくなり萬葉第九云

過二葦屋處女墓一時作歌一首并短歌

田邊福麻呂

古之益荒丁子各競妻問爲祁牟葦屋乃菟名日處女乃奥城矣吾立見者永世乃語爾爲乍後人偲爾世武等玉鉾乃道邊近磐構作冢矣天雲乃退乃限此道矣去人毎行因射立嘆日惑人者啼爾毛哭乍語嗣偲繼來處女等賀奥城所吾并見者悲喪古思者

反歌

古乃小竹田丁子乃妻問石會處女乃奥城叙此

語繼可良仁母幾許戀布奐直目爾見兼古丁子

又同集同卷に

見二菟原處女墓一歌一首并短歌

高橋連蟲麻呂

葦屋之菟名負處女之八年兒之片生乃時從小放爾髪多久麻氐爾並居家爾毛不所見虚木綿乃牢而座者見而師香跡悒憤時之垣廬成人之誂時智奴壯士宇奈比壯士乃廬八燎須酒師競相結婚爲家類時者燒太刀乃手頴押禰利白檀弓靭取負而入水火爾毛將入跡立向競時爾吾妹子之母爾語久倭文手纏賤吾之故大夫之荒爭見者雖生應合有哉完串呂黄泉爾將待跡隱沼乃下延置而打歎妹之去者血沼壯士其夜夢見取次寸追去祁禮婆後有菟原壯士伊仰天叫於良妣地牙喫建怒而如己男爾負而者不有跡懸佩之小劔取佩冬敍蕷都良尋去祁禮婆親族共射歸集永代爾標將爲跡遐代爾語將繼常處女墓中爾造置壯士墓此方彼方二造置有

故縁聞而雖不知新喪之如毛哭泣鶴鴨

反歌

葦屋之宇奈比處女之奥槨乎往來跡見者哭耳之所
泣　墓上之木枝靡有如聞陳努壯士爾之依倍家良
信母　引合てみるへし

かくてその男ごもとしよはひかほかたち人の程たゞ
おなじばかり（ほとに歌林良材）なん有ける心ざしのまさらんにこそは
あはめと思ふに心ざしのほとたゞおなしやうなりく
るればもろともにきあひぬものをこすればたゞおな
じやうにおこすいづれまされりといふべくもあらず
女思ひわつらひぬ此人の心ざしのおろかならばいつ
れにもあふましけれどこれもかれも月日をへて家の
門にたちてよろつに心さしを見えければしはびぬ

家の門にたちて　萬十一　思ふにし餘りにしかはすへ
をなみ出てそ行しその門を見になごよめる類ひ也
しわびぬ　しかたもなき心なり

これよりもかれよりもおなしやうにおこするものご
もとりもいれねといろ〳〵にもちて立りおやありて
かくみぐるしく年月をへて人のなげきをいたつらに
おもふもいとおしひとり〳〵にあひなばいまひとり
か思ひはたえなんといふに

人のなけきをいたつらにおもふも　九詞　あしかれと
おもはぬ山の峯にたにおふなるものを人のなけき
は六條家本には人のなけきをもいたづきをもおも
ふにおしこ有こそ　ひとり〳〵　歌林良材にはひ
とりにあひなばとかき給へり

女こゝにもさ思ふに人の心ざしのおなじやうなるに
なんおもひわつらひぬるさらばいかゞすべきといふ
にそのかみ生田川のつらにひらばりをうちてゐにけ
りかゝれはそのよばひ人ごもをよびにやりておやの
いふやう御心さしのおなじやうなれば此をさなきも
のなんおもひわづらひにて侍るけふいかにまれ此事
をさためてん

そのかみ　その時といふに同し前に出　つらにひ
らはりを　歌林良材には女ひらはりをと有帟和名
抄云平張曰帟（羊益反和名比良波利）御幸云上達部のひらばり
に物まいり云々川つらは川の面なり又邊といふ心
なりいかにまれいかにもあれなり

あるはとをき所よりいまする人有あるはこゝなから
そのそのいたづきかぎりなしこれもかれもいとおし

きわざなりといふ
遠き所よりいまする人和泉の血沼男なるへしこゝなから津の國の男をさすいつれも〳〵その勢限りなしとなりいたづき袖中抄云煩なり煩は惱苦なり云々

時にいさかしこくよろこびあへり
かしこく　畏なりかしこまり悦ふなり二人の壯子のなり

申さんとおもひ給ふるやうは此川にうきて侍る水鳥をゐ給へそれをゐむて給へらん人に奉らんといふ時にいとよき事なりといひてゐるほどにひとりはかしらのかたをゐつゝいまひとりはおのかたをゐつそのかみいつれといふへくもあらぬに女おもひわづらひて
申さんと思ひ給ふる　兩人の壯士へ女の親のいふ詞なり

すみわひぬ我身なけてん津の國のいくたの川も名のみなりけり
いくたといふを身の生ながらふるにそへてよめり我今かく身を投むなしくなれば生るといふも名のみなりとよめるなり哀ふかし

とよみて此ひらはりは川にのそみてしたりければつふりとおちいりぬおやあはてさわぎのゝしるほどに此よばふ男ふたりやかて同しところにおちいりぬひとりはあしをとらへいまひとりは手をとらへてしにけり
ひとりはあしをとらへ歌林良材には女のあしをとらへとあり兩人を思ふ戀と題をえて寂蓮　津の國のいくたの川に鳥もゐば身をうらむとやおもひなりけん　阿佛口傳に見えたり　又千十二　こひわひぬちぬのますらをならなくに生田のかはに身をやなけまし兩首ともこの段の心にてよめるなり浮舟云とてもかくてもひとかた〳〵につけていとうたてある事はいてきなん我身ひとつのなくなりなんのみこそめやすからめ昔はけそうする人の有さまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ身をなぐるためしもありけれなからへばかならずうき事見えぬへき身のなくならんは何かおしかるべき云々浮舟の君匂宮と薫大將とふたかたの心さしに思ひわづらひて宇治川へ入水せんとおもへる段なり此生田川の故事を思ひて書りとぞ

そのかみおやいみしくさはぎてとりあけてなきのゝしりてはふりす男とものおやもきにけり
歌材良材には男共のおやも聞傳へてきにけりとあり　はふりす　葬送なり
此女のつかのかたはらに又つかどもつくりてほりうつむ時に津の國の男のおやいふやうおなじ國の男をこそおなし所にはせめこと國の人のいかてか(イになし)此國のつちをはおかすべきといひてさまたぐる時にいづみのかたのおやいづみの國のつちを船にはこびてこゝにもてきてなんつゐにうづみてけるされば女のはかをはなかにて左右(サウ)になん男のつかどもいまもあなる
前に記　萬葉歌引合てみるべし　こと國和泉國なり津の國よりいふ詞なり
かゝる事とものむかし有けるをゑにみなかきて故きさいの宮に人の奉りければこれがうへをみな人々此人にかはりてよみける
故きさいの宮　温子號二七條后一寛平后基經公女
伊勢のみやすところ
伊勢〃寛平祚(ソ)にましく〵ける時なれつかふまつりて行明親王をうみ奉りけるゆへ御息所と稱するとぞ温子の女房なり異本に伊勢の御息所男の心にてとあり
かげとのみ水のしたにてあひ見れど玉なきからはかひなかりけり
上句かげの如くにあひそふ心なりされとも魂なきからはかひもなしとなり
女になりて　女一宮
女になりてとはうなひおとめが身に成てよみ給ふなり　女一宮均子内親王　系圖云寛平第一皇女御母同二天皇一云々胤子内大臣高藤公女
或說に寛平第五の宮なれと依二后腹一號二女一宮一といへり
かぎりなくふかくしづめるわかたまはうきたる人に見えんものかは
限りなくふかくしつめるとは身投しをいふ沈むとあるよりしてうきたる人にと對してよみたまふなり
うきたる人　無實の人をいふなるへし
又みや
これも女一宮にや

いつこにかたまをもとめむわたつ海のこゝかしこと
もおもほえなくに

此歌全　長恨歌の心にてよみ給へり
臨卭道士楊貴妃か魂魄をもとむるに両處茫々皆不レ見忽聞海上有ニ神仙一山在ニ虚無縹緲間一なと長恨歌にありされば道士は仙術をもて太眞か魂魄に尋ね逢たり此うなひおとめか魂はわたつ海のこゝかしこをも知よしなければいつくにかもとむへきと處女かうせしをあはれみしたひ給ふ心なるべし
此女生田川に身投しとあるに海とよませ給ふ事不審といふ説有此おとめが身なけし所を又海ともよめる歌あり萬十九五月六日追和ニ處女墓一歌

大伴家持

にほひにてれる　惜き身の　さかりなるすら　ますらおの　ことゐたはしみ　父母に　まうしわかれて　離家　海邊に出たち　朝夕に　みちくる潮の　八隔なみに　なびく珠藻の　つかのまも　おしき命を露霜の　過ましにけれ　おきつきを　こゝに定めて　後の世の　聞つく人も　いやとをにしのびにせよと上下略　又玉九いくたの海に身投ける女のけさう人の二人なから同くしづみたる事を人々歌によめるに辨乳母一おくれてはいくたの海のかひもなししつむみくつともになりなん此等の歌ともを見れば川にはあらず海に身なけしなり袖中抄にもすみわひぬ我身なけてんの歌も下句いくたの海はと書りされはわたつ海とよみ給はん事難なかるへし又此川は海にまちかくつゞきたればかくもいふべきにや殊に此歌は繪に寫せしをよませ給ふなればその畫の模様もいかゞ有けん海につゞきたる所川も海も一面にかきなしたらんにはかくよみ給ふもその理り侍る歟又海川池なとは同類のものゆへ通はしてよむといふ事も有也
萬三長皇子遊ニ獵路池一時作歌　柿本朝臣人麿
皇者神爾之坐者眞木之立荒山中爾海成可聞　獵路池山中にあればあら山中に海をなすと池を海にかよはしてよめるなりされば此女宮も是等の例にて川を海にかよはしてよみ給ふとも見るへきにや然るをわたつ海とよみ給ふは川海の差別もなく讀誤り給ふやうにいへる説も侍る歟おぼつかなし

兵衛の命婦

是も温子の女房ならん
つかのまもろともにとぞ契りける逢とは人に見えぬものから
つかのま暫しの間なり塚にそへたり塚の中の契なればよ所には見えぬ心なり
いと所の別當
絲所拾芥云在釆女町北献藥玉之時依レ請給ニ新物等ー縫殿別所也云々　典侍(ナイシノスケ)治子(アマテイコ)朝臣(ノ)
古今作者　作者部類云參議章綱ノ女云々
かちまけもなくてやはてん君によりおもひくらぶの山はこゆとも
二人の壮士の志勝劣なき心也　暗部山　山城なり
暗(クラ)き心によむ時はくらふのふ文字すみてよむ一古梅の花匂ふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくぞありける又此歌の心にてくらぶる心によむ時はふ文字濁てよむなり金八我をばかれ〳〵に成てこと人のもとへまかると聞てつかはしける「ことはりや思ひくらぶの山さくらにほひまされる花をめつるも　是は競(クラフ)る心にて此歌の類なり
いきたりしおりの女になりて
入水せぬさきの女の心になりてよむなり

逢事のかたみにうふるなよ竹のたちわつらふと聞ぞかなしき
古今榮雅抄云なよ竹はなよやかに打なびきたる竹なりにが竹の細くよなかきなとなり云々
なよ〳〵としてこなたかなたなびきやすきものゆへ立わづらふといわん爲におくなり
逢事のかたみは逢事難(カタキ)にいひかけたりさて筐(カタミ)をそへたるべし筐は竹にて作るゆへなり
うふるは植るにや伊物に　わすれ草うふとたにきくものならはともよめり　歌の心はまへの詞にいづれまされりといふべくもあらず女思ひわつらひぬなとある心なり女存生の時の事なり此歌も作者治子歟
又ひと
身をなけてあはれと人に契らねどうき身は水にかけをならへつ
歌心明なり　作者不知　以下三首も同斷
いまひとりの男になりて
おなしえにすむは嬉しき中なれとなど我とのみ契らさりけん

江に縁をそへたり女の心をわけん事を歎く男の心なり

返しをんな

女になりて返歌する心にや

うかりける我みなそこを大かたはかゝる契りのなからましかは

二人の男に思ひかけられて左右におもひわづらふはうき契なるをおなしえにすむはうれしきなとうけ給はるは心得ず大かたはかやうの契はなきこそましならめとの心なり　我みなそこは我身にいひかけたり結句はいひのこせるてにをはなりかゝる契はなきかたこそましならめとなり

又ひとりの男になりて

又一人の男になりてなど我とのみ契らざりけんと前によめる男の歌の返しをよむなり

我とのみ契らずなからおなしえにすむはうれしきみきはとぞ思ふ

なと我とのみ契らざりけんといふにこたへて我はかりにはあらずともおなしえにすむは嬉しきとの心なり嬉しきみきはとは身にそへてなり前の水底とよめるに同じ

さて此男はくれ竹のよふかきをきりてかきりてかりきぬはかまゑぼしおびなどを入てゆみやなくひたちなとを入てぞうつみける

くれ竹のよふかきをきりてかきりて此詞歌林良材に見えず良材云さて獨の男のおやかれかきたりける狩衣云々よふかきをきりてかきりて　袖中抄にはくれ竹のよながきをきりてとあり或云墓を築く所に竹垣などせしをいふにや云々　和名抄云箙（音服和名夜奈久比）盛矢器也唐令用胡簶二字唐韻云箶箙（胡鹿二音）箶室也云々

いまひとりはおろかなるおやにて有けんさもせずぞありけりかのつかの名をばおとめづかとぞいひける

をとめつか　土人求塚といふ太平記にも求塚とかけり　袖中抄云もとめつかおまへにかゝるしは船の北けになれやよるかたもなし

俊頼歌は物語によれりをとめをもとめといふ歟おとめとおなしひゝきなり云々按に俊頼朝臣ノ歌は堀河院初度の百首海路の題にてよめる歌なりかくよめるためしもあればもとめ塚といふも誤とはい

ひかたしをも五音通す此塚はと生田川よりは東東明村といふ人家の邊に在

ある旅人この塚のもとにやどりたりけるに人のいさかひするおとのしけれはあやしと思ひてみせけれどさることもなしといひけれはあやしと思ふ〳〵ねふりたるにちにまみれたる男まへにきてひさにづきて我かたきにせめられてわびにて侍り御はかししばしかしたまはらんねたきもの丶むくひし侍らんといふにおそろしと思へどかしてけり

東屋云かたみにうちいさかひて云々　槇木杜云いかなるむかしのあたかたきにかおはしけん云々わびにて侍り袖中抄歌林良材ともにわびしく侍りと有　御はかし太刀をいふ　ねたき　嫉なり

さめて夢にやあらんとおもへどたちはまことにとらせてやりてげりとばかりきけばいみしうさきのごといさかふなりしはしありてはじめのおとこきていみしうよろこびて御とくにとし頃ねたきものうちころし侍りぬいまよりはながき御まもりとなり侍るべきとて此事のはじめよりかたるいとむくつけしと思へどめつらしき事なればとひきくほどに夜も明にければ人もなしあしたにみれはつかのもとにちなどなかれたりけるたちにもちつきてなんありけるいとうとましくおほゆることなれと人のいひけるまゝなり

御とく　御德なり　むくつけし　おそろしきなり

歌林良材にはたちにもちつきてなん有けるといひつたへたりと書留給へり本の異なるにや

大和物語虚靜抄下巻之二

つの國難波わたりに家してすむ人ありけりあひしりて年ごろありけりをんなもおとこもいとけすにはあらさりけれどとしごろわたらひなどもいとわろくなりて家もこぼれつかふ人なともとくある所にいきつゝたゞふたりすみわたる程にさすがにけすにもあらねば人にやとはれつかはれもせず

あひしりて　夫婦あひしりて也　わたらひ渡世也

次第に零落の體なり蓬生云すこしもさて有ぬべき人々はをのづからまいりつきて有しをみなつき〳〵にしたかひていきちりぬ女ばらのいのちたへぬもありて月日にしたかひてかみしもの人かずすくなくなりゆく云々　是等の面影なり

いとわびしかりけるまゝに思ひわびてふたりいひけるやう猶いとかうわびしうてはえあらじ男はかくはかなくていますかめるを見すてゝはいづち〳〵えいくまじ女も男をすてゝはいつちかいかむとのみいひわたりけるをおとこおのれはとてもかくてもへなん女のかくわかきほどにかくてありなんいといとおしき京にのほりてみやつかへをもせよよろしきやうにもならは我をもとふらへをのれも人のごともならばかならすたつねとふらはんなどなく〳〵いひちぎりてたよりの人にいひつきて女は京にきにけり

みやつかへ　官の字みやつかへとよむ奉公する事なり　人のことも　人の如なり　人なみにもならはといふ意なり　伊物云むかしきのありつねといふ人ありみよのみかとにつかふまつりて時にあひけれどのちはよかはり時うつりにければよのつねの人のごともあらす人がらは心うつくしうあてなることをこのみてこと人にもにずまづしくへてもなをむかしよかりし時の心ならひによのつねの事もしらずとし頃あひなれたる女よう〳〵とこはなれてつゐに尼に成てあねの先たちてなりたる所へ行云々此段に似たり

さしはへいつこともなくてきたれば此つきてこし人のもとにゐていとあはれとおもひやりけりまへに葦すゝきいとおほかる所になんありける風など吹けるにかのつの國を思ひやりていかゝあらんなとかなしくてよみける

さしはへは心なし只さしてといふまてなりつきてこし人たよりの人にいひつきてとまへにあるその人のもとにまつおちつきたるなり

ひとりしていかにせましとわひつれはそよともまへの荻ぞこたふる

すみなれし難波を出しる人もなき所にひとりきてこはいかにせましなとなげゝご誰ありて哀をかくる人もなしたゞ前栽の荻の葉風のそよ〳〵と答ることく音するはかりなりとよめる尤あはれふかし荻ぞといふぞ文字心をつけて味ふへしさらしなの日記云「笛の音のたゞ秋風と聞ゆるになど荻のはのそよとこたへぬといひたれはげにとて

荻の葉のこたふるばかり吹きよらでたゞに過ぬる笛の音ぞうき　續古十七　秋風の軒端の荻のこたへすは獨やせまし昔かたりをと家隆卿のよみ給へるも此歌より思ひより給ふにや

となんひとりごちける

○ひとりこち　獨言なり　ち　と　音通す

さてかう女さすらへてある人のやむごとなき所にみやたてたりさへ（てイ）宮つかへしありくほどにさうぞくきよげにしむつかしき事なともなくてありけれはいときよげにかほかたちも成にけりかゝれどかのつの國をかた時も忘れすいとあはれとおもひやりけりたよりの人にふみ○（をイ）つけてやりたりけれはさいふ人もきこえずなどいとはかなくいひつゝきけり我むつましうしれる人もなかりけれは心ともえやらすいとおぼつかなくいかゝあらんとのみおもひやりける

さすらへてとかくさまよひしなり　新古十　さすらふる我身にしあれはきさかたや蜑の苫屋にあまたゝひねぬ　やむことなき　桐壺云いとやむことなきにはあらぬか云々花鳥云きはめて上臈の品をいふ云々みやたてたりみやつかへに出したてたるなりさへそれへなり　むつかしき　夕顏云むつかしげなるおほちのさま云々むさ〳〵としたるを云　文つけて　文をことづくるを云也　さいふ人　かの夫の事なるべし心ともえやらず奉公の分際なれば我とつかひをしたる程のこともえせざりしなりおもひやり此心毎度見ゆる此女二夫にまみえしは惡むへけれと憂につけ喜につけ難波の夫をかた時も不忘志の程あらはれて殊勝にこそ

かゝるほどに此みやつかへするところの北のかたうせ給ふてこれかれある人をめしつかひ給ひなどするなかに此人をおもひ給ひけりおもひつきて女に成にけり思ふ事もなくめでたげにてゐたるにたゞ人しれず思ふ事ひとつなんありけるいかにしてあらんあしうてやあらんよくてやあらん我あり所もえしらざらん人をやりて尋ねさせんとすれどうたて我男きゝてうたてあるさまにもこそあれとねんじつゝありわたるに猶いとあはれにおぼゆれば男にいひけるやうつの國といふ所のいとおかしげなるにいかてなにはにはらへしがてらまかからんといひければ

人しれず思ふ事　難波の夫なるべし　あしうてやあらん伊物云よくてやあらんあしくてやあらんいにし所もしらず云々　是も津國の夫を思ふ心也　我おとこきゝて　今の男を云　ねんじつゝ　堪忍する心也　難波にはらへ　みをつくし云難波の御はらへなどことに七瀬によそをしうつかふまつる云々稱名院殿御説云祓は難波か本なり花鳥云代始に八十嶋祭は難波にてあり典侍の人御衣をもちて參向して解除する事あり是みな難波祓の例なり或云近所七瀬とは加茂桂などなり遠所七瀬は難波辛崎なり云々榮花殿上花見云なにはといふ所にて御はらへあり云々祓は除レ惡祭なり唐韻ニ云除レ災求レ福也文選李善注云風俗通曰周禮ニ女巫掌ニ歳時祓ニ除疾病ニ禊潔也云々

いとよきこと我ももろともにといひければそこにはなものし給ひそをのれひとりまからんといひていでたちていにけり

いとよき事今の男の詞我もともに難波へ行むといふなり　そこ　足下なりそなたといふに同じ女おもふ所あるゆへ我ばかり行むといふなり

なにはにはらへしてかへりなんとする時にこのわたりに見るべき事なんあるとていますこしとやれかくやれといひて此車をやらせつゝ家のありしあたりを見るに屋もなし人もなしいづかたへいにけんとかなしうおもひけりかゝる心ばへにてふりはへきたれど我むつましきずさもなしかゝれはたつねさすべきかたもなし

かゝる心はへもとの夫に逢ん心にてなりふりはへ若紫云ふりはへさせ給へるにきこえさせんかたな

くなん云々わざといふ心なり　ずさ　従者なり
いとあはれなれば車をたてゝながむるにともの人は
日くれぬべしとて御車うながしてんといふにしはし
といふほどにあしになひたる男のかたいのやうなる
すがたなる此車のまへよりいきけりこれかかほを見
るにその人といふべくもあらずいみじきさまなれど
我男ににたりこれを見てよく見まほしさにこのあか（るイ）
しもちたる男よばせよか（イになし）のあしかはんといはせけり
さりければようなきものかひ給ふとは思ひけれどし
うのゝ給ふ事なればよびてかはす車のもとちかくに
なひよせさせよみんなどいひて此男（おとこのかほをイ）をよくみるにそ
れなりけり
　御車うながし　促なり催したつる心なりかたい伊
物云かたいおきな云々宇治拾遺云心なしのかたい
云々和名抄云乞児（カタイ）（和名加多非）云々乞食の類なり又癩病
やむ者をもかたいといひならはせりすべてみぐる
しききたなき人を云なるべし　ようなきもの　無
用物也　それなりけり　こゝにて昔のおとこと見
　きわめたるなり
いとあはれにかゝるものあきなひて世にふる人いか
ならんといひてなきければとものの人はなを大かたの
世を哀がるとなんおもひける
　かゝるものあきなひて　蘆を苅商ひて世をわたる
　たつぎとせしなり唐にては蘆を刈ものを蘆人とい
　ふなり文選江賦に蘆人漁子とあり猶大かたの世を
　供の人は女の心中をしらぬ故なり
かくて此あしのおとこにものなとくはせよものいと
おほくあしのあたいにとらせよといひければすゞろ
なるものに何か物おほくたまはんなどある人いひけ
ればしゐてもえいひにくゝていかでものをとらせん
と思ふあいだにしたすたれのはざまのあきたるより
此おとこまもれば我女に似たりあやしさに心をおさ
めてみるにかほもこゑもそれなりけりとおもふに
　すゝろ　蔡云すゞろなる車のごうに云々注云心に
　もあらぬやうの心なり云々下すだれ翠簾をいふに
　あらず几帳のかたひらの如き物なり簾の下にすそ
　ごのきぬなどをかくるをいふとぞ枕草紙云下すだ
　れもかけぬ車のすだれをいとたかくあげたるはお
　くまでさし入月に薄色紅梅白きなど七八はかりき
　たるうへにこきゝぬのいとあさやかなるつやなど

月にはへておかしうみゆる
おもひあはせて我さまのいといらなく成にけるをおもひはかるにいとはしたなくてあしもうちすて丶はしりにげにけりしばしといはせけれど人の家ににげ入てかまのしりへにか丶まりおりけり
いらなく　此詞源氏一部のうちに見えず手習云たのもしういかきさまを人に見せんと思ひて云々注云いかきは威摧威勢也いか／＼しくたけき心也云々威勢ふりてこと／＼敷儀歟こ丶にても其心にて無二威等一と可レ見にや我身無二威勢一零落せるを云ならん又宇治拾遺に大きなる猿のたけ七八尺はかりなるかほとしりとはあかくしてむしりわたをきたるやうにいらなくしろきが毛はおひあかりたるさまにてとありこ丶にてはいみしうなといふ心にや
はしたなく　桐壺云いとはしたなき事おほかれと云々よはきものにつよくあたるやうの心なりと注せりとかく似あはしからぬ心と見ゆ　伊物云いとはしたなくてありけれは云々闕疑抄云此古郷のあれたる所にきやしや風流なる女のあるは似合はさるやうにいふなり云々かまのしりへ竈の後にや

この車より将此おとこたつねゐてこといひけれはこもの人てをあかちてもとめさはげり人そこなる家になん侍るといへは此おとこにかくおはせことありてめすなり何のうちひかせたまふべきにもあらず物をこそ給はせんとすれおきなきものなりといふ時にすゞりをこひてふみをかくそれに
ゐてこ　ひきゐて來なり　あかちて　分ちてなり　人そこなる家に男のかくれゐる所をある人の供人におしへしなり　何のうちひかせ　むりにひきとらへなどし給ふ事にはあらずとなり　をさなきもの　初心ものなどいふにおなし若葉上云心のうちぞをさなかりける云々
きみなくてあしかりけりと思ふにもいとゞなにはのうらぞすみうき
悪かりけり　葦を刈にそへてよめり
後拾十六　是もさはあしかりけりなつの國のこやとつくるはしめ成らん　拾遺　難波にはらへしにある女まかりたりけるにしたしく侍りける男の葦を刈てあやしきやうに成てみちに逢て侍りけるにさりげなくてとし頃あはざりつる事などいひつかはしたり

けれは男のよみ侍りけると有て此歌入たり返しあ
しからしよからんとてぞわかれけん何かなにはの
浦はすみうき
とかきてふんじて是を御車に奉れといゝけれはあや
しと思ひてもてきて奉るあけてみるにかなしきこと
ものに似ずよゝとそなきけるさてかへしはいかゞし
たりけんしらず車にきたりけるきぬぬぎてつゝみて
文などかきぐしてやりけるさてなんかへりけるのち
はいかゝなりにけんしらず
ふんして封してなり　返しはいかゞ拾遺に返歌あ
り前に記
あしからしとてこそ人のわかれけめ何かなにわのう
らはすみうき
此歌此物語には返歌とはなくて此所に出せりゆへ
も有歟拾遺にのする所上句少し異なり　後撰九　浦わ
かすみるめかるてふ蜑の身は何かなにはのかたへ
しも行
むかしやまとの國かつらきのこほりにすむおとこ女
ありけり此女かほかたちいときよらなりとし頃思ひ
かはしてすむに此女いとわろくなりにけれはおもひ
わつらひてかきりなく思ひながら女をまうけてけり
此いまの女はとみたる女になんありけることにおも
はねといけはいみしういたはり身のさうそくもいと
きよらにせさせけりかくにぎはゝしき所にならひて
きたれは此女いとわろげにてゐてかくほかにありけ
とさらにねたげにも見えすなとあれはいとあはれと
思ひけり心ちにもかぎりなくねたく心うくおもふを
忍ふるになんありける
此女いとわろく　今の女は富たるといふに對すれ
ば貧きをいふ歟まつしけれはおのつから容もよか
らす見えしなるべしこゝにおもはねど今の女を格
別におもふとはなけれともとなり
心うく思ふを女の心にはふかく嫉しと思へとも色
にも出さす堪忍するなりうらみいふべき事をも忍
ひてうへはつれなくみさほつくりてとはゝきゝの
巻にいへる類ひなるべし
とゞまりなんと思ふ夜もなをいねといひければわか
かくありきするをねたまでことわざするにやあらん
さるわさせすはうらむる事もありなんと心のうち
に思ひけり

なをいねごいひけれは　若菜云とみにもえわたり給はぬをいさかたはらいたきわざかなとそ丶のかしきこえたまへはなよ丶かにおかしきほとにえならすにほひてわたり給ふを見出し給ふもいとたゞにはあらすかし云々源氏君女三のかたへおはしかねたるを紫上そ丶のかし給ふゆへ彼宮へわたり給ふ段の詞なりおもかけかよへるにやことわさするにや又異男をも通すかと疑へるなり拾遺十五題しらす讀人不知うらみぬもおほつかなくそおもほゆるたのむ心のなきかと思へはとあるおなし心なり

さて出て行と見えてせんざいのなかにかくれておとこやくると見ればはしに出ゐて月のいといみしうおもしろきにかしらかひけづりなとしてなかめければ人まつなめりと見るにつかふ人のまへなりけるにいひける

かしらかひけつり　梳髪なり

風ふけは沖つしら波たつた山夜半にや君かひとりこゆらん

闕疑抄云此歌は序歌なり　顯注密勘に注する所立田山といはんとて興津白波といひ沖津白波といはんために風吹かはとおくなり萬三わたつ海の沖つしらなみたつた山いつかこえつ丶妹かあたりみんと有定家卿此今案可ㇾ興可ㇾ御此五文字敷島のやまとにはあらぬから衣のたくひなりといへり此歌ころもへずしてあふよしも哉といはん爲上はいひたるものなり又白波は盗人の事なり立田山に盗人あるをいふといへり盗人を白波といふは莊子よりおこれり緑林白浪といへり此歌は盗人の事とは見えす然は詞に見たるか面白となり定家卿もさやうに見るを感せられたり　歌の心は風波はけしき時に立田山を越て艱難をへて君か獨行ことよといふ心なり夜はといふはたゝ夜の事なり爰は夜半と半の字なり云々伊物或抄云此歌にとりては風吹はとおける此山中のかんなんのさまになりて枕詞なから用に立て面白云々六百番歌合夜戀寂蓮

忘らる丶身をは思はてたつた山心にか丶る沖津白波とよめるも此歌より出たり又立田山に盗人をよめるは拾遺九廉義公家のかみゑに旅人のぬす人にあひたるかたかける所藤原爲頼ぬす人のたつたの山に入にけりおなしかさしの名にやけかれん

簸河上辨ノ入道作云白波といふは盗人の名なりさるもの
ゝ立田山をおそろしく獨こゆらんとおほつかなさ
によめる歌なりとしるせり
此歌を新撰髓腦にも貫之か歌の本とすへしといひ
けるとなりとのせたればあふきて信をとるへきに
や云々
とよみければ我うへをおもふなりけりと思ふにいと
かなしうなりぬこの今の女の家はたつた山こえてい
く道になんありける
此今の女の家　河内國高安のこほりと伊物にはあ
り
かくてなを見をりければ此女うちなきてふしてかな
まりに水をいれてむねになんすへたりけるあやしい
かにするにかあらんとてなを見るとれば此水あつゆ
にたぎりぬれは湯ふてつまた水をいる見るにいとか
なしくてはしりいてゝいかなる心ちし給へはかくは
し給ふぞといひてかきいたきてなんねにけるかくて
ほかへもさらにいかでつとゐにけりかくて月日おほ
くへておもひやるやうつれなきかほなれど女のおも
ふ事いといみしき事なりけるをかくいかぬをいかに
おもふらんとおもひいでゝありし女のがりいきたり
けり
かなまり　和名抄云金椀　日本靈異記云其器皆鋺
俗云賀奈萬利今按鋺ノ字出未ノ詳古語謂ノ椀爲ニ萬利ト宜ノ用ニ金椀ノ二字ヲ也　宇治拾遺三條中納言
水飯まいる段云大きなるかなまりをぐしたりみな
御臺にすへたり云々
飯食のもの入ると見えたりあつゆにたぎり文選思
玄賦云心灼藥其若レ湯衛曰灼熱貌
ゆふてつ　ゆすてつなり　ふす五音通す
女のおもふ事いといみしき事なり此女かくふかき
心あるにつけて河内の女もいかゞあらんと思ひや
りて高安の女のがり行しなり
ひさしくいかざりつればつゝましくてたてりけりさ
てかいまめばわれにはよくて見えしかといとあやし
きさまなるきぬをきておほぐしをつらぐしにさしか
けてをりてづからいゐもりせりけるいといみしと思
ひて来にけるまゝにいかずなりにけり此男はおほき
みなりけり
かいまみは　垣間見なり物のひまより見るなり

伊物云此男かいまみてけり云々　おほくしをつらくし末摘云さすがにくしをしたれてさしたるひたひつき云々三光院殿御説に陪膳に候する人櫛をさす事本義なり云々陪膳の女は必櫛をさす事なりされは爰を伊物にも手づからいゐがひとりてけこのうつはものにもると有此女もその故實にて櫛をさして家子の陪膳をもせしにやつらくしつまくし歟五晉通丁神代卷に湯津爪櫛あり此男はおほきみなりけり王孫をいふとぞ源氏にわかむどをりとあるも王孫をいふなり業平歟又誰となくてもなるへし

むかしならのみかどにつかふまつるうねめ有けり

ならのみかど　文武天皇とも聖武天皇とも兩説なりそのうち文武帝と申説よろしきよし古序いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりぞひろまりにけるとある所榮雅抄云ならのみかど七代おはします元明　元正　聖武　孝謙　廢帝　稱德　光仁なり　ならのみかどいつれと聞えねども公任卿文武の御歌　たつた川もみちみたれての御歌を注せり是は貫之此序にたつた川になかるゝもみぢをばとかける文武の御歌なれはなり定家卿も此説に同心して此序のならの此時といふ所にもをして文武天皇と注しつけられたり奈良の御時は文武の御次元明の御時なるを文武の御歌をさしてかけり貫之夏部にもならの石上寺にて時鳥のなくを聞きてよめるとて素性歌石上ふるき都の時鳥聲はかりこそむかしなりけれといふ歌をかけりいそのかみはならにあらざるをならのいそのかみとかく今の京よりまへ代々の都なれば大和同國の事なれはならの御時と書たるなり此際同とかくいへる事あやなき説なり持統文武二代を藤原の御門といひ奉る二代此所にて崩したまふ文武の御次元明和銅三年三月に藤原の宮よりならにうつりたまふ時　飛鳥のあすかの里をおきていなは君かあたりは見えすかもあらん萬葉又新古今に入り云々いそのかみはならにはあらねども大和同國ゆへならのいそのかみといふごとく文武帝は藤原の都の御門にてならの都にはあらねども藤原もならも同し大和の國ゆへ奈良帝と稱し奉るとの義なるにや此御製萬葉には第一卷に出る新古今十羈旅の部に和銅三年三月藤原のみやよりならのみやにうつらせ給ひける時元

明天皇御製とありて此御歌いれり此物語此次の段におなしみかど丶ありてみかどたつた川もみちみだれての御歌を書りされは此段のならの御門と同帝なり又此段人丸も供奉と見えたればかた〳〵こ丶のならのみかどは文武帝を稱し奉るとぞ猶異説まち〳〵なりことなかければ略す　釆女職原抄後追加（清原秀賢撰）云陪膳釆女尤可レ然事也近代漸零落無レ極云々

凡そ釆女は郡の少領已上の女の形容端正なるものを奉らしめ従丁従女などをもおほやけより給ひて陪膳御湯殿などの役を勤むるとかや續日本紀（元明紀）云和銅三年日向國貢ニ釆女一云々紅葉賀云みかど御としねびさせ給ひぬれどかやうのかたはえすぐさせ給はずうねへによくら人などをもかたち心あるをばことにもてはやしおほしめしたればよしある宮つかへ人おほかるころなり云々

かほかたちいみしうきよらにて人々よばひ殿上人などもよはひけれどあはさりけりそのあはぬこ丶ろはみかどをかぎりなくめでたきものになん思ひ奉りけるみかどめしてけりさてのち又もめさ丶りければかぎりなく心うしとおもひけりよるひるこ丶ろにか丶りおほえ給ひつ丶戀しくわひしくおほえ給ひけりみかどはめしゝかど事ともおぼさずさすかにつねにはみえ奉る猶世にふましき心ちしければよるみそかに出てさるさはの池に身をなけてけりかくなけつともみかどはしろしめさ丶りけるをことのつゐてありて人のそうしければいといたう哀がり給ふて池のほとりにおほみゆきし給ふて人々にうたよませ給ふかきのもとのひとまろ

さすかにつねには見え奉る　釆女は陪膳の職なれは帝へ親近し奉るゆへなり　又髮上ノ釆女といふもあり　おほみゆき　伊物云三條のおほみゆき云々た丶みゆきまてなり別の子細なしかきのもとのひとまろ　姓氏録云天足彦押人命之後也云々榮雅抄云家門のまへに柿本あるによりて柿本といふ云々拾芥云官位不レ見天智御時人又天智御宇以後人歟云々大學頭敦光人麻呂讃云大夫姓ハ柿本名ハ人麻呂蓋上世之歌人也仕ニ持統文武之聖朝一遇ニ新田高市之皇子ニ云々

わきもこがねぐたれかみをさるさはの池の玉藻とみ

るそかなしき
わきもこ 萬吾妹子又脇母子なと書り妹は婦人の通稱なり吾とはしたしみていふ心なり ねくたれかみ寢みたれかみに同し 枕草紙云池にさるさはの池うねめの身をなげけるを聞しめして行幸なと有けんこそいみしうめでたけれねくたれかみをと人まろがよみけんほといふもおろかなり云々中務内侍 從三位永頼女日記云さてさるさはの池をみれは濁りなく澄て釆女か身なけゝんむかしのかけも今うかひたる心ちして今はと見けん面影を我ならいかに鏡のかけもかなしとみけん御幸ありけん御門の御心ちもかたしけなく哀なり思ひやる今たにかなしわきもこがかぎりのかげをいかに見つらん拾遺二十猿澤の池にうねめの身なけたるを見てと詞書有て此歌入たり
とよめる時にみかと
さるさはの池もつらしなわきもこかたまもかつかは
水そひなまし
釆女入水して池の玉藻をかつくならは水も乾くへきを無心の水なれはさはなくして釆女を溺しけれは池もつらしとよみ給へるなるへし萬十六或曰有三男娉一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露三雄之志難平如石遂乃彷徨池上沈沒水底於時其壯士等不勝哀頽之至各陳所心作歌三首 姓名未詳
無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來乍潛水渡將涸 此歌此御製によく似て侍り
とよみ給ふげりさて此池にはかせさせ給ふてなんかへらせおはしましけるとなん
はか 墓なり 今此池邊に釆女の小社有
おなしみかどたつた川のもみちいとおもしろきを御らんしける日人まろ
たつた川もみちはながるかみなひのみむろの山にし
ぐれふるらし
古今五に入讀人不知又はあすか川もみちはながる此歌不注人丸歌云々栄雅抄云立田川にもみちのなかれ出るを見て水上の御室山に時雨ふるらしとなり此時雨は木の葉の時雨なり言語道斷其妙の歌なりわすれす吟詠すべきなり家隆卿みむろの山に嵐吹くらしと常ならはよみてんといへるを定

家卿嵐といひては歌の心あさかるべし時雨といひ
てこそ心ふかけれどいへり
みかど
たつた川もみちみたれてなかるめりわたらはにしき
中やたえなん
古今五題しらすよみ人しらすと有て此歌はある人
ならのみかどの御歌となん申す云々榮雅抄云たつ
た川にもみちのちりみたれて水のすきまなくなか
るゝは錦をしけるか如く見ゆるをわたらは中たえ
なんとなり云々（新千五）立田山峯のにしきも中絶ぬ松
をのこしてそむる紅葉に此御歌をとりてよめり
とそあそばしたりける
おなしみかどかりいとかしこく（ライ）このみ給ふけりみち
のくにいはでのこほりより奉れる御鷹世になくかし
こかりければになうおぼして御てだかにし給ふけり
名をはいはでとなんつけ給へりける
おなしみかど是も文武帝ならん歟　かり鷹狩なり
そのわさに賢く好みおはしましゝとなり　みちの
くにいはてのこほり　磐堤（ハンテ）（或用二磐手字一）鷹は奥
州の産物也　聽雪集手なれてもしらすよいかにみ
ちのくのいはての鷹の心ふかさは御手だか帝御手
つからすえさせ給ふ御鷹に此いはでをあそはされ
しなり花鳥云野行幸は仁德天皇御宇より始めて代
々有之云々九條稙通公御說に野行幸とは天下の農
作何と有そとて野に行幸あるなり土民を御憐愍の
爲なり云々天子野外へみゆきなりて鷹つかはしめ
給ふを野行幸と申なり嵯峨野物語（二條太閤良基作）云桓武天
皇嵯峨天皇なと上古には御好あり今新修鷹經も弘
仁に鷹所にいたされたる文なり又寛平延喜天曆一
條白河にいたるまで野行幸たひ／＼有て此道（鷹狩なり）
をもてあそばせ給ひしなり云々

それをかの道に心ありてあつかりつかふまつり給ふ
大納言にあつけ給へりけるよるひるこれをあづかり
てとりかひ給ふほどにいかゞし給ひけんそうし給ふ
てけり心きもをまどはしてもとむるにさらに見え（イニナシ）出
す山々に人をやりつゝもとめさすれどさらになしみ
つからもふかき山に入りてまどひありき給へどかひ
もなし
大納言誰としらす　とりかひ　取養にやたゝ鷹を
かふ事をいふへし　此段萬葉十七大伴家持大黑と

いふ蒼鷹をそらしてもとむるによしなし夢に娘子
ありて喩すゆへによめる歌の詞に似たり
此事をそうせでしはしゝ有へけれど二三日（ニツサンカ）にあげす
御らんせぬ日なしいかゞせんとて内にまいりて御た
かのうせたるよしをそうし給ふ時にみかどものもの
給はせす「閑（イナシ）しめしつけぬにやあらんとて又そうし給
ふにたもてをのみまもらせ給ふてもののも給はす」
たい〳〵しとおほしたるなりけりと我にもあらぬ心
ちしてかしこまりていますかりて此御たかのもとむ
るに侍らぬ事いかさまにし侍らんなどかおほせこと
もし給はぬとそうし給ふ時にみかど
かしこまりて　畏也　たい〳〵し　夕顔云馬にて
ものせんとの給ふをいとたい〳〵しき事と思へと
云々
九條植通公御説に退（ダイ）々敷なりすゝまぬ事とは思へ
どもといふ心なり云々　桐壺にもかく世中の事を
おほしすてたるやうに成行はいとたい〳〵しきわ
さなりともあり
いはでたゞふといふにゝされる
心明なり　鷹の名をそへて遊はされしなり

との給ひけりかくのみの給はせてこと事もの給はさ
りけり御心にいといふかひなくおしくおほさるゝに
なんありけるこれをなんよの中の人もとをばとかく
つけたるもとはかくのみなんありける
こと事　異事なり歌の上下の句をもとすへといふ
なり伊物に「かち人のわたれとぬれぬえにしあれ
はとかきて末はなしそのさかつきのさらについま
つのすみして歌のすゑをかきつぐ又あふ坂の関は
こえなんと有下の句に上の句をさま〳〵つくる事
のもとは是等をもとゝしてとかくつくるなりとい
ふ心なるへし早歟云花鳥の色をもねをも同し心に
おきふしみつゝはかなき事をもとすゑをとりて
いひかはし云々注云上句をいひ出し給へは下の句
を續下の句には上の句をつぎなどたがひに兄弟し
給ひしなり云々
ならのみかどくらゐにおはしましける時さがのみか
どは坊におはしましてよみて奉り給ふける
ならのみかど此御門は平城天皇なり前にあるなら
のみかどには同しからす此御贈答續後拾遺四に入
後集に云みこのみやと申ける時内に奉らしめ給ふ

ける
嵯峨天皇御製みな人のその香にめつる蘭君か爲に
と手折つる蘭御返し平城天皇みな人の心にまかふ
蘭むへ色ふかく匂ひけるかな袋草紙云今按に三反
は同帝と書之其後更奈良帝と書也各別帝と見ゆは
ての蘭の歌は無レ疑大同帝ノ歌也嵯峨帝坊之時の故
也初二首者以往の奈良帝也人丸相伴之故也然則南
帝之儀相ニ叶古本之意趣ニ云々　初二首とは采女
の身なけし段の御製立田川の紅葉を御覽しけん御
歌いはで思ふそと末の句を遊はされしとをさして
いふなるへし
坊に春宮坊なり春宮の居家をいふとぞ平城帝は桓
武第一皇子御母皇太后藤原乙牟漏贈太政大臣良繼
公女　嵯峨帝桓武第二皇子平城同母弟大同元年
五月十九日立太子同四年四月朔受禪平城帝をなら
のみかどと稱し奉るは御讓位の後平城の舊都にま
し〳〵けるゆへとぞ
みな人のその香にめづるふちはかま君の御ためとた
をりつるけふ
嵯峨帝御製なり　みため御爲なるへし續後拾遺

袋草紙いつれも君か爲にとあり
みかと御かへし
おる人の心にかなふふちはかまむへ色ことににほひ
たりけり
歌心明なり　おる人とは太子をさしてよみ給ふむ
へは宜なり平城帝御製なり蘭蕙は兄弟の事にいふ
なり平城嵯峨御兄弟なれはなり　藤袴云らにの花
のいとおもしろきを給へりけるをみすのつまよ
りさし入てこれも御らんずへきゆへはありけりと
て云々稱名院殿御說に蘭兄蕙弟といふ事有兄弟の
事にとる歟云々
夕霧玉鬘のゐ給ふみすのつまより蘭の花をさし入
らるゝなり實の兄弟にはあらねとも此時まではま
ことの兄弟と心得られしなりされは御覽ずへきゆ
へはなと申されしなり
やまとの國なりける人のむすめいときよらにてあり
けるを京よりきたりけるおとこのかいまみて見ける
にいとおかしけなれはぬすみてかきいだきて馬にう
ちのせてにけていにけりいとあさましうおそろしう
思ひけり日くれてたつた山にやとりぬ草のなかにあ

ふりをさきしきて女をいたきてふせり女おそろしさおもふ事かきりなしわひしと思ひておとこの物いへといらへもせでなきけれはおとこ

ぬすみて　伊物云人のむすめをぬすみて云々浮舟云おどろむぐらのかげにあふりといふものをしきて云々馬にうちのせてといふ首尾に泥障(アフリ)をときしきてといふなり

誰みそきゆふつけ鳥かから衣たつたの山におりはへて鳴

此歌古十八題しらす讀人しらすとあり栄雅抄云たつたの山に夕つけ鳥のおりはへてなくは誰みそきをすらんとなりから衣はたつたといはんためたかみそきは木綿付鳥といはむとて也誰みそきは誰人のみそきそとなり鶏に木綿を付てはらへをするをたがみそきといふ云々袖中抄云ゆふつけ鳥とは庭鳥をいふなり世中さはかしき時四境のまつりとておほやけのせさせ給ふに鶏に木綿を付て四方のせきにいたりて祭るなり云々又云ならの京にては立田山は攝津に通ふ道なれは西のせきにてゆふつけ鳥よまんにたより有云々男此誰みそきの古歌を思ひ出して詠せし心はたつたの山におりはへてなくといふ所今此女のいらへもせてたゝ哭はかりなる體の所から折にかなへるゆへに思ひよりて詠吟せしなるへし折にかなへは古歌にても今詠出せるやうに取用ること流例なり伊物にみちのくの忍ふもちすり誰ゆへにみたれそめにし我ならなくにとある融公の歌を其まゝ春日の里の女業平の歌の返しに用ひたると開題抄云融公の歌をそのまゝ返歌に用むは我よまぬ歌なれともついておもしろきと思へる心なり空蟬のはにおく露の木かくれて忍ひ／＼にぬるゝ袖哉　伊勢か家集の歌なり是空蟬の贈答にはあらすいせか集の古歌をよく此時相應したれは御たゝうがみのはしに書そへたりいせが木かくれて露にぬれもはてぬといふ心なるを此空蟬の心には我身のかくれて逢奉らぬを木かくれてといひてそれゆへに人しれず袖をぬらすといへり心をとりかへたるも前達作り云々又曰古今にては誰ゆへにみたれそめにし我にてもあらすそなたゆへにこそみたれそめぬれといふ心なりその心を今女の返事に用ゆれは不二相應一忍ふのみたれとをくりたる歌

にあるをうけてそのみたれは誰ゆへにかあらんとはしめの二句にて切て我ならなくにとは我にてはあるましき物をといふ心なり如此心をとりかへていまの返事にするなり云々此誰みそきの歌もゆふつけ鳥のなくとあるを女の哭に用ひかへて詠吟せるなるへし（新後拾五）もみちはも誰みそきとか立田山秋風吹はぬさとちるらん

女かへし

たつた川岩ねをさしてゆく水の行衛もしらぬわかごとやなく

我如くやなり　夕付鳥も我如や鳴といふ心なり序歌なるへし

とよみてしにけりいとあさましうてなん男いだきもちてなきける

むかし大納言のむすめいとうつくしうてもち給ひたりけるをみかどに奉らんとてかしつき給ふける。殿にちかうつかふまつりけるうどねりにてありける人いかでかみけん此むすめを見てけりかほかたちのいとうつくしげなるを見てよろつの事おほえず心にかゝりてよるひるいとわひしくやまひに成ておほへければせちにきこへさすべき事なんあるといひわたりければあやし何事ぞといひて出たりけるをさる心まうけしてゆくりもなくかきいだきて馬にうちのせてみちのくにへよるともいはずひるともいはずにげていにけりあさかのこほりあさかの山といふ所にいほりをつくりて此女をすへて里に出つゝ物などもとめてきつゝくはせてとし月をへてありけり

大納言誰と不知　殿大納言をさしていふなり　うとねり続日本紀云文武天皇大寳元年始補ニ内舎人九十人一於ニ太政官一列見云々百寮訓要抄云内舎人（従六位）是は童殿上などの成業なり昔は武勇をならはせける程に内舎人を坂東の國へ遣されけるとぞ今はかやうの事もなしいまた元服せずして殿上のふたにつくは皆内舎人なり又下﨟も同舎人には成ける云々花鳥云内舎人帯レ刀具ニ兵仗一武勇ノ者也云々　せちに切になり　ゆくりもなく　夕貌云いざよふ月にゆくりもなくあくかれんことを云々不意なり水原抄にとりあへぬ心なりといへり

此男いぬればたゞひとり物もくはで山の中にゐたればかぎりなくわびしかりけりかゝるほとにはらみに

けり此おとこ物もとめに出にけるまゝに三四日こさりければまちわびてたち出て山のゐにいきてかけを見れば我ありしかたちにもあらずあやしきやうに成にけり

三四日みかよかとよむなり金八戀の心をよめる伊通
　山の井の岩もる水にかけ見れは淺ましけにも成にける哉

かゞみもなければかほのなりたらんやうもしらでありけるにはかに見ればいとおそろしけなりけるをいとはづかしと思ひけりさてよみたりける

あさか山かけさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

萬六十傳曰葛城王遣ニ陸奥國ニ之時ニ國司祗承緩怠異ニ甚於レ時王意不レ悦怒色顯レ面雖レ設ニ飲饌ニ不レ肯ニ宴樂ニ於レ是有ニ前采女風流娘子ニ左手捧レ觴右手持レ水撃ニ王膝ニ而詠ニ此歌ニ爾乃王意解脱樂飲終日

安積山影副所見山井之淺心乎吾念莫國　葛城王

は情語見答なり古今には淺くは人を思ふものかはと詞をすこしかへて見えたり此物語もかの集にしたかふならん榮雅抄云あさか山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふものかはと讀る心は王なとの淺く心を人に見へぬものぞと山の井によせていさめけるに此歌にこゝろとけにければ尤德のすくれたる歌なり云々此歌の趣とこの物語のうへとは心かはるべし此物語にては男の里に出て久しくかへりこぬを女の恨て何とてかく淺く人をは思ふ物かはさてもつらき男の心かなとかこつ心に用ひかへて女の詠吟せしと可見にや前にも有讀みそきの古歌を誦せしとおなし類ならん

とよみて木に書つけていほにきてしにけりおとこものなとももとめてもてきてしにてふせりければいとあさましと思ひけり山のゐなりける歌を見てかへりきてこれを思ひじにゝかたはらにふせりてしにけり世のふる事になんありける

若葉云昔は人の心たいらかにてよにゆるさるまじきほとの事をば思ひおよばぬものとならひたりけん今の世にはすき〳〵しくみたりかはしきこともるいにふれてはきこゆめりかしきのふまでたかきおやの家にあがめられかしつかれし人のむすめの

けふはなを〳〵しくくだれるきはのすきものども
に猶たちあざむかれてなきおやのおもてをふせか
げをはつかしむるたくひおほくきこゆる云々尤い
ましめとすへし

しなの丶國さらしなといふ所に男すみけりわかき時
におやはしにければおばなんおやのごとくにあひそ
ひてあるに

信濃國更級　郡の名也　おば　姨母なるへし祖母
をもおばといふ故祖母をいふかともいへり野分云
おば宮の御もとにまいり給へれは云々三條ノ宮は
夕霧の祖母なり夕霧のうへよりいふゆへおは宮と
いふなり

この女の心いと心うき事おほくて此しうとめのおひ
かゞまりてゐたるをつねにくみつ丶男にも此おば
のみごゝろのさがなくあしき事をいひきかせければ
むかしのごとくにもあらずおろかなる事おほく此お
ばのために成ゆきけり

この女　袖中抄には此よめと有此男の妻にて此お
ばのよめ也　さかなく　悪也　をろか疎の中略也

此おばいといたうおいてふたへにてゐたりこれをな
を此よめ所せがりていま丶てしなぬこと丶思ひてよ
からぬ事をいひつ丶もていましてふかき山にすてた
うびよとのみせめければせめられわびてさしてんと
思なり

所せがり　をき所なくうるさく思ふ心なり　よか
らぬ事をいひ　よめの讒言するなり　たうび給ひ
といふに同じたうべといふも給へといふ事なり思
ひなり歌林良材にはおもひなりぬとあり

月のいとあかき夜をうなどもいざたまへてらにたう
ときわざすなる見せ奉らんといひければかぎりなく
よろこびておはれにけりたかき山のふもとにすみけ
ればその山にはる〴〵といりてたかき山のみねのお
りくべくもあらぬにおきてにげてきぬ

いざ給へ　いざ來り給へとさそふ也おはれにけり
まへにいといたう老てふたへにてなどあれば歩行
ならざるゆへ負て行なり

や丶といへどいらへもせて家にきて思ひをるにいひ
はらだてける折はらたちてかくしつれどとし頃おや
のごとやしなひつ丶あひそひにければいとかなしく
おぼへけり

やゝといへど　おばの男を呼かけたる聲なり
此山のかみより月もいとかぎりなくあかくていでたるをながめて夜ひとよいもねられずかなしくおぼへければかくよみたりける
我心なくさめかねつさらしなやおばすて山にてる月を見て
古今十七　題しらずよみ人しらずと有榮雅抄云姨をいざなひてすてたる山に月は限りなくあかく出たるを夜もすがらうちながむれど悲しくおぼへければ我心なくさめかねつと甥かよみたる歌なり云々袖中抄云無名抄云此歌は信濃國さらしな郡におばすて山といへる山の有なり昔人のめいを子にして年來やしなひけるがはゝのおば年老てむづかしかりければ八月十五夜のくまなくあかゝりけるに此母をすかしのぼせてにげて歸りにけりたゞひとり山のいたゞきにゐてよもすから月を見てながめける歌なりさすがにおぼつかなかりければみそかに立かへりて聞ければ此歌をうちながめてなきおりけるそのゝち此山をばおばすて山といふなりそのさきは冠山とぞ申ける冠のやうに似るとかやそれよりのち月見てなぐさますとはよめるなり今按僕頼説と大和物語と大にたがへり物語はおいこれはめいなり彼はむかへてかへりこれはすてゝやみにけり前哥に付て物語の說ニ載云々又云坂東に一にたかき國は信濃なり甲斐よりものぼり美濃よりものぼり越後よりものぼるなり其國中におばすて山たかければ月はまことにあかしとぞ申云々
とよみてなん又いきてむかへもてきにけるそれよりのちなんおばすて山といひけるなくさめがたしとは是かよしになんありける
なぐさめかたしとは是がよし此山になぐさめかたしと歌物語などにいふ事はこれが始めなりとの心なるべし千載十五　月見ては誰も心ぞなぐさまぬ姨捨山のふもとならねど　新古十四　更級の山より外にすむ月もなぐさめかねつ此頃の空やどり木云をのつからながらへばなどなぐさめん事を思ふにおばすて山の月のみすみのぼりて夜更るまゝによろづ思ひみだれ給ふ云々狹衣云御手あたりにゐるものなきにやおばすて山にのみぞおほさるゝ云々いづれも此物語より出たり

しもつけの國に男女すみわたりけりとし頃すみける
ほどにおとこめをまうけてて丶ろかはりはて丶此家
にありけるものどもを今のめのがりかきはらひもて
はこびいく心うしと思へどなをさせて見けりちりば
かりのもののこさずみなもていぬたゞのこりたる
ものは馬船のみなんありけるそれを此男のずさまか
ぢといひけるわらはをつかひけるして此船をさへと
りにおこせたり

男女をまうけて　又こと女を外にすへおきし也
此家　本妻の家なり　すさ　從者なり

此わらはに女のいひけるきんぢも今はこゝに見へじ
かしなといひければなどてかさぶらはざらんぬしお
はせずともさふらひなんなどいひたてり女ぬしにせ
うそこきこえで申てんや文はよに見給はしたゞ詞に
て申せよといひければいとよく申さふらはんといひ
ければかくいひける

きんぢ　汝也乙女云きんぢらは同し年なれど云々
大鏡云きんぢもとめよとの給ひしかは云々
などてかさぶらはさらん　童の詞なり　ぬし　主
也　文はよに見給はじ　よに心なし文は見給はじ
といふ詞なり後撰十六　とし頃すみ侍る女を男おもひは
なれてものもゝぐなどはこひ侍りければ女のよめる
歎しな終にすましき別かはこれは在世にと思ふは
かりに　此段に似たり

ふねもいぬまかぢも見へしけふよりはうき世の中を
いかでわたらん

直梶　童の名をよみ入たりまかぢいたゞかぢとい
ふまでにて眞帆といふ同類なり萬七　大船爾眞帆繁
貫水手出去之奧將深潮者干去友　梶は海川な
どをわたる具なればそのえんにてかくよめり

と申せといひければ男にいひければ物かきふるひい
にし男なんしかなからはこびかへしてもとのごとく
あからめもせでそひゐにける

しかながら　今の妻のもとへかきはらひ運びわた
せしが又そのまゝひかへせしとなり
あからめ　よその女也三会　大井川岩波たかし筏士よ
岸の紅葉にあからめなせそ

やまとの國に男女ありけりとし月限りなくおもひて
すみわたりけるをいかゞしけん女をえてけりなをも
あらずこの家にゐてきてかべをへだてゝすみて我か

たにはさらによりこずいさうしと思へどさらにいひもねたます秋のよのながきにめをさましてきけばしかなんなきけるものもいはてきゝけり

なをもあらす　伊物云たゝなをやはあるへき云々注云なをやは直の字の心なり云々こゝも同心なりたゞこと女をえたるのみにもあらず本妻の家へかの女をつれ來りたるなり我かた本妻のすむかたなり

かへをへたてたる男きゝ給ふやにしこそといひければなに事といらへければ此鹿のなくはきゝ給ふやといひければさ聞侍りといらへけり男さてそれをいかゝきゝ給ふといひければ女ふといひける

きゝ給ふやにしこそ男は後妻と壁を隔て東の方に住たりとみゆされは本妻は西の方にふしたるゆへに西こそと呼かけたるなり夕貌に北とのこそ聞給ふやとある類ひなり　さきゝ侍りさやうに聞侍るとなり

我もしかなきてぞ人に戀られし今こそよ所に聲のみはきけ

本妻歌也我もしかとはわれもその如くなどいふにおなし夕霧里遠みおのゝしの原分てきて我もしかこそ聲もおしまね　注云我もさうこそとなり鹿の字をもたせたり云々此類也歌の心は今こそ壁へだてゝ夫のこゝろもよ所にきけもとは我も男に戀られし物をとなり老哀ふかし此歌新古十五に入て侍る

とよみたりければかぎりなくめでゝ今の女をおくりてもとのごとなんすみわたりける

大和物語虚靜抄下卷之三

そめごのゝないしといふいますかりけりそれをよしありのおとゝ申けるなん時々すみ給ふけるものをよくし給ひければ御ぞどもをなんあづけさせ給ひけるにあやどもをおほく遣はしたりければくもとりのもんのあやをやそむべきときこえたりしをともかくものたまはせねばえなんつかふまつらぬさだめうけ給はらんと申奉りければおとゝ御かへりことに

そめとのゝないし　染殿拾芥云正親町北忠仁公ノ家　内侍西三條右大臣良相ノ女滋春ノ母といふ說有或云稱ニ染殿ノ内侍ニ事無ニ所見ニ北村氏考據ニ何書ニ平藤氏系圖良相ノ女子雖レ載レ之染殿内侍不レ見云々按續後拾遺十四に典侍因香朝臣に遣しける近院左大臣雲鳥のあやの色をもおもほえず人をあひ見で程のへぬればとあり

能有公ノ歌此物語に同し然れは染殿内侍因香朝臣同人歟因香朝臣作者部類云古今後撰作者貞觀喜人云々　よしありのおとゝ　源能有文德皇子紹運錄云左近大將右大臣正三位仁壽三年賜ニ源姓ニ母ハ伴氏號ニ近院大臣ニ　ものをよくし給ひ　染物なとの事なるへしあづけさせ給ひ御ぞの事などを皆うち任給なるべし　くもとりのもんのあや　雲鶴の紋の綾也千十八後頼朝臣長歌　くもとりのあやにかなはぬくせなれば二風十　夕くれは思ひみたれて雲鳥のあやに戀しき人の俤又花鳥云謝惠連詩云客從ニ遠方ニ來遺ニ我ニ鶴文綾ニ　ともかくもの給はせねばえなんつかふまつらぬ　染物の事をさきに窺ひしをとかくの返事なければ了簡に不及故猶又決定の御返事を承らんとて尋ね申ぞとなり

くもとりのあやのいろをもおもほえす人をあひ見でとしのへぬれは

内侍に久しく逢まいらせずして年をへぬれば心も迷ひて物のあやめもわきまへねばいまだ一決しかたしとの心なりあひ見では藍にそへたるへし

となんの給へりける　のたまへりけるに

おなし内侍に在中將すみける時中將のもとによみてやりける

在中將　業平なり

秋はきを色どる風のふきぬれば人の心もうたがはれ

けり
色どるとは下葉の色つくをいふなるべし
とありければかへし
秋の野を色どる風はふきぬとも心はかれし草葉なら
ねは
此贈答後撰第五に入詞書云女のもとより文月はかりにいひをこせて侍りける云々歌此物語に異なる事なし返し業平朝臣秋萩を色どる風のと初五文字かはれり
となんいへりけるかくてすます成てのち中將のもとよりきぬをなんしにおこせたりけるそれにあらはひなどする人なくていとわひしくなんあるなをかならずして給へとなんありければ内侍御心もてあることにこそ。あなれ
御心もて　業平へ衣の洗なとしてまいらする人のなきはそなたの御心あたし〳〵敷て定りたる室家もなきゆへにこそあれとなり
おほぬさと成ぬる人のかなしきはよるせもなくてしかぞなくなる
奥儀抄云大ぬさははらへするに陰陽師のもたるくしにさしたるしでなり云々闕疑抄云大麻ははらへの具也あれこれの手をふるゝものなり云々　かれこれあまた人の手ふるゝ物なれば人の心のあなたこなたうつりやすきにたとふるなりされば古歌にも我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心は大ぬさにしてなとよめり下句はかのぬさを祓してのち川になかしすつるゆへよるせあるなり業平は心あたなる事大幣の如くなれとも定りたるよるせもなきゆへあらはひなどもしてまいらする人なきなりさればさやうにわび給ふもみな御心つからの事にこそあれとの心なるべし伊物云むかし男ねんごろにいかでと思ふ女有けりされと此男をあたなりと聞てつれなさのみまさりつゝいへる「大ぬさの引手あまたに成ぬれは思へとえこそたのまさりけれ返しおとこ大麻と名にこそたてれなかれても終によるせは有といふものを
となんいひやりたりける中將
ながるとも何とか見えん手にとりてひきけん人やぬさとしるらん
大麻と成ぬる人と内侍のよめるをうけていかにも

我心はあた／＼敷大ぬさの如なるべしされどひた
すら何の因縁もなき人はぬさのあたなる物といふ
事をも知へからす内侍はさすが一たひ引手のうち
にもおはしければそのぬさのあたなる事をも辨へ
知給ふなりされはさはかりの昔の因縁あるゆへに
こそあらはひなとの事をも頼みまいらするなれ一
向に故なき事とはなおほしそとの心なりとそ
となんいひける
在中將二てうのきさいのみやまだみかどにもつかふ
まつり給はでたゞ人にておはしましけるによばひ
奉りける時ひしきといふものをこせてかくなん
二條のきさいの宮　高子清和ノ后陽成ノ御母贈太政大臣長良
公女貞觀十九年閏二月廿七日立后とぞ　まだみ
かどにもつかふまつり給はで　二條の后またたゝ
人にておはしましける時をいふ　ひじき　海草な
り和名抄云辨色立成云六味菜比須木毛楊氏漢語抄云鹿
尾菜云々
おもひあらはむくらの宿にねもしなんひしきものに
は袖をしつゝも
伊物戯抄云思ひのなき身にてあらばの心なり戀に
は逢事をねかふが本意なれども思ひの切なる餘り
におもひなくてあらば葎の宿に袖をかた敷てもと
ねかふなり袖をしつゝもかたしく心なりかたしく
はひとりねのこゝろなり萬何せんに玉の臺も八重
葎はつらん宿にふたりこそねめ抄々の趣右の通な
り然とも思ひあらばといふを思ひなくてあらばさ
いひがたき也おもひあらはといふ五文字切なる心
の至極したる詞なり思ひあらばといふ五文字を引
分て見るなり思ひあらばとうちなかめたんそくし
ていひたる歌なり思ひあらば玉敷る宿も何せんと
いふ事を五文字一句にて理りてさて思ひのなくて
あらば葎の宿にたとひ袖をかた敷ものにしてもた
へんとの心なり能々心をつくへし云々新古四たへて
やは思ひありともいかゝせん葎の宿の秋の夕暮
新千思ひあれは涙に袖は朽にけり葎の宿に何をしか
まし新後拾七さしこもる葎の宿の花にさへ猶おもひ
ある春風そふく是等引合て味ふへし清月集松島や
秋風さむき礒ね哉蚕のかるもをひしきものにて伊
物には昔男有けりけそうしける女のもとにひしき
もといふものをやるとてとあり

さなんの給へりける返しを人なんわすれにける
伊物にも返し見えす
さてきさいの宮春宮の女御ときこえて大原野にまうて給ふけり

春宮の女御　闕疑抄云春宮の母義の女御なり二條后の御事也勘物云貞觀十一年二月貞明親王陽成爲ニ皇太子ー于時高子爲ニ女御ー仍ニ春宮ノ母義ー號也云々　ふぢはかまに承香殿ノ女御繁黑の妹を春宮の女御と書りこれも春宮今上の御母ゆへなり闕疑抄云氏神大原野社は嘉祥三年閑院左大臣冬嗣公乃我氏神春日を勸請申されたり藤氏の后宮はかならす行啓あり又云江次第十四大原野ノ行啓起ニ五條ノ后順子ニ以ニ藤氏勸學院衆ー爲ニ車副ー二條ノ后高子以レ姪乘ニ車ノ後ー在五中將書ニ和歌ー與ニ二條后ー歌略レ之人疑先レ是若有ニ密事ー歟云々
大鏡云そのかまたりの大臣生れ給へるはひたちの國なればかしまといふ所に氏の御神をすましめ奉り給ひてその御よゝり今にいたるまであたらしきみかど后大臣立給ふ折見てくら使かならすたつ御門奈良におはしましゝ時はかしま祭とて大和國みかさ山にふり奉りて春日明神と名つけ奉りていまに藤氏御氏神にておほやけ男女つかひたてさせ給ひ后宮その氏の大臣公卿みなこの明神につかふまつりたまひて二月十一日上ノ申日御祭にてなんさま〴〵のつかひたちのゝしる御門此京にうつらしめ給ひては又ちかくふり奉りて大原野と申二月の初うの日霜月初子日と定めてとしに二度の祭あり又おなしくおほやけつかひたつ藤氏ノ殿原みな此神にみてぐら十列奉り給ふ猶もちかくとて又ふり奉りて吉田と申ておはしますめり此吉田の明神は山かけの中納言のふり奉り給へるぞかし云々

御ともにかんたちめ殿上人いとおほくつかふまつり給へり（けりイ）在中將もつかふまつれり「御車のあたりなまくらきをりにたてりけり」みやしろにて大方の人々ろく給はりてのちなりけり御車のしりより奉れる御ひとへの御ぞをかつけさせ給へりけりさい中將給はるまゝに

人々ろく給はり　闕疑抄云行啓には必禄をくたさるゝ也御車のしりより奉れる　御車へ奉らする單の御衣を業平へ給はる也單裝束式云綾を紅に染て

夏冬同用レ之夏は白生をも被レ用云々

大原やをしほの山もけふこそは神代の事も思ひいつらめ

伊物或抄云長ありて優なる歌となり歌心は春宮の御息所始て行啓ある程に春日神も天照太神と契り給ひし相殿の昔をおもひ出給はんとなり君臣の契約なり下の心は二條后へ密通の昔をおほし出るかとの心なり云々闕疑抄云風の歌などには是を本とすべきにやうへはたとして底に心をつけてみれば心のふかき所の有也云々西山記長嘯子作云二條の后のまだ御息所と申ける時氏神に詣給ひし御ともに業平朝臣さふらひて人しれぬ昔の夢を神代の事とかすめけん春日の宮もいと氣ちかき所なり云々此歌の心を優におかしく書なし給へり相殿の昔とは神代巻下云是時天照太神手持二寶鏡一授二天忍穗耳尊一而祝之曰吾兒視二之寶鏡一當レ猶レ視レ吾可三與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一復勅二天兒屋命太玉命一惟爾二神亦同侍二殿内一善爲二防護一云々口訣云二神亦同侍二殿内一者二神在二天孫之左右一而爲二守護一也故ニ於二度會ノ神宮ニ中ハ御鏡左天兒屋命右太玉命於山田之神宮ノ豊受ノ大神相殿瓊々杵尊瓊々杵尊相殿ニ天兒屋命太玉命也云々　春日本殿　祭神四座　武甕槌命　經津主命　天兒屋命　姫太神是は天照太神の御分身といへり

大原野社是に同し續後撰九　太神宮に讀みて奉りける歌の中に慈鎮頼むそよ天照神の春の日に契りしすゑのくもりなければ慈鎮和尚は法性寺殿忠通公の子にして藤氏なればなるべし

としのひやかにいひけりむかしをおほしいでゝおかしとおほしけり

昔をおほし出て　后の心中をいふ

又在中將うちにさふらふにみやす所の御かたよりわすれ草をなんこれは何とかいふとて給へりければ中將

これは何といふ　中將の中絶て參らぬを忘れやしつるとかこちてとひかけたる心なるへし

忘れ草おふる野へとは見るらめどこは忍ふなりのちもたのまん

此程中絶して參らぬを忘れやしつるとおほすらめども此中將はたゞこなたを戀忍ひ申せば忘草にはあらず是は忍草なり猶のち〳〵をも頼申さんとなりこはこれはなり

となんありけるおなし草を忍ぶ草忘草といへばそれ

によりてなんよみたりける

忘草忍草　說多し幽疑抄云槲の木の葉に似たるを忍草といひ一葉に似たるを忘草と常にいふなりされともさのみ草の形などを尋ねてせんなしたゝ一草二名なり此分にしてをくへきと有云々　續古十五　忘るゝも忍ふもおなし古鄕の軒端の草の名こそつらけれ從二位顯氏卿歌なり此段伊物には昔おとこ後涼殿のはさまをわたりけれはあるやむことなき人のみつほねよりわすれ草を忍ふ草とやいふとて出させ給へりければ給りてとあり

在中將きさいの宮より菊めしければ奉りけるついてにうへしうへは秋なき時やさかざらん花こそちらめねさへかれめや

幽疑抄云うへしうへは重詞なりうへんとうへんならばといふ心なり春秋はきはまるかきりなし此花をうへをくならば秋のなからん時はいさしらすさかぬ事は有へからず花こそちるともねのかるゝ事はあるましきなり千秋萬歲たるへしといへり人の花など植たらむとき此心をもつてよむへし云々菊花散不レ散の論あり此歌にては散なり　拾遺十七　天曆御時菊のえん侍りけるあしたに奉りける忠見吹風にちるものならば菊花雲ゐなりとも色は見てまし此歌の心菊は風にちらぬものゆへ地下の者は雲ゐの菊を見る事なしとの述懐ならん歟されば此歌にてはちらぬやうによめり伊物にはむかしおとこ人の前栽に菊うへけるにとあり

とかいつけて奉りける

さいちうしやうのもとに人のかざりちまきを（イニナ）おこせたる返しにかくいひやりける

かざりちまき　粽を糸にて卷たるをいふ伊物或抄云天福本にかきなりちまきと有は昔あやまりなるへしとなり　拾遺十八　五月五日ちいさきかざりちまきを山たけのこに入てためまさの朝臣のむすめに心さすとて春宮大夫道綱女　心さしふかきみきはに菊こものちとせの五月いつかわすれん此時端午五日にてあるへきなり云々

あやめかり君はぬまにぞまどひける我は野に出てかるぞわびしき

伊物或抄云粽を菖蒲にて調する事はなけれとも歌には粽よみかたき事なるによりて時節なればかく

よむなり沼に出て此ちまきを調せられたるかとなり我は叉野に出て狩をして此雉子を奉るとなりとてきじをなんやりける

水のをのみかどの御時左大辨のむすめ辨の御息所とていますかりけるをみかど御くしおろし給ふてのちにひとりいますかりけるを在中將忍ひてかよひけり

水のおのみかと　淸和御事也御諱惟仁文德第四皇子御母皇太后明子號染殿后太政大臣藤良房公女天安二年十一月七日即位元慶四年十二月崩卅一奉レ葬二水尾山一因號二水尾帝一　左大臣辨の女　或云左大辨宰相家宗女伊勢守繼蔭妹也更衣云々見二日野家傳一疑ハ是カ乎云々　御ぐしおろし　元慶三年五月落飾　獨います　辨御息所の御事なり

中將やまひいとおもくしてわつらひけるをもとのめども丶ありこれはいと忍ひてある事なればえいきもとふらひ給はす忍ひ〳〵になんとふらひける事日々にありけりさるにとはぬ日なんありけるやまひいとおもりて其日に成にけり中將のもとより

もとのめども　もとより業平のくせられたる妻妾なとをいふべし　是はいと忍ひて　辨の御息所と

の中なりその日に成にけり終焉の日なるべしつれ〳〵といと丶心のわひしきにけふはとはずてくらしてんとや

病におもりて一入心ほきけふしもとふらはすしてやみたまふやとかこちたる心なり　とや　とひかけたるてにをは也新古十一　難波潟みしかき蘆のふしのまもあはて此世を過してよとや　此格なり

とてをこせたりよはくなりにたりとていといたくなきさはぎて返りことなともせんとするほどにしにけりときゝていといみしかりけりしなんとする事いま〳〵となりてよみたりけるりイ

かへり事なとも　辨の御息所よりまへの歌の返しなともし給はんとする程になり

つゐにゆく道とはかねて聞しかどきのふけふとはおもはざりしを

古今十六に入詞書云やまひしていとよはくなりける時よめる云々袋雅抄云此歌きのふまではけふとも思はさりしといふ說不用たゝうちまかせてきのふけふとは思はさりしをと世間のことはりを讀る也云々柏木云いとかうけふあすとしもやはとみつ

からながらしらぬ命の程をおもひのとめ侍るもはかなくなん云々　業平朝臣元慶四年五月廿八日卒五十六歳

とよみてなんたゝはてにけり

在中將物見に出て女のよしある車のもとに立ぬ下すだれのはざまより此女のかほいとよく見てけり物などいひかはしけりこれもかれもかへりてあしたによみてやりける

下すたれ前に出

見すもあらす見もせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさむ

一二句はそとはつかに見たる心なり此段古今伊物などには車の下すたれより女のかほのほのかに見えけれはとあれは見すもあらす見もせぬとよめるも相應のやうなれと此物語にては女のかほいとよく見てけりものなといひかはしけりと有て歌には見すもあらす見もせぬなと讀るいかゝとおほゆれとあかぬ心よりいへは猶さたかならぬ心ちしけるゆへかくよめる歟又憶にみたれとも世に憚る心にてかく讀とも可見にや闕疑抄云歌ノ心ははつかに見たるはかりなれともその人を忘れかたけれはあやなくけふやなかめくらさんとなりあやなくはかひなくまたやくなきなといふ義なり云々拾遺一　香をとめて誰おらさらん梅花あやなし霞たちなかくしそ新續古一　あやなくや雲にまかへむみすもあらす見もせぬ花に山路くらして

帚木　さゝかにのふるまひしるき夕暮にひるま過せといふかあやなき此段の女も二條の后にや大鏡に高子の事を評する段に云見もせぬ人の戀しくはなと中事も此御なからひとこそうけ給はれ末の世まて書をき給ひけれおそろしきすきものなりかし云々

とあれは女かへし

見も見すも誰としりてか戀らるゝおほつかなみのけふのなかめや

中將のあやなくけふやなかめくらさんとよめるに答て人を戀るといふは憶にその人を見てこそ戀るならひなれ見すもあらす見もせぬ程の人を誰と知てかさやうに戀られてなかめくらすなとは承るおほつかなしとの心なるへし　なみは　なき也五音

通す　伊物云むかし右近馬場のひおりの日むかひにたてたりける車に女のかほの下すたれよりほのかに見へけれは中將なりける男のよみてやりける
云々　返歌　しるしらぬ何かあやなく分ていはん思ひのみこそしるへなりけれと有古今も是に同しとぞいへりけるこれらはものかたりにて世にある事ともなり
おとこ女のきぬをかりきていまのめのがりいきてさらに見えずこのきぬをみなきやりて返しをこすとてそれにきしかりかもをくはへてをこす人の國にいたづらに見えけるものとも成けりさりける時に女かくいひやりける
女のきぬをかりきて　本妻のきぬをかりきて後妻のもとへ行也　きやりて着破也　きしかりかも雉雁鴨也　人の國にいたつらに見えけるものとも人の國とは他國田舍をいふなり俗に放逸なる者をいたつらものと云此男をさしていふなるべしいなやきじ人にならせるかり衣わか身にふれはうきかもぞする
本妻歌なり　初五文字は否や不レ着也　人にならせるとは後妻に肌なれしをいふなり　うきかも憂移り香なりさて雉雁鴨を隱して讀り
ふかくさのみかとゝ申ける御時良少將といふ人いみしき時にて有けりいといろこのみになんありける忍ひてとき〳〵あひける女おなしうちに有けり
ふかくさのみかと仁明帝也御諱正良嵯峨第二皇子御母皇太后橘嘉智子贈太政大臣正一位橘淸友公女天長十年三月六日即位　文德實錄云嘉祥三年三月己亥仁明皇帝崩ニ清涼殿ニ云々又曰發卯葬ニ仁明皇帝于深草山陵ニ云々因て深草のみかとゝ稱し奉るなり　良少將　良峰宗貞也正三位大納言安世卿子なり榮雅抄云父安世は桓武の御子なり然るを閑院左大臣冬嗣に給りてその子とす姓を給はりて良峰といふ大納言大將にいたる其子宗貞は仁明の御時左右なき近臣にて五位の少將にて藏人頭なり云々いみしき時にて時にあひたるなり宗貞は仁明の寵臣なり　おなじうち　おなじ內裡の女房なるへし
こよひかならすあはんと契りたる夜有けり女いたうけさうしてまつにおともせすめをさましてよやふ

けぬらんと思ふ程に時まうすおとのしければきくにうしみつと申けるをきゝて男のもとにふといひやりける

けさうして化粧也　時申をと　禁中に夜時を奏する事桐壺云右近のつかさのとのゐ申聲聞ゆるはうしに成ぬるなるへし云々奥入云亥一剋左近衛夜行官人初奏レ時（終子四剋）丑一剋右近衛宿申事至二卯一剋一内竪亥一剋奏二宿簡一云々（奏時の事禁秘抄にも見えたり）　うしみつと申けるを　昔は陰陽寮の属官に漏剋博士有て晝夜十二時の一時を四剋にわり漏剋を置て守辰丁とて其漏剋を守る者有伺二漏剋之節一時々に鐘皷を撃也（漏剋博士二人守辰丁廿人ありとそ）　漏剋は銅壷に水を入て箭をたてゝその箭に四十八の刻をつけて彼水のしたゞりて一のきさをあらはせは是一剋也二つあらはせは二剋なりかくて四つあらはせは一時なりそのゆへに子一つ二つ三つ四つ丑一つ二つ三つ四つなといふなり刻の數昔は百刻にせしよしなれども此時代には四十八剋を用ひしなるへし伊物云女人をしつめて子ひとつはかりに男のもとに來りけり云々狹衣云うしよつと申までに成にけり云々枕草紙云時そうするいみしうおかしいみしうさむきに夜なかばかりなとにこほ〳〵とこほめきくつすりきてつるうちなどしてなんけの何かし時うしみつねよつなとあてはかなる聲にいひて時のくひさすをとなといみしうおかし云々また子いくつ丑いくつなといふによりて撃皷の數ともきこゆれは煩紛らしきにや

延喜陰陽式云諸時撃皷子午各九下丑未八下寅申七下卯酉六下辰戌五下巳亥四下並平聲鐘依二刻數一云々萬十一　時守之打鳴皷數見者辰爾波成不相毛恠此歌子午九つ丑未八つなとゝ鐘皷刻數にしたがひてうつ故數ふれは辰には成ぬとよめるにや式の文に相當すへし是は此物語にいふ漏剋の子ひとつ丑みつなとにはかはるへし枕草紙に又奏時の事をいふにね九つうし八つなとこそさとひたる人はいへすべてなにも〳〵よつのみそくゐはさしける云々ね九つうし八つといふは尋常の時を撃鐘皷の數にて子刻は九つ丑剋は八つなれはその數にあはするなりそれは田舍などにてこそさやうにもいへと内裡に時を奏し辰のくゐをさす事は漏剋にしたがひて

何時も四つつゝに定りたるといふ枕草紙の心なるべし〻〻〻

人心うしみつ今はたのましよ

丑みつ時に人心うしとそへたりといひやりたりけるにおとろきて

夢に見ゆやとねそ過にける

子の時過て丑に成たるにそへて夢にもみゆやとまどろみしが寝すきたるといへり此連歌拾遺十八に入内にさふらふ人を契りて侍りける夜おそくまうてきける程にうしみつと時申けるを聞て女のいひつかはしけると詞書有為家卿集うちなせる時のつゝみはかはれともねすぎてきけは今のよもうしとぞつけてやりけるしはしとおもひてうちやすみけるほとにねすぎたるになん有ける

かくて世にもらうあるものにつかふまつるみかどかぎりなくおほされてあるほとに此みかとうせ給ふ御はうふりの夜御ともにみな人つかふまつりける中にその夜より此良少將うせにけり

紹運錄云宗貞仁明天皇御葬日嘉祥三年三月廿一日出家卅七法名遍昭元慶寺座主號ニ花山僧正一寛平二年正月十九日化七十云々文德實錄云先皇崩後哀慕無レ已自歸ニ佛理一以求ニ報恩一時人愍焉云々榮雅抄云仁明崩し給ふによりて慈覺大師の室に入て出家して大眞言師となり有驗の譽れ世にきこえ文德御惱の時めしに參内して加持し奉るに法驗あるによりて法眼に叙すほとなく赴任して僧正になる也是延暦寺に任せらるゝ僧綱のはしめなり晩出家の人たりしかど前唐院の拾封の宣旨を蒙りて慈覺大師の顯教を此人官領しけるとぞ元慶寺といふ所に住す此所を花山と號す然れは花山の僧正ともいふ云々

元亨釋書曰元慶寺遍昭俗名宗貞號ニ花山僧正又觀中院一僧正一台徒僧正一爲レ始云々

ともたちめもいかならんとてしばしはこゝかしこもとむれともをとみゝにもきこへずほうしにや成にけん身をやなけてけん法師になりたらばさてなんあるともきこえなん猶身をなけたる成へしとおもふに世の中にもいみしうあはれかりめこどもはさらにもいはずよるひるさうじいもゐをしてせけんの神佛に願をたてまとへどをとにもきこえす

ともたちめ　友達妻にや　めこども妻子なり明石
云めこいかはをも見で云々とうじいもる同事なり
かさねていへり精進と訓す
めは三人なんありけるをよろしくおもひけるには猶
世にへじとなん思ふとふたりにはいひける
よろしくおもひけるにはたゝ大方に思ふにはとい
ふ心なり世間なみ一通りなるをよろしくといふな
り世俗の詞づかひとはちかふ也桐壺云よろしき事
だにかゝる別の悲しからぬはなき事なるをと云々
帚木云すこしよろしからん事を申せ云々是等もた
ゝ大方といふ意なり妻三人のうち二人へは遁世の
志をかねてかたりしなり
かおりなくおもひて子どもなどある女にはちりばか
りもさるけしきもみせざりけり此事をかけてもいは
ゞ女もいみじとおもふへし我もえかく成ましき心ち
のしければよりたにこでにはかになんうせにけると
もかくもなれかくなんおもふともいはざりける事の
いみしき事を思ひてなきいられてはつせの御寺にこ
の女まうでにけり
限りなく思ひてこどもなどある女　本妻なるへし

かくなん思ふとも少將のつゝみける強面さを恨む
る本妻の心なり　はつせの御寺三代實録廿八云貞
觀十八年五月廿八日甲辰先レ是律師法橋上人位長
朝申牒ニ偁ク大和國長谷山寺是長朝ガ先師川原寺ノ修
行法師位道明ガ實龜年中ニ其同類ニ奉ニ為國家ニ所ニ
建立ニ也尊像殊勝靈驗仰止ニ云々　玉鬘云佛の御な
かにははつせなん日のもとのうちにはあらたな
るしるし顯し給ふともろこしにたにきこえあん
なるましてわか國のうちにこそ遠き國のさかひと
てもとしへ給ひつれば我君をはましてめぐみ給ひ
てんとていだし奉る云々　元亨釋書云長谷寺者比
丘道明沙彌德道備人也乃法道割レ力建ツ其像材者自ニ近洲高
島郡三尾山ニ流出ル霹靂木也木之所レ至有ニ疫災ニ漸
漂流至ニ和州葛下郡神河浦ニ道明欲下取ニ此木ニ刻ム
佛像上而無ニ貲力ニ專レ心禮レ木ヲ有ニ金紫光祿大夫
中書侍郎藤原房前奏シ賜ニ和州租稻三千束ニ乃刻ニ
十一面觀音像高二丈六尺ニ雷霆破ニ青石ニ為レ座方
八尺佛工稽主勳稽文會作レ之云々下略　泊瀬は昔よ
り靈驗あらたにてしかるべき人々まほくまうでぬ
れば此女も參詣して祈願をこめし成べし

此少將は法師になりてみのひとつをうちきてせけんせかいをおこなひありきてはつせのみてらにおこなふほどになんありけるあるつぼねちかうゐておこなへば此女たうしにいふやう

みのひとつ　簑一也（後拾十九）七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞかなしき　せけんせかい　例のかさねていへりあるつほね參詣の人各々局して居なり玉鬘云右近が局は佛の右の方にちかきまにしたり云々枕草紙云はつせにまうでゝつぼねに居たるにあやしきげすどものうしろさしませつゝ居なみたるけしきこそないかしろなれいみしき心をおこして詣てたるに川の音などおそろしきにくれはしをのぼりこそしていつしか佛の御顔を拜み奉らんとつぼねにいそぎ入たるにみの虫のやうなるあやしきゝぬきたるがいとにくきたちゐぬるづきたるはおしたをしつべき心ちこそすれ云々此遍昭もかゝるみの虫のやうなる姿にてこそこもり給ひけめ哀あさからずこそ　たうし　堂師なるべし祈の師なり

此人かくなりにたるをいきて世にある物ならばいまひとたびあひみせ給へ身をなけしにたる物ならばそのみちなし給へさてなんしにたるとも此人のあらんやうを夢にてもうつゝにても見きかせ給へといひて我さうぞくかみしもおひたちまでみなずきやうにしけりみつからも申もやらずなきけり

そのみちなし給へ死たらばしにきと道つけてしめし給へと也　我さうぞく　遍昭俗なりし時の裝束上下は狩衣指貫などなるべしずきやうにしけり誦經或修經布施か　つけ物などをいふ榮花みはてぬ夢云御誦經によろづの物はこび出させ給ふみまやの御馬殘りなく御車牛にいたるまで御誦經などおほくおきての給はず云々枕草紙長谷詣の段にもたて文などもたせたる男のすきやうのものうちおきたう童子などよぶとあり

はじめは何人のまうてたるならんと聞ゐたるに我うへをかく申つゝ我そうぞくなど。かくすきやうにするを見るに心ぎもゝなく悲しき事物ににずはしりや出なましとちたびおもひけれと思ひかへし〳〵ゐてよひとよなきあかしてむしたに見ればみのも何もなみだのかゝりたる所はちのなみだにてなんありける

いみしうなけばちのなみだといふものはあるものになん有けるとぞいひけるそのおりなんはしりも出ぬべき心ちせしとぞのちにいひけりかゝれとなをえきかず

心きもゝ　桐壺云心きもゝつくるやうになん云々おもひかへし〳〵しゐてねんじたる體也　ちのなみだ　伊物云男ちのなみだを流せどもとゞむるによしなし云々文選江文通書云位盡而繼レ之以レ血云々榮花浦々の別云れいのなみだにもあらぬなみた出來て云々血涙なるべし思はせて書り　かゝれと猶えきかず　かく女の切に祈れども遍昭のこゝにまちかくありとはえ聞つけぬとなり遍照集云かくていつこともなくありき侍てはつせのみてらにさふらふほどにかたはらなる女の寺の僧をよびよせていふやうとしころの人かうなりたるをいかにしてもあるものならば今一たびあひみせ給へ身をもなげしにもしたらばみちをもなし給へたゞともかくも此人のありさまを夢にもうつゝにも見せしらせ給へとておさこの具をおひたちまで誦行にせさすとてえもいひやらずなくをはしめは何人やらんと思ふほどに我うへに開なしてちかくよりて猶きけばめのうへなりけり子どももそひていみしうなくいとかなしうてなぞやはしりも出なましとちたび思へどもいみしうかへされてよもすがらなきあかしたるところはみのなども紅になんしみたりける云々引合て見るべし

御はてになりて御ふくぬきによろづの殿上人かはらに出たるにわらはのことやうなるなんかしはにかきたる文をもてきたるとりてみれば

御はてになりて御ふくぬきに　仁明帝御服のはてなりふくぬきは解除(ゲジョ)なり除服にはかならず川原に出て潔身(ミソギ)するなり服をぬぎてはみそきして吉服を着るなり是をぶくなをしといふ續日本紀十七釋服と云槿齋院父宮のぶくぬぎに源氏の君よりとふらひ給へば藤衣きしはきのふと思ふまにけふはみそきのせにかはる世をとよみ給へり（乙女巻に見ゆ）（續古十五）服ぬき侍りける日よめる俊頼　みそきして衣をとこそ思ひしが涙をさへもながしつる哉解除の事禁秘抄にも見えたり　柏にかきたる文　伊物云そのみるをたかつきにもりてかしはをおほひて出したりける

かしはにかけり云々
みな人は花のころもに成ぬなりこけのたもとよかはきだにせよ
古今十六に入詞書云ふか草のみかどの御時藏人の頭にてよるひるつかふまつりけるを凉闇に成にければさらに世にもましらはすしてひえの山にのぼりてかしらおろしてけりその又のとしみな人御ふくぬぎてあるはかうふり給はりなどよろこびけるを聞て讀ると有榮雅抄云みな人は花の袂になるに我は世をそむきたる苔の衣かはきたにせよとなり云々苔の衣は桑門の服をいふ榮花見はてぬ夢云御はてなどせさせ給ひつうすにびなとはてゝ花の袂になりぬるもいともの丶はへあるさまなり云々枕草紙云ゑんゆうゐん御はての年御ふくぬきなとしてあはれなることをおほやけよりはしめて院の人も花の衣になどいひけん世のことおもひ出づる云々
とありこれは此良少將のてにみなしついつらといひてもてこし人をせかいにもとむれどなし法師に成たるべしとはこれにてなんみな人しりにけるされといづちにかあらんといふ事さらにえしらず
いつらいつくといふにおなじ伊物紅ににほふはいづら白雪の枝もとを丶にふるかとも見ゆ　いづくへか行しとかの文もてきたる童をたづぬるなり
かくて世の中にありといふ事をきこしめして五條のきさいの宮よりうとねりを御つかひにて山々尋ねさせ給ふけるこ丶にありときゝていけばうせぬかしこにありと聞てたづぬれば又うせぬえあはずからうしてかくれたる所にゆくりもなくいにけりえかくれあへであひにけり
五條のきさいの宮　順子也　仁明后　文德御母　閑院左大臣冬嗣公女　うどねり前に出づ　山々尋ね　榮花花山尋る中納言云山々寺々手をわかちてもとめ奉る云々　ゆくりもなく不意なり
みやより御つかひになんまいりきつるとておほせ事にはかうみかどもおはしまさずむつまじうおぼしめし丶人をかたみとおもふべきにかくよにうせかくれ給ひにければいとなんかなしきなどか山はやしにをこなひ給ふともこ丶にだにせうそこし給はぬ御さと丶有し所にもかよはぎもし給はざなればいとあはれにな

んなきわふなるいかなる御心にてかうは物し給ふらんときこへよとてなんおほせられつるこゝかしこ尋ね奉りてなんまいりきつるといふ

此段は御使内舎人后宮のおほせごとをのぶる詞也　かうみかどもかく仁明もおはしまさずと也　むつまじくおぼしめしゝ人を帝の御存生に親しくおぼしめしゝ良小將を崩御の後は御形見とも御覧せらるべきにと也　やまはやし栄花初花云出家して山林に入ぬべき云々　こゝにたに后宮の御方也　御さとゝ有し所本妻などの方也　いかなる御心にて　良少將の遁世を本意なくおぼしめすよしなり

少將大とくうちなきておほせ事かしこまりてうけ給はりぬみかどかくれ給ふてかしこきみかけにならひておはしまさぬ世にしはしもありふべき心ちもし侍らさりしかばかゝる山のすゑにこもり侍りてしなんをごにてと思ふ給ふるをまだなんかくあやしき事はいきめぐらひ侍るいともかしこくとはせ給へるわらはべの侍る事はさらにわすれ侍るときも侍らずとて

かしこまりてうけ給はりぬ后宮へ啓する詞なれば也　かしこきみかげにならひて少將は帝の御近習にてありしゆへ也　しなんをごにて期なり人を思ひのやまんごにせめさもよめり　わらはへの侍る事后宮のさこの事をまでかけて仰らるゝ故に我子の事をも申出さるゝなり遍照子素性由性などありかぎりなき雲ゐのよ所にわたるとも人に心をおくらさらむやは

古今八別離部に入題しらず讀人不知とあり栄雅抄云限りなく遠くわかるゝとも人を心におくらすまじきとなり人を跡に置ずさそひて行心なり定家卿云身は野山の末に在ながら心に人をおくらせぬ心なりといへり後の字をおくるとよむ云々古今には第四句心に人をとあり此人とよめる子どものうへをいふと見る説もあれどそれには不レ可レ限とぞ遍昭集には　かぎりなき雲ゐのよそに成ぬとも人を心におくらさらめやとあり此時遍照の讀る歟又折にかなひたるゆへ古歌を詠吟せるにや

となん申つるとけいし給へといひける

后宮などへもの申を啓するといふ也

此大とくのかほかたちすがたを見るにかなしき事ものににずその人にもあらずかげのごとくになりてた

たみのをのみなんきたりける少將にてありし時のさまのいときよけなりしを思ひ出てなみたもとゞまらざりけりかなしとてもかた時人のゐるべくもあらぬ山のおくなりければなく〳〵さらばといひてかへりきて此大とく尋ね出てありつるよしをかんのくだりけいせさせけりきさいの宮もいといたうなき給ふさふらふ人々もいらなくなんなきあはれかりけるみやの御かへりも人々のせうそこをいひつけて又やりければありし所にも又なく成にけり

かげのごとく　總角云かひなしどもいとほそう也てかけのやうによはけなる云々　古十戀すれば我身はかけとなりにけりさりとて人にそはぬものゆへ瘦衰たるをいふ也　いらなく(イラナク)これも無威等歟　良

少將のありさまを聞てさふらふ人々も猛き心なくみなしほ〳〵と落涙せしなり遍昭集云入道のかほすがたいとなんかなしかりけるそのほどにもあらずなりてたゞみのをのみなんきたりける少將なりし時きよけなりしを思ひ出ていとかなしかりけるかたとき人のあるべき所ならねばかへり參りて事のよしかくなんとけいせさすれば宮かしこくしほたれさせ給ひて御返つかはすに人々もみなせうそこつけてやり給ひけれどかくれにければえたづねあはす云々

をのゝ小町といふ人正月に清水にまうでにけりおこなひなとしてきくにあやしうたうとき法師の聲にてごきやうしたらによむ此をのゝこまちあやしがりてつれなきやうにて人をやりてみせければみのひとつをきたるほうしのこしにひうちげなとゆひつけたる(なへにイ)。なんゐたると云けりかくてなをきくにこゑいとたうとくめでたう聞ゆれはたゞなる人にはよもあらじもし少將大とくにやあらんと思ひ(にイ)。けりいかゞいふとて此みてらになん侍るいとさむきに御ぞひとつかし給へとて

小野小町　不詳其出自

系圖云

篁（敏達天皇御末刑部卿峰守男　參議從二位配ニ流隱岐國ニ）──良眞（出羽守　一本當澄又常澄）
　├─女子
　└─女子　小町歌人（作者部類云出羽郡司女云々拾芥云出羽郡司女或仁明天皇ノ御時承和ノ頃ノ人云々）

には山ふしのとあり
續古十 岩の上にかたしき衣たゝ一重かさねやせまし
峰の白雲 玉六 岩の上の苔の衣もうつもれて只一重
なるけさの白雲 新千四 七夕の雲の衣はたゝ一重かさ
ねてうさくなる契哉　右いつれも此歌を本歌にて
よめり
といひたるにさらに少將なりけりと思ひてたゝにも
かたらひし中なりけれはあひてものもいはんと思ひ
ていきければかいけつやうにうせにけりひとてらも
とめさすれどさらににけてうせにけりかくてうせけ
る大とくなん僧正までなりて花山といふ寺にすみ給
ふけり
元慶三年僧正に任するよし元亨釋書に見えたり元
慶寺花山に在
俗にいますかりけるときの子ども有けり太郎は左近
將監にて殿上してありけるかくよにいますかりとき
く時だにとて母もやりけれはいきたりけれは法師の
子はほうしなるそよきとてこれもほうしになしてけ
り
太郎は左近將監或說云俗名玄利(ハルトシ)或云信時(アキトキ)法名素性

紹運錄云左近將監淸和御時殿上人云々
袋草紙云素性は住二石上良因院一云々かく世にいま
すかり遍昭の存生の時だに對面あらせんとて母の
子どもをつかはせしなり
かくてなん
おりつれはたぶさにけがるたてながらみよの佛に花
たてまつる
此歌前段のつゞきにあらずたぶさ奧義抄云手でを
いふ也云々臆　けがは汚也　たてながら立木のま
ゝにてといふ意也　みよの佛三世諸佛也　此歌後
撰三に入詞書云やよひばかりの花のさかりに道ま
かりけるに云々集には二月はかりに道をまかるとて
とあり 續古八 色々の花の匂を朝ごとに四方の佛に手
向つる哉法華方便品云以二一華一供二養畫像一云々
三代實錄廿五云山林自笑之花足レ供二三世之佛一云
々
といふも僧正の御うたになんありける此子をおしな
したうひける大とくは心にもあらでなりたりけれは
おやにもにず京にもかよひてなんしありきける此大
とくのしぞくなりける人のむすめのうちに奉らんと

てかしつきけるをみそかにかたらひけりおやきゝつけておとこをも女をもすけなくいみしういひて此大とくをよせず成にければやまにぼうしてゐてことのかよひもえせざりけり

此子をおしなしたうひけるたうびけるは給ひけるなり法師の子は法師なるぞよきとて得心もなき子をおしつけて法師になしてけれは心にもあらぬ新發意ゆへ親にもにぎりしと也　しぞく親族なりいとひさしう有て此さはがれし女のせうとごもなとなむ人のわざしに山にのほりたりける此大とくのすむ所にきて物かたりなとしてうちやすみたりけるにきぬのくびにかきつけゝる

人のわざ人を葬を云歟又佛事なとにや　きぬのくひ枕草紙云きぬのくびなとつくろひて云々袍の領をいふとそ　和名抄云釋名云　袷　音頸古呂毛乃久比　頸也所ニ以擁ニ頸也云々小補韻會云凡ッ衣ノ要衿著ニ項領一處皆曰ㇾ領云々女の兄の衣裝の領に書付しなり是も直に領に書しには有へからす物に書て領につけしなるへし

しら雲のやどるみねにそおくれぬるおもひのほかにある世なりけり

由性の歌にや我は此度かの女こゝそか事ありしにより世の人にもうとまれ立よるかたもなけれは雲の常にやどる山にすめりされば女も我を思はゞ兄とうちつれこふらひきてわれをもなぐさめともに此山にもあるへきをおくれてこぬ事は思ひの外なりとうらむる心なるへし

とかきたりけるをこのせうとの兵衛のせうはえしらで京へいぬいもうと見つけてあはれとや思ひけん是はそうづに成て京極のそうづといひてなんいますかりける

せうとの兵衛尉誰としらすこれはそうつに以下由性の事をいふなり絹蓮鈔云由性ハ少僧都雲林院延暦寺別當云々

むかしうとねりなりける人おほわのみてぐらつかひにやまとの國にくだりけりゐでといふわたりにきよげなる人の家より女ともわらはなどいできて此いく人をみるきたなげなき女いとおかしげなる子をいたきてかどのもとにたてり此ちごのかほのいとおかしげなりければめをとゞめてそのこちゐてこと

ひければ此文ふりきたりちかくてみるにいとおかし
けなりければゆめこと男し給ふな我にあひ給へ、おほ
きになり給はんほとにまいりこんといひてこれをか
たみにし給へとておびときてとらせけり
おほわ異本におほうわさあり萬六寺々之女我鬼申
久大神のなとあり神字わとよむ大神也　みてぐら
つかひ幣使なり公事根元云四月大神祭是は上の卯
の日に行はるもし卯の日三あらは中にあるへし先
丑日使たつ大原野のごとし此祭冬はとらの日使た
つそのゆへは夏は卯日の曉冬は夕にまつる故なり
大神とは大三輪の神なり大物主の神の御事なり云
々　井手山城なり大和へ通路也正治百首に　大和
路をたへず通ひし折のみや先くみけん井手の玉
水と俊成卿も讀給へり　めをと丶めて袖中抄には
馬をと丶めてそのあこまろこちゐてことあり六條
家本の趣にやこちゐてこは此方へ將て來なりさら
しな日記云いつら猫はこちゐてこ云々
さてこのしたりけるおびをときとりてもたりけるふ
みにひきゆひてもたせていぬ此子とし六七ばかりに
ありけり此おとこいろこのみなりける人なればいふ

になんありける○此子はわすれず思ひもたりけり男
ははやう忘れにけり
袖中抄云さてかの子のしたりける帯を又ときとり
てもたりける文をひきゆひてもたせていぬ云々是
も本の異なるへしさてこのしたりける帯をときと
りてもたりけるふみに異本に子の字を書男我帯を
兒にとらせ又兒の帯をときとりて我もたる文にひ
きゆひて兒にもたせけるにや袖中抄に又ときとり
てとあるにて文義よくきこゆ
か丶て七八年ばかりありて又おなしつかひにさ丶れ
てやまとへいくとてゐてのわたりにやどりてゐて見
ればまへに井なんありけるそれに水くむ女どもある
がいふやう
袖中抄には水くむ女とものわらはなどがいふや
うと有歌林良材には此本文のごとく書しめ給ひて
大和物語諸本如此是は水くむ女初よりの事をかた
るを書つけたるへし云々伊物云むかし男契れる事
あやまれる人に　山城のゐての玉水手にむすひた
のみしかひのなきによりけり此歌此段の心にて
よめるといふ說も侍るにや又下帯の物語と云もの

もあるよしなれどいまの世には見えずとぞ十玉さき
かへし井手の下帯行めぐり逢せ嬉しき玉川の水
新千三 山城のゐでの下帯ながき日にむすふもあかぬ
玉川の水 六百番歌合 結ばんと契りし人をわすれめやま
たかけあさきえての玉水 是等の歌この段より出
たり右三首の中さきかへし井手の下帯の歌は初逢
戀の心をよみ給へる俊成卿歌なり袖中抄云とよま
れたるは此大和物語の心と見えたりされど此物語
は書さしたれば行めぐりて逢よしもなきをさもあ
りぬべき事なれば逢たるやうによみなしたるにや
云々

これひらのさいしやう中將にものし給ふける時故兵
部卿のみやの別當し給ふければつねにまいりなれて
ごだちもかたらひ給けりその君うちよりまかで給け
るまゝに風になんあひ給ふてわつらひ給ふけるとふ
らひにくすりのさけさかなてうじて兵衛の命婦なん
やり給けるそのかへりことにいとうれしくとひ給へ
るあさましうかゝるやまひもつくものになんありけ
るとて

これひら 參議正四位下伊衡系圖云南家武智麻呂
末富士麻呂孫左兵衛督敏行男母從五位上も治弟娓
女云々 宮の別當みやのうちの事を萬事とりはか
らふを云 ごたち宮の侍女などを云なり その君
伊衡也 風になんあひ給ふて風邪を煩ひ給ふなり
それゆへ宮より御見まひ有なりくすりの酒本草綱
目造釀類に諸藥酒數方ありさかな藥の酒藥のさか
など見たる說もあるにやいかゞ是は御見まひに藥
酒を贈り給ふ故肴は酒につきたる物なれば何にて
もさかなをそへてをくりたまへるなるべし文選短
歌行にも我酒既旨我肴既臧などもあり てうして
調也こしらへとゝなふるなり常夏云ちかきかはの
いしふしやうの物おまへにてゝうじて云々 兵衛
の命婦御使なり誰と不知

青柳の糸ならねども春風の吹はかたよる我身なりけ
り

吹はかたよるとは風氣にわづらひ給ふ心なりよる
は糸の緣なり

とあれは兵衛の命婦返し

いさゝめにふく風にやはなひくへき野分過しゝ君に
やはあらぬ

吹はかたよりなと承れとも春風なとのかりそめにそと吹たるにはなやみ給ふへきにあらす秋の野分のあらき風をさへ事ゆへなく過し來り給ふ君にておはせばさなくさめて讀るなるへし伊衡秋の頃も不例におはしけれとほとなく本腹し給ひし事のありしにや　いさゝめかりそめなり古十いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心はせをは人に見えつゝのわき暴風と書

今の左のおとゝ少將にものし給ふける時式部卿の宮につねにまいり給ひけりかの宮にやまとゝいふ人さぶらひけるをものなとの給ひけれはいとわりなくいろこのむ人にて女いとおかしうめでたしと思ひけりされどつねにあふ事かたかりけりやまと

今の左の大臣　小野宮實頼公なり少將にものし給ふける延喜十九年正月廿八日右近少將式部卿の宮敦慶親王なり

人しれぬ心のうちにもゆるひはけふりもたゝてくゆりこそすれ

心のうちにもゆる思ひの火なれは烟もたゝでとよむ也　たゝで古今序にはたゝすとありて不立不斷の兩說なり此歌は不立の心なりとぞ

といひやりけれはかへし

ふしの根のたへぬ思ひもあるものをくゆるはつらき心なりけり

烟もたゝてなとあるによりて富士をとり出し給へり富士の煙の昔よりたえぬもあるをくゆるとはかりは淺き思ひなればつらしとなり此贈答續後撰十三に入詞書云淸愼公少將に侍りける時道しける式部卿敦慶親王家大和云々淸愼公返歌第二句たえぬ烟もとあり

とありけりかくて久しうまいり給はざりける頃女いといたうまちわびにけりいかなる心ちしけれはかさるわざはしけん人にもしらせで車にのりてうちにまいりにけり左衛門のぢんに車をたてゝわたる人をよびよせていかて少將の君にものきこえんといひければあやしき事哉たれときこゆる人のかゝる事はし給ふぞなといひすさみていりぬ又わたれはおなしごといへばいさ殿上なとにやおはしますらんいかてかきこえんなどいひて入ぬる人も有うへのきぬきたるものゝいりけるをしゐてよびければあやしと思ひてき

たりけり
内にまいりにけり　實頼公内裡におはすを知て大和の行しなり左衛門陣拾芥云衛門陣左延春門右宣秋門又建春門下云東面三間號二左衛門陣一云々わたる人まへわたりする人なりいひすさみてたゝうちいひて行なり
おなしこと同し如くなり　いさ　不知なりうへのきぬ袍なり
少將の君やおはしますとひけりおはしますといひければいとせちにきこえさすべき事ありて殿より人なんまいりたるときこえ給へと有ければいとやすき事なりそも〳〵かくきこえつぎたらん人をはわすれたまふましやいとあはれに夜ふけて人ずくなにてものし給ふ哉といひていりていとひさしかりければむごにまちたてりけるからうしてこれもいひつがでや出ぬらんいかさまにせんと思ふ程になんいできたりけるさていふやう御前に御あそびなどし給へるをからうしてなんきこえつればたかものし給ふらんいとあやしき事たしかに思ひ奉りてことなんの給ひつるといへばしんじちはしもつかたよりなりみつからきこえむとをきこえ給へといひければさなん申ときこえければさにやあらんと思ふにいとあやしうもおかしうもおほえ給ふけり
殿より　少將の方よりなり大和たばかりていふなりそも〳〵かく袍を着し人の大和へ戯ていふ詞なり　むご無期なりいつともなきをいふ　浮船云むごにふしたり云々　いかさまにせん大和の意なり
たかものし給ふらん　少將のゝ給ひし事をとりつぎの人申詞也　しんしちは眞實也大和の詞也きこえんとを　をは助字也　さにやあらん少將の推量なり
しばしといはせてたち出てひろはたの中納言の侍從にものし給ふける時かゝる事なん有をいかゝすべきとたばかり給けり
ひろはたの中納言　源庶明卿なり　紹運錄云寛平御孫齊世親王ノ三男中納言左兵衛ノ督母ハ山城守橘ノ公廉女號ス廣幡ト云々公卿補任云延長三年正月卅日侍從同七年九月廿三日任ス左京大夫ニ云々たはかり給けり
伊物云大將出てたはかり給ふやう云々闕疑抄云日

本紀に思慮（タハカリ）と書り萬葉には方便の二字をよませたり思案了簡する心なるへし云々庶明の了簡をもきゝみつからも思案し給ふなり

さてさゐものちんにとのゐ所なりける屏風たゝみなともてきてそこになんおろい給けるいかでかくはとの給けれはなにかはいとあさましう物のおほゆれは（えけれはイ）

とのゐ所　宿（トノヰ）とも宿直（トノヰ）とも書休息所なり　おろい給ける　大和を車よりおろし給ふなりいかてかくは　少將の尋ね給ふ也　いとあさましうものゝおほゆれは大和の詞也　書さしたる文體故あるにや

亭子のみかど石山につねにまうで給ひけり

元亨釋書云石山寺者聖武帝創二東大寺一鑄二一十六丈遮那銅像一多聚レ金爲レ薄此時本朝未レ有二黄金一帝語二良辨法師一曰傳聞和州金峰山其地皆黄金也師祈二金剛藏王一得レ金資二銅像薄一不二亦宜一乎辨入二金峰山一持念夢藏王告曰此山黄金不二敢自恣一也今示二汝二別方一近州湖西勢田ノ縣有二一山一如意輪觀自在靈應之地也汝至レ彼持念必得二黄金一辨便赴二勢多一時老翁座二大石上一釣レ魚辨問曰汝何人對曰我是此山主比良明神也此地觀音之靈區也言已不レ見辨就二其石一縛レ盧安二如意輪像一持誦不レ幾奥州始貢二黄金一爾後刻二丈六悲像一藏二先像於中一亦造二金剛藏王及執金剛神一安二左右一其像各八尺當レ夷二基趾一地中得二五尺寶鐸一益爲二靈地一云々

くにのつかさたみつかれ國ほろひぬべしとなんわふるときこしめしてこと國々のみさうなとにおほせてとの給へりければもてはこひて御まうけをつかふまつりてまうで給けり

くにのつかさ近江の國司なり民のつかれたひ／＼御幸あれは民のうれへ國の費ゆへうら／＼國司の歎きけるよし聞しめして外國々の御庄へ御幸賄の事をおほせらるゝなり御庄は院の御知行所なり須磨云領し給ふみそうみさき云々

あふみのかみいかにきこしめしたるにかあらんとなけきおそれて又むげにさて過し奉りてんやとてかへらせ給ふうち出のはまによのつねならずめでたきかりやどもをつくりて菊の花いとおもしろきをうへて御まうけつかふまつれりけりくにのかみ（はイ）。たちおそれてほかにかくれおりてたゞくろぬしをなんすへおきたりける

いかにきこしめしたるにか　國司の内々つぶやき
し事をいかに聞しめしゝやらんと恐るゝなり又む
げにさて當國へ御幸なるにその國司無下にしらず
かほにてあらんはいかゞなればと還御のみぎり此
儲をせしなり　うち出の濱今の大津の邊なり　く
ろぬし　紹運録云大友皇子天智皇子曾孫與多王孫都堵
牟麿男云々　榮雅抄云志賀明神黑主といふ園
城寺の地主也と云仁和のはしめつかたまて存生す
彼御時大嘗會の和歌を献するよし見えたり或云陰
陽の人歟後撰集に志賀の唐崎にて祓して祿にあつ
かるよし見えたり云々
おはしまし過る程に殿上人くろぬしはなどてさては
さふらふぞとひけり院も御車をさへさせ給ふて何
しにてゝにはあるぞとはせ給ふければ人々とひけ
るに申ける
なとてさては　何とてさやうには在ぞと問なり
さゝら波まなくきしをあらふめりなぎさきよくは
君とまれとか
さゞら波とゝ浪に同し總してちいさきをさゝとい
ふ和語のならひなり此打出の濱の諸淸くは君の御
心にもかなひてとまり給はんとてか波も岸を洗ふ
とみゆるといふにそへて國司奔走の心をのべしな
るへし續後撰十六さゝら波まなくきよする浦をこそよに
あさくとも見つゝ忘れめ新千載十六亭子院石山に詣させ
給へる日近江國の司打出濱に御まうけつかふまつ
りたりけるをたゞに過なんとせさせ給ふければよ
める大伴黑主さゝら波ひまなくきしをあらふなり
諸淸くはきても見よとやとあり
とよめりければこれにめで給ふてなんとまりて人々
にもの給ひてかへらせ給ける
よしみねのむねさだの少將ものへ行みちに五條わた
りにて雨いたうふりければあれたるかどにたちかく
れて見いるれば五間ばかりなるひはたやのしもにつ
ちやくらなどあれどことに人など見えずあゆみいり
てみればはしのまゝに梅いとおかしう咲きたり鶯もな
く人ありとも見えぬみすのうちよりうすいろのきぬ
こきぬのうへにきてたけだちいとよきほどなる人
のかみたけばかりならんとみゆるが
よしみねのむねさた　遍昭也　つちやくら　土屋
藏歟　うす色のきぬ桃華蘂葉云たて紫ぬき白の衣

をいふ云々　こき衣紅の濃也枕草紙云こききぬのいとあざやかなる云々　かみたけばかり　髪の長させいだけ程あるをいふなり

よもぎおひてあれたる宿をうぐひすの人くとなくやたれとかまたん

古十九 梅花見にこそきたれ鶯の人く〳〵といとひしもをる粲雅抄云鶯の人くる〳〵といとひをるとなり鶯は人く〳〵とゞ鳴なきはてゝ切聲に早く鳴がさ聞ゆる云々 續古一 梅花ちりぬるまでに見えざりし人くとけさは鶯ぞ鳴歌の心我栖は蓬など生しげりて荒たればたれ詩ねごんともおほえぬに鶯の人來ると鳴はいかゞ誰をまつきぞやとよめるなり帚木云世にありと人にしられずさびしくあばれたらんむくらの門に思ひの外にらうたげならん人のとぢられたらんこそかぎりなくめつらしくはおほえめいかてはたかゝりけんと思ふよりたかへることとなんあやしく心とまるわざなへき云々枕草紙云女のひとりすむ家などはたゞいたうあれてつゐぢなどもまたからず池などのあるところは水草ゐ庭なども蓬しげりなどこそせねども所々すなこの中よりあをき草見えさびしげなるこそ哀なれ物かしこげになだらかにすりして門いたうかためきは〳〵敷はうたてこそおほゆれ云々引合て見るべし

とひとりごつ少將

きたれどもいひしなれねば鶯の君につけよとおしえてぞなく

我いまも此所へ來たれどもいまだうゐ〳〵敷いひなれぬやどりなれば先我來りしよしを君にあなひし告けよとの心にて鶯もかく鳴ぞと讀る成べし

と聲おかしうていへば女おどろきて人もなしと思ひつるにものしきさまを見えぬる事と思ひて物もいはずなりぬ男えんにのほりてゐぬなどかものゝ給はぬ雨のわりなく侍れはやむまではかくてなむといへばおほちよりもりまさりて。こゝは中々といらへけり時はむつき十日のほどなりけりすのうちよりしとねさし出たりひきよせてゐぬすだれもへりはかはぼりにくはれて所々なしうちのしつらひ見いるればむかしおぼえてたゝみなどよかりけれどくちおしく成にけり

ものしきさまを見えぬる事と人もなしと思ひてあらはなる體にてありしを女のはち思へるなりおほちより　大略也　しとねさし出たり　箒木云すのこにゐ給へばしとねさし出たり云々　和名抄云野王曰茵（音因和名之土禰）かはぼりにくはれて蝙蝠（加八）也（一名伏翼）一名仙鼠柏玉集に　ふるす有と燕やきつるかはぼりのそれたにあらずこすのまぎれに此詞より出たる御製なるべし　むかしおぼえて　榊云めつらしき御たいめんの昔おぼえたるに云々昔のおもはるゝ心也口おしく成にけり　見ぐるしく成たる也荒屋の體思ひやりてみるべし

日もやう〳〵暮ぬればやをらすべり入て此人をおくにもいれず女くやしと思へどせいすべきやうもなくていふかひなし雨は夜一夜ふりあかして又のつとめてそすこし空はれたるおとこは女のいらんとするをたゞかくてとていれず日もたかうなれば此女のおやらはばかりさゞめたる（たりけるにイ）にかたいしほざかなにして酒をのませて少將にはひろき庭におひたるなをつみてむし物といふものにしてちやうわんにもりてはしに

は梅の花のさかりなるをおりてその花ひらに女のてにてかくかけり

やをらすへり入て　帚木云やをらより給ひて云々静なる義也といへり　又のつとめて　翌日の早朝也　あるし饗應しもてなすをいふことねりわらは　小舎人童也供の者は前夜みなかへして此童はかりとゞめたると見えたり　ちやうわん　椀に大小有其椀中に大きなるをいふなるべし又或云重椀なりかさねたる椀也といへりはしには　箸端雨說也女の手にてとは母のかきたるにや

君かため衣のすそをぬらしつゝはるのに出てつめるわかなぞ

前の詞に庭に生たる菜をつみてとありて歌には春野に出てとよめるいかゞとおほゆれどひろく荒わたりたる庭なれば野外の心ちせるよりかくよめる歟又幸芽せる心もあるべし一古君が爲春の野に出て

わか菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

おとこ〳〵これをみるにいとあはれにおぼえてひきよせてくふ女わりなうはつかしさおもひてふしたり少將おきてことねりわらはをはしらせてすなはち車にて

まめなるものさま〳〵にもてきたりむかへに人のあればいま又もまいりこんとていでぬそれよりのちたえずみつからもきとふらひけりよろつのものくへごなを五でうにてありし物めつらしうめでたかりきと思ひ出ける

車にてまめなる物　實なるもの也澪標云まめ〳〵敷御とふらひもあり云々內證の用意までなりと注せり此女の家事たらぬすまゐと見ゆれは內々の事迄何くれと心つきしなるへしなを五てうにてありしもの凡なにゝよらず心にしみておかしく忘れかたき事あればそれによりたる事は見聞につきて心のとまる人情のならひなりかの紫のひともとゆへにとよめるにおなし風情ならんかし

としつきをへてつかふまつりし君に少將おくれ奉りてかはらん世を見じと思ひてほうしに成にけり

仁明崩御　宗貞遁世みな前に記

もとの人のもとにけさあらひにやるとて

もとの人　遍昭俗なりし時の妻なとにや

霜雪のふるやかしたにひとりねのうつぶしぞめのあさのけさなり

霜雪のふるやは霜雪の降といひかけて古屋をそへたり霜雪もたまらぬ荒屋の住居は樹下にも等しかるへし苦修の心もあるへし此歌古今十九俳諧歌の部に題知らす讀人知らず世をいとひ木の下ことにたちよりてうつふしそめのあさのきぬなりとあり遍昭集も古今におなし榮雅抄云世をいとひ木の下ことに立よりあさの衣を身にまとひ丸ねにずる事をうつふしそめのあさの衣にいひつゝけたり世をいとふ人の衣むかしはふし染にしたるなり今は墨染にすると同事なり雲臥の客といひて雲にまじはり山に臥す樹下石上の體なり又ふしかねにて染たる衣なりつるはみ色ともいふふしそめにそへてうつふしといへるなり物おもふ人のさまうつふしたる心なり云々又觀念の意も有歟蜻蛉云うつふして侍るときこえていでこねば云々辨の尼の初なり

千十八長歌　うつふしそめのあさ衣花の袂にぬぎかへて云々

となんありける

古今に入しとは上句少しかはりたれともその心はおなしかるへし此歌彼集にても誹諧の部巻軸にの

せたり又遍昭集にも巻の終に在此物語一部の終もこの歌にて書とゞめたりまことにゆへあるにや抑此物語亭子院おりゐ給んとするころといふより書はじめて御くしおろし給ひ所々山ふみし給ふ事をのべて終には此うつぶしそめの麻のけさにて一部をおはれり首尾ともに佛道の上なればこの物語は花山法皇の御作といふ説も據なきにはあらざるべしされどまへにもいふがごとく作者の沙汰は異説まち〳〵にして清輔朝臣の時代にさへ不詳のよし書おき給へはまして末世にて定めきこえん事はかたくなん有へきさて又此草紙にもかきらず世に翫ふものがたり伊勢源氏をはじめてよむ人の心得あるへき事は彼物語の諸抄にも古賢の庭訓つまびらかなれば同し事をかくべきにもあらず師説をうけて了知すべき物ならんかし

大和物語錦繡抄上卷

濱臣云此物語の大むねは打聞にして作物語にはあらす歌をもとにて文はすゑなり撰集家集なとの編書に近しされは作者の歌とおほしきはなしみな古今の人々の歌を打聞にしるしたるはかりなり伊勢物語に文勢の似通ひたる所もあれとよく考れは伊勢には事遠くして中々に宇治大納言物語のかきふりにちかしされは作り物語にはあらすして打聞物語也其打聞の歌をかきとめんとてはしかきけるほとの文詞おほしされはこそ歌はよくて文はつたなしこれまこと拙きにはあらす伊勢なとのやうにわさとつくり構へしものならねはなり古今後撰の歌をのせたるなかに勅撰には讀人しらすとあるうた此物語に作者をたしかにしるせるありてこれはた伊勢物語のしひて引あてし例とはたかひてさる傳へを打聞のまゝにしるせしなれはなか／＼に古今後撰にかくれたる作者をしるへき事ありかの桂のみこの御歌などは古今にはわさといみて御名をしるさゞるを此物語にてしらるゝなとは古今にははゝかる所ありてわさと讀人不知と擧られけむかし勅撰に讀人しらすとのするにさま／＼の例ありて作者はしれなから時にさゝはりて讀人不知とかける一例なるへし又この物語にいにしへ今の人々の交れるも打聞のならひなりいにしへありし事ともを傳のまゝに今物かたりきかするそのまゝにかけるもあるへしまた文勢に巧拙ありて一人の手にならぬやうにみゆるも打聞には人の書おけるをたま／＼筆にまかするもなき事ならすよく／＼腹にあちはへみは作物語ならぬ打聞物語なるしられぬへし

眞淵直解云此文花山院のかゝせましゝといふ事さたかにしりかたけれと凡この文書けむは其御時なとの手ふりと見えたりされとこのおはしましゝ頃まで有けむ人のうたも入たりかゝるものには昔の人のうへを耐はいへるならひなるにいかにもおほつかなし其程に遠からぬ清輔朝臣すら作れる人はしらすとあれは後にいへるはおしはかりの事しるきなりさて此書に先帝とあるを延喜の御代としおほきおほいまうち君とあるを貞信公仲平とし今の左のおとゝといふを小野宮殿とするにつけて天暦の頃に出来しなといへとこは條々異にていにしへなる後なるまじれりその

いにしへをいふ時はそのをりにしたかひて今の左のおとゝなと書こと常の事なれは是も時をさすよしなしたゝ平兼盛ぬしはもはら天暦の御時に見えたる人にて花山の御時の頃まても在つらむ事謹かいへるも同し且詞のさま古ことの殘りたる誤れるもまたこれかける人みつから讀つらむとみゆる歌のあるに其歌とも間〻花山一條の初つかたの時までの手ふりとこそみゆれ伊勢物語は天暦なとの頃に書しとはみゆれとも文のさま古にならひて言少て心こもり宮ひかにして物あつしこの大和は詞多して弱くをかしき古言も拙きもましれりそか中にはしめと末のをち〳〵はよきかきなせしもなりなからの程にはいとことはりもなく詞も拙きあり且伊勢物語にある事をかへて書しはいよ〳〵拙くわろし又奈良のみかと柿本人麻呂なとの事かきし殊に時世をもしらぬ者のおよつれことによれる物なりそのよしはすへて其所々にしるせるをみよさて古き物語ふみの今世に(本のまゝ)をもていはゝ伊勢物語はことのさまいにしへにより詞あつくてみやひ也源氏物語は後世につきてことうすくて心やり過たりそれらの間なる物とみゆるは空穂大和なとなり

● 竹取は古しといへとも賞ことのさまつたなけれはいふにたらす又住吉物語は今あるは後の詞にて事のさまもいにしへならぬ事おほし古ありしはうせて後に僞作れるにや又ふるきかはし〳〵ありしに後人の作りそへしにやかゝれはこのやまとを必ふるき物とせぬをもしれ又枕草紙にふるきものかたりふみの名をならへ擧しにもやまとは末に出せしをも思へさてこの物語の辭はさはいへとなたらかにして古き意もましれゝは末の世の人のいにしへに歸りのほらむはしの一きたとならすしもあらす歌ももとより延喜なとのころより程なき人のはさらなり其後なるもおのつからのとやかなるしらへもあれは又みるへきものなり

寶暦十年の冬人々つとひて讀ける時加茂眞淵しるす

直解凡例

此物語の注世に行はれたるはふえうなる事もひかめるもいとおほくなん有けるさるを縣居の大人つはらに考正してもとの注をけちあるは書かへなとし給へ

りしを我友村田春海ぬしか家にひめおけりそをこひ寫してこたひは大人のほいのまゝに書つらねたりいちはやく事の心を思ひとかむれうにとてし給へるなれはしはらく直解となん是か名をおほせにけり
此物語注なき本は二巻にわかてり首書本は五巻にわかてり季吟ぬしか注の本は六巻にわかてりはやくよりさる本とものありしにや又かける人の心もてわかてるにやおほつかなけれは其わかてる所々に其よしことわたりおきつ今はたよりにつきて三巻にわかてり本文のかたはらに眞字をしるせるはおのか心にかつ／＼思ひよれるなり猶たらさるはつき／＼におきなふへしはたかく思ひよれるもいとし□なりはひの暇ふつくゑの本に燈火をかゝけて書寫せるなれはをくらきこゝろに思ひたかへたるも書誤れるもおほくなん有へきそは後に見ん人さらに正しつへきにこそ寛政五年九月源躬弦しるす

大和物語

亭子院のみかと云々伊勢のごのかきつけける
直解云宇多天皇おり居させ玉ひて始は朱雀院におはしまし其後亭子の院を作らせ給ひてそこにおはします故に亭子院と申なり其御位を譲り奉りたまひておりゐさせ給ひしは寛平九年七月也伊勢のごは伊勢守繼蔭の女なる時出てつかへし故にいせご呼ふなりかの家集に大和に親もたるといふは其後大和の任の時と見ゆ此院のみかどの皇子を産し故にあかめて御といふすへて皇子うめるをは御息所といふを略きたるなり〃濱臣云此説非なり本朝文粹菅公詩云閭巷稱辨御（係於女優御號取夫人女御之義也）とあるによるへしされは皇子うまぬ女房をも某の御といへり某の子なりとて清てよむ説あるはいかゝ
後撰離別大鏡 わかるれとあひもをしまぬ云々かなしき
直云もゝしきは百石城てふ事にて皇宮をほめたる語なり今の京の比となりては轉してたゝ宮城の事にいへり古はもゝしきの大宮なとのみいへりそは冠辭考にくはし心はおりゐさせ給はゝいせもおなしくまかてぬへきなこりを思ひてあひもおもはぬなとよめるかあはれなり
とありけれはみかと云々
後撰離別大鏡 身ひとつにあらぬはかりを云々ゆきめくりてもなにか云々となむありける

直云すへらきは我御一人はかりにもあらねはまかつるとても又行めくり参りてなへての帝にもつかへまつりて内わたりをもみさらんやと讀ませるなり大鏡には法皇のかゝせ給へりけるを延喜の後に御覽しつけて傍にかきつけさせ給へると承るはいつれかまことならんとありされと上のをは亭子院の大御歌としても聞ゆれと此歌を延喜の大御歌としていかにかきかむ此説あやまりなり

みかとおりゐ給ひて云々やかて御もとにかしらおろしてけり

末書云に此條宇治大納言物語にもありて詞少しく異なり

直云宇多帝の御くしおろしませしは或書に昌泰二年十月十四日仁和寺にて出家ましませしといへり此秋冬のたかひいつれにても有なんともにたしかなる書ならねはなりさて後撰に山ふみしてみとせといふにみかと歸らせ給ふとあれは其間高野熊野なとに御幸のことおはしけむ

抄云ひせむのせう備前肥前の兩説なり橘良利

新古今作者　肥前國藤津郡大村人也出家號二寛蓮一爲二宇多院殿上法師一圍碁之堪能也因爲二碁聖大德一延喜十三年五月五日碁聖奉勅作二碁式一獻レ之云

前田夏蔭按實物集には橘能使とかき新古今集には良利宇治大納言には義敏と書りいつれか誠ならん　直云橘良利碁の上手也し事扶桑略記なとにも見えたり

人にもしられ給いで云々たかひつゝありき給ふ

抄云うちよりとは今上醍醐のみかと成へし

いつみの國にいたり云々このよしとしのたいとく（大德）

新古旅　ふるさとのたひねのゆめにみえつるはうらみやすらん又ととはねは

とありけるに云々寛蓮大とくといひて後までもさふらひける

夏蔭案和名抄和泉國日根郡あり

直云歌の意故郷人のうらむるによりてゆめにみえつらむといふなり

故源大納言宰相におはしける時

抄云清蔭大納言正三位陽成院の御子母紀氏號二紀君一贈二源姓一天暦四年七月三日薨拾遺集の作者なり故の字はうせし人の名にかうふらしむるなり

京極のみやす所より云々一えた二えたせさせて給へときこえ給ひけれは

直云こは御息所より御賀の設の事を清蔭へいひ遣

はし給ふなり古は物を枝につけて捧し故さゝけ物一枝とはいへり其枝は松梅櫻何にてもよしある枝をするなりさて多く作り枝なりしほみなとするかうるさければ祝ふ時はいよゝ作り枝につくるなりひげこをあまたせさせ云々何かとみなあづけてせさせ給ひけり

直云清蔭はしより此事を僕子に頼あつからしむるなりとし子は後撰集に歌入たり拾遺集には承香殿僕子とみゆ髭籠は右にいへる枝に組して結び付くるなり敷物は枝物の外にたゝ敷物に敷をいふなりそれは先下には地敷といふあり又臺の上にも敷てそれか上にさゝけものをおくなりその敷物とはいろ〳〵なり錦にても又綾なとにきぬのうらつけなともすよりてくみは髭籠を枝につくるれうにも又かの臺の敷物に四方に組をふせてその伏組の末を四隅より引下て足の所々にてあけ巻むすひて末にふさ付て是とひとしくさくる也其組は色々あり

其物ごもを九月つこもりに云々人のもとにおこせたりける

ちゝの色に云々いまはしくれになるをそめまし

抄云源大納言へとしこのいひつかはせる也　直云かく様々の色を染帯して秋もすきしかは今よりは時雨にそむる物もあらしとはかなくよめる也

其物いそきたまふ(ひイ)ける時はひ(ひイ)まもなくこれよりもかれよりもいひかはし給ふけるを云々いはでしはすのつごもりに成にければ

直云其事とやとは此事にとりあへむいとまやなかりけむといふなりしはすは年みつるといふ語を略きてつをすにかよはしたるなり東麿のいはれたるこそ古語のとき様なれ奥義抄なとの説いとわろし

抄云奥義抄色葉抄等云僧をむかへて佛名をおこなひあるは經をよませ東西にはせはしる故に師はす月といふ心なるよししるし給へり

かたかけのふね云々おもひ出つるきみ

直云風波たてる時は島陰なとのかたかけによりし舟は浦をそれに乘れる人にや波のさわく時のみ物して静なれはおもひも出ぬよと云り萬葉に風をさけて島陰をこくことおほくよめり　夏蔭案此説一わたりいはれたるやうなから未うけかたし躬恒集にも別の歌にかたかけの船にやのれるしら波のた

つはわひしくおもほゆるかなと見ゆ
となんいへりけるを云々此家にありけるを折て
直云其柳の中にて殊に長きを物よりといへり物さ
はすへてこの物をさゝていふ詞なりけにとは萬葉
に異の字又勝字なと書てことに勝れてなといふ詞
なり
青やきの云々おもひいてけれ
抄云はしめ倭子のさわく時のみ思ひ出るきみとい
ひしにそへてのとかなるをりしもこそおもひ出れ
との源(なりイ)大納言かへしなり
とてなんやり玉へりけれは云々のちまてなんかたり
ける
直云になくは似るものなきなり
野大貳純友かさわきの時うてのつかひにさられ云々
いたうば(きイ)り云々いかてきかんと思程に
朱書云此段宇治大納言物語ニ載テ詞少しく異也抄云野大貳勸物云參議小野好古
天慶三年正月兼追捕凶賊使正五位下左近少將四
年五月一日四位下少將如元五年正月叙愚案野大貳
は小野氏の大貳なるへし參議小野篁を野相公とい
ひしたくひなれは也　直云此うての使の事扶桑略
記日本紀略等にみえたり純友かさわきとは朱雀院
の御時伊豫守從五位藤原純友おほやけに背きたて
まつりて天慶四年終に亡ひたる事は李部王記等に
見ゆかゝいたうはりとは加階は位ののほる事たう
はりは此度の功に田戸なと玉はるべき事なりをさ
〳〵は長々とかくへし轉しては專らの意にいへり
こゝも其心にて專ら聞えすといふなり
京のたよりあるに云々月日なとかきておくのかたに
かくなん
抄云近江守きんたゝ勸物云源公忠大藏卿國記男右
大辨號二滋野井辨一
撰集二たまくしけ云云あらんとおもひし
抄云あけなからとは五位の袍赤色なれば五位のま
ゝにてあらんとはおもはさりしとなり
これを見てかきりなくかなし云云文の詞にはなくて
たゝかくなんありける
抄云思按後撰集に好古の返しあり　あけなから年
ふる事は玉匣身のいたつらになれは也けり　直云
後撰なる好古の返し今こゝにもありつらむを後に
や書おとしけん　朱書云宇治大納言物語にも好古

の返しをのせす
前坊のきみうせ給ひにけれは云々さりけれはよみて
いだしける
抄云坊とは東宮坊也前といふ字は以前にかくれさ
せ給へるをいへり是は保明親王の御事なり勘物云
延長元年三月廿一日薨諡號爲二文彥太子一同年四月
廿六日立二女御穩子一（昭宣公女）云々大輔は前坊御
乳母也或說源たすくの女云々ゆゝしとて大輔泪に
のみくれてあれは立后のめてたきに忌はしきとな
り大鏡に大輔前坊を夢にみ侍て「戀しさはなくさ
むへくもあらさりきゆめのうちにも夢とみしかは
とよみし事侍
わひぬれはいまはと云々なみたなりけり
直云此物をといへるは物おもふといふにはあらす
ものは事をといはんかことしいまはおもひうんし
てせんかたもなしとおもへとも其心に似す泪の落
ることなり
あさたゞの中將人のめにて有ける人にしのび云々い
とあはれとおもひけりさてよみてつかはしける
抄云朝忠勘物云三條右大臣男天慶五年正月廿日左
近中將六年參議後中納言右衞門督云々かのをとこ
ゝは其女の本夫なりひとの國の守とは京より畿內
又其外の諸國をさして人の國といふなりこれもか
れもかの男受領にて其國へ下るとて此女をも引ぐ
したる故朝忠も女も哀にかなしくおもへるなり光
源氏空蟬のいよの介にぐしてくたりし名殘をおほ
してけふわかるゝもふたかたになとよみ給ひしに
倣侍れは此段のていをもて紫式部もかけるにや
たくへやるわかたましひを云云そらにもてはなるら
む
直云われはたましひもこゝになきまてたくへやる
物を君はいかてそこはかとなき遠き道の空に我を
はなれ行らんとうらめるなり此はかなきはそこは
かとなきなり
男女あひしりて年へにける云々男もあはれとおもひ
けりかくなむいひやりける
抄云かやうに誰となく侍る段は又誰と非可勘也
直云かくやうに其人ともさゝぬは物語のつねにて
實はしるへからねは強て求むるはわろし
新勅撰四
あふ事はいまはかぎりとおもへともなみだはたえぬ

ものにそありけるを　むないとあはれとおもひけり
監の命婦のものに中務のみやおはしましかよひける
云云こよひはえなんまうでぬとのたまへりければ其
御かへりことに

抄云監の命婦命婦は女官なり勅命なといひ傳る官なりとそ監物なとのむすめの命婦なるへし中務の宮兼明親王なるへしかたのふたかりとはは丶き丶の巻にこよひなる神うちよりはふたりかりけりとあり其神のふたかりしかたへはゆかぬ事なれば方違へとて他所へ行てそこより往も歸りもすれば方の違ふ也　直云命婦はもとは五位以上の官女をすへいふ事なるを中頃よりは五位の勅命ある女房をいへりまた五位以上の男の妻をも外命婦といふこ丶はた丶つかふる女房をいふにて監の命婦とあれば將監なる人のむすめの命婦なるをいふなりすへて官女はその父などの官をもて呼名とするなりさて此人は考がたし　夏蔭案元良親王集云源命婦にかたふたかりたればなど給ひければとてあふことのかたはさのみそふたからんと聞えたりければさはらておはしにけり又の日さておはせて嵯峨院に狩しになんとのたまひければ大津の云々てふ歌をのせたり此によれば此にいふ中務宮は元良親王にやとも云べけれど此物語に故兵部卿宮といふは元良親王の御事なれば彼御集と此物語とはおのづから傳の異なるなり彼を引て此を推へからずさるうへに日本紀略天慶六年七月廿六日の條下に兵部卿三品元良親王薨とみえて中務卿に任じ給へる皇子ならねばこ丶に叶はず本より彼御集は後人の書つめつるものなればなか／＼に此物語の傳を誤りて元良のみことせしにや下文六十八段に平忠文か子を命婦しのひてあひかたらふといふ事みゆ又彈正のみこけさうし給へりとあるは章明親王にておはすべければ此命婦は凡朱雀の御世のころそ盛の齢なりしなるへきされはこ丶の中務宮は代明親王か式明親王なるべし兼明親王にてはいさ丶かたくれぬべし

あふことの云々ひとよめぐりのきみとなれ丶ば

抄云監命婦のうたなりひとよめぐりのきみとはこのふたかる神をひとよめぐりのかみともよめる事あるをそへてかく云にや　直云天一神の一夜つ丶

めぐりて居給ふことかたかたへ通ひ給ふ君なれば其間やかたへふたかるべきことわりなりとうらみたるなり後撰にあふことのかたふたかりて君こすはおもふ心のたかふはかりぞ

とありければかたふたかりたりけれと云々

抄云おほとのこもるとは御寢なる事をいふなり

かくて又ひさしくおともしたまはざり云々いかにおぼつかなくおもひつらんなどのたまへりける御かへしに

直云此皇子嵯峨の龜山に別業しておはしまして菟裘賦など作り給へりそこに狩しにおはして日數へたるよしなり　夏蔭案嵯峨院は嵯峨天皇の離宮後に大覺寺といふ是也兼明親王の雄藏殿を嵯峨院といへる事物に見えずまた彼皇子小倉宮造りたまへるは左大臣を罷められたる後にて圓融の御代の事なればいたくおくれたり菟裘賦云余龜山の下聊卜幽屋解官體身終老於此逯草堂之漸成爲執政者枉被陷矣とみゆおもひあはすべしこゝにいふ中務のみやは兼明親王にあらず嵯峨院も小倉宮とすべからず縣居の說從ひがたし

おほさはの池のみつくきたえぬともなにかうらみんさがのつらさは

抄云水くきは筆なり文などにいふ詞なりさかのつらさはとは嵯峨に性をそへたるべし夏蔭按書を水莖と云事古は聞えず伊勢御の集に水くきのかよふばかりをすくせにて雲ゐはるかにはてぬとやきく又なき人の書とゞめけん水莖はうち見るよりそながれそめけるなとみゆるが始也　直云さかは性なり神娃など紀にもかきて生つきをいふより轉じて癖のかたへもいふなり惡といへるはわろしそれはさかなしとこそいへさかに嵯峨の地名をよせたり

御かへしは是にやおとりけむ人忘れにたり

もゝそのゝ兵部卿の宮うせたまひて御はて九月つごもりにしたまひける云々北の方にたてまつりける

抄云勘物云敦固二品兵部卿寬平第四（母同二延喜帝一内大臣高藤女）延長五年九月七日薨御はて表のはつるといふ心成へし勘物に九月七日にうせ給へるよしあれは一周忌の忌日なといふ日にもあらねと故ありてけふしたまへはこそ九月晦日にしたまへりと詞書は侍けめかのみこの北のかたはいつれにおはすらん延喜

皇女慶子内親王を敦固のみこに配するよし紹運錄に侍り此御事にや猶可勘之　直云さて又の年の九月九日までを御表として其祓など有て後に御はての法事などありしにやさはりあらはさる事も有へしこの北の方は何れの御方と考がたし

おほかたの秋のはてだにかなしきにけふはいかでかきみくらすらん

かぎりなくかなしとおもひてなきゐたまへりけるにかくいへりければ

あらばこそはじめもはてもおもほえめけふにもあはてきえにしものを

となんかへしたまひける

抄云此五文字みこの世におはしまさばこそといふにはあらず北の方の世におもひきえたまへるあまりにわが身もなきにひとしき物をといふ心也帚木巻にあるにもあらずきゆる帚木どうつ蟬のよめる心なりはじめもはてもおもほえめなどよみ給へる

前後忘却のさまなり

監の命婦堤にありける家を人にうりて後あはたどいふ所にいきけるに云々よみたりける

抄云堤にありける家賀茂川のつゝみ成べし家をうりしためしは古今にいせが家をうりてよめる歌又金葉集雜上に周防内侍家をうりて「住詫て我さへのきの忍草しのぶかた〳〵おほきやどかなどみえたりあはたいま粟田口といふわたりなりかのうりし家の前を命婦の過るとてよめる也

ふるさとをかはと見つゝもわたるかなふちせありとはうへもいひけり

抄云此うたはかのごの歌をうけてにや古今雜部に伊勢家をうりてよめる　あすか川ふちにもあらぬわか宿もせにかはり行物にぞありける　直云かはと見つゝ彼はどわか家をみつゝといふを川によせたりあはどみるといふもおなし事なるを川になしていはむとてかはどいへるか總てかれあれは同し語なれは也わたる哉とは前わたりするを川わたるによせたりさて此うたはいせか歌をうけてよめる也

故源大納言のきみたゞふさのぬしの御むすめひかしのかたを云々亭子院のわかみやにつきたてまつり給ひほどへにけり

抄云たゝふさのぬし勘云右京大夫藤原忠房大貳庶廣後敏孫云々ひかしのかたとは忠房女源大納言清蔭の室なり亭子院のわかみやとは一字不違本云非亭子院皇女延喜皇女也前齋院韶子延喜廿一年賀茂退配云々愚案紹運錄亦云韶子內親王配大納言清蔭云々　直云ぬしはあかめいふ詞也紹運錄あやまりおほし從ひかたし

子どもありければこともたえずおなし所になんすみ給ひけるさてよみてやりたまひける

抄云此忠房の女のはらに清蔭の御子息なとも有けれはわかみやを得たてまつりてのちも猶よろつせうそこなさやうの事も絶さりしとや

拾遺戀二　忠房かむすめのもとにひさしくまからてつかはしける*
すみのえの松ならなくにひさしくもきみとねぬよのなりにけるかな
*大納言きよかげ

とありければ返し

ひさしくはおもほえねともすみの江のまつやふたゝひおひかはるらん

抄云新古今神祇にいかはかり年はへねとも住の江の松そ二たひ生かはりけるとあり心かはり侍にやとなんありける

おなしおとゝかのみやをえたてまつり給ふて云々かよひ給ひけるころかへりて

新古戀三
あくといへはしつこゝろなきはるのよのゆめとやきみをよるのみは見む

直云よるのみかよひ給へはしはしはかりの夢とみむといへりさてあくとは夜の明るをおもてにしておもひあかれむ事のかたを云也

むまのせう藤原のちかぬといふ人のめにさしこといふ人なん有ける云々かきりなくかなしくのみおもひありくほどに

抄云藤原千兼勘云忠房二男母陰陽亮帶雄女肥後守五位云々うちの藏人にて有ける一條のきみといひける人は云々あやしとおもひありくほどにとはぬ人のずさの女になんあひたりけるを見てかくなん

抄云一條のきみ紹運錄云三品神祇伯貞平親王女後撰作者云々此物語のおくに陽成院の一條のきみとある同人か禁中女藏人にて侍し成へし

おもひきやすきにし人のかなしきにきみさへつらくならんものとは

ときこえよといひければ返し

なき人をききみかききかくにかけしとてなく〳〵しのふ
ほとなうらみそ
抄云きかくにとはきかむずるにといふ詞也　直云
きかくには聞くを延たる詞にて古今集にもありこ
の歌はそのなき人の事をいはゝ君か聞て悲しひを
増へきものとて音もせでこゝになく〳〵しのひて
むる程そと也　夏陰按千乘は延喜十七年三月六日
乙卯御記淸涼殿花宴の條に讃岐様千乘彈琵琶とみ
えたるすなはち此人なり
本院のきたのかたの御おとうとの云々いまそ（すイ）かりけ
り云々おはしまさゝりければよみてたてまつりける
抄云本院拾芥云中御門北堀川東一町左右（大カ）臣時平家
云々北の方勘云右衛門佐従五位上棟梁女時平公室
おほつほね是も棟梁のむすめ也此名後撰に侍るに
行成卿の本にはおほつぶねと侍るとかや陽成院拾
芥云大炊御門南西洞院西作の院御誕生所云々此帝
は淸和第一御母二條后にておはしますいますかり
けりとはおはしましけりとおなし　直云後撰古本
に大つふねとあり和名抄奴僕（豆布禰）
あらたまのとしはへぬともさるさはのいけのたまも
はみつへかりける
抄云かの帝をうらみたてまつりて身をなけし采女
の事をよせてよみ給へるにや年へて御かけを見た
てまつることもなきものからやかてふるされまゐ
らせし事をふかく恨みたる心成べし　直云としは
經ねともとは參りていと年久しくはあらねともと
いふか又さして年久しきまて御わたりの絶たるに
はあらねとといふか
又つりどのゝみやにわかさのてといひける人をめし
たりけるか又もめしなかりければよみてたてまつり
ける
抄云釣殿宮綏子内親王（光孝皇女母女御班子）紹運録に配陽成院
云々わかさのこ後撰には陽成院のみかと時々との
ゐにさふらはせ給ふけるを久しくめしなかりけれ
ばたてまつりける武藏とありいつれか誠ならん
直云つりどのゝみやにわかさのご云々は宮の下に
侍るといふ詞落しか
かすならぬ身におくよひのしら玉はひかりみえさす
ものにそありける
とよみてたてまつりければ見たまふてあなおもしろ

のたまの歌よみやとなんのたまひける
陽成院のすけのごまゝちゝの少將のもとに
抄云すけのこは陽成院の官女にや此少將未レ知レ誰
はるの野ははるけきなからわすれくさおふるはみゆ
る物にぞありける
抄云異本に春けなからもと有り　直云はるけきな
からと云はよそなからと云むが如し男のやうさた
かにはあらねど忘れ行心有とは見ゆるといふな
り
少將かへし
はるの野におひじとおもふわすれ草つらきこゝろの
たねしなければは
抄云古今にわすれ草何をかたねとおもひしはつれ
なき人の心なりけりとよめる心にて此歌の心あき
らか也
故式部卿のみやの云々やりたりければ少將
抄云式部卿のみや敦慶親王（宇多帝第四皇子）一品式部卿
號二王光宮一延長八年二月廿八日薨出羽のこは此み
やの官女なるへし
秋かせになひくをはなはむかしみしたもとに似てそ
こひしかりける
抄云少將の歌也古今秋の野の草のたもとか花すゝ
きほに出てまねく袖とみゆらん此歌をそへて此少
將の歌をも見侍れは餘情猶侍るにや
いではのこかへし
たもとゝもしのばさらまし秋かせをなひくをはなの
おどろかさすは
故式部卿のみや二條のみやす所に絶給ふて又のとし
のむつきの七日の日わかなたてまつり給ひけるに
抄云二條のみやす所三條右大臣定方女也
ふるさとゝあれにしやどの草のはもきみかためとそ
まつはつみける
抄云五文字式部卿の絶給へる事を風し給へるにや
とありけり
おなし人おなしみこのおもとにひさしくおはしまさ
ざりければ秋のこと成けり
世にふれどこひもせぬ身のゆふされはすゝろに物の
かなしきやなそ
抄云すゝろはそゝろといふとおなし
とありけれはかへし

ゆふくれにものおもふときはかみなつきわれもしくれにおとらざりけり

直云此神無月は時雨といはむ料なり古今集秋に神無月時雨もいまたふらなくにとある用さまなり

となんありけるこゝろにいらてあしくなむよみたまふけるとそ

直云御返し大そうなるやうなり

故式部卿のみやをかつらのみこせちによばひ給ひけれとおはしまさゞりける時月のいとおもしろかりける夜御ふみたてまつり給ひけるに

抄云かつらのみこ勘物云孚子内親王寛平皇女中野親王女 萬葉にひとの國によはひにゆきてたちのをもまたさかされはさよそあけにける　直云此所の文は式部卿のみや桂のみこをせちによはひ給ひとあるへき事也必かきたかへとみゆまたおはしまさぬは式部卿宮なりさて式部卿宮より歌をまゐらせられし也

ひさかたの空なる月の身なりせはゆくとも見えてきみは見てまし

直云式部卿宮のうた也かつらのみこの歌にしては行とも見えてなどいかゝさてゆくとも見えてはゆくともなくて居なからといふ也

となんありける

良少將兵衞の佐なりけるころ監の命婦になんすみけるをんなのもとより

抄云良少將は一字不違本云良岑義方承平六年右少將天慶三年正八年中將天曆元年卒云々この物かたりのおくに良少將とあるは宗貞也法名遍昭これは別人也

頭按こゝにいふ良少將は義方なりといふ説よろし下文六十八段に監命婦平忠文か子にあひかたらふといふことみゆさらは宗貞にては時代叶はす續古今[illegible]後拾遺ともに此條の歌をとりのせて良岑宗貞とせしは此物語をよくも辨へすしておもいあやまれる成へしこの歌とも遍昭の口つきにあらす後世の撰集にはかゝるひか事いとおほかり又下文百七十段に深草の御門と申ける御時良少將といふ人いみしき時にて有けりとあるはさたかに其世をさしていふにてこの良少將と異なる事文章を考へて知らるへく混すへからす

續古戀二 かしはきの森のした草おいぬとも身をいたつらにな

さすもあらなん

抄云奥義抄八雲御抄ともに兵衛の名をかしは木と侍りけれは此うたも柏木を良少將にそへわが身を下草にそへてたとひ年老ぬともふるしはて給ふそさたのめたる心なり古今「大荒木のもりの下草老ぬれは駒もすさめすかる人もなし此本歌より監命婦のよめるにや　直云源氏物語に右衛門督を柏木といへるをおもへは兵衛は中ノ重左右衛門は外ノ重なれと共に御門守るさま同しけれは同稱ある歟

かへし

同上夏峰宗貞

かしはきのもりのしたくさおいのよにかゝるおもひ（はに何）をあらしとそおもふ

抄云身をいたづらになさすもあらなんといふを慰めてゆめさることはあらしと云也　朱書云河社二十三オ　かしは木の杜の下草云々返し云々此二首を續古今集に載られたるに返しの作者を僧正遍昭と有は誤也良峯朝臣義方承平六年に右少將になられけるを良少將とは云り後撰夏部に藤原のかつみの命婦に住けるをとこ人の手にうつり侍りにける又の年かきつはたにつけてかつみにつかはしける良峯義方朝臣「いひそめしむかしの宿のかきつはた色はかりこそかたみなりけれこれにて知るへし

となんいひける

良少將たちのをにすへきかはをもとめけれは監命婦

續後拾なし

なん我もとに。あるといひてひさしくいたさざりければ

抄云たちの緒にすへきかは拾遺物の名にをかはのはしといふ事を「つくしよりこゝまてくれとつともなし太刀のをかはのはしのみそある　夏蔭按野劔に革緒さして用ひるは近衛中少將衛門兵衛の佐なと常の事也後には蒔繪野劔を革緒の太刀ともいふ螺鈿野劔を然いはさるは平緒を用ひれは成へし蒔繪野劔に平緒用ひらるゝ事もあれとも普通の事にはあらぬなり

續後拾遺雜中良岑宗貞

あだ人のたのめわたりしそめ川のいろのふかさをみでややみなん

抄云染川は筑前の名所也みてややみなんのて文字濁りて讀べしと長頭丸の説也　朱書云河社二十四オ是をも續後拾遺集雜部に良峯宗貞と載られたるは右にいふかことし

とよめりけれは監命婦めでくつかへりてもとめてや

りけり
抄云ふかく其心せしさまなり　直云はしめは空ことなりけれは今わさともとめてやる也
陽成院の二のみこ云々さらにとひたまはさりけれは
抄云二のみこは三品彈正尹元平親王俊蔭の中將は古今作者勘云延喜十年右少將十二年藏人十九年四位九月中將廿一年卒女五のみこは依子內親王寬平第五母更衣源貞子民部卿昇女
夏蔭云古今集も今の本には俊蔭とあり誤也古本には後蔭とあり
今はおはしますまじきなんめりとおもひたえて云々かくれたまひにしとありけれはことばゝなくてかくなん
せかなくにたえとたえにしやま水のたれしのべとかこゑをきかせむ
抄云此歌まへの言書におはしますましきなめりと思ひたえてとある詞をうけてきくべし水上よりおのれとたえに絕はてし水は聲すへきやうもあらぬを序によめりたれしのへとかといふに深く思ひ絕たる心みえ侍りとてもしのはるへきにあらすとみつから思ひ絕侍る故ものをも申さすにけかくれ侍しそこ也　直云すべて物語に御聲聞せ給へなどいふも物いふ聲をいふなり
先帝の御時に右大臣殿の女御うへのみつぼねにまうのほり給ひておはしますやするとしたまち給ひけるにおはしまささりければ
抄云俗草紙清輔作先帝は延喜の御宇と侍りこの物語にておほくは醍醐の帝を先帝とあり右大臣の女御は勘云能子三條右府定方女漢朝には八十一の女御とてあり云々うへのおつほねは禁秘抄云號藤壺上御局后女御更衣參上所也近代爲御所又云上御局號弘徽殿御局是御行なと有所也女御更衣可參上したまちとはした心に待ぬる事也天皇を待おはす也
ひくらしにきみまつやまのほとゝきすとはぬときこそこゑもをしまぬとなんきこえける
比叡の山に念覺といふほうしの山こもりにてありけるにしさくにてましくゝける大德のはやうしにけるかむろに松の木のかれたるを見て
抄云念覺は俊子の兄也しとく何にても天子の師を侍讀と禁秘抄に侍是はたゝ師匠の事にやむろはい

せ物語にしひてみむろにまうでしとあり若紫にさ
かくまりてむろのとにもまかてすとも世繼に五つ、
の室ならへてと侍るもともに後世のおこなひにこ
もりたまへる所を云り彼師法の古跡也　夏蔭按後
撰戀二男の程久しうありてまてきて御心のいとつ
らきに十二年の山こもりしてなん久しう聞ねさ
りつる云々枕册子におほつかなきもの十二年の山
こもりの法師の女をやといひ今昔物語十三十七比叡
山に登りて出家して法華經を受持て日夜讀誦して
十二年を限りて山を出ることとなき也とみゆこれら
の山籠は類聚國史弘仁十三年六月傳燈大法師位最
澄奏言よりはしまれり又千載集釋敎讀千載旅中の
詞書千日の山こもりといふ事みえたり
ぬしもなきやとのかれたる松みれは千代すきにける
こゝちこそすれ
抄云能因法師集に後拾遺陸奥へこたひくたりけるにのち
のたひはたけくまの松のなかりけれは「武隈の松
は此たひ跡もなし千とせをへてやわれはきつらむ
此心によくかよひ侍也　夏蔭按土佐日記に貫之ぬ
し家に歸りてほとりに松もありき五とせむとせの

内に千とせや過に劍かたへはなく成にけり
とよみけれはかの室にとまりたりける弟子ともあは
れかりけり此念覺はとしこかせうと兄なりけり
かつらのみこいとみそかにあふまじき人にあひ給ひ
たりけり男のもとによみておこせ給へりけりゐイ
古今戀五讀人不知
それをたにおもふこととてわかやとをみきとないひ
そ人のきかくに
抄云五文字はたゞ我宿をみしといふ事をだにいひ
そと也帚木の巻によしいまはみきとなかけるとい
へる空蟬の心よくかよひ侍らんかし
となんありける
直云おもふ事とては我宿をみきといふをたにおも
へはさはいふと人のおもはむ事とてといふ也
かいせうといふ人法師になりて云々うるさき事いふ
物かといひけれはよみてやりける
抄云かいせう後撰の作者に戒仙とある同人にや五
音相通なれは也　直云あらはひとは衣を洗ふ事也
さて古語にてははひの反ひなれは延てあらはひと
いひしとすべしされと此頃と成てはかゝる所に何
となく音を借ておもはせていふ類あれはあらはし

めなとするてふ事をかくいふ成へし
いまはわれいづちゆかましやまにても世のうきことこと
はなほもたえぬか
抄云たえぬかはかなといふ事なり古今に「世をすてゝ山に入る人山にても猶うき時はいづちゆかまし此歌の心よく叶侍り　直云あらそひなとする人もなく親なともむつかれはかくよめり
おなじ人かのちゝの兵衛佐うせにけるとしの秋云々
霧たちわたれりけりまらうと
抄云いますからぬはかいせうの父の兵衛のすけのうせたるをしたふさまなり
六帖一
あさきりのなかにきみますものならははるゝまに〳〵うれしからまし
抄云はるゝまに〳〵は晴ゆくまゝにといはむか如し
といひけりかいせうかへし
ことならばはれすもあらなんあさきりのまきれにみえぬきみとおもはむ
直云上の歌に秋霧の中に君ますといへるをうけてその如くならばといへるならん　濱臣云如(コト)ならはにはあらてカクとならはを二言轉約してコとなれる也すみてよむへし中昔の抄物にも如此ならは也といひ本居氏も其説にしたかはれたり此詞ふるく古事記の歌にみえたり古今正義ことならばさかすやはあらぬ櫻花見るわれさへにしづ心なしの歌の注に云ことならはは斯とならばの約まりたる言にて今もかくあらんとならば咲すしてあれかしとさけるかひなきをいふ末にもことならは君とまるへく云々ことならはおもはすとやは云々なとあり尤書紀の[illegible]云々萬葉の[illegible]云々又[illegible]云々なとも斯と[illegible]は斯と放は斯と[illegible]はにてしか約まれるもいとふるきことなり又末にかきくらしことはふらなん菅萬にことは根さへにほりてすてゝむなとはことならはふらなんことならば根さへにといふべきをならばを省なれたるにて又後成へし
云々まくらとは貫之友則なとになん有ける
故式部卿の宮に三條の右のおとゝこと上達部(かんだちめ)など類いして云々をみなへしをかざし給ひてみきのおとゞ
抄云式部卿のみやは敦慶のみこ也三でうの右のおとゝは藤原朝臣定方公云々こと上達部なと類いし

てこはよの公卿など同道してこ也かづけものは裝束などこ引出物にせらるゝ成へし
をみなへしをる手にかゝるしらつゆはむかしのけふにあらぬなみたか
直云今はなくなりし人あるを思ひ給ふ成へし
となん有けることゝ人々のもおほかれとよからぬはわすれにけり
故右京のかみ宗于のきみなり出へきほごにわが身のえなりいでぬ事をおもひ給ひけるころほひ亭子のみかとに紀伊國より石につきたるみるをなんたてまつりたりけるを題にて人々歌みけるに右京のかみ
河社二ウ十四うつほ物語に春宮の御まへになまみるの石貝つきなから有をとりたまひて云々　抄云故右京のかみ宗于勘云一品式部卿本康親王ノ一男寛平六年正月從四位下又三光院殿ノ說ニ云光孝天皇是忠親王宗于云々但爾說其王代系ニ僃不レ載レ之如何なりいづべきは官位こもへあがらむとおもふほごにと也石つきたるみるは岩間より生るみるめなごよみて海松は石に生る物也　直云此下に南院の君たちといひて下に宗于をいへば是忠親王のみこなるべし
新千載戀　おきつかせふけひのうらにたつなみのなごりにさへやわれはしつまむ
河社二このうた新千載集には戀に入られたるこゝろおほつかなし又直叔は紀の國なり清正集に紀のかみになりて又た殿上もかへりせて「天津風ふけひの浦にすむたつのなとか雲井にかへらさるへき　直云なこりは汐干のなこりと萬葉に續てすへては干たるに深き所々に波のあるをいふ然れはこゝも其心にて汐干ゆけご猶しつみて有石に身をそへたる也立波とはまついひてそれかひしほになれるを次にいふなり河社云此歌新千に戀に入られたるいかゝおほつかなし
又　後撰夏よみ人しらす　おなじうきやうのかみ監の命婦に
よそながらおもひしよりもなつのよのみはてぬゆめそはかなかりける
亭子のみかとに右京のかみのよみてたてまつりたりける
あはれてふ人もやあるとむさしのゝくさとたにこそおふべかりけれ

抄云紫のひともと故にむさしの丶草はみなからあはれとそみるとある歌をこめてなるべし又宗于も皇孫にておはしませはみかとへかく申給へるにや
直云古今むらさきのひともと故云々むさしの丶草はみなからはあはれとたに思ふ人もあらむと也こは身の爵位をも得すしてなりのほらぬ事を此院へうたへ申て御かへりみをねかへる成へし　夏蔭按此歌を續後撰戀三に亭子院に奉りける監命婦とて載られたるいたく誤れりとすへし亭子の院とは時世かなはさる事卷一の說に合せてしるべし
河社二十五ウ　此歌續後撰には戀に入て作者を監命婦とありこのまへにおなじうきやうのかみ監命婦にとてうたありてさてつ丶きたれは爲家卿見そんしたまひけるにや

又

しくれのみふるやまさとのこのもとはをる人からやもりすきぬらん
直云をる人からとは居人によりてといふ也わひ人のわきてたちよる木のもとはたのむかけなく紅葉ちりけりといふに似たり

とありければかへりみたまはぬ心ばへなりけり
直云帝の御うへならば御心はへとかくへし　上田秋成云けれははけるはの誤なるべし
みかど御らんじてなにごとも心えぬとてそうつのきみになん見せ給ひけるとき丶しかはかひなくなむありしとかたり給ひける
抄云そうつのきみ未勘
みつねが院によみてたてまつりける
抄云躬恒古今序に前甲斐小目云々院は宇多帝にやたちよらむこのもともなきつたの身はときはなからに秋そかなしき
河社二十五ウ　後撰雜二におなじみつね「人につくたよりたになしおほあらきのもりの下なる草のはなれは　直云蘿の身といひて身をそへたりさてつたよりすくにときはとつ丶くにあらず蔦のみは切てさていつもかなしなから秋ぞ殊に悲しといふ也然れば蘿のいろ付秋のかなしき意さへこもれり蔦にとこ葉も有なといふは此歌をよく思ひとかぬ也
右京のかみのもとにをむな
いろそとはおもほえずともこのはなはときにつけつ

ゝおもひいでなん
抄云五文字はよきはなの色とは御心につかすとも
と也この花は梅成へし　直云初句いつそとはと有
へしこの花は梅とのみおもへるは誤也さてこそ何
その花を贈りし歟又子ある中にていへる歟
つゝみの中納言内の御つかひにて云々いとおほくた
ちのぼるやうにみえければかくなん
抄云堤中納言兼輔也うちの御つかひは勅使也おほ
うち山は仁和寺の山也寛平法皇おはしましける故
にいまも仁和寺をおむろと申とかや　直云大内山
は大和國にある事紀にも式にもみえたり又此所を
いふはいつのころよりにや
新勅雑四中納言兼輔　しらくものこゝのえにたつみねなればおほうちやま
といふにそありける
抄云高光「こゝのへのうちのみつねにこひしくて
雲のやへたつやまはすみうきとよみたまへるこゝ
ろもおのつからよせつへし
伊勢の國に前齋宮おはしましける時に堤の中納言勅
使にてくだり給ひて
抄云前齋宮は柔子内親王（宇多皇女母同ニ延喜帝ニ）延喜式云凡天皇
即レ位者ハ定ニ伊勢太神宮齋王一備ニ内親王未レ嫁者一
卜定ス若無ニ内親王一者依ニ世次一簡ニ諸王ノ女一卜定ス
云々垂仁天皇の御時かみよより御殿をおなしく物
せさせ給へる八咫鏡を皇女倭姫命をしていせの國
五十鈴川のかはかみにいはひおかせ給へりしかる
に倭姫の命うせ給はんとし給ふ時我去不レ久自レ今
をちつかた皇女一人をもて神に奉する事我ごとく
したまへと〇〇〇〇〇給へりしより代々のみか
と齋宮をまゐらせ給へるに土御門院承元二年四十
一代の齋王後鳥羽院の皇女粛子内親王に至りて其
事絶侍るとぞ
新勅賀中納言兼輔　くれたけのよゝのみやこときくからにきみはちとせ
のうたがひもなし
直云いつきのみやの久しく絶せぬをいはひ給へる
歌なり
御かへしはきかず彼齋宮のおはします所は竹のみや
ことなんいひける
和名抄伊勢國多氣郡多氣多介
いづもがはらからひとりは殿上して我はえせざりけ
るときによみたりける

抄云いつも系圖しれす
かくさける花もこそあれわかためにおなしはるさや
いふへかりける
抄云獨のみ殿上したることをうらやみたる心也下
句おなしはるとはいふましきといふてにをは也
直云さやはさやはの略也　讀臣云此はるは君恩を
そへていへる也春といひて君恩の事とせしは古今
の春の日の光にあたる我なから後撰に白雪の簑し
ろ衣うちきつゝはるきにけりとおどろかれぬる猶
外にもおほく例あり
先帝の五のみこの御むすめは云々ゆきのかみのめに
ていますかりて
直云先帝の五のみこ何れとも知かたし何くれとい
ふはみなおしはかりにてとるにたらすゆきのかみ
は壹岐守也これもしられす　和名鈔壹岐由岐
たまさかにとふ人あらはわたのはらなけきほにあけ
たいぬとこたへよ
抄云長頭丸の説に此歌ふねをまはしてよめり「和
田の原漕出てみれは久方の雲居にまかふ沖つしら
波といふも舟といふ字なくてきこえ侍云々　直云
こはゆきの守にぐして海の上へゆく時の歌なり
伊勢のかみもろみち[illegible]たゝあきらの中將の
君にあはせたりける時に
抄云伊勢のかみもろみち[illegible]たゝあきら勘云源正明[illegible]
承平四年十二月右中將南院式部卿是忠[illegible]王男天慶
八年左中將五年參議云々正明異本に忠明とかけり
そこなりけるうなゐをば右京のかみよびいてゝかた
らひてあしたによみておこせたりける
抄云宗于の語らひしと也
和名抄[illegible]男女に通じていふわらはの事也
新勅撰三白露云々トアリ
おく露のほどをもまたぬあさがほは見すぞなか〳〵
あるへかりける
直云しはしのあいだはなか〳〵にうしてふこゝろ
なり
かつらのみこに式部卿のみやすみ給ひける時云々御
らんせさすとてきこえさせける
夏蔭按後撰夏かつらのみこの螢をとらへてといひ
侍りけれはわらはのかさみのそでにつゝみてとて
歌ありかつらのみこ孚子内親王たる事此物語とお
なしたゝ傳の異なるのみ然るに後撰にあるは清和

第五皇子貞元親王號ニ桂親王ニ給へるそれ也といふ説はあやまり也又按和名抄汗衫唐令云諸給時服夏則汗衫一領移所銜反衣名也また遊仙窟に翠衫をみとりのあせとりと訓り枕草紙に櫻のかさみ萌黄こうはいなといみしくなか〳〵しり引てといひ又春はつゝし櫻夏は青朽葉くちはといへり

後撰夏讀人不知　つゝめともかくれぬものはなつむしの身よりあまれるおもひなりけり

源大納言のきみの御もとにとしこはつねに參りけりざうししてすむときも有けり

抄云ざうしは曹子也つほね也淸蔭の御もとへしたしく侍りしにや前にも京極のみやす所の御賀のまうけの具をも此君としこにいひあつけ給へり

をかしき人にてよろつの事をつねにいひかはし給ひにけり云々よのなかのはかなきことせけんのあはれなる事いひ〳〵てかのおとゞの讀給ひける

抄云此むすめあねにあたるあやつことしこのむすめ也よぶこ淸蔭の官女成べし　直云萬葉には世間と書てもよの中とよめりこゝも世中のはかなき事あはれ成事いひ〳〵てと有けんをかたはらに世間といふ字付たるか本文に入しか濱臣云世間字音のまゝに讀へし竹取うつほなどに世界とも世間とも字音のまゝにてみえ此書下文にもこと世界とみえたりすへて物語は其かみの俗語多く字音を訓によまんとすれはなか〳〵に古言にたかへり

新勅撰三大納言淸蔭　いひつゝも世ははかなきをかたみにはあはれといかて君にみえまし

直云はかなし〳〵とはたゝ常の言くさにもいへとけに現身の世ははかなき物なれは我もいつしかはかなく成なん後にもいとあはれと忍るゝはかりのかたみをはいかにしてか殘しおくへきといふ也

とよみ給ひけれはたれ〳〵も返しはせであつまりてよゝとなんなきけるあやしかりけるものごもにこそはありけれ

抄云よゝとはいたくなくさま也萬葉に「君によりよゝ〳〵よゝとよゝ〳〵とねをのみそなくよゝ〳〵と　秀按抄云萬葉とある歌は六帖四の誤なるへし萬葉にはみえず

惠しうといふほうしのある人の御けんさつかうまつりけるほどにとかくよの中にいふ事有けれはよみた

りける
抄云ゑしうひえのやまの法師とぞ御驗者は祈りの
師をいふ也
さといはふやまにはさわくしら雲のそらにはかなき
身とやなりなん
抄云此人ゑしうと名の立しにや里にもやまにも
此事の名のたちみちにければ身をおく所もなした
ゝ大虚の雲のゆくへなき身とや成はてなましと也
「きみにより我名は花に春霞のにも山にも立みち
にけり「中空にたちぬる雲のあともなく身のはか
なくも成にけるかな此二首の歌をひきあはて見る
へし
となんありける又此人の御もとによみたりける
直云許にの下にてを落せる歟
あさほらけわか身は庭のしもなからなにをたねにて（こそイ）
こゝろおひけん
抄云庭の霜を下々の身といふ心にそへたるにやこ
ゝろおひけんとはきみをこひぐさのきざしたる事
成へし朝霜によせて云遣しつる歌にや
このたいさく坊にしける所のまへにきりかけをなん

させける其けづりくつにかきつけける
・抄云きりかけ夕かほの巻にきりかけだつものとあ
り板をめんとりばにしてふちをして墻のやうにせ
しものと也
まかきする飛彈のたくみのたつきおとのあなかしか
ましなぞやよの中
抄云たつき音は木をきるおと也あなかしかましは
あゝかしましといふ詞也「みやつくるひたのたく
みのをのゝおとほと〳〵しかるめをもみし哉伐木
丁々山更幽杜甫　直云いにしへは飛彈の國よりの
み出し事令にみゆたつきは和名抄に鐇（多都岐）廣刄斧
也とみゆ
なといひておこなひしにふかき山にいりなんとすと
いひていにけりほとへていづくにかあらんといひて
ふかき山にこもり給ひぬとありしはいづくぞといひ
やり給ひたりければ
なにばかりふかくもあらすよのつねのひえをとやま
とみるはかりなり
抄云ひえを外山にみるとはふかき事といはんとて
也よかはにすみけるよし詞書にみゆ

となんいひたりけるよかはといふ所にある成けり
おなし人にある人やまへのほり給ふへき日はまたと
ほくやあるいつそといへりければ
のほり行やまのくもゐのとほければ日もちかくなる
ものにそありける

抄云やまのいたりて高きゆゑあまつ日かけもとほ
からぬ心也山へのぼるべき日比のちかつきたる事
をそへてよめり是も密通の人などに名殘をしまれ
けるにや

とそいひおこせたりけるかくのみよからぬ事のある
がうへにいてきけれは
のかるともたれかきざらんぬれころもあめのしたに
しすまんかぎりは

抄云ぬれ衣とはなき名をきる事なり長頭丸云あま
のぬれきぬをまゝ子にきせし故事よりおこれりと
いへどたゞしき出所を見侍らぬは此詞につきて後
人の作れる事にやとおもひ侍るたゞぬれたるきぬ
はきてうきものなりかゝる事よりいひそめつるか
又何となくいひつたへたる方言成へしと云々歌の
心は雨といふを天下にそへてよめる也

つゝみの中納言のきみ十三のみこの母みやすん所を
うちにたてまつりけるはじめにみかとはいかゝおほし
めすらんなど云々よみて奉り給ひける
つゝみの中納言兼輔十三のみこ延喜皇子彈正尹章明親王母更衣鮮子女みかどはいかゝ叡慮にはいかゝと氣遣し給ふ也かしこに以心也
人のおやのこゝろはやみにあらねともこをおもふみ
ちにまとひぬるかな

先帝いとあはれにおほしめしたりけり御かへしはあ
りけれと人えしらす
平仲かんゐんのこにたえてのちほとへてあひたりけ
りさてのちにいひおこせたる

抄云平仲　平貞文字仲同號平仲右中將平好風ノ男好風中務親王之孫茂世王之子閑院のこ古今作者或說宗于女云々
うちとけてきみはねつらんわれはしも露のおきゐて
こひにあかしつ
をむなかへし
新拾遺閑院しらつゆのおきふしたれをこひつらんつれはきゝお
はすいそのかみにて

抄云きゝおはずとはこひにあかしつるとのたまへ

と我事とはきゝいれずと也いそのかみとはふりたることをいひつけたれはわか身のふるされたるによせて也・夏陰云古今石上ふりぬる戀の神さびてたゝるに我はいそねかねつる

陽成院の一條のきみ

おく山にこゝろをいれてたつねずはふかきもみちのいろをみましや

先帝の御とき刑部の君とてさぶらひ給ひける更衣の里にまかりいで給ひてひさしうまゐりたまはざりけるにつかはしける

抄云刑部のきみとて更衣の名也更衣とは天子の便殿に候して御衣なとめしかへらるゝ官也仁明帝の御時よりはしまれりとそもろこしにも侍り容齋隨筆九云雅志ニ堂後小室名レ之曰二更衣一又曰灌夫傳座乃起更レ衣（顔師古注更改也）凡久座皆起更レ衣以ニ其寒暖或變一也又云衛皇后傳帝起更レ衣子夫侍ニ尚衣一云々いまは此刑部のきみ未レ知レ誰里にまかり出とは禁中を退出して也桐壺の巻にもの心ほそく里がちなるをいよ〳〵あかすあはれなる物におもほしてとあり直云更衣は御衣のひとつにて女御は三位更衣は四位也

新古戀一　題しらす

おほそらをわたるはる日のかけなれやよそにのみしてのとけかるらん

抄云此うた新古今には亭子院の御製と侍り

直云新古今にて亭子院といれりこれに隨へし延喜帝にはあらす亭子院のみかとなり

おなしみかど齋院のみこの御もとにきくにつけて

抄云齋院のみここれは延喜の御時にや新古今にははしめの帝を亭子院とあるにしたかふへき歟考ニ帝王系圖に宇多皇女の中には君子内親王賀茂の齋院也賀茂齋院のはしめはまことや嵯峨のみかと平城の帝と御位をあらそはせ給ひし時さがのみかと御祈のために皇女有智内親王をはしめて齋院に立給ひしとぞ土御門院元久元年三十四代の齋院にいたりて斷絶し侍るとかや

ゆきてみぬ人のためにとおもはすはたれかをらましわかやとのきく

抄云こなたへきてみたまはぬといふ歌の五文字にや又齋院をなつかしく思召せども帝の御身にては自由にゆかせ給ひて見まゐらせ給ふ事もならぬ心

とも歌の心は賞翫におほしめす菊をたてまつらせ
給ふとの御事なるへし　夏蔭按縣居翁の説抄の後
のかたの註におなし然れともこははしめにいへる
かたよしゆくとくるとかよはしいふ例おほし

さいゐんのおん返し

わかやとにいろをりとむるきみなくはよそにもきく
の花をみましや

抄云色をりとむるは色よきを手折送る心にや

かいせんやまにのぼりて

抄云異本にかいせうとありまへにも侍しを戒仙と
同人なるへしとおしはかりつる此こゝにていよ
〳〵別人ならぬほどしられ侍にや新拾遺雑中載[illegible]詞

雲ならでこたかきみねにゐるものはうききよをそむく
わか身也けり

齋院よりうちに

おなしえをわきてしもおく秋なれはひかりもつらく
おもほゆるかな

御かへし

花のいろをみてもしらなん初しものこゝろわきては
おかしとそおもふ

抄云この御製大明無㆓私照㆒至公無㆓私親㆒の心にや
延喜帝の御うた成へし

これもうちの御こ

抄云これ天子の御うたといふこと也これもはしめ
の歌とおなし時にや　濱臣云すへての御所作にも
御といふ事ありもと天子の御身のうへにのみ限り
ていふ事なるを中頃より高貴のかた〳〵におよほ
しいへり齋宮女御の集などみな御歌を御といへり

わたつみのふかきこゝろをおきなからうらみられぬ
るものにそありける

抄云わたつみはたゞうみの事なりうらみられぬる
もおのつからうみの縁也　濱臣云おきなからは心
おくなどのおくとはたがへりわか深き心をうつし
て人にそへおく意也さて沖をいひよせたり沖より
して浦をみやらるゝといひかけたるもの也

陽成院にありける坂上のとほみちといふをとこおな
じゐんにありけるをんなさゝることあり。てあはざ
りければ

秋の野をわくらんしかもわかごとやしけきさはりに
ねをば啼らん

右京のかみむねゆきのきみの三郎にあたりける人は云々さておもひけるともだちのもとへよみておこせたりける

抄云はくやう博奕也竹取物語いつちも／＼足のむきたらんかたへいなんとす

しをりしてゆくたびなれとかりそめのいのちしらねはかへりしもせし

抄云深山なとへいる時に木草の枝を折かけなとしてもと來し道のしるへとするをしほりとはいふ也

直云父の折檻にあひて行を道の標折のことにいひよせたり　夏蔭按初句さまての意ともおほえすたゝ心あてして行との意成べし

をとこかぎりなくおもひける女をおきて人の國へいにけりいつしかとまちけるにしにきといひて來たりければ

抄云しにきとはいなかの男のうせたる也

いまこんといひてわかれし人なれはかぎりときけどなほぞまたるゝ

となんいひける

越前の權の守かねもり兵衛のきみといふ人にすみけるを年ごろはなれて又いきけりさてよみける

抄云兼盛勘云駿河守従五位下後賜平姓云々紹運録云是忠親王曽雅王篤行兼盛兵衛のきみ後拾遺の作者也參議従四位兼茂女

夕されはみちもみえねどふるさとはもと來しこまにまかせてぞ行く　くる同

夏蔭云韓非子に管仲大雪に道をまどへる時老馬の智用へしとて馬にまかせて至れる事あるをいへり

女かへし

同同　こまにこそまかせたりけれはかなくもこゝろのくるとおもひけるかな　あや同

あふみのすけ平中興のむすめをいといとうかしつきけるを云々兼盛かよみておこせたりける

抄云中興勘云昌泰元年蔵人延喜二年大内記四年任近江守後左衛門權佐むすめをいたうかしづき

此物語のおくにもこのをんなはになくかしづきてみこたちかんたちへよはひ給へとみかどにたてまつらんとあはざりけりとありとかくはふれてはおちふれたる事也身は捨つ心をたにもはふらさじともよめり

後撰雜二讀人不知
をちこちのひとめまれなるやまさとにいへゐせんと
はおもひきやきみ
とよみてなんおこせたりけれはかへりこともせてよ
ゝとそなきける女もいとらうある人なりけり
抄云かへりことをせて後撰にはかへし「身をうし
と人しれぬよをたつねこし雲の八重たつ山にやは
あらぬと侍りらうあるは勞の字也よろつに勞をつ
みてうち心得しなとやうの心にや
おなしかねもりみちのくにゝて云々其むすめどもに
おこせたりける
抄云閑院勘云貞元親王清和第三のみこ從五位下源兼
信貞元親王三男源重之の父也
拾遺雜二
みちのくのあたちのはらのくろつかにおにこもれり
ときくはまことか
抄云此うた拾遺に入侍詞書に云みちのくにくろづ
かといふ所に源重之かいもうと有ときゝてつかは
しけるとあり家の集もこれにおなじ　直云こは重
之のかたへ戲にいひやりしなるへし塚といふより
鬼といへは直に其娘へもおやへもいひやるべきも
のならず重之は歌よみにて兼盛の心しりなれば戲
のやうにはさもいふへきなり
といひたりけりかくてそのむすめをえむといひけれ
ばおやまだいとわかくなんあるいまさるへからんを
りにをといひければ京にいくとて山吹につけて
はなさかりすぎもやするとかはつなくゐでのやまふ
きうしろめたしも
抄云うしろめたしとは心もとなしとなりいまだわ
かきといひのがるゝをいふかしくおもひて也
古今に蛙なくゐでの山吹散にけり花のさかりにあ
はましものをと侍る詞を取て也
といひけりかくてなとりのみゆといふ事をつねたゝ
のきみのめよみたりけるといふなんこのくろつかの
あるしなりけり
抄云なとりのみゆ奧州名取郡にある温湯成べし恒
忠のきみ未勘此人の妻にかの兼盛の心かけし女は
なりたるべし此くろつかのあるしとはさきにおに
こもれりとよめるうたをうけて成べし
拾遺物名兼もり
おほそらの雲のかよひぢみてしかなとりのみゆけば
あとはかもなし
抄云あとはかもなしは足あともなきとの心也はか

は助詞也此歌拾遺物名部に兼盛のうたと侍り此物
語にては□信の女のよめるやう也いかゞ
さなんよみたりけるをかねもりのおほきみおなじ所
を
抄云兼盛は平姓を給はりければおほきみとはいふ
べからず云々文の一體にや　直云兼盛王は平の氏
給はらぬ先とわくべし
しほかまのうらにはあまやたえにけんなどすなどり
のみゆるさきなき
さなんよみけるさてこの心かげしむすめこと男して
京にのぼりたりければ云々おこせたりければおこ
抄云こゝをさこして恒忠のめに成たる事なりみち
のくのつさばしめ兼盛の遺し給ひける文をいまみ
やけさて返したる也
年をへてぬれわたりつるころもてをけふのなみだに
くちやしぬらん
といへりけり
世の中をうんじてつくしへくたりける人女のもとに
おこせたりける
抄云うんじて倦の字也うらみ果し心也筑紫日本紀

箋注云筑紫洲者蓋地之形似ニ木菟ニ和名曰ニ都久ニ俗
謂ニ耳附ニ之鳥也この鳥に似たる故つくしといふと
ぞ
わするやといてゝこしかといつくにもうさははなれ
ぬ物にさりける
抄云うさにつくしのう佐をかねたり
五でうのごといふ人ありけり云々けふりをいとおほ
くゆらせてかくなんかきたりける
抄云五條のご此物語のおくに山蔭中納言のみめひ
ことあり
きみをおもひなまくし身をやくときはけふりおほ
かるものにさりける
亭子院にみやすん所たちあまたみざうししてすみ給
ふにさしころありて云々ざうしをのみしてわたらせ
給ひけり
抄云六條河原院は融公鹽かまの浦をうつして鴨川の
ほとりに家をいとおもしろく作りてすみ給ひしを宇
治拾遺物語にかのおとゞこの家を宇多の帝へ奉り
給ひけるに帝又いみじく作りなさせ給ひしよし侍
るひとゝころの御曹子京極の御息所同車にて河原

院へ御幸のよし世繼にも侍り則此院にて融公の靈
の御息所を魘せし事など侍
はるの事成けりとまり給へるみざうしどもいとおも
ひのほかにさう〳〵しき事をおもほしけり
抄云さう〳〵しきはさひしき也
殿上人などかよひまゐりて藤の花のいとおもしろき
をこれがさかりをだに御らんせでなどいひて見あり
くにふみをなん結びつけたりけるあけてみれば
抄云亭子院の藤の盛をさへ御らんせすして河原院
へ御幸なりし事よと殿上人たちの申給へるさま也
世の中のあさき瀬にのみなりゆけばきのふのふちの
花とこそみれ
抄云此ころまては寵愛せられまゐらせしかといま
ははや院の御心のふちも瀬にかはりにしといふ心
をよめり
とありけれは人々見てかきりなくめであはれかりけ
れどたがみざうしのし給へるともえしらざりけりを
とことものいひける
藤のはないろのあさくもみゆるかなうつろひにける
なごりなるへし

直云院の御の心うつりいに給ひしをそふるのみ
のうさんのきみといひける人淨藏とはいとになうお
もひかはす中なりけりかきりなくちぎりて思ふ事を
もいひかはしけりのうさんのきみ
抄云のうさんのきみ閑淨藏ハ洛城人諫議大夫殿監善
淸行第八子也母弘仁帝孫安峯女夢ニ天人入ニ臥内一因而
娠寛平三年生頴悟無レ雙七歳求出家云々元亨釋書
おもふてふこゝろはことにありけるをむかしのひと
になにをいひけむ
といひおこせたりけれは上ざうだいとくの返し
ゆくすゑのすくせをしらぬこゝろにはきみにかぎり
の身とぞいひける
抄云すくせは宿世也
故右京のかみ人のむすめをしのびてえたりけるを云
々さてあしたによみてやりける
抄云女の親宗于の遥給ふをせいする也
さもこそはみねのあらしはあらからめなびきしえた
をうらみでぞこし
平仲にくからすおもふわかきをんなをめのもとにゐ

てきておきたりけり云々この女つゝみに物なさいれ
て云々女いにけりさばかりありておこせたりける
抄云めのもさに本妻のもさへなりらうたしさはい
たはしく哀におもふ心也さばかりありてはしばし
ありて也　直云いさあはれさは平仲は心にしかお
もふ也
濱臣云いちはやきむちはやき皆同語なり稱德紀天
平神護元年詔云如此久乎治方夜時仁身命乎不惜之天○
遊仙窟に嗟運之迍邅○源氏に須磨　いちはやき世の
いさおそろしう侍る也○伊勢物語にいちはやきみ
やびをなんしけるさあるは心かはれりされさ別語
にはあらすさかしさいふ詞を嶮險の義にもいひ賢
良の義にも用ふるに同しく轉用せし物也
わすらるなわすれやしぬるはるかすみけさたちなが
らちぎりつること
南院の五郎みかはのかみにてありける
抄云南院拾芥抄云四條北壬生西是忠親王家勘物云
是忠親王延喜二年式部卿此宮子息名字不ㇾ見云々
夏啓按長幼の序によりて太郎次郎さいふ事漢土に
は六朝の頃よりいひならへり皇國にもふるくいひ
し事に一皇極紀蘇我入鹿を太郎さ呼事みゆ法王帝
說にも同人を林太郎さいひ太子傳暦に時人入鹿を
指して太郎さいふさみゆれは既此頃よりはじまり
て後世はもはらいひならはす事也けり
承香殿にありけるいよのごをけさうしけりこんさい
ひけれは御息所の御もさにうちへなんまゐるさいひ
おこせたりけれは
抄云承香殿御息所宇多　胤子高藤公女[illegible]　い
よのご承香殿の官女也　直云古今に僧正遍昭の許
へならへまかりけるさかける類にて内に御息所の
おはし所へ参るさいふなり
たますたれうちさかくるはいさゝしくかけをみせし
さおもふなりけり
さいへりけり又
なけきのみしけきみやまのほさゝきすこかくれゐて
もわれのみそなく
なさいひけりかくてきたりけるをいまはかへりねさ
やらひけれは
抄云やらひは追遣の字也
しねさてやさゆふかへすはやにはるゝいさいきかた

きこゝちこそすれ

抄云往かたきといふに生の字をそへたり

返しをかしかりけれとえきかす又雪のふる夜きたり

けるを物はいひてよふけぬかへり給ひねといひけれ

はふりけるほとにとをさしてあけさりけれは

夏蔭按物はいひての下たゝには逢すしてしか〳〵

言出しと詞をふくめて書し文也縣居翁はこゝは語

の落たるならんといはれしかと落ちたるにはあら

しとみゆ

われはさは雪ふるからにきえねとやたちかへれとも

あけぬ板戸は

抄云五文字は我をはさらはと也　夏蔭云板戸あけ

ぬてふ心をかくめくらしていふのみ

となんいひてゐたりけるかく歌もよみあはれにいひ

ゐたればいかゞせましと思ひてのそきてみれはかは

こそ猶いとにくけなりしかとなんかたりしとか

としごちかぬをまちける夜こざりけれは

さよふけていなおほせ鳥のなきけるをきみかたゝく

とおもひけるかな

直云稲負鳥は庭たゝき也待侘るころにはあらぬも

のゝねをもそれかとおとろくへし稲負鳥のこと古

今正義秋わか門にいなおほせ鳥の啼なへにけさふ

く風にかりは來にけりの歌の注につまひらかなり

又としこ雨の降ける夜ちかぬをまちけり云々さる所

にいかで物したまひつるといへりければとしこ

抄云雨のいたくふりしかは千衆よりの詞也

きみをおもひ隙なきやどゝおもへどもこよひの雨は

もらぬまぞなき

枇杷殿よりとしこか家にかしはきのありけるををり

に給へりけりをらせてかきつけてたてまつりける

抄云枇杷どの勘云左大臣仲平[illegible]

後撰[illegible]

わかやどをいつかは君かならしばのならしかほに

（ならしてゐ損の）

はをりにおこせる

抄云いつかは君かならしばのとはいつかはきなら

はし給ひしといひかけて又下句の枕詞也ならかし

はならしはおなし物とそ　直云かしはならなら

はおなし物也さてかへしをも合せておもふにこは

たゝにあらすむかし心通ひし間なるへし

御かへし

同上（なつのにの同）

かしはきにはもりの神のましけるをしらてぞをりし

たゝりなさるな
抄云源氏物語に「かしはきに葉守の神はまさすと
も人ならすへき宿のこすゑかと侍るも此物語を受
て也　直云顯昭法師の袖中抄に葉守神とは樹神な
り萬の木を守る神也といへりさてこの歌は俊子に
ぬしあるをのたまへる也もとの心あらすはかくは
讀給はし　又抄云基俊は葉守の神を柏にかぎる
やうにのたまひつれどさもなきにや俊頼歌にあら
しをや葉守の神もたゝるらん月に紅葉のたむけし
つれはと讀り　朱書云河社二十五ウ　清少納言に木は
といへる所にかしは木いとをかし葉守の神のます
らんもいとかしこしとかけり顯昭云葉守の神とは
樹神なりよろつの木を守る神なりさて葉をもる神
といふ也かく注せられたれと基俊等の歌に葉守の
神をはかしはによまれたれはかしはに居てあたし
木をもまもらるゝにや仁德紀に葉「此云衛始婆」
と註せられたれは葉はかしはをもとゝするなるべ
しうつほ物語國ゆつりの巻に「おひてさはもゝか
しはにやなりにける子日をちよとかそふへき松此
もゝかしはは百葉にて小松の葉の百はかりあるを
いへるにや

忠文かみちのくの將軍に成りてくだりける時
抄云勘云參議修理大夫天慶三年正月九日右衞門督
征東大將軍 愚按 藤原忠文 天慶三年 正月蒙二勅命一
與二平貞盛俵藤太秀卿一赴二東關一而誅二伐平將門一此
時之事也又宇治離宮明神則忠文之靈也

それかむすこなりける人を監の命婦しのびてあひか
たらひけりむまのはなむけにめとりくゝりのかりき
ぬうちきぬさなとやりたりけるかのえたるをとこ
直云くゝり染は今いふ絞染の事也ゆはたともいふ
うちきは男女ともに下に着る物にて褂とかく衵(アコメ)さ
同し物にてすその長きとみじかきとのわかちのみ
ぬさは五色のきぬをこまかに切て帒に入て旅の料
にもつ也　夏蔭按めとりくゝりは今の鹿子絞なる
べしふるく目染といふものは今の鹿子染なるへき
よし在滿大人の考也

よひ〳〵にこひしさまさるかり衣こゝろつくしの物
にそありける
直云旅に出たちて後に程へていひおこせたるにや
さにはあらてはふつにとゝのはぬ歌なるをいかて

あてけん歌はわろけれど別のかなしさにつけて先
　心をあはれみしにや
とよみたりけれは女のでゝなきけり
　抄にむすこなりける人は忠文の子大七といへるも
　の成へしと
おなしひとに竪命婦やまちゝをやりたりけれは
みちのくのあたちのやまもろともにこえはわかれ
ちかなしからしを
　抄云褐布を昆題也和名抄褐毒毛布東家
となんいひけるさてつゝみなるいへにすみけるさて
あゆをなんとりてやりける
　抄云竪命婦の家を云也上文第十段竪命婦か堤の家
　を人にうりてとあり
　夏蔭抄下のさては衍文也此詞有ては文義とゝのは
　すこの所は堤なる家に住ける比とあるへき文也
　かも川の瀬にふすあゆのいをとりてねてこそあかせ
　夢にみえつや
　抄云そなたの御ためにとてあゆとりあかしなど心
　ざしの淺からねは夢にもみえぬへしと也
かくて此をとこみちのくにくたりけるたよりにつけ
てあはれなる文ともおこせけるを云々久しくなりて
もてきたるになんありけるをんた
　抄云蔭塚驛奥州也
しのつかのうまや〳〵とまち侘しきみはむなしく成
そしにける
　直云拾遺雜下なしといへは惜からと思ふらんし
　かやうまこそいふへかりける六結うま　東路のうま
　や〳〵とかそへつゝあふみの近くなるそうれしき
　あつまちの里の遠くもあらなくにうまや〳〵と君
　をまつかな小馬命婦集獨寐はかひなかりけり廟な
　へてかけのうまやと待て寢まんみな馬を今によせ
　たり
とよみてなんなきける云々かねのつかひかけておや
のもとにいくになんありける
　直云こゝは六位藏人の叙爵して五位になりて地下
　になるをおりてといふへし然らは藏人所にとある
　にの字誤にて藏人所をなるべし　抄云かねのつか
　ひ古は他所には使すくなくてたゝ奥州より貢せし
　事あり其ための使也わらはにて童殿上にてをさな
　きほどにする事也とみえ待禁抄云近代童殿上有

代體ニ云々藏人所職原抄ニ云嵯峨天皇御宇弘仁年
中初置ニ之其時ハ侍中內侍等職事 下 者ヲ云藏人其
莊ニ校書殿ニ有ニ別當ニ左大臣一人頭二人預人八人出
納三人小舍人六人云々或云兼十二人有ニ內官ニ或所
衆廿二人瀧口廿二人或藏人八人五位二人或三人六
位六人或五人是皆職事也

誠式部卿のみやうせ給ひける時はきさらぎのつごも
り花のさかりになん有けるつゝみの中納言のよみ給
ける

抄云敦慶親王延長八年二月二十九日薨

新勅撰三中納言兼輔
咲匂ひ風まつほどややまさくら人のよゝりはひさし
かりけり

抄云吹風にこその櫻はちらすともあな頼みがた人
の心は花よりも人こそあだに成にけれいづれをさ
きにこひんとかみへし此兩首引合可見侍り 定家

三てうの右のおとゞの御返し 同三右大臣等ニ同
はるはるのはなはちることも咲ぬへし又あひがたき人
のよぞうき

おなし宮おはしましける時亭子院にすみ給ひけり云
々池のいとおもしろきにあはれ成ければよみける

池はなはむかしながらのかゞみにてかげみしきみぞか
なきぞかなしき

人の國のかみにてくだりけるうまのはなむけを堤の
中納言してまうち給ひけるにくるゝまでござりければ
いひやり給ふける

夏蔭案此段かならす上に何がしといふ名字ありし
か脫失たる成べし

わかるべき事もあるものをひねもすにまつとてさへ
もなげきつるかな

ごありければまうどひ來にけり

おなし中納言かのとのゝしんでんのまへにすこしと
ほくたてりける櫻をちかくほりうゑ給けるがかれざ
まにみえければ

抄云かのとのゝ兵殿兼輔の御殿あり所也ニ夏蔭案
兼輔集に兵衛の司はなれて後前にてうはいぞうゑ
て花のおそく咲ければとて今の歌あり

後撰春三
やどちかくうつしてうゑしかひもなくまちどほにの
み見ゆるはなかな

抄云まちどほにとは宿ちかくといふに對して急給
さきまたるゝをおそく遅きやうに見なし給ふ優なるにや

後撰集に前栽に紅梅をうゑて又の年おそくひらき
けれはと此歌の言書に侍

とよみ給ひける

おなし中納言くらうどにて有ける人の加賀のかみに
てくたりけるにわかれをしみける夜中納言
古今離別藤原かねすけ朝臣
きみかゆくこしのしらやましらねどもゆきのまに
〳〵あとはたつねん

抄云古今に入言書に大江千古かこしへまかりける
馬のはなむけによめるとあり

となんよみ給ひける

かつらのみこの御もとによしたねがきたりけるを母
みやす所きゝつけ給ふて云々かとのはざまよりいひ
いれける

抄云かつらのみこ孚子内親王寛平皇女　よしたね勘云喜
種正五位下美作介從三位刑部卿長猷男かとのはさ
まは門の間也

こよひこそなみだの川にゐるちどりなきてかへると
きみはしらすや

これもおなしみこにおなしをとこ

なかきよをあかしのうらにやくしほのけふりはそら
にたちやのほらん（ぬイ）

抄云此歌も前段とおなしやうの時にや異本にのほ
らぬと侍心はかほとの思ひの烟の空にもたちのほ
らぬかと成へし　夏蔭云抄にいへるたちやのほら
ぬの詮わろしのほらぬはうらに意かへりて立のほ
る也

かくてしのびて（つイ）あひ給ひけるに云々されどめし也け
ればえとゞまらで急ぎ參給ければ喜種

抄云奥義抄云八月木のはもみちておつる故に葉お
ち月といふをはつきとあやまれりと云々　直云八
月をはつきといふ事誰も秋のもみぢよりいふとい
へど八月は紅葉はまたし此月の名心得す

たかとりかよゝになきつゝとゞめけんきみはきみに
とこよひしもゆく

直云竹取の翁か養ひし娘の天に昇らんとせしをと
ゞむれどきかで八月十五夜月のあかき空に向ひの
ほりいにしを此みこをとゞむれど猶院の御所へ參
り給ふをたとへたる也さて上旬はみな竹取の姫君
の事下旬のひとつの君はかつらのみこ下の君は院
の御事を申せし也

監の命婦朝拜の威儀の命婦にて出たりけるを彈正のみこ見給ひてにはかにまどひけさうじまどひ給ふげり御文有ける御返事に
抄云朝拜の威儀命婦は元正の辰の時に天皇大極殿に行幸あるを群臣拜し奉らるゝ事を朝物とも朝賀ともいへり猶公事根源に委し威儀命婦は不レ限ニ朝拜ニ節會なとに威儀を調て侍事也けさうは懸想也彈正のみこ章明親王にや　直云けさうは係想また繫念なとかけり懸の字用ひし事なし　朱書云此直解の說僻說なり繫懸兩字字義相通
うちつけにまとふ心ときくからになぐさめやすくおもほゆるかな
抄云五文字さしあたりになどいふ詞也　直云その迷ひこふる心をなこめ安き也うちつけの事なればなだむるもはやからんといふ也
みこの御うたはいかゞ有けんわすれにけり
又おなじみこにおなじをんな
こりずまのうらにかつかむうきみるは波さわがしくありこそはせめ
抄云此歌は一度あひたてまつりて名など立てのち又まみえむなど宣ふ時よめるにや
宇多院の花おもしろかりける比南院のきみたちこれかれあつまりてうたよみなどしけり右京のかみむねゆき
抄云宇多院は拾芥云西京土御門北木辻ノ東（此小路當東洞院）法皇御所刑部卿源湛宅云々或抄云西京宇多小路但此小路當ニ町尻東行ニ南院のきみたち今按に前の宗于勘物是忠親王男と三光院殿の御說を王代系圖になしと註し侍しかと此段のさまをみ侍るに宗于のきみは南院の御息無疑にや
きて見れば心もゆかずふるさとは（のイ）むかしながらの花とちれども
抄云ふるさとゝ侍れば宇多院崩御の後などによめるにや
こと人のもありけらし
季縄（すゑなは）の少將のむすめ右近故きさいのみやにさふらひけるころ故權中納言のきみおはしけるたのめ給ふ事など有けるをみやにまゐることたえて里に有けるに更にとひ給はざりけり內わたりの人きたりけるにいかにまゐり給ふやとゝひければつねにさふらひ給ふ

さいひければ御文たてまつりける

抄云季縄少將は右少將從五位上鷹ノ名人號ニ交野少將ニ右近拾遺作者也故きさいのみや穩子（昭宣公女なり）故權中納言は敦忠（時平公息）天慶六年三月七日薨（三十七）大鏡に世にめでたき和歌の上手管絃のみちにもすぐれ給へりき云々

わすれじとたのめし人はありときくいひしことのはいつちいにけん

（後撰戀二初句わすれしと）

となんありける

おなじ女のもとにさらにおともせできしをなんおこせ給へりけるかへりごとに

くりこまのやまにあさたつ雉よりもかりにはあはじとおもひしものを

（六帖きじ）（われをはかりにあるひけるかな六）

契沖云和名抄山城久世郡栗隈（久里久末）夫木十一貫之の家歌合讀人不知みかりするくりこまやまの鹿よりもひとりぬる夜ぞかなしかりける（下文自四十三段に見えたる歌也）能宣集の詞書にはくりこ山ともみゆ同所也朱書云河社二十六（ォ）六帖にはわれをはかりに云々とあり同じ歌なるべしくりこまやまは山城久世郡にあり和名抄云々とある是也能宣集にくりこ山なる人の家にをうなども紅葉見侍り「紅葉みるくりこま山の夕かけをいさわかやどにうつしもたらんことかきのくりこ山はまの字の落たるにやとおもへど俗にはさいふにや保元平治物語の歌にも「奈良法師くりこ山までしふりきていかもの丶くをさきぞとらる丶

となんいひやりける

おなじ女うちのざうじにすみける時しのびてかよひ給ふ人有けり云々雨のもりければ莚を引かへすとて

抄云頭なりければ藏人頭也職原抄藏人所之下云四位侍臣中ノ殊ニ撰ニ其人ニ爲レ頭云々藏人頭は殿上を管領せり總じて殿上の貫首なればこの物語にも殿上に常にありけりと侍にや其人誰とも未レ知案に清愼公延長八年九月二十五日補レ頭又謙德公（九條師輔公男）伊尹天曆九年八月十七日補レ頭これらにもおはすべきにや

直云こはいとあがめ書つれば謙德公のはじめ天曆のころ頭になられしをいふにや

おもふ人あめとふりくる物ならばわかもるとこはかへさざらまし

となん打云けれはいと哀と聞給ひてふとはひ入給に
けり。
おなじ女男のわすれしとよろつの事をかけてちかひ
けれど忘れにけるのちにいひやりける
拾遺戀四 わすらるゝ身をばおもはすちかひてし人のいのちの
をしくもあるかな
直云神佛に誓ひて忘れしなどはしめはいひしかわ
すれにたれは其人の命そ先いとほしきといふ也
返しはえきかす
おなじ右近桃園の宰相のきみなんすみ給ふなどいひ
のゝしりけれどそらことなりけれはかのきみによみ
てたてまつりける
抄云紹運錄云源保光號二桃園中納言一
よしおもへあまのひろはぬうつせかいむなしき名を
はたつへしやきみ
抄云あまのひろはぬといふに實なきこゝろをこめ
たりいたつらなるなき名をおはむよりはよく／＼
君も誠に思召せと也
となんありける
むつきのついたちごろ大納言殿に雍盛まゐりたりけ
るに物などのたまはせてすゞろにうたよめとのたま
ひけれはふとよみてたてまつりける
抄云大納言殿闕　直云すゝろは心におほえすある
事なるを轉してこゝは何のくさはひもなくふと歌
をこふなり
けふよりは猿のやけはらかきわけてわかなつまむと
たれをさそはん
とよみたりけれはになくめて給ふて御返し
かた岡にわらひもえすは尋ねつゝこゝろやりにやわ
かなつまゝし
抄云後撰には此返歌なし蕨は十二種の中にも侍れ
は初春よりもある物也されはわかなに對して侍り
となむよみ給ひける
たしまの國にかよひける兵庫のかみ成ける男のかの
國なりける女をおきて京へのほりけれはゆきのふり
けるにいひおこせたりける
抄云兵庫のかみ闕
やまさとにわれをとゝめてわかれちのゆきのまに
／＼深くなるらん
といひたりけれは返し 此文字なしイ

山里にかよふこゝろはたえぬへしゆくもとまるもこゝろほそさに
となんかへしたりける
おなし男きのくにゝくだるにさむしとてきぬをとりにおこせたりけれはをんな
紀のくにのむろのこほりに行人はかせのさむさもおもひしられし
抄云むろと云物はぬりこめにしてあたゝかなる物なるを紀伊國の牟樓郡にそへてよめり
かへしをとこ
きのくにのむろのこほりにゆきなから君とふすま（衾）のなきそ（かたい）わひしき
修理のきみにうまのかみすみける時かたのふたがりけれは方たかへにまかるとてえ参りこぬといへりけれは
抄云修理のきみ勘云内匠允藤眞行女云々拾遺の作者也うまのかみ闕
これならぬこと（かたい）をもおほくたかふれはうらみんかたもなきそわひしき
抄云あまりあだ〳〵しきにめなれし人はうらみんかひも今更に有まじきこそげに侘しきことなめれ
かくて馬のかみゆかす成にける比讀ておこせたりける
拾遺雑秋修理
いかてなほあしろのひをにことゝはんなにゝよりてかわれをとはぬと
抄云拾遺に入侍詞書に藏人所に侍ける人のひをの使ひにまかりけるとて京に侍なから音もし侍らさりければ云々うたの心は氷魚の網代による事のあるよりよめり
といへりけれはかへし
あしろよりほかにはひをのよるものかしらずはうちのひとにとへかし
濱臣云あしろよりほかにはといへるにむかへて宇治に内といひよせたり
又おなし女にかよひける時つとめてよみたりける
抄云つとめて早朝をいふ也
あけぬとていそきもそするあふ坂のきりたちぬとも人にきかすな
夏蔭云女の歌也
をとこはしめごろよみたりける

いかにしてわれはきえなんしら露のかへりて後のものはおもはし

抄云おひみしほどにしにたらは歸る朝の物おもひもすましけれはいかにして露とわか身はきえむと也

かへし

かきほなるきみか朝かほみてしかなかへりてのちは物やおもふと

おなし女にけぢかく物などいひてかへりて後によみてやりける

抄云けちかく氣近也したしくちかづきたる心也

心をしきみにとゝめてきにしかはものおもふ事は我にやあるらん

抄云上の句は古今「あかさりし袖のうちにや入に劔我魂のなき心ちすると云心也下の句は其とゞめこし心にも戀しきおもひはしたかはでたゞ我身につきそひたるにやと也源氏「俤は身をもはなれす山櫻心のかきりとめてこしかとと侍るも此心にや

修理か返し

たましひはをかしき事もなかりけりよろづのものはからにぞありける

抄云からは骸也又心をばきみにとゞめしといふをうけて馬のかみをさしていへり歌の心は心をとゝめしとはあれどめにみる物にもあらねは何の曲もなしたゝ御身のかたち社はよろつの哀も物のをかしき事も侍れと也をかしきは面白き心也

おなし女に故兵部卿のみや御せうそこなとしたまひけりおはしまさんとのたまふければきこえける

抄云故兵部卿のみやは元良親王陽成院第一皇子三品兵部卿天慶二年七（六イ）月二十三日薨五十四歳

新勅戀二修理
たかくとも何にかはせんくれ竹のひとよふたよのあたのふしをは

抄云此うた竹の縁語にてよめり五文字は親王をたうとみていへりかたじけなき御事なからとても末とげさせ給ふまじければあたら／＼しきひとよふたよはかりのちぎりを何にし侍らんと也又梁孝王の（漢文帝の子）修竹苑の故事より親王を竹のそのふと申せばかくよめるにや（修竹之事在史記孝王世家之註）つれ／＼草に云呉竹は葉ほそく河竹は葉廣し御溝にちかき河たけ仁壽殿のかたによりてうゑられたるはくれたけ也と

云々
朱書云源本此條より中卷とす
三條の右のおとゝ中將にいますかりける時まつりのつかひにさゝれていてたち給ひけり云々いろなともいときよらなるあふぎのかなともいとかうばしうておこせたりひきかへしたるうらのはしのかたにかきたりける

抄云三條右大臣定方也勘に云延喜六年三月左中將九年四月參議中將如元　まつりのつかひ賀茂祭卯月中の酉の日也公事根源に云末日まつ陣に着て六府をめして警固の由を仰す當日のつかひは近衞の中少將つとむと云々かなども扇に燒しめたるなり

拾遺雜戀　讀人不知
ゆゝしとていむともいまそかひもあらし（なイ）うきをはこ（か）れにおもひよせてむ

抄云女の扇に書しうた也ゆゝしとはいま〳〵しき事也袖中抄云名におへはたのみぬへきをなぞもかくあふきゆゝしと名つけそめけん顯昭云昔は扇を人にとらするを忌事にて有ければゆゝしとはよみそめたり愚按是は班女が古事の心にて扇は夏のほとは愛せられてやがて秋風ふけば捨らるゝものなればおもふ人にとりかはす事をいむ成へし後撰にびとをのみうらむるよりは心から是いまざりしつみとおもはむ公任卿集にも云宣方中將賀茂の使にいてたちけるに具して花のかたを作りたりける扇をすり袴にそへてやり給へりければ「あふきをはゆゝしとのみそおもひこしけふはかひあるかたみなりけりと云々此物語のうたの心は昔より忌きたる扇をいまははや取に給へるからは女の獨ゆゝしといむかひもあらじよく〳〵かくまゐらするにつけてもうきをおもひよせむと也いみ給べきあふきを取にだに給へりけるよと也

とあるを見ていとあはれとおほして返し
ゆゝしとていみけるものをわかためになしといはぬはたかつらきなる

抄云我こそとりにまゐらすともさやうにいまはしと思給ふ物ならばなしとて給るまじき事よと也何ともしらてとりにまゐらすると知ながらたまはるとは誰かはつらきとかへりてうらみたる返歌也

故權中納言左のおほいとのゝきみをよはひ給ひけるとしのしはすのつごもりに

抄云故權中納言敦忠左のおほいとのゝきみ清愼公

のむすめ後撰にみくしげとのゝべたうとあり

後撰冬 藤原敦忠

物おもふと月日のゆくもしらぬまにことしもけふにはてぬとかきく

となん有ける又かくなん

後撰戀五 藤原敦忠 拾遺戀一 五文字いかてかは

いかにしてかくおもふてふ事をたに人つてならてきみにかたらむ

抄云後撰詞書云しのひてみくしけとのゝべたうにあひかたらふときゝて父の左大臣せいしければさあり後拾遺集にいせの齋宮わたりよりのほり侍ける人に忍ひてかよひけることをおほやけきこしめしてまもり女などつけてければ忍びにもかよはず成にければよみ侍ける左京大夫道雅「今はたゝおもひたえなんとはかりを人づてならていふよしもかなと侍るも此ものかたりの心よりにや

かくいひ／＼てつひにあひにけるあしたに

後撰戀四敦忠

けふさへにくれさらめやはとおもへともたへぬは人のこゝろなりけり

抄云此五文字けふといへはなといふ心にやさへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさにと古今に侍る五文字を祇註に我心に了簡したる事也とあり　直云たへぬはけふも暮ぬ事あらしとおもふにも猶暮を待堪ぬは人の心と也そへにとある本は誤なりさへと有べし

これもおなし中納言齋宮のみこをとし頃よはひたてまつり給ひて云々さてよみてたてまつり給ひける

抄云齋宮のみこは勘云雅子内親王延喜皇女 承平二年十二月廿五日卜定六年母喪にて退配云々いせの齋宮の御占にあひ卜定の事也皇女をうらなひて定る事也延喜式前に侍り此段の體狹衣の中將源氏のみやをけそうし給ふに賀茂の齋院のうらにあひ給ふて其志をむなしくし給ふに似侍

後撰戀五同

いせの海のちひろの濱にひろふとも今はかひなく（なにてふかひかあるへき也）おもほゆるかな

直云此歌後撰集よし今の末句の如くてはひろふともといふてにをはかなはす

となんありける

故中務の宮のきたの方うせ給ひて後ちいさききんたちをひきぐして三條の右大臣殿にすみ給ひけり御いみなど過してはつひに獨は過し給ふまじかりければかの北の方の御おとうと九のきみをやかてえ給は

むとおほしけるを何かはさもとおやはらからもおほしたりけるに
抄云故中務の宮代明親王延喜皇子三品中務卿北のかた右大臣の御むすめ成べし御いみなとは服忌令に云妻服九十日暇廿日と云々何かはさもは何かはくるしからんさもせんといふ詞也又一説に何かはさもせん姉のあとへ妹はまゐらすましきと也されど此段の心にははしめの心かなひ侍らんにや九の君勘云右大將濟時母三條右大臣女
いかゞ有けん左兵衛のかみのきみ侍従に物し給うける頃云々其時にみやす所の御もとより
抄云左兵衛のかみは勘云小一條左大臣貞信公男號師尹侍従に物しは侍従の官におはしつる頃と也みやす所勘云女御能子イ芳子三條右大臣女九のきみの姉君なるべし
なき人のすもりにたにもなるべきにいまはとかへるけふのかなしさ
抄云すもりとは鳥の巣にかいごのかへらずして殘るを云也
直云こは九の君を姉の御かはりにもとおもひしをかの左兵衛のかみの御文もて來るといふ事によりて宮のかへらせ給ふをよそへて云也和名抄毈和名須毛里　卵不レ孵也蜻蛉日記中巻長歌よつにわかるゝむらとりのおのかちり／＼はなれなはわつかにのこるすもりこも何かはかひのあるへきと
康熙字典殳部　毈徒玩切音段説文卵不レ孚也玉篇不レ成レ子曰レ毈揚子法言　雞伏レ卵而未レ孚或作レ孵音赴
みやの御返し
すもりにとおもふこゝろはとゝむれとかひあるへくもなしとこそきけ
抄云かひあるへくといふにかひこをそへ給へり九の君に左兵衛のかみの文もてくときゝ給ひし事をのたまひける御返歌也和名抄卵加比古
となん有ける
おなし右のおほいとのゝみやす所みかとおはしまさす成て後云々齋宮の御もとより御文たてまつり給へけるにみやす所みやのおはしまさぬ事なときこえ給ふておくに
抄云式部卿宮は敦實親王宇多皇子齋宮の御もとは柔子内親王宇多皇女あつみのみこの妹也

後撰冬　ゆきふりおれは後
しら山に降にし雪のあとたえていまはこしぢのひと
もかよはず
抄云後撰集此歌の詞書に式部卿敦實のみこ忍びて
かよふ所侍りけるをのち〳〵たえ〳〵に成侍りけ
ればいもうとの前齋宮のみこのもとよりこの頃は
いかにぞとありければその返事に女とあり
となん有ける御返あれど本になしとあり
直云此下に詞落たる成へし今の本になしとあるは
後人のかけるもの也
かくて九のきみ侍従のきみにあはせたてまつり給ふ
てけり云々かのきみむここられ給ひぬとき〻給ひて
おと〻みやす所に
抄云左のおと〻小野宮左大臣實頼號ニ淸愼公一かの
きみむこゝられは侍従のきみの定方の聟にとられ
たまふ事を聞てうらやみ給へる成べし
なみのうつかたもしらねどわたつみのうらやましく
もおもほゆるかな
おほきおと〻の北の方うせ給ふて御はての月になり
て御わざの事いそかせ給ふ頃月のおもしろかりける
にはしに出給ふて物のいとあはれにおほされければ
抄云侍奴歌におほきおと〻は貞信公也云々きたの
かたは貞信の北の方寛平の皇女もあり能有右大臣
の女もあり此次の段に別に左のおと〻の御母すか
はらのきみかくれたまふと侍るは寛平の皇女なれ
は是は能有のむすめにや御わざ御事也佛事成べし
いせ物語に四十九日（たゞなるか）のみわざとあり
かくれにし月はめぐりてきにしか（いでくれども）とかけにも人はみ
えずぞありける
抄云貞信公のうた也
おなしおほきおと〻左のおと〻の御は〻すがはらの
きみかくれたまひにける御ぶくはて給にける頃
抄云左のおと〻は小野宮太政大臣實頼大鏡に云こ
れ忠平のおと〻の一男におはします小野のみやの
おと〻と申き御母は寛平法皇の御むすめとあり勘
云寛平皇女源氏順子母菅丞相女云々此北の方の御
母かた菅家なればすがはらの君と申にや
亭子のみかどなんうちに御せうそこきこえ給ふて色
ゆるされ給ひける云々かく色ゆるされ侍る事なとき
こえ給ふさてよみ給ふける
抄云うちに御せうそこは寛平法皇當今へ聴色（コルスイロ）の事

をとりもち奏せさせ給へる成へしいろゆるされは禁色の宣旨くたりしにやきさいの宮七條后宮温子寛平三后昭宣公之女貞信公之姉

ぬぐをのみかなしとおもひしなき人のかたみのいろはまたもありけり

抄云寛平法皇の御消息にて色ゆるされ給ひてかく花やかになり給ひし事をよみ給へりうせ給ひし北の方は寛平の皇女なれはかたみの色は又もありけりとなるへしはしめ服のうちにめしけるにひ色をまづなき人のかたみとおほしめしける心よりかくよみ給也

とてなむなき給ける其ほとは中辨になんものし給ふける

抄云勘に云貞信公不レ歴ニ中辨ニ而四位侍從任ニ參議ニ後に右大辨云々

亭子のみかど御もとにおほきおとゝ大井につかふまつり給へるに云々かならす奏してせさせたてまつらんなと申給ふてついてに

直云こゝの事いとうたかひあり百人一首此歌の所にことわれり貞信公大納言の時の事也　夏蔭按扶桑略記巻二十四延長四年十月十九日天皇行ニ幸大井河ニ親王卿相皆以相從太上法皇同以御行雅明親王供奉一代要記說同此大井御幸又行幸の事につきての眞淵か考は是にあらざる事は香川翁百首異見此歌の所に委しく辨しおかれたれは引合せて見るべし

拾遺雜秋　小一條太政大臣

をぐら山みねのもみちは心あらはいまひとたひのみゆきまたなん

拾遺集雜秋亭子院大井川に御幸ありて行幸も有ぬへき所とおほせ給ふに事のよし奏せんと申てとあり

穗井田忠友名蹟臆斷云小倉山は今いふ嵐山也云々

となん有けるかくてかへり給うてそうし給うければいとけうある事也とて大ゐの行幸といふことはしめ給ひける

抄云大井行幸は延長四年八月とかや　夏蔭按八月は誤也上に引記せる古記みな十月十九日といへり八月は紅葉の時にあらず

おほゐに季縄の少將すみける頃みかどの給ひける花おもしろくなりなはかならず御らんせんとありける

をおほし忘れておはしまさゝりければ少將
ちりぬれはくやしき物をおほゐ川きしのやまふきけ
ふさかりなり
とありけれはいたうあはれかり給ふていそきおはし
ましてなん御らんしける
抄云此帝いつれの御時かもし宇多の院にや
おなし少將やまひにいといたうわつらひてすこしお
こたりてうちにまゐりたりけり云々三日はかりあり
て少將のもとより文をなんおこせたりけるをみれは
抄云みたり心ちはおこたりはてねとは病氣はこと
ことく平愈にもあらねとゝ少將の詞也かく迄侍る
事今日まては存命(ながらへ)つゝ對面し侍るなどやうの心也
新古哀傷　季繩　くやしくものちにあはむと契りけるけふをかきりと
いはましものを
とのみかきたりいとあさましくて涙をこぼしつかひ
にとふいかゝ物し給ふとへはつかひもよわくなり
給ひにたりといひてなくをきくにさうにもえきこえ
す云々かくてありける事をかんのくたり奏しけれは
帝かきりなくなん哀かり給ける
抄云このゑのみかとは梁塵愚按抄に陽明門をいふ
也と侍り拾芥云陽明門は東面又云山氏造之五間
戸三間號ニ近衞ノ御門ニ云々かんのくたりかみのく
たり也まへにあるかたちを延喜帝へ奏し給也
土佐のかみにありけるさかゐのひとさねといひける
人やまひしてよわく成てとばなりける家にゆくとて
よみける
抄云酒井人眞古今作者に左中吏河内國人云々
ゆく人はそのかみこむといふものをこゝろほそしや
けふのわかれは
抄云そのかみ此物語にてはおしなへて當時の心也
此歌の心はよのつね出行する人はやかて其時かへ
りこんなといふを此たひはかきりとおもへは心ほ
そしとなり
平仲が色このみけるさかりに市にいきけり
抄云勘云貞文佐兵衞左從五位上左中將好風男世號
ニ平仲ニ云々市に行けりは色このむ人なれはあつま
る人など見に出たる成べし
なかころはよき人々市にいきてなんいろこのむわざ
はしける云々さりければをさこのもとより
抄云こたちは后宮の御かたの女房達也色このみか

ゝりはたはふれかゝれるなるべしのちに文をは市より歸りて也

直云になうは無似なり

續後撰戀一百敷にあまたの神はみえしかと續後撰

百敷のたもとのかすはみしかともわきておもひのいろそ戀しき

抄云おもひの色は緋の色をそへたり武藏守の女（ムスメ）こきかいねりきたる故也

夏蔭案續後撰戀一に七條の后宮のむさしにつかはしけるとて二三の句かはれり

といへりけるはむさしのかみのむすめになんありけるそれなんいとこきかいねりきたりけるそれをとおもふ也けりされは其武藏なん後はかへりことしてい（一本此詞なし）ひつきにける云々いといたう人々けさうしけれと思ひあかりて男なともせてなん有けるされとせちによはひけれはあひにけり

抄云武藏のかみ閑こきかいねりは濃搔練（コキカヒテリ）也表裏紅（おもてうらくれなゐ）の打たる物にて中金ある女の裝束なり末摘花卷にさむき霜あさにかいねりこのめる花の色あひやみえつらんとありいひつきにけるとはかたらひつきたりといふかこさし

夏蔭按在滿大人云火色搔練二色さしたる差別なけれとも細かにわかては裏表共に打て中倍を入たるを火色といひ裏は張て中倍もなきを搔練といふとみえたりといはれき詳に裝束色葉にみゆ

そのあしたふみをもおこせすよるまておともせす心うしと思ひあかして又のひまてと又もおこせす

抄云はしめてあひたるあくるあしたは後朝とて必文つかはす事とそ枕草紙にむねつぶるゝ物よべきたる人のけさの文おそき聞人さへつふるとあり

其夜したまちけれと來すあしたにつかふ人なといとあたに物し給ふときゝし人を云々其夜もしやとおもひてまてと又こす又の日もふみもおこせすすべておともせす五六日に成ぬ

抄云いとあたに物し給ふとつかへ人ともの詞也平仲はもとよりあた〳〵しきゝしをとこ也ありありてあひたてまつりいといたう人々けさうしつるにはおもひあかりてあひたまえてと口をしかる也みつからこそ平仲の身社さりかたきさはりありともこ也心ちにもわか心にもある事を人もいへはいよ〳〵女のくやしさのまさるさま也五六日いつか

むゆかとよむ
此女ねをのみなきて物もくはす云々人にはしらせてやみたまひてことわさをもし給ひてんといひけり
抄云大かたはなおほしそつかへ人の詞也此人の事を思しそ是にかきるへき御身にもあらずと也人にはしらせで平仲にあひし事を他へはしらせ給はで又餘の人にもあひ給へと也　直云つかふ人數ある中に大かたの人はそれに思ひ絶給ひて又他の人にもといふ也　又云上文に云わかかくありきするをねたみてことわさするにやあらんといへはこゝもこと男するをいふ也
物もいはてこもり居てつかふ人にもみえていとなかかりける髮をかいきりて手つからあまに成にけり云々今まてねたりけるとてせうえうしにとほき所へゐていましてけさのみのゝしりてかへし給はすからうして歸るまゝに
抄云かゝりけるやうは是より平仲文をもやらすみつからもゆき給はぬ事をいふ也つかさのかみとは官につかさ〳〵有て其したに佐尉志（スケゼウサクハン）などのたくひありいま平仲は左兵衛の佐なれは其頃の左兵衛督をつかさといふへしよりふしたるとは平仲の體なりせうえうは逍遥也莊子林希逸註云逍遥言ニ優游自在ナル也云々　ゐていまして將の字なりひきゐておはします也
亭子のみかとの御ともに大井にゐておはしましぬそこにまた二夜さふらふにいみしうゑひにけり云々人なん來てうちたゝくたそとゝへば猶ぞその君に物きこえんといふ
直云平仲この頃は尉なりし成へし
さしのそきてみれは此家の女也云々いとあやしうおほえてかいたる事をみれは
抄云わかねては綰（ワカヌル）也
濱臣云そき尼のそきし髮の末をいふきれとは絹紙等なとにかきらす及物もて裁し物の總名也和泉式部集に宮法師になりて髮のきれおこせ給へるを云々續世繼（白川のわたり）紫壇のきれ殿に申てそのかうらんのをれたるつくろはん此外細布にいふはつね也
あまの川そらなるものときゝしかとわかめのまへの涙なりけり
とかきたりあまになりたるなるべしとみるに目もく

れぬ心きゝをまとはしてこのつかひにとへは云々男の心ちいといみしなでうかゝるすきありきをしてかく侘しきめをみるらんとおもへとかひなし
抄云さはかりにさほとなかゝりしかみをおたらしとおもへる詞也なでうかゝるすきありき何とてかゝるすきことのありきをせしと我好色を悔む心也帚木にいとゝかゝるすき事ともをとあるも色好の事也
なく／＼かへりことかく
世をわぶるなみたなかれてはやくともあまの川にはさやはなるへき
直云世のうき事堪かたくとも尼になるへき事かはといへり
いとあさましきにえものもきこえすみつから只今まゐりてとなんいひたりける云々事のあるやうさばかりをつかふ人々にいひてなく事かぎりなし
抄云ぬりこめにくらなとやうにして人にあふまじき時かくれなとする所也夕霧の巻に小野にて落葉のみやのぬりこめにかくれ給へる事侍事のあるやうさはかりを平仲身のうへのさはりありてえまゐらさりし事のたらちをいひことはれるさま也
直云そのかみは其をり也塗籠は物おく所にて又人も引こもるへくしつらひたる物也事のあるやうは平仲この頃の事のさまをいひてといふ也さはかりはそればかり也
物をたにきこえん御こゝろをたにしたまへといひけれとさらにいらへをたにせすかゝるさわりをはしらでなほたゞいとほしさにいふとやおもひけんとてなん男はよにいみじき事にしける
しけもとの少將に女
抄云勘云藤滋幹大納言國經男延長六年六月右少將承平二年卒後撰の作者女誰ともなし
新古今讀人不知 戀しさにしぬるいのちをおもひ出てとふ人あらはなしとこたへよ
少將かへし
からにたにわれきたりてへ露の身のきえはともにとちぎりおきてき
朱書云河社二十七萬葉集第十二に「あさな／＼草の上白くおく露の消は共にと云し君はも　抄云われきたりてへはわがきたれりといへ也八重葎して門

させりてへと侍るとおなし女のなきからに成とも、
はやわかきたれりとつけよ同穴の契せし中なれは
いまたゝいまゆかんほとにと也猶五文字のだにと
いふてにをはは女のいきてあるよにしらせたらは
ともにしなん物をよしさきだちぬともといふ心こ
もれり此返歌新古今には侍らす
中興のあふみのすけかむすめ物のけにわつらひてじ
やうざうたいとくをげんざにしけるほどに人とかく
いひけりなほしもはたあらざりけり
直云うき名のみにしもあらざりけりにてたゝにし
もといふにおなし
しのびてありへてのち人のものいひなどもうたてあ
り猶世にへしなとおもひわひてうせにけりくらまと
いふ所にこもりて云々なぞのふみぞとおもひてとり
てみれはこのわがおもふ人のふみ也かけることは
後撰戀四中興がむすめ
すみぞめのくらまのやまにいる人はたどる／＼もか
へりきなゝむ
抄云此歌後撰に入侍るに詞書淨藏くらまへなんい
るといへりけれはとあり
とかけりいとあやしくたれしておこせつらむとおも
ひ云々又山に入にけりさておこせたりける
抄云淨藏見まくほしさにいさなはれつゝあくしあ
りきなからもはらあひ事もえせてかへりておこせ
しとなり
からくしておもひわするゝ戀しさをうたてなきつる
うくひすのこゑ
抄云やう／＼として思ひわすれつるに又文なとお
こせてこひしさを催しつるとかこちたる心也
かへし
さてもきみわすれけりかしうくひすのなくをりのみ
やおもひいつへき
抄云わすれけりかし扨ははや忘れ給ひつらんとい
ふ心也
といへりける又淨藏大とく
詞花戀上淨藏法師
わか爲につらき人をばおきなから何のつみなき世を
やうらみん
抄云此歌は前の歌とおなし時には有へからすいつ
にてもつかはしたるべし何のつみなきとは何たる
つみもなきといふ心に侍べし世を憂といふもかく
つらき人などあるにつけてなれは實に世にとりて

は何のつみもなしと也
ともいひけり此女はになくかしづきてみこたちかん
たちめよばひ給へどみかどにたてまつらんとてあは
せざりけれど此事いできければおやもみず成にけり
抄云親だにも踈み果し心にや元亨釋書云釋淨藏洛
城人諫議大夫殿中監善淸行之第八子也母弘仁帝孫
女夢ニ天人入ニ臥內ニ因而娠寛平三年生聰敏無雙云
々康保元年十一月二十一日化ニ雲居寺ニ壽七十四歲
博物顯密悉曇天文易筮醫卜絃歌文章伎藝莫レ不ニ貫
攝ニ而皆拔萃云々
故兵部のみやこの女のかゝる事まだしかりける時よ
ばひ給ひけりみこ
をきの葉のそよくごとにそうらみつるかせにうつり
てつらきこゝろを
これもおなしみや
新勅戀四兵部卿元良親王　さも新勅
あさくてそ人はみるらめせき川のたゆるこゝろはあ
らしとそおもふ
抄云せかれ川は末のなかれ淺けれともたえたる水
とはかはれりされはたえぬ心になそらへ給へり
直云寛平菊合十番逢坂關菊此花に花つきぬらし關
河の絶すもみよとをれる菊のはせきたる川を關河
といふよしあるはわろしさる詞やはあるへき
かへし
同　平中興女
せき川のいはまをくゝる水をあさみたえぬへくのみ
見ゆるこゝろを
抄云かくまのあたり絶々に見えさせ給ふ御心をい
かであさくはおもひ給へさらんとふくめたるてに
をは也
かくてこの女いてゝ物きこえなどすれどあはでのみ
ありければみこおはしましたりけるに月のいとあか
かりければよみ給ひける
よな〳〵にいつとみしかとはかなくていりにし月と
いひてやみなん
とのたまひけりかくてあふぎをおとし給へりけるを
とりてみればしらぬ女のてにてかくかけり
數ならぬ後撰集
わすらるゝ身はわれからのあやまちになしてたにこ
そきみをうらみめ
朱書云河社二十七オ　元良親王のおとし給へるを平中
興か女のとりてみるなり　同此歌は兼輔集にあた
なりけるをとこのあふきをやりけるにかはりてと

て君をわすれめとあり
抄云我身のあやまり故人には忘らるゝとは思ひなから猶人をは恨みつへき世の人の心のならひにやとかけりけるを見て其かたはらにかきつけてたてまつりける

ゆゝしくもおもほゆるかな人ことにうとまれにける世にこそ有けれ

抄云かく人ことにうとまれたてまつる世なれは我にも末とけさせ給ふ事はあるましきと也　濱臣云上文の歌にもよめる如く扇はわするゝならひにてゆゝしき物成よしの故事もあれは此歌あふきとはいはねとも直に扇にかき付たるにて扇をおもはせてさてゆゝしくもとはよめる成へし

となん又このをんな

わすらるゝときはのやまのねをそなく秋野のむしのこゑにみたれて

濱臣云山の嶺とつゝけて哭とそへたれは異本の山もとあるはわろし

返し

なくなれとおほつかなくそおもほゆるこゑきく事のいまはなけれは

又おなしみや

雲ゐにてよるふるころはさみたれのあめのしたにはいけるかひなき

抄云内裏につねにおはして御心のまゝに女のもとへもおはしまさぬ心也

かへし

ふれはこそこゑも雲井にきこえけめいとゝはるけきこゝちのみして

直云雲ゐにて世をふると聞え給ふをうけて吾をへたてゝ世に經給へはこそ今の給ふ言も雲ゐをうけてこと遠く聞ゆらめそれにつけても君ははるかになり給へる心ちのするといふ也

おなしみやにことをんな

あふことのねかふはかりになりぬれはたゝにかへせしときそこひしき

朱書云四の句せしとあるは誤なる事山口栞上十三に辨せり

直云あふ事の願ふといふ詞心ゆかねと外にいはむよしなしいたつらに返し奉にし事もありしを今は

御夜かれかちなれは其時だにとりかへさまほしき
と云也
南院のいまきみといふは右京のかみむねゆきの君の
むすめ也それおほきおとゝの內侍のかんのきみのか
たにさふらひけり云々おはしたえにけれはとこ夏の
かれたるにつけてかくなん
抄云南院のいまきみ後撰の作者也おほきおとゝの
內侍のかむのきみ勘云尚侍貴子入二文彥太子宮一天
慶元年任二尚侍一貞信公女世繼にも貞信公のみこたちの
事をいふ所にをんなごひとゝころは先坊のみやす
所にておはしましきとあり兵衛の君■　夏陰按南
院は是忠親王の御家にて宗于朝臣は此みこの子に
おはすれは其女も此所に住てかくいはれし也　直
云あや君は幼名なり
かりそめにきみかふしみしとこなつのねもかれにし
をいかでさき劔
抄云とこ夏を床にそへたりねもかれにしとは根を
寐る事にそへておはし絶にけることをよめり
おなじ女おほきがうしをかりて又後にかりたりけれ
ば奉りし牛はしにきといひける返事に

抄云[illegible]城後撰作者也
後撰雑二閑院のみこ（でこイ）
わかのりし車をうしとやきえにけんくさにかゝれる（はにかゝる後撰）
露のいのちは
抄云くさにかゝれるとは露の事をうしには草をか
ふ物なればいへり　夏陰按古今集に閑院とのみ見
えて後撰には閑院のご又閑院の大君ともみゆ古今
集の仲實朝臣の目錄には延喜の頃命婦云々とみえ
作者部類には源宗于女とみゆ別人かおなじ人か猶
考ふべし　再按作者部類に古今後撰の作者同人と
する說はひか事也古今の閑院は別人なる事戀二に
昇の大納言の近江介なりし頃歌をおくれるにて知
るべし
おなじ女人に
おほそらはくもらすながら神無月としのふるにも袖
はぬれけり
拾遺戀一よみ人しらず時雨にも雨にもあらて君こ
ふるとしのふるにもそてはぬれけり
大膳のかみ公平のむすめどもあかたのゐどゝいふ所
にすみけり云々三にあたりけるは備前のかみさね
あきらまだわかをとこなりける時になんはじめのを

とこにしたりけるすまさりければよみてやりける
抄云きんひらの女橘公平女後撰作者也あがたのゐと縣井戸一條よりかみなりとぞおほいこ太子也いちの姉也三にあたりとは第三のむすめは信明にとつきそめしと也信明は後撰の作者源公忠男也後撰春下あかたの井戸といふ家より藤原治方につかはしける橘公平女みやこ人きてもをらなんなさけな・くあかたの井戸の山ふきの花枕草紙家はあかたの井戸　新續古今に縣宮あり拾芥抄巻四井戸殿又縣井戸一條北東洞院西角とみゆ

この世にはかくてもやみぬわかれちのふちせをたれにとひてわたらん

抄云わかれ路のふちせとは三途河をいふべし女の初あひたる男にかの川にて手をひかるゝとぞ源氏・物語にも侍るうたの心はかく捨られてこの世は侘つゝも有ぬべきを渡り川のふちせをいかにせんとなり十王經云葬頭河曲云々初會男負其女人牛頭鐵捧挾二尺肩從渡狭瀬 源氏

となん有ける
おなじ女のちに兵衛の尉もろたゝにあひてよみておこせたりける風ふき雨降ける日のことになん
抄云勘云藤原忠中納言兼輔四男天慶九年藏人右兵衛尉（異に督とあり）

こち風はけふひくらしにふくめれとあめもよにはたよにもあらじな

抄云ひくらしは終日也こちふけば雨ふるものとぞ詩衛風習々谷風以陰以雨と侍り　直云雨もよのもは添へて語をのぶる例記にも萬葉にも多し雪もよも同じく雨の夜雪のよといふ也けふは雨風もむれど今夜は雨夜にはあらしといひて男を待時の女の心哀也

とよみけり
兵衛のせうはなれてのちりんじの祭の舞人にさゝれていきけり此女とも物みに出たりけりさてかへりてよみてやりける
夏藤案此條上文に書續へし別段とするはわろし
抄云臨時の祭公事根源に云石清水臨時祭三月中午日賀茂臨時祭十一月酉日いつれにも舞人あり祇園日吉にも臨時祭はあれと勅使はかりにて舞人の沙汰なし是は公平のむすめども物みに出たるよしな

れは賀茂にて侍へきか

むかしきてなれしをすれる衣手をあなめつらしとよそにみるかな

抄云新古今臨時祭の歌に宮人のすれる衣はゆふたすきかけて心を誰によすらん又新勅撰賀茂の臨時祭の歌に山あひにすれる衣なども侍り此物語の心はいゝえ此兵衛中絶にければさらによそ人なからかの祭に出たちたるさまを見るにむかしなれにける時の心ち只今のやうにひし〳〵とおほえつるよりなれしをすれるなとよめるなるへし　又云臨時祭のまひ人青すりのうへのきぬきるよし花鳥餘情にあり

かくて兵衛尉山吹につけておこせたりける

もろともにゐての里こそこひしけれひとりをりうきやまふきのはな

となんかへしはしらすかくてこれは女かよひける時に

おほそらもたゝならぬかなかみな月われのみしたにしくるとおもへは

これもおなし人

あふことのなみのした草みかくれてしつこゝろなくねこそなかるれ

抄云しつ心なくは浪にゆらるゝよりしつか成心なきと也ねこそなかるれは音に鳴事を草の根の流るるにそへたりあふ事なしに人しれぬねをなきつゝおもひみたるゝ心なるへし

かつらのみこ七夕のころ忍ひて人にあひ給へりけりさてやりたまへりけり

袖をしもかさゝりしかとたなはたのあかぬわかれにひちにけるかな

抄云袖をしもかさゝりしかとは七夕に衣なとかす事あれば也

右のおとゝ頭におはしける時に小貳のめのとのもとによみてたまひける

抄云右のおとゝ三條右大臣にや小貳のめのと後撰の作者天暦の御乳母とぞ但おほつかなし　夏蔭按續後撰によれは右のおとゝは九條の師輔の右大臣也此公藏人頭なるは承平元年九月より三年まて也

續後撰戀九條右大臣

秋のよをまてとたのめしことのはにいまもかゝれる露のはかなさ

となむ
秋もこす露もおかねとことのはゝわかためにこそいろかはりけれ
抄云是も右大臣の歌にやかの契りのたかひし折なと成へし　直云これは小貳の答なるへきを言葉の落たるならんさてこゝに秋もこすといへるよりみれは上のもまだ秋ならねと露をいはんとて設て秋の夜をよみ給ひし成へしさて上の句は右の歌をみなうけたり末は男は今さはいへと實はうとく成て後の心故こゝにはおして色かはれりといふへし
きんひらかむすめしぬとて
なかけくもたのみけるかな世中をそてになみたのかかる身をもて
かつらのみこよしたねに
新勅戀四　孚子内親王
露しけみ草のたもとを枕にてきみまつむしのねをのみそなく
直云露しけみといふは末の句へかけたるなりさなくはたゝ露しけきといふべし
かんゐんのおほいきみ
續古戀二　閑院大君
むかしよりおもふこゝろはありそ海のはまのまさこはかすもしられす
抄云ありそうみは越中名所也
おなし女にみちのくにのかみにてしるし藤原のさねきかよみておこせたりけるやまひいとおもくしておこたりける比也いかてたいめむしたまはらんとて
抄云勘云藤眞樹延喜十年正月藏人兵部丞十二年式部丞十三年十二月刑部少輔　直云こは京にての事也
からくしておしみとめたる命もてあふことをさへやまんとやする
抄云おそろしきやまひせしたにあるにあふことさへやまんかと也病をそへてよめり
といへりけれはおほいきみかへし
もろともにいさとはいはてしての山なとかはひとりこえむとはせし
後撰戀四公頼朝臣の婦にしのひてすみ侍りけるにわつらふ事有てしぬへしといへりけれはつかはしける朝忠朝臣もろともにいさといはすはしての山こゆとこさんものならなくに朝忠集にもありといひたりけりさてきたりける云々さてあしたに男

のもとよりいひおこせたりける
あかつきはゆふつけとりのわひこゑにおとらぬねを
そなきてかへりし
おほいきみかへし
あかつきのねさめのみゝにきゝしかととりよりほか
の聲はせざりき
おほきおとゝは大臣になり給ひて年ころおはするに
枇杷のおとゞは元來給はでありわたりけるを終に大
臣に成給ひにける御よろこひにおほきおとゝ梅をを
りてかさし給ふて
おほきおとゝ勘ニ云貞信公延喜十四年八月廿五日右
大臣（右大将如元）延長二年正月廿二日左大臣（左大将）八年攝
政承平六年八月太政大臣枇杷のおとゝは勘ニ云仲平
承平三年二月十三日右大臣（左大将五十九）同六年（左大将）正月十日
左大臣（六十三）天慶八年九月一日出家（七十一）大鏡ニ云左大
臣仲平此おとゞこれもとつねの次郎御母は本院
の大臣（時平）におなし大臣の位にて十三年ぞおはせし
枇杷の左大臣と申す云々貞信公よりは御兄にわた
らせ給へど廿年まで大臣に成おくれ給へりし終に
なり給へればおほきおとゞの御よろこびのうたお

そくとくと此段の歌なり
おそくとくつひにさきける梅のはなたかうゑおきし
たねにはあるらん
とありけり其日の事共を歌なとかきて齋宮にたてま
つり給ふとて三條の右の大殿（臣）の女御やかてこれにか
きつけ給ひける
抄云齋宮勘ニ云柔子寛平皇女母同ニ延喜ニ三條の右の
大殿勘ニ云定方延長二年正月廿二日右大臣承平二年
八月四日薨（六十歳）此おとゝのむすめの女御也
後撰雑一　むめの女御
いかてかく（いかてか の後撰）としきりもせぬたねもかなあれ（あれた）
る宿にうゑてみるへく後撰
行庭のかけさたのまん
抄云年きりはくたものゝなりならすなとのする事
なりかの貞信公のたか植置したねにかとよみ給へ
るをうけて忠昭宣公（基經）の御子孫のかくとり〳〵に
さかえたまふに右大臣は是よりさきにうせなとし
たまひて心ぼそく思召て讀給にや　後撰雑一三條
右大臣身まかりてあくるとしの春大臣めしありと
きゝて齋宮のみこにつかはしけるいかでかのとし
きりもせぬたねもかなあれたる宿に植てみるへく
同上きのとものりまだつかさたまはらざりける時

こゝのついで侍りてとしはいくらばかりにか成ぬるとゝひ侍りければ四十よになん成ぬると申ければ贈太政大臣今までになどかは花のさかずしてよそとせあまりとしぎりはする返し友則はる〳〵のかずはわすれて有なからはなさかぬ木をなにゝうゑけん　同雑三法皇かへり見給ひけるをのち〳〵は時おとろへありしやうにもあらす成にければはさとにのみ侍て奉らせけるせがゐのきみあふ事のとしぎりしぬる歎にはみの數ならぬものにそありける　永久四年百首兼昌あふことをとしきりしたる我みかな花さきかたき物ならなくに　直云うひの反りにて年嫌（キラヒ）也

とありけり其御返し齋宮より有けりわすれにけり云々さりける時にさいくうより

抄云左のおとゝの中納言勘云清愼公中納言にておはしましける時女御の御もとへおはしつると也たねみなひろこりてかけおほくかの女御の歌をうけての詞書也　夏蔭云延喜の帝崩まして此女御おり給ひしによりてすみ給ふにや

後撰雑一齋宮より女御春毎に行てのみみん後撰

はなさかり春は見にこん年きりもせすといふたねはおひぬとかきく

抄云みにこんはみにゆかんといふ心也此歌後撰の詞書に云かの女御左の大臣にあひけりときゝてつかはしける齋宮のみこ春毎にゆきてのみみん年きりもせすといふたねはおひぬとかきくと侍り此齋宮は御母右大臣殿の御兄弟（皇后胤子）なればかくしたしくおはせしにや

さねとうの小貳といひける人のむすめのをとこ

抄云さねとうの小貳（闕）

ふえ竹のひとよもきみとねぬときはちくさのこえにねこそなかるれ

抄云千種の聲とは色々のねのいつる事也ひとよと云に對して也

といへりければ女かへし

ちゝのねはことはのふきかふえ竹のこちくの聲もきこえこなくに

抄云ことはのふきとは口ふえ也笛の譜なと詞にてとなふる事なるへしふきとはたゝふく事也こちくは八雲抄に胡竹也と云々奥義抄にいつか又こちくなるへき鶯のさへづりそめしよはの笛竹六百番歌

合に寄笛戀季經卿羨しわかりこちくとふえたけを
たのむる中の人はきくらんなとよめり
さしこか志賀にまうてたりけるに增喜きみといふ法
師ありけり云々いまはとしこかへりなんとしけりそ
れにぞうきのもとより
抄云增喜きみ後撰作者に增基法師とあるを偖双紙
二に大和物語の增喜と同人歟と云々　直云はし殿
は山谷かけて橋の如く作れる家をいふべしほそ殿
なといふに似たり　又云偖草紙二廿一丁庵主をしる
せる增基は永延已後の人かとみゆ
後撰戀三 讀人不知 あひみてもわかるゝ事のなかりせはかつ〳〵物は
おもはさらまし
直云萬葉に小端をはつ〳〵と讀る同し語也後撰戀
三あひかたらひける人これもかれもつゝむ事あり
てはなれぬへく侍りければつかはしけるよみ人し
らずあひみてもわかるゝ云々
かへしとしこ
新續古戀一 としこ いかなれはかつ〳〵物をおもふらんなこりもなくそ
われはかなしき
抄云此かつ〳〵はいさゝかの心也增喜のかつ〳〵
物をおもふ心によめりしをとかめ出たる返歌也な
こりもなくとはいたりたる心也　直云なこりもな
くとはかなしさのおもひ殘す事なきをいへり
となん有けることはもいとおほくなん有ける
おなし增喜君やれる人のもとはしらすかうよめりけ
り
草の葉にかゝれる露の身なれはやこゝろうこくに淚
おつらん
抄云心はもろ〳〵の緣にひかれて發る一念の生死
のきつなと成事をかなしめり云々身のはかなき事
をしめす也又一說に此歌も戀のこゝろ也とぞ
本院の北の方まだ帥の大納言の女にていますかりけ
るをりに平仲かよみてきこえける
抄云本院の北方時平公室 棟梁女 帥の大納言伊勢物語
に太郎國經の大納言とあるとおなし長良卿一男昭
宣公の兄也此北の方はしめ國經の女にて敦忠をは
らみ給ひしころ時平公此大納言の許にて酒のみし
あそひ給へるに大納言沈醉のまきれに簾中に入て
みつから此北のかたの手を引つゝ引出物に時平公
へたてまつり給ひしと也

はるの野にみどりにはへるさねかつらわかきみさねとたのむいかにぞ

抄云序歌也わかきみさねとはまらうどさねといへるにおなしことはにて實の字也我つまになしたてまつらんと行末を頼むをいかに思召ぞと也此北方國經とは年にけなくわかゝりければつねにそはそはしく有しとかやされは平仲もかねてかく心さし給へるにや

直云わか君さねはわか本妻にといふ意のみさねは其正身をいふつかひさねは正使まらうどさねは上客をいふにてもおもひ合すへし

といへりける其後左のおとゝのきたのかたにてのゝしり給ひける時よみてお

一本といへりけるの下かくいひ/\てあひ契ることと有けりの詞あり

ゆくするのすくせもしらすわかむかしちぎりし事はおもほゆやきみ

抄云すくせは宿縁也かく本院の北方に成給ふへき縁あらん事はしらてわかさねとたのみたりし事は思しめししるかと也さりとも忘れ給はしと也

となんいへりける其返しそれよりまへ/\も歌はいとおほかりけれどえきかす

抄云世つき物語に云おとゝ北の方を車にのせ給ひしほどにしたかさねのしりとりて御車にいるゝやうにて平仲よりてかきつけておしつけてさりにけりおとゝはみたまはず成にけり北の方又見けるに袖のしたにみちのくに紙をひきやりておしつけたるをあやしとおもひてみれは忍へる人の手にて物（古今に思ひいつるときはの山のとあり）をこそいはねの松の岩つゝしいはねはこそあれ戀しき物をとなん有ける車にのりしほどしたかさねのしりいれしはこれにこそ有けれとおほしける又ある人のかたりしはわかきみのかひなに書て母にみせ奉れとてやりたりけるとも申す「昔せしわがかねとの悲しきはいかに契りし名殘成けん此歌こそ兒のかひなにかきて母にみせたてまつれといふにわがきみみせけり女いみじくなきて又かひなにかきて返し「現にてたれ契りけん定めなき夢路にたどるわれは我かはと云々

泉の大將故左のおほいとのにまうて給へりけり外にて酒などまゐり醉て夜のいたく更てゆくりもなく物

しゐへり云々みはしのもとに松ともしなからひざまつきて御せうそこ申す

抄云いつみの大將勘云定國大納言大將延喜六年七月三日薨四十　高藤男故左のおほいとの時平公也ほかにて酒なとは餘所にて大將の醉給へりゆくりもなくは不意也おもひもかけす時平公へおはせし也みふの忠岑古今序右衞門府生とあり泉大將の隨身也段階(キタハシ)などのもとに續松もちなから大將の御せうそことて申也

直云かさゝきの橋は唐詩に烏鵲橋邊烏鵲起とある如く禁中の橋をいふ

かさゝきのわたせるはしの霜のうへをよはにふみわけことさらにこそ

香川翁百首異見中納言家持鵲のわたせる橋におく霜云々の歌の註に云眞淵か初學云烏鵲はまつ大内の御橋を天にたとへいへりさてこれは嚴なる宮中の冬夜に御橋の霜の白きをみて夜の更たる事をしるといふ也月もなき冬の夜に霜のしろ〳〵とみゆるはまことに夜のふけたるさまのしるきなり淮南子烏鵲塡レ河成レ橋以渡二織女一といへるをもて大内の事に用たるは唐詩に奉レ和下初春幸中太平公主南荘上應制蘇味道鳳凰樓下交二天仗一烏鵲橋頭敞二御筵一同題にて李邕傳聞銀漢支機石復見金輿出二紫微一織女橋邊烏鵲起仙人樓上鳳凰飛これらは公主の家なれは大内とひとしくいへり

天皇を日に譬へ奉るより宮を天にたとへ御橋を星橋烏鵲橋なともいふ也といへりこは大菅白圭か批釋云これ必中納言寓直の作か杜甫か明朝有二封事一數問夜如何といへるに似たり徒に深夜に起出て望むの感にあらさるべし鵲橋七夕に限るへからす鳳凰樓下交二天仗一烏鵲橋頭敞御筵と蘇頲か作れるも初春太平公主の莊に幸するの詩を和する也といへるを今ひそかに襲ひ取てかきなせる物とみゆされともいみしきひかこと也まつ烏鵲橋を大内の御はしに譬へたるためしさらになく唐詩に引たるもいたくたかへりかれは太平公主の良偶を此世の外にあかめたゝへて織女仙女の契に准ふるよりその南莊をも烏鵲橋鳳凰樓にたとへたるのみさるを公主の家なれは大内とひとしくいへりといへるは何の事そや實に大内に比へたる心なし又同書に吾國に

も七月七日の外にかさゝきの橋とよめるは大和物語に泉の大將云々夜はにふみわけことさらにこそとなんのたまふと申すあるしのおとゝいとあはれにおかしと思して云々これいつこのたよりにかとのたまふによりてたゝ大内より御橋のよふかき霜をふみ分てわさとこゝにまうてたまふなりといふ意なれはこをもて今を知へき也といへるも非也此物語の意さらにさる事にはあらすこは右大將定國卿ある所にて酒にまゐりゑひて夜更て歸り給ふ道のついてに左大臣時平公は日頃へたてぬ御なからひ成うへかつ酔心にもまかせ給ひて俄におとろかし給ひし也おとゝのいつくにものし給へる便にかとすき方のうかれあるきをかすり聞え給ふを御供に有ける忠岑御格子あけさわく御階のもとにひさまつきて大將殿しか申こたへさせ給ふといひて鵲のわたせる橋の云々とよみ出たる也歌の意はかくおき滿たる霜の上を夜はにさへふみわけてことさらにこそとひ來たれいつくの使にかなとうけ給はるへき事かはとかへりてなじり聞えたる也さる歌のおもしろきはさら也酔しれ給ひてみす〳〵道のついてなるをわざとかくまめたちて御うたへ申なしたるを殊にあはれにおかしく興せさせ給ひて祿なともたひたる成べしさるは追すかひたる御齢のほとにてかたみにわかけのたはわさなりこれを大内よりの事と見てしかも正しき事からに思ひとりたるはいとをさなしたとへはしはらくたゝしき事にみて内よりふりはへ給ふとせんにもさはかり嚴なる宮城門を大將ならん人の酔のすさひに夜いたく更て物し給はんこと有ましく又公の事につきて不意に出給へる便とせんにもさるついてを殊さらに祉とはいふへくもあらしもとより外にて酒などまゐり酔てと書るをいかに見て内の事とは思ひなしけんされはからにもやまとにも烏鵲橋を大内の事になそらへたる例はなき事に侍りたとへ有とも歌の意さる事に侍らずおそらくは序なる例をわすれて解わつらひたるより出きたる附會の説にそ侍らめ

となんのたまふとまをすあるしのおとゝいとあはれにおかしとおほして云々大將に物かつけ忠みねもろく給はりなどしけり

抄云物かつきは御裝束なと引出物に出し也
そのたゝみねかむすめありときゝてある人なんえむといひけるをいとよき事なりといひけり云々かへりことに
抄云えんといひけるは忠岑か女を娶らむといふなりたのめ給ひし事は祝言せむ事をいひけす也
わかやとのひともとすゝきうらわかみむすびときにはまたしかりけり
抄云うらわかみとはたゝわかき事也「うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはんことをしそおもふとよめるにおなしかのむすめ嫁するほとにはあらすをさなきを云也　後撰戀二また年若かりける女につかはしける源中正葉をわかみほにこそいてねはなすゝき下の心にむすはさらめや
となんよみたりけるまことにまたいとちいささむすめになんありける

大和物語錦繡抄下卷

つくしにありける云々いといみしう成にけり
抄云ひかきのご筑前の遊女なりしとぞとしつきかくてをかしく勞ありて世をへし事なり物のぐは道具ともなりいみしうは衰たる心なり
かゝりともしらで野大貳うての使にくたり給ひて云々ともなる人もいひけり
抄云後撰集この檜垣か歌の言書には大貳藤原興範と侍り又禁秘抄にも帥大貳赴レ任上古必參內召二弓場一給二酒肴一次召二御前一給レ祿藏人傳祿件祿白褂一領御衣一襲也延喜興範友于如此と侍れは興範大貳なりし事疑ひなししかれども此物がたりには野大貳とあり興範は藤氏なれは異說侍るにや猶知者のあきらめを待ち侍し
あはれかゝるさわきに云々はぢてこてなんいへりける
抄云おうな嫗とかく年よりたる女をいふなり
まへよりは大貳のまへよりなりあやしきやうなる家は家か何ぞとあやしむはかりの賤しき心也和名

抄嫗於無奈
後撰雜三年ふれは後
ぬは玉のわかくろかみはしら川のみつはくむまてな
りにけるかな
抄云しら川は肥後國阿蘇山より出る川なり水色白
如レ粉といへりみつわくむとは老かゝまる也
又云左右の膝かしらとおとがひの一所へよるをみ
つわさすといふ云々
直云古本今昔物語卷十二增賀法師の事をいへる條
に美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃
保禰備阿布曾宇禮志伎ともあれは三歯さすともい
ふなり老て歯のまはらに落て上下の歯とみつさし
合くみあふやうになりたるをいふならん三輪と心
得て云は誤なり今昔にも美豆波とこそ書たれ後撰
集雜三つくしのしら川といふ所にすみ侍りけるに
大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついで水たべん
とてうち(たイ)よりてこひければ水をもていでゝよみ侍
りけるひかきの嫗　年ふれはわか黑髮もしら川の
みつはくむまておいにけるかなかしこに名高くこ
とこのむ女になん侍りける檜垣家集には老はてゝ
かしらのかみもとあり源氏夕顏云これみつの父の
朝臣のめのとにはべしものゝみづはくみてすみ侍
るなり云々

とよみたりければ云々ぬきてなんやりける
抄云あこめ衵の字なりもしほ草に說々侍り一說に
舞きぬのやうなる物なりうへにうちかくる物をい
ふ也又いはく公家の裝束のしたにをりたるものゝ
あやなとのやうにある物をかさねきるをあこめと
いふともあり此物語のさまをおもふに後の說しか
るへきにや
直云あこめは衵にて袿に同しくて衵は東帶の下に
も着れは身の長とひとしくす衵はうちうちにも着
又よるの物ともすれは裙いと長きなり是をもてわ
かつべし後世のさうそく抄ともに此けちめをしり
わきまへたるなし

二

又同し人大貳の　たちにて秋のもみちをよませけれ
は
しかのねはいくらはかりのくれなゐそふりいつるか
らにやまのそむらん
抄云古今おもひ出るときはの山の時鳥からくれな
ゐにふり出てなく

此ひかきのご云々 末をつけさせむとてかくいひけり
抄云すきものこゝにでは事を好むやうの心にや
わたつみのなかにそたてるさをしかは
とてすゑをつけさするに 底箋共所
秋の山へやそこにみゆらむ
とぞつけたりける
筑紫なりける女云々よみける
新續古戀三監命婦 人をまつやごはくらくそなりにけるちきりし月のう たのめし新續古
ちにみえねは
抄云此うた男の京へゆくとて其月中に歸らんなといひちきりしが其頃に見えされはかくよめるにや
これもつくしなりける女
秋風のこゝろやつらき云々まつそむくらむ
抄云風の西よりふけば薄は東にのへふすさまをそむくといふより心やつらきとよめり
おなしみかとの御時みつねをめして云々みはしのもとに侍ひてつかうまつりける
抄云日本紀云月弓尊(ノミコト)纂疏云弓弦也弦月半之名七八日爲二上弦一二十三四日爲二下弦一云々毛詩孔安國註ニ八九日月體半昏而中似二弓之張一而弦直(スクナルニ)謂二之上弦一云々
てる月を云々やまのはさしていれはなりけり
直云此事おほかゝみにもみえたり 又云月を弓張といふほどの事しらぬ人やはあるかく問せたまふはこれにはよみなしのをかしき事あらんとての仰言なりよりてかくいひなして時の興を申のみ
ろくにたほうちきかつきて
抄云袿は女のうへにきる裝束なれども大袿は桐壺巻にもひきいれのおとゞの祿にたまはりたまひし事侍り 直云大袿は男のもはら下にきる物也女もきる又小袿といふは女のうへにきるものなり
後撰集春上元日に二條のきさいの宮にてしろきおほうちきをたまはりて藤原敏行朝臣 ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる
和名鈔衣服類袿漢書音義云諸于大袿衣婦人袿衣也
釋名曰(字知)婦人上衣也
しら雲のこのかたにしも云々ふきてきつらし
抄云おりゐるといふ詞禁中なとにては今はよむへからずとぞ

おなしみかと月のおもしろき夜云々いみしうあやしかりたまひけり公忠
　抄云こきうちきは紅の色こき袿也
おもふらん云々わひしかりけれ（かなしイ）
先帝の御時に云々さてのたまはせける
新勅撰題不知延喜御製
あかてのみふれはなるへしあはぬよも云々哀とそ思
　抄云新勅撰にはあかてのみふれはなりけりとありとのたまはせけるを云々おひいて給ひけるいみしう
　抄云いみしうとは心をふくめてかき捨たる筆法此物語におほし
三條右大臣のむすめ云々いまさゞりけるころ女
　抄云くらのすけは兼輔の當官をいふなり勘ニ云延喜九年三月補ニ藏人右衛門佐ニ元兵衛佐、十三年左少輔内藏助
内藏知元いまさゝりけるはおはしまさぬとなり
新拾遺四三條右大臣女
たきもの丶くゆるこ丶ろ云々ねられざりけり
　抄云くゆる心とはふすふるといふに悔る心をそへたりひとりはたへてといふに獨と火取を兼てなり
源中最秘抄にやらむ火取の圖あり燒物する香爐のたくひなり
返しは上手なれば云々えきかねはか丶す

　抄云兼輔は卅六人の歌仙公任撰の中の一人也
又をとこ口頭さわがしくて云々思給ふと有ければ女
さわくなる云々なに丶たとへむ
　抄云兼輔の日頭さわがしくてまかりありくうちにもとあるせうそこの詞をうけてた丶獨まきれもなきつれ〳〵のほとの物おもひはたぐひもなしと也
となんありける（イ）
志賀の山越のみちに云々家もいとをかしうなんありける
　抄云歌林良材云しかの山越は北白川の瀧のかたはらよりのぼりて如意が嵩（たけ）越に志賀へ出る道也故兵部卿のみやは元良也
さしご志賀にまうでけるついてに云々かきつけたりける
新勅秋下さし子
かりにのみ來るきみ云々秋そかなしき
　抄云五文字かりそめの心也ふり出ては聲を立てなくさまなり中臣祓に小男鹿の八の御耳をふりたて丶とある詞に似侍り下の何なく鹿やまとそへてよ

むべし　夏蔭按元良親王集云志賀の山越の道にいもはらといふ所もたまへりけり　そこにおはしつゝ人見たまへりけるを知りてとし子かかいつけたるとて今の歌をのす

こやくしくう（そ河）といひける云々おこせたりける

抄云こやくしくう関

新千戀枇杷左大臣
かくれぬの云々くるしかりける

伊勢集
抄云かくれぬはこもり江などのたぐひなり木隠れなどにある沼なり

かへし女

同同かくれぬに伊勢集
みかくれにかくるばかりのした草は云々

抄云水にかくるほどの草ならば短からんと云て此人の末とけて心ながく我を思ふましきといふ心と此男のせいたけひきゝ事とをよめり

朱書云河社二ゥ十七伊勢集に初の歌は人とありて返しの發句かくれぬにと有新千載集戀一に初の歌枇杷左大臣とて落句わひしかりけりと有かへしは伊勢なり伊勢集によりて載らる

先帝の御時に承香殿の御息所云々女のもとよりよみてたてまつりたりける

抄云承香殿拾芥抄仁壽殿北九間四面云々中納言のきみ後撰の作者承香殿の官女なり故兵部卿のみや元良のみこ陽明院（成カ）の一宮也　直云らうあり物よく心得たるさまなるをいふ

拾遺戀五承香殿中納言
人をとくあくた川てふ津の國のなにはたかはぬ君に（もの拾）そありける

抄云芥河難波みな津の國なり

後撰戀四承香殿中納言
こぬ人をまつのはにふるしら雪のきえこそかへれあはぬおもひに

六帖一
こふる六
抄云きえかへるとは消る事を深くいふ詞なり

さてなん云々たてまつりける

抄云努々此雪おとすなとなり折節を專におもへる心にや

故兵部卿のみやのほるの大納言云々さなから有やとりたてやしたまひてしとのたまへりけれは御返事に

抄云のほるの大納言勘云源昇延喜十四年大納言民部卿十八年薨れいのおましところいつもの御しんあり所となりかのひさしに是よりみこのせうそこなり

しきかへす云々はらふ人なみ

抄云歌の心はゆめ〳〵其時のまゝにてしきかゆる事もなしされども問人なければ蘆のふかくなるはかりそとなり
とありければ御かへしに
草枕云々たつをまてかし
抄云枕の蘆をはらふ人なきと恨たまふ故に我たえまは其蘆を拂ふへき袂をゆたかにたつあひたそとなり　直云此宮未た四品にておはせしほどの事歟
とありければ又
から衣たつをまつまの云々ちりもつもらめ
直云その假枕のみならす君まつとねぬ夜おほければわか床にも蘆積るらめと也敷栲は床枕なごへかゝる冠辭なるをやがて夜の物の事にいひなせり
となんありければ云々又宇治へ狩しになんいくとのたまひける御返に
みかりするくりこまやまの云々わひしかりけり
抄云くりこま山山城なりまへにもあり歌心は鹿は狩にあふ事を歎くへし其命をおふ鹿よりも獨ねは侘しきと也　直云くりこま山前文八十一段にあり
よしいゑといひける云々するたりけり

此よしいゑといひける宰相の傳抄にも審ならず
もとのめも云々人の國がちにのみありきければ
直云受領なれば妻もゐて行へしこはよしありてこゝかしこへ御使なとしけるならん
ふたりのみなん云々とかくいひければよみたりける
抄云ふたりのみは本妻と後妻となり
檜垣嫗集 夜半にいてゝ月たにみすは（にみえすは集）云々いはましものを
抄云つくしの女の歌也我かの密夫にあふ事を夜な〳〵の月はみるへし此證人たになくはなき名ともいひのかれむをとなり
となんかゝるわざをすれど云々いつれをかおもふととひければ女
抄云たゞさる物にては其分にしてあまりはしめのやうに懇意にもせぬさまなり
同上 花すゝききみかかたには云々風はふけとも
となんいひける云々みれはかくかけり
抄云よはふ男はつくしの女をこと男のよはふ事をいへり猶男せじなといひける物なんは物なむは助字也よばふをとこなどあれどつくしの女の心に我あたなる心からかの本の男にも疎まれぬれはかゝ

る心やめてんとおもふなり又世中心うしとは心さしふかゝりし男なれどかくうとむからは世の人の心はうき物なり定て此後の男もかくこそあらめたゞ男せじとなりとはいひながら又此密夫の返しなどせしと成へし　直云よはふ男はあたし男也物なんは物ながらといふ心なり　夏陰按よはふ男も有けり此わたり脱文あるへし

同上 身をうしとおもふ心の云々思ひそむらむ

抄云我心から初の男にもうらまれつるとはいひながら猶こりずまに又密夫におもひつきたるこゝろなり

となんこりずまに云々男も心かはりにければさゞめてなんやりける

抄云本妻は哀とおもへと男は心かはり果て筑紫へかのをんなの行事をもとゝめさりしとなり

もとのめなむもろともに云々かくのみなんありける

抄云山崎にもろともにはむかしは山崎より舟にのりて淀川を下りけるにやうはなり後妻とかけりこなみ袖中抄に妻の事をいふとあり本妻をこゝにてはいへり

同上 ふたりこし道とも云々かへすめるかな

抄云此女の歌四首皆檜垣の嫗の集にあり件女しはらく在京せしことあるにやと云々

といへりけれはをとても云々かほはいとちいさくなるまで見おこせけれはいとかなしかりけり

抄云この文章甚奇妙なりたいまみるやう成うちに哀ふかく侍り詩者有聲繪といふはさる事ながら繪者無聲詩といふもかやうにはうつしとり侍らしかし遊仙窟張文成が十娘に別ゆくさまを行至二三里一廻レ頭看數人猶在二舊處一立余時漸々去遠聲沈影滅顧瞻不レ見惻愴而去行到二山口一浮レ舟而過とかけるさまに似侍り　直云土佐日記にこれより今は漕はなれて行これを見送らむとてそこの人ともは追來けるかくて漕行まに〳〵海のほとりにとまれる人も遠く成ぬ舟の人もみえす成ぬ岸にもいふことあるへく船にもおもふ事あれとかひなし

故みやす所の御あね云々いますかりけり云々心に物のかなはぬ時も有けりさてよみたまひける

抄云おほいこはいちのあねなりらう〳〵しくは上﨟らしき事なり又よろつに労あることをもいふへ

しゐおやは母なりこゝろに物のは「芹つみしむかしの人もわがごとく心に物のかなはさりけんとよめる詞なり　直云らう〳〵しくは老々しくなりよろつに功者なるをいふ

古今雑下平貞文
ありはてぬ命まつまのほとはかりうきことしけく　おもはずも古今
なけかすもかな

抄云此歌古今集には平貞文うき世には門させりともとよめる歌とならひて入侍り

さなん云々梅の花を折て又

かゝるかの秋もかはらず云々なかめせましや

抄云此歌は春の名ある事も只此梅かゝにこそと聞え侍　直云これも繼母の事により誠の母をこふ心みゆ

とよみたまへりけるいとよしづきて云々かくなんいひやりける

抄云よしつき由めきなといふ詞なり由ある心なり

おもへとも云々人の見るらむ

抄云かひなかるへみはかひなかるへきと云詞也我もひたすら思はぬにはあらねと忍ふる事の深けれはうちとけたる返事もせすされはおのつからつれなしと人に見ゆるなるべしとなり終になひかぬ心ながら人のわりなくせむるに默止がたくて云のへし歌也

とはかりいひやりて云々廿九にてなむうせたまひにける

抄云よとゝもにはわが一世のあひだとなりさいひけるもしるくは日比のことばをいちしるくたがへず一生不犯のほいをとげたまひしとなり今迄此物語にあまたの女侍しかどうさかの森のしもとなくかみともいはずつくまのまつりのなべて其かすをはぢざるべきやは侍し其中にかくふたかみ山のたかき心をたてみゝなしの池の深く思ひとぐるたぐひなきにしもあらずされば姪といひ貞といふもゝにすむむしの我からならずや

むかし在中將云々忍ひてすむになん有ける

抄云在中將は業平也（平城帝ノ御孫阿保親王男母ハ伊豆内親王桓武皇女）御むすことは在原滋春也（業平二男故號次官）めなる人とは此在次君の妻五條の御の事也山蔭従三位中納言みめひは御姪也（或本にみめひめとあり）伊勢守圖此人の妻に業平のむすめのなりたるあるなるへしかみのめしうとゝは伊勢守の

妾なりしにやそれに在次君の密通せし也五條のごの事なりめしうどゝは我心につきたりし人をめしあつめて置しなれば妾とおなし禮記云聘則爲レ妻奔則爲レ妾

我のみとおもふに云々さりければ女のもとに

抄云このをとこのはらから業平の子棟梁又師尙なと侍しなり此かきさま伊勢物語に我のみとおもひけるを又人きゝつけて文やるとあるとおなじ

新勅撰四在原滋春 わすれなんと云々物にぞありける

となむよみたりける云々それによみてかきつけたりける

直云をふさの驛考ふる所なし下に三河よりのほるとて此歌よみし所にやとりてみしといへは三河より京までの間なり　夏蔭按をふさのうまや此次にみのわの里といふ驛とあるは兵部式に諸國驛傳馬の條に云相摸國驛馬小總箕輪濱田各十二疋とみゆればともに相摸國のうまやなる事あきらけし下の文に三河國より京へのほる人の此驛ともに宿りてこれらの歌をみたるよしいふは聞あやまちてかけるなるべし此等の驛を考る所なし三河より京までの間なるべきよしいはれたるは三河よりのほる人のみしといふに深くなつまれしなり相摸よりも東に至れる人の京へのほるとてみしなるべし本文のさまを考ふるに相摸より甲斐に行きて身まかりし也すゝろありきの道なればしかもありしなりけり

わたつみと人やみるらん云々なきつめつれは

抄云なきつめつれはとはとし月へてあふことなしに泣きたりければつもり〳〵て海とも人のみむとなり京におもふ人なきにしもあるましければおもひ出たりけんさてをふさとはをふさといふ所に隱せり　直云ふさとは多き事をいふ萬葉八にいめたてゝとみの岡への撫子の花ふさ手折我はもて行むなら人の爲其外ふさといふ皆おなしこゝは涙のおほきをいふなり其涙を海と人やみるらんといふのみ

又みのわのさとゝいふうまやにて

いつはとは云々しりまさりけり

抄云秋の夜はひたすらに侘しきはといふ事にみのわといふ所の名を隱題也古今いつはとは時はわかねと秋の夜そ物おもふ事の限りなりける

直云是も三河より京までの間也　眞淵が此說非なる事夏蔭既に辯せり
とよみてかきつけたりけり云々やまひしてしぬとて
よみたりける
古今哀傷かりそめのゆきかひちこそおもひしをいまはかきり
こし古今のかとて成けり
抄云古今の詞書にはかひの國に相知て侍ける人をとふらはんとてまかりけるを道にて俄にやまひしていまや〳〵と成にければ京にもてまかりて母にみせよといひて人につけ侍りけるとあり
祇註云ゆきかひちとは往かよふ道なりそれに甲斐をたちいるゝ也
とよみてなん云々いとあはれとおもひけり
抄云ひとゝころにくしてはあひともなひし心也
亭子のみかど河尻に云々よみてたてまつりける
抄云川尻は津の國なりしろ古今作者しろめとあるにおなし江口の遊女也　或說に源のつくるかむすめと云々しもにとほくは下座の末に居るなり
はまちとり云々あはとみこそれ
抄云上の刀はちとりの飛にかぎりある事也「あはここそみれはゝるかに遠くみるといふ事也あはとみるあはちの月のあはれとも又「あはちにてあはとはかりにみし月のなどもよめり此歌大鏡にも出て侍り
とよみたりければ云々かつけものたまふ
古今離別しろめいのちたに心に云々悲しからまし
抄云古今詞書に源のさねかつくしへ湯あみんとてまかりける時山崎にて別をしみける所にてよめるとあり
亭子のみかど云々うけたまはりてすなはち
抄云鳥飼院津の國也大江玉淵大江音人男朝綱之父後撰の作者におほえの玉淵女とありこの物語とおなし人にやこゝにかく遊女にて侍るはおちふれたる事のありしなるべしそも〳〵は發語のことは也玉淵のむすめと申すをあやしく思召ての勅言なりたまふちはいとらうあり帝かれが父の事を仰せ出されて其子ならば歌よくよまむとてよませて心みたまふ也
大鏡あさみとり云々たちのほりけり
抄云春は松のみどりなとたつ事なれば霞ならねと

たちのほるとよみてわか身をそへたる五もし也大鏡にはふかみごりと侍りさてあさみごりかひあるといふに鳥飼といふ題をよみいれたりかひある春とはけふかく帝の御前にめしあけられつる事の生るかひある心なり
直云淺みとりは下の霞の事なりそれを鳥飼をいはむとてこゝにまつおくのみ

とよむ時に云々ふたまばかりつみてそおきたりける
抄云御しほたれたまふ感涙の御有様なり延喜式齋宮ノ忌詞にも哭稱二鹽垂一とあひなきすとは醉ては涙のもろき物なり萬葉「夜ひかる玉といふとも酒のみて醉なきするにあにしかめやも　かみしもは上﨟下﨟なりかつきあまりて云々琵琶行に五陵年少爭纏頭一曲紅綃不レ知レ數と侍るにてかける文章にや

かくてかへりたまふとて云々つねになんとふらひかへりみける
抄云かくてかへり京へ還御也南院七郎君勘ニ云是忠親王の子敦六男七男近代系圖不見云々七郎君かり七郎のもとへなり

むかし津の國にすむ女ありけり云々姓はちぬとなんいひける
抄云此段萬葉集第九ニ云過二葦屋處女墓一時作歌一首并短歌　此益荒子のあひきそひ　妻とひしけむ　あしのやの　菟名日處女の　奥城を　わか立みれは永き世の　語りにしつゝ　後の人　しのびにせんと　玉ほこの　道のへちかく　いはかまへ　つくれるつかを　あま雲の　しりへの限り　此みちを　さる人ごとに　行よりてゐたち歎日　わび人は　ねにもなきつゝ　かたりつき　しのびつきくる　をとめらが　奥城ところ　われし又　みればかなしむ　むかしおもへば　反歌「いにしへの小竹田丁子の妻問し菟會處女のおきつきそこそ「かたりつくからにもこゝに戀布をたゝ目に見けんむかしのをのこ
今二首見二菟原處女墓一歌あり此物かたりのさまと所々ことなる事あれは略レ之　直云和名抄攝津國兎原宇波　萬葉巻九にも十九にもみゆ題には菟原處女とかきて歌には菟名負處女その反歌にもあしのやの宇奈比處女とかきその長歌に智奴壯士宇奈比

壯士とも書たり然らは菟原と書てもうなひとよみしを和名抄の頃に至りては只字につきてうはらとも唱へしにやと覺ゆ
かくて其をとこども年齢顏かたち云々いろいろにもちてたてり
抄云しわびぬはせん方なき心也
おやありて云々おもひはたえなんといふに
直云ひとり〳〵は只一人をいふこと他の書ともゝしかりされどいかてかくはいふにやもし其人々をひとり〳〵と分ていふよりおこれるか
女こゝにもさおもふに云々いくた川のつらにひらばりをうちて云々いとほしきわざなりといふ時に
頭註曰和名抄帯和名比良波利
抄云いたつき奥義抄に出所をおほくひけり又費困これらをいたつきとよむともいへり又云いたつきは煩也煩は惱也苦也とも云々勞の字をもかけりいまたしき心とも　直云わつらひにてはわつらひいにて也わひにてといふにおなし
いさかしこくよろこひあへり
直云伊勢物語にかしこう思ひかはしといふにおなしくて恐にも賢にもあらすいたくといふことく用たるなり中頃よりの俗語なるへし
申さんとおもひたまふるやうは云々女おもひわつらひて
抄云申さんとおもひたまふやうとは男たちへいはんとおもう事はとなり寂蓮と申けるうたよみ等思兩人戀といふ題をえて津の國のいくたの川に鳥もいば身をかぎりとや思ひなりなん
すみわひぬわか身なけてん云々名のみなりけり
抄云異本にうき身なけてんとあり
とよみて云々をとこのつかともいまもある
抄云はふりすははうふり也つちをおかさすへきは土をけかしてうつまるへきと也萬葉に親族とも居よりあつまりながき世にしめさんためと遠き世にかたりつかむとをとめつか中に作りおきをとこつかこなたかなたにつくりおけりとあり
かゝる事ともの云々この人にかはりてよみける
抄云故きさいのみや七條后宮温子（昭宣公女宇多之后）
伊勢のみやすんところをとこの心にて
抄云或本云伊勢ハ非二更衣一但諸本如レ此仍任レ本書

レ之云々愚按に此説非也拾遺大鏡にも伊勢のみや
す所とあり宇多帝の皇子をうみたてまつりたまへ
ばさもいひつるなるべし
かけとのみ云々かひなかりけり
抄云玉なきからとは死骸なりそれを貝に眞珠のあ
ることをそへてよめり
女になりたまひて女一ノみや
抄云均子（寛平第五中宮温子）母依二后腹一號二女一宮一後代祐子内
親王又如レ此雖二第四一號二高倉女一宮一
かぎりなく云々
又みや
いつこにか云々おもほえなくに
抄云ある人生田川にての事をわたつみとよませた
まへるいかゞといへりされど波水などの繪を御覽
して女宮などのかくおほやうにのたまひなすもさ
も侍へき事也云々　直云是は親になりたまひてよ
みませしなるべし
兵部の命婦
抄云是も七條后の官女なるべし
つかのまも云々人に見えぬものから

抄云夏野行をしかのつの丶つかのまもとよめりさ
て塚のうちにてしはしもはなれす人しれぬ契をか
はす心なり　直云是は塚の內なる男女を皆すべて
よめる也つかの間は手一つかにてわつかのことな
り
いと丶ころの別當
抄云勘云典侍春澄朝臣洽子古今作者寛平遺誡ニ曰
給之物等類總可二處分一洽子朝臣自レ昔知二絲所之
事一生之間猶令三兼二知之一云々參議式部大輔善
綱女拾芥抄云絲所在二采女町北一又曰縫殿之別所
也云々
かちまけも云々くらふの山はこゆとも
抄云下の句は心くらへの事をかの山にそへて二人
の男のかたみにおとらぬこゝろさしのほどをよめ
りくらふ山は山城なり　直云二人の男の心をより
君はをとめくらふ山は近江なり
いきたりしをりの女になりて
あふ事の云々きくそかなしき
抄云かたみはたかひにといふ詞なりあふことのか
たしとうけてなり二人の男のさまを女の歎く心な

り是も治子のうたにや

又ひと

直云是は又ひとりの男になりてとありけんが脱たるなるへし

かへしをんな

うかりけるわがみ（身歟）なそこを云々なからましかは

抄云わか水底とは我身とそへたる詞也　直云うき身なれはかゝる契りのなからましかばよからむと云なり

又ひとりのをとこに成て

われとのみ云々みきはとぞ思ふ

抄云嬉しき汀はうれしき身とそへたるべし

直云これまで治子朝臣の歌歟

さて此男はくれ竹の云々かのつかの名をはをとめつかとそいひける

抄云よなかきをきりてかきりては竹のなかきを持てつかのめぐりにかきなどかこひしにやをとめつか萬葉のうた前にひき侍る今の世にはもとめつかと誤りていひ侍とぞ　滋臣云さて此男とある此男はうはら男あたをむくいしはちぬ男なるべし萬葉巻九の反歌聞か如ちぬ男にしよるへけらしもとよめるは後にちぬ男の女を得し心をよみしなるへし

ある旅人云々いとうとましくおほゆる事なれど人のいひけるまゝなり

抄云御とくに太刀かしたまへる御功德にとなりむくつけしはおそろしといふとおなじいとうとましとおほゆる事まことしからずうけられぬ事なれともと双紙の地なり　直云御とくにの註日本紀竟宴歌大御德廣庭須女羅とよみ榮花浦々別佛のほとくにたひらかにおはしますにこそ又わかみやの御とくになどもあり源氏柏木にもある詞なりこの次條にもみえなり

津の國の云々いと下（げ）すには云々女は京にきにけり

頭註云直云けすは下衆なり　抄云人のこともならば人の世にのゝしることくにもならばとなりあひしりて有けりとは次の詞に女も男もとあれは夫婦あひしりたる心なり文の一體にや此男は津の國のなには蘆屋左衛門なにかしとかやきこえし人とそ

夏蔭云蘆屋云々は後に好事のものゝおふせたる名所なり

さしはへいつこともなくて云々悲しくてよみける
抄云さしはへいつこともなくさしていつくともなくとなりはへは詞の助なりいつくと心さすかたもなく來るとなりこのつきてこし人は前にたよりの人にいひつきてとありし共もとにまつゐたるとなり　直云荻すゝきおほかる所とは庭なりいかてあらんは彼津の國の男いかゝして有らんとおもひやりたるなり次にいかゝあらんとあるもおなじ詞なり

さてとかう女さすらへて云々いとあはれと思ひやりけり
抄云とかうさすらへてはとかくさまよひたゝよひし心なりやむ事なき無止事と書貴きかたに云詞なりみやたてたりとはみやつかへに出したてたるこなりさへみやつかへそれへ奉公しありくとなりむつかしき事とは世話にむさきと云心也むつかしけなる大路のさまなと夕顔にあり　直云みやたてたりとは出したてたりとありしを誤れるなるべしむつかしき事なくとはむさむさしきことなきなり

たよりの人に云々おもひやりける
抄云心ともえやらすは物の便宜ならて心からは人をもえつかはさゝりけり也したしくつかふ人なごもなければなり

かゝるほどに云々人をやりて尋ねさせんとすれとうたて（縣居本無）わか男きゝてうたてあるさまにもこそあれとねんじつゝありわたるに猶いとあはれにおほゆれば
抄云おもひつきてめに成にけり凡離別のゝち嫁を改むる事は子ある中は五年子なければ三年を過してゆるすとかや令に掟侍しこれもかれもさすらへしほどに其年月をへ侍しにや思ふこともなくめてたけにて貴人に寵せらるればよその人めにはめてたげなれどもさすが二夫をかへぬほいにあらねば人しれず不レ快なるべしわかをとこいまの男をいふなりねんじつゝ念の字なり心のうちにおもひていはで堪忍する心なり

をとこにいひけるやう云々まからんといひければ
抄云難波にてはらへする事拾遺集の詞書にも澪漂の巻にも侍り難波は七瀬の御祓の遠所の七瀬のうちなりとぞ　直云萬葉四八代女王君により言のしけきに龍田こえみつのはまへにみそぎしにゆくと

よみたれば難波に祓することははやくより有し事なり

いとよき事云々人もなし云々悲しう思ひけり

抄云祓の事日本紀に伊弉諾尊日向小戸橘檍原といふ所にてみそきしたまふ是を根元とせり　一條禪閤御所之纂疏曰祓ハ除也左傳曰祓ニ禳於四方ニ漢志ニ三月上巳官民皆禊ニ飲於東流水上ニ洗ニ祓去宿垢ニ由ㇾ此人有ニ不淨ニ則臨ニ河水ニ而修ニ禊事ニ古之遺法也下略

かゝる心はえ云々いとあはれなれは

抄云すさはめしつれし從者なり

車をたてゝ云々かのあしかはむといはせけり

直云御車うなかしてんは急きやらむといふなりかたゐは和名抄乞兒加多比とあり土佐日記にもこの梶とりは日もえしらぬかたゐなりけりとあり

さりけれは云々此男をよくみるにそれなりけり

抄云やうなきものいせ物語に身をえうなき物にとある心なれは無用のものとなり　直云やうなきは益なきなり用なきとおもふはわろし

いとあはれに云々わかさまのいといらなくなりにけるをおもひはかるに云々かまのしりへにかゝまりをりける

抄云したすたれのはさま車の下簾のはしつかたなりいらなくこさこさしくきこつなく成しさまなりたゞ物のきらもなくおとろへたる心なるべしいとはしたなくて物の似あはしからぬ事なり伊勢物語にいとはしたなくてありけれはとあるなりかまのしりへにかゝまり竈の後にかゝみ居しとなり　直云はしたなくははしたなるなりなきは詞まて中間なるなり古今木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにこのみはなりぬへらなり

この車より云々をさなきものなりといふ時

抄云たつねゐてこ尋ひきゐてことよとなり手をあかちては手わけをしてなり人そこなる家になんはある人かの男のにけかくれゐる所をゝしへしなり何のうちひかせたまふへきにもあらす何に其むりにうちひこづらふ事もあらんさやうのためにはあらすと供人のいふなり

すゝりをこひてふみをかくそれに

拾遺雜下 六帖三 きみなくて云々うらそすみうき

拾遺雜下難波にはらへしにある女まかりたりけるにもとしたしく侍りけるをとこのあしをかりてあやしきさまになりて道にあひて侍けるにさりけなくて年頃はえあはさりつることなといひつかはしたりけれはをとこのよみ侍ける君なくて云々
とかきてふうして云々いかゞなりにけむしらず
抄云拾遺にはこのあとのあしからしとてこその歌を少引なほして返しと侍りされと此物語にはきこゆに具して文をやりたる事ばかりにて返歌は知らずと侍る心なきにはあらざるべし
原本此條より下卷とす
むかしやまとの國云々いとあはれとおもひけり
抄云此女いとわろく成にけり次の詞に此いまの女は富たる女となれば少まづしきにそへて姿なども△よからすみえきたれるにやかくにぎはゝしき所にならひて賑なる所の目うつしにかつらきの女のさまいとゝわろけにみえたるへし　直云此わたりよりはしか南作りさまいとわろし在中將の事ともかけるはみなわろし古今と伊勢物語とを見ても知べし又是より末にもよき所あるをおもへは好事のものゝ中のほどへ色々書加へしにやあらん

心ちにもかきりなく云々心のうちにおもひけり
抄云猶いねといひければ若菜の卷に女三の宮の御かたへ源氏のおはしかねたるにいとかたはらいたきわざかなと紫のうへのそゝのかしきこえたまふに似侍りしはかゝる事にて式部のかけるにやことわざする又よの男をかよはすにやとかへりて女を疑ふなり拾遺「うらみぬもおほつかなくそおもほゆるたのむ心のなきかとおもへは
さて出ていくと見えて云々つかふ人のまへなりけるにいひける
古今雜下
風ふけば云々ひとりこゆらん
抄云萬葉云和銅五年壬子夏四月遣長田王于伊勢齋宮時山邊御井作歌　わたのそこ沖津しらなみたつた山いつかこえなんいもかあたりみむとよめるたくひなり　或說に盗人のたつたの山に入にけりおなしかさしの名にやけかれむ　又しら波を盗人といふは後漢の黄巾賊張角の餘黨西河の白波谷にかくれゐて諸國よりゆきゝするものをぬすみける時の人白波賊といひし事とをひきてかくおそろしきものもすむらん山を此男のひとりこえゆか

ん事を歎きつると云説あれど優ならねは不用とそ
とよみけれは云々かくてほかへもさらにいかてつと
ゐにけり
抄云かなまり枕双紙にけつりひのあまつらに入て
あたらしきかなまりに入たるとあり何にてもいれ
おく物也又順和名抄に金椀を加奈末利とよめり日
本紀神代下云以玉鋺來當汲水云々纂疏云鋺
當作椀盌同盌小盂也此猶釣瓶之意也されば金
椀もかねのつるべの類にや但うち拾遺に殿盌を引
よせて金椀をとらせたまへるにと侍るは食物入し
器とみえ侍しゆふてつとは湯捨るなり水にてむね
のほのほをさますさまなりつとそひてとはつとあ
ひそひてはなれをらぬ心なり　直云ふつは棄なり
古言にうつといふに同音通也古事記須勢理毘賣歌
に曾遲叔岐宇氐神代記吹棄此云浮伊勢物語に俄
に親此女をおひうつ落窪におひうてん
かくて月日おほくへて云々此男はおほきみなりけり
抄云つれなきかほなれど帚木巻にうへはつれなく
みさをつくりてといふ心なりやまとの女の何うら
みたるけしきも見えさりしがかくふかき心ありし
につけて又かはちの女もさぞとおもひやるさまな
り　つゝましくてはつゝしむ心なり　卒爾に家の
うちへいらざりしなりかいまみは萬葉に垣間見か
いまみとよめり其心なり物こしなどにみるていな
りあやしきさまなるはいやしきていなるなり　お
ほくしをつらくしには官女などのくしをしたれて
さしたる事末摘花巻にするを陪膳に候する女房な
どの櫛をさす事本義なりといへり又催馬樂にさし
くしはたうばり七つ有しかどゝ侍るを額にさす櫛
なりと後成恩寺殿の御抄に侍るこそこの物語の
つらくしにさしてとあるにかなひ侍らめ手つから
いゐもりをりけりやまとの女のみる人なきにかた
ちつくるとこの女の人みぬ時にうちとけたると其
心ばせいかばかりのたがひぞや云々おほきみなり
けりとは王の字なりもし此段も業平にて侍らば在
原の姓をたまはりたまはざりし已前孫王にて有し
ほとの事と云心にや又たゞ王孫なれは前にも兼盛
のおほきみなど侍し類なるべし　直云さし櫛は釵
子と具してあればうるはしう髮あぐる時の事なり
常には櫛はさしたる見えず大櫛といふはいやしき

ものゝさすくしならん
つらくしとはいかにさすにかあらむしらざれども伊勢物語に髮を卷揚てといへはさるやうにして櫛を額ぎはにさすをいふ成べし

むしかし云々うねめありけり
抄云うねめ其人たれとつまびらかならず
直云うねめは諸國の郡司などの女妹姪なとの中にかたちこゝろよろしきを撰ひて貢するなり故に采女とかけり

かほかたち云々わひしくおほえたまひけり
直云みつからの事にたまふといふは我身わが心に深く得る事をもていふこゝにいふも夫より轉して深く心に思ひ入たるをいへり又上の人のうへをいふも物を悉得たまふかたよりいふなり

みかとはめしゝかど云々かきのもとのひとまろ
抄云おほみゆき無ニ風情ニたゝ行幸の事なり

拾遺哀傷人丸
わきもこか云々見るがかなしさ
抄云ねくたれかみはねみたれ髮とおなし拾遺哀傷さる澤の池にうねへの身なけたるをみて人まろわきもこか云々萬葉十六かつらこの身なけたるを男いためる歌耳なしの池しうらめし吾妹子か來つゝかつかは水はかれなん

とよめる時云々かへらせおはしましけるとなん
直云此條は殊に後の人の作ことなり奈良の帝と有て人麻呂の歌とあるも事違へり奈良のみかとは平城天皇を申なり人丸は藤原宮慶雲年中石見にて死ていと古なるをこの頃誤りて書しものにもあらす物語に僞りて作れるなりさるを諸說は古の事をも知らず强て其僞をかさらむとする故にみなわらふへき事のみさて行つまりては傳授なといふ事をさへいひ出て人迷はせり　古今集序に今の本は後人の僞りて語を加へし事多しそは古今集にて云へし天皇の御諡天命と申はいと多きを天命開別天皇をのみいふとおもへるは誤なり奈良の宮といふ時は大和國奈良の都にて元明より光仁まて御七代也ならの帝と申時は平城天皇御一代を申事也又文武は藤原宮なるをいかて奈良のみかとといはむかくいふ說は皆かの古今の序に後の人書加へたる事を見わかすして强ていふのみ次に奈良の御門位におはしける時さかのみかとは坊におはしましてとい

ふにても知へし夫をいろいろと云ひまきらしたる説どもは笑ふへし人丸は萬葉二に石見にて死れたること見ゆ文武天皇の慶雲二三年の間なるへし月日は知られぬを三月十八日といふは强ごと也續日本紀に柿本人麿みえす他姓に人まろといふ人おほきをもて誤りしものなり墓地其外の事どもみな跡かたもなき僞なり拾遺に猿澤の歌を人まろとて入たるも此頃のおよつれ言なり

おなしみかと云々人丸

古今秋下讀人不知拾遺冬

たつた川もみちはなかる云々

たつた川もみちみたれて云々中やたえなん

直云此歌古今集の左註にならの御門の御歌とあるもこゝよりかけるにていふに足らす

古今集左註の事は古今正義に悉辨駁あり引合せてみるへし

おなしみかと云々まとひありきたまへとかひなし

抄云中つ比野行幸に帝御たかすえおはします爲に鳳輦のたゝさきの方の柱をはつしつるためしも侍るにやそらしは鷹をにかす事なり　をしむともかりふまじろのたかなれはそるをはえこそとゝめさなけれ

このことをそうせて云々そうしたまふときにみかど

抄云たい〳〵し退々の心にや桐壺にたい〳〵しきわざかなとあるは正體なきやうの心なり我にもあらぬ心ちとは心のそらになりしさまなりわれを我身と知らぬなり　直云今の俗に三日にあけずといふに同じさて萬葉に一夜もおちすと意通へり退々の字音なるべし源氏などにも皆おもひしりそかるゝ事にいへるが多けれはなり

いはでおもふぞいふにまされる

抄云鷹の名をそへ給へり

とのたまひけり云々もとはかくのみなん有ける

六帖五いはて思ふ心には下行水のわきかへり下同

ならのみかとくらゐに云々たてまつれ給ひける

抄云ならのみかと勘云平城天皇大同天子桓武第一皇子袋双紙云かみ三反は同帝とかく已に各別のみかとゝみゆはての歯のうたうたがひなき大同帝の歌なり嵯峨帝坊の時の歌なり云々愚按に桓武天皇延暦三年にならより山城の國長岡に遷都し給ひ

又おなし十三年に此平安城に都をうつさせ給ひしなりしかあれと大同天子を平城と申たてまつるは大同四年四月朔日に皇大弟嵯峨帝に御位をゆつらせたまふて平城の舊都に還御し給ひつる故にとかやさがのみかどは桓武第二皇子大同元年五月十九日爲二皇太子一同四年四月十三日即位　直云類聚國史卅一帝王部　延暦廿五年九月乙巳幸二神泉苑一琴歌間奏四位以上共揷二菊花一于レ時皇太弟頌歌云美那比度乃曾能可邇米豆留布智波賀麻岐美能於保母能多乎利太流祁上和レ之曰袁瑠比度能己々呂乃麻眞丹布智波賀麻宇倍伊呂布賀久爾保比多理介利

皇大弟は嵯峨帝上は平城帝也

（類史卅一續後拾遺秋上嵯峨天皇）みな人の其香にめつるふちはかまきみのみためとたをりつるけふ（かな續後拾）

みかと御かへし

（同　同平城天皇　のまゝに類　心にまかふ續後拾遺　ふかく類續拾）をる人のこゝろにかなふふちはかまうへいろことに（遺さも同　けるかな續拾遺）にほひたりけり

直云にほひは餘光なりこは打まかせては薗なりされど類聚國史にては菊をふちはかまとよませたまへるよしみゆ

やまとの國なりける人の云々いらへもせでなきければをとこ

直云和名抄障泥（阿不利）とみえたりいにしへ行幸には障泥あり御幸にはなし又かく常に用る事ありしにや源氏宇治巻にも見えたり空穗物語（俊かけ）にもかねふさの大將山のうつほに尋ねきてむかはきをときて苔の上にしきて女に逢たる事あり

（古今雜よみ人しらず）たかみそき云々をりはへてなく

抄云袖中抄云顯昭云ゆふつけとりとはには鳥をいふなり世中さはかしき時四境のまつりとておほやけのせさせ給ふに鷄に木綿（ゆふ）をつけて四方の關にいたりてまつるなり云々　直云誰か御祓とあれは神社なとへはなつ事有しか祈年祭祝詞にも神社へ白鷄を奉る事ありさる時ゆふを付るにもあるべしをりはへは新撰萬葉に折字を用ふれはをりの假字なりはへは詞なり四境の關にはなつなといふはおしはかりの說にてよしなし相坂のゆふつけ鳥とよみしも詞のみなるへし

むかし大納言のむすめ云々にけていにけり

抄云大納言誰とも知らず殿にちかうつかふまつるはしたしく大納言とのへ時々なと參りつかへしなるべし内舍人職原抄可ㇾ然之侍任ㇾ之攝政關白給ニ内舍人隨身ニ時殊撰ニ其器ニ召ニ仕之ニ帶劔之官也ゆくりなくは思ひかけずなどの心なり　直云内舍人は本は五位以上の人の長男を先内舍人としてさて後に官に補する事故にかろからさりしなりいと後世はさもなければ人の心得違ふ事有專ら玉體の守りにて御幸の供奉其外の事あり其人の中に此大納言にしたしきか有なりつかうまつるといふをみてよろつをおもひ誤りていふ説あり竹取物語によるをひるになしてさらしめ　たまふ予安貝也榮花物語よるをひるにいそかせ給ふ住吉物語よろつをすてゝよるをひるに參り給へ

あさかのこほり云々年月をへてありへけり云々さてよみたりける

あさかやま云々

抄云此歌萬葉十六に安積香山かげさへみゆる山の井の淺き心をわれおもはなくに　右歌傳云葛城王遣ニ于陸奥國ニ之時國司祗承緩怠異甚於時王意不ㇾ悦怒色顯ㇾ面雖ㇾ設飲饌ニ不ㇾ肯ニ宴樂ニ於ㇾ是有ニ前采女風流娘子ニ左手棒ㇾ觴右手持ㇾ水撃ニ之王膝ニ而詠ニ其歌ニ爾乃王意解脫樂飲曰云々此物かたりのこの女はわかかけの山の井にうつるより又所のあさか山なれば折ふしおもひ出て古歌を詠吟せるにやされども萬葉の心とはおもむきいさゝかかはるべしこゝにての心は此男の里に出て久しくかへらぬを恨みてかやうにあさく人をはおもふ物かはと成べし此あさか山の歌となにはつの歌とを古今序にもこのふたうたは歌の父母のやうにて手ならふ人のはしめにもしけるとありわか紫の巻にまたなにはつをだにとありし返事にあさか山あさくは人を思はぬになどやまのゐのかけはなるらんと源氏のきみのよみ給ひしなと手習ひのほんにも此ふたうたをかきてならはせつるとなれは今の物語の女もあさゆふによくきゝしり見おほえたる事にてあれはこゝにていさゝか句をかへてかく詠しかきつけておきたるべし

しなのゝ國更科といふ所に云々あひそひてあるに

抄云をはなん顯昭法師說には伯母の甥を子のこと

くせしそうに侍り　直云袖中抄十七全文を引けり
姨母なりといふ説わろしをばなる證ども多かり
よめ袖中抄このめの心いと心うきこと。おほくてこのしうとめお
いかゞまりてゐたるをつねににくみつゝ男にもこの
をばのみこゝろのさがなくあしき事をいひきかせけ
れはむかしのごとくにもあらすおろそか成ことおほ
く此をばのためになりゆきけりこのをばいといたう
おいてふたへにてゐたり
直云萬代集雜六東三條入道關白前太政大臣　わか菜摘こしはふたへ
に有ながら野への小松を賴みてぞ引散木集春老ら
くの腰ふたへなる身なれども卯杖をつきてわかな
をそつむ尚齒會序八十坂に老かゝまりて腰ふたへ
成ども淸輔集けふこそは雲ゐの山の峯までにこし
ふたへにてのほり付ぬれ
これを猶此よめ所せがりていまゝでしなぬ事と思ひ
てよからぬことをいひつゝもていましてふかきやま
にすてたうひよとのみせめければせめられわびてさ
してんと思なり月のいとあかき夜おうなどもいさ給
へ寺にたふときわさすなるみせたてまつらんといひ
ければかぎりなくよろこひておはれにけりたかき山
の麓にすみければ其山にはるゝといりてたかき山
のみねのおりくへくもあらぬにおきてにけてきぬや
ゝといへどいらへもせで家にきておもひをるにいひ
はらだてける折はらたちてかくしつれどとしごろお
やのごとやしなひつゝあひそひにければいとかなし
くおほえけり云々かくよみたりける
抄云いさたまへはいさおはしませといふ詞也嫗と
もの寺にたふとき佛事なとするをみせんとをばに
いひてたばかるなりやゝといへどをばのやよ〱
とをとこをよふこゑなり
わか心云々てる月を見て　古今雜上　讀人不知
さよみてなん云々是がよしになんありける
直云袖中抄云捨たらむ夜はをばにてもをひにても
姨捨山にてる月をみてとは不可詠歟物語は由緖は
かりを書ては證なければさもたよりある古歌を書
かふる定る事なり或は又あたらしき歌よみくはふ
にも常の事なり　又云こゝの歌の後なる詞はいと
〱わろき作さまなりおもふに歌に姨捨山とよみ
しは本よりの名にて何事もなく其山に月の照りて

愁はしきをよみしのみの歌にていさいにしへのよき歌なるを古歌の何事なくいひておのつからよろしきをしらぬものゝかく今姨を捨たりとは作りしなり　信濃國にていにしへ老たる人を山に捨たるよし今集解にもかけりされば此歌のゆゑよしにはあらで外にいにしへをばを捨し事有しより山の名にはおひけん集解にかけるも此歌によれるにはあらで其本によりしならん其伯をばを捨てやかてをば捨山とよむへきことはりあらねば此物語の作りさまは誤也

しもつけの國に云々馬ふねのみなん有ける

和名抄鞍馬具槽音曹和名與舟同馬槽也

それを云々とりにおこせたり

抄云まかぢ童の名なり

このわらはに云々かくいひける

抄云きんぢ汝といふとおなしぬしおはせずともわかしうをさしていふなり殿なといはんかことし

直云きんぢは汝といふほどの事と聞ゆれどいかでしかいふかしらず源氏處女巻に惟光その子にむかひていふ詞にもきんぢとみえたり

ふねもいぬ云々いかてわたらん

抄云高葉大船にまかぢしらぬきうなはらをこき出て渡る月人男

と申せといひければ云々そひたまひにける

抄云しかながらさながらなりあからめよそめなり　津の國のなにはのわたりの一橋きみしわたらばあからめなせそ　夏蔭按霊異記下巻第十條惣宗

遊仙窟云覚雨都盧失注云都盧者惣盡意也

やまとの國に云々物もいはできゝけり

直なほにもあらずはたゝにもあらずなり

壁をへだてたる云々女ふさいひける

抄云にしこそ男は壁を隔てゝ東のかたに後妻さすみて本妻の西のかたにふしたるにいひかくる詞なりにしこそは西とのといふとおなし　直云にしこそのこそは惣て物を有か中よりとりあけていふ詞なり源氏夕顔に北とのこそ又今昔物語に地藏こそ又父こそなどいへりいにしへ其人をとりわきていふをあがめ詞とせしなり

新古今戀五讀人不知

われもしか云々

鹿衆

とよみたりければ云々すみわたりける

直云おくりて送りかへして也
そめとのゝ内侍云々時々すみたまひける
抄云そめとのゝないし西三條右大臣良相女滋春母
よしありのおとゝ勘云近院右大臣能有文德源氏　寛平九年薨
物をよくしたまひければ云々おとゝ御返りことに
抄云物をよくしたまふ此内侍たちぬふかたをよくしたまふとなり　くもとりのあや袖中抄云雲つるの紋の綾なりとトつトるトりト同音なり
百詠註云有二雲鶴一綾也云々愚按あながちに同音ならずとも雲とつるとあるを雲鳥といはむは母のことはにて猶優に侍るにやともかくものたまはせねはそれをそめよともそめそも返事なければとなり
直云音通といふはわろしかやうに略していひよきやうにいふこと常におほし

萬代戀五近衛左大臣
雲とりのあやのいろをもおもほえす人をあひみで（いなそも袖中いなせもイ）（君袖中）としのへぬれは（ほど續後萬代さた袖）

抄云人をあひみでといふに藍をそへたるへし　あやの色をもといふよりかくよみたまふ也　異本にあやのいなせとあり萬葉には否諾（イナセ）と書りいやあふと云心なり内侍に久しくあひまゐらせぬ故心もそらにて何事もおぼえすとなるべし　直云藍をそへたりといふは假字わきまへぬ後人の説なり藍はあゐのかななり
おなし内侍に云々よみてやりける

後撰秋上讀人不知
秋はきを云々うたかはれけり

後撰秋上女のもとよりふん月許にいひおこせて侍ける讀人不知あきはぎをいろどる云々返し在原業平朝臣秋はきを色とる風は云々
とありければかへし

同在原業平朝臣
秋の野を云々

となむいへりける云々してたまへとなむ有ければ
抄云あらはひ瀚濯也官人朝廷につかふる時毎月一旬に一度まかでゝ衣服をあらふなりされば一月三十日を上瀚中瀚下瀚なといふとぞ瀚ト浣同
内侍御心もてある事にこそあなれ
抄云御心もてとは御心からといふべし其あらはひしてまゐらする人なきは御心のあた〳〵しくて人に末とけたまはぬ故ぞとなり

おほぬさとなりぬる云々しかそなくなる
抄云大幣は祓する時麻苧など榊につけて人々とりてはらふ物なりあまた人のてにふるゝ物なれば人の心のこれかれうつりやすきにたとふるなり　よるせともなくとはかの幣を御祓してのち川へ流す故よる瀬といふことをよみて業平の一かたに心をとゝめおかぬ事をいへりしかそなくなるとはさやうになくとなり御心のさだまらぬ故いつれをつひのよるへとする事もなくてさやうにあらばひなどする人もなしと侘給ふぞと成べし
となんいひやりたりける中將
なかるとも云々ぬさとしるらん
抄云一向何のよしみもなき人はぬさの流るゝも何ともえしるましきをさすがに手をもふれ給る名殘にて其ぬさの何とあることをもよく案內を知給ひしぞとなりさほどのむかしのちなみあればこそかくあらはひをもたのみ申せよそ／＼しくはおほすなとにや
直云今木內侍の歌の末句をなくなるとあるは誤なる事返しにてもしるし

在中將云々おこせてかくなん
抄云二條后宮高子長良卿女貞觀十九年閏二月廿七日中宮元慶六年正月七日皇太后宮また帝にもつかふまつりたまはで玄旨法印說にいさゝか業平をいたはりていへり實にたゝ人にてもおはすへし五節の舞姬に奉公は十七歲の時なり入內は其後なればたゝ人さもあるべし云々
伊勢物語
おもひあらは云々袖をしつゝも
抄云いせ物語の詞書にけさうしける女にと侍り歌の心はおもひあらばむぐらの宿にもおはしましおほとのこもれかくいやしき栖にはか／＼しきひしきものも侍らずは袖をかたしかせ給ひてもとにや后の淺からぬ御志のほとをおしはかりての歌なるべしさて下の句のひしき物などいふ詞よのつねは優美にもきこえ侍ましきを鹿尾菜(ヒシキ)をかくせんとなれは此歌にとりては一入にや
直云おもひあらはゝ相思ならばてふ意なる事例を引て古意に委いへり
さてきさいのみや云々とい中將たまはるまゝに
抄云春宮の女御伊勢物語勘物に云貞觀十一年二月

貞明親王爲二皇太子一于時高子爲二女御一依二東宮母儀一
也去年十二月廿六日誕生 高子年廿七 おほはらのにまう
て一條禪閤御所說に此社は后宮のまゐりたまはむ
ために春日の本社遠きによりて都近き所にうつし
てまつらると云々玄旨法印の說に嘉祥三年に閑院
左大臣冬嗣公氏神春日を勸請し給へりとぞ御車の
しりよりたてまつれる後の御車へ人のまゐらせし
裝束を業平へとりわきてたまはる也伊勢物語にも
人々祿賜はるついでに御車よりたまはりてとあり
伊勢物語七十五段藤井高尙新釋に云二條后氏神に
まうでたまひける云々は二條の后は藤原氏にてお
はしませば其氏のおや神天ノ兒屋ノ命をまつりたる
大原野社にまうでたまふなり神は氏のおや神を云
事なり其子孫を氏子又は氏人ともいへりさて天兒
屋命は鎌足のおとゞ常陸の國にてうまれたまひし
かばそこにまつりてありしを奈良の都の頃三笠山
にうつし今の京になりて大原野にうつしまつらる
ヽ事大鏡第七の卷にみえたり
古今雜伊勢物語
大はらや云々おもひいつらめ
抄云玄旨法印云東宮のみやす所の行啓ある程に天
照太神と春日明神と契りたまひにし相殿のむかし
をおほし出すらんとなりそこには二條后たゞ人の
時參通せし事をおほしめし出すやと云心也神代と
はもとの心なり日本紀云天照太神手持二寶鏡一
授二天忍穗耳尊一而祝レ之曰吾兒視二此寶鏡一當レ猶
レ視レ吾可三與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一復勅二天兒屋根
命太玉命惟爾二神亦同侍二殿內一善爲二防護一云々
春日四所大明神第一殿武甕槌命第二殿經津主命
第三殿天兒屋根命第四姬太神 天照太神分身也 伊勢豐受宮ハ
國常立尊 或言二天御中主神一也舊事紀ニ云天中主ハ者國常立之弟也而有同體異名之義矣 左ハ者瓊々
杵尊右ハ天兒屋根命也是所謂相殿也　勢語新釋云
をしほの松も塗本に從ふ山もと云るよりまされり
をしほの松とはそこにしづまります神天兒屋命の
御事を松になそらへていへる詞なり住よしの神の
御事を住よしの松と歌によめるにおなし神代の事
とは古事記の上卷に天神御子日子番能邇々藝命天
降生ところに爾天兒屋命云々幷五伴緖矣又加而
天降とみえ日本書紀神代卷一書にも以二中臣上祖
天兒屋云々凡五部神一使配侍焉とみえ又古語拾遺
于時天祖天照太神高皇產靈尊乃相語云々以二天兒

屋命太玉命天鈿女命ニ使配侍焉曰又勅曰云々汝天兒屋命太玉命二神宜持天津神々籬ニ降ニ於葦原中國ニ亦爲ニ吾孫ニ奉齋焉惟爾二神共侍殿内能爲防護とみえたり天つ神の御子の此國に天降たまふ時そひたまひてたすけまつりたまふ神たちの中には天兒屋命ぞことにおもかりけるさるからにかくいづれの書にも此命をはじめにいへり今氏子の御息所も大み殿のうちにさむらひて君をまもりたまふ妃夫人の中にすぐれたまへる事なれば此息所のまうでたまふをみたまふこそ天兒屋命も侍ニ殿内ニ君を防護したひし御みづからの神代の事をおもひ出たまふらめといへるなり臆斷古意ともに此神代の事をと云詞の意をとかれたるやうよろしからずさて又したの意は松を御息所に比してむかしみそかにあひまゐらせしを神代のことゝほのめかしいへり御息所もそれがしが御ともにさむらふけふこそはむかしの事をおぼし出らめわれもおもひ出奉るとなんありける云々よみたりけるといへるなり

又在中將云々中將 續古戀四 業平朝臣 伊勢物語

わすれ草云々のちもたのまん

抄云此草のこと袖中抄などにさま〳〵問答侍れどかくかきしるして侍るうへは此物語にてはおなし草と定りてきこえたり續古今 忘るゝもしのぶもおなし古鄉の軒はのくさの名こそつらけれ　直云わすれ草は萱草なる事萬葉にて明らけく枕草紙にも六月花咲よしありしのぶは倭名抄に垣衣とて昔のたぐひに出して明らかなる別物なるを此物語かく人の誤れるなり是より後の人さまざまいへとみなふるき事をしらで此物語などによれるはいふにもたらず　伊勢物語九十九段むかし男後涼殿のはさまをわたりければあるやんごとなき人の御つぼねよりわすれ草をしのぶ草とやいふとてさしいださせたまはりければたまはりて 新釋云大和物語にはみやす所の御方よりさまりげにさやうならんされもはるゝことなりされど此物語にてはある貴女の御局とみるべしその貴女を此男もと相しれりしかどしかく禁中にまゐりたまひて時めきたまふ事なれば中たえたゝなりさてこゝはかく中たえてせうそこもなきはわすれたるならん　されど　さはいはで中たえたるはなほおやけをはゞかりて忍ぶゆゑとやいふらんといふ心をあらはにいはゞかたへの人のきゝしりもやせんさてわすれ草をさし出してわすれたるらんといふ心をしらせ又しのぶ故とやいふらんと云こゝろを此草をしのぶ草とやいふと草の名をとふさまにいひまぎらして人のきゝしらぬやうにとしたるわざなりさるを昔より女のよういありてものしたるよしを考へ

えたる人なかりしばいつれの注もみなさきえざりき　新釋云わすれ草たふる野へさは云々げにわすれたるならんさこそ見たまふらめどさやうにはあらず人めなしのぶ故に中たえたるなりされば又あふこさもあらんさたのみてありこの後もたのまんさいへるなりそれを男もかたへの人にきゝしられじさ草によせて云ひまぎらはしたるなり我はしのぶなりさいふ意を草の名にさはれてこたふるさまにいひなしてこはしのぶなりさいへるなりさてしのぶさいふはわすれたるにはあらず人めなしのぶ故なりさいふ意なるを古意臆斷拾穗などにみなこひしのぶ意にさきたるは此歌の意をも女のとひかけたる詞の意をもさらにえきゝしられざりし故なりかし

在中將に云々たてまつりけるついでに

此詞書伊勢物語五十段にはむかし男人のせんさいに菊うゑけるにとあり

古今秋下うつし古伊　うゑしうゑは云々ねさへかれめや

抄云此五文字眞名伊勢物語六條宮御作には遷植者と侍り業平家集にもうつしうゑはとありて異本にうゑしうゑはと付たり然ども古今集にうゑしうゑはとあるを定家卿もうつしうゑはといはんよりうゑしうゑはとかさねたるが優に聞ゆるよしのたまへりとかや玄旨法印云此花をうゑおくならば秋のなからん時はいさ知ずさかぬ事はあるまし花こそちるともねのかるゝ事はあるましければ千秋萬歳たるべしといへり　直云其名伊勢物語業平家集に從ふべし今は誤ならん　古今集秋下此歌の詞書人のせんさいに菊にむすびつけてうゑけるうたとあり古今正儀云初句眞字の勢語に遷植者とかき朝臣の家集にもうつしうゑはとありて事もなきにや植し植はと云る事此外になく他の辭に例するにたとへば更る事をかへしかへば添る事をそへしそへはともいはす或は取る事捨る事をとりしとればすてしすてはなと云る類ひすべて聞しらぬにや戀をし戀はとはあれと戀し戀はとはいはす吹とし吹はとはあれと吹し吹はとはいはさるはうゑしうゑはも世にあらぬ詞也只紀氏の筆と云古本にうゑしうゑはとあれどこはもとより紀氏の自筆ならず後人の筆なることとしるければ古き一本に具ふべきのみ尤正據とすべからず

さいちうしやうの云々かくいひやりける

抄云かさりちまきいろ／＼の糸などにてする事とみえ侍るこゝは五月五日の事なるべし

和名抄に風土記云糉作弄反字亦作粽和名知萬木以二菰葉一裹レ米以二灰汁一煮レ之令二爛熟一也五月五日啖レ之

伊勢物語　あやめかり云々かるそわひしき

直云ちまきは茅もて初はまきしなるべし後にはまこもさゝにても卷なりこの頃はあやめにて卷しならんさなくては此歌よしなし菖蒲は藥にて香もよければまくべきものなり

水のをのみかど云々しのひてかよひけり

抄云みつのをのみかど淸和天皇文德第四母太皇太后宮明子號染殿后天安二年十一月七日即位元慶三年五月八日落飾同四年十二月四日崩卅一葬水尾山因號二水尾帝一左大辨融獨いますは御息所なり

中將やまひ云々其日に成にけり

抄云もとのめどもはもとより業平につきそひたる妻妾あり是はいとしのひで云々は辨のみやす所の事なり

つれ〳〵云々くらしてんとや

抄云病中のつれ〳〵をも日頃のみやす所の御消息にこそなぐさみしにけふはやまひもおもりいとゝわびしき折にしもとふらはせ給ふまじきやとなりとておこせたり云々しなんとする事いま〳〵となりてよみたりける

古今業平朝臣伊勢物語

つひにゆく道とはかねて云々おもはざりしをとよみてなんたえはてにける

抄云業平元慶四年五月二十八日卒五十六歲 正イ 在中將物みに出て云々

見すもあらず云々なかめくらさん

古今戀一右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほのほのかにみえければよみてつかはしける在原なりひらの朝臣伊勢物語九十八段むかし右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車に女のかほのしたすだれよりほのかに見えければ中將なりける男のよみてやりける

直云古今にもいせ物語にもみゆ然るを其はし書はかきそこなひしなり歌に見すもあらずみもせぬと有をはし書に顔いとよくみてけりといふべきか

伊勢物語新釋此歌の注云むげに見ざるにはあらねどさだかにそれと見定もせぬ人の心にかゝる事かなかくせちにこひしくばその人ともしらでわけもなくけふも思ひくらさん事か其人とさだかにしらまほし名のりきかせ給へといへる意なりさるからに返歌にしるしらぬ云々といへるぞかし臆斷あやなくをかひなくの意にとけるはたかへり古意

も歌の意をさきえられず師の古今遠鏡にいはれたるも俗意にちかくて此歌の情にあらず

とあれはをんなかへし

見もみすも云々けふのなかめや

直云此女のかへし古今にも伊勢物語にも有ていとよき歌なりこゝに出せるは歌もよまぬ人のいひたる事にてわろしおほつかなみのとあるみの詞かゝる所におくべき事ならぬをもわきまへぬをこの歌なり　古今勢語にある返しの歌しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひのみこそしるべなりけれ

をとこ女のきぬをかりきて云々女かくいひやりける

抄云みなきやりて着破りたるなり　直云いたづらにみえける物とは御歯固の供などに猪鹿の代りに雉鴨を用ひられたれともきこしたる饗なとには必雉のみなれば外の鳥は用なくたゞ田舎におほくみえてあるものといふならん

いなやきじ人にならせるかり衣わか身にふれはうきかもそつく

抄云五文字はいやとよきましきとなり人にならせるとは今の女に肌なれし心なりかの人にならしたる衣なれはそのうき人のうつりかのわか身につくこともあらんするほとになるべしさて雉鷹鴨を三所によみかくしたり　直云かへしたる衣は今の女にならせる衣なればそれをわが着はわかわろき香のつきぬへし我はいなきましよといふなりうき香をその女といへるわろし

深草のみかど云々おなしうちにありけり

抄云ふかくさのみかとは仁明天皇諱正良嵯峨帝第二天長十年三月六日即位矣崩而葬二深草山陵一曰號二深草帝一良少將勸云良峯宗貞いみしき時にて時にあひたる心なりおなしうちに是も仁明帝の官女にや内裏にての事なり

こよひかならす云々ふといひやりける

抄云けさうしてうちよそほふさまなりときまをし禁秘抄云奏レ時事上古隨二陰陽寮漏刻一奏レ之近代指計藏人仰レ之丑杭以後爲二明日分一うしみつと申ける一時を四刻にしてあるは子ひとつとも又うつみつるともいへりさぞ漏刻の事一日一夜十二時を百刻にわかつ事もあれと是は四十八刻にや惠遠が蓮花

漏も四十八刻とぞ　直云時申の事式其外ふるき記ともにおほし

拾遺雑賀　讀人不知

人こゝろうしみついまはたのましよ　といひやりたりけるに云々なんありける

拾遺雑賀うちにさふらふ人をちぎりて侍ける夜おそくまうてきけるほどにうしみつと時申けるをきゝて女のいひつかはしける人心云々良峯宗貞夢にみゆやと云々

かくて世にも云々此良少將うせにけり

抄云勘云嘉祥三年三月廿一日仁明帝崩ニ于清涼殿一四十一廿四日葬ニ於山城深草山陵一御葬司爲ニ裝束一今夜宗貞出家三十五元亨釋書云登ニ叡山一薙ニ髪於ニ慈覺之室一學ニ止ニ台密一云々法名遍昭　直云帝は三月廿一日に崩したまへり此少將三日過て出家せりとみゆこの物語は實錄にたがへり

さもたちも云々おとにもきこえす

抄云ともたち女友達妻なるべしさうしは精進なりいもひと精進とおなし例のかさねことは也　一本にともたちめもいかならんとてしはしはこゝかしこもとむれどもおとにもきこえす法師にや成にけん身をやなけてけんいかならんと世の中にもいひのゝしりめこどもはさらにもいはずよるひるよの中にありとある所にたつね神佛にくはんをたていのりもとむれどかひなしとあり　直云いもひは物忌なとして神へ祈るなり

女は三人云々此女まうてにけり

抄云よろしく思ひ云々大かたにおもふ女とも二人には遁世のあらましをかたりしなりともかくもなれ本妻の心なり

この少將云々申もやらずなきけり

抄云すきやうは誦經なりみつからも女のさま也

直云みちなしたまへ後撰雑三故女四のみこの後のわさせんとて菩提子のずゝを右大臣求め侍るご聞て此すゝをおくるとてくはへ侍ける眞延法師一おもひての烟やまさむなき人の佛になれるこのみみは君　返し右大臣「道なれるこのみたつねて心としありと見るこそねをはましける此歌道なれるも成道の字なりそれを菩提は道といふ梵語なれは道なれる菓とはいへるなり

又云わかさうそくは遍昭の裝束なり

はじめは云々かゝれとなほえきかす
抄云かゝれと猶えきかすかく誦經しなごし侍れど遍照のこゝにありといふ事をかの妻のえきかさりしなり　直云えきかすは遍照はかゝる悲しひに逢たれと猶妻のねかひを聞いれすして在しといふなるべし
御はてになりて云々文をもてきたるとりてみれは
抄云御はてになりて御服ぬきに仁明帝の御服つくる頭也解服の時川原に出て祓するはよのつねの事とみえ侍し天子の御錫紵をも河原において解除する事禁秘鈔に侍　直云上に御はふりの夜失しといふをうけてかけりはてとは物語ふみに四十九日の事をいへりさてこゝは除服のはらへなりかしはに書たるは山住のさまなり
みな人は云々かはきたにせよ
古今集哀傷深草のみかとの御時に藏人頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇に成にけれはさらに世にもましらすしてひえの山にのほりてかしらおろしてけり其又のとしみな人御服ぬきてあるはかうふりたまはりなとよろこひけるをきゝてよめる僧正遍照みな人は花のころも云々
とあるをみれは云々えかくれあへであひにけり
抄云五條后宮順子仁明天皇之后勘云文徳母后左大臣冬嗣女嘉祥三年四月皇太后宮四十一貞觀六年太皇大后宮十三年九月廿八日崩六十三
宮より御つかひ云々まゐりきつるといふ
抄云かうはかくなり山林におこなひは法華經方便品云我常獨處山林樹下若坐若行又藥草喩品云獨處山林常行禪定御さとゝありし所良少將のさとかの本妻のもとなり　直云御さとゝは遍昭の里なり
少將云々更にわすれ侍る時も侍らすとて
抄云かしこき御かけにならひて仁明帝の御近習にめしまつはされてとなりしなむをごにて死せんを期するといふなりいきめくらひ八雲抄によにたちめぐるなといふ心なり死をまつ身の不思議に世になからへ侍るとなりわらはべの侍る事とは后よりの御詞に御里とありし所にもとありしに答ふるなり宗貞の子素性中性なと侍し
古今離別よみ人しらす
かきりなき云々おくらさんやは

抄云愚按此物語にては子供のことを忘れぬよしを
いはんとて古歌なとをふといひ給へるやうに見侍
らんか　直云人に心をとあるは誤なり古今集にも
此一本にも人を心にとあるぞよき古今集離別此歌
題しらすよみひとしらすとあり

となん申つるとけいし給へといひける

抄云后東宮なとへ物申上るを啓するといふなり

此だいとくの云々又なくなりにけり

抄云いらなくはこと〳〵しきさまなり人々のせう
そこ書状を消息といふ事遠靄抄とかやに文選李善
註云消言往也事巳往故曰二之消一息言來也使レ無レ
所レ來故曰レ息云々しかれは往來消息同事也　直云
今もいらけなきといふはことのはけしく急なる樣
の事にいへりこゝも強くなくをいふならん

をのゝこまち云々御ぞひとつかしたまへとて

抄云ときやう讀經なり枕草紙にときやうは夕暮陀
羅尼は曉と云々つれなきやうにてはさらぬていを
するさまなり火打け火打いるゝ物にやいかゝいふ
とては良少將かあらぬか何といふぞ心みんとてと
なり

躬弦云小町集後撰共にいそのかみ寺に詣てとあり
遍昭集には上の泊瀬寺のつゝきに書せり　直云ひ
うちげは行いたる野山などにて飯かしく火の料に
旅人またかゝる人は必火打をもたるなりそれをち
いさき器に入たるを火打げとはいふべし又俗もあ
りしなり

後撰雜三小野小町家集六帖
いはのうへのたびねをすれはいとさむしこけのころ
ろもはしかされよ六帖
もをわれにかさなむ

後撰集雜三いその神といふ寺にまうてゝ日の暮に
けれは夜あけてまかりかへらんとてとゝまりてこ
の寺に遍昭侍りと人のつけ侍けれはいひこゝろみ
むとていひ侍ける小野小町いはの上に云々返し遍
昭世をそむくこけの衣云々

同
世をそむくこけの衣はたゝひとへかさねはうとしい
さふたりねん

といひたるに云々にげてうせにけり

抄云かいけつやうには物かきてうちけすやうにと
なり　直云たゝにもはつねにもといふことし
又云小町の事古人一首古説に委しくいへり其出し
所たしかならすいかさま采女などのごとき女なら

んかし
かくてうせにける云々花山といふてら御寺イにすみたまひけるイり
抄云勘云ニ良岑宗貞承和十一年正月藏人廿九十二年正月七日從五位下十一日任ニ右兵衛佐三十十三年備前介同日右少將嘉祥二年正月藏人頭三十四三年正月七日從五位上大納言右大將安世男元慶三年權僧正天台宗六十五仁和元年僧正二年輦車十二月八日於仁壽殿賀七十ニシテ二薨
俗にいますかりける時云々これもほうしになしてけり
抄云太郎は左近將監玄利或僖時清和御時殿上人法名素性かくよにいますかりときく時だには法師にこそなりたまへせめていきてよにあるときく時にたにとて子供をつかはしたるなり
直云扶桑略記に遍昭の子の法師素性由性二人雲林院に在し事見ゆ　夏蔭按將監入道のちに僧都に成て京極の僧都といひけるよし次の條にいふすなはち一人の上なる事明らかなり然るを此所の注にては將監を素性の事とし下に至りては京極の僧都を由性と注する事ひか事なり此所はすべて由性一人の事にて素性はあつからぬ物語也後世のものなから釋家初例抄に少僧都由性遍照僧正在俗時子素性法師舍兄延喜十四年二月十五日入滅七十四とみゆ素性の兄なるよしいふはこゝに太郎將監を由性か事としてかけるとよくかなへり然るを素性法師は歌に名たゝる故に誰も僧正の第一男と心得ひかめてこゝにいふ太郎の將監を素性と定むるはこゝの文意をも委しく考へす二人の子ともをいつれが兄なるとも思ひさとらぬひか事なり古今集打聽の素性か傳此物語の文を出して左近將監を素性の事とせられしは縣居の翁の講説にかへるなり用ひかたし
をりつれは云々花たてまつる
後撰集春下やよひ許の花のさかりに道まかりけるに僧正遍照折つれはたふさにけかる云々
といふも云々京にもかよひてなんしありきける
抄云此子をおしなしたらひけるたいさく發心もなかりしを押立て法師にしたまひける事なり
此たいさく云々かよひもえせさりけり
抄云しそくは親族なり萬葉にこれを二字にてやからとよませたりをとこをも女をも法師になりたる

をこゝにて男と侍るは破戒のつみをいましめたる
心なるへし是らの文法更に一字の褒貶なり云々
いとひさしう云々くびにかきつけゝる
抄云人のわざしに人を弔(とふらふ)佛事なとしになりきぬの
くびにえりなどにや又催馬樂にかたこくびきよら
にぬひてきせめかもと侍るはおほくひに對してい
ふと愚按抄に注したまへり　直云山は日枝也きぬ
のくひは領か又催馬樂にかたこくびきよらにとあ
るは今いふおくひなり
しら雲の云々あるよなりけり
躬弦云白雲のかさなる峯に我はすめるを君もろと
もにあらすして我におくれたまひぬる哉世はおも
ひの外にもあるものうさは契らさりしをといふ也
とかきたりける云々いますかりける
抄云せうとの兵衛のせう圀勘物云由性少僧都雲林
院別當
(袖中抄巻十三)
むかしうとねりなりけるひとおほわのみてぐらつか
ひにやまとの國にくたりけり(の子袖)ゐてといふわたりにき
よけなる人の家よりをむな(あこまろ袖)こもわらはへのいてきて
云々めをとゝめてそのこゝちゐてこといひければ云
々おほきになりたまはんほとにまゐりこん(よ袖)といひて
これをかたみにし給へとて帶をときてとらせけりさ
てこの子のしたりけるおび(又袖)をときとりてもたりける
文に云々をとこははやう忘れにけり
抄云おほわ大神大三輪神也大物主のかみの御事な
りみてくらつかひは幣使祭の使の事なり公事根源
に是は卯月上の卯の日におこなはるもし卯の日み
つあらは中にあるべしまつ丑の日つかひたつ大原
野の如し此祭は冬は寅の日つかひたつ其故は夏は
卯の日の曉冬は夕にまつる故なり
ゐてといふわたりは山城の井手なりした帶の物か
たりと云双紙の侍るよしなれといまた見およひ侍
らず歌にはあまたよめり「ときかへしゐてのした
帶ゆきめくりあふせうれしき玉川の水「道のへの
井手の下帶引むすひわすれはつらしはつ草の露な
と侍りめをとめて其こゝちゐてこはこちへつれて
こよとなり六條家の本には馬をとゝめてそのあこ
まろこちゐてことあり文に行(引歟)ゆひては内舍人わか
帶に文をつけてかの女子にもたせたるなり　直云
おほわとは大三輪の略稱也　又云女の子のしたり

ける帯を男のごきとりてといふなりさて文とのみにてはこどわりなし文杖に結付て從者にもたせていにしなり

かくて七八年(ナヽトセヤトセ)ばかり有て又おなしつかひにさゝれてやまとへいくとて井手のわたり(こ袖)にやどりてゐてみれはまへに井なんありけるそれに水くむをんなども(わらはなど袖)あ(あの)るかいふやう

抄云此段のとまり例の筆法にや一條禪閣御説に諸本かくの如し云々ある本に云それに水汲女どもあなるかいふやうその行へもとほらぬとたゝひとくちいひすゑをいひさしつと有顯昭袖中抄云山城の井戸の玉水手に汲て(むすび伊勢物語)たのみしかひもなき世なりけり此歌は井出にて契れる事をたかへたる事の有けるにやもし大和物語に書さしたる事は是にや中略もし此事かなはぬやうにいひけれは此たのみしかひもなき世なりけりといふ歌をばよめりけるにや極めて不審の推量にてはあれご事の體のあひ似たるなり　濱臣云山城の歌は伊勢物語又新古今戀五に入たり顯昭の說いかゝあらん猶考へし

これひらの云々かゝるやまひもつく物になんありけるとて

抄云これひらの宰相は勘云伊衡敏行男　延喜十七年藏人少將延長三年四位十月右中將春宮亮八年十一月正四位下兼內藏頭承平四年參議止中將六年刑部卿七年左兵衛督天慶元年卒故兵部卿の宮の別當は此みやのうちのよろつのはからひする事なりごたちは女はうたちなり其きみはこれひら也うちよりは內裏を退出したまふとて風ひきたまふと也くすりのさけ本草綱目に諸藥酒六七十方侍る中に風を治するもの半はに過たりわきて百靈藤酒菖蒲酒牛蒡酒なと諸風を治すとそみえ侍る兵衛の命婦はみやの官女にや又さきの生田川の段にありしと同人なるべし其かへりこと是はまづ兵衛の命婦へ謝したまふことはとみえたり

あをやきの糸云々わかみなりけり

直云かたよるとてはことわり得ても聞えす次になひくとよみしは萬葉には病臥さまを打なびき床にこいふしとも讀て打臥たるさまなれはよし

いさゝめにふく風にやは云々君にやはあらぬ

抄云いさゝめはかりそめとおなしのわきは秋ふく

あらきかせ也かくおそろしきのわきをさへ難なく過したまへる君なれはかりそめの春風などに何事かおはしまさんとなり　直云のわき過し丶とは此人前に難に逢し事にてもあるをいふかとかく事ありよめるならん

いまのひたりのおとゞ少將に物し給ひける時に（故）式部卿の宮に常にまゐり給ひ云々めてたしとおもひけり

抄云今の左のおとゞ勘云清愼公延喜十九年正月右少將廿一年從五位上藏人延長四年正五位下六年四位左中將八年藏人頭承平元年參議止中將承平三年左衛門督式部卿のみや勘云敦慶親王やまと誰ともしらすみやの官女也後撰集戀三あつよしのみこの家にやまとゝいふ人につかはしける左大臣いまさらにおもひ出しとしのふるをこひしきにこそ忘れわひけれ

續後撰戀三清愼公
ふしのねのたえぬ（たもひ續々）おもひ（けふり同）もあるものをくゆるはつらきこゝろなりけり

とありけり云々なといひていりぬる人もあり

抄云いかなる心ちしけれはかさるわざとは內へやまとのまゐりし事のあまりわりなければなり左衛門の陣拾芥云左衛門陣　建春門云々　建春門東廊ノ通路西南云々わたる人とは前なとこほる人也あやしき事哉云々はこゝなどにてたれなれば我に詞をかけたまふそとあやしむさまなりいひすさひは口すさひのやうにうちいひて過る也又わたれは又人とほれはおなしことく少將のきみをとふなりいさは不知とかくなりいかてきこえむ少將のおはし所をしらねは何として申つかむとなり

うへのきぬ云々あやしとおもひて來たりけり

抄云うへのきぬ袍なり　直云この人よろしき人のさまなりまた例の人也

少將の君や云々いとあやしうもをかしうもおほえたまひけり

抄云いとせちに云々は事ありて殿よりなとゝやまとのたはかりいふ詞なりかくきこえつきたらむ人をはわすれたまふましや云々はやまとへたはむるゝ詞なりむごに無期とかけりいつとなくうつら〳〵とまつさまなり源氏にもある詞なりたからのしたまふならん夜中に御使あるはあやしき事なりたかまゐりたるぞと少將のとひてまゐれとのたま

ふなりしんしちは眞實也みつからきこえんことを直に申さんといひたまへとなりさにやあらんやまとのきたるにやと少將のきみのおしはかりたまふなり

しばしと云々いとあさましう物のおほゆればしばしといはせてしはらく待たまへといはせ

抄云しばしといはせてしはらく待たまへといはせてなり廣幡の中納言は源庶明天慶四年參議（三品齊世親王三男）たはかりは思慮とも方便ともかけり思案しつてだてなとするさまなりいかでかくては少將の詞なり何としてかくはきたれるぞとなり何かはいとあさましう物のおほえけれはは少將の御こたえをうらみて待わびし事などやまとのかたるなるべし　夏藤按日本紀計慮（タバカリ）などの字を訓しごとくたゝ考へおもひはかる事也伊勢物語にもかの大將出てたはかりたまふやうと有今此所もかたらひてあひはかる事なり

亭子のみかと云々すえおきたりける

抄云石山江州石山寺開山は朗辨僧正にて聖武天皇の御願なり猶委ニ元亨釋書ニ國のつかさ近江守也誰ともしらすこと國々の御さう御庄也御知行所なるべし又むけにさてすくしたてまつりてんやは近江の國へ御幸に其國のかみ無下にしらずがほにて過したてまつらんもいかゝなればとて還御の時まうけせし也　直云石山寺のはしめは今昔物語に弘法の佛造りしよりおこれりといへり後に聖武天皇の御願といふはよしなしこと國のみさうみこは院の御庄の物もて其諸の料にせさせられしなり打出の濱は大津の東也大友は近江の地名也後撰にもからさきの祓に黑主か出し事あり近江の國の陰陽師とみゆはらへは陰陽師のするなり

（新千雜上大友黑主ひま同）さゝらなみまもなくきしをあらふめり（な同）なきさきよくはきみとまれとか（來てもみよさや同）

抄云さゝらなみさゝなみとおなし

良岑宗貞の少將云々つちやくらなとあれど

直云土してぬりたる倉を土屋倉といふならんかことに人など云々かみたけはかりならんとみゆなるか

抄云此ありさまうつほの物かたりに俊蔭のむすめのかくれゐたる所をわかこきみ見たまふて「むしのねもあまた聲せぬよもきふに獨すむらん人をこ

そおもへとのたまひつるに似たりたけたちはせいたけの事なりかみたけはかりは髮のせいたけほとある女のさまなり

よもきおひて云々たれとかまたん

抄云人くとなくやとは誰もとふへき家にもあらぬ物を鶯の人くるといふはいかにとかの女の口すさひたる歌也

とひとりごつ云々くちをしくなりにけり

抄云物しきさまはみぐるしくかろ／＼しきさまを女のはぢおもへるなりしとねはきぬのへりとりてひしく物なりむかしおほえてとはむかしの思ひやらるゝさまなり徒然草にもてるてうどもむかしおほえてやすらかなるこそ心にくしとみゆれといへるをかゝる文體よりかけるにや

日もやう／＼云々いふかひなし

抄云せいすべきは制也なせうといさめむやうもなしとなり

雨は夜ひとよ云々酒をのませて

抄云又のつとめてはあくる日の早朝なりあるじは八雲御抄に食物まうけたるをいふと云々饗の字なり是をまかなひともよめりふるまひの事なりことねりわらは小舍人童なり少將の供は皆かゝして此わらはばかりとゝめおきたるべし　直云萬葉集卷五貧窮問答歌かたしほをとりつゝしろひかすゆ酒うちすゝろひ云々

少將には云々女の手にてかくかけり

抄云長頭丸云ちやうわんは長椀なるべし中におほきなる器ものなりはしにははしつかたなり箸ともいへど優ならぬにや女の手にてはかのをんなの母にや　直云はしには梅の花の云々拾遺雜春除日のころ子日にあたりて侍けるに按察更衣のつほねより松をはしにてたべ物を出して侍けるにもとすけひく人もなくて云々　又云ちやうわんは空穗花開にたいひとつたてゝ白きたうわんにおものびめゝきて少しもりてすしをりはしかみつけたるかふらかたい鹽はかりしてよさりのおものにもあらすあしたのおものにもあらぬ程にて參りたりとあるたうわん同物かさて陶椀にて白き磁器ならん花ひら一つに歌一字つゝ女の母の手にて書しなるべし

きみがため云々はるのに出てつめる若菜ぞ

朱書云河社二十七ヵ此歌續後拾遺集春部に僧正遍昭にわかなをつかはすとて讀人不知と載らる春の野に出てを野澤に出てとす

をとこれを云々ひきよせてくふ（さイ）云々

しもゆきの云々あさのけさなり

抄云古今集誹諧歌の末の終によみ人しらず世をいとひこのもと毎にたちよりてうつふしそめのあさのきぬなりとあるに祇註云うつふしそめとはあさ衣をふしにてそめたる心にやたとへば桑門の衣の黒色をいふなり　直云うつふしとは五倍子は内のうつろなる物故にいふなりこれは黒くなる物にて僧の衣など染るなり

「またある本によのつれの外なりしことくはゝれり其てにをはなど聊おほつかなき所なともあれさたくへる本を見侍られはあらためきこえむよしもなしさすかに捨かたき事さもなれはこにひたりにかきつられ侍る」

今はむかし云々つかさおくれたりけり

直云末は弟の誤か又兄の末とありしかのゝ字おちたるか

それをいかゝ思ひけん云々かゝる獨ことをそいひたりける

古今雜下　平貞文　拾遺雜上同
うき世にはかとさせりともみえなくになとわかやと（かわか身の）のいてかてにする　古今拾

といひてひかみをりける云々かきおこせける

うきたつた云々そてにそ有ける

といひやりけれと云々かくとしもなし

直云かくとしもなしといふ詞きこえかたし

かゝる事とも云々夜になりければ

直云あそひのけちかきとは管絃の様なる事せしといふなるべし

このをとこかゝる歌を云々みつねとものりかほとなりけり

直云いとふかゝらぬとは公の勘事をいふ

おなしをとこ云々ことのほかにおひまさりしてみえければぬま水に云々

直云みるまくはみぬまくの誤なるべしかへしのもおなし

女かへし云々此男に女のいへりける

新古今戀　平定文
いつはりを云々かけてをちかへ（つゝ新古）我をおもはゝ

新古今戀三宮つかへしける女をかたらひ侍けるにやむことなき男の入たちていふけしきをみてうら

みけるを女あらかひけれは平定文
女のおもふをとこをしてたしかにいたすをみて
　夏蔭按出すをみての下にもとの男といふ詞必ある
　へきを詞の落たるなるへしさあらでは此歌何人の
　ともしられぬなり
あらはなる事あらかふな云々ちるをみえつゝ
　直云女の心かはりはてたるをみせたりといふ
返し
いろにいてゝ云々あらしとそ思ふ
　直云下句わかるゝ山の風はやみなりと同意なり
西の京云々わらはのくちにいひいれて
　直云いひ入てはいひふくめてといふにおなし
さてとき〳〵云々文かきて出しける
わかやとはならのみやこそ云々あらはさてとへ
　直云末は字のたかひあるべし聞えかたし
と有けれは云々三條よりかへりけるに
　直云三條は山上の誤なるべし
あすのもとといふ所に
　秋成云しの岡本か
あひしれる法師云々おもひみたるゝほどに

　直云みし人とは男なり　又云男のかくおもふ間に
　女より歌よみておこせたるなり
くやしくも云々さてもとはねは
例の心もとなきとまりなれは猶ありけんともおも
ひながらせんかたなしたゝし此なかに平貞文兵衛
のすけにてつかさとられたまひし事又其ほとの歌
とも有て男といへるはおなし人なりければこれに
もとつきてかの家の集なとしつかにかうかへ侍ら
ば此返しはかりの事は見出もし侍るへけれと何か
はとてもかとあらむ人のしりめにとゝむる物にも
あらしたゝわかかなしくすめる女のわらはなとの
ためかつ又心のなくさめはかりにせし事にあやな
き心さへつき侍けんうたてかきみたるやうにおほ
え侍れは物うくてさておき侍りぬ

壬辰十月中旬　洛下　拾穗

寶暦十年七月よりたま〳〵集りて一わたり讀みて同
十二月の八日によみ果つ一月に三度よたひなん讀け
るなり本の注のあしきをはおほゝけしつそのむしろ
にさま〳〵のよしなしことをもいひわたらひながら
たま〳〵書つけたれはそれはたわろき事もおほかり

なむ

賀茂眞淵

秋成か本に都人村井古巖か本にあるとて上のつゝきを書くはへたり左にしるす

ならの木のならふほとゝはをしへねと名にやあふとそやとはかりつる

といひたりけれはあなうちつけのことやとてかくぞいひ出したりける

かとすきてはつせ川まてわたる瀨もわかかためとや君はこたへん

その夜とまりつとめてをとこ

朝またきたつそらもなししら波のかへる〳〵もかへりきぬへし

文化九年十月上旬泊々舍に人々會讀しける時一わたり讀わたしつ

文政のふたとせ八月廿日餘り一日縣翁の此抄に書そへられつる事とも寫し終る抄とおなし所もあるはあなかちにわつらはしく書くはへすいささか私におもへる事もありしは其所々にしるしおきつ

前田夏蔭

この三卷は前田夏蔭か北村季吟か抄へ直淵の直解あるは其師清水濱臣の說共をかきあつめ又おのれのおもへるふしをも書加へおきけるを吾友菊池隆吉は夏蔭かをしへ子にて其師世に在し時寫しおかれたるをことし消夏の料にとて借受てよみもてゆくに何れも世に名高き人々の物せる注釋ともなればみすてかたくて終に寫し終るになむ纂注とはおのれわたくしに名付し也

甲戌八月　柳漁誌

大和物語備考

群書一覽（卷の三十五ウ）曰此物かたり作者の事諸說分明ならず季吟云此ものがたり本の差異多し六條家の本二條家の本そのほかあまたかはり侍り清輔の說に大和物語和歌二百七十首此內連歌三首但し本々不レ同と云々今用ゆるは定家卿の御自筆をもて一字をたがへす書寫せしとあるのうつしにて侍り歌數すべて二百八十餘首ありかの本のたがひめによるにや作者の說も一かたならずあるは在原滋春（業平の次男在次君と號す）の所作なりあるは花山院の御作りものかたりとも申傳へて侍り此本をもてこの兩說を案じ侍るに滋春のかけるとさためん事おぼつかなしこのものがたりのうちに在次君と聞ゆるが甲斐の國にて身まかるとてかりそめの

ゆきかひぢこそおもひこしとよめりし事は古今集にもよきしくしげはるが母に見せよといひおきつるよし見え侍りしかあればいかゞとぞ思ひ侍る一條禪閤御所の歌林良材集にはひとへに花山院のやまとものがたりとかゝせたまへるこそたゞに故なきには侍らじとをしはかられ侍れ人々のうた折々まじはりて見え侍り今ひそかに思ひ侍るに滋春のかきたまへるといふも古人の說なればひたすらに誣がたしかのいせものがたりを業平の朝臣の自記ともいせの御の筆作とも二かたにさだめかたきにとりてかの自記のもの有しに又伊勢の御のつくりくはへていせ物語と名づけたりとかや諸說に決し侍れば今の物語をもはじめ在次君のあらましゝるしをきつらんに又かのみかどの製作にて其後々の事共をも補ひおはしましけるとや見侍らん或人乃云滋春のかきたりといはんことのおぼつかなさはそのいはれあまた有りしかあれど花山ノ院のかゝせたまへりといへらんことも何のよりところにてかたゞしくさだめ聞えんとやつかりがいはゝこれたゞ舊說にまかするばかりにていづれもさせる證跡は侍らずさりながら又管見のよりどころ

は此花山院のみかどは冷泉第一の御子御女は皇太后宮懷子（攝政太政大臣伊尹ノ女）安和元年に降誕あり永觀二年十月十日に御ゆつりをうけさせたまひ御在位二年にて寛和二年六月廿二日におりゐさせたまひ花山寺にして御かざりをおろしこゝかしこ深山に入など佛道をおぼしこめにけり此大和物語にはじめには亭子のみかどおりゐの御心ある事をかきつぎに御ぐしおろし山ぶみせさせ給ふ事などかきつらねつゝ卷軸には花山の僧正のうつふしそあのさめのけさなりとよめるをもて一部をとゞめさせたまへりけりこれらの文體をみるにかの帝の御心有てもやかくものせさせたまへるならんとこそ愚意にはおしはかられ侍れ但し清輔のの說（袋草）には作者不ㇾ審まつ朱雀院の御時天曆（慶イ）のはじめの頃にや先帝は延喜の御宇おほいまうちきみと號するは貞信公なり兼盛ならびに檜墻の嫗等のうた有と云々愚按するに貞信公は朱雀院の御宇承平六年に太政大臣になりたまへり兼盛は後撰集の頃より花山のみかどの御比ほひまでもながらへたまひしよしに侍り檜墻の嫗は天慶四年純友がさわぎの比わがくろかみもしら川のごとよめりいづれも時代そのころなり

猶此說により侍らは清愼公(小野宮左大臣之號)を此物語に今のひだりのおとゞと侍り之も天暦年中に左府に任じたまへるよしなりければいかさまにも此ころ出來たりといはんにつきなきには侍らじかし清輔卿の此ほひにだにすでに作者はつまびらかならずと侍るは其後の說よりさもやと心もまどはるれば只京極黃門のいせ物語の奧書に上古の人强不ﾚ可ﾚ尋ニ其作者ヲ只可ﾚ翫ニ詞花言葉ヲ而已とかゝせたまへる金言にならひて此物語もさてをき侍らんか猶ことなる正說も有りて後日の所見も侍るべけれど唯今の了簡にまかせてせつ〳〵かきとゝめ侍り〇題號を大和物語といふ事清輔說に云(袋草子)其名目和語の由歟云々我日のもとのことばをもてやまとうたのみちによりたるふることともをかきあつめたるゆゑなるべし又やまと物語は伊勢物語に對していふともいへり可ﾚ尋ﾚ之云々〇賀茂眞淵云大和今昔の二物語はみづからたくめるにはあらで人のかたるを聞くまゝに書きつればまこともそらごとも又いとこまなるもましれり又云大和物語はいせ物語をまねびたるがごとくなれど文の體似るものにあらすたゞ歌はあしからず

〇荷田春滿云大和物語といふは今の京のこと多かれどはた大和の國にて有りしことをも書たれば大和と名つけしものと見えたり云々

〇按ずるに此物語古人稱美の事は八雲御抄に云伊勢物語大和物語源氏物語歌人のみるべきものなり云々又千五百番歌合顯昭判詞に云歌合のうたには物語のうたをば本歌にも出し證歌にも用ゆまじと申けれど源氏世繼伊勢大和とて歌よみの見るべきふみと承るといへり

〇大和物語抄　六卷　北村季吟

本文の奧書に永亨三年十月權少僧都延德二年六月禁裏ノ御本を以て書寫せしむるのよし見えたり又或本に常の本の外なる事くはゝれるを此抄の卷末にしるせり承應二年五月季吟自序あり卷尾に自跋あり

〇大和物語首書　五卷

作者詳ならす書籍目錄には一華堂切臨(サイリン)としるせり大抵季吟の抄に似たるものなり

明曆三年二月

宇津保物語玉琴

宇津保物語二阿抄　全

宇津保物語考證

宇津保物語玉松

物語ふみ多かれとあとなしことをけにしかなりと愛思ふへくつくり出たるは多からす人のさとりにかきりあることにて人のしわさにかきりあらねはむへさることなるへしされはこそうつゝのかたりことにも十に百にさまはしもたかへりとみえなからことはひとつたくひなからそこゝのけちめのやゝたかへるのみなれ物語ふみはひとつ心より千萬の人の心をうつし出るなへに人ことに心はへのかはれりとはみえつゝもよしとせしはみな人のよしとうへなひあしゝといへるは人みなにあやしきまにいひくたせるなとつくりぬしの心にのみかゝれそかしはしにはよしといひたてし人をもあしさまにいひかちぬることをもつくりそへて出したるもあなれとそれはた時にたかへる人のことみなされてよき心しらひの人としもみえさるもつくりぬしの心にうへなはぬからのことなれは也また思ふに源氏の物語につきてはこの物語にうへこすへきなかきつくりふみはあらぬをふみのさまのふるひしにやあるらんあへなく世にすさめられしも幸なきにこそ榮花の物語なとの源氏の物語にもまさりていとなかきものかたりなからかれはうつゝにありしことくさなれは何そもことなりとしもいふへきかはかれをはなちて又ことにまされるもなきにかたなりなる狭衣の物語よりも思ひおとしたるはいかにそやこの物語は源氏の物語にもみえしふみなから世にすてられて奥津玉藻のたれとりあけてかそへいてさるを往年桑原やよ子のうつほの物語考ひと巻しるしたるになのりその汝も我もうち任してことひうしのこと心もつかはてありし己もひたふるにこの考のまに／＼巻の序をもなしてみたりしか亡友菅原久樹かもとなりしこの物語の寫本に校合せし時やゝたかへるところ／＼しるしとゝめしをふるきぬのうちすてゝおきしをこたひとり出てみるにむへよしと思ふことの多かれはかゝるものをうちおかんもほいならす思ひおこしてまたさらに考へぬる序にやよ子の考ふみのうへをも考へあはするに彼には摺本のみにかゝつらひてしるせしからに思ひたかへられしこともみゆれはいてこの思ひたかへられしをあらためなんとせしにいつしか五巻のふみとなりぬ己におな

し心の人によせんと思ふも例のひかわさにこそ
此ふみのこと思ふ給へたちしひ色ある松なうつし植ることありしかはいさなめけなれとうち思ふまゝを
千年へんこともかけし引植るこの玉松の色にあえぬとも
ふみの名をも玉松とやいふへき

源眞憶

宇津保物語玉松一之卷

うつほの物語はいともみたれしふみをもて摺本とせしものにてよみうかへかたきことこそ多なれそのいとゝしきものは卷の序さへみたりたれこのことは桑原やよ子の考にもいはれ（頭註書入云やよ子の考はうつほの物語考とて一卷あり寫本也）大人の玉勝間の櫻落葉卷に田中道麿の考をしるされしかとそれはた大旨ことのみにて諾ひかたきことのみなれはこたひ卷々をよみ考へその證ともをとり出て卷の序をさため竝といふことは源氏の物語にもいへることにてさせるやくあることならねと物語ふみのてふりには後にいふへきさまのことをゆくりなく其ことをかたりおきなからふりはへて其ことの始をこと卷にかたり出なとせることにてかうやうのさまは物語ふみこのゐるとちはさる心しらひのことはしりうかへしことなれと初學のものはかゝることのわひためありとしも知らてみたれしなとさへ思ふへけれはかくはいふそかしこの物語にもはやくは竝の卷々のことありしかとそれさへ傳のうせてさたかならねはこたひ竝の卷々をたてゝその序を定めし

ことつきにいへり（頭註書入云うつほの物語の並の巻のさたかなりしさまは河海抄のうつせみの巻の注にみえし）さて巻の序のみかは巻ことの上中下の序をもみたりしをやよ子もあら〳〵に考おき道麻呂も考へしことゝもの諸也とみゆれはそかまに〳〵なほ考みかはし上中下の序をさためぬ摺本八巻を別て三十巻とせしうちの巻にもこと巻のみたれいりしとおなしことなるをふた巻に出せしことなとありていとみたりかはしこたひ友人菅原久樹かもたりし古き寫本にみかはしてもみたれしを改めたるかきりをはまたみん人のいまの摺本にみかはしてあらたむへき料につきの巻々にしるしおきたれはあはしみてたかへるさまを知るへし己か某の巻にみゆるなといふもみなこの改しふみもていへれ摺本にたかへりとていふかしとおもふことなかれまた人々の官途のこともいとみたれたれはよく心してみるへきこそ（左大将を右大将と誤り式部卿民部卿なとをはかたみに誤れるもあり兵衛佐衛門佐なとのいとしろきものなさへ誤れる所々あれはなりかし（頭註書入云官職のみたれたるもの丶しろ丶かきりはこたひあらためしな人々の系圖の下にもつきの巻にもしるしたれはそなみて摺本のたかひたるなは知るへし）また初學のまとふへきことは巻ことに書ありて其書のことをとき丶かせしことはをもひとつらに物語のうちにかきつらねたれはおなしさまのことのかとなり

ていへるなと思ひまとへとての書ときの期にはことはこれはなとやうのことはをおきてことをへたてたれは心とゝめてみはいと〳〵しるかるへしこの書ときの期も作者のみつからそへしものなれは人々の齢のほとなといへるかやうとなりてこたひ年立をも巻の序をさためし據とせしも多かりき

年立はやくなきことにいへるもあれと年立は物語の綱領にて年立にうと〳〵しうては物語のつゝけさまのうまくさとりうへきさとりえさらんには人々のしわさをあはれとは愛つへきあはれと思はさらんには物語ふみゝるかひなかるへしと己かひか心に思ふものから其しらるゝかきりをしるしつゝけて年立をものせしされと新墾わさにもあなれはたと〳〵しうて思ひたかへりしもあめれはまたみなん人の心して誤をつくろひて給ふへし猶いふへきことは年立の始にいへりし

系圖はみかとより始て人々の御族をはやく知るへきものにてうと〳〵しうすへきものにはあらす是にうと〳〵しうてはみなしらぬ人の心ちそせらるれされは桑原やよ子も系圖をはしるされしかと思ひたか

へられしこともいと多かれはこたひ改めたれとなほ思ひたかへることもあるへけれはよく考へみ給ふべきことにこそ

この物語のうへにはいふへきことのいと多けく考へ思ふへきことも多かれとこゝには序のみたれたると年立系圖をのみむねとしたれはこれにかゝらぬことをはさてやみぬ巻ことのうちにもかれとこれといりみたれたるこゝた多くて己かさためいへりし巻の序のまゝにみなんにもまた物語のこゝろを思ひ知られぬか多なれは其みたれしかしるくみゆる久樹の許なりし寫本にてよみあはし考へ定めしを下巻にしるしたれはそをみて摺本のひかことなるを知るへし某巻某丁の左右としるせしは摺本のにていへるなりをおはわをほなとのかなもしのたかひしをはひとつもいはねはいふかしみ思ふましきことそこれらのことは物語みなからも改めやすきわさなれはそかし

この物語はいとふるきふみにて源氏の物語にもみえしことは人のよくしりたることなから古より人も愛おもはさりしにや注釋ふみもなく契沖法師も愛られしにや物に引なともせられ縣居翁も物には引出ていはれしかともともに注釋のさたにおよはてそありし大人も玉勝間に道麻呂か考へをのせられしのみ也かくなたゝる人々にえりのこされしはこのふみのさちなきにやあらんさるを己かとり出ていへるをおこわさなりとすさめるもあめれとおもひえかたきを任とせるにはあらねは何そもさそあらんことかはなと思ふものからはつはつに其大凡ことをそ新釋はしつれ猶つき〳〵考へえしことをはことふみにしるして聞えなんさてこの物語の作者を源順あそのよし物にみえたれとそはいみしきひかことそかしそはこの物語の讀例にいへれはこゝにいはすおなし讀例にむねといひしことにはあれと源氏の物語はこの物語につきてかきしものにてこの物語をは先代のことゝしたるそいと多かることわれもいはんにこの物語にみえたる人々のしわさなとさへかれとこれと引たかへつゝそれにゑんなる心はへをもいみしきことをもこはこはしきさまをも心つきなきわさをもそへてしるせしこそいと多かれ源氏の物語はこの物語にいまやうさまのことそへてしるせしものとこそいふへけれ古より源氏の物語にのみ心よせてこの物語をはありとし

も思はてすさめたれはそか丶ることにも心のつかてありしならんことのさまのにたる人の業ともいへる物語ふみのもとなれはにたることのなとかはなからんものかはなといひくたすへけれとそは編なることにてまたく源氏の物語はこの物語によりてつくり出しことのいとあかけれそのこと〳〵をはうつほの物語讀例に委にいひたれとか丶ることもありとおとろかしおくのみ猶讀例をみてそのよしをは知るへきことそあなかしこ

この物語の年立ははやくよりあることにや己はまたみね桑原やよ子の考にもさることなけれはなかりしにやあらんと思ふものからこたひ源氏の物語の年立を大人の改め給ひて玉の小櫛にしるされしさまにならひてしるしつ丶けぬれと新墾わさなれはいとうと〳〵しけなれはわつらはしきまてその徴となりぬへきこと丶もをしるしぬかしさはいへとこの物語には人々の齢の程をいへる所々おほかれはそをもて年立をさためしまたかの物語は光君をもて年立をたて丶しにこの物語にむねとせしは仲忠の君なれはこの君のうまれ給ふ年を始の年とはなしぬ俊蔭巻の始は俊蔭中納言の齢にてこそ年立をいふへけれとこれはさることなともうちみにも考へしらるへけれはその齢のふみにみえしかきりのみをしるしつ丶けさて仲忠の君うまれ給ひしより年毎にかそへそめつるさるかうちにも春のことのみにて一年を丶はりそのつきの巻には夏のことよりいひいて丶してともありてた丶とにはおきし年のさまなれとよく考へぬれはやかてつくる年のことなることなともありておもひたかふわさもいとおほかり秋冬とかはれるにもさるたくひのことありて春夏にはかきらねとこれは大凡ことをいへるなれはか丶ることのありとはかねて心にしめおくへきことそかしもとこの物語はいとしとけなきかきさまなるうへに摺本のかたはみたりかはしきことのみなれはよくこ丶ろしてみるへきものそことさらにこの物語には版本も多からす寫本もまたえやすからねは異本の考へきたよりたになくて知らぬ山路にまとふこ丶ちのみこそせらるれされはこ丶にしるせし年立も己か心ひとつに定めしことにしあなれはいとも〳〵おほつかなけれはか丶るものなからんよりはと思ひのとめてしるしいてぬまたみん人の心

しもまゝくはへ給ふへきことなりまたいふへきことをいひのこせしことこそあなれこの物語にみえし人々のよはひのほとに合て年立をさためしは前にいへりしことくなれとまた其齢にあはせんとて年の經たることをあからかにみえねと己か心して年月のたちしことをそへしそあなるそれは國讓巻の終と樓上巻の始との習に二年のほとの事をのこせし思ふにこれは心ありてもらしたるにはあらさるへし源氏の物語にもかゝる例はあれとかれはそのはふきたるさまをいとよくいひて心ありてはふきしさまなれはうたかひ思ふ人もなけれとこれはさる心はせありともみえすまた何のふしもみえねはみん人のこゝに二年のほとをはふきしといふは己かひかことゝしもうたかひ思ふへけれと二年のことをくはへされは犬宮の齢のほとのまたくあはねはなりそのよしあら〳〵いはんに仲忠の君廿八歳の十月中の十日にうまれ給ひしこと藏開巻にみえおなし下巻に廿五日にいてくる乙ねに犬宮御百日にあたり給ふよしいへれはあくる年の正月廿五日にて犬宮二歳になり給ふへしさて藏開巻の下は仲忠の君廿九歳犬宮二歳の二月にてことをとちめ國讓巻の始は二月はかりよりいひ出しことなれは例の手ふりならんには仲忠の君三十歳犬宮三歳のとしと定むへきことなれとさならす犬宮二歳の二月のことにて藏開巻の下とおなし年也其故は藏開巻の中（仲忠の君廿八歳時）に梨壺の女御七月はかりよりはらみ給ふよしをいひおなしき下巻（仲忠の君廿八歳時）に藤壺の女御はらみ給ひて五つゝきはかりのよしをいひて國讓巻にて梨壺の女御みこうみ給ふよしをいひこのつきに四月六日はかりのことをいへれは四月の始にうみ給ひしなるへし國讓巻の中に晦日に藤壺の女御みこいま宮をうみ給ふよしをいひてさてかくて六月になりぬとあるにて五月晦日なることといとしるきことをやこのいへる月そ梨壺の女御も藤壺の女御もともにうみ給ふへき月にまたくあへれはひとつ年とは定めし國讓巻の下にかくて年かはりぬとあれはこれそ仲忠の君三十歳犬宮三歳の年といふへし國讓巻の下は三月の上の十日はかりにてもちめつゝ樓上巻に三月十餘日のころとあれは仲忠の君三十歳の三月のつゝきのさまなれとこのつきに犬宮の來年はなゝつになり給ふよしみえたれは仲忠の君三十歳の三月のつゝきにあらさ

るをしるへしこのなゝつといへるをよつの誤とせん
には年記はまたくあへれとしかならさることこそあ
れ楼上巻の下に正月三日云々とあるは犬宮のなゝつ
をよつの誤とせばこの正月そ犬宮四つの年の正月な
れとこのとしの八月十五日に仲忠の京極の家に両院
さかの院朱雀院の御幸し給ふときさかの大后宮七十にあまり
給ふよしをいへるにて思ふにこの大后宮六十の御賀
ありしは仲忠の君廿四歳の正月廿七日乙ねにありし
事にて犬宮の四歳ならんには仲忠の君廿八歳の十月
にうまれし御子なれば仲忠の君卅一歳にこそなりぬ
ければ廿四歳よりかそへて八年になれは大后宮は仲
忠の君廿四歳の時六十歳にておはしましゝかは八年
を加へて六十七歳になり給へは何條七十にあまり給
ふといふへきことかは犬宮をなゝつとし仲忠の君を
卅四歳となしぬれは廿四歳大后宮の六十の御賀也よりかそへて十
一年になれは大后宮七十になりたまへはこそかくは
いひたれこをもて犬宮を七つといひしはひかことな
らぬを知るへしこのひかことならぬを知りたらんに
はこゝに二年の間の事を脱せしといへるをも諾ふへ
しかゝる類のこといと多かれとひとつ〳〵かそへい
てゝいはねと餘もこの定なりと押て知るへしまたこ
の物語のつくりさまにて思ふに仲忠の君にきしろは
せんとてすゝしの中納言をは設けしものとこそ思へ
さるから物語のうちにこの二人にまさりたるはあら
ぬをもておもふへし巻々にもこの二人の御さかえを
かたたかひにしるせしにてもひかことならぬを知る
へきそかしされはこゝにうたかひ思ふへきことこそ
ありけれ蔵開巻まてはすゝしの中納言のさかえたま
ふさまを所々にいひなから國譲巻は物語のうちのな
かき巻にありなからすゝしの中納言のことをは仲忠
の君ならぬ人々とおなしさまにいひ楼上巻にいたり
てもなほしかおなしさまなりこの巻ともにはすゝし
の中納言のことみえぬにはあらねとこと巻々にあは
しみよいともことすくなにいひしはしるきことなる
をこゝに依ておもふに國譲巻と楼上巻との間すゞしの
中納言の御うへのみいひし巻のありしか亡たるなる
へしされはこそこゝに二年のほとをかき國譲巻にも
楼上巻にもけしきはかりいへりしにてもうたかひお
もふへきことそかし源氏の物語なとやうに古にも今
にも人の愛思はぬふみにしあなれはかゝることのあ

るましきものにもあらしかしと思ふものからおそろかしおけるなりひか思ひにやあらんかし

年立の圖

俊蔭巻

俊蔭七歳高麗人とふみつくりかはす
俊蔭十一歳かうふり給ふ
俊蔭十六歳遣唐使に召る海中暴風に舟はなたれ波斯國に流着しつ　俊蔭卅五歳の時はゝうせぬ
俊蔭卅七歳の時父うせぬ　俊蔭卅九歳にて歸朝し則式部少輔になされ殿上をゆるされ東宮學士となる
一世の源氏を妻としつ　俊蔭女うまれぬ
俊蔭式部大輔左大辨かけつ　俊蔭女四歳になりぬ
六月廿日のほとに裝束し琴をみかとより其餘の御かたく\にあかちまいらす俊蔭位をかへし奉り三條の京極の家にすみて其女に琴ならはし始む
俊蔭治部卿宰相となる　俊蔭女十五歳の二月に俊蔭妻にはかにうせぬ俊蔭も病つきて三月はかりにうせぬ年五十四歳はかりなるへし八月廿日兼雅始て俊蔭女に逢給ふ則はらみ給ふ九月はかりよりと聞ゆ忠雅二十歳兼雅十五歳のよしみゆ

忠こそ巻・俊蔭巻並一

忠こそ五歳の三月に母の一世源氏うせ給ふ年廿歳とみゆ　左大臣忠恒うせ給ふ
千蔭一條の上にかよひ給ふ忠こそ七歳のさしと聞ゆ

歳	上段	下段
一歳	六月六日仲忠の君うまる母俊蔭女京極上	
二歳		
三歳	仲忠三歳になり給ふ	忠こそ十四歳にて法師なり給ふ御父の千蔭の右大臣うせ給ふ年四十四歳はかりなるべし
四歳		
五歳		
六歳	年かへりぬ云々仲忠母子ともに北山のうつぼにかくる　仲忠始て琴をならふ	
七歳	仲忠七歳になり給ふ	
八歳		
九歳		
十歳		
十一歳		
十二歳	仲忠十二歳になり給ふ	
十三歳	あづまのくにの兵のあたむくひせんとて都にきしか此北山をしめていみしうまさなきことありきしかばそにたえ給はて俊蔭の遺言のまに／＼なむ風の琴をかきならし給へば山くづれ	

て兵等みなうつまれうせてけりなほあくる日の午の時ばかりまでこゝの手なゝりかへし彈給ふに卅日みかど北野に御幸し給ふことありて兼雅も御供にたはせしか此彈給ふ琴のねをたづねたづねてうつぼに出り給ひ仲忠にことゝひかはしたはしあはすることあれどけしきにも出さでかへり給ひ三日ばかりありてしたうつぼにたはしまして則仲忠母子をさもなひかへり三條大路北堀川西なる家にすまさせ給ふ頭注書入云此みかどは朱雀院也茲にいへるのちに此みかどの御ことばにさかの院の御時云々といへることみえたればはやく御譲位のことありしなるべし　按に俊蔭か女京極上の邸に此山にすむこと八年になりぬ云々また兼雅のことばにも此人も年ながぞふるに十三ばかりにこそなるらめとありけに仲忠は十三歳になれり母君の御年三十にすこしたらぬほどゝみえしは此時廿八歳になり給へばなり

十四歳

忠雅卅一歳　兼雅廿八歳になり給ふべし

十五歳

十六歳

仲忠みやこに出て三[illegible]せかほどにすへてせぬことなくなりぬ云々十六といふ年の二月にかうぶりせさせて名をはなかたゝといふ殿上をゆるさる

十七歳

十八歳

仲忠十八歳侍從になりぬ

十九歳

二十歳

廿一歳

藤原君巻　俊蔭巻並二

あて宮御年十二と聞ゆる二月に御裳奉る

兼雅四十ばかりとあれど實に卅六歳になり給ふ

上野宮道隆寺の塔會し給ひてあて宮の人代なる舍人か女を爲給ふ

四月ばかりになりぬ云々

廿二歳

年かはりて三月ばかりとみゆ

滋野眞菅かことはに人のいましむる五月はいぬとみえたれば六月ばかりなるべし七月七日とみゆ

廿三歳

梅花笠巻　嵯峨院巻並一

二月廿日に正頼かすかの社に詣給ひおなじき廿三日にみやこにかへり給ふかすがにて正頼忠こそ法師に逢給ふ忠こそ法師の齢にて按に卅三歳になり給ふべし三月のほどゝみゆ

年かへりて八月廿二日に雅相撲のかへりあるし給ふ

嵯峨院巻

齋宮くたり給ふ御母承香殿女御

吹上巻上　嵯峨院巻並二

源廿一歳のよしみゆ
二月廿九日仲忠等の人々吹上のはまの凉の御許に参り給はんと出たち給ふ
三月三日とあり
四月朔日に仲忠等の人々吹上のはまを出たち給ひれなしき四日にみやこに歸り給ふ

祭使巻　さかの院巻並三

按に四月はかりよりと聞ゆ
五月五日とみゆ
六月頃ほひとみゆ
七月一日云々
藤えい季房卅五歳のよしみゆ

吹上巻下

かくて八月なかの十日のほと云々
九月朔日院のみかと吹上のはまに御幸し給ふ九日の宴に吹上君に源氏を給ひ名をすゝしと給ふ

かくてひころへて九月になりぬ
十一月はかりになりぬ
十二月朔日とみゆ

年かへりて云々季房大内記春宮學士となる仲頼行正仲忠仲純ときめき給ふ
正月十八日ののり弓のせちに左かちてけれは云々左は左大將正賴なり

殿上をゆるさる院のみかとの御籍に俊蔭かくれて二十餘年仲忠せけんにさとりありといへともかれか時にあてす云々按に俊蔭うせし年より廿四年になりぬれはかくの給ふなるへし
内のみかと神泉にて紅葉賀し給ふ季房試の題給はりて進士となるすゝし内の殿上をゆるさる
忠こそ法師眞言院の阿闍梨となる繼母一條の上に逢ひ給ふ
九月晦日　十月朔日とみゆ

菊宴巻　嵯峨院巻並四

十一月朔日春宮殘菊の宴し給ふ正賴か家にて神樂し給ふ十一月十三日のよしみゆ
十二月とあり

かくて年こえて云々かくてのり弓に左はあるしすへしとて心ことにまうけすへきことをの給ふ左は正賴左大將なり
大后宮の六十の御賀正月廿七日にいてくる乙れにゝなく正賴の

左大將正頼正月廿七日の乙つかふまつり給ふあこ宮十一に
れにさかの院の大后宮に六て此御賀にらくそん舞給ふいへ
十の御賀たはる宮陵王舞給ふ季房大内記とみゆ
二月はかりになりぬ云々三月十餘日はかりに始の巳の日
實忠か子のそて君十二歳にいてきたれは云々
なり給ふまさなり十三歳秋ふかくなるまゝに云々仲忠實
にてうせ給ふ忠とつれてものよりかへり給ふ
みちのすから實忠の北方三條宮
すゝめられて志賀の山本の家に
すみ給ふかたにゆくりなく至り
給ふ

あて宮巻 さかの院巻竝五

十月あて宮春宮に參り給ふ年十
五なるへし仲頼このことに依り
法師となり水尾の山にこもる

初秋巻

六月はかりよりと聞ゆ
七月朔日とみゆ

二月なかの十日に始の庚申いて
きたる
三月晦日とみゆ
あて宮御巻のことに依て實忠小
野の山莊にこもり給ふ仲純廿九
歳にてうせ給ふ
前太宰帥滋野眞菅依無禮之科遷
伊豆權頭其子そこはくはなたる

廿五歳

八月九日相撲節會左かち給致仕大臣高基のみこみつから家
ふ此日京極上ないしの督に所を燒て山にこもり給ふ
なり給ふ十月朔日春宮の一のみや生れ給
ふ御母堂壺女
あくる年の二三月よりあてみや
またはらみ給ひ二の宮生れ給ふ

廿六歳

田鶴群鳥巻

六月はかり云々
八月になりて仲忠に女一宮
を給ふ御年十七のよしみゆ
十三日に正頼の姫君たちに
むことり給ふすゝし廿四歳
仲忠廿六歳兵部卿宮廿七歳
季房卅八歳八君十八歳あて
宮十五歳十君十六歳十一君
十五歳十二君十四歳十三君
十三歳十四君十二歳になり
給ふなるへし

藏開巻

十一月はかり云々とみゆ仲忠京極の家つくらんとせしとき其
處の里人の辭に今年はたとせはかりみそとせにはまたたらぬ
ほとゝいへるは俊蔭のうせたる年よりなるへけれは廿八年に
なりぬへし

廿七歳

かくてかへる年の正月はかりより一の宮はらみ給ふ 仲忠北方 朱雀院の

廿八歳

十月中の十日に仲忠の女生給ふいぬ宮といふ母女一宮（女一宮也）
正賴五十四歳　兼雅四十三歳とみゆ　忠雅四十六歳　すゝし
廿六歳になり給ふへし

廿九歳
かくて年かへりて正月朔日のひ云々　廿五日にいてくる乙れ
にいぬ宮御百日にあたり給ふ云々春宮の始の宮はわか宮と聞
ゆ御年五つほとれとうとの宮は四つ云々御母は藤壺女御なり
かゝるほとに月たちて二月になりぬ云々

國讓卷

太政大臣源季明御位をかへし入道し給ひ則うせ給ふ御年七十
にあまり給ふ由みゆ太政大臣の御四十九日四月六日はかりに
あたれる由みえたれは二月十七八日の頃うせ給ひしなるへし
二月廿日この御とふらひに左右の大將其餘の人々も參り給ふ
二月廿七日のほと云々　三月廿八日はかり云々　梨壺女御み
こうみ給ふ後に二宮と申實忠の女そて君十七歳母三條宮廿五
のほとゝみゆ四月朔日藤つほ男みこを產　六月になりぬ云々
五月はかりより承香殿女御はらみ給ふ　仲忠北方一宮九月は
かりよりはらみ給ふ　七月中の十日になりぬ云々　八月十一
日御國讓らせ給ひみかとは朱雀院にいてさせ給ふよしみゆ
八月十七日はかり云々　かゝるほとに御卽位廿三日にあるへ
しとのゝしる　かくいふほとに十月になりぬ云々　春宮には
若宮ゐ給ふ御年五歳御母藤壺女御　十月十五日云々　式部卿
宮女御十月はかりよりはらみ給ふ

三十歳
かくて年かへりぬ云々しけのゝ眞菅が族の科ゆるさる　二月
はかりに承香殿女御をとこ宮生み給ふ　二月といふかみの十
日も過ぬ云々廿三日に仲忠北方女一宮御子生み給ふ　三月上
の丑日はかり花さかり也云々　十月さかの院花宴きこしめす

卅一歳
頭註書入云こゝに二年のこと脱たるよしは前にいへり

卅二歳

樓上卷

卅三歳
齋宮のほり給ふ御母承香殿うせ給ふによりて也朱雀院の御は
らからのよしみゆ　三月十餘日のころ云々　犬宮來年は七つ
になり給ふよしみゆ　八月十三日云々　京極上仲忠とゝもに
犬宮に琴をしへ給ふ　十月云々　十一月朔日云々　十二月云
々

卅四歳
正月三日云々二月卅日云々　三月のせく云々　四月まつりめ
す云々　五月のせく云々　六月あつけれと云々　七月七日云
々　八月十五日さかの院朱雀院仲忠の京極の家御幸し給ふ后
宮女御たちもとゝたち御供に奉り給ふ京極上正二位に加階し
俊蔭に三位の中納言を贈り給ふ　さかの院御年七十二大后宮
七十にあまり給ふよしみゆ

この物語の系圖は古きものにはみえぬを桑原やよ
子の思ひおこしてものせられたれどあら〳〵に考へ

られしにやいとも〳〵思ひたかへられたることぞ多なれ己こたひよく物語を考へしりゐしかきりをはしるしつゝけたれとなほ思ひたかへしこともありぬへしこの系圖をしるしなんとせしときやよ子のしおきたりし系圖のあやまりはあやまりとみながら多くのやくとなりにしかば己がこのしるせし系圖もまた改めなんと思ふ人のようにもなりなましとわつらはしけれどしるしおきぬさて源氏の物語には人々の上に歌によりそのすみ給ふ家所などやうのものにてあざゑめきたることありて（紫の上六條の御息所玉鬘の上なとやうのことぞ）いとよく其人を知りやすけれどこの物語にはさることのあらてかれとこれとのけぢめ心をゑかたけなれはわたくしに人々の上にさる事をなしぬ（實忠の北方を三條宮といひ正賴の大君朱雀院の女御を仁壽殿女御俊蔭か女兼雅の北方を京極の上なといふたくひそかし）それをば系圖の人々の下にしるしおきたればそをみて爪印とはなしぬへきこと也また物語に官名にていへるをば某の卷にては何の官也としるしおきたればこれにて知るべし（正賴な始は左大將とのといひ後には右大臣とのみいひ仲忠をは侍從とも中將とも大將ともつき〳〵官のかはれることにいへるたくひのことないそふ）また后宮女御たちまた宮達大臣達諸の北方をば其系の後にしらるゝかぎりはしるしたれとなほ誰の御子ともしられぬも多かりそれはたゝ某の北方とのみしるせしもあるそかし源氏の物語の系圖には女房たち家司あるはわらはへなとさへしるしたれとこれにはさるさまの人々をはみなはふきぬこと〳〵にしるし出たりとも何のやくかありぬへきと思ふも己かさしすき心にやあらん

系圖

先院
─嵯峨院─（俊蔭卷にて御即位ありしなるへけれと可考よしなし御讓位のこともたしかならねと梅花笠卷の始にかゝることにその時のみかともなりぬ給ひ春宮國しり給ひ云々あれは御讓位ありしことも俊蔭卷なる事あかきなや御秋卷にさかいみかとも太上宮ともいへり樓上卷にさかの院御年七十二におはしませとまた五十はかりにみえ給ふよしみゆ）
─式部卿宮─（藏開卷に故式部卿宮とみゆはやくうせ給ひしなるへし）
　─大君（朱雀院の女御初秋卷に式部卿宮の女御とみゆ）
　─中君（兼雅北方　藏開卷に故式部卿宮の中君十三歲にて兼雅へまいり給ひし由みゆまた下卷に四十に一二たらぬ由いへり宮君とも宮の中君とも云り）
─中務卿宮（蔵原君卷にせんまの御はらから中務卿宮とみゆ）
　─太郎君（御母正賴中君とかの大后宮六十の御賀に五常樂舞給ふよし菊宴卷にみゆ）

女宮　さかの院御妹女御はら清原俊蔭の母のよし藏開巻にみゆ於猶委子俊蔭系

朱雀院　俊蔭巻にて御卽位ありしことはさかの院の系に梅花笠巻さていへるかことし俊蔭巻に正頼北方女一宮の御弟の由みゆ彼に物語のうちに此みかとの御齡たいへることさみえれは御年のほさ可考よしなしやうなき人の齡さへかそへいてゝいへるに此みかさの御年をかそへいてさるはいかなることにやいふかし國讓巻に八月十一日に春宮に御讓位ありて朱雀院に出給ふよしみゆ

式部卿宮

右馬頭　祭使巻にうまつかさのつかひには式部卿宮のうまの君そ出給ふさみゆ

女君　連純北方御年廿二式部卿宮のかくしむすめのよし田鶴群鳥巻にみゆ

女君　桃たた殿御息所女御になり給はぬよし國讓巻にみゆ

民部卿宮

太郎君　さかの大后宮六十の御賀に太平樂舞給ふよし菊宴巻にみゆ御母は正賴の五君なるへし頭註書入云藤原君巻に五の君年十八にふたり又うみ給はんさするよしいへり

二郎君　れなしききわう城樂舞給ふよしみゆ

女君　兼純北方年十五のよし田鶴群鳥巻にみゆ

兵部卿宮

入道宮　正頼北方女一宮の御弟のよしさがの院巻にみゆ

涼　御母神南備女藏人　神南備種松か女年廿一のよし吹上巻にみゆさかの院九月吹上のはまに御幸のさき院の殿上をゆるされなしき九月の宴に源氏を給ひすゝしさ名を給ふ身のさえは仲忠さひさしきよしいへり朱雀院禪泉にて紅葉賀し給ふさき殿上をゆるされ侍從になさるまた正四位左近中將になさる初秋巻に宰相かけ給ふよしみゆ田鶴群鳥巻に中納言になさるよしいへりまたた右衛門督かけぬ二十四歳のよしみゆ

若君　母正頼十君いまみや藏開巻にうまれ給ふよしみゆ

女一宮　正頼北方后はらのよし藤原君巻にみゆ大宮さいへり

女二宮　季明北方宣耀殿女御の御母正頼北方御妹のよしあて宮巻にみゆ

女三宮　兼雅北方梨壺女御の御母かれかさ京極上につき給ひしのちは女御の御さしつきにこさよせて内にのみさふらひ給ふよし初秋巻にみゆ一條宮さいへり

女四宮　承香殿女御さみゆ后はらのよしいへりさかの四宮さ國讓巻にみゆ

女宮　實忠北方實忠にすさめられて志賀の山本の家にすみ給ふよし菊宴巻にみゆ後に三條の家にかへりすみ給ふ御年卅五のほさゝ國讓巻にみゆ

齋宮　御母承香殿女御さかの院巻にくたり給ふよしみゆ御母女御うせ給ひ齋宮をおり給ふよし樓上巻にみゆ

今上　御母大后宮太政大臣藤原茱女　國讓巻に八月廿三日御卽位のよしみゆ御年十九にてあて宮をめし御年廿にてわか宮生れ給ふよしあて宮巻にみえたれは御年廿四にて御卽位ありしなるへし

入道宮　國讓巻に朱雀院のみこたち后ばらの二のみ子は法師になり給ひ西山にをはしますよしいへり

彈正宮　三の宮のよし藤原君巻にみゆ御妻なきよしもいへり田鶴群鳥巻に御名たゝやすのみこさみゆ藏開巻に御年廿三さいへりまた三宮は三品のよしみゆ仁壽殿女御の御はらのよし藤原君巻にみゆ

師宮 四宮仁壽殿の御はらの由田鶴群鳥卷にみゆ花園卷に御年廿一のよしいへりまた四宮は四品のよしみゆ

若君 御母忠雅中君のよし田鶴群鳥卷にみゆ

五宮 御母大后宮祭使卷に嵯峨宮とみゆ藏開卷に御年廿のよしいへりまた后はらのよしみゆまた五品のよしいへり

六宮 御母仁壽殿女御御年十一にてさがの大后宮六十の御賀にらくそん舞給ふよし菊宴卷にみゆ藏開卷にかうぶり給ひ六位になり給ひまたくらの頭かけて左衞門の尉になり給ふまた侍從になり給ふ國讓卷に常陸守宮といへるはこのみやなるべしあこ宮あこ丸宮あこなどいへり

七宮 御母大后宮のよし國讓卷にみゆいへ宮いへあこ宮なごいへり

八宮 御母仁壽殿女御さがの大后宮の六十の御賀に陵王舞給ふよし菊宴卷にみゆ藏開卷に御年十七のよしいへりまた殿上ゆるされ給ふかうぶりえ給ふむなかうぶりのよしみゆ

九宮 御母更衣またわらはのよし國讓卷にみゆ

十宮 御母仁壽殿女御御年四つよし藏開卷にみゆ

女一宮 御母仁壽殿女御田鶴群鳥卷に八月仲忠に一の內親王を給ふよしみゆ御年十七になり給ふよしいへり樓上卷に四品な給ふことさみゆ犬宮等の御母なり

女二宮 御母仁壽殿女御二のみやのみかさにに給ひふくらゐにけちかきそひ給ふよし藏開卷にみゆ

女三宮 御母仁壽殿女御またかたなりにあてなるよし國讓卷にみゆ嬢君さもいへり

春宮 御母藤壺女御ふぢつぼ御年十六の十月朔に生れ給ふわか宮といへりあて宮卷にみゆ御年五歲にて春宮に居給ふよし國讓卷にみゆ

二宮 御母梨壺女御國讓卷に生れ給ふよしみゆまた只今生れ給へるなしつほのみこをはうにすゑにさもこそ大后宮のゝ給ひしかさてみ子になし給ひふらつはいみやは二なれと三のみこになし給ふといへり

三宮 御母藤壺女御二のみやにまさこみかさの御心さ三の宮にし給ふことさ前にいへるかことし藏開卷に御年四つになり給ふことさみゆ

四宮 御母藤壺女御いま宮といふよし國讓卷にみゆ

五宮 御母承香殿女御のよし國讓卷にみゆ

三春王 高基皇子といへり藤原君卷にいやしき人の腹に生れ給ひ三春の姓を給はりしといへり宰相にて左大將かけぬまた衞府かけたる中納言になり又大臣になり給ふ七條大將のはと二町の所にすみ給ふ後に御位をかへし奉り美濃國にはりぬるよしみゆ宮仕のたさゝさいへりあて宮卷にあて宮春宮へ御參入のゝち思ひあまり給ひて七條東四條に家なはじめてみな燒亡し山にこもり給ふ由みゆ初秋卷に宮仕のたほいまうちきたかもこの朝臣さみゆ

若君 母市女德町年五つばかりのよし藤原君卷にみゆ

上野宮 賴顯男子といへり藤原君卷にかくて上野宮さてふるみこれはしけりそのみこはものひかみし給へるみこにておはしける云々道隆寺にて塔の會し給ひあて宮の人代うけひ給ふよしみゆさがの院卷によりあきらのみこさみゆ

嵯峨院

后宮 菊宴卷に正月廿七日の乙丑に正頓北方大宮六十の御賀奉らるゝよしみゆ樓上卷にさがの院の大后宮は七十にあまり給ふさいへり大后宮さもさがの大后宮さもいへり

承香殿女御　あて人のよし初秋巻にみゆ齋宮御母也うせ給ふこと樓上巻にいへりさかの承香殿といへり

梅壺女御　橘千蔭云兼雅北方たとゝの山のことはらの御妹のよし忠こそ巻にもしかみゆ藏開巻にみゆまたいみしき色このみのよしいへり

神南備藏人　神南備種松女母大納言源在垣女源中納言なうみて則うせぬるよし吹上巻にみゆ

朱雀院

后宮　太政大臣藤原某女　忠雅兼雅等の御妹今山の御母のよしあて宮巻にみゆ后はらのみ子五人にはしますよし國讓巻にみえたれと今上入道宮五宮七宮のみにて今一人はみえ給はす

仁壽殿女御　左大臣源正頼大君母さかの院女一宮男宮四人女宮三人の御母のよし藤原君巻にみゆまた女御はらのみこたち合て七所十三歳よりしもなりといへり初秋巻に一の女御のよしみゆみこたち八所うみ給ふよし田鶴群鳥巻にいへるに去年生れ給ふ十宮をかそへていへは内侍督巻に春宮女御とみえしはこの女御なるへし紫宸殿女御ともいへり

式部卿宮女御　故式部卿の女のよし初秋巻にいへりみこたちのことはみえす

更衣　誰ともなし九宮の御母のよし國讓巻にみゆ

今上

承香殿女御　正頼の北方大宮の御はらかられなし后はらの四宮のよしあて宮巻にみゆまた御年廿のよしいへりさかの四宮ともいへり

宣耀殿女御　太政臣源季明女あるかなかに年老かたちもにくゝ心きゝなきよしあて宮巻にみゆまた御年三十はかりとみゆつき／＼の巻にもさかなきさの給ふさまみえたり

麗景殿女御　太政大臣藤原忠雅大君のよしあて宮巻にみゆ

藤壺女御　左大臣源正頼九君あて宮十月五日に御年十五にて参入給ふ春宮の御母なり

梨壺女御　右大臣藤原兼雅大君御年十八のよしあて宮巻にみゆ二宮の御母なり

桃花殿女御　平中納言正顯三君御年十六のよしあて宮巻にみゆ

桃花殿御息所　式部卿宮の御女々御になり給はぬよし國讓巻にみゆまた十月はかりはらみ給ふとみゆ

宮達北方

故式部卿宮北方　誰ともなし

中務卿宮北方　正頼中君母太政大臣の女せんたいの御はらからの中務のみやい北方年廿一のよし藤原君巻にみゆ

式部卿宮北方　誰ともなし

又　連純北方の御母のよし田鶴群鳥巻にみゆ

民部卿宮北方　正頼五君母女一宮年十七のよし藤原君巻にみゆ

兵部卿北方　正頼十一君母太政大臣女八月廿八日にまいり給ふよし田鶴群鳥巻にみゆ

涼中納言北方　正頼十君いま宮母女一宮八月十三日に宣旨こそまいり給ふこと田鶴群鳥巻にみゆ

帥宮北方　忠雅中君年十六大君麗景殿女御とはことはらのよし田鶴群鳥巻にみゆ

五宮北方　實政大君年十四のよし田鶴群鳥巻にみゆ

三春王北方　とめる市女の徳町といへるなとりて御妻とし給ひ子ひとりうみてのちにけるくれたるよし藤原君巻にみゆ

上野宮北方　舍人某女道隆寺の塔會し給ひてあて宮の人代に盗給ひしなり年十六はかりのよし藤原君巻にみゆ

季明　源　初秋卷に左大臣從二位源朝臣すゑあきらさみゆ田鶴群鳥卷八月十五日に太政大臣になり給ふ國譲卷に御位さかへし入道し給ひ則うせ給ふ年五十にあまり給ふ由いへりこのうせ給ひしは二月十七八日のほさなるへしまた右大臣さのはひさつ御はゝの御弟になせれはさみえたれは右大臣正頼さは御はらから也田鶴群鳥卷迄に左大臣さみえしに多く此れさゝなり

實政　梅花笠卷民部卿源されまさこみゆ　初秋卷三位權大納言兼民部卿源朝臣されまさこみえし藤原君卷に頭宰相さみえたるは此君そかし多くは民部卿さのみ云り

男君　正頼三君になさこ子たはすよし藤原君卷にみゆ菊宴卷にたほさのゝこ君蔵戯樂舞給ふよしいへるはこの君なるへし

大君　朱雀院五宮北方年十四のよし田鶴群鳥卷にみえき

實頼　二郎君左近中將のよし藤原君卷にみゆ初秋卷に左近のさはより中將さいへり藏開卷に頭中將されよりさみゆ國譲卷に新宰相さみゆ

正頼四君に子ふたりまたうみ給はんさするよし藤原君卷にみえたれさ其餘可考こさみえれははふきぬ

實忠　三郎君初秋卷に左大臣さのゝ三郎少將かけ給ふあて宮卷にあて宮春宮に御參入ののちそな思ひわひ給ひ小野の山荘にこもり居給よしみゆ國譲卷に中納言になり給ふ藤原君卷宰相のよしいへり多くは宰相の君さいへる後に新中納言さのさいへり

男君　母三條宮さかの院皇女年十三にてうせ給ふよしさかの院卷にみゆまたこ君さいへり

女君　母なし年十二のよしさかの院卷にみゆ國譲卷に年十七のよしいへりまた寵愛君のこさみゆそて君さも人宮さもいへり

女君　母さかの女二宮　今上の宣耀殿女御さかなくたはすよしいへる年三十はかりのよしあて宮卷にみゆ

季明大臣御族北方

季明北方　さかの院女二宮正頼北方の御妹のよしあて卷にみゆ國譲卷に實忠の事にうへかくれ給ひにしのち世の中心うく思ふ給へしかは云々さたにさゝの事にそれはわれもいみしくかなしみ思ひしかはこそまた人なもすませて年頃ひさりはありつれ云々にて思ふに季明の北方ははやくうせ給ひしなるへし

實政北方　正頼三君母太政大臣女年十九のよし藤原君卷にみゆ

實頼北方　正頼四君母たなし年十八のよし藤原君卷にみゆ

實忠北方　さかの院の皇女年十四にて實忠に嫁給ひ御子のそて君十二歳のさき實忠あて宮に思ひつきてのちすさめられ給ひ三條の堀川の家にすみ給ひしよしさかの院卷にみゆまた三條の家にもすみわひ給ひて志賀の山本の家にうつりすみ給ふさ菊宴卷にいへり國譲卷に御子のそて君ささもに三條の家にかへりすみ給ふさまなといへり三條宮さも三條の上さもいへり

正頼　一世源氏　納名藤原君左大將正二位大納言きさいの宮の三條大宮いほさに四十にていかめしきさやなれほやけよりすかして給はりしよし藤原君卷にみゆ御母藤原氏いよし梅花笠卷にいへりまた正三十春宮の御笛の師なるよしみゆ祭使發に御母方藤原氏なれは大學勸學院別當なかれ給ふ菊宴卷に春宮大夫な辭給ふ吹上卷に大納言正三位兼行近衛大將陸奥出羽按察使源朝臣まさよりさみゆ田鶴群鳥卷に右大臣になり給ふ藏開卷に御年五十四さみゆまた大將な辭給ふまた正二位に加階し給ふ國譲卷左大臣になりと給ふ季明の御弟なることさは前にいへるかことし

忠純　太郎君母女一宮左大辨宰相年三十のよし藤原君卷にみゆ田鶴群鳥卷權中納言になさる藏開卷左衛門督になり給ふ

太郎君　母一世源氏菊宴卷にさかの大后宮六十の御賀にすらう樂舞給ふよしみゆ田鶴群鳥卷に年十四のよしいへり

二郎君　母なし年十三のよし田鶴群鳥卷にみゆ

三郎君　母なし

女君　母なし

師純　二郎君母は一宮右衛の佐宰相年廿九のよし藤原君卷にみゆ祭使卷に右兵衛督とみゆ田鶴群鳥卷に左大辨になる

太郎君　母平中納言正頼の中君のよし田鶴群鳥卷にみゆ

二郎君　名なし

三郎君　名なし

四郎君　名なし

五郎君　名なし

輔純　三郎君母女一宮右近中將藏人頭年廿八のよし藤原君卷にみゆ田鶴群鳥卷に宰相になり給ふ

太郎君　母源氏さかの大后宮の六十の御賀に鳥舞し給ふよし菊宴卷にみゆ藏開卷に宮はたさいへり

連純　四郎君母女一宮左衛門佐年廿七のよし藤原君卷にみゆ初秋卷に右近中將かくろ國讓卷に宰相になり給ふ

式部卿宮のかくしむすめに子三人たはすよし田鶴群鳥卷にみえたれさ其餘可考ことなければはふきぬ

顯純　五郎君母太政大臣女左兵衛佐年廿六のよし藤原君卷にみゆ藏開卷に春宮亮なさる國讓卷に兵部大輔になり給ふ

兼純　六郎君母太政大臣女兵部大輔年廿五のよし藤原君卷にみゆ田鶴群鳥卷に左衛門大夫といへり藏開卷に左衛門佐とみゆ國讓卷に右衛門督になり給ふ

仲純　七郎君母女一宮侍從廿五のよし藤原君卷にみゆあて宮卷にあて宮春宮に御參入のゝち思ひわひ給ひてうせ給ふよしいへり年廿九になり給ふなるへし

八郎君　母女一宮御名みえす大后宮の大夫のよし藤原君卷にみゆ

清純　九郎君母太政大臣女式部丞殿上人年廿二のよし藤原君卷にみゆ

頼純　十郎君母女一宮右兵衛丞藏人年廿のよし藤原君卷にみゆ

近純　十一郎母太政大臣女年六歳の由藤原君卷にみゆ梅花笠卷に大夫ちかすみといへり藏開卷に藏頭藏人のよしいへり仲純にかたちも心もまさりたるとみゆまた右近少將になり給ふ國讓卷にくら人少將ちかすみといへり多くはくら人少將とみゆ

十一郎君　母女一宮年六歳ちかすみとひとつ年に生れ給ふよし藤原君卷にみゆ國讓卷に左衛門佐といへるはこの君なるへし

大君　母女一宮年卅一大君は御母大宮の御せうとの朱雀院につかうまつらせ給ひ后宮女宮あまたうみ給ひ一の女御のよし藤原君卷にみゆあてみや卷に仁壽殿女御さいへり初秋卷に仁壽殿の大將の御息所また一の女御大將さのゝ仁壽殿また紫宸殿女御とも云り猶委于朱雀院條

中君　母太政大臣女年廿一さかの院の御はらから中務卿宮の北方のよし藤原君卷にみゆ

三君　母太政大臣女年十九民部卿實政の北方のよし藤原君卷にみゆ

四君　母太政大臣女年十八宰相實頼の北方のよし藤原君卷にみゆ

五君　母女一宮年十七民部卿宮の北方のよし藤原君巻にみゆ

六君　母女一宮年十六大納言藤原清雅の北方のよし藤原君巻にみゆ

七君　母女一宮年十四宰相藤原忠俊の北方のよし藤原君巻にみゆ

八君　母女一宮十三ちこ宮といふよし藤原君巻にみゆまた右大臣忠雅に奉り給ふよしいへり

九君　母女一宮十二あて宮といふよし藤原君巻にみゆあて宮巻に御年十五の十月五日春宮に参入給ふ藤壺女御といへり猶委于今上條

十君　母女一宮十一いま宮といふよし藤原君巻にみゆ八月十三日に宣旨にてすゝし中納言にまいらすこと田鶴群鳥巻にいへり

十一君　母太政大臣女年十歳のよし藤原君巻にみゆ八月廿八日に兵部卿の宮にまいらするよし田鶴群鳥巻にいへり

十二君　母太政大臣女年九歳のよし藤原君巻にみゆ八月廿八日に正顯中納言にまいらすよし田鶴群鳥巻にいへり

十三君　母女一宮年八歳そて宮といふよし藤原君巻にみゆ八月廿八日に源中將行正にまいらすよし田鶴群鳥巻にいへり

十四君　母女一宮年七歳けす宮といふよし藤原君巻にみゆ八月廿八日に右大辨季房にまいらすよし田鶴群鳥巻にみゆ

正頼大臣御族北方

正頼北方　太政大臣のひさつむすめの由藤原君巻にみゆ橘千蔭のおとゝのはらから兼雅の北方おとゝの上の御姉のよし藏開巻にいへり大ゐさいの上といふ

正頼北方　さかの院の女一宮きさいはらのよし藤原君巻にみゆ朱雀院とはひとつ御はらの御姉なるよしおなし巻にいへり大宮といふ

忠純北方　一世源氏年廿八君たち一所は女三所の男のよし田鶴群鳥巻にみゆ

師純北方　平中納言正顯の中君年廿六なりこ子のかきり五人の子おはすよし田鶴群鳥巻にみゆ

輔純北方　源氏年廿三子あるよし田鶴群鳥巻にみゆ

連純北方　式部卿宮のかくしむすめ年廿二子三人あるよし田鶴群鳥巻にみゆ

顯純北方　近江守橘某女年十五子なきよし田鶴群鳥巻にみゆ

兼純北方　民部卿宮の女年十五はらみ給へるよし田鶴群鳥巻にみゆ

太政大臣　藤原　俊蔭巻に嵯峨小野の行幸の御供にさふらひ給ひ北山の奥にいれたち山ふかく入給ふ所にむかし父母の加茂まうでの時さわきの給ひしなたほし出なき御かけまさ云々さ忠雅の思ひまさひ給ふさまないへるにてはやくうせ給ひしな知るへし

中將　太政大臣のはらから兼雅京極の上の許にさゝまり給ひし時たつれまさひ給へること俊蔭巻にみゆ國譲巻に宰相かけ給ふよしみゆ

后宮權頭　兼雅御なちの中將の子后宮權頭かけ給ふよし國譲巻にみゆ

忠雅　太郎君俊蔭巻年二十はかり右兵衛佐とみゆまた右大臣のよしみゆ初秋巻右大臣從一位藤原朝臣たゝまさといへり田鶴群鳥巻に左大臣になり給ふ國譲巻に太政大臣になり給ふ御年四十九はかりになり給ふなるへし

清雅　太郎君のよし藤原君巻にみゆ梅花笠巻に左衛門督きよまさとみゆ田鶴群鳥巻に大納言になり給ふ

太郎君　母正頼六君年五歳になり給ふよし藏開巻にみゆ

太君　母おなし年みつになり給ふよし藏開巻にみゆ

わか君　母おなし國譲巻にうまれ給ふよしいへり藏開巻にまたはらみ給ふよしみえしはこのわか君なるへし

忠俊　二郎君右衛門督藤原のたゝさしさ藤原君巻にみゆ祭使巻に藤宰相さいへり

少將　三郎君四位樓上巻に藤宰相の御弟の四位の少將さみゆ忠俊さひさつ御はらなるへし

侍従　たとゝのしゝうと樓上巻にみゆ正頼八君の御はらのこのかみなるへし國譲巻に十一歳のよしみえたれはこゝにては十六歳はかりなるへきか猶可考忠俊さはこゝにらいさまないはんさてたゝの侍従さはいへるこさそかし

大君　今上の麗景殿女御忠雅の大君年二十はかりのよしあてみや巻にみゆ

中君　朱雀院の四のみこ帥宮北方年十六御子ひさりおはすよし田鶴群鳥巻にみゆ大君さはこさはらのよしいへり

忠雅北方正頼八君の御はらの君たち四所十一なるを兄にてよつ五つなるおはしなゝつに女君をそちゝはゝいみしうかなしうし給ふ女はそれかきりなりさ國譲巻にみえたれさ侍従君の餘は可考ことなけれははふきぬかし

二郎君　誰さもみえす

三郎君　誰さもみえす

兼雅　四郎君わかこ君さいへり年十五の時御父太政大臣の御供にて加茂社に詣て給へりしかへるさ俊蔭か女に思ひつき給ひ則其夜かたらひつき給ふ父おさゝの愛子なるよし俊蔭巻にみゆまたわかこ君は右大將になり給ふさみゆ藤原君巻に四十はかりさみえたれさ是は大凡ことにて此とき三十六はかりになり給ふへし初秋巻に三位守大納言兼行右兵衛大将春宮大夫藤原かねまささみゆ御子の仲忠大將

に任し給ふさ左にうつり給ふ藏開巻に従二位に加階し給ふ年四十二さみゆ國譲巻に右大臣になり給ふ年四十四になり給ふなるへし

仲忠　太郎君母京極上年五歳にてみやこにすみわひ給ひ御母さゝもに北山のうつほにかくれすみ給ふこさ八年十三歳の時みかさ北野に御幸し給ふ御供に御父兼雅さふらひ給ひしか京極上の琴ひき給ふ聲をたつねてうつほに至り給ひこさゝひかはしみ御子なるこさをおもほしあはして三日はかりありてまたきたらせ給ひ仲忠母子をさもなひみやこにかへり給ふ十六さいふ年の二月にかうふり給ひなかたゝさ名つき給ひ殿上をゆるされ給ふ年十八にて侍従になり給ふよし俊蔭巻にみゆ吹上巻に正四位左近中将さいへりまた頭中将さみゆ菊宴巻に宰相左近中将さいへり田鶴群鳥巻に八月朱雀院の女一宮を給ふまた中納言にて左衛門督かけぬ検非違使別当をかぬるとみゆ蔵開巻に右近衛大将を兼給ふ國譲巻に大納言になり給ふまた二位に加階し按察使をかけ給ふ年三十四はかりなり給ふなるへし

大君　母一條宮さかの院の女三宮年十八のよしあて宮巻にみゆ梨壺の女御さいへるよし藏開巻にいへり

二郎君　母源宰相上年八九歳になり給ふよし樓上巻にみゆまた琵琶をよく彈給ふよしいへり

大君　朱雀院后宮あて宮巻に春宮（今上）の御母の后宮は大殿（忠雅）右大將兼雅なさの御妹のよしみゆ中宮さもいへり

女君　母朱雀院女一宮いぬ宮さいふ十月なかの十日に生れ給ふよし藏開巻にみゆ樓上巻に來年はなゝつになり給ふさいへり

わか君　母おなし二月廿三日に生れ給ふこさ國譲巻にみえし

太政大臣御族北方

太政大臣北方　誰さもみえす

藏人　二郎君なるへし桃花殿女御のはらからのよしあて宮巻にみゆ

式部丞　三郎君なるへし桃花殿女御のはらからのよしあて宮巻にいへり

大君

中君　師純北方年廿六御子はをのこゝのかきり五人をはすよし田鶴群鳥巻にみゆ

三君　今上の桃花殿女御年十六はかりのよしあて宮巻にみゆ

正頴御族北方

正頴北方　誰ともみえす元祐等の母

正頴北方　正頼十二君八月廿八日まいり給ふこと田鶴群鳥巻にみゆ

清原某　式部太輔左大辨大納言のよし俊蔭巻にみゆ年八十にてうせしよしいへり

俊蔭　年十二にてかうふり給はり進士となり對策いみしかりしかは式部丞になさる年十六にて遣唐使になされ海中にて暴風に舟をはなたれ波斯國に流れつきとゝまり居ること廿三年にて年卅九にてみやこにかへりまゐる父うせて三年母うせて五年になりぬ則式部少輔になさる殿上をゆるされ春宮の學士となれり又式部太輔にて左大辨かけぬのち位職をかへし奉る三條京極に家造りてすめりまた治部卿かけたる宰相になさる京極上年十五の二月に北方の源氏うせたるをいたみてをなしき三月はかりにうせぬるよし俊蔭巻にみゆ年五十三四歳になり給ふへし樓上巻に三位の中納言を贈らるゝよしいへり

女君　母一世源氏俊蔭かうせし年の八月中の十日に太政大臣の加茂社に詣て給ふさき御子の四郎君兼雅またわかこ君といへりしときついちのくつれに立居給ひしたみこゝあ給ひ則其花かたらひつき給ひ行すゑかけてちきり給ふはらみ給ふよしいへり年十五のさきなりし九月はかりよりけからひのものみ給はぬよしみゆ十六歳の六月六日に仲忠をうみ給ふ仲忠とゝもにみやこにすみわひ給ひ北山のうつほにかくれ給ひしは年廿はかりの頃なるへし八年ありて兼雅にゆくりなくたつね出され給ひ仲忠とゝもにみやこに出給ひ三條大路より北堀川よりは西なる家にすみ給ふさき年三十にたらぬ限といへるは廿八歳になり給へは也琴の手は父の俊蔭にまさりたりとゝもに俊蔭巻にみゆ御秋巻に内にて琴彈給ひし賞に内侍督なさる藏開巻に三位になり給ふ國譲巻に正二位に加階し給ふ三條の北方とも京極上ともいへり

俊蔭御族北方

清原某北方　さかの院の御妹俊蔭の母のみこはむかし心高かりける姫手かき歌よみなりさかの院の御いもうと女御はらのよし藏開巻にみゆ樓上巻に俊蔭朝臣の母の源氏は御息所はゝのまたいとこなりといへり俊蔭巻にて思ふに俊蔭の三十五歳のときうせ給ひしなるへし

俊蔭北方　一世源氏しけのゝ王女心たましひすくれ給へるよし俊蔭巻にみゆ樓上巻に俊蔭はしけのゝ王のむこなるよしいへりまたさかの院の御辭にしけのゝ王衛留の朝臣のないはらはわかなはにいまそかりし宮なりさみゆ俊蔭巻に京極上十五歳の二月に俄にうせ給ふよしいへり

資仲　源　左大臣

太郎君　誰ともみえす

仲頼　左近少將源なかよりは左大臣すけなかの二郎なりとさかの院巻にみゆ菊宴巻にくら人少將とみゆあて宮巻にあて宮の巻にあて宮の春宮に參入り給ひし後思ひわひて則法師に水尾の山にこもれるよしいへり國

眞菅族北方

眞菅北方　つくしにてうせぬるよし藤原君巻にみゆ

眞政北方　詳ともみえず

巻の序のみたれしことは前にもほのめかし出しことくやよ子も道麻呂もいはれたれともと巻々のうちのみたれしをよくも考へみずて論へるさへあるにならひの巻々をさためみされはにやいはれしことのかなへりとはみえなからひかこともたちましれり道麻呂は藤原君忠こその二巻のみをならひとし猪苗代某は梅花笠祭菊宴の三巻をならひとせられたりともに、ならひの巻なから其序られしそいたくたかひたれはかなはす河海抄の空蟬巻にもこのものかたりのならひことをいはれて古き傳のさまなからうへなひかたけれはこたひ巻々をみかはしみさためてしにて年立をしるしたれとなほそかあかしともなりなんかきりをこゝにしるしたれは年立にみかはしなはかたみにおもひうることありてそのやく多かるへしこゝにしるしたるは考へあらためしふみもてなせしものなれは今本のまゝにたつねたらんにはまとひぬへけれは終に出したる異本の考によりて今本の誤れることは知りぬへし

第一俊蔭巻　上下の序今本のことし

この巻の終はさかの院巻の始にかゝれる也其故はこの巻に年かはりて八月に右大將相撲のかへりあるしし給ふ云々とみえしをとりてさかの院巻の始にかくて右大將とのにかへりあるしゝ給ふそれは例のことなんといひしはこの巻のつゝきなるをあかさんとてかくかきしものそまたこの巻に仲忠の辭にまことみやにもことなる氏族もなかめり君をふかき契になしてかたらひ聞えよとなんの給はせし仲純にもしか仰せられて源少將兵衛佐にはらからの契なしたり君達もさる契なせとなん仰せられし仲忠いとうれしきなとかたみにの給ひて云々さかの院巻に仲忠の侍従はつねにこのとのにきつゝ云々源侍従の君をはらからと契てかたらふといへるもこの巻にみえしをつきいるにてこそあれさてこの巻にみえたる俊蔭の族のことともは楼上巻にみえたり

第二忠こそ巻　俊蔭巻並一

この巻は忠君阿闍梨の御うへをむねとせし巻也初この巻を俊蔭巻のならひの一にせしことは梅花笠巻に忠こそ法師春日にて正頼大将にゆくりなく逢給ひしときみづからの御うへをいへる辭に心うく侍りしかはねんしあまりてなん十四歳にてなんまかりこもりし今年二十年になん侍りぬる云々もて逆に年立をかぞふるに梅花笠巻は忠こそ法師は三十三歳なるへし仲忠の廿三歳の二月廿日に正頼大將の春日に詣て給ひしときたれは忠こその十四歳の頃を思ふに仲忠の三歳の時にあたりぬ俊蔭うせてより四年の時なれは俊蔭巻の並の一とはさため し道麻呂の此巻を俊蔭巻の並の二とせられしはこの巻の終に忠こその御父千蔭のうせ給ひしことをいひなから藤原君巻の始に右大臣ちかけのみえたれはそになつみて藤原君巻のつきとはせられしなるへし藤原君巻にちかけの御うへのみえたるは正頼大將に女一宮を給はせしときのむかしをかたるにこしちはあて宮の十二歳のときのことなれはこゝたの年をへたてしことそかしかゝるたくひのことは源氏の物語にも例あることそ猶其あかしをいはんに俊蔭巻に兼雅の京極上仲忠をうつほよりむかへ給ふ時の辭にむかしちかけのおとゝのたゝひとり子をまゝちゝにはかられていまはおとにも聞えすとあるもて思ふへし此時仲忠十三歳なり給へは忠こその法師にならてはやく十年はかりになりたれはむかしといはんにつきなからすかゝることをおきてこの巻をならひの二とせしひかことを知るへし

頭注書入云忠こそ巻の始にかくてまたさかの御時にとあるをもて俊蔭巻の終に朱雀院の御時なるを思ふへしされはこそこの巻にたちかへり前をいふなれはかくて又とはかけることそかし

第三藤原君巻　俊蔭巻並二

この巻は多くの年をいへるさまなれと前にもいへりし如くむかしをかたるにてあて宮は御年十二と聞ける二月に御裳奉るほともなくおとなになり出たまふ云々よりつくる年の七月までのことをいへるにて俊蔭巻にみえたる兼雅の八月に相撲のかへりあるししたまふ年の前年の七月迄のことそかくさためされはこの巻にみえし正頼の御君たちの齢

のほと丶田鶴群鳥巻におなし嶺君たちの齢のくははり給ひしをいひしにあはねは也この巻の二月とみえしは仲忠廿一歳の年のことなれは忠こそ巻よりは十七年はかりへたゝれるなるへし

第四嵯峨院巻　今本の藏開巻下にて今本のさかの院巻は國讓巻の下也道麿もしかいへり

この巻は俊蔭巻のつゝきなることは前にいへるかことしさて俊蔭巻にみえし兼雅の相撲のかへりあるしゝ給ひし年の八月はかりよりつくる年の二月の頃までをしるして相撲のかへりあるしありし年の春夏のことをは俊蔭巻にもこの巻にもいはさるは並の巻にいへれはなるへし

第五梅花笠巻　嵯峨院巻並一

この巻は兼雅の相撲のかへりあるしし給ふ年とひとつ年にてさかの院巻は八月はかりよりいひ出しにこれはおなし年の二月よりいひ始めたれはさかの院巻の前におくへく思ふへけれとしからすそは前にもいへることくさかの院のまきは俊蔭巻の終につくへきさまをあかく知らせんとて巻の始に兼雅のかへりあるしのことをほのめかし出たれさるからに此巻をはならひの一とはせしそかしかことさためされは此巻と吹上巻とにつゝきたることの多くてよみときかたけれは也猶つきにいへるをみて知るへし

第六吹上巻　嵯峨院巻並二今本の下は上巻にて今本の上なは下巻とすへし

この巻も兼雅の相撲のかへりあるしし給ふ年とおなし年にて梅花笠巻の終につゝきたること也梅花笠巻の終には三月ほとゝありなからこれには二月廿九日に仲忠等の人々吹上のはまに出立給ふことをいへるをもてたかへるとしも思ふへけれとしからず梅花笠巻はあて宮の御うへにかゝれることをいひつゝけしことなれはそのことをまついひつゝけて巻をとぢめさてこれにはたちかへりてすゝしの生立給ふさまより種松かになくかしつけることなといひすゝしのさえあそひのことにかしこきことなとほのめかしいてゝみやこなる人々もそれに愛てくたり給へるさまをつくり出しにてけにかくせされはみやこなる人々のかしてにくたり給ふよしのなけれはなりさてこの巻と梅花笠巻とひとつ年なりといへるは此巻に一日春日にてこまなくたへゑひにけるなこりになほくるしう侍れはな

んと行正かいへるは梅花笠巻のかすか詣のことを云るなりこの春日まうては二月廿日にて廿三日にみやこにかへり給ひて則仲忠等の人々は同き廿九日にまた吹上のはまに出立給ひしにていとほとちかきことなり又吹上の家にてすゝし仲忠等の人々むつものかたりしたまふ時此かすかにてあそはしゝこかの聲にこそ仲忠多くなみたはおとしてしとあるも春日まうてのときあて宮の琴弾き給ひしとをこたり出給ひしことにて仲忠の聞思ひしさまは梅花笠巻にみえしことそこの巻の上は二月より四月の始までをしるし下の巻は八月より十月の始までにて四月より七月迄のことをははふきたりそのはふきしを祭使巻にしるせしそかしこの巻々の頃はいとこと多くてかれとこれといりみたるへけれはかくまさ〳〵にことを別てよみときやすくせしを後に序を誤りたるから知りかたきことゝはなりしそいとふひんなれ猶祭使巻にもことわりいふへけれと年立の圖をみてそか大旨をは知るへしさてこの巻下もひとつ年の八月よりにて祭使巻の終につゝくへき故はさかの院の吹上のはまに御幸のときあたりちかき社にて忠こそ法師のときやうし給ふ聲をきこしめしてめしよせて御らんし給ふ所にみかとこのおこなひ人をほの〳〵御らんせしやうにおほさる大將正頼なりなかたゝなとはかすかにてみ給ひしかはそれと思へとはちかしこまりしをおほしてたゝいまもいみしう思ひつるをみればしらぬやうにてさふらひ給ふみかとむかしより御らんしたる人をおほし出るに忠こそをおほし出てそれなりけりとおほしさため云々これも春日まうてのとき正頼仲忠等の人々はことひかはし給ひたれはこそこゝにはたゝ春日にてみ給ひしとはかなくいひてそのことをしたにふくみたるなり

頭註書入云梅花笠巻に三月ほとゝいひてさてこの巻に二月のことをいへれはいりほかなるさまなれとこれは此物語のてふりにてあて宮巻には二年にて後のことをいひなから初秋巻にたちかへりあて宮巻の二月中の十日に始の庚申ありし年の六月はかりよりいへるなとやうのことあるにてうたかふましきなり

第七祭使巻 [illegible]

この巻は前にもいひしごとく兼雅の相撲のかへりあるし給ひし年にひとつ年にて吹上巻の上下の間におきてみるへきものなりさはこの巻を吹上巻の中巻ともすへきことなるをこと名をいひこと巻とせしはいかになど思ふへけれど年にしたかひ月並によりてしるしつゝくるは日次の記などのむね〱しきふみのことにて物語ふみのてふりにあらぬことなり物語ふみのさまはまついふへきことをはますくにいひつゝけさてこと事のいふへきをはたちかへり前なることをも其よしもなくいひ出るなるやうのことのしどけなきうちにもそのひとつ年のことなるをはそれとなくほのめかし出てそれなりとみる人の心に知るへくかまへぬるか物語ふみにてこのことは此物語のみにかきれることにはあらす今の俗の談ことにもかれもこれもひとつにかたりてはみたりかはしにてきゝわけかたけれはまついうちいふへきことをひとつゝにかたりてのちいまいひしうちのかゝりしときしかくのことありしなといへは聞く人も心をゑやすきをもて思ふへしもと吹上巻は吹上君すゝしのことをむねとかたることなれはそにあつからぬことをははふきてこの巻にいへることそかし其故は此巻に紀の國の吹上の君の御許よりいかてと思ひけるを人々さへかたりきかせ給へれは云々さあるはすゝしより始てあて宮の御許に御ふみまいりし時のことにて吹上巻の上にて仲忠等の人々すゝしと御むつものかたりのときあて宮の御うへをかたり出給ふことありしかはこれまでにもかたりつたへをも聞もし給ふへけれと其人からの仲忠とひとしからぬものゝみにてこそありけめされはこそいかてきいふほとにはあらしかしなと思ひくたし給ひしをわれとひとしきさまなる仲忠等の人々さへかたり聞えたれはといふことなりこの巻に二所三所まてすゝしの御名をいみてきのくに吹上の君としるせしも吹上巻の上につゝくへきの證なれ吹上巻の下にてさかの院の吹上のはまに御幸し給ひしとき始て殿上をゆるされ源氏を給ひしをもすゝしと給ひたれはこの巻はそのことより前のことなれはたゝに吹上の君といふなりまた吹上巻の下をこの巻のつきなるゆゑはこの吹上の御幸のときとうゑい季房かしこ

きものと聞しめして吹上の御幸の御供にさふらふへき由仰せ給ふと吹上巻の下にみえしはこの巻に正頼の家にて季房のさえのほとを始てあらはし聞えたれはこのよしを正頼よりものゝ序に奏されしとありしなるへしさならさらんには季房かゝ（本ノマヽ）こきのこときこしめしいふへしやは吹上巻の下をこの巻よりなかる事（本ノマヽ）とをは正頼の家にて季房のさえのほとあらはせしを正頼等の人々愛給ふはいとおそきことゝいふへしされはこそ吹上巻の下にて内のみかと神泉の紅葉賀し給ふとき季房に試の題給はりて進士となれることの始終を調ひ命たることなるをや

頭註書入云吹上巻は吹上君すゝしの御うへにかゝれることをむねとせしことなれは上巻に仲忠等の吹上のはまにまゐ（か）りてくさ〳〵のことありしをいひ下巻にさかの院の吹上のはまに御幸ありしも仲忠等かしこに至りしさまを聞しめしていてたゝせ給ひしことなれはことくさをましへぬともいふへし猶あて宮巻にあて宮の御さかえをいはんにて田鶴群鳥巻にかゝれる年までをいへるとはなしたくひそかし

第八菊宴巻 嵯峨院巻並同

この巻は兼雅の相撲のかへりあるし給ひし年とひとつ年にて吹上巻の終につゝきたること也吹上巻の終は十月の始はかりのほとにてことをとちめこれは十二月朔日に春宮の残菊宴し給ふよりいへり吹上巻につゝくへき故はこの神泉の御幸につかさのおほいすけすゝしおなしすけ仲忠心とゝめて琴つかうまつりしに仲忠の朝臣に一の内親王すゝしの朝臣に正頼か九にあたる女にふへきよしせんしくたりにしとなん侍る云々正頼の春宮に奏給ふこと此巻にみえたるをもて思ふへし猶いははさかの院巻に年かへりて云々季房大内記春宮学士になさるゝこととみえしを此巻にとうゐいの大内記とあるそ並の巻とせる證をもかねぬへし此巻にかくて年こえて云々正月十八日に正頼か家にてのり弓のかへりあるしゝ給ふことさかの大后宮に正月廿七日の乙ねに六十の御賀まゐらする事なとこの巻にもさかの院巻にもかたみにいへるにてならひの巻なることうたかひなきことなるをや實忠の北方三

條宮すさめられ給ふてことをさかの院巻にいひてこの巻に志賀の山本の家にうつりすみ給ふことをいひゆくりなく其家に實忠仲忠等の紅葉をりとらんとて立より給ひしさまなといへるにてもいとしるきことそ扨この巻は吹上巻の終の年の十一月よりつくる年の秋までのことをいへり其故はこの巻に去年吹上のはまなく〳〵にてこそは人つかうまつらぬなとなくつかうまつるめりしかそのをりつかうまつらすなりかし云々仲頼かいへるは吹上のはまの行幸の時のことなれは其明年なることを知るへしさかの院巻はこの正月廿七日の大后宮の御賀のはるまてにて夏秋のことはしるしいてず猶年立をみて知るへし

第九あて宮巻　嵯峨院巻並五

此巻はさかの大后宮の六十の御賀し給ひし年にひとつ年の十月よりつくる年をいひまたの年の二三月の頃までにてなめては三年のことをいひてさかの院巻の終菊宴巻の終等につゝける巻にて二月なかの十日に始の庚申いてきたる年は初秋巻にかゝれることそ二の宮の生れ給ふ年は田鶴群鳥巻の年の春のことなりと知るへしかくゆくすゑなることを前にいへるもすてにいへりしごとく例の物語のてふりにてあて宮のときめき給ふさまをいふことにて御さかえのむねとせることはみ子のあまたいてき給ふよりうへのことなければかくいひつゝけて其御さかえをみせたるもの也あて宮の春宮に參入給ふへきをうち〳〵に定め給ひしことは菊宴巻に仁壽殿女御と御母大宮との御ものかたりにもしるきことにてけそう人のかぎり心まとはし給ふことなともそれとはいひしらさねとしたにふりみたるはいとしるくみゆることなり猶年紀かゝれるさまを一初秋巻田鶴群鳥巻にもいふへけれと年立をみかはしてうまく知るへし

第十初秋巻

この巻はさかの院巻につゝきたる巻にて前にもいへりしことくあて宮巻の二月なかの十日に始の庚申いてきたる年とひとつ年の六月より八月までをいへる也あて宮巻には二月より三月までをいひ四月より九月までをはゝふきて十月よりいひて今上の一宮の生れ給ふことをいひたれは其はふける月

をこの巻にいへることなりさてこの巻を二月のなかの十日に始の庚申いてきたる年のことゝいへる故は正頼の家に兼雅のおはし給ひて御物語聞えかはし給ふとて右大将（兼雅なり）とのこゝに參入りこしはむかしこそはつかしう思ふ給へしかはいまは心やすかりけりあるしのおとゝ（正頼なり）今は御うしろみなすへき人やは侍らんしかおほすほと聞え給ふ云々かう兼雅のゝ給ふにて春宮にあて宮參入り給ひしのちなるを思ふへし兼雅もあて宮のけそう人のうちなりしにはむかしこそはつかしかりけりとの給ふなりほとちかきことをもむかしといへるは古の例にて物語ふみにはいと多きことそかし猶證とすへきことこの巻に多くみえたれはよみみてみつから知るへし

第十一田鶴群鳥巻

この巻は初秋巻につゝきて其明る年の六月はかりより八月までをいひたりあて宮巻の今上の二宮の生れ給ふといひし年とひとつ年そかし初秋巻もこの巻もともに六月はかりよりいひそめて八月までにてことをとちめたれはひとつ年にやと思ふへけれとしからすかゝる例はこの物語にはいと多きことそかし國讓巻と樓上巻とはともに二月はかりよりいひ出されとかれはそのたかひめいとしるけれとこの巻と初秋巻とはけちめさたかならねはよくみさためすは其たかひめを知らるましけれと猶下にいへる姫君たちの齢もてしよく知るゝことそさてこの巻と藤原君巻とは六年へたゝりさかの院巻には四年へたたること也其故はこの巻に正頼の姫君たちの齢のほとあるはすゝし仲忠等の齢なといへるにて思ふへし其齢のほとをは系圖にしるしたれはそをみかはし知るへしまたこの巻の始に内のみかとの御傳になほすゝしなかたゝかろくはいかにそやなとすゝしか本意のたかひにたる心ちのする大将（正頼なり）今この八月はかりにとなん思ふ給へるすゝしの朝臣はかりはしか思ふ給へしを春宮よりせんしなかりし前より幸れと仰せられしをかゝるせんしなんあると聞しめしてなほ參入らせよそのよしは奏せんと仰せられしかはなん參入せ侍りしをそのゝはりにと思ふ給へるものゝちいさく侍るほとにいましておくたり侍る云々あるは内のみか

と神泉にて紅葉賀し給ふ時すゝし仲忠箏琴になくつかうまつりしろくのことにて春宮よりみけしき給はりしははやく藤原君巻にみえしことこそみくちつから正頼に聞え給ひしは菊宴巻にみえたることとなりこをふくみて正頼の奏し給ひしことそかしこのつゝきに正頼と大宮との御物語にこなたのも（大宮なり）あなたのも（おほぬとのゝ上なり）ことによきほとになりにたるをといへるにても年のたちたるを知るへきことそかし

第十二藏開巻（上中今本のこさし今本の下は嵯峨院巻にて國譲巻下とせし今本そこの巻の下さかし）

この巻は田鶴群鳥巻のつゝきにて其つくる年の十一月のほとよりいひてまたの年をいひて明る年の二月まてのことをいへりなめて三年のことをいへり其故はこの巻下に今上のはしめの宮はわか宮と聞ゆ御年五つほと云々弟の宮は四つといへるは今上の一宮二宮の御ことにてこの御齢のこともてこの巻の三年のことなるを思ふへしこの宮たちをあて宮のうみ給ひしみこのことならすとしもうたかふ人もあめれは（そか）其故をもいふへしこのみやたちの御齢をかなへ出さる前にふちつほ（あて宮なり）いみしき人なめりかしたゝ今の后にこそは坊かねをひとりなるにもあらすふたりまて玉をはかきてもたまへる云々あるにて思ふへし猶しるしくすへきこと多かれはこの巻にみて知るへきことなり

第十三國譲巻（今本の中巻は上巻にて今本の上を中の巻とすへし今本の嵯峨院巻そのこらすこの巻の下の巻なれ今本の下は藏開巻の下なること前にいへるかことし）

この巻の始は藏開巻下の終の年とひとつ年にて藏開巻下は二月まてのことをいひとちめしにこの巻にまた二月よりいひそめしかはこと年のことなれとしからすことは初秋巻と田鶴群鳥巻とのけちめのことし扨この巻は藏開巻の下巻にひとつ年の二月よりいひ始てつくる年の三月迄をいへりなめて二年のことそかしさてこの巻と樓上巻との間に二年はかりのことをはふきたり其故は犬みやの齢のほとを樓上巻にいへるにかなはさるからこの巻の始と藏開巻下の終とはひとつ年にはあらさらんなとうたかひ思ふもあるへけれとまたくしからす其故はこの巻に去年の冬人に聞せて御前にて御ふみつかうまつり給ひきとあるは仲忠の内のみかとの御前にて外祖父俊蔭の文集にみ給ひしことに

て其さまは藏開卷の中卷にみえしことそ又仲忠の辭に去年のしはすに御ふみつかうまつりしろくになんとあるは忠こそ阿闍梨に貞信公の御石帶を朱雀院より給はりしみせ給ふ時のことはにてこの去年のしはすに御ふみつかうまつりしとの給ふも外祖父俊蔭集にみ玉ひしことそ貞信公の御帶給ふことも藏開卷にみえしことそかし藏開卷下卷にて年かはりてけれは云々いへるとこの卷の始の年はひとつ年なれはこそみかとの御前にて御ふみつかうまつり給ひしを去年とはの給へり藏開卷下とことと年ならんにはなにても去年とはいふへきことをや猶其證をいはは藤壺女御梨壺女御なとのはらみ給ふよしを藏開卷の下卷にほのめかし出しかみなこの年の始にて生れ給ふにても藏開卷下とひとつ年なるを知るへし

第十四 闕卷

この卷に二年のほとあるへきことは前にもほのめかし出しことくまた年立の始にも其ことのさまをあら／＼にいへれはむくみて知るへし猶委にはうつほの物語讀例にいひたれはこゝにはいはすかし

第十五樓上卷 今本の下を上卷とし今本の上を下卷とはすへし

この卷と國讓卷の間に二年のほとをしるせし卷のうせたることは前にいへるかことしさてその二年のほと過きたる年の春よりこの卷はいひ出しにて其故はこの卷に仲忠のことはにいぬ宮をおろそかにおほしたるにこそ侍めれ云々いかさまにせましと思ひ侍るらいねんは七つになりたまふといへるにて思ふへし琴なと彈給ふさま仲忠の京極の家にみかとの御幸し給ひしとき朱雀院の几帳のかたひら引あけてみ給ふ所なとをみてもけに七つはかりのさまとは聞ゆれはそかしなめてはいぬ宮の六歳の春のほとより七歳の八月十五日嵯峨院朱雀院の兩院后宮たちみこたち大臣達諸供奉して仲忠の京極の家に行幸し給ひてくさ／＼の御遊のことをつくしてのちいぬ宮のうゐ琴をきゝ給ひ愛給ふことをいひさてこの御幸の勸賞に仲忠の外祖父俊蔭に三位の中納言を贈らるゝことをいひて卷をとちめたるさまもけに全部のをはりとそみゆるものそ

宇津保物語玉松二之巻

こゝにしるせしは己が年頃みたるこの物語の異本ともに摺本をよみあはし摺本のわろきところ或は異巻のみたれいりたるもさなからをなしことのまたことゝ巻に出たるなとのことをも異本にはあやまらてありしをよしと思ふかぎりをしるしぬさてかくしるしたるも己かみし二種三種の本のかきりにこそあれなほあまたのふみともつとへて考へ合せたらましかはまたよきこともありぬへけれとそれはたかたきわさなれはさてやみぬ又いつれの本も同くあしゝとみゆることもなきにはあらねとそれは出さす又年月のたかひしはてたひ年立をかける序にかれとこれと考へてけに誤なりとしるくみゆるをはこと〳〵く改めしかはそれをもしるしおきぬをおいゐはわなとやうのかむなのたかひしもいと多く彫工のみたりにほりたかへしと思ふことなとをも其まゝにさしおきたれはいふかしみ思ふことなかれかゝるたくひのことは心とゝめて思はんにはいと心をえやすきことなれは也一の巻の始にもいへりしこともあれはかしこをもみかはしてよく思ふへしまた巻々の某丁の左右としるせしも摺本にていへるなりつき〳〵傍にちいさくかきしは摺本のまゝなれはそをみて其よきあしきをみかはしなんたよりにとせしことそかし

第一俊蔭巻

清原の大納言ありけり右一父か高麗人にあふこときちゝをもときてこまうとゝふみを同かく生のさえあるをのことも手まとひをして左一日たかく題を給ひてかたかたとはるとしかけ問に同ひたひをつとへてちの、なみたを左二三人の人ならひ居て右三日本の國王の使右四おなしきかはをしきてすゑつ同この三人の人只きむをのみひく同はるかなるおとのひゝきは同文を誦して左四ひゝきかよへりその時としかけ思ふほと同またせかいなきにことのねに同いさましきこゝろして同からうして其山にいたりて右五きりの木をたふして同頭のかみをみれはつるきをたてたるかことしおもて、をみれははむらもゆることし足手をみれは同木をきりこなすとしかけ我身は此山に右五なむちはなむその人そとしかけこたふ日本の國王の使清原のとしかけ

この木きる音をたつぬること三年になりぬけふをも
てなんこの山をたつねえたるといふ左五けたるのゝ
はけしきなかをわけいつるときはほのほあつく左六あ
くをふくめるとく地に右七ちゝはゝかてをわかれしひ
より同むかしのをかしのふかきにより同もとの國よ
りこのやまをたつぬるおもひの心はへは左七一生ひと
り子也かへりみのあつく同おもひのあさきにあひむ
かへんとの給ひき同あたの風おほいなるなみにあひ
ておほくのともからを同このつみをまぬかれむため
に同其むくひとなさん右八天女くたり音聲樂をして同
年月なておほしたてつる左八あしき身まぬかれとてま
もりつくれるを同おのか一分のとくなしなにゝより
てかなむちにあたへんといひて同たゝ今はまむとす
る同なゝたひふしをかみあなたふと右九この木の上な
か下上中のしなをは大福徳の木なり一寸をもちてむ
なしき同たから誦いつへき木也同なく山ひとつに左九
ことの音の有かきり同こともをならへおきて同こ
ゝろみるに春の日右十このめけふりてはなさかりに同
ことのねをかきいてゝ聲ふりたてゝ同かの山の人の

まへにてはかりしらへて右十一天女の給ふに同虎狼
ひと山さわく所ありきさい出さて左十一七の山になゝの
人有て同かよひたまふ所よりか日の木のひとなれと
右十一つし風れいのことゝもを右十一あるしは哀かりて
三人つれて同はなのうへには孔雀つれて左十二らみち
の露を右十三おやの御あたりのからはしきに左十三たい
めんするそとて同いさゝかなるをかし有て同この世
界にむまれきて七人のともからおなし所に同うけ給
はる也と中に右十四あそひ人らいさゝ同あそひ給ふ時
にあそひ人ら同いまあさましかりししんねんのむく
ひに左十四しかあれは輪廻しつる一人かはらに八生や
とり千かはらにおのく八生やとるへし其や
とるへき母一人もひとのみを同むかし大寶はむなと
いひし同仙人のせしことは同こくにつかれし時右十五
こくを施して同三代の孫にうへし左十五そのくわほうゆ
たか同七人の人音聲樂してて孔雀のわたしたる川同か
へるとての給ふやう日の木まて右十六ほしけれとも山
くちを同いま一をはやともり風同まさもてきておろ
し左十六そのときさしかけこのしら木のことを同この

ことを一つ〻たてまつるに同としかけをめしてここのよしを右十七いさまをゆるし給はす同日の本へかへりきたれり同うるせかりしもの〻左十七殿上ゆるされて同としかけにあつくついてのこさず同むこにせむ〳〵とよへとも右十八ち〻か思ふやういまは同いま十なるをりうかく風をは同ほそを風をはわかにて左十八内へまいり同花その風をは同と〻もをこ〻ろみ給ふにおとろ〳〵しき聲いてくおとろき給ひての給はくこのとともをは同いかてと〻のへたるそと左十八せた風を給はりて左十九たい曲一をつかうまつりにひ〻きたかうておと〻のうへの同おとろき給ひての給ふ同うちよせらる同からうしてかへり左廿あまりありといへとも同琴をならはす同一わたりに曲一を習ひて同ち〻にまさりて右廿一あたりもひかりか〻やきて同まはゆきまてみゆ同御門東宮父母にめし同天道にまかせたてまつり同山かつたみのめともなれ同たちなみたれと出入もせす左廿一十五歳になる年の二月に母にはかに同ほとふれはまつしくて右廿二いのちの〻ちにいましの同ゆめさら〳〵に左廿二よのたからとな

しさいはびあらは同わさはひかきりになりて同やさ〻もをこほち右廿三もてこぬも使やり左廿三はたりてこそもて同さはきにとりかくしてしかは同あかしくらすに同この幅のくはすれは同屏風几帳さるものはかりは同もの〻けうあり右廿四たまひかりか〻やくうなゐこの云々うなゐこはおほきおと〻の御四郎に右廿五花す〻きわれよふ人の左廿五花す〻きわかたもさ〻は同みやしろにまうてつき給ひて右廿六わかこ君かの家の萩の室同野らやふのと同またきも月のなとの給ひてすのこのはしにゐ給ひてか〻る住居し給ふはたれそ左廿六うちくらうなれは同あなおそろしをとの給へとも、ものの給はすおほろけにては右廿七あるは有ともおもはさらゐむ同まことにはかなくて哀なる左廿七すまひはなと同たれか御そうに同すまひし侍れはたちより左廿七たのもしけなれ同ちかくては今ひとへまさりて右廿八おほえたまはねと父母の同そめぬらめみたて左廿八まとにかくておはする同おや〻おはする同ところやあるあるらんま〻に同さは

れたれと聞えし右卅九　かたときも御まへならぬ右卅　こそ
と今なむ思ひし同あさちふにいまはこはれん同ねを
ふかみそのみちしはの同おろかなりとなおほしそ左卅
みる人のなこり有けもみえぬよをいかにしのふる同
人あまたしてこそありき給へたゝひとゝころ右卅一　あ
れか人にもあらぬ同かうかへの給ひて同みな人十人
二十人と左卅一　たち給へり兵衛佐同つかうまつりたり
し人々は右卅二　たゝまさらもいたつら人に同みな人酒
の氣ありて同み給へつれはしつむも同わかこ君みな
人の同したるはかりの心ちして同有つらんさらはこ
ゝにや左卅二　いつかゝるありきは同かくなんいとかた
けれは右卅三　たゝこの人のみ左卅三　たゝならすなりたま
ふ同いなつまのかけもよそには右卅四　たれかはこたえ
んわかこ君同おなしかはへの人をみしより左卅四　あふ
ことなきねのみ同なかき夜すからよろつの同むすひ
し人もおもひいてらる同子うむへきほとになりにて
右卅五　このつかふ嫗ものくはするとてまへに同御物か
たりやし給ひしいらへいさやちかき同はかなさよ嫗
なくなり左卅五　御身身さたになり給ひなは嫗おひかつ

ゝきてもつかふまつらむゝあかほとけの同たいらかに身
身となし給へ同念し給へと同子ともなと有けれは卅六
左ありやといへはいらへいかなる同なにゝまれあら
ん物を同せむかしといへは同たゝこれにて同おほく
になしてきぬぬのなとかひて右卅七　思ひまとひありく同
そのをりの事みなしいて同はゝにはをさ〳〵同おは
しまさとほこりありく左卅七　かゝらむとやは思ひし右卅八
嫗いらへあなさかなや同なおもほしそ同そのはりを
いとかしこく左卅八　行者こそ君の同さらにたゝすとそ同
おほなの丹波に右卅九　よきほとにすけておほなの同い
とはへるたゝそれに同さやはおもひしおはなわひ給
ふなかのことそうやうこそは左卅九　たからのわうそと
て同ありしをはおほならしなひ同ちはのまぬはなは
のめ右四十　なのませ給ひそ同みきゝつること同くるし
かるへきことは同かなしきものなりけりと同おほな
うせぬ同もののもくはす有をみていかてこれやしなは
んいみしうかなしと思ふ左四十　つりするもの魚を同
はりをかまへてつるにいとおかしけなるこのおはい
なゑ川つらに出てつれは同くはせなとしありくを四十

一おもとおはするといひて同あたゝかなるほとは同
左ふゆのさむくなるまゝにさもえなすまし同魚をとり
に四十二右なゝきそこほり同みつはかゝみのことく同そ
のときこの子いふやう同ないてそとてなく時に同い
てきたれりとりて同かへりくるをみるに四十二左いてゝ
はありくそ同かゝらさらんをりいてゝ同ありけとな
けゝはくるしうもあらす同魚は魚ともつれと同この
子ましして同この河にのみやは四十三右とりつゝこの子に
いふやうなにしに四十三右おもとに〳〵はを奉らんとて
といへは同このほりひろひ同いもくころをほり又こ
のみ四十三左このみのあり所もみえぬ同いみしうふる雪同
いもところやきてうして同すきの木のもとよりも
のを四十四右やのほとにあき同よりてみるに同まろか
参らする物に同母をもち奉れり同おやに参らするな
り四十四左くらうまかりかへりしほと同ほりいてゝもま
つまいらせむ同まち給ふらんもかなしう侍れはちか
くとおもふ給へて同みつからのうへにいへるときは思ふ給へ人のうへにいふに思ひ給ひさいへるそ物
語ふりの所也して吹むへし心ようなき所あらは四十五右この中にいた
つら同山のわうにせし奉る同ふたつの熊同そのときこ
の木の同はきゝよめてありけは四十五左ほかにいさ給へ
同ほとにつれ〳〵と同つかそはおやの御ために同こ
と思ふましてよきこと同心にはかたときにも四十六右
それもえさもあらす同参らせんまかりありく同いつ
ちへも〳〵いかさらむ同いまはゝもろともに同しる
へとたのむわれやなになる四十六左すまゝほしけに同子
にいふいまはいとまあめるを四十七右うかく風をは同
ほそを風をは四十七左このものゝねを同このみをもち子
ともゝ同春はおもしろきくさの花四十八右わかよのかき
りはいのち同ことの手母にもまさり母はちゝのてに
も同くたものはまさ〳〵四十八左とりけた物のいろをも
四十九右はゝの思ふやうわかおやは四十九左かきならさここそ
同ひきならすに父ぬしか七人の同をりかへしひきぬ
五十右ものゝおたなむ聞ゆ五十一右あはせたるやうにて五十一右せ
た風のひとつそうなるへし同れいのすさひありき同
御馬そひはかりにて五十一左ものゝふのゝこれるは同おほ
やけの御つかひの同たにゝおちいり同ものゝ音のひ
ゝき同しけりてもりのことみゆるなかに同この琴の

聲聞ゆかの峯をさして入給ふに同されはこそ聞えつ
れ五十二右わかきこさをもの給はする同かねまさらけたも
のに同かいの心なすやみ給へ同御馬をはしりうち入
給へは同もとよりのり給ひつれは同ひとりいれてこ
まりぬる五十三左やなくひおひたれは同いとおそろしう
てなほ同いみしきを丶いつ丶こえておはするに獣は
なほかひを同このことの音をたつねてうつほのある
同うつほの人はことを五十三右なほとはまほしくて同か
うたつねさはせ給ふ人もなきに五十三右たつねまゐりき
つるさて同山のおくにうとましき五十四右たつねたる心
はへは同所々におはしけれと五十四左みえぬをた丶あ
らんま丶に同物おほゆること侍りけるか五十五右人有さ
みて人の同としころこ丶に同あなるをきても同おも
ふ給へて同いかてかはさ丶よめんと同はらひあけて
五十五左けにこのねかひ侍りしことみて侍ると同加茂に
まうて給ひたりしかはみんとてはしにいてたりしに
なんちいてくへきにやおほえぬ同いとうきたる事な
れと五十六右申されたすへて同かなしき事にも有か
な同おほすかまたれいの同きよらなりほと十五六は

かり五十六左たふとき事なれ同けうのけたもの丶五十七右かた
へこそかくみゆるすも五十七右たえかたからめと思ふ給
へれは同くちをしきさまに五十七左ことはりのかれ所な
く同うちみ給ふほとにの給ふ同くもてにさして五十八右
さるともおとろきて同山のをひとつこえ給ふ同たつ
ねおはするにみつけて五十八左けたものはかひをふせた
る同御ともに侍らさる同おはするかくて五十九右おほく
の御召人まて同さわかしきなかに五十九左そこにむかへ
いてんと同むつましきかきりの人同すりかりきぬう
ちき同いへとことふりは六十一右へましはえしらしは丶
君同しらせ奉るといへと同あらかひ給ふとてなん我
そかもまうて同さわかれけるにかへりまゐり同御身
をはなち玉はす六十一左いと野ひやうに同おほつかなさ
をさしころ同おほつかなくから夢の六十二右思ふ給へし
ほとに云々たくひなき身と思ふ給へしか同人めまれな
る所をしおきたり六十二左おほつかなからす聞え侍らん
同いまさらにおもふ玉へ同年をかそふるに十三はか
りに同おとにも聞えすとなんいふなり六十三右かよひあ
りかむに同又あこもかくみおきて六十三左この御心さし
もむけになさしと六十四右ともかくもいはれす同いなみ

の給ふことも同女君のうへにつけて六十五右 三條の大路よりは北ほり川よりは西同くらうてみえねは同子もはかなきすいかむさうそく六十五左 くらきかたにいり給へは同あこはそこにねよねふたからむ同御くらいとおほかり六十六右 三十にすこしたらぬほとなり同子ははたさつにらいはす六十六左 こささえもさるへき同よこふえならはせ給ふ同今はここ所におはさねこ殿の六十六左 ふえこもいとさ同京にゐていて給ひし六十七右 殿上せさせ給ふうへも同うつくしみ給ふ同うへ大將にいつくなりし同いとゆうにては同しり給へさりしを同みいて侍るもの同心えてのち六十七左 ましらひせんと申しかは同いかにそは三代のてい同いみしきゆうそくなり同たれも／＼ならひ同たつねとひしかは同かくあからめもせさせ奉らぬ六十八左 まつはさせ給ふを同なとそやすからす同このなかた御門も春宮も同たう／＼にせねさ同すくれいてたれは六十九右 はしめたてまつりてほめ愛給ふ同五せちのかたち同うちふるまへるも同そうかする聲も同かの三代の年六十九左 つかうまつらねはらおさ同仰せことうけ給はりぬいとかしこ

しとせちに同こかの聲にしらへてやかてひくに同又かゝることを世には同なかたゝゐてまゐりて七十右 かのちゝの朝臣同すくれ給ひたゝ今世にたくひなく七十左 ものし給ふとき人も七十一右 ゐふのぬしたちのち同あやのうちきふたへうきねのはかま同なへての世のものゝやうにも七十一左 こゝは三條殿おとゝ北方ならひて同くに／＼のこさうよりこふきぬ同はからひさたむそめくさ同さまさまに聞えおさゐかみ給ふもあれとすへてたゝいまはこと人にもの聞えむとも同おほしくたゝす同その日になりて七十二右 まうけせさせ給ふ同うちしきしとねみな同おとゝ人々うちに同きても心にくき人の七十二左 御子くものきむたち同多の人ゐかにおはす七十二左 中將少將には七十三右 ほていてきぬのひき同あそはしぬふえとも同しなのゝぬのを同なかとりみつに七十三左 あかゝちはの花文れうの同あやかいねりひさかさね同さい相よりはしめて同はかまいろおされ七十四右 つかさのそうまては同物かつかぬなし同心ありやゐひて本性あらはし給へと同わすれはて侍らしかさ

いもせちなりしせんしのかしこきにからうして思ふ給へいてゝ七十四左心ちなむつかうまつるへきさきこゆるに七十五右すきものやなほつかうまつりて同たまはらむ同おりはしりまさいらくを同思ひのほかの物を七十五左この聲もたうつきて同なかたゝすこしかきいてたるに同こくの手みつを七十六右われはそりし同みや人をうつむちみちの同かゝれさもちりけるえたは同をれかへりまふに同になくまひ給ひ名さり七十七右うちかつきてもろさもにまひあそふ同いつさて御ついまつ同からこして出給ひぬまひもはてゝゑかの所に七十七左きんつかふまつらせ同たいめして御物かたりし給ふ同なかたゝうへに侍りなさ同をさ〳〵まゐり給はねは七十八右なささものたまえせ給ふらむ同みぬ人こふる同いまはあそひも同まことやにも同ふかき契になして同源少將兵衛佐七十八左いさいたうゑひてはか〳〵しくつふさに聞えす同ひころ思ふうへつる同なかすみまかてぬかくて同いてやおのれはみしるへき人かはされさ同みならひさり給へり七十九右侍從おらすこそ同人のきゝつたえて同おさゝいさいみしきものそや七十九右

なかよりゆきまさも七十九左あてこそのみうへに同さゝにいてこす日の同かつけものさりいて八十右たゝかくの聲をみやましさは同をりはしりふたうして同になき聲しらへて同なみたおさしたまひつ同おほろけにてすへきにあらす八十左うへのせめさせ給ふに同なはおのれこそ年へにたる同

第二忠こそ卷

源のたゝつねさ聞ゆる一右申すおはしける同左大將かけたる同十四歳なるをえ給ひて同はうらいの山になさんさもたなうらの一左かくれ給ひかし同母君師すこさまたふたつ二右みすてんこさのうしろめたく同ちひさき時はめおやにしくことはあらぬ同たゝこそをめにもかたへ二左なてやしなひ給ふ同ものし給へはさて三右あまたあつめてゆきかに同かくおさゝのめうしなひて同女君さかく思ひて三左てら〳〵に修法おこなひ同是をはなちてめなき人の同有難さうそくせさせて同こゝのみや云々またむくらおふるやさもありとか四右奉れ給ふおやきちかけの御さのに參りてかさに同さりいれてみ給ふ五右よの人さおほして同おもほしてなかきむくらを同はちをみせ給ふなさ同おやことみ

るはかりなる左五おほえ給ひつらん人を同むかしのみ
おもひいて右六まれにものし給ひては同みほろほす同
ことたゝにあやにしきを同草木すてきせかさらん左六人
のならはたしらす同まれにものし給へははしふれぬ
同くちひそむも聞しらす右七心ひとつやりて同こゝに
ものし給ふことは同みかとおほすこと同ほかにやら
しと同まなことその給ひし同故君の御為に八かうし
給ふ同心なく年月に左七まつしくなりぬ同なほたえは
て給はて同おひいてゝ女御たちをもみならして同た
たこそ故おとゝの御めひに右八おとゝのみえかたく〱
同さらなりやいみしき左八入給ふまてはなほ左九ありし
やうにもあらねはなにしに同おにほしてたちかへりか
いなまほしくおほせと人めをおもほしてしはしもの
し給ふ同こゝちもそらにて同心にもあらぬことなと
の給ひて同しはしものし給ふ同北方いたくやらしと
て右十けしきのしるくみえけれは同こよひは一條には
わたらせ給ふましき左十ふす物をやとのしたには同せ
くなといときよらに右十一れいの人にもものもくはせて
同ちひさきさうふに同おきたるはしのたいに同とり

かへし給ひかくてうせぬと左十一こゝら五つき六つき同
うしなひつるとて右十二なけき給ひぬこのおひを同
とりたるとちゝおとゝ同さなからさなきむとの給へ
は左十二かふ人もなけれは同うるなりとていてたると
き右十三こゝらうつる中に右十四さし給へるにいとおほえ
たり同仰せ給ひしせるいたいに同たゝこそのおひ
にこそなしつらめなと同御覧せさせんと同もてまい
りてかくと奏す同せめられこうして左十四にる人も
なかりしを右十五うせやうのあやしかりしをなてう同
しわつゝひてまたゝはかるやう左十五こゝにはむりし
わすれ左十六さいつころ侍所に同いりまうてきてひと
つふたつ侍りし同この頃うちにめし同今のもおなし
こと御とくは左十六人はわれとしもおいぬいまさし
に同ひとりあるをつれ〱と同きゝもものするにあ
さましき右十七いかなることかありけん同みしらぬや
うにて侍れと同ちゝおとゝのいますかれはこそ同む
かしよりはらきたなき同奏したるやうにつけ給ひね
左十七おほされぬへくこそは同しかあらんときたゝこ
そこそたつね右十八おとゝも心はつかふもの也同あや

しきことにもあるかな左十八うけ給はりしことつけ給へ同ひとひのたはかりかと左十九かたはらのものかけおつる同おとゝとはかり物も同かくいらへ給ふいかなることに同そのよしはたかはし右廿こ君のらうたく同思ひ侍る人のはかなくみ給ふるときわかゝはり同たゝこきみにおくれて左廿あやしきことの侍る同なにのはへもなくて同ちかけのおとゝかくて同まうてゝさ聞えつれはいまころしなんや云々ころさんやとの給ひ同さふらふにおとゝの久しく參入り給はねは右廿一まかてんと奏すれと同しひてまかてたりつると同さうしにこもりふして思ふこゝらの左廿一なすともいゝのつはもの同なんちかさかさはとかめし同おとゝはみえ給はねは右廿二まゐりぬらんと同さとにこそあらんと同おとゝにみえ奉らし同はやしにいりなん同みつれはなにを同とこころ〳〵しらけしか同いてゝみるにいとになき左廿二からふしをかみ給ふとて同家の子なるへしと思ふに同ものもえたまはて右廿三みやつかへせしとおやの同つゝましく侍るを左廿三そも〳〵たえおはし同やすらかに作給ひつる右廿四ゆくさきのこ

とをおもふなり同ひきあそひつるをりめ風を左廿四物にいて給ひ人ともゝなきをり同おこなひ人もろともに左廿五みなうつしとりておこなふさることありとしろしめさねはみかとは左廿六小とねりさたれり同たりしかとこゝには同まかて給ひにし後さらに右廿七申しゝかはかへりまゐりたると同うちよりも御つかひを同あらぬまてもおそろしとて左廿七たゝこそはなさかなれるそ同しはしなものをとこといひしかは同なやみ給ふことあり同ものせむといひしかは同まさにみいて侍らまし右廿八こゝにはさ思ひぬへきことも同ふかきことにも侍らさりしを左廿八人のつけたまひしかは同ならはしたうへるに同ことをか聞えたかひし同さらにおやのうへには右廿四人にはかられ給へる同左大臣の妻むかしより同ともかへて聞え給はて同故君のいま〳〵となり給ふまてにのたまひおきしことに同かへす〳〵の給ひけると左廿九思ひいられて大願を同世の中にへんこと右卅つらきせのみそあたみえける同うらみつるかなこゝにこそたゝこそかうへに左卅ものし給ひけるうらみ申さまほしくと同えあるま

しく思ふ給へられて同こゝにもとりあつめて同あさきこそふみもみるらめ同北方おもほしなかく事左卅二おほいとのにかく聞え給へりはや聞えしと思へといはてうき人はといふ同いとゝあらしになるかあやしきものもおほえぬ御こゝちに右卅三かう思ひはてられ同こゝらのとゝ頃に左卅三つくしはてゝかきりなく同よもきこいひしかとゝまりて同われたにつかふまつらては同大将に萬石にうりて同これは一條とのゝ同いもゐさうしをもほつ給ふほとに同そのわたりはひえさかもと右卅四さて日々に誦經にしてかいかくしもてなりしゝ物をは我めにはみしとの給ひて佛つくらせ給はんとてよろつのつはもかしてちからひとあつまりてわるにいさゝかなるきつゝかすかねのうへに露かゝらんはかりなりもてわつらひ給ふほとに大そらかきくらして雨ふり雷なりてこの琴をまきとりつかくおほいなるわさをしてまちわたり給ふほとにたゝこそをこひしにゝかくれ給ふ左卅四

第三藤原君巻

太政大臣のひとつむすめ右一父御門御母后にの給ふ左一

此人にさらせんとの給ひて同おほやけすかのかみに三右まちひとつにひはたのおとゝらうわたとのくらいたやなと同あるかきりひはたなり同おほいとのゝ御方にをとこ左三まつ宮の大君同おほいとのに九郎宮に十郎おほいとのに中の君同女はもきかみあけをとこにつき右四いつれも〳〵かたちきよらに同なほこの御そうは同聞えあへりかくて同四郎左衛門佐つらすみ同五郎左兵衛佐あきすみ同八郎大后宮のたいふ左四三の君左のおとゝのとう宰相左四四の君左大臣との次郎右五宮の御はらの五の君同みんふ卿宮の北方同太郎の北方年十六七の君右大臣とのゝ二郎ゑもんのかみ同たゝとしの北方年十四いまた御男なきは八の君ちこみや九の君あて宮と聞ゆるは年十二十の君いまみや年十一同十三の君そて宮八同御おとゝのをとこ君宮六に同こくはくのをとこ同めくし給へるもさしに同父母のすみ給ふ左五しんてんにはあて宮より同女御の御はらの女宮たちなとみなみのおとゝ同父母はきたの御かたに右六をとこ君たちは同太郎君の御かた同所々右をたひつゝ同所々はさしはなちつゝ同けう

らにおはしまし同十二と聞えける同いまめきたる御
心もあり左六ゆるされ給ふましましてしのひて同心は
せある人に兵衛の君同なとおほすてゝを同さらては
かゝることは同かねまさと申す年四十はかり左七おほ
きなる家ともたてゝ同ちひさく聞え左八ひとりはかり
はふところすみ右九あるしのおとゝあか君同かくて春
宮の同あそひことの色このみ同あるしある女をもみ
こたちをも左九みやす所をもの給ひうこかし給ひ例な
く同たよりをおもほすに同御ふみもてまいらせ給へ
と同思ふことをかたらひ右十おもしろくはなのひらん
しに同兵衛の君にこれ御覧せ同いふらんかなとの給
ふ左十の給ひまさらはして同思ひにそへて左十一兵衛の
君の御もとに同まきらはしつゝなん宰相なと右十二は
らからのみむふ卿中將なんと同さねたゝをしもおほ
しおこすへきのちおひともいふ右十二ことにはあらて
かの御方は同その御つき〳〵におひ左十二まうて侍る
かの聞えし同いかて御もともあなるを同ひさしくさ
らふはて右十三めにちかくをりていのれと同あやしれ

いのむつかしき同例のことのたまへかし右十四のちの
心みにはありといふともけにけふの御返ことはつゆ
をもみせ給へと左十四心つよくも物し給ひ右十五あやし
こてふの同聞え給へれと同いろ〳〵の花のかけに左十五
左聞ゆれはちこみやなん右十六ひさならし給ひける同
おはしてかく聞え給ふ同しもやともみなひはたなり
十六 十七の丁はいたくみたれたれはこゝにこと〳〵さしるしぬ諸本とよくみかはして改むへきなり おとな三
左十人はかりわらはは六人しもつかへ六人めのとゝもな
とありみなわらははあて宮の御人なりにしのおと
ゝに女御すみたまふしもつかへわらははおとなおなし
かすなりうちより御ふみありみ給ふひんかしのたい
には女御の御はらのをとこみこたちいとあまたおは
すなりみなこうちなとすきたのおとゝは宮父おとゝ
すみ給ふおとゝうちへまゐり給ふとていそくこれは
御子とものすみ給ふまちおとゝむついたやらうさう
しくらともありしん殿に民部卿の宮すみ給ふ北方宮
の御はらの五の君年十七御子ふたりまたうみ給はん
とするとおほくいきほひたりにしのおとゝにおなし
御はらの六の君年十六子うみ給はんとす御をとこ右
の大臣とのゝ太郎君なりひんかしのおとゝにおなし

御はらの七の君年十四御をさこ右衛門のかうのとの
きたのたいゝたつらなりいまおひ出給ふかれうなり
いけひろしうゑ木ありそりはしつりとのありこれは
大いとのゝ君すみ給ふおとゝまちやさもおなしかす
なりしん殿に北方すみ給ふこたちいさおほかりにし
のたい中務の宮きたのかたこなたの御はらのなかの
君なり年廿一をさこ君たちもこの御はらの四人はら
うを御さうしにしておはすひんかしのおさゝにお
なし御はらの三の君年十九御をさこ左の大臣との丶
太郎君子ひとりみなみのおとゝにおなし御はらの四
十七丁をはかさ改むへきなり　子なし年十八源宰相右十八　物ひかみし給
へるみこにておはしけるほとにたゝいま同めすゑた
らはゑひうとみ同おひいて給ふまゝに同八の君のお
ひ給ふさ同右大臣とのに奉り同おとゝうちみ笑左十八
思ほして聞え給はす同おむやうしかむなき同の給ひ
かはし給ふ我此よに同この左大將源の同かくはかり
の人聞えす右十九みゝにつき心につくしかあるに同さ
うしみにいふに同かたきをゑんする同またなうはせ
の同おほんみてくら左十九いはんやきはの人は同てら

〳〵にしきなく同おの〳〵奉り給ははかならすひ
さうさしも思ひ給ふらねさ左廿くさくなりさ同ひしり
のさくになし給へ大さく同御あらんすさせなくは同
我大師のひしり右廿一おもむけしめ給へさて右廿一みなさ
らせ給ひつ同大かくのすけのいふ同いへるやうはえ
かたき同ふせうさゝのはす家かまさ同たうさくしき
うたいし同いてたちつへきものなり同人のなけきを
のそき同もんしよにいへり左廿二人のよろこひを同を
りさころなくひもの同出したて給ひつかきうへき人
同聞ゆることはこれは同さはかりいますらんそれら
みなはしかあつまりてたゝかはあやうからしは
うちさものいて有ましきこさいふくそたちかな四お
もて四丁のとのにおもてことに右廿二おとゝに其木の
と同天下のそうなき同たふのゑし給ふへし同見物は
かたかるへしといひなきむ同あつまりてうはひ同こ
のことはけふこそたちの同のたまひしらせよ左廿二こ
ゝはしんてん宮おはすをのことも同はくうちゝ集りを
りて同此人ともにおくる同はかり給はんとおほすな
ゝり右廿三はかゝの奉らんかしとて同けむつけのみこ

の同やりて物みせんと同わかくかたちきよけなるを
左廿三　ひさしはきこりの同ひらうけにはとのゝ御たち
同あらんこそたゝ人の同こゝは大將との同けしから
ぬこゝおほかり右廿四　あそひのゝしるはさかの院のう
しかひなりかうせち同みこの君しむしちにおほすに
や同つしあそひすらうそくとも同いさをしてあり同
はくうち京わらへかすしらす左廿四　かゝけてみ給ひは
ひゑつ同こゝはてらゝこそゝ同うしかひあつまりて
をりはくうち京わらへくるまうはひたり左廿四　なめき
めみ侍りつる右廿五　御よくあらはし奉り右廿五　出給ふに
ていのりのことゝも同あか君の御ために同はたし奉
ることなとてかは同宿をはみしと祈りしを左廿五　物ま
いれりこたちつかう同はくうち京わらへらこそく云
々京わらへにものかつけたりしうとくに同むなくる
まにいくしをつみて右廿六　さきうまに出たりかくて同
物くはすきぬきてはつかはるゝ左廿六　をたりたるめう
し同ちひさきめのわらはを同ちひさきわらはにきた
ちをはかせてふるわらうつに同しらすかほにてまし
らひたまふ右廿七　まつりことをさしくあるゝいくさ同

さるへきをつかはせ給ふ左廿七　人參りてひゝましるに
さふらひに同われか人かにも同かゝれはこそは同つ
いえあるらんましてあたらしくとゝ人十五人に云々
とをまり五なりこれならしてはいくそはくなりぬか
こを同とをまり五なりならして右廿八　いらへくち
をしう物の同みまのかや屋かたしくつれあみたれ廿八
左さかとのゝかたは同しとみのもとまて同そしり申
ことはへなりいらへいなあちきなき右廿九　あめの下の
すきもの同いちにあきなははこそかしこからめわれ
ゝかゝるすまひすれとも同きよらにする人同おそろし
きやまひつきて左廿九　せさせんとする同つち三すんの
同おほくの物出く同枝はひとつに同うこまはあふら
に同多くのせにいてく右卅　ゆみつまうほらす同いさゝ
かも物同こゝならぬたちはな同これはかつてなし右卅
殿のみそのにあり同てのいちのはらに同ははをゐし
て左卅　むねつふらかしき同つきたれと我うり同はしめ
てはきれわかほこにあたらん同位をかへし奉り給ふ
つたなき身にて右卅一　山かつらをしたかへて同かへし
奉りなんくにひとつを同はしくつれたる右卅二　ついた

てさうしたて同おとゝ物まうほれり同しらけにむきの同あはせの物なしこゝはのみつし所寝殿のきたの同むな車にいをほし左卅三たよりもなく同かしこまりてなんえかくとも聞えねかくひとりすみし侍るをかたしけなくともわたりおはしまし右卅三さやうにおとなしき左卅三御かへりは聞えさせんといふ同しん殿たいよつわたとの同はこにものいれて同かくて四月はかり同夜かなことの給ふほとに左卅四ひと聲にあくなるものを郭公こゝらたひねのをしきしのゝめ同物にそ有ける同例の宰相ひえにまうて右卅五と聞え給へりあて宮右卅五積れる山とこえはたのまん同おほつかなく侍れと同瀧津瀬もあわに云々人のあれはなりけり同平中納言とのより左卅五御はらのみこもまた御めも同よしみねのひとりよに右卅六父母こひかなしひて左卅六それならぬものも同人のするわさ同かしこうせぬわさなし同ものゝねつかうまつらせ同若宮にもさうの御ことつかうまつる右卅七さとゝおもほせりし左卅七年かはりて三月はかり左卅七けうきみにいさゝか同人

にもいはしとの給ふゆき、、、まさ右卅八これなかのおとゝ右卅八たかそとの給ふ同めさましのことや同あて宮かゝる人同ならはさしをやなとなき給ふあて宮をさなき左卅八宮あこ君あて宮に同又たさいのそちしけのゝ右卅九子ともあるめみちにて同みな御かたにむこ̀とりし同こひまつらんと思ふ同かの君は春宮より同おほくのみかたはくつすとも同いらへしかなりなにかは左卅九聞しめささらん同ひとつにこそことは同なかとのゝおもとといふ同けにこのころまうてん同さし出かたくなん侍りつるなかとの右四十わらはへをそもて同なかとのかいらへ同さなりよくの給へり左四十ぬしものまいるたい二よろひ同すゝのたいかねの同まうほるをのこともすゝのたいかなまりして物くふへしとす右四十一をのこともゐなみたり同うすものかたりゐる同つかへんともきたり同なかとのをそちの殿へ同やもめにてつきなく左四十一申つき給ひてんや同なかとのいらへ同嫗はをとこ君になんつかふまつりて侍るうまこなん同やまとうたひとつゝくりてと同なつ

さも奉らしめん四十二右 女人はたひのそら同なかさのに
せに五貫同なかさのよろこひ同姫君はいつくにか四十
二左ひさまに奉れ同ことはかけれは同なかさのかえた
ることそあめれさてかへし同かくてそちのぬし四十三左申
さんとのたまひて同たまはりてまうてこむ同なかさ
のかへし給へりといはて同ひさたひもし給はめ同お
もさの御ふみにことのよし同なかさのいとよきこと
なり同おほしたれ嫗しはべらは四十四右けに此女よきぬ
すひと同左大将ぬしの同こと女のふみは同けにかの
ふみは四十四左かのめのとのことの同いきていふけ
にわか女おきなあやまち同心もあら〳〵しく四十五右お
ほかたの女のなさ同かくは申さむらふやつい まゝた
しはり同このもりといふふる人同ましをしろきいた
ゝき同かくて例の宰相四十五左ひさひいさかれく御かへ
りを聞え給へりしをすなはちもたまへりしひえのわ
たりに同なかのおさゝの君も同さは山こもり同い
らへ心しつかにて同御返り聞え給ふおく山に同かき
りなくうれしかりしを四十六右ぬひしをもほころふまて

に四十六左さらにみ給はしなにゝか同まゐりつるとの給は
んもくるしきを同したりつるとな聞え給ひそあたり
もおち聞え給ふになどものかたり多くし給ひて兵衛
はまうのほりぬこの御ふみ奉りての給ひしことゝも
聞ゆれと御いらへもし給はすかくて源宰相なかのお
とゝのすのこにたちよりて兵衛の君よひいてゝいか
にそや聞えしことは聞え奉り給ひしかいらへいさよ
く聞え給ひしかともゝのもの給はすなさ夕くれに外
よりとりもてまゐりたる鳥のこのねくらもしらてな
きありくをみたまひて巣をいてゝねくらもしらぬ
ひなとりもなそやこれゆくひよさなくらんわれひと
りにはあらさりけりとの給ふをうちにも聞しめすな
るへし兵部卿の宮よりひさしく思ふ給へわひつるこ
ゝちもほのかなし御返になん思ふ給へなくさめつる
さるは

なつの野にあるかなきかにおく露をわひたる虫は
たのみぬるかなこのたひは御返なし右大将さのより
かひなけれは聞えにくけれとえさも思ふ給へはてぬ
ものになんありける　かくはかりふみゝはしき山

路にはゆるさぬせきもありしこそ思ふふかき心はたのもしくなんと聞え給へり御返なし平中納言とのより聞えそめては 四十六左にかくそそへくはふへき也 人を思ふ心はちゝにいをつくる四十八右 いらへそは思ふ給へるを同そちさの給ふはもて侍る女人のなほむらいあらしめてひこしらひやせんとおもはしめしゝなにか同人の聞えおける四十八左 よもしかあらしうちには女御の君同近くゐてたうへりや同おきなのかたいほに四十九右 おきなのたうへんものゝまつけことにとりよひしはしめをくうしめてこそはかしつきたいまつらめさうもちらはたみ身ひとつにたへたいまつりみそかつものともこともしくてはあらしはや同こくわうのへのめに同さい相の君兵衛の君はといひて同けにそれはさねたゝの同いらへさなり同こゝにはすみますそものちりの君もいまは御めもなしかくてなむものし給ふかそちてかさをしていふけにな四十九左 おかしと聞給ひて宰相は外に出給へは同しかありなゝんや同いかにそつれ〳〵なる御つかひあしたにたうひつるをまちても

のたてまつらせんなと四十九左 此しけのゝ原のといへる所々はいたく乱たる思ふにそちのたりかきしなるへけれはそれこれに考へあはして改めしるしたる辞はいさふるひたるものからうつなるものたかへみてかくはみれさなほひかこさそ多かるへしよく可考なり 加茂の川邊に同そのひのせく川原にてまいれり五十右 いろつく秋のなにやなになる五十一右 御つかひに女のさうそく同すゝもりよと思ひしものを同民部卿の宮の御方五十一左 夜にいりぬきみ達同中務の宮の御かた同右大臣との御方同民部卿の御かた同てもやます我くるいさを同藤宰相との御方同宰相かはのほとりに五十二右 けふの水泡となりくたす哉五十二左 御つかひにものかつけたり同こゝは人々同かはのほとりにゐ給へり同つこもりはかりになりぬ春宮よりあて宮の御もとに五十三右 秋の色も露をもいまや同右大将とのより五十三左 平中納言とのより同物かたりし給ふる御前なるさうらに身に夏むしをみさりをは云々もえすそあらまし五十四右

第四嵯峨院巻

此巻は搨本のかたはいたくみたれて藏開巻の下となせしことは前にいへるかてとしまた巻のうち

もいたくみたれは寫本もて改めしかきりに摺本を
考へ合せて其改むへきには某の丁にこれをつくへ
しさいへりさるは摺卷を一丁も多くありけんとて
そかし

さふらひのへたう右一こなたにさて御さうしに同いか
になめけなるさまにはべりけむ同源侍従ははたか
しこし同さらにおほえ侍らぬは左一すゝみて侍りけめ
なさ同さはおはするなかたゝこそうち參入りより同
うしのけそや同なかすみかまかる所は同いますなる
をわかきをのこ右二聞ならひあられよなく同いかて聞
えつかむさ同かくきありくになん同この思ふことを同
をりあらはさてやるにやかて手に左二淺ましくかくさ
たに右四こゝちし侍りつるになん同源侍従ひさまにま
いり給ひてかくあきましき心さかつはおもふ給へな
からもいさかくつらき君もあいなしなさの給へれさ
れいの御いらへも左四齋宮のくたり給ふ御おくりにい
きて同えたえかねてなん右五この右のおとゝのすみ給
ふ八の君は同こさ君たちのすみ給ふ同御はらからよ
りも左五きんたちのをのこらかなかに同心ちしてこそ

え聞えね同夢聞ゆへき人もなし同え聞えぬにて右六み
なれはよの中にはへらすや同おもひかへして左六なか
すみにては侍りや同かひなかるへかめれさも右七あか
きみあかきみなほかゝるけしきかたらひ聞え給へ同
おほすことなめるを左七の給ひかたらはむに同あか君
なんよきさまに同おのれまさに聞えん右八なにこさを
の給ふさも同思ひいられためるを同九の君おもてあ
かみて左八うちほゝゑみ給ひ同えあるましくわりなき
同なほ思ひこかるゝもうたてある同もみちうすきこ
きむらこに右九民部卿の宮も右のおとゝも同民部卿の
宮さうの御ふえ同なほおはしまのはしに左九女御の御
はらの三宮同すこしあかくなるほさに左十物やおもふ
さたれかいふらん同人々もあかれ給ふこゝはきんた
ち同きくをおしをりておはしますこゝは同君たちみ
な御前に左十物まいるひんかし同おとゝに平中納言右十一
大將のぬしははなはた同わつらひ侍る云々わつらひ
になん同いさまふみたてまつり同おとゝたれ〳〵か
同しいかふたつの物左十一四箭のかたなめりき同まさ

よりかゝりしにやさの給ふ同さはいかなる事にか同まさあきらなに心なく右十二かのまさあきらの朝臣同申はへりたうへは同いかにもそあくねん同かの左大將同すそしころしたいまつり左十二思はんなさいさせちに同なにのよせかおはし同しさいいさやんこさなく侍るかの朝臣のこゝのつに同大將のこゝのつに云々いつらよりそさゝひ給へはこのはゝの御はら同くるしうゐず侍りしを右十三はひとりもて侍ると同さなりそては一□□門督なども同まいてうへにも聞しめし□たゝ□かひさつをさり申なり同この侍るものは左十三同人にもたゝいまは左十三思ふ給へぬものを同あやしき事さて同こゝはおさゝ中納言同たいめんし給へりさふらひ所にをのこともいと多く同おきふしなけき給ふ同されはこそはわひし右十四物思ひいてられて哀とおほゆるときにわらはへを京にのほせて大將とのに同思ひなかすのはまもかひなくとかきて右十五おとゝまて奉り同みせ奉り給ふに同さいなむとてなさかいれ給ふそ同御返もなかめれは左十五思ひしりぬさくのほり給へ同いとゝしくたましひ同きり〳〵すもゝのうけなる右十六この君はあるやう有て左十六しりたまひてや同右大將とのより同おのか弁路のとほきまに〳〵右十七まつとことふる人もあらなん同とのみ聞え奉り同まかてつるそと左十七なやましく侍りつれは同人かすにもはへらねは同しかおほさんに同こゝになんたちましり右十八九の君と聞ゆれは同この葉はよきて云々ふるかわひしき左十八こゝは左大將殿のさうし同「春宮九月廿日云々より四十二右かくて左近少將源のなかよりといへるまては菊宴巻の始のみたれいりしなりこゝへは菊宴巻十六左にみえし」かゝるほとに十一月はかりになりぬ新嘗會の頃春宮よりかくの給へり「ねきとをかみもおとろくころしもや君かこゝろはしつけかるらんあて宮「ちはやふる神の前にはあた人もたもはぬことを祈るものかはふる雪をみて聞え給へり

かすならぬ身は水の上の雪なれやなみたのうきにふれとかひなき御らんしおとさらめと聞え給へりあて宮「水の上に雪は山ともつもりなんうきてのみ

ふる人のかひなきあなみくるしやと聞え給ふ右大將のぬし五節いたし給ひて內參入りの夜「百敷にさふる乙女の袖の色も君しそめねはいかにとそみるかひなきものになんと聞え給へりあて宮「ひとしほもそむへきものかむらさきの雲よりふれる乙女なりともおほしかくるもそなめけなれなとの給ふ兵部卿のみこをみよあたり給ひてうちより「色ふかくすれる衣をきる時はみぬ人さへもおもほゆるかないつれのをりにかはわすれ聞えんあないみしやなと聞え給へりあて宮「あた人のさはにつみつすれる色になにゝあやなく思ひ出らんなれなくてはえの給はしかしなと聞え給ふ頭中將なかたゝりむしの祭の使に出たつとて「夕暮のたのまるゝかなあふことをかものやしろもゆるさゝらめや神の御とくもみ給ふに今まいりこんと聞え給へりあてみやめさましやなとの給ひて「榊葉の色かはるまてあふことはかものやしろもゆるしたまはし神もおなし心にやとの給ふ三のみこより「ひとりぬる年はふれとも冬山にまたひとえたのみえすもあるかなと聞え給へと御返しなしすゝしの中將しものおけるつとめて「いふことにこたへぬやなそ冬の夜はことのはにさへしもやおくらんとさへなんおほゆると聞え給へと御返りなししゝうの君しはすのついたちに梅のひらけはてぬるををりて「年のうちにしたひもとくる花みれはおもほゆるかなわか戀る人まつことこそ思ほゆれなとてみせ奉り給へとみぬやうにてものもの給はす藏人の源少將つこもりの夜御讀經のゝちうちよりまかてゝかく聞えたり「うかりける年さへけふにとちむれはいつを思ひのはてといふへき御返りなし年かへりてついたちのひ良佐「たちかへるとしとゝもにやつらかりし昔か心もこえたりとみん御返りなしかくてとうゐいは宣旨給はりて六十の試給はり年のうちにうちかうふりにあたりたれは大將とのゝ御いたはりにて七日のひうちかうふり給はり十一日に大內記になされ春宮の學士になされなくして時めくことふたつなし內宴にめされてあを色のきぬにあけのきぬかふとて思ふ「衣手の色はふたゝひかはれとも心にしめることはかはらすなと思へと聞えす忠こそのあさり宮あこ君をよひとりてかく聞え奉る「鶯の谷よりいつるはつ聲も世にう

きものと思ひぬるかなかくはおほえぬものにこそあめれと聞えたれとおそろしとのみおほす［是を四十二右にみえしかくて左近少將源のなかよりは云々とある上につくへきなり］源のなかよりは左大臣すけなかの四十二右よのつねにすくれかたちも同七かけぬことはいとわろし同春宮にもいとになく同たまはせんとなんおもほしける左大將との丶四十二左しりなからむことり給へと同とふらふことなし同そのち丶ぬしももといきほひなく四十三右なはふるともわかむすめにつきよせつくさん四十三左すますといふとも同院のみかとの三の宮大臣公卿のみむすめ同さこそすてられためれ同かさるともすますは同こ丶はくないと卿とのむすめ少將の君たち三人ち丶ぬしは丶このかたち人とものかたりしてありか丶るほとに四十四右のり弓のせちに四十四左はしめたてまつりて同それにそひて少將つく四十五右いかにせんと思ひ四十六左いけるにもしぬるにも同心にいれてしゐたり同ちくなと給ひて同少將このとのを同せめていつと人々四十七右ひきと丶めて同いまより

しり給へ四十七左こ丶は大將とのみこたちかんたちめ同うら風の外をふきかへる四十八右あかほとけといひて同よるもこなたに四十八左わかやうになる人は同かくおさましき所に同おひいて給ひつれは同なたたり給ひつる同あらひほころひはしつへしやとも人に四十九右ひとこもりをりきなといひて四十九左さるをしりしえて同ありし物のめそこそと同こ丶ら聞すくしつれと同あふみのさうもこの君の時にこそうりつれかうまとひ同なにことをか人のいひけん五十左みえしとてやなん同少將ふしゐたり女きたれは五十一右思ひしつまり給ふやとて少將まうて同こ丶はむすめものいひたり云々少將のかたに同こよなくたへゐひ五十一左いとあしきことなり同こ丶はは丶きしはうしてものまいらせんとて丶うしいそく同こ丶は少將に云々むすめきしなとあり五十一左あるかきりのきんたち同ひらうけ十四うなゐはるま同かすをつくしたりまひのこともきんたち五十一右いとになくさみそき同さこそきてそありける同

いま卅人はあか色に五十四右ろうのうへのはかま同さらにもいはす同しなくにさうそくまひしとも同また衣もたまはさりけれは同いましつかにとおほし五十四左あすのねの口に同くちをしきことなり五十五右てつから御ふみかき給ふ同おはせていとあしく同いたはらるゝこと同たちはきなかまさに五十五左かしこけれはさふらひつるを同それにくはゝるへきになんと同四位五位六位あはて二百人はかりありけり「こゝに菊宴巻卅五左にみえし源宰相は三條堀川のほと云々四十一右まてなるひとつらをつきて此巻はとちむへし」かくて源宰相は三條ほりかはのほとにひろくおもしろき家にすみ給ふ時のみかとのかしつき給ひけるひとつ女十四さいにてむこらゝれてまた思ふ人もなくいみしきなかにてこの世はさらにもいはすゆくするにも草木とりけたものとなるともともたちとこそならめといひ契りてすみわたり給ふにをのこ一人女子一人うみ給ひぬ女子はそて君男子をはまさこ君といふまさこ君をはちゝ君かた時み給はてはあらずなてやえなひ給ふほとにとのゝうちゆたかに家をつくれる

ことこんこんなりのおとゝに上下の人聲たゆることなくてへ給ふにこのあて宮におもほしつきてより年頃の契りをも忘れかなしきめの御うへを知らてかのとのにこもり居て吹風ともにつ是もさふらひ給はて年つきになりぬ北方思ひなけき給ふことかきりなし二月はかりになりぬとのゝうちやうくこほれ人少なになり池にみくさはへわたり庭に草しくりゆくこのめ花の色もむかしにおほえすあしたにはもし人やおとつれ給ふとまちくらし夜さりはかけにやしゆるとたのみわたり泪をなかしてわたり給ふに春の雨つれくとふるひあまこもりてわか君たち父君をこひつゝうちなきてゐ給へるを母君あたらしくかなしとおもほしてうくひすの巣にこをうみおきて雨にぬれたるをとらせてかくかきて奉らせ給ふ源宰相に「春雨にともにふるすのもりうきはぬるゝこともをみるにそ有けるこれにおとゝぬとはみくるしうなんさてもまさこはかすしらすとか聞ゆめるとて奉せ給へり宰相けにいかに思ふらんとおほえて「すみなれしやとをそ思ふ鶯はなにゝ心もうつるものからなとのとかにおほしたれけにいかにと思ふものからなんまさ

こはかすしらん時にやとの給へとあり北方み給ひてなみたをなかしてへ給ふほとにまさこ君十三歳そて君十二歳になり給ふまさこ君は父君のなてやしなひ給ひしのみ戀しくあそひもせすものもくはて思ふほとに父君のわれをおもほしゝ時にはあそひしにかた時たちしそきしをたにくるしきものにこそし給ひしか今はまへをわたりありき給へとゝふらひ給はぬは御子ともおほさぬなりおやなき人は心もはかなくさえもならえてつかさかうふりもこゝることかたくこそあなれわれこそさるへき人なくれなとおもほししみてやまひつきてたゝよはりによはりぬまさこ君めのとにいふけにわれこそちゝ君の戀しく思ふ給ふにえあるましくおほゆれうへにつかうまつらんと思ひつるものをとなく／＼いふめのとあなゆゝしやあか君はなみかの給ふうへも今はかく御さくもなくなり給ひつれときんたちのおはしませはこそゆくさきをたのみ聞えてこゝらの人さふらへおはしまさすはまゝよりはしめてなにをたのみてかつかうまつらんとこそおほきめつらくあるましき父君により奉り身をもいたつらになさんとはおほすなとなく／＼いふ

まさこ君さは思へとえそあるましきやわかなからむかはりにうへによくつかうまつり給へよなといひわたるにつひに父君をこひつゝなくなり給ひぬ母君まとひこけれ給ふにかひなし源宰相はかゝる事をもしり給はておもほすことのならぬをのみ思ひいられふししつみやまひになりある時はあそひきりめきつゝたひすみをし思ひしめしこの宮を忘れこひかなしみ給ふ御子のうせしをも知らぬほとにまさこ君七日のわさを母君ほとけかき經かきほうふくしてひえにてし給ふほとに宰相思ひなし給へとみやしろにまうてあひ給へるにこの君のわさするくわんもんにおやの心かはりたるによりひとりあるをのこいたつらになりたることをおもしろうつくれりひと山の人かなしみのゝしる源宰相おとろきてなきまとひふしまろひ給へとかひなし多くの誦經し給ふさてなんまさこ君のなきをはしり給ひけるかくてをとこもなき所につれ／＼となかめわたり給ふこの北方むかしよりかたちきよらにこゝろある名とり給へりむかしの君もよきほとにてものし給へはよろつの人聞え給ふなかに左大將との中將の君兵衞のかんの君式部卿の宮の

うまのかみの君なとこの北方にせちに聞え給ふをちかくてかくみ給ふことかきりなしまさこ君の戀しくおほえ給ふをり〳〵なん「聞たにもゆゝしきみちと思ひしを君もゆきぬとみるかゝなしきそて君「ならひゐてあそひしものをにほとりのなみたの池にひとりゆくかなゝとそあかすおほゆれは母君「思へともかなしきものはいけみつのゝとけきことをむすひつゝをしのこともゝならひゐてうきもつらきももろともにふちにもせにもおくれしと契りし物をいつのまに花の色々さきまかふはるのはやしにうつりゐてあとたにみえすなりゆけはあくるあしたをなかめつゝあらしの風のおとにたに聞えやするとまちくらし暮行ときはとふとりのかけやみゆるとたのみつゝまつのはしけきおく山のふかくかなしと思ひつゝ月日のゆくもしらぬまにふたはにおひしなてしこをくるあさことにかきなてゝいつしか色のうすくこくさかりをたにもこんとのみ思ひしほとにうちはへておやをこひつゝなきためしからくれなゐのうみをいてゝきなるいつみにおりたちていさこのなみをうちそむきかなしきまてにつきにけりよる〳〵ことにむはたまの衣のしたにふしわたりしのゝめことにおきゐつゝはなのこもとにあそひこしわかみのひとりゆくみちにえたなる露のきゆるまもおくれんとやはおもほえ。しやとのいたまはあれまさりこのもとはかくもりぬれとたまのしたにもありしかはてう鳥たにもかよひこしそら行くものよそにてもありやとゝひてふかくさのみねのかすみとならましやなほたらちめを思ふにはなかめてくらすはるのひのひくらしまてにたつかりのかすもかすにはありもあるかなとてなけきわたり給ふ これをつきてこの巻をはさらむへし

第五梅花笠巻

此巻も摺本はこゝたみたれたりその改むへきさまも外のこと〳〵も嵯峨院巻にとき聞えしかことし

猶その所々にもいるへきかたをはいへりしかし

世の中たひらかに右一かゝるほとに左大將のをのこゝも女こも同うなゐしもつかへ同のりしりのさうしき同わらはへいしう四十八人云々まひ人八十人同いちものものともをなん左一おとな四十人うなゐ廿人同れうのはかましもつかへ同まうて給ひける同女御の君ははらみ給へれは右二あか色のからの御そ同すりもえ

き色の云々御こうちき奉らせたかひらうけ十には同うまにのれり云々かちよりあゆむひすまし六人同あゆみぬ御車の御前同まうてつき給ひて色々のあけはりうちわたし左二御車よりおり給ふをとこ同中の時はかりにはてぬまひ人に女の同かつきわたるを同所々み給へるに右三おなしき木草のすみたも同兵部卿のみやけにさおはします宮なりこの宮にまうて給ふことゝたひ也同おそき花ともさき同この宮にまうて同まさに木草も同御もとに奉れ給ふ左三たちよれは梅の花かさ同こゝらぬれけり同奉れ給ふ同心につくひになん左四ことかなゝといひて同春のなかはねまちの月を四はなの匂をいさなふ同春のかりのつらをなしてかはへのかもの同かすかの宮にわたり給へりかゝれは同えたにさふらひ松のせみいほりにしくれ春をさゝる草ひとにおさろき同春のふちいろはつかにて同いさせむすへり春の雨色にいてゝみえ花の枝風にうしなふむしたの霞みとりの同のへに春おいたりまひせみるちかきのへははなを右五雪のしたくさおひしものうへのなさかりなりこのめのみとりはつかに同

はるのわらひに同こほりとつ時をさらぬまつ同夏をもよほすむし秋をまつ同冬をいなふる鳥まとゐにたらぬ月おくれたる月とかき出して同民部卿のみこ鶯を左五おく山の松におくるな同こもしのこさずこしかりはこゝにて春をすくさゝらめや同かはへのかも同うち人のまとゐるけふは同ことのねをしくたしせみは同源のたゝすみ同右兵衛の佐おなしきもろすみ時にのそめるさくら「棹姫のほのかに染るさくらにははひさしそむるふちそうれしき左六右近中將おなしきすけすみ同春の雨色にいてゝ同ときくの松のつらく同風にうしなふ花同はしめとの人に右七さねよりおとろふ梅（こゝにさほ姫のほのかに云々の歌摺本にみえしは六左にいるへき歌のみたれいりしなり）しろたえのころもとたとる同左近少將源なかより同たによりくものたちわたるらし左七少將かすまさ同左兵衛の佐あさすみ同兵部の大輔かねすみ同千代のあたりかや左八ふたゝひやこゝの櫻は同春へには山邊にいそく左八右兵衛の丞よりすみ同鶯の冬のねくらや同春雨のふるなるのへの右九草木にや同すくひし鳥もはた

さむみ左九まさゐにたらぬ月同おくれたる月に同一條
このゝをかはれたるかたち風さ云琴をこゝかの聲に同
こさのめてたきてをゝりかへし右十忠こそのおこなひ
人かのくらゝま山に同ちゝはゝの御ために同くらまを
はさるすきやうしたる所左十ちかき所にまうつるに同
おほそうによみみれは色々のあけはり左十ものゝねま
さりて聞ゆかくてちかく同これはなむその同ものか
なさゝかめののしれは同かのかたちかせを同こかの
聲をてつくしてひくさらに右十一しゝまうしてつかう
まつらぬ同人のためには御てせらまれさめりいらへ
かたへはうちわすれ同こかのてともひきはつる左大
將左十二忠こそさおほしなし同かくものし給ふは同た
ゝいまはなこむになん侍めりあやしきしころ右十二か
くかなしけに同まいてひさり侍ることなりおやのみう
へを同まかりこもりし左十三わかくてにさくのおもさ同
罪業をもほろほさん同またらをたもちて同思ひやら
れうしろめたう右十四それを御やまひさし給ひて同な
り給ひにき同思ひにたへ給はずなりにしかはふけり

の同みうへもしられぬ同大將さの御けんなさははや
ものし同なりにて侍りいちにあたる左十四うまれなさ
したるを同思ひたるかなんこりすまにそしかる同す
そのかいなきことを祈願せさせ同さてまうてつるを
右十五たましひやのこりて同神馬引たてまつらせんさ
てなん侍つるかのかたに同おこなひと同まかりいる
いかなる時にかはあつけになりておほし立さるやお
こなひこさみちもはけしきに四五月はかりになんま
かり同はかりそ聞つらんさ左十五あなかしこ院には同
いさまをしひてまかてゝやかてまぬらす同おもきつ
み侍りなん同いまにたそろしく同もていて給ひてか
ゝけ給ひて右十六さの給へは忠君同けふをくらふる山
風は同はなをさそふ風はけしくて御あくふきあけ同
ありかたきみこたちさもの同まさり給へる人なりな
く思ふに同むかし思ひいてられて左十六なりなましな
さ思ふ同いりぬる山はありなから同いまもわひしき
さかきつけて同くらまの山に右十七かくて大將さのは
廿三日の同かすかよりかへり給ひけるそのひかへり

同あこめひとくたりへいしうに同わらはへいしうなと同聞えさせ給へとてかきつゝけ給ふ左十七なき世なりせはわか戀の同あしたつのたつてふ名をも右十八かのなかたゝのしゝり左十八松の枝なからをりて同おく山にいく世へぬらん同そわうの君にこれ御らんせさせ給ひてこの花給はりておき給へいまたゝいま同右近の少將なかより右十九かしこきに思ひしのひてありしを同かひまみてのち同もえいてたりけるに同いへあこ君に左十九右大將とのかつらにおもしろき所に同はなさかりなれは右二十なかたゝのはゝ北方わすられて心ゆく同なほもこのかつら右廿一なにかさらなむ云々聲は聞えめ同わかくおはする右廿一あて宮をゐてなほたへねは同いかにそあらんねたう思ふへき左廿一いかによからんまめやかに同さもゝのし給はなん同きえかへりまくのみありし同これを思はこそ同あて宮にもえ聞えうけれ右廿二まさりしかはこそこの一條に同さあまたにくはりし同ひとりみるときは同なかめつゝふねうくはかり同あか佛されと左廿二いてゐ給ひてひはさうのこと同めてたきものともを同御そこ

もをかけわたして同いてゐのすのこにはおとな二十人はかりこきうちひとかさねす（こゝに田鶴群鳥巻廿九右より卅一丁までをつきて巻をさちむへしこゝなるはあて宮巻のみたれいりし也）りもきたりよきわらは四人あをちのあはせのはかまこきあこめなときていてゐたり花のかけにあそひていみしきむかしかたりをしあはれなるゆくすゑを契りてゐ給へりかくて夕くれのほとにうちにおとゝひさしくまゐり給はぬことをみかと右のおとゝにの給ふ右大將ひさしくまゐらぬかなとの給へはおとゝかつら川のわたりにけうある所をもて侍りたうふそこになん花み給へんとてひころ侍りたらふなりはりとさいなともいつれをかゐてものすらむおとゝなかたゝかはゝをなんゐてまかりつるうへそれを思ふなりおとゝたゝ今かれひとりをなんもて侍りほんさいともみな忘れ侍りてこ奏し給へはいとけうあることかなまたかの大將のめひとりもたると聞えす三の宮を思ひし時も女七八人はかりもてありしをいかなれはたゝひとりにはなりたらんそのみこを忘るゝはかりの心にこそはなかたゝか母にはむかしよりあかぬことなく聞えし

人そいかてゐんと思ひしをまゐらすなりにし人をとてうへなほこの人なやましにやらむとてかゝせ給ふ「月にたによらすなりにししらくものたにゝとしふと聞はまことかいと心つよけなりしをいかてはなとかき給ひて左近少將なかよりに是かのかつらの家にものして內のかたにうらせよと仰給ふなかよりいそきていつるひとつ車にてゆきまさすけすみの中將なかすみの侍從なとのりてかつらへまうて給ふみちのほとあそひてくるおときこしめして侍從のまかつるにそあなるゆつけのまうけさせよとの給ふほとにおもしろき花のえたに御ふみつけて御使の少將まゐり給へはあけたるみすおろしてとに出給ふこたちみなうちにいかぬかくてすのこにゐぬ御ともの人々は花のかけにすゑたりなかより御ふみをうちにいるれはおとゝいとみまほしくおほさるれとえいり給はす北方御ふみをみ給ひてわらひ給ふさてうちよりてみなものまいるしたんのをしきちむのたいにすゑてやつゝくゑいといかめしくはあらてかしものなまものなとしてよきうなゐともかきりなくさうそかせてまいらす御かはらけたひ／＼になりて御つかひの少將いそき給ふになとかくはいそき給ふ花をみてこそかへり給はめとてかはらけ給ふ「いそくとも花にまかせん匂ふ色みつゝや人のかへるともみむなかよりさらはなといひて　花のかをたつねて來つるかひもなく匂ふにあかて我やかへらんすけすみ「かくなからちらすと思はゝさくら花かけにて千代をめくらさらめやなかすみ「このやとに匂へる花のいかなれはおつる雫もたまとみゆらむゆきまさ「松風のひゝきのこれる宿にしものとかにきける花の色かなかたゝうちにてよますなりぬかゝる程に少將ひさしくならぬいとかしこしとていそけは北方うちの御返し「しら露のやとるもうれしたにといへと空にし月のかけもみゆれはと聞え給ひてあやかいねりのうちきひとかさねはかまくしたる女のさうそくひとくたりかつけ給ふいそき參りぬこと人々はとゝめ給ひてあそひあかしてつとめてかへり給ふにおなしやうなる女のさうそくかつけ給ふ

宇津保物語玉松三之卷

第六吹上卷

此巻を揺本は上と下と別て二巻とせしか上下のたかへることは始にいへるかことしまた巻のうちもみたれしを改めしきまは嵯峨院巻にいひしにおなし

吹上巻之上　かきりなきたからの王にて右一それか妻もとは同おやもをとこも同たねまつたはかりとりて同奏さすなりにけりかゝれとおほち同東のちむのとには左一せんたんしたむましらぬ同そのかはりには王か國の右三ゆたかにあきみたん左三ひとつほに一二斗とらぬ同かくつかまつりありく右四おひたつ人にもあらす同はしめ奉りてさま心はへに同ならはずしておほく同かれかさえをはならひ左四廿一になり給ふまて御妻なし同こんゑのつかさの少將なかより左四いふほとにまつかたは左四それかうまこに物し同かはつらにかくのことなみさため左五弟のさえなとそしゝうの君同あつらしき人おひいて給ふとなん同いかてさはおひいて同さはゐてやかてくたり右六まつかたらたにみやこのこと思ひ同かひある君になんものし給ふ左六さらにせむやはゝゝなからん仰ことをたにうけ給はりゝゝねは同きんの御こと同兵衛のつかさに右七こゝにかうへにさふらはぬ同ゆきまさはなはたかしこし同なほくるしう侍れはなん同聞えんとてなり同かのきのくにのけむし同かむなひのくら人の左七ゐてくたり給はめ同みいしまのなかめれはらうすけ同かつらへいく同うれしきことなゝり右八右大將のおとゝ同けうある所の侍るなり同右大將いつこへそ同ゆるしの給はねはなん左八なにかはゐてくたり同人々ものし給ふ云々やすかなりなかよりいとものへあからさまに同いつこかものし云々ちかき所なり同物へものし給ふ同なにせんにかものし給ふものへも云々をちゐに右九さて正月のせちゑ同とみにえさりいてずもこそあれあちきなし同いね多くいてき同くをものなときよけに同所にはゐ給はて同それよりしゝうやかて左九あかたれしきんの同いたりて君の御前についゐる左十かしこしさふらはんと同ま

うて給へる御こともに同さやうになん思ふ給へてまゐり給へる右十一　さうし申給へ同うちにはひいり給ひて同よところつきつらね給ひぬ同かくこもりものし給ひけるに同あるしの君に聞ゆ左十一　こゝにえまゐりこし同これしきことあか君や左十一　せさせ給へりしあるしの侍同ましらひなさせは右十一　すくし侍りつるをさらでもこさゝらにこのわたりに侍るなと奏せし人の侍るをつたへうけ給はれより申かきりに同あやしうもの給ふものかな同おはしませとも君をこそ同さあるましきをのほりやは左十二　花文れうにうすもの同をりものあやかとりに同うちしきにしかすの同からくたものゝ花同山海河あのしたに右十三　ちむのたいはん二ついと同かさねてをりてちうを一尺二寸はかり同つかふ二ついききかつき同ふしやうしまのやすより同山の一のかすなりとねり八人同ものゝしさまの心はへありかたち左十三　あしゝける嶋よりすたつ右十四　やともり風を同なかたゝ大に喜ふ同ものし給ひける同をり〳〵もことにかゝる左十四　なとか心すこき右十五　すこしまさるものになん同宮内卿とのゝみむすめとも

なん左十五　ものし給ふとうけ給はる右十六　おもほしたるこさあなれは同うしなひ給ふなることは左十六　あそはしゝこかの聲に同聞ゐ給へりしをみ給へ同こゝはふきあけの宮右十七　おなしやうなる野の同鹿雉子かすしらすあり同花のはやしの外をかきれり同いさこうるはしきのねしなゝくみえす同こかいともしけるとあり同さくらのしたかきなときたりみなかちよりいてたまひぬ左十八　まかなひよりはしめてめのつかうまつる右十九　心はへめつらかなるあをい同かいねりのうちき同十五蔵よりうちたけ等く同をとこともはみはしのもとまてに同たけたかううるはし左十九　一にすゐてさほくより同きむにあはせて同かゝるほとに少将同上手つとひてよのいちのことふえふき右廿　すこく吹てはまへを同吹上のはまをこけはなるへし同まかきのはなを同ゆくふねに花のゝこらす左廿　たねまつか妻侍同はやしの院に来れり同こすゐはわかすかゝれはや右廿一　そこまて匂ふ色もみゆらん同匂ふ春にもあはすと思へは左廿一　そのひのかつけもの同よそひいてつゝ同そこらともゝ院もひろく面白き同きよらなるおさ

ゝたてり同ひとたまひにふりつゝ右廿二いはぬさえな
りかつけもの同君たち御はしへしに同そうともにす
はらの左廿二おとらしかしとて右廿三はまちとりの云々聞
てあるしの君左廿三あか君をは同はまのつとゝて同こ
ゝはなきさの院同しほのひみつかたに同しほかまに
うしほくみいれはつかなる右廿四てつきつき〳〵しく
ほしたり同ふちゐの宮に藤の花の賀し給ふ同御さう
そくは同かしくみのをつけてたてまつり同まうとの
御まへにはゐふのけう同少將なとのくたるを左廿四ふ
ちゐの宮に云々みなつきわたり給ふ同したんのろく
ろひきのつきともしてしきものうちしき心ことなる
錦綾なりすはうのをしきすはうのろくろひきのつき
すゑてふたつおほんとものゝ人同たてわたし御かはら
け右廿五思ひたゝす侍りしに同いひのゝしるなといひ
て左廿五たまのをむすふ松にはみえける右廿六左近の將
けん同左近のそうちかまさ同左近のう時かけ左廿六そ
この藤こそ花とみえけれ左廿六君たち四所國のかみ同
はちあふけたる八するゑて右廿七ついまつになしたるを同

こゝは藤ゐの宮右廿八のそきたてるに同木のねたか
くみえす同ひろきことうみにおとらす同こけおひた
ること同ちんのえたにきかせて左廿八京のつとに同思
ひいたることも侍らん右廿九ちむをおなしやうにひか
せ同わりこのことにはいれくすりかうなとを左廿九
卅匹つゝいれてすはうの同くすりかうを包みて右卅こ
かねるりなとの同三日にのほり同たけやきはかり年
むつはかりなるはしりうま四同くらほへうのかは左卅
なゝきはかりなるありき馬同うまにおほせたり同御
かしよねひと所に右卅一是はたねまつかむろのいへ同
田八まちはかり同うしともにからすき同をのことも
をもちてすく同うみのことくてなかれ同くらよそち
つゝたてめくり同これはま所けいしとら左卅一なりはひ
こかひすへき同すみやききこりなと向てうしはかり
をさむをとこ同とてま所うかひたかゝひあみす
きなとひなみの同みまやによきうま同うしやによき
うしとも右卅二つかひとをのこに同八人たちてよね同さ
うし女みなうちあやきてありきぬきたるをのこゆた
んおほひたる同御れうはかうたいのをもの一斗五升

とて左卅一はたちはかりすゑて同ひしほつけもの同さ
いくひさ三十八人同うみ山かめねいろをつくしてしい
たす右卅三みなものくへり同こゝはおりものゝ所同お
ものとも織これは同そめとのこたち同たうひともひ
とこさにすゑて手ことにものともそめたり右卅三手こ
とにものまきたり左卅三ひはたやあこめはかま同これ
はぬひもの所同わらは四人しもつかへ右卅四こゝは所
々の云々なみゐて同こゝは主のたねまつのぬし同
心み給ひて云々奉り給はんとおほし同ちむすりのす
り〳〵さの色に同あかきうまに左卅四御前の野にはい
たかあはせ同ちはなの木とも風にみたれとりともた
ちさわくをみて君たちえうちすき給はて同花のみを
しくみゆる春かな同おほんわりこまいる右卅五たまつし
まにまゐり給ひ同こほれるは春のかたみに左卅六ある
しの君いつかまた逢ふへき君にたくへてそ春のわか
れもをしまるゝかな同女のよそひことくたり御とも
の右卅七はかまひさくたり給はす左卅七ふたいゆひあけ
はりうちたり同御こときまうけしに同かたらはぬなつ

たにもある右卅八さき〳〵も侍りしかはなとゝて左卅八
うつせみのはにおく露の同みまかたききにたちて卅九
右かた〳〵ものおほせたる同しろかねこかねをぬさ
にしたりひとつのすきはこ同しゝうにはぬさいりた
る左卅九やさにまつらん人をこそ思へ同こかね
のいさこにつけたり同からきぬにあはせのはかまそ
へて同こゝは吹上の宮右四十すはうのすはまなとおま
へに同すきはこともとりいてたりこれは同きぬいれ
て奉り四十九こなたをゝしみて同をしみとめたる四十一右
をしみかはして同宮内卿とのにおはしつきたり同か
いこふらにやまさとの四十一左ちむのわりこうしなと同
少將はこかねの舟はうちに四十二右左大將とのにわりこ
は四十二右わりこはさかの院に同かくて左大將とのには
同したるをりに左兵衞佐ゆきまさしゝうなかたゝ少
將四十二左さふらふと聞ゆおとゝ同此わたりにも交もの
し同こかはにくわんはたさん同かみなひのたねまつ
四十三右二日はかりうまうしもかい同のほれなとゝめ給
ひ同くさゝあふむなかぬはかり四十三左さき〳〵かむな
ひのくら人のはらに生れたまふきみありとはきゝし

かのくら人いともけたかく同ちゝこそ下﨟なれ同こ
のころさかさりつるいかやうにかおひいて同さむは
かりはこよなからむそ四十四右 左右のつかさのくはん人
同十六の大國より四十四左 ひとつの木の枝をつくしても
二三千のえたのいてく山のすゑ同京のつとにさて給
へる同くしたる御うま二同なかに人いれて四十五右 さうし
いれ奉りて同せんふんかひとつ同まめやかなるもの
同ゑふつかさにまうてゝ四十五左 左大辨の君同たゝみい
れつゝふみかいつけてそ同人ことにとらせたり同お
とゝにくるまうし同あるゝうみのとまりもしらぬ
四十六右 つかひにしらはり同なみたてはよらぬとまりも
同おとゝ宮に源宰相云々宮この三月四十七右 うちよりの
しあれと同こもれりと聞侍る同ゆきまさらか使にも
同吹上巻之下 院のみかされのゑん一右 のこるなくまゐり同いつ
かはさとはせ同近きほと野はさか野かすか野山はを
くら山あらし山なん同心はへことなるにつかさの左一
み給ふるはさきに右二 うへそやさることそやいとゆか
しけれたれかれもしか奏せしかといかてかはかしこ

まては右二 の給はすれは右のおとゝなとかこそは同かく
て院のみこたち左二 みちのほとのことまてたね松こん
〱なりして同いらせ給ふ同さるの時云々おはしま
しぬ右三 みなつきなみ給ひぬ同ひかせ給へはいつれも
三左 兵部卿のみこ右四 かくて九日こゝにて同花なとこゝ
のへたるなかに同名はすゝしとなん同みかと御らんし
四左 いくらのよはひこもれゝは同すゝしなかたゝ四
人六右 ろくろひきの御器十五こかねのこき十五つゝよ
そへは同御くたものかすを同御ものたい九よろひち
んこかねの御器まいるもの同おなしくゝたし給ふ六左
くみとゝのへて同まされるかなかたきたい出さんと
て七右 としかけかくれて二十餘年同かれか時にあはす同
九つのつゝみのなかに七左 みこたちよりはしめて同こ
かねのとうち八右 くらうく殿上人八左 木のかはこけの同
ことをひかさせ給ひて九右 大將なかたゝなとは同たゝ
こそけしき御らん九左 はしめ奉りて聲も十右 奏せんと
思ふ給へしかと同いかなることにかくそ同いとまな

奏し左十くやうとしこの葉木のかは同えもとめいてす
もありけるかなとて院のみかと左十一くらまの山を同く
らまてふなを同かくて院のみかときの國右十二よにあ
りかたきものゝね左十二院のみかと御ものかたり右十三
このすゝしか侍る同殿上なとゆるさせ給ひて同ふん
たいに文たてまつる同進士になされて同なかたゝき
ん給ひてもかひなきことなん左十三ほそを風をてりに
右十四たまくつかうまつりしては右十四すゝしときし
ろひて左十四すゝし苦しと同思ひつゝさきのしらへに
て一のはをほのかにかきならすなか忠からうして同
こかのてをつかまつりぬ同すゝし給はりて右十五二の
ことゝり給ひて同すゝしなかたゝ御ことの右十六この
ことまさにつかう同すゝしいやゆきかことなむ風に
せらぬありすゝしこのこと院のみかとにまいらせ
いしをみかとおなし聲に左十六かの七人のつたへし
手すゝしは同雲の上よりひゝき同月ほしさわくつふ
ての同ふすまのことりて同すゝしいやゆきか同左近
中將に右十八すゝし源氏なり同すゝしなかたゝに同御

けしきよくうちわらはせ左十八ろくはすゝしなかたゝ
に同わいてもすゝし同ものせらるゝをそれを給ふと
仰せらるすゝし同天人くたりてまふ左十六松風のとく
ふきほさは右十九おいぬれはわか紫を同すゝしさかり
たに花のくさはの同すゝしなかたゝおりて左十九すゝ
しへけのものなり同すゝし廿餘のことのこくいやゆ
きにひとし同すゝし奏す同さえのみやつかへ右廿すゝ
し五歳にて同かなしきによりてなん同ふかきたにに
かはねを同ゆいこんをえほとこさす同天人おりきて
まふ左廿三條に家つくりて同たからをたくはへをさめ
同めきみおほえぬ同時雨もよよとみしものを右廿一院
のうちにたんにはかくありけ給ひなとしてさふらは
せ給ふむかし師につきてかしこくうけられさとりい
と深く騒ありしかは院のみかと奏させ給ひて眞言院
の阿闍梨になされぬ弟子園行なとおほく身のいきほ
ひときめくとむかしにおくらすめしありてうちのみ
かとにまゐるうちのみかとの御いのりのことうけ給
はりてまかてつる御門のほとりにて老かゝまりたる
嫗のかたゐいちめかさのいたくそこなはれしをいた

たきてかほはすみよりもくろくあし手ははりよりもほそくてつきのぬのゝわゝけたるつるはきにきて阿闍梨のまかつるをみて手をさゝけてけふのたすけ給へとしりにたちてはひゆく阿闍梨あはれかゝりものなとうらせてむかしいかてありし人のいつよりかくはなりしそといへはかたゐはかきりなきたからの王にてよのいちの人の妻にてまた世に思ふことなくなん侍りしその人の子にけうなきをのこのかたちこゝろすくれたるをもちてかきりなくかなしくし給ひになくかへりみ給ふかありしをのにはまゝに侍りしけにや心にたかふことの侍りしかはいかてこの人をほろほさんと思ふ心ふかくておやの家のたからの黄をさりかくしてそれかぬすみたるといはせおやのためにとかあるへきことをつくり出てその人におほせてつひになんその人をうしなひてしむくひにや侍らん身をかへてもかゝるさまにはかけてもなり侍らしとしふ給へし多くのたからともゝみなうせていきなからかゝる身をくはふへきなりあさりむかしの一條左廿一聞なし給へは時のかはる同おさゝの大くはんを同人のためにはあやしき同しはてしことなれは右廿二　あたらしくかなしく同ちひさき家つくりさめすゑて同この恭かすかにおはしまさと左廿二ことこもりいはほのなかに同ひきやりすて給ひつ右廿三　ふりたてゝなけ同かへつるそてもかはらさりける左廿三たのみ聞えたれなこの給ふ右廿四　をし鳥のなれもつれなくなきてたつかな左廿四　六十餘日かうちにたいさくせんさ同いまはこの大將さのゝおほんかへりみにくひものは山のこさくあふらはうみのことたゝへなさしてありふるにもなほ同こゝろこそあかくなりしか同

第七祭使卷

くら人のかみかけたるゆきまさ云々式部卿の宮のうまの君そ右一おとゝこの三所の同つかひの中將にかさし同さていて給ふにかつらより右大將のぬし同つかひの君み給はん左一ゐかにみこ四所右二今はえ聞えさすまし右三つくはねのますかけなしと右四人にこそあめれ同つれなくいひくたしたる左四御返しなしなかたゝ同つらからて思ひそめたる同さ聞え給へれとも御かへしなし五月五日同しろきねをそへて侍從同うしろやす

けれは右五思ひ給ふへく聞ゆれこゝろに聞え同よき御庄ある國同みくたちまては同御むこなゝ所の同りんしのまらうとには左五あてられたりそのひに同せんかうのをしき同さうそくあさやか同おとなまいりすゆ同たい廿人のわらは右六をとこさんたちの御まへことにまいりたり同ちかくよまちとほりてうまは池のほとりにあるみまや右六一番に民部卿の宮同民部卿にみこかち給ふ左六左衛門督かみかち給ふ同左大辨に同兵部大輔同九番に同かゝるほとにおとゝに同けんけう申給ひ同てつかひなるはらへの右七御うまのあしろ同しもへら右近の同こまかたわきてまひ同きう杖もちて左七右大將のぬしてつかひの給はん同もの〻ふらまて同大將のぬし御車同さやたのこくはくのものともひきつれてくるならん同うしかひのあつかり右八大將のおとゝの同さうの御ふえ取て同左右へ合せてひろくよきおとゝに同おとゝへいり給ふ同左大將のにはかなるまうとえたなるを左八聞え給へれはなかもちの同女のよそひもゝくたり同つかさの御みそひつみを

に右九御くたもののひつ十につみて大將にたまはり給はん同大將にかくいひつかはす同あそふなるやとに心をわれもやるかな左九よのふかくなりぬるにわたり右十もろきみつとはれたりと同もの〻ふらまていちもち左十左近のそうまて同よしひんかとあらそふて同兵部のをのこども同二のはてはなかつきて右十一らさうしてまひす同九左かつかちまけしてすなしりのことはりに左にはまつりこと人同まつかたさる御馬同右のとうにうち左十一かへしろかけ左十二こゝにはえおほしあやしさもあらさめりもしもの〻やまひたゝしく同としころあか右に同下﨟なれとさねよりをたに右十三なとかさねたゝをしも右十三思ふ給へしる同さはやいかゝすへきさつきにもなりにけるを左のおとゝ同しなにそへて給はりぬ左十三しもへの火ともしうまつかさ同もの〻ふらにこしさしなと給ふあそひあかして同人のひくへきあやめくさ同いはさらんことそくるしきうきみこそよのためしにもなるといふなれ右十四しけきなけきは身にこそありけれ右大將同わひ

ぬれはさつきそをしき同お給ふ給へす心さしの左十四
なりぬるこそいみし同たちはなのまちしさつきに同
なかめつゝつひにくちにし右十五うゑ木きしにおひた
り同なときこえおき給ひ左十五つゆたにもらぬ同つり
とのよりかくなんとてたてまつれ右十六なかつかさの
宮に同風わたるえたにもたれそ同かけにまとゐるも
も松の同ふねなみてすへて渡り給ひぬうなゐしもつ
かへ左十六さしつきうきはし同まつすのこに同ふきあ
はせひは御ことけいうたせこかの聲に右十七うおろし
てこひふな同胡瓶とも同ひとりなきさう〳〵しや
右十八そこにおひつるひしつむと同有かなきかにかき
ならす左十八たゝ今まゐり給へ同あはわりなや同聞え
給ふかくらすへきをりちかうなりぬる右十九もとめら
れよ辨の君同右大將とのゝ同心とゝめて同つけられ
たるこゝたに同心ことにしいてらるゝを同心とつく
らせ同うつはものにも左十九右大將侍從ひとつに同侍
從をえ給ひし同女このよきほしかりし同すゝみには
出同御らんせさせんと左十九いふやうになん宮の人々
同かくら十七日右廿右大將のぬし同はゝする給ふたる

所は同つくらせたる所おもほしやれ同こうちきとも
同わかなへ色にふたあゐ同みかうのこあを色に同ひ
はた色きたり同みかうのこおろしてまひいる左廿めし
人さいはら同ふえつかうまつる左近のそう同の高なし
おほんまへよりはしめし人らまて同右大將のぬし
右廿一左大將のおとゝ同右大將のぬしいせのうみのこは
ふりに同おほんむかへして左廿一御前につき給ひぬ同女
のよそひひとくたり給ふ右廿二いとゆひのみき帳同御
まへのまへに同兵衛そちの君同わさいてたる水を同
石まをわけて行水の左廿二夜に入て御かくら同さは有ま
しき人そ右卅三わつらはしきことかなさくの給ひ聞え
なはさものおもはせ給はせすなんさくの給ひしら
せて同めしひらくには左廿三こゝはみかくらみかうの
こともつれてまひいるさえのをのこともみかくらつ
かうまつれりみきにたてるとりもの同右大將殿より
左廿四すはまにかくかきて同人わすれ草つみに行らん
右廿五あて宮に左卅五しけかりしこたに有に同ちしの
おとゝの同そなたにもまうてこまほしけれとおほや

げ所の人々さわかしきによりてなんひとしれす右廿六
宮内まゐりてけり同右大將とのにて同さては兵部卿
の宮右大將の同物のつひへもあらん左廿六 さかしはむ
ゐふつかさ左廿六 かなかき和歌にみよそめよき同わつ
らふ人をは耳にも同たくはへわたらひこと右廿七 はか
なきわさし給はて左廿七たゝはへわたらひ心同家とうし
つき同人の多きそかし右廿八 さあるへきなゝれとあて
宮は同おほしわつらふと左廿八この右大將の同すゐてす
き物いますめる同みこゝろせしもなやましし右廿九さいは
ひおほせは同はたあらくこはきちうしに同人もはへ
らす左廿九 とらせてかへし給ふ同みむかへすへきひ同
彼みいへはいつれそえくはしくは同聞えおもむけて
同そちなにかはうたかひ同せうもちせんとて侍る右卅
きらはしむへきに同とのもりら侍れは同めつらしめ
いふへからむ同めて侍らすさらは左卅はや渡ますへき
同つふさなるみものかたりと申同わか〳〵しけれは
同みのさえもとよりある右卅一せうかうさうしき同まれ
〳〵さにつけは同いひをくふ院し同とうゐいかかて

一のひねりふみとわらはれ同かすまへられすちゝ
母すさやから同たよりなしことなきかく生あまた
たついてをこえらるれともとうゐいたいさくなすへ
きたよりなくかくてあくふるとし卅五左卅一 かゝる心
にも思ふ同とうゐいかくはかりなくせまるを同すゝ
しのふくろに同こくはくいはゝれ給ふ悲かくもん卅三
右 たうとさにまかりつき同めしかすまふること同み
のあつかりしに同さうさうし夏の同みるなるはちも
うすくなりなむ左卅三 そうとうしたへは同勸學院の西
とうゐいかさうし左卅三 つくゐにむかひ同山の如く積
て同くりやめくろきにいひけに右卅四 しるしてもてき
たりこゝはひんかし同侍從のかくすともつきなみ同
院司さうしき同よねかすしらす同にはのみたさうと
いひて同これは座につきたる進士秀才此人あはせて
同れうのあはせのはかまみる色にはなすゝきかさね
の云々きたるわらはかみたけにひとしき八人なかの
おこゝ左卅四 おなしき八人同おなしやうにて八人同たな
つき七つ同ことことおほゆかを右卅五 かた〳〵かさら
れたり同なみたちてふたうしたりかくて同にはかに

さうり同へたうどのにこのよしをさうさせ卅五左かうちよりあゆまんと同ひきてたてるにゝしのさうしのとうゐい同うへのきぬのわゝけたるにしたかさねのはんひもなくふとかたひらのしたのきぬきて同あるしりきれのしうのやれたるをはきて同ゆるきいてきて同ましかたりはかせとも右卅六わらふことかきり同けさうさるのへたうどのゝ同かうあるかきり同學生の名こふのみさう同ひきしそけおしたふしなど同さうこうしらまゐりて左卅六しさくのこさめうにのおもくいたして同おやある人の同なそのかうしやわらはる右卅七れいよりけうある同さうとうにりんし同たいかたし給ふたうひ給ひて八ゐんの左卅七式部丞かうしゝて同もろすゝ夜に同とう臺まなく同すゝる人あなり右卅九文人ら聞えまきらはす同こゝらけうあるくを同人すゝる聲に右卅九くちつからとはせ同學生らのすゐに同こさくをすゝるはへなりなにものといふかく生そこたかく同にしのさうしの同かく生かなこなたに同たかのちとして左卅九大辨なりかけのおさゝ同なりかけの左大辨同のこるかはねなくほろひ同三月のあ

はれし同さしは卅五年同まなこのぬけさうの右四十一れう給はらて同さとり侍るものなり左四十しかたましひさたまらす同さまたけとなるへきによりてえせす侍なりと申同さうとう進士同あやまちいちこ一しやう四十一右うしなひ學もんに同ふせわけさうをいれたうはりを同からけさしてある同家にらうあるものに給ひてあまるを四十二左ことわりなりまつしき同ことかなふしきには同あはせてますことなく四十三右松をはおきて藤かえを同ふちかつらはひてしけふそ同うるわしきにそひしすくれたるおひさして同この學生一身のさうなり云々そのさうそく同ひんかきよそひさうそく四十八左もとのしらもみちの同はたさもし給はさなり同わらひつるかく生らに同まかつることもの云々あたることおもほゆ四十三右院のうちさうしにて思ふこと同いたとはさかてのみなん四十三左なくひくらしの聲やなになるとの給へと四十四右御返りなし右大將同なとあらしもはやきかはせそ四十四左またふみもみぬものゆゑに同しらへより同ひさしきを聞くに同すのこにたち入

て同かゝる御ことゝも四十五右心もあれうたても同たちていれはみ給へ四十五左ものひとこと聞え同いとあさましけれ四十五左こゝにもおのらは聞え同りうたんの花同をしをりて四十六右あさきせになかれてくたる同われは聞えしさて同なほあか御ほとけ同かた時よにふへくもおもほえ四十六左くろほうを同涙川つきせぬこひの同心たましひもなく四十七右ちむのまつともして同うかへるをのこかうひの同思はしきし給ふ侍従御前なる硯に手まさへり四十七左聞えさせしと返々四十八右川となる身の年をへて同いみしくなりに四十八左いはぬそよきなとしも人になさけなくなせそさあらて同さは聞えつへき同

第八菊宴巻

此巻は摺本のかたはいたくみたれて藏開巻下にもみたれて入りたれは寫本とみかはして其たかへる所々をみあらためてしるしぬらし

かくて春宮十一月朔日ころ殘れる菊の宴聞しめしけるみこたちかむたちめあまたまゐり給へり大將のおとゝはまゐり給はすはかせともなとあまためしていとかしこくふみつらせ給ふ御あそひなとし給ふことしつまりてこれかれ御ものかたりのついてに春宮けふこゝにものせらるゝ人々のなかにこともなきむすめたれか多くもたらひたらんかけものにしてむすめくらへなとせられよや左のおとゝこの中には聞えすなん平中納言はかりやもたらひたらんそれもまたちいさくなん聞え侍る源中納言左大將の朝臣こそ女子あまたもたまひて侍るなれ天下の人これかれつとへられはてぬとみ給ふれとなほ今ひとりふたりはこともなくてものせらるなるすゑあきらか身にもひとりは侍るなり平中納言ひとりのみにはありしまたも聞ゆるやうあり兵部卿の宮さかなのものいひかなとてうちわらひ給ひて源宰相をうちみあはせ給へはいとかたはらいたしと思ひてものもの給はす春宮この上野の宮のものし給ひしこそこともなく聞ゆるや我をはけそう人の數にもいれさなることそからけなたの

おとゝ仰ことさふらひなははやうこそ奉り給はめかしこまりてこそさふらひ給ふらめ春宮さしもむかひてはいひにこゝおもほえてこそことのついてあらはやとおもふをまた大将にはものせすかの人には時々せうそこなとものすれとさを／＼いらへもゝのせすやなとの給ふを聞て源宰相兵部卿の宮平中納言なといとわひしと思ふことかきりなし春宮めさはかならすまゐらせ給ひなんをいかにせんとおもほえす心たましひまさひさわきてなにのものゝけしきをもおほえ給はすなりぬこゝは春宮左のおとゝ平中納言源宰相みやつかさのかみ殿上人わらはなと多かりかゝるほとに大将のおとゝ春宮にまゐり給へり春宮けふそあやしく時すきたる菊をもえみすつゝましうおほえつれはこれかれめしてみせなとしつるにみえ給はすありつれはさう／＼しかりつるになとかひさしくまゐり給はさりつらん十月の頃もかへにもいたはらるゝ所ありとありしかはいとをしかりまうしつるを大将あなかしこれいわつらひ侍るかくひやうおこりこうし侍りてえふみたてかたうてまかりありきといふものもし侍らてからきいたはりやめ侍りてなんたゝ今人のつけ申つれはおとろきなからかくたにまゐり侍りつる春宮いとふひんなることやこゝにかく文人等めしてれん／＼一く二くつくらせしにものし給はすなりにしかはやみの夜のなにかしの心ちなんせしなとの給ひて其ふみともみせ給ふおとゝいとかしこくみはやし給ふとて御ものかたりし給ふついてに月ころ聞えんと思ふことの有をしめやかなるをりなくてえ聞えぬかな大将なにことにかは侍らんけふよりしつけきことまた侍らしをいかてうけ給はりてしかな春宮いとさゝやかに聞えにくけれはなとてそこに人々つとへらるなめりおのれをそのうちにいれられぬつらしと聞えんなほ上野のみこなとに思ひおとし給へるをなんねたくおもほゆるとやうなるはかりことをやせましなと思へとそかやうにもやせらるゝとてなん大将あなかしこさる仰ことなきうちにしかさ

ふらふへきも侍らはと思ふ給へなからいとあやしき
さまのものゝみ侍るめれはかしこまりて侍るをさい
ひてうちはあてのみ侍らんやはさて心にしたかひて
人々にくはり給ふことなん侍りしかのみこにたに
みえ給ふへきか侍らさりしかはなんからうしてもと
めてものせし春宮さても殘りあるやうに聞えしはそ
れをたになわすれ給ひそかし人しれす聞えおきたる
心ちすれはさりともとなん思ふとの給へは大將はな
はたかしこき仰をなりつたなき中にもゑりくつなる
か侍るをこの神泉のみゆきにつかさのおほいすけす
ゝしおなしすけなかたゝ心とゝめてきんつかうまつ
りしになかたゝの朝臣に一の内親王すゝしの朝臣に
まさよりかれにあたるむすめ給ふへきよし宣旨くた
りにしことなん侍ると申給ふ春宮それは今のことに
こそあなれこゝにはそこにこそ只今聞ゆれかしこに
は聞えてひさしきこゝちなんする大將宣旨をそむか
ぬものに侍れは思ふ給へわつらひ侍る春宮なにかそ
はつみあらはそうせかへさすはかりにこそあなれな

おほしわつらひそ大將はなはたたうとき仰なりいと
ちひさくなん侍めるすこし人とならはさふらはせん
と申たまふ春宮いとうれしきことなりかの御かたに
もつねに聞えさせんと思ふをさわかしなとものし給
はんすゝろなることなれはうたておほさんやなとゝ
てなん時々は聞ゆれとも母宮聞いれ給はぬやうにな
んと聞え給へは大將いといたゝかしこまりてさらは
仰にしたかひ侍らんとてにかゝて給ひぬそこはくの人
氣も心もくたけておもほすなかに源宰相あをくなり
あからなりたましひもなきけしきにて候ふを左の
おとゝいとほしとみやり給へりこゝは春宮おはしま
す御前にか心たちめみこたち兵部卿の宮左大臣右大
將中納言ふた所源宰相大床子たてゝすゝしなかたゝ
なかよりゆきまさ大將との御むすこたちはしめて
四位五位ふるき進士たゝ今の秀才藤ゑいなとめした
るは引出もの給へりこゝは殿上人等はかせひとむら
にて文字給へるつくりてふみ奉る樂所あそひす文臺
たてたりみなものかきたるかんたちめみこたちはか
せたちゑてしろきうちきはかまかつくとも人もこふ

く給はることは春宮左大將のおとゝ御ものかたりし給ふかゝるほとにこのあて宮またともかくもおほし定めすいかにせましとおほしわつらふほとに春宮からせちにの給ふことたひ〳〵になりぬれは大將のおとゝみやに聞え給ふあてこそをいかにせましと思ふに春宮なん殘りあるをたにとするなとの給ふをいかにせましや春宮よりあてこそに今もの給ふことやあるみやさあめりそのことをその給ひつるやしはしはとかく聞えつれといとせちにの給ひつれはえいなひ侍らさりつるを兵部卿の宮平中納言いとものしと思ひたりつるなかに源宰相のあるかなかに思ひいりて居給ひたりつる左のおとゝこれかれみあはせてそなみたくみてものし給へるいとほしかりつれ宮もいとほしとおほし居給ひつゝあやしこの子によりてこそけうあるをりもいとほしきをりし多かれ春宮なとかは人々あまたあるをりしもさはの給ひいたし給ひつらんおとゝなほ人々かくものすときこしめしてなりけれとおほしゝめいてゝの給はするこそはあめれ宮源宰相さいふはかりの人にはあらぬをけしきみゆるそわろきかしおとゝいとかしこく思ひしつむれとそれしもそしるきかしをのこはさこそあれはかくてもさふらふへけれとむかし御ことを思ひそめまいらせしほとはなにの心ちかせしかのぬしいうそくなれとこのみちになれはかくこそはあれそのみちひとめつゝまるゝものかはこれをおもへはてそこのことはをの給ふ人々にはえをしみ申たれ宮なにかはまゐらせんと思ふを人々のつかうまつりたまふみやろれはいかにせまし日にかくよきほとなりとていますめるをこゝにもそれをなん思ふ兵部卿の宮右大將なとはたゝ人にてもこともなき人にこそあめれそれをもいとせちにの給ふなれとなほこの丸をはすこし心ことに思へともうちにはしゝうてんさふらひ給ふいかゝはまた春宮にはかくはとおもふをいとゝきなる人々多くさふらふなれはものしけれといかゝは御くちつからの給はらむをはかしこくいなひ聞え奉らんおとゝさなりなにかはかやうのはやつかへは千人つかまつれとも人のすくせにこそあしめあまたの中に一人こそはみかとのおやともなるめれあまたゝひの給ふ

をたゝ今のみかどにこそはおはすめれうけ給はり忍ふれはいとふびんなりおもほすこともこそあれこゝにもと思ふ給へたらん宮なにかはすくせはしらねどもさるましらひせんにもけしうは人におとらじなどの給ふこゝはおとゝ宮御ものかたりなかのおとゝにきんたちおはしますこたちものなとまいるかくて女御の君まかて給はんと聞え給ひつれは御迎ひの車廿はかり四位五位六位かすおほくはらからの君たちさながらまいり給へり手車のせんしおそくくたりてよふりてまかて給へりあかつきにまかてつき給ひてうちやすみ給へれはまたたいめんし給はす宮あくるつとめてになかのおとゝにわたり給ひかしこにわたり給ふへかめりさて御裳ひきけなとし給ふ君たちみな御裳引かけつゝおはします宮兵衛の君してにしのおとゝにそなたにやまゐりさふらふへきこなたにやはへるへきと聞え給へれはみやす所みたり心ちのいとなやましう侍れはうちやすくてなん今たゝいまそなたにまゐりてと聞え給ひてすなはちわたり給へり宮そなたにこそまゐりさふらはんと思ふ給へつれなと

いとひさしうなか居し給ひつるたひにこそありつれおほつかなきことかちになんみやす所いとま聞ゆれともをさ〳〵ゆるし給はすなとあれはえそまかてぬやこのたひもいとま給はらせさりつれとあやしくなやましくのみ侍れはことつけてからうしてなと聞え給ふ宮なやましけにと聞ゆ例のことかみやす所いとやそかみくるしきこと宮なにかはさう〳〵しかりつるにいつはかりよりそはみやす所こゝ七月はかり例にすなやましく侍れはそれにかこちてなんいましはしひとたひにまかてよと仰の給へれとと申給ふおとゝもこなたにおはしぬかた〳〵の君たちみなわたり給へりかくまかて給へるもさうさうしとて君たちの御かたよりものいときよらにして奉り給へりこゝはなかのおとゝに君たち宮わたり給へりうちの御方の御前にものまいりたりおとゝものまいるたいとも いと多かりかくて御ものかたりのついてにみやす所宮いとよきほとになり給ひぬめるをなとか心もとな

けにては宮それをなん思ひ侍りつるなとてかかくてのみこそ思ふをいかゝはすへきの給へかしみやす所けにかやうのことはなま女こそはものたはかりはすなれたはかり聞えてんやなと笑ひ給ふまめやかにははやうこともかくもよろしきさまにものし給へおとゝはいかゝ聞え給ふらん宮いさやこゝろをさまて多かれはまた思ひ定められぬや一日おとゝの給ひしは春宮なん御けしきありていとまめやかにこれをたに忘るなとの給はすなるうち〳〵にも仰せらるゝことあるをいかにせましとの給ふをなにかはと思へとやむことなき人々多くさふらひ給ふなる宮なれはこの人のはかなくてましらひ給はんもいかならんと思へはまたともかくも思ひ定めてなんみやす所いとよきとなり春宮よりはなほ聞え給ふやさはおほしたゝれよりしたゝ今はこの宮にこそは人とあるかきりはまゐり給はん人は多かれとそのまゝにしもなきものを四の宮右大将よきほとにおはしませそれをはなちてはりしらはなかるへし宮あちきなしあまたあれとおほとのなここそおなし君たちと聞ゆれとあらまほしくやむことなくてはものし給へみやす所されとこの公達のさふらひ給はんこそはにつかはしからめことすみし給はんはひんならこそあらめうちにはたゝふたりあるやうにてありせんまゐらせ奉れ給ひなはさやうのともし給ふましき宮なれはなんかしこにはえものせねなとたひ〳〵の給へとさいたちてさふらふよりはこそあらめ宮にはみこたちなともまたおはし給はねはたのもしかし宮さりやひともいかておとゝもまゐらせんとなんの給ふなりしかくはおほすにこそ有けれわれもともにわかき人のなきこそいかてよき人もかなとの給ひしかははやうまゐらせ給へ人はあまたあれとかゝるましらひはあちきなきものなりたゝ今はうちにもいと多くさふらひ給ふれとまとのほり給んはひとりふたりこそあれとなほくにこそものせらるめりそれにはなおほしはかり給ひそなとの給ふ春宮はこの宮の御弟におはし給へはなりけり宮いとやらうたしと思ふものをもしいかならん

と思ふそおそろしきや御かたをこそはあえものにはけしうはあらしかしみやす所あなゆゝしやなとわらひ給ふ日ひとひ御ものかたりし御ことあけはしかた〳〵をとこ君たちおとゝもみなおはしまして御あそひありてかた〳〵よりけうあるものともきようにてうしてまいり給ふ宮東のおとゝにわたり給ふとてこなたに人々いさとくさふらへとの給ひおきてわたり給ひぬかくて夜ふけてみな御かたかたにかへり給ひぬこゝはなかのおとゝみや御やす所御ものかたりし給へりあて宮みこたち五所御方々おはしますみなものまいれり男きみたち七所はかりゐ給ひてものまいるこたち多かり右大將とのより御くたものわりこなと奉り給へりこれはきんたちものきこしめすみや東のおとゝにわたり給ふこたちいとおほかりうなゐ四人御几帳さしたり方々よりみなものまいりたりかくて御神樂し給ふへきまうけし給ふおとゝ左大辨の君に聞え給ふこたひのかくらはしもすゝへきたひなるを少しよろしくせんとなんめし人なとゐらひてその行事心とゝめてものせられよ辨の君かゝることはしむる時はいといかめしくはせてのち〳〵にまさるなさなん申こと侍るおとゝなほこれらかむたちめいかにしあひてみ給ふにいともものはかなくてものしからんされとも聲よろしからんなとゐらひてものせられよ辨の君例のものともはまゐりなんこのそうの外にうたのかみなとゝはうちのめしにもかならすいなみ侍るおとゝめくらしふみしておくにそうゑかきつけてつかみさは〳〵すまはし辨の君あそひものともはえやみ給はさらんするにわかをよまむやはなとの給ふ辨の君ふんところにつきてけいしともにこのこと仰せ給ふ御神樂十三日にせら給へきこと仰せらるゝを人々のみる所も有をおなしくはすこしよろしくせんとなん仰せらるゝことある左近の頭の少將またこの少將しけのたすまさ●まところの別當定め申只今うちのめし人は右近のせうまつかた右兵衛のせうときかけ右近のせう年のこれのり左衛門のせう藤原のもろなほ平のこれすけ宮内少將源のなほまつ右衛門の佐藤原ときまさうちのくらのせう平のたゝとは内舎人ゆきたゝみちたゝうたのせうくすたけむら

きみうまの允かはとしやすちかはるちか大和のすけなほあきらしなの丶すけかねみきなとすへて三十人のものともこそは只今のいちもちには侍るなれこれらはうちのめしならてはたはややすくまかりありかすさりともとの丶めしにはまゐりなんそれにみなめくらしふみをつくりてかはさんとてよしのりこの御かくらのことさんとものあるしのこともまたろくとも丶のふらとねにもこのろく給ふへきぬの丶ことなと定め給ふぬのはかひむさしよりもてまうてきたりしをかへりあるしのろくすまひうとなとのろくにみなたひてきた丶しなの丶みまきよりもてきためる二百たん上野のぬの三百たんなんまところにさふらふそれをこそいせしめ給はめあるしのことはみまさかよりよね二百石奉りためりいよのみふのものみさうのものも丶てまうてきためれはそれらしてこそつかうまつらすへかめれさてとの丶うちのかみまいらせなとし給ふことこの御神樂の時こそはせしめ給はめそのことともいとかしこくせらる丶わさに侍るめりそれもこの御かくらのひのことにせよなんと仰せられつることと／＼にはこのことあそと少將ともろ心にことかくれすあつかひものせられよといひおきてたち給ひぬこ丶はまところ辨の君めくらしふみつくりてさえともめしあつむよねいと多くもちてまいれり少將よしのりさえのめくらしふみか丶せて奉る左大辨の君に奉りおと丶に奉るこれはやむことなき人々ほうし給ふめりろくなときよらにせさせ給へと申給ふ宮いさやつねにせらる丶ことなれはめなれてなにことのきよらせ丶んなと聞え給ふすけの君していせのかみにきぬめしにつかはすしらきぬ三十ひき奉れりめし人卅人はほそなかひとかさねはかま一くたりつ丶なんまうけられけるこ丶は辨の君のこたちものたつそめものせらる丶おと丶宮おはしますいせよりきぬもてまゐれるまところにくほてなとさす山より賢木もてまゐれり御かくらひさわかしかるへしとて十一日よきひなれは御くらまいるとてまところの丶しる御かくらの日になりて多くのあくともうちてしんはんの御前に丶なくまうけられたり日暮てさえともかすをつくしてまゐりみかうのこさふらふおと丶宮かはらへ出給ふ御ともにをとこ君たち四位五位六位あはせて八十人はかりつかうまつることかねつ

くりの御車二ひとたまひの御車五していて給ふ御車
となよせさわくかはらよりくらくかへり給ふみから
のこ四人おりたりいけやまもいとおもしろしかんた
ちめみこたち右のおとゝ右大將民部卿左衛門督平中
納言源宰相みこたちはれいの兵部卿のみこ中務のみ
こなと多くおはしますれいのなかよりゆきまさなか
たゝれいよりもいとめてたくさうそきて心つかひし
て出きたれりおとゝきれはこそさはあらしと思ひつ
かしとてあけはりうちてさいはらふえふき歌うたひ
つきなみぬとかうのこおりてまひいるめし人等もの
ゝねいたしかみうたつかうまつるこゝは女君達女宮
よりはしめ奉りてかた／＼のきんたち五人つとひお
はしますかた／＼のこたち八十人はかりわらは廿人
はかりしもつかへさはかりみなみのひさしにまらう
とこたちすのこになかよりゆきまさなかたゝとのゝ
しゝうたちさなからこゝは大たきをりさえのあくつ
くゐなとしてものゝふらともあなたのこといふかく
てめし人卅人なからかみうたうたふ　さかきは

のかをかくはしみとめくれはやそうち人そまとゐと
りける　うはそくかおこなふ山のしひかもとあな
そは／＼しとこにしあらねはやひらてを手にとりも
ちて山ふかく家をりてくるさかきはのえた　やま
ふかく我をりてくるさかきは神のみ前にかれをさ
らなんなとうたふほとに兵部卿のみこあこみやして
宮に御せうそこきこえ奉れ給ふれは東のおとゝにお
ましよそひてたいめんし給へり宮なつころかはらに
てうれしう聞えうけ給はりしをこよひそおなしかみ
の御とくならてはとみせ給はてこそ兵部卿のみて月
ころ時々民部卿の宮の御かたにまゐれとをりなく
てえ御せうそこも聞えさせぬをこよひまつかたとき
かける聲はかならす聞しめすらんをこゝにもちかく
さふらふをわるついてにとてなん宮こゝにもおはし
ますときもありさうけ給はれと心のはたゝしうなん
侍りてえ聞えて月ころにもなりにけるいかにそさか
の院へはまゐり給ふやうへなやみおはしますとうけ

給はりしをいかにおはしますらんまゐらはやとせしをあやしき人にみ給へまとひてなんえこそまゐらねそこはかとなくあはたゝしくてよろつのことおこたりぬれはなと聞え給へはみこひとひもまゐり侍りきことなる御こともおはしまさゝりき例の御ねちのおこり給へるなりさて御うへともをなんの給はせしたれ〳〵にたいめんすることのかたきおほえん世もゆくさきみしかきおちするをかのみこたちわかき人たちもみてしかななといと心すこけにの給ふありし宮おほつかなからぬほとにてあらんとおもほすをえさらぬことかちにこそ御ゆきもかたからめたらぬ人々さへおほつかなさをわか君たちとのゝ君たちなともいかてみえ奉らんまたけしからぬものとも今いてきたるも御らんせさせんと思ふ給ふれといとみにくき人ともなれは御らんせんから御心おとりやせんと（なにはなりなと聞え給ふ御宿りみこ）はつかしくてなんいまさりともゐてまゐらんみこたちいつねにまゐらんと聞え給ふめりなと聞え給ふみ二人々宮の雪の賀し給ひしにまゐりてはへりしかは御ものかたりのついてにこゝにある人とものことな

との給ひていかにそやとのにいまゐるやあやしく大將に申ことのあるをよく聞しのひ給ふかなそのよしは御かたに聞えさせ給ひてんやとの給はせしかはなにかはうけ給はりてなと聞えさせしをよしことのよしはくはしくはあらてたゝかしこに聞ゆることのあるをさはしり給へりや御心とゝめ給へとなんありし聞えさせすも有けるをなにことならんと聞え給へは宮知らすかほにしらすなにことにかあらんうけ給はりけん人のわすれやしにけんと聞え給へはいはておもおほすにやあらん御心にこそは定め給はめなと思ひ給へとえしのひ給はていてや今は聞えさすともかひなかれといみしくしのひかたきことはまつ聞えさせんとこそ思ふ給へれ月ころ思ふ給ふことのつひにはかなくなりぬることかすならぬものにおほされさらましかはかくもあらさらましおなし御なからひにもたのみ聞えさせしかはかやうのをりにも人よりはとなん思ふ給へし宮なとかゝひなくおほさるへきさ思ひ給へたることあるかまたえさもあるましけれみこひとゝころをなん聞えさするもにしもあらぬことこそいかてと思ふ給ふれ宮み給ふましくのみあれは

すこしうろしきやいてくるとてなんみこひとひ春宮
にてうけ給はりしかはかたときにふへき心ちをね
はいたつらにならぬほとにかくなんとたに聞えさせ
んとてなん心たましひをくたきて聞えそめたる身の
みこそいとからくかなしくおほえ給ふなとなくなと
聞え給ふ宮とかく聞えこしらへ給ひつゝ聞えさせん
と思ひつるこゝとありつれとことさらにをと聞え給ひ
てたち給ひぬかくて夜ふけもてゆくまゝにさえとも
のものゝしらへものゝねともおなし聲にとゝのへて
あそひすかたつかうまつりなとするほとにものゝね
聲ともいとゆたかにいてきてたかくおもしろきこと
かきりなしかゝるほとにしゝうなかたゝいとになく
さうそきて夜うちふけていてきたれりあかしのおと
となほこゝにとて御前によひすゑてこよひかみの御
とくのうれしさはぬしのおはしたるなりかのこても
のはこよひかむわさよしあるを今ひとたひかのもの
の聲きかせ給へらは只今も奉りてんかしなとあさむ
き給ひて御ことゝうてゝせちにひかせ給へとの給へ
ともさらに手もふれすうちにみ給ふきんたちなとも
多くの人の中に心にくゝふかきらうなりとみ給ふか

（これより十三行今本になし）

くてみかうのこなとまひはてゝさえとものの人々にほ
そなかひとかさねはかま一具つゝかつけかむたちめ
みこたちはとも人までものかつきものゝふらにろく
たまはりなとしてたゝのあそひの人々いとになくあ
そふなかたゝさうのふえゆきまさたゝのふえなかよ
りひちりきあるしのおとゝやまとこと右大將ひわ兵
部卿のみこさうのことおなし聲にしらへていとにな
くあそひたまふかくてみなさえなのりなとすあるし
のおとゝなかよりの朝臣なにのさえか侍る山ふしの
さえなん侍るいてつかうまつれあなまつくさのかや
またゆきまさの朝臣なにのさえか侍るふてゆひのさ
えなん侍るいてつかまつれわたりかたきかきものは
ふゆけなりやなかたゝの朝臣なにのさえか侍るわか
のさえなん侍るいつゝかまつれなにはつにやある冬
こもりのころにやとてかつきわたしておくへいりぬ
なかすみなにのさえか侍るわたしもりのさえなん侍
るかせはやのよやすりすみなにのさえか侍るきこり
のさえなん侍るゑかにあらすのみやなといひたてた

るほとに源中將ゐかの所よりいりいまするをおとゝかの君はなにのさえかおはするやわらぬすんのさえなん侍る兵部卿のみここてうふくかせはあないりかたのやさりやさてついたちてかつきわたりみないり給ひぬこゝはしん殿にきんたちおはしましてものみ給ふみこたちかんたちめ御みきいみしうすみて人々いとおほかりさえのをのこにきんたち御そぬきてみな〳〵かつけ給ふさえの人々みなぬかつきてかつくあそひ女とも二十人はかりいとになくさうそきてこさひきあそふらくてみなことはてゝめし人ともかてかんたちめまかて給ひて藤しゝうとのゝしゝうの君の御さうしにこもりふし給ひて御前にて兵部卿のみこのしひ給へるさらにすへてものもおほえすたへゐひにけりやなといひてなかたゝいとものおほえすなりにけりてのついてに聞はんことはつともあらしな禰もゆるしさかいふなさかめ給ひそなかたゝひとひ春宮にてかなしき心ちせしかなやかて御前にてしぬとおほえしいかてけふまて侍るならん源しゝうあやしのつとへことやしゝうされとふしぬるうちの心ちそするやぬしはことすちになり給へるひとはあらすや源しゝうなにをかおほすしゝう玉のうてなもこいふ源中將の君こそうらやましけれ源しゝうつのをれたる牛のたくひなりやしゝううちわらひてむくいぬのあいなたのみのやうにてぬしおほけなうおはせそ源しゝうかの人は只今のよいちにてうちにもこゝにも雲井よりふりたるまうとに思ひ聞え給ふ人をさるついてにしか仰せられぬかゝるみせもちてなそこのはかなことはしゝうかしこけれと心たましひをつくして聞えそめたるをこゝには身をかへてもいかてかはとはえ思ふ給へよらぬはいとゝしこきそや源しゝうくすりのきねはいかにそしゝうみのなる□くはぬこゝちそするやなといひてこのあかつきにうちにきんあそはしつるはたれと聞ゆるそなかたゝいましぬへけれなとかいのちはしかくは源しゝうきんひきつるはなかすみかいもうとの九にあたり給ふなりなかたゝいとありかたき御ことの聲をもほのかにうけ給はりぬるかなあなわひしいかさまにせんなといふ源しゝういてや君のこゝこゝめ給ふはかりはえしもやはなといふなかたゝからうなん只今一二のひ

き給ふと思ひさふらひつるされといと哀にいまめける御ことありけるものかななといひて思ふことかきりなくなりぬこゝはなかのおとゝきんたちひんかしのおとゝのきみこたちおはすしゝうのさうしに藤しゝうものかたりすかくて大將との宮としころ御母きさいの宮の六十の御賀つかうまつらんとおほしてかねてより御まうけせさせ給ふ御つし御ひやうふとり始めて御てうとゝもきよらをつくし給ふ御年の（うるにしき御てうと・もをあやにしきにしかへして）たり給ふはあけんとし六十になり給ふ年なれはつかうまつらんとおほすなりけりみやおとゝに聞え給ふひさひ兵部卿のみやにたいめんしてさかの院へやまゐり給ふと聞えしかはつねにまゐるあやしくおのかまゐらぬことよの中のつねならぬうちにかくゆくさきもすくなくなりぬる心ちするにわかき人々をもみまほしきことなとのたまふなるをけにいとあさましうまゐらねはさもおほすらんいかてこのおのか思ふことしてこのこともゐてまゐらんおとゝなにかはことゝもはみなくしにためるをらいねんこそはたり給

ふ年におはしませは御ねのひかてらもまゐり給へかし宮いとよきことなりことゝもはみくしにためるを（みなしたりをかつけものなんまたしきとそんみはくらつくことをなんこかねのやくしにとけ）たゝかつけものほうふくとものことなんまたしきおとゝかつけものはなにかは儀にもせられなんまつ御（五ところへにてたらに縫なとまへにせらるなり）（このしも廾八行今本になし）としみのことをせさせ給ひてそのほうふくなとのことをもし給へ宮さらはなにかは御前のをしきのことさてはまひのわらはへなとゝのへさせ給へおとゝ御前のことはおほいとのにこそは聞えつけたれまたまひのわらはへのことは民部卿に聞えつけたりおのつからことはしむとみ給はゝいそき給ひけんまさよりか侍るかひなくいかてとおほさるゝことのいとあやしきかねてよりひとつのこともかゝすしてたゝとしのかへらいさふらはせ奉らんとこそ思ひしかおのかいそきをのみ夜ことゝもにせさせ奉りてこのことの心もとなきことなといとよくかしこまり申給へ宮なにかくせぬことゝも多くもなしやいかゝ多くいそきをのみせらるれはのとけきことはと思そかしなと聞え給かくておとゝ左大辨の君御むこのきんたちなとめし給ひこゝにこのはやうよりとり申ことのこのもの

し給ふ宮のさしころなかき申給ふことをまさよりよとゝもにけしからぬあるしなとし給へるうちにえまたせていまにふようなること多くなとして來年たり給ふ年なるをわかなゝとてうして御子の日にまいらせんとものせらるゝをそのこともいかゝものすへきまたまひのわらはへのこといかに定められにけんやまさよりかゝすにも侍らぬ身にてかゝる御なからひにまじり侍るつみしろにはかくはかりのことをおもはせ奉らぬせたにとこそ思ふ給ふるいとおしくなんとの給ふ民部卿けにしかおほさるへき事也まひのわらはのことはさたまさか承りにしことなれはつかまつりぬへきにもて侍るもの十四人はかりはさま〳〵したかひてつかまつらせよとみな仰せ侍りぬ今は六七人はとのゝきん達ふたところはおはしましなんさねまさかはらから大臣とのゝ子君又辨の君なとこのなかよりまひ給ひなんこと〳〵ともゝあへからんことはつかうまつらんかしなと申給ふおとゝみな人々まことひとつつゝせなん聞えたる御かたにはこのまひのわらはへとゝのへ給へこの宮あこまろにまひならはすへきことなとをせさせ給へ民部卿みやあこ君はらくそんをまひ給はむなんよかむめるいまゝひのしめして侍せの給はんと聞え給ふ右のおとゝにはゐきをさめのおものゝこと聞え給ふ左衞門のかんの君には御はこともなとのさひとつつゝ聞えつけ給へりこゝは宮のおとゝ御そともかつけものたちぬはせ給ふいとかしてくはいそき給ふきんたちの御そとも人々のさうそくともなと中のおとゝ東のおとゝにてもゝのくはりたまふこたちいと多くゐてぬふそめものす大貳のもとより綾卅匹もてきたりたりおとゝの御こともきんたちにもの聞え給ふみのより絹六十匹丹後よりこうちきぬ百匹もてきたるおとゝはこかねのやゝしほと闘尺にてなゝはしらたらに經なとせらる宮は法ふくをなんいそきせさせ給ふかくておと（こ宮は法服をなんし給ふなるそれはことしとなんき・しには御としみのともなとも御らんせ）ゝをのこかはあそひし女こはもののねかきならして（させよた・ならんや）聞しめさせ給はんとて舞にはみこたちの御子ども左大辨兵衞のかみ中將なとのみことも出さる也や左大辨中將なとのみこたちはうしろめたうはあらし女こたちもはつかしけにはよもあらしかし宮あこいへあこなとをは例の師にはあらてなかよりゆきまさらし

てこのてともならはせん舞をはこの人々ならはさゝらんまたせぬことなめれはさはありともの給ひなんかしとおもほして人々めしにつかはして人々をなきみすのうちにめしいれて年ころ大事と思ふことをぬしたちのおなし心にし給はぬに忍ひてものすることなんあるをさいひてすゑらんやは給ふは聞えんさてなんせうそこものしつる少將なかよりはなはたかしこしなにことにか侍らん御大事のことをの給ひ聞ゆへくまゐも人きこの給へるになん承りおどろきぬるおとゝふしゝはを山ともみ林としてもたゝいまこのことしつへしたゝこれになんとてまめやかにこゝにものし給ふなん院の后の宮來年御年たり給ふとしなるをえ承りすこすましうなんいへあこみやあこらに舞つかうまつらせんと思ふ給へるを人のふるせる手はつたへしとなん思ふ御てしにておほしたてられにこれを聞えんとてなん少將ひさしく思ひこそみてさらにつかうまつらぬことなりおのつから御らんすらん去年ふき上のはまなとにてこそはひとつかうまつらぬなとなくつかうまつるめりしかそのをりなと

もつかうまつらすなりにしことなりゆきまさもおなしこと申すおとゝ朝臣さへかうものせらるめれこそかの少將のゝ給ふともおほゆれ宮あこをは少將らくそむ兵衞の佐はいへあこ陵王はゝかるとろ／＼ならはしをのこともにさま／＼のものゝねともなとにあもせて出したてられすは生々世々のかたみのあたかならんとすならはし給ふへくはれんかの契りをなさんなといひかけていり給ひぬ少將良佐このことをすといかて聞しめしけんかゝることすと人にもきかれしとをといかにおほししりにけんと思ひわつらひてなほおとゝのおほさんことくるしうおほゆれは少將らう佐との君たちをいつところつゝこまとりにとりて少將は粟田といふ所のおくに鳥もかよはぬ山の中にこもり良すけは水尾といふ所のおくにおなしやうなる所に人にもしらせてこもりてならはすてものかきりおなしうはと思ひてならはす十二日より民部卿の宮の御方に舞師すゑてきんたち舞ならはせ給

ふわか御子さいそうらうおほとの丶こ君萬歲樂辨の君の御子ふさう樂なと舞給ふ舞の師ひてとは兵衞さくわんさほた丶なといふいちもちのかきりいと多かりこ丶は民部卿の宮の御方々たちさわく君たちものまいる舞の師ときのくふ君たちの御さこそくせさせ給ふかくて民部卿との丶御方の太郎君太平樂二郎君わうしやうなと舞給ふこ丶は民部卿との丶御方舞の師二人樂人十人はかり殿上人なと多かりものくひ酒のみ舞の師立てまふ君たちならひ給ふなり務の宮の御子太郎君萬歲五しやうらく舞給ふ舞の師かくのゑか多かり左大辨との丶御方の太郎君すらう中將との丶太郎君鳥の舞ならひ給ふ

このつ丶きに今本にはか丶るほとに十一月つもこりはかりになりぬ云々の六十一行あるはさかの院巻のみたれいりしなりそはさかの院巻にいたしおきぬこ丶のはぬきたるへきなり

このしも五十七行今本になし

右のおと丶の御方にて御たいてうすると定め給ふ日かねの丶ちめして御つきともからことものこと仰せ給ふをしきとものことなとこ丶は右のおと丶の御方御をしきのこと定め給ふ白かねのをしき二十御つきかうこなとそこはくなかのたいにすゑなみたりかねてよりまうけられたるものなれはいといかめしくきよらなり右のおと丶のとの人多さふらふかくてみちのくにのかみたねみかもとより錢まんそく奉れりよねはにしの御くらに三百石つまれたりおろしてつかはるくらはよつを三にはよねとも一にはせに多くつまれたりか丶るほとに月たちて十二月の中の十日はかりに年のはての御讀經し給ふきんたちなとはたみなしつらひ給ふなかのおと丶のひがしのかたをなんみたうにしたりけるそうかうのかたはきん達しつらひ給ふさらぬはさふらひのをのこともつかまつるもの丶うちにひんある所をなんそうはうにしかる廿二日より御讀經はしむこ丶はまんところなかつかさのせうよしのり居て御讀經のそうくのことおこなふせいしとも居たりをさめとのよりほそめさとめむらさいのりなと出すそうはうともてうとうしなといと多かりこ丶は大はんたて丶しすゑたりなかのおと丶御讀經の所は花つくゑに經ともつみたり大とくたち經くはる經よむせんしたちありこ丶は人々なかよりゆき

まさなかたゝうこんの少將ふたりすりやうともなさかすしらす多かりたうとうとははしめのよはゐふみのかみつきのよのものはつのかみかくて三日と云うまの時にけちくはんして大とこたち御ふせにしら絹十匹ともにおこなふよさりは御佛名せらるれはまたかへらすこれは東のなかあけて君達ものみ給ふよさりのれうにはなつくらるいと多かりかた〳〵君達はおひものし給ふとていそき給ふおとゝもになくいそきたまふこゝは中のおとゝ宮たうしのかつけものかつけたまふこたちいと多かりたうしのまへのものまんところいそく人々多かり大とこたちのひしあふみの守いといかめしうしたりみな〳〵はるたうしのまへのものともいと多かりこゝは佛名の所大とこゝちしたいしてひき居て七八人まゐるたうしさうしてことはしむしたいしともれいのなかたゝゆきまさなかよりおとゝの御子の君たち御こともいと多くおはしますさふらひ人いと多かり御佛名はてゝつこもりになりぬれは正月の御さうそくいそき給ふかゝるほとにこの九の君に聞えたまふ人々はあちきなく年のかへるをもくるしと思ひいかならむ御心のつきまさりおほさる事誰も〳〵おらくすしものいとしろきあしたに平中納言とのより思ふ給へこりぬへき御けしきはいとよくみ給へしりなからなん「ひとりのみよな〳〵しものさむきにはしのふの草はおひすやあるらんかくきこえさするこそいとおほけなけれこたみもおほつかなくと聞え給へと御かへりなし源宰相とのより「あさな〳〵袖のこほりのとけぬ哉夜な夜なむすふ人はなけれといとこそあやしけれときこえたまへれと御かへりなしかくて晦日に國々よりせちれういとおほく奉りたりこれはなかのおとゝにきんたちおはしまして雪の梅の木にふりかゝりたるを御らんして居給へりこたらいと多くさふらふこゝはまさころれうくはりみたまのいそきすまつきすみもちひなとあり宮はついたちのいそきし給ふかくて年こえてついたちに君達御さうそくいとめてたくしておとゝをかみたてまつりにまゐり給へりいといかめしこゝは東のおとゝに君達もまゐり給へり君達にものまいりたりなかのおとゝより東のおとゝに移り給ふうなゐ二人みき帳さしたりこたち廿人はかりこれはおとゝの御むこの君達なとにせくまいるおほみきまいり

いみしくすかくてのりゆみに左はあるしすへしとて
心ことにまかんすへきことの給ふをいかて心ことに
せんこそのかへりあるしを右大將のいときよけにし
給へりしかな三條こそあやしう心あるへき人なれこ
のしゝうのはゝよりめてたきなとちなしや宮さして
むかしまさになかたゝかはゝにて右大將のもたまへ
らん人おほろけならんやはとの給ひてかつけもの〻
いそきし給ふこれは宮かつけものたちてくはらせ給
ふ人々ぬふあるしのまうけにところにてすおとゝ
宮御ものかたりし給ふかくて后の宮の御賀正月廿七
日に出くる乙ねにになくつかうまつり給ひけるまう
けられたるものみつし六よろひちむしたんひやくた
んすはうなりかうのからひつなとおほいおりものに
しきなとすはこたきものくすりの壺すゝりの具より
はしめて御衣御ふすま御よそひなつふゆはるあき夜
の御衣からの御衣御裳御はしのをりたてちくしろか
ねおきくちことのまきゑしてうちのものいろにした
かひてありかたくきよらにならへすゑたり御てうす
のてうとしろかねのつき御たらひちむをまろにけつ

りたるぬきす白かねのはむさうちむのけうそくしろ
かねのすさはこからあやの御ひやうふみきちやうの
ほねすはうしたんなりみきちやうのかたひらなつふ
ゆはるあき御しとねおましなとい　今本一丁より十九丁まではいたくみたれたれ
はかうそあらたむへきなりかし　いとけ十こかねつくりのひらうけ十　右廿
御よそひ宮女御いま宮　同あて宮は十五おなし　同いつ
へかさねうへの　同やなきかさねのからきぬ　同わかす
きたり　同しもつかへひらきぬ左廿かくてまゐり給ひて
同宮きさいの宮に聞え給ふ　同ほと〳〵しく侍り　同ま
つおひたるうへに右廿一左大將　同うゑそむる人そ云々
幾世みるにか　同春の山邊になみたてる松のよゝをき
みに　同ほとゝきすあり左廿一池水のみとりも云々のと
かにものそ　同けさくるかりのふみに　同かりさへり　二廿
右こきつらね氷魚はらふとて　同ゆきふれるに人　同左衛
門のかむの君かけていのる廿二ことはしまれりあけ
はりうちふたいよそふふえきりつゝみひきゝつかく
そまひ人ともまゐる　同御をゝけひまいる　同御たいま
いる　右廿三左衛門のかむのとのより　同まかて給はて　同舞

人のまへまてまいりはてぬ左廿三かけにかくるゝ御わ
れひとり同ひとつくは君にさけ同院のみかとおとろ
きて同ふたいにたち給ふに右廿四よこそはさま〳〵の
さえのきかりにて人のかたちさへ同まひのてかなゝ
さきわき同少將なと右廿四かよりわらまひ給ふ左廿四りや
う王にまひ同よはひそのほるくもちかく同后の宮女
一宮云々奉りて大將同きさいの宮あてこそはなさみ
え同ちゝなとのくちあけ右廿五いてあなれやとてさう
のことをふたつしらへて同ひゝきたかくおもしろく
同左大將のおとゝ左廿五みやなめりかしとて同ひくまつ
のをゝ開同木かくれて風のしらへの松のねは同くか
ねのはこつほとものなかによろつの同ひたびへらさ
いしもとゆひ右廿六きさいの宮にまゐり給ひて御もの
かたりなと聞え給ふかく時も同しられさりつるにけ
ふ同まゐりなんとせしを同まゐり給ひつと同なかよ
りかまうけて云々するを聞え給ふ同大將とのゝ宮に
左廿六まゐりて侍りしときのよゝにや同かうなとも聞
え同あらねははなちすてし右廿七うけ給はれはゐたちの
同ほとこそこゝらもうちすみの同うけ給はりとため

て同のとけからぬそのちい左廿七ときわかす云々聞ゆ
れと同いましてよひもなと同このあてこそといふ
左廿八同の宮なとも同かしこにもえさもらはせぬ同聞
えたてまつれよと同宮あさましう同きさいの宮いて
やことに同はつかしけなる人もなし右大將とのゝ廿九
右さてはことなるもなかめり同みこたちには女の廿九
左しもはほとにつけ同かすみのことく同けふのさう
のことの聲は右卅なかたゝらかみゝは身にもそはて同
おほめかりつる同かくはかりたゆけに種の左卅かはし
きゝのまへになる思ひ給ひそよなと同また春宮より同
の給せたりあて宮云々あまらぬはなかき心の右卅一聞
え給ふ人々さうしいもゐ同ふちをもしらすまとひ
こかれつゝ同くさまにつけつゝ左卅一人つてならて同
聞え給へれと同右大將いまは同あれたる神はねきつ
れと右卅二はるのゝこりは同心にまさるたにしなけれ
は左卅二いかにせん〳〵と聞え給へり御かへりなし同
三のみこあめの同とかめらるゝにや同しりぬれとか
そふはかりの右卅三ふえいつるわかゝへこともなりな
ゝん同ときめくことふたつなし左卅三つかひふみ日記

かきなとし又かたきふみおもしろふみをもかた時に
つくれはおほやけにはかしこき同むこにとり給はん
との給ふを同ほこりかにせまれる時にはゝふむしな
りともこつたふ鳥ともおさしいふそかしかしらのか
みに同たすくることもなしはちをすてみを同いさゝ
か人々しくもなれ同てんたうひとつはかくしやう
のちからなり右卌四もとよりおよひかたかりし同もゝ
しきをみならすこと同あけのきぬゝしらにさらにみ
むすめあはせよかし同左大將のおとゝ同しゝ給ふ人
うつくらせ同まうちきみたえすなのりしなとす左卌四
ほのほももゆる同思ふにむかしのしさらのこゝろみ
に同いて立てこそはいまはこのみたちにもさむらふ
なれ同身よりほのほは同こと人にはなみせそと右卌五
さらに侍らねは同つかうまつりふみも云々みやあこ
君ものゝしことに同すて給ひつたゝこそのあさりも
同水にして奉り給ふ同
卌五左にかくて源宰相は三條の云々うら四十一右
とてなけきわたり給ふまての百十三行はさかの院
巻のみたれいりしなれははふきぬへし

かくて三月十に日はかりにはしめのみの日四十一右上巳
のはらへしに四十一右百五十石はかりの同うらんをう
ちつけ同ぬるものなくして四十一左あて宮に奉り給ふ二
には大ゐとのゝ君をとこ君たちに奉る三には御方
々云々ゑらはれさうそくとも心ことにとゝの
へたり又の御舟に左大將との頭中將源中將源宰相な
とひとつには御むこなゝ所奉る同よれるあをやき四十
二なかすにいたり給ひて同民部卿の宮の御方同左近
中將とのゝ御方同左衞門のかむのとのゝ御方同とう
さいさうとのゝ御方同右のおとゝの御方きゝわたり
云々同わかなけきをは四十三右はらきたなくもなとて同
御使に給ふはやく同うらのまゝに四十三左まさいらく所
々に御しようかして同みなこんかくにてうして
同くもかゝりかな四十四右かへしけるけむ中將同おなし
さまにてらして同おほうなはらに同かへすをあはれ
とて同みそきしてみぬより人を同なみたてるまつの
ねたさを四十四左かくをかのみそきなるらん同夜にいり

て月おもしろう四十五右ちりしきたるうらに同せしむ春さへほとやなからん同式部卿のみこ云々みかけるをにしきとやなほ四十五左むれてきぬけふをまたぬは同源さい相なみにきほひて同たちぬるはよる〳〵浪のうけはなりけり同所々もみぬ所なく四十六右きしかけことに同と聞え給ふ四十六左かくて源宰相かもに四十七左右大將のぬしはせより同ゐてゝそつくも同もろこしもとかいふ同りうもんよりとまつおほさるゝ四十八右しのひてまうて給ふさるまゝにさかしき同まうて給ふにひちかさ同まゐらんこそいとをしけれいつも四十八左こたひはかりすけすみにゆるし四十八左聞え給へと思ひて同右大將の云々いのり給ひて云々くわんし申給ふいのりなゝし給へらはいさゝかことも云々くわんし申四十九右そものもの給はねは四十九左ちかくなりにたれは同あかほとけいと五十右えいたしたてられ同こゝになけかれん同こゝにと聞ゆるは五十九はしめ私の君にて同こゝにはこの事同なとしてかく聞え給ふ同御返事聞え五十一右ふかくつゝき物同兵部卿の宮より同けふり立かしらの

雪は五十一左とかめぬこそは同きみはちかき社にはまうてぬ同しら山まてまいるに同まこふころかな同源中將は五十二右おほつかなうのみ同まさるこそ同藏人の少將うさの使にさゝれて同神もうらみん同君にかゝれる五十二左しかへのくらひ同心のちりは山となり五十三右ならぬ人さへうきをは多かるを思ひしらせ給はしやなとかきて奉れ給ふあてみや同かせたかみあやうさうみの同わかみつくきは五十三左なとかいまは同あかほとけたすけ五十四右さきによけなから同やかてこなたに同なともちかくは同いみしきことはの給ふ五十四左よそなから聞えてしかなと同御かたきこそならめ同おもほされ給はんには同つかさかうふり給はり同ことになん侍る五十五右なるともと思ふ給へしかと思ひかくへくも同すへきかたなく侍る同ふたかれるむね五十五左聞え給へ思ひ五十六右なたのまれそよ五十八右さかさまにならん同すのこにはめくりて同いとほしと思ふ給ふれと五十八左源中將兵部卿なと同し給ひぬるひまに五十九右あはれにかなしと思ひてかくいひてかへす同よひかへすには同ひえたかをに五十九左あるかなかに同きをつゝおこなは

せみつからは同まさこ君のはゝきみに聞え六十右みな
もみちともの同御前の草木あるは左同はなのちりなと
し六十左すのこにこたちなと同あき風の身にさむけれ
はつれもなきをしかの聲のとほさかりゆくそて君み
る人もなくてちりぬる山里のちくさの花は世をはう
らみしめのとひくらしのなく山さとのゆふくれはも
の思ふそてにつゆそおきそふ云々源宰相こさはてゝ
同こさしてかへりいつる六十一右ひはのつしにて同頭中
將いりぬへきうちやみちやとあしひきのりうけの山
をたちならしつる源宰相うちわらひてつゆにものお
きそふえたをなけゝともかひある山はわれもまたみ
すおかしからん同なほこの家みれと六十二左ふすよりは
云々山へにをるん同あはれにもうしなひ六十二右やとを
かへてそ六十二左居給へるに中門同いかゝいらへ聞え六十三右
わらふたにかきつく同たひといへは同いふなるなと
いひてしはし同よしつきたるさまにもみち同こはい
ひなと六十三左さらにもかりと同かたらひおきて六十四右かく

いふほとに同色ふかさ木々のひま〳〵六十四左君まつ
人に同わか思ふ心同みちにもと思ふ給へてなん六十四右
ゆとのに出給へる同なくならはやとの給ひしらせし
を同

宇津保物語玉松四之巻

第九あて宮巻

かなしきこともかきつらねてひこゝにかき右一たゝこのみうへをは左一いますかるか同しきにつけても同られんと思ふ給へるほいにかなひ御世の同とゝなく〳〵聞御宮右二おとゝそかいとほしき同となりと同さわかし宮これか同人つゝしみ給ひて左二おりたちて同御てうと御よそひを同みな四位あるは宰相のむすめ同二十餘いうちさうそくから綾たゝきぬひとつませす同ひはた色にもみちかさね右三よつにちんのさしくし同よつの御けつりくしのくゝ御くしあけの御てうとよつ御すゑ同ありかたくて同からのあはせだきもの左三しろかねのはしひさつかひ左二はひ入てくろほうを同かきて奉れたり同そわうの君に同けふいくしほと右四いひしらすうるはし同こゝむれはゝかりあり同なるやうのものなり同かつは御まゐりのこと左四このまゐりのことゝも同さはれ今ものし同さものせんかし右五い

みしくすかた同きぬをえうせること同そわうの君左五さなおほしいれそとて立給へは同立たまひぬるを右六なしきこのかゝる右七御參りのひなん同物ないひそとて同心つよう思ひて左七あやまちにこそ同くたらあゐの色同いとほしなと右八ものとはせつれは女のりやう左八まゐり給へり同はつるに湯つゆはかり同あすはまかつるとも右九君たちのたち給ひ同ものはつかにいひよろこひ同こかねつくり十にうなゐ車一同おほけなき心同もくの君左九いとほしくそ承るやと聞えて同誰もとまらん右十おり給へりおとなは同あゆめりこれは御つほねうへに同もくのきみとものかたりしたり同きさいはらの四の宮左十左大臣との同平中納言とのゝきみかくさふらひ同四の宮右大將とのなんとき〳〵同かたちもにくゝ同みこたちまたうまれ給はす同つとめて春宮右十一あて宮ね給へるやうにて同かゝるほとにはらみ給ひに同御つほねみにまゐり給ふあて宮の中納言若年十九そわうの君云々宰相の君同うなゐなと御せむに同さうの御琴同御ことあそはす同ら

、、のなと聞え給ひて左十一　、、はしてなん同らうたきこ、
、さかなおほやけにも同さはいふなる同さらぬ、、さきよ
り同御たいのうちしきは花文れうに右十二　ひわりこ五
十たゝのわかこ五十ひわりこは右十二いひ四石はかりい
れるひのき同ほゝのさにくろかいのあし同わたき
のものに同かひつもの同ほゝのきにひらきのあし
左十二　一石いるそ十にさけいれこてのせに同しらはり
はかま同しろきすきはこ同いれたるものいひに右十三
めてたうして奉れ同いしつくりて同わつらはしきわ
さ右十四　あるへきに奉らせ同四の宮の同まうけられた
りし同わりこここてなと同御かへりに、、、、、、はりしこまけて
、、、、、うけ給はりぬ多く同このときすきさりせは左十四　うへ
いとちかき同みやこのかりはいつち同あかてのみ
十五かりのたむけも同かへれるかすを左十五女のよそひ
右かつく同わりこかたつらは同こゝはあて宮同ひわ
りこすみもの同いとちかし同かまうよにはあらすや同
こゝはおとゝ殿上人右十六　これは右大將との御つほ
ね大君の御かた年十八かたちきよらなり同わりこ二、

、十か云々なまめきて同これは四の宮の同とし十六か
たち左十六　おほすかるそや同こゝをたちしほたちて同
みつからもおはし右十七　少將をこひて同よろこひて同
なとかゝく思はぬ同なかたゝらかた時同われもふち
せを同とし頃日にしたかひ右十九　御ふみかき給はす同
たふとけれは同あるなかにおかしけ同あさりのよそ
ひ同ことりめにちかく同まゐり給ひにしよし聞はて
ゝふように左十九　ありしやうにも同ちりと碎くるたま
しひに右廿　ふるえの床に同たゝへても左廿かくおほ
つか同をり〳〵につけて同中將もいましたり同まゐ
り給へる日同身はよはくなり同いひてゝもつひにと
まらぬ水のあわの右廿一　あやしき心のみえしかは同い
とほしうなん左廿一　ちいさくをもつゝみて左廿一　いさい
とほしく右廿二　かくて治部卿の同御むかへに同ゆすり
みちていかりはらたち同いふほといかてか左廿二　ます
かつたなき同おのかめかねを同よにうれへ奉らん同
さかひまても、おひつかはされる同おそる〳〵申右廿三
たゝ今とかなんなむちは同かたはしよりおひ拂ひて同
いひかひをさくにとり同かちよりまゐりて同さかな

きこさをつくれ(つ)り左廿二ぬしを(ナシ)いつのこんのかみ同そ
こはくの(ら)ことも同てこし(う)給ひて同こたいを(を)つち(ぬ)に(て)な
ける同ひいのせうすけなさ(ナシ)して同すゝ(ら)らてなく〳〵
いふ右廿四あめのしたに(ナシ)そしられ同今(を)は大臣の同家を(え)は
しめて同つ(ほ)とめて宮の(大臣)、、すけを(ナシ)左廿四花のなかなる(る)しら
つゆは同思ひしもせし(卅)同あてみや(ナシ)まつたきと云々
廿五右まうけし給(たふみ)ふ、、おとな同つ(を)いかさね二十(にたに)しろかね
廿六左いかめし(う)こ(て)てのせに同すきこめのおろし同めさ
ましに給へと(ナシ)て右廿七かしこく思(ひ)ふ給へ(ふ)るに同るりの
つほのちひ(い)さき四(皿)に同四、、(こ)の宮より左廿七みなすき給ひ
つ同あつめ子を(ナシ)うみて同まことかさ(る)て同か(は)うせすと
も同所々よりいと(しも三十四行今本になし)きよらにあまたこてなといと多く
てかんたちめみこたちいと多くものし給へり御そ御
むつきなとみなかつき給ふ七日の夜春宮よりいとき
よらにいかめしくてこむのすけを御つかひにて御ふ
みありおほ宮御近事聞え給ふ右大将とのより御前に
したんのついかさね二十ちんのいひけ御つきともろ
くろにひきて御そむつきなとは例のこと大ゐとのに

おとらすし給へり頭中將しろかねのいかめしきはと
きになゝくさの御かゆいれてすはうのなかひつにす
ゑて奉り給へり源氏の中將またさまかへてまうけ給
へり内春宮の殿上人のこるものなくつとひたりかむ
たちめみこたちさながらおとらず御前のものいふは
かりなしこて二百五十貫おきておほきなるひつにい
れて出されたりかみしもゐはせて二百餘人はかりあ
り上らうには五貫中らうは三貫下らうは一貫つゝ給
ふ夜ひと夜うたひのゝしりてみなかんたちめみこた
ちよりはしめ奉りてきよらなる御そに御むつきそへ
てかつけ給ふかくて大宮御はそのせきり給ふ左大辨
とのゝ北のかた御ちつけくらのすけのおもと御ゆと
の御ふみ式部大輔御めのと三人一人はわかむとほり
二人大貳のむすめ御ちつけに贈りものなつふゆさう
そくにさゝぬあやはこにたゝみいれて式部大輔に女
のよそひ一具よき馬ふたつ牛ふたつこゝはなかのお
とゝちやうたてゝあて宮しろきふすまきてふし給へ
りめのともひきあやのうちきひとかさね白きあやの
もからきぬきたり年二十はかりの人かたちよりてゝ
は人々の奉れ給へるものともいと多かり人々ものく

ふ大宮女御の君おはすものまいりうちまきしたり式部大輔ふみよめり辨のとの丶北方御ちつけにまゐり給へり左衛門のせう弓ひき給へりこ丶は湯殿の所すけのおもとす丶しのうちきゆまさしてゆとのにまゐるしろかねのほときすゑて御ゆとのまいる御むかへゆ内侍のすけのおと丶まゐり給ふこれかれかむたちめみこたち殿上人こなたにおはすしろかねのけにこてのせにいれてつむかんたちめの御前には參議殿上人五位には三箇六位なとは一箇つ丶これは宮の御使に御ものかつけたり人々たち給へるもしな〳〵ものかつき給へりかくて月日へて宮よりせちにめしけれはしはすはかりにまゐり給ひぬあくる年の二三月よりまたはらみ給ひてをとこみこうまれ給ひぬ御うふやしなひさきのおなしことなりしはしありて春宮にまゐり給ひぬかくて時めき給ふことかきりなし

第十初秋卷

内にはまさりてけうはおもほえんいさ中將云々われも中將も一右けふいとまにて同まゐりなんと思ふ給へつるに左一おほみきまいらせ同まいらせ給ふかくて同おと丶右のすまひともは同かすのことくなんまうて

二右こともなきものとも同すこしみ所ある同さるついての同ことなく心つかひ二左なみのりまうてきたり同ほてゆきつねか同いてたゝんせちゑ同右大將されは三こ丶にまゐりこしはむかしこそ同はつかしう思ふ右給へし同御うしろみなすへき三左たちなれて同わか宿は同ものいひかたりなとするはくの女同思ひわつらへるか心とゝめてかきたる右四みやす所はかりの女を同内宴のえかなひ同にるものなくあはれになん左四つひにうとくて同いと丶しくたましひ同あることならはこそ同時なとおなし右五いとすちことなりし同もとにかの女御同かけ侍らんなとこれかれ右六給ひけるなかに同ゐり出てもち同それにいれてこのとの丶はせからの右六いさ等しくて同とかの御時の左六今めきたるすちなとの左七なかた丶をこなた同こくはくのしやう同おもしろきなん同せすとも聞給へし左八まことその日もことにうすやうにかきたる同せちにせしまれし同いてやこのそらこと同さとよりはさやうの同ならひ給ふへくこそは右九おほさるれははりかは同御たら

しあそはす同うま十疋なから左九右大將とのはたかや
に同あてんの心もなく右十たつましさはかり同いたる
いをこめに同あつかりよりうとこのうまを同になく
しひ給ふ左十はかまひと具つゝ同御たか二つとのゝた
かゝひにすゑさせて同かつきてかへりまゐる同大將
とのはなさけなきやうなりしひて右十一ほそなかそへ
たる同いたはりてさふらへ左十一右大將とのもなみの
り同ことのありし同左右のとあるに右十二まところよ
り同まうけさせ給へり左十二かつけものならは同なにこ
とをも同おとらしとなむ同ふちつほにもの申さは三十
右かのつほねにはすこし同このすまひのこと同こさら
ましかは左十三すはうちんなと同御さうそくのことし
たまふ同こゝはすまひ人同その日頃は左右近衛同こ
とをのみにてたの同右近中將つらすみ右十四人にまさ
れり同ついたちうちのみこと同みやす所の御つほね
同もし多くえん左十四たれにか仰せられん左十五なして
もたらまほしく右十六われもたられまほし同まめにし
もあらん左十六こさわりやとて同事ともなんある同な
かにおもとに同ことわりなりとみ所そ同兵部卿のみ

こかへりて同しか給はすなりにけり右十七ありしかは
たゝふみはしり同いさやさ思ひはるゝ右十七をとことあ
るかあしくいはぬ左十七ありともきかしかしなかたゝ
同たゝにすこし同御いらへされはかの右十八返事をま
うくは同思ふ給へさりしを同多くすゝめりしかと同う
へあはれなる同すゝしのあそんの同思ひしをこゝろ
さし同すゝしのあそんえこそ左十八位はなおもほしそ
左十九かくゝしたるさえに同さらめなとの給ふ右廿よし
あるわさせす左廿しかしなんさため給へ同ものになん
いのち同るいたいにもして同九日にはなりなん同さ
てなほことなる右廿一さみたれたるに同うちふきたる
同五日におくるとなん左廿一ますものなくなん右廿二し
給ふほとに七月十日はかりの夕ひかけなほいとあつ
き同しるくみゆる風同時にうへかくそ同みやす所み
すのうち左廿三うへわらひ給ひて同そよと聞ゆる風な
かりや同すくさいふなり同これもかへしやすき右廿四
過にしをなにしも吹の風をいとはん右廿四これをそい
ふ同かへし給ふなよ同御ともにまいら同御ともに本

れ同こゝはみやす所うへなと同右大將は宰相の同ま
かて給ふ御むこも御こともゝ北の左廿四 こなたへおは
し同しるつかう奉れと同ほとに夜ふくるもしらずな
りにけりみやいかにふちつほに同こともかものし給ふ
同さるいちもちの右廿五 おららぬ聲に同もとかしから
すや同あはれなるけしき同みせよやとたはふれ左廿五
いまこそをこそはしか思ひ侍れうへ仰せらるゝこと
あるやなほいまこそはすゝしの右廿六 すゝしにと思へ
とそうの同あそんにいつこかは同いとひとしきを廿六
左思ふはあてこそに同右大將の給ふを同ものしたら
は同こくはくやしめしらしある左廿六 すくれたる人の
同いとほしけれよのつね右廿七 ひとつこにて同御けの
いたはりなと同御けのはつかし左廿七 このいまこそ
同ちひさくより同そてそちこそは同右大將のみ
給はんに右廿八 そかうちにいまこそは同にすこそはお
ひいてたれ同おとりたるをや左廿八 こゝは大將との同
ろなう御まかなひにこと〳〵もあたり給へ同うなゐ
ともふさなり右廿九 仰せつかはせにけん同みやす所か

ういたちまうのほり左廿九 聞こしめしけるその日あし
たの同式部卿の宮の女御よりい十人同日のよそひも
同うなゐにてなん右廿七人は御せちのめし同みやうふ
うへゆるされたる同左右近衞大將左廿左右近衞の樂人
同しつゝ左右兵衞のあくうち左廿一 さふらふかきりな
く同きよらなる御かた同そこ女ふたあるけな同花
文れうにからあや同かいねりのうちき同こくはくの
人に右廿二 右大將聞え給ふ同御めをくはりて同なかに
こそありけれ同おかしきことかたらはせんに左廿二 ま
ほりおはしますに同花のあるにつけてとに同御心に
おほすことありけれはしらず聞えにくゝなんてこ三廿
右人しれず心ひとつにおほすことなれは同おいのよ
はひに左廿三 かくさふらふにおさらず同御らんしとき
て右廿四 承香殿をおほしたり同かへたるかはと同しり
給へさりつれとも同とられ給へりみこたち左廿四 中少
將かくし給ふ同左にたゝな云々さらになみのりか同
まかりかへりに同右のすまひ同なしとおほしてこた
ひの同また日たかしその右廿五 なほこたみはつかう同
おもしろく御覽左廿五 きしろひいとみ同みかとこの君

の同けふはたゝゑみす左卅五　女もふかきらう右卅六　出て
はえあらす同そこにはいひ給ふ事やあらんとする卅六
左　開すこし給はて同やかてたふれぬる人も同かくし
あまるけしき同さてあらんにそ同けになてうと心み
右卅七　まいり給ふみやす所同かすをかゝせむ同はねや
かたはに左卅七　左大將に給はり給ふこり給ふとて同き
えはてゝ夏をもすくる同右大將に奉り給ふとり給ふ
さて同あるへきとおほしてしひて同ゆきつねかあひ
なん左卅八　左右とあらそふ同なみのりにたまひて同こ
ゝらのこし比右卅九　ここ人はえつかう同すゝしなかた
ゝ左卅九　すゝしをめすすゝしその日同さうそきてまゐ
れるを同おもほゆるひになん同思ふやう今すこし同
こそにまたあるまし同すゝしのあそむと同すゝしと
し比右四十　奏すましきことなり同いふをうへ聞しめし
てすゝしの左四十　上手はけに同さえはそれに同たいた
いしく申ことなり上すも右四十一　仰せられて給へはすゝ
し同かへり聲になして同六十てうはかりこそてとも
の同すゝしのあそむ同きしろひたる人左四十一　すゝした
にいふ同よしおほせみむかし同ふえふきせめてから

たるあそひしをるに同ふちつほは春宮に右四十三　たゝい
まわつらひにて同兵衛やうなきもの同なけしにおし
かゝりて左四十二　まうのほり給ふのほり給はぬ同いかゝ
なとゝはせ給ふ同あらんとてまめやか同なやみ給ふ
こさありて右四十三　いとこそみにくけなかりつれ同し侍
りつるは同いとよのにしきの同御てつからまつり給
ひて左四十三　まかりわたるとも同こはつくりはたあそは
す同白たへのなと同あらんかしな中將こゝなして四十四
右四十四　しらへんされと同すれすのみあらん右四十五　いかゝせ
んつひに御覽ししらしとやすらん左四十五　この頃は月に
そへて同おはするかないなや同あいなきはいもとか
なゝなりや世の中同あて宮からうしていひて給ふ四十
右六　物のやうに同それはおとにならん左四十六　秋風のをさ
の云々こそさやくらん同もとかしうこそあれ同左近
のあくにて右四十七　よもまかてし同うへ右大將に同源中
將あそむも左四十七　すゝしのあそむ同すゝしなとの同よ
りすみのきみにあひ給ひすゝしは同かれはたとさい
ふすゝしと右四十八　なかたゝおはせぬと同にくめりすゝ
しとて同あなかまやすゝし同すゝしおまへにて同こ

うしにたりや同うれしけれなと物かたり四十八左すゝし
かけうあるかな同やういしつる所同すゝしねたきと
も同かくてすゝしも四十九右もとめゝくり給ふ同ちんこ
とに宰相中將や云々このゑの同つかはしたれは
四十九左御つほねともをうかゝひ同さうのことひきすゝ
し同みつけ給ひて同御くちつからめし五十左おとゝの
ちにかねまさ同御けしきあしうて仰せらるそや同す
ゝしの君をは同こゝはふちつほなかたゝすゝし同四
のみこ姫宮五十一右女たちさなから同四の宮そうさう
〳〵し同ものせらるめるものを五十一左うみのたまもを
同うみもをは同春宮四の宮に同あらぬをとて御前に
同ふちつほよりまゐり給ふ同ひたりみきりの五十三右も
とめにとてありき同左右近衛も立て同あそひてまゐ
る同すゝしひとりなん五十二左そこらの人に同左近大將
左のあくにて五十三右ことありと仰せられ五十四右こもられ
つらん同たゝやすをこそおほしかけゝれな五十四左花み
かて云々たひにふるかなつらしとこそ同ものをいは
せんと五十五右のりものにかせん同なへての御さえを

つくして同いちにし給ふさえにおはし同これにいか
てとおほすなかたゝはた同この御こにかたむ同けう
ありとおほし五十五左のりものつくのへと同たゝにはあら
しかし同とくうけ給はりて同たへぬへきことならは
つかふまつらんえたへぬことなくはそのよしを五十六右
たへぬへきことならは同なんや仲たゝ同うへすゝし
に給ひ同ことなりこれさらに上にふたへ同このゐん
をたちかへり〳〵同ほうらいのふしやくあくまこく
のうとむけを同みのたへんに五十六左仰せことなりと同
さりとも今ほうらい同ふしやくとりに渡らん同くわ
ん女たに同おひしまにうかへ同くわん女えおとる五十七右
くわん女いてくる同身のつかれありなん五十七左つかひ
にはるかなる五十八右心ほそからんまたいきて同それか
なけき思はん同かひなからんかし同王母かいへにを
とらす五十八左くわん女こそ同これならぬとなに同なかた
ゝかはゝに同聞えさりけれはくちをしく五十九右らうに
てかたち人の二三のものゝ同そのそうのてはまつか
たのみ同ひとつそうのては五十九左心はやるかた同それも
さるへき同なしやたへてなし六十右仰せらるなかたゝ

同たへてそのすち同それをこそはいまの同わすれに
たらん同なさゆるしけなく左六十右大將み給ひて云々
なさきはかり仰せらるゝものを同はひのりておさゝ
の御せん六十一右さいしやうの中將同その日御くしすこ
しほしかねて同すのこについゐる同まゐらんかしわ
いてもにし東にやあらん六十一左おもしろきこさものに
はにねこかたはたれほすこし同まひのしものゝしさ
いふ同はやくいて給へ六十二右なりさここそ思へ六十三右ここ
をは聞えてん同あらずはやさ聞ゆ同いさゝせ給へ同
なさいひゐたり六十三左なかたゝか身には同さゝひさつ
かひになん同よるひなきになん同ひらうけの御くる
まにひさたまひ同うまのこんのすけくにさき聞ゆ六十
四右御うまやなからん同さうやくをせしさも同ちから
出同いまはおろし給へぬ同さうそき給へや六十四左すきさ
かし給ふなりけり六十四左御みおそひはいつれ同うつしを
おきて給へなにせんに同れいの御みおそひ奉れ同か
ひけつり花文れうの六十五右御もにからもかさねて同四
人下つかへ六十五左ついゐ給へるを同わすれていつくな

りし天女そさ同なかえちかうそひて六十六右御せんの人
はうちに同妹の君の春宮に六十六左みやたれそやさ六十七右う
しろめたさにくゝに同さもこそさうたかはさらめ同
かすならすおほさる六十七左心こさにおもほさん同よそ
ひつゝにしの六十八右なかたゝすけすみのきみ同人こよ
ひまゐらする同おさゝの御くつ六十八左おもほえすおもほ
ゆる同いつくにをりよさて同めをもみるかな同御几
帳をさきに同中將くつはかせたてまつりもさらせて
御くしつくろひかしつきたてたるさまめてたき同お
ほさなふらけたせ給ふ御さいまつさもにけたせ給ひ
て六十九右みき帳のもさにしさね同あらはるゝにこそは
ありけれ北方いさ六十九左給はなんさ思ひて同まゐらせ
給へさも七十右思ひし時はめなれ七十左かたきこさものし
給ふめれ北方なにこさ七十左ものし給ひぬるを同さら
にゆつるなさ同かくこそはの給はさらめ同なかたゝ
のあそん七十一右けしきにも出さて同よるなれはこゝも
同さらは聞えんかし七十一左ものもおもほえすものの忘せ

ぬ同けにそうのうらに同聞えんとてなんとて同給ひ
つるをいひんの同とゝめ給ふてなく七十二右 させたるに
や侍らん同給ふことはかなけれ同しるきよめをはま
たかた〳〵同しつき給へらんとさらにわする七十二左 さえ
といふものわかくより同の給ひてよそに七十三右 水をあさ
み七十三左 秋のしらへも同はやうこそさいと七十四右 いさは
かなきてとも同うけ給はれはまして同すこしよろし
からんて同こゝにかれらに同ことそへる御琴にて同
ゐんの松はらの七十四左 世にてふれ給はすこの中將同つ
かうまつられけれと同きんに手ふれ七十五右 むかしのと
も同時にみな人同このまゐりつる同さかりのよとい
はるゝ七十五左 右大將のまゐり給はん云々しらさらんや
は七十六左 おとゝもさおもほし同なかに心あらん七十七右 な
かたゝはうしまうし同ひくへきてなり同かへしてか
きかへ給ふ七十七左 ことわりなほくかい引同なきにより
て同后のなかにねかひ同こく母も婦人の中にも同みす
るに此一人七十八右 こく母をと中同天子はことかへすと同
こくもを給ふ同こくもこの國云々こかのねを同いのは

らにあそはし七十八左 てにひとしくなん同よろつのこと
忘れて同物のあはれなん同なかたゝ詩すしなと七十九右
すこきねを聞はとわり七十九左 天皇の正妃として同せき
ゆるしぬる國王同おとゝらめ同みなゝみたをなか
し八十右 あはれかり給ふこと同すゝしなかたゝか同九
日のろくをまた八十右 すゝしなかたゝは同こそはゐた
れ、とて八十左 するあきらとゝきつけて同右のおとゝに
八十二右 そうにこそは同おもほしよりて同はなわの松は
同いさやさしはかく同よりたりつるとはおほとす同
はなわより云々むへも小松は八十一左 けしうそこは心得同
かう御なせ同大納言兼右近衛同民部卿源朝臣とね
まさ八十二右 高砂の同中宮大夫從三位八十二左 かきつけて松
風のむかしの聲に聞ゆるは八十島よりや吹つたふら
んなと心々に御名してくたりぬかくて北方はこかの
てともにしらへ同こかにしらへかへて同なともなほお
もしろからん八十三右 聞せ給へ、まいてもいとのとしのう
ちに同とものつきんことの八十三左 こゐたえず同おもと
にもくききと同むしの聲にても聞由となゝは八十四右 水

さなかれんそこにさおほせかし同いさきよらにて八十四左まいるせんかうの同左近のさねよりの八十五右この君天下の同むかひてしんいうそく同てらし出したる同いつくよりもく八十五左いてきこの御せしき同みこ逢なさの御子同御もさにあるおさなわらはなさ同いやますく八十六右に六十もたりたる人同あるしし給へる八十六左かたゑかのをさこ同にはかにらうあるせんし八十七右女官さも也同うへはたいかて同思ふをさる心も八十七左いさいさほしきこさ同すこし今めきらうあらんものは同かみに御ものかたり同給へやさてそこにまゐり八十八右すへて女官のことはなにことにも同いまはこくもさ同わいてもなかたゝ同みやす所はねかひに同やかたにすむとも同侍らはこそあらめ八十八左なにかさゝらなん同ものおちはすれ八十八左さて思ひてあれさ同すくしかたきことなん八十九右この月にはある十五夜に同たなはたおくりて同御まへわたりに同ほたるをさらへて八十九左御覧しつけて同かたひらをうちかけ同たゝつゝまれたれは九十右わさやさうちらさひ九十一右しいたしたるきえなさ同ほのかにみるも同あけくれもひさり九十一左ひるさなる聲九十二右またみすのみか同うえずさかきく九十二左なほまかて給ふ左のおさゝ同はたちたいおほひあふこはたにもいはすつくも所の同御からひつさもに同らうのあやつき同さゝのへてうし給へる九十三右かうちすくれたるは同えなたゝりしいたすわさ九十三左五さくはかりのひろさ同にしき花文れう色々同おかせ給へるくらん九十四右あふこたいおほひさらにも同めてたくてはかけこゝのへて同おなしくしつかは同きよらなり御そこもはかたきの同御うはきなさいへは同もんにおりてこれもかゝるようもこそあれさてまうけ給へる同御はこもにいれ九十四左御送りものは世の中に同秋の山をくみすゑ同とりさもすゑなさ九十四右くみすゑひさよろひ同くみすゑたる同おひたるしまさも同くみすゑたるすきはこ同すゑひたひより九十五左もさゆひ御くし同めてたくて六たかつき同

第十一田鶴群鳥巻

大將侍る所に一右さらに聞かさり同物せらるれは同給ひつるをつみに同ことにこそあめれ同まゐりまかてする一左なほすゝしなかたゝ同すゝしかほいの同春宮より

せんしなかりし前より奉れと仰られしをかへるせん
しなんあるとて左一ものゝちひさく同さあらさらん
大將今侍る右二ときしわれそと同のほり給ふこゝはし
ゝうてんの女御同こたち多かり左二いとほしきと宮い
まこそおこらす同さむついても同あるはみものすち
はさなるまし同うへもさおもほして同あらぬ末に女
この右三ここによきほとに同なん思ふちここそは同な
との給ふかくて左三こもりおはしまさふす同中將にい
まこその君同兵部卿のみこに十二の君は同十三の君
をは右大將のぬし十四の君右四十宰相にとおほして同ひ
とまてかたちこゝろことにとゝのへ同おもほされた
るらんなと同かけても聞え給へは同さあらむを云々
あてこそにもの同あや綿ともして左四こゝろはえさた
められて同そのきみたちゐて同らひさくより云々な
らはしゝほそを風をわすれさふらはれたる右五忘給ひ
にたらめと左六もの侍りける同つかうまつりしかのな
む風はとれところ〳〵しくちくたいして今宵のほそを風
は同宰相にまいり給ひて左六たついかにみん同式部卿

の宮にまいり給ふ右七すゝしくのみもおもほゆるかな
同右大臣に左大將左七大納言には左衛門督中納言にはす
ゝしなかたゝ權中納言にはたゝすみ同まつ右大將の
ぬし同とゝめてまち給ふ同とするをこれかれ右八こ
ゝは右大將との左八かくて北のおとゝ同かくて藤中納言
まちつけて同とのまてひたりのおとゝ右九ゆたかにて
へたまふ左九おもてにこむ〳〵なりあやにしき同かく
て一の宮もいまこそ君し同御心さしふかく同御門の
ゐたちて同思ひいりてものも左十月み給ふとて右十一せぬ
わさなくしつへさ同いきてめくらひ同とのむねけに
こいふ同いかになりにたるらん同こゝにものせすな
りにしかはそれたに忘れなんとしける同いてやかた
くこそ同二の一條なと同やうにこそあめれ同一の宮の
御もとにくら人右十二からのてうふく云々浮文れうの
同からのはようも同わさとのてうふくに同かしこま
りてうけ給はりぬ同爲すまひかうと云々いさかしこ
しこゝは左十二こゝは大臣二所同宮ちこ君御ふみ同御

たい四よろひ云々御まかなひ宰相の君すけすみのたいきやう同右近の君なとして御ちやうに右十三なかさりにあつまし左十三しもにつき給へり同忘れにたるやなとの給ふ御前に御こと〻も左十四つかうまつり人同かしこのき〻給はんによきことこといはし同をさせんさて源宰相同大將とのに宰相中將君平中納言とのに左衞門大輔右十五侍るめるをいかにをむと聞えよと左十五源宰相とわためらひて今はからふようの同たつねさはせ給ふ同まつなつかしくなん同おいのよにまたかなしと同思ふ給へなけきし右十六かきりと思ひて同かたく世の中同おほせことはかしこまり左十六めくらひ侍れともえなほ同花におくとも同侍りけんとなん御つかひにはかはらけたひ／＼同をのわらはつかひて十七なかめてゐる同山はやしをも左十七思ひまとひなけき同かくの給へるなんとつくりありさまをみ給へるに右十八かへりみよとしは／＼の給へは云々いか〻はせん左十八みたる所あれは納言宰相にも同良中將をものせん同かくてあなたの十一君を兵部卿の宮に　十

二の君をは平中納言にこなたの十三の君をはらう中將ゆきまさに十四の君けす宮をは左十八よところなから同いきほひたりさうゐいすゐふさは右大辨右十九四人まゐれり同給はんみするせんしは左十九侍らすなとおほせらる同た〻とほ大かくの同するふさなけきてはへる同いてたちぬるにた〻とほかいま〻て同くら人のまきためるに右廿なおもほしそつかうまつらんするふさのぬしの御かへりみをわすれ同た〻とほおほやけに左廿身ひとつをに同大殿にたはかり同かたへはいか〻同いろ／＼あふみなん同かへるにあやかいねりの右廿一かくておとゝに云々くら人になして同かくかきていひつく同たへぬれと左廿一けふかみそりをうるかうれしさ同をさめとのにもち給へ同さう中納言右大辨同こ〻は東のまち右廿二一所ははひ給ふ同これとおなしかす同民部卿の宮の御方なり左廿二宮廿七女君十五にものし同東のおと〻おほきおと〻の同源中納言との〻御方いま宮十四中納言廿四同平中納言の御方東のたい藤宰相の御方なり西のすみ同中の

すみにもきんたちおはす同みそかけに色々の廿三と
し十二こたちいと同大學衆もおりてひさまつきをる
右廿四ふみよませ給ふわりこすみもの云々すさいとも
ふきに云々秀方すかはらの同たりつるなむいのち同
左大臣との丶大君こと左廿四十六子ひとりをのこ又五
の宮同その御妻源氏同民部卿の宮のむすめとし十五
はらみ給へり軍中將の御かた式部卿の宮のかくしむ
すめ同いへあこ宮同も丶ちはかりたつそこはくひろき
との丶うちひまなし右廿五　このこしもふちのかゝれるなから云々の百四十行は梅花笠巻なる松の枝
のみたれいりしなりことはその巻にいへりしかし

第十二藏開巻

この巻も摺本のはいたくみたれしさまは巻の序の考にもさかの院巻のはしのにもいへるかことしなほよのことは前にきこえしさまにたなしけれはいはす

藏開巻之上　中納言御せむしたる人の一いかめしき錠かけ
たり同その錠のうへ同みなもしゑりつけたり同これ
はふみとももならん同一まいもふみ丶えず右二きむなと
たに同かはらのほとより云々嫗おきなはひにはひ
きて同なそかく申して同あるやうは申さんといへは
同ことしはたゝせあまり左二またたらぬ同ほとに同そ
の音しやうかくせ同きも心さかえて同えつけてそ侍
りし右三いりみたりて同やとものよろつの同ゆつる
うちを左三この嫗おきなのみ同すかたのおはする同こ
くつけ申さん同月をへてそ侍りし左四うたてあるもの
丶へにはらひすて右五嫗おきなおいのよに同あたひも
かきらすとりつかくて同くらのめくりをはらひ同け
いしきてあけはり同せむその御りやうなり左五この錠
はあくへきにもあらすうへを同えあけぬそこさみん
同いかめしき錠なりひきくつろかして同あせして錠
あり同とには文殿と同又錠あけるへは同ちすともに
つゝみ左六やうに錠さして同はらみこうむ人の右七夫と
もして同北方にも一の宮左七ふみとも丶やうあるは同
きたりぬる同嫗おきなは同こ丶はきやうこくさの同
なかなりこれを文所にしてかのしその右八聞せ給へ人
ちかく同ふたうして同聞え給ふ女みこたち同それに
したかひて左八かたなまないたを同そひまかなひて同
一のみことかく同二のみこは女御丶うへに右九おふし

たてらるゝ左九みこをあまた同御くしはよらしかけ右十かねてうきれ同すほうよろつの神同なりにしかはさて左十右大將とのも同いらすもあらむ右十一かんのおとゝ右十一みえ侍らす同とひ給へはかんのおとゝ左十一、そのかくをこまふえにてふさ同右大將たゝいま同さときよくうちわらひ同ついゐぬおとゝ萬さいらくはたして右十二かつきてまひたてる右十三わさにこそはとせめ同ひとくさをとも同とにたちよりて同いちしるき同かんのおとゝうまれ左十三かんのおとゝ同いぬ人きほとにて同ふところに云々いてくとて同かんのおとゝ右十四このことのそう同そへたらむとて云々かんのおとゝ同ぬひものゝ袋に同しらへあはせ左十四給はて手まとひ同おはしまさう右十五きたるこれかれ同御ちんの事同へいの外のかたに同あうらふく同かんのおとゝに申給ふ左十五みゆかよりおり同そのねさらに同ゆゝしきまて同御てはやまひ同みな忘れて右十六さはやかにわさを同みなおり給へは左十六をとこ宮たち同かくの給ふとも同たひらかにあなる云々さま〳〵ものを同よろこひなとも同右大將のかんのおとゝ七十

右をいしなされためれ同かんのおとゝみ給ひて左十七かやすくてとくも同あそむの又なき同おもふ給へられて右十八いませ給へはなるへしかゝる程に同みなさゝしのしろかさね同わか宮の左十八しろきろうのあをさしぬき同おとゝいたきて内侍同かんのおとゝ同御くし御もにすこし同中納言のおやとも右十九すけのおもとこゝら同おはすれ中納言みたまひはなたねは同さふらひてましかは同ゐ給へれはかんのおとゝ左十九ふせ奉り給ひつゝ同聞え給はねは女御の君とにゐさり出て云々ひさしうね侍らねは左十九かんのおとゝうたて同おほしていらへもし給す右廿おはしまさふ西の同かんのおとゝの左廿右大將とのし給ふしろかねの同うちしきもの花文れうの同十くたりはかりにてこてのせに百貫同あそひこうなとし同あるしのおとゝ給右廿二をとこみこたちも同女御さかうとも同こまいぬよつにおなしひとりするゐてかうのあはせたきものたえす同すみ〳〵にするたり同おほくかへこおほひつゝあまたするゐ左廿一よきうつしともにいれしめたれは同よそにても同こゝのおまし所は同れいのさうそくした

り同つちゐにをしかゝり右廿二君達ゐなみ給へり同女
御の君聞え同八さくはかりあり同なにかさらすとも
同かんのおとゝ左廿二これはありかたくそなとて同つ
やゝかに同ふちつほよりとて左廿三をりひつ十にもの
いれてすはうのたかつきにするてしろかねのきしふ
たつはらにりうなうこめてきしのはねさせておほき
なる松のつくり枝につけてはらにかくかきつけてお
したり同こえうにつけたり同やうにて侍りしかは
右廿四はちかくまてを同まろかためにかならす〳〵と
左廿四かきなくはを給ひに同おもほすやうにとのみ給
はせたる右廿五たちゐるよせは同おなし一かさねに同
ほしうはへるらんとて左廿五これかゝる所より同こ
の御つかひに同もていて給ひて同おりてはいして
同奉れ給へる同せしひつともには同こひおなしき
たい一をりひつ同ちんすはうを右廿六みくささか
うの同みそとかきつけて同ものをなとおもほす同つ
いかさね十におなしこきするて左廿六きよらなるつ
いかさね同ひとつには云々花文れうのうすもの
同するたれはをされて同するてこゝのつ同うちし

きものことに同女のよそひとく右廿七はかまさく同こ
てたきてかさたかく同すゐものともうちくし同こて
すみもの同しきわたしたり同右大將式部卿の宮
同いとさう〳〵しく同おきなこゝならはまひて左廿七
みなおはしましぬれは同みななみゐたまへり同
まいりわたり給ふ同しさけなかりしかこひはまつの
ともに同をりにか侍りけむ右廿八らう中將のあそむ
同いかなるさるかうをして同さいつ頃まかてんと
同けにさおほすらん同たゝまさらかいふことはいは
ゆるうしの左廿八ひは式部卿の宮同わこむ兵部卿の宮
同權中納言に大ひちりき同かいねりかさねきて同か
たちさかりなり同御かとのむこなり右廿九みやけちす
のみ給ふさてかくの給ふ同やとなれと同おひならひ
つゝひめ松はえたをはまさて左廿九こまつの陰も同右
大將同はやしとおふすや右卅よろつよみゆる同ことは
しめとこそいふなれいつらそのこ同をのことも樂さ
うしつゝこととも左卅くろらかなるかいねり同すはう
かさねのしたかさね同さうのことをいと右卅一たゝに
てはやみ給ひなん同まひし給ひつゝ左卅一たゝひとも

同御たらうの大納言同かくいゝさおもしろくす同人の
さして同いのちをいかゝみえし同ひたりのおほいさの
に右卅二これさらにまいり給ひこれも舞給ひぬ右卅二舞
給ふものをさて同ひさたひに同ほゝさわらふ同右大
將のきみ左卅二けしきはかりし給ふ程に同うつくしけ
にこえて右卅三おほちおさゝ同誰にそ〳〵さ同右大將
の同ついゐ給ひて同ひさしてふなる同むかしおもほ
ゆれは左卅三いなこれにさ同はたをさかし給へは同こ
れこそしろけれ同いな〳〵さて同ゆさまさの中將卅四
右まめやかにさくをさめられかん同左のおさゝたゝ
まさ左卅四さくさりてまひする中將云々うへにをりて
右卅五いをふたつを出し左卅五くさくつるを舞せて同くさ
くはかうしをくひつるさもはいをゝくひて同御さも
の人々も右卅六右大將にゐほひて同女君かきいたき
て同はしらをおさへて右卅七ひきさかさりつる同かん
のおさゝも同うちにはめのさゝも同ありけるなりさ
やこゝはみなみおもてみなゝから同まひし給ふまゐ
うさ同御えはうし左卅七かくそさもゝあり同さうてさ
せて御覧す同かんのおさゝの同すはうひなかひつに

右卅八またさくをさてなん同みよけならぬも同なりけ
れなさて同この御てやそこの左卅八心さえみすなりに
し同この宮はさう宮に右卅九ここにつらく同心ふかく
なおはせそ同おはせんよや同ほうしにもなりなむ同
あいきやうつきたり右大將同みしらねはよくおはす
さ左卅九あはれさ思ひ同かたりしものゝなかに同いふ
をれいのきぬ同ものまいる云々まつそよき右四十人の
ゝひぬへき左四十まうけらるこのさのにも同よさりつか
た同御こうちきなさ同まうけさせ給へり一右四十ひや
くるりのついかさねむつしたには云々うへにはるり
のつき一左四十をしきむつゝまいれり同すはうのつく
ゐ二かんさちめには同いつかたそ中納言のゝ給ふま
へや同六をりひつゝみてすみものおほひて二右四十しさ
しおほひて云々しろかねこひ二同こんるりのおほき
やかなるゐふくろみつに二左四十からのむらさきの同し
をんのつくり枝につけたり同いさえんなるふみかな
四十四右なしつほよりなり同いをのよくささうしのよく
さ同あまたそへて奉り云々中納言に同けうし給ひて

四十四左そへたるつきともに同この御うたあたりにめさ
す同水なるかもめ同かつきをしたる同御せうそこあ
りしには御返しつゝ奉り給ひつ同もやにむきておと
ゝたち四十五右みなみ東に同一まきすゝりはこのふたに
四十五左右大將のおとゝ同こかねのせに一つゝみ四十六右御せ
んともに同いせとりこゝにはさらに同あつまことな
と云々たゝのことは同さうそかれたる御こと四十六左一
つゝひき給ふ同さうのことはおまへにといひつゝい
るれはきみともとりつゝまいれは同いかなるへきこ
とにかゝんのおとゝ同宮をしかつき奉り給へは四十七右
しはゝゝあはせふかすかたゝゝの君たちこれには云
々左衞門のかみにや同さても々人々けもあそひ同な
えたるかりきぬ同いましてと東の同いりたちたまひこ
とふえ四十七左てのいたらぬはかりのうれへはへらし同
右大將いとゞ同なとかこよひは同たゝいまねてなと四十
八右ちかゝらんめれは同たへゐはねいかて云々御かは
らけ給はらん同さかのくやうは同右大將にまいり四十

八右たちてゝそ云々かひこのみゆる四十八左彈正の宮に奉り
同めしてまたれと同うらやましとの給へは同うちに
やをらてを四十九左あるしのおとゝ同四所なほしすかた同
右大將いろあひ五十右とし四十三同このこひはいきた
る同あかみたる同おほひたりこれはきたのおもてた
いはん所きさいの宮同おほさむしはしおとつれにも
ゝゝとも思ひ給ふれと五十左くるしう侍れは同このとのゝ
みことに同すはうのたい五十一右あやのないふさかけえ
ひひとつ同おもほえつるを同あはれなるをなん五十一左蒔
ゑのおきくちのころもはこに同御さうそくふたよそ
ひ同こかねのつほに同せまほしくをさなん五十二右むかし
より名とり同これにまさりて同かたしけなくもせさ
せ五十二左いとほしけれ同よしさもの給はしを五十三右宮のあ
こ君いかてか同ひきさけ人のいそき同まいりて侍る
へき五十三左かくとの給はせたな同いまかしこにも同女
御のきみなしつほ同うちに奉れ給ふとて同くらへさ
せ給ふとて乳母のもとには沈の高つき五しろかねの
つほのちひさきに五十四右ちむのかせありたりし同こと

わりそやさゑもんの五十四左うへこゝらんして同なにしこれかれに給ひつと申いとゝ／＼に同奉れ給ひつこひきしなとは五十五左われかゝむとの給ひて同まゐり給ひねかし同おとなしくならればたらん同まことやかまふのさりつゝき右に同されとこれをこそとて同ゆゆしきほとに五十五左かきくすりなん同そうし侍りつれは同まちり給ふものを五十六右うちほゝゑませ同さふらふなりなと同おまし所も同よき人の御こうみに五十六左宮といぬ宮とを同いたちてしたて同こゝらかゝる所の五十七右御しとにけほちおはします同ちゝ君にしとふさにしかけ同宮てれいたき給へ同人のおやゝとて内侍五十七左いかにかくさゝらむ同らこのかほにゝたてまつり同人にまとひはて同いまはいと いみしや同あてにくゝや同この御くしといかにすけさはかり五十八左かの御かたのいと同ふちつほのかたはらも五十九右えうち奉らせ給はし同三條殿の北の方一ふちつほ二宮三にそ同中納言いみしき云々みなしにやあらんうたていとおそろしけに五十九左いかにもしたる人をは六十右給

はすはこそあらましか同わか人にもあらねは同おににもこそは同そはかもつきむすめ六十左給へるなりさても同給はんとすらむくゆくさきのきみにかねにやは同いたかまほしけなる六十一右ひさしくまいられ同右大將の朝臣の内侍のかみ六十一左まひをなんし侍りにし六十二右いかにせしことゝも同わうしやうをなん六十二左うへいみしかりける同ひとつにあそひて六十三右さやうのものそこもちふしなから同ましかはなみの給ふ同かくまか／＼しきことを聞え給へは六十四右目もみあはせ奉り給はす同返事なとし給ふなりしそれはてのよかりしかは六十四左返事し給ふふみ給へ同右大將との六十五右給はすなりにしは六十五右いてすけすみを同ひかりはなつへき同いま一人には聞えて六十五左むかしゝうのうへに同御さくにそこなひ同宰相の君もなき給ひて同わさ／＼はしてましあるは六十六左さやうならむ人も同思ひ侍りしと同よき人のさやうにこそ同もの思ひしけるにや同かの君に侍り同なとかゝうなとも六十七右いかにせさせ給ひけん六十七右いれさせせぬとなむ同まか

て給ひぬこゝはふちつほ同をのこゝに侍る六十七左しりて侍るなとこそ六十八右ものゝやうに同よろしかりしは同思ひのつみのかうかし給へは六十九右みるものとなんと同なかしひなるにかゝることゝもありけるとの給ふ同四十九日のうちにぬの七むらつゝ給ひすきやうに六十九左こゝは北のおとゝ同これよりしのひて同かくおほすこと同そのくのものともはをさめとのに同ひわりこ手をつくし七十右もちひくはすへき同おはしましたり頭中將七十左こきともはひわりこ十か同もちひ四をしき同をしきこゝろは同みなちんすはう同くゝりをなとも同みなまいりものかたへは同いか／＼と聞わたれとも七十一右すはまにたかき松七十一左おいのよに千代をのこしれみとりこの七十二右けふや千代をもならふらん七十二左 ●おさらてもかな同御てはへれは同あらむとする心七十三右はかまかつけたり同これよりも聞えむと同日頃はえ聞えさせぬ同もちひいかものなと七十三左彈正の宮になとか同あまたおはすれと七十四左おほしたれ三宮とし頃は同大宮なとはたひすみの同み給へひつ

へきも同かすにも侍らぬ同さおほさるゝ女御の君同御こゝろこそ同それをうむして同かうゝみいたしたるこ七十五右かの人をは兵部卿同あるましきことなりと三條の同まつはかしこしとて同しかの給ひけること同彈正の宮されはこそ七十五左思ふ給へるに同はかりにそまかてさせんと七十六左いつはかりにかはいさこの頃同いとよしおひためれ七十七右とりちらさせ給はす同みやとあらは七十七左すらせつへしとは同こと人はかく同さらましものは同いとおしくはさて七十八右さてまかて給ふへかなる七十八右ものくるほしき七十八左なにとかみ給へん同おほつかなからし同はしめていたくとも同所々なりしかは同なかよりなとやうに同その所とう中納言の七十九左中納言の君の御もとに同まうけのものなと同うちより御からひつ同御もとよりあか色の十八右女のよそひいつゝせきくちのみはこに同みなかやうにも奉り同かくてその日になりて右は左にうつりてなかたゝ右大將かけ給ひつ同あを色にすはうかさね八十左やり水のほうより八十一右ちこみとりこと聞つる人に八十二右うへたちもおほすへしましらひ人は同仰せ

らるれは舞踏し給ひのほりてさふらひ給ふうへさは
かりものの給はて御覧するやう八十二左おもほしいり
て同あらぬと思ふに八十三左いかなるものそ大將いへの
八十四右みるへきこのなゝり八十四左こゝははかなき女こ同
まもらむとなん同それにつゝしみて同かしこかりし
人なれは八十五右うへしとしりたるに同ひらかせ侍りし
かはほさりに同いたはることあらむを同家しふとも
もしのせうもちともゝたせて同あめりやみてつけお
ころかし八十五左うけ給はるをけふの同むつかられおは
します八十六右やらむと聞え給ふは同ひるもわたらせ給
ふとき八十六左こゝかうさくにも同かしこの人八十七右さるこ
ともなしかるなしつほ同時々まうしてのほらせ同
さおほえさらむ八十七左おもはせ給ふ人こそ同さとす
みし給ふ時には八十八右おほし給ひつることはなしつほ
かくて同よひとよあそふ同わさなきをはしめ給ふ八十
八左あそひてかむたちめなとはたち給ひける同書開巻之中み
るにかみさひたる一右ひのおましに一右いつらとの給へ
はちんのふはこ同よりしたゝめてあつさ二三寸はか

りにつくれるひさはこつゝありとしかけのぬしのし
ふそのてにて一左てつからよみてきかせよと同うへに
てよむれいの花えんなとの同よまさせ給ふ七八まい
のふみなりはてにひとたひはくに同すしたれはいと
同つかうまつりくらすうへこの頃のよなかに二右また
聞んなまかてそ同をいらかにと二左とのゐもの給は
させよ同中務の君よみ聞え給へとて同おりものゝく
もたゝのあやのにもわた入て同おきくちはかり御そ
はこ二左かいねりかさねの下はかまをいれて同つゝみ
につゝみたり三右なにともまたおほししらすとなん
いぬ宮は同いたはれやと同五宮とふらひ給ひかる
にさかとのに同一のみこまことに三左そのよは承香て
んの御とのゐなり四右このあそむのむかし同うへあな
にくもときしにこそ同まさりたりと聞たる人も同う
しのまへと申は四左給ふとて殿上人いと多かり同さふ
らひそひにたる同かいまとせしたまへは大將との人
の同よへはなとか御返は同いかてうちはへてと五右宮
の御もとなれは同たてるさふらひの人に五左めせはさ
うそく同御返ことゝてもてさわくを大將との同かた

はらいたくゝるしと同そのわたりにては同女御の君の御ての右六この日頃御せんに右七おほんかほなん同申給へはうへいつくにも同たいめし給はさなりすへて誰も云々ひまにかは侍りつらん同たいをこのむとこそしるせるものを四の宮左七人の御あひしなり同女三のみやもいと同かうはしくて奉れり右八うまの時はかりに同いみしくけうらに同めせしはしやすむ同くらくなりて左八うへくれかたく同すなはちと思ふ給へれと同昨日の御さうそく右九まいりてまゐり給ひぬうへふみは同御となふらにいりて同なからふともいふなるものを白雪のふれははかなき左九まいりて奉れは同世中はなそ右十そとの給ふまいりて同まかせは人の同思ひやみにしかと心ちうちさわかれてしつむとすれとひかよみを多くすへきをてんひとつも同こゑうちしつめて左十すゝ聲すゝをふりたる同御琴ともかきあはせ同文のろくに何よかり同さてこれはしはし同うへ文さいは右十一ともかくもの給はて同お

はしまさを給ふ同宮はたともに左十一宮はたをふところに云々かたらふあね君は同宮はたおほきにもなり給はずちひさくも同てゝきはうつくしう同おほきにおはする宮はた同てゝきは宮をは同なきなとこそし給へ右十二宮はたはそこのを置ていつれかはと云は同宮はたさそかし同われもえさせん同いとまの侍らねは同なといふにつとめて同宮はたおくれはかしらかいつくろひ同さかし右大將の左十二こたち女にこそは同よからぬとなき同いつくなるそと同よへはおもはぬやうそ有し同あわ雪もつもれは山と右十三おもほゆるたえてくしちの同かつはいぬこそいと戀しう左十三さわくとおほして同源中納言右大辨同めこのふところをすてよくさむきに同えそかうちに右十四よへはひとたひは同空にはあかりにし同それすらさる同はらわたのたえし同聞侍りしかもし右十四大將たちやすき左十四御世に出くまし同なりのもたひにいをひともりおなしたかつきになまものから物くほつきにくた物同をのゝすみ同くろほうを同つくりくほめて同あつもの

をは左十五きこしめしつへしや同きしのあしをりもの
に同御前にとのみきけは十六右かきりなくありしむか
しの同いかて今しはし左十六殿上にさけのみ同おきなの
かたをゝものを同つめるわかなをいとりくへしや同
またすき侍らさりけり同ものなしくひはてゝ同大将
この奉れ給へる同そらことにて右十七いとよき御つし
所同うしなひたりける同さうやくを奉らん同けうの
うつしはさからたきものくゑかうも猶ことに左十七う
へはとしかけの同いとゝくまいりて同これはしはし
とゝめ同大のさうしにつくりて同ひとかたかき一に
右十八れいのてをよませさせ給ふめてたきことかきり
なし同日ことによませて同こよひはきさいの宮同
かうしはこゝろせよと同つめくひもて同これは誰も
〳〵左十八さらにと人の同たゝありつるとを同むかしな
たかかりける云々歌よみなりけり院の御いもうと女
御はら也同けたひはかりをなん右十九こよひもなん同
つくしへいてたち同かれにはまされり同聞しめして
是は同なほみはてよとて左十九れんけのはなそのにて
同なきことゝもなめり同いとくるしと同そのことか

なけれは同月ころきけはうへにも右廿なほうへにら
うし給ひて同そううちに四の宮のいたく同御とした
かくなりぬれは同そかうちにも院の同宮なりそこの
心に左廿月ころかしこまりて同ありさけきくや宮さ
しり侍るめる左廿それはしめかしこに同いて給ふへ
きと聞えし同うへのちははらへものにも右廿一おほし
ますよにかゝると聞しめすなんいと〳〵ほしきやう
なることゝもを同そしられなくて同さいあいのめも
たるにこそいしり同こゝにはよき女の同かしこにこ
そ侍る同つたはらくゑ御おひ左廿一てうはいなとあに
ん同大将ふたうし同文なめるを同のとめせさせて同
そゝのかしてまゐらせられよ右廿二あなつるにこそは
の給へは同この御文ともは同ふんつけさせてみつし
同春宮かへり給へり同いとつらくおほし同なしつほ
何ことそや左廿二是はかりそとの云々なかたゝらかた
めにもめいほくなることゝ同めてたきことなりとも
同せちのころあつけにや同あらめとゝきのなく右廿三
ものをいかてか同いとむやしきや同むくめのみ有

廿三左　院の御方はまうのほり同御いさ給ひあらて御そ
ひきやられ同引やらゝれ給ひつらん同こゝはなしつ
ほかくて右廿四　まかて給ひて一のみやの御方へまゐり
て同たまいらしかしさて同こなさまゐかしたる同い
さうつくしさおもひ左廿四　けふの御ゆするこさ左廿五　まゐ
りぬへきこ聞え同おさゝの君にいたかれ奉り同奉り
給ひつゝ宮の右廿六　うたれわひさせ給ひて同おさゝい
さものくるほしき云々かはかりのほさの同おほゆる
ものをゝさこ宮たちに同いさよくかくし給へ同かゝ
りて二所なから同わさこそいさものしさ同おもさ人
たゝゐて左廿六　御つしなりもやの同にほはして御くし
同かうの給ふなる同めのさかいふ同わたらせ給へら
ん右廿七　御うふやのその日同おほく侍るものをなさそ
女御の君に聞え給ふかさ仰こさ侍りつるをおこゝ
右廿七　みるとき聞ゆる所左廿七　えあるましければ同そ
こはくさすかたはなくおふし同天下のきさいのくら
ゐも同それらを物の右廿八　月頃み奉らさりつる左廿八　か
たう侍りつれ同さはゝへれさちこもち同御おもひな
りおさゝ同とりにつかはしたれは同これはまたよに

なき右廿九　山こもりしには同今ははた領すへき同さふ
らひつらめとも同給ひしかはかしこさに左廿九　給ひつ
る也しりいつゝかうまつりて同おさゝそれをれいに
同わか御まへ宮たちの御まへ同またものゝまいら右卅
いたくわつらひ給ふさて同人なくてあしからん同あ
りつれはまつり同さふらはんさて同をさこさいふ女
御の君同宮はこきうちきの同あからかなるにきいけ
つけたる左卅　あなみくるしの同宮はたのいひし同さて
ちゝぬしは右卅一　あなかま御をちたちは同誰にかあ
らむ同ぬれきぬなりやこさすちに同いもうさの君な
らんやはこさ宮同おはしけめなさて同御くしをさ聞
ゆれは左卅一　又の日ひるになるまて出給はすをもの
まいらて御たいなさならせさ同御わけへちに同な
さか久しく右卅二　あなくかたしやいかて同いたうけう
してみ給ふ大將日頃うちに左卅二　あくる日まてさふら
ひてみたり同そのなこりにや右卅三　さるは御覽せさ
すへき同おほく侍る同さきく御おひなかいさかたし
けなく同いつまてをさおほしたるはみならんさいふ

さむりしかは左卅三おさるましくは侍るを同さらにい
はぬことなり右卅四きこしめしたらんや同み奉らんとて
さし頃に右卅四かりのゝしるよのなかに左卅四給ひにたけ
りくにしり給ふ同もたまへるかうさいはひ人を右卅五
あめる人ひとりに同ちゝはゝはらかさ同そはそかな
かにも同おはしかさぬさき左卅五つくらせ給へる所に
同ほいたかひたる同むかしわかくおはし右卅六御すゝり
かみなさ左卅六むさくになくもて侍る右卅七されはそのわ
たりにも同さしわきても元聞え同けつりくしせさせ
ゆさのなさせさせ給ふ程に左卅七かさはふたつたてる
左卅八すみしはひとつはらうめりし子ときめきたりし
同ひころの家なん右卅九つきたれはにこそ左卅九おましし
さねなさ右四十わらはいてきて同しるく御覧す同はつら
しさしわきては左四十きくこそいみしう同人のもてた
らひたる一右四十なにゝかはと思へと同なにかゝうなん
同政所によひいれて一左四十ものし給ふならん同たひ〳〵
すゝめ給ふ二右四十うつし心にも同から衣袖ぬれわたる

同故郷のゝいひて同まちとるなるこそとてとりつゝ
さて二左四十うかれうさこそ同をのこともなとあまた侍
り三右四十御くらあけてものを同かれはたからのわう同
いにしへの忘れかたきに三左四十やうなきものとも四右四十
出てけるかな同久しく思ひゝそみて同いくはくもな
くて四左四十くりなけいたしけんはなかよりの同中将の
ひめみこの同このなかの君の五右四十なからんをみつと
りて同もてことてほそのもとをつほに忍りおはすな
にを同ちきりおきしむかしの人も六右四十さためねいふ
みやるかたも同大将かちの侍ら六左四十かくかねくさの
やうに同そのおやをひきこして七右四十したまひてんこ
となる七右四十まゐらしさせしかと同我はと思ひかほに
てみまこのみこたちいたまを同つちをさひてひさま
つき同みこたちを思へは同人くほつきたる七左四十も
たまへるはなとかは同女子たちはへし給ふとも八右四十
さやうなる人は同いへはをひらかにもの給ふるかな
おさゝさてこそはつき給へりやとてひさまさしり給
へはうたてたはれ給へるとてうちむつからて同御く
しのえうしかけたる同ありきてゝなにくまれて八左四十

こゝはいつくそ四十九右いとあしきこと多く同たち給ひ
ね同さらはゝの日四十九左式部卿の御かたをなん同御物
いみなさに同しつらはせ給ひことおこなはせ五十右て
うさなときよらなりし同こゝは三條とのかくて五十左
うちえうしたり同所そさてなほしさうそく五十一左よろ
こひをゝて云々末にはものゝし同四人そさいまつ同

藏開卷之下　この卷は今本の國讓卷の下なること一の卷に云り

右大將源中納言は
一つごむかひゐてものかたりをし給ふ同藤つほのみ
やに同ほうしにやなりなまし同うれへをや申ましさ
なん思ひさわさし同ものくるほしうこそ侍るめれ
同こともさふらはせんにくゝはひさよまからん一左
ふたよくまからむす我をかたくなゝる同かくし給
ふさなむ同さてさに侍りつき同おほしわつらひけり
二人はことわりさそ思ふや同たれもく思ひしか
右同をさり給はさなるをなにをかおほす同かの君の
御さまなる人は二左さたきゝはさもや同よくみさりた
るなさ同めはなこそはつき同そこやしてんの女御の
もさなり同くわふつのわらはに同それそかしこれこ
そ云々一日こゝにまかりし云々ならして夕きりこさ
いひしかは三右わらはゝ藤つほの同おさゝやあこきを
をの君のおさゝや同いつるまゝに同ひきにこそひき
給はめ同きくにはきくは三左さやうに人は同大將子は
かりなしき云々きみは思ひ給ふや同まろらかこは同
花やかなるましらひもや同まろかこにうらせむさい
ひていらへ、まろかこのめに同さてもわれらこそ四右かた
くものし給へ同なにかはさははらへられて同やら
ひやるへき同おほえもありし人四左かいさうもちひな
さ同花のさかりにいさ給へさうの中將同ふみなさつ
くらむ同ふるき所うしなはぬ同はかなきにいまは五右
きかまほしくし給ふ同するわさしおいぬれは同そ
こにをのこさも侍らん同わたりおはしまさねは同中
納言の君のたからは五左こをうち給へは同うち給はす
ゐ給へは同ゐふくろにひさゐふくろ同きみたちはあ
しをみたりてたはふれ同あやのすりもさまくかさ
ね六右すみ物なさたなにかきすゐたり六左さけさをひこ
つにつけたりこひささゝけにたひひさつにつけたり
きゝしこささゝけたる三を一枝につけたりはさゝさゝ

けふたつをひとさゝけにしたり白かねのゑふくろふたつみちとあまつらといれたり同又きのかみの北のかたの御許よりついかさねみつこしたそつきあさくゆひたる同かつをつほやきのあはひ同我と君とはいといみしく右八おくのかたにてそこはみならひ給ふらんを大將ものはちすときかれためるは右八きなむや北方に左八ちかきまもりならては同まゐりきけるかな同いたさせ給ふとて同ふたたひあらむ同世々のかつらせまつほとに同御聲しつるかさの丶わたりつかさ同このて丶にきぬ右九かそへて君に幾世しらせん同しきふ卿のみやの御方になたかきひは源中納言のもたまへるをかきならはしてさしいて同道にふたかりゐて左九大將の御とねり同かいねりのいさくろらかなる同はかま一重えもいはす同しらぬ人いさは丶こそ今より右十みはしよりおりて同なそ君のうちに同にけ給ふそこて同めしいれててうせられ左十まいりにけるそや同故侍從のみをとのたいふ同くらのかみにて同此君かたてまつれは同御佛名すくして右十一をりあらはそのよし同中納言藤つほすこしの同す丶しらおもてや

はある同大將そよさかしらいふおろかにといへは同とほくてよついて同いときゝにくしと左十一はしたなさめを同まけをまりてまろさかさくかをとてこえを同このこてといふもの同みせさらんと同中納言とりつ丶き右十二あやすかのも同たち給はんとするほとに同ふようにや左十二まらうとのかむたち同人しれすわたり右十三の丶しりつ丶もちたる同ひとくたりにても同中將の君にひとつ同あらまきとえたといをさ丶り二たかつき五さかつきつ丶左十三かなしくし給へはいかにいころは御ゆとの同大將との丶北方このちこには同十四右たりしかとさらに同かたちあるもいひさわけは同内侍のすけにみそひつ同こ丶は源中納言との左十四しろきくみを丶あらまきにて左十四そを五葉の同とえたひこひはいきてはたらくやうにて同きしのはらには同くろほかせまろかしいれからをはみな白かねにてつくれり同ちむのかつを同つほやきのあはひ同あまのりにわたを同すはまをみ給へは右十五おひもたゝなむ同こてもみなあり同御せりそこにて同かはれいか

かさなむ同やすくうみ給へはあえものに左十五おはし
てすのこに同おろしてさしめくり同さいなみ給へは
たゝひさ所なんひさにはいさほしかりて右十六例はい
さいたりそらめいたる人のいさ同人のいさおかしけ
同あれきさにくし大將夢み給へるか左十六いたき給は
す同おさゝ宮は同いさあやしく同三條さのにまうて
給ひて右十七こかねつくりにはをのこ左十七一すしにて
同中の君の御かたに同一重かさねすゝけたる右十八を
ものひめゝらて同あしたのをものに同ふるひたるま
きゑのくしのはこ同めのさかけて同しさゝになりぬ
左十八こゝらの年月同いかていはんさ右十九なかめつゝ
云々みつる別の同はしらのもさに同おりかゝりて同
ひさよろひこきならして左十九身にありへぬへき同心も
し侍れは同あまのさまやの右廿いさをいらかに世の中
はいさゝかくても有へぬへしや同ほさに右大將は少
將のいもうさ左廿ひさ〳〵さもさめ同有しをかうて右廿一
承りなさしたれさ同このくない卿の同なかるなりし
かの人同やうなる左廿二ものならはさむさて同あそひ

のくも同をさなき子さも右廿二いもうさの君同宮の御
かた三條へ同いまいさひろく左廿二なほほしうさこそ
さて同まかなひせよや同さけそにいれてするてまか
りして左廿二しもつかへらひさたまひへのる左廿二なけ
いたし給へれは御さもの人さりて同こせむしてい
ますへかなり同大將たちよりて右廿四みなおり給ひぬ
同右のおほさのは同こさなさくはへて左廿四しもつか
へ車あはせて廿はかり同國なるのみこそ同はなちて
はみな同ひさのゝちむに同ふし給ひぬるまゝに同ま
ゐり給へれさ宮同こゝらの年月日もへきりつる人の
右廿五いてうるへかめる同もゝすはえして同女こもち
たらん同すゑたらまし左廿五せうそこ申せさ同そ王の
君を同はしりふさせ給へは同こしをつきつ御屛風廿六
右こほ〳〵さたうれぬそ王の君同をほな〳〵よのほさ
ろ同おやはらからひきつれ同おやはらからひさつ心
同はらのさはくに左廿六うつうへはいましむるそさの
給ふ同悲しませ給ふらんにそこは云々おさゝかへり
給ひけるつさめてくらのかみの君右廿七御いさまを給
はり云々まかてはへるをいさま給はりてせうそこは

の給へくるま云々いふはかりにおほしたて奉しかは
いつしかも云々せうそこ車つかぬほさに打やすらひ
廿七左 人のめさも丶やすめ云々有をおいひさ丶りて御
前にいさいまほしさは云々給へさあるをいさ云々こ
そはさなむさいはせ給へはくらのかみ云々子さもひ
きつれてなにかよからぬ右廿八 わかき人々のゆくする
のためこそ云々右近少將にはちかすみくらのかみ
廿八左 右大將もまゐり給へりかたて云々まめなる御心
云々人めしよせす人の右廿九 さふらはすよろこひ云々
さふらふ也こゝは春宮かくて云々せちれういさ多く
奉るそかなかにたねまつはおさゝ右大將さのにかゆ
のれうすへてうし奉るおさゝには蔵其か米三十石云
々よね一石さすみ云々又同しかすに左廿九 いもうさにつ
かはす云々いつかたにも〳〵云々みつのをにみくら
へ云々かきてちうしの云々わらはそへてくりいたし
ゝところ云々すみはたこをいさこまかに云々ものお
ふしてゆひたり右卅 つしやかなるせちれうも云々め
のさなさこれも云々ひさへきぬへつゝ給ひて左卅の給

はすれはむまの云々いかに御手くろ云々ひろけてみ
ゝてこたち云々かの君の御さもの云々みつのをのれう
なさゝかおき宮内卿云々御文そへて子さものきぬ云
々こゝは少將の云々まへにことゝもおきて右卅一 ふみみ
せ奉れは云々心ちし給はんなさ左卅一 さらなりつるに
や右卅二 物さもか思ひいて同いかにもさふらひにやら
んくひ物云々もてこさて御前に同あふらなさなかひ
つ云々御ふみは一日は云々え聞えさりしさおほせ云
々なるしもさかいふなれ左卅二 かねは百りやうにたら
ても有云々人々さらせてそかへしつゝ右卅三 有てな
んこのみはなりぬる云々かみのいへのみなんせちな
る云々そこにつかひ給ふ云々院のひんかしなるこ
こにらうするに云々右大臣さのものしさ云々みには
すみ侍りきや左卅三 三はにせはけれさ云々かうふりな
さや云々まさりになりまさられぬ云々いまのうへ人
は云々なかたゝはやへうすや右卅四 あそひ物おもひし
かは云々けになけかれぬへく云々大將国の宮こそは
みもき給ひてかそは云々いかゝものし給ふらん左卅四 お

はすれはいろあひ云々かたちはとくこそそかうちに
云々大將にやらなむ云々かれさいとよき云々藤壺の
こそとの給ふ云々右廿五いかにみまほしからましと
大將こまかへらせ云々あとはたれをか云々物せらる
なれ左廿五とりもてきしか又云々かのいへのことは云
々こかは三條とのかくて右大臣とのには左のおとゝ
の云々北のかたわたりて云々いまは人とおもはて云
々大宮おさなきこともあし云々ひんなきことゝしの
右廿六いらへも聞え給はす云々をとこみつなる云々お
かしけなれは云々御方にと宮の御方に奉り云々かく
て年かへりてついたちの日に云々おもてになみたち
て左廿六大將とのもまゐり云々御みきまいらんとするほ
とに十の宮云々たてまつりてかきて云々けふのこと
我思ふ人と云々大將宮をかきいたき右廿七うちにま
ゐり給ひぬ云々まゐり給ひぬ云々みこたち五所右
大將は御前に右廿八ひとところはとのゆるされ給へり十の
みこは云々そわうの君に云々うへの御つほねそなん
ひとよおとゝの云々あこきとなん大將左廿八おほえた
るほと云々みやはとのになしいひしは云々いとみさ

ほなりや右廿九いかなるにかあらん云々おとゝに申し
かは云々こそなとなんいふかしう云々めさぬこと
はへる藤壺も左廿九いへ宮かうふりえ給ふ云々右まけ
給ひぬ云々いてくるおとねは云々こたみはないしの
云々ひらなのいさけこかねつくり云々迮色にてうし
て云々わりこともしろかね右四十ひわりことをたゝの
とを奉り左四十たうるの夜よりは云々たいめにそ聞え
さすへき右四十一はしりよろひて有まつおひたり云々も
ゝかはけふとしらせつ云々なすかひめ松云々おひて
さはもゝかはにや左四十一とにさし出し給へ云々みつと
しらなんとてさしいるれはこと人はみ給はすおとゝ
宮たち云々宮のあこの大夫云々かゝす右大將右四十二御
つきのちひさきして云々御年五ほとおほきに云々さ
うそき給へり大將よた所なから御ひさにすゑ奉り給
ひて聞え給ふ左四十三もちひくはせ侍るを云々おろし
をとてなんわか宮わかみに云々給はさりし二の宮云
々なきしかはこそみせ云々わさをし侍れは云々宮い
とく〳〵うれしかりなむ右四十三物くゝめつゝまいり云々
ひゝなにねのひ云々おかしき御もてあそひ云々こゝ

ゝはひんかしの（四十三左）女御の君に御もの語聞え給ふこゝはもゝかの所云々おきかへりなとし給ふ云々兵部の大輔は左衛門佐になり云々むまそひゝとりは（四十四右）三條とのにかのゝ給ひしいへの券（四十四左）仰せられしいへゝ奉り侍云々給はれるくにはいへはかりは云々人のいへのくあり同なかの君の御許に（四十五右）かの許の三條云々かくおほそうなるその云々さらはとて御車（四十五左）おほひしたりそれにも鎖かきあり云々御てうと二かひ十よろひおほひしてすゝり云々からの物いとより云々かへしろはしろく云々しんてむのさたに（四十六左）おり物のほそなか云々四十に一つ二つたらね云々もとにそこなるむつかし云々よくはきかすとてよさりわたりねと云々御たいかねの（四十七右）おき給へこれをさへ云々いとめてたくすゑひ云々いふかたなく（四十七左）廿人さりたえす云々いとほしと思ひつる人々すませて侍なりとりするたるこの人云々人ともなくとくみな（四十八右）人にしても見え聞えす云々北のかたわかき人の云々みくちいるゝ人もなくては云々さても世の人云々

よにすむらんやうも（四十八左）けにさこそあらむ云々まうていなむ云なつくられたりにしのたい云々けたかくものくしき（四十九右）有かたくみ出て侍り云々年頃まかりさる云々れいならすならはゐやうに思はれ（四十九左）ゆるひも侍らすこのなかたゝのあそんこゝに侍れは云々こにはあはぬ物云々みやなとか中納言云々まきれ、なき物（五十右）こと人のえしつめ云々こゝは三條との云々人えしり給はさりし云々かたかたはおもほしける（五十左）宮にもかくて云々むかへ奉らんと思ひしをはしめのいへに云々なありそとにこそく云々をはおとゝに聞え給ひしかと（五十一左）太上の宮のみくしけとの云々かく聞しめして云々せうとなとてありけれはむかへつ少將の云々するゑ給へれは人もなしたゝ宮の（五十二右）しもやにさうしつゝ有云々まつ北のおとゝに云々すますなりぬるやとゆゑに云々ゐむにさふらひしをゐてまりて（五十二左）まかきの竹に云々いひし所とおほして一のたいにいりてみ給へはゐ給ひし柱よせに（五十三右）かの物し給ふるあそひ云々わかくよからし人とて云々われも〳〵きよらを（五十三左）まつときゝにし人そ云々

こゝは一條との云々みなすみあまりて云々おろし
こめて 五十四右 ことなど聞え給へは云々身をつみてのみ
はたど云々御はらからの宮云々これもその御さくに
五十四左 まかてむどあめる云々かゝる人のこたいの 五十五右
右大將かの御むかへ云々やむことなくる云々人のみ
る所も云々右のおとゝ 五十五左 かるへけれとねふり給ふ
をしひてこそゝのかし云々宮まうてぬへかなり 五十六右 か
くうとからぬ云々えあらしをといとありかたきこと、
なりやこゝにはこの頃云々まかてられなむ云々御ま
うけ殿のまところ 五十六左 よの人のすることのわかきみ
云々御ものまいるとて云々まかてられよしを 五十七右 た
ひらかにておやは云々花につけて奉れ給へるをおと
ゝとりて云々こゝちおちゐぬる云々人にとかむはか
り 五十一左 すくすとしかな云々きかしてくふおとゝはし
むてんへわたり給ひぬ ゑあるはつきのひはた藤つほまて給へり

宇津保物語玉松五之卷

第十三國讓卷

此卷の中を今本は上卷とし上を中の卷とせしはた
かへりことは始にいへるかことしまた今本のさか
の院の卷はことく此卷なること嵯峨院卷にい
ひしにおなし

國讓之上 御子ともゝかんたちめ云々わたり給はんと聞
え給ふこのおとゝきこしめしてけに年比も 右一 なんと
すれは藤つほ 左一 にしのたいにわたりてすみ給ひぬ扨
の人は云々女御の君に云々みちをは藤壺に云々奉ら
せ給ふを御子ともゝおほく云々さかりつゝすみ給へ
はおなし云々いふははかりになん 左二 はかなきことに
てこの月頃ゑんし給ひて云々人のいむといふなるを
云々給ひねかしかく年月 右三 女御の君大宮の云々女君た
ちひきて云々一のたいのきた云々かへしろ御帳おま
しなと 左三 たいなとには云々藤つほたゝいまいて云々
そこにしもかねて云々こゝは藤つほ云々ふえうなる

も云々右のおとゝの云々おもひてんたゝうしろ云々
いきかたうある右四やさしきものなりさいしやうのあ
そん云々かたち心云々中將の君なとに云々いかて右
のおとゝに云々思ひたるそ世の中左四おやをこそいへ
そかうへも右五民部卿右のおほとのに左五おほこれなん
あたらし云々右のおとゝ左六されと年頃云々侍ときて
やく右七侍らすはいはんや云々思ふ給ふるなと聞え
左五おほきなるとの三ある云々なかにたからにし給ひ
置たるこまか云々くはへてとの給ふ右八ゑ給ふそれは
この云々右の大殿にもこらんせさせ左八かのこと子と
もたりし云々はかなくてうしなひ云々女こさへいか
に云々裏けにて右九かなしとも思ひたらさめるをや左九
せうそこたえけれは云々宰相右の大將左十あそんはた
ふえうの人云々おさめとの五ある右十一みくちいれ奉
り云々おのつから御らんし云々世の中にへ侍る云々
御事を思ふ給へつる左十一おはしましねよろつの云々
おほつかなかりつる云々くるしかるらん云々二月廿
日おほき大臣の御とふらひ云々右十二右の大臣とのは
ひとつ御はらの左十二院のはいと云々あら〳〵しき御

心云々人にみゆへく云々らふらひてん右十三なけきし
と聞えつれはわれたに云々たてまつらすなりき云々
つかはさん宮それ左十三さらはこゝには右十四わか身も
きえさらは左十四しらぬをのこゝなん云々わかれとほ
かに云々きくたちはさう〳〵にたちより云々い
まいくいろの右十五たゝん月日の云々兵部大輔の君十五
左左衛門督の君云々かゝりてよせたり云々御とこそ
く御かたち云々そわうのきみ云々たちてまち奉りて
おはしますゝ源中納言云々右十六いてんとおほして云々
みつからしもまうて云々みちの程はらきたなき人も
云々たゝはさりつるをからうして左十六いつしかとこ
ひは右十七奉らましくこそ云々しつらひさらに左十七こ
ゝにおはしませ云々ふきあけといひ云々なめれはい
と云々の給ふほとに源中納言とのは云々けいしのき
のかみ右十八おほみあるしつから云々つゝすゑわたし
たり云々したうこそ云々み給ひていとよく左十八ある
しゝ物かつけ右十九女御の君おはす云々さまをもおなし
やうに云々なりにたるなれと右廿侍りつるを俄に云々

なんと聞え給へは云々これよりもいかて云々心しり
なまし云々つかねは聞えさす云々すらんとつゝまし
云々ましらひするには左廿おもほゆれ御かへりは云々
たいめん給へる右廿一うけ給はりしかとえ聞え云々つ
ねにまゐりこん云々やともりにて云々もたるうた
てきわさなり左廿一ひとつもえたへずは右廿二そのいふ
こといと云々聞え給ふのれ云々かいまみせなん云々
なかうなれしかはかくてやむるならんとそいふ女御
の君左廿二ほかにこたに云々こそは思ふならめ云々あ
るさまするわさなと云々みかとも今日こさなからん
をは云々てゝにもゆるされ云々いかなる故にか右廿三
のちなりかしこのみなら云々みならひはて云々いか
てかはすらん云々なかにも人にも云々女御君のこゝ
にも左廿三大将もうらみ給ふへけれは云々おのれはゆ
るさす右廿四きこしめさんに云々しらねはおそろしう
云々いかにとの給ふ左廿四夕くれなとは云々をうとく
らん右廿五のちにはと聞え給へは云々の給はんまゝに
と云々たちより給ひけもなきをそなたに云々めつら

しき人をもまつとこそ思ひ給ふのれとこゝに左廿五い
たき奉らん云々それをたにとみに云々たてられさり
き云々しはらはひなとし人みてはたゝわらひにわら
ひて云々人にこそはそかうち云々給はすかくなにこ
とも右廿六ゐ給ひつるをみれはみえ給ひつる人に云々
しかともうへにさのみ云々給ひつるむま云々おはし
てみせ左廿六ひもついさし右廿八給ふるをいまは云々な
とし給ふへかめる云々おほそうなる云々つかまつら
んとその云々聞え給ひけるかきて奉り給はさしねは
そゝのかし聞え奉れよつかひうらかゝんと左廿八はや
と奉り給へと云々みにくけなめれはからもりか右廿九
かきとも多くさしつけ云々きたのかたみ給ひて云々
とのゝうちなと今日御らんせよ云々君もこの君にも
あけさせ給はんすれはとおほし云々からひつともい
みしう左廿九三さくのちんの云々四さくの云々てうさ
なと有云々まさゐのつしよりよろつそれにしろかね
の云々しろかねにしすゑたり右卅しろかねのまかり二
十はかりちひさきなと云々うちともには云々物とも

、いとおほかりそのくらの左卅またきやうにも云々給は
んとやする云々左卅一まうけられたるひに二のわらは
右卅二かくておほきおとゝ殿には二月廿七日云々君た
ちはおはし云々かくて藤つほはおほゐとのゝ云々に
ひ色の左卅二をこたり給ふへかめる云々いといとほし
と右卅三いみしうおほしなけく云々藤壺のなるかな
給へみ給へん左卅三宮の君聞給ひて云々まうけ給
ふめる云々ものゝ給ひたりき云々いとも〳〵
めつらしさは右卅四をりの侍へけれは云々ひとつを
なといふ左卅四とりにつかはしてにひ色の云々これこ
そとめしゝかいまは右卅五人もおはせねは云々たゝな
らぬをりならねはきぬをもぬくへきをとしころおこ
なひいてたる云々いくよなるまて左卅五物聞えなんと
や右卅六さてこそおはせめ云々さてしもあらませは左卅七
宮の進を御つかひ云々みやつかひにいたして云々み
給へはいと哀になしきとは右卅八なにかさしもとて云々
よにへはいたく云々人のしゝ給へれは左卅八みそかを
とこに云々うけ給はりぬ浅ましう云々うちなくさみ

云々みしよりそかくもいはましなけきつゝ右卅九思ふ
給へ侍りし人ために云々給はすはおやの云々奉れ給
ひつ云々なきをりなりけれは侍りつるやうの給ひつ
る左卅九ちむのたかうなつくらせ給ふまもなくうゐ
させ云々ものせしまら人の右四十かうなんいとをし
く云々きみにはいかゝ左四十またおほゐとのゝ御かた
云々たかうなかなとて云々御返はうけ給はりぬ云々
御ふみはけにさも云々おほせさりとも云々いといと
をしくなん右四十一かたみにたにとて云々おほんかたは左四十一
思ひはなれ給へれはなほ云々かうさかりてけすなと
、、、、、にかくまさなくいはされはうとみわたらん右四十二こし
をられしに云々きわかれ給ひし云々さるへき人は云
々ひとひとふらひに左四十二心さしにしなはぬ云々藤壺
いまはたれも云々なに事とも右四十三かくおほそうに
ては云々すけすみらより云々奉り給へれは云々うた
てやなにし云々なしつほはさしても左四十三わかみより
はしめ云々みな〳〵ひきいりにたり云々したかひ奉

り給ふ云々事のみ聞え云々みこうまれ給へり四十四右さうそくいさ云々このはんにたゝすみらを入られぬ云々宮あこのしう云々ひさりをはいまんかは四十四左このはんに云々かき給ひ御ふんして云々おはさん御前の云々よろこひさりつ云々わたらせ給ひね云々つきてゝひきにひく四十五右やりみつのほさに云々きこにふちのかゝり四十五左おもしろうしおきたり云々つくれされいの云々れいの所の四十六右しゝう二の御かた云々にしのたいは云々ひかしみなみにあり云々なほせはくすみなし云々ひわりこらうある云々手本四まきいろ〳〵四十六左そわうの君の云々なにの本か云々をさこ手にもあらす四十七右をんなてにもあらすあつめ云々みつくきも云々さしつきに云々しらすれさ云々思ふ心は君わするなよ四十七左てを忍給ふひとの云々物をしを宮の四十八右まかりにきさきこゆ云々つかひやる心せよさ云々あさにもさめられ四十九右たてまつりつかゝるほさ云々いかゝさなんみれは云々たのめにもさ云々いかゝさ思へさも云々ひさひなんいてや云々をりもなき

かな云々上とはせ給ふ院の御かた云々はかりかまふのほり四十九左かき給ふひころは云々心ちなん參り云々まかりありきは云々末するけをのみ五十右くるしうてなんまかてし云々みしあさは五十左まつきえしかな云々今日のみこそさ云々そわうの君云々そへやそわうの君五十一右このころこそむかし云々うちみゆるやまちに云々まゐりしかさきこえ云々し給はさりしか五十一左みゝにきゝいれね云々事もいはめ云々やみにしかそわうの君云々もてはさかし君の云々このそわうの君云々かしこまらす云々大い君はこれに云々そわうこの御方五十二右かたときさらて云々宮の御うへまゐり給ひしのちは云々一さくはかり云々兵衛の君にゝて云々一さくはかり五十二左らう〳〵しこれこそも云々女宮たちひさつ云々ましろひ奉りて五十三右宮々にもこれかれ云々うさからぬさちあそひ云々給へるそれを云々ふせてのみおきつれは五十三左宮は御まへにのみ云々人のものせねは云々たゝ八軸をたもちてこもりゐためる五十四右御こさそやさ聞え云々おきゐにしきんのての云々おほえてむねなん云々ゐておはしてきかせ給ひし五十四左のみな心このそうのて云々つねにのみ

そいふや云々宮さいつさきかす五十五右おりゐ給ひてん
さき云々はかりそまさり五十五左御子にいさよ〳〵云々
けちかきになん云々おほゐさのゝ御方よりひわりこ
五十六右そわうの君中納言の君云々そわうの君兵衛あり
そわう達は云々なさやこの下云々らうへていみし
うたせ給ひて云々さらにかけていふ云々ものくる
ほしや五十七右こさくさにもしわらひ云々ひさひは御か
たの五十七左時々はしたなき云々をさこをんなまうの
ほり五十八右つれ〳〵なるに云々まはゆしやなさ云々御
こさゝもさりいたさせ云々あなたのそわう御まへ云
々宮あやしう五十八左かのわたりならて云々よのなるら
んかしこゝにはさはかりたにそきかせぬ云々かくの
けすなさの給ひ云々きゝ給ふをさもしり云々御こさ
さもひさつに五十九右そわうの君は五十九左へりをおり物に
云々はしきしたる云々そわうの君して六十右めのさお
ほせ事云々おほえたるにや云々ひきしよひかな六十左
されはこそむかしたに云々おほせらるれはみな六十一右
侍りけりあすの云々侍るゝ聞え云々女御の君おはし

云々ひさひいさ心云々たのみ聞え給ひし六十一左左のお
さゝの御方云々左の大将さのゝ御方になん六十二右蔵人
さ女のよういゝ侍り云々らう〳〵しうし云々左の大臣
のはいさすくにかゝに云々そわうかたちにて云々平中
納言さのは云々なりたる人の六十二左さのみそ聞え云々
いかなるにかゝる六十三右たまふれはわらはせ云々奉
り給へおはせん云々宮よりめのさ六十三左宮なさも猶さ
りに云々たゝこのこさを云々まさりかほこそ云々お
もはせ給はゝ六十四右あさはみすさも云々あなたにさ聞
え云々聞え給へれは云々けふあすこゝに云々きこ
え給へれは六十四左みすもくるしからん云々うちふすさ
こそ六十五右ひさひ物し給ひし六十五左ものなくてうし云
々物なさ給ふ大将同なやませ給へは云々給ひそそ
くゐのこさ云々えみ給へす云々中納言の君さいふ
六十六右給へらんさの給へは云々けからはてかへり云
々御つかひいくたひ云々きこしめさゝりし六十六左ゑう
のゝしる云々こゝはにしのたいかくて三日云々あけ
はりるちてよひさに云々そのよはみきりのおさゝ后
の宮大宮御うふやしなひし給へり右の大臣の君達左

るほどに宮云々きはみたるしきし右九たちはなのかは
をよこさまにきりこかねをみにほしせて云々おほせ
こさうけ給はり云々これかれなんつかうまつり云々
くはり奉り給ふ云々おはせや君たちさるへからん人
にたちはな左九よつゝいかさねて右十をけのおほきさ云
々ひとつには云々やうにてちんいれたり云々からう
して一ついゝのかつかひしてくまには左十そわうの君
右十一事もをうも云々おろしつちひくほかなど云々く
はりつちひく云々いとたひらかに云々うまれ給へる
右十二御さうそくたちかへり云々またみしらぬならん
云々しらひつれはかたち云々ついやかにさてこそは
左十二はしめてなかもちの右十三みつからもの給へ云々
いとよくみえつ云々よろつはやみる左十三聞るここ
とにはとりき給へれは云々こもちの御まへおとゝ
の云々きよらにてうして云々きくみたるかきてしろ
きゝはみたるせにつゝみたり云々みつれはと大将四十
右つかふまつり給ふ云々つゝしみ給へり云々おはし
まさましゝときまらうときみたちも左十四いまさしも

あらね云々右大臣よりはしめて左十四さうのふえを云
々御ことゝもあそはし云々おほひちりき云々かし
こへ奉れ給ふ云々はての日にかくて右十五御まへのも
のし給ふ云々かうはしき云々しゝうくえかう云
々そらなりつるをはいさしろき云々はらふくろ
に左十五あそひものゝくまて云々おほみあそひな
と云々人々さうそくともなさしてさふらふないし
の云々行事す御ゆとのはそわうの君に云々こゝ
らの御らふやに右十六なかに物おほくにきはゝ
しかりし云々なゝのたからふり左十六はいなさしてゐ
給へり云々はたゝち給はす右十七このすちに云々こ
のそうは云々おまへにてつかふまつり左十七きこ
ゆれはよく云々かくて大宮はそわうの君に一夜云々
そわうの君云々まいらせ給へれは云々うへにたてた
る云々こゝにおもくも云々したにいれたる右十八てい
してあらてなり云々さて手ほん云々おさゝけにさな
めり云々み給へはさかうのへそ云々いれたりさうて
ゝかを心み右十九みかう物えられたり云々おさゝけに

さこそあなり云々心つくさせ給ひ左十九うちにいまし
て云々たよりにはすれ御覧すらんかしおとゝもの給
はせ右廿史にかき〳〵云々聞えんとなすれは云々かひ
なくまたは云々まとひけむとかさらさりせは云々さ
て給へれは左廿さする人をこそ右廿一きこえよとなん同さ
いせうかゝるを云々かくなの給ひけたれかは云々給
へれは宮人はうへのもしものもわひ云々すなりしか
いてゝ云々よりはまいり物云々こゝにも御ふみ給ふ
左廿一すれはとたに云々うみつらねたる物云々おしふ
せつへくも云々いへとときの人のはゝとする云々あ
らしましてさらには右廿二さもなとゝなむ云々かほ
のやういと左廿二うるはしくおもほえて同おこものに
はあらすや云々かたちをおとにきゝ云々さわき給ひ
人に云々たひたる所におかせ給ひて時々とはせ云
々をのにまかりて右廿三なにせんにか云々つねに思ひ
云々あるなる子にも云々わらいへの侍る左廿三のへみ
し人も云々何とかまさはん云々民部卿の君右廿四さら
せてをとてとのゝ云々かくて六月になりぬ云々ひは

たのおとゝいたらう左廿四心をかくおはす云々みるへ
き所にも云々さらはくはやゐて右廿五給へはなさおほす
云々いかなることそ北方云々なにしにかこれより云
々かくてもうとからぬ云々かく山さとには云々うち
には一日中納言云々つかふまつれと左廿五はひいりて
み給ふに云々かくても右云々かくて三日右廿六事もい
かてせさせ云々こゝは三條とのかくて云々さはたち
給ひにたれと大殿は左廿六たれも〳〵ほゝゑみて云々物
し給ふめれ云々御かたにかくおそろしかなる人こゝ
ら云々さるけにやは云々いときら〳〵しくておはす
るいかならん云々おもほすほとに右廿七おろともによひ
て云々外にてとなん云々にくけこさしたまふ云々御
使はゝへる打わたり左廿七申しさふらふ御使はひとひ參
り云々御せうそこし給へる云々たえぬとみれとつひ
に云々しあせ給へる右廿八まつわかさか侍るは云々か
のことはおとゝ云々御こしうなかさすれは云々后宮
大臣公卿たち云々なにことをかは左廿八おほさんとう
かなり云々なみたみつるかな云々なにかいとむつま
し右廿九けしきにこのをりに左廿九おほしすてし云々御

まなこなくつやつゝき給へる云々まつりこちなれ給
へるわうゐ云々うれへそふらむ右卅 の給ひておはすら
くて又宮云々したりしにそれも云々松のはしける左卅
下には風の云々えたにはつゆも云々かつならぬつみ
の云々こゝはゐなりかくて云々こたみはいたく右卅一
さわきてまゐり云々おんみやう師けんさ左卅一 みしり
給へるに云々けれと聞え給へは云々なにわさかし給
はん右卅二 大宮あなむくつけ云々ほいとけんとすると
云々ねらなとにや右卅三 いとゝくまうてきなんとてま
いりぬ云々ほとなれはみゆつる右卅三 まいるやうこそ
云々聞え給へはさもみえ云々さわかしかりぬへき云
々かしこうまいらんとの給ふめるにこよひ右卅四 なむ
との給へは云々とのゝ御ためにや云々さわかしかる
へけれ云々こゝにもまうてん左卅四 とく大將歸り云々
事とも申され右卅五 よそひいときよら云々ひらうけの
車云々大將宮の中なと左卅五 大將いとうれしく云々ま
いり給はぬとき云々心もとなさを云々ひさしくさふ
らひなんを右卅六 大將おほやけの御もとより左卅六 大將
はさわき云々かちまいれいとおそろし大將に云々み

な承り給へるを右卅七 山さとにてきんにあはせて云々
いとたふときおほせことにも左卅七 つかふまつるまし
きに云々えつかふまつり云々すゝろに物かなし云々
いふ／＼ことの有し右卅八 ねかひにみやうにて左卅八 御
ものとそならまし云々このおひはこ千かけの云々こ
のかすゝに侍りし少將なゝよりの云々とふらひ侍に
きそのときおなし人々なとこれかれ左卅九 かくかむた
ちめにて侍り云々頭なんとにて侍る律師いまいとま
にとふらひに云々御まへに侍りて遊ひ云々大將御心
とゝめ云々仰給ひて御まへより云々左大臣殿大將云
々御むかへしていり給ふ云々右のおとゝ左のおとゝ
に云々左のおとゝまさより云々右四十 右のおとゝかね
まさ云々御國ゆつりのことちかく云々まゐるものゝ
侍るをいとあつしく云々かたときみ給へすてかたう
ひきいれおき侍りしをからうしていたしたて侍りし
このなやませ給ふと承りおとろきてなんかくてくた
ものまいりなとしものかたりし給ふ左四十 四十一丁より いたくみたれ
れたはかくそあらたむへきなりかくて右のおとゝまゐり給ひぬとて左衞

門督の君くら人の少將宮あこのしゝうなと參り給へり宮たちおとゝたちいさかゝる所にてかくひやういたはらんとの給ひてかえてのあをやかにしけりたるもとにたち出給ひおかしき鞠のかゝりかなとけうしたまひて御まりあそはすみな上手なり人々さうそくし給へり宮たちおとゝたちはなほし奉れり大將との藏人の少將まりも上手さまもよくみゆ宮たちあやしわさやとて御らんすくれぬれは皆いり給ひぬ宮たちは二の宮の御かたにいり給ひぬ大將に宮のけふはれいの風のいもゐに御前なる人々ましてけふはいとものきよくてくらさせたまひぬと聞ゆれはあなしこやすいはんしてまいり給へと御目ふたきてみたにいれ給はねは犬みやひさにすゑてさしくゝめてまいりて御ことゝをもみ給ふるかなとの給へは宮あつしすのこにをとの給へはよへをたに思ふ所にこよひいねふりそようなとやとの給ひてふし給ひてかの御方いさとく人さふらへ聞やうありとの給へはめのとむねつふれていかて聞給ふらんと藏人の少將もすのこにゐ給ひてかの人み給へれは右大將とのとほくてさし出給ひあなかしこや人ゐぬるといとおそろしきつはものありくなり外にてはしらすこゝにてはいとさかなからんとの給へは宮たち御めもさめておき居給ひぬめのとは身もひえはてゝわれにもあらて居たりかくて曉になりみかうしもおろさす二の宮の御方にこなたとは高き御屛風たてたりおはする所いとちかけれは御屛風にてへたてたるなりけり大將このをり宮たちみ奉らてはいかてかと思ひて一の宮いとよく御とのこもりたれはけふそこをふみたてゝ御屛風のかみよりのそけれはあけぬとおほえてをとこ宮たちは御とのこもりたり二の宮は御几帳のかたひらはうちかけてまたおろさすおき給ひていさゝかなることせんとおほしていり給へるをいとよくみ奉り給ふ白き綾ひとかさね奉りて御くしなともおほとのこもりふくためたれといとけちかくうつくしけなりとみなひめ宮もおきあかり給へるをこれはまたちひさくかたなりにてあてなりよくもうみあつめ給へるみこたちかなとみてゐ給ひぬほの／＼とおかしきあさほらけなれはおとこたち高らんにおしかゝり居給ひつゝ右のおとゝむかしかゝりしこくねちにこのつりとのへこそはたひ／＼らうしにまゐりしかけふまて侍る人を

や左のおとゝけふもむかしのやうにせんかしわいても朝すゝみにこそはさてもおほやけの御いそきはしんしちに月や定りて侍らん左のおとゝこの八月はかりにとは承れとたしかにはまた承らす朱雀院みなつくりはてたんなれはなほとくいそきてあるへからんことをものせよと仰せらるれはさらはおほしなやむことも侍らんかしいはせしめ給へや左のおとゝけしきみんとての給ふにやあらんと心つかひし給へとたれもたれもなに心なくうちかたらひ給ふ大將とのは御みきなとまいらせ給ふ右のおとゝかくなやませ給はすは月ものこりすくなくなりぬるをせくらのかたへ御さい給はらんと思ふ給へるをと聞え給へは左のおとゝなにかさやうにすさみなとし給ははけしうはあらしと聞え給ふさらは承りぬつもこりかたにおはしまさせんむかし御らんせしよりは水なとも深くなりいほといとおほくすみ侍るうりかふものともは家の中よりなん行かへり侍る御らんせさせはや春秋はむかしよりも木のかすあまたになりていとおかしく侍るなと聞え給ひてみなかへり給ひぬかくて二の宮姫宮はこのおとゝのにしの方におはします彈正宮は

二の宮の御めのとなとくしておはしませと女御の君の聞えおき給へれは二の宮の御もとに夜も晝もおはします藏人の少將いかてなとはおほせとおとこ宮おはしまいていさゝかけしきある事聞ゆる人もなしこの二の宮に思ひからしたる君達はこたちにつきてものをとらせつゝぬすませ奉れとの給ふもありけり藏人の少將は中納言の君とて御身につきつかうまつる人によろつのたからものをとらせ給ひつゝぬす人にいれよとの給へとさるへきをりもなしいかならんひまにいらんとうかゝひ給ふこと人々もあまた聞ゆるなかに五の宮よりせちに聞え給ふ宮より聞ゆるほとに一の宮のみ心をもかゝるすちに大將みなし給ひ こゝに五十九丁をつくへきなり 多くなむとてさては云々よひとよたちて云々このつほねに聞ゆる 五十九右 まかて給へは大將さらはかの聞えしみつのをへはかならすしかおほしたて云々いたさせ給へりりつしには云々すゝくしたるさくなとひとくたり奉り云々宮たちそわうの君 五十九左 おとなうなゐしもつかひをとこ宮達右のおとゝ右大將ひとつにかむのおとゝ御車むつ云々かむのとの二

にて云々おはしつきてしん殿の左六十女御の君をゐて云々舟ともの丶いりありくを云々けうしてくるしけになく云々左のおと丶なほ〳〵云々はひ出給へるに云々み給ふをはおほさねとほかすみし給ふ宮たちのみ給ふをくるしとおほす云々おと丶をはおちすおもきらひをも六十一右はかなしやよひいて丶云々おかしけなる物ないしのかみ云々このあそむをは云々六十一左君こそはひおはし云々ゐ給へりいぬもいとやかしく云々おきなをもゆるさす云々まかせてもえ侍らすや云々聞にくやおきなをは云々みつけ手をさ丶けてはひいつれは六十二右物のしけとしの云々いをあらまき人の云々それとういてさせ給ひてあらまきそへてなしつほ云々れうにとてことさらにてつからそかき云々しはしはと聞え六十三右みさうしのてつから云々とりちらさせ給ふな云々月のかつらも云々し給ひやう〳〵夕かけになる程に六十三左水はまつすみかはるともまとゐいる云々なれはそ人の心をもしる六十四右人の心も云々あな心うや云々御文もてまゐりたり云々われこそ八の

宮とてみ給へは云々いさ丶ほくわたらせ六十四左なくせのたひにて云々御ときよくゑひ給ひて云々彈正宮世御かへりは六十五右いたし給へれは云々ほそなかこうちきゐはせの云々奉れ給ひつ云々御返りこと丶もあり云々御ふみはさて手つから六十六右めのとにとらせてひとつもくはせてそあらんと云々御をしきともして六十六左いやまさりつれ云々御むねやまさせ給ふ六十七右こ丶になこそゐね云々大將わらひてさきには云々たかはせ給ひも云々いぬ宮はひいて給ひて六十七左とうろかけつ丶云々すのこにみすかけ云々宮三所いて給ふかんのおと丶はゆかも云々御衣ぬき給ふ一二宮六十八右しろきろうのひとへ云々一宮わこん二宮さうの御こと云々こ丶もとはとほからすと云々山のはよりはつかに六十八左やほよろつ六十九右よ明ぬれは云々いをさもとらせつ云々あゆ一こはへひとこいしふし云々てつからわうちい云々すむいせ丶六十九左かんてうなる人云々またおはしまさす云々御まへに人めして七十右はうにもうちの宮云々はうにこそうちの宮云々いとらう

ゝ（ナシ）〱しく云々給ひぬへかめり（る）（た）七十　七十一丁よりいたくみ・たれたれはかくこそあらたむへし　なと聞え給へれは北方かはらけにかくかきてへいしもたせて奉り給ふ「すたつことまたしらさりしひなとりの枝はいつれそしらすかほにもと有おとゝみ給ひてけにいとことはりやされと「とりの居るおなしとくらはとひしかとふるすをみてそとめすなりにしとて奉り給へは中納言なにことならんかたいたしとおほすかくてその日ひとひすゝみあゆひらせくるれはうかはせなとし給ふ程に藏人の少將の御もとより二の宮の御めのとの許に女のよそひゝとくたりしらはらのひとへかさねつゝみて御文ありきのふのつとめてせうそこ聞えたりしかといそきて出給ひにけれはかの聞えしこと宮にてはいとかたかるへきことを宮達も御あそひせさせ給ふへしなほともにすゝみ給ふめるよひの間にたはかり給へきのふのつとめておひてまうてきて此わたりになんさる心して侍るさてこれはいとあつき日なめるぬきかへ給へとありめのとみてあなおそろし人もこそけしきみれとてさとよりあらひにやりたりし物もてきしさまにていとようもてかくして御返りかしこまりて承りぬきのふは左のおとゝまゐり給ひていそかし聞え給ひしかはいとゝく出ものし給ひしなりの給はせたることはあなおそろじや宮におはします時にりも宮達かきのことおはしまさいて夜は御めくりのおはしまさふめれはこれかれたにえちかくもまいらすなんいとかたしけなく旅におはしまさすなるをはやかへらせ給ひね人にけしきみえさせ給ふなさて給はせたるあなかたしけなやかくみくしけとのをせさせ給ふをなんいかて此御衣は御めにもかけさせ奉りてしかなとこそ思ふ給へるまめやかには宮にわたらせ給ひなんとき聞えさせんと聞えつかくてその日の夕方かへり給ひぬをとこ宮たちはあるしのおとゝ御むま鷹なと奉り給ふ女宮達にはこかねのかふこのはこによろつありかたきものともいれて一の宮よりはしめて奉り給ふ犬宮ははこのちひさきによんのものいれて奉り給ふめのとたちにはさうそくひとくたりつゝ給ふこたちの中にかつらものゝ具なと出さるかへり給ひて右のおとゝなしつほ御はらへに出させ給ふ大將とのより御車とも五はかり出したて奉れ給ふ宮たち若君たちなとまいり給ひせうようおかしくし給ひてかへり給ひ

てふつかはかりありて宮おとゝ東河に車三はかりし
て出給ふおとゝは出給はすむつましき人々して出し
給ふを江のかみにの給ふこの東河にはらへしにもの
すなるを東河の水にちかゝらんあたりに車たてさせ
てあゆなとくふへきやうにものせよと仰よあやしう
わかき子のやうに入するにしたかひたる宮なれは心
くるしくなんとて出したて給ひぬこゝは三條とのか
くてふちつほもからさきに御はらへし給はんとてお
とゝもゝろともに君たちさなから御供の人々多かり
御車引つゝくるほと宮おとゝあなたの御車をまつと
のたまへはふちつほいかてかまつとの給ふに御車と
もふたかたに引つゝけて立わつらふおとゝなほこれ
をうなかせしてふちつほの御車を一にたてさせ給へ
はみな人々あはれとおもふへしからさきにおはしま
して御はしへいかめをつゝ（こゝに四十五丁）くへしれいのえんむすひ
て云々にくけにえし給ふにしたかひ云々聞え給はす
かゝれは云々こそやうやまたなき（四十五右）おなつられ給
ふことゝけしり云々宮つかさくら人云々たちはきと
申人云々申給ふほとに七月云々なりぬゆへある夕暮

に云々物し給ふほとにしはくも云々さわかしう物し
（四十五左）聞えんとせしをあえものの云々へたてゝこそは
こゝにも云々（四十六右）さやうのこゝろも云々し給ひなん
やと云々かく聞えうけたまはるもうとからねはなと
聞え給ふほとに云々いとうとゝしとて云々物し給
ひてなり民部卿いとうれしく（四十六左）こゝにもしはした
つねん云々こゝにははちたてまつる（四十七右）はち聞えぬ
所には云々御わらふた云々いとしふ〳〵にいり（四十七左）
かくおはしまさせつる云々よの人あらぬやう（四十八右）天
下によにもとめ云々さねまさらを人と云々女はらか
らとて（四十八左）ことはみつからの事云々つかふまつらし
云々はゝ君はよしなし云々つかまつり人はそて君（四十九右）
なりし人そおとなに云々とりちらし給ふものなくな
として云々そはりたれはなきもの（四十九左）人の子とも
たりしを云々なとまいれはたたむかし云々給ひての
ちよるひる云々かくてへ給はゝすへて（五十右）つかふま
つり給ひつゝ云々北方にも姫君にも云々おほすらん
とおほして（五十左）よろつの事云々いまさらにはと云々

有へらむ物かたり云々たいめん給はり五十一右 そこそ殿かくれ五十一左 北の方いかてなにか云々の給ふそせうそこ云々御上を思ひ聞ゆる云々せんにそいさゝ五十二左 としころのすまゐ云々奉りてそうそきて出給ふき帳おじ出て云々あらさめるをさてき帳を云々女御のやうにて五十三右 有し人にしも云々み給へれとも云々奉り給へれは五十三左 なさきゝしすなはち云々しかはいかにそ思ひ云々いと哀に物五十四右 御はらからの君たち五十四左 さかくまゐりてなん五十五右 聞給ひつるやとのたまへは云々五十五左 おさゝ御心さかくて云々いのりなさするとき五十六右 ゑみてみるらん云々雲井をかくは云々そらにて君かみるをしそ思ふ五十六左 五十七丁よりいたくみたれしかはがく攺むへし かなけかさるへき宰相中將「山さとにゆきつゝみれはうちなかめひとりへしこそあはれなりしか民部卿あなにくやおなし心にとの給へはいらへするはさ仰られつれはなとて御みきたひ／＼きこしめす御物かたりなさひさしくし給ひて新宰相の君してうちに御せうそこ聞え給ふいとうれしくも物し給ひけるをよろこひ聞えさせよいまゝたも聞えさせんなさやう

にてかへらせたまふかくて民部卿けうしの所なれはかつけものはせて御とも人々にはこしさらなさたまふおとゝかへり給ふとてかくてのみをいまはものし給へさておはせはかうちかきほとなるをさしあゆみつゝまゐりこんとておはしぬかくて十日はかり有て民部卿なんよるはとのへおはしひるはこゝにのみおはす中納言は殿つほいかに聞給ふらんとしつ心なくおもほしてしものとのへかへりなんとおほせとひるはよろつの人々まゐりて故とのゝ人もなつき奉りなとしつかふまつるすりやうなともまめやかなるものくたものなと奉れは時の所のやうなりふちつほに御ふみ奉れ給ふ御せうそこ聞えたりしのちとほくまかりて山さとせいせさせたまひしかは時々はと聞えさせしかは一日あからさまにと思ふ給へてまうてこしを思ひのほかなるやうなることゝも侍りてなんおのつからきこしめすらん　ふるさとにありとは人にしらるれとなみたにのみそうきねせらるゝいつしかうちにもさらは時々とのたまはせしかはなんけふまてもかくちかきほとに侍るをありしやうなるをりもいかてかとなんまゐらせ給ひなはいつをいつ

とかは聞え給へり御返りひころはちかくものし給ふさうけ給はりつれはおひなほりをさなんさき〳〵さ聞えしことはなほさてのみおはするをりもありなんさみにまゐるましくなん　そこにかくありさ聞ゆる今よりそいひてしこさも思ひしらるゝさ聞え給ふ中納言いさはなやかにもてなされてかくてもつきなからす山さとにつれ〳〵さをのこさもをのみつかひておはせしよりはさおもほさるれさなほよの人の心をつゝみて北方には物も聞え給はすぬりこめはなくてなかさをたてゝ東の方には北方にしには中納言さいさうさ〳〵しうて女もめしつかひ給はすつかひつけ給へるをのこをのみめしつかひ給ひつゝおはす時々姫君のみよひわたしたまひつゝ物語し給ふ年ころはなにこさかし給ひつるひさひこゝにものし給へりしはかの山さとにおはせし人そかしそのかみは中將にてそありしこれはよろつのこさするなかにきんの上手そゝれこそもみちみるとてありしそこにやありけんきんひきしをよくなりぬへきこさかなさの給ひしかそのゝちはよくなりにたりや年ころはよるひるこひしくかなしくのみ思ふ給へつゝよにえ侍る

ましくのみおほえしかはかくてもえたいめんすましきにやみなけかれて　よろつのこさもかひなくつれ〳〵さなんなかめ侍るそこにはなさかまうてたりしにはこゝにはわれそさはの給はさりしそて君さおこゝに七十五丁なつゝくへし　物なさ聞え給へさゆゝ人には七十五右　民部卿ものし給ふ云々たち給へる人に七十五左　いかゝおほすらんさ云々聞えたはやく云々姫君をおもほし云々かひにやさ思ふるも七十六右　心ほそくのみなん云々よいみちかりやいこめ云々人のもさにして云々し給へやゝいこめは七十六左　よき日さ申給へは人々のぬかせたまはんときにこそ母君はさ申給へはようなき事七十七左　おもほしなけきて云々したかひて御けしき云々おはしませはうちにも五十八右さらになまいらそ云々有てよにも五十八左つゆのいのちも云々うかしめれはよに云々なさ有見給ひて云々物を御さくにいたはりなさせ給へ七十九右し給はすはよろこひ云々侍へき上たりまゐりて七十九左なにゝよりかくふかく八十右

此卷は今本のさかの院卷なる事前にいへるか如し

國讓卷之下

大殿へその日の云々奉りたまふ右の大殿云々物し給へと有云々いまさふらひおほせこそ承りさふらはんと聞え給ふてそのよに云々いれ奉り給ふ云々たえぬへき事右一人出きてになく時めき左一夢のことくたうへるに云々すゑむとなん思ふ云々おもほしすてつづきしかた右二いかてかは立んかと云々時こそはへれかく云々さため申さんたゝみこのみよにかく右三すちのむけになくは云々申さはわそはさすかに云々ゆるし給ふやうもあらめ云々其まさらはう日給はらす左三ものゝかためとはゑりたうふ人也云々たゝまさはそれを云々いともたふさくかくおもほしめさせ給ひけり云々此あそむ侍れは右四しり給はすはへるなりそのはらに云々はへなり又この大納言云々そのおとゝの六にあたるを云々いひふれて侍しとて左四とへるなり宰相のあそむもかねまさかもて侍るあねのはらなり云々有かなかにかの君にしてもてかしつき右五かやうのをりのよういなり云々いへのたふときとは云々しをりたるとの給へはおほきおとゝこの云々侍らすこのあそんは左五すちのたつ事は思ひつぬしたちは云々

そのにかなしとて云々奉りたるみこ女え給へたりさも其女のこともには云々つたなくなはからひ給ひそおほきおとゝ云々人なかれとこそのたうかの有ことなん右六聞え給へ仰こと云々給はゝこの中にさいはひ云々おほしてみやのになくおほしたるとて云々よしやわれをやなり中云々このはうかねの君云々めい王かねさうまれ云々つれてそあらん左六右のおとゝさても同しかくのやうにて云々にくけにはおはせすおはたあまりつ女云々この大將のあそむ右七神佛はほうしにし給ひしかなさの給ふ君は云々聞侍れさえなん左七くらゐなさもかへりみてなん思ふ人右八こそはにはかにはこれを云々たち給ひぬ后宮云々すかたにて物し左八胡の國へやう楊貴妃云々いりましりて侍れは云々思ひかけぬなり右九いとふけうのとそ云々たゝへのかみたに云々まかて給ひぬ云々々はうもおなしゐ云々かう／＼なん思ふ左九宮はらみ給ひつるなりそれもしをさこならは云々おやとあらん云々さかしらもはつかし右十こもりおりて云々うちわらはせさひにたる子ともの左十いとゝよき

人云々ついたるへき人云々むすめとももて云々
いとかしこくおかし云々人々なんとわく右十一藏人
のことも云々ゆるさせ給ふさて云々くものはらをは
云々人はうとけれは右十二給へりしはしありて云々い
そきなさせ給ふ四宮故大きおとゝの上左大臣との
云々藤つほとなし左十二后宮聞え給ふ云々をりなれは
かくいふに云々后宮このさかな物をはなし給ふ右十三
かへりみすはいかゝ云々みなかし給ひて梨壺にはて
くるまをゆるし給ふとそ云々故大ゐとのゝ云々れい
けい殿に左の云々右のおとゝのはなしつほ平中納言
云々桃花殿は女御になり給はすちゝ宮よりはしめた
てまつり左十三里にひさしくゐ給ひてまうのほしせ給
はすこゝは閑ゆつり云々こゝと人おやにしたる云々き
さいの宮うちに右十四かゝるよき日といふ云々かう
〳〵の給ひつれは云々おほせられたれとひころ云々
民部卿の宮の左十四北方もわたり云々聞え侍るを云々
そこなひたるやうにてゆくつも云々ほと〳〵かくも
え有左十五后宮よりめすなり云々なるへしとは申をさ

云々かた〳〵ときまかりさまにたはかり云々ここそ
おもはれ左十五さるなたゝるめてたく云々北方に八た
ひく云々またかたなりにていと右十六あしとおもはし
や民部卿とのゝこゝにも云々いひしろひなとせられ
云々たはかるなめり云々きこしめしたるやういとこ
そおかしかりけれ左十六よくおひなり右十七いも奉らまほ
しき云々ものし侍らん左十七まゐりまうてゝも聞え云
々さらはの給はせよ云々聞えんと聞え給ふ右十八もの
はあやしき云々まゐるへけれと云々御心のなからん
云々たのもしうと聞え給ふここは左大臣殿の御方
左十八おもほしうんして云々君をそわたくし物にて云
々兵部卿のは外すみし左十九北方いとせはうて云々か
へらせ給はねは云々こゝもとにゐて云々かしこに御
あやまち云々しらせさりける左十九いかてとおほして
云々天女をもたる云々天地にうけられ右廿人つてなら
て云々そらことかたしかに云々かしこまりうけ給は
りて云々おりていりみれは左廿たゝまうてにまうてゝ
云々御つかひにさふらひつる右廿一まつひ給ふこと人

々いとほしとおほす云々物し給へれと云々おほしよらんこと云々たれにかは聞え左廿一あひみえ給はし云々うつふしふしてなき云々まかりおりてなん右廿三宮のすけかみも左廿二うちの御方の左廿三それかくさりなりかゝる云々事をのみけ心うし左廿四御心もゆかす云々おほきおとゝのかゝる云々出給ひぬ例のことなり云々かの北方おやの云々右のおほとの右大將このことの聞え右廿五みなかうふり給はり云々くら人たちかうふり云々兵部のたいふいとかたく云々兵部のたいふにあさすみ云々これこそのくら人忠ゑもんのそうに左廿五北方大宮の御もと云々あちきなしわらはへにも右廿六こさまかうさまに云々物も聞え給はねは云々よるひるけひて云々まかてなとするくるま左廿六心ゆるひなく云々むつましき物には云々給へとて御せうそこありつれは右廿七まゐらせ給ふこの宮まゐり左廿七さねたゝのあそむこそ云々いとさいはひなく右廿八ゆ水もたちて云々はちをみることゝふし云々なけき侍なれは云々うへよにさ契られたらは云々にすさる所

した云々はためたましやと左廿八かたらひ給はゝ右廿九よたりのおきなを云々ことはなしにけれ云々はうをはすゑすとも大將云々おそろしくかしこき左廿九かたらひて聞え云々こゝは右大將との右卅おほしなりにたんなり云々左のおとゝは云々たれ／＼も物も聞え給はす云々つとひし人々もまゐらねは左卅おもほせとも物も云々かくいふもしるく云々御つかひもみえねは云々の給ふやうになり給はゝ云々みやたちをみたて右卅一ありきたまふかくいふ云々つみにもあて給はは云々みたまへわつらふ云々心を思ひ給ふる左卅一さやうにたはかりなとも云々みつのをの山云々さあらんほとゝあからさま右卅二せぬわさなうよき人云々心なともきよけに云々大將とはいとはつかしく左卅二あらしかしいとよく云々あせちかくあらはれて云々聞えなとするとの給ふいぬ宮云々ちゝきみ見たてまつり右卅三ほそをといふ琴もたせ云々二人は五位二人はやんことなき左卅三しろあをしな／＼に云々二人はをとれり宿もりといふこともたせたまへり右大辨あをにひの云々かくさうとも御前云

々下らくなりらう中將は云々とものひと右卅四 うたの
こむのかみ云々ひいのそう時まさ云々まかせたり律
師わらは云々御ともにかゝる云々いてたつかくて二
條云々こゝはみつのをのみち左卅四 たふなとも云々い
とおもしろう云々さうふきよこふえふかせ云々まつ
もみちの林におましゝきて云々山のほうしはゝ云々
おかしきかれきひろはせ云々をものかしかせ云々お
ひたるさひら右卅六 なとてうして云々君たちけうしつ
ゝ云々この君につかう云々散たるをは云々けうある
にまつまつかたの云々むかしいとゝか左卅六 おもむき
たまひにし云々御かはらけ参りてさかのくやうにも
侍るなり云々吹あけに云々みるはゝなしき山こもり
も云々まゝゐせるけふ大將云々右卅七 いまは秋山の云
々左卅七 ちりまかふかな云々山ふし二谷あり云々たて
ゝくりをてことにやきてかゆにませ右卅八 よふけゆけ
は云々露にぬれたる云々よところなから云々右大辨
の御ともとなるすさのひとり云々かうしすかゝる左卅八
常のことく右卅九 そのみのをにもぬるみやはせし云々
よをくらみ云々ひのほとりには左卅九 たねまつ山こも

りの云々うまともにおふせてほしひうま云々ひさつ、
つゝらゝす云々すてうをあふこにして云々かなまり
かひさし云々てうとつくしいれ右四十 いれてゐてゐ
り給ふ云々またしくに物をこそ云々奉り給ふ右大辨
云々よろつのおこなひのかみほたい左四十 はしめ用あ
る者を云々又のひは文つくりそのてうにも云々せさ
せせんはうせさせなとし四十一右 こもりて年頃云々なり
しかは女三宮四十一左 給ふれとおやは云々の給へかのをは
きみに云々いかやうに此事云々奉らんたに云々みえ
給はぬなから云々をとりたまはす四十二左 これらかため
にうれしうさふらはましう云々さりとも、みな云々と
人しか思ひたらさめり云々心つき給ふたれは四十三右 山
こもりこしはかりは云々御物かたりしてかへり云
々くちは色の襖なと四十三左 人々御後にたちて云々ふも
とにてわかれ云々人々たかゝ手にすゑつゝ四十四右 君かた
めこたかてにすゑ野邊に出てまつむしをくふ鳥をと
りつゝ云々しらするとやは云々思ひてさるとてあせ
ちの君云々くとしこありき四十四左 つれ／＼とまもり云

々ひさしうこそみねはむかへに物しゝかと留められ云々えしもはへらさりつる云々からうしてまゐりて侍りつると申給へは上それは四十五右院の御かたかくて云々あらまほしく云々こゝにみたて四十五左物し給ひぬへうは云々ともならはさんとてなんとて云々御返りうけ給はりぬ云々人にみえぬへき四十六右いさやこけをうすみ云々奉り給ひつきぬわた云々もとにはこに入て四十六左吹上の君の御おくり云々こゝは宮内卿云々こま車もをさ／＼云々大將とのにいと多かり藤中將云々大かくのすけの云々ゆるされたるかへし四十七左昔大學の院に云々うへにうへつゝふみの云々いきて侍るかひなむ云々まつるなんひかみたるやうなり四十八右かへりみ給はめいと云々かゝれはかれはかくはなややに云々するゑひさしく四十八左こゝは右大辨との云々大將とのにはみかとに人も云々よりはひことに云々をとこ子もをんな四十九右なりしかはふところより云々うらみもおひいたつら云々宮つかへいたし四十九左なせうにかゝる云々なみたをえさへて云々人も思ふへき

云々いまはかくには五十右我御せひのみ云々うちはゝゑませ給ひてすこしいき出て云々御しりにつきぬ五十左おとゝの御もとにと御ふみ云々きみたち太刀をぬきて云々いさえきかす云々うちわなときて五十一右いふこゑを聞給ふに云々おしこみいりて云々みのときにそれちひらへう五十一左こゝにまゐるとて云々はやつけよおもひ云々くら人の少將云々聞え給へは女御の君うちわらひ五十二右しん殿の北の方に云々かたときに玉の云々かねてせられむやうなり云々にしの御かたには云々民部卿のみやの五十二左はらにくゝらうまれ云々こゝらのならひ五十三右いと思はすに五十三左おもほししつむらんと聞え給ふかくて云々御せうそこ思ふに五十四右宮つかさなさるゝ云々事とも侍るを云々あい返りみるへき云々給はりしか侍るなれ云々おほして大將を云々宮につから五十五右こゝはみくしけとのこれは右大辨云々あしかりしかは云々うへにはことにうしと云々したにはいとねたう云々みなしなゝんつひに五十五左我も／＼ときよら云々御いきほひなり云々それし

もろ人はさま〳〵云々をりたるにましてさ五十六右ふら
ひ聞え云々かくてきさいの宮わか御そう云々なほ心
うきよなり云々よになりはてぬる云々たりぬへから
ん所に云々こゝはすさくゐん五十六左大きおとゝのきた
の方云々秋のころほひ五十七右ける事心うけれ云々奉り
給ひし時は云々みせ給はす五十七左おほそうには云々こ
ゝはおほとのゝ北方云々はしめてまゐり給へりける
に五十八右聞えさせんと思ふ給へつるに四のみや云々け
ふあすになりにたるは云々聞えむとなん云々なし給
ひしなり云々はち給ふへけれと云々なりにたかいの
ち五十八左やすかるましけれと云々いかにおほすらん云々は
うにすゑよとも云々藤つほのみやは二なれと三の云
々春宮はうまれ云々五十四右みこをとおほして云々みよ
の人のいひ云々月ころは御つかひ五十九左はうするては
六十右なほまいらかまし左六十まゐりぬへかめり云々くも
の色とり云々さかしまなりや云々これこそのくら人
六十一右いひつかせ給へは云々みちもなとも承り六十一左侍
りつるにより云々とかくの給はする云々このかく

しゝて云々むかしの心さし云々こともなくはへれは
六十二右心ゆるひなく云々なほおほしたゝは六十三左物し給
ふをなり云々あめれとみるに物云々さその給ふなる
六十四左をとこみこつとひてよるひる云々されともみか
との御前にまゐり云々給ふことの中にも六十五右つちと
たまとの云々いみしきことをも申給ふ云々御前に手
ろしてまかり六十五左うらはへなやみ云々へけれとも
ゝてはなれ云々ひらうげ、まうなる云々裝束とも
ゝのへ云々十人つゝつけたり云々かちのきぬかうふ
り六十六右しろかねのはくちらしたゝしろはかま云々ふ
かくつはまて六十六左御くるまうし云々源中納言良中將
右大辨云々めあきたるなきなし六十七左一の人たまひは
云々うまにのりぬ云々みくしけ殿の人云々のかたれ
は女御の六十八右なりまさりたる六十八左このよにも淨土は
有けり良中將をみてこれはゆきまさけな云々よみし
はやと云々かけ給ひけるはおふけなき云々給ふめれ
はかの君六十九右そのみさくにそ云々かたらひむれつる
鳥を六十九左君たちみなおはす云々こゝは春宮まゐり云
々うしふたつと申七十右うたてくもいひなさるゝ云々

御文ありたたいまは[七十一左]二の宮あかゝる云々ひとへか
さねおりもの云々おかしくこえて云々給ふうへわた
らせ云々いとみかはして云々給へと聞え給へは[七十一右]
二の宮のはされはこそ云々これもたくひのひとそな
とこれもにくゝ云々つみも思ふましき物云々[七十一左]給
へとの給へと云々けにこれは云々いかゝさは侍らん
上人のえもとくましく[七十二右]いとおかしなしつほはな
ほものゝたまひ[七十二左]四の宮は藤つほ[七十三右]そうし給ふ
こども云々ことは御ためにやんことにてもそうし
[七十三左]平中納言殿の[七十四右]聞え給へはなされ云々さわく
左のおとゝ云々末すけはさかしき人に云々かゝるほ
とにさかの四の宮をとこ宮うみ給ひぬ太后宮かゝ
りける[七十四左]いとになく所々云々四の宮の御方かく
てすりのかみ云々なけれはいてゝ云々うしくるまさ
りそく云々もたりけりとうてたれと云々えさるまし
とかう云々こゝらの年ころ云々猪しさいをうりて世
に[七十五右]めのわらのをとこに云々こけの衣を云々こも
り侍るを云々かねまさらにはえの給はし云々みはら

からの左大辨[七十五左]せちに申され云々なにの故にか云
々給ひけむわたくしことには云々あそむの山に云々
たゝやすはそのこ云々物にて侍りそれはおふけなき
心の云々おとゝそのこゝのすきはきもあるや云々天
上の仙人も[七十六右]さもならさめれはにこそかの女御い
うそく云々みはらからをこして云々かみ年六十はか
り云々このころになまうて給ひそ藤つほへ云々かく
てかむのおとゝ[七十六左]こゝにもとまり云々かのあせち
の君云々心ほそめに[七十七右]院のうへはなとか云々御返
事申つき云々[七十七左]ほとにおとゝおはし云々かれらか
しへき[七十八右]うへにころされんや云々おひたるものをの
こらあまた[七十八左]おはすれはちむわたり云々御さむた
ひらかに云々ないて物し給ひそ云々おもほすは心有
て云々いとしとけなき云々うへたち給へり御前より
[七十九右]いつちそあなさわかし云々思ふ心あらは云々よ
るへくもあらねは云々少將のなきを云々こゝをはゝ
なれぬ[七十九左]かりきぬにわらうつはきて云々おかしく
見えて[八十右]宮たちもおはせて[八十一左]まろをはよも云々

みな人にゝくまれ云々いひそめつれは云々おはひかけてそれにうくて云々よへはよろつのことおほえ八十右二いかてみむと名ひしこともさの給ふ云々五の宮このみを云々二のみやの御もと云々たひらかにやおほつかなく八十二左五のみこの御ふみ云々上のゆるさせ云々みえ奉り給はて八十三右うふやをありしより云々二月さいふかみの云々みすほう七八たん云々くたゝ經の云々そのよ夜ひとよ八十三左ひとひなやみ云々大殿のこうみ給ひて云々あは物にとて八十四右さわきてしつ心云々いていりをもおもほし云々人多くさわき八十五右二の宮におはして云々御方々をはち聞え云々我をなしり云々あかし給ひつ八十五左あまたもたまへるそうに云々ちひさくよりうへの八十六右こそはおのれをも八十六左物をさいさの云々大將とのきぬもぬきあへ八十七右ぬうつくすさく云々雨のあしのことに云々有めおやをは云々はたあるにしたかひ八十七左女こなれと云々をのこはかならす八十八右れいかうもあり云々こゝらのみこたち八十八左たかのもくゐたちて云々まゐりていさゝせ給

へ云々二の宮は八十九右心しらひたる八十九左とらの時はかりにいかにかくなとおとろきて云々なほおきさせ給へと云々おきなといと心ち九十右宮なにかしはし云々給へともなにか云々給へとこそは九十左所々より云々こたみのはなをしかな云々かしつきくさにもし九十一右こらむせんと云々すこし人心ちも九十一左かひなからむや云々つれなけれと云々こみ奉り給はねとも九十二右ふし給へりしさるに云々けにかおほきなる九十二左一よもよひいれ云々宮あらすと云々さこんらこそ云々給はらすおそろしき九十三右たはからねよかし云々院のけいしなれは多くのかつけ物九十三左參るへきを院の云々たひさらう物云々よにあらん人の九十四右給ふとやおほさむへこそれをは思ふにあらね云々とはすやみちには九十四左みすて奉りて云々せめられは心そら云々院のみつけ給ふ云々わいてもさてそ云々院の御ともに九十五右かけにまひ人とも云々はしめて進士より出たる云々右大辨良中將九十五左たむゐんさせ給ふ云々まつらせむ右大將云々思ひつるいかて云々みなたんゐんす

九十六左 さいつころほと〳〵云々からうしてちうはい
云々なてうわさし云々たまはすへき 九十七右 うちのみ
かと云々きさうのをのこ云々のゝつかさのくはん人
云々ちからまいりて 九十七左 たむゐん給はる云々しちら
いを云々九のみこは 九十八右 ふえつかふまつり云々きよ
くかきたるも云々風ゆるうふける云々ふみ奉るにや
九十八左 申給へはみかとたちよりて 九十九右 すさく院おいせ
る云々ゆきそふりけるうちの御歌云々つれてこさら
ん 九十九左 ひたちの大鳥のみこ云々いくよをふれは云々
おいをみすらん 百左 おいもみな花をり云々やとにさけ
やと云々右衛門のかみ云々よろつの花そ 百一右 大將源
中納言云々みな人も云々まひしうたうたひさるから
せぬはなし 百一左 けうしあはせ給ひて云々けふはいと
けうある云々いぬる年の秋ななよりかゐつる云々さ
聞きやたゝまろ法師にたらによませて云々三條に侍
りしみこの云々みかとしは〳〵はもまて 百二右 まかせ
はへらさりけれ云々この水香殿に侍りつる人おほえ
す云々まいらせしかひなく 百二左 たのもしき物云々こ
のくらゐとこそいはせ云々有やうはゝらのはゝを 百三右

きたりしかはなに心もなくさあらんをかはさせんと
の給ひてしかはそらことせすといふそうに云々はた
かくしゝことゝてなん云々おもほしすつへき云々よ
からねはたち給ひて四の宮の御方に云々はうしてさ
いなませ給ふなめり 百三左 ぎこえさりし云々御物かた
りし給ひて云々つふらかにしろくこえ給へり云々ち
ひさや人のはしめはかくあるものかな我もさそ有け
ん云々いとあさましかりしや 百四右 ちひさきとこしか
しとて云々殿上人さに云々申には時なりぬ云々參給
へと宮云々給へて出給ふに云々二十くたりはかりさ
くら色の 百四左 わたきさらすまて云々御うま一御かと
たち云々御おひ御はかしなと奉り給ふこゝはさかの
院の花の宴の所 百五右

第十四卷 脫卷

第十五樓上卷

此卷の上下のたかへること始にいへるかことし
また卷のうちのみたれしを改しもまた同し

樓上卷之上 すみわひぬ云々みつけ給ひて云々給ひけるを
ゝんな 百一右 すさく院の御はらから云々聞えし御はらの

云々右大將との云々時々み奉りし左一又かくみつけ
云々いしつくりてらの右二さわかしきまて云々ゆゑ
〳〵しき云々几帳のほころひ云々大とこのみたり云
々をさな〳〵しき云々なといふあふこ左二をのこ子か
こもよほろ云々しろううつくし云々とのかたにたち
たり云々みあはせたまひて右三たか御子としらす云々
右の大殿とかや右三うへにちかうつかひ云々きえては
泡と右四おもふたナへらかれ云々給ひたり心ほそくお
もひ云々きこえ給ひて左四かたらひきこえ云々このや
うにおもひ云々きこえむなと聞え給ふに右五みくるし
う心くるしう右六まいり給ひてあそひ云々たれかをし
へ奉りしそ云々いて給ふ此君の左六奉り給ふにしの云
々かくなんと聞え右七かれにおとらしとすはかり云々
侍らんからに云々いまはやともかくも左七よにもいと
多く侍らん心はへはえにくませ右八よからんとて云々
ものいれんとの給ひ云々きぬなといれ給ふ左八いまさ
てのみはまてこは云々人のものし侍める云々心よせ
かて云々めつらしよくみ右九もろともになれにし云々

またやつたへんと云々あいなきかたやと聞え給ふ云
々みところあるさまに云々はらからのやうに云々あ
やしうおさな〳〵左九ひやうふともなと云々よそそお
ほしたり右十とよりみいれ給へは云々東のつまとの云
々人ものめしゐたり云々こゝろきこうちのつやゝか云
々あやのはりわた云々つやゝかになまめかしけにひ
たひ左十かいねりのこうちきすきはり云々思ひ給ひて
云々さはおんひさにゐて右十一うちしはふき云々おは
せかたしけ云々なにかははちさせ云々あすなん侍る
なと云々御かへりうけ給はりぬ左十一なとこその給ふ
らん云々おもふ給へ侍らて云々なむと聞え給へは云
々給ひつるなかたゝはかりに右十二うれしきことにも
、、、、、、、、、、、侍るへきをちかくては御心おとりもやと思ふ給へる
ここにも云々いまはたのみ聞えさせなん左十二すこし
、、のふることも云々みへかさねのはかまひとつには十三
右とて御ふみもなしいとちいさきとねり左十三はかり
はの給へと云々うしもなくこそ云々み給へられてな
く右十四なむしてにけて云々くやしうなにせんに云々

さらにひんなるゝ左十四たらんかたちも云々給ひしか
ゝことはりにこそ云々らうたうして云々てひくれたらは
はやう云々あつめ給ひける云々おかしくこそおはせ
め右十五給ふらんな身の上云々かきりの給ひいたせ云々
なとよくせさせ給ひて云々御車にておはし左十五ちひ
さくおかしけなるわらはなとあり云々いときよらか
なりしひとの云々右十六ゑみ給ふはけにあいきやう十六
左ひきかくしたまひてしそなとゝし頃左十七むかしの
心のやうに右十八御くるまにをは北方御しそくに云々
のりぬつきにおとな云々御まへにおはせんと左十八ね
いりて侍らんとて云々ふる事あらくめ云々たまひて
御とのこもり云々てゝこそして云々大とのへあまた
云々いときよけにしとうけきて右十九おとゝのこすく
なくさう〳〵しとて云々誰そとゝひ云々かしこうわ
たらせたまふ云々なまめかしく云々大殿宮にまゐり
云々宮の君にもさやうにこそとて云々給はぬなりけ
りあない左十九大殿のしゝう大納言の御たらうとうの
宰相の御をと左廿よりめりおとゝの御子すくなり物

し云々はへりし宮なとをも云々我をはおやこ
とも云々ことわりにこそあなれ云々一日み奉りし云
々うちみあけてたちたまへりしを左廿みすてておはせし
云々なけきおひ給はす云々よからめかほかたち右廿一
心もみゆるおもなし云々御心の有樣云々御心はへの
云々心はへなとこそ左廿一やますけをつゝみてからの
扇云々つらきためしとやする右廿二人々よりやすらか
におはすいにしへを云々思ひしくなにも云々きゝい
るなしも人云々きこゆれはあなかしこ云々こなたに
いま五よを右廿三なかたゝはへりいまはへとかく申へ
き云々み奉る人々の云々こなたに十日宮の御方に十
日いま十日を左廿三おもひ給ふ人も有けめ右廿四みえ給
ふ人なめり云々もてなし給へかの大將をもをは君の
左廿四給へは十五夜はこなたに云々御方になとの給ふを
さはそのほと云々御方にて御さうそくし給ひ鬘つら
ゆひ云々右廿五おほきなるは人に云々ひき侍とそらし
云々さしいてゝみる云々うつくしとける人云々ひか
せたまへは左廿五いてそのゝ給ふみやとてかたしけな

けれ共此君にはまさり云々さかなう心こはくなまめか
しき云々いねこその給ふ右廿六うつくしかり給ふ云々い
さこてゐておはす云々誰にそ奉らせ云々むさ給へれ
は人々左廿六かたをえたまひて云々こときさしはな
ち右廿七小君は大將をはてゝこそさつけ云々廿からあ
やちむのみねに云々御方にもよの云々人の心こそ云
々ちんしたんのくし左廿七心にくゝ申かはし云々春宮
なとおほつか云々こゝちさへよに心右廿八し侍りつれ
宮なにをとの給へはいぬ宮なとをおろかに云々また
はひゐさり給ひ左廿八思ひ侍るらいねんは云々奉ら
ぬ事となんなけかしう侍るかのおとゝは云々あら
さりけりと云々くたれるてしう云々あそむは七人の
山人云々おとりのてよりこそ右廿九院のうへなとは
云々おなしくの給へとも云々かのひき給ふときに
こそ左廿九したゝるいけの云々心に思ひつゝけて云々
思ひをなしてひき侍れと云々音も思ひ／＼に云々た
ゝひきにやはひく右卅ひとつをたに云々思ひ侍るに
ひとり云々さわかしくてさるへきにも侍らすかむの

おとゝ右卅御まへに聞えさせ云々聞え給ふ大將わかこ
君左卅一へかりきかしなと云々とのにし給ひて右卅二
なりわたるを云々おほくのこと侍る云々さやうこく
をさるへきさまに左卅二さらなる御事なり云々すま
ゝほしう思ひ右卅三いかてかとおもひ云々たふと
きこはしか思ふ云々おもふたまふるなと云々殿さき
おふこゑして左卅三有につけて表右卅四いまめかしきこ
との左卅四源氏の君とも云々たけ五尺なりもゆひあ
こきせ給ひて御あそひのくにてさふらはせ給ふ云
々まゐりにくゝ申給ふ右卅六み給ひしかのとかにいま
み給ふに云々としへたるいはの云々治部卿はしけの
のみこのむこなり左卅六十よ日ころより云々御めのと
のはらからなるに云々ことにうるはしく云々うちた
かゝらぬ云々ふたつのなかに右卅七たくみはえせし云
々つかさのなかにすくれ云々かたはなることなく心
ことにつくらす云々そのみつのさま云々こせんのた
けのたかさをそれよりは南なる木しけゝれはすきて

みつかに卅七左　みくらにおけれ云々しろかねには云々
大将おは給ひて卅八左　是彼いきあひ云々そわう君の
云々御方の宮の君といふもまうていきあひて卅九右　聞
き給はの云々うへにもけにいみしう卅九左　にしきをは
らせ云々うすこうなるを四十右　おまし所なり云々白た
んすはうを云々ひとよろひつゝ四十左　つくりはてたり
同つくもところの云々かたはしきをめて四十一右　いぬこ
そのしつかなる云々ならひ給ふへきなり云々ひくな
き事には四十一左　さりともこゝにこそはおはせめ四十二右　侍
りつれはかならす云々あそひ給へるさまにて云々た
ゝん事も云々いまひとたひとのみそ四十二左　思ひすてら
れ給ふらん云々わたくしとえさらぬ四十三右　いかにかしこ
まり云々いよ〳〵つかうまつる云々ふるのあはんの
ないはゝは云々はらのまたいもうと四十三左　ふかくまい
りはへらて四十四右　およすけてさむひかま云々こと〳〵
しう人の云々例の琴にも四十四左　をしへ奉れと云々人に
てかきりなく云々おもふと聞て四十五右　院のうちしつら
ひ云々つきの十五日云々院のうちきしき四十六右　さゝや
かなること器にて云々兵衛なとゝいぬみや云々うち給

ゝはすこれらみつけ云々ならはい奉らんとの給ふ四十六左
こほるはかりにて云々ならひ給ふへき云々ふように
はへなり四十七右　おはせぬところなり云々なほひさしく
やは宮は四十七左　おはしぬくれ方に也に云々ものおほせ
らるゝ四十八右　さまをり御らんし云々なとおもしろき
云々きこえ給ふほとに云々なそことならん云々き給
へるなりと四十八左　すゝしにはかくし給ふと云々ひとゝ
ころあらす云々すまひにさふらはせ四十九左　しるくにな
く云々ふきあけのはまの五十右　御ものかくしなほ云々
音よりもすくれ云々聞えんともおほえす云々なれは
とき〳〵も云々しろきうすものゝ五十左　こうちきをき
給ひて云々ところ〳〵にとて云々みおこせ給ふ五十一右
うちはへてほのかに云々またこそみえ給ふ云々御め
のとたちに云々ちかうあらぬわき五十一左　こけいひはへ
るなれ五十二左　あかほとけかくし云々きこゆとも心しつ
る五十三右　たゝむつきのあひた云々中納言御かたに五十三左
おはしけれかみの云々いとをさなけなる云々ちこに
かつらを云々なくててふにや云々かほかたちにそ物
し五十四右　なに事にもすくれたる上手のこゝちにて云々

ちひさき子とものいさおかしけなるを云々かくて大
將宮に五十四左 おまへはみよおはし云々たゝひさゝころ
を云々はへらしさてとそ五十五右 給はんものゝ心くはし
くみさせ云々ならひ給ひぬこれは七になり給ひぬ云
々すこし侍にけり世中云々物かなほひさゝせ 五十五左
人はたゝ人みすはなれてやならふ五十六右 あへいこさな
らねは五十六左 なさはなさか物云々きかせんとつねに物
し給ふ事は云々おまへたにさて云々ことのひかたほ
し五十七右 ねんしてやおはすらんみそかにおはせよりし
云々大將のをは云々人くさうそく宮にも五十七左 おなし
かすなりおなしひ五十八右 心にくゝめてたし云々いさた
くひなしさみえたり云々ふたあるにくもたすき云々
かたをうつしすゝき五十八左 おほえある人々このうち
にましゝたらんは云々馬くらよりはしめて云々上ら
うしくるまは五十九左 あをすりすみすり六十右 給はんさに
しの云々まいるへきなりとそのこせん云々かたち
いさきよけ云々右大臣さのなさ云々いかめしうを

ちの中納言さい相なさ云々つかうまつり給ふ六十左
すかやうの子とものうたのすけ云々こかねつくり
たゝのいさけこなた云々右大殿これこそ云々左大殿
のいかめし云々かすこそおよはね云々またそへん
さの給へさ便なく侍らん六十一右 うまをうちておはし六十
一左 君みいたし給ひて云々おもひくらふるに云々あ
てなる宮におはす云々みきゝてんけに云々まついち
のみこをうみ給へらましかは六十二右 うちにいらぬほさ
に云々ゆふはへしていさ云々さらにもいはし云々給
ひてすたれ云々さも思しめしのやうに云々打ほゝ
ゑみて六十二左 大將の姬君のめてたき云々かしつくさ
思ふこはほいもかなはて云々ゑりくつにそあらん
六十三右 まつ宮おり給ひて云々さしており給ふ云々お
なし色の云々御あふきさしかくし給ひて云々おは
するさまいさうつくしくゆゝしくおほえ給ふ殿はら
ひんかしのたいのつりとのにゐなみ給へり云々三
日のよろこひのは六十三左 をしき十二したんの云々こ
うちきひさへかさねの云々これより下には云々つ

きしもはみすいらん六十四右　給玉ひしよりも云々み給
ふ人々云々てりかゝやきてこのよに云々すはま
のあなた云々なかしまはかりを云々ぬりたれはき
ら〳〵とす云々はしなる念すたうにつくほと十五
けんなり六十四左　かはらふきにしたり云々つゝきての
ほとは云々人々み給ひて六十五右　をちの右のゑもん
のかみ六十五左　かんのとのゝいにしへ思ひいたし云々た
かうおひたふれてしも云々はひこりて人云々給ひつ
ゝくりなし給へるさま云々いきほひみたてまつり給ふ
に云々おもわすれ給へりし云々かゝることこえいみ云
々六十六左　さ有ましくや云々いかてかこなむ六十七右　あさま
しくわすられにてや云々なるへかりけれきかま云々
かしとかき給へり云々かうてうせさせ給ふいと不便
にと申せはいみしう云々さいなまれめさて六十七左　さく
さにくちはの云々しうとくなる云々こゝさよらなる
に云々はりあはせへ云々とくちもよらねは六十八右　はへ
るいかなれはといらふれは今日は云々はへらねは

ゝといふ云々つれはいとほしく云々ちすらのもはかま
云々ふみにてよき程六十八左　おほえはへらすやとて云々
にけてたふれも云々いれさせ給ふかんのとの六十九右　四
日のよなかはかりに宮云々さるへき四位六人云々奉
り給ひてあかつき云々聞え給ふ大将めしなくはまゐ
る云々としおいたるおほとねりのかみ云々はんをお
りて云々みかともかよな云々大殿いとうたて六十九左　も
のくるほしきわか〳〵し云々おほろけには云々いま
めかしく物し云々はなれ給ひて云々給ひてむいかゝ
云々いまひかむきん云々うへたちも御覧せむとお
はしまさむ大将そ七十右　まとふものを云々ことをしへ
んかゝに七十左　とき〳〵まうて云々ものうけにていて
云々いときよけに云々たふれ所々にしとみなとの
云々はしらのみところ〳〵七十一右　あるまなきまゝ云々
おはしてみ給ひし云々あきたりしたりつきの光みて
ゐ云々かた時わすれ給ふ七十一左　へけれこときふらふ人
々の云々ねんし給ふいと云々いさまのたひことに
云々たゝいまはおよすけ云々十七日なりかし七十二右

傳上卷之下　御たいこゝにて云々十二人きてうさしつゝき云々御やうたい七尺右一たかうさせさの給ひて云々なかく\さ人あゆみつゝきたり左一おはするさまはいさ云々りうかく風をいぬ宮の細緒風を大將云々いぬ宮にりうかく云々かた時にならひはて給ひつ右二さへきりてかく云々ひきこりて音を左二さてもわかおほえよ云々ことをてならして右四いたりてならせは大將云々おもひならす秋の云々あかさんこさも東云々こひしくはへめる右四ひやう𛀁侍從のわらはにてみあそびかたき云々しはしまゐりけれさ右五さはらに侍從云々給へはひゝなあそひを左五御そかいさりて右六まいらすかこしくたり云々かきたることさいさ云々みいたし給ひて左六およはゝやさ聞え云々哀さおほえ云々侍從參りて云々ひかせ給へる八しやさ云々かたらひ給ふ夜右七おなししらへをひかせ奉り給ふたゝおなしことなるをうれしう云々大殿まゐり給へり云々ひゝなあそひをおきふし云々こくはくの日ころ左七あらすありぬへ

き云々こゝにもかしこにも云々一夜も千年も云々この宮たちの云々いさなつかしう云々春宮をしへ云々思ひいさまれて云々たれかさは思ひたて右八おなしほさのおさなきみこうし云々御あそひのくなさ右九ものし給ふなるなさ云々はらへして歸り左九こゝは内侍のかみの云々人名かうさりならし右十さくも侍りぬ左十すかくさも云々大將うらみ聞え云々人のみきかんこさ右十一ひき給ふへかめり云々右大殿に參り給ふ宮君も云々悦給ふおほさのゝ云々きくの宴なれは云々たいめんにたちなから云々けいしさもめして十一左宮のもかくやあらん右十二いさおさなしう云々心をしへ奉り給ふ左十二きこしめさせける云々給ふまゝにいさかしこく云々おほしたらてよろつ右十三このははかくて左十三心ちもいさかなし云々ことのうへに云々さはかりてつかしさ思ふさ左十四さまる木のはまれなり云々そよさいふさも云々思ふゝしの給へり右十五ことにさえも云々うちはしめ世中云々およはすさしたかうなり左十五みせけんむかしより云々たえてかなし

き云々天下にて一のさえかたち云々みかさゝ申とも
右十六 うたをよみたまふ云々よみかうせさせ云々か
くせさせむ云々たえすねんし左十六 みくるしのさまや
云々おもふひこあらんとてそのまゝに返し右十七 あ
ひしらひらかせ云々おころき給ひたり云々かうはか
きならさす左十七 こゝはしんふみの日云々やり水うゐ
木ともいと云々さるはいかてかさ右十八 いらさらめか
はへこそいらめとて云々ふりしめるかな云々いぬ宮
なくき給ひそ云々いかゝそやありし云々きみのなゝ
きそと左十八 うすゝはうのからの云々人よりもこゝ宮云
々給へとてとりつゝ云々あまりたる事し右十九 をとな
〱しうおはせん云々うれしきよなり云々いつらめ
やすくも云々ひくるゝめう云々めてたくさうそき十九
左おくのかたより云々きよう人にもはからし右廿 まい
り給ひてみなまかて給ひて二所云々こもちくさから
ぬふすもてこさて云々しらせんかしと左廿 おかしうと
もさて云々犬宮とひとしく云々いなくち神にも云々
なんとは聞え給ひなからいみしう我のみに右廿一 いと
あきらかにみ云々あかほさけなほみせ云々さにそき

ゝこえんといひしかたみに左廿一 み給ひつれさはれ云々
あさましき心ちし右廿二 いますこしたけに云々御かほ
ゝよとの給へはいかてかくまては左廿二 こよなしかしと
云々奉るやとの給ふをしか〱なん云々つねにそら
くちもし給へる左廿三 なかさまさりつ云々もたまへる
多からし云々人しらしなん云々なほも内侍のかんの
云々ならひはて給へらん云々あはせまほしき右廿四 ひ
とりゐてむしかるへし云々うしろめたく聞え左廿四 ま
かて給ひてうし返したまふへければ云々いとうるは
しうて右廿五 めしてはなたの云々ならすこゆこなと云
々かむのとのみたまふ云々春宮の御方より云々み奉
る宮に左廿五 あやしうはつかしう云々御かたにいり給
へはにけて云々えしともきこえ云々ことわりになん
右廿六はらたゝしけれと右廿六 あなかまやまろらは云々た
いけうせられねは云々右廿七 しもつかひさうそき云々
をとな〱しうなり左廿七 うすやうにかきて云々かけう
へは右廿八 くらうてそまいり云々くらすほとゝきす左廿八
内侍のかみ云々えあかく聞え云々おましうちしきて

云々いみしうらむに心ふかくおとなのやうにおは
すれはあり〳〵しうその給はしとおほすおさなき心
ちに左卅九 おはしたりつらん右卅 よさりまてうかひなさ
云々内侍のかみ云々かたなれさかうせうひかせ云々
卅一左山のさかきのもとに云々こくのものたゝひとつ三十
哀なるおさおなし聲云々わりなくてもかくて卅一左ま
た歸てのち家右卅三 けふかもにまゐらん云々申給へは
左卅三 四人くしたりつる人云々ゐたる人にと云々のち
かといへはしかこの御のちのおはしますとこたふ卅四
左 かくなむとと申せは云々さうそかせて四人云々さ
うそきてあふき云々いとゆへ〳〵し年云々大將の君
も左卅五 さかのかせうとにさふらふ云々哀と思ひし人
のこなり右卅六 このあふみに侍りしめひとも左卅六 おと
な〳〵しく云々わらはへをほうしほしかり云々おや
ありそくになさん云々申てそうのかたより云々せめ
てうしいへせ云々まつりし身の右卅七 いかまほしけれ
云々心ちいまやゝむ左卅七 からずものし給へは云々あ
か大將にそ右卅八 しかさふらふと申せはなほよしこゝ

にまうてこくて云々しろくらう〳〵し云々いとゐふ
やう云々うねめをなんし右卅九 あやにくにいみしき同
又かの國に院云々きぬ十むらこれは云々の給はすか
きりなく云々ものし給ひなとする所に大將とのより
紅のうちき一かさね右四十 きぬ二十むらこれは云々け
ちかくいまは左四十 かふるものなりけり云々ひとりま
かてぬ云々やかて殿に右四十一 このわらはへの云々あて
ゝせさせんと云々人々におほせ給ふ云々わらはへ
はいまよりは四人かはへてとゝのへ左四十一 ひゝきあか
りはへりまし云々文かうし侍り左四十二 みゆきせめいか
に云々九月九日右大辨に云々みんとてなん云々なん
とすこし物右四十二 さはかの家のきん云々哀にありかた
き云々すさく院は大將に左四十三 らてんすかたり云々さか
の院の大右四十四 いつにか有けん左四十四 女御君宮女御右四十五
さかくきゝかたなき左四十五 内侍のかみの云々ゐ給ふまゝ
にまゐを云々内侍のかみかくし右四十六 しひてきこえ給
へは右四十七 あかほとけにきこえさせぬ左四十七 十四日のよ
さかの院云々れいのきしき云々たてなめたり云々こ

かねつくりひらうけあはせて云々大きさいの宮四十八左
にしのたいなり云々ひさしよまをにはかに云々所に
し給ひつきの五十右 聞んとの玉ふ一院云々いけなかし
まつりとの五十一右 ひろくおもしろき云々内侍のかみ云
々きしろひかたく云々けにと思ひ聞え給ふ五十一左 右大
將のあそんのいへに云々きんをしへてけふもとの云
々き丶かたく侍るを云々ひんなくや侍らん五十二左 たう
のみゆるゆかの五十三右 はなひらはるに五十三左 ひらはりよ
りおほつ丶み云々物せられよとて云々はなちいての
もや二つを五十四右 内侍のかみはこ丶に云々はやくとの
給はすれは五十四左 四人れうのうへの云々さしつ丶きた
る云々御かたまいりて五十五右 まさりてみえ給ひしかさ
云々ゆ丶しくへけの物五十五左 一、院時々云々みえきこえ
たり云々手かけてよせたり云々おり給ひつきに五十六右
かさねたりちすりのも云々からのおりもの丶あか色
五十六左 いみしか丶りける人五十七右 申給ひてめせは云々なか
らいと／＼おかしう五十八右 ゑんとの給へは云々あらぬ
せたにもてなし云々おかしくて宮たち五十八左 一院の玉
六の宮云々ふえうなりと宮さはみてや五十九右 ありき丶

はこよなく五十九左 とか丶み給へし程に云々もの丶給ふ
かな六十右 おほせことを明くれ同たひ／＼をめさせ六十
一右 つたへき丶給ひけんや云々きんのころなん六十一左 ひ
き給はすなん云々これを聞せ給はて六十二右 うちとけて
こそ云々すさく院は云々治部卿は云々いまはかき
りのさいはひのきはめんときまたよに六十二左 さすらへん
時に云々おほかみけたもの丶云々いまてふれすとて
六十三右 左大殿北の方を云々左右大臣かむたちめ云々多く
あるかきり六十三左 御をちとなり大臣の北の方六十四右 内裏に
よさりの云々申しひて聞せ給へは東たつみのかたよ
り六十六右 からうしてまゐりて云々けいせんと思ふに云
々六十七右 れいのにしきの云々六十八右 かきならし給へらん
聲にあはせてこのわらは四人まひて侍らはいかにお
もしろく六十八左 みなき丶ならし云々とくごそかくおと
し聞ゆへか丶りけれ六十九右 いやゆきかこさく云々御てす
さひに六十九左 あやしかり玉ひて云々あるはことはさみ
云々ひるのやうなる云々おほえて歸りまゐる七十右 すく
れたりしては云々さわかしくなりひらめきて七十左 玉

ふにけにいかに云々すさく院の七十一左すさく院中々七十二右ものし玉ふとて云々すみひゝくこと七十二左こゑはしてあはれなり七十三左侍らしこれは七十四右あはせてふかせ給ふに云々水もなかれて云々ことの音の七十四右かゝぬなり源中納言云々心うの御心やと云々いかゝきゝなさん云々なかれいてつる水七十五右はえあるへきこゝに七十五左右大臣右大將のをは七十六右内侍のかみの家七十六左思ふ給ふれとたひ〳〵云々そう官の中納言に云々四人衛門尉になし侍らんに七十七右せんしとくゝたり七十八右いろ〳〵こくうすく云々いと哀なり藤つほ七十八左枝をみるかな八十左七八尺はかりして八十一右思ふものになと云々なりのほそきはこに云々みえたり人々八十二右はつかしきほとに聞え云々とくもいたさせ給ひ云々女のさうそく八十三右かさみれうのはかま云々おほしの給はぬなしとなん八十三左

此下につきのまきに女たいきやう云々の四行は後の人かきそへしものなれはぬきさりぬへきなり

文化六年巳七月三日かきをへぬ

源貞憶

宇津保物語二阿鈔目録

俊蔭巻

宇津保物語二阿鈔目録

俊蔭巻

太政大臣賀茂詣のをりからわかこ君（太政大臣の四郎君かれまさと申）俊蔭か女の家にやとり給ふ事廿五右

俊蔭か女こうみ給ふ事廿七右

この兒則なかたゝの朝臣なり此年より年立をしるしぬ今本誤りてむしみつとかけるをなかたゝの朝臣の幼名なるへしと吾友日中道麻呂のいへりしはひかことなり古き寫本にはくしみつとあり則奇瑞の義なり

この子（なかたゝをいふ）三になる年より母（俊蔭か女）に孝なる事廿九左

この子五になる年秋つかた嫗うせぬ四十右

かゝるほとに年かへりぬ四十二右

この子六になる年母とゝもに北山のうつほにかくれ初て琴をゝしゆる事四十七右

みかと（朱雀院）北野に御幸し給ふ御供にかねまさ（右大将とのわかこ君といへりしなり）侍りて俊蔭か女の琴彈給ふ聞てうつほにたつね至り給ふ事五十一右

こゝに右大臣とみえしはかねまさのせうとたゝまさの朝臣なり院のみかとゝみえしはさかの院なり俊蔭巻の上とまきの下とはみかとも臣達もことゝくたかへれは年立と系圖とをよく／＼みかはすへし上巻と下巻の間にて御讓位のことありしなるへし

右大将との（たゝ大将とのみもいへり）うつほより俊蔭か女その子かなたゝむかへて三條堀川の西なる家にすゑおき給ふ事六十五右

一條殿とみえしはかねまさの北方女三宮なり北のかたとみえしは俊蔭か女則京極上なり又三條の北方ともいふ春宮とみえしは當今のみかとを申

なかたゝ十六歳の二月かうふり給はり殿上し給ふ事六十七右

こゝに始てなかたゝと名いふよしみゆ

なかたゝ十八歳にて侍從になり給ふ事六十九右

なかたゝみかとの御前にて琴彈給ふ事六十九左

右大将とのにすまひのかへりあるしゝ給ふ事七十左

左大臣とみえしはすゑあきらの朝臣なり左大将はまさよりの朝臣をいふ

おなしときなかたゝの朝臣（侍從とのみいへり）琴彈給ふ事七十五右

おなしとき夜になりてなかたゝの朝臣なかすみの朝臣ものかたりし給ふ事七十七左

忠こそ巻

既に云しことく俊蔭巻は半より後はみかとも臣達も始にみえしとはかはれり此巻はたちかへしさかの院の御時のことをいへれは巻始にかくてまたさかの御時にしるせる也巻の終りは朱さく院の御時にかゝれり

ちかけの右大臣一世の源氏を妻とし男子（忠こそ又忠君ともいへり）を生給ふ事右一

忠こその母君（姫君ともいふ）かくれ給ふ事左一

たゝつねの左大臣かくれ給ふ事右三

故たゝつねの大臣の北方（一條上ともいふ）にちかけのおとゝかよひそめ給ふ事右三

忠こそ十歳にて殿上せさせ給ふ事右七

みかと（さかの院）忠こそを時かし給ふ同君（あこ君）故忠つねの大臣の御めひの許にかよひ給ふ事右八一條上とひとつ家にすみ給ふ

一條の北方（忠こそのまゝ母一條殿ともいへり）忠こそにけそうし給ふ事右八

ちかけの大臣一條の北方の許にしふ〳〵かよひ給ふ事右九

こゝにこの北方とみえしは一條上なり北方とみえし故一世の源氏にて則忠こその母君なりまさふへからすまゝはゝ北方とあるは一條上にて忠こそにむかひていふことなり

忠こそまゝはゝ北方の心にたかひ給ふ事右十一

ちかけの大臣の家に累代の名高き御帶を一條殿とりかくし給ふ事左十一

ちかけの大臣御帶のうせしをなけき給ひたつね求め給ふ事右十二

一條の北方博打をかたらひて御帶を忠君のとりたるといはせ給ふ事右十二

一條の北方故たゝつねの大臣の甥すけむねの少將をかたらひて忠君のまさなきわさなし給ふよしをちかけの大臣に告させ給ふ事左十五

ちかけの大臣忠君に怨言の給ふ事右廿一

忠こそ老たる行者人につきて出家し給ふ事右廿二

みかと（さかの院）父おとゝ忠君のうせ給ひしをたつね給ふ事左廿六

みかと一條上のさかしらことにて忠君をちかけの大臣にうとませ給ひしよしをおほしめしやりてちかけの大臣にをしへ聞え給ふちかけの大臣悔思ひ給ふ事右廿七

ちかけの大臣一條のうへと御なかゝれ給ふ事右廿九
ちかけの大臣忠こその御うへをなけき給ふ事右卅一
一條とのおとゝへ給ひかたち風の琴を正よりの大將
にうり給ふ事左卅三
ちかけの大臣いもゐさうしゝ給ひて忠君にたつね逢
んことをねかひ給ふ事右卅四
ちかけのおとゝおりめ風の琴をわりて佛をつくらん
とし給ふ事左卅四
このこと今本にはなし古寫本にはみゆ

藤原君卷

此卷は俊蔭卷の半より後とおなし頃なり忠こそ卷
の終より少しおくれたりされはみかとは朱雀院な
り院のみかとゝみえしはさかの院なり
藤原君（正よりのおとゝなり）大政大臣（ちかけのおとゝの御父おとゝなり）の一の女にか
うふりし給ふ聟とられ給ふ事右一
此御妻を大ゐとのゝ上といへり
おなし君のみかと（朱雀院）の御妹女一宮にむことられ給
ふ事左一
此御妻を大宮といへり
おなし君三條大宮のおとゝにすみ給ふ事右三
おなし君の宮の御方大ゐとの御方の御子達の事左三
此條をよく〳〵心にしめてみされは正よりの大臣
の御子たち御聟君たちのわかちしれかたしことに
今本はお名また齡のほとなとに誤り多し
さねたゝの宰相あて宮（正よりおとゝの女）にけそうしかりの子の
うたをおくり玉ふ事左六
かねまさの大將（わかこ君といひしなり）あて宮をけそうし玉ふ事左七
平中納言（まさあきらといへり春宮の御いとこなり）あて宮にけそうし川千鳥の
うたをおくり給ふ事右九
源相宰（さねたゝ）あて宮に花さくらの歌をおくり給ふ事右十
おなし君兵衛（あて宮の女房なり）の許に歌をおくり給ふ事右十一
右大將との（かねまさ）かすかのゝうたをおくり玉ふ事左十二
宰相（さねたゝ）はまちとりの歌をおくり玉ふ事右十三
平中納言やへのいはかきのうたをおくり給ふ事右十四
宰相うたをおくり給ふ事左十四
兵部卿宮よりうたをおくり給ふ事右十五
源宰相月おもしろき夜なかのおとゝ（あて宮の御かた也）にいり給
ふ事左十五
侍從（なかすみなりあて宮のせうと）あてみやにけそうし給ひにほとり

このくたり今本になし
また水のうへの雪の御歌を、、、、同
今本になし
右大將との五節出し給ふ夜うたを、、、、右十九
今本なし
兵部卿宮をみに當り給ひてうちよりうたを、、、同
今なし
なかたゝ中將りむし祭の使に出たつときうたを、ゞ
同今なし
三宮より冬山のうたを、、、同
今なし
すゝしの中將冬のよのうたを、、、同
今なし
侍從君（なかすみ）冬さける梅を折てうたを、、、右廿
今なし
藏人源少將（なかより）うたを
今なし
らうすけ（ゆきよきないふ）年かへりて朔日のひうたをあてみや
におくる事右廿
今本になし

とうゐい（すゑふさ）大内記春宮學士になさるゝ事右廿
今本になし
忠こそあさりうたをあてみやにおくる事左廿
同
左近少將源のなかよりおひたちの事なかよりゆきま
さなかすみなかたゝとり〳〵にときめく事左廿
同
なかより宮内卿（たゞやす）に聟とらるゝ事右廿一
今本なし
左大將（まさより）のりゆみのせちに左かちにければ左大將
との（まさより）より家に人々集てみあそひし給ふ事左廿二
おなしときなかより九君（あてみや）を始てけそうし思ひわ
つらふ事右廿四
正月廿七日のおとねにさかの院の御賀を正よりの大
將奉らるゝ事左廿三
源宰相の北方御子たちの事右廿六
今本なし

梅花笠卷

此卷の始に睦のみかとゝみえしはさかの院なり春
宮國知り給ふとあるはすなはち朱雀院をいへりさ

かの院巻のならひなから彼巻の年の春のことをいへるなり此巻の終はたかへることは巻序考にいふかことしこゝにしるせしはたかへる本のまゝなれは今本にはたかひぬへし

左大将とのまさより春日詣の事右一

今本に右大将とあるはひかことなり

おなしとき兵部卿宮梅花をゝりてあてみやにおくり給ふ事右三

おなしときなかよりの少将和歌のかな題つかふまつる事左四

おなしとき人々うたつかうまつり給ふ事右五

たゝこそあさりかたち風の音につきて正よりの大将に逢ひ給ふ事右十

今本にみやこ風とあるはひかことなり

三月のほと春宮よりあてみやに青柳のうたを給ふ事右十七

源さいしやうあてみやにうたをおくり給ふ事左十七

兵部卿宮ゝゝゝになくたつのゝゝゝ右十八

平中納言とのゝゝゝ同

三のみこよりあてみやにうくひすのうたをおくり給ふ事右十八

なかたゝのしゝうあてみやにふちの花のうたを左十八

右近少将なかよりゝゝゝ左十九

侍従の君なかすみ涙の川のうたをゝゝゝ右十九

右大将との（今本に左大将とあるはひかことなり）なかたゝのはゝ北方上京極とかつらの家におはします事同

おなし大将あてみやにうたをおくり給ふ事右廿

おなし大将北方上京極とむかしのものかたりし給ふ事右廿一

みかと朱雀院右大将のかつらの家におはしますときかせ給ひ其北方に御うたを給ふ事人々かつらの家にてうたをよみ給ふ事右廿三

吹上巻

紀のくにふきあけのかみなひのたねまつの事右一

すゝしの朝臣のおひたちの事右一

わか君とみえしはすゝしの朝臣をいへり

清原のまつかたなかよりの少将にすゝしの朝臣の御うへをかたる事左四

まつかたなかよりの少将らうすけゆきまさとうしゝうなかたゝ吹上のきみすゝしの許に参り給ふ事右七

祭使卷

菊宴卷

この卷は今本とはたかへる處々多けれはこのいへるにたかふへし

兵衛君をよひてかたらひ給ふ事　兵衛君につけてうたをおくり給ふ事　又兵衛君をよひてあてみやの御うへをの給ひかはし給ふ事　源宰相思ひにしつみ死いり給ふ事　源宰相思ひあまり給ひ比枝の登り給ひくさ〳〵御修法し給ふ事

源宰相の北方上(三條)すゝめられ給ひ御子達とゝもに志賀山本にこもりおはす事左六十

源宰相ひえの山よりかへり給ふ道にて藤中將(なかたゝ)にあひ給ひ三條上のしのひ居給へる家ともしらて立よらせ給ふ事

あてみや卷

あてみや東宮に參入り給ふへきよし定りてけそう人達思ひまとひ給ふ事右一

源しゝうあてみやの思ひにくし給ふ事　源宰相丶丶丶事

あてみや御參入りの御よそひ御とも人の事左二

おなしときなかたゝの中將あてみやにくさ〳〵の調度とも奉り給ふ事　源中將より御さうそく奉り給ふ事　源宰相うたを兵衛君におくり給ふ事　侍從(なかすみ)思ひわつらひ給ふ事　おなし君にあてみやたいめし給ふ事　たえいり給ふ事　源宰相思ひわひたえいり給ふ事　あてみやなみた川のうたをなかすみの侍從に奉り給ふ事

あてみや東宮に御まいりの事右九

おなしとき源少將木工君とものかたりし給ふ事

あてみや御まゐりの後源少將法師になり給ふ事右十

あてみやときめき給ふ事右十

東宮の女御達の事左十

あてみやはらみ給ふ事右十一

大將とのよりまさなかすみの侍從わつらひ給ふよしを東宮に啓し給ふ事右十一

あてみや庚申し給ふ事左十一

おなしとき人々物奉り給ふ事　人々うたよみ給ふ事

源少將のあまり山すみし給ふかたに(のなみつ)頭中將源中將兵衛佐(ゆきまさ)なとゝむらひ給ふ事左十六

おなしとき源少將うたをあてみやにおくり給ふ事

源さいせうあてみやの御まゐりをなけき給ふ事左十九

侍從君(なかすみ)丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶丶左廿

侍從君思ひにしつみうせ給ふ事左廿一

初秋卷

田鶴群鳥卷

藏開卷

おとゝ故侍従君なかすみの御爲に誦經し給ふ事六十九右
いぬ宮の御五十日し給ふ事六十九左
おなしとき宮大宮女御君仁壽三宮彈正宮み物かたりし給
ふ事　中納言なかたゝ宮女一宮とみものかたりし給ふ事
おとゝまさより大將をしゝ給ふ事七十九右
中納言君右大將かけ給ふ事八十右
このとき右大將かねまさは左にうつりなかたゝ右
大將になり給へるなり今本にこのことおちたり
おなしく參内拜賀し給ふ事　みかとゝみものかたり奏
し給ふ事　なかたゝの大將家集を奏覧すへきよし
の給ふ事　おなしとき春宮藤壺女御となかたゝの
御うへをかたりかはし給ふ事　大將とのなしつほなかたゝの妹君なりにまうて給ふ事
中納言との家集俊かけの文集なりをみかとに奉る事藏開中一右
このくたりにとのゐものゝさまみえたり　おなし
く中納言との家集をかうせさせ給ふ事　春宮家
集をかうするを聞かせ給ふ事　おなしとき中納言
との源中納言右大辨すゑふさ中納言たゝすみ中納言ゆきまさな
とものかたりし給ふこと　おなしときとしかけの
もろこしへわたされしときのみちのきの巻々出る
事　みかと春宮にみものかたりの事　みかと中納
言みおひ給ふ事
おとゝまさより女御君仁壽殿大將なかたゝみものかたりし給ふ
事卅七右
中納言なかたゝみかとより給はりしみおひをおとゝまさより
にみせしめ給ふ事　おとゝ御帶のむかしかたりし
給ふ事
此帶はちかけのおとゝのもたりし帶にて忠こその
發心せられし故ある帶なり
源中納言の北方いま宮子うみ給ふ事卅右
大將なかたゝ宮女一宮とみものかたりし給ふ事卅右
大將ちゝおとゝと俊かけの家集かうし給へるみもの
かたりし給ふ事卅二左
大將ちゝおとゝに御帶みせしめ給ふ事　大將梨壺
女御はらみ給ふよしをちゝおとゝに申給ふ事　大
將ちゝおとゝの北方をひとつ方につとへんと申こ
ひ給ふ事
大將との源中納言とのに御うふやしなひ奉り給ふ事卅七左
御うふやしのみは卅二右にみえたりし

むかへ給ふ事五十左
少將なかよりの妹上少將大將なかたゝの二條院にうつり給ふ事五十一右
おとゝかれまさ大將なかたゝ一條どのゝ家におはしまして女君達のすみ給ひしあとをみ給ふ事五十二左
おとゝ北方上京極に一條とのゝさまをかたり給ふ事五十四右
なしつほの女御御里にまかて給ふ事五十五右

國讓卷

右大とのまさよりの御聟君達かた〳〵にあかれ給ふ事一右
これまては右大との家にかた〳〵すみつき給へるをこたひ別れ出給ふなり
右大との家三條大宮なりつくりかへらるゝ事三左
藤壺女御御里にまかて給はんとする事四右
大きおとゝすゑあきらおもくわつらひ給ふ事四右
おなしとき右大殿にたいめし給ひ御子たちのうへをかたらひおき給ふ事　宰相の朝臣たゝされまゐり給ひみものかたりし給ふ事　大きおとゝ御せうふんのふみかゝせ給ふ事　おとゝ御くらゐかへし給ひうせ給ふ事　御かた〳〵御とらひにおはします事

藤壺女御御さとにまかて給ふ事十二左
藤壺女御御かた〳〵とみものかたりし給ふ事　春宮さくら花のうたを藤壺女御に給ふ事　彈正宮おはします事　藤壺女御大宮仁壽殿女御とみものかたりし給ふ事　春宮ねさめの御うたを藤壺女御に給ふ事　一宮なかたゝの北方より藤壺女御に御ふみ奉り給ふ事　藤壺女御一宮の御かたにまゐり給ふ事
大將なかたゝとのとみものかたりし給ふ事　藤壺女御若宮たちの御料の手本かきてまゐらすへきよし大將にの給ふ事　源中納言との鍵のうたを奉り給ふ事
源中納言すゝしとの堀川の東の家ふきあけのつほさいふにうつり給ふ事廿二右
藤壺女御おほゐとのゝ御かたにわたり給ふ事三十二左
今本におほゐとのをおとゝとかけるはたかへり
藤壺女御ふちなみのうたを源宰相たゝされにおくり給ふ事
東宮より源宰相に御ふみ給ふ事
春宮より藤壺女御にもの給はす事四十右

國讓中卷の下は今本いたくみたれたりこのいへるは改めし卷をもていへるなれは違へる處々多かるへし

樓上卷

文化乙亥四月十三日漫記之畢　明阿彌陀佛

以是因緣名觀世音かくのごときの本誓あればこの時俊蔭朝臣も念誦有し功力によてその難をのがれ給ひしを云なり
なゝたびふしをがむ　明阿曰七度拜伏の事次にも有すべて七の數を用る事多し
ふさくら右三
日本國皇の使　明阿曰板本に日本の王の使とあるはあしゝこの次にも日本國皇の使と有にて知るべし
道麻呂も然云り
花の露もみぢのしづくをなめてありふるに　明阿曰仙家の趣にいへり
三年この木の聲たえす　明阿曰としかげ十七歲の春よりこの木伐音を聞事三年なればことしは十九歲にぞなるべき
三年といふ年の春　明阿曰としかげ十九の年より此ひゞき有所をたづねんとて行むかふにその年くれ又あくるとしもくれ三年といふ春行つきたればその時すでに廿一歲なるべし
わりこづくる　明阿曰その桐木を破折てちさきかたに木造るなり

かなまり　明阿曰金椀なり神代紀
おむなおきな子ごもうまご　貞雄云嫗翁子ごも孫なり嫗和名抄於無奈老女之稱也翁和名抄老人也於岐奈さみゆ異本に女をさなきこごもとあるはたがへりこゝはあすらの族ごもまで居る趣をいへれば也
いかしき右五　貞雄云板本にはしたなきことあるはたがへりいかしきは右廿三
むしけら左六
まなこを車の輪の如くみくるべかして　明阿曰車輪のごとく大なる眼を見めぐらして嗔にらむをいふくるべかしては轉回の意なり貞雄云明阿かいへるごとくにもあるべけれど能思ふに前に眼をみればかなまりのごとくきらめきてとあればその眼の趣は既云りこゝは車の輪の回轉するがごとくくる〱と眼をみめくらすをいふなりさるからくるまの輪のごとくみはるべかしといふにあらずや
あなかしこ此山をたづぬることはげしきいはほほむらいつるまでけだものゝはげしき中を分出るときはほのほあつくつるぎはだをつらぬきあくをふくめるごく蛇にむかひてもとの國よりこの國に至り

てすみしはやしよりこの山をたづね父母が手をわかれし日よりけふまでのことをことふ　明阿曰此文みだれて詞おきたがへるにや心得がたし例装の法とも云べからす又毒蛇の下に脱文あるべしといへり貞雄諸本どもをつどへて校合せしに　あなかしこどしかげ此山をたづぬことはおのがひく琴のねに木をたふすをの丶聲のひゞきかよへると三年になりぬさだめて思ふ琴のねにかよへるひゞきするはねたか丶るべき木にこそあらめいがて琴ひとつ丶くるばかりえんと思ふ給へてはげしきいはほほむらいづるまでときあしをいだしてかければつるぎをもちてはぎをつらぬくがごとくいかしきけだものごくをふくめる蚖蛇のむかひまてるなかをわけいづるはあたをふくめるもの丶まちむかへるがごとしさるいみじきめをみつ丶たゞ此木たふす聲をたづねてゆきめぐりこ丶にまうできたれり猶ち丶は丶の手をわかれし日より今日までのことをこたふ　とありこもと丶のへるにあらねど其こ丶ろはとほりて聞ゆればしるしつ

忍辱　明阿曰六度論云不酬名忍加惡名辱

四十人の子ども　千人の眷族右七

日本より山をたづぬるおほいなる心ばへは　貞雄云一本に日本より此國にまうて來此山を尋るおほいなる心ばへはとみゆ

としごろらうせる父母に　明阿曰らうせるを異本には老と書たるによればおいたると訓べきかまた苦勞せるといふことならば勞の音語なるべし思ふに原文には老たるとありしを轉寫の時にらうと音に書しなるべし貞雄云老勞ともにらうの音なり老の字音なりとせばとしごろといふことばにかけあはす此ものがたりは字音にいへる所々多ければ勞の字音なるべき

あめわかみこ　明阿曰天若命にて是は天人に云なしたり神代紀にも天若彦と云に同し貞雄云神代紀の天稚彦を古今集序にあめわかみこといへれば中古よりかくも云しなるべしされどこれは天稚彦のことにはあらすたゞ天に在す神をさして云こと也狹衣物語に狹衣大將の御かたちより御ざえのすぐれおはします由を云とて大殿などはあまりゆ丶しくあめわかみこのあまくだり給へるにやけふやあま

の羽衣むかへ聞え給はんとあやうくしづ心なき御心のうちどもなりとみえしにて思ふべし是もたゞ天在人といふことも也こゝも天上なるかみのくだりまして三年の間掘り給へる谷といふことなるをや

音聲樂　明阿曰樂の文には音聲吹をおせぶきといへればこゝも其例によらばおせがくといふべし

三寶　明阿曰三寶は佛法僧の三を云老子經にも三寶あれどこゝにかなはす

忉利天　明阿曰倶舍論に須彌の卅三天の事を說る所委しくみゆ

なむぢか一方あたらむ　明阿曰異本につきて兩說あり汝が一方にあたらんと云と又は汝に一方あたへんといふとの異あり貞雄がみしふみどものうちによしと思へるは　汝にわかちあたへむとみえしぞかなへりと覺ゆれ

車の輪のごとくなる雨左八

この木の上中ふたつのしなは云々　明阿曰是は打出の小槌といふ寶物なり打出の小づちの事は寶物集にみえたり

たなばた緒よりすげさせ　明阿曰織女は手かき細工の事など女工のことつかさどる神なればかくは書なせり織女星は和名抄

なかばをふたつにつくれるは　明阿曰上にえたりし下品の桐木のうちにて又上下かたはらにては二十八の琴を作り眞中にて作れる二の琴はすぐれてよき物となりしをいへり

三年といふ年の春　明阿曰としかげ廿一歲の春この阿修羅にあふて木を乞えて琴に作りて引あそぶこと三年なればこゝにて二十三歲になりぬ

てふ鳥右十

ぞうたつべき人　貞雄云ぞうたつべきは族可立にて家を起すへきといふなり明阿はしうたつべきの誤りにて宗可立なりといへり

なむ風　はし風　明阿曰この琴の名え思ひわきがたしはし風は波斯國によりてかくは名つけしにや貞雄云なむ風は南元風にあらすやはし風は國名にはあらで可愛風なるへし風はふと字音にいふべし假字某ふとかける所あればなり

つじかせ　明阿曰旋風にてつむじかせの事なり和名抄

虎狼ひさ山さわぐ所有りきさいできて云々　貞雄云
道麿呂本にはきさ出來て云々又さい出來てさ二樣
にかけり明阿本にはきさゝい出來てかけり貞雄か
みし一本にこゝを假字にしてさらおほかみひさや
まさわぐさころありきさいできて云々あるにより
道麿呂本の始條にあへれば改めつ
おのがおやのかよひ給ふ所よりか日本のみかご花ぞ
のよりさ聞ば　明阿曰日本のみかごこの下誤り有べ
し上に日本のみかごのつかひ清原のさしかげ云々
さいひたることのあればこゝも其例によればみか
ごのつかひ清原のさしかげなさやうのこさ落ける
なるべし又思ふに日本のみかごは異本などをかた
はらにかきたるをあやまりて加入たるかさいへり
貞雄云諸本ごもつごへて考しに一本に蓮花のはな
ぞのゝおのがおやのかよひ給ふ所よりか日本の人
なから花ぞのよりさ聞ば云々あるそたゝしかりき
さしかげさつらね給ひて　明阿曰さしかげさつれ立
て又の山に入給ふなり
はゝのおんかなしくちぶさのこひしさに　明阿曰曾
丹家集四月長歌のうち「垣根に咲るうの花のめも
しろたへに色わかず雪よりけなるおもさじのちぶ
さのむくひするほごに云々
ほてりかに　明阿曰ほこりがましきなり驕をよめり
はなのうへには孔雀つれてあそふ　明阿曰板本には
なのうへには乃鳥孔雀云々ある乃鳥は鳳の字あや
まりにて鳳皇なるべし又乃はすなはちさ訓べきか
次に備わたり給ひてすなはち孔雀にのりてさ有を
思ふべし貞雄云乃鳥は已も鳳の字誤りにやさ思へ
りしに道麿呂本植字本さもに花のうへには孔雀つ
れて云々ありて鳳の字なし又一本にも此字なけれ
ばなきかたぞ然るべき明阿の又考に下文を引てす
なはちさ訓べきよしいへれごこゝはすなはちさい
ふことばおくべき趣にあらすこさにすなはち鳥孔
雀さ訓んとも穏しからねばなき方にしたがふべし
花のつゆをくやうにうけ　明阿曰天人佛仙は人間世
界の食さ同じからず事は倶舍論世間品に委くみゆ
あまつ風　明阿曰後漢書岑彭傳云時天風狂急彭奇船
逆流而上さもみえて天より吹おろす風なり源順朝
臣天津風空に吹あくる雲もあらば澤にぞたつは鳴
さつげなん

佛わたり給ひてすちはち孔雀に乘りて（十四右）
阿彌陀三昧　明阿曰阿彌陀佛の名號を一心不亂にとなへて七日七夜の感通念佛をおこなふなり三昧は梵語にて三昧此云正思ともみゆ翻譯に異議多くあり

じねんのむくひ　明阿曰自念報に依て人身を受しなり

大そんはむな　明阿曰大尊般那

なつみ水くみ　明阿曰法華經を我えしことはたきゞこりなつみ水くみつかへてぞこし（法華經）

此山の七人にあたる人を三代のうまごにうべし　貞雄曰としかげの三代の子に此山人の第七にあたる人のうまるべしと佛のをしへ給ふをいへり則なかたゞをさしてのことなり其報ゆたかなるさまも佛のゝ給ふがごとし

いきかでにしてかへる　明阿曰難行而歸也かではかたきなり萬葉集にも則難とかけり

山ぐち　明阿曰山の入口なり

たふさの血をさしあやし　明阿曰たふさは手拳なり俗にはてぶしとも云古今集（又大和ものがたり）遍昭　をりつればたふさにけがるたてながらみよの佛に花たてまつる又人丸集たちはきのたふさのすゑにいまもかも大宮人のたまもかるらん（此歌は萬葉集のよみ誤りなり）　血をあやすは血をぬりてあやからとする意なるべし血を出してあかく色なす故いふかたふさは日本紀（神代紀）には腕を訓り又案にあやすは文（アヤ）なすの意か貞雄云遍昭の歌を古今集也と明阿のいはれしはひがことなり後撰集第三（春下）にみえたり又神樂歌に　みづかきのひさしき代より篠の葉をたふさにとりてあそびすらしもとみゆたふさと云を思ふに手心（タナゴヽロ）掌則の左右の起肉の所を云なるべし其由は新撰字鏡に臀豆寸反尻不佐とみゆ俗言にしりこぶたといへるにて則ゐさらひのことなり掌の左右の起肉もゐさらひに似たれは手不佐といへりしならん腕しもたふさと訓るは轉誤なるべし萬葉集第一釼着手節乃埼は志摩國答志埼を云借字なれは手不佐によしなしさて手不佐の不を多くは濁音に訓れと能思ふに清音にいふべし不佐はものゝ多きを云義也此ものがたりにものふさ（物多）に給はすなといふことみえたり手不佐は手起肉の所を云ひ尻不佐は臀をいふなれば共に

肉の多き所をいふにて思へ糸の多を集へりしを總といふも此義なるをやあやすはあやなすにて文成(アヤシ)なるべし

しら木もとりくはへて　明阿曰始つくりし琴は三十なるを佛に奉り七人の仙人に遣して殘物に天人仙人の名付し十二あり外にまだ名もなきが殘りたるをしら木とはいふなるべし萬葉に弓にはしらきともいへり貞雄云天女の號給ひし二の琴はもとより仙人の號し十は手不佐(タフサ)の血をさしあやして其號をしるせしなべに夫にむかひて無名琴をしら木といふなり既に此琴つくられしとき天女くだりまし／＼てうるしぬり給へること上にみえたり（琴は後世につくれるもみなうるしぬれるなややまさ琴つくし琴の例にな思ひそ）弓のしら木とひとつことに明阿のいはれしはたがへり

三年すみし山　貞雄云栴檀樹の下に在三人の琴彈人の許をいふ

そのかみ　明阿曰當時を訓りそのときと云如し大和物語うはらをとめか身なげし所にいとよきことなりとて射るほどにひとりは頭のかたをいついまひとりは尾のかたを射つそのかみいづれと云べくもあらぬに女思ひわづらひて云々あり又むかしの事にいへるも有齋宮女御家集にそのかみはさしも思はでこしかどゝ思ふことこそ異になりぬれどいへるは當初の意なり　谷河士清曰そのかみに當時をよめるは上に昔の事を云て其時と指い詞なりといへりいとよく云かなへり（廿二左可之合）

あらき所あり　明阿本道[illegible]呂本一本共にあしき所ありとせり然れど植字本又一本等にはあらき所とあり下にみかどの此琴どもこゝろみさせ給へる條にこれが聲まだなれすなむあるとの給へるをもて思ふにあしき所といはんよりあらき所といはんかたまさりぬべし

けうやくの舟につけて廿三年といふ年三十九にて日本へかへりきたる　明阿曰けうやくは交易なり波斯國より我國へきかよひて貨物をうりかふる舟也としかげ十六歳の時遣唐使にしたがひにし道にてあたの風にあひて波斯國へたゞよひつきしより今年卅九歳までの間廿三年也

三とせのけうおくる　明阿曰三年の喪つとめしなり孝服かくることなれば則かくいふか

うるせかりし　遣麻呂曰うるせかりしはうるはしかりしと同語なりといへり貞雄云うるせかりしはうるはしかりしとは同語にはあるべからすとしかげまだ若くて父母の手放れて遣唐使に參りしさへあるにあたの風に逢ひて二十餘年のほどおとにも聞えざりしをみかどうるせく思ひ給ひしといふことにて則いぶせく御心くるしくなどいふ意のことばと聞ゆ猶能考べし

みかど　明阿曰嵯峨院なり下にかの朝臣もろこしよりかへりわたりてさがの院の御時云々みえたり

いんよくのつみおもき　明阿曰不邪婬戒はことに五戒のうちにもかたくいましめられたり

ふたつの琴　明阿曰天女の名付しなむ風はし風の二つなり

おどろ〳〵しき十八左

こゑもしらます　明阿曰しらむはめりて聲の立ぬなり下こゑうらこゑといふがごとし源氏物語末摘花巻に

雪ふすまのごとく　明阿曰李大白詩に雲片大如衾とみゆ

ゆうごく　くせこゆくはら　明阿曰ゆうこくは遣曲にや

むかしふたゝび心みせし　明阿曰このこと上にみえたり

たぢろく　明阿曰立退(タチシゾク)の略語にて足もとの定まらでうごくをいふ

ものゝしせん人のなむすべき廿右

なほしの位　明阿曰直衣きるべき勅許あらんとするを云古へ三位已上の位をかくいへり

らう〳〵しき廿一右

ひかりかゞやき　明阿曰竹取物語

かたじけなく御返こと聞えす廿一右

あけたて　明阿曰明くれといふに同じ古今集　あけたては蟬のをりはへなきくらし夜は螢のもえこそわたれ云々

よはくおぼゆるとき　貞雄云こゝちよはきをいへり則死ぬべきゝはをいふべし

たゞしいのちのゝち女子のためけぢかき寶廿二右

いひまつはし知らせん　明阿曰位田職田等の所領もあれども我死たる後は誰有てかその取まかなひし

ていひしらせんとなり貞雄云位田職田の事と明阿のいへるはいかゝこゝは私の莊園のことをいふなるべし

かちの袋　明阿曰かち染の袋に入しなり褐は青黑黃をおびたる色なり

こかことおぼさば　明阿曰これにふたつの意あり我が子なりとおぼすならばと今一は我事を思ふならばとの意なり

さいはひあらば云々　貞雄云此遺言のまゝに北山のうつほ又はみかどの御前に琴彈給へるなりすべて此遺言の趣をうつしてうつほにての事しるせしぞかし

とものつはもの　貞雄云伴の兵士なりいとめづらしきことばと覺ゆ

さすらへて　明阿曰流落漂泊をいふ左遷をもさすらへと訓どもこはそのことにあらすたゞ世におちぶれしをいふべし

やどゞもこほちとり　明阿曰道行人も主なき家と思ひあなづりて屋共もみなこぼちとりてほどなく野とせしを云貞雄云やどゞもを一本又道麻呂本にはいへどもとあるぞまされるやどは家處(ヤド)の義にていへどころ云なればかなひがたし宿をやどと云はやどりやどるを體言に云なれば意たがへり中古頃よりこなたにはいへとやどのけぢめうるはしく云別ことなし頭注云又四十四右に大きなるやのほどに云々四十六右

めのとのつかひけるずさ　貞雄云こはさがのといへる嫗なり則樓上卷に委にみゆ

でうど　明阿曰調度は器物なり漢書に什器也ともみゆ和名抄にも調度の部あり

世のなかも知らぬわかき心ち　貞雄云前に云るものゝこゝろも知らぬとおなじ意なり好色のかたにはあらす

とりかくしてしかばみなうせはてゝげる　明阿本にはとりかへざえにして　みなうせ　はてゝげるとあり其意を說て父母の死たりし時佛事孝養のいとなみのため調度どもゝみな交易財にしてつかひはてたるを云なりといへれどかなひかたし當時はみな交易なりしかはこゝにかくことわりいふべきにあらすげに然なりとも卑氣なれは一本にとりかくし

てしかばとあるにしたかふべきをや

うなゐ　明阿曰和名抄後漢書註云髫髪（召反和名宇奈為）俗用垂髪二字謂之童子垂髪也（髭同）

この家のかきほよりいとめでたく色きよらなるをばなをれかへりまねく　明阿曰蜻蛉日記上の一　宮より薄といへばみれば折檝といふものにうるはしう堀植て青き色紙に結ひ付たりみればかくぞ　ほに出ば道行人もまねくへき宿の薄をほるがわりなき

（歌）吹風のまねくなるべし　明阿曰貫之家集二　女の家にをとこいたりてまがきのもとにたてり　吹風になびくをはなをうちつけにまねく袖かとたのみけるかなこの意をとりて今はかけるなり又源重之集　風さむみやどへかへれば花ずゝきくさむらごとにまねく夕ぐれ　藤原仲文家集八月十五夜藏人所にて月の頃をあはれがりてたちいでゝ行にれいけい殿のみさうしのごたち花ずゝきをりてたてしとみより出たり　白露のおくよりまねく花ずゝきむすはぬさきにまづぞみだるゝ　かへし　なべて人むすばぬ前の花ずゝき風にのみこそみだるべらなれ

うしろ手（廿五左）

やのもとに（廿六左）

あかなくにまだきも月の　明阿曰あかなくに（伊勢ものがたり）まだきもつきのかくるゝか山の端にげていれずもあらなん

かはら風（廿六右又廿四右）

やどまどはし（廿七右）

ぬりごめ　明阿曰伊勢物語

かげろふ　明阿曰かげろふに四意あり

うときよりも（廿七左）

ちへまさりて（廿八右）

そもかう　明阿曰そもかうは抑如斯也そも〳〵かくて爰にも参り來べかりけるかとの給ふなり

ふたしへ　明阿曰後撰集九戀一つらくなりにける人につかはしける　伊勢　いかでかく心ひとつをふたしへにかくもつらくもなしてみすらん此歌によりて思へばふた心有といふに同じ二重といふにし字をいひ入たるなり貞雄云ふたしへは二方（フタシヘ）也二重にはあらすすべてことを二になすをふたしへといへり

あがほとけ左三十
やど思ふ同又卅四右
あれか人にもあらぬ　明阿曰心のまどひて我身か人身かと思ひわかぬなり夢か現かなどいへるに同じこゝろなり
つかへどころにつかはしごくそにさふらはせん　明阿曰使廳の官署に云おくりて獄所へやるべしとぞのつみを勘當し給ふなり
はなつきはなたれ　貞雄云突鼻放なり袋卅子に小突鼻氣也といへりすべてはなとはものゝさし出たるを云號なり其さし出たるか物にあたりて支ゆる如くさし出かたきをいふなるべし東鑑第卅四仁治二年辛丑十二月五日條に左親衛突鼻事今日有免許とみえたれば當時もいへりしなり
さかしき人三十二右
しづ心もなし　明阿曰静か心なり下心に同じ下枝をしづえといふにことならす
あやまちしたるかりのこゝち云々さきにたつかりこそありつらん　明阿曰當時の諺なるべし
さへのかみ　明阿曰道祖和名抄風俗通云共工氏之子好遠遊故其死後以爲祖和名佐倍乃加美今昔物語にまどはじ神にさそはれしなどいふことのあるたぐひなり
貞雄云こゝのさまにて思ふにまどはし神をいふにはあるべからす若小君の辻に立おはせしさまをさへの神によそへ給ひてたゞまさのゝ給へることゝすべし今も石もて二柱の神像をつくりて衢に建置こと處々にあり則道饗祭にいへる八衢比古八衢比賣の神なり　うぢ拾遺第一に五條のさいのかみのことみえたり
たい／＼しき　明阿曰源氏物語などに此詞多し河海抄には退々の意を用られたり是を思ふに昔語には有まじけれども意は退々といはんもこと似たり頭注云忠こそ卷抄六右にも考あり
貞雄云
殺しては　明阿曰このてはのはを半濁に云ても聞ゆれども濁りていへばてあらばの略語になるなり萬葉集第十五に　君がみふねのつなしとりてばとあるに同じかるべし
あからさま右卅三
らうたげ左卅三
いめごと　明阿曰夢の如ありし也夢は寐目なれば

いめなり努はゆめなり後に同しことゝせるは誤なり

なかむるをだにさ 三十四右

夢のかよひぢ 卅四左

あふごなき 同

かつらの木　明阿曰桂楓の二木をともにかつらのきとよめり

御かたき　明阿曰その對人をさしていへり源氏物語なさにもあそびかたきなど多くいへり唐の俗語にもさるかたにとりて寃家などするゑの世のものにはみえたり

れいすることは九月ばかりよりせぬ　明阿曰去年の八月なかの十日ばかりに若小君の立より給へば則その月よりたゞならずなり給へば今年五月ばかりぞ其月にはあたれる

御をばつかうまつらん 卅六右

御身々々とだになり給はゞ　明阿曰俗言にも身と身とになるといふ親兒とわかるゝをいふ

かたるなかに（三十九本異に川馬とあるはあし、）子どもなど有ければ　明阿曰この下にこの女のむすめ丹波國に有るもとにゆきてこのまうけせんとて米などこひてこしものがたりせしことあれば此ゐなかは丹波なるべし京よりは五里ばかりあればさもいふべし貞雄云樓上卷

えうじ給ふべき所々　明阿曰要用の有ぬべき處々に行て調度と絹布を交易るなり貞雄云えうじは所要の意なるべしさて處々といふことはに依て思ふに調度唐鞍ならん今本にうつくしげにてうじたるからくらとあるはたがへり

六月六日にこうまるべくなりぬ　明阿曰去年の八月若小君立より給ひてその時より身おもくなりぬればば今年の五月ばかりぞその月にはあたれるを上に九月はかりよりけがれのものみざりしよしいへればば六月とはかきなせしなり貞雄云このいへることいりほがなりかならす十つきならではうまれぬものと思ふにや

すなはち 卅七右

ぬのゝふところ 卅七右

おほぢ　明阿曰今うまれし子のためには俊かげは祖父なればかくいへり

故おとゞ　貞雄云故おとゞはとしかげをいへりこれ

を今生ひの小君にむかひて大殿といふなるへし大臣の義にみるべからす此ものかたりにおとゞといふは多くは此義にいへり

あまかけり　明阿曰萬葉集

此くしみづをは　貞雄云今本に誤りてむしみつとあるを道麻呂はなかたゞの幼名にて姫のつけし名なるべしといへりされど右寫本にはくしみづとあり則奇端の義なり孀のみし夢をさして然云なり

ひとひろかたわぎばかり　明阿曰ひとひろは人のもろ手ひろげたるをいふそのうへにまた片手の長さ腋のほどばかりに至るをいふかすべて一尋半をいふなるべし

はしたか　明阿曰はしはうつくしむ意にて萬葉集にはしきやしなどいへる同じはしひめはしたかはみな愛ることばなれば愛鷹愛姫なりこのはしの語をわきまへで箸鷹橋姫と假字にかきたるにつきてさま〲いふはみなうくべからず

したかひのみくひ（頌三十八左）

てづくりのはりのみゝいとあきらかなるに　明阿曰つかひなれたるはり のみその あきら かによく通れる信濃の絲をぬきとほせしなり調布は和名抄（巻十）二調布唐式云楊州庸調布今按本朝式有庸布調布々々讀豆岐乃沼能貞雄云こゝにてづくりとあるは調布の義にあらすもと天豆久利は手作にて御貢に奉るをば民人等心をたけをつくしみづから手づからつくりて奉るにいへりさるから其精粋なるものをみな手作とはいへり調布は庸布にむかひては純なるから手作布の號あるなり（調布を天豆久利とのみいふは後にはぶきいへるなり其由は和名抄に白絲布唐式云白絲布今按俗用手作布三字云天都久利乃沼乃是等とみえたり）然は調布を庸布にむかひてはてづくりの布といふべけれどたゞには調布をば都岐乃沼乃庸布をば都無乃沼能亦多太乃沼能と訓べし

たちぬる月にも　明阿曰上にこの孀そのこうみ給はん料のもの求にとてかたゐなかへ行しこと有しはこのむすめの許にて丹波なるへし

いぢかむぢか　明阿曰五十歳か六十歳かといへるなるべしといへり道麻呂も然云り貞雄云としかげの女の父母を戀思ふを孀のなくさめ云ことばなれば五十歳か六十歳かといはんことかなひかたしことに五十歳はいそぢとこそいふべきにいぢといはん

もかなひかたし思ふに五歳(イチ)か六歳(ムチ)かなるべし上にあなをさなといひ下に子うみ給へりともなくてといふにても知るべし これもて古寫本にむぢとあるにしたがへり今本はむそぢとありこゝにをかしきよそへごとあり俗言にとかくよそへごとをくだ〳〵しういへるをいちむちいふといへるは古きことばのなごりにやあらめ

うへこひ給はんや　道麿曰飢寒なるべしといへり明阿も然云り

さのまひならぬ人もこそあれ　道麻呂曰左の舞にやといへり

わひ給なはのことぞやそこそはよのするなのめにはかなけにやはおは書所する　明阿本にはわび給ひなばのことぞやそこぞはよのするなのめにはかなげにやはおはするとあり道麻呂本にはわび給ふなかのことさやうこそよのするなのめにはかなげにやはおはするとあり一本又一本活字ともに今本のごとし古寫本にはなわび給ひそうへの御かけのそひ給ひなばするの世になのめにはかなげにやはおはすべき 又或本になわび給ひそうへのけうやうこそはたはすめれよのすゑなしめにはかなげにやはおはすへきとあり能思ふに古寫本のかたまさりて聞ゆるをや

たからの王 卅九左

なみだの海 同

阿古　明阿曰我子なり唐のふみに阿子阿奴などいふ有をそのことゝ思へるは誤なり我を阿とのみ云は古語なり貞雄云

らうたけ 四十一左

百味をそなへたる飲食 四十二左

いみじういかめしきすぎの木のよつものをあはせたるやうにてたてるが大きなるやのほどに開あひてあり云々うつぼなりけり　明阿曰この椙のうつほに親子の人住みけるよりやがてこのものがたりの名にはおはせしなり貞雄云このさまにて思ふに大きなる椙の四本ゆきあひて枝と枝と組合てうつほになれるなり然れは洞の義にあらす空の義なり

いもひとすぢ　貞雄云このことばうぢ拾遺 第一利仁署預かゆの條 にもみえたり

山の王 四十左

ようなき所　明阿曰此ようなきといふ事心得かたし源氏物語の抄などにはおほかた無用の由をいへれどそれは音訓交りてよしとも聞えす或人は無益な

るべしさらばやうなきと書べしといへりさるにま
たこと所にはふようといへるありこれを不益とは
解がたし依て考るに三代格の中に不要無要なとい
へる所有り然は是に依らは音便にてふえうとも書
べしこの所は無益の注をよしとすべし

そのかみ　明阿曰當時とも當初とも書て今の事とも
先の事とも所によりてその意異なるべしこゝはそ
の時の意なり大和ものがたりにもかく用ひし例あ
り

さとにすむ　貞雄云うつほにむかひてさとにすむと
いへるなり

欧ふちせもしらぬ四十六左

かゝらざらん人　明阿曰この親子の人は世のたづき
なきに住わびてこそかゝる山に入たりしに思ひの
ほかかく面白くすみよかるべき所なれば世に有人
なりともこゝをみば住まゝほしく思はんずらめと
いふなり

はこのふた四十七右

いかき　明阿曰大なる意也いかめしきなどもおなし
後世には太刀にもいかものづくりなどもあり貞雄
云いかしきとひとつことばなり

みしめ　明阿曰見卜也貞雄云介見なるべし

鳥けだものゝ色をもきらはす四十九右

いみじき同

ものゝふ同

あをつゞら　明阿曰防己也和名抄

みかど　明阿曰上巻に東宮と聞えしかこの間に御
即位ありしなるべし貞雄云このみかどは朱雀院な
り

ひとつぞう　明阿曰一族なりせた風はとしかけ歸朝
のときみかどへ奉りしこと上にみゆ則さかの院な
り

例のすさびありき　明阿曰はやく父のおとゞの賀茂
詣し給ひし時はら　からつれだち給ひしに四郎君
かれまさは京極のとしがけの女の家に立より給ひしこ
とにこりてかくの給ふなり

天ぐ五十一右

いみじき五十一左　六十一右

天にもつかす地にもつかす同

山のするゑ同

いかめし同

ふすまをしきたらんやう　明阿曰源氏物語すまのまき

だんごく山五十二右

賀茂詣の時　明阿曰さきに父おとゞの御ともして賀茂詣のかへるさに四郎君うしなひ給ひしことと思ひ出給ふなりなき御蔭と有は父の太政大臣殿はいつしかかくれ給へる後なり賀茂詣よりこゝまでは十三年がほどなり

いみじきをゝばいつゝこそておはする　貞雄云いみじき峯をは五つ越なり

けだものゝ様（はやく古寫本）はかひをふせたらんやうにおなしうへにたちこみたるに　明阿曰やうかひはやくかひなり此頃には貝覆は有まじけれども後を初にめぐらして書るか貝おほひの竝重りしごとくと云か又たゞ多くかさなることに具をふせならべたるがごとくといふにや此やう具のことは文繁ければいはす貞雄云けだものはやくかひをふせたらんと古寫本にみえしにしたがふべし明阿本に獣の様かひをふせたらんとかけるはたがへりやくがひは和名抄第十九に錦貝辨色立成云錦貝夜久乃加比班文如金貝也今按本文未詳但俗説西海有夜久邊彼邊所出也といへり則この貝もて壁に塗り入ることありしなりこをたとへごとに引出ていへることなるへし壁にぬれる由は樓上巻

うつほなるすぎの木五十二左　頭注云五十八右にけたものばかひをふせたるやうにてみちしなければ云々

こけのすだれ　明阿曰これは薜蘿なり仙人などの衣物とすることと離騒のふみにもみえたり貞雄云和名抄　頭注云六十二右にこけのすのもとによりて云々

山ふところ　明阿曰山のめぐり立る中の所をいふ人の懐にたとへたり

いらへ　明阿曰下にもこのいらへ云々と書たる所多し思ふに是は後人の傍に加へたるがまじりたるなるべし貞雄云けに能考得られたり古寫本にはこのことばなき本あり

はた五十三左

むかばき　明阿曰行縢和名抄

とらおほかみ　明阿曰とらは我國にはすますそのうへ上にも所々に熊狼とのみあれはこゝも熊にてあ

るべし又たとへことに虎伏野べと云類にや
京極　明阿曰京の西東に京極あり町のかぎりなる故にいふ今の寺町御幸町はむかしの東京極なり
さかしら 五十五右
おもてぶせ　明阿曰恥かしきときには顔のえあげられでふしめにうつぶけは面伏とはいふなり我と思ひたがふるを唐の書には抗顔などいへるを思ふべし
あたらしく　明阿曰萬葉集に新夜をあたらよと訓りしによれはこゝも新の意にて則をしき意はこもれり貞雄云
をしうめでたきをよそ人に聞えんだに　明阿曰これにふたつの意有り　をの字を上につけて手邇遠波になしていみじうめでたき乎餘所人にと意得るこまた一は凡人とみるなり其時は乎を於となすべし貞雄云餘所人といはんかたよろしこゝは凡人といふべきつゞけさまにあらず
思ひくたし 五十七左
よづいたるめ　明阿曰世のなかに交るめはみんなりよひなどいふも同し貞雄云

山のみるめ 五十七左
ひたやごもり　明阿曰和泉式部　うきによりひたやごもりと思へどもあふみの海はうち出てみよ源氏物語葵巻
くぼで　明阿曰延喜式に葉捲をくぼてとよめりかしはの葉をならべて竹の細きにてさしめぐらしてくぼかにつくりしものなり
院の女三宮　明阿曰是は右大將かねまさのえ給ひし皇女なり巻の初にみえし今上この間におりさせ嵯峨院と申春宮は今即位ましませしなり
御めしうど　明阿曰小姑なり和名抄
うちき袴小袴奴袴馬に乗せ奉らんとおぼしてさしぬきはもたらし給ふなりと明阿はいへりし
ゑぶくろ　明阿曰鷹の飼入る袋を本にしてそれに菓子乾飯などもいるゝなりゑ袋の製さま〲有別に記
ふりはへ　明阿曰わざ〲なり貞雄云
ましはえしらし 六十一右
かひなし 同
あらがひ 同

かくれ心六十一左
こよなき六十二右
ところせく同
とまれかうまれ　明阿曰左有右有（トモアレカクモアレ）をはぶきていふな
り
聞えはるけむ六十二左
げに同
うしろやすく同
ひたみち同
十二ばかりにこそなるらめ　貞雄云なかたゞ五歳の
ときこのうつほにかくれ給ひことしにて八年にな
りぬればけに十二歳にぞなり給へる
むかしちかげのおとゞのたゞひとり子をまゝはゝに
はかられて今はおとにも聞えすなん六十三右
しづこゝろなく　明阿曰静かこゝろなり又したつ心
にて下裏の意ありしづこゝろなく花のちるらんの
類なり貞雄云
心のごか六十三左
そゝのかし六十四右
きむちら六十五右

御となぶら同
あさぼらけ六十五左
北方御とし三十にすこしたらぬほどなり　明阿曰北
方はとしかげの女なり二十歳の年その子は五歳と
いふ時に京極の家をはなれて北山の奥なるうつほ
に住給ひことしの秋ふたゝび迎へ出され給へば今
廿七歳になり給ふなり貞雄云
いかにそは　明阿曰如何其者なり今本にいかにそと
あるは誤り
三代の年　明阿曰としかげむすめなかたゝの三代な
り
中納言になるべき身　貞雄云楼上巻にとしかげに三
位中納言を贈らるべきことをこゝに含云るなり
いろこのみのはてはかくぞあるやあやしきものにと
まるとはなごやすからず聞えける　明阿曰當時の人
のことぐさなり貞雄云
おもておこし六十八右
さば同
たう〳〵六十八左
かご〳〵しう六十九右

ちゝおとゞ　明阿曰父の大將どのは大納言の大將にておはせしを是までの間にいつしか内大臣になり給ひしやらん又たゞひろくおとゞとは申せしにや貞雄云此おとゞは大臣の義にあらす御殿の義也このことつぎ〳〵にいふべし

こかの聲　明阿曰胡茄歟または古雅歟貞雄云

こよなく　七十右

しきのざうじ　明阿曰中宮職の曹子なり清少納言記などにもこの事多くみゆ

ゆうそく　明阿曰是に二の心有歟一は有職にて時の物智人をいふ又二は有色にて色よき女をいふこゝも色有女をこめすゑしをいふ歟世繼物語にもこの詞あり

すまひのかへりあるじ　七十左

ほそなが　七十一右

いさいかに　同

こふきぬ　明阿曰國府絹なり

になく　明阿曰似るものなくといふに同じふたつなきといふ詞によりてこれも無二の音訓なりといへるはあたらす

あげばり　七十二右

我がつかさのすけ　貞雄云

左大將のみこ左のおとゞのみこぞかし　明阿曰下にまさよりとあり御父は左大臣なり貞雄云御父の左大臣どのこの餘みゆることなしとくうせ給へるなるべし又思ふに此左大臣どのはさがの院の御はらからなるべし

御はしくだし御かはらけはしまり　七十三右

すまひ　明阿曰和名抄漢武故事云角觝丁禮反訓與牴同　今之相撲也王隱晉書云相撲下伎也○註撲音蒲角反和名須末比本朝相撲記有古手垂髮總角最手助手等之名別又有立合相撲長也○字典云角觝戲名觝通作抵六國時所造使兩々相當角力相抵觸漢武元封三年作角抵戲

ほて　明阿曰相撲人のうちにてもことに勝れたるを云最手と書り今世に云關取なりわき手といふは關脇のことなり

なかとり　明阿曰なかとりは祿など盛入る器なり

とねりすまひ　明阿曰諸國の召人の相撲にはあらで舍人のうちよりえらび出されし相撲人なり

むげ七十四左

よもぎのゝべにかはづのころする　明阿曰南史　孔珪字徳璋齊明帝時爲南郡大守云々門庭之內草萊不翦中有蛙鳴或問之曰欲爲陳蕃乎珪曰我以此當兩部鼓吹何必效蕃王晏嘗鳴鼓吹候之聞群蛙鳴曰此殊聒人耳珪曰我聽鼓吹殊不及此晏有慚色

なかよりまざいらく舞七十五右又七十六右

たうつきてならひきたれば　明阿曰その統緒を繼たるなり師資相承の藝をいふなり貞雄云

ゆいこんこゝのゝみつを　明阿本には遺言の曲をまた遺曲の手を又の考にゆいとくの　こくをこんこくのみつをなどありいづれとも定めがたし或は遺言(曲ともよむべし)九(こゝ)の三(みつ)をとも讀るべき歟九の物三つの意ならん貞雄云

秋みな人をうづむ　明阿曰源順集「あさまだき嵐の山のさむければもみぢの衣きぬ人ぞなき

さがの院の御賀　明阿曰こはむかしがたりにてこのふみにはなし

めでしれ七十七右

ぬすまはれて　明阿曰盗れてを延べていふなり萬波反は萬となればなり潔齋をもきよまはるといふ類なり

みだりこゝち七十八右

みぬ人こふる御やまひ同

こぎみ　明阿曰北方のちゝとしかげの朝臣のことの給ひ出すゆゑに故君とはの給ふなり

がうざく七十九左

みてづから八十右

けにはた同

宇津保物語二阿鈔二

たゞこそ

明阿曰こそはかくそにや古今の作者にくそといふ有源氏物語の抄物に紀貫之の童名は内教坊阿古屎といひしよしつたへたり又源氏手習の巻にいづらくそたち琴とりてまゐれといふに云々またいでこのもりのくそあづまとりて云々また此物語のうちにも所々みえたりくそたちかなどもあり又大和物語にも小藥師くそといふ女有きその頃いへる辭なるべしくそはすべて物の屑なり今俗に火を打てつくるものをほくそといひ鍛冶のくずをは金くそといへりこの類なるべし貞雄云こそとくそとはもとよりたがへる辭ならん能ことのこゝろばへを考思ふにこそは愛思ふの意に云ことはなり源氏物語に右近君こそ又きた殿こそなどいへり此ものがたりにあて宮を御父おとゞのあてこそとの給ふことみゆ彼比賣古曾といふ神名も愛思ふよりかく申せるにあらすや又こそとくそと相通していへることは竹取翁物語に糞をしもこそといへることみえたり猶後にいふべし　頭書藤原君巻にあるまじきこといふくそたちかなどみえたり

いたゞきの上を蓬萊の山になさんとたなうらのうちにこがねの大殿をつくらんといふとも左一

ふたつなし右二

あしよし　貞雄云善悪也後世のことばならんには文字のまゝによしあしといふへきをあしよしといへるは古例なり

はらぎたなき人二左十七右

水のうへにふる雪いさごのうへにおく露　明阿曰古の諺にてともにあとなきことのたとへなり

妻にもかたへ子にもかたへ左二

よのたからの王右三

ひとつこ　明阿曰これはひとりこの誤にやいせ物語にもひとつ子にさへありければと有どもそれさへうたかふ人あり

これをいなにて　明阿曰古寫本にはこれをはなちてとあり則放齋の意にて是をのけてと云に同じもとのまゝにては是を否にてなりかくてもこゝろえらるゝなり否にてはいなむ意になれり

あやき　貞雄云文君か綾君なるべし
おなじ野にや右四引歌
うちはじめ右五
おぼえ　明阿曰似たるをその人に覺えたるといへり
吹風なる雨のあし左五
さしおいかたちみにくき　貞雄云明阿本にとしおいてかたちみにくきとあり此ものがたりの例にてかゝる所にて字をそへ云ぬ例なり
かしらよりあなするゑ　明阿曰頭より足末までなり
みぞかけ　明阿曰衣架也貞雄云
をひ〳〵しき右七
すげなき同
わがよのかぎりはまなこ同
よなりといはるゝ右八
あこ君同
あたになぼしそ左八
湯水もまゐらす同
すべながり同
すがはらや歌　明阿曰古今集　こゝにのみ我よはへなんすがはらやふしみの里のあれまくもをし菅原伏見は大和なり
そこにもまゐりこぬ右九
身こそよそなれ同引歌
すなはち左九
よしばみ同
いめがたり　明阿曰ごたちなどもなにがな云さやめんとて夢物語して心にかけさするなりたとへは夢にみしやうあしかりしなどいふなるべし
たまのうてな　明阿曰萬葉集第十一問答歌念人將來跡知者八重六倉覆庭爾珠布益乎玉敷有家毛何將爲八重六倉覆小屋毛妹與居者
かたおもひ　明阿曰六帖第四かたこひの題　ねもごろにかた思ひする此頃は我心からいけるともなしいせのうみのあさなゆふなにかつくてふあはびのかひのかたおもひにて
五月五日に成てせくなどいときよらにてうじて右十一
ちさきさうぶに　貞雄云ちさきを明阿本又古寫本にちひさきさうぶとかきし本有かくいへば聞ゆる如くなれば能思ふに小き菖蒲とのみにては聞えがたし古に千裂菖蒲又千前菖蒲など云しものありしや

はかりがたし可考
よるなみのすゝきわたれば歌　すゝきを明阿はすゝぎこいへれは濯の意に思はれしなるべし貞雄思ふによるなみの進きにてすゝきに過の意を含ませよるなみをよる年波にかけしならめ猶思ふはかく年波の我よりもいたく進き給へる女の猶我を思ふは心くるしかりけれこの意也さるから一條の北方はらたゝしくなり給へるなり此歌を誤り給へるなべに忠君の身のいたづらになれゝば能心して歌はよむべきものにそありける
目をつけてみ給へど左十一
せまりまどひ右十二
まことや同
ばくち同
てをすりて左十三
こゝろづきたる人右十四
うれたき左十四
ふしぎ同
いだしたてられにけりや同
こゝろだましひ同

いふかひもなく右十五
天下さかしまになるとも同
かけても同
なでうこと同
ふかう　明阿曰不行跡なるをいふか僕ざまにも不平行などもいへるがごとし又は不孝にてけうの誤れるにもやあらん貞雄云
すけむね　貞雄云このすけむねは少將のよしにいへり古はつかさある人にもかゝる人のありしにや
君かくれ給ひにしかば　貞雄云君は殿のうつしたがひなるべしこゝに君と云ひてはこと聞えがたし
あさりとり右十六
かう奏したるやうにつげ給はぬ　貞雄云つげ給はぬはつげ給へといへるなり此たぐひの手爾遠波いと多し
愛子左十九
かたはらなるものゝかけおつるこゝろ左十九
たゞがはゝ　貞雄云今本にたがはゝとあるは例の誤りなり下に左廿たゞがはゝにおくれてとみえしにて知るべし則たゞこその母といへるなりたゞとのみ

いへるが名なるべしさるからたゞこそたゞ君なご
いへりこそも君も稱名の如きもの也明阿本にたが
はゝをたかはじと改めしはひがごと也
こらうたく　貞雄云古寫本にいとらうたくとありし
可考
たゞがはゝに　明阿本にたゞこそが毋にと改しはさ
がしらごと也
さばさや右廿一
ちむぢ左廿一
思ひこがれ　貞雄云萬葉集第一軍王作歌に燒鹽乃念
曾所燒吾下情とみえしなどの思ひもゆるなり出し
ことはにて思焦るならん思懲思凝などの字を當て
いふはたがへり
山ふし左廿二
みつせみのみ左廿四
なきたむる云々歌明阿曰古今集戀　よど川のよどむ
と人はみるらめどながれてふかき心あるものを
なみた川は
宮す所右廿五
すなはち左廿六

やむごとなき左廿七
まじらひのついで右廿八
たい〳〵しき左廿八明阿曰謙退遜讓の意あり依て源氏
物語の抄物等には退々の音語とせり又一説には大
々の意ともいへれど當れりとも云かたしその頃の
俗言なるべし
さだめて知りぬ右廿九
左大臣の家　貞雄云左大臣はたゞつねをいへり家は
彼北方一條上をさしての給ふなり今俗言に內『其
妻をさして內といへり』といふにおなじこれより
轉りて夫のうせしを後家などいふなるべし
いま〳〵廿九右廿二左
はらぎたなき左廿九
いもゐさうし　明阿曰潔齋精進をいふいもゐは物忌
にこもれるにて齋居也貞雄云頭注右八にも考あり
沉のはこひとよろひ右卅
これをだにかたみ　明阿曰古今集
いみじき左卅
まゐりこずや同
しろかねのすきはこ同

左近中將　左衛門佐　貞雄云誰ともなし思ふにちかげのおとゞの御族なるべし
淺みこそ云々歌　明阿曰伊勢物語に淺みこそ袖はひ
　つらめなみだ川身さへながるときかばたのまん
あさぢにつけたりしより始て　明阿曰此卷の始に此北方より大臣の御許へこゝのみやあさぢしけしと思へどもといへる歌をおかしき淺茅につけておくり給ひしことあり其御ふみよりして其後のもみなかへし給ふなり
いや聞えじ　貞雄云古寫本にはや聞えじとあり思ふにいや聞えじは彌聞えしにて重ねては聞えしと思ひしかならめ猶可考
とはてうき人左卅二引歌
我宿に時々ふきし云々歌　貞雄云文屋康秀ふくからに秋のくさきのしほるればむべ山風をあらしとい
　ふらん
なほざり左卅三
おもひはてられ同
かひ同
たきゝくくず同歌

みとくさかり左卅三
なめて同
よもき同　人の名なり
さいひてあらん同
此時の大將に　貞雄云大將はまさよりなり
いもゐさうじ　明阿曰潔齋精進をいふいもゐとは忌
　籠居の意にて齋居をいふなり
ひえさかもとをのゝわたりおとは河ちかく右卅四
一切經　多寶塔左卅四
かのよのみち左卅四
よろつのつはもの同
ちから人同
かねのうへに露かゝらむ同
いかづち同
　藤原君
一世源氏右一
身のざえ人にすぐれがくもんに心いれて同
むこどり同
太政大臣　貞雄云此おとゞはちかげのおとゞの御父なり

三日の夜 左二

御母后宮　貞雄云まさよりの北方女一宮の御母后宮といふ義なり則さがの太后宮なり

とらして　明阿曰とらしては其造營の執事してなり又異本にとくしてありとくしてならんには催督の義なるへし貞雄云

宮の御腹に十五歳よりうみ給ふ　貞雄云十五歳より生給ふは後人のかきそへしさまながらまたくしからす此ふみの例にてかゝることいと多し

うるはしくきよら 左三

女はもぎかみあげ　貞雄云をとこはつかさかうふり給へり女はもきかみあげとみゆかゝれば女の裳着髮上は男の官位給へるほどの事なるを思ふべし

正三位の大納言になんおはしましける　貞雄云かゝるたぐひのなんはぞにかよへるつかひざまなりさるからるもしもてこゝをとぢめたり明阿かなんはなりの誤りかといひしはたがへり

御をんな宮の御はらの大君は御せうとの今のみかどにつかふまつらせ給ひけり　貞雄云こゝのつゝけさま聞えかたげなり　委に云は御をんなの御子は宮の御はらの大君は御母宮の御せうとのさがの院の皇子の今のみかど朱雀院ににつかふまつらせ給ひけりといふ義なり

あて宮　道麻呂云愛宮なるへし明阿も然云り

こくばく 右五

四町の殿をはらひとつをばまちへにすませ奉り給ふいつのまのおとゞひとつ十一間のながや一つづゝ奉り給ふ　貞雄云はらひとつは腹ひとつにてひとつ腹の御かた／＼を一處にすませ給ふと云義なりさて五間の殿十一間の長屋は一方／＼に奉り給ふと云ことなり　明阿曰すませ奉り給ひつまづおとゞひとつ云々ある本たがへりといへりげにしかなるべし　明阿曰萬葉集第十六　橘之光有長屋爾吾率宿之宇奈爲放爾髮上都良武香　夕顏卷

貞雄云

おもとひと　めのと　うなゐ　しもづかへ 左五

ひんがしのおとゞは宮たちすみ給ふ　貞雄云宮たちは御聟の君たちにはあらす女御君仁壽殿のうみ給へる宮達をいふなるべし

太郎君の御かたには殿のあたりなりける處の右をたひつゝ云々　明阿本には太后の御かたには殿のあた

りなりける所々をたびつゝ云々あるはひがことな
るべし此時きさよりの御族に仁壽殿女御を除きて
后と申べき御方なしきさよりの御母さがの太后宮
の御里居處といふべけれどさならんにはたびつゝ
といふべからず古寫本に太郎君とあるにしたかふ
べし

らう〳〵じく左六

御心つき　貞雄云御心着なりすべてかたらひつき思
ひつきなどのみな著なり

すゞろ左六

心ばせある人同

ことたはふれ　明阿曰巽戯なり

くちあそび　貞雄云ことたはふれごとはの給ふとも
このかゝるくちあそびはさらにうけたまはらじ云
々くちあそびは異戯にむかへることなれは俗言に
いへるじやうだんといへるほどのことゝ聞ゆ異な
るたはふればの給ふこともかゝるじやうだんはの給
ひきこえ給ふなどいふことならん

うひことば　明阿曰初事なりといへり貞雄思ふに初
言葉にて初てあてみやの御うへをさねたゞの言出
給ふをいふなるべし

かりのこ右七

かひのうちに云々歌　明阿曰和名抄陸詞切韻云卵音嬾
和名加比古 鳥胎なり　野王按卵音字俗云加倍流 卵化也此歌の末
は誤有にやかへらざるらんかへさゞるらんいづれ
も心えがたしかへらざらなんの誤にや　貞雄云古
寫本にかへらざらなんとあり

やご左七

かばかりにおやうみつくらん人のやうにもこそつか
ふまつれば 是造兵衛君のことば いでかばかりぞかしの御心はさ
の給ふ されたゝのことば 貞雄云此兵衛君のことば聞えがたし
可考

すもり　明阿曰和名抄呂氏春秋云鷄卵多毈音段和名須毛里 野
王按毈者卵不孵也大和物語上卷故中務の宮の北方
うせ給ひてのち云々
なき（みやす所）人のすもりにだにもなるべきにいまはとかへ
るけふのかなしさ
すもり（みや御かへり）にと思ふ心はとゞむれどかひあるべくもな
しとこそ聞（キケ）

かりのこは萬葉集第二皇子尊宮舎人等慟傷作歌の

中に
とくらたてかひし鷹の兒すだちなばまゆみの岡に
とびかへるこん
かもといふもの歟
此鷹兒は借字にても有べしまた今云夏鷹とてかる
藤原のかねまさと申年四十ばかり　貞雄云今本及塙
本には三十ばかりとあり古寫本には卅ばかりとあ
り則四十の省文なりかねまさの歳をかぞふるにあ
てみや十二歳のとしは卅六歳ばかりなり給ふべけ
れば卅ばかりといひてはかなひがたし
おほきなるや左七
左大將どの丶中將此御つかさの中將なりけり　貞雄
云左大將どの丶中將は右近中將すけずみをいへり
左大將はまさよりをいへり
心のまばゆき右八
ひろき家におほきなる屋ども立て左七　貞雄云すべて
古は家と屋のけぢめうるはしかりしと是にて知る
べしいへとはすべての家所のことを云ひ屋とは其
家のうちにて一所をさしていふことなり思ひまが
ふべからす

玉のうてな　明阿曰六帖
何せんに玉のうてなもやへむぐらしげれるやどに
二人こそねめ
まめやかには左八　右十一
若宮わたり　貞雄云すけずみの中將の戀わたり給へ
るかたにあるべけれど此ことものがたりのうちに
みえす
すいたる名　明阿曰すきたるなは好色の名をとりて
すきものといはる丶なり　貞雄云すべて偏にもの
好みすることをすき數寄といへることなるを中古よ
りこなたは好色のかへなのごとくなれりもと好色
をすきものといふもひたふるに色を思ふをもて負
る名なり
ふところずみ　明阿曰內裏春宮などへもまゐらせす
また聟どりもし給はて父母のふところのうちにと
りこめていつくしみ給ふをいふなり唐土の書に懷
抱に有深窓にやしなふなといへるたぐひなり貞雄
云一本にうちずみせさせてあらんとあるはひがこ
となり
あそび丶と　色このみ右九

あるじある女をも　貞雄云明阿本にあるとしあるをむなをば云々ありこれは有とし有女をばといふ義なり

兵衛尉の君　貞雄云兵衛のぞうはよりずみなり

さゝらなみ云々歌　貞雄云此歌意得がたし可考

まさなからんをば　貞雄云今本にまさにさらんをば明阿本にまさながにさらんをばとありともにひがことなり不正からんにて正からぬをばみせ奉らじとの給ふなり

たちはしり右十

夢ばかり同

はなざくら　明阿曰櫻花といふに同じけれども六帖に花櫻をば櫻とわかちて出したればしばらく異物としてたゞ花の大きくうつくしきをいふべきにや

貞雄云花びらは花瓣なりたゞおもしろき花といふまでなり

ちりひぢ　明阿曰塵泥なり古今集序

をいらか左十

ふる雪とも云々引歌　明阿曰六帖雪

しものうへにふるはつ雪のはつこほりとけすもみゆる君が心か

かきくらしふる白雪のしたもえにこひうせねとや人のつれなき

かきたれてふる白雪の君ならばあなめづらしといはましものを

山ちかみめづらしけなくふるさとのしろくやならんとしつもりなは

（此歌後撰集に入しはふるさとをふる雪とて讀人不知なり）

ひとめみし人にこふとてあさきりのふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

萬葉巻十にも是等の歌の意をとりてふる雪のとはいへるなるべし

人の御あだこと右十一

しろかねの火とりにしろかねのこつくりおほひて同くもとな物ぞかし引歌　明阿曰楚襄王の故事にて王夢に神女と契りをこめ給ひしに朝には雲となり夕には雨とならんとちかひし事なり

いでや左十一

まさゑのはこ右十二

のちおひ　明阿曰古今集物名歌ちまき大江千里
のちまきのおくれておふるなへなれどあだにはな
らぬたのみとぞ聞
後生といふも此意なるべし
うちはへ左十二
ゆげともゆかれす引歌同
もりのさかきは云々歌　明阿曰さかきはのはもし二
義あり榊葉ならば濁音てにはならば清音なり
あとかは邊云々歌　明阿曰近江國なり
すもりこ右十四
兵衞が名は云々　明阿曰かねてなきなおひしことの
今きよまりしをいふ貞雄云
こりずま　明阿曰古今集戀三よみ人しらす
こりずまにまたもなき名は立ぬべし人にくからぬ
よにしすまへば
きなるいづみ　明阿曰神代紀
岩のうへ　明阿曰古今集
ちご君　貞雄云まさよりの八君なり
すゑの松歌　明阿曰陸奥國末の松山の事は故事に云
ならはせり

にほといふ鳥右十六
をさ〳〵同
上野宮　明阿曰親王にて上野國の守なれば則かんつ
けのみやと申たてまつるなり　貞雄云さがの院巻
に御名よりあきらと申よしみゆ
ものひがみ右十八
今さぞ同
さしはへて左十八
御みやうじかうなぎばくち京わらべおうなおきなめ
しあつめて云々同
はぐち　明阿曰博奕をこと〻して身を〻さめずわろ
くはふらかしたるものなり著聞集にばくちの聟入
せしことなど皆り博打の意なり簺をば打なくるも
の故いふなるべし貞雄云
さうしみ　明阿曰少人(サウシミ)にてあてみやをさしていふな
り今本に雜仕等とあるはわろし又さうしみは正身
の音語ともいへり日本紀にまさむと訓るも此意な
り兩說ともにかよへり　貞雄云さうしみの事は源
氏物語にもみえてくさ〳〵にいへり少人正身とも
にうけかたし書紀に正身にまさむと訓れとこのさ

うしみの據とはしがたし思ふにさうしみとは多く
主なき女妻なき男にいへり故さうしみは曹子在の
約れるならん ましなつゝむればみさなれり故さうしみさいへり 女の父母の家に
あるにみづから家とは云がたく男は妻の家にすむ
ならひなるは古の例なりさるからむことりむこと
られなどいへり男なき女は父母の家にあるなべに
みづからの家とは云がたく其曹司に在といふ義に
てさうしみとはいへり男にいふも然なり俗言の部
屋住といふにおなじかるべし
比叡山惣持院右十九
十禪師曰
龍門寺壺坂寺ともに觀音大士靈場なりと明阿いへり
つちをまろかし　明阿曰土をまろかし沙をあつめて
佛像卒都婆をつくること大功德あるよし經說に多
くみえたり　貞雄云明阿がいへるはたがへりこゝ
の意はたゞ土をまろめたるものなりとも神といひ
佛ともいはば信じ給へといふことなり
七萬三千佛左十九
比叡四十九院曰
大とこそうけい　明阿曰そうけいはその名なり

せまりしれたる大學のす　明阿曰これは世にも用ひ
られず官位にもえすゝまぬえせ學生の年老たるを
いふなりさるものを唐の書には窮錯大といへり
貞雄云せまりしれのしれはしれもの癡白のしれとお
なじことながら少しけぢめあるべししれものは俗
言のうつけものゝごとくなれど老しれ思ひしれな
どのしれはうつけものゝかたには云がたしかゝる
かたのしれは耄の意にて老耄思ひ耄せまり耄とい
ふにおなじぼうけとは俗言にも云ひ猶こゝの意を
云もてゆけばうつけしとおなじことなればうつけ
しは生得の性なり耄のかたは其ことによりて生得
の性のうせしなればけぢめありとはいへり　道麿
呂曰大學のすは大學助なり一本にすけとあり今
本にけもじを補べきよしいへるはたがへり大學の
衆なりたゝ大學の人といふことなるをや
家かまど右廿一
みちごとにおきてはしきしにもいり　明阿曰諸の藝
術の道々におきてしづめるをあげさゞこほれるを
すくはせたまへといふなりはしきしは橋岸なり
貞雄云於諸道其ついでゝすてきたよりなきものをつ

いですべきたよりを道路によそへて橋岸とはいへるなり

すぐろくのぬし　明阿曰萬葉集第十六長忌寸意吉麻呂一二之目耳不有五六三四佐倍有双六乃佐叡このうた今本の訓は音語にてよみて誤りあれはあらたに訓改つ又同巻無心所著の歌に

わぎもこがひたひにおふる双六のことひのうしのくらのうへのかさ

和名抄　雜藝類　雙六　兼名苑雙六子一名六采今案簙奕是也簙音博俗云須久呂久　貞雄云前にはぐち京わらべと云てここにすぐろくのぬしといへれば和名抄にいへるごとく俗名にあるへし職人盡歌合聖護院にはぐうちの繪あるにも雙六盤を前におきたれば當時までも然なりしなるべし

いろこのごとく　明阿曰如魚鱗也唐の書には鱗次また鱗雜なども多くみえたり

くそたち　明阿曰このこと多くあることばなり公族の音語歟また糞はいやしきものゝかぎりなれば詈ていふ詞にや古今集の作者の名にもくそといふ有次の文によればのりていふ詞ともみえず　貞雄云

東山なる寺の塔のゑし給ふべし云々　明阿曰これは下にいへる道隆寺也たふのゑは塔供養なるべし和名抄に層和名太布乃古之とありかなは此定に太布と書べし今本たうとあるはたがへり堂には和訓のなければ音にてだうと書べきなり

どうりうし　明阿曰上に東山なる處と有ば其わたりなるべし山城名勝志にも郡未堪よしみえたり拾芥抄に道隆寺と有又野府記云萬壽四年十一月十三日云々諷誦道隆寺式光云々ともみえまた古文書の奥書に云天文十四年三月下旬道隆寺花王坊書之と有これらにて思へばまさしく天文のころまでは此寺有しとみゆれど其後のさわぎにあともなくなりしなるべし

しらげよねうちならし　明阿曰しらげよねは佛に奉る洗米也うちならしはうちまきの米なりうちまきの事も古よりいへり古昔物語などにもあり

あたはとくをもちて　明阿曰老子六十四章爲無爲事無事味無味大小多少報怨以德云々といへる意なり論語の以直報怨以德報德とは事ことなり

いろふし　明阿曰色由の意にて面白き節を云　貞雄

云

をさかく廿四右

つじあそび　明阿曰今京俗言の辻打の事なるべし

らうぞく　貞雄云異本枕冊子おそろしきものらうそくとあり思ふにらうそくは老族の音語にや前に上野宮くさ〳〵の人集へ給ふくだりにおんみやうしかうなぎばくち京わらべおうなおきなとみえたり此おうなおきなをさして老族といふべし老人のおごろ〳〵しきさまはおそろしげなれば枕冊子にもおそろしきもの丶條にいへりしならめ

頭注云異本枕冊子におそろしきもの云々　らうそくのおさめいかりなのみならすみるもおそろしさあり世繼翁若枝卷に刀自をさめとみゆ又書紀に專領の二字をたうめをさめと訓りともに老女の稱なり刀自も老女の稱なり老人のおごろ〳〵しきかかりなのみならざらんにはげにおそろしかるべし

たつゞみ　くさかり笛廿四左

かたしきりして同

七日七夜とよのあかりして　明阿曰朝廷の公事の豐明宴ならでもその事に准へて酒宴をまうくるを私にもかくいふなり　貞雄云

みとこあらはし奉り　明阿曰その佛に祈り參らせし事のかないたれば是佛德のいちしろしく顯然たるものなりといふ事なり又一本に佛の御かたあらはし奉りとありこれはそのかへり申のために佛の御像をあらはし作り申にや

はまゆか　明阿曰帳臺の事をいふその實體のさまは假名裝束抄に見えたり

すゞのたい　かねのつき廿五左

机同　貞雄云食盤なり

こゝは佛つくる　貞雄云前に明阿の一本に佛の御かたあらはし奉りとありといへるを諾ふべし則これはそのことを繪にかきしなり

むな車にいくしをつみて　明阿曰人のらぬ車に五十串をつみてなり　貞雄云むな車は屋形なき車なり

枕冊子

三恭といふ娃廿六右

人のくに　明阿曰唐をさして云にはあらす又畿内を中華といふにむかへて七道の國々をさしていふなり他國などいへるもみな同し律令にみえたり

おほやけこと云々　明阿曰公務をよくはげみて貢調をもとゞこほりなく奉りそのうへに私の寶をも多くつみたくはへしを云
板屋形車左廿六
脊垂たるめうし同
ぬのゝふときをうへみぞにそめてふときてつくりを云々　明阿曰布の太きを上袍に染て太き調布をなり調布和名抄
木太刀左廿六
ふるわらうつぼにしのはさしあつめて　貞雄云古蘘空穗に羊蹄の葉指集てなり　明阿曰しのはは羊蹄の葉なり和名抄
まつりことをさしく　明阿曰國を治る政事のをさをさしきを云
あるゝいくさけだもの右廿七
きぬぐらにあるとくまちといふいちめ　明阿曰絹の肆に居し德町と云市女なり
なつき　明阿曰名簿なりこの書樣の事委く台記にみえたり明月記にも有又後撰集に
そじき給はすとも　明阿曰素食なり　貞雄云衣食(ソジキ)なるべし衣食給はすともつかふまつりなんといふことなるをや
ひるましり侍る左廿七
さかな　明阿曰酒菜(ナ)なり菜肴にかきらす酒にそふるをすべて菜といへり漬豆零餘子雲雀をいへるにて思ふべし
つけ豆　ぬかご左廿七
をとり　明阿曰媒鳥なり
いとほしき右廿八
かけて聞ば　明阿曰心にかけて聞ばなり萬葉集などにかけて思ふなどいふこといと多くあり又後言の意にてしりうごといふを物かけにて聞といふにや
つまはぢき右廿八
よきくたものからもの　貞雄云菓物乾物也からものは乾菓物をいへり
三まのかやゝかたしはつちあみだれじとみ　貞雄云是に兩義あり一は三間の茅屋片しは土編垂蔀(明阿)一は三間の茅屋形芝土編垂蔀呂(道麻)といへり思ひ決めがたし
たからにはぬしよぐ　明阿曰當時の諺なり寶は持主

にえりきらひして成らぬと云なるべし避去の意なり
ちひさくて　明阿曰これは左大臣どの丶幼稚ておはしほどのことを云なり
ほど〳〵し左廿九
たからの王同
うちまき　明阿曰うちまきは米をうち丶らすなり物いのるときにするわざなり今昔ものがたりにうちまき米に鬼のおそれたることなどみゆ今俗に米をそのま丶うちまきといふなり貞雄云
あふち　明阿曰和名抄
うごま　明阿曰烏胡麻はくろきごまにて油にしぼる事今も然り
みそしろへ　明阿曰今味噌と書ども和名抄
まうほる　明阿曰食欲なり
は丶をえじ　明阿曰徳まちばらのをのこゞ母の市女を怨ずることありて父大臣には丶のみそかにみ苑の橋をとりて外よりえしと僞りて參らせしことを云告るなり
あこ　明阿曰阿兒なり

山がつをしたがへて　明阿曰率山賤也
あすだれ右廿二
こ丶の丶なる莚同
ついたて障子同
くれのかしら同
みつ足の臺同
うら黒のつき同
しらし同
て丶たな同
くれのあしだ左廿二
さいづゑ同
布のひた丶れ同
むな車同
たな同
綾の手おり同
た丶みわた左廿三
まきゑの厨子同
綾の屏風　明阿曰綾にて張たる屏風なり
なくひところゑ引歌　明阿曰古今集夏紀貫之夏夜はふすかとすればほと丶ぎすなく一聲にあくるしの丶

め
志賀にまうで　明阿曰近江國
心にこめて右卅五引歌
瀧津瀬も云々歌　いとひかは一本にいとひくはとあり道麻呂曰六帖にいとは川あり可考といへりあわにならはぬ
みこもりて云々歌左卅五
父がともにつくしにくだりて云々　明阿曰是は太宰帥又は西國の守になりて下るにつきて行しならん
貞雄云
かくこうせぬわざなし　貞雄云學業せぬ事なしなるべし一本にかしこうせぬわざなしとあり則賢うせぬ事なしなりこもいとよくかなへり
思ひかくまじき人右卅七
うるはしくかたらひ聞えて同
さだめたる里左卅七
おほけなき　明阿曰無負氣の意にて身におはぬことゝ云に同じ貞雄云
ふみならはさじをゝやなど左卅八
ふちせも知らせす同

いまひとはしら右卅九
少將くはしき事は聞給ひてん左卅九貞雄云此少將はしけのゝそちの子かすまさなり左近少將にてまさより大將のつかさ人なれば大將とのゝことはくはしきことを聞給ひてんと春宮帯刀のいへるなり
せうもち左卅九貞雄云莊物をくら(令贈)しめてなりその收納の物を令贈といふなり四十一右繪ときの詞に大將どのものいりげなる殿なめりしろき米二百石か劵つくらせよと帥のぬし云ことみえたりこれぞ莊物を令贈といふの繪のさまなり
ちうはいにわきざしらうちして　明阿曰この次にもかのちうはいのよしいひおくれるなりけりと有り仲媒の音語にてなかだちを云歟わきざしらは脇座等歟猿樂の諷物にもわきざしたちと有り　貞雄云わきざし等は横座といふにおなしく其さし云人につくべき人をいへるならん
雨のかくふればかしらもさし出で右四十
このけふばかりありしはたけうちはきてむきさすばかりきのふなんちぎりあつめてはべる　貞雄云此今日ばかりにいさま我は　ありし此頃まで畠うち剣て麥さすば

かり昨日ぞちぎりあつめて侍るといへるなり

なにの粉もつぼしりに入て　明阿曰壺尻にや　貞雄云壺尻は壺底と云義にて則ものゝ少きよしを云なるべし

あさがたり　明阿曰俗にあさうつといふことありものがたりの應答する事なり　貞雄云あさうつといふ俗言にかなへりあさうつといふはかたりことの跡をつぎてかたりかはせることにいへりこゝも其義なるへし頭注云後撰集のあさうだりとおなじきにやと道麻呂はいへりし

ともだち四十左

おいしれ　明阿曰老ほけたるを云僻事するをもしれ者などいへり

ひそくのつき　明阿曰秘色抔は青磁の大高坏の類也青磁はむかしはことに秘藏せし故にいふ暇耕錄に秘色のことみえたり

ほれ〳〵しき四十一左

よばひぶみのやまとうた　明阿曰男女の相聞ふるにはふみやる時にかならす歌をおくることつねのならひよばひは婚姻をいへるなり

しきおはせぬ　貞雄云しきをもせぬとあり時宜をも不爲宮仕の始と云ことにや是よりよばひふみのことばなり

なつき　明阿曰名薄なり

鬼の目をつふしかけたるやうなる手にて　明阿曰あらくなしくこは〳〵しくふみをかきたるをいふなり

あかもの　貞雄云あかもの己が有となりしのこゝろにやまたはあがものといへるかをりもじに誤りしにや

もころかしむる四十四右

髪に繩をつけてしりへてにしばり　貞雄云このさまそいにしへ女をいましめたるさまなるべき

ちうはい四十四左

くやつ四十五右

ましをしろきいたゞきのうへにする奉りて　貞雄云汝乎白髪の頂の上に居奉りてなり

山ごもり四十五左

すなはち同

うらむれど云々歌　明阿曰六帖喜撰法師　わがため

になにのあたごのやまなれやこひしとおもふ人の
いるらん

ふるさとものし給ふ　貞雄云此兵衛君がいへるは實
たゞの北方（三條のうへ）をいへりこれぞ御中かれ給ふお
こりなるべき

ほころび 四十六右

かしかまし 四十七右

山かつの云々歌　明阿曰此歌の次下に詞のもれたる
か次のゑことばと合せ思ふにそのことゞもみえす
うたかうべし　貞雄云次下に賀茂川に御禊すまし
給ふ條の繪ことばにうかれぬ參れる由いへれど本
文中にはなし是等例にて文中になきことをも繪に
あらはせしなべに繪詞ありとすべし

うつしうま 四十七左

ものいひきり 四十八右

師はらたちてもすゝら（箺歟イ）をなんたけあらしめばひこず
らひやせんとおもはしめし 四十八右

わうたう 四十八左

せうもち 四十九右

てかき 四十九左

七月七日になりぬ賀茂川に御ぐしすまし 四十九左

さじきうちて 同

おはしまさふず 同

たなはたづめ云々歌 五十右

ひこほし天の川わたるをみて 五十一左

手もすまに云々歌 同

うかれ女 五十三右

わび人の云々歌

嵯峨院

たべゑひ 右一

ゑひすゝみ 左一

うしけ　りうのつの　明阿曰牛毛麟角は多と少との
たとへなりりんのんをうと音便にとなふるも常の
ならひなり抱朴子萬夫之中有一人爲多矣故爲者如
牛毛獲者如麟角也北史文苑傳序明帝御曆文雅大盛
學者如牛毛成者如麟角

うしろみ 左一

つき〴〵しく 右二

との人 右二

こたち 右二

なみだの川はたぎりつゝ歌右四
津のくにの云々歌　明阿曰古今集雑上なにはへまかりける時たみのゝ邊にて雨にあひてよめる貫之
雨によりたみのゝしまをけふゆけばなにはかくれぬものにぞありける
こゝろすこしゆく左四
あつき火のなかにすまふ心ちし左四
よその人右五
しりてしらすかほ右五
こうちこさひき左五
かたはらいたき左五
さかさまのこと右六
かたは右六
あやしき心右六
いはてたゞに　明阿曰思ふことはいはでたゞにやゝみ
ぬべきわれにひとしき人しなければ
おなじ心左六
世中にたちまふべき左六
命だにしばしとまやとて右七
おぼろけ右七

いみじげ右七
さすが右七
いとほしく左七
おのが心ながら心にまかせぬ左七
さはた左七
それさなおはせそ右八
にげなき右八
心やり右八
なけのことのは引歌右八
うちほゝゑみ　明阿曰遊仙窟に歛咲忍咲とも書りゑまくほしきをしのびてはづかにゑめば含咲といふなり又類のみすこしゑみをあらはす故にもあるべし
こゑせぬにこたふるものは山彦の　明阿曰古今集戀一題しらす　よみ人しらす
うちわびてよはゝん聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ
このうたを又後撰集戀に入てかへしせぬ人に遣しけるとあり
になく　明阿曰似ものなしといふに同じ二なくには

あらすふたつなしといふ詞とはおのづから異なり
すき〳〵しく左九　貞雄云過々しきにはあらすきもじを清音にいふべしことのこゝろは其情をものによそへなどして云をいへり多くはをとこをんなのなからひにいへるなべに好色をいふと思へれどさにはあらす
うちなげく左九
おきのうへにゐるこゝち　明阿曰和名抄爐煨唐韻云熾昌志反漢語抄云於岐比猛火也又盛也四聲字苑云爐煨和名同上熱灰新火也古今集物名歌　おきひ　都良香　ながれいづるかたゞにみえぬなみだかはおきひんときやそこはしられん　貞雄云
いかめしく右十
ちかまさり右十
きやくひやう右十一
いとまぶみ右十一
さう〳〵し右十二左廿三
聲をはなち　明阿曰放言とて高聲を發していふさま怒れるときのものいひなり
たひ〳〵しき　明阿曰おそれかましきといふ意に用ひたり
やむごとなき右十二
すそゐくねん右十二
かみおほかる左十二
あしてのつゝかもあらば左十二
しんじち左十三
いでいりおきふしなげき左十三
いかでものゝくるしさしらせん右十五
はしりかき右十五
とほき心さし右十五
なきぬらし左十五
いとゝしく左十五
魂しづまる時なしく左十五
きりくづ右十六
なれ〳〵しき左十六右十八
ことあそひ左十七
はらからとちぎり左十七
いとつきなきこゝち右十八
露たにぞなき引歌右十八
おぼろげ右十八

捨人左十九
人げなき左十九　貞雄云人かすならぬといふに同じ
もたらひ　明阿曰持て有といふがごとし　貞雄云もたりといふりもじを延てらひといへるなりもたりは持在なり（ちあの約めたとなれり）
けしう右十九　左廿四
さしもむかひ左十九
心たましひ右廿
なにものゝけをもおぼえす右廿
神なづきのころもがへ右廿
まかりありき右廿
やみのよのなにかしのこゝち左廿
うちはめて右廿一　明阿曰このことばおちくぼの物語にもみゆうちすてゝ物の数にも入れさるの意なり
心にしたがひ右廿一
すゝろ左廿一
心ことに右廿二
いさゝきる人右廿二
けうし左廿二
みだりこゝちいとなやまし右廿三

うちやすみ右廿三
おぼつかなきことがち右廿三
をさ〳〵右廿三
なま女右廿四
ものたばかり右廿四
たばかり聞えん右廿四
はかなく右廿四
人とあるかぎり左廿四
ときことに左廿四
あちきなし左廿四
らうたし右廿五
あえもの　明阿曰あやかりものゝ意なり古今集ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ貞雄云
今本にあへものとあるはひがこと也あえと書べし
ゆゝし右廿五
いざとく右廿五
ものはかなく左廿五
たはやすく左廿六
めぐらしふみ左廿六
もろ心右廿七

ことかくれす廿七右
みかうのご廿八右
ひとたまひの御車　明阿曰副車和名抄　頭注云貞雄云ひとだまひは佗給(ヒトダマヒ)なり下五十三右にも
こゝろづかひ左廿八
さかきばの云々　明阿曰此歌はかくら歌のうち神樹の本歌なり　やひらでを云々神樂歌の韓神の歌に本みしまゆふかたにとりかけわれから神のからおきせんやからおき末やひらでを手にとりもちて我から神のからおきせんやからおき　これは旋頭歌のさまなるを下に詞をそへていふはうたひ物故にすべてかく有ことなり古の神樂歌をとりて當時は下をは云かへてもうたひけんさよふかくよりは新につくりたるなり或人下はみまがへて書誤れるといへるはいかゝあらん　山ふかく云々此歌も神樂歌のうちの賢木のうたをとりて其末の歌に　神がきのみむろの山のさかき葉はかみの御前にしげりあひにけり又或本の歌に霜やたびおけどかれせぬさかき葉のたちさかゆへき神のきねかも　此二首の詞と意をとり合せてよめるなりこれも上と同じく當時かくいふ神樂歌有しを其まゝ此にも用たることなるべし
心あはたゞしく左卅
すごげ　明阿曰赤染右衛門集二
雪の賀　明阿曰冬賀のえんおこなはるゝを雪の賀といふなり秋にもみぢの賀などいふにおなし
きゝしのび左卅一
いはでおぼす　明阿曰六帖　心にはしたゆく水のわきかへりいはでおもふぞいふにまされる
ほのめかし左卅一
さいなのり　明阿曰そこにありあふひと〳〵みなおのれが身におへる才能をなのり申なり　貞雄云さいなのりは猿かうのことにありしなるへしこゝのさまも然なればなり
あそび女右卅三
御としみ右卅五
おのがいそぎ左卅五

つみしろ　明阿曰罪代の意歟田鶴むら七左
ゐきをさめのおもの　明阿曰息やすめのためにきこしろす食物なり　貞雄云威儀をさめのおものにて饗膳のうるはしきものをいふべし頭注云吹上下三の右にいきのおものとみえたり
まひのしすゑてきんたちにまひならひ給ふ　明阿曰舞師すゑてはおきての意なりならひはならはせの意にてならへ給ふの誤り歟はせの約はへなればなり
しろかねのかぢ卅七左
ほそめ　さとめ紫のり卅九左
花つくらる四十右
みたまのいそぎ四十一右
穴あるものはふきをあるものはひき四十二右
ちくさのわざ四十二右
よろづのことこの人の手かけぬことはいとわろし四十二右
天女くだり給ふらんよにわがめこの出こん四十三右
うきてのみあり四十三右
かいつきて四十四右

ぢんさかうにしめて四十四右
御つくゑまいりかはらけはじまり御はしくだり四十四左
こゝちそら四十六右
御うしろですがたつき四十六左
なきてをいたしあそびせめて四十七右
いまからしり給へ四十七左
めにもたらす四十七左
居くらし四十八左
あらはひほころひ　明阿曰大和物語上かいせうといふ人法師になりて山にすむあひだにあらはひなどする人のなかりければ又下なり半の中將のもとよりきぬをなんしにおこせたりけるそれにあらはひなどする人なくていとわびしくなん云々これはあらひといふべきをはひの約ひなればかくのべていへるにやまたは洗ひ灰の心もあるにやあらはしめなどいふ意をふくめり
らう／＼しき四十九右
あはれたる所四十九右
さう／＼し四十九右
いたつけわづらひ　明阿曰拾遺集物名つくみ

さくはなにおもひつくみのあじきなさみにいたづ
きのいるもしらすて
和名抄　平題箭揚雄方言云鏃不鋭者謂之平題 和名以太都岐
郭璞曰題猶頭也今之戯射箭也
あたりの土をたにふます 四十九右
ほうしこもりをり 四十九左
かほかたちおにのごとく 四十九左
かしらはひたしろ 四十九左
あは〳〵しく 四十九左
おもたゞしき 五十右
つきなく 五十一右
こもなく　明阿曰無期に酔たるなり
おしわごみ 五十二右
おとね　明阿曰下の子日なり
うなゐ車　しもづかへ車 五十二左
あそび人 五十二左
くみませ 五十三右
ゆゝしくさがなき 五十四右
あたり〳〵 五十四左
われもむかしはをとこ山　明阿曰古今集雑上題しら
すよみ人しらす
いまこそあれわれもむかしはをとこ山さかゆくと
きもありこしものを

宇津保物語二阿鈔三

梅花笠

のりしり　明阿曰騎尻は馬に乗て後に立て供奉するものなり

をんなわらはべいじう　明阿曰上にわらはべいじう男陪從とあればこれも女べいじうなり

あをに　明阿曰あをには衣服令などには黄丹とかけりこれをワウニと訓れども思ふに音訓ましへていふべきことわりなければこれもとはあをになるを後にそのこゑの同じきによりて借字のやうにかけるなるべし其もとの色は丹に青き色のまじはりたるにて有なり貞雄云

この宮に詣て給ふことこそたみなり　明阿曰こそはと字の誤にて十度なるにや一本によそたみとあるはいぶかし四十度春日宮へ參り給ふべき事はあるまじきなり貞雄云古寫本にこくはく也とあるぞ穏しかりき

ふたばにも引歌

あはれけふは云々　このかきさま貫之の大井川のみゆきの記をとりてかけり

けふをみるちかきのへは花をうらやみこくをきくとほき山　明阿曰けふは興にやまた聽曲に對たれば舞の誤にや

くれなゐの梅すゝめり　明阿曰すくめりは透也源氏物語にこの意のうた有すきとほる意なり又過る意とみればやすし貞雄云古寫本にはくれなゐのうめすゝめりとあり則進にて時に先立をいふべし前三右にさしいそぐとあるにおなしこゝろなり

明阿曰按に古今集の序にあるは花をそふとてたよりなき所にまどひ或は月を思ふとてしるべなきやみにたどれるとあり今思ふにこの事むかしより家々の説ともあまたありていまたそのたしかなるさためもなし餘材抄にも古きものども引て解れたれども是こふといふことにかたつかれたり今この物語の此歌どもをみて思ひあはする事有こゝも月と花とを對へていだせりねまちの月といへるはしるべなき月にまがへるにあらすや花をいざなふは花をそふに似たりたよりなき所にまどひといへるは此歌の我宿にうつしてしかなは野べのたよりな

き所の花なるべししかれば花をそふは花をさそふなるべし是の歌もかの序の心をとりてかゝれたるにやと思ひなりぬされどもそのよしあしはしらず

春のさほびめ歌　明阿曰範兼朝臣の童蒙抄に云春をまもる神をさほ姫といふ　按にいにしへさることはふつに聞えねども中頃の人さること云出て四の時につけてつかさどる神いますといへり

ねごと　くちあそび十右

あげはり　明阿曰平張にて周禮にみえし承塵なり和名抄

いろこのごと　明阿曰唐のふみには鱗次と書り

花のごとみゆ　明阿曰唐詩にも宮女如花滿春殿と作れり

なにそのおこなひ人ぞかうわさの所には出くべき十一左

こかのころ十二右

たゞ今はなごろになん待める　明阿曰按になごろは納言の轉語にや音便にはかくいふなるべしんをろにかよはせるなり餘波をなごろといふことあれ爰とは異なり貞雄云古寫本には正しく納言と文字かきにせしもあり又なこむとかなかきにせしもあればなごろはひがことなり

にゝくのおもと十三左

あめのしたはさかさまになるとも同

こりずまに　明阿曰古今集第、、、

こりずまにまたもうきなは立ぬべしひとにくからぬよにしすまへば

みさい給はり十五右

露霜草葛のねをくやうにしつゝ　貞雄云くやうを今本にときにしつゝとあるはあしゝくやうは請用の意なり齋は齋食のことなればたがへり　頭注云としかけの巻に花の露をくやうにうけ云々あり

ちりおつる花ひらに云々かきつく十六左

わらはべいじう十七右

なるゝは引歌

山彦もこたへぬ空に云々歌　明阿曰古今集戀一よみ人知らず

うちわびてよはゝんこゑに山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

ふちのかゝれるを松の枝なからをりてもていまして

はなひらにかくかきつく 十八左
こともなし同
右大將どのかつらに云々　明阿曰一本にこれよりなし貞雄云己かみし古寫本にはこれより卷を別て一卷とせり
花なき里歌云々　明阿曰古今集
いはゆるあて宮をいてなほたえぬはこの侍從の母こそまさめ云々　明阿曰これはあて宮を奉て歟あて宮置て歟世上人右大將のあて宮を奉てもなほ侍從の母に絶ぬは侍從のはゝのまされるなるべしひとしくはめづらしきをこそ思ひまさらめ心にくしと評判せんと右大將のいふなり
あが佛 廿二左
いてゐて　明阿曰二の意あり本のまゝなれば出居てなり又ひきゐてのかたなれば將以などの字意にてゐて居てなるべし下にひとつにしらべとあればゐて居てもよからん歟貞雄云下にあげたるみすうちおろしてとに出給ふごたちみなうちに入りぬとあればゐてゐてのかたぞまされる
やど云々 歌廿五右

吹上

こゝろおひにおひたる　明阿曰おのが心にまかせてすぢりもぢりて生たる草木なり人のちかきあたりの苑に生るものはためすかしてみがらもよきにむかへていへり
十六の大こく 二右
いきのおもの 三右
かひこふ　明阿曰介甲也
累代のはかせ 七右
たゝみわた百疋　明阿曰疋はむらさと訓べし疋食はむらかれたる意なるべし
くらふ山　明阿曰古今集春貫之
梅のはな匂ふはるへはくらふ山やみにこゆれどしるくぞありける
天德三年内裏歌合　元眞
はるかすみたちやこめつるくらふ山音羽のかひに雪もみえねば
うまくりや　明阿曰馬厨屋にや後世に駄餉といへることゝ有それをそのまゝにうまくりやといひしにやこれはかれゐおふせたる馬なり下のふねは舟には

あらで馬櫪なるへしうまふねはこのものうちにも出たり

雪ふすまのごとこりてふる　明阿曰李白か詩に雪片大如衾と作れる意をとれり

とぢこもり　明阿曰古今集雜下よみ人しらす

いかならんいはほのなかにすまはかはよのうきことの聞えこざらん

法句譬喩經無常品曰昔佛在王舍城竹林園中説法時有梵志兄弟四人各得五通却言入須彌山中還合其表命無際現無常殺鬼安知吾處云々王乃悟曰四人避對一人已死其餘三人豈得獨免云々〇天台釋云山海空市無通避處といへるはこの意なりまた後のことなれども西行上人の

はるかなるいはのはざまにひとりゐて人めおもはでもの思はばや

とよみしも是等より思ひよりしなり

かうざく右廿四

祭使

まつらかつら右一

かさし同

つかひの君　貞雄云まさより三郎君すけずみなり藤原君巻に右近中將藏人頭のよしいへりこをもて始に兵衞づかさの使には中將君とあるは近衞づかさの誤りなるを思へかねまさは右近衞大將なれば御馬などおくり給ふなり

まうけ　明阿曰副儲にてかけがへのために引るゝ馬なり

うりもの左一

かねの杖同

ゑか右二

てぶり　明阿曰手振なり供の人陪從にこのてふりと云有

まきちらし右二

あが君右三

いたゐの清水云々歌左三

かひもなき云々歌　貞雄云甲斐も無きなるは勿論かひに卵の意を含みたり卵もな舊巢を我ものと思ふにおなじくこなたわくる心なしといふ義なり

みつせみの身にかくかきつけて云々左三

たまづさ右四

紀のくに吹上の君同
あこあるわらは　明阿曰ひさかご目につくべきほご
　の童なり貞雄云
ますかげなし右四
つれなくいひてたしたる　貞雄云明阿本にいひてい
だしたる古寫本にいひくたしたる道麻呂本にいひ
けたしたるあり能思ふにすゝしの歌さま文のこと
はなごにては道麻呂本にいひけたしたるとあるぞ
かなへる則云消しの義なり
ながめする云々歌　貞雄云霖雨また詠のふたつのこ
ゝろにかけていへり
思ふこと云々歌　明阿曰こなたの願をそのまゝに成
就給はんことは神の御意にてもなりがたきことも
あらんずればせめてしばらくのほごの心をなくさ
むるやうに守らせ給へとねぎいのるさまなり
淺香のをしきはたち　明阿曰二十をはたちといふこ
と人の齢をかぞふるのみにはあらす光明后宮のよ
ませ給へる佛足石の讃歌に三十二相をみそちあま
りふたつのすがたとよませ給へり則數の事にても
ゝちなごもいへり

あざやか左五
まうちきんたち同
さいしもとゆひ同
まゐりすう　明阿曰居はすゑなればうとはたらけご
　もまたふにかよふこともあり用をもちゐもちうさ
　いふはもとよりなれごももちふといふいはれもあ
　り貞雄云
けふあし御らんせんとて　明阿曰今日馬の足なみ御
　覽じてえらせ給ふなり今も祭の試あるは競馬の習
　禮を足揃といふがごとし
手つがひ　明阿曰手番なり番にわかちて競馬あるな
　り
くはざのみこ　明阿曰冠者の御子なり
此十番の競馬　勝負のことしるせしおの〳〵同しか
　らすよくかへてかけりと明阿のいへりき
ものゝふしら　明阿曰風俗神樂催馬樂などの諸もの
　ゝふし博士心得たる者共をものゝふし等といふな
　り源氏物語松風巻に近衛司の名高き舎人ものゝふ
　し閑江入道也是軒集にものゝふしと云は近衛舎人
　のうち東遊に達したる者を物節と稱す

うまゆみ　明阿曰騎射和名抄
こまかた右七
たまをうちて遊ふ　明阿曰打毬なり樂にて打毬樂とて有り玉をうつことをまねぶなりきうちやうは毬杖なり今京の童のもて遊ふものにこの物あり俗にはぎてうといふなりてうはその杖なり今は心得たがひてぶり〳〵と云ものなり
こまかたまはせつゝ　明阿曰上に舍人ともこまかたわきて舞遊ふと有
うじかひのあづかり右八
ながもちのみからひつ　明阿曰長持御韓櫃はつねのよりはたゞのながくてあれば長持のからひつとはいへるなり今世の足長持といふ則是なり
おほうちき　明阿曰大袿は男女ともにきるものなり小うちきは女の衣也上にいへり
ひきいてもの右九
ないしれうなとも　明阿曰乃至の音語歟貞雄云
かはらけに歌をかく事右九
とうしのくら人左九
さいまつ　明阿曰續松たいまつついまつみなおなじおちくぼくものがたりにも清水詣の所にさいまつのすきかげにて車のうちみたること有り
垣下右十
左右大將とうにておはします左十
かざりうま右十一
埒にむきてうまの毛申給へり　明阿曰埒の方に向て馬の毛色申なり毛付の奏の類なりこの馬その奏のことばなり
とうよりはじめ右十一
かべじろ左十二
やまひだゝしく　明阿曰病のつのりて物氣などのたたりがましくなりしを云なり祟はたゝると訓てたたはしきともいへり病のおもたゝしきともいふなり貞雄云
さつきにもなりにけるを　貞雄云五月はことをなすに忌む月なり源氏物語玉葛卷にもこのことありしか
こしさし　明阿曰腰指は卷絹なり下部の者には是を給ふにやがて腰にかいさし入ればこの名有也
ためしにも云々歌　明阿曰この歌ほとゝきすにては

上下のことはその故なしおそらくはあやめくさなるべし人の引べきといひまた五月雨にあえなんといへるはこれ又長雨によせたり上の歌にも猶さみだれもときはなるべきこともいへりことに此歌次の詞にかけて根とうけたりかた〳〵あやめくさなるべし貞雄云在満本古寫本ともにあやめくさとあり明阿の考えたり

あふちの花右十四

橘の實に歌をかく左十四

たちばなのまちし云々歌 明阿曰古今集

さつきまつはなたちばなのかをかげばむかしの人の袖のかぞする

日さかり右十五

扇に歌をかく左十五

もえ松云々歌 明阿曰この上にえだしげみの歌また下の我たのむの歌ももえとかきたれどそれはもらぬもらずの誤なりまとゐするの歌もるともなけのと讀しうへはそのことあらはなりたゞこの歌のみさることの意とはみえすもゝえ松を誤りてもえ松とはかけるなりもゝえ松とは枝のしげくて百千の枝有を云なり萬葉集巻二人麻呂の長歌の中に百兄槻木虚知期知爾云々あれば是も百枝の意なり萠の意にてはあるべからす貞雄云古寫本及契沖本にももゝえ松とあなり

こち風の云々歌 明阿曰東風をこちかぜと訓しことこの前にみえす萬葉集には東風をあゆの風と訓り柿本集いぶかしきものなれどもさりながらふるきものなりその中に美濃國を題にてよめる物名の歌に

わたつみのおきにこちかぜはやからしかのこまだらに浪高くみゆ

すべてちといふは則風のことなりあらちといひちぎといふ類 貞雄云はやちといふはとき風のことゝいへり なれどもあかの水といふがごとくすぐにそれをは名にしてまた風をもそへいふなりあらしの風しぐれの雨といふがごとし 菅神のうたなりといへるこちふかは匂ひおこせよ梅の花あるじなきとて春なわすれそといふもあれば中頃よりこなたの名なるべし

もるともなげの松のかげかは 明阿曰古今集第……春

舟なみすべて 貞雄云舟竝總てなり今本のまゝにて明阿のくさ〳〵にいへるはたがへり古寫本にはふねなみすべてとあり

ひし　みづふぶき　明阿曰和名抄蔆子説文云蔆音陵秦謂之薢茩皆后二音楚謂之芰音岐字亦作芰和名比之芡爾雅注云芡音儉和名三豆布々木一名雞頭草其實似鳥頭故以名之江戸のあたりの人は鬼蓮といふ芙容に似て其葉甚大く刺あり其實くらふべし

やまもゝ　明阿曰和名抄楊梅爾雅注云楊梅和名夜末毛々狀如苺子赤色味甜酸可食之七巻食經云山櫻桃有二種黑櫻子和名同上味甜美可食矣

ひめもゝ　この名和名抄にみえず萬葉集より下の歌にも聞すたゞし萬葉集に毛桃と訓しは有これによて思ふに和名抄に李桃辨色立成云、、部波木毛々といへるは今世にいふすばいもゝなり是は毛のなくてその實つやゝかなるものなれば毛桃に對て姫桃とはいへるなるべしすべて姫なにといへるものゝ名は皆さるゆゑよりいふなり

胡瓶十七右

水にひろひたて　此下に御たいの前になだらかなる石かど有岩なとひろひたてたる中より河のわきたる瀧落したるなと云々有是同し語也思ふに拾ふ意にはあらで俗にひろけると云に同じくて下のひを半濁にみと云やうに云べきか又濁りて廣き意に云べきかと明阿のいへりき貞雄云

せいうたせ十七右

よびにやれ十八右

にほどりのほのかになく十八左

辨君　貞雄云たゞずみの朝臣なり

かくら　明阿曰夏神樂なり貫之集

河やしろしのにをりはへほす衣いかにほせばか七日ひざらん

行水のうへにいはへる河社いはなみたかくあらふなるかな

この歌によりて河社にて夏神樂するといふ事俊成卿の歌合の判にいへり六百番歌合顯昭か歌の陳云是は夏神樂といふ事なりその神樂には清き河に榊を立しのを棚にかきて神供をそなふ是を河社といふなり夏神樂の譜にみえたりと云々此事定家卿の河社追注といふものにくはしくみえたり

常はいとはしき女子の十九左

やみのよのにしき　明阿曰古今集

おく山に云々歌廿右

みかうのこ　明阿曰御神子の御歟といへり
さいばら　明阿曰催馬樂の事は三代實錄に始てみえたり
おほきみきまさば　明阿曰さいばら我家歌わいへんはとばりてふをもたれたるをおほきみきませむこにせんみさかなになによけんあはひさたをかかせよせん
此歌をとりてそのふしうちつきにて今の歌をうたはれしなり
いせのうみ　明阿曰同いせのうみの歌
いせのうみのきよきなきさのしほかひになのりそやつまんかいやひろはん玉やひろはん
あふ事の云々歌　明阿曰いせものがたり
神もみゝとく　明阿曰躬恒集
そこみえてながるゝ水のはやけさははらふことを神もきくらん
御さへ　明阿曰前栽の事歟または御對の音語にてたいの誤歟
なだらか廿二右
ひろひたて　明阿曰上の語におかしき胡瓶とも水にひろひたてなどしてすゝみあそび給ふと有
うちはへて云々歌廿一左
たいしがはら　明阿曰たいしは度子かはらは河原にて渡守河原のしといふ事なり度子は書紀
ぬるまざりけり歌廿二左
神だにものきゝいれ給はなん　明阿曰上のあてみやの歌の次の語にけふのみそぎは神もみゝとゞめなんとあるにむかへり
人長廿三左
とりものども　明阿曰神樂の採物なり
ひとりのみ云々歌　明阿曰花をゝりたきといふに居をそへたり
いづれのをりに云々歌　貞雄曰何の度なりこのこさは玉椿第二ゝゝにいへりき前に廿三左　いつれのたひかねたくおもほえぬ云々あり
うかれ女廿三左
みる人は云々歌　明阿曰萬葉
まどひつゝ云々歌　明阿曰古今
にしかはら　明阿曰桂川なり上にさかのかつらかはのほとり大將殿にてせられしこと有賀茂川を東川

といふによりてむかへて西川といふなり
けいめい　明阿曰經營を音便にかくいへりいとなみ
　とも訓り
いさゝかすうかまへて右廿六
かなかきわかよみ　明阿曰假名かき和歌讀かといへ
　り一本にてかきわかよみとあり
らうし右廿七
くちをあきておる同
あたらよく聞え給ふ君に左廿七
家童子左廿七
よところもしらで右廿八
いたづき　明阿曰勞なり貞雄云古今集
あそびめ左廿八
あそびわざうちして同
ようめい廿九右卅一左
まふけのきみ　明阿曰儲君にて皇太子の御事なり
しこぶちにふるめきたる箱　明阿曰醜物也今の俗に
　もこの語ありしこは物を罵語なりしこ郭公しこの
　ますらをおにのしこくさなどの類をいふ神代紀に
　醜女をしこめと訓り貞雄云ことのもとはこのいへ

るごとくながらしこふちと云は然ならずたゞした
ゝかなるをいへり俗言のあつぶてきなるといふに
　かよへり
ちうし右廿九
たかき山とのみたのみ　貞雄云仰き見るとのよそへ
　ことなるべし當時の俗言にや
いとなけれと左廿九
ふと同
せうもち廿七右三十右
みさい左三十
たんざく三十一右
くれなゐのなみだ　明阿曰紅涙は則血の涙なり
螢を袋に入　明阿曰學の窓に螢を集は西土の故事な
　り雪をまろかしけんもまた同じ螢雪の功勞なども
　いへり
日なごしろくなれば左卅一
こくはくいはゝれ給ふ師　明阿曰いかばかり崇敬て
　祭典にあひ給ふ先聖先師をさして祈願ふ詞なり
院より出たる人　明阿曰勸學院の學生の及第出身せ
　し人の外へ出たるを云　貞雄云院より出たる人の

下へ丹後守になれるが出立んとてのもじ補べし下
卅四右にたこのかみあるじゝたりとあるにて思ふ
べし
すゝふぬる歟　貞雄云進凉の二にかけて云なるべし
ぬのかたひら左卅三
くりや女くろき假いひげにいれてさはやけのしるし
てもてきたるに改むべし今本たがへり明阿本もよろ
しからす右卅四
おほいごの右卅四
あさめ　くりやめ同
かしはて庭のみたさう右卅四
そりはし　うきはし左卅四
けづりさほ左卅四
さう〳〵しき左卅五
ふとかたひら同
けもなく　貞雄云人氣もなくなり
ゆるさいで左卅五
かうふりたゝなはり　明阿曰禮記
はなやく人右卅七
八ゐんのふみつくる　明阿曰八韵の詩作なり八句四
韵なるべし
家の子三十七左
さうろ　さう臺同
こますゞ右卅八
なにまろといふ學生右卅九
けたうの大辨　貞雄云遣唐大辨なり
つめをはじき左四十
人のため　明阿曰爲人とかきてはひとゝなりと訓べ
きを誤りてひとのためと訓しにあらん
大學勸學院云々右四十一
家にくらあるもの　明阿曰くらはろうの誤にて家に
有功勞を云にやといへり貞雄云くらはくうの誤り
なりくうは功の字音なり若紫卷にあはれにくうづ
きとあるにて思へ
御琴にあはせてます右四十二　明阿曰ますは御座なり
あらかねのつち　明阿曰このことば萬葉集にはみえ
す新撰萬葉に初てみえたり
きゝのいた戸はさゝてのみなん　貞雄云古今集戀四
に
君やこん我やゆかんのいさよひにまきのいたども

さゝすねにけり

立かへりなく 四十四右

いくたひか云々歌　貞雄云

いとせめてこひしきときはぬはたまの夜のころもをかへしてぞぬる

いらへ　明阿曰このものがたりにこのことは多くかけるは後人のましるしに傍にしるしたるがあやまりうつしたるなりといへり貞雄云げにこのいへるごとくなるべけれどまたさもみえぬ所々あれは能考べし

りうたんの花　明阿曰龍膽　古今集物名歌りうたんのはな

わかやとに花ふみしたくとりうたんのはなけれはやこゝにしもくる

かうかい 四十六右　明阿曰髪かきなり和名抄

いくら 同

あかほとけ 同

上衆の所 四十七左

庚申し給ふ 同

いしはじき 同

てゝき　明阿曰この童女名なり爺君かすべてわらはの名にあこきまゝきいぬきなどつくること此頃いと多し

菊　宴

すゞろ 一左

うふ大将のおとゞなど　貞雄云今本にこふ大将とあり明阿本にはかう大将とかけり思ふにうふは右府なるへけれど此書にかくかける例なけれはひがことなりこふは左字の誤にて左大将なるべしかゝればなどのことは用なしこゝは左大将のおとゝなんものし給へりなるべし ものしはまゐりの誤にもあるべし

つましう 二右

しめやか 同

はかりこと 左同

ひきでもの 三左　貞雄云こゝのをはりにひき出ものゝ品みえたり

思ひそめまたしほと　貞雄云またしきほとにや

手車のせんし 六右

ことつけて　貞雄云事著てなりことを添ていふことなり

さう〳〵し左六
なまおうな同
さかし右七
かたは同
たび〳〵左七
さいたち　貞雄云前立なりきさいはしたしくかよへり
うしろめたく左七
あえもの左七
いせの君　貞雄云辨君の誤なり辨の字なたらかに辨とかけるをいせと讀たかひて伊勢とかけるなり
めくらしよみ右八
あそひもの左八
さいはら同さいはらの左十　貞雄云この二所はみな後人の傍書したるかまきれいりしなるべし
玉のうてな引歌十二右
むくいぬのあいなたのみ同
うるはしき　貞雄云このふみには多く麗の意にいへり
さしみ　明阿曰年忌とて生年によりて歳次の支干によりて忌事あり此事人知らす又異説もありといへり貞雄云さしみは魚食ふことを忌たるを落る由にておさしいみのつゝめたるなりと師はいはれき契沖も精進のゝち魚くひそむる事なりといへり清玉かつま第三に委にみえたり
みやあこいへあこ　明阿曰みな童子の幼名なり阿児の意にて吾子としたしむ意より名によべりとみゆ
からまひ　明阿曰唐舞にて倭舞にむかひて云るにやといへり貞雄云後に此皇子たち舞給ふはらくそん陵王を舞給へり是等をから舞といふこと聞えず一本にあらしかし舞をやさあるにしたかふへし
思ひみそひ右十五
ねんりのちぎり左十五
いひかけて同
ねきことを云々歌　明阿曰古今集
さふるひとの云々歌　明阿曰萬葉集
さかきはの云々歌　明阿曰一本にかものやしろも同じ心に　是までを歌としたるは誤にてやしろもの下に文字のおちたるなり神も同し云々はことばなりといへり貞雄云已みし古本にはえこそゆるさし

おなし心にやとゝあり是なるべし
かく聞えたり　明阿曰この下に歌おちたりといへり
けにしかなり貞雄かみし古本に
うかりける年さへけふにとぢむればいつを思ひの
はてといふべき
御返りなしとあり
うちかうふり左十八
こういつかひてこと右十九
からあやの屛風左十九
こかねの花うてり右廿
ひらきぬ　貞雄云平絹なり
玉ひかりかゝやく左廿
ちゝなどのくちあけさせなとしけるは　明阿曰乳な
どの口開させなどなりといへり
あらしと思ふものを　貞雄云あらしのうへにまたの
もしをそへてみるべし
するのよつき給ふ　貞雄云末世繼給ふなりのこりの
よはひくはゝり給ふとなり
さうやくの藏人右廿七
いたちのまなき　明阿曰ゐたち居起の誤りなりといへ
り貞雄云然にはあらじいたち鼬なり下の春宮の御
ことはにねつみの心ちもすへかなれとあるにてお
もへこは當時のたとへことなりこをいひつゞけし
は
つれなき人右廿七
のちはなにせん歌引　明阿曰拾遺集戀一戀しなん後は
なにせんいけるひのためこそ人はみまくほしけれ
こかねの山のつくりものいとありがたくて　貞雄云
今本にこかねの山いき物などありてとあるはひが
ことなるべし
御車どもかすみのことく引つゝけ左廿九
馬をならべ手づなをかはし右卅
かたきゝ　明阿曰片聞歟といへり貞雄云古本にかた
きとあるぞ然るべし
いつこよりこしきてうよりや中將いさやこひてう山
まても右卅
いまはのよなる左卅
つねにかわしきのまへに左卅
いつこにか云々歌　明阿曰古今集雜上　讀人知らす
うれしきをなにかつゝまん唐衣たもとゆたかにた

てさいはましを

たつこさうきかけの心ち卌一右

かすかくら卌二右

くれなゐのなみた云々歌　明阿曰唐のふみに泣血紅

涙なさ多くいへり

おほそらさへこそ　貞雄云引歌なるべし可考

山にもみちぬる心ち　貞雄云引歌可考

さきなりふたつなし　貞雄云時なりは其時にて時め

くを云なるべし

云まさくる右卌四

さうてんの法　明阿曰聖天法なり

あまこもり卌六左

まゝ卌七左　貞雄云乳母のことをいへり自是前にまさ

こ君めのさにいふ云々とあるにて思ふべしまゝは

繼にて繼の古言なり

百五十石ばかりの船四十一右

おほきなるかうらい同

ほてにあげ　貞雄云帆手なり萬葉

かうふり柳　拾遺集第九雜下　かうふり柳をみて

仲文

河柳いさはみさりにあるものをいづれかあけの衣

なるらん

或人云津國冠里にある柳なりさいへるはいふかし

この歌惠慶法師の家集にも入て起句をあをやきの

とありさ明阿はいへり

なかす　明阿曰攝津國河邊郡淀川尻に有　拾遺集戀

一讀人不知

人知れすおつるなみたは津のくにのなかすさみえ

て袖そくちぬ

同戀五よみ人不知

こひわひぬかなしきこさもなくさめんいつれなか

すのはまべなるらん

なけきの花云々歌　明阿曰古今集

なけきにはいかなる花の咲ことゝみになりてこそ

しるべかりけれ

ふなうた四十三左

大空にさふ車云々歌　あてみやの歌なり貞雄云あて

みやはことにらう〳〵しき人にいへるにこの故事

をよめるはいとこは〳〵しき心ならすや故博士の

作りしを思へ

みやこいて丶云々歌　明阿曰古今集春上そせい法師
みわたせはやなきさくらをこきませてみやこそ春のにしきなりける
もろこしも云々歌引
ひちかさ雨　明阿曰範兼朝臣の童蒙抄云ひちかさ雨とはにはかに雨のふりて袖をかつくをいふと云傳たり
いもかゝとゆきすきかてにひちかさの雨もならなんあまかくれせん
とあるは萬葉集第十一一卅妹門去過不勝都久方乃雨毛零奴可其乎因將爲とあるをさいはら歌妹か門には
いもかかとやせなかゝとゆきすきかねてやわかゆかはひちかさのあめもやふらなんしでたをさあまやとりかさやとりやとりてまからんしでたをさ
とあるも萬葉の歌をうたひ訛れるなりそれをまた童蒙抄なとにもおなしく誤れり後にはひちかさ雨といふことは一種出きて臂をさしかつきてにはかなる雨をよくることとくはなりたるなり

神といふ神ほとけといふほとけ四十九右
戀の山云々歌五十一右五十二左
まきゑのおきくちの筥五十五左
あらじ五十八右
よはさかさまに五十八右
雲のうへに云々歌　明阿曰是は魂よはひの事をいへり禮記曲禮下云崩曰天王崩復曰天王復矣註曰始死時呼魂辭也疏曰復招魂復魄也夫精氣爲魂身形爲魄若命至終畢焉必是精氣離形而臣子罔極之至猶望復生故使人升屋北面招呼死者之魂令還復身中故曰復也若漫招呼則無指的故男子呼名婦人呼字令魂識知其名字而還云々此意にてこひかへせともその命はすでに絶ぬれは魂のかへり來らす生延すと云也人の死して魂の天にのほりて星となれるとは
秋風はたさむく六十右
かたは人六十三右
山づと六十一右
すかずや六十三右
おなじ山路同引歌
をはな色のこはいひ　明阿曰和名抄史記云廉頗强飯

斗酒食肉十斤注飯符萬反亦作餅飾強飯和名古八伊比抜に尾花色強飯の事恵命院僧正の海人藻芥云八月朔日小花粥内裏仙洞以下令用給良薬云々彼粥調法薄を黒焼にして粥に入合る也とみえしものなるべし御厨司所預人にも尋ねしに此外所見なきよし承りぬ貞雄云

うしむしみなり六十四右　貞雄云有心者也といふ義なり心はもしのごとくなるべし

賀注書入云初秋巻八十七左かざのこれうしむの げうにてはだんうるせき人なり

もの〻心も引歌六十四左

かち水をすゞりの水にしてかく事六十四左又三十五右 にもかう水とあり

あて宮

このみこと　貞雄云此御事なり則あてみやをさしていへり

きうや〻右二

おもてぶせ人わらはへ同

うちをもつべき　貞雄云保氏也其氏を保べき人からなりといへり

ておりの絹右三

まき絵のおきくちの箱同

からのあはせたきもの左三

すみとり同

沈のおきくちの箱右四

きやうさくなるえうのものなり　明阿曰景跡也えうはやうの誤歟

ひとおもても知らず　貞雄云他面も不知なり病甚しくて人をみわかぬをいへり

くろむらさき右五

くだらあゐ　明阿曰百濟藍は即異藍也和名抄

ものとひ　ものとはせつれば女の靈となひ云つる云々貞雄云ものとひは物問にて卜相ぬることをいへり卜相のことを卜問ともいへり

およひ　明阿曰およひをもさおよひと書て小指の事と思へるは誤也和名抄

あそびがたき左十

らうたき左十一

初庚申同

金のこきにこかねのけうち　明阿曰金鑑のちやうにこがねして筋つけしなり髮の毛のごとく細くつく

れば毛とはいへるなり是を今の世には毛彫なとい
へりこの次にもからの錦のいときよらなる沉木の十三右
箱に目かねのすぢやり云々といへるもこの毛打た
るといふに同し
まゆみの紫　明阿曰是檀紙にてこの次にもみちのく
に紙あを紙とつゞけたれはみな同物なり
これはたゝのそ命なり十二左　貞雄云次にあてみやよ
り御かへりのことばにこのそまうのおろしの多く
云々あればはゝそ命はゝてみやうと訓べし次のそまうはみやうの誤りとすべし
則奏冥の字音にて庚辛の備物をいふなるべし
あないざとや十四左
手向の具をとぢる十五右の歌二首可引
夏犬なればあつまりてかまうせに云々十五左
みちのくにかみあをかみ　貞雄云前にもまゆみのか
みあをかみとみえたり明阿は同物にやといへれど
能思ふに同物ならんにはかく重ねいふべき由なし
あをは院號などにやあらん可考
なみたをうみとたゝへ十六左
なけきを山とおほして同
はなつみ　明阿曰古今集　やよひのつもこりの日花

・つみよりかへりける女どもをみてよめる
みつね　とゝむへきものとはなしにはかなくもち
る花ごとにたぐふこゝろか
つれ〲十九左
いひでゝも云々歌　明阿曰械をよめりたゞひともい
へり和名抄
おしわくみてゆしてすきいれ　明阿曰ふみをまろめ
て湯にて飲給ひしなるべし物食ふことをすくとい
へりすき米のおろしすこし給はせよなといへる詞
もあり貞雄云おしわくみは押曲組也明阿はわぐみ
は棺也といへり
えにの方廿二左
めがね廿二左　明阿曰己が妻とすべきと思ひおきし人
をいふ坊がね聟がねなどの類ひなり
うれへふみ　明阿曰愁状歟またれはたの誤にて訴状
にや
ふみはさみ廿二左
いひかひをさくにとり廿三右　七飯　匆
ゆひくら　明阿曰これは乘鞍にもあらで物など負す

る爲の鞍なるへし

年月も云々 歟 明阿曰拾遺集戀三

衣たになかに有しはうとかりきあはぬよをさへへ

たてつるかな

後撰集

つらからぬ中にもあるこそうとしといへへたては

てゝし衣にやはあらぬ

御うぶやのまうけし給ふおとなわらはみなしろきそ

うぞくをし云々 廿五

こきいれ 貞雄云みたしいれてなり古言にはこきれ

といへり萬葉集第八に

引攀而折者可落梅花

袖爾古寸入津染者雖染

又第十九に

藤浪乃花奈都可之美引攀而

袖爾古伎礼都染婆染等母

などゝかり猶亂るゝと云理をいはば第十八に

たゝしかす君がくいていふはりえにはたゝ古伎し

きでつきてかよはん

又第二十に

あきかぜのふき古きしけるはなのにはきよき月夜

にみれどあかぬかも

なとあるもみな亂の意なるをや

すき米のおろし 明阿曰物喰ふことをすきといふな

りこれはその産給ひしあて宮の御膳米のあまりす

こし給へそれを人々に給ひてあやかり物にせさせ

ばやとなり次におはいどのゝ姫君のゝりての給へ

る詞にもたれかその姫のはみのこしはほしきよろ

づのあつめ子をうみて宮の観子といへばまことか

とてもてあがめ給ふなと局のこぼれぬはかりくせ

ものゝしりて云々と有にむかへ知べし已に上にも

ふみをもひきくおしわくみて湯してすきいれてと

もいへり

夏ころもはほど多くすきて 貞雄云明阿本に夏より

はほど多に改しはたがへり是は多くすきての緣語

にいへるにて夏衣のうすく透るを食るにかけてい

へり

よろづのあつめ子 明阿曰あて宮いまだ春宮へまゐ

り給はぬほどに多くのけさう人有しかはその人た

ちの子を生給へりと罵言ての給へるなり其多くの

人々のあつめし子を春宮のなりといへば人もあかめ給ふさにくさけにの給へるなりすへて狂言にとりなしてかけり

くせち　明阿は口舌といへれど能思ふに口説なるべし

なゝくさの粥廿八左

上﨟　中﨟　下﨟同

うちきき廿九右

初　秋

ふずく一左　明阿曰和名抄云辨色立成云粉粥〇詿以米爲之今按粉粥則粉熟也延喜大膳式に古製はみえたり中頃のことは源中最秘抄にみえまた近世の製はそれともことなり是は別に考ありことなかけれは省つ

すまひ　明阿曰字典云角觝戲名觝通作抵六國時所造便兩々相當角力相抵觸〇漢武帝元封三年作角抵戲〇史記李斯傳作觳抵張騫傳作角氐　和名抄

ようめう　明阿曰交名の事にや交名とはその參りくる人々の名簿をしるせるものなり東鑑なとの頃にもこのことみえたり貞雄云ようめうはやうめうの誤りなるべし祭使卷廿九右にそのようめいをやはくらにはつまん又卅一左　ようめいさえはありかたしやなと云々みえたりこゝには何の考なし思ふにこれもやうめいの誤りなるべし祭使卷の始なるはなかたゝの名高きよしを云ひ後なるはするふさのうへを云にて彼揚名顯親の義にいへりこれなるは強力の揚名をいふにて交名のことにはあらざるべし

頭注云此卷廿六左たゞこのよにこくはくのようめうらうある人のなかにもすぐれたる人の云々あるにてもようめうはやうめうの誤りなるを思へ

ほて　明阿曰江家次第卷八相撲節條云次相撲一番白注云最手與助手取之若有腋大可決之者最手獨陣退入大將以爪注交名勝者上〇裏書云助手又曰腋也最手掖手皆近衞府各補其人也相撲人者皆近衞之類也

仁壽殿　明阿曰江家次第相撲節條云仁壽殿東庭相撲の事委也そこの裏書云南殿無出御之時於仁壽殿有召合拔出之義

おなじくは出たゝん　明阿曰これはその節會のまへに內取の事どもありて拔出となして當日に出立さばやとなり江家次第にその事のつき〳〵はみえた

たりき
御うしろみ左三　貞雄云
らうある女左三
こゝろゆき左三
しゝう殿　貞雄云仁壽殿也明阿の紫宸殿なりといへ
るはひがことなり
らうある四右四左
けんにあること左四
たい〳〵しき右五
すきごと右五
たゞさか右五
さほき心右五
いで右五
いづら右五
むつかしう左五
おもと左五
しろかねのすき箱六右九十四左
しきもの右六
せんかうのむしはみなとしたるにあやけつり出しな
どしたるにからくさ鳥などゑりすかしてあるにいれ

て右六　貞雄云このつゝけさま聞えかたし強言して云
はせんかうのむしはみたるをからくさ鳥なとにゑ
りすかしてあやのしきものなとしたるにいれてな
どありしを誤りしならん
手詞右六
うるせき右六
手なごはしりかき六右廿五右廿五左
をさ〳〵右八
上しゆくるしき手右八
ひはは女のひくにゝくげなるすかたの由左八にいへり
あらす左八
らうし左八
心ばへ左八
おいのよ右九
うまぶね　明阿曰和名抄唐韻云槽音曹和名與舟同馬槽也また
酒槽を佐賀布祢と訓したり俗解をは由布祢と訓る
も物入る故にいへれど形は各異なり大和物語下に
もたゞのこりたるものは馬船のみなんありける云
々又蜻蛉日記にすけうまふねしはしとかりけるを
れいのふみのはしにすけのきみにことならすはう

まふねもなしと聞えさせ給へとありかへりことにもうまふねはたてたる所有ておほくすなれば給はらんにわづらはしさかなんともしたれは云々とありこれは大和物語にあることをとりてかゝれたるとみゆ雅亮かな装束抄ないらんのいへたいきやうの所にそんざのうしかひむねときやうようありうしふねとてぬのにてうまふねのやうにしておくなり云々あれば牛馬の食物をいるゝ布の袋なりものをもりのすればふねといへども湯あむするものにはあらす

はりかは右九

御たらし右九

まてしばし左九

けうさめ左九

らうある兵衛のそう左九

鷹屋左九

をいらか十右廿五右

いをごめ　明阿曰みさごのくはへたる魚ながらに射落し給へるなり清少納言か記にむくろごめにといひしことあり

そのこま　明阿曰催馬樂律歌我馬　いでわがこまははやくゆきませまつち山はれ二段つちゝ山まつらん人をゆきてあはれゆきてはやみん是は萬葉集巻十二に

きしろい右十二

うら手　明阿曰寛平菊合に右を占手と書たりうらては左を表手として右を裏てとなす也貞觀儀式に

ろなう　貞雄云勿論なり又廿八左

あつけ左十五

なつみつの引歌左十五

あひぬす人右十六　明阿曰相盗人の意にてたがひにたこなることをいふなり

しりてまごはん　明阿曰古今集俳諧歌興風
なにかそのなのたつことのをしからんしりてまごふはわれひとりかは

女になしてもたらまほし右十六

おもと左十六

ふみはしりかき右十七

あしこ　明阿曰あしくの意なり

まつはりなき左十七

天子そらこゝせす左十八
あちきなき左十九
はた左廿
るいたいにもしてしかな　貞雄云累代のためしにも
してしかなとなり
としのうちの節會云々右廿一　貞雄云枕册子源氏物語
なとに節會のらうあるとふゝた秋春のうつりゆく
けちめのらうあることをいへる起原といふべし
なまめく右廿一
華うちし右廿一
せくなどきこしめす左廿一
花橘柑子右廿二
めづらしく云々左廿二　貞雄云此御歌もて巻號とせし
なり
みすのうちながら左廿三
そよと聞ゆる風左廿三
おのれつらくて右廿四
しづ心なき右廿五
あはれたる右廿五
かたは左廿五

たはふれ心左廿五
ひとりご　明阿曰いせものがたりにもひとつごにさ
へありければいとをしくし給ひけり云々このひと
つごといへるはいかゞあらんひとりと書るりもじ
のつに誤れる歟眞名本には一子蘭剐作許蘭客とあ
りてかなもひとりごとつけたるにてみるべし一子
と書たるより讀誤りしなり萬葉集第六市原王悲
獨子歌にも不言問木尙昧高晃有云乎直獨子備有之
苦者これらひとりごといふ徵なり
眼いつゝむつほしき左廿六
つくりあはせ右廿七
めやすく左廿八
ふさ右廿九
こつくしたる御けさうをし左廿九
色ゆるされ給へる左廿九
さうやく　明阿曰次第を書たるものに役送といふ事
有そのことのとりはからひして調度などもちはこ
ぶ事する人を云或は雜役にてもあるべし
貞雄云送役ならんにはそうやくと書べし雜役なら
んにはざふやくと書べしこゝはざふやくの誤りな

るべき
頭注云歲開上左十七にさうやくをもろともにと思ふ給へてなんとみえしを明阿の送役なりと云ひしはいか丶雜役なり彼所もさふやくに改むべし季鷹の帚木卷のさうやくとひとつことはなりと云ひしはいみしきひかことなり帚木卷なるは雜藥とすべし則これをもさふやくに改むたゞし舊のま丶にさうやくとせは草藥なるへき歟

おりと丶のへ三十左

ひさご花　明阿曰江家次第第八相撲召仰の所に出たり次一番自註にいはく左右先出著葵花取劒衣置北圓座進立櫻樹下次右出着瓠華次々番負方先進之云々勝方葵瓢等華並劒衣等稱肖物今具於次番葵瓢花等落時雖勝方風吹入借下者不取之不吹入時相撲長一人進取之最手不依前番勝付花云々この裏書云葵瓢華造花也とみえたりこれはみな中頃よりのこと丶みゆ書紀第廿一崇俊卷に聖德太子の束髮於額をヒサコバナニシテと訓しによりて古へもとつく所をしれり別考ありこゝとなかければこ丶にもらしつ

うちとにめをくばり右卅二

目とゞめ耳とゞめ三十二左

心みとき三十三右

まかきよりな丶むらにほふ三十三右

らうのふかき三十三左

そらおぼえ右卅四

いはひそし　明阿曰そは殺字をよめ甚しき意に用ひたり西土の書に多く笑殺愁殺などみえて去聲としてサイの音に讀意におなじ又そぐ意ともなれども爰にはかなはす

すこしみところきゝところある右卅六

き丶みるもの右卅六

わいても左卅六

かはらけのすまひのせち左卅六

かくしあまるけしき左卅六

かたは右卅七

いはれそめ左卅七

むご左卅八

こ丶ろこはき人左卅九

たましひをかへ右四十

あなずゑ右四十

ようまれあしうまれ四十左
かたねばかりはのこり四十左
たい〳〵しう四十左
六十帖四十一右　貞雄云琴號也下五十六の右にすゝしに給ひつ
る琴云々有にて思へ
きしろひたる人四十一左
すまうまじき四十一左
あやにくもの四十一左
ようなき　明阿曰益なきなれはやうなきとかくべし
ようにはあらす
あはせにあたならぬ人四十二左
なげし四十二左
あへにたる四十二左
よきそらこと人四十三右
よのにしき四十三右
御つしはあり四十三左
秋風はすゝしく吹を引歌可考四十三左
野にも山にも引歌可考四十四右
あらし引歌四十四右
まかせ引歌四十四右

みなこからし引歌四十五右
すき四十五右
そよや四十五右
そらめにおはす四十五左
世中にわびしきものはひとりずみするにまさるもの
なかめり四十五左
ゆふてもたゆく引歌四十五左
いとなむ四十六右
おもと四十六左
をきの下庵云々四十六左
いさやそよと云々四十六左
にげぬらん四十七左
あとをたちてにげかくるゝ四十七左
あいなう四十七左
はたやがて四十七左
けさう四十八右
かれはたそ四十八右
いとよくにくめり四十八右
せめそせさせ四十八右　明阿曰責殺とかくべし源氏にもい
ひそし給ふなどもおりそはそぎといふに同じ

こうじにたり 四十八右
かうざく 四十八左
すべなきこゝち 四十九左
みだりこゝちものにゝすなやまし 五十右
たい〳〵しき　明阿曰ものゝくま〳〵しくある時かはゝかる意のある時に身をしりぞかまほしく思ふ意の有なり義をもて退字をかけるもかなへるにたり貞雄云
かけにはづばかり 五十一右
なまみるのいしかひつきながら有を　明阿曰大和物語上巻に故右京のかみ宗于のきみなりいつへきほとにわかみのえなりいてぬことを思ひ給ひけるころほひ亭子のみかどにきのくにより石つきたるみるをなん奉りけるを題にて人々歌よみけるに右京大輔　おきつ風ふけひのうらにたつなみのなごりにさへやわれはしづまん
かたち人 五十一右
らう〳〵し 五十二左
けちするをたぶ 五十三右
こよなく 五十三左
草笛 五十四右
かくれあそび 五十四右
せいひん　明阿曰琴號なり下にせいひともみえたり
下 七十一左 になかたゝに給ひつるせいひの御琴を云々
いひごと 五十六右
ほうらいのふしやく　あくまの國のうさんげ 五十六右
になきつかひこのみ 五十七右
えうする　明阿曰要にてもとむる意なり
いのちをゝしむくす 五十八右
うつしつたへる 六十右
たましひしづまらす 六十左
はひのり 六十一右
さう〳〵し 六十一右
すゞろ 六十三右 六十八左
よしある御衣奉りみところあらん御かたちみ出て 六十三右
なましめり 六十三左
さうやく 六十四右
よづま 六十四左

つるふち　明阿曰ふちかたち蔓のごとくつらなりたるをいへり後のものなれど散木集第十物名の歌につるふちのこま　さき出るふちのこまつにかゝらすはいかてちさせのほどをすぎまし

今世には鶴駮とて鶴の舞たる形に似たれはいふとて鮑駮とさへいふなも出來しなりさはいふまじきにこそ

かしづきもの六十七右

ふるめきのぞう七十右

さとすがたもひきかへす七十一右

みかいもと七十一右

かざとして引歌七十一左

ふるき人の前に物語するやうにやあらん七十一左

人たがへ七十二右

かきなすことの引歌七十三右

君がつらさ引歌七十三右

ちりゐにたり　明阿曰琴もひかで手もふるしとしもなければいつしかちり居たるなめりといふなり枕のちりはらはぬ床のちりなども多くいへり

みちりたに云々歌　貞雄云水守なるべし

なんやういしもの琴七十四右

しやうずのですの手とも　明阿曰上手の傳受の手ごともなり

ゑんの松原　明阿曰宴松原拾芥抄云匡遠本宜秋門北掃守寮西近衛南朱雀西豔三代實録仁和三年八月十七日戊午今夜武德殿東縁松原西有美婦人三人向東歩行有男在松樹下云々江談抄著聞集にも此事をいせたり榮花物語にゑんのまつはらにて　あはれにも今はかきりと思ひしをまためくりあふゑんの松原

わくことにおほえ七十五右 遲如

このめくたち七十七左

このめいかてたちなりける　明阿曰いかてのいかは衍字にててはくの誤なるべしさは上のこのめくたちと同語なるへしさてこのめくたちは胡婦行なとと云曲調歟

あしはらに引歌七十九右

いざやさらば八十一右

おぼめく八十一左

かごさばかり 八十三右

かさてしは 八十四左

そゞろ 八十六右

おほそう 八十六右

出はしり 八十六右

今めきらうあらんもの 八十七左

たうばり 八十八右

うしろみ 八十八右

やかた 八十八右

けしうあらじ 八十八左

たちはしり 八十九右

多くの螢をさらへて胡服（うへのきぬ）の袖につゝみて　明阿曰袖に螢をつゝみしこと後にも猶多し大和物語にも童女のかさみの袖につゝみしこと有また螢の光にて人をみしことは伊勢物語に

胡服衣服令に禮服と胡服と有こゝはたゞ衣袍の意にてかければうへのきぬと訓べしこは〳〵しく音讀にすべからざる歟

しいたしたるざえ 九十一右

はた 九十一右

まれにあふよは　明阿曰ひこほしのまれにあふよのとこなつはうちはらへどもつゆけかりけり

ふたう 九十二右又左

まき繪のみそひつ 九十二左又九十四右

かうざく 九十三右

らうをいれかたひらにし　明阿曰綠松をろうそうとよみたればこゝも綠にてみどり色歟また羅のことにや

きのみとりのそらのかいふの○（イニナシ）もんを　明阿曰誤りあるべし

しろかねのたかつき 九十五右

かねのぬりもの 九十五左

すゑひたひ　さいしもとゆひ

宇保津物語二阿鈔四

田鶴群鳥

けふりのたゝへ一左引歌
もときしわれそ二右
よろしかるべくははやせさせん　明阿曰はやははやくの意なり一本によろしかるべきはやとあるははやは助語にて上につけて讀なり
おはしますと　明阿曰おはしまさふずの意なりさふの約すなれはなり
あやひともして　明阿曰文例によればひは錦なるべしあやにしきごもして飾なり一本にあや人とかけるは誤なり
こけたち　明阿曰兒等にや又下の文もて思ふにみこたちにや　貞雄云道麻呂本及古寫本にむこ君たちとみえたり
つくばねはかけあれども　明阿曰古今集　つくはねのこのもかのもにかげはあれどきみがみかげにますかげはなし
みねたかみ云々　明阿曰今もたにゝあるときくは上のうたに峯までかゝるしらくもといふにこたへていへるなり　巻に　月にだによらすなりにししらくものたにゝとしふといふはまことかといへるも同し意なり
むねけ　明阿曰胸氣なりむねのいたむやまひなり足疾をはあしけともいへり
あやにしきへいれ　明阿曰あやにしきのふくろへいれにや外にもかくいふこと多くみゆ落たるなるへし又へいれは下へつらねてへいれ浮文綾のうすものゝことにやへは中重（なかへ）とて羅のかさねの間へいろをはさむをいへり
からもの右十二
ふようの人　明阿曰不用の人なり官仕も辭て閑散の人となりしとなり
をのこのやもめ　明阿曰和名抄
かたき有と申によりて　明阿曰文官になりぬれば劒を帶さるによりて敵有人なればさる心かけの有ぬべきとて武官をかけさせられて少將をかけたるなり

すさい　明阿曰秀才なり
しきのことを　明阿曰史記の事を秀才の學生に尋らるゝなりつぎのしきのかうしも同じ
せいとのかた左廿
かみそり　明阿曰髮剃刀のことふるくよめり
玉ひかりかゝやく右廿二
ふむやほとり左廿二
わりごすみもの右廿四
十九才　明阿曰十九は秀の誤にて秀才なり

藏開

裝束きよらにせす云々
女おきな　明阿曰女はおうなにて嫗を和名抄にもおむなとよめり老女のことをいへり貞雄云
こゝらの人のかはねを　季鷹曰かはねをゝ句にして上へかへして解すへき歟しからすは語を脱せるなるべし
そのこをえまちえ給はて　明阿曰そのこに二の意有べし其子といふと其期といふといつれにもあるべし貞雄云彼子なることあかきをや
きもこゝろさかえ左二
みよはひの使右三
かはら人　さと人右三
こたてをぬきわり左五
いまひとへあせして錠あり右六
おして右六
ちす左六
つゝくにたにつみ　季鷹云ゆひつくえにつみの誤りなるべし　貞雄云古寫本にからくみのひもしてゆひ〳〵つくえにふさにつみてありとみえたり
ついひち　明阿曰泥をひちとよめりそれをつきかためてつくる故の名なり築地といへるは俗言なり
文ともゝやうあるはとり出てみ給ふ　明阿曰やうは筬をかくよめり多くの文ごものうちにやく有物をのみゝ給ふなり用要なと云意にみるはわろし
家つくりてきたりゑる　明阿曰ゑるはゐるの誤なるべし是も本は居と有しにやをると讀へきを誤りてゐるとよみしを又うつし誤たるなるべし
こゑむ　季鷹云こゑむはこをにごりて後院にや脱履の後すみ給ん御料の院といふにそあへからん
ふところ　明阿曰文所也學文所をいふべし

かのしせの　明阿曰是始祖にてせはその誤なり
あへもの　貞雄云背物なりあえものと改むへし
御くしはようしかけたることして　明阿曰御髪のひろかりたるがわさとよくしかけたるかことくなみよくかゝりたるなりやうと書たるは誤りなり
御でうごゝもしろかねにしかへして　明阿曰常にはこかねからかね玉などにてかされるを御うぶやのまうけゆゑ白をもううる時なれば銀にしなほせるといふことなり
ゆみひきつゝ　明阿曰鳴弦也
みゝはさみ右十一
しうとく左十一
こめき　明阿曰今昔物語に女子めきてとある其略語なりこめかしくも同し互古なと云意にみたるは字音なればあたらす
ものはたこもれりける所　明阿曰みちのくのあだちがはらのくろつかにおにこもれりといふはまことさかなごもよみたり鬼をはすくにものともよみたれはその意にもいはるへき歟　貞雄云このいへること心得がたし

のちのもの左十一
こめまひ左十一
萬歳樂は呆してこと　明阿曰この樂曲はまひおほせてこそよからめなかばにてはあしからんとなり
なきてを出し　明阿曰世になきめつらしき舞手を出し給ひなり下冊四の左にも
おひつるのもの右十三
みくるしのかたつふり右十三
しものなるもの　明阿曰下のはかまをひとつまいらせよとの給ふなり貞雄云
みそかけ右十三
くひもゐぬべきほど　明阿曰うまれ兒の五十日なとすくるほどにはかしらのゐかたまれるを今俗にもゐりのすはるといふなり
はうしやうといふ手を左十四
ころもゝきあへ給はす　明阿曰衣不敢着の意なり昔紀神代巻に不敢來をエコジと訓るかことし意きて衣を着ることもえし給はぬなり
おはしまさう　明阿曰きうの約すなれはおはしますををのへたるなり源氏のものがたりにはおはしまさ

うすと有所もあり
うちそはめてさし入　明阿曰冠をうちかたふけてきたるなり
まひろげ　明阿曰衣もんをつくろはでとりひろけたるさまにて來られしなり貞雄云眞廣けなるべし
いしたゞみ　明阿曰石疊にて是を唐石敷ともいへり塼をよめり和名抄に
わかやかにわさをしつるともおほされす　明阿曰わかやかにはさわやかにを誤れるなるへしわさをしつるは子うみ給ひしことをいふなり
かやすく　明阿曰かやすすてとあるはひかことなりかやすくをかやすゝとみし誤りなるべし
あやのゆまき御ふねのそこにもしき左十八
たゝなはれたる右十九
かにといふものゆめはかりつき給はぬこそ　明阿曰小兒の生れたる時にしたる屎を俗にもかにはゝといふなり
かんのおとゝ　明阿曰尙侍にてないしのかみをさしていふうちまかせてはおとゝとは大臣のことなれとも爰は准へ假て督の君といふかことくいへるなり貞雄云かんのおとゝは督殿といふ義にてとのゝうへにおもじをそへいふなりとじき　明阿曰鈍食也和名抄に餛飩四聲字苑云餛飩渾屯二音上亦作餫見唐韻餅𩚵內麵裹煮之
あはせたきもの右廿一
こおほひ　明阿曰籠はたきものたくをりにひとりのうへにふせごといふものおほふなり類聚雜要に圖出たり
おろし左廿一
御帳の外のつちゐ　明阿曰帳臺のそとのかたの柱たつる所の下のもたせになる所を土居といふなりそれによりかゝり枕にし給ひしなるべし貞雄云上三十左につちゐのもとゝみえしも是なり
御ゆかのはし　明阿曰濱床なり俗にはつねに帳臺といへり
しろかねのきじ　明阿曰銀にて作物に雉子ふたつをしてその腹に龍腦をこめ入てさて實の雉子の羽をそのまゝにつけながら斧剃にしてそのうへにきせて常の雉子のさまにして大なる松枝に付たるなり
つるのこほり　明阿曰甲斐國都留郡にいひかけたり

たひ　明阿曰延喜式に平魚と有
白きもの　明阿曰白粉なり鉛花ともいへり
えひ丁子をかつをつきのけつりものゝやうにて右廿六
こでたきで　明阿曰碁手彈碁手也
こてすみもの右廿七
ひとねたれ物左廿七
さうかい　明阿曰和名抄に靸鞋唐韵云靸小兒履也と
のみあればこゝにはかなはさるか外字書にてみれ
は草履とも註したれはかよはし用たるか又和名抄
に線鞋ありもしこれなるか線は仙戰反なれどもさ
うの音にいへるか　貞雄云さうかいは草鞋なり
はたかつるはき　明阿曰金葉集連歌宇治へまかりけ
る道にて日頃雨のふりければ水の出て賀茂河を男
のはかまをぬきて手にさゝけて渡るをみて
　頼綱朝臣
　　かもかはをつるはきにても渡かな
　行綱
　　かりはかまをばをしと思ひて
さるかう右廿八
めをとぎて　明阿曰眼をとぎみかきてよくみるさま
なり
けちすのみ給ふ右廿九
りんたい　明阿曰輪臺なり磐渉調の曲青海波のまへ
につけて舞曲也
はなたのきのさしぬき　明阿曰縹色の綺なり綺は和
名抄
すむのまひ　明阿曰順の舞也
ひちゝか右卅二
さるかうする人にてかめまひをす右卅二
いまやう色右卅二
鳥のまひ左卅二
やうき左卅三
すむのわか　明阿曰順の和歌なり上に順の舞といふ
に同し
はまゆふ右卅四
なかれのかはらけ左卅四
こしきぬ　明阿曰後世に女のさうそくに腰巻といふ
ものなるべし貞雄云明阿のいへるはたがへり則腰
紳絹なり是をこしさしとも又こしきぬともいへり
つるを舞せて左卅五

ていのこゝろひ 卅六右
しころもころ 卅六右
やふれこもち 卅七右
きたないものをだにひきとかさりつる 卅七右
あけはり　明阿曰和名抄云四聲字苑云幄 於角反和名阿計波利 大
帳也
ものこころにむすひものごもおきたてたり 卅七左
せんかう　明阿曰和名抄
ものまいられとの給へは　明阿曰ものまいらせなり
らせの約れなり
みち　明阿曰蜂蜜なり和名抄云
あまつる　明阿曰和名抄千歳藥汁本草云千歳藥汁味
甘平無毒續筋骨長肌肉一名藥蕪蘇敬註云則今之蘡
薁藤汁是也蘡薁二音嬰育和名阿末豆良本朝式云甘
葛煎也今按千歳藥をあまつらにあてられしは誤な
り千歳といへるは冬かれぬものにいふ名にて萬年
香のことさみな冬も葉のしほまぬものなり千歳藥
は冬つたといふものなりあまちやといふものに木
こ草この二種ありみな冬は葉なきものなり
御かゆのあはせ　明阿曰あはせは菜なりこれは飯に
あはせてくらふものゆへにしかいへるなるべし
こかねのかはらけ　明阿曰金箔たみの土器なり
みねかさねのはかま　明阿曰三重かさねの織物の袴
なり
しきし　明阿曰古へしきしすきなどいへるものみゆ
色紙といふにはあらす然云紙ありしなり
すはうものとも 四十五左
いふそう 四十六右
ひきしろみ 四十六左
しゆふた 五十右
こしてきぬ 五十一右
ころもはこ　明阿曰是は古へつねに衣服をいれし箱
也今世に用る廣蓋といふもの有こはその衣箱のふ
たなりその箱はいつしかにとりうしなひてふたの
み世に殘れりけるおほよそ今世の調度にはこのた
くひそ多かる
ひきさけ人 五十三右
かたのにも御覽しくらへさせ給ふ　明阿曰交野の雉
子は名たゝるものなり大鏡
からものを一きりつゝうちわり給へ 五十四左

花のかたはらのときはき五十八右

おむな　季鷹云女の本語はをみなゝるををうなをんなゝどいふは音便なり嫗は老女にてかなをおんなとかくは大をうなの略なり

あらざなりなすたさしたまう　季鷹本にはあらさなりなにかさたゝし給ふとあり　貞雄云古本にはあらさなりなすらへたまふへきわかみにもあなりやとあり

しそくゐ　明阿曰しよくゐなるべし

みつひとつこゐにしらべて六十二右

おほたかりに出しはなたれ六十四右

しひのつみにみちならぬやうにみえ　明阿曰人に強られたる罪にしづみて無道のやうにみゆるなどいへるなり

むくにのくほのつきごも七十左

こかねくひの七十二右

きんちかつたなく　明阿曰きんちは汝に同じ大和物語にも有　貞雄云繪合巻にもみえたり

いへのさうふのやう　明阿曰家領の庄分をいふまたは譲附の意にてゆづり受しをいふ歟俗言にじやうぶわけといふに同じかるべし

おきくちのはこ　明阿曰置口とは銀錫等にて箱のふちをとりてつゝみしをいふ是を省て金銀泥粉にていつかけとてするなり　貞雄云おきくちといつかけとは異なりいつかけは俗言にて本語はいかけなり沃懸とかけり

うつしにいれしめて　明阿曰移馬つれしめてと云べきをまをにと誤りし歟うつしまは異説あれどまつは唐鞍を移し作りしくらおきしをそのまゝ移馬といへり然るに此物語のうちにて按れは引替の馬をうつし馬といへる所有平家物語にもこの意なる所あり　貞雄云明阿のいかに思ひたがへてかゝるひがことは云れしそやうつしにいれしめては沉さかうのたくひの香物を入れたる衣箱にて其箱に装束また衣を入おきて香をうつせるをいふことにてたをたゞにはうつしともうつしの箱ともいへり

頭註云藏開中十七左に柳かさねなどいときよらにてけうのうつしはさかうたきものくえかうものここにしかくしたりとあるにて思ふへし

名取川にあゆつるおとゝの八十一右

こまうど　明阿曰高麗人の來朝すべしとなり
せちかきよみて八十三左
いへのこしふ　明阿曰家に傳へし古集のやうなる文書有と奏給ふなり下にも家集とも文字の抄物と有
こゝら日きし　明阿曰許幾日記しか又彈しか
ひつけしなどし　明阿曰さることと有し年月日などを日記に書附おきしなるべし
かのふみのしよ　季鷹云文書をもんそと讀へきをかくよみなせしにや
その家集どもゝしのせうもちども　明阿曰其家集どもまたは文字の抄物とも持せてまいられよとの給ふなり
たがならはしの引歌八十六右
をいらか　季鷹曰おのかなにておほきらかの意なるべし

藏開中

きやうさく　明阿曰景跡也下卅四左
かみさびたる翁一右
ころもたに引歌二左
ふるきのかはきぬ　源氏ものかたりに末摘花のき給ひしことみゆ和名抄云黒貂唐韻云貂有黃貂黒貂出東北夷黒貂和名布流木とありと明阿のいへり
そこたち　明阿曰彼所也足下の字音にはあらす萬葉集第二
うしのまへ　明阿曰瀧口のとのゐ申の聲の丑刻まへなりと申しゝなり
そてになりて四左
にんし　明阿曰上にも多くみえたり妊の音語なり思ふに妊字をかきしをうつす人の字音にかきしなるべしはらみと改むべし貞雄云此ふみには字音かける所々多しみなひかうつしなるべし
さけをのみたいをこのむ　明阿曰此文は白氏文集にや有けん內は閨房の內にて妻女を內人ともいへり白居易か送內といへる詩もあり又は內色の荒などもいへり
むかしべは云々　明阿曰古へといふに同じ古今集夏忠岑
むかしへやいまもこひしきほとゝぎすふるさとにしも鳴てきつらん
同戀二貫之

きみこふるなみだしなくはから衣むねのあたりは色もえなまし

またく此歌をとりてよみたり末は色燃ぬへきなり人を戀る思ひの火にはもゆるといひしを昔ものかたりにはきゝしにまさしく他のうへにもあらすたゞちに今我袖のもゆべくおもほゆるはといふなり

後撰集戀　貫之

涙にも思ひのきゆるものならばいとかくむねはこがさゞらまし

心にもあらでなんなからふともいふなるものを

明阿曰三條院御製に

心にもあらでうき世になからへば戀しかるべき夜半の月かな

此御歌はこの物語をとらせられたるかまたかくいふ古歌有を物語にも取三條院もとらせ給へるが可考もし三條院の御歌をとりてこの物語に引るとならば三條院以後の人の筆にして源順にはあらす順は圓融院の永觀元年に薨せられたり三條院は寛仁元年に崩給ひしかは其間卅五年なれはこの物語をとりてよませられしにはあらさるべし　貞雄云此ふみは源順朝臣のせられしにあらざることは玉琴に云るがごとし筆のつひでにこゝにいへり年代記てふふみには紫式部を正暦元年又は同三年に死せりと記せしもの多しいかなるふみに依りてかかくはいへることにや寛弘五年に道長のおとゞ四十三歳はかりになり給ふべし紫式部にたはれごとの給ひ同六年に渡殿の戸をたゝかせわび給へる事など彼日記にしるしたればいたくさだすぎしにはあらさるべしかりに今年を三十三歳ばかりとせんに榮花物語に中宮威子の三十あり一二にならせ給ふなさたすきさせ給ふさおり彼記にみつからさたすきしよしいふあもて思ひあはせてかりに三十三歳とはいへり　遂にかそふれは貞元二年の出生なり父の爲時朝臣三十歳はかりの子とせんに正暦三年には爲時朝臣四十六歳はかり紫式部はやう〳〵十六歳はかりになるべからん爲時朝臣の卒歳をかりに六十歳とせば寛弘三年なり紫式部の卒歳を六十歳とせは長元九年なりこをもて思ふに心にもあらでの御製を引歌とはすべからずたゞ當時云ならへることを云事ならん三條院の御製も其世ことくさをとりてよませ給へるなりといはんこそ難なかるべし

おもしろくすゝるこゑ鈴をふりたるやう左十

はたかつるはき　明阿曰裸體鶴脛也衣をきすはたへあらはしもすそをたかくかゝけでつるの足のながきがごとくかいあらはしたるさまなり

石のからひつにいるゝぞかし左十四

壁のなかにをさめさせ給へ左十四

はつせきゝしりたらん左十四

るりのもたひ　明阿曰瑠璃はこきあをゝいへることゝ思ふは俗意なりすきとほるをるりといへり紺瑠璃といふにて知るべし甕和名抄

てうし　明阿曰銚子和名抄

君がため云々　明阿曰古今集春　仁和のみかどのみこにおはしましける時人にわかな給ひけるときの御歌

君かため春野に出て若菜つむわが衣手に雪はふりつゝ

大和物語下巻良岑宗貞かこと書る所に少將にはひろき庭におひたる菜をつみてむしものといふものにしてちやうわんにもりて箸にはうめの花のさかりなるをゝ[illegible]てこの花ひらに女の手にてかくかけり

君かたのころものすそをぬらしつゝ春野に出てつめるわかなぞ

そらめみ給へる右十七

きぬのそでとかれぬ右十七

大の冊子右十七

女手　さう　かたかんな　あしで右十八

人のくにゝもさいあいの妻へもたる云々　明阿曰唐玄宗帝の揚貴妃を寵愛させ給ひしことなどをいへり

おほそらのたきあるものを左廿五

なかたにも云々　明阿曰古今集戀四　よみ人しらす

天原ふみとゞろかしなるかみも思ふなかをはさくるものかは

みゆかたゝして　明阿曰御床は濱床なり御帳臺ともいへりたゝしてはゆかめるなとを正すなるへし貞雄云たゝしては正すにはあらす立してなり源氏物語にいしたてゝなとみえしとおなじくて出置を立とはいへり

つし　明阿曰厨子なり類聚雜要に圖みえたり

御くしにたわつきなんす　明阿曰髮洗ていまだほさ

ゞるにねぬれば髮にくせのつくをいふたわはたわみにて曲るいふ和名抄に鬈を訓り

ちうもち 廿八左

しくいつ　明阿曰しういつゝかうまつりにて秀逸の詩句を作れるといふことにしくはつかうまつりにて詩句は仕りにてにや

こかねの毛にてうちたり 廿二左

こよひより云々　貞雄云黄河千年に一度清むてふ漢土の故事を詠るうたなり明阿の說あれどすべてかなはざればかかす王子年拾遺記に丹丘千年一燒黄河千年一清皆至聖之君以爲瑞又曰黄河清而聖人生云々などあり

いとかしこきつのともいへり　明阿曰屋角などなるべし

ほうかね　明阿曰春宮にゐ給ふへき宮をいへり坊實の意なりききかねむかねみな同し　貞雄云坊之根てふことなるべしねは其きさしをいふことばなり

くひこそまうくといふなれ　明阿曰守株のことをいふにや

なとり川云々　明阿曰古今集墨滅歌

犬上のとこの山なるなとり川いさとこたへよ我名もらすな

この歌は萬葉集に狗上之鳥籠山爾有不知也河不知二五寸許瀬余名告奈とあるを誤れるなり　同戀三

忠岑

みちのくにありといふたるなとり川なき名とりてはくるしかりけり

同よみ人しらす

名とり川せゝの埋木あらはれはいかにせんとかあひみそめけん

めしうと　明阿曰和名抄に女公爾雅云夫之姉爲女公和名古之宇止女又云夫之女弟爲女姉和名同上これによれはをとこの兄弟をばこしうとゝよひ女の兄弟をばめしうとゝいふなり

とはうのすきやう文 廿九右

めかいたる　明阿曰妻めきたるといふなりめゝかしき同辭なり

うつし心 四十二右

もみちのかれかうしたる 四十二右

なくてちりにし故郷の　明阿曰古今集秋下北山にもみちをらんとてまかりける時よめる
貫之
みる人もなくてちりぬるおく山のもみちはよるのにしきなりけり

たかへにかはさいふ四十二左

あてそこはこほれなごやしたる四十二左

ゆくとても云々　明阿曰跡をとゝめしは足跡を絶しといふにやあらん

なみだ雨のごとくにふらし四十四右

あそび　明阿曰うちまかせてあそびとは管絃のことをいへり

さゝやかなるかつらのはこ四十五右

またまてひとつぼいれ　明阿曰壺の口までみたしめしなり　貞雄云はたは傍なり口の傍迄みたしめしをいふべし

やとを出て云々　明阿曰古今集俳諧歌　よみ人しらす
枕より跡より戀のせめくればせんかたなみぞ床なかにをる

くほつきたる四十七左

しはすの月よのやうなるわざ四十七左

あくとくははき給ふ四十七左

あしこのみだれてありかんはをう女しあらじ　明阿曰をうはあふの誤りなるへし可逢女はあらじの意歟

やまひおもくなりにたるけしなどのやうに五十右

おのれしうとのみかどにいはれて五十右

みすにはあさきにしてみどりのきをはしにはさしたり五十左

しろき綾をうちやうしたり　明阿曰白綾をうちて瑩したるなり瑩は裝束抄などに多くありみかきかくるをいふ　貞雄云瑩はえうと訓へければかなひかたし古本にしろきあやをそ調したりとあれば調をちやうのかなゝりと筆者の誤りうつせしなり此ふみには此例いと多し

たゝみにはこんわたをこもに五十左

おこしすみはとりの子五十一右

さいまつ　明阿曰和名抄松明唐式云毎城油一斗松明十斤（今按松明は今続松乎）かくありてさいまつといふ名みえす

今俗にはたいまつといへりおちくぼの物語に中納
言の北方の清水へ參りし所にさいまつのすきかげ
に人のあまたのりたればにやあらん云々
貞雄云さいまつはさきまつなり俗言のたいまつは
たきまつなり松明とはけちめあるべし

藏開下

しもにもかうしのゝしる　明阿曰平中納言等の御供
人のおのれごちかうしのゝしれるなり
くわふつのわらは　明阿曰灌佛會の堂童子也
あふきさたゝき　明阿曰人をよひ叉案内などするに
もあふきをならせしなり源氏のものかたり其外の
ふみにもみえたり
あこき　やこき　明阿曰ともに女童の名なりおちく
ほのものかたりにあこきてふ童のはらはみえたり
女のくら左三
かいさうもちひ左四
むすひ袋　明阿曰拾遺集雜上　ものへまかりける人
のもとにぬさをむすひふくろにいれてつかはすと
て　よしのふ
あさからぬちきりむすへる心はゝ手向の神そしる
べかりける
按にいまの世にぬさ袋などいへるものなるへし
ありかゝり　明阿曰とありかくありなり久阿のつゝ
め加なればかゝりともいふへし
あらまき左七
こしたかつき左七
あさくゆひたるつぼ左七
かたみ　明阿曰互といふことなり形見とかくはわろ
し
さのゝわたりつかさ左八
大將このこそ　明阿曰下左十一に宰相中將のことばに
こてをかりつればのゝしりつるにわひてなんとあ
れは中將とのこその事にや
とねりのねやのほうし　明阿曰仲文家集に法師のそ
のにをとこ有とてほうしのうれへ申さんといふを
いにしへのとねりのねやの物語かたりあやまつ人
そあるらし
拾遺集雜下　健守法師佛名の導師にてまかり出て
侍りけるとしいひつかはしける源經房朝臣
山ならぬすみかあまたにきく人はのりしにとくも

なりにけるかな
かへし　健守法師
山ぶしものぶしもかくて心みつ今はとねりかねや
ぞゆかしき
てうふくまろ　これこそ十左　貞雄云とねりのねやの
ほうし云々よりのちの問答のさまもて思ふに古物
語にありしことなるへしてうふく麻呂これこそな
とも其ふみにみえし人ぞかし
おもてやはある　明阿曰めいほくなきとなり
たにまけて　明阿曰たにはだきにのきもし脱せしに
て彈碁なるへしといへり貞雄按にたにのたもしは
こもしの誤にてこにまけてなるへし此ふみはこも
したもしかたみに誤れり
をは君　明阿曰伯母君にや祖母君ならんにはおは君
と改むへし
ほそなか　明阿曰ほそなかをひきへきてあはせのか
たを兵衛君に給ひゝとへのかたを中將君に給ふと
あれは中重を入てかさねしものなるをしるべし
すみもの十三左
みなわけつゝそ　明阿曰皆人の碁手をとりわけつゝ
有よしなりかくいひさして下を省るなり
こかねつくりの　明阿曰この下に落字あるべしこか
ねつくりは車をいふ下にいとけにはさふらひの下
らうのをのこ云々あるにむかへてみれはこのこか
ねつくりのくるまによきをのこともつきぬべし貞
雄云
しろきたうわん　明阿曰陶碗なるべし土もてつくり
たるなり大和物語にみえしちやうわん全文十三の右に引記せり
は長碗なるべしといへれとこゝのさまにて思へは
たうわんの誤りなるべし
かたいしほ　明阿曰日本紀
すみはふれ　明阿曰世中にすまふことのかたきなり
はふれははふらかされてなといふに同じ
おもてふする　明阿曰おもてふせといふに同じ恥か
ましき時は面のえあからぬてうつふしふす故なり
貞雄云これはおもておこしといふことはに對へる
ことはなり
まかりしてわかしつゝ　明阿曰まかりにて酒をあた
ゝめしなり
のちのをといふなれば廿四右

たうきり　明阿曰車のかたちをいふ轅切なといふも
あり
ものまきたる車廿五右
もゝすはえ　明阿曰唐の書には氣條と書りわか枝の
氣をふくみてこゝろよくおひのひたる故にさいふ
なるべし
いぬからす廿五左
かなしくするひとつね廿七右
みつのわなゝき廿七右
しけいとたはらにあみ　明阿曰和名抄絓絲説文云絓胡卦反懸絲也漢語抄云之介以度　たはら　俵也類聚國史
あまくもは云々　明阿曰古今集戀五　なりひらの朝臣きのありつねかむすめにすみけるをうらむることありてしはしのあいだひるはきてゆふさりはかへりのみしけれはよみてつかはしける
あまぐものよそにも人のなりゆくかさすがにめにはみゆるものから
かへし　なりひらの朝臣
ゆきかへりそらにのみしてふるさとは我いる山の風はやみなり
この歌をとりてよめり
こめ　明阿曰和名抄釋名云穀　胡谷反和名古女　其形纖々視之如粟
ひとへなるしも引歌廿二左
みつばに　明阿曰
このとのはむべもとみけりさきくさのみつ葉よつはにとのづくりして
およすけ　明阿曰老付の意なるべしおよひすかふ意もあり　貞雄云己が考は玉椿第二にみえたり
五品　明阿曰親王位に五品といふはなし是は五位の誤にや　貞雄云このいへることく五品なるを品位の例になして五品といふなるべし
あからめ廿九左
をんなかうふり　明阿曰女叙位なり
もゝかゝは云々　明阿曰百日かはといふにやもしくはもゝか川といへる名所なとそへたるにや
うちのくら　明阿曰女藏人なり
おほとのあぶら　明阿曰御殿油なるを乃阿のつゝめなゝれはおほとなぶらともいへり
おほそう四十五左

しらたておほひ四十六右

しやうさしてかきゆひつけたり　明阿曰鏁鎖おなじく用るなりさらにしやうの音なし思ふに鏁唐韻サウなりさうさしやうはつねにかよへばそれより轉移なるべし裝莊のこときさうしやうかよへり和名抄鏁子唐韻云鏁蘇果反俗作鎖子鐷鎖也揚氏漢語抄云鏁子藏乃賀伎辨色立成云藏鑰　かくいへるを思ふにこのかぎといへるは今俗に云とは異なり今は牡をかきといひ牝をしやうといへり古へはかよはして二ながらかきといへるなるべし禮記　曰鍵牡閉牝也正義云凡鎖器入者謂之牡受者謂之牝若禽獸牝牡然とあれば今の器に同しきとみゆ

あへなん　明阿曰有べきならんなり

おはおとゞ五十一左

かこやかなる家　明阿曰籠はくちのすほまりてこもりたるやうなればかこかなるにたとへたり

さうにかきたり　明阿曰かなにはかゝで草書もてかきしなり源氏

身をつみてのみはた五十四左

國讓

あしこ　明阿曰あそこといふに同し　貞雄云かしこは彼所なりあしこはあの所といふ義なるべし

よろづの所のせきとなる　明阿曰せきは關なり

貞雄云塞なるべし

おほんしほたれ　明阿曰おもひしほたれか御しほたれか

御なおし給ふ　明阿曰名署し給ふなり花押草名などいへり

よになきあふみたにのほど十一右

御几帳さし　明阿曰さし几帳とて行路さきにさしかくすものなり後世には聞えず古はつねなりしものなり

發びんつきいろぎは廿右

ちとせをかねて廿左引歌

われをまつちの引歌廿一左

やともりに引歌廿一左

かたはなれたる馬のごと廿四右

むかしをいまに廿五左

こゝちこそかしら白くなりにたるやうなれ　明阿曰

白氏文集

あひなだのめ左卅一
つちごの左卅二
いまはたゞせはしといふなるみちひとつ左卅四
ながきこゝろ引歌右卅五
人ためによからす左卅九
むすびもの右四十
御えうある　明阿曰要の意にてもとむることなり
　肝要の意なり
しの手　明阿曰眞名手なりむを省きいふことつねなり
あつめち　明阿曰集字なり今本にあめつちぞとある
　はたがへり
をとこて　明阿曰男手也　貞雄云文字書にせしをゝ
　とこ手といへり
はなちかき　明阿曰眞名書につぶ〳〵と書しなり
　假名もしのつらなりたるにむかへていへり源氏物
　語
人をとふとも引歌四十九右
すぢつきて　明阿曰筋目有めきて書給へるなり
つくはねの云々　明阿曰古今集雜下　みこのみや
のたちはきにはべりけるをみやつかへつかうまつ
らすとてとけてはへりけるときによめる　みやら
のきよき
つくばねのこのもとごとにたちぞよるはるのみ山
のかげをこひつゝ
同集大歌所御歌　ひたち歌
つくばねのこのもかのもにかげはあれどきみがみ
かげにますかげはなし
よのまに四十九左同中九右
思ひ出る云々　明阿曰古今集つくばねの歌をとりて
よめり
それう　明阿曰總領の意にや
むねなんはしりし　明阿曰古今集俳諧歌　をのゝこ
まち
人にあはんつきのなきには思ひおきてむねはしり
びに心やけをり
したにこめられ　明阿曰獄屋の下くらにおしこめ
しなり　貞雄云下屋にこめられしにて御きのあた
りに出やらぬをいへり因にこめらるゝことにはあ
らす

ゝをくりものにしたる　明阿曰屏風の縁を彫物せし
にや又異本にはくりをおりとかければ織物にや貞
雄云古寫本にはおりものとあればこにしたがふべ
し
とのゐものねさうぞく　明阿曰とのゐものは男女に
かよはしていへりこゝはふたつ對へていへればと
のゐものは夜具のふすまなどいふべし寢裝束は直
衣のたぐひなりつねにはいづれをもかよはしいへ
どこゝは並ていへればしばらくわかちていへり
そくゐ　明阿曰觸穢なり
のちおひ六十七左
こたみのそん　明阿曰此度之尊者にや
せてう　明阿曰潛上にや
をはうほうしのやうなるよろこび　明阿曰古代の諺
なるべし
おちにも父にも　明阿曰祖父にも父にもまさり給ふ
となり　貞雄云なかたゝの大將は祖父（さしかげ）父（かれまさ）
にこえまさり給ふとなり
むかしを今に　明阿曰古今集
世のうきよりは　明阿曰古今集雜下　讀人しらす

山里はものゝさひしきことこそあれよのうきより
はすみよかりけり

國讓中

みすくにものし給ひ　明阿曰すくは直にて直人の意
にや
ひきほし　明阿曰みゐの引干なりおちくほのものが
たりかけろふの日記などにもみえたり
あふらち　明阿曰あふらもちのもの字を落せしにや
あふら餅は環餅なり貞雄云あふらちのらもし衍
なり古寫本にはあふちとありあふちの實をくだも
のにせしこと藤原君卷卅九の左にみえたり
りんたうのくみしてゆひ　明阿曰龍膽色は紫苑のご
とくむらさきなりこゝは龍膽色の組糸にて結しな
り
うらやまし云々　明阿曰古今集夏　よみ人知らす
さつきまつ花橘のかをかげばむかしの人の袖のか
ぞする
此さつきまははやすでに五月をまちつけしなりと
いへりげにさにてあるべし此歌もて思ふにもうら
やましきは花橘のさつきは既に待えしなれば其如

く今我身にしても人をばいつかまちつけんぞと願
へる意なり
水をけ　明阿曰補和名抄
くぼて左十
ねぎこども云々　明阿曰古今集俳諧歌　題しらすさ
ぬき
ねぎことをさのみきゝけんやしろこそはてはなけ
きの杜となるらめ
人のおやにとか左十三
みゝはすばりにし右十五
かはふえ右十五
あはせたきもの　古今集物名
なとかはかいなは　明阿曰一本になとかはいまはと
あり又などかはかひなくの誤にや
さいはひのおにこそあめれ左廿一
となからかへり給ひぬ　明阿曰家内へはいらて云お
き立かへり給ふなり　貞雄云是そ葬中の禮なりけ
る
つしやか　明阿曰おも〳〵しきをいへり
みわうゐたにも　明阿曰御王位なるべし

下のもろくら　明阿曰下諸曰なり
みやまきの云々　明阿曰みやまきのしもにはよし風
のあらくふきすさむとも枝のほどにはすこしもす
ぎさはらてあれなりみ山木の下といへるは木の幹
をいへるなりもし風のあらくふきなどせば木葉の
色かはらんことをなけくさまなりつゆは露にはあ
らす少しきをいふことばなり
いたちなきまのねずみばしも
あらはれたるやくしほとけ　明阿曰現身の藥師佛と
世にも只今いへばとなり
いねふり　明阿曰いは語の口にてそへたることばに
て勿眠なり又ゐもじならんには居眠なり
みもあえはてゝ　明阿曰身もあせにあえはてゝなり
源氏物語に汗あえてなとゝ有り今本にはみもひえ
はてゝとありひえはては寒慄の意にておそれて身
もひゆるやうに我身にもあらす覺ゆるなり
ふくだめたれど　明阿曰とのゐものきてふしたるさ
まのふくらかなるをいへり
やつこのはこ　明阿曰八入子箱なり今俗にも七いれ
子といへる龕あり

下はらへ　明阿曰祓に上中下の品あることは三代格にも詳にみえたりまたは賀茂川に上中下瀬のさだめあればその下瀬のみそきにや

東川　明阿曰東川は賀茂川なり西川といへるは桂川なるにむかへていへり

ほうご　明阿曰反故和名抄

かげのごとそひ 五十二左

こひてふ山 五十二左

雲井より云々　明阿曰列仙傳卷二丁令威本遼東人學道於靈虛山後化鶴歸集華表而吟曰有鳥々々丁靈威去家千歲今來歸城郭如故人民非何不學仙塚景二この意をとりてよめるなり

ぼたいずのすゞくしたるたゝなどひとくだり　明阿曰和名抄内典有念珠經今按念珠一云數珠見千手經たゝはたひの誤歟和名抄玄奘三藏表云袈裟一領衲音奴答反字亦作納 俗云能不二云太比 これをもてみれは數珠に袈裟一具つゝそへて給ひしなり太比はけさの異名なり

はかなしひ　明阿曰はかなきなぐさみになりことなしみなといへるたぐひもおなじ

いりくし　明阿曰入具なり父君にはやくつれ具して内へ入給へとなりいかゝしとあるは誤なり

たまむし 六十二左

あゆかゝり 六十三右

みるはた　明阿曰女の名なり

國讓下

あそばへのあらんゆう 十左

神さび　明阿曰さびはさみしきさまの意なり

女はそれかきり 廿四左　明阿曰此下に脫誤有べし貞雄云古寫本に女はそれかきりなりけるとあり

よたりの翁をかたらひてぞ事はなしにけれ　明阿曰史記に漢高祖の時惠帝のいまた太子にておはしけるときこれを止て戚夫人がはらのみこ趙王如意を位につけんとし給ひしを張良かはかりことにて其時に商山にある隱者の四皓と聞えしをまねきて太子のたすけとなせしかはつひに太子をかゆることならすして後に位につかせ給へること有き漢高帝本記又西漢史等にみえたり

水雄　明阿曰續紀寶龜三年十二月辛未幸山春水雄岡延暦四年九月庚子行幸水雄岡遊獵　夫木抄云水尾

山城こあり今愛宕山西麓水尾村あり　夫木抄よみ人しらす
うちつけにみつのを山の秋風を岩まにたきつおこかさぞきく
水尾山寺水尾陵などは三代實錄に出たり
ぬのゝあをわたあつくいれて四十右
あふこ　明阿曰和名抄朸聲韻云朸音力和名阿不古杖名也古今集
なこてかくあふこかたみになりぬらん
おりもいゝあを四十左
いさのくゝつ四十七左
ほゝゑませて五十左
六位もめあきたるなきなし　明阿曰目なきはそのかぎりにはあらで目のあきたるほどの人はさふらはぬはなしさいへるなり今本になきの二もじを脱せり
うちなすかねの引貮七十左
さいしをうりて　明阿曰一本にさかしおこりてさあるは其意得かたし財貨を貪りてなるべし妻子にはあるべからず　眞雄云一本にしさいをうりてさあるぞ然るへし則貨財也
こけの衣七十五左
えさう　明阿曰園莊也
こうちかくれ　明阿曰小路隱なりそこらはひわたりて町小路などにもゆきかゝくるをいへり
手をうちて給へば八十五右
すかせ給へは　明阿曰食事をすくとのみいへり
花宴九十三左
ふたい　明阿曰文題歟
さるかう百一左

樓上

にはかにくたり給はん　明阿曰伊勢齋宮になりてくたり給はんとするさまなり源氏物語の榊のまきこれをうつせしにゝたり
いしつくり寺のやくしほさけ　明阿曰石作寺　續古事談には石造寺とかけり太秦佛事に昔攝津國に富原といふ所に翁ありけり家の前なる梅の樹夜々ひかりけりあやしみてこの木を切て一搩手半の藥師佛をつくり奉りて丹後國石造寺にうつし奉れりさもいふ云々このことをあけて丹後國にはあらぬ

由を山城名勝志にいへり按續古事談謂丹後國石造寺者誤歟宇都保物語屬山城但石作鄉近丹波故或誤爲丹波後人傳寫重妄者乎といへり山城國なることあきらけし猶徵有　三代實錄元慶三年閏十月五日辛卯勅以山城國乙訓郡公田五町爲元慶寺田而四段三百五十歩返入石作寺延喜式玄蕃寮式云凡近都諸寺東拜志以北西石作以北停預講師僧綱檢察（拜志寺在紀伊郡）これらを考れは山城國乙訓郡にあることあきらけし且石造と書るは誤りなり石作とかくへし

かみもよほろはかり（三右）

くさ　明阿曰具者歟從者といふがごときなるべし

またらきぬ（八左）

もりわたかさねて　明阿曰もりははりの誤にやおちくほの物語にはりわたの事あり

うちきすきはり（十一右）

むすふの神（十三左）

千字文（卅一右）

ちやはゝ（四十七左）

なごり　明阿曰風はしつまりても猶海のあれて浪のたかきをいへり伊勢物語

はたほこ　明阿曰旗鉾也

かたおもひ　明阿曰萬葉集第十一

いせのうみのあさなゆふなにかつくてふあはひのかひのかた思ひにて

たはふれにくゝ（五十六右）

おほうみの裳　明阿曰大海の裳といへるは海部といひて海中のありさま浪魚くさの類をかけるをいへり紫式部日記に　綾ゆるされぬはれいのをとなおとなしきは無文の青色もしは蘇芳なとみな五重にてかさねともはみな綾なりおほうみのすりもの水の色はなやかにあさ〳〵としてこしともはかたもんをそ多くはしたる

やくかひ　明阿曰錦貝をいふなり古の異名にやちかき世のものなから三十六種歌仙貝の歌といふもの有その中に錦貝の歌

富士のねのもえてやかすむむさし野をやくかいかなるけふりなるらん

これはやくかひをかくして物名の歌に讀るなりされともかなをはしらて貝をかいと思ひたりすへて貝はひとつの小名にてつぬは介なりされは和名は

加比なるを介の音は加伊なれは思ひあやまりて和
名をも加伊と心得て後世の人はつねに用たりかな
こそたかひたれその語は古をつたへたれはやくか
ひは錦貝たることうたかふへからす後歌仙貝の歌
に錦貝を出して三條院の御製を入てこのやくかひ
のうたをあたらすといへるは古しらぬ人のしわさ
なり貞雄云
かうてう 六十七左
もこよひ 三十　明阿曰神代紀下豐玉姫化爲八尋大熊鰐匍
匐逶迤遂以見辱爲恨
樓上下
しろかねのすきゐふくろ　明阿曰常の餌袋には籠の
口にきぬなどつけてしたるもの也これはその籠を
銀にてつくりしなりしかしすきといへるを思へば
常には籠を用ずして絹布などにてつくるとみゆ籠
のはすきといへるなるべし箱にもゐりすかしたる
をはすきはこといへり
をはな色の細長 左一
もかうのすのなかに 右四
秋のよをなかめあかさんこともとかなんつむやとの

給はためるは云々 左四
おもしろや　めしたりこそ　明阿曰二人ながら下仕
の名なり
からもり云々　明阿曰むかしものがたりなりそれに
ありしことなるべし
うつしにのせ給ひ 右十
まろがひく云々　明阿曰麻呂か彈琴のうへにうらや
ましさや佩もとのみ云さして末をいひ給ぬなり一句
より隔句に三へつゝくなり
はまつ風　明阿曰濱風にてつは助字なりおきつ風へ
つ風などもいへり
おこしび　明阿曰和名抄
雪の山　明阿曰禁秘抄枕冊子にもこのこと有萬葉集
第十九に天平勝寶三年正月于時積雪彫成重巖之趣
奇巧彩發草樹之花屬此樣久米朝臣廣純作歌
奈泥之故波秋咲物乎若宅之雪巖爾左家 理家 流可
母
禁秘抄下 第四十六章　凡此事上古不見自中古事也事始大
略一條院御時以後也清少納言記在其子細云々
台記 第五 久安二年十二月廿日大雨雪 洛中雪上九寸 辰刻向舟丘

眺望次向東北院權中納言過之則歸家築雪山云々廿一日戌刻終雪山之切東西一丈五尺南北一丈二尺七寸高一丈八尺二寸清少納言記しはすの十餘日のほどに雪いとたかうふりたるを女房ともなどしてもの丶ふたに入つ丶いと多く置を同しくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて侍めして仰ことにていへばあつまりてつくるに云々けふ雪の山つくらせ給はぬ所なんなき御前の壺にもつくらせ給へり春宮弘徽殿にもつくらせ給へり京極殿にもつくらせ給へりなどといへは
こ丶にのみめづらしとみる雪の山ところ〳〵にふりにけるかな
後世には明月記建仁二年正月十日正治二年正月十九日の記にもみえたり猶いと多かり

ひいなあそび右十九

なかすひつ左十九

いな丶ち神　明阿曰かくつち神の誤にや

すもりこ　明阿曰蜻蛉日記

やくさし　明阿曰厄年也

山の井のしりひきたる　明阿曰やまの井のするのなかく流る丶さまなりもの丶尾ひきたるによそへていへり

かうせう　明阿曰和名抄唐鹵簿令云行障六具

からかさ　明阿曰韓笠にて則傘をいふなり

かみよほろはかりにて左卅五

てつくり左四十

みすのもかうには大もの錦をせさせ給ふ　明阿曰翠簾の帽額に大紋の錦をすること後世にはなきことなり帽額は今云みづ引といふものなり今世の翠簾の縁に木爪をもやうとす故にもかうもさることゝ思ふはもとよりのひかことなりかの木爪は古へ聞ぬことなるにいつよりかはさあることにや

商けん所の法師四十八右

そろ〳〵しく　明阿曰揃々しくにはあるへからすそは〳〵しくの誤りなるへし

いけのふなや　明阿曰いけの邊に作れる舟屋なり

そひやか　明阿曰御丈の高きをいふそひゆるの意より轉りてそびやかとも云なり聳字を訓りやかはにほやか延やかなど多かり

うまかきりてとりのはじめに　明阿曰晝の午時より限りて樓上にのほりて夕の酉時にかならすくたり

給ふなり
ひらはり　明阿曰和名抄
はなち出　明阿曰別棟に引放て造り出せし家をいふ
なり
身を二にはえわけじ 五十四左
へけのもの　明阿曰變化のものなり
凡帳さして　明阿曰古へさし凡帳といふ有今時はなきものなり行障の類なりその形は帳臺の少きやうにして上に薄もの覆ひかけてその中に在て自持て歩行を行障と云此さし凡帳は舟の帆のさましたるものなり古書にみえたり
からのいといふ　明阿曰いといふは衍字歟又からのゐといふは韓藍の意歟あゐをゐとのみいふこと例あり山藍をやまゐと歌に讀り
ほそなか　明阿曰童女の衣なり
玉虫 五十七右
すそほそからす又こちたからぬほどにて　明阿曰是みな髪のさまをいへり髪のすゑほそらすさりとて又あまりにこち／＼しく多くもあらぬをいふなり
みすこさましや　明阿曰空しくみ過しはせまじと思ほすなりみめすの意なり
ひなびて　明阿曰鄙めきて都の手ふりにあらぬをいふ
かんなり　明阿曰雷壺なりむかし琴彈給ひし也
二葉にて云々　明阿曰むすび松萬葉集第二にみえたり
くもたちまちにいできほしさわぎ 六十四左
みゝはさみ 七十右
ちりつもる山　明阿曰古今集序
ひめこ松云々 七十四右
やどり木 七十六左
ひきうゑし 八十一右
小さうしに所／＼ゑかき給ひて歌よみて三卷ありしを　明阿曰今世にもさしかけの卷を三卷として古きゑなど書るもの有是をうつほ物語とてもはら世にもてはやしぬるはこのことよりさはなしそめしなるへし
こよひの物にはふしやくてもかなとおもへ 八十二右

文化十二年六月五日借得片山氏之許而起筆今茲十三年五月七日未後令抄出畢雖非無不審之事其儘存書焉

他日可令追考者也

細井貞雄

宇津保物語考證

清水濱臣著

吹上上 巻之六

まつりごと人一オ

和名抄職名部國目椽 万豆利古止比止

るり一ウ

和名抄玉類、瑠璃、

したん、すはう、くろかい、

和名抄木類 紫檀 蘇枋 黒柿

からもゝ

和名抄菓類、杏子、加良毛々

しやこめなう二オ

和名抄玉類、硨磲、馬腦、

せんたううとまじらぬばかりなり、

下文 に此吹上の宮をいへる所に、めぐりには、仙たうゐたうさかす、くさ〳〵あふむなかぬはかりにて、住はへりたふとあらされば、こゝも此本のうとゝあるはたふとありしがあやまれることしるし

御はかしをしちにおかん九ウ

竹取もし金たまはらぬものならば、かのころものしちかへしたへ　今昔廿六條十九唐人の物を六七千疋許借てけり、其質に貞重古き太刀十腰をは置たりける宇治拾遺十四にも唐人に物を六千疋がほどかるとて、太刀を十腰ぞしちにおきけるとあるも、今昔とおなしことをいへる所なり、

都のつと十ウ

古今大歌所歌 をくろさき、みつのこしまの、人ならば、都のつとに、いざといはましを、

やどもり風

としかけの巻にみゆ、

大將殿いてたつ人に、

師説以下三行給詞也、保孝按給詞にあらす、

たねまつ三月三日ウ十三

以下廿四行、給詞歟、

花そのにあさゆふオ十四

源氏に、こてふをさへやとよみしは、此歌を本にてよめるなるべし胡蝶巻

ふきあけのみやウ十八

以下廿六行給詞か、

きのねしなく（ろイ）オ十九

今も此邊、松の根たかく出たり師説

おほきなる川

紀の川といふ、吉野川の末なり、

おほきなる山ウ十九

かつらき山につゞける山なり、

その日かつけものウ廿三

以下十一行給詞、

あまかつきウ廿四

あまかつきにて、潜女の義か、又はあまは海士にて、かつきの下に、め、の字脱せしにや、和名魚獵類、白水郎、初名、阿万潜女和名加、豆岐米僬父無艮、岐美

なきさのゐんウ廿六

以下五行餘給詞

はつき

永久四年百首ぬき衣、今そはつきに、かけてほす、かつけして夫木同けりよさのあま人、

拾玉四あさてほす、はつきの枝に、ゐるもつの、しつかならはや、しつかいほまて、

わきあけ

和名抄衣服類、缺腋和岐阿介、乃古路毛

ついまつウ三十

和名抄、松明今之續、松乎

ふちゐの宮おほいなる云々

以下十八行餘給詞

三月晦日になりぬれはウ卅一

これは三月の末になりたるをいへるなり、下文オ四十三月つこもりの日に、なりてと有、保孝後按されはこは晦日の日の事にあらざる事しるし、古人の詞つかひみるべし、

はたごオ卅二

和名抄竹器類、籠和名古俗用旅籠、二字云波太古

をりひさかけウ卅二

をりはすりの誤なるへし、下文オ卅四に、すりふたかけと有、

和名抄竹器類、簏和名須里箱類也、

くろほね（らイ）ウ卅三

和名抄鞍馬具類、鞍橋久艮、保禰

かしよねオ卅四

和名抄、粿米（和之、與禰）淨米也、○炊米の義なり
たねまつかむろのいへオ卅四
以下四葉給詞、
きさのきウ卅五
和名抄木類、檟（漢語抄、云木佐）
たゝらふみウ卅六
和名抄、鍛冶具、蹈鞴（太々良）
しららう
和名抄錫、兼名苑云、一名白鑞（之路奈、麻利）
からうすオ卅七
碓（賀良、宇須）蹈舂具也、和名抄にみゆ
しらきぐみウ卅七
延喜式、新羅組、
物いひなとすオ卅八
以上給詞なり、
あるしの君らうすけ
あるじ涼の歌一首、こゝにおちたるなるべし、人によみかけたるさまの歌にあらず、
せきのもとまで
むかしの紀の關のあと、今山口といふ所にありといへり、
しろかねのは○こ（ニ歸）四十四ウ
下文 しろかねのうまはたこおほせなから、なかに人はれてあゆませて、御覽せさす、
こゝはふきあげの宮
以下十三行給詞
みたりむまうも（どイ）かいやすめて四十八ウ
みたりこゝちさいふにおなし、心にて疲勞したる馬をしばしやすめて、上京すべしとなり、
十六大國ウ五十
下巻オ二に十六の大國にも、さはかりの所やは侍らむ、諸乘法數にちかくは、十六大國の名出たり、
人いれてあゆませてウ五十
上文書詞 白かねのはたこも、はこに人いれてあゆませてひき出けり、
野のさかりは八月中の十日云々オ一
吹上（下巻七之）
源氏松風、山のにしきはまたしう侍けり、野邊の色にこそさかりに侍けれ
こゝろおひオ一

こゝろのまゝにおひしげりたるなり、

十六の大こく二オ
　此卷に五十みゆ

とうがい八オ
　和名抄燈火類、燈械所以居燈盞也、

たいまつ、
　此物語にかきりて、いづくにも、さいまつとかけり、こゝにのみたいまつとあるはいかゞ、さいまつとは前松の意なるべし、又擘松の意にても有べし、

くりや十二ウ
　厨子なるべし、

ひとりふねに十三ウ
　源氏少女、つなかぬ舟にのりて池にはなたれ出ていとそへなけなり、細流云、放嶋の作文とて、中嶋の人もかよはぬ所にやりて、詩をつくらするなり、其故は、人にとひあはさすましき爲なり、

方略のせんじ十四オ
　令義解考課凡秀才試方略策二條文理俱高者爲上士、

あさほらけ十八オ
　枕册子、物のあはれしらせかほなる物のつらさき此歌を引ていへる所有、

こゝは神泉廿一ウ
　以下三行餘給詞なり

かほは墨よりも黒く廿三オ
　此所缺文あり、たゞこそのまゝ母の、おちあふれゐたるを、み出たるなり、

われひとりかへれる池に廿七オ
　此四の句落たり

菊の宴卷之八

かくてしも月一オ
　師說、さきの七の卷には、九月廿日東宮詩作し玉ふと有、月日をたかへて、ことさらにおほめかしく、書なせるなり、
　保孝按るに、七の卷とは、いつれをさせるにか、後日考へし、

左のおとゝを（ナシイ）のへ（いイ）にひとりふたり一ウ
　左大臣の姫君は、さねたゝの妹にて、東宮にまいり給へり、いとさかなき聞えあり、

さやうなるはかりことをや三オ
　たはかり給ふこと、藤原卷に見ゆ

春宮かなしとみやり玉へりオ三

是は、次に有ておとゝの事なり、こゝに用なし、

春宮おはしますオ四

以下十行給詞、

なかのおとゝ大宮オ八

以下六行給詞、

かくて霜月のかくら

七巻にもみゆ師説

さ思ひ給へたる事有かオ十二

兵部卿宮にまいらせ玉はんとおほしたる御娘のまだをさなければとなり、

ひとゝころなん、聞えさするも

師説此詞聞えかたし

ぬしはうとすちにオ十四

おかすみの詞、　神泉のみゆきに女一宮たまはるべき勅ありしことを、かくいへるなるべし

こまとりオ十八

源氏榊、殿上人も、大學のもいとおほうつとひてひたりみきに、こまとりにかたわかせ給へり、

同若菜下、楷前しりへに、こまとりにかたわきて、

みこたちをとこ君たちはウ十八

以下給詞二十

としかへりてウ廿一

此上に歌落たるか、

七月たなはたまつりたる所にオ廿六

此次行作者脱せしか、

ちゝなとのくちあけオ卅

以下四行ほとよみがたし

御するひたひオ卅一

入内のをり、御かみあけなとの調度にや、

いたちのまなきオ卅三

源氏東屋、いたちの侍らんやうなるこゝちのし侍れは、按ずるに、これは、浮舟か母のむすめ、おほくてかしこ。こゝに足もとめす、行かふを、いたちといふものゝ、子おほくもちて心せはしく、かけり、めぐるにたとへいふなり。こゝもその心と聞ゆ、

のちはなにせんウ卅三

拾薬戀一、こひしなん、後は何せん、いける日の、為こそ人は、みまくほしけれ、此歌萬葉巻に

いき物 廿五オ
穐なるべし、
たつことうき 廿八ウ
古今春 けふのみこ、春を思はぬ、時たにも、たつことや
すき、花のかけかは、
かすかくらとか
伊勢物語 行水に、數かくよりも、はかなきは、思はぬ人を、
おもふなりけり、
かやゝ 四十六ウ
めのこみづから、いふかやゝは、まゝの訛か、ま
ゝは源氏にもみゆ、やゝこいへること、例おほつ
かなし、
ちかくて見給事 四十八オ
此上落文有へし、
からふりやなき
拾遺雑下 川柳、糸はみどりに、なるものを、いつれのあけ
の、衣なるらん、 仲文
なにしおはゝ 五十一ウ
萬十 此頃のわかこひちからしるし、あつめくら
に申さは五位のかうぶり、季吟そ一説河柳なり、

一説津國冠里にある柳なり云々、○五位に叙せら
るゝを冠すといへばなり、五位は緋袍故にいふ、
六位こそ緑袍にて、柳の糸に色のかなへるか、冠
と名におひて赤色ならぬは、いかゞとなり
ながす 五十一ウ
なかすの濱は攝津國にあり
とふくるま 五十四オ
和名抄 飛車、竹取物語とふくるま、ひとつくし
てらかいさしたり、又屋の上にとふくるまをはせ
て。榮花物語御着裳 りうとうは、とぶくるまの
かたちをつくりて、
もろこしもとち のイ 五十八オ
古今戀五 もろこしも、夢にみしかは、近かりき、思はぬ中
そ、はるけかりける、
しりへ 六十五オ
後宮の義なり、しりへの庭ともいへるおなし事な
り、赤衛集巻一、女院の姫君こきこえさせしすい
しなけりの石めすを參らすとて
すへらきのしりへの庭の、石なこは、ひろふ心あ
り、あゆかせてとれ、

舟のうちならぬ人六十五ウ
白氏新樂府、海漫々童男童女舟中老、
七大寺七十三オ
拾芥抄七大寺　東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺、
秋風の七十五オ
以下三首ともをりにふれたる古歌を、思ひ出でうたへるなり、下句をうたはぬにはあらす、古今の歌にて誰もしりたるなれは、筆者の略せるなるべし、
秋風の、下句人をそこふる、くるゝよことに、
みる人の、下句もみちはよるの、にしきなりけり、
ひくらしの、下句風より外に、とふ人そなき、
頭中將ややと
こゝ落文あるへし、
あしひき
なかたゞの歌なり。
いもがゝとの七十七オ
催馬樂妹之門、いもかゝとやせなかゝと、ゆきかねて、ひちかさのあめもやふらなん、してたをさ、あまやとりかさやとりやとりてまからん、してたをさ、
あてみや九之巻
けふいくしほ五オ
幾入(イクシホ)に往時(イクシホ)、とよせてよめるなり、時節を、しほといふ事多く例あり、
さまれ六オ
もあの約ま也、
これはあてみや十一ウ
以下五行給詞也、
こゝは十三オ
以下五行給詞なり、
東宮の君たち十四ウ
こゝは女御たちの、御事とみゆ、
なかとり十四ウ
和名抄木器類、樂中取俗所謂、畀食器也、
もる
吹上中巻に、もりものといふ詞あり、酒器をさかつきといふ意にて、いろ／＼のものをもる器を、もりものと云なり、略て、もりともいふなるべし、
まゆみのかみ、あをかみ、まつかみ、十四ウ

略器和名抄、紙有色紙、檀紙、穀紙、紙屋紙、松紙、河苔紙、斐紙、薄用紙、等名

たうち十六ウ

和名抄、意錢今之攤錢也○紫日記上、攤うち給ふ
、紙のあらそひ、いとまさなし、○榮花初花たうち
玉ふに紙のほとの、ろん聞にくゝ、ちらかはし

こゝにあてみや十八ウ

以下二行給詞、

こゝにおとゝ十九オ

以下十三行給詞、

みつのおとゝ廿二オ

以下九行給詞也、

こゝは源宰相廿三ウ

以下二行給詞也、

えにの方廿六オ

不審也、或人兄方の事といへり、いかゞ、

めりかね

后のね坊かねなとのごとく、妻かねなるべし、

こゝは治部卿廿七ウ

己下六行給詞、

かくてちしのおとゝ廿八オ

藤原巻にくはし、

春宮はゝきさき廿九ウ

東宮の御母きさき、これもいとさかなくおはす、

そのめい卅ウ

あてみやの母も宣耀殿の女御左大臣の娘也の母も、嵯峨
院の御むすめなれば、女御とあてみやとは、いと
こどちなり、こゝにめにと云はいかゝ保孝後按

よろつのあつめもの

あてみやを、思ひかけし人々おほかれは、其人々
の子なるべし、東宮の御子にはあらしとなり、

なかのおとゝ卅三オ

以下十六行餘給詞、

田鶴むら鳥十之巻

けふりのたとへ一ウ

後撰別 しなのなる、駿河 あさまの山も、もゆなれは
ふしのけふりの、かひやなからん、

かときしわれそ二ウ

木木し枯す、師説又も生出る枝あり、といへるたと
への侍しにや、又もと木にしかすとのたまへるか、
さては下の御ことはによくつゞけり、女御は左大

將さの丶、大姫君なる故、かくの玉へるなるべし、

上らうなん
　以下三行給詞、

左大將殿ォ九
　以下二行給詞、

かけはあれどもウ十二
　つくはねの、このもかのもに、かけはあれど、
　　君かみかけに、ますかけはなし、

せぬわさ〳〵ォ十三
せぬわさ〳〵とありしを誤れるか、なの字の落字とせんも聞えたれど、傍例おほければ、猶せぬわさ〳〵なるべし
　人もみぬ、所にむかし、君とわれ、（源公忠朝臣）
　　せぬわさ〳〵を、せしぞ戀しき、
此物語た丶こそ國讓下樓上等にも此詞あり、

これは右のおほいどのウ十四
　以下三十行繪詞、

これは源宰相ォ卄
　以下七行給詞、

ふかうォ卄四

今昔十七條卅三、不合に御せむ程のことは、訪ひ聞えむと、かく不合なるをも此人の養公にか丶りて、世に可有にも有らんと思ひて、同廿六卷條十八、廿七卷條廿四、廿八卷條七、卅一卷條五、等に見えたり、俗に不仕合と云に同し、

ろう〳〵
源氏藤袴、すてかてらに、かくゆつりつけ大とうのみやつかへのすちに、らうろうせんとおほしおきつる、同若菜下、かんの君は、胸つふれて、か丶るをりのらうろうならすは、えまゐるましく、けはひはつかしく思ふも、心のうちぞあらきたなかりける、河海牢籠、細（不自由なる、意といへり）東鑑に往々みえてみな牢籠とかきたり、

にんし給へり東のおと丶ウ廿六
　以下卅三行給詞、（保存按にんし玉へりは本文にはあらざるかしばらく今は師説にしたがへり後考、）へし、（されど下の給詞にも此詞あり）

これは女御の君のウ廿八
　以下廿行給詞、

ふぢのか丶れるをウ廿九
　以下梅の花笠の卷の終り、二たびこ丶にまきれて

出たり、されと初のは、いと〻みたりたりとみゆ
れは、こ〻と相てらして見るへし、

左大將殿かへしにオ廿一
以下桂卷也、保孝按梅の花笠卷にも

藤原君 二の卷

藤原の君オ一
源氏にて藤原君といふは、梅花笠の卷に、左大將
おと〻源氏におはしませと、母藤原氏なりとある
にて思ふへし、すへて、いにしへは、親王たちの
御名、御母方御乳母なとの氏をもて、つけ玉ふ事
なり、

心たましひ
としかけの卷、一世の源氏の、心たましひ、人に
すくれ、

よかるへきなんとの給て
んは、衍

岩のうへの
伊勢集六帖、いははほ、いはの上を、すみかにしたる、あしたつは、
ちよをのとかに。おもふへきかは、

あしたづのうつるウ二
うつるは、ゆつると同響相通なるべし、萬葉十一、
鳥玉の、夜渡月之、湯移去者、とあるもうつりな
はにて、同響相通也、

大い殿のたいふウ四
異本此下に年廿とあり、今案廿の下四三等の字い
づれか一字ありしなるへし、

十一郞ちかづはオ五
年いくつとか、有しならん

八の君ウ五
左衞門督の北の方と七卷に見ゆ、此卷の末にも、
民部卿殿の御方七君とみえたり、今一人式部卿の
御方、こ〻に落たり、

なかやオ六
萬葉十六、橘之光有長屋爾、

大郎さいオ六
おほきさい、太后なり、ほんさいとあるは、本妻
なりこれはいぶかし、此本に大郎とあるはさいの
詞いかゞ

とのにさふらふとは中のおと〻にウ八

實忠の詞なり、中のおとゝは、あて宮をいふなり、
下文ォ九にもみゆ、

すもりォ九
和名抄○呂氏春秋云、鷄卵多毈須毛里、野王按毈者卵不毈也、大和物語故中務の宮、
なき人の、すもりにたにも、なるへきに、
いまはとかへる、けふのかなしさ、
すもりにと、思ふ心は、とゝむれと、
かへあるへくも、あしとこそきけ、

かねまさゥ九
なかたゝの父、かね雅、いまだ俊蔭の娘をたつね出たまはぬさきに、一條の宮にすみ玉ふ頃なるへし

玉のうてなゥ十
六帖何せんに、玉のうてなも、八重葎、
おへらんやとに、君とこそねめ、

平中納言ゥ十一
七の巻にまさときと、其名みえたり、

はなさくらォ十三
櫻花といふにおなしけれとも、六帖に花さくらをは、櫻とわかちて出したれは、しはらく異物として、たゝ花の大きくうつくしきをいふべきにや、

ふる雪ともォ十四
六帖かきたれて、ふる白雪の、君ならは、
あなめつらしと、いはまし物を、

のちおひォ十五
古今物名のちまきの、おくれておふる、なへなれは、
あたにはならぬ、たのみとそきく、

すもり子のゥ十七
上文ォ九實忠、かひのうちに、命こめたる、かりの子は、君かやとにそ、かへさゝるらん、

こりすまになんォ十八
古今こりすまに、又もうきなは、立ぬへし、
人にくからぬ、世にしすまへは、

こゝは大將殿ォ廿一
巳下三十五行給のさまをいへるか誤入しなり、

かむつけの宮ォ廿三
上野宮よりあきら、七巻にも出、親王にて上野國の守なれば、すなはち、かんつけのみやと申なり、

京わらはべォ廿四

古事談二件雜色於天下依爲無雙京童部高松之車副等不及敵對云々、同同京童部集て天下の事ともを語申けり、○太平記にも往々、京童部の略頌あり、今俗にいふ地廻り、若い者男達など云類か、

つちをまろかしオ廿五

土を圓かし、沙をあつめて、佛像卒都婆をつくること、大功德あるよし、經說におほくみえたり、

一月に一石四斗七升カ廿六

日にても月にても聞ゆ、日ならは一合つゝ、四十九日にて、四升九合なり、これを三あはせて、一石四斗七升なれば、一合つゝ一日に三度なるべし、なし給へらは大とく

ら、はの下脫語あるべし、

せまれしれたるカ廿六

たゝこその卷には、くちのせまりまとひたるをめして、又源氏少女の卷に、せまりたる大學の衆とて、わらひあなつる人もよもあらし、

學問科カ廿七

千載大江匡範學問料申けるに、たまはらさりけれはよめる、

思ひやれ、十夜にあまれる、ともし火の、かゝけかねたる、心ほそさを、

續世繼星合の卷、ともし火ののそみとあるも、即燈湯料の事なり、○延喜大學式、凡諸博士學生等計宿給燈湯料錢明經博士十五文先生十文後生五文、

すくろくのぬしたち廿八

上文にいへるはくちどもなり、

ひんかし山なるてら云々カ廿八

下文にいふ道隆寺なりたうのゑは搭供養なり、

道隆寺カ廿九

見捨茶抄、

こゝはかんつけの宮オ廿九

以下六行餘例の給詞のまぎれ入しなり、

あたはとくをもちてオ卅

老子六十三章、報怨以德、

こゝに大將殿カ卅

已下三行例の給也、

いろふし三十一オ

源氏みをつくし、かくくちをしききはの物たに、物なもひなけにて、つかうまつるを、いろふしに

思ひたるを、○面目と云ほどのことなり、
こゝはてら云々三十二ウ
以下三行例の給なり、
とよのあかり三十二オ
朝廷公事ならでも、なぞらへて、私の宴樂をもい
へり
うちあけあそふ
竹取此程三日うちあけあそふ、よろつのあそひを
そしける、古事記樂ウタゲ(ちあの反たも也)顯宗紀、室壽辭、拍上
賜吾常世等云々釋紀云、飲酒義也、
こゝはかんつけの宮卅三オ
以下十行給也、
はまゆか
字鏡、䅧(波萬由加)、はまゆかは帳臺の事をいふ、其さま
は、假字裝束抄にみえたり、
三春三十三ウ
次巻に致仕大臣と有、七條殿とみゆ、後に四條に
住給ふよしみゆ、
人の國
人の國は、唐といふにはあらす、五畿内をさして。
中華といふにむかへて、七道の國々をさして、い
ふなり、他國などいへるもみな同し、
むくにをさむるに卅四オ
六ヶ國の受領を經しにや、
しりがい
和名抄、鞦(之利加岐)卅四ウ
なつき卅五ウ
名簿の書樣台記、及、明月記、等にみゆ、
たからにはぬしよく卅七ウ
たからにはぬしよくそのかみの諺なり、實は持た
に、えりきらひして來らすと、いふなるべし、
ちひさくてやまひ卅八オ、
ちひさくては左大臣との、、幼稚にておはしませ
しほどの事をいひ出給ふなり、異本非なり、
たからの王卅八ウ
としかけの巻に、
まつりはらへ
字鏡、解奏、(波良戸祭)、
うちまきによね
打まさは、米をうちちらすなり、物いのる時、す

るわざなり、今昔物語にうちまきに、鬼のおそれたるよしみゆ、

うこま 卌九オ

和名抄、胡麻 訛云于古未、按ずるにその色くろきはりいふにて、烏の字なるべし、くろまめを、烏豆と和名抄にあるにてしるべし、

みそ

和名抄、未醤、

はゝとゐじて 卌九ウ

此五歳はかりの男子の母の市女を怨すに、こゝと有て其腹立に、父大臣に母のみそかに、苑の橘取て參らせしことをいひつくるなり、

こゝは七條殿 四十一オ

以下七行例の給なり、

さひづゐ 四十一ウ

和名抄、鉢佐比 都恵、鋤鐲也、

御返事はいふ 四十三オ

はの下「とりてまゐらせん」なといふ詞脱せしか、

こゝはちじの 四十三ウ

以下九行給也、

鳴ひと聲 四十四ウ

夏の夜は、ふすかとすれは、ほとゝきす、
　　なくひと聲に、明るしのゝめ、

いかでねまつに 四十五オ

根松に、寢待をそへたり、

女御の君の御はら 四十六オ

此親王は、あて宮の御甥なり、

またしにけるよしみね 四十六ウ 云々

ゆきまさのなりたてを、こゝにいへり、

けうやく 四十七オ

としかけの巻、

こゝは大將との 五十オ

以下七行例の給なり、

やさせであてみや、

此上に、あこ君といふ事脱しか、

ちゝぬし 五十一オ

此上脱文あるべし、みむすこは、帥の字なるべし、父ぬし云々は、帥をいへるなるべし、

わきざし

腰さしからは、あて宮の父殿へも、媒へも、賄賂

せんといふ事か、
つぼしり五十二オ
和名抄、坩 和名都保今按本謂之壺尾謂之坩 壺也
あとかたり
後撰雜四、あとうかたりの心をとりて、かくなん
いひつかはしける、○袖中今あとかたりは、なそ
なその事なり、
拾玉 さそといはゝ、まことにさそと、あとうちて、
なやうやといふ、人たにもなし、
ひそく
源末摘、御臺ひそくやうの、もろこしのものなれ
と、○ひそくは飯なともる器にて、青磁のやきも
のなり、
こゝはそち殿云々五十三オ
以下十四行例の給なり
二百石がけん五十三ウ
二百石の入用をかけて、つくらせんとにや、
女人はたひのそう五十四ウ
上文、宰相の帥、滋野の眞菅とて、年六十斗にて、
子ともあるの道にて、うしなひてのほりきたりと
有、其事を今いふなり、
よきぬす人五十六オ
竹取、かくやひめてふ大ぬす人云々
ふかきあたこ五十九オ
ふかき寇と、いひかけしなるべし、
六帖 我爲に、河のあたこの、山なれや、
こひしと思ふ、人のいるらん、
聞え給ぞかし六十オ
こゝに脱文あり、異本にて補ふべし、巻末に別記
せり、
草葉にかゝる六十ウ
松の木に、なくとありて歌に草葉にかゝるとある
はいかに、
かしかましのもせにすたく、虫のねよ、
我たに物を、いはてこそ思へ、
曾丹集に此歌なし、もしはこのうつほの歌を、お
ほえたかへしならすや、
こゝは大殿六十一オ
以下十六行給詞なり、
たはれたけいで六十三ウ

たはれ心のたけくして、といふ意なるべし、

おまぼり六十四オ

まほりは、まうほりの約語なるべし、

雲のふね六十五ウ

伊勢集、亭子院御時長恨歌御屛風に、　雲の舟たに、なかりせは、世をうみ中に、たれかとはまし、夫木卅三同

秋あさみ六十六オ

古今　天川、もみちをはしに、渡せはや、たなはたつめの、秋をしもまつ、

こゝはかはらに六十七オ

以下七行給也、

玉のはこ、

皇嘉門院歌合　こひわひて、仲中十四　おつる涙の、雅親　玉ならは、あはこの數に、過やしなまし、

宣化元年詔曰、黄金萬貫不可療、白玉千箱何能救冷、

梅の花かさ　一名春日詣　三之巻

此物語卷々の名つけたるやうをみるに、此卷の名春日詣といふかたや、よしあらむ、

梅の花笠と名づくるは、此卷の中の歌に、立よれは、梅のはな笠、にほふ野も、なほわひ人は、こゝらぬれけり、とあるによれり、

のりしり一オ

騎尻にて、馬にのり、尻にたちて、供養するものなり、

あをに二オ

衣服令なとには、黄丹とかけり、これをワウニと訓れとも、おもふに音訓ましへ、いふべきにあらざれば、もとはあをになるを、後にそのひゞきのおなしきによりて、かり字のやうに、かくもかけるなるべし、そのもとの色は、丹に靑をまじへたるにと、あるなり、

いろ〳〵のあてより三オ　と印にはイヂイ

和名抄幄、　四聲字苑云、於角反、和名阿介波利大帳也、

この宮にさて給こそこたみなり三ウ　よそイ、と印

或云、こそはとの字にて十度なりとにや、一本によそといへるもいふかし、四十度まうて玉ふ事いかゝ按するに、此本にそこたみとあるにて、若干(ソクバク)度の意にて、聞ゆるやうなり、

ちんのをのこオ四
　ちんは沈にて、沈香なるべし、陣にはあるべからす、増鏡かつ　あす　限のふねに、麝香のへそにて、衾きたる男つくりて、云々とも有、
みのむしつける云々ウ同
　これも沈香もて、つくれるなるべし、
あはれけふはウ四
　以下和歌序、
春をさゝる草
　此題序文にみえす、
時にのそめるさくら
　下文、さほひめの歌こゝに入べし、
兵部卿少輔ウ八
　藤原君の巻に、兵部太輔と有、
秋をまつこの葉オ十
　夏をもよほすむしの、下に有べし、
冬をいなぶるオ十
　いなふるは否の字にて、いやに思ふ意なり、
まさるにたえぬ月ウ十
　已下二題ともに、上の序にみえす、

一條との丶をかはれたるオ十一
　たゝこその巻に、一條の北方俊蔭か奉り給へりし琴を、大將に一萬石に賣たることあれば、それを買得玉ひしをいふなり、但としかけの巻に、かたち風をは、左大臣つねたゝに奉り、みやこ風を、東宮の女御にたてまつるよしみえたり、こゝにみやこ風とあるはいかゞ、
くらぶ山オ十一
　鞍馬山をくらふといふ事、中頃よりあれども、誤なり、くらふ山は近江なり、按するに、此物語もくらふといへる定にて、くらまと有しにはあらす、下のたたこその歌に、いにしへに、けふをくらふの、山風は、といひかけたるにて、くらぶなることと、あきらかなり、くらまとおぼさんは、中〳〵にわろし、
おもとしウ十四
　母をいふ、曾丹集長歌、おもとしのちふさのむくい、これは乳母をいへり、
つまもとより血をさしあやしてオ十九
　おのかたふさの血をかけあやしてと、としかけの

以下七葉桂の巻なり、
いとけうある廿七
此下に次の廿八葉一枚、ここかなより、すのこにまて、を入べし、○
此巻の末廿一ふぢのかゝれる松の枝なからをりて
云々、以下ふたゝひまきれて、田鶴村鳥の末に、
出たり、かれは、こゝにくらふるに誤すくなくみ
ゆれは、錯簡とて、むけにすつへからすかし、か
へあはすへし、
たゝこそ四之巻
見おふさん二ゥ○
見終にて、そのかなならむか、考べし、
ひとつこ三ゥ
伊勢物語、ひとつこにさへありければ、
これをいなにて四丁イ
これを、はなちてなるべし、放棄の意にて、是を
のけていといふに同し、
みそかけ七ォ
和名抄、衣架美曾加介、
おい〱しき同
榮花物語、月宴、みやす所も、きよげに、おはす

巻にみゆ、
なるゝは十九ゥ
古今戀五、よみ人しらず、
みても猶、又もみまくの、ほしければ、
なるゝを人は、いとふへらなり、
此歌にや、
つるてふ名廿ゥ
或云、今もわらはへの言の葉に、つるは雄とな
けは、雌、子となくといへり、
をかしき松廿一ォ
或云、をかし松といへるより、下みたれたりとみ
ゆ、たづのむら鳥の巻に、又此前ふたゝひ、みだ
れ入たり、されどあひてらして、心得らるもあれ
ば、かれをもすつべからす、
このり弓廿二ォ
巻七に此時の事くはし、
御返しなし廿三ォ
一本以下、嵯峨院の巻に、つゝきてかはて、中宮
よりおほきおとゞへその日云々、とつゞくなり、
右左大將かつらに廿三ォ

れとものおい〳〵しく、いかにそやおはして、
こゝはちかけのおほいとの ォ八
例の給なり、
すか原や ヤ九
こゝにのみ、我世はへなん、すか原や、（よみ人しらず）（古今雑）
ふしみの里の、あれまくもをし、
そこにもまゐりこぬ ガ十
まゐりこぬは、そこにもおかぬといふ事なり、来をゆくといひ、ゆくを来といふ例多し、
夢かたり ォ十一
こたち何かな、いひとゝめむとて、夢物語して、心にかけさするなり、夢見あしかりしなといふなるへし
たまのうてなも ヵ十一
何せんに、玉のうてなも、八重葎、（六帖）（むくら）
生らんやとに、君とこそねめ、
こゝは、ちかけの大殿 ォ十二
例の給なり、
名たかきおび ォ十三
源若菜下、なたかきおひ、御はかしなと、

あめのした、さかさまになるとも ヵ十六
下文 ヵ廿二 よをさかさまになさん、又下文 ヵ廿四 〇菊宴下、今は世をさかさまになすとも、おほしかへすべきにあらず、〇春日詣、天の下は、さかしまになるとも、かくなり給ふ世を、みんすらむとなん、おもはさりし、〇源須磨、天のしたを、さかさまになしても、おもふ給へよらさりし御有さまを、
たかはゝ ォ廿二（たゝイ）
たゝは、即たゝこそなり、たゝ君、たゝこそ、なとあるは、いさゝかうやまひていふ詞にて、みつから、又は父なとの詞には、たゝとのみいへるなり、冊子の地、又は他人よりいふ時には、たゝこそ、たゝ君、なといへり、下文に、たゝとのみいへる所三あり、一つは、みかとの〻給ふ詞、二つは、右大臣の詞なり、こゝも右大臣の詞なり、思ひ考べし、
これはちかけのおほいとのなり（印本におとあり）
例の給なり、
みやこ風 ォ廿八

としかけ巻廿一ウ　東宮の女御に奉りしよしみゆ、
よとむべき哉廿八ウ
古今叢淀川の、よとむと人は、みるらめと、
なかれてふかき、心あるものを、
あさみこそ卅五オ
後撰あさみこそ、袖はひつらめ、涙川、
身さへなかるゝ、きかはたのまむ、
あさちにつけたし
上文にみゆ、
たこのうら卅五ウ
たこにたゝこそをいひかけてよめり
かのとしかけのぬしの卅七ウ
次の春、月詣の巻に、此琴のことみゆ、○としかけ二十二オに、かたち風を左大臣たゝつねに奉りしよしみゆ、
これ一條殿のほろひ給へる所
例の給なり、
祭のつかひ五之巻
山岡氏曰、此巻は吹上の巻に次て有べし、
賀茂祭、次に五月五日の競馬の事、次に祓、次に七夕の交會、有て其下に秋の事どもみえたり、
いてたち給ふ一オ
たちはたゝしの約か、
てぶり二オ
供人、陪從に手振といふあり、
人さへかたりきかせ四オ
吹上の巻にみゆ、
つくはねのますかけなしと四ウ
古今つくは山、このもかのもに、蔭はあれと、
君かみかけに、ますかけはなし、
御むこならスイなイ所六オ
下にも御智とあれは、むすことあるは誤なり七葉オにみゆ
あなたの北方の御まへ
おほいとのゝ御方を、いへるなるべし、これもまさよりの簾中なり、
あし御覽七オ
今日馬の足なみ御覽しえらひ玉ふなり、今も祭の試あるは、競馬の習禮を、足揃といふか如し、
よひのりて

下文ヵ八はひのりつゝとあり、萬葉五、長歌、あこ
こまにしつくらうちおき波比能利堤、

一番に云々ゥ六
此十番の競馬、勝負の事しるせし、おの〳〵おな
しからす、よくかへてかけるものなり、

かさのみこ
異本は非なるへし、源氏夕霧にも、

かゝるほとに殿ォ八
左大將まさよりなり、次に右大將かねまさ、司の
佐巳下ひきゐて來り給へり、此卷すへて左右の文
字たかへり、

ものゝふし
風俗神樂催馬樂なとの諸物のふし、はかせ心得た
るものともを、物のふし等のいふ也、源氏松風に、
近衛司の名高き舍人ものゝふしと有、花鳥にいは
く、今案、物節といふは、近衛舍人の中に東遊に
達したるものを、物節と稱す、

はひのりヵ八
上文

うまゆみ

なもちの御からひつヵ十
騎射和名字末由美
常のよりはたけのなかくてあれば、長持のからひ
つとはいへるなり、今世の、あしなかもちと云即
是なり、

左のおとゝヵ十一
さねたゝ、さねより、等の父なり、國讓の一の卷
に、うせ玉ふ事みゆ、まさよりの御兄の、よしか
の卷にみゆ、このおとゝの御名、はつ秋の下に出
たり、

とうしのくら人ォ十二
藤氏、一﨟、當使、

さいまつ
壁松か、萬葉一、藤原役民長歌に、まさきくひのつ
まてを云々、といへるをも思ひ、後に轉して、今
さいまきと云ものゝあるも、もとは壁貢木ならむ、
さてここは、續松と同物なるへし、落久保物語淸
水詣の所にも、さいまつのかけにて、車のうちみ
たる事有、

さねたゝをたにォ十五

民部卿さねよりは、宰相さねたゝの弟なり、まさよりの四の君にあはせ給へるよし、藤原の君の巻にみゆ、〇下文かねよりは、異本にさねよりと有かたよろし保孝後按

こしさぬさしなど十六オ

源氏胡蝶、物のしどもには、白き一かさね、こしさし、などつき〴〵に給ふ、河海に、腰差、花鳥に、疋絹を腰指といふは、腰にさしはさむ物なればなり、山岡氏いはく、下部に玉ふにや、かは腰にかいさしいるれば、此名有なり、されはそれよりして、巻絹を、腰絹とも、こゝにはいへるなるべし、

式部卿のみや十八オ

式部卿宮より、中將まて、七人ともに御聟なり、保孝後按に式は民の誤か下にいふへし

もえ松十九オ

山岡氏云、上の歌に、枝しけみ露たにもらぬ、木かくれに、といひ下の歌に、我たのむ、千とせのかけは、もらさすして、といひ又次の歌に、もるともなけの松のかけなどいへる、みなおなし、非なり、こゝにもえ松とあるはいかゝ、百枝松をあやまれるか、萬葉人麿長歌、百兄槻木虚知期知爾とあるに同しきか、萠の意にはあるべからす、

こち風

山岡氏云、萬葉に、東風あゆのかせとあり、今本人丸集物名美濃、わたつみの、おきにこち風、はやからし、かのこまたらに、波たかくみゆ、ちは風の古言なり、それに又、風とそへていふは、あらしの風、しくれの雨、と同例なり、

中將十九ウ

七人の御聟六葉オ考へし

中君の夫、　中務宮、
三君の夫、　民部卿さねまさ、
四君の夫、　中將さねより
五君の夫、　民部卿のみや上文に式部卿宮とあるは誤なるへし
六君の夫、　左衛門督きよまさ
七君の夫、　藤宰相たゝとし、
八君の夫、　右大臣たゝまさ、

ふねみて十九ウ

山岡氏云、舟編ては御直とも、わたさん舟とも

を、あみつらねて、浮橋として わたしたるか、又は、あはなの誤にて、並てか、萬葉に、馬並てなとよめるに、同義か、

ひしオ廿

和名抄菱[之比]

水ふふき

和名抄莕[三豆布々木]、

山もゝ

和名　楊梅、

ひめもゝ

春霞、たちかくさなん、道のへの、

　かさねにさける、ひめもゝの花、

山岡氏云、李桃は、毛のなくて、その實つやゝかなる物なれは、毛桃に對して、姬桃とはいへるか、

ひろひたて

山岡氏云、下文御たいの前に、なたしかなる石かとある岩なと、ひろひたてたるなかより、河のわきたる瀧落たるなと云々と有同語也、按するに、ひろふ意にてあらて、俗にひろけるといふにおなし、

かくらウ廿一

下文にかくら十七日になんすへきと有、此神樂は

夏かくらなりオ廿三

おほやけのうつはものオ廿二

源氏はゝきゝ、男のおほやけにつかうまつり、はかはかしき世のかためとなるへき、まことのうつはものとなるへきを、取出んには、

人しき[うへイの印]

禁中の職にて、大臣の座をいふなるべし、枕草子にも、中宮職の御さうしにおはします頃と有、

おほきみまさはといふ聲ふりにかううたひ給ふ

催馬樂[我家]わいへんは、とはりてうをもたてたるを、おほきみきませ、むこにせん、みさかなに何よけんあはひさたをかかをよけん、此歌のふしにそこふかき[━━歌]今の歌をうたふなり、

いせの海のこはふりに

同[伊勢海]、いせのうみの、きよきなきさに、しほかひに、なのりそやつまむ、かひやひろはん、玉やひろはん、

おほぬさならぬオ廿五

伊勢物語、
神もみゝとゝめなん
　そこみえて、なかるゝ水の、早けさは、
　　はうふることを、神もきくらん、
ひろひたて、
上文にみゆ、
神たにもきゝいれ廿六
上文歌、あふことの、なこしのはらへ、のつゝきの詞に、けふの、みそきは神もみゝとゝめなんと、いふにむかへみよ、
はゝはゝはゝ廿七ウ
以下四行給詞なり、
らうすけ廿九ウ
兵衛佐、良峯、ゆきまさを、らうすけといへり、良佐なり、
にしかはら三十オ
桂河也、上にさかの桂河のほとり、大將とのにてせられし事そ、賀茂川を東川といふに、むかへて西川といふなり、
しこふち卅四オ
塵添埃嚢抄云、モノゝゲスシキヤウナルヲ、シコブチト云ハ、正字イカン、此事サセル本說ヲキカス、タヽ世俗ノ事バ歟、日本紀、忌部連色弗ト云人名アリトミエタリ、コレヲミレハ、色弗トカクヘキニヤ、件ノ人、形體ゲスシクシテ、シコフチナリケルヤラン、按ズルニ、此說トルニタラズトイヘドモ、中頃ハヤクノ俗語ナルコトシルヘシ、コハ醜ナルヘシ、ブチノ詞未攷山岡氏云、醜物ナルベシ
たかき山卅四オ
竹取物語、船にのりては梶取のまうすことをこそ、たかき山ともたのめ、續詞花神祇、かたをかのやしろに、かきつけたりける歌、
　　　　　　よみ人しらず
　かたをかと、人はいへとも、我はたゝ、
　　たかき山とも、たのまるゝ哉、
くら人もくのすけ卅五オ
そちの次郎なるべし、
少將ぬし卅五オ
そちの太郎なり、

たちいき
　その三郎なり、藤原卷に此人の歌有、
ひねりふみ
　齊明紀　短籍、
こゝはゝいはいれ給云々
　山岡氏云、いかはかり崇敬て、祭典にあひ給ふ、
　先聖先師をさして祈願詞なり、
院より出たる
　山岡氏云、勸學院の學生の、及第出身せし人の外
へ出たるをいふ、
はたこふるひ
　下文給詞によるに、たこのかみのあるしする日と
有しも、あやまれるか、
こゝは勸學院卅八ゥ
　以下十三行給詞なり、
さはやけのしる
　和名抄菜羹類、黃菜俗云王佐以一、〇延喜式膳內 漬春菜
料蔓菁黃菜五斗料韲三升、
　春風の、けさはやけれは、鶯の、
　　花の衣も、ほころひにけり、

山岡氏云、俗にいふモヤシなり
なになりなん四十一ゥ
　名をれに、なりなんなり、
ふやわらは四十二ォ
　下文にも、とうゑい卑下して、かくいへり、文屋
　童は學生につかはるゝ下部か、
八韻のふみ四十二ゥ
　山岡氏云、卽八句四韻の詩をいふにや師說此說非な
るべし、賦なと又さらでも韻を礎て文をつくれは、
こゝも文なり、詩にはあらじ、保孝按排律なとを
いふには、あらさるか、うちまかせて、文ともき
こえぬなり、
もろずゝ四十三ォ
　諸誦にて、もろ聲に誦するにや、
さとわらふ
　榮花月宴、女房たち、何となくさとわらふ、
ことしは卅一
　上文に、とし卅五といひ、又入學してことし廿餘
年と有、
さうのつきん

上文入學して、ことし廿餘年、いまたさしのねん
　にあつからず、
人のために 四十六オ
　有しなりけんを、心得たかへたるなるべし、
　山岡氏云、人のためには爲人と書て、人となりと
あらかね
　此、枕辭、萬葉になし、菅萬古今序なとよりみゆ、
かひなくて 四十八ウ
　とうゐいあてみやにけさうしたるに、えしくかへ
　るこゝろを、いへるなり、
まきの板戸は
　古今戀四 よみ人しらず 君やこむ、我やゆかむの、いさよひに
　　まきのいた戸も、さゝずねにけり、
こら風は 五十オ
　浩句誤字有、
おほつかなまだふみせぬ
　拾遺雜下、高尾にまかりかよふ法師に、名たち侍
　けるを、少將しけもとか聞つけて、まことかとい
　ひつかはしたりければ、八條のおほい君、
　　なきなのみ、高尾の山といひたつる、
　　　君はあたこの峰にや有らん、
りんたんの花 五十二オ
　むらさきなれはしほかてかきしなるへし、
　沖津白波 一名初秋 十一之卷
かゝるほとに左大將殿 一オ
　此巻いとみたりたりとみゆ、拾六葉七月朔日とい
　ふを、此巻のはしめとして、さて拾七葉よみて、
　廿四段 ことしは、わせのよねいとおそき年なりと、ある
　よりここにかへりてよむへし、
ふずく 二オ
　和名抄、粉粥 以米爲之今按、粉粥即粉熱也
承香殿のみやす所 四ウ
　齋宮御母なり、うせ給ふよしは、樓上巻にみゆ
かねまさかもとに 六ウ
　かは御の誤なり、御もとゝは、まさよりをさす、
　しかなくては此所不通 保孝、後按 再按に、さては又承香
　を女御といへるいかゝ、猶よく考へしいつれにも
　誤有べし、
女のせんにうたて 九オ
　源氏少女、ひはこみ女のしたるに、にくきやうなれ

とらう〳〵しき物に侍れ、

おひのよ十ォ

うまれてより今のとしまてといふ事ときこゆ、なかたゝは廿餘の若人なり、老の世とみつからいふへきにあらねはなり、

むまふね

和名抄、槽和名馬舟同馬槽なり、大和物語のこりたるものは、うまふねのみなん有ける、

はりかは

張革は的にや、又は今いふあつちのかはりに、かゝるものたてゝ弓を射にや、

おまへに十四ゥ

父の御前なり、

宮にまゐらん十五ォ

東宮なり、

これは右大將十六ォ

一行ほと給詞、

七月ついたち十六ォ

これよりを、此卷のはしめとすへし、くはしくははしめにいへり、

しりてまとはん十八ォ

古今何かその、名のたつ事の、をしからむ、

しりてまとふは、われひとりかは、

すゝしのあそむふきあけのはまに廿ゥ

吹上の下の卷、神泉苑の御幸に、女一宮をなかたゝに、あてみやをすゝしにと、定め給ひしことあるを、此所にては、吹上のみゆきの時のことゝせり、わさとさたかならす書かへたるにや、

天子答ことせす廿一ォ

禮緇衣篇、王言如糸、其出如綸、王言如綸、其出如綍枕冊子三段考合すへしこゝをとりて書るにや、

けふ初秋とつくるなるへし廿六ォ

此歌によりて、卷の名を初秋とはつけしなり、

こゝにみやす所廿七ォ

二行半給詞なり、

源中將は云々卅一ォ

すゝしはたねまついたはりまゐらせぬれば、よろつのみたらぬことなけれは、ふさはしからすおほすとなり、

本家卅一ォ

答問雜考に詳也、
人にはしらせんかし卅一ウ
人には勅ありしことはかたられしとなり、
そでこそちゝ一本にこそ卅二オ
いつれも御娘にて、十一君十二君なるべし、
こゝに（左イ）大將殿卅三オ
以下二行給詞、
御ぼに卅四オ
ほにには盆なるべし、盂蘭盆會なり、枕册子百四十八段
七月十五日ほんを奉るとていそくをみ給ひて、
道命あさり
わたつうみに、おやをおし入て、此ぬしの、
ほんするみるぞ、あはれなりけり、
ことしはわせのよねいとおそきとしなりといふ卅四オ
といふといふ所より、初葉のはしめにかへりてよむべし、
ひさこ花卅五ウ
江次第巻八、相撲召合一番、左先出着葵華取劍衣置北圓坐進立櫻樹下次右出着、瓠華
同裏書云、葵瓠華造花也、〇爲忠後百首相撲節、
（寂恵）すゝみいてゝ、ひさこ花とるすまひをさの、
つれ〳〵しくも、きさりよるかな、
（親隆）さしかねて、なけまふよりも、すまひをさの、
ひさこ花とる、けしき先みよ、
（顯昭）夕顔に、あふひの花の、さしあひて、
いつれかいろの、うてんとすらむ、
（俊惠）いつしかと、うらてに出て、うてぬれは、
はつかしけなる、夕顔の花、
いはひそして卅九ウ
いはひそするは、左右の方人をくひに、まくることなかれと、ちからをつけいはふをいふか、そするは、すへて物をつよくいふ詞なり、下文御琴をたまはりてせめさせ給へるに、源氏はゝき、われたけくいひそしはへるに、源氏明石、人々に酒しひそしなとして、みな同し、愁殺、笑殺、の殺の字の心なり、
あふてにしなし五十二オ
すまひによせてかくいへり、
御つし（うイ）五十二オ
藏開巻の、もろこしよりはちかゝめれは、つらしなくともうけたまはりなん、

野にも山にも五十二ウ
いつくにか世をはいとはん、心こそ、
野にも山にも、まさふへらなれ、

やさかす人は五十三オ
一させに、一たひ來ますす、君まては、
やさかす人も、あらしとそ思ふ、

ゆふてもたゆく五十四オ
思ふこと、こふこともいはむ、物なれや、
ゆふてもたゆく、とくる下紐、

したひもとくるは五十四ウ
我ならて、下ひもとくな、朝顔の、
夕かけまたぬ、花には有とも、

なみたのかゝらぬ五十四ウ
物をのみ、思ひねさめの、枕には、
なみたかゝらぬ、あかつきぞなき、

后まち五十八ウ
和名抄常寧殿后町

こゝにふちつほ六十ウ

以下七行締詞なり

かげにはつばかり六十一オ

夢にたに、みゆとはみえし、あさな〳〵、
かゝみのかけに、はつる身なれは、

とうなんくれん女云々六十七オ
白氏文集新樂府海漫、不見蓬萊不敢歸童男丱女舟中老、

ないしやく七十一オ
後拾遺賀、大中臣輔長はかまきはへりけるに、内外戚のおほちにて、輔親公資侍るをみてよめる、

藤原保昌朝臣、

かた〳〵の、おやのおやとち、いはふなり、
この〳〵千代を、思ひこそやれ、

内戚は父方、外戚は母方なり、

かきなすことの八十七オ
秋風に、かきなすことの、聲にさへ、
はかなく人の、戀しかるらん、

えんの松ばら
哀れにも、今はかきりと、思ひしを、
まためくりあふ、えんの松はら、

拾芥抄、匡遠本宣秋門北、掃部寮西、近衞南、朱

雀西頭、
なかた丶九十一オ
上文に、出家せるよしいへるは、後を前にめくらしかけるなり、此次の巻にさまかへたること有、
たけくま九十六ウ
神中抄引古歌 我のみや、子もたりといへは、武隈の、はなはにたてる、松も子もたり、
拾遺集夫木廿一 たけくまの、はなわにたてる、松たにも、わかことひとり、ありとやはきく、
こそてし百ウ
古今十四紀友則 こそてしはたかことにあたる、小山田の、なはしろ水の、中よとにして、
上いかてこの内侍督御らんせんと百六ウ
此一段大和物語によりてかけり、又此段をとりて源氏螢の巻はかけるなり、
まれにあふ夜百八オ
こひ〳〵てまれにこよひは、あふ坂の、ゆふつけ鳥は、なかすもあらなん、
する百十四オ
和名抄容飾具、假髪和名須惠、

ひたひ
同、蔽髪和名比太飛、
さいし
同冠帽具、簪子此間云釵子、上音如オ
ともゆひ
同容飾具、髻和名毛止由比、以組束髪也、
装束きようにせすとて
蔵ひらき上之巻十二一オ
せずとて、にてせんとての意なり、せんずといふを、約めて、せずといへるなり、
上かけたり二オ
古今集十六 家に有し、ひつに鏁さし、をさめてし、
戀のやつこの、つかみかゝりて、
うへをこぼちあけ侍らん六ウ
保孝按、うへはもと上とありけん、上はすなはちみしきやたてごのくらあけたる所九オ
こゝには鏁なり、
給詞なり、
そくひ三十二オ

枕冊子心もとなきものかたくふんじたるそくひなど、はなちあくる心もとなし、江次第續飯、

さうかい三十四ウ

あて宮卷、くつかたし、さうかいかたし、

一たびさたびほゝさわらふ三十五ウ

下文四十ウ上下ひさたひにほゝさわらふ、榮花月宴、ほゝさわらふはや、

三のみや三十八ウ

仁壽殿の御はらなり、十の宮までずき〳〵におはします、

さけをたうへて四十六オ

催馬樂飲酒に、此句みゆ、

御丁のみちには云々四十六ウ

以下給詞歟十行程

むすひもの四十七ウ

國讓卷、東宮は、しろかねのむすひものども、こほたせたまふて、

あまつら五十四オ

和名抄飲蜜類、千歳藥汁、

東路のかひのうちなるつる六十二オ

和名抄、甲斐國郡名、都留豆留、

これは右のおとゝ六十三ウ

給詞以下十三行

しさ六十六ウ

靈異記下卷卅八條、

しうのねにや六十八ウ

琴の音を卑下して、とかく聞え給ふなり、

ころこひ七十四オ

ころはよろなるへし保孝後按

さしたてまつり七十四ウ

或云、さしは今いふ丸のたくひか、按するにたゝ詞にても聞ゆべし、

御せこし給七十四オ

御をこし給ふといふにおなし、

つきもし奉らは七十五オ

遊仙窟云、輝々トシテ面子ノ荏苒トシテ畏ル彈穿、

花のかたはらの

源氏紅葉賀、立ならひては、花のかたはらのみやま木なり、源氏のは、源氏を花にたとへ、頭中將をみ山木にたとへたり、此物語のは、仲忠大將を

花にたゝへ、仁壽殿女御の彈正宮をときは木にたとへていへり、

きんのうるし七十六オ

和名抄、膠漆具之金漆和名古之阿布良　濱松中納言物語四、たゝなよりたる髮かきいて給へれは、いたゝきよりすゑまてつゆかくれたるすちなく、誠にきんのうるしなとのやうに、影みゆはかりつや〳〵として、○榮花初花　花山院の御車は、きんのうるしなといふやうにぬらせ給へり、○同玉の臺　御まへのかたのいぬふせきは、きんのうるしのやうにぬりて、

さりけもなき人八十一オ

なかたゝの子もりをし給ふを、わらはせ給ふなり

○藤壺ここに八十八オ

繪詞、

きたのおとゝこれせイ九十一オ

繪詞、

いかに〳〵九十三オ

いかにいかゝ繪詞不載、かそへそふへき、八千とせの、あまり久しき、君か御代をは、

くひもすくよか九十四オ

小兒の病を療する書に、顱顖經あり、今俗に、ひよめきのかたまらぬといふは、赤子のほとをいふことにて、こゝにくひもすくよかなりとは、うまれたちの丈夫なるをいふなり、榮花うら〳〵のわかれかしらたにかたくおはしましなは、一天の君にこそ、おはしますめれと、あるもおなし心なり、

○藤壺ここには百十六ウ

繪詞なり、○は文字衍文、

藏ひらき中十三丁イ本之卷

大將は殿上に十オ

以下七行繪詞、ナシ玉とイ十二オ

なからふとても

なからふる異本、つまふく風の、さむきよに、我せの君は、ひとりかぬらん、

此歌叶へきかニイ、

かしこにとそ侍るめれ廿七ウ

上の鬼女のかきりつとへたると聞え給へるにつつきて、其鬼女は外にはあらしと、五の宮をの給ふなり、

あくめ女イのみ有と卅オ

惡女のみ有との給へは、東宮の御詞を聞て、なかたたもし梨壺のことにやと、むねつふれしといふなり、

御ぞひきやうれ卅オ
やれといふ詞を、音便にてやうれといへるなり、又按、やられの誤なり、

こゝは玉 なしつほ卅ウ
給詞、

けふあらはるゝ
今よりは、ゆふかけてこむ、千早振、
かみあらはるゝ、所なりけり、

みると聞ゆる所卅四オ
女御は、いぬ宮をちかく見給へは、みすてゝのほりかたくおほすを、みかとはよそにと聞玉へれは、愛し給ふ御心うすきとのたまふにや、

下 なくてちりにし五十四ウ
古今 みる人も、なくてちりにし、故郷の、
もみちはよるの、にしきなりけり、

上 一條殿は四十九オ
給詞、

かうしをへなけて五十四ウ
潘安仁か故事によれるなり、建禮門院右京大夫家集、隆信家集、唐物語などにもみえたり、あはせ考べし、

これは一條殿五十五オ
給詞、

こゝはイ 三條殿の六十五オ
給詞、

國讓上 十四之卷 (俗本云)國讓中經文不知他日可考

かへうあるしはしめ給し時二オ
としかけの末に此事みゆ、

御こて物二ウ
さしかけの末に此事もあり、

かの山ざと五オ
さねたゝの、北方志賀の鹿に作給ふなり、

たひ人のれう十四ウ
さとすみのほとを、旅との給へるにや、御供の人々に、玉(イナシ)へとなる心し、

うちもおとろかされたりとも十四ウ
しとろもとろに、のき給へりともと、の給へるな

り、
やみる（イナシ）さか十五オ
　人の親の、心はやみに、あらねども、
　　子を思ふ道に、まどひぬる哉、
いたちのまどゝこそ十六ウ
下文卅九ウに、いたちのなきまのねずみどいふこと
有、こゝもその心にや、さらはどもし一字衍なる
へし、盛衰記卅三、いたちのなき間の貂ほこりど
かやの樣に、
おのれはみそかをどこ云々廿四オ
藤つほの事なり、東宮の御心にかなひ給ふを、ね
たみてかくの給ふなり、
この殿は云々廿八ウ
以下二行半繪詞保孝後按
三條殿に（イナシ）卅ウ
繪詞保孝後按又按るに、此說非なり、下文四十ウ此例有み
るべし、
やんごとなき所々卅二ウ
后のみやなど、なしつほの御子を東宮にど、おほ
したはかり玉ふなり、

だんじやうの宮卅七オ
以下廿行錯簡也、下文四十九オ大將に宮のけふは云々
どある、上へ入べし。
ひきいれてももてきたりとて四十七ウ
こゝより下文六十七オいまたにおくえ云々どあるへ。
つゞくなり、
かくして御返かしこまりて四十七ウ
下文八十四オ聞え給へりどいふよりこゝへ、かへりて
つゞくなり、印本こゝよりどおわけたり、
かへり給ひて右のおどゝ五十一オ
下文六十八オみなかへり給ぬどいふより、こゝへつゝ
くなり、
三條殿五十五ウ
此三字繪詞保孝後按、
聞えさし給つ五十四オ
下文六十八オかくて二の宮どいふへ、つゞくなり、
かくて新中納言五十四オ
下文六十九オこの宮よりせちに聞え給どいふより、こ
ゝへつゞく也
（ナシ）さまの（さく）こきごみ五十七オ

さねたゝの息也、父君を慈て死給ひし事、菊の宴
の下に見ゆ、
聞えさせに 六十七ォ
下文八十四ォ 北方かはらけにとあるへ、つゞく也
いまたにあく(わすれイ)え 六十七ォ
上文四十八ウ もてきたりとてよりこゝへ、つゞくなり
あさすゞみ
保孝按月詣集に此詞見ゆ、数多くは見あたらぬ詞
也、
上文五十一ォ にかへ給ひて右のおとゞとあるへ、つゞ
くなり、
みなかへり給はぬ 六十七ォ
かくて二の宮 六十八ォ
上文五十四ォ 聞えさせ給つといふよりこゝへ、つゞく
なり
この宮よりせちに聞え給 六十九ォ
上文五十四ォ かくて新中納言とあるへ、つゞく
宮より聞ゆる 六十九ォ
いとおかしけに 八十三ォ
以下二行餘衍文なるへし。

聞え給へれは(りイ) 八十四ォ
上文四十七ォ かくして御返かしこまりてとあるへつゝ
くなり
北方かはらけに 八十四ォ
上文六十七ォ きこえさせにといふより、こゝへつゞく
なり

國譲中之巻 十五

きみまかてゝ思やうに侍らは
藤つほ、たひらかにみそこなりなは、さくまうの
ほり給はんよし申給ふなり、
御き丁さして
さしき丁とて、路行ときには、さしかくしものな
り、後世にはきこえす、いにしへはつねにおほし、
むかしを今に
古本 いにしへのしつのをたまき、くりかへし、
昔を今に、なすよしもかな、
つち殿
榮花に多くみえたり
をとこ女こと(みこたちも)まてたき奉り
すけすみの詞なり、自身をはしめ、男女の兄弟の中

にて、藤つほは御子たちをうみ玉へれば、君なりとあふき給ふ心にて、二人づゝそのゐをもせんとの給ふなり、

國讓下 之巻十六
たかとの上 之巻十七
たかとの下 之巻十八
いしつくりてうの ら ツ二オ

續古事談には、石造寺とかけり、太秦佛事に昔攝津國に富原と云所に翁有けり、家のまへなる梅の木、夜々ひかりけり、あやしみて此木を切て、一搩手半の藥師佛をつくり奉りて、丹後國石造寺にうつし奉れりともいふ云々、　山城名勝志云、按、續古事談謂丹後國石造寺者誤歟、宇津保物語屬山城但石作鄕近丹後故或誤爲丹後、後人傳寫重妄者乎、　三代實錄云、元慶三年閏十月五日辛卯勅以山城乙訓郡癸田五町爲元慶寺田、而四段三百十六步返入石造寺、延喜玄蕃式云、凡近都諸寺東拜志以北西石作以北停預講師僧綱檢察、　されは山城乙訓郡に、ある事あきらけし

落窪物語證解

全

落窪物語證解卷之壹

此物かたりは古來能登守順朝臣の作といひつたへたれとさたかにそれとは定めかたし或說に云この物かたりの中に中納言敦忠卿のあひみての後の心にくらふれはむかしは物を思はさりけりの歌を引もちひたる所ありしかるに此うた拾遺集戀部に入たれは此ものかたりは必拾遺以後になれるものにしてしたかふの作にあらさるの證とすへしといへり今なほこれを詳にせんに拾遺は一條院長德年中大納言公任卿の撰といひまたは花山法皇御撰といへり法皇御撰といへる說是なるに近きか後拾遺通俊の序に花山法皇はさきの二集に入らさる歌をとりひろひて拾遺集と名つけ給へりと見え又別に拾遺抄二卷あり拾芥抄に云拾遺抄所ニ書傳花山院御自撰と云々若又長保寬弘五年以前の頃事歟其年月不レ知云々又云公任卿抄出爲ニ十卷ニ被ニ勅撰ニ自由抄出者恐多歟云々なとありてしかとしたる證文はなけれともかく云傳へたるも舊しきことなれはとにもかくにも長保寬弘以前の物なるへししかるに順朝臣の卒去ありしは圓融天皇永觀元年にして花山法皇の崩御寬弘五年を去る事二十六年なりさらは拾遺のならぬさきに豫めしたかふの此歌を引用すへきにあらすはた敦忠朝臣は天曆六年三月薨年三十八歲と公卿補任に載せられたれは家集なといまたもはら公布すへきにあらすなと一途におもひこみしよりかゝるせつも出來しは一わたりことわりに聞ゆれとなほ一つの疑をのこすへきことありいかにと云に天曆六年あつたゝの薨しゝより順の卒せる永觀元年までは三十二年を經たれは敦忠集世に流布せさるへきにあらす若此物かたり其際の作ならんには敦忠の歌猶引用すへきことわりなれは一槪に云へきことに非す

眞淵云おちくほは冷泉院の頃に作りなして中に道賴のおほいとのと書るは忠平公をや思ひけむ御子たちの官のきそひさまいとよく似たりといはれたりしたかふ朝臣は冷泉圓融の朝をへて十六年のゝちに卒し給へりさらは此物語必しも順朝臣に出すとはいひかたかるへし

落窪物語證解卷之壹

此物かたりは古來能登守順朝臣の作といひつたへたれとさたかにそれとは定めかたし或說に云この物かたりの中に中納言敦忠卿のあひみての後の心にくらふれはむかしは物を思はさりけりの歌を引もちひたる所ありしかるに此うた拾遺集戀部に入たれは此ものかたりは必拾遺以後になれるものにしてしたかふの作にあらさるの證とすへしといへり今なほこれを詳にせんに拾遺は一條院長德年中大納言公任卿の撰といひまたは花山法皇御撰といへり法皇御撰といへる說是なるに近きか後拾遺通俊の序に花山法皇はさきの二集に入らさる歌をとりひろひて拾遺集と名つけ給へりと見え又別に拾遺抄二卷あり拾芥抄に云拾遺抄所ニ書傳ノ花山院御自撰と云々若又長保寛弘五年以前の頃事歟其年月不レ知云々又云公任卿抄出爲ニ十卷一被ニ勅撰一自由抄出者恐多歟云々なとありてしかとしたる證文はなけれともかく云傳へたるも舊しきことなれはとにもかくにも長保寛弘以前の物なるへししかるに順朝臣の卒去ありしは圓融天皇永觀元年にして花山法皇の崩御寛弘五年を去る事二十六年なりさらは拾遺のならぬさきに豫めしたかふの此歌を引用すへきにあらすはた敦忠朝臣は天曆六年三月薨年三十八歲と公卿補任に載せられたれは家集なといまたもはら公布すへきにあらすなと一途におもひこみしよりかゝるせつも出來しは一わたりことわりに聞ゆれとなほ一つの疑をのこすへきことありいかにと云に天曆六年あつたゝの薨しゝより順の卒せる永觀元年まては三十二年を經たれは敦忠集世に流布せさるへきにあらす若此物かたり其際の作ならんには敦忠の歌猶引用すへきことわりなれは一槪に云へきことに非す

眞淵云おちくほは冷泉院の頃に作りなして中に道頼のおほいとのと書るは忠平公をや思ひけむ御子たちの官のきそひさまいとよく似たりといはれたりしたかふ朝臣は冷泉圓融の朝をへて十六年のゝちに卒し給へりさらは此物語必しも順朝臣に出すとはいひかたかるへし

今はむかし

○今はむかし　竹取物語に今はむかし竹取翁といふ者有けり云々安閑紀に往歳古語拾遺に久代と書り萬葉十二にうつり行時見る毎に心いたく牟可之の人し思ほゆるかもなど有て詳にはむかしへと云て迎來し方の義にしていにしへと云に同しむなし世といふ義なりなどいへるはいみしきひがことなり

中納言なる人の御むすめあまたもたまへるおはしき大君中君にはむこどりして西のたい東のたいにはなちしてすませ奉り給ふ三四の君にもきせ奉り給はむとて

○裳きせ奉り給はむとて　和名抄に裳釋名云上曰裙下曰裳和名毛　梅枝巻明石中宮十二の時御もきの事おぼしいそく云々西のおとゝに戌の時に渡給ふ宮のおはします西の放出をしつらひてみくし上の内侍なともやかて此方に参れり云々子の時に御裳奉るおほさなふらほのかなれと御けはひいとめてたしと宮秋好中宮見奉り給ふと有し裳あけゝき同時なる證ともすへし藤原君巻にあて宮は御とし十二とけたる二月に御も奉る程もなくおとなになり給ふと有

かしつきそし給ふ

○かしつきそし給ふ　帚木巻に我たけくいひそし侍るに明石巻に酒しひそし榮花物語花山巻に東三條のおとゝ世中を御心の内にしそしておほすへかめれと遊糸日記にいはひそしてなど有てそれぐの上に付て強く云詞にて殺の字の心なりといへり

また時々かよひ給ひけるわかうとほりはらの君とて

○わかうとほり腹　中納言云たれは落の母君は實は本妻なりし成へし　末摘花巻に内にさふらふわかむとほり兵部大夫なるがむすめと有河海抄に王家無差論と註せしを契沖あさりもうけりはれず末に至て短くいひて能註せる處ありつと覺ゆそこを用ゆべしといはれしのみなりこは王家統と書る文字をあてたるかことく皇の御すちといふ事にて二世王より下をすへていふ語なり三の巻に此君の祖父の事を母方のおほちなりける宮共故大宮とも書しを見れは祖父は皇子にて母君は二世の女王なる事しるし

今は母君もうせ給ひしなり　今のなり　また下にましで北の母もなき御むすめおはす北のかた心やいかゝおはしかたの御まゝにて有なも次に引し柚の巻なも併考へしけむつかうまつる御たちの數にたにおほさす

○つかうまつる御たちの　本朝文粋一慰少男女詩
序「往昔閑巻称婦御注俗書貴女為御並取貴人女御と有て御たちの御は女御などのをなりしを末には轉じてよき家の女房をいふことゝなりぬたちを達と書は假字書のみにて實は等の字あたれり
しむてむのはなちいての
○しむでん　貞丈雑記十四云寝殿と云は即主殿なり上公卿の間なり（公卿の間公卿の二間云今時上臥の間といふ）貞衡云寝殿の屋の上は下を檜皮葺にするなり御成次第記に云最初に先寝殿へ入御と云々寝殿と云は公卿の間につゞいたる所なり別所にあらず主殿の一名を寝殿と云道照愚草に云花御所御寝殿に於士御門御座より於彼御殿は萬之御祝言巻たり檜皮も此御殿にて参るなり云々條々聞書に云御主殿は四方なから蔀にて御座候此内殿にて檜皮被下御祝ゐ御座候と有右道照の文と聞書と合せて考知るべし
○はなちいで　貞丈雑記十四云放出源氏梅枝巻に上は東の中のはなち出の御しつらひの事にふかうしなさせ給ひて云々其下文に西の放出をしつらひてみくし上の内侍などもやがてこなたに参れり云々綱流に云花鳥にくはし所詮は兩方に小寝殿あり母屋の中をながらにして御帳をたつるもの也母屋の中を云り外様むきをはなち出といふ也晴の心也花鳥に放出は母屋なり梅枝の巻に東の中のはなち出は東の對の母屋なり中といふは母屋と東西の廂との間に障子を立たる所を中のはなち出といへる也又若菜の巻上にしむてんのはなち出を例のしつらひにて云々又同巻みなみのおとゝはなち出におましよそふ云々同下文にわかな参りし西のはなち出に御帳立て云々嘩花抄に云寐殿なり云々右はなち出の事源氏物語の諸註にては母屋をしきりたるを放出と云様にきこえてたしかならざるごとし用ひかたし按ずるに今昔物語（北邊大臣の條）云前のはなち出の障子の上に物のひかるやうにみえければ云々又同書（寛蓮の條）車より下りて入ぬみれば前の放出の廣庇ある板屋のひらみたるに前庭に離結て云々又云（平貞盛射鑑人條）法師をは物忌かたくおはすなればとて奥に入れて其身は放出の方に居て食したゝめてねぬ又云（冥現報殺人條）頃しも夏の頃にて暑さにたえがたきに放出に居たる二人の侍いねぶらすして居たり云々按る

に此文に依て考るに放出は母屋より立出したる屋なり母屋より放ち出したる心なりたとへば丁の字の如し横の畵は母屋にて竪の畵は放出なり世俗に口屋といふものなり

また一まなる所の落くほ（落くぼみたる所なり）なる所のふたまなるになむ住せ給ひけるきむたちともいはす御かたとはましていはせ給ふべくもあらす

○御かたとはまして　下に中の君のことを辨の御方といへり親しみかしつきていへることはなるへし

名をつけむとすれば

○名をつけむとすれば　小侍従あるひは大輔などゝ名をつけてよふは召仕ふ女房の稱なればさすがに中納言のいかにとおほす心あるべしとつゝみ給ひてなり

さすかにおとゝ（中納言）のおほす心あるへしとつゝみ給ひておちくほの君といへとの給へは人々もさいふおとゝ（此たゝは殿の事なり源氏にたはたゝさへいひつ濱）もちこよりらうたく（勞）や（いとほしきものになり）おほしつかすなりにけむ

○ちご（兒）より　和名抄老幼類赤子　老子註云赤子不害物和名知古今按云含乳之義なりと有て乳のみ子といふ意にしていとけなき頃よりといふ事なり

ましてて（況）北のかたの御まゝにて

○まして北の方の御まゝにて　秋成本に御まゝにてといふ傍に隨意の字をあてたるはいみしき僻言なりやがて繼の字にて後母をいへるなりそは上にましてとある語勢にてもしるべし

はかなきことおほかりけりはか〳〵（落の方には）しき人もなく

○はか〳〵しき人もなく　桐壺卷にとりたてゝはか〳〵しき御うしろみしなければ云々湖月抄に此ことはまことに哀也はか〳〵しきはげに〳〵しきなといふやうに心えべきかはかなきとはげに〳〵しからぬ事にいへはそれに準して心えべきと也云々直麿案するにはかははかりの下略にてはかなくなるといふもはからむすべもなくなりたりといふことにてやがてむなしくなるといふことに成なりはかなの夢のわすれがたみやといへるもさめて後せんすへもなき夢のわすれかたき也さてはか〳〵しきははかり〳〵しきにてあれかれによく行わたりてものなれたる人もなきをかくいへりそこはかとなくはそくはくとなくとにてこれとは心こそな

り　註釋云物の度量をはかるよりいふなり萬葉に
稻苅計とも有
(乳母)めのともなかりけりたゝ(はゝ歟ヤイ)母君のおはしける時よりつ
かひつけたるわらはのされた(酒落云あされの上略土佐日記)る女そ(こゝは伶利なるを云)
○春海云あされは肉のあされたるなといふと同し
詞にて人のうへにいふはみたれたるさまをいふな
るへし土佐日記に鹽海の邊にてあされあへりと云
も鹽の有海へにても人はあされあへりとたはふれ
書る也そは魚の肉は鹽をくはふれはあされぬもの
なれはなり
うしろみとつけて(名付てなり)つかひ給ひける裏に(かたみに)思ひかはして
かた時はなれすされは此(るハ古本 書の)君のかたちはかく(大君中君等なり)かしつき
給ふ御娘ともよりも
○かくかしつき給ふ　谷川士清曰冊をかしつくと
よめり長恨歌傳にみえたりかしこみつかうる義な
るへしかふ反く傳の字もよみかしつきと名目にも
いへり眞名伊勢物語に嗣の字をもよみたり若菜に
猶のかしつきをしてやしなひ給ふ竹取物語にいつ
きかしつきやしなふほとにてとみゆといへり又田
中大秀か竹取物語註にいつきかしつきは縣居の勢
語古意にいつきは神に仕るは凶穢を忌て清く仕う
るをいはふ共いつくともいふ人にいふも凶を忌て
吉を用るをいふかしつくは恐み(カシコ)仕うるをいふとい
(ヘリ)はれしき萬葉(巻九に子なよめる歌)(霍公鳥の間の雛)錦綾の中につゝめる(斎)
兒も妹にしかめや云々俊蔭巻に(女のこさを)母も父君そ
ひていつきかしつきしこときょりもかほかたちまさ
りてなと有といへり
おさるましけれと出(落の)(交 合)ましらふこともなくてあるもの
とも知る人なしやう〳〵物思ひしるまゝに世中あは
れに心うき事をのみおほされけれはかくのみそうち
なけく「日にそへてうさのみまさる世中にこゝろ
つくしの身をいかにせむ
○日にそへてうさのみまさる　此うたは和名抄豐
前郡名宇佐と見えたる宇佐の名をおもひてよめる
なるへしさる例は大和物語に世中をうんしてつく
しへ下りける人女のもとにおこせたりける「わす
るやと出てこしかと何處にもうさははなれぬもの
にさりける月詣集五(紀康家)「尋ゆく心つくしのはて
またあひみぬうさやあらんとすらむ　源平盛衰記

三十三云宗盛公宰相宮へ參り給ひて「思ひかね心つくしに祈るともうさにはものもいはれさりけり　神殿大に鳴動してかく「世の中のうさには神もなきものを心つくしになに祈るらん　此御託宣に御心ほそくかく「去ともと思ふ心も虫の音もよはりはてぬる秋のくれかな　なとみえたりなほあるへし

さいひつゝけていたう物思ひしりたるさまにて大かたの心さまさとくて琴なともならはす人あらは

○ことなともならはす　橘の泰か箏のすさひにことゝいふは絃器の惣名にしてころいとの略謂ならむ琵琶のこと箏のこと和琴をつくしことなとなり琵琶には柱と云和琴にてはつくと唱へり王昭君のことをよめる歌に「道すからなくさむとてやひくことのをことに玉をぬく泪かな　又兼盛集に琵琶法師を題して「よつのをにおもふ心をしらへつゝ引あるけとも知る人もなしとよめるは琵琶を四つの緒とよめるなり且琵琶法師をよめるはしめなり六帖に「むつのをのよりめことにそ香は匂ふ引をとめ子かそてやふれつるとある六の緒は和琴なりといへり　直麿案するにこゝなるもおしなへてことなとも云々といひて下にしやうのことを世にをかしく引ならひけれはとことわりていひたり

いとよくしつへけれとも誰かはをしへむ母君のうせ給ひしむつ七つはかりにておはしけるにならはしおいたまひけるまゝにしやうの琴をよにをかしく引たまひけれは

○しやうの琴　和名抄琴瑟類云風俗通ニ云神農造ル箏ヲ俗云ニ象ノ乃古牛ト或云蒙恬所ナリ造ル云々蒼頡篇ニ云箏形似テ瑟ニ短ク有リ十三絃一今案ニ箏譜ニ云一二三四五六七八九十斗爲巾是十三絃ノ名也　阮瑀箏譜云箏柱和名古止知高サ三寸具フニ三才ヲ一也今案ニ三才ハ云ニ天地人ヲ一也　體ニ源抄云箏は我朝に傳る事は仁明天皇の御時に遣唐使の准判官掃部頭貞俊簾承武か娘に傳ると云或は內教坊の妓女命婦石河の色子筑紫の彥の山にして唐人にこれを傳るとも見えたりといへり

むかひはらの三郎君十はかりなるに（後に大夫さいひし人なり）

○むかひはらの　榊卷にむかひはらのかきりなきとおほすはかく〵しうもえあらぬにねたけなると多くてまゝ母の北の方はやすからすおほすへし云々と見えて嫡母の子と云事なり庶母なとに對へて云詞と聞ゆ榮花物語さま〵の悅の卷に　中納言殿

（嶋にたはれ給ひける中にといふ所）猶御たはれはうせさりけれはこの
御子ともいはれ給ふ公達あまたになり給へとなほ
此むかひ腹（[illegible]）のをいみしきものにおもひ聞え
給へる内に云々なといひ字鏡に嫡をむかひめとよ
ませ日本紀（通證）に正妃をむかひめと訓せるにて知る
へし

琴心に入たりとてこれにならはせさ北の方の給へは
時々をしふつく〳〵（つれ〳〵 註本）といとまのあるまゝに

〇つく〳〵といとまの有　註釋に云古今つれ〳〵
のなかめにまさる涙川云々こは物をおもひつらね
つらねをるをいふ良[illegible]の約轉なり或本つく〳〵と
有はわろし書につれ〳〵と書しをつく〳〵と見誤
りたるなるへし

物ぬふことをならひけるかいとをかしけにひねり縫
給ひけれはいとよかめりことなるかほかたち（北方）（面貌）なき人
はものまめ（眞實）やかにならひたるそよきとてふたりのむ
このさうそくいさゝかなるひまなくかき（掻合）（かき集るなどいふ心）あひ縫せ給
へ（にや）はしはしこそ物いそかしかりしか

〇しばしこそ物いそがしかりしかの詞つゝき文義
穏ならず

（後々には）よるもいもねずぬはすいさゝか遅き時はかはかりの（北の方の詞）
事をたにものうけにし給ふは

〇ものうけにし給ふ　註釋にはうけかたにし給ふ
と有て首書云うけかたは心よりおもはぬをいふ俗語
にも此詞あるは此かたを用ゆへしといへり

何をやく（益）にせむとならむとせめ給へはうち歎きてい
かて猶きえうせなむわさもかなと打歎三の君に御裳
きせ奉り給ひてやかて藏人の少將にあはせ奉り給ひ（縫）
ていたはり給ふ事かぎりなしおちくほの君ましてい
と（ものに）まなくくるしき事増るわかくめてたき人は多くか
やう（られて）のまめわさする人やすくなかりけむあなすりや（侮やすくせ）
すくていと侘しけれはうちなきてぬふまゝに「世中
にいかてあらしとおもへともかなはぬ（思ふかこさに）ものはうき身
なりけりうしろ（落の）みといふは髪なかくをかしけなれは
三の君の方にたゝ（一向によびつけ給ふなり）めしにめしいつうしろみいとほい
なくかなしと思ひてわかき（落を云）みにつかうまつらむとお
もひてこそしたしき人のむかふる（妻なさに）にもまからさりつれ

〇したしき人　下文によれば和泉守か妻あこきか
をはを云なり

何のよしにか異君とりはし奉らむとなけは君何か同
し所にすまむ限りはおなしことゝ見てむ
○おなじ事と見てむ　三の君につかはるゝも異な
ることは見しとなり
衣なとのみくるしかりつるになか〳〵うれしとなむ
見るとの給ふ
○なか〳〵　直麻呂案するになか〳〵は俗にいつ
そのこと又はかへりてと云詞に同じくて漢語の寧
といふによくあたれり語意は久波の約まり加にて
なくは〳〵と云義にて餘りのうれしさ餘りのかな
しさにつけて此事の無は〳〵とかへりて物思ひを
し餘り情ある故にかへりてつらく思ふなといふ詞
にてさていつそのことゝいふ意になるなり
けにいたはり給ふことあてたければ哀に心ぼそけに
ておはするをまもらへならひていと心くるしければ
常に入ゐればさいなむこと限りなし
○さいなむこと限りなし　直麻呂案ずるに催馬樂
何爲に親はありくとさいなめと又若紫巻にれいの
心なしのかゝるわざをしてさいなまるゝこそ心付
なけれなと有て河海に罪と有源語梯に入にしから
れ打たゝきをせらるゝなり災難の字音より出たる
詞にやといへり春海か假字拾要に古本催馬樂譜何
爲に左伊名戸止とあり字鏡に讁以豉反不擇是非也戸豆頁布阿佐牟久又佐支奈
牟と有か本語にて幾を伊といへるは音便なり是を
後の人罪字の音なりと思へるは誤なり」といへれ
と此にかなへりとも覺えず河海等の說も又おぼつ
かなしかにかく呵らるゝ方にも打たゝかるゝ方に
もいへることとはみゆれと言釋おもひえず字鏡
なるは別語なるべし
おちくほの君もこれをさへよひこめたまふことゝは
らたゝれ給へば心のとかに物語もせすうしろみとい
ふ名いとひむなしとてあこきと付給ふ
○あこきと付給ふ　古今六帖無逢ふことをあこき
か島に引鯛のたひかさならば人もしりなむ　此歌
夫木九によみ人しらすとて入たり此歌に取てかく
名付しは三の君の方にたゝめしに召出る事の度か
さなる心はへなるべし
かゝる程に藏人の少將の御かたなるたちはきとてい
とされたる者此あこきにふみかよはして年經て後い
みしう思ひてすむかたみに隔なく物かたりしけるつ

落　若ア按

いてに此わか君の御事をかたりて北方の御心のあや 奇の字
人にすくれてこいふ心よからぬなり注　且はなさいふ意
しうて哀にてすませ奉り給ふ事さるは御心はへ御か
たちのおはしますやうなど語うちなきつゝ
○御心はへ　谷川士清は心はえの假字を用ひて書
紀に意字又意氣立操心許なとを訓り心映の義なる
へしといへり宣長ははへの假字を用ひられたり栞
取魚彦は下延の類なりといへり此詞また源氏澪標
に出つ　今案に心ばせと同じくにてエケセの横通
にして士清のいへるかことくなるへき歟
いかて思ふやうならむ人にぬすませ奉らむと明くれ
呵怜
あたらものにいひ思ふ
○あたら物　註釋云萬葉十三沼名川之云々えてし玉
から安多良思吉きみか老らく惜毛此外にもあまた
有皆惜む意にて惜の字を阿多良斯と訓し所も有と
云り
草子地
此たちはきかめおやは左大將後に太政大臣攝政し玉ふと聞えける御むすめ子左
近の少將におはしけるをなむやしなひ奉りけるま俗に云御つき人なり養ひたてまつるはもり立るといふ事なり
ためもおはせてよき人のむすめなど人に二字衍かと注こひ聞給ふ少將に
ついてにたちはき落くほの君のうへを人聞かたり聞えけ
れは少將みゝとまりて静なるひとまに細かにかたら

少將
せてあはれいかに思ふらむ悲しう思ふらんとなりさるはおかうとほりはら
帶刀か詞
なゝりかし我にかれみそかにあはせよとの給へは只帶
今は世にもおほしかけさうかましき事はなりなえて給はしいまかくなむとものし
侍らむと申せは
○いまかくなむ　大和物語近江介平の中興むすめないたうかしつきけるをと云條
にかくて其むすめをえむといひけれは親たいこ
若くなむある今さるへからむをりにといひけれは
云々と有に同しく俗によき折になどいふ意也
いれにいれよかし少將
○いれにいれよかし　下の詞にされはこそいれに
入よとはいへむこそさらるゝもいとはしたなきこ
ゝちすへしらうたう猶思へは此所にむかへてんと
も有を思ふにとかくはいはんとなり注
のち將いかにともさためんとなり注
はなれてはたすむなれはくるしからしとこの給へはたゝはかゝる文例も末に有きあこき
にかくなむと語あこき詞落のはたゝ今けさうかましきことはさやうのことかけてもお少將は
ほしたゝぬうちにらイいみしく色好みときゝ奉りしものう
をさもてはなれ取付はもなくなりていらふるをたちはきうらむれは此よ
しろみか詞
しいま御けしき見むといふ草子地三の御方なり此御方のつゝきなるひと
し二間さうしにうしろみか部屋にえたるなりはえたりけれは

○さうしにはえたりければ　貞丈雜記十四云曹司といふは家をなかくつゝけていくしきりにもしきるなり曹の字はカキルとよむ役所を仕切心なり今用部屋と云に同しなり又云近世いまた家督を取すして居るを部屋住と云は則御曹司と同し心也

同し樣なる所はかたしけなしとておちくほ一間をしつらひてなむふしける八月朔日頃なるへし君獨ふしていもねられぬまゝに母きみ我をむかへ給へいとわひしといひつゝ「われに露哀をかけは立かへりともにをきえようきはなれなむ　心なくさめにいへとかひなし

○心なくさめ　註釋云和進なり神さひ翁さひといふみな同し○かひなし　直麿案するにかひなしは無間也是は原來さかひの上略にして歌に山のかひと詠るは山の界なり待かひとよめるは待さかひにて則待間なりかゝる所にかひなしといへるは物のひたとせまりてせんすへなき心なりさて界はさかりあひにて離間の義なるへしサクアヒのクアを約むれはカと成なり古學者かひは代の義なりなといへるはあらし

つとめて物語のついてに

○つとめて　新撰字鏡云曉　曉晄同上屯反日初出時也明也豆止女天又阿志太　枕草子に冬はつとめて雪のふりたるいふへくもあらす云々

これかゝく申はいかゝし侍らむかくてのみはいかゝはしはてさせ給はむといふにいらへもせすいひわつらひて居たる程に三君の御手水まゐれとて召さるれは立ぬ心のうちにはとありともかゝりともよきとは有なむやめおやのおはせぬにさいはひなき身と知りていかてしなむと思ふ心ふかしあまに成ても殿のうちはなるましけれはたゝきえうせなむわさもかなとおもほすたちはき大將殿に參りたれはいかに彼事はいひ侍りしかはしか〳〵なむ申す誠にいとはるけゝなりかやうのすちはおやある人はそれこそともかくもいそけおとゝも北方にとりこめられてよもし給はしと申せはされはこそいれに入よとはいへむことらるゝもいとはしたなき心ちすへし

○はしたなき心ちすへし　帚木卷にいとはしたな

きこと多かれと云々湖月抄にはしたなきといふことの意はよはきものにつよくあたる心なりと有を契沖師のいはれしは此注かなはす枕草紙にはしたなき物といふ下の一つに人を呼に我かとてさし出たるまして物くるゝをりはなとかけり是にて心えへし竹取物語に宮は立もはしたゐるもはしたにて居給へりと云におなしそれに付てふたつの心あるへし大氣なるをおほけなきあらきをあらけなきといふ類なきは詞にて無の字の意ならねははしたなきも唯はしたか又はしたのなきといふ義ならは夫にても同し心なり其故ははしたはなかはに同したとへは十ある物五つ有て今五つのなきをはしたなしといふへけれは也といはれたり直麻呂案するに此二説のうち次の説よろしかるへし一つ有へきものゝ半なきはたらはぬ物なれはやかてとりつきはもなき心になる詞なりおほけなきあらけなきのなきを詞にせられたるはよろしからすおほけなくは覺氣もなくにて則おほつかなき也あらけなくもあたらしけなくにていたはらぬを云也何れも有無の無にて詞にはあらさりけり猶くはしくは予か燕居

雜話に類語を引て辨しおきたるを見るへし○されはこそいれにいれよ　久かり女云少將されはこそ落くほの君のかたへ何かなしに我を引入よ父母のものゝかすとも思さぬ娘の方へむこどらるゝもいとはしたなきこゝちすへし女君にかたらひてらうたうも思はゝかしこにすますともこゝに女君をむかへてむ迎へむほとにもあらすはよそのきこえあなかしましとてつゝましけにもてなしてやみぬへしとなり帶刀なほ其むかへんむかへしの程の御さため能うけ給はりてこそ此事は仕るへけれといへは少將そは女君をみてこそ定むへけれそらにはいかてかはとの給ふなり

らうたう猶おほえは爰に(少將のかたへ)迎へてむさらすはあなかまとてもやみなむかし(翁かへり)との給へは其程(帶刀)の御宜よくうけ給りてなむつかうまつるへかなりとまうせは少將見(先)(落君を見てこそともかくも)てこそさたむへかなれそらにはいかてかは(晴)

○そらにはいかてかは　帚木卷にそれしかあらしとそらにはいかゝおしはかり(こしらへまさなり)おもひくたさむ

まめやかに猶たはかれ世にふさはわすれしとの給へ

はたちはきふさはあちきなきもしなゝりとまうせは（ふさは忌れしさのたまふを）

○ふさはあちきなき文字なゝりと申せば　須磨巻に（宰相のこさは）いつとなくわかれと云もしこそうたて侍るなる中にも又葵巻にいまはさるもしいませ給へ　花宴にきこえたかへたるもしかな

君うちわらひ給ひてなかくといはむとしつるをいひたかひられぬるそやなとうちわらひ給ひて是をとて（しそきてあこきかもとに行て）御文たまへは（帯刀）しふ〳〵にとりてあこきに御文とてひき出たれは（あこきか詞）あなみくるし何しにそとよしなしこと（中さても有ぬへしさ）はきこえてとといへは

○よしなしことはきこえて　徒然草に心にうつり行よしなしことをそこはかとなく書つくれは云々　無由事なり何の故もなきことをいふ事なり

（帯刀）なほ御かへりせさせ給へかし世にあしき事にはあらしといへは（あこき）とりて参りて彼聞え侍りにし御ふみとて（落の詞）奉れはなにしにうへ（源中納言殿の北方）もきゝ給ひて（いイ）は

○何しにうへもきゝ給ひては　落君の何しにかへりことなとはすへきそ繼母北方のかゝることきゝ給ひてはうせ事とこそいはめよしとはの給はんやといへは安古伎云さやうなることなき時は母北の方のよくおもひきこえ給ひしや只つらくのみあるものを母北方の御心におちおそれてなすへきわさもつゝみはゝかりてのみゐ給ふなと云也

（あこきか詞）よしとはの給ひてむやとの給へ（イナシ）にはさてあらぬ時はよくやは聞え給へる（落）やうへ（イナシ）の御心になつゝみきこえ給ひそといへといらへもしたまはすあこき御文をしそくさしてみれは

○しそくさしてみれは　和名抄（登燭）紙燭雑題有紙燭詩（紙燭俗音之曾久）　夕顔にしそくさして参れとのたまへは云々

たゝかくのみあり「君ありときくに心をつくはねのみねと戀しきなけきをそする

○君ありときくに　拾遺戀一よみ人しらす「音にきく人に心をつくはねのみねと戀しき君にもあるかな　うつほ祭の使巻にきの國吹上の君よりあてみやのもとへ「おほつかないかて心をつくはねのさすかけなしとなけく成らん

（落は）をかしの御手やとひとりこちゐたれとかひなけなる御けしきなれはおしまきて御くし（櫛）の箱にいれて立ぬ

たちはきいかにそ御覧しつやいて（あこき詞）またいらへをたに
せさせ給はさりつれは置て立ぬといへはいてや（發語の詞）かく（帯刀）
ておはしますよりはよからむ
○いてやかくておはしますよりは　さるへしと也
我等か爲にも思ふやうにてといへはいてや（あこき）御心のた（落の實）
のもしけ（様に見ゆるを云）におはせはなとかはさもといふつとめて（少將の詞中納言）お
と丶ひ（晝）の殿におはしけるま丶に　一
○ひのとのにおはしける　枕草子に日のおましの
かたにおものまいる云々
おちくほをさしのそいて見給へはなりのいとあしく（衣服のわろきなり）
てさすかに髮のいとうつくしけにてか丶りてゐたる
を哀とやみ給ひけむ
○か丶りてゐたる　註釋に髮の物にたれか丶りて
有さまなりと有は猶いまたし　くに女裝に衣服は
いとわろけれともさすかにかみはうつくしうてわ
ろき衣服にか丶りたるかあはれなり
（おと丶の詞）みなりいとあしあはれとは見奉れ（無ゐつかぬ）と先やむことなき
子とものことをする程にえ心しらぬなりよかるへき
事あらは心ともし給へ

○心ともし給へ　心ともし給へとは男することを
いへり下文に北方のわかいはさらん人のことをた
にしたらはと常にの給ふとあるも男することなり
また下文少納言か落へむかひて言詞にもよきこと
あらはせさせ給へかし云々といへり
かくてのみいますかいとほしやとの給へとはつかし
くてものも申されす歸り（おと丶）給ひて北方に落くほ（おと丶詞）をさし
のそきたりつれはいと頼みすくなけなるしろきあは（袷）
せ一つをこそきて居たりつれ子供の古衣やあるきせ
給へよるいかに寒からんとの給へは北方つねにき
せ奉れともほらかし給ふにや（なけやりにするならんとなり）
○ほらかし給ふにや　玉勝間に云物をすてる事を
俗にほかすといふはおちくほの物語にほらかし給
ふと有云々　眞淵云溢らしにてはふらかしと有つ
らんをほらの如くよむによりてふとかく誤りつら
ん
あく計もえきつき（着襴）給はぬと申給へはあなうたてのこ
とや
○うたて　契冲云菅萬にうたてを別様とか丶せ給
へり又日本紀に奇偉をよめり又古事記下連降天皇

段云云忍齒ノ王隨(ノリナカラ)ニ乘御馬ニ到ニ立大長谷ノ王ノ假宮之傍ニ而詔夜既曙(アケヌ)訖(スラク)可レ幸ニ獵庭(カリハ)ニ侍ニル大長谷ノ王之御所ニ人等白(サク)宇多底物云ッ王子(宇多底三字以レ音)　貫之集云きの國に下りて歸りのほりし道にて俄に馬のしぬへくわつらふ所に道行人々立とまりて云これはこゝにいますなる神のし給ふならんとし頃社もなくしるしも見えねとうたて有神なり云々凡うたてはうたたと云うたてしきと云俗語にもいへと今引所みなかなはす中にも菅萬にかゝせ給へるによるに尋常ならぬと云心なるへし　眞淵云うたては何れにしていへと物のなりかさなれるに過たるとあまりしきことあやなくなれることなと所によりてさまさまに用ひたり物語にも多しこれらをもてみるへし直麻呂按るにうたてはうとみへだての中略にてあまりしきまての心より俗に云むこいつらいなといふ意になり取かさりもなきと云事までにもなれりうとみへたつるは親しからぬからの事にて親しからねは上にいへる言の心にすへてわたるなり菅萬に別樣とかゝせ給へるなと心をつくへし（心のはかゆかすたくれたるなり）（母君なり）おやにとくおくれて心もはか〳〵しからすそあらむ

かしといらへ給ふむこの少將（藏人少將）の君の上の待ぬはせにおこせ給ふとて是は（北方よりいひおこせたる詞）いつよりもよくぬはれよろくに（賞美にといふ程の事なり）きぬきせ奉らむとの給へるを聞にいみしき事限りなし

○いみしき事　此詞よき方にもあしきかたにもいへりこゝはうれしきなり

いとゝく清けに縫いて給れは北方よしと思ひて（心ゆきたるなり）おのか着たるあやのはりわたのなえたるをきせ給へは

○あやのはりわたのなえたる　濱云はりわた可考末にもしをんのはりわたと有次にまたかいねりはりわたと有あやのはりわたといふことあるましく覺ゆ　和名抄（錦綺類）綾（綾紋付）野王曰綾（音凌和名阿夜綾有熟線綾長連綾二足花文綾平綾等名）似綺而細者也考切韻紋（音文）呉越謂小綾也　直麿案に範兼童蒙抄（分註）（しらぬひのつくしのわたの歌の條）つくしのわたの廣くよきをきぬにも入すしてたゝぬひてむかしは着けりと見えたり扨下にいへるしをんのはりわたも色をいへはこゝのあやのはりわたは文あるをいふなるへし亦は此比のはり綿の製にかく名付し一種有しかも知るへからす今も越の國人は多く綿に糊を引縹也にそめて猿といふきる物のことくして着るなり　眞淵云此下にかいねり

のはりわたさ有もこゝのはりわたの事なり又下にしをん色のはりわたさもいへりこは夜の物のことをうへにいひてかく有榮花物語にわたを染て衣のうへに引たることさ有しは似たる體なり　道別案に今昔物語に女行醫師寮治瘡逃條に宿直物の薄綿衣一つ計を着て逃云々さあり宿直物は即夜のものをいへは綿入へき理りなりはりわたも此類の物なるへし又强ていはゝうすわたさありしを書誤しにもやあらん猶可考

前に八月朔日頃さいひ下にかきくらす時雨の雨はさも有な思ふに今は八月末つかたにて野分立たる風の早きなり▲かゝる單衣なえていさうれしさ思ふはわひしきにならひて心の屈し過たるさいふにや

風はたゝはやに成まゝにいかにせましさ思ふに少しうれしさ思ふそ心ちのくし過たるにや此むこの君はあしき事をもかしかましくいひよき事をはけちゑむにほむる心さまなれは此さうそくさもをいさよしよくぬいなほせたりさほむれは御たち北方にかくなむさ聞ゆれはあなかまゝ落くほの君にきかすな心おこりせむものそ

〇あなかまゝ　枕草紙にまへにいたる人は心得てわらふをあなかまくさまねきかくれさ君しらすか（分註）ほにておほさかにてゐ給へり云々蜻蛉日記（泊瀬まうての條）音せてわたる森の前をさすかにあなかまくと手をかき面をふるふ云々源氏夕顔巻に中將殿こそ是よりわたり給ひぬれさいへは又よろしきおさな出きてあなかまさ手かく物から云々かやうのものはくさせてあるそよきそれをさいはひにて人にもちひられむものそさの給へはこたちいさいみしけにもの給ふかなあたら君をさ忍ひていふもありかし

〇いふもありかし　眞淵云此かしの詞物語に多しすへて詞の外に添てつよくいひ定むるやうのことなり古事記の歌につかはすらしき萬葉にあらそふらしきしぬひくらしきなさ有きの言さ同し

かくて少將いひそめ給ひてけれはまた御ふみすゝきにさしてあり

〇すゝきにさして　凡物を萬の木草に付るは木鷹狩の鳥柴より出て折から似合しき物に付るなり

ほに出ていふかひあらは花すゝきそよさも風にうちなひかなむ

〇ほにいてゝ　大和物語に故式部卿の宮の出羽の子にまゝ父の少將すみけるを放れて後女溝に文を付てやりたりければ「秋風になひく尾花はむかし

より袂ににてそ戀しかりける　いてはの返し「たもとゝもしのはさらまし秋風になひく尾花のおとろかさすは　あらはして我かくいふかひあらは花薄の風になひくことくに有かしとなり〔文詞〕

御かへりなし時雨いたくする日さもきゝ奉りし程よりも物おほししらさりけるとて〔詞〕「雲まなき時雨の秋は人こふる心のうちもかきくらしけり

○時雨の秋　萬葉三〔四十六ウ〕長歌に「なか月のしくれの時は紅葉をゝりかさゝんと云々同六〔四十四ウ〕「さをしかの妻よふ秋はあまきらふしくれをはやみ云々

御かへりなしまた「〔同〕あまの河雲のかけはしいかにしてふみゝるはかりわたしつゝけむ

○天の川　河といふより雲のかけ橋といひて踏見るに文みるを寄たりさてかく度々いひわたれと返しなきを此後いかにせは返しをたに得んといふ意をもてふみゝるはかりわたしつゝけんといへり

〔御かへり　不斷　少將の詞〕日々にあらねとたえすいひわたり給へとたえて御かへりなしいみしうものゝつゝましきうちに

○いみしう　或云いみしう云々よりしらぬにやあらんまて地より評したる詞なり

かやうのふみもまた見しらさりけれはいかにいふともしらぬにやあらむ〔物思ひ〕物思ひしりけに聞を〔落は〕なとかははかなきかへり事をたにたえてなきとたちはきにの給へは〔帯刀こたへ〕しらす北方のいみしく心のあしくて我ゆるさゝらんこと露はかりもしてはいみしからむと

○露はかりもしては　直案には文字濁りてよむ秋成本爲出の字を傍釈したるはひかことなり

明暮おほいたるに

○おほいたるに　諸本おほひと有て秋成本には覆の字を塡たり　直案に覺たるのあやまりにていの假字なるべしそれに改む

〔恐謹〕おちつゝみ給へるとなむ聞侍ると〔帯刀〕申せは〔少將〕われをみそかにといひわたり給へはわか君の御言をいなひかたくや有けむいかてとみありく〔よきふしもかなと何ひありくなり　文詞〕十日はかり音信給はておもひ出てのたまへり日頃は〔大和絵四〕「かきたえてやみやしなましつらさのみいとゝますたの池のみつくき

○かきたえて　大和もの語〔第八段〕「大澤の池のみつくきたえね共何かうらみむさかのつらさを　拾遺集戀四よみ人しらす「ねぬなはのくるしかるらん君よりもわれそますたのいけるかひなき　今はかき

絶てやみなましやなるとはなくて日々につらさの
増るはといふを下に水茎といふより上にかき絶て
といひつらき心のまさるを益田の池によせてよめ
るなり

思ふ給へ（前の日比はといふよりこゝへかけてみるへし）忍ひつれとさてもえあるましかりければな
む人しれす人わろくとあれはたちはき此たひに御（落に申せとあこきに云詞）
かへり聞え給へしか〳〵（とかくのたまひてなり）なむの給ひて心に入ぬそと
さいなむといへは

○さいなむ（上五丁前に出二・比可見）といへは　直按催馬樂いかにせん親は
ありくとさいなめと又若紫の巻にれいの心なしの
かゝるわさをしてさいなまるゝこそ心付なければな
と有て河海に罪（サイナム）とあり源語梯には人にしかられう
ちたゝきをせらるゝなり災難の音より出たる詞に
やといへり春海か假字拾要に古本催馬樂譜何爲に
左伊名戸止とあり字鏡に譲（以珠反不擇是非也戸豆具布岡佐乎久久佐支奈乎）と
あるか本語にて幾を伊といへるは音便なり是を後
の人罪字の音なりと思へるは誤なりといへれとこ
ゝにかなへりとも覺えす河海等の説もまた覺束な
しさはもと發語の詞いなむは否にてこはみあらか
ふ詞の轉してかく成たるにや字鏡は別語なるへし

あこきまた（御返り）いふらむやうもしらすといとかたけ（むつかしけ）に
おもほしたる物をとてまゐりて（落のかたへ）見せ奉れと中の君の
御男の右中辨とみのことにて出給ふうへの衣縫給ふ
程にて御かへりなし少將けにいひしら（かへりとも）ぬにやあらむ
と思へと

○いひしらぬにや　末摘花にいと寒けなる女房白
き衣のいひしらすすゝけたると有えもいはれぬと
いふに同しといへり

いと（落の心深きよしなり）深き御心も聞しみにければさる心さまやふさは
しかりけむ

○ふさはし　源氏花宴にふさはしからすといへる
詞有て契沖の説にふさはしとは俗に相應するを云
り神代よりある詞なり古事記の八千矛神の御歌に
布佐波受といふ詞二つ有て俗にいふ詞と同し意に
聞ゆといへり榮花々山（東三條のおとゝ若宮にすまひ見せ奉らんとするなうけかひ奉らぬところ）
七月すまひも近くなれは是を若宮に見せはやとの
たまはすれとおとゝ少しふさはぬさまにてすこさ
せ給ふに云々

少將のたちはき（帶劔）おそし〳〵とせめ給へと御かた〳〵（大君中君三の君の御かた〳〵）住給ひ
ていと人さわかしき程なれはさるへきをりもなくて

（さやかく）思ひありく程に此殿ふるき御願はたしに石山にまう
て給ふに御供にしたひ聞ゆるまゝにゐておはすれは（願のまゝにゆるし給ひてなり）
○ゐておはすれは　ゐては率の字なりゐはひきゐ
の下略なり
（嫗老女を云）おむなさへとゝまらむ事をはちと思ひて詣つるにお
ちくほの君數へのうちにたにいらされは辨の御方
○辨の御かた　辨の御方は中君のことなり左中辨
の北方なれはかくいへり
（北の方にかくの給ふなり）落くほの君ゐておはせ（北方詞　落を指す）獨とまり給はむかいとほしき
こと、申給へはさてそれかいつかありきしたる旅に
ては縫ものやあらむとする猶ありかせそめしうちは（てさいはんか如し）（たしこめ）
めて置たるそよきとて
○うちはめて　萬十七平群氏女郎贈家持歌十二首
中鶯能奈久々良多爾々宇知波米底夜氣波之奴等母
伎美乎之麻多武　空穗藏ひらき下うちはめてのみ
侍らんやはとて　土佐日記にもほと〳〵うちはめ
つへしなと有て投入ることなり
（ナシ）思ひかけてやみ給ぬあこきは三の君の御かた（イナシ）の人う（イ）
とにて
○人うと　直按人うとは今云人すくなゝと云詞に

や源氏末摘花に（大輔命婦か源氏に末つむの事を語る條）心はへ形なとふか
き方はえしり侍らすかいひそめひとうともてな
し給へはさるへきよひなと物こしにてそかたらひ
侍を云々是も人遠々しくといふ意にて遠々しくす
れは自らすくなきことわりなれはなり秋成本御方
人にてとあるはいかゝ
いとになくさうそかせてゐておはするにおのか（あこき）君の（落）
たゝひとりおはするにいみしくおもひて俄にけかれ（月事）
侍りぬと申て留れは（北方詞）世にさもあらし彼落くほの君の（あこき）
獨おはするとおもひていふなめりと腹立はいとわり
なきこともよく侍るなり侍らへとあらは參らむかく（ましてかゝる折はさいふ心を含めり）
をかしき事を見しと思ふ人有なむやおむなたにした
ひ參る道にこそあめれといへは
○おむなたに（オヤミオムナ）　書紀持統紀云四年夏四月癸丑賜京
與畿内耆老耆女五千三十一人稻入二十束　和名抄
老幼類云翁老人也和名於伎奈（婢）又云嫗和名於無奈老女稱也
（北方）けにさやおもひけむはしたわらはの有に
○はしたわらは　半物は女房に次たる者にて下仕
樋すましなとよりは下なるものなり其わらはにて
あるをこゝにはいふならん

さうそきかへさせてとゝめ(あこきなは)給ひのゝしりて出給ひぬれは

○のゝしりて　直案に今俗に云ざゝめくなといふ意とみゆ文選に喧呻叉讙譁をノヽシルとよめり眞名伊勢物語に罵詈と塡たり賓韻に大聲也と有新選字鏡に聒をよめりのゝめき白癡といふことにや罵知の義なといふ説はうけられすいつれにもほこりかなるを云詞なり

○かひすみて　直案にかひすみのかは助詞にて萬葉に青成といふへきを香青生(ナル)といひ安きを可夜須岐といふ類にてひそみてと云ことなり後にもよわきをかよわきなといへり　榮花初花巻にこみやの御有さまにもおさらすかいひそめおかしうおはしましつるを云々　蜻蛉日記(の條)は論かいしのひやかなれは萬につけてなみたもろくおほゆ　末摘花の巻にかいひそめ人うとくもてなし給へはといふ詞有源語梯にかいは發語の辭ひそめは隱るゝ意なりと有さらは原本かいひすみと有しなるへし

わか君と打かたらひて居たる程にたちはきか許より

御供に參り給はすと聞は誠かさらはまゐらむと云た(傷の侍るへき)れは(落の)御かたのなやましけにおはして留らせ給ぬれは(と云心な殘せり)何しにかはいさつれ〳〵(參らんといふを略て書る也)なるをなむなぐさめつへくて(帶刀に來れと云やるなり)おはせありとの給ひし給かならすもておはせといひたるは女御とのゝ御かたにこそ

○女御とのゝ　直案に或云女御殿は少將の妹今上の女御なり下にみえたり　うつほ樓上上かむの君達おもと人しもに侍ふ人々に例の御せち料より外にいといかめしうわかち給ふ女御とのゝ御かたにいとうるはしうてさま〳〵(少將なさす)に奉らせ給ふ

いみしくおほくさふらへ君おはしかよはゝ見給ひてむかしと云る成けりたちはき此ふみをやかて(少將詞)(帶刀か實名)少將の(ほめたるなり)君に見せ奉れはこゝや紳成か妻の手いたうこそ書け(帶刀詞)れよき折にこそは有なれいきてたはかれとの給ふ(少將なはしかよはん折に也)(かしこしなり)一巻おろし給はらむと申せは(帶刀)君かのいひけむやうならむ折こそ見せめとの給へはさも侍ねへきをりにこ(中イ少將)そは侍るめれと打笑ひ給ひて御かたにおはして白きしきしにこいひさして口すはめたるかを出給ひてめし侍れは(たる樣を書るなりされは異にせしとよめり)

○色紙　今の世に歌のみかく料に八寸許にしたるをいふはいと後のことなりいにしへは鳥の子紙にもあれ薄樣にもあれ染たるはみな色紙といひて歌のみならずふみをもかき又たき物の類をもつゝみなどすめりこゝにいふも白いものして作文など書たるかみをいふなるべし○白きしきし　榮花見はてぬ夢（粟田關白兼通のうせ給ひし後中川のさじ歌よみける條）かくなむとうたをかたりてすゞりの下なる白き色紙にかき付てえさせたり○こいひ　直案にこいひはおよひの誤なるべし和名抄に季指を古於與比とあれども小ゆひさすとはいふべくもあらず又いとゆは通へる假字なからゆびをいひと云しは所見なし

（少）つれなさをうしとおもへる人はよにゑみせしとこそ（繪不令見不得笑）思ひかほなれ

○ゑみせし　六帖おもひ出あめのみかと「逢にあひてゑみせしからにふる雪のけなはけぬかにこふてふわきも　萬葉「道に逢てゑみせしからに云々また道のへの草深ゆりの花ゑみにゑみせしからに云々

をさなとかい給へれば出とて（帶刀）（母にあつらふるなり）おやにをかしきさまならむくた物ひとゑ袋しておい給へれ（記）

○ゑふくろ　今昔物語廿八（近衞舍人共稻荷詣語）云此事なき舍人とも餌袋破子酒など持せ列て參けるに云々又廿七（於朱雀院被取餌袋菓子語）今は昔六條の院の左大臣と申人御けり名を重信と申其大臣方違に朱雀門へ一夜御けるに云々頼信前立て朱雀院に行けるに大きなる餌袋に交菓子を鉉（ハシ）と等しく調へ入て緋の紐を以て上を强結にして頼信に預けて此持行て置たれとて給ひたりければ頼信餌袋をとりて下部に持せて朱雀院に行にけり云々　蜻蛉日記（からさきにはらへする條）に大なるあふちの木たゝ一つたてる陰に車かきおろしてうまともうらに引おろしてひやしなどしてこゝにて御わりこ待つけむ云々ゑぶくろなるもの取いでゝくひなどするほどにわりこもてきぬれは云々

（繪）たゝ今取に奉らむといひ置て（落へ）いぬ（帶刀か落の方へ參て）安濃呼出たれは（おこき）い（かし詞）つらゑはといへはく此からふみ見せ奉り給へいて（御ふみ）そらとにこそあらめといへと（繪見せ給へと聞えつるやさ）取ていぬ君いと（おこき）つれつ（か詞）れなる折にて見給ひて繪や聞えつるとの給へはたちはきかもとにしか〳〵いひて侍りつるを（少將）御覽しつけ

けるに侍るめりといへはうたて心なと見えられたる（落の詞）
様にこそ人にしられぬ人はむしむなるこそよけれと
て物うけにおもほしたりたちはきよへはいぬ（寝）
○よへはいぬ　昨宵はむなしくいねたりとよへあ
こきか方へこさりしことわりを述るなり　秋成本
呼往の字を傍釈せしはいとよしなし
物語して誰々かとまりたまへるとさりけなくてあな（少将を忍はせ申んとてなり）
ひとふ
○あなひとふ　直案あなひはあなゝひの中略なり
和名抄に麻柱阿奈々比と見えて案内の字音ならす
元來足代のことにて低より高きにわたり行ものな
れば轉じて道ひくをもうかゝふをもいへりこゝ
はうかゝひ問なり詳に續紀元明天皇即位の詔宣長
の解舊本今昔物語等に見えたり
（[illegible]落たるへし）いとこう〳〵しやおむな（帯刀か母を云）とものみもとにくた物取に
やらむとて何もあらむもの給へと云にやりたれはゑ
ふくろ二つしてをかしきさまにして入たり
○ゑふくろ二つして　秋成云詞有しか直案にこ
ゝに下文のさま〳〵のくだ物といへる一句ありし

なるべしさて下は大きやかなるにはいろ〳〵のも
ちひ云々とつゝくべし
今一つのおほきやかなるにはさま〳〵のくた物色々（染たる也）
のもちひ薄きこき入て紙隔てやい米（焼米）入て
○やいこめ和名抄卷十七[illegible]糒（ヤキコメ）本　唐韻云糒[illegible]
（焼米夜木古女　可用糒米二字）燒稻爲米也孫愐切韻糒古典反　新粳燒而舂之
得米也　遊糸日記靑いねからせて馬にかひやいて
めさせ云々又たまさかなるあるしにやいこめば
かりそわつかにしたる云々
（文の詞　母の方よりなり）
爰にてたにあやしくあ。たらしき（わイ　たイ　食物なといふ事か）口つきなれはたひ（ましてイ　旅秋イ）
（にての意なるへし）
にてさへいかに見給ふらむ
○たひにてさへ　直云對にてさへのかなちかひな
り秋成本なとて旅字をは塡たりけむ　注釈たいさ
あり一本たひと有をとれるか古しへ一夜にても外
にやとるを旅といへり源氏にうちのたひねともあ
りて内裡に有をすら旅といへりといへり
はつかしう此やい米は露といふらむ人（あこきかつかふ童の名）にものしたま（帯刀か）
へといへりさう〳〵しけなる（草子地）氣色を見ていかてはか（あこき）
なき心さしを見せむと思ひてしたる成けりをむな見

ていてあやし米くた物やけしからすそこ（帯刀）にし給へるにこそあめれとえむすれは帯刀打わらひてしらすま（予）るはかやうに見くるしけにはしてむや

○まろ　こは才ある人を角ある人といふにむかへて自からくたりていふ詞なり

おむなとものみさかしらなめり

○みさかしら　賢めかきて物するをいふこは例の美稱なり六帖に「さかしらに夏は人まねさゝのはのさやく霜夜をわれひとりぬる

つゆこれとりかくしてよとてやりつ二人（帯刀あこき）ふしてかたみに君（少將）の御心はへともを語る今宵雨ふれはよもおはせしとて打たゆみてふしたり女君人なき折にて琴いとをかしうなつかしう引てふし給へりたちはきをかしと聞てかゝるわさし給ひけるはといへはさかし故（あこきか詞）上の六七つにおはせし時より

○六七つ　直案諸本みな六さいと有と上の文によつて改之

をし（ママ）へ奉り給へるそといふ程に少將いとしのひておはしにけり人（從者）を入給ひて聞ゆへきこと有てなむたちはき出給へといはすれは帯刀心えておはしにけりと思ひて心あわたゝしくて

○あわたゝしく（ニワ・ヿヰ）　濱云あはたゝしくは泡立にて心のおちゐぬにやさらはあわの假字なるへし

唯今對面すとて出ていぬれはあこきおまへ（落の）に參りぬ少將いかにかゝる雨に來るをいたつらにてかへすなとの給へはたちはきまつ御消息を給はせておとなくてもおはしましにけるかな人（落の）の御心もしらすいと難き事にそ侍ると申せはいといたく（なイ直）。すくたちそとて

○すくたちそ　すくたちは源氏なとにすくよかといふに同しく健字意

しとゝうち給へは

.○しとゝ打給へは　保孝案しとゝぬるゝなといふしとゝと同しくしとやかに靜に打給ふ也雨の上にていへは靜にゆるやかにぬるゝ故よくしめりてぬれわたるやうに成なり

さ（遮）はれ（莫ヲ）下りさせ給へとて諸共に入給ふ御車はまたくらきにことてかへし（迎に來させてなり）つわかさうしのやり戸口にしは（あこきか曹司たち帯刀かわかさと云なり）しゐて有へきことを聞ゆ人すくなゝる折なれは心や

（垣間見）すしさてまつかいまみをせさせよさの給へは
○かいまみ　日本紀垣間見又竹取物語に闇の夜にもこゝかしこよりのそきかいまみ云々さ有てもさは籬の間よりのそきみるをいへるそれを轉しては籬間ならてもひそかにみるをはすへていふなり
（帯刀）しはし心おさりもそせさせ給はむものいみ（物忌）の姫君のやうならはさ聞ゆれは
○ものいみの姫君　或曰物いみの姫君さは物いみさいふ物語にや　直案物いみの姫君のやうならばさはかみ形のよそほひもせすいさわひしけにてあるをいふなり若紫に葵の上のことをたゝゐにかきたる姫君のやうにしすゑられてさ有
（少將）笠も取あへて袖をかつきて歸る計さわらひ給ふ格子のはさまに入奉りてるすのさのゐ人やみつくるさおのれもしはしすのこに居
○かうしのはさま　春海云源氏空蟬にやをらあゆみいてゝ簾のはさまに入給ひぬゞ有に同し格字さ簾さの間をはさまさいへるならん
○さのゐ人　宣長云萬葉に侍宿さ書るは義をしらせし也是をもてさのいさ書はわろし夜居の僧なさいふ居にて宿直をさのゐさいふ也此説によるへし
○すのこ和名抄（居宅具）に簀子（スノコ）切韻云簀（音責切韻式反　數簀子須乃古）

床上籍レ竹名也　今いふ板椽なり
（落を）君見給へは消ぬへく火さもしたり几帳屏風こさになさ（りわきて也）けれはよく見ゆむかひ居たるはあこきなめりさ見ゆ（書體）るやうたいかしらつきをかしけにて白き衣うへにつやゝかなるかひねりのあこめきたり
○あこめ　和名抄（絹布類）練精紡切韻云練（郎甸反和名禰利岐沼）又（衣服類）衵唐韻云衵（人質反又尼質反漢語抄云阿古女岐奴）女人近身衣也搔練は後照念院關白装束抄に曰搔練の下襲に火色の下襲各別物也其爲赤色之間人存二同物一之由是不レ可レ然云々又助無智秘抄曰火の色の下重はかいねりさかはりたる物なり火の色さは裏表さもに打ものにて中倍を入たるなりかいねりさはたぶうらは紅のはりたるにて中倍なきなり
（あこきに）そひふしたる人あり君（落）成へし白き衣のなへたるさ見ゆるきてこしより下にひきかけてそはみてあれはかほは見えすかしらつきかみのかゝりはいさをかしけなりさ見る程
○かみのかゝりは　さかりはさもいへり髪のさかりたる程らひを云萬葉に菅苅計爾に有計に同しく程計の事なるを略てばさのみいへるなり
（前にきえぬへく火さもしたりさ云首尾）火消ぬ口をしさ思へさついにはさおほしなすあなく

らのわさや人有といひつるをはやいねと云ころもい（事）
といみしくあてはかなり（美 高貴）
○あてはか也　あてはかは上﨟めきたるを云アテ
は上手なりウハ反アなりハカは形容（ウタトル）詞なりとそ（あこきか詞）
人に逢にまかりぬるうちにおまへに侍はむ大かたに（凡の字）（たほつかなければ）（さむら）（そへてなり）
人なけれはおそろしくおはしまさむ物そといへは猶（君）
はやおそろしさはめなれたれはといふ君出給へれは（帯刀）（少将）
いかゝ御送りつかうまつるへき（たはむれてかくいふなり前に笠もとりあへてなさいへり）
○君出給へれは　少将かのあなひを見てあこきか
をれは入かたくて出て帯刀にのたまふなり
御笠はといへはめを思へはいたくかたひくとわらひ（妻なりあこきをさす）
給ふ心のうちには衣とゝそなえためるはつかしと思（落のまゝ母の よからぬをしろしめせは 帯刀にはやあこきを呼出てねよ）
はむ物そとおもほしけれと早其人よひ出てねよとの（落の）
給へはさうしに行て呼すれとこよひはおまへに侍ら（その給ふは落へしのひよらんの用意なり）（帯刀）
ふはやうさふらひにまれおはしねといへはたゝ今人（帯刀に早くなり）（あこきを）（前に）
の云つる事聞えむあからさまにいて給へと聞えさす（帯刀にあはんとて来し人のいひしこと聞えん程にしはし出給へといい）
れは（ふなり）
○さふらひ　禁秘抄下侍二間在二炭櫃一四面敷レ疊

號二侍臣亂遊所一也如二折松一於二此所一行レ之とあり
是をうつして臣家にもさる所ある也且さふらひと
書時はふは濁るへしさむらひと書は即ふの半濁也
○あからさま　源氏葵巻にあからさまに立出侍る
につけても云々　日本紀に急の字倏忽之間なとの
字をアカラサマとよめりしはしのほとなり俗にち
よとなといふに當れり後に白地の字をよませしは
明様の義にてありのまゝに打出し明す心にて本義
より轉せしなりといへり
何事そとよかしかましやとてやり戸をおし明てさし（喧）（詞）
出たれはたちはきとらへて雨ふる夜なめりひとりな
ねそと云つれは
○ひとりなねそ　或云かゝる古ことなどありしか
いひつれはの詞さらてはあしゝ
いさ給へといへば女わらひてそよことなかりといへ（それよともなかりしはと云なり）
はしひてゐて行てふしぬ物もいはてねいらねはねい（帯刀）
りたるさまをつくりてふせり女君猶ねいられねは琴
をふしなからまさくりて
○まさくりて　榮花物語殿上の花見巻に子日に山
すけを手まさくりにして云々源氏花宴に箏のこと

をまさくりて云々蓬生巻に時々のまさくりものにし給ふ云々契沖云花海に弊の字をまさくりとよめる事何に出たるかおほつかなし弄の字を日本紀にマサクルとよめりモテアソフともよめり物を手に持てあそふをもてあそふといへはまさくるも同意なりといへり

古今雑下よみ人しらすいかならん岩ほの中にすまはゝか世のうき事のきこえこさらん

なへて世のうくなる時は身かくさむいはほの中のすみかもとめて

○いはほの中のすみかもとめて　法華譬喩經無常品云昔佛在王舍城竹林園中說法時有梵志兄弟四人各得五通却後七日皆當命盡自共議言五通之力返覆天地手捫日月移山駐流靡不能寧當不能避此死對一人言吾入大海中上不出現下不至底正處其中無常殺鬼安知我處一人言吾當入須彌山中還合其表令無際限無常殺鬼安知我處一人言吾當輕舉隱處空中無常殺鬼安知我處一人言吾當藏入天市之中無常殺鬼趣得一人何必求吾也四人議乾相將辭王吾等壽算餘有七日今欲逃命冀當得脫還乃親省惟願進德於是別去各至所在七日期滿各々命終猶菓熟落市監白王有一梵志卒死市中王乃悟曰四人避對一人已死其餘三人豈得獨免云々釋に山海空中市逝去無處といへる是なり

といひてさ（頃）みにねいるましけれは又人（少將）はなかりつさ思ひて格子を木の端（落の）にていさようはなちておしあけて入ぬるにいとおそろしくておきあかる程にふ（少將）とよりてとらへたまふあこきかうしをあけらるゝ音を聞て

○かうし　和名抄（居宅具）通俗文云障子竹障名也（俗用格子二字）

いかならむとおそろしきまとひておくれはたちはきさらにおこさすこはなそみかうしのなりつる（鳴）をなそと見むといへは狗（あこきか詞）ならむねすみならむそな驚き給ひそといへはなてふ事そしたるやうのあれはいふかさいへは

○なてふ事　春海云なてふは何といふをつゝめてなてふといへるなり後世の源氏の注に何條といふ字をあてたるはいたくひか言なりさる事となしては文意かなはぬ所多し

（帶刀）何わさかせむねなむといたきてふしたれは（あこき）あな侘し

なき體に云は大かたはその説のことくならめと猶
思ふに不齢付(ヨツカヌ)にてよはひの若き人のおのつから物
事さゝのはさる程をいふならん
からうしてあるにもあらすいらふ「人こゝろうきに(庭)
は(鳥)とりにたくへつゝなくよりほかのこゝろはきかせし(てにをはを錯にかれたり)
といふこゝろいさらうたけれは少將の君なほさり(等閑)にお
もひしをもまめやかにおもひ給ふ御くるま(迎の御くるま)ゐて參り
たりといふをきゝてたちはきあこきに參りて申給へ
といへはよへは參らて今朝參らむもけにまろかしり(あこき)
たることくこそおもほさめはらきたなく
○はらきたなく　源氏螢卷にまゝ母の腹きたなき
云々と有さもしき心底なるをいふより轉してよか
らぬ心かまへあるを云なり
人にうとませ(踈)奉ることゝゑむ(怨)するいわけなきものか(異様にをさなしき物哉)
(其心はへのたかしけれは)
らをかしけれは
○いわけなき　五非純禎云いわけなきは幼稚の人
をいふなり幼稚なる時は物のわきまへなきものな
れはいはけなきといへりいは發語の詞なり日本紀
に驚駭(イハケ)とあると別なり　田中大秀云なしてふ言は

意な「しはしたなしをはした」「わりなしをわれて」
共云類にていわけたると云も同意也繪合卷に(秋好中宮)
(体な)いとおもりかにて夢にもゆわけたる御ふるまひ
あらはこそおのつからほのみえ給ふついてもあら
め(源氏の君のゆかしくおもはすなり)心にくき御けはひのみふかさまさ
れゝは云々榮花赫藤壺卷にて(上東門院十二に入内の所に)姫君の御有
樣云々御形をかしけにおはしますまたいとをさな
かるへき程にいさゝかゆわけたる事なく云々あさ
ましきまておとなひさせ給へり云々是等を考れは
心をさなくて思慮もなく物するよしなりいわけて
はあらぬよしを源氏心にくきといひ榮花におとな
ひさせ給ふと有にて明らか也といへり直案純禎か
日本紀に驚駭とあるとは別なりといはれしはよろ
しからすいわけは俗にいへるたわけなる事又つま
らぬとなといふ意にしてたはれたる事するは餘所
目よりはおそましう打おとろかるゝ物なれはやか
て驚駭と同語なり竹取物語(中納言石上麿其燕の子安貝を取んとしておなゝひより落てこしを折しところに)御心地もたかひてから櫃のふたに入られ給
ふへくもあらす御こしはをれにけり中納言はゆわ
けたるわさしてやむことを人に聞せしとしたまひ

けれと夫を病にていとよわくなり給ひけりと有を考ふれはたはけなるとをしてといふ義なること明らかなりされはなしといふ詞助字にはあらす則有無の無にして驚駭する色もなくおとなしやかなるをも戯しきこともなき意をも兼たる事榮花におとなひさせ給ふとあるをもてしるへしされはいわけなきはをさなしといふとにはあらすやかておとなしといふ詞也さるを古學者すへてかうやうなる詞のなしは付字にて意なしといへるはいみしき僻言也是等のなしと云詞にはすへて意なくていかてをさなしうらなしのなしにのみ意は有けむいとをかし

たちはき（帯刀）うちわらひて君（落）うとみ給はゝまろ思はむかしといひて格子のもとによりてこわつくれ（おとなふを云）は少將おき給ふに女の衣（衣の上にきる物なり）を引着せ給ふにひとへもなくていとつめたけれはひとへをぬきすへして起出給ふ女君いとはつかしき事限りなしあこきあひなく（無愛）いとほしけれと（さりとてもはいりゐたらればこそあらめと思ひて）（落）さてもはいり居たらねは參りて見るにまたふし給へり（よへのことゝも）（文のれさ）いかて云出むと思ふ程にたちはきのも君のも（思ひかけねなり）（うち引入給ふと云に夢の事な）有帯刀のには衣一よしらぬことにより打ひき給ひつつれ

さへ添へてか（無分の意にてもの、せまりてすへなきを云）ることそいとわりなかりつれ

○うち引給ひつることそ　大和物語（あしかりの段）このをとこにかくおほせことと有てめすなり何のうちひかせ給ふへきにもあらす物をこそ給はせんとすれをさなきものなり云々　春海云帯刀か知らぬことをもし知たることかとうたかひてそれを引しろひうらみしといふことか○わりなく　契冲云わりなく菅家萬葉に無破とかけり宣長云あるましき事を强てあなかちにすることと思ふことなり　直案に言のもとは無理にてことわりなきの上略俗にいひわけもなくといふことなり古今よみ人しらす「わりなくもねてもさめても戀しきか心をいつちやらは忘れむ　またふかやふ「心をはわりなき物と思ひぬるみるものからやこひしかるへき　後撰よみひとしらす「戀ほとにわり無ものそなかりけるかつうらみつゝかつそ戀しき　これらみなことわりなくと云ことなりこゝもさても心えぬことゝのみおほしためれと云義なり俗にいふ揉もなきことゝなといふにあたれり

御ためにも少しにても（あしきといふ程の詞）おろかならむ時には參らしまし（母北の）

方は ていかなるの見せ給はむ御心はせかな（落の）おまへにもいかによくもあらさりける物かなとおほしの給はすらむと思ひ給うれは此宮つかへいとわつらはしく侍れと御ふみ侍めり御かへり聞え出給へ此世中はさるへきそや何か（落のものな）おもほすといへりもて（落のもさへあこきか）參りて爰に御ふみ侍るめりよへは（あこきか詞）いとあやしくて思ひかけすしてふし侍りし程にはかなくて聞侍りにけり聞えさすとも（わかれへそかならぬ）あ（心はへを聞えても今更いひわけするさ）らかふとそおしはからせ給ふらんもことわりなれと

○あらかふ　拾遺戀五　せうそこ通しけれとまたあはさりける男をかれあひにけりといひさわくをあらかはさるをとうらみけれはよみ人しらず「蓮葉のうへはつれなきうらにこそものあらかひはつくといふなれ

此けしきをたにみて侍らはと萬にちかひゐたれといらへもせす起もあかり給はねは（つらさ見ごとしてなり）猶（落は）しりて侍とおもほすにこそ侍るめれ心うくこゝらの年頃つかうまつり侍てかく（心まゝにおき上りつへ、は）うしろめたき事はし侍りなむや

○うしろめたき　眞名伊勢物語に後目痛とかけりおほつかなき意なり

一人おはしまさむを思ふ給へて（落の）をかしき御供にもまゐり侍らす成にしかひなくかゝることわりをきかせ給はすかひなき（御はら立ならはなり）御氣色ならは（御前に）さふらはんもいといとほしう侍りいつちも〳〵まかりなむとて打なけは君いと〳〵ほしうてそこにしりたらんとも思はすいと淺ましう思ひもかけぬ事なれは

○あさまし　宣長云此詞はよきことにもあしきことにもいひて俗言にけしからぬきものつふれたことなといふ意なり（玉の小櫛）といひ眞淵は思ひの外なることの甚しきをいふ故に多く驚きたるさまに聞ゆ（勢語古意）といへり伊勢物語（四十六段に）昔男うるはしき友有けり云々月日へてやりたりける文にあさましうえ對面せて月日へぬる事云々桐壺巻（源氏君生れ給ひし所）にかゝる人も世にいておはするものなりけりと淺ましきまてめを驚ろかし給ふ夕顏の巻（夕顏の君の絶な）人のけはひ甚あさましく柔におほときて云々榮花赫藤壺巻（上東門院十二にて入内の所）いさゝかゆわけたることなく云々あさましきまておとなひさせ給へり宇治拾遺（巻三雀の瓢に米ある所）におもひかけすあさましとおもひてあさましくうれしけれはなと有いつれも眞淵宣長の說によくか

なへりされとことの本は何ともいはれさるはいか
ゝこはまさしくあなすさましを中略したる詞なる
へく覺ゆ

いと心うく思ふうちにいといみしけなる（落の白の事）はかまの有
様にて見えぬるこそいといはむかたなく侘しけれこ（故）
上うへのおはせましかは何ことにつけてもかくうきめ
は見せましやとていみしうなき給へはけにことわり（あこきか詞）
に侍れといみしきまゝ（なへて世の）母といへと

○いみしきまゝ母といへと　繼母は世中にいみし
き物にいへととり分て此北の方の心のわろきは少
將の前々聞しり給ふ事のあるへけれはみなりあし
きとてもさる方におほしなすへけれはさまてはな
けき給ひそ此うへはたゝ少將の御心かはらてたの
まれ奉りぬへくはあこきもいか許うれしからむと
いふなり

北方御心のいみしうまゝしきよしはさき〳〵にも聞
せ給へれはさこそはおほすらめ（落の詞）たゝ御心たに頼み（たのまれ）奉
ぬへくはいかにうれしからむそれこそはましてかく（白の事）
こ（さりぬさ云なり）さやうにあらむ人を見て心とまりて思ふ人は有な
むや物の聞えあらは

○物のきこえ　物とはすへてことをひろくいふ時
に用る語なり物へまかる物するなとみなことをお
ほよそにいふなり

北方いかに

○北のかたいかに　北のかたのいみしう心あしく
てわれゆるさゝらんことは露計もしてはいみしか
らむと明くれおほいたるにおちつゝみ給へるとな
む上にみえたり

北（北の方かれて落にの玉ひしとなり）の給はむわかいはさらむ人のことをたにしたらは哭
にもおき（あこきか詞）たらしとの給ひし（こゝなは）く物をとていみしと思ひ給
うれはされはなか（いイ）〳〵思ひはなれ奉りたらむかよか
らむかくおもはれおはしませは

○かくいはれ　北方にあしさまにいはれおはしま
さはかくこめすゑられてつかはれ給はんよりはか
へりてよき事にあひ給ふこともや有らんといふ意
なり

いつ。（くイ）の世にか（イナシ）もしよくもならせ給はゝ（むイ）

○いつの世にか　紅葉賀にいかならん世に人つて
ならてきこえさせんとて

かくても世におはしまさしかくて籠居たて奉給ひて

つかひ（使）奉り給はむ。御心（のイ）のいと深くてあらせ聞え給ふには有すやといとおさな〳〵しう云ゐたり（前にいへるいわけなさにむかへて見べし）御返り事はさゝへは早う御ふみ御覽せよ今は覽し歎く其（過し夜のはかつ）（落）しかりしこさゝもなかひあらしとて御ふみひろけて奉れはうつふしなからみ給へはたゝかくのみあり「いかなれや昔おもひし程よりは今のまゝ思ふことのまさるは　と有けれと（落は）いと心ちあしとて御かへりこともなし安濃（彡）かへりこと書いてや心つきなくこは何事そよへの心はかきりなく（帶刀迄云詞なるべし）あいなぐ心つきなくはらきたなしと見てしかは今（落の）行先もいとたのもしけなくなむおまへにはいとなやましけにてまた起させ給はさめれは御ふみもさなからなむいとこそ心くるしけれ御氣色をみれはさいへ（心をほのめかしていふなるへし）り少將の君にかくなむと聞ゆれは我をいとものしと（帶刀か）（落の）思はむやはたゝかの衣ともをいといみしと思ひたりつる名殘ならむと哀におもほす（少將）ひるまにまた御文書給ふなとか今たにいとわりなけなる御けしきのいとほしさはまさりたるそ（文詞）（よへのなつかしさに）「戀しくもおもほゆる哉さゝ（やイ）かにのいとゝけすのみ見ゆるけしきにいと（こイ）わりな。

と有たちはきか文こたひたに御かへりなくはひむな（な落せしか）かりなむ今はた相おほせかし御心はいとなかけにな（少將の御心はすゑかけてたの）（もしけになり）む見奉りの給はするといへり安濃猶こたひはといへともいかに思ひ出給ふらむと思ふにはつかしうつゝ（少將の）ましうわつらはしくてかへり事書へくもおほえねはたゝ衣を引かつきてふしたり聞えわつらひてあこき（落にさま〳〵さ）（眞實）かへり事書御ふみは御覽しつれとまめやかにくるしけなる御氣色にてなむ御返事もさて最なかけにはな（聞え給はぬなといふを略たり）とか

○扱いとなかけに　御心のなかけなりとの給へといく程もなくてなとか長さも短さも見えむまたたとへたのもしけなくおはすとてもしか有のまゝにのたまはんやとゝかめたるなり

いつの程にかはみしかさも見え給はむまたたのもし（少將の御心の）けなくともうしろやすくの給ふらむと書てやりつ

○うしろやすく　うしろやすくはうしろめたしに對へたる詞にて氣つかひなきをいふ（少將の詞）

たちはき見せ奉れはいみしくされてものよくいふへ

（落の）き物かなむけにはつかしと思ひたりつるに氣のほり
たらむとほゝゑみての給ふ
○ほゝゑみて　和名抄（面部）顔面　四聲字苑云顔（五姦反）
眉目間也　遊仙窟云面子（一云保々豆岐）　字萬伎云ほ
ゝゑむは含笑なり萬葉に梅花いまたふゝめりとい
ふは花のまた開けす含てあるをいふ其ふくさほゝ
と音通へり人の頬をほゝといふも物ふゝむ所なれ
はなりゑみは心にめておもしろむ時の事なれは愛（ヱ）
みの心なりこゝは少し愛みをふくまるゝ故にほゝ
ゑむといへり
直云ほゝゑむは聲はせて顔にわらひのみゆるなり
ほゝは頬の字なり和名抄に顔面をほゝつきとよめ
り
さてあこきたゝひとりして云合すへき人もなけれは
心一つをちゝになして立居つゝおまし所のちり拂ひ
そゝくりて
○そゝくり　若菜巻（紫上の明石の女君をいつくしむ所）にちこうつくし
みし給ふ御心にてあまかつなと御手つから作りそ
ゝくりおはするもいとわか〳〵し云々　契沖云蜻
蛉日記云天下の本葉を取あつめてめつらかなるく
す玉せんなといひそゝくりゐたるほとに云々下に
そゝくと云詞有是に同し　延喜式第八に喋の字を
そゝくとよみて注に古語といへりさわく意なり又
物語にそうときたつといへる詞もそゝきたつとい
へる詞もそゝきたつにうは音便にそへたる歟後の
人の加へたるかにて此詞にや
屏風几帳なけれはしつらひなさむ事もなしいとわり
なけれと君は物も覺えてふし給へるをおましなほと
むと引起し奉れはおもてあかみてけにくるしけなる
まて御目も泣はれ給へりいとはしう（下文に頭）裏にて御くし
かきくたし給へ（かい下しなさする）とおとな〳〵しくつくろへといと心
ちあしとてたゝふしにふしぬ此君はいさゝかよき御
てうとゝもたまへりける母君の御物成けり御かゝ
みなとなむまめやかにうつくしけなりける是をたに
もたまへさらましかはと思ひてかきのこひて枕上に
置
○枕かみにおく　帳臺のはしらに鏡をかくることさ
雑用抄又雅輔裝束抄にくわしこゝは帳もなけれは
枕上におきたるなり
かく（あこきは）おとなになりわらはに成一人いそきくらしつ今

はおはしぬらむとてかたしけなくともまたいたう身にも馴侍らすいとほしうよへをたにさて（イナシ）と見え奉り給ひけむをとておのかはかまの二度計着ていときよけなるとのゐ物ひとつもたりけるを

○とのゐもの（書紫に云）こはもと公卿殿上人又は女房にもと有内裏に宿直するにてとのゐものは其宿衣をいふ打任せては直衣の事なりされと此處にいふはあこきか宮仕に用る料の衣にてはれの衣なるへしされは二度計着ていときよけなるとはいへり實に夜のみ用ならは馴衣にも有へくまた君に奉らむはなめしかるへしされはこゝは晝夜にかきらす君の前に出仕るをとのゐと轉し云て俗にいはゝあこきか御番に用る衣なり宿直物といふに泥むへからす抑此とのゐといふこと上内裏にのみいふへきを臣の家に犯しいふなり○とのゐもの　ねまき夜具の類を云後撰にまさたゝかとのゐものをとりたかへて大輔かもとにもて來りけれは大輔「ふる鄉のならの都のはしめよりなれにけりともみゆる衣か　返し雅忠「ふりぬとて思ひもすてしから衣よそへてあやなうらみもそする　又赤染右衛門家集にかたゝかへに來る人のとのゐものを出したれはつとめて云たる「夜やとりの朝の原のをみなへしうつり香にてや人はとかめん　返し「宿かせは床さへあやなをみなへしいかてうつれる香とそこたへむ　又宇治拾遺物語（平貞文か本院侍従か局へしのひたるところ）に局に行たれは人出來て上になれは案内申さんとてはしのかたに入ていぬみれは物のうしろに火ほのかにともしてとのゐものとおほしき衣ふせこにかけてたきものしめたるにほひなくてえならすと云々　眞淵はとのいは宿直にてとのいの假字なりといはれしはひかことにて殿居なれはゐのかななるよし宣長か萬葉玉小琴にみえたり

いとしのひて奉る（落に）とていとなれ〳〵しう侍れとも

○いとしのひて奉るとて　奉るとはきせ參らすを云伊物「是やこの天羽衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけり

また見しる人の侍らはこそあらめいか丶はせむとい（なてふ事かあらんなといふに同し）へは（落の）かつははつかしけれとこよひさへ同し樣にて見（少将に）えむ事をわりなく思ひつるに哀にて着給ひつたき（薫）物

三の君の御裳着の時なるへし
は、此御もきに給はせたりしをゆめ計つゝみ置て侍り
さて

○ゆめはかり　いさゝかはかりと云ことなり千載集雑上　周防内侍「春のよのゆめはかりなる手枕にかひなくたゝん名こそをしけれ　今もなほ甥部には少しはかりと云事をゆめほとゝいふ所もあるにや　うつほ菊宴下（源宰相のあて宮へいせうそこ）こゝらのとし頃思ひたまひまとひつる所かひなく人つてならて夢はかりも聞えさせてやみぬる事云々　うつほ藤原君（源宰相あて宮歌らんさする所）源宰相はなほかの兵衛の君に思ことをかたらひつゝゆめ計の返をたに見せ給へとなんの給ひける

いとかうはしうたき匂はす三しやくの御几帳一つそいるへかめるいかゝせむ誰にからまし御とのゐ物もいとうすきを思ひまはしてをはの殿は（あこきか）ら宮つかへしけるか今は和泉守の妻にて居たりけるかり文やるとみなる事にてとゝめ侍らむはつかしき人の方違にさうしに物し給ふへきにきてう一つさてはとのゐもの（人のかく来り宿るにさいふ意也　便無）に人のこふ（イかう）物すら（イる）ひなきえいたし侍らしと思ひ侍りてなむさるへきや侍る給はせてむや折々はあ（音信なは）もせて

や数事なれとこみにてなむとはしりてやりたれはおこつれ給はぬをこそいさ心うく思ひ給ふれとはしも（事様にしもおはしますらんとなりはつかしき人のかたゝかへなさいへるなうけたるなるへし）物し給ふらんきてう奉る

○さはしも云々几帳奉る　此詞諸本おのか着んさてしたりつるなりといへる下に有しをおのれ直廳かさかしらにこゝに移せりとさらぬは見む人の心にまかすへし

何もく（たはの詞）猶のたまはんとの給へれはよろつとゝめつ最あやしけれとおのかきむさてしたりつるなりとて

○何もくなほの給はむ云々　あこきかふみに猶あとよりまたく聞えんと様に有しならむ夫をうけてまたも御消息有んとの給へは其時にと答たるなり

しをむ色のはりわたまておこせたり

○しをむ色　源氏河海抄云紫苑色とは表すはう裏もえきなり湖曹抄云表薄色裏青二説不同

いとうれしき事限りなし取出て見せ奉るきてうのひもときおろす程に君（少将）おはしたれはいれ奉りつ女ふし

たるかうたてくおほゆれはおくれは（少将の詞）くるしうおほえ給はむに何かおきさせ給ふやかて（すくになり）とてふし給ひぬこよひははかまもひとへもあれは

○イ本こよひははかまもいとかうはし　はかまもきぬもひとへもあれは云々

れい（よのつねと云事）の（落）人心ちし給ひて男（少将）もつゝましからす（うちとけてなり）ふし給ひぬこよひは時々御いらへし給ふいと（少将）世になうあるましくおほえ給ひて萬にかたらひ給ふ程に夜も明ぬ御車（御迎の）ゐて參りたりと申せは今雨やみてしはしまてとてふし給へれはあこき御てうつかゆいかて參らむ（參らするなり）と思ひて

○かゆ　粥和名抄（水漿類）唐韻云饘（諸延反和名加太賀由）厚粥也四聲字苑云周人呼粥也粥（之叔反和名之留加由）薄糜也

みつし（御厨子と膳所也）にやかたらはましと思へとも大かたにもおはしまさねは御かゆもよにせしと思へといきてかたらふ（あこきか詞）たちはきの友たちなむよへものいはむとてきたりしを雨にとまりてまたかへらぬにかゆくはせむと思ふをなむなくてかはらけ少し給へ

○かはらけ　酒の事をいふ若紫巻に苔のうへになみゐてかはらけ參るなと見えたり

さてはひきほしなとや殘りたる

○ひきほし　夢浮橋にひきほし奉れたりつる云々細流云海藻なるへし花鳥餘情云うつほにひ色のをしき四つしてひきほしくた物なとゝいへり契沖云海松にてする事とみえたり蜻蛉日記にみるのひきほしのみしかくちきりたるをゆひあつめて云々赤染右衛門家集に御いみにこもりたる僧とものれうにひきほしゝて奉れりしに「ひきほしして袂かはくと思へとも泪そまさる見るめたえては　濱臣案引はあやめ引なとのひくにて海草をとるをいふさて夫をほして貯置てくひものとするなり今のひしきこんふなとみな引ほしなるへし　直案赤染集のはし書に御いみにこもりたる云々とあるにてらしてみれは下に御としみとあるも精進の後うをゝ用ることあきらけし

少し給へといへはあな（みつし預りか詞）いとほし心いそきをかこし給ふかいとほしさ（石山より）歸らせ給はむれうに今少しあらむといへは歸り給はむには御としみ（土佐日記本居云たさしいみと略語）をそし給はむとてけ

しきよろしさみて

○御さしみ　契沖云蜻蛉日記にはやさしみをそしたまふへきなさおほよそ此詞猶みえたりそれは精進の後魚を用る事のやうにみゆ猶可考　直麿案に此說よろしさてうつほ藏開下源氏乙女なさに年貿の事をいひしは年滿の義にておのつから別語さみゆ

かたはらなるへいし（和名抄（瓦器類）瓶子楊氏漢語抄云瓶子（上音薄經反和名加米））を明てたゝとりにさるを少しは殘し給へといへは（あこきか詞）さよ〳〵といひてかみにて取わけ（女の童也　にイ）てすみとりに入て引かくしてもていきてつめか御かゆいときようしてもてこよとてをかしけなる御臺らさめありく御てうつまいらせむとはさうもさめありきて御方には何事（諸）のはさうたらひかあらむ

○はさうもさめありき　和名抄（楾浴具）說文云匜（移爾反一音作和名波邇佐布）楾中有道可以注水之器也俗用楾字所出未詳但和名之義或云有柄半插其內故爲半插也○たらひ　盥說文云盥（音管）澡手也字從臼水臨皿也楊氏漢語抄云盥（音貫）比（落の）俗用手洗二字以上三の御かたのを取もてきて御前に参らむとてかしら（髮）かいくたしなごして居たり（插下）

○かしらかい下し（上文にみくしかき下し給へ云々）　いそかはしきをりは髪をあけて御前へ出るをりはまたかき下すなり

女君はわりなうくるしと思ひてふし給へりあこき最清けにさうそき（假）けさう（粧）して帯ゆるらかにかけて参るうしろ（背面）て髪たけに三尺はかり餘りていとをかしけなりさたちはきも見おくる此みかうし（格子）は参らてやあらむするとひとりごさして参るを少將の君もゆかしう（あこき）ていとくらしあけよとの給ふなりとの給へは物ふみたてゝあけつ男君起給ひて御装束し給ひて車は（迎ひ）ありやとゝひ給ふみかさに侍と（あこき）申せは出給ひなむとするにいときよけにて御かゆ（露かもて来し成へし）参りたり御てうつ取くして参りたりあやしう（少將）ひなし（無便）と聞し程よりはとおほす女君はいとあやしういかてと思ひたまへり雨少しよろしうなれは人さわかしうあらねはやをら出給ひなむとす女君の御方を見給へはまめやかにいとうつくしけれはいとゝ限りなくおもほし増ていと哀とおほす

○あはれとおほす　直案あはれとおほすの下詞落たるにはあらて少將のかへらせ給ふことをわさと

うれしき事にゝ（物）す見れはいつのまにしたるにかあら
むくさもちひふたくさ（二種）れいのもちひふたくさちいさ
やかにをかしうて

○くさもちひ　文徳實錄に母子草を蒸擣て餅となす
すこと見えたり又和名抄䭔（久佐毛知比）と有此物なり二
くさはかたちを二いろにしたるをいふなり

さま／＼なりふみには假にの給へりつれはいそきて
思ふさまにやあらさらむ心さし口をしといへり雨い（乃とも）
たうふるとていそけはさけ計のますかへり事はすへ（ろくなさかつけす）（あこき）
て聞えさすれは世のつねなりとよろこひやりつしそ（うれしさ云も）
しつとてうれし物のふたに少し入て君に參るくらう（もちひな）（落）
なるまゝに雨いとあやにくにかしらさし出へくもあ
らす

○かしらさし出へくもあらす　明石巻にかしらさ
し出へくもあらぬ空のまきれに云々　うつほ藤原
君巻にこのころまうてんとしつれとあめのかくふ
れはかしらもさしいでゝなん侍りつるなりと云々

少將たちはきにかたらひ給ふ口おしうかしこにはえ（帶刀か詞）
いくましかめり此雨よとの給へは程なくいとほしく（今宵行給はすはなれて）
そ侍らむかしさ侍れとあやにくなる雨はいかゝはせ（ほともなきにいとほしからんとなり）
む心のおこたりならはこそあらめさる御ふみをたに
ものせさせ給へとてけしきいとくるしけなりとかし（少將）
とてかい給ふいつしか參りこむとしつる程にかうわ（文の詞）
りなかめれはなむ心のつみにあらぬにおろかにおも（あやにくなる雨の）
ほすなとてたちはきもたゝ今參らむ君おはしまさむ（御ふみ有またて帶刀も）
としつる程にかゝる雨なれは口をしと歎かせ給ふと
いへりかゝれはいみしう口をしと思ひてたちはきか（落もあこきも）（あこきか）
かへり事にいてやふるともといふこともあるを（文の詞）

○いてやふるとも　六帖一　雨　大伴像見　「い
そのかみふるとも雨にさはらめやあはむといもに
契りしものを　又萬葉三

いとうさ（イナシ）／＼しき御心さまにこそあめれさらに聞え
さすへきにもあらす御みつからは何の心ちのよきに（帶刀た指）
かこむとたにあるそかゝるあやまちしいてゝかゝる
やう有やさても世の人はこよひこさらむとかいふな（引歌あるへし）
るをおはしまさゝらむよとかけり君の御返り事には
たゝ「世にふるをうき身と思ふわか袖のぬれはしめ
けるよひの雨かな　とありもて參りたる程はいぬの

時も過ぬへし火のもとにて見給ひて君もいと哀とおもほしたりたちはきかもとなるふみを見給ひていみしうくねりためるは

○いみしうくねりためるは　古今序にをみなへしの一ときをくねるにも源氏紅葉賀にまつくねく〳〵しく恨る人の心やふらしと思ひて云々紅梅にうるはしからぬ心さへ打ましりなまくねく〳〵しき事とも出くる時々あれと云々源語梯にうらむるさまなり女郎花にくねると云詞あるもをみなへしを女にたとへて女の本性の思ひきりなく物をうらむるを繰練の義にいへるなるへしといへり祇案にこはとさまかうさまもとかしけにいふことにて俗にこねると云詞と同しく覺ゆこねるは米粉麥粉なとを水にて煉をいひてねまりてうるさきものなれはいふなるへしさてかよはしてくねるともいひけむ今の俗ものむつかしう云をこねるねちるなといふにや繰練といふ説は覺束なし

けにこよひは三日の夜なりけるをものゝはしめにものあしう思ふらんいと〳〵ほし雨はいや増りにまされは思ひわひてつらつゑつきてしはし寄爲給へり

○つらつゑつきて向ひ居給へりと有て頰杖の事なり白氏文集に暁燭前にある支頤をツラツヱツクと訓せり　箒木巻につらつゑつきて向ひ居給へりと有て頰杖の事なり

こゝに移すへし

たちはきわりなしと思へりうち歎て立は少將しはし居たれいかにそやいき。せむするかたちよりまかりて云なくさめ侍らむと申せは

○かたちよりまかりて　萬葉十一人丸「山科強田山馬雖在歩吾來汝念不得　拾遺戀「山城のこはたの里にうまはあれと歩よりそ行君をおもへは　下文にかちよりおはしたるなるへしとあるに照映す

君さらは我もいかむとの給ふうれしと思ひていとよう侍りなむと申せはおほかさひとつもとめよ衣ぬきてこむとて入給ひぬ

○おほかさ　和名抄行旅具　簦　史記音義云簦音登　俗云大笠　笠有柄也　後撰戀六をとこのまうてこさありありて雨のふる夜おほかさをこひに遣はしけれは

帶刀かさもとめにありくあこきかく出たち給ふもしらていといみしと歎くかゝるまゝにあいきやうなの

雨やとはら立は君はつかしけれとなとかくはいふそとの給へは（あこき）猶よろしうふれかしなりにくゝらおほえ侍るかなといへは（今俗にいふよく降と云に似り）（落）ふりそ増れると忍ひやかにいはれてそ

○ふりそまされる　古今戀四藤原敏行朝臣業平の家也ける女を相しりて文つかはせりける詞に今まうてく雨の降けるをなむ見わつらひ侍るといへりけるをきゝて彼女にかはりてよめる在原業平朝臣「かす〳〵におもひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる　又伊勢物語百七段に載す

いかに思ふらむとはつかしうてそひふし給へり男君はたゝ白き御そ一かさねを着給ひていとかてうけにひきつれてたちはきとたゝ二人

○かてうけに引つれて　秋成本駕丁の字を傍釋せり或説に駕輿丁けになるへしいやしきものゝさまといふなりといへり　直案にかてうはかてふの假名の誤れるにて岩疊氣なるへしかひ〳〵しく丈夫氣なるをいふ今も田舍にてよくいふ詞なり

出給ひておほかさを二人さして門をみそかに明させ給ひていと忍ひて出給ひぬつゝやみにてわふ〳〵道のあしきを

○つゝやみ　今昔物語廿六（美濃國因幡河出水流ㇾ人語）日暮て夜に成にければつゝ暗にして物も不見ければ其夜は明して水落してこそは木より下らめと思て云々　又廿七（頼光郎等平季武値ㇾ産女ㇾ語）既に季武其渡に行著ぬ九月の下つやみの比なれはつゝ暗なるに季武河をさふりさふりと渡るなり云々同卷（通ㇾ鈴鹿山ㇾ三人入宿不知堂語）雨は降てつゝ暗なるに今一人の男亦着物を脱に成て前に出る男の後に立て出ぬ云々

よろほひおはする程にさきおひてあまた火ともさせてこうちきりにつしにさしあひぬ

○よろほひおはする　谷川士清曰神代紀に徒倚をヨロホフとよめり依這の義なるへし仁德紀の歌にもよろほひゆくかと見え源氏によろほひたふれと見えたりよろめくよろ〳〵も同語なるへしといへり　直案にありくに足もとのしとろなるをいふ詞にて催馬樂に酒をたうへてたへゑふてたうとこりんそやまうてくるよろほひそまうてくるたんなた

んなたりやらんなたんなたりやさありさて語意を
考るによろはゆるに通ひて地震のゆるなとのゆる
に同しくふら〳〵するを云ほひはひの延ふるにて
よろほふはゆるきふるふといふ意なるへく覺ゆ
平家物語に颭の字をユルグと訓せり正字通に凡風
動物與物受風搖曳者皆謂之颭とある注よく
ふら〳〵すると云にかなへりよろきゆるき同しき
證は延喜式に相摸國餘綾淘綾と見え古今六帖に近
江國輿呂伎神社をゆるきのもりと詠る類なり這は
はひとはいへとほひとはいふましけれは依這の説
はあらし

いさせはきこうちなれはえあゆみかくれすかたそは
みてかさをたれかけて行はさうしきとも此まかる物
共しはしまかりとまれかはかり雨もよに夜なかにた
た二人いくは

○雨もよに　此詞を古き抄物ともに雨催といふこ
となりとしまた雨の夜なりといふことにしたるは
いみしきひかことなり催すはかねてその氣はひあ
るをいふ詞なれはしきりにふるを催すといふへき
ことはりのなきは誰も知りぬへし雨の夜とさため
かたきよしは　紫式部家集　今よひ御覽する日内
にて「たつきなき旅のそらなるすまひをは雨もよ
にとふ人もあらしな　和泉式部家集　秋のいとお
もしろく咲たる所に雨ふる日まろうとの來て物語
して歸るに「雨もよにいそくへしやは秋はきの花
見るとてはわさともそくる　賴政集　女のもとよ
り雨のふる日遣はしたりける「雨もよにおもひい
てしと思へとも思ふ心をもらすけふかな　返し
「雨もよにおもふ心のほうかけにやあやしくぬる
ゝわか袂かな　大和物語におなし女後に兵衞尉も
ろたゝにあひて詠ておこせたりける風ふき雨ふり
ける日の事になむ「こち風はけふ日くらしにふく
めれと雨もよにはたよにもあらしな　とあるはみ
な晝によまれたれはなりさておのれか臆もていは
ゝもよは助詞にて紀のおきめもよあふみのおきめ
萬葉のかたまもよみかたまの例にて雨もよには雨
にといふことなりかく心得れは何れの歌も通せぬ
はなきなり眞淵濱臣なとくさ〳〵の考あれともみ
ないひえす今諸子に折衷してかく定めつ

やうすあらんとなり
けしと有とらへよといへは佗しくてしはしあゆみと
まりて立れは火をうちふきて

○火をうちふきて　ふきては振てなり萬葉に山吹

を山振とかき羽ふきを羽振といへると同し
人々足ともいと白しぬす人にはあらぬなめりといへ
はまうと（眞人）のこぬす人は足白くこそ侍らめといひ過る
まゝにかく立るはなそゐ侍れとてかさをほと〳〵と（これも雑色の中にいふ詞）
うてはくそのいとおほかるうへにかゝまりゐぬまた
うちはやりたる人しひて此かさをさしかくしてかほ
をかくすはなそとていき過るまゝにおほかさを引か
だふけてかさにつきてくそのうへに居たるを火を打
ふきて見てさしぬき着たりけり身まつしき人の思ふ
めかりいくにこそなと口々にいひておはしぬれはた
ちて衛もむのかう（督）のおはするなめり我をけむき（嫌疑）の者・
とてはやとらへむとこそしたりつれ我を足しろきぬ
す人とつけたりつるこそをかしかりつれなとたゝふ
たりかたらひてわらひ給ふあはれ是よりかへりなむ
くそつきにたりいとくさくていきたらは中々うとま
れなむとの給へは
○けむきのもの　源氏横笛にけむきのものと思ひ
つるにこそとらえむとはしにたりつれと有嫌疑の
字なり○衛門のかうの云々　宮衛令云衛府持時行
夜々鼓聲絶禁行曉皷聲動聽行云々今は此夜行にあ
ひたるなり枕冊子にゆけいのすけのやかう狩衣す
かたゐいやしけなり又人におちらるゝうへのきぬ
はたおとろ〳〵しく立さまよふも人みつけはあな
つらはしけむきの者やあるとたはふれにもとがむ
云々と有をもてこゝのさま思ひやるへし
たちはきわらふ〳〵かゝる雨にかくておはしました
らは御心さしをおほさむ人はさかうの香にもかきな
し奉り給ひてむ
○さかう　和名抄（香名類）麝香爾雅注云麝（食夜反）脚似麞而
有香
殿は（少將のやかた）いととほく成侍りぬ行先はいと近し猶おはしま
しなむといへはかはかり心さしふかきさまにており
たちていたつらにやなさむとおほしておはしぬ門か
らうしてあけさせて入給ひぬたちはきかさうしにて
まつ水とて御足すまさす又たちはきもあらひてあか
つきにはいみしくとくおきよまたくらからむに歸り
なむとゝまりてあるへきにもあらすいとこと樣なる
姿成へしとの給ひてかうし忍ひやかにたゝい給（開出し給はゝ也）女君
はこよひこぬをつらしと思ふにはあらて大かたきこ

え出はいかに北の方の給はむ世中のすへてうき事思ひみたれて打歎てふし給へりあこき思ひ（今宵はさ）まうけたるかひなけに思ひておまへによりふしたれはふと起てなとみかうしのなるとて寄たれは少将あけよとの給ふこゑに驚て引あけたれは入おはしたるさま（雨にぬれて）しほる計なりかちよりおはしたるなめりと思ふにめてたく哀なることふたつなくていかてかくはぬれさせ給へるそと聞ゆれはこれなりかかむさうおもしと侘つるかくるしさに

○かむさう　勘當は今世御叱といふほとの事なりうつほ俊蔭の巻（若小君失給ひたるに）大殿には云々兵衛佐君（小君）の兄をいみしうからかへ給ひて御前馬添の男ともは云々勘當せられ雜色は打しはらせ云々　宇治拾遺卷三に尾張の國司俊綱下國の後大宮司を呼てきやつたしかにめしこめて勘當せよ云々雜談集に槪賢のわかきとき尊師勘當し給ふ云々文德實錄云本朝俗諺爲君父擯斥曰勘當續日本紀卷之八養老二年四月丙辰筑後守正五位下道君首名卒首名少治律令曉習吏職和銅末出爲筑後守兼治肥後國勸人生業爲制條耕營頃畝樹草菓下及雞豚皆有章程曲盡時宜旣時皆行如有不遵教者隨加勘當文德實錄本朝俗爲君父擯斥曰勘當とあり　貝原好古諺草曰俗に君父の怒に逢て閉居するを勘當に逢たるといふ是は其罪の科を勘へて輕重の律に當る心なるへし唐書軍中不暇勘當と有といはれたれは西土にもいへる詞なり唐書潜博誰か傳にか俄に搜索しかたし追て可考

くゝりをはきにあけて來つるに

○くゝりをはきにあけて　土佐日記（十三日）ほやのすしあわひをそ心にもあらぬはきにもあけて見せける季吟注に云はきにあけてとは脛をあらはにかきあけて磯邊なとにおり立さまなり古今にいつしかとまたく心をはきにあけて云々此歌はきにあけては袴のすそなとくゝり上し躰なり云々指貫の絬（クヽリ）を膝のほとりまてたかくあけたるなり

たふれてつち付にたりとてぬき給へは女君の御そを取て着せ奉りてほし侍らむと聞ゆれは着給ひつ女君のふし給へる所に寄給ひてかく計哀にて來りとてふとかきいたき給はゝこそあらめとてかいさくり給ふに袖の少しぬれたるを男君こさりつるを思ひけるも

しきわさかな石山よりも今日はかへりおはしぬらむ人もこそふとくれと思ふもしつ心なくて御かゆ御てうつなと思ふにいそきありけは（あこき）たちはきなとかくしつ心なくはありき給ふといへはいかゝは程なき（狹なり）所に人をする奉りたれは人やふとくるとてさわきありく（少將）そかしといふ車取にやれやをら（徐々）ふと出なむとの給ふ（少將）程に石山の人のゝしりてかへりおはしぬふようなめりとて出給はす成ぬ

○ふようなめりとて　ふようは不用の字音にてことのならぬいたつらなるを云一說ようはえうの誤にて益の字音を用ひたるなりといへりさらはやくなきよしなりいつらかあたれるにや

落窪物語證解卷之二

女君かく隱れもなき所に人もこそくれいかにせむとむねつぶれていとおそろし（隱るへき所もなきなり）（三ノ七丁オ可考乎此）

○むねつぶれて　源氏總角にいかなる心ちせんとむねもひしけて覺ゆ又赤染右衞門集にけちかくなりてふみおこせる返事をむねやみてせねはむねひしけなけく歎もありふれはあくこゝちするものとしらなん

あこぎもいとあわたゝしくおぼゆ

○あわたゝし　直麿按するにあわて〳〵しきと云へる轉語なり此語あわてるあわつるなど活用して日本紀に急字遽字惋字をアハテルと訓み文選に周章を訓めり新撰字鏡には惶急をアワツと訓めり沫立の意を轉用せりなど云は非なり

御たい（臺）あはせいと淸げにてかゆ參りたり

○あはせ　續世繼卷九にまなの御合せと云こと有まなは魚なりあはせはめしのさいの事なり枕草子にもあはせと有めしにあはせてくふ物なり古事談

三仁海僧正は食鳥の人なり房にありける僧のえもいはず取けるなり件の雀をはら〳〵とあふりて粥漬のあはせに用けるなりなと有
續世繼いのるしるしの巻（禪林寺の僧正時の關白法藏の破の修理乞し所）に年老たる女房のあれは御はらのそこなはせ給へるをみのりのくらことは侍る物をと申ければさもいはれたる事さも有んとてまなの御あはせともと〻のへて奉りければ材木給りてやふれたる法藏つくろひ侍りぬとそ聞えけると有まなは魚なり云々
御てうつまゐり（手水）いそぎ（あこき）ありくが心もとなければ今人ひとりもがなと思ふに
○心もとなければ　詞花集に「ほともなくくるしと思ひし冬の日の心もとなきをりもありけり　新撰字鏡に忙怕をコヽロモトナカルとよめりいそかはしうおほつかなき意なり　直慶按に此詞に二つの意有源氏空蟬巻によふくるとの心もとなきをの給ふ竹取物語に此枝をゝりてしかはさらに心もとなくて船にのりて追風吹て四百餘日になんまうてきにし大和物語にみつから唯今參りてと云々里に車とりにやりて待ほといと心もとなし竹取の下に天人遅しと心もとなかり給ひて伊勢物語（八十三段）にとくいなんと思ふにおほみき給ひろく給はんとてつかはさゝりけりこの馬のかみ心もとなかりてなと有はいそかはしう心いらるゝさまにて新撰字鏡に忙怕をよませしによく允れりこゝなるも其意なり今一つは土佐日記九日（コレハ心イラル丶方ニ入ルヘシ）こゝろもとなきに明ぬから船を引つゝのほれは水なければ居さりにのみゐさる宇治（同）拾遺十二に例の光もの山より地上を飛行けるに起んも心もとなくてあふのけに寢なからよく引て射たりければ源氏きり壺にいつしか心もとなからせ給ひて急ぎ參らせて御覽するに枕草紙心もとなき物に人のもとにとみに物ぬひにやり待ほと物見にいそき出て今や〳〵とくるしういりつゝあなたをまもらへたるこゝち子うむへき人の程すくるまてさるけしきのなき遠き所より思ふ人の文をえてかたく封したるそくひなとはなちかくるこゝろもとなし又此物かたりにいつしか夜も明なんと心もとなくいひあかすなといへるは待とほき意也とされといそかはしう心いらるゝさまにいへるは本にて轉して待とほなる意ともなれるなるへし文勢によ

りて解しうへし　後撰はし書に伊勢へまかる人とくいなんと心もとなかると聞て云々是はいそかはしう心いらるゝなり　詞花集のうたは待とほきかたなり　なほ前後せぬやうによく見わけて清書すべし　宇治拾遺二用經あら巻の事にやかて用經けふの庖丁は仕らんと云てまなはし削り鞘なる刀ぬひてまうけつゝあな久しいつらきぬやなと心もとなかりゐたりおそし〳〵といひゐたる程に云々
北の方いさゝく車より下りもあへすなといふに同しおり給ふやおそきと北方あこぎとてよびのゝしり給へば
○おり給ふやおそきと　今昔物語十九六宮姫君夫出家語此常陸守も任畢て上れは壻も同く上る道すがら中略京に入や遲しと妻をは父の常陸守の家に送りて我は旅裝束乍ら六の宮へ急行て見れは云々
隔のさうじをあけていつれはさす鎖べき人もおぼえす
格子かうしのはさま間隔てに参りたれは
○はさま　大和物語に下簾のはさまのあきたるより又下すたれのはさまより榮花物語月宴こきてんのはさまより云々日中行事に御湯殿のはさまなと有て眞名伊勢物語には迫字を塡たり是はまさしく論語の攝二乎大國之間一といへる包咸か註に攝迫也迫二於大國之間一と有によれるなるへし又孟子梁惠王下滕小國也間二於齊楚一とある間の字をハサマルと訓しをみれははさまは挾の義なる事明らけし又歌には山家集「遙なる岩のはさまに獨居て人めおもはてものおもはゝや　新撰六帖　信實「五月雨に瀧もあまりの水はしり所もおかぬ岩はさまかな　同　同人「山はさまきひしくたゝむ岩かどに年へてきれぬ瀧の糸かななどよめり何れも間の意なり
北方の詞きかうじたる人はくるしけれは打やすむに此頃あこぎか事やすみをりつらむ
○きこうしたる　來困蜻蛉日記河瀬詣きこうしたるげすとも云々
イナシ車おるゝ所にみぬはなぞすべて落のかたの人なれはかく云人の身ひとばかりはらだゝしくよしなき物はなし
○人の身ひとはかり　或曰人の身一つはかりと有しにやまたつの字脱せしにもあるへし　直按日本紀に他をヒトとよめり方言に呼人曰他と見えてよそにする詞身人は方人なといふ意かいまた左いふ

例を見あたらねはむさとはいはれねと下にいかて
是かへしてんと有をおもひ見るへし
いかでこれかへし申て（落のかたへ）むとの給へば心ちにはいとう（うちゝらしイ）
れしきことゝ思ひながらきたなきものきかへ侍りつ（さく参らぬには）
る程なりと聞ゆれははやう御てうづ（北の方の詞　手水）参れとの給へば
立てありくそらもなし

○ありく空もなし　直鷹按かゝる所にいへる空は
心うきてつくかたなき意にて古今凡河内みつね「初鴈のは
つかにこゑをきゝしよりなか空にのみ物をおもふ
かな又同じ人「秋きりのはるゝ時なきこゝろには立居
の空もおもほえなくにといへる類也源氏夕かほの
巻にあしをそらにおもひまどふとある所に契沖の
引れたる萬葉のうたともよくこゝの詞にかなへり
「立居するたときはしらす我心あまつ空なり土は
踏とも「わきも子か夜戸出のすかた見てしより心
空なり土はふめとも「立とまりゆきゐのさとにい
もをおきて心空なり土はふめとも「下野のあその
かはらゆいしふます空ゆときぬよなか心のれ　是
等にてさとりうへし

おもの（膳）もいできにたれは御づし所にぎて

○みつし所にきて　直按にみつし所賑てなるへし
秋成本に來てとあるはあらし

あが君〳〵（もてはやす詞か）といひてかの白き米おほくにかへて

○かのしろき米　第一（四十三丁のオ）ゑふくろにしいこめ
入てと有はゑ文字の落たるにてこゝに彼といへる
はかの白米をさしていへるなり因て一の巻をもろ
文字をくはへて改つ

御だい参りき（來）ぬものゝくさは（種）ひ（助詞）ならびたれば

○くさはひ　日本紀に種々雑物をクサハヒノモノ
と訓り種々といふ意なり此詞源氏帚木巻に難すへ
きくさはひまぜぬ人はいつこにかは有んとあるを
始にて花散里梅か枝玉鬘など所々に出たり

少將の君びなし（便）とのみ聞しにいと心にくゝ（ゆかしく思ふなり）おぼす女
君もいかなるらむ（少將の心を）とおぼすをとこ君（少將）もをさ〳〵参ら
ず女君（落の心にもいかてかくしつらんと思すなり）はたおきゐ給はねば御まかり（あこきか）してたちはきに
いときよげ（落）にしてくはせたれば

○御まかりして　禁秘御抄毎日次第主上御手水ま
ゐる條に女官申す御手水まゐらせさふらはん女房

あさ云女房御楊枝二つ雙指まかりまゐらせさふらはんさ云ふ女房あさ云此まかりは枚なり

詩兕觥其觩　遊仙窟林叢交横　文選甘泉賦玄瓚觩　徒然草云久我相國は殿上にて水をめしけるに主殿司土器を奉りければまかりをまゐらせよとてまかりしてそめしける云々野槌に貝をすりて作れる飲器をまかりと云云々南嶺遺稿に云六帖目のおものまかりをつくるたをやめのあふきのおともえやはわするゝ此歌は天子配膳の女官唯今御膳もすみたるまゝ手長の人々参りて御膳をすへらかされよさ知らするために扇子二つ三つ打てならすなりひのおものとは毎日の御膳なりまかりとはすへらかせよさの義なり其配膳の女官に心をかけたる殿上人のよみし歌なり其扇の音もわすれすといふ詞つゝきおもしろしさて御膳のさま〳〵のもの檜曲といふ物にて夫へ入てしりそくたさへは砂糖なさを入る曲物の大きなる物なり是をまかりといふ御膳の具を入てまかる物なればなり毎日の御膳にあたらしきを用る故殿上の間の次の臺盤所に多くある物なりつれ〳〵草にまかりにて水をのみたるさ

いふに神代卷の豐玉姫の段を引てつるへの事なりさ抄物にあるは誤なり公卿の人つるへより水のむべからす云々　瀆按御まかりは御さかりの誤なるへしさをまさ寫し誤れるなり和名抄金器類器皿部鏁四聲字苑云鏁（音宮漢語抄云散賀利俗用懸釜二字今案春秋後語云懸釜而炊云々都賴器部中別無有此器之名）似釜而大口一云小釜也さ見ゆ懸釜さあるをおもふにつる有てさくるさましたる小釜にて物を煮には物にかけて煮る故にしかいふならんさかりの名も是より出しなるへしさてさかりの言は古語なり古事記垂仁條到山代國之相樂時所懸樹枝而欲死故號其地謂懸木今云相樂云々（和名抄山城國相樂佐加良加）されは此鏁して炊たる粥のおろしを鏁のまゝもて出て物にもりてくはせたるなり和名抄飯餅類云餲餅文選云膏餲粔籹餲音讓粔籹見下文楊氏漢語抄云餲餅形如藕節故名也和名萬加利是は食物にて別なり　うつほ藏開一の宮御産の事に中納言は例ものし給ふひむかしのひさしにきしきして御てうつものゝまかなひなさしすゑたれさもやのすみより頭もさしいて給はて宮のおろしをのみまゐる

いふやうこゝら（巨々等）の日頃さふらひつれどかくおろしな
どや見えつる猶わが君（あこきか帯刀に）のおはしますげなりけりとい
へばうれしき御心見えむとするうまのはなむけ（出ていれかしといふやうなるを）とい新
へばあなおそろしのことやとてたれ〴〵もわらふか
うて（而）書きて二所（少将と落さ）ふい給へる（直云こゝはふしとあるべし）程にれいはさしものぞき
給はぬ北方なかへだてのさうじを明給ふにか（牢）たけれ
はこれ明よとの給にあこきも君もいかゝせむとわひ（迷惑がるなり）
給へは

○おろしなどや　直案におろしとは俗に云おした
と云事と聞ゆ枕草紙にあなたにもおもの参るうら
やましくかた〴〵のは皆参りぬめりとく聞しめし
て翁おんなにおろしをたに給へ云々源平盛衰記四
十三ウ七汁御菜持はこひたる尼若女童下取（オロシ）んとて集
たる子孫童にいたるまで云々○うまのはなむけ
直淵云物へ行別に馬のはなをかなたへ向けてつゝ
かもなくてよなといふをもとにて後には其馬のは
なむけの料に酒のませなとするをいへり　新撰字
鏡云餞馬乃波奈平介

少将遮莫の字俗にいふまゝよなり
さばれあけ給へ几帳あけたまへらば物引かつぎてふ
（臥）いたらむとの給へばさしもこそのぞき給はめとわり
なけれどやるべき方もなければ几帳つら（片つらに）におしよけせ
て女君居給へり北方などおそくは明つるぞとひ給（下に几帳おし）
（秋本　落）やりて出てと有（六ノウ）
（落）へば今日明日御物いみに侍るといらふれはあらこと
〴〵しなでふ我いへなどなき所にて御ものいみや侍
るとの給へば

○御物いみ　物いみとは天災地妖はもとより夢凶
祥あしき夢見なとにも三日計門をさして物忌と紙
に書て簾帳なとに結付て慎居るを云禁秘抄云御物
忌之時總不出御他殿舎中諸事於簾中有之と見え河
海抄に昔は忍草に物忌を書てみすにも冠にもさし
ける也事なし草と云に就て也又柳の枝を三寸ばか
りに簡に作りて物忌と書て御冠の纓に着られ又白
紙に書て付らるゝ事あり是は禁中の事也と見えた
り直按に私にする物忌もこれに准するなるべし
（少将）あが君猶あけよとて明さすれば（北のかた）あらゝかにおし明て
入（坐）ましてつい居て見れば例ならず清げにしつらひて

きてうたて君（落）もいとをかしげに（可愛 秋本）取つくろひて（續日本紀）大方の
香もいとかうばしければあやしく（奇異）成てなど愛のさま
も御みざまも例ならぬもし我なかりつる程にとや有
つるとの給へばおもて打あかめて何事か侍らむといい
らへ給少將いかゞあるとゆかしうてきてうのほころ
ひよりふしなから見給へは
○ゆかしうて　古事記に悒の字を訓りものしたふ
心のゆかまほしき心にや　夫木集　右大將より朝
みちのくの奥ゆかしくもおもほゆるつほのいしふ
みそとのはま風
白きあやのかいねりなどよからねどかさねきておも
てひら〻かにて北方と見えたり
○おもてひら〻かにて　增鏡に太政大臣藤公相ノハ面
首區短也妖術者其首を得ん事を欲す葬る時其塚を
發き首を斫て去と云へり此區短はよこひらたきと
なり　永田圣齋脇餘箚雜錄に西域記を引て屈支國
（亦龜茲）其俗生レ子以レ木押レ頭欲ニ其區遞ー也區遞今所
レ謂計保字加志良是也と有是も自然ひらたつらな
ることわりなり
口つきあいきやうつきて少しに（艶 秋本）ほひたるけつきたる（色けある也）

清げ成けりたゞまゆのほどにぞおよずけのあしけさ
も少し出いたり（出來の音便なり）と見る參りたる（北方の詞）やうはけふこ〻にか
（置）ひたる鏡のをかしげなるに此御箱の入ぬべく見えし
しばし給へ（借し給へとなり）と聞えむとてなむようはべなりとの給へ
ばかう（落の）心やすく物し給へはいとよくなむ（心置なうの給ふものをといふ程の事なり）とば（さらばなり）給へと
てと引寄て取給へり
○およすけの　源氏桐壺におよつけもておはする
云々抄云萬に助及と書おとなひたる事なりといへ
り契沖師云萬葉に助及の事全なし不可用といはれ
しに宣長も同心せられたるのみにて何とも說なし
純頼も又同し或曰およすけはおよつけの誤にてや
かて老付の心にて生長しおとなしやかになるをい
ふか萬葉五に老しをはといふことを意余斯遠波と
詠りさて若き人の老人めきたるを云しより轉して
兒の長するをもいへりともいひ又幼きか漸成長し
て生次をおひを音便におよと云次をすかふともす
くともいふは古語なりともいへり共にあたれる說
とも覺えすこはまとしく若紫の卷にあな今めかし
此君やよついたる程におはするとそおほすらむと

あるよつきにておはをのかな違ひにて助字なるへしさて言の意は世着にて人情をしりたるをいへは幼き人の物のわきまへも世人には殊にすくれてめつらしきをもおさなの情しり顔なるをもいふなるへしこゝは北の方のとしにすなめかしう情しりかほなるまゆのほとなとにあしけく見ゆるを云なり

打うつしてわかもたまへる入給へり　鏡な　譌 秋本

○うちうつして　打移なり秋本あしゝ　此俤にうつし入てみれは也よろしき品なりけに入たればかしこき物をもかひてける(買 如此)かな此はこのやうに今の世まできゐこそさらにかくせねとてかきなで給へば

○蒔繪こそ　蒔繪の字は宋史に(九十一日本列傳)日本蒔繪筥一合納髪鬘二頭云々と見え眞名伊勢物語にも此字を書り皇明文則張汝弼楊義士傳宣德間嘗遣三人至二倭國一傳二泥金畫漆之法一歸略下といひ瑯仁寶七修類稿にも泥金綵漆出二于日本一と見えて蒔繪は皇朝を本源とする事なり

あこきいとにくしと見て此御かゞみの箱もなくてや(落のなごりてゆかは)といへは

○かゝみの箱　鏡匳 字彙 音廉鏡匳また石門文字記有二鑑室銘一共にカヽミノハコカヽミノイへと訓すへし和名抄此等の字なし今こゝに撿出す

今またもとめて奉らむとて立給ふいと心ゆきたるさ(林葉集二呆やこの待れくて時鳥心ゆかしのよはの一こゑ)まにてこのきてうはいつこのぞいときよけ咸

○心ゆきたる　竹取物語にかくや姫のこゝろゆきはてゝ有つる歌のかへし云々枕草紙に心ゆく物よくかいたる女繪の詞をかしうつゝけて多かる河舟の下りさま狭衣に物なとけによけにおこすれは心ゆきはてゝなと有て俗にいふ氣味のよいなと云詞にあたる

例に似ぬものも有猶けしきづきたりとの給へば女君(あこきか詞)いかに聞えむとはづかしなくてあしければとりにやり侍りつと聞ゆ猶けしきをうたがはしく思ひ給ぬる(北の方退出の後なるへし)のちにあこきまめやかには(落の餘りに大やうなるを云)をかしくこそ侍れ

○けしきを　此下そ文字落たるか

(北の方へ)奉り給はむ事こそなからめもたせ給へる御調度をかくのみとらせ給へるよ

○御調度　漢王莽傳に禮儀——とあり谷川士清云く後漢書の注度音大各反といへはタクの音なるへけれと古よりドの音によへり

○北の方の腹大君中君なとのさき〳〵の御むこどりにはしかへてたゞしはしと屏風よりはじめて取給ひて

○しかへて　直應按にしひてと有しを見てかく寫し誤るなるへしひを草の手になたらかに書はかへなとやうになれはなりされと諸本みな如此なれはいま更改かたし

たゞわが物のくのやうにて立ちらしておはします御女君は本ことをたに聞えさり給ひてき今とのにもこひてもてきなむ

○御ごき　直應按に此御字かならず衍也うつほあて宮巻二月中の十日宮の御たいにはかねのこきにこかねのけうちしろかねのをしき三十こかねのごき百たつのうちしきは花文りやうにうすものかされたりと見えまた貞丈雜記十四上に續日本紀云御器順和名集云御器長刀[illegible]牧貞元（直應云御字ヲムヘカラス）世繼物語云藤原顕忠は御食物は御器にても参り續世繼にかねの御器しろかねのかたつき云々なとを見てしるへし秋成盒器の字を塡たる何に據たるにか

六（五十四丁ウ）御ごきをなん一具給へる云々　註譯云食器の蓋あるを合器といふ

うつほ吹上巻御前にぢんのたなづし九よろひにたな十つにおなしろくろひきのごき云々

この御方のものはたゞ見るまゝに御かた〳〵の物にのみ成はてぬかく心ひろくおはしませども人の御心ざしやは見ゆるとはらだち居たれば

○見るまゝに　新古今羇旅　熊野へ参り侍しに旅のこゝろを太上天皇　見るまゝに山風あらくしくるめりみやこも今や夜寒成らん

女君をかくしてさばれいづれも〳〵ようはてなばたひてむといらふれば少將げにと開給ふきてうおしやりて出て女君を引入てまだわかう物し給ひけるはむすめごもはこれにや似たるとの給へはさもあらずをかしげになむおはし給ふめるあやしう見ぐるしうても見え給へる哉少將の事をきゝつけていかにの給はむといふおちくぼの少し打とけたるを見るまゝにい

とをかしげなれば此まゝにて事もなく猶あらじにて思ひやみなましかは
と思ふ口たしからんと鏡の箱の北の方よりかはり此あこ君といふわらはしてお
こせたり黒ぬりのはこの九寸はかりなるか深さは三
寸計にてふるめきまどひて所々は剝けたるをこれくろきたなきを云
けれとうるしつきていとよきなりとの給へれはをか
しとわらひて
○古めきまとひ　めくはものゝ樣を云詞にて時め
くなまめく色めくあためくなとみな同し源氏夕貞
卷にかの白きさけるをなん夕かほと申侍る花の名
は人めきてと有を見れはぶるといふ詞に通ふとみ
ゆ古めくも則ふる〴〵にてぶるびたるを云夫流の
反微なるを思ふへしまとひは惑亂する事にていと
きたなく色合も見わかぬをいへり○うるしつく
直案にうるはしつくにてうるはしもうるほしと
同語なれは潤澤あるをいひて今いふ光澤か有とい
ふ事なりうるほひ有ものは自らつやの有よりして
云へる詞なり神代紀に明彩萬葉に愛靈異記に姝ま
た華をよみ字鏡に嬋媛をムルハシと訓るもムとウ
は通用する故なりこゝもつや〳〵してよきと云事
なりあるひは善あるひは友善または忠の字をよめ
る書ともゝあれと上下の照應によりて訓すれはそ
こにてさばくべしこゝにはあたらす泥むへから
す
御かゝみ入て見るにこよなけれ衍歟は餘りしければなりわろきのこよなきなりいてあなみぐるし
中々いれでもたせ給へれいとうたてげに侍りと聞ゆ
俗にいつその事と云程の詞なり一五才くはし二十二ウにくはしう云
れはさはないひそ給はりぬいとよう侍りとてつかひ
へしこゝは假付やうなりと云事なり　あこ君かへしやるなり
やりつ少將の取寄て見給ひて
⊙さはないひそ給りぬ　或云給りぬの上にとての
二言落しなるへし　直云とての詞なくてもよし下
文にとてと有はうるさけれはこゝには省くなり
少將の落に較れての詞ふ詞
いかてかゝるこだいの物をみ出給ひつらむ
○こたいの　古代なり源氏末摘花卷につゝみに衣
はこのおもりかにこたひなるうちおきておしいて
たり榮花月宴卷に少しこたいなるけはひ有
老
おい給へるものはさるすがたにて
○おい給へる物も　千蔭云これは前にかしこき物
をも買てと有を思へは北のかたのひめ置給ふもの
も可然姿にてこれも世に無物にてかしこしといふ
歟
世になきものもかしこしかしとわらひ給ふ明ぬれば

いて給ひぬ
○よになき　世に無かはた無與二か
女君おき給ひていかにしてかくはぢかくすことはし
つるぞきてうこそいさうれしけれとのたまふあこき（落の心にあこきか幼き心にもなり）
しかして侍りしなど語きこゆをさなき心ちにも思ひ
よらぬことし出けるも哀にらうたくてけにうしろみ
とつけしかひ有と思ふ
○しかして侍りし　おはの殿はら和泉守か妻の許
よりものしゝよしを語るなりいかにしてと問給へ
るに答る詞なりしそしと有本はあしゝ
（あこき）たちはきか語りしことゞもをかたりていと哀にて御（少將）
心ながくはねたく思ひおとしたる世にいかにうれし（北の方のことなさ）（少將）
からむといふ其夜はうちに參り給ひてえおはせずつ
とめて御ふみ有
（翌朝にあり）○つとめて新撰字鏡云　皦瞭明　同上竜反日初出時也明也旦也女天豆女阿志太
枕草紙に云冬はつとめて雪のふりたるいふへくも
あらず
よべはうちに參りてなむえ參りこず成にしいかにあ
こきこれなりかむだうし侍りけむとおもひやりしも

をかしうこそさがなさはたがをならひたるにかと思（邪子云繼母北の方のうへをいへるなるへし）
ひしにも
○さかなさは誰かを　帶刀かたくひなしとは思ひ
給はぬにやと云しをあこきか少しよろしかんなり
なほあかぬそといひしを聞しめしてなるへし
おそろしうなむこよひはむかしは物をとなむ「さら（か歟邪）
てこそ其いにしへも過にし「を一よへにけることぞか
なしき
○むかしは物をとなん　拾遺戀二　中納言敦忠
「あひ見てののちの心にくらふればむかしはもの
をおもはさりけり
つゝましきことのみおほうおほされためる世ははな
れ給ひぬへしや心やすき所もとめてむとこまやかに
聞え給へり御かへりはやとくもて參らむとたちはき
聞ゆ御ふみをあこきを見てわろうかたり申てけりとい（帶刀か少將へあしざまに）（かゝる事なといふへき人の外になきまゝになり）
ふへき人のなきまゝにこそいさかはれ侍れといふよ（ろイ）（評）（文）
へはまたきしくる。「一すちに思ふ心はなかりけりい（り詞）
とゝうき身そわくかたもなき
○いさかはれ侍れ　鬪をも諍をもイサカヒと訓ど
もこゝは諍のかたにてあらかはるゝと云までのこ

さなり○またきしくる　古今戀五　よみ人しらす
「わか袖にまたきしくれの降ぬるは君かこゝろに
秋やきぬらん
○一すちに思ふ心　物思ふ事の一すちならねはい
かにと思ひ分る方のなきをいふをいとゝに糸をそ
へ分るにわくをいひかけたるなり
まことにうき世は門させりともといふやうに出かた
くなむ
○門させりとも　古今雜下　平の貞文「うき世に
は門させりとも見えなくになとかわか身のいてか
てにする
あこきはつみあらむ人はおち給ひぬへかめりとある（落の御文に書そへて少將のおそろしうなと有にいさかひかへしたるなり）
をもちて出る程に藏人少將（三の君の夫）先めすといふめれはえ置
あへてふところにさし入て參りたり御ひむ（髮）參らせ給
はむとて成けり御うしろをまゐるとて君もうつふし
我もうつふしたる程にふところなるふみの落ぬる
もえしらす少將（藏人）見つけ給てふとゝり給ひつ御ひむか
きはてゝ入給ふにいとをかしけれは三の君にこれ見（ひて手そ）
給へこれなりか落したりつるそとて奉りたまふおち（をかしけれとの給ふイ）
くほの君の手にこそとの給少將（藏人）とは誰をかいふあや（さイ直接にそはの誤なるへ）
三の君の詞
しの人の名やさいふ人有物ぬふ人そとてやみぬ三の（おちくほとは　三の君の詞）
君はふみを取給ひてあやしと思ひ居給へり帶刀御ゆ
するのてうとなとゝり置て立とてかいさくるになし
心さわきて立居ふるひひもときてもとむれとたえて
なけれは
○御ゆする　葵卷にあやしさに御ゆする參りと有
かみあらふ事なりしかるを新撰字鏡に潘粕粧なと
を皆ゆするとよみうつほ物語藏開中に大將の君ま
かて給ひて參りて見給へは日のおましにも御帳の
內にも宮おはしまさすあやしと思ひて中務の君に
いつくにそとの給へは西の御方に御ゆする參ると
聞ゆれは淺ましと思ひてなとまかて侍るとはきこ
しめしつらんを今日しもおほろけに久しくすます
御くしのやうにすましほさんほと命みしからむ人
はえたはめ給はらし中略宮の御もとに御ふみ奉り
給ふ云々けふの御ゆつるこそ「何にかもさくとは
きかぬあふことをけふあらはるゝかみは何そも
ゆすると云にくさ〳〵の說あれとも是にて髮あら
ふことの證たしかなりこゝもまたさなけれは聞え
すくに子しるす

いかに成ぬらむと思ひてかほあかめて居たり愛より外にありかねばおつともこゝにこそあらめとておま（絹）しをまづ取あけてふるへともいつこにかあらむ人や取つらむいかなる事出こむと思ひ歎きてつらづゑをつきてほれて（恍惚の字茫然としたるを云）ゐたるをくらむとの少將いつとて見給ひて

○つらつゑをつきて　直按に俗に云頰杖の事なり（再出）源氏帚木に中將いみしく信してつらつゑをつきてむかひ居給へりと有古今俳諧歌に大輔「なけきこる山とし高くなりぬれはつらつゑのみそまつゝかれぬる　貫之集　戀「ことしけき心よりさく物思ひの花のえたをつらつゑにつく　とよめり文集に吟苦支頤曉燭前ある支頤をツラツヱヲツクと訓せりまた列子左手據膝右手持レ頤以聽曲といへるもつらつゑなり二字文集に倣ひてツラツヱツクと訓すへし

なごこれなりはいたうしめやきたるものやうしなひたるさてわらひ給ふ此君とりかくし給へるなめりと思ふにしぬる心ちすいと〳〵わりなげなるけしきにていかで給り（俗にいどうぞなり）侍らむと申せは藏人われは知らず姫君こそ（古今　君を置てあだし心をわれもたはすゑの松山なみもこえなむ）するゑのまつ山とこそいひつめれとていで給ひぬ

○しめやき　又按に是はしめやかを活して云へる詞にてひそみたる意にて俗に云ふさいたなと云にあたるへし日本紀に徐または深沈をシメヤカと訓せるにて知るへし○わりなけなる　源氏桐壺にわりなくまつはさせ給ふ湖月抄に河海を引て　無別（ワリナシ）（日本紀）　無破　と有を契沖師は日本紀に無別の言くなし無破は菅家萬葉に有と云れたるのみにて說なし宣長は有ましきことをしひてあなかちにする事思ふ事なりといひ純頑はわかちもなきなり人と我とわかちもなきをいへりなといはれたれと源氏にてはかなふへけれとなへてにはかなひかたし此に云へるわりなけなると有にても知るへし直應按にわりなきは無理にてことわりなきの上略なりあやめもわかすなといふと同し詞にてわけもなくと云事なり　古今集　よみ人しらす「わりなくもねてもさめても戀しきか心をいつちやらはわすれん　又　ふかやふ「心をはわりなき物と思ひぬる見る物からや戀しかるへき　後撰集　よみ人しらす

「戀ほどにわりなき物そなかりけるかつうらみつゝなほそ戀しき　などみなことわりなくと云意なりかく見れはなへての物へさしつかへなく聞ゆる也此もことわりなき意より轉りてことわりなきことは㝵もなくしたらもなき物なれは帯刀かせんすへなけにて途方にくれしさまを云と心得へし（㝵出）いはむかたなくて（文さりかくせしは）あの君と思はむことはづかしけれごいかゝはせむとて（なわか）あこきかもとにいきてありつる御かへり自ら參らむにもてまゐらむとて出つる程に（藏人少將の）しかめして御ひむからせ給へる程にかうしてとられ奉りぬ

○かうして　直按此上と文字落たる歟又からうしてのら文字落たるか

いといみしうこそとあれ（我）にもあらぬけしきにていへはあこきいといみしきこと哉いかなるのゝしり（さわきといふ程の事）出こむとすらむ

○のゝしりいてこんと　按に罵はわめく事なるが轉して騒きといふ事に成しなるへし北越の人事のもつれ合て訟にも及ふばかりになれるを大きなさべりに成たと云此のゝしりとよく似たり

いとゝしく此（繼母北の方）御かたのけしき有とうたかひ給ふ物をいかにさわがれ給はむとすらむと二人あせに成ていとはしかる三の君此ふみを北方にしか〳〵して有つるとて見せ奉り給へはされはよけしきありきと見つ誰ならむたちはきがすむにやあらむそ（帯刀が此ふみ）がもたりつら（落窪を）むはむかへてむといひたるにこそあめれ

〇たちはきがすむにやあらん　以下四句倒語の法（落窪の文の中に云々いへるはむかへてんと云たるにこそあめれと也）

いでがたしといへるは句男あはせじとしつるものをいと口をしきわざかな男いできなはかう（斯）て世にあらじむかへてむ句（北のかたに　イナシ）人なくては大事なりよきあこたち（我兒）のつかひ人と見置たりつる物をいかなるぬす人のかゝるわさしいでつらむまたきにいはゝかくしまごはむ物そ此ふみも出させでけしきを見るに人もいひさわがねはあやしう思ふ

○物そ　此下とてと云詞の落たるなるへし

（帯刀か詞）女君には御ふみはかう〳〵し侍りにけりおもて（無面目）はつかしきやうなれと侍りつるやう（さきにありつる樣に也）に御ふみかゝせ給て給はらむといへは君いとわひしと思ひ給へりとはお

ろかなり北方も見給ひつらむと思ふに心ちもいとわひしうてまたもえ聞ゆましと歎き給ふこと限りなしたちはきもいとほしくて少將の君の御まへにもえ參らすこもりゐたり暮ぬれはおは（少將）しぬ御かへりはなど給はざりつるとの給へは北方おはしつる程にとの給ひておほとのこもりぬ程なく明ぬれは出給ふに明過て人々さわかしけれはえ出給はで歸り入てふし給ひぬあこきれいの御だいけいめいしありく少將君しつかにふし給ひて物語し給ひて

○けいめいしありく　源氏夕顔にあつかりいみしくけいめいしありく源語梯にけいめいは夜の明たるを宮中にてふれありく也とて鷄人のことを引てこゝは夜まはりのきひしきをいへりといへりかなへりとも覺す爪印にはおとろき恐たる心といひ奥竹集にはいとなむ心なりといへりさらは經營の字音にや此說よくかなへる樣に覺ゆ　•

（落）四の君はいくらおほきさに成給ひぬと（少將）のたまへは十（君の著）三四の程にてをかしけなりといへはまことにやあらむまろにあはせむと中納言の給ふなるとそ

○あはせむと　神代紀に合をも配をもアハスと訓り男女配偶のことなり同書に妻之をアハセマツルとよめるも是なり論語以其子妻之とも見えたり

（殿）めのとなる人かのとのなる人をしりて御ふみもてきて（中納言の）北方もいかてとなむの給ふとてめのとなる人こそ俄にせめしか

○せめしか　せめと云詞は俗に催促するといふにあたる神代紀に促をセメとよみ靈異紀に迫をよめりせまるの約言なり拾遺集にはとしさへせめてうらめしき哉とよみ源氏にとしもせめつれとゝいへるも同し意なり

（落君との有やうを打あけて）か、ると聞え給へといはむにいかゝおほすとの給へは（落）心うしとこそは思はめとの給ふこゝ（兒々草子地）しけれはらうたしと思ひて爰はいみしう參りきたるも人けなき心ちするをわたし奉らむ所におはしなむやとの給へは御心にこそはとの給へはさらはよなとの給ひてふし給へり程は十一月廿三日の程なり三の君の男の藏人の少將俄にりむしの祭のまひ人にさゝれ給ひければ

○りんしまつり　十一月下酉の日行はる北祭といへ•るこれなり公事根源云先兼日に試樂調樂なといふ

事有當日の儀式御禊庭の座など石清水に同し社頭の儀はてゝ使舞人歸りにかへり立の儀有孫庇に御障子をたつ御引直衣に御草鞋をめす額の間より出御させ給ふ階の間のとほりの庭南北二行に座をしきて使舞人つくうしろに本末の神樂の所侯へ陪從近衞の召人つく出御有て公卿めしあれは簀子長階に候次階の下に頭以下つきて使舞人をめす勸杯有て神樂有庭燎よりはしめて朝倉其駒まてうたふ庭火にもろうた有へけれは人長さほう有御神樂はてゝ鍒有（以下此祭の日おこりたのへて寬平御記の趣なり下御記を引たり略す）寬平御記曰宇多帝潜龍時（號王侍從）放鷹狩于賀茂邊俄天陰霧降東西迷路帝臥藪中憂恐之甚有一翁來告曰吾此邊老翁也春既有祭冬願賜冬祭帝心爲賀茂明神也因答曰吾力非所及宜被奏請于內翁曰知其力之所可及願自重而勿輕矣言已不見帝大怪之未幾仁和三年八月廿六日立爲皇太子即日即天皇位於是信神言而寬平之年十一月廿一日始行賀茂臨時祭云々　篝木にりんしの祭のてうかくいみしうみそれふる夜これかれまかりあかるゝ所云々

北方あ（イナシ）はてまさひしたまふあこきろむなう御ぬひものもてきなむゝのそさむねつふるゝもしるくうへのはかまたちて

○うへのはかま　和名抄衣服類　大口袴　唐令云慶善樂舞四人白絲布大口袴（和名於保久知乃八賀萬）一云表袴谷川士清云うへのはかまは表袴の義夏冬の別なく裏をつく大口なりと云り女官飾抄に童女は晴のときは打袴を着る袴の上に表袴をきる也といひまさすけ裝束抄にかさみのうへの袴はすゝしなりといへりと和訓栞にいへり

（使の詞）是只今ぬはせ給へ御ぬひものはいてきなむと聞え給ふと云君はきてうのうちにふし給へけれはあこきぞいらふるいかなるにかよへよりなやませ給ひてうちやすませ給へり今おきさせ給ひなむ時に聞えさせむ（少將）といへはつかひかへりぬ女君ぬはむとて起給ふまろひとりはいかてつく〳〵とふいたらむとておこし（使にさひ給ふなり）奉らす北方いかにぬひ給ひつやさゝひ給へはさもあらすまた御とのこもりたりとあこきか申つるはこい（落の事を御さのこもりと云した咎るなり　口きくすへを不知）へは北方なその御とのこもりそものいひしらすなあ（さなりさるいひさま）りそ

○御殿こもり　源氏にもしは〳〵出て貴人のいね

給ふことにておほとのこもりとよむなり殿の内に
ものなと立まはしていねる事なり北の方落君をお
としめ何の其おほとのこもりなと云へきことかは
といへるなり
栄花物語とりのまひの巻に同し口にいふへきならねは云々（四十四ウ）
われらと一つ口になそいふは聞にくしあなわか〱
おもしろの駒と一つ口にいふへきにあらす　曾丹集いもと
しのひるねやしかみの程しらぬこそいと心うけれと
われねやのかまさにひるねして日高き夏のかけをすくさん
てうちあさわらひ給ふ

〇ひるね　晝寝の字は論語列子韓詩外傳なとに見えたり詩に黒甜と作れり正字通に唐人呼晝睡爲黄嬭とも見えたり源氏螢巻に何心なくひるねし給へる云々狹衣一下にひるねしたる榮花月宴に御あさいひるね云々などあり〇あさわらひ給ふ　直廬按にあさけりわらふの義なるへし嘲をアサケルとよみ新撰字鏡に嗤をよめり人を淺々しとしてさみするを云呉都賦に東廣王孫輾然而咍（アザワラフテ）曰とあり

したかさねたちてもていましたれはおとろきて几帳の外に出ぬ

〇したかさね　和名抄衣服類　史記音義云衣之單複相具謂之襲（[illegible]和名[illegible]）褂雅注云襲猶重也また襯をシタカサネと訓り袍の下に重ぬるをもて名とす後世云下着にて裾は此尻なりとそ

見れはうへのはかまもぬはておきたりけしきあしう成て手たにふれさりけるは

〇手たにふれさりける　古今題不知詠人しらす
「吹風を鳴てうらみよ鶯はわれやは花に手たにふれたる

今いてきぬらむとこそ思ひつれあやしうおのか云ことこそあなつられたれ此頭み心そり出てゝけさうはやりたりとは見ゆやとの給へは

〇御心そりいてゝ　そりはそれなり鷹の佚るをそると云心のそるは心の佚するなり

女君いとわひしういかにきゝ給はむとあれにもあらぬ心ちしてなやましう侍りつれはとてしはしためらひて是はたゝ今出きなむものをとて引よすれは

〇ためらひて　萬葉に猶豫徘徊なとをタメラヒとよみ埃嚢抄に躊躇をよめりたゆめる義なるへしといへりらひは下に付て活く詞なり

おとろきうまのやうに手なふれ給ひそ八たねのたえ

たるそかし
○人たねの絶たるそかし　人喰馬のくふべき人たねは絶たりと云にや　かくうけかくなる人にあなかちにかく物ぬはするは此方にこと繁き程にてぬはすへき人のたえたれはこそさりかたくていふそかしといふなり人少といふ程の事なるをつよくいはんとて人種のたえたるとはいへる也六帖にいなといふ人をはしひし敷しまのやまとの國に人やたえたるともよめり
（かうけかくイ）そらうけかへなる人にのみ云は（いふ事よなさいふに同し）此下かさねをたゝ今ぬひ給はすはこゝにもなおはしましそとてはら（もイ）立てなけかけて立給ふに少將のなほしの跡の方より出たるをふとみつけていて此なほしは何（か）このぞと立とまりての給へばあこきいとわひしと思ひて人のぬはせに奉り給ひつると申せはまつ外の物をし給ひてこゝのをおろかに思ひ給へるもはらかく（專）（斯）ておはするにかひなしあなしらくしの世やとうちむつかり（憤）ていく
○しらくし　癡（シレ）々しきなり　枕草紙（二十八段）ひゝしくをかしき君達も隨身なきはいとしらくしと有てしれ物のしれと同詞にて本朝文粹に白物をシレ

モノと訓し萬葉には愚人をシレタルヒトとよみ左傳杜注に無慧所謂白癡なりといへるを見て知るへししれと云詞は凡て物に多く見えたることなから轉りてはわひしれゑひしれなと甚しき事にもいへりこゝは常に馬鹿くしいといふにあたれり
うしろて（髮の風情）子多くうみたるにおち（落）てわつかに十筋計にてゐだけ（居長）なりかたちうちふくれ（膨脝）ていとそこかましと
少將つくくとかいまみふしたり女君あれにもあらて物をる少將衣のすそをとらへて
○ものをるは　袴のぬひめなと付るなるへし○かいまみ　伊勢物語に此男かいまみてけり　契冲云日本紀には視其私屏と書てカイマミとよめり心は垣間見なり　竹取物語に闇のよにもこゝかしこよりのそきかいまみまとひあへり　大和物語に久しくいかさりけれはつゝましくて立りけりとてかいまめはと有もかいまみれはなり
まつおはせと引せむれはわつらひて（くるしさにさいふほさの事）入ぬにくしなぬひ給ひそ今少しはら（あイ）立て（俗に云まごつかする）まとはし給へ（堪）此ことははなそ此とし頃はかうやきこえつるいかてたへ（給へるイ）侍らむと

の給へは女君山なしにてこそはといらふ

○山なしにて　古今誹諧歌題しらすよみ人しらす「耳なしの山の口なしえてしかな思ひの色の下そめにせん　直按六帖山なしの歌「世中をうしといひてもいつこにか身をはかくさん山なしの花

源氏あけ巻にかゝる御すまゐのかひなき山なしの花そのかれんかたなかりける「このもとは雪とふるまてとふ人のなくてやつひに山なしの花　濱松中納言物語にわりなうおほさるれは山なしの花の心うきをほしゐるに

くらう成ぬれはかうしおろさせてとうたいに火ともさせていかてぬひ出むと思ふ程に北方ぬふやと見にみそかにいましにけり見給へは縫物はうちゝらして火はともして人もなし入ふしにけりと思ふにおほきにはら立ておとゝこそ此落くほの君心のあひきやうなく見わつらひぬれ

○おとゝこそ　或云おとゝこそのこそは例の人をよひ出す詞也さて落くほの君の下かあいきやうなくの下にこその詞今一つ有しを上のこそをてにをはと見たかへてかさなりことなりと思ひてはふきし後人のさかしらなるへし　源氏わか紫（紫のうへ詞）こそ此寺にありし源氏の君こそおはしたんなれ○あいきやう　古き抄物ともに愛敬の字をあてたりしかりやしらす源氏あふひの巻にけにあいきやうのはしめはと有は新枕のことを含ていへるなるへしといへり今もよく云詞なれと兎に角に文字はかうかへえす俗に可愛らしなと云意と聞ゆ

これいまし（往）ての給へかく計いそく物をいつこ成しき（几）てう（帳）にかあらむもち知らぬものまうけてついたてゝ入ふしくする事よとの給へ（直按に給へと歟）はおとゝは近く（北の方に）おはしての給へとの給へはいらへとほく成ぬれははてのことはゝ聞えす少將（かれてより）おちくほの君とは聞さりけれは何の名そ落くほはといへは女君いみしうはつかしくていさ（不知）といらふ人の名にいかに付たるそろなうくし（屈）たる人の名ならむ

○いさといらふ　いさは萬葉十一豹上之鳥篭山爾有不知也河不知二五寸許寸余名告奈と有ていさは否といふに同しく知らぬと云事なりいらふは答るなり此歌を古今をはしめ源氏枕草紙にも下句を誤

りていとゞこたへよわかなもらすなとしたり
きら／＼しからぬ人の名なり北方さいなみたちにた
りさかなくそおはしますへきといひ臥給ひけりうへ
の衣たちておこしたり
○きら／＼し　神代紀に端正雄略紀端麗繼體紀姝
妙をよめり源氏明石巻に月のかほのみきら／＼と
してと有亦新撰字鏡には瀞の字を訓りきら／＼し
からねはげす／＼しきなといふに近し　源氏東屋
巻にほと／＼につけては思ひあかりて家のうちも
きら／＼しく物きよけにすみなし又同巻にはしめ
よりたゝきら／＼しく人のうしろみとたのみ聞え
んにたへ給へる御おほえをえらひ申て
又おそくもそぬふとおほして萬の事おとゞに聞えて
いきての給へ／＼とせめられておとゞおはしてやり
戸をひきあけ給よりの給ふやう
○やり戸　庭訓往來に遣戸と書り徒然草五十五段
に細なるものを見るにやり戸は蔀の間よりもあか
しと見え禁秘抄に高遣戸あり新撰六帖知家「今宵
こそことしけしとて逢ことをちかへやり戸のたて
るからかみ　とも詠り中山傳信錄に琉球門窓皆
無二戸樞一上下隈皆刻二雙溝道一設二門扇其中一左右推
移以爲二啓閉一と見えたりやり戸のさまをよく寫せ
り　源氏東屋巻にやり戸といふ物さしていさゝか
明たれは云々　つれ／＼草の前に引へし
いなや此おちくほの君あなたにの給ふ事にしたがは
ずあしかむなるはなぞおやなかむめれはいかてよろ
しくおもはれにしかなとこそ思はめかはかりいそく
に外の物をぬひてこゝの物に手ふれさらむや何の心
ぞとて夜のうちにぬひ出さずは子とも見えじとの給
へは女君いらへもせでつふ／＼となき給ひぬ
○つふ／＼となき給ひ　直案につふ／＼は本委曲
の義にしてつふさ／＼の意なるか轉りてはら／＼
となくと云こゝろの所へもいへるにやさることわ
りは委曲の訓をつはら／＼といへるをも思ふへし
はら／＼はつはら／＼の上略にてこまかに落る泪
は粒々として玉なすものなれは此詞は涙のはふり
おつるかたちをいへるなるへし和訓栞つふ／＼の
下に云粒々の義神歌に「雨ふれは軒の玉水つふ／＼
といはゝや物を心ゆくまで　と云うたを引り實方

集に「物をたにいはまの水のつふ〳〵といひをやはゆかんおもふこゝろの といへるなとは水のつふ〳〵と落るをかねていへれはこゝも其心なるへし古くつふさ〳〵の心に用ひたるは遊糸日記にいかてつふ〳〵といひしらする物にもかなと云々源氏とやにつふ〳〵といひつゝけ給ひて云々又乙女けしきをつふ〳〵と心え給へと云々なとなる委曲の意なれははら〳〵となみたをおとす意にもなりぬへしすへて詞は轉り行物なれはなり　再案狹衣一下一いはまの水のつふ〳〵と聞え給ふへきと有は實方の歌によりて書れたるなるへしとにもかくにも雫のたるゝかつふ〳〵としたるをかねていへるに論なしおとゞさいひかけて歸り給ひぬ人のきくにはつかしくはちのかきりいはれ。つる名を我と聞れぬることよと思ふにたゞいましぬるものにもがなと縫ものはしばしおしやりて火のくらきかたにむきていみじうなけば少將哀にことわりにていかにけにはづかしと思ふらむとわれもうちなきてしばし入てふし給へれとてせめて引いり給ひて萬にいひなぐさめ給ふおちくぼの君とは此人の名をいひける成けり我いひつる

事いかにはづかしと思ふらむといとほしまゝ母こそあらめ中納言さへにくゝいひつるかないといみしう思ひたるにこそあめれいかてよくて見せてしかなと心のうちにおもほす北方おほくの物ともをひとりはありはらたゝしからむえ獨はぬひ出しと思ひて少納言とてかたへなる人の清けなるいきてもの其にぬへとておこせたれはきていつこをか縫侍らむなとかおほとのこもりにけるさはかりにおそからむ物そと聞え給ふものをといへは

○さはかり　それほとまてにと云詞にて物を仰山にいふ詞也　宇治拾遺物語七にさはかり大きにおはするとのゝ御手に大きなるかなまり哉とみゆるけしうはあらぬほとなるへしなと有をおもふへし

心ちのあしけれはなむ其ぬひさしたるひだまつぬひ給へといへは取寄てぬひて猶よろしうは起させ給へこゝのひたおほえ侍らすといへは今しはしをしへてぬはせむとてからうして起てゐさり出たり少將見れは少納言はかけにいときよけなり

○ゐさり　伊呂波字類抄云膝行井サリと見えて おつお

つ出る様なる意也ゐさるは居去にて進み得ぬを云
今も居じさると云所も有（少小言か）又はゐじやりとも云
よき物こそ有けれと見給女君をうち見おこせたれは
いといたうなきつやめきたるを見て（眼ふちなどの泣はれて赤めるを云なるへし）哀とや思ひけむ
いふやう聞えさすれは（巧言）ことよきやうに侍りさりとて
聞えさせねはさる心はへ有とたに（追従するやうになり）しらせ給はしと口
をしさになむえさらすさふらひ侍る御かたよりも此
年頃御心はへも見參らするに
○心はへ　立操（綏靖紀）氣推（古意氣　皇極紀）此詞の意誰もよく言
得す直案に心はへは心延の約言にて俗に心いきな
と云にあたれり
つかふまつらまほしう侍れと世の中のうたてわつら
はしう侍れはつゝましうてなむ人しれぬ宮仕もえつ
かうまつらぬと聞ゆれは
○うたてわつらはしう　古事記傳八に轉は宇多弖
阿理と訓へし是は本より有ことの愈進て殊に甚し
くなるを云詞なり萬葉十一五丁に何時奈毛不戀有登者雖
不有得田直比來戀之繁母又廿十三丁に秋等伊弊婆許
己呂曾伊多伎宇多弖家爾花爾奈蘇倍弖見麻久保里
香聞（又十の十二丁十一の十丁にも此言あり開き
て見るへし源氏葵卷に紫上の髪のことをうたて所
せうもあるかないかにおひやらむとすらむと云ひ
同卷に年ころあはれと思ひきこえつるはかたはし
にもあらさりけり人の心こそうたてあるものはあ
れ云々これらもいよゝ進みて甚しき意なり）此等に
て心得へし轉字を書は轉り進む意を取なるへしさ
て下卷空穗朝段に宇多弖物云王子書紀に武烈天皇
の御所行を言所に設二奇偉之戲一なと有は右の意よ
り轉りて平穩に尋常ならで善からぬ意と聞ゆ貫之
集に蟻通の神の事を宇多弖有神也と云るも是なり
古今集にあはれてふ言こそうたて世中を思ひはな
れぬほたしなりけれ又落と見て可在物を梅花宇多
弖香の袖に留在是も形見こそ今は仇なれと詠る如
くにて同意なり（管家萬葉に此歌の宇多弖を別様
と書れたるは物遠し春記に瀧口定淸去夜不レ得二盜
人一太以別樣也とあり此別樣もウタテシとよむへ
きなり中古に此字を書ならへるなるへし）又俗に
笑止なると云と同意を宇多弖伎と云も是よりうつ
れるなり又古今集俳諧に花と見て折むとすれは女

郎花宇多々あるさまの名にこそ有けれ此宇多にも同言にて意も右に同し　女郎と云名にはゝかりて尋常の花とはたかひて折むことをあやしくよからす思ふよしなり）故此轉の字をも常には宇多々と訓り

女君さるへき人（親族）もことにま心なるけしきも見えぬに（そこのかく云は）うれしくも思ひ給へけるかなといらへ給へは少納言けにこそあやしうは侍れうへのあやしうおはせむは例の事御はらからの君たちさへ自ら聞え給はさめる（心にふかく思はぬなと云）こそいと心つきなけれあたら御さまをかくてつくつくとおはしますこそあひなけれ四の君もまた御むことりし給はむとまうけ給めり

○あたら　日本紀に愛惜をアタラと訓り源氏篝木巻に君の御心あはれなりける物をあたら御身をなといふに云々と有拾遺戀四題しらす「あたらしさ何に心をおもひけむわすれはふるく成ぬへき身を　後撰春下　源さね明「あたら夜の月と花とを同くは心しれらん人にみせはや　山家集「花みむと群つゝ人のくるのみそあたら櫻のとかにそ有ける　皆をしむことはなり

北方の御心にまかせてのへしらめし給ふ（落間）めてたきや誰（落君）をかとり給ふとのたまへは左大將殿の右近の少將殿さかかたちはいときよけにおはするか（内裡）うちにたゝ今成出給ひなむと人々ほむ

○なり出給ひなむと　直麿按に成立するをいひてやかて成出るの義也俗にいふ立身するを云うつほ藤原君巻にこの源氏たゝ今の見るめよりも行さきなり出ぬへき人なり大和物語にわか身のえなり出ぬ事と思ひ給ひ云々なと見え　俊成卿「四方のうみを一つのけして汲ほさんときにやわか身なりも出へき　日本紀竟宴の歌に「狼を扶けて後そ大津父か深草よりはなり出さりける

御門も時めかし（さきめきたるものにおほしめすなり）おほす御めはなしいとよき人の御むこなりいかて此わたりにもかなと思ふとおとゝもつねにの給ひて

○御門も時めかしおほす　うつほ（藏開上巻へ宮す所ほの事な）宮す所もさはかりおはしますめりし御門のいみしく時めかし給ひて云々　同たゝこそ（右大臣[illegible]の手かけの事な）おほやけにつかうまつり給ふにも身のさえ人にまさり給へり御門は時めかし給ふ事かきりなし又たゝこそ十

三四になりぬ云々おひいてし女御たちをもこなくしてみかどかぎりなく時めかし給ふ

北方いそきにいそき給ひて四の君の御めのと彼殿成ける人をしりたりけるをよろこひ給ひてさゝめき（囁）さわき給ひてふみやらせ給ふめりといへは（落）をかしうてさてといひて（さないひさして先ほゝゑみたるなり）いさようほゝゑみたるまみ口つきの火のあかきにはえて匂ひたる物からはつかしけなり

（落詞）少將の君はいかゝいふと君の給へは（少納言詞）しらすよかなりさやの給ふらむ人しれすいそぎ給ふと云に少將そらことゝいらへまほしけれとねむしかへしてふし給へり少納言（四の君へむこ取なとして）まらうと又そひ給はゝ

○まらうと　まれ〳〵に見ゆる人といふ意にて賓客を訓めり和名抄および佛足石の歌にはまら人ともよめりこゝはめつらかなる人をいひてむこ取なとあらはと云事なり

（落君）御まへの御身そいとくるしけにおはしますへかめる（男もたせ給へかしとなり）よきこともあらはせさせ給へかしといへは（落君詞）なてふか（イナ）かる見くるしき人がさる事は思ひかくるといへは（イナシ）いであなけしからすや

○あなけしからすや　あらけしからぬことかなといへる事にて打かへしてけしく有と云心になりてあやしきことかなとなしりたる詞なりけしきは怪敷なり

なとかくはおほせらるゝ此かしつかれ給ふ御かたかたはなか〳〵といひさしてまことに此世中には（此頃のすき人とみゆ）つか（交野）しき物と思ひ給へる辨の少將の君世人はかたのゝ少將と申すめるを

○かた野の少將　枕草紙（百四十五段）（月あかきにの條）けにかたのゝ少將もときたるおちくほの少將なとはをかしそれもよへをとゝひのよも有しかはこそをかしけれあしあらひたるそにくゝきたなかりけむ

其殿に彼男君の御かたに（宮つかへする）少將と申すは少納言かいと（それゆへ少納言も）（此人の噂はじめて見ゆ）こに侍りとのゝつほねに常にまかり侍りしかは彼君も此殿の人としりて心つかひし給へりき

○つほね　局曹房なとをよめり禁中の殿舎を桐壺梨壺なと名付るは字書に宮中道（ノチ）曰レ壼（コント）と有よりいてゝ宮中の殿ともの間のつほかなる庭を云よりして則その宿直する一區を指て桐壺梨壺なともいへ

はつほねは壺宿の義なりとそ然れとも壺音胡酒器壺音惆内壺と字書に見えてわつかに一嵩のたかひのみ壺は殿ともの間のつほかなる所を云によりて是をもやかてツボと訓したる物なり二字相混したるものなと思ひ誤るへからす

御かたちのなまめかしさはけにたくひあらしとこそ見侍りしか御(少将)むすめおほかりと聞(るイ)しはいかゝとておほい君よりはしめてくはしくとひきゝ給ひしかはかたはしつゝ聞え侍りしにおまへ(落君の事)の御うへを申侍りしかはなむいといたう哀かり聞え給ひて我い(よイ)と思ふさ(心にかなふを云)まにおはすなるをかならず御ふみつたへてむやとの給ひしかは

○なまめかし　なまめくとは物のなり定らて若きほとを云さてわかき人は艶にうつくしきものなれはさる心にも用ひまた轉して色めかしくこふる様の心にも用ひたり　遊仙窟に婀娜埃嚢抄に窈窕をナマメクとよみ眞名伊勢物語に媚字又姚字嫋字をよめり字書に嫋言若不出口と注せり艶嫵を含こゝろよりしていへるなるへし拾遺に一水もなく船も通はぬ此嶋にいかてかあまのなまめかるらむ　といへるうた有こは尼のなまめくを海人の生和布刈(ナマメカリ)に云かけたるなり加流の約久なりこゝには婀娜窈窕なとの文字よくかなへり

かくいとあまたおはしますうちに御母(落君は)持なとおはしまさねは心ほそけにおほしてかゝるすちのことおほしかけすと申侍りしかは其御(少将)母おはせぬこそはいと心くるしく哀増らめ我ほいにはいとはなやかならざらむ女の物思ひしりたらむか

○はなやか　源氏きりつほの巻に世のおほえはなやかなる御かた〳〵にもおとらす又帚木巻に(頭中の女の事なを)けに其匂ひさへはなやかに立そへるもすへなくてなと有てあしき方にもいふ様なれとはな〳〵しうかくるゝ所なき意より轉用したる物なりいとはなやかなる女は餘りはでやかなるをいふ白氏文集に聲華をハナヤカと訓り

かたちをかしけならむをそもろこし(唐土)しらき(新羅)まてもとめむと思ふこゝにおはするみやす所はなち奉りては

○こゝにおはする御息所　こゝにおはするとは此かたのゝ少將の御いもうとの女御をさし給ふなり其いもうとの女御をおき奉りて外に父母具したる

女御たちはおはさぬそかしさる人々さへ父はゝなきもおはせは何かくるしからん我方にむかへてわたくしものにしかしつかはしか心にまかせておはすらんよりはよからんとなり
ちゝ母おはする人やおはするさて心にまかせておはすらむよりはわたくし物にてわか所にすませ奉らむなと
○わたくし物　榮花月宴巻に宣耀殿の女御はいみしううつくしけにおはしましけれは御門も我かわたくし物にそいみしう思ひ聞え給へりうつほ初秋巻に私の后に思はんかし又吹上巻に是は北の方の御わたくし物云々又初花巻上は人しれぬわたくし物に思ひ聞えさせ給ひて　源氏桐壺巻にこの君をはわたくし物におほゝしかしつき給ふこと限なしまた四阿屋巻にわたくし物にそいみしう思ひ聞え給へり（二條初に引へし）何れもことさらにめてうつくしむこゝろなり
いとこまやかになむよふくるまての給はせしか參りて後もかの事はいかに御ふみや奉るへきとの給はせ、たりしかと折あしくて今御らむせさせむと申しとい

へといらへもし給はす成ぬるほとにさうし（曹子）より人（少納言）尋きて（な人の尋きてなり）とみの事聞えむといへは出たり人おはして（尋こし人の詞）先出給へ（よし聞えまゐらせむとなり）聞ゆへきことなむあるといへはしはしまて（少納言か詞）御消（落へ其）息きこえさせむとて入ぬ御あへつらへつかうまつり侍らむと思ひ侍りつるをとみの事とて人まうて來たれはなむ
○あへつらへ　俗に手つたひなといふ意歟可考
直按にあへしらへの誤にや遊仙窟に應答をよみあるひは會釋の字を譯するなとを思ひ合するに今云御相手をするといふ意に轉用したるにはあらぬかと思はる篝木巻に中將は此ことわりきゝはてんと心にいれてあへしらへゐ給へりとあるなと考合すへし
（今はなしさしたることの）聞えさせつる事の殘りもまたいとおほかりゐむにを（藍）かしうて（退出するなり）侍りしまめやかに（猶まめやかに）きこえさせ侍らむうへに（北の方）はかくおり侍りぬとな聞えさせ給ひそ（北の方の少納言な）おとろきさい（様子よけならはなり・又參らんとて）なまむ物そさりぬへくはまうのほらむとておりぬ少（少納言）將き帳おしやりてをかしく物き（きイ）よくいひつる人哉かたちもきよけなりと見つる程にかたのゝ少將をか

たちよしとほめきかせ奉りつるにこそみまほしう成(イナシ)
ぬれ(落甘、)ともえいらへ給はてこなたを見おこせ給ひて心
もとなけに口つくろひし給へるかな侍らさらましか(物云たけ寅様したるを云)(少將)
はかひある御いらへともあらまし文たにもてきそめ(落甘)(片野少將か)
なは限りそかれはいとあやしき人のくせにてふみ一
くたりやりつるかはつるゝやうなけれは人の女御門(めイ)(無用)
の御女もくたるそかしさて身いたつらに成たるやう
成そかしそかうちにわたくし物と聞ゆなれはいとお
ほえことにおはするはと
○いたつら　谷川士清云徒字をよめり痛くつらし
の義なるへし日本紀に閑曠萬葉集に無用をよめり
古歌に「人とかく生れける身のうれしさをいたつ
らになす我心かな「いたづらにすくる月日は多け(おもほえて古今)
れと花見てくらす春そすくなき　興風家集はし書
にさたやすの親王の后の五十賀奉り給ひける御屏
風の裏に櫻花見たる所と有
いとあいなくものしけにおほしての給へは女君いと(少將詞)
あやしとおほして物もの給はすなと物もの給はぬを
かしうおもひ給へる事をものしう聞ゆるがいらへに

くゝおほさるゝか都のうちに女と云限りはかたのゝ
少將めてまとはぬはなきこそうらやましけれとの給
へは女君その數ならねばにやあらむとしのひやかに
の給へは少將此すちはいとやむことなければ中宮は(かたのゝ少將か家の)
かりには成給ひなむはやとの給へとをさ／＼さもえ(にかしつかるゝ程にはなり給んとなり)
しらぬ事なれはいらへす
○はや　宣長曰古事記崇神段の歌にみまきいりひ
こはや倭建命の御詞にあつまはや同御歌にその太
刀はや日本紀允恭巻新羅人の詞にうねめはやみゝ
はや雄略巻歌にいひしたくみはや又仁賢巻の詞に
あかつまはや(ハ)は語の終に在て歎息の詞なりかの仁
賢の巻なるを阿怜奕と書りさて此はやは萬葉には
見えず拾遺六「君かすむ宿の梢のゆく／＼とかく
るゝまてにかへりみしはや　六百番歌合　顯昭
「夜川たつさ月きぬらしせゝをとめ八十とものを
もかゝりさすはや　なと見えたるのみまた源氏物
語なとの文にも多しそれを著也と釋せるはあたら
ぬ事なり
物ぬひ居給へる手つきいとしろうをかしけなりあこ
きは少納言ありと思ひて精力か心ちあしうしけれは

しはしと思ひて入にけり下かさねはぬひ出てうへの衣をらむとていかてあこきおこさむとの給へは少將ひかへむとのたまふ女君見くるしからむとの給へときてうをとの（外）かたにたて丶おきゐて（上手そといふこゝろなり）猶ひかへさせ給（少將詞）（やはりなと云意）へいみしき物しそまろはとてむかひてをらせ給ふいとつきなけなる物から心しらひのよういすきていとさかしらなり

○心しらひ　直牌案に源氏箒木巻にけちかきまかきのうちをは心しらひおきてなとをなん云々と有さて此詞はよく心のと丶のひ行わたるを云なり書紀繼體紀大伴大連等僉曰正直仁勇通於兵事今無出於奄鹿火右また天武紀安麻侶素東宮所好密領東宮曰有意而言突なと有を見て心を得へしさるを谷川士清は仁賢紀に奄生妻飽田女徘徊顧戀失傷心云々と有を上に引る文の通の字有意の字なとと混し引て源氏にいひしらひつきしらひあへしらひ新拾遺集物名にことしらふ徒然草に引しらふなと云めりらひ反り知の義なるへし或は爭をよめりなといはれしはふつにあたらぬことなり仁賢紀なる痴ぶるの義なるへし○いとさかしらなり　萬葉三に賢良と書てサカシラとよませ同十六には情出情進なとも書て賢し立て物する意にて今いふ心ききたるふりをすると云ことなり

女君わらふ／＼とる（以下廿四文字イナシ）四の君のことは誠にこそ有けれとの給へは（小將詞）おほむゆるされあるをしらすかほなりや（まけしたましひにたはふれてあらかふなり）との給へはものくるほしかたの丶少將のわたくしにものまうけむ時はしもおほやけ／＼しくてこられむと（中納言に聟とられんとなり）わらふ夜いたうふけぬ（少將詞）おほとのこもりねとせむれは今少しなめり早うね給ひねぬひはて丶むよといへは獨りおきゐ給はむかとて居給へる程に北方ぬ（れ）はてね（はぬイ）やしぬらむとてうしろめたうてねしつまりたる頃に例のかいまみのあなよりのそけは少納言はなしこなたに几帳たてたれと（一ノ三十オ移すべし）

○うしろめたう　宣長云此詞は後日痛といふことにてうしろやすきの反なり俗言に氣遣なると云意なり直牌案に此說は眞名伊勢物語に後目痛と書るによりていはれたるにやされと彼書は眞淵の殊に信しられたるをあやしき事なりさて假名のたかへる所書樣の拙き所をさへに考わたして宣長みつか

ら論しられたれはあなかちに彼書によりていはれたるにもあらぬかそはさまれかくまれよろしとも覺ぬ說なりこは後目痛にはあらて後見たきなるへし語意は獨夜山野など行時には人にまれ鳥獸にまれ後より來る物のあらんかと氣味あしう無覺束やうに覺てしは〱かへり見たく思はるゝより云詞となほし後目痛といへるは何とも解すへからす俗言にきつかひなると云意といはれし譯はあたれり

こゝも氣つかはしくてなり

そはのかたより見いるれは女こなたの方にうしろをむけてもたる物を折むかひてひかへたる男有なまねふたかりつるめもさめ驚て見れは白きうちきのいさきよけなるかひねり不審のいさつやゝかなる一かさね山ふきなるまだきぬのあるは

○白きうちき　源氏きりつほ巻にも見えたり和名抄衣服類袿　漢書音義云諸于今案于當作衧見玉篇大掖衣婦人袿衣也釋名云袿音圭漢語抄作和名宇知岐婦人上ノ衣也とはあれと男女通用のものなり建武年中行事に御襖の人ゝめしてと見え侍中群要には侍臣と有また源氏引入の大臣の祿に賜り大和物語に躬恒か歌の賞に給しことなど見えたりうち着は打着の義ならんと云へり○山吹なる　こは花山ふきの事なり源氏箋に花山吹はおもてうす朽葉うら黄なりと有て胡曹抄に花山吹を只山吹とも云といへり朽葉とは經を赤く染て横を黄に染たる糸にておるよし貞順女房衣裝次第といふ物に見えたるよし貞丈雜記にいへり

女のもきたるやうに腰より下に引かけたり火のいさ二字衍歟あかきほかけに

○火のいさあかきほかけに　此儘にて詞かさなれり小笠原近江侯藏本綸寒天和三年寫本里村昌廸筆中村文子藏本ともに火のあかきかけにと有宜く此によるへし

いさみまほしうきよけにあいきやうつきをかしけなりまたなく思ひいたはる藏人の少將よりも增りていさきよけなれは心まさひぬ

○心まさひ　伊勢物語に心ちまさひにけりと有る如く心かきみたるゝなり

男したるけしきは見れとよろしきものにやあらむさこそ思ひつれさらに是はたゝ物にはあらすかくはかりそひゐて

○たゝもの　たゝ人と云に同し日本紀に凡人をタタウトと訓み非常之人をタヽヒトナラスとよめり伊勢物語に二條の后のまたたゝ人にておはしける時と有に眞名本に直人の二字を塡たり　毛詩の匪二直也人一にによれるなるへし源氏――にもなほ〳〵しきたゝ人のなからひと見えたり

めゝしくもろともにするはおほろけの心さしにはあらしいといみしきわさかな

○おほろけ　此詞今いふ容易なると云意にあたりてなみ〳〵のこゝろさしにはあらしと云ことになるなり白氏文集に無明をオボロケと訓しを見てもしるへし源平盛衰記に忠盛の「雲間よりたゝもりきつる月なれはおほろけにてはいはしとそおもふとよまれしも容易には名のらぬそとよめるなり

よく成て我したいにはかなふましきなめりなと思ふに物縫のこともおほえすねたうて猶しはしたてれは（少將詞）しらぬわさしてまろもこうし（国）にたりそこにもねふたけにおもほしためり（落詞）なほ縫さしてふし給ひて北方例のはらたて給へといへははらたち給ふを見るかいとくるしきなりとて猶ぬふにあやにくかりて火をふきけちつ

○あやにく　盛衰記に御あやにくと見え新撰字鏡に嗟字をよめり杜詩に生憎柳絮白於綿遊仙窟に可憎病鵲夜半驚人この生憎可憎をアヤニクともアナニクともよめり俗に云にくらしいなと云にあたれりまた轉してさはなくてもかなと思ふことのさあるやうのことにもいへり源氏桐壺巻に御こゝろさしのあやにくなりしそかしと有は志のにくらしきなり若紫の巻にあやにくなる短夜とあるはなかゝれと思ふ夜のみしかきを云り是等にて心うへし後拾遺戀二　藤原隆經「いかにせんあな生憎の春日やよはのけしきのかゝらましかは　新拾遺集夏郭公　尊道親王「鶴公鳥鳴へき頃もあやにくにまてはやしのふ初音なるらむ　狹衣一下三十五　今昔廿九十五

女君いとわりなきわさかなとりたにおりてといとくるしかれはたゝきてうにかけ給へとて手つからわくみかけてかきいたきてふしぬ

○わくみかけて　うつほ藏開上ノ一らう中將のあそひはしたのはかまをきてみなかいわくみてはしらる

めりしそれも其道の人とては高つるはきにてもさはかれしや同しく下に此女れいならぬけしきを見ていと心うしと思ひて前なるすゝりに手ならひをしてかきつゝく云々とかきておしわくみて置たるを見て哀とおもふなと有舊事紀に縈をツゲと訓り縈は廣韻に繞也縈也と有てわくるとは束てからみ付る様の意なり輪組の義か今女兒の髪に島田わけからこわけなと云もわくむより云なり綰をワカヌルと訓も同義成へし

北方聞はてゝいとねたしと思ふ例のはら立よと云つるはさき〳〵我腹たつを聞たるにやあらむ語たるにやあらむいとねたしとつく〳〵ふして思ふに行方なければ猶おとごにや申てましと思へど

○行方なければは　わか心のゆく方なきなりやるかたなきと云に同し

かたちはよしさき〳〵なほしなど見るによき人ならばもて出やし給はむと

○もていてや　表向にてむこ入なともあらんかとなり

あやふくて情たちはきにあひたることいひなしてむは

なちするたれはかゝるそ部や（今はいましめて）にこめてむいかでかはらたゝせよとはいはすへきといとねたきまゝに思ひたばかるこめたらむ程に男はおもひわすれなむ我をぢなるがこゝにざうししててむやくのすけにて身まつしき六十ばかりなる

○てむやくのすけ　拾芥抄 中本位階部　典薬頭（クスリノカミ）典薬寮 人醫令　大醫署 醫監 助二人 醫正

さすがにたはしきにからみまはさせておきたらむとする也云（木草の蔓のものにまつはりつくやうにせさ）よ一夜思ひあかすもしらで

○たはしきに　秋成本戯の字を傍釋せしはよろしからす此たはしきは好色なるをいひて新撰字鏡に婬の字妖の字をよみ日本紀に淫の字奸の字通の字或は結婚をたはけとよめるも同語なり榮花花宴に中に九條もろすけのおとゝいとたはしくおはして北の方の御はらに男十一人女六人そおはしけるなと有をおもふへし

少將いと哀にうちかたらひて明ぬれは出給ひぬやかていそき縫かけつる程に北方おきてぬひさすと見しをまだしくばちあゆばかりいみじくのらむとおほして

○ちあゆばかり　萬葉八橘歌に安要奴我彌又十八橘歌に安由流實又十秋つけはみ草の花の阿要奴蟹なと有て物の結成して熟する事をいへり又枕草紙十三段　すゝろに汗あゆる心地そするうつほ物語に血をあやしなとあるも同じ詞にて汗にぬれ通り血に染るなとをいふと村田春海か假字拾要に見えたり

直案にうつほ俊蔭七つの山の人々さしかけか日本へ歸るを迎え所に　かの國までもて歸るへき琴にはおのたふさの血さしあやしてことの名を書つく云々　又梅花笠たゝこそ法師あて宮を見て心まさひせる所に　おつる花ひらにつまもとより血をさしあやしくかきつく云々住よし物語中將殿姫君を尋て住よしの尼君のもとに行たまふ所に　中將はならはぬさまなれはわらくつにあたりてあしよりちあえり行やらぬけしきなれは云々　又行付給ひし所に　いとうつくしきあしに土付て所々ちうちあえてかほさきあかみてくるしけなる御すかたを見て云々榮花物語とりへの淑景舍の女御うせ給ひし所に　日頃なやみ給ふとも聞えさりつる物をなとおほつかなかる人々多かるにまことそ也けり御はな口より血あえさせ給ひて唯にはかにうせさせ給へるなりといふ云々同もとの雫ほり川の女御うせ給ふ所に　いさなやましうおほされけれは御風にやとてゆてさせ給ひてのほらせ給ふまゝに御口はなよりちあえてきえ入給ひぬなとは出る出すなと譯していとよく通せり萬葉なるはおのつから別なるを春海か混していへるはいみしきひかことなり

ぬひ物給へ出きぬらむといはせ給へはいとうつくしけにしかさねて出したれはほいなき心ちして口をしくいかに出きにけむとてやみぬ少將の御もとより御ふみ有いかにぞよへのぬひさし物ははらまだたち出ずやはと聞まほしくこそさて笛わすれて來にけりとて給へたゝ今うち内裡の御あそび奏樂に參るなりと有けに文の詞北の方のはら立には落見るにいさかうはしき笛有つゝみてやるはらはけしからず人もこそきけかうなおぼしいてそいとようゑみてなむあめる笛奉るこれをさへわすれ給ひけれは「是も猶あたにそ見ゆる笛竹の手なるゝふしを忘ると思へは　と有は少將いとほしと思ひて「あた成と思ひける哉ふえたけの千代もねたらむふしはあらしを　となむ有ける此少將藏人のいでぬるを北方おとゞに申給ふさる事は有なむやありもしなんかさかれてしいまいましきなりと思ふもしるく此落くほの君のやさしくいみしき事をし出たりけるが

○やさしくいみしき事　此詞は風流にみやひたる方にもいふめれど恥かしき意なるか本なり風流に情有人は打向にも心つかひせられて恥かはしき者なれは也　萬葉五松浦川釣魚女子答大伴卿歌に多麻之末能許能可牟加美爾伊返波阿禮騰吉美乎夜佐之美阿良波佐受阿利吉また山上憶良貧窮問答反歌に世間乎宇之等夜佐之等於母倍杼母飛立可禰都鳥爾之安良禰婆とよみ竹取物語源氏物語等に人きゝやさしと見えたるもみなはつかしき意なり古今集に　詠人不知「何をして身のいたつらに老ぬらんとしの思んことぞやさしき　とも詠り

いみしささすがにさしはなれたる人ならばともかくもすべきにいとこそかたはなれとの給へはおとゝおとろきまどひて

○かたは　箒木にかたわなるへきもことゆるし給はねは云々注　頑　片輪　契沖曰先かたわと書るかな誤て注も是にしたかひて誤れり鳥の片羽より云詞なれはかたはと書り空穂物語初秋の歌に「つはさのゝはらにやさるはつらけれどかたはにみえぬおとや成けり「大鳥のはねやかた羽に成ぬらん今はおとやに霜のふるらん「かたはなる名のおとやにもきこゆるはおもひいらるゝ頃にも有かな「秋の夜のかすをかゝせんしきのはの今はおとやのかたはにはせん　かたはと書てかたわと聞ゆることく云は音便也片羽は不具なる事故見くるしき事にも云りこゝもみくるしく可恥事にいへるなり

何事そとゝひ給へは此藏人の少將のかたなるこたちはきといふは

○こたちはき　形のわかくちいさやかなるゆゑ呼るか下文に年ははたちはかりたけは一寸はかりなりとのゝしりたるを考合すへし

此日頃あこきにすむと聞思ひつるははやうさうじみにたちかゝりにけり

○さうしみ　正身と書て音の轉したるなりとそあるしの女をさしていふ

文の返事をしれたるものにてふところにいれてもたりけるを此少將の君のまへに落したりけれは見付給ひてくはしく心つきたる君にてたかきと帶刀にとひせため給ひけれはかくさでしか／＼と申けれはいときよげなるあひむことり給ひてけりなあな名だゝし

人の見きかむもいといみじうこれなすませ給ひそといとはづかしげにの給ひけるとくはしく申給ひてければ

○とひせため　夫木卅六　後九條内大臣「あぢきなし身の爲にこそ戀もすれ心せたむるわが泪哉　林葉五「おのつから打まどろめはうち起しいかにせたむる胸の思ひそ　今昔物語廿六事に事を付て責ためんとして云々宇治拾遺三（十七丁）にうちせためつみせらるゝ　盛衰記五拷木に懸て打せため同廿三我は入道にせため殺されんするそなと見えて谷川士清は責縊るの義なるへしといへり　直按に責縊るの義なるへしとあるはいはれぬ事なりせめは歌にいとせめてなとよめるせめにてせまりの約み（ツヾメ）をむにもめにもかよはしてせめともせむともいひためはたしなめの中略にてくるしめることなり神代紀に辛苦また困阨欽明紀に劬勞神武紀に厄の字をよめる意にしてせまりくるしめるの義なるへし狹衣におのか身をとさまかうさまにせため云々又母しろまたせためにより来なとあるを可合考

おさゝおい給へるほとよりはつまはしきをいとちから〲しくし給ひて

○つまはしきをして　直案につまはしき唾吐かけるなといふかことし是もと佛經より出たる事なり三千威儀經上厠有二十五法其四到門外三彈指（恐有人在内）五已有人不得逼六已登正彈指（此音嗽驚諸鬼）と見えたり源氏箒木につまはしきとあれとも諸抄こゝに及さる歟また梁書巻四十一褚翔列傳云翔少有孝性爲侍中時母疾篤請沙門祈福中夜忽見戸外有異光又聞空中彈指及曉疾遂愈咸以翔精誠所致焉また維摩經云度百千劫猶如彈指うつほ藤原君に市女うちわらひてつまはしきをして聞ゆ云々蜻蛉日記にいとかしこしとてつまはしき打してものもいはて云々源氏空蟬にかの人の心をつまはしきをしつゝうらみ給ふ云々土佐日記に一日風やますつまはしきをしてねぬなと皆三千威儀經の說によりて書るなるへし

いといふがひなきことゞもをもしたる哉かくてをればみな人は子の數（地下といふ事）としりたるに六位といへど藏人にだにあらすつちのたちはきのとしはたちばかりたけは一寸計なり

○つちの帶刀　萬葉五許騰波奴紀爾茂安理等毛和（コトヽヘヌキニモアリトモワ）

何世古我多那禮乃美巨騰都地衛意加米移母とある都地と同しく下といふことなり

かゝることはしいづべしやさるへきすらう(領受)あらはしらずかほにてくれてやらむとしつる物を北方そがいと口をしき事おのが思ふやうはあまねく人しらぬさきにへやにこめて守らせむをむな(帯刀)思ひたればいであひなむずさで程過てともかくもし給へと申給へはいとよかなりたゞ今おひ(追)もて行て此北の部やにこめて物なくはせそしをりころしてよとおいほけて物のおぼえぬまゝにの給へは

○しをりころして　伊勢物語六十五段上略このをむないとこの宮すむ所女をはまかてさせてくらにこめてしをり給うけれはくらにこもりてなく云々契冲云しをるは風の草木を吹しをると云も採ていたましむるをいへは今もいたむる心也萬葉第十九に梅のはな雪にしをれてと云に之乎禮氐と書菅家萬葉に康秀歌に秋の草木のしをるれはといふに芝折禮者とかゝせ給へり泪に袖をしほるといふは假名もたかひこゝろもことなるを後のうたには此しをる心をもしほると書て袖をしほるといふにまかへたり　春海曰伊勢ものかたりにくらにこめてしほりたまうけれはおちくほ物語云々とあるも手にて物を絞るやうに身をつめて自由になさしめぬことにいへり是等をもしほりと同し語なりといふはわろし　直二説を見わたしてとくと考見るに契冲の説よろしと申へしいかにと云にしをりは萎折の義にして康秀の歌もしかなり草木萎折れはいつしかさ枯果る物なれはそか如く物くはせすして芝折ころせといふなり俗に力なけなるを打しをるゝなどいふを見ても知るへしもし春海か説のことくならは人して搤殺せしむるをこそいふへけれ物くはせておのれと死なすをいかて絞殺とはいふへからむ大和物語に「しをりして行たひなれとかりそめの命知らねは歸りしもせし　新六　しをり　光俊「山ふかく誠の道にいるときは我身しをりとほねををるかな　新千　釋教　法印俊譽「うけかたき身をしをりてそまとひこしもとのさとりの道はしりける　是等皆身をくるしめる事をいへるなり自他はかはれともことの心はおなしかるへし

北の方いとうれしと思ひて衣たからかに引上て落くほにいましてついゐ給ていと云かひなきわさをなむし給たる子とものおもてふせにとておとゝのいみしくはら立給ひてこなたになすませそとく籠置たれ我まもらむたゝ今おひもてことなむのたまへるいさ給へといふに女君淺ましう侘しくかなしうてたゝ泣になかれていかに聞給ひたるにかあらむといみしとはおろかなりあこきまとひ出ていかなる事をきこしめしたるそさらにしあやまちせさせ給へる事おはしまさゝめる物をと申せはいて此しほさきをかりてなさくしりそいかにしたりつることにかあらむ

○しほさき　萬葉一柿本人麻呂のうた潮左爲二五十良兒乃島邊榜船荷妹乘良六鹿荒島回乎とあるによるにこゝも潮さゐの誤なるへしさゐの爲は和藝の約にてしほさわきといふことにて潮のみちくるとき波のさわくをいへりとそさらはこゝも此さわきに乘てと云心なるへし潮のさしくるさきなとにたくへていふと心得るはあしし　外

我にはかくし隔給へとおとゝのとより聞ての給ふぞ　主　多利の約(ツヽメ)知なり　すべていとあしきもしらぬしうもたりてわきはみ思　辨秋

ふ君に増らせむと思ひつるこゝ。な。わらは家の内になありそいさ給へおとゝのゝ給ふこと有とて衣のかたを引たてゝたち給へは

○わきはみ思ふ　萬葉に客人之やとりせん野に霜ふらはわか子はくゝめあまのつるむらとよめるに同しく鳥のかひ子を養ふやうに人を殊にいたはる事に用るなりこゝも即わきはみいたはる三の君に落くほを立増らせんとせしとてのゝしるなり

あこきなくこといみし君はたさらに我にもあらす物もちらしなからにくる物からむるやうに袖をとらへさきにおしたてゝおはすしをむ色のあやのなよらかなる白き又かの少將のぬき置しあやのひとへきて髮は此頃しもつくろひけれはいとうつくしけにて丈に五寸計あまりてゆらめきいくうしろて最いみしくをかしげなり

○ゆらめく　ゆるきめくなり本ゆらくと云詞より活きたるにて古事記の歌にねてゆらくもやと見え萬葉にゆらく玉緒なともあり神代紀に瑲々をモユラとよみ遊仙窟に鏘々をユラメクとよめるは共に佩玉の聲をいへれと佩玉も原來歩行すれはゆらめ

きゆらめけは音あるよりいへるなれはこゝも髮の
うつくしう佩ものなと掛たらんやうにゆら〳〵す
るをいふなるへし平家物語に鬩をユルクとよませ
正字通凡風動物與物受風搖曳者皆謂之鬩とあるな
と思ふへし　顯宗紀御歌に謨謀逗拖甫奴底喩羅俱
慕與於岐毎俱羅之慕

○うしろて　うつほ藏開下（なかよりあてみやを見し所）なか賴い
かにせむと思ひまとふに今宮ともろ共に母宮の御
方へおはすか御うしろてすかたつきたとへんかた
なし

あこき見送ていかにしなし奉り給はむとするにかあ（足すりしてなきたきかなり）
らむと思ふにめくるゝ心ちしてあしすりしてなかる
る心ちを思ひしつめて

○あしすり　萬葉五山上憶良戀男子名古日歌に
靈剋伊乃知多延奴禮立乎杼利足須利佐家婢云々又
九詠水江浦島子歌に叫袖振反側足受利四管頓情
消失奴云々また同卷莵野橋別大伴卿歌三船子乎
阿騰母比立而喚立而三船出者濱毛勢爾後奈美居而
反側戀香裳將居足垂之泣耳八將哭云々　伊勢物語
六段ゐてこし女もなしあしすりをしてなけともか
ひなし源氏總角卷にみるまゝにものゝかれゆくや
うにて消はて給ひぬるはいみしきわさかなひきと
ゝむへき方なくあしすりもしつへく云々同蜻蛉に
今はかきりの道にしも我をおくらし氣色をたに見
せ給はさりけるかつらきことゝ思ふにあしすりと
いふことをしてなくさまわかき子とものやうなり
なと見えたりあしを地にすりつけ〳〵泣さまなる
へし

打ちらし給へる物ともとりしたゝむ君はあれにもあ
らすおとゝのおまへに引出きてばくりとつい（衝居）すゑら
れてからうじて

○はくり　此類語いまた見あたらず今俗言にぼつ
くりなと云詞にあたるか猶可考

あしつから（手つからといふに同し）いかすは今少しかりなむとの給へは（中納言）早籠（北の方にいふ也）
給へ我は見じとの給へは又引立てこめ給ふ女心
にもあらで物し給ひけるかなおそろしかりけるけし
きになから（半）はしにけむ（死）くるゝ戸（樞）のひさし（庇）ふたまある
へやのすさけい（酢酒魚）をなとまさなくしたるへやのたゝた
ゝみ一ひら口のちさに打敷てわか心を（北のかたの詞）こゝろさする

ものはか丶るめ見るそよとていとあら丶かにおし入て

○まさなくしたる　竹取物語にこは高になの給ひそ家の上にをる人ともの聞にいとまさなし源氏繪合にいとかうまさなきまていにしへのすみかきの上手とも丶跡をくらうなしつへかめる大鏡一巻三條まさなうも申させ給ふ哉つれ〳〵草下巻四十段黒戸は小松御門位につかせ給ひてむかしたゞ人におはしまし丶時まさなことせさせ給ひしを忘給はて常にいとなませ給ひける間なりみかま木に煤けたれは黒戸といふとそなと見えて用ひさま各こと也　直案に竹取大鏡なるはよしなといふ意源氏は繪の上手をいみしうほめたる詞なり徒然草は料理し給ひしことをいへり畢竟あしき方にいふ詞なるを源氏つよくほめんとて斯いへりこ丶なるとつれ〳〵なるとはむさくろしきといふ事にて桐壺にこ丶かしこの道にあや敷わさをしつ丶御送迎の人のきぬのすそたへかたうまさなきこと丶も有といへるに同し

手つからついさしてしやう（綯）つよくさしていぬ君は萬に物の香くさく匂ひたるか侘しけれはいと淺ましき（後世に云匂ひにゝたれとも何となくあしき香のこもれるをいへるなりさることもなくむんむさするを云）には涙も出やみにけりなとかくつみし給ふ事ぞその事共聞すおぼつかなくあやしあこきをたにいかてあはむと思へとも見えす

○あこきをたに　直按あこきにたにといふへきををたにといへるは古文の法なり古今離別になにはのよろつをかうたのはしかきにあふ坂にて人をわかれける時よめるまたつらゆきも人をわかれけるとき詠るをとはの山のほとりにて人をわかるとて詠るなといと多かるを古今打聞に人の旅行に別る丶には人をといひわれ行にはわかるといふといへるはあたらぬこと也萬葉にくやしく妹をわかれ來にけりまたたらちねの母をわかれてまことわか旅のかりほにひとりねんかもとよめる皆わか行時の別なりと千秋いへり

いとうかりけると身を思ひてなく〳〵うつふしふしたり北方落くほにおはしていつらくしの箱の有つるはあこきと云さくしりをりて早う取かくしてけりとの給ふもしるく

○さくしり　源氏未通女にいとさくしりおよすけ

たる人云々　花鳥に鑷の字をさくしりとよめり角にてしたる鑷なり云々　契沖師云和名抄刻鑷具云唐韻云鑷（尼輒反和名玖之利）角錐童子佩鑷説文云角銳端可以解結著也と計にて別に説なし源語梯に和名抄の意を取て注し更に童子佩鑷の詩を引て云童子の出過てかしこたてをするをそしりたる詩也こゝもそれを下心にもちて年若なる人のこさかし過たるをいへりといへりされど和名なるも玖之利とのみにてサクシリとはなければは覺束なし　直按こはサカシリと同語なるへし日本靈異記に儒をサカシリと訓して賢知の義とす上になさくしりそとあるもかしこふるなとはたらかしたる詞こゝなるはかしこふる奴と體語に用ひたるなるへく思はる　狹衣四上うちさくしり引はひなとはし給はす云々（上源氏の次に引へし）

（あこき詞）愛にとり置て侍るといへはさすがにえこひとらすこなたは（落くほなり）我あけざらむ限りはあくなとてさしかためておはしぬ（北の方したりとおもひてなり）しつと思ひていつしか此事てむやくのすけに語むと思ひて人まをまつあこきさし出されて（落窪の居給ふ部屋の外へ）いみしくかなしければはなぞや出てやいなましと思へと君（鎖）のなりはてゝ給はむやうたい（容體）見むとて

○人まをまつ　日本紀に間の字をヒトマと訓て人のなき間をいへり竹取物語にある人の月のかほ見るはいむ事とせいしけれともともすれは人まには月をみてはいみしくなき給ふ源氏紅葉賀巻に人まにさしよりて物かくしはこり給ひぬらむかしとて云々うつほ藤原君の巻是人まに奉れなと有また古今春上　貫之ぬるとあくと目がれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん　後撰戀上　藤原ありよし「逢見てもつゝむ思ひのわひしきは人間にのみそねはなかれける

いかなるさまにておはすらむとゆかしければ三の君の御もとに（北のかたの）ひとへに打たのみ奉るいとも淺ましくしり侍らぬことによりさいなみてまかでねとの給へれは宮仕をしさし（いひさし背さしなさのさしなり）侍るめることゝいとかなしくなむいかで猶今一たびだに見奉り侍りなむ猶うへ（北の方）によきさまに聞えさせ給ひて此度のかうし（勘當）ゆるさせ給へちいさくてこそつかうまつりしか今はあかれ（判）ことに（別）成て侍れば此落くぼの君の御事まほに（またくの意）しり侍らずいとわ

ひしくなむ
○まほに　十分にといふ詞なり箒木巻にかたちなといとまほにも侍らさりしかはと有注にまほとも讀千載集にむすこけのまをならす共とよみしは眞青の意に用ゆるなり又萬葉にこく舟のまほにも妹にとよみしは眞帆也然れともまをとよむへし契冲師云初のうたは千載戀三待賢門院安藝「そなれ木のそなれ〳〵てむす苔のまをならすともあひみてしかな　まほはかた帆にむかひたる詞なるを此歌に眞青とよせたるは假名つかひの其頃よりわろく成れる故なりかた帆なるといふにむかひたる眞帆なれはまほなり夫をまをのことくいふより假名の沙汰なきころ藍を蓬にさへなしてよみけれはむす苔の眞青とはつゝけたるなり假名をはよく沙汰してかくはよむましきことなり後の歌は早蕨の巻にまたく引りしかれとも萬葉にはかたくなきうたなり

哀にめしつかひつかうまつり侍ぬる御てをまかで侍（またいつかはま見え奉らんといふ詞をこめたり）りなばなど事よく契りてみそかに頼み奉りたれば三君まことゝ思ひて哀にて母北方にあこきをさへ何しにさいなむつかひ（使）つけ（附）て侍ればなき（無）はいとあしめしてむとの給へはあやしく相思ひたるわらはなめりぬす人かましきわらはにてくやつ（此奴）かよくなさむとて（よきことせんとて也）したるにこそあめれおちくほはよに心とはせむとおもはじ

○よに心とはせん　一の廿一おとゝの詞によかるへきことあらは心ともし給へかくてのみいまするかいとをしやとの給へは云々

をとこ心は見えざりつとの給へば三君なほ此たひはゆるし給へらうたくわひおこせて侍つと申給へばともかくも御心（三の君のさく）までつかひよしとはしもなの給ひ（莫宣）そいとしれかましと心ゆかすの給へはさすがにわつらはしくてえふと（與風）もよばてしばしねむ（念）ぜよ今よく申さの給へりあこき思へと〳〵盡もせすへやにこもり給へる君たゞ物もおほえ給はずあこきはた思ひよらぬことなく歎く御たい（臺）をだにまゐらせでこめ（籠）奉りつるをくやつはよも參らせしと（イナシ）さはかりらうたけ成つる御さまを

○くやつはよもまゐらせし　落君をふたゝひ大殿

の御まへにはよも參らせしとなり
引いて奉りつる程のけしき思ひ出るにいみしう悲し
く我身たゝ今人とひさしくてもかな
○人とひさしく　曾丹集序名をよしたゝとつけて
けれといつこか我身人とひさしきと云々
むくいせむと思ふもむねはしる君やよさりおはせむ
とすらむいかにおもほさむすらむとふとしもなくな
りたらむ人をいはむやうにいみしうかなしうておき
ふし泣いらるれはつかふ人もやすからす見る女君は
程ふるまゝに
○むくいせんと　大和物語に御はかししはしかし
給はらんねたきものゝむくいし侍らん云ふに云々
宇津保俊蔭卷に東國より都にかたきもたる人むく
いせんとおもひて四五百人の兵にて云々源氏賢木
卷に后の御心いちはやくてかた〳〵おほしつめた
ることゝものむくいせんとおほすへかめり土佐日
記に國よりはしめて海賊むくいせんといふなる事
を思ふ上に云々神武紀被傷於虜手將不報而死耶又
欽明紀今夜兒亡追蹤覓至不長亡命欲報故來○
むねはしる　源氏夕霧卷にこの御文は引かくし給

つれはせめてもあさりとうてつれなくおほとのこ
もりぬれはむねはしりていかてさりてしかなと云
々　古今戀　小町「人に逢んつきのなきには思置
てむねはしり火に心やけをり　盛衰記四十六に嗣
にはさく〳〵御渡り候へと申せとこそ云ける藤太冠
者むねはしりつゝ云々なと見えたりむね打さわく
を云なり○なくなりたらん　千蔭云今死たる人を
いはんやうにゆゝしうかなしむと云ふ意なるへし
死るをなくなるといふは俗語の様なれど死人をな
き人ともいへばなり
物くさきへやにふしてしなば少將に又物いはず成な
むことなかく。のみ云　契し物をといと悲しくよへ物
ひかへたりしのみ思ひいでられていと哀なれはいか
なるつみをつくりてかゝるめ見るらむまゝ母のにく
むは例の事に人もかたるたくひ有てきくおとゞの御
心さへかゝるをいといみしとおもふ彼少將きゝてい
とまはゆくいかに女君のおほすらむとてもかくても
我故にかゝる事を見給ふことゝ限り無歎く人まによ
りてかくなむとも聞えよとて
○いとまはゆく　源氏桐壺卷にいとまはゆき人の

御おほえなりと有て細流にまはゆきは人のそねみて打ち向はぬ貌なりと注せるを契沖は細流はめをそはめつゝきたれはかくは注し給へと御覺と云によれは日のかゝやく時まはゆくて見かたきやうの意なるへきにやといはれたるに本居宣長も同心して人に目をそはめらるゝ是まはゆきなりといへり此詞蓬生の巻明石の巻等所々に見えてさま〳〵に心かはる樣なれと共におもて伏なることにてはつかしきにも氣の毒なるにも云へり直按にまは目なりはゆしと云詞はこそはゆしおもはゆししほはゆしなと云はゆしにて氣味わるく身にこたへるをいへはこゝも北方の心さかなく目をそはむるかおそろしさにおもてむけかぬるをいふなるへし古き詩集なとに羞明をマハユシと訓せり宋壺山か夜雪詩に雪眼羞明夜轉飛と作りしはまはゆしと云によくあたりま字覩たをマハユシとよむ東見記に見えたり

文詞 いつしかと參りきたる折淺ましとは世のつねに夢のやうなることゝもをうけ給はるに物もおほえすなむいかなる心ちし給ふらむと思ひやり聞ゆるもおほすらんにも増りてなむ對面はいかてかあらむとするさいと佗しくなむとの給へりあこきな(長)(鳴イ)きぬともをぬき詮てはかま引上て下ひさしよりめくりていく人もねしつまりにけれはやゝみそかに寄て部やの戸打たゝく音もし給はすおほとのこもりにけるかあこきに侍るといふほのかに聞ゆれは君やを(落)ら寄ていかに來るぞと

○ほのかに聞ゆれは　萬葉集に髣髴又不明また髴の字をよみ新撰字鏡に佛をもよめり諸書に夙聞側聞なとをホノカニキクと訓り側通して仄とも書り眞名伊勢物語に入風所道をホノカとよめり火薫の意にしてはきこせぬをいふなるへし薫はくもりふたかるやうの所にいへる古語にて神代紀一書にも我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉と見え萬葉にも日かをるなとよめり

なく〳〵いみしうこそ有いかなる事にてかくはし給ふるにかあらむともいひやらせ給はてなき給へはあこき泣々今朝より此へやのあたりをかけつり侍れさえなむさふらはさりつるはいみしくもさふらひつる物かな

○かけつり　今俗にもいふ詞なり
（帯刀か君にすむと儀したるやうあこきか語るなり）しか／＼の事（あこき）いひ出たる成けりと申せはいと丶泣増
り給ふ少將の君おはしたりかくなむと聞せ給ひてた
丶泣になき給ふかう／＼（少將の消息を傳ふるなり）なむ侍りつると申せはいと
哀とおほしてさらに物も覺えぬ程にてえ聞えす對面
は「消かへり有にもあらぬ我身にて君をまた見むこ
とかたきかな
○伊物に女くらに有て「さりともと思ふらむこそ
かなしけれ有にもあらぬ身をしらすして（蜑）
と聞えよいとくさき物共のならはひゐたるいみしう
みたりかはしく丶るしうてなむいき（生）たれはか丶るめ（氏岡のつゝめ多）
も見る成けりとてなき給ふとは世の常なり
○世の常なり　眞淵土佐日記おほろけの願により
てにやあらん風も吹すよき日出きてこき行と云所
に注しておほろけは大かたと云詞なりされはおほ
ろけならぬ願にと有へきをかくいへるは此頃の俗
語におほろけならぬと云へきをならぬをはふきて
いへる俗語をもてかけりと見ゆ源氏もの語にもか
くさまにいへること有凡俗語には云なれし詞は理
なく省きてつかふ事多し今もしかりか丶る詞はみ
やひ言にあらすと知りてわきまふへしといはれし
かかくこ丶のよの道もよの常ならすと有へきを斯
省きてかけるなりと知るへし
あこきか心ちもた丶思ひやるへし人やおとろかむと
みそかに歸りぬ
○おとろかむ　是は萬葉に覺の字をオトロクとよ
めるか如く人やさとらん人や心付んなといふ意な
り
聞ゆれは少將いとかなしく思ひ増ていといたうなか
るれはなほしの袖をかほにおしあて丶ゐ給へれはあ（少將）
こきいみしと思ふしはしためらひて猶今一たひ聞え
よあか君やた丶にえ消ぬものになむ「逢事のかたく（消息）
成ぬと聞よひはあすをまつへき心ちこそせね
かうは思ひ聞えじとの給へはまた參るみちに心にも
あらす物の鳴けれは北方ふとおとろきて此へやの方
に物のあし音のするはなそといへはあこきなく／＼
とくまかりなむと申せは女君こ丶にも「みしかしさ
人の心をうたかひしわか心こそまつは消けれ（あこきかまかりて少將に聞ゆる詞なり）
との給ふもえ聞あへすしか／＼聞きての給へれは萬

もうけ給はらす成ぬといへは
○たゝにえ消ぬ　落のかへしにきえかへり有にもあらぬわか身にてとあるによりてかくの給ふなり
○しか〳〵おとろきて　北の方のこのへやの方に物のあし音のするはなそとゝかめたる事なりおとろくは心つくなり
少將たゝ今もはひ入て北方をうちもころさはやと思ふ誰も歎きあかして明ぬれは出給ふとてゐていて奉(将出)らむをりを告よいかにくるしうおほすらむとおろかならすいひ置て出給ひぬ帯刀かくまはゆき事をおとゝも聞給ふらむにこゝにあらむ事もひむなけれは御くるまのしりにのりていぬあこきいかて物参らむい(食 落に奉んと)かに御心ちあしからむと思ひまはしてこはいひをさりけなくかまへていかてと思へとせむかたなけれは
○こはいひ　直廳按和名抄に强飯の字を出して史記の廉頗强飯斗酒食肉十斤を引て强飯和名古八伊比と云れしは順朝臣の博識にも似合ぬいみしき誤なり此强飯はしひて食するをいへりこはいひは字彙に饠巨兩切强上聲硬食とある是なり余恐らくは後進の和名抄の誤を襲んことを故にこゝに詳にす
此かたらふちいさき子に(三郎落の箏な教し人)彼君のかくておはしますをはいかゝおほす(いとほしう思すイ)。やといへはいかゝは(いかゝはいとほしうたは)と云さらは人にけしき見せで此御ふみ奉るわさし給へといへはい(さゝんとなり)てとて取てあやにくにかのへやにいきて是あけむ〳〵いかて〳〵といへは北方いみしくさいなみて
○あやにくに　既に上に詳にすこゝは行でもあれかしと思にの意なり
何しにあくへきそとの給へはくつを是に置てとらむとのゝしりて
○くつを是に置て　和名抄履襪類云唐韻云草曰扉音翡麻曰履音句革曰履音李和名並久豆用韓字音沓黄帝臣於則造
うちこほめかしてのゝしれはおとゝをとこにて悲しうし給へは
○をとこ　弟子と書弟女にむかへて季の子にてことにめくしとおほすを云
おこりありかむと思ふにこそあらめ早うあけさせ給へといみしくの給ひて(以下四文字イナシ)今しはし(へとイ)有て(我)明むついてにとの給ふにをそはへてあれおしこほちてむとはらたち

のゝしれは
○をそはへて　春海云おそはへは押はへか古事記の歌に押をおそふらひ共有はへはふりはへのはへか　濱臣云おそはへは今いふそはへてと云と同し萬十三長歌伊蘇婆比座與いかるかとしめと有いそはひに同し相通にていそはへともおそはへともいふを後に略してそはへとのみはいひけり枕草紙にすてにそはへたる小とねりわらはともいへり源氏箒木にはそはつきされはみと有皆同樣なり　直按秋成本おそとあるはよろしからす活本をそと有にていとをと通しよふ事いよゝ明也又歌によめるは山家集上　初花のひらけはしむる梢よりそはへて風のわたるなる哉　萬代冬雨夢混波堀川右大臣嵐吹時雨の雨のそはへにはせきのを浪の立空もなし
おさゝ手つからいましてあけていれ給へれはくつもとらていつらとてついかゝまりてさしとらせてあやしなかり（沓の）けりとて出ぬれは
○ついかゝまりて　かゝむは屈の字なり萬葉にかかる我手といへるもかゝまる我手と云ことなり
まさにさかしき事せむやとてはしりうち（撃）給（戸なうつ歟）彼ふみをはさまよりひの光のあたりたるより見れは
○はしりうち給ふ　秋成撃の字を傍譯せしはいかか此うつは部屋戸をとつるを云なるへし今も俗に戸をさしこめたるを戸を打といふを思ふへしまた三郎を打給ふへき由もなく籠てある落きみを打給ふへきよしもなけれはなり猶あかし有へし
あこきか萬の事書てはかなきさまにしておこせたる成けりされとも物〳〵はむともおほえておきつ北方さすかに目に一度物〳〵はせむもの縫により命はころさしと思ひててむやくのすけを内々によひてかう〳〵なむしか〳〵のことあれはこめ置たるをさる心思ひ給へとかたらひ給へはいとも〳〵うれしくいみしと思ひて口はみゝもと（耳根）まてゑみまけてゐたりよさりかのゐたるへやへおはせなと契りたのめ給ふに人〳〵れはさりぬあこきかもとに少將の御ふみ有いかにその部やはあくやといみしくなむ猶ひむきあらは告られよさりぬへくはかならす〳〵奉り給ひて御かへりあらはなくさむへきいと哀なることを思ふにとありさうしみにはおろかならすいみしき事をかき給ていと心ほそけ成し御消息を思ひ出るにいとわりなく〳〵なむ

一いのちたにあらはと頼む逢事をきえぬといふそいと心うき

○きえぬといふそいと心うき　前に落のわか心こそまつはきえけれとあるに答てかくよめるなり

あか君心つよくおほしなくさめよもろともにたに籠られなむとかき給へり帯刀もさらに此事を思ふに心ちもいとあしくてなむふして侍るいかにおもほすらむとかたはらいたくいとほしきにほうしにも成ぬへくなむと書ておこせたりあこき御かへりかしこまりてなむいかてか御覧せさせ侍らむ戸はいまた明侍らすさらにいとかたくなむいかにして侍らむ御ふみもいかてか御覧せさせ侍らむとすらむ御かへりはこれよりも聞えさせ侍らむときこゆたちはきかもとにも同しさまにいみしきことをなむいへりける二の巻にそこと〳〵もあへかめる

○二の巻にそこと〳〵も　うつほとし蔭の巻尾つき〳〵にこそ同國譲巻尾のこりはつき〳〵に有へしこそ　榮花花山巻尾あさましきこと〻もつき〳〵の巻に有へし　堤中納言虫めつる姫君の帖末といひてかへりぬめり二の巻にあるへし

落窪物語證解三之巻

あこきいかて此御ふみ奉らむとにきりもちて思ひありくに更に部屋の戸明すわびしと思ひおもふ少將とたちはきとはたゝぬすみ出むとたはかり○し給ふ

○たはかり　敏達紀に相計をタハカリと訓り竹取物語にこやす貝とらんと思しめさはたはかり申さんとて云々たは發語にてはかりは計ことを云日本紀竟宴歌阿保朝臣經覽　思兼たはかりとをせさりせは天の岩戸は開けさらまし　直案たはかるは人をはかりすかしあるはおとしいる〻やうの所に多くいひてたゝはかるとはいさゝけちめ有こはまさしくたくみはかるの義なるへし空穗忠こその巻（大臣の北のかたたゝこそを讒せんとはかる條）いかて是かむくいせんと思ひなりて何事をいひつけんと目を付て見給へといひつくへきこともなししひてたはかるとて云々此下にち〻大臣の數代秘藏し給へる帶を北の方とりかくしてたゝこそのぬすみいて〻うらんとしさまにたくみしうちたる事をなか〳〵と書り又同巻（橘の千陰を）

此のおとゝみかとかたふけ奉らんとそうしてなか
させ奉りてつゝむともなくてせめいはんとなんいひ
たはかるなることあるを見合せて知るへし宇治拾遺
六(僧伽多行羅刹國事)にあしき風にはなたれて此
嶋に來れば世にめてたげなる女共にたはかられて
歸らんことも忘れて住むほとに云々
可早圖之神武紀
少將
われゆゑにかゝるめも見るそとおもふにいとゝ哀に
ていかて是をぬすみ出て後に北方に心まどはす計
俗に云ひさきめにあはしてやるとの意はへなり
にねたきめ見せんと思ひおもふ
○おもひ思ふ　管子云故思之々々不得鬼神敎之
心術
ほと〳〵」にしうねく心深くなむおはしける
秋本に无可從　執念
○ほと〳〵に　幾また殆また危を訓り幾は字書に
將レ及也と注し殆は訓近也と注し危は險也と注せ
り邊垂々々の義にして物のきはまて行つまりたる
ときに云詞なり萬七旋頭歌三幣帛取神之祝我鎭齋
杉原燎木伐殆之國手斧所取奴　拾遺戀四よみ人し
らす「なけきこる人いる山のをのゝえのほと〳〵

しくも成にける哉　同雜戀國茂「宮つくるひたの
たくみの手をの音ほと〳〵しかるめをも見し哉土
佐日記にこけとも〳〵しりへしそきにしそきてほ
とほとしくうちはめつへし枕草紙十ほと〳〵えの
かるましく侍つるを云々六帖をのゝえふしの
山なけきこるてふをのゝえのほと〳〵しくもなり
しほと哉なと見えたりこゝなるはけはしう又は極
めて行つまりたる心よりかく成なと譯して允當なるへし
かのかたらひせし少納言片野の少將の文もて來るに
かくこもりたれは淺ましう口をしう哀にてあこきと
いかにおほすらむ
○こもりたれは　こめられたれはなり神代紀に入
居をコモルと訓み幽居をコモリマスとよめり隱字
籠字なとを訓は常のことなり
なごかゝる世ならむと打かたらひて忍ひてなく日の
いかてか如此にある世ならむとなり　語合
暮るまゝにいかて奉らむと思ふ内少將のふえの袋
かれてにきりもたる文　笛の袋など
縫するにとりふれむかたのおほえぬまゝにとみに手
もふれぬ程に北の方部屋のやり戸をあけて入おはし
て

○ふえ　吹枝なり
これ只今縫給へ（北の方）といへは心ちなむいとあしきとてふ
したれは是縫ひ給はすはしもへ（下）屋にやりてこめ奉ら
む
○心ちなんいとあしき　土佐日記にこゝちあしう
して物もものし給はてひそまりぬ此外みたりこゝ
ちぬるみ心ちおこりこゝち世中こゝち風のこゝち
なといへるは物かたり草紙にいと多し
か様のことを申さむ（落の心）とて爰には置き奉りたる（下部屋にもこめてんと）にこそ（吾）
あれといへはまことにさもしてむと佗しくてあれに
もあらすくるしけれと起上りてぬふあこき部屋の戸
明たりと見て例の三郎君よびていと（さきにも）うれしくの給ひ
しかは（頼み奉るになん御文）なんこれ北方の見給はざらむに奉り給へ（落へ）ゆめ
〳〵けしき（北の方へ）見え奉り給ふなといへは（三郎君）よかなりとて
とりつい（就來）きてかたはらにゐて笛取て見れとあそひ居
て衣の下にさし入つ（落の御文）
○ゆめ〳〵　努力々々の義也日本紀にはツトメ
〳〵と訓り萬葉には謹字勤字なとをユメ　とよめ

りゆめはいましめいさめなといふ詞を約めたるも
の也といへり古今戀三詠人不知「戀しくは下にを
おもへ紫のねすりの衣色にいつなゆめといへるも
色にないたしそといましめたる也○けしき　直磨
案に字音の轉りて訓と成しものにしてしかも二義
有一つは人の動靜によりて云一つは見わたの有さ
まをもて云人の動靜によりて云ふ方は氣色の字な
り後撰戀四はし書に人のむすめにいとしのひてか
よひ侍りけるにけしきを見ておやの守りけれは
云々後撰雜一はし書にかたはらの女御たちそねみ
給ふけしき成けるとき云々また戀三男のけしきや
う〳〵つらけに見えけれは小町　伊勢物語廿三段この
もとの女あしと思へるけしきもなくてまた此女け
しきをとりてなとあるは氣色の字なり辨乳母集に
淺からぬ千代のけしきと見ゆる哉此中嶋の松のみ
とりは後拾遺賀右大臣顯房これもまた千代のけし
きのしるきかなおひそふ松のふたはなからに同春
上紫式部　みよしのゝはるのけしきにかすめともむ
すほゝれたる雪の下草（後拾遺猶有之）なと見えし
は景色の字なりよく心え置くへき事になむ

落いかで見むと思ふに袋縫はてゝ見せにもていきたる程にからうじて見て哀とおもふ事限なし硯筆もなかりけれはあるまゝにはり(針)のさきしてたゞかく書きたり

○硯筆　すゝりは墨摺(スミスリ)の中略ふては文出(フミテ)の義也

「人しれす思ふ心もいはてさは露とはかなくきえぬへきかなとおもひたまうるこそとてもたり(持居)北方いましで有つる袋は最よくぬひたりやりと明たりさておとゝさいなむとて引立てじやうさゝむとすれば

落いかであなた(北方)に侍りし箱とりてとあこきに告侍らむといへばたてさしてあのくしの箱えむとあめりとの給へはまとひもて來てさし入る手に入たれは引かくして立ぬ

○はことりて　和名抄(容飾具)　巖器魏武疏云漆書――俗用唐櫛匣三字　○まとひもてきて　此まとひはあわてゝと云詞にあたる

(あこきが詞)からうじて御笛の袋ぬはせ奉り給ふとて明給へるまになむと云少將いとゝ哀と思へる事限なし暮ぬれはてむやくのすけいつしかと心けさう(懸想)してありきてあこきが居たる所によりていと心つきなげにゑみて

○いつしか　早晩(李白詩)何時(萬葉)ともにイツカと訓りいつしかも同し詞也○いと心つきなげに　源氏帚木卷に物えんしをいたくし侍りしかは心つきなういとかゝらておいらかならましかはと思ひつゝ云々俗に云思ひつきかないなといふ意にて我より彼を見て心のそまぬを云

あこきは今は翁を思ひ給はんずらむなといへばあこきいとむくつけくおもひてなどかさ有へきといへはおちくぼの君をおのれに給へれば此御方の人にはあらずやといふに驚きまどひてゆゝしく(忌々)思ふに泪もつつみあへず出れど

○むくつけく　直案にむさくろしく氣味わるき樣の意也蚕字をムクツケシともツゴメクとも訓るは蛆などのわきてむくめくはきたなくきみわるきよりいふなるへしむく犬むくたけなともきたなけなるより云歟源氏東屋にいとむくつけくげすく／＼しき女と思して云々大和物語（一女を爭ひて共に死せし男旅人に刀をかりて戰し條）御德に日頃ねたき物うち殺し侍ぬ(中略)此事はしめより語るいとむく

つけしとおもへとめつらしき事なれはとひきくほとに夜もあけにけれは人もなし源氏夕顔巻〈夕かほのうせ給ひし所〉此人を空しくしなしてんことのいみしくおほさるゝにおほかたのむくむくしさたとへんかたなしとあるも同語なり　うつほ吹上（忠こそあさりあて宮にった参らする所）ぬあて宮に奉り給へはあなむくつけなてうさる物をかもておはするとて引やりてすて給ふ

（泣ぬふりして）つれなくもてなして男君はおはせてとつれ〳〵なりつるにたのもしの御事やさてもおさゝのゆるし聞え給へるか北方のゝ給かさ（典薬助か）いへばおさゞの君もめぐみ給あが北の方はましてといさうれしと思へり

○つれなくもてなして　つれなしつくるを云委しく（下の三十七丁）に見えたり　○つれ〳〵成つるに　源氏帚木の巻につれ〳〵と降りくらしてしめやかなる宵の雨に殿上もをさ〳〵人すくなに云々又須磨の巻につれ〳〵なるまゝにいろ〳〵の紙をつき手習したまふなと見え眞名伊勢物語に徒然をよめり新撰字鏡には儚を訓て獨畢也と注せりたゝ一人さひしくあるをいふこゝもさる意也寂寞をよめるは何によれるにか

あこき萬の事よりもいかさまにせむ（てんやくのすけかこさた）いかでかくとだ（落に）に告け奉らむと思ふにしづ心なくてさていつかとい（典薬のすけか落）へ（すみ初んは）ば今宵ぞかしといふ

○かくとたに　拾遺戀女にはしめてつかはしける　藤原實方朝臣「かくとたにえやは伊吹のさしもくささしもしらしなもゆる思ひを

（あこきか詞）今日は御忌日なる物を何かうけがひあらむと云へば（典少将）されど人もたまへるなればあやふしとく南といひて（まぬらする間にな）立ぬあこき侘しき事限りなし北方殿の御臺参る程に（てんやくか事）はひより（あこき落のこめられ給ふへやに）て打たゝくたそといへはかう〳〵の事侍る（用意）なりさるよういせさせ給ひて御忌日となむ申つゝい（あこき）みしくこそ侍れ（七丁のオ可ㇾ移ニ于此ニ）如何せさせ給はむとも云やらで立ぬ（かなし）女君闇にむねつぶれて（もの〳〵かすにもなり）更にせんかたなしさき〳〵お（さ）もひつる事物にもあらす（てんやくか事わびしきにつけ）おぼえてたゞ今死なむと思（かくるへきかたはなしいかて）ひ入にむねいたければおさへてうつぶしふして泣事いみし

○うつふしふして　直靨云うつふしは空伏（ウツホフシ）の義に

て膝と肱とを突て伏す時は胸腹の間はうつほになる故いふか宇治拾遺七今は昔父母もなく主もなく妻も子もなくて唯一人ある青侍ありけりすへきかたもなかりけれは観音たすけ給へとて長谷に参りてうつふしふして申けるやう此世にかくてあるへくはやかて此御前にくひじにヽしなむもし又おのつからなる便もあるへくはそのよしの夢を見さらんかきりは出なましとてうつふしふしたりけるを

火などヽもしてけれはおとゞはゆふまどひし給ひて臥給ひぬ

○ゆふまどひ　光房云初夜惑也ヒイの約ヒ也老人のねふたさに急てぬるをいふ新六（ひとりね）「待ち侘てさわく心の夕まとひぬるとはなくてねられもやせん　此歌も戀人を待ち侘てさわきまとふ心をやかて夕まとひにいひよせて老人のする夕まとひにはあらねと待わひて心のさわきまとふまヽになすわさもえせすしてとくいねてぬるとしもなくねられもやせんとはかなきさまによめり源氏末摘花に老人なとはさうしに入ふして夕まとひしたる程也云々と見えたり

北方は彼てむやくのすけの事により起まして部屋の戸引明て見給ふにうつふしふしていみじうなきいといたくやむなどかくはのたまふぞといへばむねのいたく侍ればと息の下にいふあないとほし物のつみかともてむ薬のぬしくすし也

○てむやくのぬしくすし也　殊さらにかく云はほこる詞成へし

かいさぐらせ給へといふにたぐひなくにくし

○かいさくらせ給へ　神代紀に探成をカキサグリナスと訓り源氏夕顔巻（夕顔のうせ給ひし所）「とよなとかうはとてかいさくり給ふにいきもせす

何か風にこそ侍らめくすしいるべき心ちし侍らすといへはさりともむねはいとおそろしき物をといふ程にてむやく参れはこちいませと呼給へはふとよりたり愛にむねやみ給めり物のつみかともかいさくり薬なども参らせ給へとてやがてあづけて立ぬればくすし也御病ひまうとやめ奉りてこよひよりいかうにあひ頼み給へとてむねかいさぐりて手ふるれば女君お

とろ〳〵しう(こわくおそろしき也)なきまさへごもせいすべき人もなし
〇いかうに・うつほ(さかの院中)女子をさへもの
しく侍るをわらはへはいかに宮仕へもつかうまつ
らせんと思ひ給へれは親はたよりなく侍れはいか
てかはとてなん大將いつこにいかにせんとおもほ
すせんやうをの給へかのおは君に預け奉りていか
うにこのことをうしろみ奉らむ云々源氏夕霧巻に
修法をなん故太夫の宣ひ付たりしかはいかうにさ
るへき事今に承る所なれと云々又此物語の四にも
四の君なん思ふ人すくなき様に物し給ふなるをお
のれいかうにしりきこえむ云々　源氏玉葛巻(大
夫監か詞)に故少貳のいとなさけひきら〳〵敷物
し給ひしをいかてかあひかたらひ申さんと思ひ給
へしかともさる心さしを見えきこえす侍し程にい
とかなしくてかくれたまひにしをそのかはりにい
かうにつかうまつるへくなん〇おどろ〳〵しう
源氏箒木巻に目に見えぬ鬼の顔なとおどろ〳〵し
くつくしてつくりたるものは心にまかせて一きは
人のめをおどろかして云々枕草紙にかきくらし雨
ふりて神もおどろ〳〵しうなりたれはものも覺え

すた丶おろしにおろす
こしらへ(いひすかすを云)かねてせめて侘しきま丶に思ひてなく〳〵(くるしさに何)
いさ(落の詞)たのもしきこそなれどた丶今さらに物なむおほ(典藥をやうには何とて也)
えぬ(のわきまへなき也)といらふれはさやなとてかおぼすらむ今は御か
はりに翁こそや(病)まめとてか(落な)丶へてをる
〇こしらへかねて　源氏若紫巻に人々こしらへわ
ひて云々と有ていひすかす意也日本紀に招慰をヲ
キコシラヘ慰喩をヤスメコシラへと訓し新撰字鏡
に誘或は誘を訓り後拾遺化城喩品　赤染右衛門(の家集)(さきのみちにやなほ)
「こしらへて(まさはまし家)かりの宿りにやすめすはまことの道を
いかてしらまし　とよめるも方便もていひさとす
ことなり
北方はてむやく有と思ひ頼みて例の様にじやう(部屋の)な
どもさしかためでねにけりあこきてむ藥や入ぬらむ
とまどひ來て見るにやり戸ほそめに明たりむねつぶ(又下二十面)
る丶物から(ものながら也)うれしくて引明て入たれはた丶む藥か丶ま
りを(五丁ォに移すへし)
〇むねつぶる丶　竹取物語に是をかくや姫きゝて

我は此みこにまけぬへしとむねつふれて思ひけり源氏篝木巻におほすことのみ心にかゝり給へれはまつむねつふれて云々此外にも多く見ゆ又清少納言松島の記に心きもゝつふるゝやうに云々狭衣にはむね心をつふしつゝこゝらいひ萬葉に我胸は破れてくたけてとこゝろもなしともよみて今俗にはつと思ふなといふかことし〇かゝまりをる　かゝみ居る也末利反美なり屈字をかく

（あこきか心）入てけりと人心ちもなくて今日は御忌日と申つる物を心うくも入給ひにけるかなと云へは何（典薬）かちか（君のあたり）〳〵しくあらはこそあらめ御むねまじ（咒）なへとう（北の方）へのあづけ奉り給ひつる也とてまだ装束もとかで居る（落）君はいといたうなやみ給ふにそへて泣給ふ事限なし

〇ましなへと　和訓栞に云日本紀に厭をマシナヒとよめり壓と同しおす也又禁厭をマシともマシナヒヤムルともよみたり日本紀に禁咒師見えたり韓退之詩に詛師毒口牙といへり蒼頡篇に伏合人心曰厭と見えたり壓勝も禁術も同し素問に移精變氣論有直農案に士清いまたましなふの訓義に及はす餘り意をもてこれを思ふにましなふは元來ましものと云より出たる詞にて中臣祓延喜式新撰字鏡等に蠱字をよみ日本紀には毒字を訓り聖武紀に所謂合藥造毒萬法作怪と云是なり病源候論に蠱是合聚毒蛇之類以器皿盛之任其自相食噉餘留一存者爲蠱欧食内行之人中之者心腹懊痛煩毒不可忍といひ通鑑集覽に巫蠱女能事無形以舞降神曰巫執左道以亂政惑人曰蠱といへるなとによりて考るにましものはまとはしものと云ことにて巫覡等か咒咀を行ひて人心をまとはすも毒藥もて人の心を惱亂せしむるも同しきよりましものといひ夫より轉して病災なとある時咒文符簡なともて禳ふわさをも病災をまとはしはらふ心よりましなふとはいひけんさてなふはなひともなへとも活く詞にていさなふあかなふまひなふなとのなふと同しく其事を行ふ上よりいへり

あこきとりわきてなごしも物をかくいみじく（おそろしき也）おぼしてかゝればいかゝ成へきにかと思ひて心ぼそくかなし（あこきか詞）御やき石あてさせ給はむやと聞ゆれは（落）よかなりとの給へばあこきてんやくのぬしをこそ今は頼み聞え

め

○やきいし　本草和名温石（今焼火熨人腰脚者也）略本草和名云温石方言要日云温石（今按本文未詳但俗用之温音如運）成爲温器者也　大鏡時平公下（保光傳條）この保光大將八條にすみ給へは内に参り給ふほとの最はるかなるに如何おほしめしけん冬はもちひの最おほきなるをは一つちいさきを二つやきて焼石のやうに御身にあてゝもち給へりけるに云々　十訓抄盛衰記平家物語等にみゆ

御やきいし求めて奉り給へ皆人もねしづまりてあこきか云むに（初）（温石もとめんと）よもとらせじ是にてこそ心ざしの有なし見えはじめ給はめといへばてむやく打笑ひてさなゝりのこりの齢すくなくとも一筋にたのみ給はゝつかうまつらむ岩山をもと思へばまして焼石は最易し思ひにさしやきてむ（火さしくべて也）といへば同しくはとくとせめられてそいかゝ（典が詞）はせむ（それにては餘り打こしたるやうなれさゝ也）とはいりたちたる様なれと最やすし心さし情を見えむとて石もとめむとて立ぬあこき此年頃いみしく侍りつる事の中に（よからぬことの）侘しくもいみしく（ことさらに）も侍るかないかゞせさせ給はむずる何のつみにてかかゝるめを見給ふ覧さても（北の方のことを云未来の事などを云か）何の身にならむとてかかゝるわざをし給ふらむといへば君（落）さらになむ物も覚えぬ

○いはやま　いはほの誤にや念力通岩といへる諺によりて云にや直云

いえゝで死なぬ事の心うきと心ちはいとあし此翁の近付來るなむいとわひしき其やり戸かけこめてないれそとの給へは（あこき）さてははらたてなむ猶なこめ（やはらかにすかすな）（云和の字をよめり）させおはしませ頼むかた（うしろみ）のあらはこそこよひは立籠て明日は其人にいはむとも思ひ侍らぬ少將の君（落の）歎き侘給へどもいかでかはたゝ今あたりにたにおはしよらむ事かたくなむ御心（落の）のうちにも佛神をねむぜさせ給へといへば君（落）げに頼むかたなくはらから（姉妹）とてもあひ思ひたちたる事なくはしたなげにのみあれは其人と云へ（たのむべき人）きこと（さては）もおもほえすいみしう悲しくてたゞ頼むことゝては涙とあこきとそ心にかなひたるものにて更に爰に今宵はあれは誰々（落もあこきも）も泣程におきな焼石つゝみてもて來るを女君侘て手つから取心ちおそろしう侘し

くおほゆ翁装束ときてふしてかき寄(かゝくり寄也)れは女君あか君(典薬を云)かくなし給ひそいみしくいたき程はおきておさへたるなむ少しやすまる心ちする後をおぼさばこよひは(かくて死なんする程なる)たゞにふし給へれといふもいとわひしくていたうやむあこきこよひ計にてこそあれ御忌日なれは猶たゞふし給へれといへばさも有事とや思ひけむさらば是に寄かゝり給へとて前によりふせはわひ／＼おしかゝりて泣居たりあこきもいとにくけれどうれしき翁のとくに御あたりにこよひ参りたる事と思ふ程なくねいりてくつちふせり

○翁さうそくときて　七葉の面にさうそくをさかてをりとありし首尾也○あか君　垂仁紀脱レ甲而逃知ニ不免一即頭曰我君と見え清寧紀敏達紀にもまたこの語有て憐を乞ふの辭なりといへり○くつちふせり　大秦牛祭々文(傳云傳教大師作)鼻たりおこり心地くつちさはり傳死病　砂石集三の上或里に癲狂の病ある男ありけり此病は火の邊水の邊人の多ある中に發る心うき病也俗はクッチと云り濱本　直案くつちくたち同語か古今に「笹のはにふりつむ雪のうれをおもみもとくたち行わか盛かも　契沖云顯昭注にくたつとは斜と云字をよめる也なのめになる也萬葉には降と云字をかけり是も傾く意也笹のうれの重く成はもとのかたふくをわか齡のかたふくをいへりといへりされはこゝもかたふきふせる意なるへし

女君少将の君のけはひ思ひ合せられていとゞあひな(典薬に)くにくしあこきいかにして出なむ(典か)のはかりことをすおきなの打驚く(目さめんとする也)ほとにはいとゞいたくくるしがりやみ給へば(典か詞)あないとほし翁の侍る夜しもかうやみ給ふがわひしきさては(あこき)又ねいりぬ間ぬれはいとうれしと誰々(典もあこきも)も思ふ翁をつき驚かしていとあかくなりぬ出給ひね(こゝにすみ給ふことを)しはしは人にしらせじなかく思ひ給はゝのたまはむ事(いはんことに)にしたがひ給へといへばさかし(典)我もさ思ふとてねふたかりければめくそとぢあひたる拂ひあけて腰はうちかゝまり(屈)て出ていぬ

○めくそ　䁾和名抄(眼目類)唐韻云䁾(充支反和名米久曽)目汁凝也

新撰字鏡二(…萬久曽)目汁凝也又[illegible](…久曽)又云[illegible]治本[illegible]名之反目[illegible]

あこきやり戸引立て爰に有けりと見え奉らじと思ひて急きてざうしに往たれば帯刀か文あり見ればからうじて参りたりしかごみかごさして更に入ざりしかは侘しくてなむ歸りまうできにしやおろかにそおほすらむ少將の君のおほしたる氣色を見侍るに心のいとまなくなむこれは御ふみ也いかてよさりだに參らむといへり御文奉らむよき隙也といそきいきて見れは北方部屋さし給あな口をしと思ひて歸る道にてむ藥行合て ふみくれたるを取てはしり歸りて北方に爰にてむやくのぬしのふみ有いかて奉らむといへは北方打ゑみて心ちとひ給へるかいとよしまめやかにあひ思ひたるそよきとてさしかためし戸口を引明たれはいさをかしうて少將の君のふみとりそへてさし入たり少將の君の文見給へはいかゝ日の重なるまゝにいみしくなむ（うたにつゝけて見る）「君か上思ひやり侍なけくとはぬるゝ袖こそまつは知りけれ　いかにすへき世にかあらむと有女君最哀と思ふ事限り

なしおほしやるたにさあむ也「歎くことひまなくおつるなみた河うき身なからもあるそかなしき　と書て翁のふみ見む事のゆゝしうてあこきにかへり事をよと書付てさし出したれはふとゝりて立ぬあこき翁の文を見ればいとも〳〵いとほし〳〵よ一夜なやませたまひける事をなむ翁の物のあしき心ちし侍るあか君〳〵よさりだにうれしきめ見せ給へ御あたりにだに近く侍らはゝ命のひて心ちも若く成侍ぬへし

○なみた河　書言故事（死喪類）淚河の下に弔喪曰緬惟淚河東注詩話人間顧長康哭宣帝之狀如何曰鼻如廣漠風眼如懸河決聲如震雷破山淚如傾河注海杜甫用此云猶有淚成河經天復東注梅堯俞詩獨護慈母喪淚與河水流河水終有竭淚痕常在眸と見えてなみた河とうたによめるは杜詩なとより出しなるへし歌枕なとの書に伊勢の名所とせしはいかにとそ覺ゆる

あか君〳〵「老木そと人は見るともいかて猶花咲いてゝきみにみなれむ

○老木そと　古今雜上女ともの見てわらひけれは

よめるけんけい法し「かたちこそ深山かくれの朽
木なれ心は花になさはなさなん
なほ〳〵なにくませ給ひそさ云り安濃いさあひなし
さ思ひ〳〵書いさなやましくせさせ給ひて御みづか
らはえきこえ給はす「かれはてゝ今は限りの老木に
はいつかうれしき花は咲へき　さ書て腹立やせ
むさおそろしけれごおほゆるまゝにさらせたれは翁
うちゑみて取つたちはきが返事かくよべはこゝにも
詮なき物語なさなしてたにもさ也　互の心を
いふかたなき事を聞えてだに慰めばやさ思ひ聞えし
にかひなくてなむ御ふみからうじてなむいさいみし
きこさとも出きてたい面になむさてやりつ北方はて
むやくにあつけつさ思ひて有しやうにもやり戸さし
かためさせねは安濃うれしさ思ふ暮行まゝにいかゝ
せむさ思ひわふうちざしにさし籠らむさ思ひて萬に
あくましきやうにかまふ翁あこきにいかにぞ御心ち
はさいへばいかにおはさむずらむさわか物かはに打
歎くをあいきやうなしさ見る
○内さし　古事記傳八巻開天石屋戸而刺許母理坐也

傳に云刺は閉たる戸に物を刺て固むるを云萬葉十二
（三十二丁）に門立而戸毛閉而有乎また門立而戸者
雖闔これにても都留さ作須さの差あることを知へ
し萬葉廿（三十一丁）に久留倍久枳作之加多米等之（久留
は戸の樞なり久枳は釘なり加多米等之は固めてし
なり）又十六（十五丁）に橫爾鏁刺藏而師（和名抄に
鏁をは藏乃賀岐さあれ共加岐には非す今ジヤウさ
云物なり故今本に邪字さ訓を付たりされさ師は古
の廿巻の歌に依て久岐さ訓れき信に古は鏁でも然
ぞ云つらむ）書紀清寧巻に鏁二閉外門一云々和名抄に
扃度佐之（此も戸を刺固むる物なるゆゑの名なり）
あすのりむしの祭に三の君に見せ奉らむ藏人の少將
のわたり給ふをさ北方はねきりをるをあこき聞てい
とうれしきひま有べかめりさむねさわきて思ふ
○ねきりをる　或云ねきりはねかふさいへる詞に
や　直案に北方向はねきり居るさ書へし　萬葉九
見二武藏小埼沼鴨一作歌に前玉之小埼乃沼爾鴨曾翼
霧己尾爾零置流霜乎掃等爾有斯さ見えてはねきるは
羽を振ふ也今も鳥の飛ひ立んさするをはねきる
なさゝいふにやさらはこゝも飛立はかり思ひをる

と云心にてかくはいへるなるへしかにかくに願ふなと云詞とはうけかたき事になん○むねさわき下にむねうちさわきてうれしきことかきりなし今夜たにのかれ(遁)給ひなはと思ひて(たはかりてぬすみ出させむものそと)やり戸のしりさすへき物もとめてわきにはさみてありく
○のかれ給ひなは　谷川士清曰神代紀に脱免をノカルと訓み常に遯をよめり賀留反具なりにぐといへり直ふ意通へりのからふ共云良布反留なりといへり直案退離(ノキカル)の義なるへしにくといふに意かよへりといへるはあらじ
おほとなふら(樋閭樋也)参れなと云まきれにはひより(這寄)てやり戸のかたのひに添てえさくら(探)すまじくさしてさりぬ
○おほとなふら　契沖云おほとのあふらを乃阿切奈なれはつゝめてかく云はよしのにあると云へきを吉野なるなといふに同し燈は油にてともす物なれはあふらと云和名に燈盞を阿布良都岐と訓り萬葉第十八には燈を阿夫良火といへり○さくらすまじく　直應按に探字を塡たるはよろしからすく文字清くよむへし鑿をサクスルとよめるか如く物もて下さまより上へこちあくるをさくると云またしやくるといふも同語にして逆繰の義なるへし繰は穴なとをくり明るの繰なりさくりもよゝとなくといへるも下よりむなさきへせき來るよりしていへは又同し義なりと知るへし
内なる君はいかにせむと思ひて大きなるすきからひつの有けるをあと(後)をかき(舁)てやり戸口に置てとかう(左右)しておさへわなゝき(戰慄)居て是明させ給ふなと願をたつ
○すきからひつ　或云透箱の類にて透からひつにや　直案に大なるすき何とも解しえすから櫃は窓櫃を云成へしさらすは手弱女の手に容易にあとを舁あくへきにあらす或はもとすきの唐櫃と有て殊にかろき木品なれは云歟○わなゝき居て　わなゝくと云詞古事記に見ゆ新撰字鏡に悸をワナヽクと訓りをのゝくと通せり日本紀に戰悼をフルトワナナクと訓り體のふるへてかた〳〵するを云へり
北のかたかき(鍵)をてむやくにとらせて人のねしづまりたらむ時に入給へとて寝(北の方)給ひぬみな人々しつまりぬるをりにてむやくかきをとりてきてさしたる戸あくいかならむとむねつふるじやう(鑰)明てやり戸明るにいとかたけれは立居ひろゝく程にあこききゝて少し遥

隱れて見たる（氐河反多）にさくれさしたる程をさくりあてゝす
○ひろゝく　直案俗言に邪魔するといふことをの
のしりて邪魔ひろくといふ是か但し下に立るひろ
きてと有はこゝもひゝろくにて箒木に有ひゝらき
と同語かひゝらきはほこりかに引ひらく心なれは
こゝも立つ居つふみはたかるといふにや
あやし〳〵戸うちにさしたるかおきなをくるしめ給（中納言も北の方も）
ふにこそ有けれ人も皆ゆるし給へる身なれはえのか
れ給はし物をといへと誰かはいらへむ打たゝきおし（さしつめて也）
引と内外につめてければゆるきたにせす今や〳〵と
夜更るまて板の上に居て冬夜なれは身もすくむ心ち
す其頃はらそこなひたるうへに衣いとうすし（腹損）
○板の上　伊物にうちなきてあはらなる板敷に月
のかたふくまてふせりて云々○すくむ心ちす　直
案にうすくまるの上略末留反牟也今うつくまると
書は誤也古事記に宇須受麻里と見えたり
○はらそこなひて　續世繼いのるしるしの巻にと
し老たる女房のあれは御はらのそこなはせ給へる
を云々

板のひえ（冷）のほりて腹ごぼ〳〵となれは翁あなさがな
ひえこそ過にけれといふにしひて（つよく也）ごぼめきてびちび
ちと聞ゆるはいかになるにかあらむとうたかはし
○ごぼ〳〵　直案ごぼ〳〵はくわら〳〵と鳴事也
夕顔にこほ〳〵となる神よりもおどろ〳〵しうふ
みとゝろかすからうすの音もまくらかみとおほす
云々枕草紙ににくき物の中に又やり戸なとあらく
明るも最苦し少しもたくるやうにて明るはなりや
はするあしうあくれはさうしなともたほめかしこ
ほめくこそしるけれ云々○あなさがな　日本紀に
惡の字不祥の字をサカナシとよめりこゝは萬葉に
恐の字をよめるかよく允れり
かいさぐりて出やするとてしりをかゝへてまどひ出（うろたえるさ）
る心ちにじやうをばついさしてかぎをはとりていぬ
あこきかきを證（アカス）す成ぬるよとあひなくにくゝ思へど
不開成ぬるを限りなく嬉しくてやり戸のもとにより（あこきか詞）
てひりかけしていぬればよもまうでこじおほとのご
もりねさうしにたちはきまうて來れるを君の御かへ
り事も聞え侍らむといひかけてしもに下ぬたちはき

などいままではおりたまはぬぞ世中いかゞはありとも
まだ出し奉らずやいみしくこそおほつかなけれ君の
おほし歎く事いみしくなむ夜なさみそかにぬすみ出
奉りぬへしや

○みそか　ひそかに同しみとひと音通へり眞名伊
勢物語に潜字を塡たりひそかは即ひそやかの中略
にしてなほ委しくはひそまりやかと云へき詞也や
かは賑やか花やか約やか艶やかなとのやかにて形
容する詞也其やかのやを略ける也

其事あなひしてとの給はせつるといへばさらにいさ
こそいみじき日に一度なむ御臺參りにあけ給ふかく
（こゝろかまへするやうは也）てかまふるやうは北方の御伯父にていみじき翁のあ
るになむあはせ奉らむとてこよひもへやに入とてか
きをとらせ給へれど内外にしか〳〵かためたればた
ち居ひろぎて開つるにひえてかう〳〵していぬ君は
此事を聞給ひしより御胸をなんいみしくやみたまひ
にしと泣つゝいふたちはきいみしき事に合てひり
かけの程えねむせてわらふいつしかぬすみ出奉りて
此北の方のたうせむとなむ

○たうせん　枕草子十に是かたうは必せんすらん
狹衣一下たうには君なしとてつむなるへし
東鑑廿五波多五郎義重先登進之處矢石中ニ右目ニ心
神雖違亂則射答矢同卅八僅逍ニ時許ニ發レ矢爰敵軍
出逢ニ馬場ニ射答矢とあるによれは答の意也又當の
字を塡るも謬なきにあらす　太平記十六兒島三郎
熊山擧旗事の條）云昔鎌倉の權五郎景政は左の眼
を射拔れ三日三夜迄其矢を拔かて當の矢を射たり
とこそ云傳へたれ　隆信集物名とのうら「つらし
とて我さへつらくあたるまに人のうらみも殘しつ
るかな　宇治拾遺五（家綱行綱をあさむきたる所）
になか〳〵ゆゝしきけうにて有けるとかやさきに
行綱にはかられたるあたりとそいひけるこ有今も
あてつけるなと常に云詞也此うち前の説たしかな
るへく覺ゆされこ答こ定んには必たふのかななり
君はのたまふといへは明日の祭見に出給ひぬへかめ
り其隙におはしませといへはたちはきいとうれしき
隙にもあなるかないつしかよもあけなむと心もとな

もなくと云に同
くいひあかす翁ははかまにいとおほくしかけてけれ
はけきうの心ちもわすれて先とかくかれあらひし程（糞をあらひし也）
にうつふしにけり明ぬれは帯刀いそき參りぬ少將い（少將殿へ）
かゝ云つるとの給へはしか〳〵なむあこきか云しと
申にて（少將）むやくのすけのことをあさましねたましけに（實）（今まて住給へ）
いかに侘しからむと思ひやるもいと哀なり爰には（落る家）し
はし住じ二條の殿に住むいきて格子あけさせよ清め（掃除）
せよとてたちはきをつかはしつ

〇二條殿　二條の殿に引移り給へるは落君をぬす
み出んの用意なるへし

むねうちさわきてうれしき事限りなしあこき人しれ
す心ちさわきてせむやう（爲様）をかまへ（心かまへしありく也）ありく（北の方祭見にて）午の時計に
車二つ三四の君われやなとのり（北方）たまひて出給ふさわ
きに合せて北方てむやくがもとにかぎ（鑰）こひにやりて
あやふし（危）

〇三四の君われや　直按上の文にりんしのまつり
に三の君にみせ奉らむ藏人の少將のわたり給ふを
と北の方はねきりをる云々と有こゝの四の字衍な
る事知らる　三の君やわれやといふへきを省ける
文法也　榮花物語花山巻になつのよもはかなく明
て中納言や惟成の辨なとくわさんにたつね參りに
けり云々

我なき程に人もぞあく（開）るとてかぎもちてのり（乘）給ひぬ
ることをいみしくにくしとあこき思ふおとど（中納言）もむこ（婿藏人）
（少將を祭の舞人に）出したてゝゆかしかりて出給ひぬ皆のゝしりてざこ（帯刀方へ）
（俗に云きゃめく也）としていで給ふすなはちあこきつげにはしらせやり
たれは少將こゝちまとひて例のゝり給ふ車にはあら
ぬにくちばの下すだれかけてをのこども多くておは
しぬ帯刀馬にて先たちておこせ給へり中納言殿には
（藏人少將）むこの御供おとゝ（殿と北の方との也）北方の御供人三かたにをのこども
わかち參りて人もなしみかどにたちはきかくれより
いりて御くるまあり（よせ）いづくにか寄（よせ）んといへはたゞ此
北面に寄よと云引入てよするをからうじて男一人出
來てなぞのくるま（くるしきものには）ぞ皆出給ひぬる所にはとゝかむ（よせ）れ
はあらすごたち（止）の參り給ふぞといひてたゞ寄（曹司）によす
（御）ごたちのとまりけるもみなしもに下りて人もなき程（折か）

ち
なりあこき早うおり（車より）給へといへば少將おりはしり入
たまふ部やにはじやうさしたり是にぞこもり（こめら給ふと）けるこ
見るにむねつぶれていみじはひよりてじやうひねり（捻の字に）
見給ふに（てれちりてみる事也）更にうごかねば帯刀をよび入給ひてうちだ
てを二人（少將帯刀）して打はなちてやり戸をひきはなちつれは
たちはきはいてぬ

〇うちたて　即ほこたち也　和名抄（門戸具）爾雅注云
棖（音唐和保古多知 辨色立成云戸類）門兩旁木也〇たちはきはいてぬ
直按門外にまたせ置きつる男ともに心せさせはや
とて先出しなるへし

（落）いともらうたげにて居たるを哀にてかきいたきて車
にのり給ひぬ安濃ものれとの給ふに彼てむやくが
（落に）ちか〳〵しくや有けむと北の方思ひ給はむねたうい
みじうて彼（典か）おこせたりし文ふたゝびなからおしまき
てふと見つく（見付安くして）へく置て御くしの箱引さげてのりぬれ
はをかしけにてとぶやうにしていで給ひぬ誰も〳〵
いとうれし門たに引出けれはをのこ共いと多くて二
條殿におはしぬ人（あたし人）もなければいと心やすしとておろ
し奉り給ひてふし給ひぬ日頃のことゝもかたみに聞
え給ひて泣み笑みし給ふかのひりかけのことをそい
みしくわらひ給ひけるふかうなりける御けさう（懸想）人（さても不覺なる好色人かなと也）
かな北方いかに淺ましと思ひ給はんとうちとけてい
ひつゝふし給へり

〇ふかう成ける　直按ふかうの假名によらは不覺
也ふようの假名によらは不用也されと今はふかう
によるへし

帯刀あこきとふして今は思ふこともなきよしをいふ
暮ぬれは御たい參りなとしてたちはきあるしだちて（主人ぶりて也）
しありく彼殿には物見て歸り給て

〇歸り給ひての下古寫本秋成本ともに御車よりお
り給ふまゝに見給へはの數字あり從ふへし

部屋の戸打たふしてうちたても打ちらしけれは誰も
たれもおとゝろきまとひて見れはへやには人もなし
いと淺ましくこはいかにしつるそとさわきみちての
ゝしる此家にはむけに人はなかりつるかかくぬる所
まて入立てうちわり引はなちつらむをとがめさりつ
らむはと腹立て誰かとまりたりつらむ（留守にのこりしを云）と尋ねのゝし
るに北方いはむかたなき心ちしてねたくいみしき事

限りなし

○むけに　源氏箒木巻にせうそこなどもせて久しく侍りしにむけに思ひしほれて心ほそかりければ云々大和物語むけにさて過し奉りてむやとてかへらせ給ふなど見えて一向にねかうなど云意に聞ゆ歌によみしは拾遺物名けにこしよみ人不知「わすれにし人の更にも戀しきかむけにこしとは思ふものから　此歌を定僻案抄にむけといふ詞うたによまねど隠題のならひ見くるしき事どもあれは只の歌にはよむへからすとの給ひつれど枕草子十二にちかへ君とほつあふみの神かけてむけにはまなのはしみざりきやといへるも有

あこきを尋ねもとむれどいつちにかあらむ落くほをあけて見給へは有と見し几帳屏風ひとつもなし北方あこきといふぬす人の（斷）かく人もなき折を見付てしたる也

○あこきといふぬす人　竹取物語かくや姫てふ大ぬす人のやつか人をころさんとてする也　枕草子四十三段（清少納言をほめて）いみしきぬす人かな（卽道雅）やかておひうたむと思ひし物をつかひよしとの給ひてかくつひにまけぬる事よ心きもなくあひ思ひ奉らさりし物をしひてつかひ給ひて（斯）と三の君（三の君の）をいみしくの給ふ

○おひうたんと　伊勢物語（四十段）假におや此女をおひうつ云々○まけぬる事　直案秋成本柱の字を允る事いかゝ輸の字にて勝負の負の心なるへしおとゞとまりたりけるをのこ一人尋ねいでゝとひ給へは更にしり侍らすたゞいときよげなる（相）あしろ車（殿の御車）の下すたれかけたるが出させ給ひしすなはち入まうで來てふとゐて（將）まかりにしと申すたゞ夫にこそあめれ（然ろへしさ也）女はえさは（左樣には）うちわりて出じをのこのしたるなめり

○あしろ車　新野問答（靑絲毛車條下）に稱網代車者懸ニ遮篠ニ也糸毛代ニ遮篠ニ以レ糸張レ之貞信公以竹代レ之藤氏皇后用レ之

何計の物なればかくわが家をあかひる（白晝）に入たちてかくして出ぬらむとねたがり（婿）まどひ給へとかひなし北方此置たる文を見給てまだねざりけり（典やくか落さ）と思ふにねたさまさりててむやくを呼すゑてかう〳〵してにげにけりぬしにあづけしかひもなくかくにかし給へる近

々しくは物し給はざりけるよとの給ひておきたるそ（さてしかおもはゞ）
ろゝはこのふみどもを見ればといへはてんやくかいらへこ
（理）ことわりなき仰也や
○ことわり　谷川士清云萬葉集に許等和理と見ゆ
日本紀に禮字義字理字をよめり言割の義也處分裁
斷等の字をよむも義通へりといへりこゝなるはす
ぢなきことを仰らるゝ哉といふ意なり無理なる事
と云義なり
（落の）そのむねをやみ給ひしよはいみしうまどひてみあた（側）
りにもよせ給はすあこきもつとそひて御忌日也今宵
すぐしてと（徐）さうしみ（正身）もの給ひていみしくまとひ給ひ
しかはやをらたゞよりふしにき後の夜せめおとさむ（開）
と思ひてまうて來てあくるにうちざしにさして更に
あかぬを板の上に夜中迄立居戸をあけむとし侍りし
程に風引て腹のこほ〳〵と申しを一二度はきゝすぐ
して猶もしうねくあけむとし侍りし程にみだれがは（ひりかけ）
しきことのいでまうできにしか（包）は物もおほえで先
まかり出てしつゝ（篋）みたりし物をあらひし程に夜は明
にけり

○風引く　源氏明石巻にこのもかのものしはふる
ひ人どもゝすゝろはしくて濱風を引ありく云々細
流には俗にいへる風を引なりと遊はしたれと空穗
藏開上一に女御のきみかんのおとゝ風引給ひてん
とてさわきふせ奉り給ひつと有はなほさとひ言に
はあらさりけり　今昔物語(內記慶滋保胤出家語)
和ら壁の穴より覗けは老たるいぬ一つ向居たる聖
人の立を待なるへし云々此る不淨の物を介食進て
む極めて忝きこと也就中近來亂り風を引て水の如
くなる物仕たれは更に可食樣も无し云々
翁のおこたりならすとのへ申て居たるに（北の方）腹立ちしか
りなからわらはれぬましてほのきくわかき人はしに
かへりわらふ
○しかりなから　いま物語にしかりはらたちて云
々盛衰記十七ユ、シクシカリ音にて讃岐日記によ
そにてはしからせ給へといへは云々宇治拾遺四（民部）
（大輔篤昌か事）しきりにせめけれとしはしは物もいはてゐ
たりけるをしかりての給へ先篤昌かありやうを聞
んといたうせめけれはなと見えたり
（北方の詞）いてやよし〳〵立給ひねいといふかひなくねたしこ（落）

（なは）さ人にこそあつくへかりけれとの給ふにてむやくはら立てわりなき事の給ふ心にはいかて〳〵と思へと老のつたなかりける事はあやまちやすくてふとひりかけらるゝをばいかゝせむ翁なれはこそあけむあけむとはせしかと腹立いひて立ていけはいとゝ人々わらひ死ぬへし

○わりなき　源氏河海に日本紀を引て無別といふ字を出し又無破と出せり契沖云日本紀に無別の言またくなし無破は菅家萬葉に有といはれたり　宣長はあるまじき事を強てする事思ふこと也河海の説さらにかなはすといへり　直按宣長説よろしけれとも言のもとをとかすあきたらぬわさなりこはことわりなきの上略にてあやめもわかすなと云と同しく俗にわけもなき事也といふにあたれり古今に　詠人不知「わりなくもねてもさめても戀しきか心をいつちやらは忘れん　同ふかやふ「心をはわかなき者と思ひぬる見る物からや戀しかるへき後撰集詠人不知「戀はことにわりなき物そなかりける且恨みつゝ猶そ戀しき　皆ことわりなくと云事也無理の字あたるへし○つたなかりける事は　谷川士清云神代紀に怯をよめり常には拙をよめり尤レ傳の義つたへぬ事は怯弱にして拙し或は孱をよむ史記に見ゆといへり直案に尤傳の義とせられしは如何あらんこは二五相通してつとなしにて無レ勉の略言なるへく思はるすへて惰弱なる人は物事勉強する事なく用をなしかたき者也まして年老ては勉強する事かなはす俗に云辛抱甲斐なく成故有の外の不調法もいでくる也故にすへてものうく役にたゝぬ者つたなしとはいへり怯をよむも孱をよむも意は同しかるへし

（三郎）わらはなる子の云やうすへてうへの（北方）あしく〳〵し給へるぞ何しにへやにこめ給ひてかくをこなる物にはあはせむとし給ひしそ

○をこなるもの　谷川士清云源氏物語に人違してはをこならんといへりもと國の名なり　後漢南蠻傳に烏滸人の事委く見えて笑しきこと多かり三代實錄に嗚滸に作り本朝文粹に嗚𤸎に作るは皆誤れり二書ともに散樂に就てをかしきわさを云めり袋草紙に多少有嗚呼氣之人とも書せり尾籠と書は東鑒釋日本紀に出て尾籠を音にてよへり應神天皇の

故事なといへるは大なる造言也東國の人はをつこうといへり今昔物語にをこつきたる者とみゆ今も云詞也

いかにわびしとおほしけむ御むすめともゝおほくまろらも行先侍れはいきあひきあひ聞えふる（詞）ゝこともこそあれいみしきこと（かくあしくし給ひしは）なりやとおよすけい（わさなしけに也）へは北方すやつ（其奴）はいつち行共よく（よき事の）ありなんや今きあふ共我等か子供いかゞせむといらへ給ふ

○すやつ　源氏玉かつらにすやつはらとひとしなみにはし侍らんやとも有其奴と云こと也スとソは通音なり

をのこ（北の方）三人ぞもたまへりける太郎は越前守にて國に（任國に有也）二郎は法師三郎は此わらはなりけるかく云さわげとかひなけれは皆ふしぬ

○さわけとかひなし　原來さやくと同語にして日本紀に風塵又散をサワクとよみ汞平又喧擾をサヤケリと訓り古事記にはサヤクに作る新撰字鏡に誓又躁又嘈囐をよみ萬葉に騷騷をよめり又散和久御民佐和久兒等と見えたり萬葉集に蘆邊なる荻の葉さやき古事記の歌にもたくふすまさやくかしたさよみ後世篠のはのさやく霜夜とよめるなとを見て語意を心得へしさわ〳〵そよ〳〵なとみな同しみたりかはしくかしましきを云

二條殿（少將の御方）には御となふら參りて少將の君ふし給ひてあこきに日頃のこと（すきこし日頃の事也）よく語れこゝ（落）にはさらにの給はすとのたまへはあこき北方の心をありのまゝにいへは君あさましかりける事哉とおほしふし給へり

○御となふら　契冲云おほとのあふらを乃阿切奈なれはつゝめてかくいふはよし野にあるといふへきをよし野なるなといふにおなじ燈は油にてともすものなれはあふらといふ和名に燈盞を阿布良都岐とよめり萬葉第十八には燈を安布良火といへり云々こゝなるはきり燈臺きく燈臺の類なりむすひ燈臺は儀式のとき庭なとにてともすものなりうつほ初秋下にはたゝちにおほとのあふらといへり直人すくなにて（少將の詞）いとあしかめりあこき人もとめよ殿なる人々（爾阿反奈）にも聞えむと思へともゆかしけなしあこきお（今）

まてはわらはにてゐたれは也
たこに成ねいさ心およつけためりさていひ〳〵ふし
おさなしけなるを云
給へり
○おさな　日本紀に壯をよめり眞名伊勢物語に長
字を讀たり大人成の義なるへし袖中抄に引或物語
に紀の國のなくさの濱に貝ひろふあまのめさしの
おさなりせは　さ見ゆ大人名さ云説は受られす
かくうれしくの給はせて明ぬれはいさのさかなる心
ちしてみうまの時までふし給ふひるつかた殿に參り
給ふさて帯刀に近く居たれたゝ今こむさて出給ひぬ
あこきおはのもさへふみやるいそくこさ侍りてなむ
昨日けふ聞えさりつる今日あすの程にきよげならむ
わらはおさなもとめいで給へそこにもよきわらはあ
らは一二人しばし給へあるやうは對面に聞えむあか
らさまにおはせよさいひやりつ
○あからさま　神武紀條忽之間出ニ其不意ニまた雄
略紀嗔猪從ニ草中ー暴出また取急歸レ家また取假歸レ
岡また皇極紀努力々々急須ニ應斬ーなさ見えて本義
はたちまち又はにはかにの意なるか轉してしはし
のほさゝ云意にも用ひ俗にいふちよさなさいふ所
にも用ひたり源氏葵卷にあからさまに立出侍るに
つけてもさ有はしはしか程なり後撰離別よみ人し
らすのはし書にあひしれりける人のあからさまに
ごしの國へまかりけるにねさ心さすさてさ有はに
はかにの意にて本義によくかなへり今こゝなるは
俗に云ちよさ云ふにあたれり又後に白地の字を訓
しは明樣の義にてありのまゝにうち出て明す心に
轉用したるなるへし拾玉三「すみのえのあからさ
まなる小ふねまて哀を見するあさの白浪　さいへ
るは白地の意なるへく聞ゆ
少將の君殿におはしたれは彼中納言さのゝ四の君の
へ少將をむこにさり給んさ云事な
こさ云人出きて物うけたまはる彼中ひさひもの給へ
りき年かへらぬさきにしてむさ思ふやうなむ有御文
聞えてさいみしくせめ侍るさいへは殿の北方さかさ
まにもいふなるかなしひてかういふこさを聞てよか
し人の爲にはしたなきやうなりいまゝてひさりある
見苦しさの給へは少將さ思ひ給はゝ早う取てよかし
○はしたなき　今昔物語に半无さかけり○少將

さ思は丶　直按少將の下よかむなりといふ言の落ちたるか下によかむなりとの給ふといひやりたれは云々又心の內にたはかる事ありてよかむ也といふなりけりと有にてしるへし

ふみは今とくやらむ今様はことにふみかよはしせでもしつ戚とてゐみて立給ひぬ我御（少將）かたにおはして常につかひ給ふてうど（調度）丶もづしなどかしこ（二條殿）にやり給ふ

○づし　書架也厨子と書りからにも書を入るものを書厨といへり朱子文集に一一の銘あり箒木巻にみつしと有是也又御膳所をもいへり所によりて心得へし　○かしこ　彼所也こは有か住かなとのかと同しくみな所と云事なり今俗にどことといふもいづこのいを省きてづをぞに通はしたる也けりこ丶は此所なり

御文（文詞）今のまいかにうしろめたうこそ內に參りてた丶今まかり出侍りなむ「から衣きて見る事のうれしさをつ丶まは袖そほころひぬへき　中々つ丶ましとな（うたにつ丶けて見るへし）む今日の心ちはとあり御かへりこ丶には「うき事を歎きし程にから衣袖はくちにき何（此）につ丶まむ　と

聞え給へるを哀とおほす帶刀心しつらひ（何くれと）つかうまつる事ねむごろなり和泉守のかへり事（あこきかたはのもとへやりし文のかへり事也）おほつかなさに（落の事など）これより昨日聞えたりしかは早うすさましきわさしてにけ給ひにき（中納言の方へ尋れし也）とてつかひをもほとぼと（殆）うたれ（打）ぬへかりけるをからうじてなむにげて來しかばいかならむと思ふ給へ歎きつるにうれしくたいらかに物し給へることと人はいまあないして聞えむ（今日明日の御清氣ならむわらはたこなもとめ出たまへと有答）

○心しつらひ　前案つ文字衍心しつらひと云事あるへくも覺えす

爰に侍らふははか〲しき者なし此守（和泉守）のいとここにて（そこにもよきわらはあらはしはし給へと云し答）こ丶におはするこそさやうに物しつへけれといへり（役にも立つへきものそと也）暮れは君おはしたりかの四の君のことこそしか〲いひつれ我と云て人（外に）もとめてあはせ（婿）むとの給へは女（落）君いとけしからずいなとおほさば（契沖云俗にたさなしふり）（宣長云じんじやうに）おいらかにこそし給はめ

○おいらかに　源氏若菜上になとてかくおいらかにおほしたて給ひけん云々河海抄に人毎に老らかにと心得たるかさにはあらすをひれたるよしをね

ひれたるなといふやう也といへり　契沖云只老らか成へし此物かたりにもあまたある所老らかにてはかなひねひれたるの准へにては叶はぬ所多かるへし竹取物語にかくや姫を戀たる五人の人々に竹取翁出て石躰なとのかたきことをいひけるとき御子たち上達部聞ておいらかにあたりよりたになありきそとやはの給はぬとうんしてみなかへりぬとあり又宇治拾遺物語に元輔か落馬せしことを書る所に殿上人の車多くならへたてゝ物見ける前わたる程においらかにてはわたらて人見給にと思ひて馬をいたくあふりけれは馬くるひて落ぬと有又此あらまきをはをしとおほさはおいらかに取給ひてはあらてといへる所も有於以とかきて於比とかゝす老らかの心を用ゆへし假名を正さぬ故此たくひの迷ひ多しといへり

ほいなくいかにいみしとおほさむとの給ふ少將は北の方にいかてねたきめみせむと思へはなりとの給へは女君是はやわすれたまひねかの君やにくかりしとの給へば少將いと心よわくおはしけり

○ねたきめ　直按妬字なれともネタムにはあらす

俗に云こうはらなめに合はすと云るなり

人のにくきふしおほし溢まじかりけりいと心やすしとの給ひてふし給ひぬ彼中納言殿にはよかなりとなむの給ふと云やりたれはよろこひてまうけしのゝしるにつけては落くほといふものゝあらば打あつけて縫はせましいかによからまし佛これいけらば來るやうにし給へ藏人の少將の借も御そともわろしとていづと入とむつかりてき給はずなどある時は侘しうて物せむ人もかなとてこゝかしこ手をわかちてもとめ給ふよかなりとの給ふ時にとりてむ思ひもそかへるとておこゝ居立にいそき給ふしはすの朔日五日とさためたる程に霜月のつごもりはかりよりいそき給ふ御むこ少將誰をとり給ふぞとゝひければ左大將殿の左近少將とかの給へばいとをかしき君そかしうちかたらひて出入せむにいとよき事哉とゆかしがれは北方はえありてうれしと思ふ

○はえ有て　俗にいふ外聞かよいと云にあたる

彼少將は北方のいとねたくにくゝていかてこれに復

しと思はせむと思ひしみにければ心のうちにおもひ（謀）たばかるやう有てよかなりといふなりけりかくて二條殿には十日計に成ぬれば今參り共十餘人計參りて最今めかしうをかし和泉守のいとこなるかう／＼と聞てまゐらせて兵庫といふあこきはおとなに成て左衛門といふちひさくをかしけなるわかうとにて思ふ事なけにてしありく男君も女君もたくひなくおほしたることわりぞかし

○和泉守　あこきかおはの文に此守のいとこにて案におはすることさやうに物しつへけれと云し人なり　○かう／＼と聞て　直案に此まゐらせての下秋本にはむしくひと云四文字あるは蝕のありて文字わからさりしを傍書にしかいひしを誤て正文にうつし入し成へし

少將の君の母北方二條殿に人すゑたりと聞はまこと（中なこんとののかへり事には也）かさらは中納言殿にはなとよかなりとはの給ふる

○聞はまことか「みちのくのあたちか原のくろ塚（あたし）におにこもれりといふはまことか

（少將のいらへ）少將御消息聞えてと思ふ給へしかと人も（媒に）住給はぬう（われなしはしと）ちにたゞしばしと思ひ給ひてなんといはせ給ひ中納言は中にもさいふと聞え侍りしかはをのこは（世に）ひとりにてやは侍る打かたらひて（あたしかたなも）侍れかしとわらひ給へは北の方いてあなにく人あまたもたるは歎おふなる身もくるしげなりな物し給ひそ

○しはしと思ひ　直云媒か少將をすかして四の君の方へ通し人なと出來ぬ内にたゝしはしと思ひてすみそめ給へといひて中納言殿は中にもさの給ふといひしを少將のかくこちたけにの給ふなめり

○北の方いてあなにく　有此母而有此子孟母三遷豈不宜哉直麻呂云

其（居）するゑ給つらむにおぼしつかはさてやみ給ひね今と（落の事）ふらひ聞えむとて後は（落へ）をかしき物奉り給ひて聞えかはし給ふ此人よげに物し給ふめり御文書給ふ（本妻に）手つきいとをかしかめりたかむすめぞ是にてさたまり給ひね

○さたまり　直云マリ反ミにて三四通して定め也

（我も）をむなごもたれは人の（心たさりせられん妻なともむかへ給は丶人の思んこと中いと心くるしと也）おほさむこともいとほしう心くるしうなむおほゆると少將に申給へはおゝゑみ給（落）ひて是もよもわすれ侍らしまたもゆかしう侍ると申

給へはいかてかけしからすさらに思ひ聞ゆましき御（母北方の詞）心なめりと笑ひ給ふ

○又もゆかし　直按まろもゆかしうと有しをまたこと異り更に又と文字にさへかきしなるへし

（母北の方）御心なむいとよくかたちもうつくしうおはしましけるかくて月立てあさて（明後日）なむさはしり給へるやといとほしくおほしたれはかくなむと申せばよかなり參らむといらへ給ひて心の中にはいとをかしとおほしけるやう北方（母ー）の御をぢにて世中にひがみしれたる物に思はれて治部卿なるがまじろふ事もなき人の太郎兵部少輔と云人有けり

○あさて　明後日の字あすさりての意也　○さはしり給へりや　直云母北の方の御心に少將のさはしり給へりやいなやといとほしく思す也○しれたる　萬葉九長歌云世間之愚人（シレタル）之吾妹兒爾告而語久云々　竹取物語云あれもたゝかはて心ち唯しれにしれて云々本朝文粹卷一源順歌云不足言不足嘲共耻白物之入青雲　左傳成公十八年云周子有兄而無慧不能辨菽麥故不可立杜預注曰不慧蓋世所謂白癡（シレモノ）

少將おはして少輔は愛にかくとの給へは（治部卿の詞）ざうしのかたに侍らむ人わらふとてえ出立もしはへらす（少輔はし）君たち御かへりみ（顧）有てこれ（少輔）まじらひつけさせ給へおのれも（治部卿もむかし）しか侍にき（はしか有しと也）わらひ立られたる程たに過きぬれば宮仕しつきぬる物なりと申せば少將打わらひていかゞ見はなし侍らむとて立てざうしにおはして見給へばまだふしたまへり又しれがましうをかしうてやゝおき給（呼おこす詞）へ聞ゆべきこと有りてなむまうできとの給へは只手合せていとよく／＼のひ／＼（伸）してからうじておき出手あらひ居たり少將なとかかしこにもさらにおはせぬとの給へばせう（少輔）のいらへ人のほゝとわらへははつかしうてといへばうとき（疎）所ならばこそ（内々ならすは也）はづかしからめとて君は妻はなどて今迄もたまへらぬぞやもめぶししてはいとくるしき物をとのたまへばせうのいらへあはする（婚）人のなきうちに獨ふして侍るも更に苦しくも侍らずといへは少將さはくるしからずとてめもまうけでやみたまひなむやせうあはする人や侍るとて待はへる也

○やまめ　榮花物語さま〳〵のよろこひ巻をの丶宮のさねすけの君はさい相になりて猶人に心にくきものに思はれ給へるにやもめにおはすれは云々
鰥夫(ヤムヲ)秋　契沖云和名抄(男女類)云鰥夫釋名云無妻曰鰥古頑反(和名夜無乎)言鰥々然不寐如魚目恒不閉者又云釋名云無夫曰寡(和名夜無女)　玉篇云寡或曰孀(霜反)　或曰嫠婦(嫠狸反)　やむをやむめはむともこ通れはやもをやもめなりかく男女にわかちていへと伊勢物語にもむかし男やもめにてゐてと書てやもをとかける事なし　春海云男女を通はしてやもめといふ事すてに古く有こは語の轉したるなれと今俗のみこ思ふへからす空穂物語藤原君かゝる程に大臣まてになりぬやもめにてえあるまし我ものくはさらん女えんとおほして又帥のぬしやもめにてつきなく覺ゆれは又なそのやもめのましま す所にかやもめ男はすましむるなこ見えたりといへり
少將いてまろあはせ奉らむにいとよき人ありとの給ふにさすがにゐみたるかほのいろは雪の白さにてくびいとながうてかほつきたゝ駒のやうにはなのいらゝきたる事限りなし

○さすかに　しかするがにてしれては有なからと云事なり俗に云ばかげてはゐながら也○いらゝき　源氏橋姫巻さむけにいらゝきたるかほしてもて參る云々注に寒き時鳥肌立つをいふ也詩に鷄皮こ云是也といへり　長明無名抄に首すちをいらゝかし云々とも有こゝは尖りていら〳〵しきを云なるへし
ひくといなゝきて引はなれていぬべきかほしたりむかひゐらむ人はけにわらはてはえあるまじいとうれ(少輔の詞)しきことに侍る也
○むかひゐらん　直案むかひゐる覽とあるへき樣なれとかく有は古文のすかた也本居春庭云いきにひみゐの字の下へるもしをそへて切るゝ詞とつゝく詞とを兼たるは後の定りにて古くは萬葉集十に春野のうはきつみて煮良思文古今に花とやみらむ六帖六に松か枝のときはにゝへき後撰集に來て見へき人もあらしな土佐日記に似へきなと第二音いきにひみゐより切るゝ詞をうくるてにをはを用ひたりといへり
誰むすめそといへは少將源中納言の四の君也まろに

あはせむといへども思ひすつまじき人のはべれは君にゆづり聞えむと思ひてあさて（日のかぎり）となむ定めたりさるよういし給へとの給へはせう（人々）のいらへほいなしとてわらひもこそすれといへば少将わらふが（何げなき體也）あるまじき（非なる事と）事と（少輔の）思ひけるこそ哀にをかしけれどつれなくてよも（少将の）（詞）（人々に少輔の宣んやうは也）わらはしの給はむやうはおのれなむ忍ひて此秋よりかよふを少将とりたまふと聞ておのれ（少将はいとこなれば）にはなれぬ人なれはかう／＼なりいかで（我通んも）え給ふぞと恨しかばいとことわりなりさらば（少輔日云詞）ふように（嫌とり）こそは彼おやたち（源中納言夫婦）もしり給はねはまろならぬ人取給ひてむもをこなり此度あらはれ（われと）給ねと云しかはなむといらへ給へさらばなて（何ともいふ事はなくて）ふことかいはむよもわらはしさておはしかよ（四の君へ）ひなは人もおほえ有て思ひなむといへはさな（少輔）〻りとうなづきゐたり

○つれなくて　此詞はおもて強く物をうけひかぬ意にて眞名伊勢物語に強顔の字を塡たり此二字はもと通鑑に有て綱目集覽に強顔猶言顔厚也と注せるに原きて何事にも情なくしおもて強くて何とも思はぬをいへり　こゝなるは源氏物語蜻蛉日記などにいへるつれなしつくるとあるに同しくそしらぬかほしてといふことなり　○おほえありて　此詞は心え有てなと云にあたれり今昔物語十八（大學衆試相撲人成村語）其相撲[illegible]權に勝れ殊に思え有ける者なり走りなんとも疾して心も猛かりけれは云々○うなつき居り點頭するを云首肯をもうなつくと訓りうなは頂（ウナジ）つくはぬかつくのつくにて築の字なるへし遊仙窟に領状をよみ眞名伊勢物語領拜の字を塡たるも義は頂築なり

（少将の詞）さらはあさてよう（夜）ちふ（打）か（更）しておはせといひ置きて出給ひぬ女いかゝ（少将の心）思はむと思へとも増りてにくしとおほしおきてけれは成りけり二條殿に（少将常の方へおはし〻也）おはしたれは雪（昇）のふるを見出して火桶におしかゝりてはひまさぐりて居給へるいとをかしけれはむかひ居給へるに二はかなくて消てましかば思ふ共いはでおきひ（機に置を操たり）に身はこがれまし

とかくをあはれに見給ひ（活）まことにとおほしてやかてをとこ君「うつみ火のいきてうれしと思ふにはわ

がふところにいたきてぞゐる　さてかきいだきてふし給ひぬ

○まさくり　源氏蓬生に時々のまさくり物にしたまふ契沖云河海に弊の字をまさくりとよめる事何にいてたるかおほつかなし弄の字を日本紀にまさくると訓りもてあそふとも訓り物を手に持て遊をいへはまさくるも心同し　○おきひ　和名抄(燈火類)唐韻云熾(昌志反漢語抄云於岐比)猛火也又盛也四聲字苑云熄(唐韻二音和名上同)熱灰新火也古今墨滅のうたに小町「おきのゐて身をやくよりも悲しきは都島へのわかれなりけり

女君いとをかしき事なりとて笑ひ給ふ中納言殿には其日になりてしつらひ給ふこと限なし今日といへは少將兵部のもとへ彼聞えしことは(兵部の詞)今宵也戌の時計におはせよとの給へはこゝにもしか思ひ侍るといへり(少輔か父にいふ也)てゝにかう〳〵といひけれはひむにしれはびむなからむとも思はでらうありて人にほめられ給ふことはよもあらじ早ういけとてさうぞくの事いそき出したてたりければ(少輔)打さうぞきていにけり

○てゝにかう〳〵と　父をてゝと云ふことゝひなひたる様なれと萬葉集榮花物語うつほ物語紫式部日記なとに見えてちゝと音通すといへり空穂（菊宴下）てゝ君の我をおもほし時にはあそひしに（源宰相子まさこの詞）宇治拾遺五（實子にあらさるもの實子のよしたる事）家主のいふやうやゝこゝのてゝのそのかみよりおのれはおひ立たるものそかしなといへは云々

○ひん　直案ひんにはひんなうといへるを省ける詞とみゆ○とりかへはや（中納言のすみすておはす所へ宰相の來りし條に）にしのたいにしのひて入給へれはいとあつき日にてうちとけときちらしてゐたりける見付ていたうひんにむらいにて侍るにとてにけいるに云々　源語梯にひんなきは人をあはれむ詞也いちらしきことにもいたはしきことにもいへり

人々そうぞきそしてまつに

○さうそきそして　直案にそしてのそすみてよむ則首巻の初のひらに見えたるかしつきそしのそしにてことさらかましうしつくすを云也なほ初にく

はしくいへり
（婿君）おはしたりといへばいれ奉りつ其夜はしれも見えて
火のほの暗にやうたいほそやかにあて成ければご逢
は人にほめられ給ふ君ぞかしと思ふにうちつけにほ
そやかになまめきても入給ひぬるかなと云あへるを
聞給ひて北方ゑみまけてかしこくも取つる哉我は幸
ありかし思ふやうなるむこどもとるかなたゞ今此君
大臣かねとてふきちらし給へは人々けにと聞ゆ
○あてなりければ　谷川士清云異名伊勢物語に高
貴の字をあてとよめりあてやかなといふめりされ
は伊勢物語にあてなる人あてなる男蜻蛉日記にあ
てなるかた源氏にあて人あてき榮花にあての御も
となとみゆあな妙と嘆美したる詞なるべしたへ反
てなり一說に上手也うは反あなりといへりいまた
いはれたりともおもはれすなほかうかへへくなん
○ふきちらし　枕草子にふきかたりといへる詞有
（四の君）此吹ちらしも俗に云吹聽しちらすをいふなるへし
をむなかゝるしれ者ともしらでふし給ひにけり明ぬ
れば出ぬ少將いかならむと思ひやられてをかしけれ

は女君に中納言殿にはよへむこどりし給ひにけり誰
ぞこのたまへはまろかをぢにて治部卿なる人の子
兵部少輔かたちいとよくはないとをかしけなるをむ
ことり給へるとの給へは女君とに人のとりわきてほ
めぬ所よとて笑ひ給へは中にすくれてをかしげなる
所を聞ゆるそかし今見給ひてむとてさふらひに出給
ひて（兵部）少輔のがりふみやり給ふいかにぞ文やり給ひつ
はやまたしくはかう書てやり給へいとをかしき事そと
て書てやり給ふ「世の人のけふのけさには戀すとも
きゝしにたかふ心地すれ　たま／＼なるのと書て
やり給へれはせうふみやらむとて歌をによひを程
にかくて給へればよきとゝ思ひていそぎ書てやりつ
○て子　直云萬葉に手兒と書て父母の手に養はれ
るゝ子と云義にて愛する子をいふ赤人我もみつ人
にもつけむかつしかのまゝのてこなかおきつき所
○たま／＼　直按たま／＼は邂逅あるひは偶の字
にて思ひかけなきことをいひてよへはおもひゝか
けぬことにて聞しにたかふ心ちこそせめといへる
也たま／＼なるのはたま／＼なるが也○によひを
る　直云俗にうめく又うなるといふに同し　靈

異記巻中に呻（爾與フ）字鏡に𠯇（詩伊反出氣息也呻吟也惠邪久又佐麻與夫又奈介久）又呻（舒神反吟也歎也左萬與不又奈介久） 宇治拾遺巻六に（僧加多思國へ行たる所）一の隔あり云々内をみれは人多くあり或は死に或はによふこゑす又十三（慈覺大師入纐纈城し條）後のかたに一の宅ありよりて聞は人のうめくこゑす云々又異所平聞は同しくによふこゑす云々なとみえたり

少將のかへり事には（兵部がもとより）よべはこと成にきわらはず成にしかはうれしくなむくはしくは對面にふみは（四の君への）まだしく侍りつる程によろこひなから是をなむつかはしつるといへば少將いとほしく女にはぢを見するぞなと思へともさくいかてか是かむくいせむと思ひし程に（母北方の落なくるしめたる）とげて後に引かへてかへりみむとおほす事ふかくて成けり女君は猶思ひ侘たるけしきいとほしうて（かゝる事を）聞せ給はす（少將）ふひとつにをかしければ帯刀になむ語りてわらひ給ひければたちはきいとうれしうせさせ給ひたりとよろこふ

○よろこひなから　よろこひは物の忝を謝する詞也

俗には蝮を云といへり源平盛衰記巻十二廿八丁（師長熱田社琵琶の事の條に）いまた是ほとの面白く目出たき御事は承り及はす此御悦には今十日の内に歸洛らせ奉んと申もをはらす搔消樣にこそ失にける又太平記巻九（中吉野伏に組伏られし條に）我命を助けてたひ候へその悦には六波羅殿の錢をかくして六千貫埋られたる所を知つて候へは手引申て御邊に所得せさせ奉らん　宇治拾遺物語四（石橋下の蛇の事）昨日おのれかおもしの石をふみかへし給しに助られて石の苦をまぬかれてうれしと思ひ給ひしかは此人のおはしつらん所を見置奉りてよろこひも申さんと思ひて云々

彼殿には（四の君）御（後朝の）ふみ待ほとにもて來れはいつしかとり入て奉る見給ふにかゝれは（きゝしにたがふさあれは）いみしうはつかしうてえ打も置たまはすすくみたるやうにて居給へり北方御手はいかゝあるとて見給ふにしぬる（いとあしければ）心ちする事彼落くほといふ名聞れて思ひ（はつかしさ）しよりも増る心ちすべし北方打見てあやしうさき〳〵のむこどりの文見る中に（北の方の手）かゝれは（是のみ）いかならむとむねつふれぬおとゝおしはな

（文な）ち引寄て見給へど目うとくてえ見給はていろごのみのいとうすく書給ひける哉これよみ給へとの給へば（みつからのか又はこと人のか後朝のふみ）北のかたふとゝりて藏人の少將のつとめての文のおほえける（の割た略記せしな也）をうちよみてたえぬは人のとなむ書給へるといへはおとゝ打ゑみてすきものなれはいひしりためりはや御かへり事をかしくし給へとて立給をきくに四の君かたはらいたく侘しくおほえてよりふしぬ

○すくみたる様にて　うつほ嵯峨院下　女御御産の條）かくいみしうやみ給へれと産給ひてはとなることもなしたゝみなく御身すくみてそおはする禁北音樂に其見物聞望の人たちすくみかしらいたうものゝ興覺えす　新撰六帖　冬月　信實　一木からしの吹すくめたる冬の夜の月見てさむき我妻哉

○たえぬは人の　後撰戀四又大和物語　一けふそへに暮さらめやと思へともたえぬは人の心なりけり

北の方三の君といかに（兵部のこたは）のたまへるならむと歎けは女の御かたいみしく思ふともかう（斷）いはむやは猶おしなへて今日は戀しなどいはむことのふるめきたれはや（様）うかへてと思ひ給へるにや心えすあやしくも有かなとの給ふを北方さなゝり色好みは人のせぬやうをせむとなむ思ふなるへしといひて（四の君に）はやかへり事し給へと申給へとおやはらから居立てかくあやしかり歎き給ふを聞に更におきあかるへき心ちもあらてふし給へれは我きこえむとて北方書き給ふ「老の世に戀もしらぬ（爲不知）人はさぞけふのけさをも思ひ分れし（不思分）　口をしうなむ女は思ひ聞ゆるとてつかひに物かつけてやりつ四の君はおきあからてふしくらしつくれぬれは（兵部）いとゝくおはしぬ北方されはよものしくおほさましかはおそくそおはせましげに（返詞）かうやうかへての給へる成けりとて悦て入奉り給ひつ四の君はづかしけれといかゞはせむとて出給ひにけりものうち云たるこゑけはひほれ〴〵（恍惚）しくおくれたれは女君（四の君）藏人少將なとに馴合するにあやしけれは我こそ戀ざらめとはいはまほしけれとおほす

○けはひ　源氏抄に形勢をよみ新猿樂記に景氣をよめりはひはなりはひにきはひくさはひなとのは

ひにて助詞也されと形容する心あるへし
（兵部）夜ふかく出ぬ三日のまうけいといかめしうしたまふ
さふらひ（侍士）のいるへき所さうしき（雜色）所なとさま〳〵にも
の（饗食居）するなとして待居給ふ御むこの少将まで出給ひて
いそき（勤）給ふたゞ今の御世のおぼえたぐひなき君なれ
はもてはやさむとておとゞもいでゐて待給ふまづこ
なたへ入給へとよばすれはゆくりもなくのほり（上）てゐ
ぬ

○いといかめしう　日本紀に嚴の字重字なとをイ
カシと訓りいかしは即いつかしの省かり言にてい
つきかしこむの義也（一ノ三葉ノ上）めしうはめかしうにていつか
しけにと云こと也かゝる詞はすへてうつくしきを
うつくしけをかしきをかしけなとおほめかしう
書るは物語さうしなとの常のことなりあなつりか
ましき詞なと思ふへからす○ゆくりもなく　日本
紀に不意をユクリナクと訓り俗に云つかもなくな
り夕顔巻にいさよふ月にゆくりなくあくかれむこ
とを云々　直按ゆくりは萬葉由久良と同し詞にて

ゆつたりとしたるをいひゆくりなくはゆたりとし
たる所なくせはしなけなるか詞の本にて思慮分別
もなきをいへることゝもなれる成へし
火（ともし火也）のいとあかきに見れはくびよりはじめていとほそ
くちいさくておもてはしろき物（白粉）つけけさう（假粧）したるや
うにて白うはなをいらゝかし（下に注す）さしあふぎて居たるを
人々淺ましうてまもる此兵部少輔に見なしてはえね（そこ也）
むせずほゝとわらふ中にも藏人の少將ははな〳〵と
物わらひする人にてわらひ給ふ事限りなし

○けさうし　伊勢物語（井筒の段）に此女いとよう
けさうして

おもしろの駒なりけりやとあふきをたゝきてわらひ
て立ぬ（おさ〳〵の方の人を云か）殿上にても物よりことに（殊）おもしろの駒はなれ（放）て
來りとてわらふ成けりかくれに居てこはいかなる事
そともいひやらすわらふおとゞ（中納言）はあきれてえ物もい
はれず人のはかり（謀）けるなめりとおほすにたゝ腹たち
にはら立れ給へといと人多く見るとおほししづめて（四の君へかよひし事もなくて）
こはいかでかく（中納言）おほえなくてものし給へるそいとあ

やしこの給へは彼少将の兵部をしへしまゝにほれて云居たれはいふがひなしとてさかつきもさ中納言ゝて入給ひぬ供の人々はかくわらはるゝもしらですゑたる所ともにつきてくひのゝしりてざにゐなみたり人居並一人もな兵部の前にはく立ぬれはせうはしたなくてれいのかたより入ぬ北四の君の方へ方開て更に物も覚えすあきれまどふおとゞは老のうへにいみしきはちみつる世かなとてつまはしきをしいりてゐたまへり四の君は帳のうちにすゑたりけるにふと入来て兵部ふしにけれはえにげずごたちはいとほしかりあへり中たちしたる人とてもあたがたきにもあらす四の君のめのとなればいふへき方なし誰も留／＼歎きあかすに四日よりはとまるといひしと思ひてむごに無期ふせり蔵人の少将の君世に人こそおほかれかゝるおもしろの駒を引寄給ひしぞいといふがひなかりけるわざかなかゝるものといで入せむこそ侘しけれ殿上の駒と名付てかしらもえさし出ぬしれ物のいかてよりきにけむ

○老のうへにいみしき耻みつる世かなとて　荘子天地篇に華封人曰壽則多辱其所そこたちのみはかりてし給へるならむとわらひて嘲哢てうろうし給へは三の君さらにしらぬよしをいひていとほしかり歎き給ふかゝるひか僻者ものなればよづかぬふみは書出したる成けりと人しれず思ひていみじくいとほし北方の心ちたゞ思ひやるべしみうまのときまで手もあらあらはせずかゆもくはせで有とある限り其御方にとて多かりし人々も誰か其しれものにつかはれむとて出こずつく／＼とふしたるを四の君見るにかほの見ぐるしうはなのあなよりは人とほりぬへくふきいらゝげてふしたるに心つきなくあいきやうなく成てやをらものするやうにておきて出たるに北方待うけての給ふ事限りなし兵部が
○いらゝかし　橋姫巻云々前に注す　直按いらは元来物のさきさかりたるをいふ詞にて角あるすをいらゝ馬すゝといふか如しこゝなるも鼻の穴打ひろこりさきのとかりうこくさまをいふきは則いふきにて息吹の義フヒ通してイヒキとも

いふ源氏なるもさむけにさかりたる顔してと云こと也常にも口をとからかすなとよくいふこと也如此みれは彼是に通はしてよく合する也

おいらかにはしめよりかう〳〵したりといはましかは忍ひてもあらましを所あらはしをさへしてかくののしりて我も人もゆゝしきはちをさる事誰なかうごしてしはしめしそといへとせむれは四の君淺ましういみしう成てたゝなきになく我かゝる物あらむとも知ぬにかくつぎ〳〵しく云けれはあらがふべき方なし藏人の少將いかに思ひ給ふ覽と女の身は心うき物に「そ有けれと思ひてなけどいふかひなし

○あらかふ　日本紀源氏物語うつほ物語なとに見えて爭を訓り新撰字鏡に諍をよめり　後撰戀三藤原滋幹「千早ふる神引かけてちかひてしとゝもゆゝしきあらかふなゆめ　大和物語にあらはなるとあらかふな云々宇治拾遺十（伴大納言應天門をやく事）に舍人をめしてとはれけれははしめはあらかひけれ共われも罪かうふりぬへくと云けれは云々

（兵部）せういつとなくふしたりければおとゝいとほしかれに手あらはせよものゝれよかゝる者にすて（棄）られぬといはれむはまたたぐひなくいみじかるべしすくせ（宿世）やさしも有けむ今はなきのゝしるともことのきよまらはこそあらめとの給へは北の方あたら（惜）あが子を何のよしにてかさる者にくれては見むとまどひ給へば（おとゞ）あゝしきことなのたまひそかゝる者にすてられぬといはれむいといみじかるべし北方こずならむ時やさも思はむたゞ今はもどさせまほしくぞあるとの給へは（直案）ひ（此間詞落たりさらすはの給へはははの給ふの誤なるべし）つじの時まて人もめみいれねは少輔くるしうて出ていにけりようさり來たるに四の君なきてさらに出給ねはおとゞはら立たまひてかくおほえ給ひけむ物をは何しにかは忍ひてはよひよせ給ひし人のしりぬるからにかくいふはおやはらからふたかたにはちを見せ給はむとやとそひ（傍君）ゐてせめ給へは（四の君）いみしう侘しなからなく〳〵出ぬ（兵部）せう泣給ふをあやしと思ひけれど物もいはでふしぬかく女も侘しと思ひわび北方も

くはた[illegible]

つゝみていで給ふ夜いでたまはぬ夜ありけるにすくせ心うかりけるとはいつしかとつはり給へはいかて子うませんと思ふ少將の君の子はいでこで此しれ者のひろごることゝの給ふを四の君ことわりにていかで死むと思ふ藏人の少將思ひしもしるく殿上の君だちおもしろの駒はいかに此頃としかへらは御引にてあを馬に出し給へ君とあれといつれをか思ひましたるとてわらふにちりもつかじと思ふ心にいとくるしとおほゆもとよりいと思ふ（三の君のことを）やうにはおほえさりしかといみしういたはらるゝにかゝりて（つなかるさいふ程の事）有つるをこれにことつけてすてむと思ひ成てやう〳〵こぬ夜のみおほかれは三の君物おほす（ろさあひむことならんかうさましきに託して也）

○つはり給へは　つはりとは懷姙の心つくを云也倭名鈔病類擇食辨食立成云ゝゝ（和名豆波利又楊氏說同）又新撰字鏡に䏘をツハリノトキとよみ孕始兆也と注し醫書にこれを惡阻とあるによりて谷川士清は衝張の義なるへしといへるはさもあるへし梅の熟してつえるをもつはると云金葉集にたゝならぬ人のもてかくしてと有はるに子をうみてけるかもとよりうみたる梢をまこもたしるし「葉かくれにつはると見えしほどもなくこはうみ梅になりにける哉　と有また新撰字鏡に𦙶をつはるとよめり徒然草下十九段に木のみの落るも先落てめくむにはあらす下よりきさしつはるにたへすして落つるなりと有

○あを馬　萬葉第廿云天平寶字二年正月爲七日侍宴大伴宿禰家持作歌　水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝利奈之等伊布　水鏡云弘仁二年正月七日はしめて青馬を御覽しき　內裡式云正月七日左右馬寮各牽青馬入自延明門　延喜式左馬寮云凡青馬二十疋自十一月一日至正月七日二寮半分飼之　土佐日記に七日に成ぬ同しみなとに有けふはあを馬を思へとかひなしたゝ波の白きのみぞ見ゆる　河海抄卷五引十節錄云正月七日看青馬青以白爲本天有白龍地有白馬是日見白馬卽年中邪氣遠去不來也　兼盛集「ふる雪に色もかはらて引者を誰青馬と名付そめけむ　公事根源云禮記に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ゆると有七は少陽の數正月は少陽の月也云々　逸周書卷七王會解

云周公旦主東方所之青馬黑山欲謂之母兒　眞淵云青馬といへと實は白馬なり古言に白きを青といふ例青雲の白肩之津といひ又青旗といへるも全くはしらはた也萬葉家持卿の歌に水鳥のかもの羽色のあを馬とよめるも鴨の羽のごとく青き毛色の馬といふにはあらす青馬はもとより白き馬をいふなれと青といふ詞にいひかけしのみとみゆ其たくひ多く見ゆ云々

落窪物語證解卷之四

彼二條殿には日々にあらまほしく成増り男君のもてかしづき給ふこと限りなし人もいくらもまゐらせ給へ女房おほかる所なむ心にくゝはなやかにも聞ゆとてこれかれにつけつゝひき／＼に參れは二十餘人計侍らふ男君も女君も御心のごやかに

○のごやか　和氣の義常には長閑をノトカとよめりこゝはゆつたりとしたるを云

よくおはすれはつかうまつりよく參りまかでさうぞきかへつゝいまめかしきことおほかり衛門を第一の者にし給へりたちはきおもしろの駒のことを妻にかたりけれはした心

○した心　萬葉十譬喩歌に吾屋前之毛桃之下爾月夜指下心吉菟楯頃者こゝろのそこにはなど云詞とみゆ千蔭は下心をしつこゝろと訓たりされとこゝには古點のまゝに引用す

にはいみしうねたかりしたうすはかりの身にもかな

と思ひししるしにやとうれしけれとあないとほしや北方いかにおほすらむさいなまるゝ人おほからんかしといふかくてつこもりに成ぬ大將殿よりは少將の君の御裝束(春のまうけの)今はとくし給へこゝには(女御の)うちの御ことにいとまなくなんとてよき帛(系)いと綾(綾)あや茜草(茜草)あかね蘇枋(蘇枋)すはうくれなゐ

○あかね　和名抄(染色具)茜　兼名苑注云茜(蘇見反和名阿加禰)可以染緋者也　○すはう　又云蘇枋　蘇敬本草注云(音方俗音須方)人用染色也　○くれなゐ　又云紅藍辨色立成云――(久禮乃阿井)呉藍(同上)本朝式云紅花(俗用之)

など多く奉り給へれは(女君)もとよりよくし給へりけることなれはいそが(勤)せ給ふ扨少將の君につけ(屬)奉りてうまのせう(允)に成たるゐ中人のとくあるきぬ(恩徳に成しなり)五十參らせたれば人々にさま〳〵給はす衛門とりくばりし(爲)おきつるにもめやすくみゆ此二條殿は北方の御殿なり御(少將の父左大將殿の、)女二所おほい君は女御男太郎はこの少將二郎は侍從にてあそひ(奏樂)をのみし給ふ三郎はわらはにて殿上し給

ふちごにおはしけるより此少將を世になくかなしう(愛憐)し奉り給ふよ人にほめられみかども(少將な)よき人に思し召たれはましていかならんこと(落なさり給ひしことなきこしめしても)をし給へり共の給ふまゝしかの御ことになればおとゞ(左大將)ゑみまけ給へれば殿につかうまつる人ざうしき(雜色)うしかひ(牛飼)まで此少將殿になびき奉らぬはなしかくて年歸て朔日(正月――)の御さうぞく色よりはしめて最(いと)きよらにし出給へればいとよしとおぼしてきてありき給ふ御母北方見給ひておなうつくしいとようし給ふ人にこそものし給ひけれうちの御(女御殿を云)方などの御大事(はれのこと)あらんには聞えつ(きこえ上てゐはせ奉らんと也)へかめりはりめ

○はりめ　萬葉四に吾背子か蓋世流衣のはりめ落ず入にけらしなわか心まで

などのいと思ふやうにありとほめ給ふつかさめしに

○つかさめし　公事根源云京官除目(ハツカンノヂモク)是は三月三日より先に行はるへきことなれと今は秋の除目とそ云める冬にもおよふなり京にある所司を任せらる故に京官とは申なり執事の作法進退大かたは春

の除目に同し三省（式兵民）なとの奏なとそかはりめにてあめる一夜行はる二夜も常のことなりつかさめしとに此秋の除目を申なりあかためしとは春のなるへし　直案に一條禪閤のころはつかさめしは秋の公事となりつらめとふるくは春のみ行れしとみゆさる證は住よしもの語にかくて正月のつかさめしに右大臣は關白になり給ふ少將は中將になりて三位し給へり云々榮花もの語はつ花（道隆のわか君たつきみ元服の條）其としくれぬれは又のとしになりぬつかさめしに少將にならせ給ひて二月にかすがの使に立給ふ云々なとみゑたりいと後のものながら北村季吟の增山井つかさめしの條下に注してあかためしの除目のことなり正月十日より十三日まて三日の間行はるあかたはいなかのことなり外國の人をめして任官をさつけらるれはかやうに名付るにや諸國の受領を任せらるゝことかやなといへるもつかさめしとあかためしと同しことゝせしはいかかや聞ゆれと正月三日より十三日まて三日の間行はるといへるとつかさめしをおもにしいへるはより所有てなるへしと思はるればなり

（少將昇進して）中將に成給ひぬ三位し給ひておぼえ増り給ふべし三（中納言の三の君の夫）の君の（中將の妹なるへし）藏人の少將彼中の君を聞ゑ給ふを（いかにやさゝひ聞ゆるなり）いとよき人（中將）ぞたゞ人とおぼさは是を取給へみるやうありと常（直）々申給ふかの北方是をいみじきたからにおもひてこ（中將の心に藏人少將を）（中納言の落）れがことに付てわがめをてうぜしぞかしと思ふにい（三の君をもてうぜすては）とすぐさせまほしきぞかし中將かくいふをみるやう（中の君の心）ぞあらむとて（藏人の文なとあれは）時々かへりごとせさせ給ふに少將たの（中の君へ）みをかけて三の君をたゝかれにかれ（落のわひ出給ひし時は）ゆく〳〵よしとほめし

○よしとほめし　はしめに此婿の君はあしきことをもかしがましくいひよきことをはけちゑんとはむる心さまなれはこのさうそくどもをいとよしよくぬひおほせたりとほむれはとある首尾なり

裝束もすぢかひ（三の君は）あやしげにしいづればいとゞことをつけて腹たちてしかけたる衣どもゝきすでこは何わざしたるぞいとよく縫し人はいづちいにしぞとはら立ば三の君男につき（從）ていにしぞといらへ給へばなぞ（少將の詞）

の男につくべきぞたゞにぞ出にけむこゝにはよろし
此殿には
きもの有なむやとの給へば三の君されどことなるこ
反語
となき人
○ことなる事なき人　直磨案にことなることなき
人とは何の覺もなき人を云才能もなくもとより
官位なともなき人なり枕草紙ににくきものゝ中に
ことなることなき男の引入こゑしてえん立たる云
々とありこゝは三の君の少將のたゝかれにかれ行
を恨て此殿にはよろしきものはなくとも又何の
覺なきまでの人はなかるへしやはといひて御心を
みれはおほすことこそあれとうらみ給へる心をふ
くめたる詞なり　或云との給へともこの家にもこ
となるあしき人もあらめ御心のよきをみれはとう
らを云なりよりてさなりとて又おもしろをほめて
の給ひぬといへり
少將
なかるへきにこそあめれ御心をみればといへばさな
なからふともいはれまいと云詞
りおもしろの駒侍るめりよにめでたき人も參りけり
と心にくゝ思ふなどまれ／＼きてはねたましかけて
たゝかれにかれ行
いぬればいみじうねたみ歎けどかひなし北方おちく

ほのなきをねたういみじういかでかやつがためにま
直云奴なり轉して
やつと云も是也
とはしにけむと
俗にいふまとつくと云棍の事
○まとはしにけむと　活字本にまはしきふせむ
とに作る或云廻し錢神をふせては其人よそへゆか
てこなたへめぐりくることの有なるべしと云り
まどひ給ふ我はさいはひ有よきむこゝると云しかひ
なくおもておこしに思ひし君にたゞあくがれにあく
少將は
がる
○あくがれ　直案にあくがれはうかれなり阿久反
字となる所さためずありくなり葵巻にあくかれま
かりありくに云々と有浮あらはるゝの意にてしの
ふへきも忍ひあえてとこともなくさまよひありく
さまなるへし古今榮雅抄にあちこちゆくなり浮岩
と書なとあるはあらし
よきわざしていそぎしたるは世のわらはれぐさなれ
婿とらんと
ばやまひ人に成ぬべく歎く正月つごもりよき日有け
るに物まうでする人ぞよかなるとて三四の君北方な
よく有なるとてなり
どして車ひとつして忍びて清水に詣づ折しもこそあ

れ三位中將殿の北方男君もまうで給ふに中納言殿の北方くるまはとくまかで給ひければさいだち行忍ひたりとてことに御前前驅もなくかいすみたり中將殿は男女おはしければ御前いと多くてさきおひちらしていと猛にてまうで給ふさきなる車はしりばやに

○さきなる車はしりはやに　直案にさきなる車句はしりはやにこされて句なるへしさてこされては被來にてはかられてをはかされてといふに同し格なるへく覺ゆ今も田舍にては來られたといふへきを來されたといふ所をり〳〵あり

清水の坂をうしろよりはやく被來てなるへし　夜をこめて出たれは

こされて人々佗にたりたいまつのすきかげに人あま

松明ともさせたるなりすきかげにの下にみれはといふ詞こもれり

たのりたればにやあらむ

○たいまつ　燒松なり松明とかく伊勢もの語につい松といへる是なり　和名抄 燈火具 松明タイマツ　唐式云毎城油一斗松明一斤今按松明者今之續松乎

牛くるしげにてえのぼらねばしりの車どもせかれて

○せかれて　舊事記に塞の字をセクと訓り歌にせきたるせきあへねせきかへすると詠る是なり遏塞の義か

とゞまりがちなればざうしきどもむつかる中將殿人を呼て誰くるまぞとはすれば中納言殿の北方の忍ひてまうで給へるといふに中將うれしくまうで逢にけりとしたにはをかしくおぼしてをのこ共さきなる車とくやれといへさるまじうはかたはらに率やらせよとの給へば御前の人々うしよわげに侍ればえさきへのぼり侍らじかたはらに引やりて此御くるまをすぐせといへば中將うしよわくばおもしろの駒にかけ給へとの給ふこゑいとあいぎやう付てよし有車にほのきゝてあな侘し誰ならむと侘まどふ猶さきに立てやれば中將殿の人々え引やらぬなそとてたぶてをなぐれば

○たふて　萬葉八に多夫手にも投こしつへき天のかはへたてればかも安麻多須辨奈吉と有に同し今はつふてともいへり

中納言殿の人々腹立てこと〻もいへば大將殿ばらの

なほこりそといふ詞をそへてみるへし中將としらぬ故也

やうに中納言殿の御車ぞはやう〻てかしといふに此

礫な打かしと也

御供のざうしきども中納言にもおづる（恐）人あらむやさ
てたぶてを雨のふるやうに車になげかけてかたやう
にあつまりておしやりつゝ御車どもさき立つ御前よ（又中將殿方は）
り始て人いとおほくてうちあふべくもあらねばかた（片輪）
わをほりにおしつめられて物もいはであるなか／＼（いつその）
（事かまはぬ方かよきに無術なることゝせしと云）
むごくなるわざかなといらへしたるをのこどもをい（中將殿の車へ）
ふのりたる北方をはじめてねたがりまどひて誰まう
で給ふぞことへば左大将の殿の三位中將どのゝまう
で給ふなりたゞ今の一の人にてあしくいらへたるな（十四丁オ）（中將殿の車へ）
りと云をきくに北方なにのあたにてとにかくにはぢ
をみせ給ふらむ此兵部少輔が事もこれがしたるぞか（おもしろの駒の事）
しおいらかにいなどいはましかばさてもやみなまし（おとなしやかに）（かけ）
よそ人もかくかたきのやうなる人こそ有けれ何もの（かまひなき人も）
ならむとて北方てをもみ給ふいと深きほりにてとみ（手をするこさ）（片輪なしつめられたる堀は）
にえ引上でとかくもてさわぐ程に輪少しをれぬいみ
じきわざかなとてになひ上て

○になひあけて　谷川士清云になふは荷に任也荷
擔の義にた反な也といへり
なはもとめきてゆひ（結）などして歸らむやはとてやうや
るのぼる中將殿の御車どもははしとの（橋殿）に引立て
はしとの　今昔物語十九（忠明於清水値敵存命語）云今昔忠明と云
檢非違使ありけり若男にて有ける時清水の橋殿に
て京童部と諍をしけり京童部刀を拔て忠明も刀を
拔て御堂の方へ逃るに云々是にてこゝの形勢明ら
かなる故くだ／＼しくこれを引又大和物語にとし
子か志賀にまうでけるに增基君と云法師有（中略）はし
との局をしてゐて萬のことを言かたらひけりまた
思儀日記に腰輿にてはしとのへ行幸有云々などみ
えたり縣居の說にははしとのは山谷かけて橋のごと
く作れる家を云へし廊をほそとのといふに似りと
いへり
むご（無期）にたち給へるにや（中納言のは）久しう有てからうじてよろ
ぼひきぬ
○よろほひきぬ　神代紀に徙倚をよろほふと訓し
てあゆむにあしの定まらぬを云催馬樂にきけをた

うへてたへゐふてたふとこりんそやましてくるよろほひそましてくる云々こゝは車をやうやく引つけたる也

いとたけ（猛）がりつる輪をれにけりやさて又わらふよき日にてはし殿にひまもなければかくれのかた（車を引入る所也）よりおりむと思ひて過て行

○かくれのかた　源氏目案に云仁和芹川の行幸次幸八條院爲作寄二御輿一之便初作二階隱（ハシカクシ）一云々見吏部王記天慶六年也今按南階の間に柱を二たてゝ上をふき出すを階隱と云鳳輦を東向にかきすえて左のわきより乘御下御あらん爲なり云々貞丈雜記十四云々階隱の間と云こと義敎公御元服の記にみえたり是は御殿の階の前に柱を二本立て上に屋根をふき出したるをはしかくしとて階の雨にぬれぬやうやねにて階を隱す心なり階隱は禁中の御殿にも有所々の神佛などにも有日隱しの間共云なり古今著聞集に云階隱の間に入て階にしりをかけしはしはれまをまたれける

中將殿はたちはきをよひて此くるまのおり所みて告よそこにゐむとの給へば帶刀はしりいきてみればしりたる法師よびていとゝくまうでつるを此三位の中將とかいふ者のまうであひてしか〳〵して車の輪をれていまう（詣）で侍りつる（遅くいりしと也）つぼね有やとくおりなむいとくるしといへばいとふびむ（不便）成ける事哉さらにみだうのま（間）なむかねて（豫）仰られ侍りしかば取おきて侍る彼中將殿もいつこにか侍らひ給はんずらむろむなうゐせ者に

○ゐせもの　直案さしもなしと物を嘲る詞なり源氏物語にゐせ受領枕草紙にゐせ幸ひゐせうしゐせ形無名抄にゐせ歌などみえたりゐせ笑もをかしくもなきに空わらひをすることゝ聞ゆ

つぼねおそひゝしがれむかし哀いとふびむなる夜なめりかしといへばさば（北方）さくおりなむ人なきつぼねとてとられなんとていそげは男一人御つぼねみおか（見置）むとていくしりに立て帶刀みおきてはしり歸りてかう〳〵なん申つるかれがいかぬさきにとておろす御几帳さして男君はなれ給はずかしつき給ふこと限りな

し中納言殿の北方中將殿のおりゐさきにとてみなあゆみのぼる程にかれはたいとゝきしき殊によそ〳〵はら〳〵とかすりて帶刀さきに立て道なる人々はら
する也中納言北の方の、、、
ふ車の人々さわき立あゆめは道をふたきて

○ふたきて　此ふたきは源氏桐壺卷に御むねのみつとふたかりて有と同言にて賀利を約れは幾となれりふたは蓋なり賀利は懸なりまたふさかりともいへるは安加佐多奈横通する故なるへし物にふたかゝりたらんやうに立おほひ妨をするを云なるへしふたぐもふたがるなり加流の反具なり

さらにやらねばゝしたなくてしばしかいむれて立たるをみてのちおひなる御物まうでなめりや常にさきたち給はむとのみおぼいためれどもおくれ給ふはとてわらへば誰も〳〵いとねたしと思ふとみにもえあゆみよらずからうじてつぼねにあゆみ行ぬはふしごうし一人有けるは彼つほねあるじのおはすると思ひて出ていぬみな入給ひて中將帶刀をよびてかの人々わらはせよとさゝめき給ふをもしらでわがつほねとたのみて來て入むとするにあらはなり中將殿おはしますといふにあきれてたてれば人々わらふいとあやしたしかにあないせさせてこそおりさせ給はましかくうはの空に御局あるましかめるものをいと〳〵ほしきわさかなにわうたうのおこなひをせさせ給へそれぞ所は廣かなるとそらしらずして帶刀は我と知れむはいとほしくてわかうはやれるものにはやしていはせてわらふにはしたなきこと限りなしかへらむにもはしたにわひしといふはおろかなりしばしたてるに人さわがしくつゐたふしつべくありきちがへは徨しくあゆみ歸る心ちもたゞ思ひやるべしいきほひ增りたらばいさかひしてもいぬべしいとせむかたなし足をそらにふみて

○あしをそらにふみて　源氏夕顏卷にとのゝうちの人あしを空に思ひまとふ同葵卷あふひの上御惱にむねをせき上て云々ほともなくたえ入給ひぬあしを空にて誰も〳〵まかて給ひぬれは云々同須磨卷

（ひちがさ雨の條）なみいかめしう立きて人々のあしをそら也車に歸りのりてねたういみじう思ふこと限りなし猶だゝに思はむ人かくはせじおとゞをやあしと思ふらむいかなる事にあたり給ふらんと集りて歎く中に四の君おもしろの駒いはれていといみじと思ふだいと（大德）こ呼てかう／＼してとられぬいみじきはぢにこそあれまだつぼね（局な）有ぬべしやといへばたいとこさらに今はいづこのかあらむいりゐたるをだに殿はらのきむだちはおしゐ（推居）させ給ふにおそくおりさせ給へるがましてあしきなりいかゞせむ車ながらあかさせ給ふべきなりよろしき人ならばこそもしやにいひ侍らめただ今の一の人

○一の人　いちの人とは攝政關白を申なり執柄とも申なり枕草紙にめでたき物一の人のみありさま云々職原鈔曰執柄必蒙二一座之宣旨一故稱二一人一又云一人者當時雨流也法性寺入道關白後胤近衛九條是也近衛分爲レ二（近衛鷹司）九條又分爲レ三（九條一條二條）是を五攝家と申なり

太政大臣も此君にあへばおともせぬ君ぞや御いもう（女御殿也）と限りなく時めき給ふをもたまへり我御おぼえばか（われからおもひあかりたる人）りとおぼすらむ人うちあふべくもあらずなといかていぬれはかひなしおりなむと思ひて（かれて局へ、、、）六人までのりたりければいとせばくてみじろきもせず苦しきこと落くぼの部屋にこもり給へりしにも増るべしからうじて明ぬ此あいぎやうなしの（少將の）出ぬさきにとく歸りなむといそぎ給へど御車の輪ゆふ程に中將殿は御くるまにのり給ひぬ例のびむなかめれば中納言殿の御車おくれむとて立れは（なて）中將殿後にも思ひ合せよむげにしるしなくばかひなしとやおぼしけむことねりわらはをよびて彼車の口のかたに寄て（中納言殿の）こりぬやと云て（來）ことの給へばたゞよりに寄てかくいへば誰かの給ふぞと（中納言殿の方）いふにたゞ彼車よりといふにされはよ思ふこと有てするにこそ有けれとさゝめきあやしがりて

○さゝめく　萬葉に耳言とかけりこそ／＼はなしをすることなり長恨歌に私語をさゝめごとゝよめるも同しことなり　第五卷三オに詳にす爰に併記

すへし

北方またし（こりはせじと也）といひて出したりければわらはかくなん

と申せばさがなもの（中将）

○さがなもの　帚木巻に指くひの女の事をさがな者といへり日本紀に悪字不祥字なとをさかなしと訓りよからぬものといふ意にて多くはこちたくもの妬するを云俗にいふ根性わるといふによく允れり

ねたういらへたなりかくておはするともしらじかしとわらひ給ひてまだ死にせぬ（不死）御身なれは

○また死にせぬ　いまた死なておはさむほとはまたやこるはかりなるめみ給はんとなり

又やみ（からきめ）給はむといはせたれば北方いらへなせそめさ（みくるし）ましとせいせられてせさせ給はねば歸り給ひぬ女（當時の事）（な取てかへして出也）君いと心うくけしからずはおはせしかどおとど（父）後に聞給はむこともぞあるかくなの給ひそとせいし給ひけれど是には（少将詞）おとゞやはのり（あの車）給へるとの給へば君だ（落の詞）ちおはすれは同じことゝのたまふを今打かへし仕う（中将かゝる事したる）まつらむに御心はゆきなん（には引かへて能つかうまつらんにと也）

○御心は行なん　空穂初秋上（左大将三條院かむたちめみこ達みき参り御物語の條）にうへも春宮もひさしくよしあるわきとす（四字不詳）やう／＼風すゝしく時もはたをかしきほとに成ゆくを世けんのこともわすれ心の打行はかりのこともしてしかなん／＼さため給へ人のよはひといふ物はかなきものなる命あらん限こそあらむことをみつゝこそあらめとの給ふ

思ひ置し（かれて）ことたかへしとのたまふ北方歸り給ひて中納言に申給ふ此大將殿（左、三位）の中將はおとゝ（大殿）をやあしくし給ふとあれはさもあらすうち（内裡）などにてもようい（用意）ありてこそみゆれとのたふ（北方）あやしきことかなしか／＼（云々）こそ有つれまたなうねたくいみじき事こそなかりつれいづとて云おこせたりつる（こりぬやといひおこせり）せうそこよいかでこれにたう（當）せむともだえ給へば

○もたえ　蒲悶をよめり空穂忠こそ巻におとゝおとろきもたえ給ひて云々詞には出さて底には絶も入んはかりにいきとほるをいひて默絶(モクゼツ)の義なるへし悶絶といふもやかて此心なるへく覺ゆ

中納言我はおいしれて（老痴なりおいほれと云に同）おほえもなく成行かの君はただ今大臣に成ぬべきいきほひなれば

○いきほひ　勢をよむ息競の義なるへし息延の義といへるはあらし

いとゞたうしがたしさべう（可然）こそあらめ名たゞしく我めをともとてさるはぢを見又わらはれけむことよとてつまはじきをして又歎き給ふかゝる程に六月に成ぬ中將せめていひそゝのかして

○そゝのかして　谷川士淸云うつほ物語にはや聞えそゝのかせともみえたり唆字嗾字なとを訓り唆は字書に小兒相應聲也嗾は挑弄也とみゆといへり直麿案にそゝのかすは日本紀に彼々(ソヽ)茅原鯖鮐日記にあなたに人のこゑすればそゝなとの給ふに聞もいれず末摘花の巻にそゝやなといひて火とり置しかふしはなちて入奉るなとみえて日本紀なるは彼々の字のごとくそれそこのなといふ意にて日記并に末摘花なるはやかてそれ〳〵と物をさして云詞とせり詞花集にそゝや秋風ふきぬなりなといへるは草木の動く音よりいへる樣なれども猶それそりやなとの意なり靈異記に動の字をそゝともすることゝ訓るは草木のうこく聲よりいへるにて轉せるなり詞の意は彼々(ソヽ)令告聞(ノリキカス)にてあれ〳〵それ〳〵と側より告きかせて慫慂(スヽムル)する義なり士淸か字書を引るはあたらす

藏人の少將を中の君にあはせ（婚）給へば中納言殿に聞ていられ（恚）しぬばかり思ふかくせむとて我をはすかしおきしにこそ有けれとていかでいきすたまにも

○すかしおきし　大和物語にさて〳〵時々かよひけれどいかなる人のすかすならんとつゝましければ云々源氏宿木巻にいとさはかりならんあたりにはたれかはすかされより侍らん宇治拾遺七（爲家侍作多事）此郡司か本に京よりうかれて人にすかされてきたりける女房の有けるをゝかしがりて云々後拾遺誹諧（少將義孝）わすれてもあるへき物を此頃の

月よゝいたく人なすかせそ續詞花戲咲（小大近）きてかへる物とも知らて夏衣ひとへ心ろはすかされにけら是等俗にたますと云詞に允れり宇治拾遺一（伴大納言の事）善男あやしみをな て我をすかしのほせて妻のいひつるやうに勝なとさかんするやらん云々

○いきすたま　和名（抄鬼魅類）窮鬼遊仙窟云窮鬼師說（伊岐須太萬）直案に窮鬼は俗に云貧乏神の事にて恐らくはこゝにあたらす源氏あふひの卷に大殿には御ものゝけいたくおこりていみしうわつらひ給ふ此御いきすたまこちゝおとゝの御らうなと云もありときゝ給ふにつけておほしつゝくれは身ひとつのうきなけきより外に人をあしかれなとおもふ心もなけれと物おもふにあくかるなるたましひはさもや有んと思し知らるゝことも有云々といへるは分明に御息所の生靈をいへはこゝもさみるへしさていきすたまは生なから其靈のねたしとおもふ人にとり付せむるをいひていきせむるたまと云なるへし世本反須なれはなり世本は世麻利の約りたるなり又案に和名（抄）窮鬼の次に魑魅を出していはく山海經云魑魅（和名須太萬）鬼類也野王云魑魅老物精也文選蕪城賦云木魅山鬼（和名古太萬）とあるをみれは須太萬は鬼の惣名にして生なから鬼のことくなりて其ものゝけうらめしと思ふ人にとりつくをいへるにや

入てしがなとて手がらみをして

○てからみをして　空穗藤原君卷（師のあて宮を入内せしめんと云を聞ていかる所）そち手からみをしていふほとになそのやもめのましまする所にかやもめをとこはすましむると有手をこまぬくことなるへし

いられまとはれ給ふ二條殿には（中納言殿のかたには思ひか）思ひかしつき給ひし（しつきし藏人少將なとられて）物をいかにおほすらむと思ひやりていとほしがる三日の夜の御さうぞくは物よくし給ふとて此殿（二條）になむ（あつらへ）奉り給ひければ女君いそきそめさせてたちぬひし給ふにもむかし思ひ出られて哀なれは「きる人のかはらぬ身にはから衣たちはなれにし折そ忘ぬ　とそいはれ給ひける（大臣）いと淸げに縫かさねて奉らせ給ひけれはおほい殿の北方限りなくよろこび給て中將もいと思ふやうにしつと思ひ給ふとて少將（中將）にあひていとおそろしき人もたまへりと

〇もたまへり　此下にと覺すらんといふ詞をそへてみるへし

小将の心に中將の中の君を卑下して云詞

おほ聞え給へしかどまぢかくて聞えかたらはむのほい有てなむしひてそゝのかしきこえたるをわりなく（とわりなきこ）と（さゝ覺すとも）もゆめもとの人（三の君）とひとつにおほすなと聞え給へば少将あなゆゝしよし聞え給へ（何とも仰られよ）ふみ（三の君へ）をだに物し侍りてむや（中の君へあはせんと）御ようい有とうけ給はりしよりなむかきりなく頼み聞えしとの給ひてげに（三の君）かへりみもし給ふべくもあらす（三の君には）おほえも（心かけも也）女君（中の君）もこよなく増りたれは（三の君のかたへは）何しにかはかよはむかゝるまゝに北方（中納言殿の）いられまどひて物もやすくはでなむ歎ける中將殿（三位）によきわかう人ともまゐり集りたるいたはり給ふときゝて彼中納言殿の少納言かく落（落）くほの君とも知らで辨の君かひきにて參りたり女君み給ふに少納言なればあはれに（憫怜）をかしうて衛門をいたしてこと人かとこそ思ひつれ昔はさらにわすれずながらつゝましき事のみおほくてえかくなむとも物せで（消息もせてなり）おほつかなく思ひつるにいとうれしくもあるかなはやうこなたに物し給へといはせたれば少納言淺ましくなりて扇をさしかくしたりつるも打置ていさゝり出る心ちもたかひていか成ことぞ誰かの給ふぞといへばたゞ（衛門）かくて侍らふにおほしいでよその世にはおちくほの御方ときこえしよわたくし（わか身の爲に）にも（も）いとこそうれしけれむかしみ奉りし人は一人も（友だちな云）なくてかはりたる心ちのし侍りつるにといへは少納言いであなうれしやわか君のおはしますにこそ有けれよそにわすれず戀しくのみおほえさせ給へるに佛の道引給へるこそ有けれとよろこびなからおまに參りたりみるにかのへやに居給へりし程まつ思ひ出らる君（落）はまつねひまさりて

〇ねひまさりて　源氏少女巻（夕霧と雲井雁を引へたて置給ふ所）にいとほしき事ありぬへき世なるにこそと近うつかうまつる大みやの御かたのねひ人ともさゝめきけり同野分（夕霧中將紫上をみ給ひし所）女もねひとゝのひあかぬことなき御さまともなるをみるに身にしむはかり覺ゆれと云々同巻（同所）に朝さむけなる打とけわさにや物たちなとするねひこたちおまへにあまたしてほそひつめく

物にわた引かけてまさくるわか人ども有云々紫式部日記にうちねびたる人々など有て年のふけたるをいふといへりまたくさる事なるへけれどなほ廣く用ひて心もちひ有て世の事どもになれたるをいふにや奈禮反彌夫里反備にしてなれふりといふ義なるへし俗に云物なれたる風情と云事なり

いとめでたうて居給へれば（少納言）いみじくさいはひおはしけるとおぼゆそよ〳〵とさうぞきかさみ（汗衫）きたる人いとわかうきよげなる十餘人はかり物語していとなまめかしげなる

○なまめかし　谷川士清云遊仙窟に婀娜𡏖嚢抄に嬝娜をよめり類名伊勢物語に媚の字又姚の字囁の字をよめり字書に婔同壯とみゆ囁は言若不出口といへり艶媚を合より書り生めくの義なり拾遺集に「水もなく舟もかよはぬ此島にいかてかあまのなまめかるらん　尼の媚めくを海人の生和布刈（ナマメカル）にいひかけたるなりかる反く也男女に通しいへる詞とみえたりといへり

（少納言がことを云也）いとゝく御まへゆるされ給ふ人はいかならん我らこそこもなかりしかどうらやみあへればさかしこはさるへき人そかしとわらひ給ふさまもいとをかしげなりかゝれは（落は）父母のゐたちかしづき給ひし御はらからどもにはこよなく増り給へるぞかしと人（御もとの）のきく程はうれしきよしをいひて入立ぬる程には少納言中納言殿の物語をくはしくす彼てむやくがいらへしこと（おもしろの駒のこと）かたれば衛門もいみじくわらふ北方こたびの御むこごりのはぢがましき事すくせにやおはしけむいつしかといふやうに（四の君）はらみ給へれば

○はらみ給へれば　日本紀に妊身所懐所娠有身有なこを皆ハラムとよめり腹實の義なり腹產の義といふはあらし

心ちよげに見え給ひし北方も思ひまつはれてなんおはすめる

○まつはれてのみ　萬葉集に纒をマツハルとよみ童蒙頌韻に縈の字文選に蟠紆の字を訓り古今戀五題しらす　かけのもの大きみ「から衣なれは身にこそまつはれめかけてのみやは戀んと思ひし

（落の詞）四の君の御人は（中将殿を云）あやしきこと哉是にはいみじうほめ

給める物をはなこそ中にをかしげにてあるとぞいはるめれとの給へば少納言はてうろうし聞えさせ給へるなり御はなゝむなかにすぐれてみぐるしうおはするはなうちあふぎいらゝきてあなの大きなる事は左右にたい(對)たてしむで(寢殿は今いふ書院のことなり)むもつくりつべくなどいへば(落詞)いといみしきことかなげにいかにいみじうおほえ給ふらむなどかたらひ給ふ程に中將の君うち(内)よりいといたうゑひてまかて給へりいとあからかにきよげにておはして御遊ひ(奏樂)にめされてかれこれにしひられつるにいとこそくるしかりつれ笛つかうまつりて御ぞかつきて侍るとてもておはしたりゆるし色(禁)のいみしくかうはしきを君にかつげ奉らむとて女君に打かけ給(中將)へば何のろくならむとてわらひ給ふ少納言をみつけ(落)て是は彼あたりにてみし人(中納言殿)にはあらずやさなめり(落の詞)い(中將の詞)かて參りつるぞかたのゝ少將のえむになまめかしかりしことの殘りいかで聞侍らむとの給へば少納言いひしことわすれて何ごとならむあやしと思ひてかしこまりいたり(中將)いとくるしふしたらむとて御帳のうちにふた所ながら入給ひぬ少納言(落の)めでたくきよげにおはしける君かないみじく思ひ聞え給へるにこそあめれさいはひある人はめてたき物成けりと思ひ給へりけるさる程に右大臣にておはしける人の御ひとりむすめうち(内裡)に奉らむと思へど我なからん世などうしろめたし

○うしろめたし　桐壺卷にまたみ奉らてしはしもあらんはいとうしろめたうおもひきこえ給ひて云々河海に影護(ウシロカケマシ)和名こゝろもとなきやうの義なり契冲云和名に全く影護の字なし凡かやうの熊藝の字は和名に出さず云々宣長云この詞は後目痛といふことにてうしろ安しの反なり俗言に氣遣なるといふ意なりといへり直案に眞名伊勢物語に後目痛と書たるによりて說をなせるか宣長は眞名伊勢物語はいとあさまなるものとしてかなたかひなといたく論し置れしはけにさることなるに俄に是をのみ證とせられしは覺束なしこは後目痛にてはなくて後見度なるへし語意は山野なとを夜行するをりなとは草木のさやきなとするをも物の來るらんと覺束

なさにしは〳〵うしろをみたく覺ゆるよりしてい
ふ詞なるへし兎にも角にもうしろ目いたしといふ
説は何とも心ゆかぬことなりしたがふべからず
此三位中將まどらひの程などに心みるに物たのもし
げ有て人のうしろみしつべき心ありこれあはせむわ
ざとの人のむすめにはあらで
○わざとの人の女にはあらて　ことさらひたる人
のむすめにはなくてはか〳〵敷妻にもあらしと落
君のことをおとしめいふなり本臺にはあらしとお
もふなり
はか〴〵しきめともなかむめり年頃かく思ひて心と
ごめてみるに思ふやうなる人なりたゞ今なりもて出
なんとの給ひてしりたるたより有て男君(中將)の御めのと(帶刀の母)
のもとにかう〳〵なんおもふといはせ給へれば御め
のとかくなむ侍る最やむごとなくよきことにこそ侍
るめれどいへば中將一人侍るほどならましかばいと
かしこきおほせならましを今はかくてかよふ所ある
やうにほのめかし給へとて立給ひぬれば御めのと(中將)思
ふやう此御めは父母もなきやうにてたゞ君にのみこ

そかゝり(たよりこし)給ふめれはなやかに(大臣の御むこになりて)かしつかれ給へらば
○給へらば　給はゞなり遣良反波なり
よからむかしと思ひて君の(中將)ゝ給ふやうにはいはでい
とうれしきことなり今よき日して御文も取て奉らむ
などいひやりたりければ此殿(右大臣殿の御かたへ)(右大臣殿の御かた)にはよしとおほしてい
そきといそしう
○いそきといそしう　急字をインクと讀りいは發
語にしてそくは及(シン)の義日本紀のうたにはしけとみ
え靈異記に駈字と訓るも皆同じいそしは俗に云い
そ〳〵することにていさをしきの省り語なり續日
本紀にはいそしみと有日本紀に勤字新撰字鏡に伪
字をイソシと訓りいそきは事をいとなむを云いそ
しうは其有様を云りされど元來は同語なるべし
四月にそとらむとおほして御てうどあるよりも(もとより)いか
めしうしかへてわかき人(女房たち)もとめけいめいし給ふ君は(昔る人の御)
右大臣殿の御むこに成給ふべかなり此殿(二條)にはしり給
へりやといへば衛門淺ましと思ひてまださるけしき
も聞えずたしかなることかといへば

○たしかなる　万葉十二「たしかなるつかひはなしと心をそつかひにやりし夢にみえきや　拾遺恩草上「吹はらふもみちの上のきりはれて峯たしかなるあらし山かな

まことに此四月にていそぎ給ふ物をとつぐる人有ければ女君に（衛門が）かう〳〵こそ侍るなれさはしろしめしたるにやと申せば（落）まことにや有むと淺ましく思ひながらまださることもの給はず誰がいふぞとの給へば（右大臣家　衛門が詞）彼殿なる人のたしかに知るたより有て月をさへさだめてまをし侍るといへば（落の）心のうちには此母北方のしひての給ふにやあらむさやうなる人の（右大臣殿なとのこさき人からた云）おしたて（たしはかりて也）ゝの給はゞ聞ではあらじと人しれずおぼして心付ぬれどつれなくての給（男君）やすることまたれ給へれど（中將）かけてもいひ出給はず女君心うしと思ひたるけしきや猶少しみえけむ中將おほすことやある御氣色にこそさりけなれまろは（おほよその）世の人のやうに思ふ（詞のはしにのみ）そや死ぬや戀しやなとも聞えすたゝいかで物思はせ奉らしとなむはしめより思へどわつらはしき御けしきの此程みゆるはいと（さまてい）くるしく心うしこそおほさむとてはじめもきいみじかりし（みじかりし也　すゝろになと云にあたる）雨にわりなくて參りしをあしゝろのぬす人と（興）はけうぜられしぞかしほと〳〵（よほどばかり〳〵しき事なと云意）おろかなりし猶の給へとのたまへば女君何ことをかは思はむいざゝれど（中將の詞）御けしきいとくるし思ひこそ隔給ひけれとの給へば（の給はぬ）女君「隔ける人のこゝろをみくまのゝうらのはまゆふいくへ成らむ

○みくまのゝうらの濱ゆふ　橘泰が筆のすさびの上に云はまゆふ是は一名濱おもとゝもいふ廣東新語に載る所の文珠蘭也芭蕉に似て極て小なり莖いくへとなく重り花は夏の末より秋に至りて開く極て潔白なり紀州熊野の浦に多く生す花盛のときは白木綿をみるかことしよりて濱ゆふと名つく云々萬葉四人麻呂「みくまのゝうらの　はまゆふもゝへ共心は思へとたゝに逢はぬかも　伊勢集一三熊のゝうらより遠にこく船の我をはよそに隔つるかな　六帖「みくまのゝ浦のはまゆふ幾重われより

人をおもひ増らん「思ひます人しなければみくまの丶浦の濱ゆふ重たになし「いとゝ敷うきみくまの丶はまゆふにかさねて物な思はせそ君「みくまの丶うらのはまゆふいくへともわれをは人の思ひ隔つる　家集「みくまの丶うらのはまゆふ夕されはわれもひとへにうらみやはなき　十題百首寂蓮法師「濱ゆふのかさなる數をしるへにて思ひ立けるわかのうら浪　新撰六帖知家「生そめしうらの濱ゆふ幾年の春をかさねてわかはさすらん　袖中抄に云みくまの丶うらのとは古きものに紀伊國の熊野うらといへりされと伊勢國にある所なり但熊野へまうつるとき人のもとへ遣しける道命阿闍梨「わするなよわするときかはみくまの丶浦のはまゆふうらみかさねむ　今按に此うたは熊野へ詣とてよみたれは紀伊國のみくまの丶うらと思へるにや又は伊勢の熊の丶うらなれとかよはしてよめるなるへし云々　綺語抄に云はまゆふははせをはに似たる草の濱に生るなり葉のもゝ重ねあるなりみくまのに紀伊國くまの丶浦を云也　童蒙抄に云はまゆふとは三熊野のはまにおふるなりくさの皮のうすくて多く重れるなり此みくまのをはみな人紀伊國のくまの丶浦としれり是は伊勢にてみくまの丶うらと云うらのあるなり云々　直案に道命あさりは熊野へまうつとていひ寂蓮法師はわかのうらなみとよせられたる紀伊にうつなし顯昭綺語抄によりて伊勢と思れしは誤なり重るも草の皮の重なるにはあらす是は顯昭も濱ゆふは葉の重りたる多くかさなりたれはやへとももゝへともよむなり其數定へからすといはれたり綺語抄童蒙抄等は皆よろしからす

男君あな心うされはよな罪おほすことありけり「みくまのに生るはまゆふかさねなてひとへに君をわれそおもへる　心ならでや（心ともなくて也）（落）物しきとも（こそありけるなり）聞え給はむ猶のたまへと聞え給へりたしかならぬことにもこそあれと思ひて物もいはてやみぬ（云々の事也）明ぬれば帯刀に御門がいふしかしかのことあるへかなるを心うくもいはぬにこそつひにかくれ有へきことかはといへば（帯刀）さらにさることと聞ずといふされど（此殿の）外の人さへ聞て人々のもとにいとほしがりとふらふ物を知らぬやうは有なむや

さい〳〵ばおそしきことかな君の御けしき今みむとい
ふ中將殿に參りて見れば

○中將殿に參りて　こゝに中將殿にと云は二條殿
にはあらず父大將殿の方なり女君と同じ殿にては
下のことばとも〳〵いはれじ又下に二條におはして
有を合せみよ

春の庭を見出しておはすいとおもしろき梅の有ける
を折て是み給へ世の常になむにぬ御けしきもこれに（二條の北方へ梅の折枝にそへて贈るといふ文詞）
なくさみ給へとの給へば女君たゞかく聞え給ふ（以下女君の返事也）「う
きふしにあひみるこそはなけれども人のこゝろの花（梅よりうきふしと詠り　憂に相を兼たり）
はなほうし

○古今小まち「色みえて移ふものは世中の人のこ
ゝろの花そ有ける

さてなむ花につけてかへし給へれは中將いと哀にを
かしとおほす猶あれこそ心有と聞たるにやとくるし（吾）
うて立歸りされはよおほしうたがふことこそ有けれ（文詞北の方の歌にあたりてされはよといへり）
さらにつみなしとなむたゞ今は思ひ給ふるをまろが（また立かへりて返事有也）
心の程は猶み給へとて（中將は）「うきことに色はかはらすう（俗にいふやはり也）
めの花ちる計なるあらし成けり

○うきことにの歌　北のかたの人の心のはなはな
ほうしとかこち給へるは彼色にはみえすてうつろ
ふ人の心のあたなるたくひをこその給ふらめと此
梅のはなはうきことにも色かはり移ろひなとはせ
ねと散はかりにふく嵐かつらきことなりとよみて
めのとかこゝろなく右大臣のかたへ聟とられよと
すゝむるかむくつけくうるさきよしを述給へるな
り

こおしはかり（推量）給へとの給へれは女君「さそふなる風
に散なば梅花われやうき身に成はてぬへき」（實た兼）

○さそふなる風に散なは梅花　もし右大臣のかた
へ聟入なとし給はゝわか身はうきものに成はてな
んとなり

とのみぞあはれにとあるをいかなることを聞たるに
かあらむと思ひ給へる程に御めのと出來て云やうか
の右の大いどのゝことはの給ひしやうに

○の給ひしやうに　前に中將一人侍るほとならま
しかはいとかしこき仰ならましを今はかくてかよ
ふ所有やうにほのめかし給へと有し首尾なり

物し侍りしにわざとやむことなき(取立たる本妻にはあらしと也)めにものし給はさ
なり時々かよひて物し給へかしとのに聞えて四月と(聟とりは)
なむ思ふといそがせ給なりさる心し給へと聞ゆれば(其用意なし給へと申あぐる也)
いとはづかしげにゐみてなてふ男のいな(否)と思ふこと
をしひてするやうかはある世の人(なへての)にもにずよき身に
もあらねはさの給ふ人(聟にさらんなど)もあらじかゝることなまねび
給ひそ

○なまねひ給ひそ　ないひそといふことなり今も
西武上毛などの山家なとには物いふと云ことをま
ねると云所往々有けまねをする是也人の云ことを
其まゝもて來て云也

かたは(みゝるしと云事已にみえたり)なりわざとのめにもあらざなりとはいかでか
しり給いとさいふはかりなる人(殊にさまて云たさしむる様なる人からにてはなき物なとの)にもあらぬをとの給
へ(給ふ也)は御めのとあなわりなもともしるく(書)

○もともしるく　最炳焉の文字にていちしるくな
るへし殊更に目立しきを云上(二十五ツ)に御てうとある
よりはいかめしうしかへてわかき人もとめけいめ

いしたまふと有なとに照應す
おぼし立ていそぎ給ふ物をよし御らむせよ(聟入して)やむごと
なき人のしひての給はむことをはいかゞはせさせ給
はむ何かは(なにの物かは也)君だちははなやかに御めがたのさしあひ(打揃て)
てもてかしつき

○もてかしつき　加禮反計にて計と幾と通してか
しつかれといふことなり

給ふこそ今めかしけれおぼす人有とても夫をばさる(それはそれに)
ものにて(して置也)御ふみなど奉り給へ(大臣との〻御壻へ)かの君(落窪)ら思時は(思ひめぐらしてみる時は)かむだ
ちめのむすめにはあむなれどおちくぼの君とつけら
れて中(はらからの)のおとりにて

○おとり　直廉呂案におとるはまさるの反對なり
まさるは優の字にて其義は益なり左流反須また左
里反志にてますともましとも活らくなりさて言の
本は直盛より出たりまさかりは物の益となるか
故なりおとるは劣字にて其義は損なり本義は盛の
反對にして衰なり呂以反利呂不反流呂婁反禮にて
おとりともおとる共おこれ共活く詞なり

二間なる所へ
うちはめられてありける物をかくたゞひなくおほし
（側にはなり）
かしづくこそあやしけれ人のかたへは父母ゐたちて
（心ゆかしう思はえゝと云ほどの詞なり）
かしづかるゝこそ心にくけれといふに中將おもてう
ちあかめて

○中將面打あかめて　直案に是ははぢらひ給ふに
はあらすふつくみ給ふ色のおもてにあらはれ給ひ
しをいひてから文に所謂勃然變色なとゝ同し下に
の給ふ詞共をみて知るへし

ふるめかしき心なればにやあらむ今めかしくこのも
しきこともなし世のおぼえもほしからず父母くした
らむをともおぼえず落くぼにもあれあがりくぼにも
（世ー）
あれわすれじと思はむをばいかゝはせむ人のいはむ
（めのとの身として）（そこにたゞ）
はこさわりそこにさへかくの給ふこそ心うけれたゞ
（御身の爲にまろか心さしなきやうに思す共也　此程そなたにも心安）
御爲に心さしなけにおぼすとも今彼もつかうまつる
（うつかうまつる樣あるへしと也）
やう有なむとていとたのもしけなる氣色にてたち給
ふめるを帶刀つく／＼と聞てつまはじきをはた／＼
（中將）
としてなてふかゝること申給君とまをしながらもは
（人言）
つかしげにおはすとはみ奉らすや唯今の御中は人は
（にてはなち奉るへき御けしきにもあらぬ物をさなり）（おほしめし）
なちげにもあらぬ物を彼の給ひつるやうに心さした
（通りに）（右大臣殿の方）（わが身に）
がはずはなやかなるかたにやり奉りて御とくみむと
（人しな）
おぼしたるかあな心う少しよろしき人のさる心もた
るやはあるなでふ御名たての落窪ぞおいひがみ給ひ
（落の）
てけり是をかの御あたりに聞給ひていかゞおぼすへ
（中將）
き今よりかゝることの給ふな君のおぼしたることい
（斯）
とはづかしくいとほし此御めのいたはりかうやいと
（母のさる心あらず共）
みまほしくおはするさらずともこれなりな侍らば御
身ひとつはつかうまつりてむ物をかやうの御心もた
る人はいとつみふかゝむなりまた聞え給はゞこれな
りほうしに成なむといと／＼ほし猶人の思ふ中さく
るは大事にはあらずやといへはおとゞ

○おとゞ　直案に秋成本めのとゝ直したるはあら
じおとゝは下文にもめのとのおとゝさこそいひし
かとゝ有ておもとゝ云に同しおもとゝいふへきを
おとゝといへる源氏にも多くみえたり

口もあかせすさいふこさ
いらへもせさせすいひなすかな誰かはたゞ今さり給
へすて給へと聞ゆるさてさにはあらずやめあはせ奉（帯刀か詞）
り給ふは
○めあはせ奉り給ふは　直案にめ合せたてまつら
んさするはさてさにはあらすやさ打かへしてみる
へし是にて語勢いさつよく妙なる書さまなり
（母の詞）いてあなかしかましさりはて〻（右大臣殿へ中將殿を）もさまあしからむか
などかおごろ〳〵しうはいふべからむかたへはめを
思ふなめりさいさはしさ思ひながら口ふたげに云へ
ば帯刀わらひてよし〳〵猶まをしそ〻（母の心中には）のかさむさお
ほしめしたりた〻これならはうしに底侍りなむ御つ
みいさ〳〵ほしおやの御うへをはいかでかしらざら
むさてかうそり
○かうそり　和名抄（僧房具）剃刀　玄弉三藏表云鐵剃
刀一口（剃他計反去聲　之云與鬀同）　剃刀（和名加美曾利）
わきにはさみてもたりて又云出給はむ折ふしさか
きそがむさて立ばおど〻獨子成ければかくいふをい
さいみしさ思ひて口（たのか口からなり）からいさゆ〻しきことをもきく

かなはさみたらむかうぞりうちやをらぬさ心（利心）みよさ
いへば帯刀みそかにわらふ君（少將）はさらにさうじ（動）給ふべ
きにもあらず我子（あのさは）のかくいふを思ひでふえう成（少將っけ引給はね）よし
（は無口なゐ一こした右大臣へ）聞え奉らむさ思ふ中將の君は女君の例のやうならず
思ひたるは此事聞たるなめりさおぼしぬ二條にお
して御心ゆかぬつみを聞あきらめつること〻うれし
けれ女君何事ぞ（中將）右のおほい殿のことなりけりなどの
給へば女君そらごさ〻てほ〻ゑみてお語へれば（中將）物く
るほしみかさの御むすめ給ふさもよもえ侍らじ始（女君へ）も
（始にもきこゆしこさくに）聞えしをたゞつらしさ思はれ聞えじさなむ思へば（此詞の下さか）を
（う心つかひもするなど云心含めり）むなの思ふことはまた人（本妻の外に）まうくるこさこそ歎くな
れさ聞しかば其すぢ（こさ人なみんなさ）（諸）はたえにたり人々さかうきこゆ
さもよもあらじさおぼせさの給へば（諸）さ思はむもした
くづれたるにやさいへば
○したくつれたる　六帖題思ひ煩ふ　石河女郎
あた人は下くつれたるさしなれや思ふといへさ

まれすして狹衣四中三十五オにいとゞ此御ものかたりともに下くつれたる心ちし侍ると云さまも云々

（中將）おもひ聞ゆときこえはこそあやうしともの給はめた（右大臣姫君を）だつらきめみせ奉らじと聞ゆれば心さし（こそなる）のあるかはなと聞え給ふたちはき衛門にあひてさらになむ（衛門か）思ひうたがひ給ひそ此世には御心うかるへきにあらずと云御めのといとほしくいはれてまたもうち出ず（中將と落と）彼（右大臣）殿にもかくおほしかよふ所有けりと聞えておぼし（むことりの）絕（こゝは）にけりかく思ふやうにのどやかに思ひかはしてすみ給ふほとにはらみ給ひにければましておろかならず

○おろかならす　おろそかならすの省語なり日本紀に輕易また粗字をオロソカと訓り

（神祭る頃なれは）四月大將殿の北方宮たち棧敷にて物見給ふに中將の君に二條に物見を聞え給へ（落の御事）わかくものし給ふ人はものみまほしくし給ふものを己も今まで對面せぬ心もとなきにかゝるついでにとなむ思ふときこえたまへ（對面せはや）ば中將いとうれしと思ひ給へるけしきにていかなるにか侍らむ人の（あたし人の）やうに物ゆかし共し侍らさめりいまそゝのかして參らせむと聞え給ひて二條におはして（母北かた）うへはかくなむのたまふぞかしときこえ給へは心ちのなやましうてあやしけに（はらみ給へる事）成たるも思ひしられて物みに出立ば我みえたらむに（なかく〳〵に我願の人にみえたらんになり）いとわりなからむとてものうげなれば中將誰かみむ（母北方）うへ中君こそはそれまろがみ奉る同じことゝてしひてそゝのかし聞え給北方の御ふにも猶わたり給へをかしき見物も今は諸共にとなむ思ひ給うると聞え給へりみ給ふ（御ふみ）につけても彼石山まうでの折一人えりすて（擇）給ひしもおもひ出られて心うし一條殿の大路にひはだ（檜皮葺）のさじきいといかめしうておまへにみなすなご（砂子）しかせせむざいうゑさせひさし（久）うすみ給べきやうにしつらひ給ふ暁にわたり給ひぬ衛門少納言一佛じやうごに

○一佛淨土　盛衰記四十八ウ五女院寂光院入御の條に常は佛の御前に參り給ひて過去聖靈一佛淨土へ

導き給へと申させ給ふに付ても云々　直廬案に一佛淨
土とは彌陀の淨土を云天台智者大師十疑論（上卷首書本十六ウ）
第三疑問十方諸佛一切淨土法性平等功德品等行者
普念一切諸佛功德生一切淨土今乃偏念求生一佛淨
土與平等性乖云何得生淨土答曰一切諸佛淨土實皆
平等但衆生根鈍濁亂者多若不專繫心一境三昧難成專
念阿彌陀佛即是一相三昧以心專至得生彼國如隨願
往生經云普廣菩薩問佛十方悉有淨土世尊何故偏讚
西方彌陀佛專遣往生佛告普廣菩薩閻浮提衆生心多
濁亂爲之別偏讚西方一佛淨土使諸衆生專心一境即
易得往生云々とあるを知るへし

うまれたるにやあらむとおぼゆ此君（落）にいさゝか
○いさゝか　聊の字をよめり字書に且也と注す直
案にいは發語さゝはさゝれさゝれなみなどのさゝ
にて小の義かに氣なり少しばかりでもの意
心よせあらむ人をばねたき物に（繼母北いかた）云のゝしりしをみな（見）
ら（繼）ひたるにたいの御かたの人とて（左大將殿の北方權い方の人々を）いたはりよういし（用意）
給ふ樣いとめでたしと思ふめのと（書刀か母）のおとゞきこそ云

しかいできて心しらひつかうまつりていづれかこれ
なりがあるじの君ぞと
○いづれか維なりかあるしの君　わか子の維歳か
妻はたれにかとて女房たちの中をとひありく也
とひありきてわかき人々にわらはる女君は何かうと
〳〵しくは思ひ聞えむおもふべき中はむつましく
ぬるのみなむ後もうしろやすきとてうへ（繼母北方）や中の君な
ど
○うへや中の君なと　二の卷廿九りんし祭みに北
の方出立條にわれや三の君なと云々
おはする所に入奉り（御車）給ふみ給ふに（繼母北いかた）我御娘嬢君にもお
とらずをかしげにてみゆ紅のあやのうち。あはせ一
かさねふたあゐのおりものゝうちき（袿）うすもののうはぎ
こきふたあゐのこうちぎゝ給ひてはづかしと思ひ給
へるいとをかしう匂ひ給へり姫みやはげにたゞの人
ならずあてにけだかくて
○たゞの人ならす　毛詩定之方中云匪直也人（タヾノヒト）
秉心塞淵　○あてにけたかき　眞名伊勢物語に
高貴の字をアテと訓りけたかきは氣高なるへし一

説にはあては上手なりといへり嗚呼妙なりと稱美する詞なるへしと和訓栞にみえたり

十二ばかりにおはしませばまだいとわかういはけなうをかしけなり中の君はわかき御心にをかし(落の御上を)とおぼしてこまやかにかたらひ聞え給ふ物見はてぬれば御車寄せて歸り給ふ中將の君やがて二條にとおほせご北方さわがしうて(さじきにては)思ふこと聞えず成ぬいさ給へ一二日も心のどかにてかたらひ聞えむ中將の物さわがし(やがて二條になさ)きやうに聞ゆるはなぞおのが聞え無事にしたがひ給へ中將はいとにくき心ある人ぞな思ひ給ひそとてわ(前)らひ給ひてゐ給へり御車寄せたればくちには宮中の君しりには(後)よめの君とわれとのり給ひてつぎ〳〵に

○つぎ〳〵に　諸本此下にみなのり給ひてと云へる一句あり直案につぎ〳〵に皆といひて中將とのをあとにいふへきことわりもなく詞も重りたれは今定めて上の皆のり給ひて衍文として削れり

中將殿みなのり給ひてひきつぎて大將殿におはしぬしむ殿の西の方を俄にしつらひて

○しつらひ　直案にこゝかしこ取つくらふことにてしつくらひの省り言なるへしつくろひは造作なり

おろし奉り給ひつごたちの居所には中將の住給ひし西のたいのつまをしたりいみじくいたはり(勞)給ふ大將殿もいみじく思ふ子の御ゆかりなればごたちに至るまでいたはりさわぎ給ふ四五日おはしていとなやましき程に(句)すぐしてのどやかに參らむとてかへり給ひぬ(上は)まして對面し給ひて後はあはれなる物に思ひ聞え給へりかくてたどしへなく

○たどしてへなく　たとへん物なくなりといへり直案にたど〳〵しき方なくにてこゝは物毎行とゝかぬかたなきを云なるへし

思ひかしづき聞え給ふ君(中將を指す)の御心は今は(落の父中納言)とみ給ひてければ中將の君に聞え給ふ今はいかで殿に知られ奉らむ老給へれば夜中曉のこともしらぬをみ奉らでややみなむと心ぼそくてなむと聞え給へば中將殿もさはおぼすべけれども猶しばしねむじてなしらせ奉り給

ひそしられて後はいさほしくてえ(能)北方てうせじ今少
してうせむと思ふ心有
○てうする　直案にてうするはちようの假名たか
ひにて懲する成へし前にこりぬやと有なと思ふへ
し秋成打字を注し置るは誤なり
またまろもいま少し人らしく成て中納言はよもとみ
にしに給はじとのみ云わたりたまふにつゝみてのみ
すぐし給ふ　はかなくて(いたつらになと云意)としかへりて正月十三日い
とたひらかにをのこゝうみ給へればいとうれしとお
ほしてわかき人の限り(若きものはかりにては)してうしろめたしとて男君の
御めのとむかへ給ひてうへ(母北のかた)なとのし給ひけん(子うみ給ひし時のことゝ)やうに
(たり)萬つかうまつれとてあづけ奉りたまふに御遊(めのと)ごのな
ごし給ひ居たり女君(めのと)のうちとけ給へるをみてむゝ成
けり男君のあだわざをし給はぬはと思ふ御うぶやし
なひ
○御うふやしなひ　禮記内則に接をうふやしなひ
と訓り産所へものをおくることをいへり葵の巻に
院をはしめ奉りみこ達かんたちめ殘りなきうふや

しなひとものめつらかにいかめしきを夜ことにみ
のゝしる
我も〳〵とし給へれどくはしくかゝず思ひやるべし
たゞしろかねそのみ萬にしたりけるあそびのゝしる
かくめて度まゝに衞門いかで北方にしらせばやと思
ふ御めのと(乳母)は少納言子うみあはせたりければ(乳付ることゝ)せさせ
給ふこれ(中將)をうつくしがり(寵)かしづき物にし給ふ　つか
さめしにひきこえ中納言に成給ひぬ藏人(四の君の夫)少將中將に
成給ひぬ大將殿(父君)はかけながら(大將を兼帶しながら也)大臣に成給ひぬ左のお
とゝのの給ふかく子のうまれたるにおほち父よろこ(昇進する也)
びをするかしこき子なりと申給ふ今はましておほえ
ことにはなやぎ增り給ふ衞門督(中納言は)さへかけ給ひつ中將
は宰相に成給ひぬ中納言はかく少將(藏人)なりあがり(任)
給ふにつけても二の君(中將もとの妻)北方などはなどか(いかなることにか)名殘有てだ
に時々くまじきといみじうねたがれどもかひあるべ
くもあらず衞門督(中納言)おほえの增り我身のときに(折えたるまゝに)成給ふ
(と云事)まゝに中納言殿を吹風につけてもあなつりてうし

給ことしも多かれど同しことのやうなればかゝず又のとしの秋また男君うつくしううみ給へれば左の（落）大い殿の北の方御うぶやにうつくしうもいそがしうもとり續き給へるかな此度はこゝにあづかり奉らむとて御めのとぐしてむかへ奉り給ふ帶刀は左衛門のせう（尉）にて藏人すかく思ふやうにてめでたくおはすれど（落）中納言殿にはまだ知られ奉り給はぬことをあかずおぼす中納言は老ぼけ給へるうへにもの思ひのみをしてをさ〳〵

○をさ〳〵　長々といふことにて専なる意なり箒木巻にをさ〳〵立おくれすいつくにてもまつはれきこえ給ふ云々殿上にもをさ〳〵人すくなにて云々なとみえたりまた頗の意に用ひたるも有といへり直麿案に殊に格別なと譯していつにてもかなふへき歟

出まじらひ給ふこともなく〳〵といりゐ（引籠）給へり落くぼの母君のつたへ得給へりける家三條なる所にていとをかしかりけるをおちくぼの君になむさらせたりけるを今は世になくなりにたればこそりや（領）うせめとの給へば北方もさらなる事世にいきたり共（たとひ落の世に存生なりとも）さばかりの家りやるず計にはあらざらましよきあこ（我子）たちわれらがすまむにいとひろうよしといひてふたとせ（歳）いでくるさうのものをつくしてついちより

○ついちより　契沖　云ついちは又ついかきとも云和名抄（墻壁類）築墻淮南子云作築墻（一名都以加岐　一名豆以比知）字のことくつきかきつきひちなりきをいに通はすは常のことなり土をひぢとよめり土形といへる氏なと是なり土をもてつきたる垣なれはついかきともついひちともいふなり世に木竹にてゆへるのみかきといふ樣にならへりもとは然らぬことなり云々

直案についちは今いふ土屛のことなり文字も土に從ひたれはもとよりさる事なからそはたは安からねは檜垣もあしかきも竹かきも柴かきもあるなり若紫の巻に夕くれのいたう霞みたるにまきれてかの小柴かきのもとに立出給ふ人々はかへし給ひて惟光はかり御供にてのそき給へは云々また浮舟の巻にとのゐ人あるかたにはよらてあしかきしらめ

たる西おもてをやをら少しこほちていりぬ伊勢竹とりなとにかいまみとあるも築垣にはあらしと知るへしされは木竹にてゆへるをかきといへるも古きことなり其餘古きものにさま〳〵のかき有さるゆゑについひちついかきといひて竹木にてしたるにわかてるなりけりかきはかこみの約りたるなるへし　夕顔の巻にむつかしけなる大路のさまをみわたし給へるに此家のかたはらにひかきといふものあたらしうして云々追加

はじめてあたらしくつきまはしてふるき(古材)一つまじらす是を大事にてつくらせ給ふかくてことしのかものまつりいさをかしからんといへば衛門のかう(中納言)のとのさう〳〵しきにごたちに物みせむとてかねてより御くるまあたらしくてうじ(調)人々のさうぞく共たびてよろしうせよとの給ひいそぎて其日に成て一條の大路のうちくひ(打標)うたせ給へれば今はといへとも(祭のわたらんきわなりとも也)誰計かはさらんとおぼしてのとかに出給ふ車五ばかりおとな二十人ふたつはわらは四人しもづかひ四人のりたり男君ぐし給へれば御前(前駆)四位五位いとおほかり弟の待従成しは今は少將わらはにおはせしは兵衛のすけもろともにみむと聞え給ひければみなおはしたりける車どもさへそはりたればはたちあまり引つゞきてみなしたい(次第)どもに立にけりとてみおはするにわかくひ(標)したる所のむかひに古めかしきびらうげのひとつ

〇ひらうけ　檳榔毛とて車の名なり枕草紙にひらうけはのどやかにやりたる急きたるはかろ〳〵しくみゆ　拾芥抄に檳榔毛の車は束帯なとのとき乗用する車なれはしつかなるかよきなり花鳥餘情に云凡車は唐廂檳榔毛車等は皆檳榔をもてふく尼用半蔀網代等はみな網代をふけり　桃華蘂葉云檳榔毛赤色簾(錦縁)蘇枋末濃(スソゴ)下簾繧繝(ウンゲンベリ)端轅或時被用青簾(草縁)青末濃下簾　金銅金物之様云々　西宮記云檳榔毛太上天皇以下四位以上通用云々

あじろ一つたてり御車ともたつるに男君のまじらひもうとき人にはあらずしたしう(親)たてゐはせてみわたしの北南にたてよとの給へば此むかひなる車少し引

やらせよ御くるま立させむと云にしふね(執念)がりてきかぬに誰がくるまぞとゝはせ給ふに源中納言殿と申せば君(二條)中納言のにもあれ大納言にてもあれかはかり多かる所にいかで此うちぐひ有とみながらは立つるぞ少し引やらせよとの給はすればざふしきどもよりて車に手をかくれば車の人(源中納言の車預りの人)出來てなどまたまうごたち(直人)の(斯)かうするいたうはやるざふしきかなかうけだつる(高家また豪家 蹴は本誤)わが殿も

○かうけだつるわか殿も　是は高家だつるにて宇治拾遺十(伴大納言應天門をやくこと)舍人大にはら立ておれは何事いふぞわか主の大納言をかうけに思ふかおのか主は我口によりて人にてもおはするはしらぬかと有と同しく歷々ぶるおのれか主人の殿も中納言にておはすやとものけなげにいふなり

中納言におはしますや(督殿のさふしきともの答)一條の大路もみな領し給ふべきが(斯)かう(者 衍)はうすとて(爲)わらふ

○一條の大路も皆領し給ふへきがかうはうすとてわらふ　直案かうはうすのはうのう衍二條はさら也一條の大路も領し給ふへき君かかうはするそとて權中納言のざふしきらがなとまたまうごたちのかうするといへるに答てわらふなり

西東さい院もおちてよぎ道しておはすへかなるはさ口あしきをのこ又いへば同じ物と殿をひとつ口にな(源中納言方)云そなといさかひてえとみに引やられは男君たちの御車どもまたえ立で君御前の人左衞門藏人をめしてかれおこなひて少し遠くなせとの給へば近く寄てただひきに引やらすをのこども(源中納言のかた)すくなくしてえふと引とゞめす御前三四人有けれどやうなく此度の

○やうなく此たひの　益もなうこのたびのいさかひしつへかりしといさかはぬをよろこふ詞也

いさかひしつべかめりたゞ今の(ものみる人)太政大臣のしり(後)はけ(蹴)るとも此殿のうしかひにてふれてむやと云て人の家の門に入て車をたてり車の中なる(源中納言かたの)人めをはつかに見出してみるにすこし(二條中納言に)はやうおそろしき物に世に思はれ給へれどじちの御心はいとなつかしうのどかになむおはしけるいとむとくなるわざかな今は(いかて相手になる)いかゞい

へきそさ世
らふへきなごさだむるに兆てんやくのすけさ云しれ
者おきたる有ければいかでか心にまかせては引やらせ
むさ云てあゆみ出て今日のことはもはらなさけなく
はせらるまじうちぐひうちたるかたに立たらばこそ
さもし給はぬむかひに立たるくるまをかくするはな
ぞ後のこさ思ひてせよ又せむとしれ者はいへば衛門（帶刀）（後日のことを料簡してせよさ也）
尉てむやくさみて年頃くやつに（當せんさなるへし）（かやつさ云に同じ）
○くやつ　人を指しての丶しる詞なりかやつさ云
さ同しき様なれご少し心たかへりくやつは此奴な
りかやつは彼奴なり
あはむと思しにうれしと思ふ君（二條中納言）も又てむやくさみ
給ひてこれなり夫はいかにいはするぞとの給へば心（尉）
えてはやるざうしきごもにめをくはすればはしりよ
りて後のことを思ひてせよさ翁のいふよ
○めくはす　目くはすはめくませをするを云彼をうて
さ目にて知らする也　伊勢物語（百四段）むかしこさな
る事なくてあまになれる人有けり云々男うたよみ
てやる「世をうみのあまとし人をみるからにめく
はせよともたのまるゝ哉　また後拾遺に「あてゝり
する鑒の住かをそこ也とはめいふなさしやめをくは
せけん　なこ有て目にて知らするを云　屈原九歌
に滿堂美人忽獨與レ余目成史記項羽本紀云須臾
梁眴レ籍注師古曰眴音舜動目而使之なさ訓せたり
また源氏若菜巻上にも人々目をくはせつゝあまり
なる御おもひかなさいふへし云々宇治拾遺二（な
り村強力の學士にあふこさ）になりむらしりけよ
さいひつる相撲に目をくはせけれは云々
殿をばいかにし奉らむぞさてながあふぎをさしやり
て
○なかあふき　直麿案に中華古今注に曰扇長扇也
漢世多二豪俠一象二雉尾一而制二長扇一也とみえ同書に
周制以爲王后夫人之車服輿車有レ翣即緝二雉羽一爲二
扇翣一以障二翳風塵一也漢朝乘輿服レ之後以賜二梁孝
王一魏晉以來無レ常惟諸王皆得レ用レ之と有て雉尾扇
は今禁中に用ひ給ふ龍顔を掩ひ奉る翳の事也長扇
は是に象りて作りたる物とあれは大臣家なさ是を
用るに妨なかるへくそのうへ此頃なか扇の制も傳
りて有しことこゝにて明らか也維式ともか手にも
たるまゝにやかてそれに一打也

かうふりをはたと打落しつもとゞりはちりばかりにてひたひははげいりてつやくとみゆれば物みる人にゆすりてわらはるおきなそでをかつぎてまとひ入にさと寄て一足づゝけるのちの事いかてそあ る〳〵と心の限りはしつ翁のしりぬべかなりいへとせむれどいき音もせず君まな〳〵とそらせいしをし給ふいといみじげにふみふせて車にかけて引やるに男ともみこりておぢわなゝきてえ車につかずよそ人のやうにさすがにそひて外のこうぢに引もてきて道なかに打すてゝいぬる時にそからうじてをのこども寄きてながえもたげたるけしきいとあしげなり北方よりはじめてのりたる人物もみじ歸りなむとうしかけてはやめておひまどひてかへればいさかひしける程に一のくるまのとこしばりをふつ〳〵ときりてければ

○とこしはり　轉（トコシハリ）　和名抄云唐韻云轉音博車下索也　釋名曰轉今按和名度古之波利　在車下與輿相連縛者也

大路なかにはたと引落しつ下らうの物みむとわなゝきさわぎわらふことかぎりなし車のをのこ共足をそらにてまどひたふれてえふともかゝげずいで給ふまじきにや有けむかくいみじきはぢの限りをみることとつまはじきをしつゝまごふのりたる人の心ちたゞ思ひやるへし皆なきになきけり中にも北方むすめごもは口のかたにのせて我はしりのかたにのりたりければこよなきよこがみより引おとしけるに

○よこかみ　和名抄車具類云軸說文云軸直六反和名與古加美持輪者也

なからばかり出たりけるがからうじてはひのりにけれどかひなつきそこなひて

○かひな　谷川士清云神代紀に肩をよみ靈異記に臂をよめり今かひなといふ所は胛なりといへり直案に和名鈔身體類胛（カヒナ）　四聲字苑云胛甲□反和名加伊加禰　肩下也とみえたりしかるに古事記には肱を加比那とよみ新撰字鏡も又同し萬葉三に木綿手次可比奈爾懸而なともみえたるは胛の字とはおなしからさるか源氏常夏巻にあふぎをもたまひなからかひなを枕にてうちやられたるみくしの程いとなかうこちたく

はあらねといとをかしきすゑつきなり總角卷に嬬君もの思ふさきのわさと聞しうたゝねのいとらうたけにてかひなを枕にてね給へるに浮舟卷に君はかひなを枕として火をなかめたるまみかみのこほれかゝりたるひたひつき云々なと有をおもひ合すへし

をい〳〵と泣給ふいか成物のむくいにかゝるめみるらむとまどひ給へれば御むすめどもあなかま〳〵との給ふからうじて御前の人々（まさひしなるへし）尋ねきてみるにかゝればいみじと思ひてどう（車 胴木）かきすゑよとおこなるいでた（いひ出たる也）るに皆人々（下らうどもの物みんとせしが）いとむとくなる御車のぬしたちかなと笑ふいとはづかしうてさわやかに（みな人々のひそ〳〵として笑ふを云）もいはぬにおもてをみかはして立りからうじてかいすゑてやるに北方あらあらとまどひたまへばねりつゝやるからうじて殿に（かへり）おはしたり御車寄たれば北方人にか（かひなつきそこなひたれば）ゝりてたゞ時のまになき（まみの）はれており給ふをなそ（大臣）〳〵とおどろき給へばかう〳〵しか有つるよしを語りまをせば中納言いみじとおぼしたることゝ限りなしいみじきはちなり

我ほうしに成なむとの給へ共いとほしうてえ成給はず世中に此事を云わらひのゝしれば左のおとゞ聞給てまことにやしか〳〵はせし女車を情なくしたりといふなるはそのうちにかの二條のものと聞しはいかに思ひてせしぞとの給へば衞門督なさけなしと人のいふばかりのこともし侍らずうちぐひ打立侍りし所に車たて侍しををのこども所にこそ多かれこゝにしもと云侍しをやがてたゞいひにいひあがりて車のとこしばりをなむ切で侍ける雜人うち（打擲）たるはそれがなめげにいひ立りしをにくさにかふりをなむ打落してをのこどもひきふせ侍しおのつから少將兵衞佐（少納言の弟達）もみ侍りきいと人物しといふはかりのこともし侍らざりきとの給へば人の（左大臣）そしりなおひそと思ふやうありきとの給へば女君はいとほしかりて歎き給へば衞門さばれいたくなをぼしそ（いたくいとほしさな覺しそさなり）あいなしおとゞ（父）のおはせばこそあらめてむやくがうたれしは彼しるしにやといへば女君いとむねきたなかりける（少し腹なふくみてはら立給ふにや）我人にはあらで君の人に成ねそれこそかくものはしうねくおもひいへとの

たまへばさば衛門わがきみにはつかうまつらむ衛門がおもひしかぎりのことをせさせ給へばげにおまへよりもたからの君となむ思ひ奉るといふかの（中納言の）北方は車より落かひなそこなひなどしていみじうやみくるしがる御子どもあつまりてぐわむだてなどしてやめたてまつりてけり

落窪物語證解巻之五

（源中納言）かゝる物思ひに（北）そへて三條いとめでたく造り立て六月にわたりなむこゝにてかくいみじきめをみるは

○こゝにてかくいみしき　白氏文集凶宅詩云長安多ニ大宅一列在ニ街西東一往々朱門内房廊相對空梟鳴松桂枝狐藏蘭菊叢蒼苔黄葉地日暮多ニ旋風一前主爲ニ將相一得レ罪竄ニ巴庸一後主爲ニ公卿一寢レ疾歿ニ其中一連ニ延四五主一殃禍繼相鍾自ニ從十年一來不レ利ニ主人翁一風雨壞ニ簷隙一蛇鼠穿ニ牆墉一人疑不ニ敢買一日毀ニ土木功一嗟々俗人心甚矣其愚蒙但恐ニ災將レ至不レ思ニ禍所レ從我今題ニ此詩一欲レ悟ニ迷者胸一凡爲ニ大官一人年祿多高崇權重持難レ久位高勢易レ窮驕者物之盈老者數之終四者如ニ寇盜一日夜來相攻假令居ニ吉土一孰能保ニ其躬一因レ小以明レ大假レ家可レ喩レ邦周秦宅ニ崤函一其宅非レ不レ同一興ニ八百年一一死ニ望夷宮一寄語家與レ國人凶非ニ宅凶一此詩全篇こゝの終始の意によくかなへり故にくた〳〵しきをいとはすこゝにあぐ

愛のあしきかと心みむとて御むすめとも引くしていそき給ふ衛門聞て男君のふし給へる程に申す三條殿

はいこめてたくづくと立てみな引ゐてわたり給ふへかなりこうへのこゝうしなはですみ給へ故大宮のい（落ノ母在）さをかしうてすみ給ひし所なれはいと哀になむおほ（ゆかしう哀に覺ゆるさ也）ゆるとかへすへも聞え置給ひし物をかくめにみ（眼前）すへゝりやうじ給よいかで領じさせはてじといへば（令領）男君券は有やとの給へば

○券　周禮注鄭別書判書今之文券也杜氏通典凡貨二賣奴婢馬牛田宅一有二文券一などみえたるは今の取かはし證文なり通鑑五代漢紀李崧以二南京宅券一献二於蘇逢吉一云々とあるはまたく家宅の沽券證文なりこゝなるも宅券のことなるへし源氏須磨巻に領し給ふみさうみさきよりはしめてさるへき所々のけんなとみな奉り置給ふと有

いとたしかにてさふらふとではいとよくいひつべ（其ことわりな）かなり渡らむ日をたしかにあないしてこその給へは（源中納言の）（承りてなり）（來）女君又いかなることをしいだし給はむ衛門こそけし（落）からず成にたれ

○けしからず　不怪異の義にて極ておそろしきといふ詞なり餘りしくてけしきともいはれぬと云意よりしてかくはいへり不褻の義にてよのつねならすと云意なりなと云へるはなかへひか言なり

たゞいひはやすやうに

○いひはやす　いみじき心を側よりいひそゝのかすやうの意なり音曲の鼓吹をはやしと云囃と書り（公ヱ）映あらすの義にて今一しほの興をそふるを云へり又取はやすつみはやすもてはやすなと映あらすの意より轉してめてもてあそふことゝなれり

いみじき御心をいふとうらみ給へば衛門何がけしからず侍らむだうりなき事にも侍らばこそあらめといへば男君物な申そこゝには心もおはせず御侮あしき（ここなる）（落の）人はいと哀なりとの給へばわか身さいなまるゝとて（殊さらに）（落）わらひ給ふ衛門心えていかゞは申べきとてたちぬ月（何とも申さじとなり）たちぬればさりげなくて

○さりげなくて　無二有レ然氣一也俗にいふそしらぬふりにてと云意　頼政集雨後月庭面はまたかはかぬに夕立のそらさりけなく出る月影

衛門いつかわたり給ふべきとあないせさせければ此（源中納言殿の方へ）

月の十九日と聞てさなむと男君にまをせば其日こゝにもわたし奉らむ

○わたし奉らん　此奉らんはまゐらせんといふにあたる源中納言殿かたへ對して云詞

（其用意して也）さる心してわかき人々（わかき人の）今少しもとめまうけよ彼中納言のもとによろしきものは有すやそれもとかくもいはで呼され後にねたからせむとの給へば衛門いとよく侍りなむといふかくの給ふをいとうれしとおもへるけしきのしるければ男君も（そだ心やりにて也）我心にてきかせじと（源中納言の方へ）思ひてさゝめき（囁）ありき給ふ

○さゝめく　靈異記に噬をさゝやくとよみ或は囁をもよめり萬葉に耳言をさゝめくと訓長恨歌に私語をさゝめことゝよめる是なり

女君に申給ふ人のいとよき所えさせたるを此十九日に渡らむ人々のさうぞくし給へこゝもすり（修理）せさせむとくわたりなむいそぎ給へとて紅のきぬあかね染くさども出し給へればひとへにかくかまへ給ふこともしり給はでいそがせ給ふ衛門たよりをつくり出て

○たよりをつくりいて　よき便手懸りをこしらへてなり

かの中納言殿にきよけなると見し人々よばすうへの（源中納言の）御方に侍從の君とていと清げなる一の人におほえたる

○一の人　第一の人と見えし人からを云なり攝關の人からをのみいふなと心えたるは泥めりつれ〳〵草のはしめに一の人の御有さまはいふもさらなりといへるは攝關の人をいふに論なし唯こゝにもかくいへることく一定せし詞にてはあらし時宜によるへし

三の君の御方にすけの君たゆふのおもとしもつかへにまろやとていときよげなる者のよし有てと見おき（兼て）しをとりまへかうかまへつゝ人をやりつゝかう〳〵して唯今の時の所なる人

○唯今のとき　巻三四十四オ　わか身のときになり給ふまゝに云々空穗初秋上すまひの節の所に一の女御大將殿の仁壽殿式部卿女御なり是唯今時の女御なり

人いたはり給ふ事限なしといはせたればわかき者共にておのが君の（源中納言殿の）しひまどひ給へるは口をしうおもひ

て
○しひまどひて　直案に下五十五ウに年比しれかひまどひ給へる中納言と有によれはこれもしれかひのれかの二字落たるなるへし
いづちかいかましと思ひいそぐ程にかういとよげに（こゝの宮つかへをすてゝ）いへはたゞ今の世にのゝしるとのぞかしなどおもひ（二條殿は）て
○今の世にのゝしる　うつほ物語祭のつかひ（君あて宮へ歌おくり）吹上のし所大將のおとゝ見給ひてたゞ今のゝしる人にこそあらんめれ云々と有て時めくなといはんかことし文字語釋等は第一卷廿六ウにいへり
うけひきて參らむといそぎつゝさとに出ておちくぼ（諾）（やさに下るなり）の君とは夢知らずまた一所に參りつどはむことゝもゆめしらで（集）
○參りつとはむ　日本紀に詣字參字入字をマヰルと訓み萬葉に參入また參納なと書りまた日本紀に會字集字來聚字などをツドフとよみ古事記訓レ集云二都度比一と有
皆おの〳〵かくしさゝめきなむしける人々ならして車（二條中納言）（すけの君大輔）つかはしてかたはしよりむかへさせ給ふにみな參るのおもと等いみしう人多かる殿にてけさうしたることかきりな（氣色はみたるなりなまめくなと云に同）し
○けさうし　化粧の字にてうるはしう立派なる意なるへし
一つ所にまゐりぬ同し所におろしたればかたみに見（車）（五）つけていとをかしと思ひたりけるに
○かたみ　互と云ことなり和訓栞に偏身の義なりといへり今も邊鄙にては相互にかはる〳〵物する事をかたみかはりにするといふ所ありうつほ初秋卷（すまひの節の條）に十二番までこなたかなたかたみにかちまけし給ふとあるをみれば實偏身の義なめりかし（ヅヽ）
聞しもしるく淸げなるわかき人廿人計しらはりの（かの人達のかれて聞しにたがはずなり）ひとへかさねふたあゐのもこきはかまきて五六人おからかなるはかまにてあやのひとへかさね引かけたるうす色のあこめのもあやなと同し樣にさうそきつ（殼）ゝかひむれ〳〵て出きつゝ人々見るにわびぬべし
○わひぬへし　わひ字羅夫禮の約にて心も空なと

いふ意になれり宇羅の反阿夫禮の反倍を阿を和に通はし倍を比に通はして和比とはいへり夫禮は波夫禮の上略にして宇羅夫禮は放心の字に充る和比も同し詞なれはやかて心も空なと云意とはなれり一轉してたよりなく心ほそき様の意にも用ひたりわひすみわひ人なとのことし又轉してさひしく物かなしけなる意ともなれりわひしらにましらなゝきそとよめる類なり直麿云

女君はあつけに（暑氣にあたり給ふにや）やなやましうて見給はねば（新参の人々を）男君我見むとて出おはすいと（参りし人々）つゝましうて

○つゝましう　愼しましうにてはちらひてたしなみたる風情なり

うつふしつゝみあひたりいと（男君）濃紅の御はかま白きすゝしの御ひとへうす物のなほしを着て出居給へるさまいみじうなまめかしうきよけにおはすまつ（参りし人々が）男君おもふやうにおはすめりと見あへり殿こと〳〵にうち見給ひてけしうはあらぬものどもなめるに

○けしうはあらぬ　こはけしからすと同語にて見にくからぬものともなといふ意なり一説に下衆しうはなきと云ことゝいへるはなへてにわたりて通せぬ所あり

衛門かみち引なれはたらはぬ事有（くさ〳〵のわざさもないふなるへし）ともいふべきにあらすいと（衛門）おほえ（強記）つよしやとわらひ給へば衛門たらはぬこと有とは御覧ししらぬにこそはひめ君の（落）おまへにさふらひつる程にえ女どもをとりつくろひても（男君に）御覧ぜさせず成ぬかやうのことはかたりてこそとて出くる人を見ればあこぎなりこはいかに（参りし人の詞）此殿にはかくめでたきおぼえ（思しめしと云程の事）にてはさふらひ給けるぞと驚ぬ衛門今しも（今はじめて）みつくる様にて

○今しも　土佐日記にいましはねと云所に着ぬ又今しかもめむれゐてあそふ所あり

あやしう見奉りし心ちする哉といふにこゝにも（参りし人々）同し心に見奉るにうれしうもといふ年頃は（衛門）對面なく成もてゆくも哀に思ふ給へつるをとて昔物語なとする程にまたいと白ううつくしげなる君の（若君）三つはかりなる

をかたにうちかけて衛門の君參り給へとて出くるを
みれば少納言なりあやしうむかし心ちして哀なる御
こゑさもかなごて云ゐたる事ごもはかゝじうるさし（くだ〳〵しう不書うるさければさ也）
○うるさし　伊勢物語に「むさし鐙さすかにかけ
て思ふにはとはぬもつらしとふもうるさし　紫集
に近江守女にけさうすときゝ人のふた心なしなど
つねにいひわたりけれはうるさくて「湖にともよ
ふ千鳥ことならはやすのみなとをこゑ絶なせそ
此外にうるはしき意にいへるうるさき有こゝにあ
つからぬ事なれはあげず
かたみにうれしきよしをそいひけるむかしみし人々（今日參りし人々も）
よういことなればたよりありてよしと思ひあへりか（心つけ格別なるは便宜よしと思ふなり）
くてあすわたるへしとて中納言殿には御かた〳〵の（三條殿へ）（源）
物はこびすだれかけしつらひ人々の物さへはこふと
聞給ひて
○はこふ　運字搬字なとをよめり日本紀に轉をよ
めり
衛門のかむのとのゝけいしなるたちまのかみしもつ（二條中納言）（家司）
けの守政所のべ當なる衛門のすけざふしきなどのき
ら〳〵しきをめして
○きら〳〵しき　神代紀に端正雄略紀に端麗禮禮
紀に姝妙をよめり源氏明石に月の影のみきら〳〵
としてみえたり新撰字鏡に熾をよめり今昔物語十
八（清則光切人語）に則光突伏て見るに弓景は不見太刀きら
きらとして見えけれは云々
しか〳〵有所の三條なる家領ずるをわたらむと思ふ
程に源中納言いかにする事にかあらむそこをりやう（こゝに領すへきよし）
じて作ると聞つるをさりとも消息してあるやういひ
てむと待て物もいはざりつるにあすわたるとなむき（た申さんとて）（源中納言は）
くまかりてこゝに知るへき所をおともせでわたるは（音信もなくてなり）
いかなる事ぞ
○知るへき所　知るはしるよしのしるにて萬葉集
に領の字をシルとよませたるを見れは則上文に所
謂領するなりしるはしむるの中略にして我物とし
たるをいふあすからはわかなつまむとしめし野に
きのふもけふも雪は降つゝとよめるも領する意な
り直庵云

しばしなわたりそといへそこに物はこびたらむもなさらせそ爰にもあすわたらむと思ふをのこどもざふしき所さためてたゝゐに居よ（直にそこに居れとの給ふなり）との給へば皆うけ給ていそぎていぬげにみれは作りざまいとあらまほし（げにも貴人の家ぞと見ゆるを云）うすなご（砂子）しかせすだれかけさせなどすいと猛に（衛門督の家司等）引つれてきぬれば人々（源中納言の）おどろきていづこの人ぞとゝへば衛門督の殿のけいしきじ（職事）共なり

○しきじ　伊勢貞丈云職事の二字シキジとよめは藏人のことなりといはれたれとこゝは必さにもあらて役義をつとむるもの共といふ事とみゆ上に衛門のかむのきみのけいしなる但馬守下野守まところのべたうなる衛門のすけなとあれはなり　宇治拾遺五にむかし大膳亮大夫橘以長といふ藏人の五位有けり（中略）舍人二人ゐて人な入そとさとて立むかひたりけれはやうれおれらにめされて參るぞといひけれは是らもさすかに職事にてつねに見れは力及はて入つ參りて藏人所に居て云々とみえたるはたしかに藏人を云り

此殿はとのゝしろしめすべき所なるをいかにして御せうそこ（消息）をもせでわたり給へるなるぞしばしなわたしそと（さたなしになり）おほせらるれはとて入たちてこゝはざふしき所そなど定て

○さうしき所そなと定めて　直廬案になとゝいへるてにをはによるに猶今一つあるへき詞なり下にさうしき所政所なと定てとあるによるにさうしき所との下こゝはまゝ所ぞの文字を落せし事うつなし

こゝもとはとかくせよなどおこなひてなほさす人々（指揮するなり）あきれ（呆）まどひて殿には（源中納言の）しりきてかう／＼のこと侍るけいししきじひきゐて（將）まうできてさらにけす（下司）どもえも出入せさせ侍らす殿もあすなむわたり給ふべきとてざふしき所政所などさためて所々などしなほさせ侍るなど申に中納言殿おいゝ心ちにまどひ給ぬいといみじき事かな彼家は我手に券こそなけれども我子の家なり我ならで誰（たれ）領せむ其子落くほの世にあると聞侍らはこそ夫がするならむとも思はめいかなる事にかあらむ打あひいさかふべきことにもあらすちゝおと

さに申さむとていで立もし給はぬ心ちに（年老て心ちもはかばかしからぬを云）さうそくも（裝束）しあへずいそぎまどひて左のおほい殿にまうで給ひて殿に御けしき給はるへきこと有てなむ參りたると（篠に云□意得へき事なり）聞え給へばおとゝ對面し給て何事にかと申給へは年（源中納言）頃わが領し侍る所三條に侍るを此月ごろつくろはせ（繕）侍りて

○つくろはせ　繕字をツクロフと訓りつくろふは作るの延語にてつくろはせは則つくらせなり後には修復する事とのみ覺たる樣に成たり

あすまかりわたらむとてさふらひども。（に歟）みな物共はこはせ侍る程に

○さふらひ共　職原抄に親王大臣以下諸家恪勤の名也と見え五位六位の侍などいへり禁中の瀧口院の下北面東宮の帶刀など皆侍の官なり萬葉集に佐守布と書てさもらふとよめるをみれは則守の義なるべし管婆反佐もりを延れはもらひなり論語刑疏在尊者側曰侍とある心にもよくかなへりあるひは俠守の義といへるは狹の字義（詁）をなさす　直麿考

衛門督のとのゝけいしと申ものまうできて殿のしろしめすべき所なりいかで御裝束もなくてはわたるべき殿もあすなむ渡らせ給ふべきさてまうできゐてしもべともかよはし侍らずさまたぐる（妨）事の侍れは

○さまたくる事　直麿按に狹蹊の義なるへし道なといそぎて行ときに草木の枝など引ちらし或は蔓草の類などはひまとはる時は大あしに行ことかなはすあしをせはめてこまかにまたぎまたぎ行意よりして物をさへきり邪魔するをかくいへるにや

おどろきてなむ此家はさらに外に人しるへからすとなむ思ひ侍るいかなる事にか侍らむ券ふ、（衛門督殿に）さふらふらんといたう歎たるさまにて申給へはおとゞ（左大臣殿）さらにしらぬ事なればともかくも聞えまをすへからずの給ふやうにては衛門督のひだう（非道）なるやうなれどもさり共有やう侍らむ（わけあらんとなり）今かの衛門督にいひて有樣さゝてなむくはしくは聞ゆへき

○くはしくは　眞淵曰古事記なる遠邪年魚目々微比賣（トホツアユメマクハシヒメ）を日本紀には年魚眼々妙媛と書て共に微妙をくはしと訓しゐ見て言の心を得へしといはれたるのみにて語釋なし士淸は加と意通すといはれたれ

はくはへしくにてしくは助詞とせられしにや猶い
はしくに重の義にて加重の義なる〻く思はるさ
らは爾かうへに丁寧をくはふるをくはしくといふ
なるへし日本紀に重をも繁をもシキと訓り
始よりしらぬ事なれはわれ（自分等にてはなり）はの意にはいか〻聞えむ
といともそらに心に入れぬけしきにていらへ給へは
中納言又聞ゆへき方なくていといたう歎きなから出
給ぬ
○なけきなから　長息の義なりためいきをつくこ
となりよりて歎息とも云へり常には歎の字をのみ
用ふ靈異記には嗟の字新撰字鏡には悒字をナケク
と訓り賈誼か策に長大息とあるなけきの甚きを云
へりまた稱嘆の意になけきと用ひたるも有にや
殿に申つれは（北方なとに申詞）しか〳〵なむの給ふいかなるへき事に
かこ〻らの年頃ひとへに作りて
○こ〻らのとし頃　古今素性法師「木傳へはおの
か羽風にちる花を誰におふせてこ〻ら鳴らん　契
冲云こ〻らは萬葉にこ〻たとよめるに同し幾許と
書り巨々等と書は後のしわさなりこ〻はくそこは
くそきたくそこら皆同し詞にて多き心なり　直案
に同集にもとかた「世中はいかにくるしと思ふら
んこ〻らの人にうらみらるれは　詞花集雜上
清輔「老の後むかしをおもふなみたこそこ〻らの
人目つ〻まさりけり　なとみえたり
人わらはれにや成なむと歎給ふとは世の常なり衛門
督うち（内裏）より殿（左大臣）にまかで給へれは中（源）納言のいましてし
か〳〵の事の給へる（左大臣の詞）は誠かいかなる事ぞと申給へには
しか〻る（衛門督）事に侍り爰に年頃わたり侍らむとてさるへき
所すり（修理）せさせ侍らむとて人つかはしたりしに僕にか
の中納言わたらむとなむし侍るとき〻侍りつれはあ
やしさに誠かときかせにをのこどもつかはしてあな
いせさせ侍るなりと聞え給へは（申上るなり）かの（左大臣）中納言は我より
外に領すべき人なき家をかくする事はいとひだうな
ることこその給ふ成しがそこにはいつよりやう
じ給ふぞ券やある誰とらせしぞとの給へばかしこに（落君の事）
侍る人の家に侍り母かたのおほぢ（祖父）成ける宮のいへな
りけるつたはりてはへるをかの中納言はほ（老）けて妻に

のみしたがひてなさけなく物しき（あたく〳〵しくてなすを云）心のみ侍しかはに
くさに此家もさらせ侍らじさてなむ參いさたしかに
侍り參しらで（もたて也）つくり（造作）て我より外にしるべき人あらじ
さ侍るこそをこがましけれさの給へば（左大臣）更に云へき事
にもあらざゝなり早くそのけむみせ給へ（中納言に）いさなげか
しさ思給へりさ聞え給へば（右衛門督）今見せ侍らむさて二條に
おはしてあすの御前（前駈）の人々めし又出し車は人々にあ
てさせ給中納言は夜ひさよ歎きあかしてまたつさ
めて太郎越前守を殿（左大臣殿）に參らせみつからまいらむさす
るをまかり歸りしまゝにみたり心ちあしくてなむ
○みたり心ち　うつほ初秋上（中將なかたゝ藤つほにいこはんさ申條）にな
かたゝかのつほねにすこし心地してこそものは聞
えめみたりこゝちのなやましく覺むまゝにひかこ
さ聞えてははつかしからん同卷に（なかたゝのことば）たゝ今みた
り心ちものにゝすなやましければえ御まへにさふ
らふまし同藏開下（右大將さのゝ女御の母みやかて給ふ所）母みや兵衛の君
の宮してこなたなん侍る參らんさ聞え給へれはみ

やす所みたり心地のいさなやましくて侍れはうち
やすみてなん云々同卷（ちゝおとゝ少將いたゝ方へ消給ひて）たゝやすこゝ
ろさし深けれさいさあやしくのみ侍て（中）少將あなが
しこ何かつきなき事も侍らす日頃みたりこゝちの
例にも似ず侍れは内の方にも參らて籠り侍る也
御けしき給はり（御意え賜し事はなり）しこさはいかゝ侍らむさ申給へば（左）衛
門の督（大臣殿の詞）にすなはち云しかばしか〳〵なむ云ありしを。。（少將）
又くはしくは（衛或はなほの誤）あの督にあひてさへ變にはしらはこ
さなればさためかたくなむさやうに容なくて領し給（越前守）
ふかをこなるやうになむさいひ出し給へれは衛門督
殿にまゐりたれは御直し計をき給ひてすたれのもさ
にゐ給へれは越前守はかしこまりて居たり女君もお
まへなれは見出し給ひて衰さおはす衛門少納言（右中納言）いか
なりし（殿におはし時は越前守な）なりおそろしさ思ひて御心（衛門督なそこなはむとする事也）あやましさ思ひ
けむされわらふ越前守殿（左大臣殿を云）に參りて御けしき給りつれは
しか〳〵なむおはせられつる參はまことやさふらふ
らむ実をくはしく承り定めむ又年頃領し（音に聞…出す）わしめすさ

かけてもうけ給らましかば

○かけても承らましかは　直鷹云かけてもといへるはまほならぬ事を云詞にて俗にしかとはなくとも少しなりともなといふに允れり其よしは歌によむ春かけては冬から春へかけての意夏かけては春から夏へかけての意にて一方つかぬ詞ゆゑきとさし定てはいはれぬ様の意ありこゝなるもしかとはなくとも承りたらんには是程までには誰も〳〵申聞え侍らしと云義なり

かく〳〵まて誰も〳〵おほせられ聞えさせましや此家作り侍る事二年ばかりなり其程まではおとなく侍てかくさまたげさせ給へるは（督殿の答）いとやすからすなむ歎き申侍らふなりと申せはさし頭は券（領する意なり）のこゝにあれは家といふ物は券もたる人より外に知る人なきと聞しかばおだしう（穏）思ひて我いへ其名のらで有つるはかうし（斯）給ふ時こそかゝる事共有けりともいはめさでも〳〵（夫でも〳〵也）券もた（持）まへるかといとなまめかしう（ゑんにやさしうかど立ぬを云）いらへていとしろうゝつくしげなる子の三つはかりなるをひさにするゑてうつくしかりゐ給へれば大事と思ひて申にいとはら立しく侘しけれと思ひしづめて此家の券うしなひ給ひ侍りて尋ねさせ侍れといまだ聞いて侍らずもしそれを人のうり申して侍るにやあらむたゞ其うたがひのみ侍るとて此家領すべき人なむ侍らぬと申せば（督の詞）券をぬすみてうりたるをかひたるにもあらずた（道理）うりにまかせておのれより外に領すべき人なむなきとおぼゆれはさる様こそあらめと思ひやみ給ひねかし中納言には今しめやかに（しめやかには徐の字の義しつかになり）券もみづから見せ奉らむと申給へとて

○今しめやかに　篝木巻につれ〳〵とふりくらしてしめやかなるよひの雨にと有ことく雨なとふりてものゝぬれしほれしか詞のもとにて轉してしつかなることにもいへり　うつほ菊の宴（春宮大将にあて宮の事聞え給ふ）御物語し給ふついてに宮とし頃聞えむと思ふ事のあるをしめやかなるをりなけれはえ聞えぬかな大将けふよりしめやかなるをり侍らしをいかて承りてしかな云々日本紀に徐または深沈をシメヤ

力と訓るなと思ふへし

御子かきいたきて入給ひぬれば越前守いふかひなくていたく歎てたちぬ女君つく〳〵と聞給ひて此わたらむ（わかりやうすへき家と）とし給ふ所は三條にこそ有けれ又まろときこえし物を年頃つくりて渡らむとし給ふらむにさまたげられむは（父中納言の）いかにおぼすらむおやのなけき給ふらむはつみいとおそろしくつかうまつる人（あこきなど）だにかく（斯）し給ふ事をさまたげ給へば歎かせ奉るか心うき事衛門がする事ぞといとほしとおほしたるけしきにての給へば（督殿自云）天下の親にておのが家おしとらるゝ人やある歎給へ（落君）わたくしとおほすともまろ子たちくしてわたりなふらむつみは後にもいとよくつかうまつりなほし給むかく云立てとゝまりたらむはいとをこならむ彼家奉らむとおほさはしられ奉りて後に奉り給へとの給へば（落君）云かひなくて又も聞え給はす越前守は（父中納言の方へ）かへりきておとゞに申すさらに〳〵今はふように（何かなしになと云意）とられ奉りぬるをはぢにてやみぬ計なめり大事と思ひて申す

ことにもあらす（ものゝ数とも思しめさすしてなり）おほしたらでいとうつくしけなる子をひさにすゑてうつくしかりて申事みゝにも聞入給はすはてはかういひて入給ひぬる左大臣殿はわれはしらず衛門督か券もたるかたこそつよくは尋ねとらめとの給ふにさらにかひなしなどかは券をは尋ねとり給はすは成にし今夜わたり給はむとていだし車のこと御ともの人々の事なとゝのへさわくめりつるをなどいへは（中納言）更に物もおほえすいみしと思ひ給へり落くほの君の母の死ぬとてかの子にとらせおきしを（券を）我も忘れてこひとらさりし程にかく（斯）うせたるぞ何か夫（督殿を指て云）がうりたるをかひてかくしたるぞいみしう人わらはれなるわさ（事）かなおほやけに申共此殿の御世なれは誰か定むとするおほくの物をつくして作てけるかいみしき事時にあひたらす物あしく人いみしき物に成け（句）りとそらをあふきてほれてゐ給へり衛門のかうの殿には渡り給はむとて女房にさうそく一具つゝして給へば程なく今めかしううれしと思ひけり中納言殿には物をたにはこひかへしに人やり給へと更に入だに

いれずなどいへば北方手をうちねたがる
○手をうちねたかる　手を打とは物に感したる時にもおどろきたるときにも口をしかる時にもいへり水鏡敏達　太子さきのよの事覺侍るを申なりと申給ひし時に御門を始奉りて聞人手を打あさみ申きく今昔十六條廿八　此は何かせむと爲といへとも甲斐なくて死畢ぬれは手を打て泣詐思ふて云々大鏡一花山由手をおひたゝしくはた／＼と打なり源氏玉鬘三條か右近を見付たる所に此女手を打てあかおもとにおはしましけれ
いかはかりのあたがたきにて衛門の督あればわがきも心をまとはすらむ
○わかきも心をまとはす　下廿六オいかなる事にか有んと思ふにきも心もさわくに云々　今昔物語二十六觀硯聖人在俗時値盜人語　云此く自を追持行は敵の殺さするなりと思ふに觀硯肝心失て更に物不覺して我にも非ぬ心地して行に云々
とまごふ越前守今はかひなし物たにはこひかへさむと申せは早う夫はとられよとはなたらかにの給へご

○なたらか　源氏桐壺卷に桐壺の御うへたさまかたちなどのめてたかりし事心はせのなたらかにめやすくにくみかたかりし事など今ぞおほし出ると有抄に口本紀に平をナタラカと訓るよしみえたれとまたくさる事なし直霊案に論語に攀士之觸不可折也古點に折をナタラカニスと訓りこれに據るになたらかにすは撫平にするの義なりこゝもすなほにたひらかなる意なり
人々さらに入ねはいさかふへきことにしあらねはたけき事とてあつまりつゝのろふ詛いぬの時はかりに渡り給車十してぎしきめでたしおりて見給へばけにしむ殿はみなしつらひたり屏風几帳立みなたゝみしきたり
○たゝみしきたり
こゝの有樣見給ふにけにいかにおもふらむといとほしけれど北中納言の方ねたしと思ひ知れと成けり落女君はおとゝ父のおぼすらむ事をおし推はかり量給ふに物のけうもなくいとほしき事をおもぼす男君はは源中納言のこびたらむものうしなふな

たしかにかへさむとの給ふかくめで度のゝしる中に
中納言殿(二條)にはわたりぬやとみせ給ふにかう〳〵めで
たくしてわたり給ひぬとかたり申せば今は(源中納言殿の方には)ちからな
しと侍りて歎くをも知らで遊ひ(奏樂)のゝしる衛門かくし
給ふを思ふ様に(十分なるを云)めでたしと男君を思ふつとめて(早旦)越前
守はこび侍し物共はこびかへし侍らむとて參りたれ
ば三日は愛の物は外へはもていくまじ今日明日すぐ
して取にものせよいとたしかにあるとの給ひてこと
にきゝ入ねば思ひまどふ事限りなし三日が程遊ひの
のしりていと今めかしうおかし四日のつとめて越前
守參りて今日だに給はらむ人々のくしの箱などやう
の物こめていとあしくなむ(都合よからぬなり)とわひ申せは(督)いとをかし
がりてみなもくろくしてかへし給ふ男君かのむかし
のふるぶた(古蓋)のかゝみのはこはありや是(櫛のはこなとになる)にそへてかへ
し給へかし北方(繼母)たからと思ひためりきとの給へば衛
門けうじ(おもしろがるなり)よろこびて衛門かもとに侍るとてとり出た
れは見きりし(新參の人なと)人々見て皆あないみしやとてわらふい(督)

とたゝならむよりはとてしるし計物かきつけ給へと
申たまへば女君いでいさや(いやな事と云ことはなり)いとをかしきついでに知
られ奉らむこそ苦しきとの給へば猶々(督殿)と申給へばか
がみのしきをおしかへして書給ふ「あけくれはうき
事見えします鏡さすかにかけそ戀しかりける
○ますかゝみ　ますみの鏡の中略なり神代卷に白
銅鏡をマスミノカヽミと訓り萬葉集に眞十鏡とも
眞鏡とも銅鏡とも書てマソカヽミと訓せ祝詞に
麻蘇比乃大御鏡といへるもともに眞澄の義なり○
明くれはの歌　朝夕たゝうきめのみ見せたりしま
すかゝみとはおもへとさすかに面影の戀しきとて
繼母北方をしたふ心をのへたりさすがはさうでは
有ながらの意なり誠に落くほの君の心ばへ思ひや
られて哀に有かたき歌なりかし
と書付給へりしきし(かゝみなは)一かさねにつゝみて物のえだに
つけて越前守よひてとらせよとて衛門にとらせて越(督殿)
前守めしていかにあやしう(いふかしき意)おぼすらむと思へど御せ
うそこもせて(さたなしにて引こし有となり)わたり給ふとなむ聞しかばあやしうて

なむ此いとほしかりしかしこまり（御心労かけたる申わけも）もみづから聞え（御報も也）侍らむこの勞もたしかに御らむせさせ聞ゆへき事も侍り今日明日の程にかならす立よらせ給へとおとゞに聞へさせ給へそこたち（越前守等）もたゞ今びむなきやうにおもふらむつひ（終逢）にこゝ（此家に）にぞいひかたらはむとの給ふ御けしきいとよし越前守最あやしと思ふおとゞ（越前守）かならす（督との〻詞）立寄給へやがて御供にそこにも物し給へとの給へばうけ給りてあゆみ出るに衛門つまごのもとにて

○つま戸　和訓栞に簷の戸を云開戸なり開戸は其妻あるか故にいへりまた高つま戸は沙石集にみえたりといへり

爰に立寄給へといはすれはいとおほえなく（守）あやしと思ひなからよりたる袖口（衛門）いと清けにさし出してこれ北方に奉らせたまへ昔いとやむことなき物におほしたりし物なればいまゝでうしなはせ給はざりけるは此御物共（調度さもなり）の歸り參るにつけておほし出させ給ひてなむといへばいと（越前守）あやしとおもひて誰御消息とかものし侍らむたゞおのつから（衛門が詞）思ひ出聞え給はむわたくしにもこゝろばかりこそはきこゝ給はすやといふ

○こゝろはかりこそ　古今夏ならの石上寺に郭公の啼をよめる　素性　いその上ふるき都のほとゝきすこゑはかりこそむかしなりけれ

あこき成けり此殿にこそ有けれと思ひてふるきみやこをはわすれ給ひけるなめれば何かは知げにも聞え侍らむまめやかには此殿に參りて侍らむ時にはしる（むかし）人（よりしる人そとなり）に請きこえむと云にてもまたもさふらふ（少納言）はさてさし（かほ）出たり少納言なりあやしうも集りたる哉と思ふに又奥の方にめならぶと云なれば

○めならぶといふなれば　古今戀五　よみ人しらす「花かたみめならふ人のあまたあれはわすられぬらん數ならぬみは

まろはおとろかし聞えしと云こゝろを聞ば越前守の思ひて時々仕ける中の君（源中納言のかたに在し人々の）の御もと成し侍從の君なりかくのみかしこの人のこゝろにていひかくれば心地もあはて（慌忙）ゝいかなる事ならむとあやしうてえいらへやら

す衛門三郎君と聞えしは今は何にてかおはすらむ御かうふりやし給へるしか〳〵此はるなむ大夫(守)と云めるといらふればかならす衛門(衛門)参り給へ對面に聞ゆへき事なむつもりてと聞え給へといへばいとやすきことゝ(守)て此つゝみたる物いとゆかしうていそき出いぬ道々彼殿のさま思ふにいとあやしくおちくぼの君のこの(衛門督)御めにて有にやあらむあこぎといひしかけしきいとよけなり又あつらへたるやうにかしこの人の集りたるは思ふによそ人のあらむよりはさりともといとうれしきは北方のちようせしさまも(落君)

○ちようせしさまも　下廿八のひらの裏越前守爪はしきをしてあないみし己は國にのみ侍てしらさりけり云々

國にのみありてしらざりけり中納言(源)殿にきておとゝにかう〳〵なんの給ひつるとて此つゝめる物を北方に奉ればあやしうおほえなぞとて引あけて見るにおのが箱なりおちくぼの君にとらせしにこそあめれと見るにいかなる事にかあらむと思ふにきも心もさはくに

○きも心もさはくに　上十九のひらの裏我きも心もまとはすらんと云々

ましてそこに書る物を見るにむげに落(底)くぼの君の手なれば目も口もはたかりぬ

○むげに　和訓栞に云秘蔵記に无高无下と見えたり拾遺集物名に牽牛子をむけにこしとは思ふ物からとよめり定家卿の説に隠題のならひみくるしき事ともあればたゝのうたによむましき也といへりと有直廬案に此詞おほつかなし此詞俗に云きはめてと云に能かなへりむけにこしとは極めて不來とはなりむげにつたなしなと云も極てつたなきを云なりさらはおしきはめて云詞にして無外の字音なるへき歟

○目も口もはたかりぬ　今昔十九(三條大皇大后宮出家語)大饗の内近く候ふ女房達奇異に目口はだかりて覺ゆること限なし同廿八([illegible])別當清廉より頭を指出たり傍共之を見て目口□□て皆立去にけり同廿八([illegible])左京大夫も客人共も奇異く目口開て居たり

治拾遺十二(今昔十九と同じ可刪)増賀上人参三條宮事　はさみはてゝ出なんとするとき上人高聲にいふやう増賀をしもあなかちにめすは何事ぞ心えられ候はす若きたなき物を大なりときこしめしたるか云々これをきくにあさましく目口はたかりて覺ゆ皆あきれはてたる風情をいへり

此年頃いみしきはぢをのみ見せつるはくやつ(此奴)のする成けりと思ふにねたういみじき事ふたつなしとはよの常なりひとゝのゝ(一殿)うちゆすりみちて

〇ゆすりみちて　古今集にきの川ゆすり行水のさよみ萬葉集には大海のいそもとゆする立波と見え又大海の水底とよみ立波とも見えたれはとよみと同語にやと和訓栞に見えたり案に動搖するをいふ古語なるを後には中略してゆりゆるとのみいへるにやゆさ〳〵ゆら〳〵なとのゆも同しくて動搖するさまをいへる詞と見えたり

のゝしるおとゞ家はとられていみじきあたかたきと思ひし心ちを我子のしたる成けりと思ふにつみもなくさき〳〵のはぢも思ひきえて子供の中にさいはひ(俗に云仕合よきなり)有ける物を何しにおろか(疎)におもひけむ彼家は此人の母の家にてことわりなりけりいひていますかゝれば北方ねたくいみじくてけしき我にもあらて(すゝろなる體を云)かの所をこことも領せられぬ此年頃つくりつる草木を物入てもそれはこび取給へ

〇それはこひ取　秋成本それ運(ハコビ)とりと傍譯し一説それは乞取とす孰れか是ならん

家(ふたゝひ)かひ給ふあたひにこそわたし給はめといへば越前守こそなでふことぞ侍らはむよそ人のやうに物し給ふるなおのつから此ぞう(族)にはか〳〵しき人なくて

〇はか〳〵しき　直案計々敷の義にしてよろつの事にたと〳〵しからですぐれたる器量ある者をいふ

みつくる人ごとにおもしろの駒はいかに〳〵と笑はるゝがはしたなき(俗に不足なと云詞にあたる)に同し殿ばらといへどたゝ今のおほえのたくひなき人(衛門督の事)に云に得てねむころになりぬるこそ

〇ねむころ　ねもころと同し神代紀に慇懃をネム

コロと訓り眞名伊勢物語に鄭重の字を塡たり萬葉集には丁寧をも惻隱をも共にネモコロとよめり谷川士清云歌に菅の根のねもころ菅の根のねもころなとよめり根の如くの意如の字を古語にもころとよめり情實の懇々たるを草根のからめるにたとひいへるなり苦の字をよむも同し靈異記に慇懃をねもころにつとめてと訓りといへり

たのもしくうれしけれといへは三郎の大夫いてや夫は（なにもろの駒の事）物の數にもあらす落くぼの君のちようぜられ給ひしさまはいといみじかりき

○いみしかりき　此下といへはの四文字含蓄せり加へて見るへし

越前守いかに〳〵ちようじ給ひしとゝへばいかば（太夫）かりかうたてありしことゝて（あまたゝびの事なりといふ程の意）かたはしよりつぶ〳〵と語りていかにあこきなといひ出らむ見え奉らむに（衛門督殿へ）つけてこそはづかしけれといへば越前守つまはぢきをしてあないみとおのれは闇にのみ侍て知らざりけりあさましきわざをこそはし給けれ此衛門督は思ひ（かの事）嘗給ひてかくはぢを見する樣にはし給ふ成けり我等をいかに思ひ見給ふらむ（面目なければ一族のこらず二條殿へましらひせずやあらむといふなり）すべてましらひせずやあらましとはおもとへは北方あなかしまし今はとりかへ（はらてすくさんかと也）すへきことにもあらすあいなしないふそたゝにくゝおぼえしまゝにせしぞかしと云にかひなし少納言侍從なともかしこ（二條殿に）にこそ有けれといふをごたち聞て我等なとて今まで參らでしひたる世をみつらむとて

○しひたる世　上四のひらの表おのか君のしひまとひ給へらは云々の所にしれかひの誤なるべきよしをいへりこゝもしれたるの誤なるへし

うらやましういみじうて

○地利不如人和卷首にこゝにていみしきめをみるはこゝのあしきかと心見むとせられしわさともそも〳〵何の甲斐かある

今だに參らむ御心は（女君の）めてたかりしかば寄論ひせむとわかき者共は云はらからのきむだち渡ましと思ふ中に三の君は我男とりたる人のゐいなれば

〇我男とりたる人のゐい　三の君の夫藏人の少將は左大臣のむこと成て今宰相と聞ゆるなれは其中の君をわか夫とりたる人といへりるいは親類の類にて男君女君をさして云なり

近うて聞えかよはむをねたしと思ふ四の君は我をはかりてかうき身になしたる人なればこと人よりも見（四の君）むにつけていみじく心うかるべきを思ふかのいつしかはらみてもたりし子は三にてちゝにもにてもあらでいとおかしげなる女君なりけり我身心うしあまに成なむと思ひけれど此ちごのいとかなしうおぼえければほだしにて

〇ほだしにて　古今　同文字なき歌　物部のよしな「よのうきめみえぬ山路へ入むには思ふ人こそほたしなり

思ひはなれて有成けりせう（少輔）はいと（四の君の）にくき者に思ひてすげなくのみもてなしければ

〇すけなくのみ　源氏桐壺巻にすけなうそねみたまひしかと有て河海抄に無（ナシ）二人望（スケ）一（日本紀）と見えたれと契沖は日本紀に無此事といひ宣長はたとひ紀に有共此字さらにかなはすと云り但五井純禎か源語話にすけなうはすこき意にてなうは用語にて無にはあらすといへり直暦案に契沖宣長は何共いはれねは知り難し純禎か說は僻言にして取に足らすこは因（コ）所（ス）氣（カ）無（ナシ）のよを略たる詞也萬葉十八廰の放れ失たせるを詠る歌「心にはゆるふ事なくすかの山すかなくのみや戀わたら甫　是因所氣無也俗に取付はも無人をそつけもない人ちやと云則此詞の訛也きわつらひてなむ有ける中納言つらき事は思ひやみ（來廿勞）て我身のおほえなくしも

〇わか身のおほえなくしも　直案にわかみの不覺悟よりして北方子たちなとあなつられたるをなけくなるに今は落のかくましませは中々面目なることとおほすなり　又案源中納言わか身の不覺悟也し故落君の見るかけもなきやうにて人々にもあなとられしを歎かはしう思ひ居りしに督殿におもはれてかゝる身のうへになりのほり給へるかおもたゝしき事なりと思ひ給へると云にや

うれが人にもあなづられつるを歎におもたゞしきこと有と最うれしくて督殿へまうでむと出立給ふに今日は日暮ぬあすとの給ふに北方わか子供よりも（落君の）有樣

いかにめつらかに見むとむねいたし三四の君かれは清水にてこりぬやといはせたりしにこそ有けれかく終には聞え給べかりける物をおほくのはぢを見せ給ひしかなかいつらね人々（こゝにつかへし）出にしはさは此君（落君）のさせ給ふ貴けり年頃びむなげにてすゑ奉り給ひしをねたしと思ひしみ給へる成けり

○思しみ給る成けり　此下と云はと云詞を省けり

北方そが最むねいたうかくさまぐ＼にねたきたうをせられぬることをいかてしてしがなといへば御娘ご（三四の君なさ答）もさばれ今はなおもほしそ御むこどもおほかり納御心つかひ給へてむやくのすけをいみしくうたせたりしは思ひ置たるにこそ有けれ男君しりて（かれてかくせんさ）ぞし給ひけむと口々にいひあかしつつとめて衛門督殿より（文詞）とて御ふみあり中納言取入させてみ給へば昨日は越前守して聞えし御消息は申されけむや

○昨日　きのふはいきの日にて往日といふ義にて昨年を往年といふかことしいきのいを上略しひをふにかよはしたるなり

御いとまあらは

○いとまあらは　和訓栞に暇の字を訓り出る間の義なるへし外に出る休暇なり令義解に依私事而罷退為假と見えたり假も暇にかよへりといへり直應案此詞貴賤にわたりていふ詞なれは休暇の義とするは恐らくは泥めりたゞ經營の間といふ義なるへし貴賤ともにいとなみなきものはあらねは也　新古今に　赤人の「もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつ　伊勢物語に「あしのやのなたのしほ焼いとまなみつけのをくしもさゝすきにけり　なと思ふへし

かならす今日立よらせ給へ聞えさすへき事有と聞え給へり御かへり（返りの詞）にはきのふはしか物し侍りしかは則參らむとせしを日暮てなむたゞ今參らむと聞え給へりければさる御心（あるじまうけの用意なさせさせ給ふなるへし）せさせ給へり越前守もと有ければ御車のしりにて來り中納言（源中納言）參り給へりと聞ゆれは督（督）殿これへと聞え給へれは入給へり南の方のもやのひさしにて對面し給へり

○ひさし　廂の字庇の字なとをよめり日さゝへの

義なるへし佐々弊の反佐世なり世を之に通して佐之といへるなるへし

女君は几帳のうちに居給へり御前なる人北おもてへまかれ（との言ふなり）との給へはみないぬさしむかひて（中納言殿に）對面し給ひて此家（督）のかしこまりも聞ゆへく侍るを

○此家のかしこまりも　此家の事につけて兎角さまたけ申しさまなる無禮のかしこまりも申のへんとなりかしこまりは俗に恐入たる申わけなといふ程の事なりみな督殿謙譲の詞なり

こゝにまた人しれずなげかるゝ人（落君の事）も侍るめるをかゝるついてに聞えさせまくなむ此領し作らせ給ひけむ（助詞なり）ひとへ（偏）にはたうり（道理）なれとも券のさまを見侍れはこゝにこそはおまへよりもしり增る（殊に領すへき事と）べく侍れと思ひ給へしに遠からぬ程に御せうそこもなくてわたらせたまふは人數にもおほされぬ（督とは）なめりと見給へしになとかさしもおもほしおとす（源中納言の御方に）へきと心付てなむかく俄に渡り侍つる年頃つくろひ御心いりたりけるにかくさまたけたるやうにてわたしたるいとものし猶こゝは奉りてよかしと歎き（落君の）侍るめるに同しくはたしかに領しさせ給へ券奉らむとてなむ御消息聞え侍りつるとの給へは中納言いともかしこきおほせなり年頃（落君の）あやしくうせ（失）侍りにし後世に人にも聞え侍らさりつれは世（死）になき（するた云）なめりたゝ（中納言忠頼也）より年わかう侍らはこそ行めくりあひ見むとも思ひ侍らめ老おとろへて今日あすともしらぬを打すてゝかけかたも聞えぬは猶世にうせにけるなめりとかなしう歎侍りつるに此家はかれ侍らはこそ領し侍らめ今はいかゝせむこゝにしるへきにこそ侍れとていたうあばれぬ先につくろひ侍りつる

○あはれぬさきに　うつほ俊かけの上巻に女君は草のおひこりて家のあはるゝまゝによるひる泪をなかして云々源氏東屋巻（浮舟の母の三條なる家へわたし奉りし所）こゝはまさいのはなもなし打あはれてはれ〳〵しからて明しくらすに云々伊勢物語四段に打なきてあはらなる板しきにふせりてこそを思ひいてゝ云々拾遺雜秋好忠「秋風は吹なやふりそ我やとのあはらかく

せる蜘蛛のすかきを　堀川集七月朔日いつしかおきの音するに「草ふかきあはらのさとのすまゐして露の命のほどそしらるゝなど物を破るをあはくと云はあはらは自ら破れたるを云なるへし和名抄に亭(阿波良)と有は語同しうして事は異なるかとも思はるれと新撰字鏡に樹をアハラと訓せ翻譯名義集に菴婆羅此云菴とあるなとみれはもと梵語なるかもしるへからす

(落君の)かう殿に侍らふらむとはうけ給はらさりついとめでたう思ふやうにとは(中もなか〳〵に)おろかなるやうにこそ侍らるけれ今まてかくなむとも知れはへらさりけるはたゝよりをひむなしとおほし從たるにや侍らむまたおもてふせなりこれか子しられしと思ひて侍るにやあらむ二つのうたかひはつかしくも劣は何か給らむ又も參らせまほしくなむ今まて死侍らぬことをあやしと思ひ侍りつるは此人のかほを見むとて成けり今なむ哀には侍るとて打しほたれ給へはかむの君さすかに哀にて(落君の御事)爰にはすなはちより御夜中あかつきの事も知らてやと歎き侍りしかと(衛門督道頼也)道よりか思ふ心侍りてしはしとせいし侍りし也其故は西の方に住侍りしより時々忍びてまかりかよひ侍りしに御けしきもこと御子ともよりもこよなくおほしおとされたりき又北方の御心はへうく淺ましくつかひ給へる人よりもおとりにさいなみしを見聞侍りしかは世に有事聞え奉るともよしともおほさし少し人なみ〳〵に成てつかうまつりぬへからむ程に知られ奉れへやにこめてむやくのすけにゆるさせ給へりけるかいと心うく思ひ給へしかは世になきさまに御らんせらるとも何ともおほさしと思ひ給へてみちよりかつらしうしと思ひおきつる事のわすれ侍らねは(源中納言)とのをはひむなしとも思ひ聞えさりしかとも北方の情なくおほえ給ひしかはまつりなと見侍りしに殿の御車といひ侍りしをなめけなるさまにをのこともかつはいかにと

○をのこともかつはいかにと　或日をのこともをせいすへきをそれをも心えて有なからなめけなる事させつれはよくも思し給はさらんと云なり物こゝろえたるを見しるといふ事物かたりに多し

見しるさまにていとよくも(落君のあしさまに見しらむやとなり)御覽せさせすやとおほえ侍りしもびむなく思ひ給へれと明くれこと(外々の)御子供の

やうに見給ふ事もかたげ成しをまづよるひる見奉らぬ事を申のれば人のおや子の中は哀なりけりと見給ふれはいかてつかうまつらむとなむ思ひ給へ成にたるを丶さなき人々（御子達）もおよすけ增るめるを見せ奉らてやなと思ひ給へてなむとかたはしよりつふ／＼と聞え給ふに中納言（源）いとはつかしくて此事ともを聞給ひて（かれて）おほし置たりける事とかきりなくいとほしうてえ御いらへはか／＼しからすこと子供より思ひおとす（落君を）ことも侍らさりしかと母ぐしたる者はまづこれにこいふま丶にまげられてげにいとほしきことも侍りけむされは（かく仰らる丶は）いとことはりなりのへ聞えさすへき事も侍らす（今さら申へきやうもなしとなり）てむやくはいとゆ丶しき事さる者にはいかなる者かゆるし侍らむへやにこめ侍りしことも思ふやうならぬ事をしたりと聞侍りしかはねたく口おしくてなむ何事よりも我君たちを先見奉らむいつら今たにとの給へは男君の前に立たる几帳おしやりて爰に侍るめり出て對面し給へと申給へは（落君）はつかしけれといさり出給へりち丶おと丶見給へはいみしく淸けにもの／＼しくねひ增りていとしろくきよけなるあやのひとへかさね二あゐのおりものうちき着給ひて居給へり見るに（源中納言）是よりはよしと思ひかしつきし娘共に增りたれはか丶りける（源中納言）ものをうちこめておきたりしをけにいかに思ひ給けむとはつかしうてつらきもの（源中の詞）に思ひ置て今ましられ（かくとも音つれ）給はさりける對面しぬるは限りなくなむ心のうれしくとの給へは女君こ丶にはさらにさ思ひ聞えぬ（つらき物とも）をこの君（衛門督）のさいなみし（ま丶母の落君を）をりおはしあひて見聞給ひて猶ひむなきものにおほし置たるなめりかししはしなしられ給ひそとのみ侍るめるにつ丶みてなむ心には更にしり侍らぬなめけさも御覧せられつる事をなむいか丶と限なく思ひ給へつるとの給へは（源中納言）そかをこにいみしきはぢなり何事におほしつゐてかくはし給ふならむと思ひ給へしを今日きけは（女）君をおろかに思ひ聞えたりしとてかむたう（勘當）し給成けりと承りあはすれは中々いとうれしくなむとて打わらひ給へは女君いと哀とおほしてさてしもこそかしこけれと申給ふ程にかむの君いとうつくしけな

る男君をいたきてくは（是なり）御覧せよ心なむ最うつくしく
侍る天下に北方もえにくみ給はしとなむ
○天下に　榮花月宴に一てんかの人何れか宮につ
かうまつらぬかあらん云々這闇なれと是はいさ
〳〵おとろ〳〵しけれは一てんがの人からすのや
うなり云々など此詞しば〳〵見えたり
思ひ給へるとの給へは（落君）そもけしからぬことをとかた
はらいたかり給ふ中納言は見るにおいこゝちいとか
なしうらうたうたゝおほえにおほえてゐみまけて（若君を）こ
ち〳〵との給へはさる翁におちでくひにかゝりてい
たかるれは（源中納言）けにやてん下のおに心の人もえにくみ奉
らしとていと〳〵大きにおはするはいくつそみつに
なむ成侍りぬるとなむ父君（源中納言）申給へはまたや物し給ふ
此弟は（督）殿に（父左大臣）なむめされにしまた女子侍れとけふはつ
つしむこと侍り後に後覧せさせむなと（霽）申給ひて御た
い參り御供の人々にもわさとのまうけにはあらてう
しかひ（牛飼）まてにいと清けにあるし給ふ男君衛門少納言

その越前守よひ入てものせよとの給へは衛門たいは
む所のかたに呼入るゝにつけてもいとはつかしけれ（守）
とも我したる事かはと思ひて入ぬ三間計あるにたゝ
み清けに敷てとゝのへたるやうにおとゝすみゆるこ
たち三十人はかりゐなみたり
○二十人はかり居並たり　前（三十二オ）に中納言參り給
へりときこゆれは督の殿是へと聞え給へれは入り
給へり南のかたのもやのひさしにてたいめし給へ
り女君は木丁のうちに居給へり御前なる人北おも
てへとの給へは皆いぬと有し首尾なり
おまへに有けるかたてとの給ひけれはきく（っ）とひたる
がゐたる成けり越前守色なる人にていと興ありうれ
しと思ひてめをくばりて見渡すに物もいはれず知た
る人だに五六人ありけり是もしりにこそ有けれとの
み見ゆ衛門殿の（君）ゑ（醉）はし奉れとの給ふに（衛門がいふ）あ（色）をうて出給
はゝひむなしわかうとたちさかつき參り給へとてか（きつらなり）
はり〳〵しふるにゐひまとひぬ衛門君たすけ給へ人
けなくてうし給ふなと云にゝけむとするにいとわか

く清けなる人のおかしう云てかこみてにくへくもあらすわひてうつふしたふれふしたり中納言もかう(督)の君御さかつきたひ〳〵に成てゑひ給ひて萬の物語をし給ふ今は身にたへ(任)む事はつかうまつらむとなむ思ひ給ふるをおほさむことはなをの給はむ南うれしかるへきと申給へは中納言いとうれしと思ひたる事限りなし暮ぬれは歸り給ふまゝにおとゝにはころも箱ひとよろひにかたつかたにはたゝ直衣さうそく今かたつかたにはひの裝束ひとくたり入て世に名高き帶なむそひたりける越前守には女のさうそく一くにあやの一(單)へかさね(襲)そひてかつけ給ふ中納言ゑひて出給ふとて世に今まで侍りつるか心うかりつるにうれしき契になとの給ふ御供の人おほくもあらねば五位に一かさね六位にはかま(袴)一くさうしきにこしさしせさせ給ふ

○こしさし　絹の卷物なり人に給はる時はその人こしにさす故にいへり胡蝶の卷にこしさしなとつき〳〵に給ふなとある是なり河海抄花鳥餘情なと別に説なし榮花みもきはつ花なとも同じしかるに秋成何のより所有て腰佩々刀なとの字を塡たりけむ　直案にうつほ(まつりのつかい)しかへの人もし馬つかさのをのこともものふしにこしきぬさしなとすと有にて明らかなり

よろしからぬ御中と見つるをいかならむとあやしく思ふ歸り給ひて北方に衞門督のゝ給へる事ともかたはしよりてむやくのすけにはまことにやあはせむとし給ひしはつかしけにの給へるにおもてあからむ心ちしてなむ有つるちこのうつくしげなりつる事限りなし人々の有樣いみしうさいはひ有けるかなとの給へば北の方いとねたしとはおろかなるにいてあなきゝにく其かみものとやは思ひ給へりしへやにこめよとはおのれ(自己)こそおこなひ給ひしか我はしらしともかくもせよとはなち給しかはこそてむやくも何もかゝくり寄たりけめ

○かゝくりよりたり　直案にかゝくりよるは搔探寄なるべし幾佐反加なり燈をかゝくるの桃るはカキアルクにて是とは別の詞也　盛衰記十三(三か)二十三寺にかゝくり著せ給て甲斐なき命のをしさに打たのみ來れり

今人の物めかし給ふに（衛門の督なと）我（中納言）せし事を人のせむやうにの給ふは何も餘りはなやか成事はなかゝらすと云は越前守いみしうゑひてよりふしなからいみしうめてたかりつる事を語りふせり三十人の女房たちの中にこもりてさこそしにたれ三の君の御方のこれ四の君の御方の何の君かのおもとまろやさへなむ侍らひつる花をゝりてさうそきて

○花を折てさうそきて　人の衣裝なと其外出立の有樣を花やかに賑々しくする事なり入唐記に行殉新調に花を折て出立まはりける又一條兼良公の釋素往來に面々出立可レ被レ折レ花之由承及候とあり東鑑卷卅一嘉禎三年二月二日條に御出儀又殊被レ刷供奉ノ人清撰各行粧折レ花　太平記卷三主上笠置御沒落條云同しく十三日に新帝登極のよしにて長講堂より內裏へ入らせ給ふ供奉の諸卿花を折て行粧引つくらふなとみえたり

いとよしさなむ思へると云を三四の君は一所にふして聞て世中は哀なる物にこそ有けれかの君のおちくほに住てへやにこもり給し時はまろらに增りて人つかひさられむとやは思ひし父母のおほきむ事はつか

しくも有哉なそや（いかてと云に同し）あまにも成なましと打かたらひて三の君なけは四君も打なきてそかはつかしき事かくうきすくせ（宿世）も知り給はてうへ（母）のけむ（顯）かく（樣）におはしかしつきしをいかに人思ひ合せむまろか此頃うき事出きにしをりあまに成なむと思ひ侍りしをいつしかとみのなり（生）侍りにしかはえならてこれ（兒）出きにし後よりはた人の心（さすかに人情なれはさにや）なりける事是（此兒）も物の心知るまて見むさおほし成て今迄侍りつる事とふたりうちなきて四の君「人のうへと昔は見しをありふれはいまはわか身にうき世なりけり　三の君けにさて「うき事のふちせにかはる世中はあすかの河の心ちこそすれ

と云明し給へりつとめて（源中納言）遂（昨日の）り物見給て宮よりはしめて翁の身には餘りたり此御おひはいと名高きおひを何しか給はらむかへし奉らむとの給ふ程に衞門の督殿より御文といへはいそきとり入る人おほかり昨日は藥行なしくも侍ししかないそかせ給しかは年頃の御物語も聞えさせす成にし今よりたに時々立よらせ給はすば心うくなむ侍これはなとか忘れさせ給ひに

し猶はやわたらせ給ねさらすは猶ひむなきさまにおほしたらむと限りなく思ひ給へ歎くへくなむと有四(落)の君(君より)の御もとに御ふみ有とし頃いとおほつかなく思ひ給へつゝかくなむと聞えまほしくなからつゝましき事おほくてわすれやし給つらむ「忘れにしときはの山の岩つゝしいはねと我に戀はまさらし　と思ひ給ふにこそいと心うけれうへ(北方)にも御方々にも今は對面にと思ひ給うれはうれしくなむと聞え給へと有は(草子地)らから四人なみゐたる程に(御ふみ)取かはしつゝ見給てあね君たち我もとにもの給へかしと今たに語らまほしきそいみしきや落くほに居たりし程はいかにとゝふ人もなかりし物をおとゝ(源中納言)の御かへりやかて昨日はさふらはむと思ひ給へしかとかたのふたかりて侍りしかはなむ今よりは最うれしく明暮も侍らひぬへしと思ひ給へしと命のひてなむさて給はせたる劵は給はるましきよしは聞え侍りしを猶かうせさせ給ふ御かむたうのふかきなめりとかしこまり思ひ給へる御おひもさらにかゝる翁の身にはやみのよに侍るへけれはかへし參らせむと思ひ給へれと御心さしの程すくしてとなむ思ひ侍らひつると有四の君の御かへり年頃はすきのしるしもなきやうにて

○年比はすきのしるしも　古今戀五　伊勢「みわの山いかに待みむとしふとも尋る人もあらしとおもへは　後撰戀五　よみ人不知「みわの山しるしの杉はうせす共たれかは人の我を尋ねむ

尋ね聞えさすへきかたなくなむ思ひ給へるにいともうれしくてなむ人はよもと心うくもおしはか(落くほの君の)らせ給ひける哉一打すてゝ別れし人をそこゝたにしらてまとひし戀は増れり(文に四の君の方にてはわか事を戀しさも思はてあらんと有し故にかく返しし給ふなり)　と聞え給へりかくて後は(落君)心しらひつかうまつり給ふ事限りなしおとゝはたとしへなきまて尋おはす越前守太夫なとたゝ今の時の所なれははちをすてゝ參りつかうまつる女君はうれしき物におほしていかてと思ひ給ふ中に太夫をは(とりわきて)御子のことくおほしたりいかて今は北方きむたちに(實のはゝ君)も對面せむこなたにもわたりたまへ母君にははちひさ(繼母北方な)くておくれ奉りし後みなれ奉りしまゝに

○見馴奉りしまゝに　直案に此まゝにと置る詞繼

を筆たり妙なる筆のすさひなり
親（宣ふ）となむ思ひ聞ゆるいかてつかうまつらむと思ふに
此年頃おほしやうとみにたらむ女君たちへも同し心
に聞え給へとの給ふを越前守さなむの給ふ我をおほ
したる事そ限なきと語れは北方いとゝとくつきにし
かはさも思ふらむ我にもいみしくおりたち（わさ／＼しくなり）てうせし
と思ひおかは（おもひ玉はゝなり）此子供をひんなく思はまし男君の（今かく事らんさは）おほ
し／＼置たるにこそ有けれまことかの物縫しよるひ
かへたりけるは此君成けりと思ひよはゐ事有てやう
／＼ふみかよはして云つくかゝる程に衛門督女君と
かたらひ給ふあはれ中納言こそいたく老にけれ世人
は老たる親の爲にするけう（孝）こそはいとけう（興）あれと思
ふことしは六十なりや六十なるとし賀といひてあそ（宴）
ひ（樂）かくをして見せ給ひまたわかな參るとて年の始に
する事とては八講と云て經佛かき供やうする事こそ
はあめれさま／＼めつらしきやうにせむとていかな
る事をかせむいきなから四十九日する人は有と子の
するにてはひんなかるへし是等か中にの給へせむと

おほさむ事せさせ奉らむと申給へは女君いとうれし
とおはしてかく（樂）はけにおもしろくをかしき事にこそ
あめれと後の世まて御身にやく（益）なし四十九日はけに
ゆゝしかるへし八かうなむ此世もいとたうとく後の
爲もめてたく有へけれはして聞せ奉らまほしきとの
給へは男君いとよくおほしたり爰にもさなむ思ひつ
るさらは年のうちにし給へよいとたのもしけ（いたく老さらほひて）なくな
む見え給ふとてあくる日よりいそき給ふ八月の程に
せむとて經かゝせ佛師（ブシ）よはせて佛清ら成へくと男君
女君心に入給へり國々に絹いとしろかねこかねなと
めす御心に心もとなしとおほしめす事なしかゝる程
に俄にみかと御心ちなやみおもくており（御位）給ひて東宮
位につかせ給ひぬ此男君の御いもうとの女御の御は
らの一の宮になむおはしける其御おとうとの二の宮
坊にゐさせ給ひぬ御はゝの女御后に立給ひぬ衛門督
大納言に成給ひぬ中納言には三の君の御男宰相には
大納言の御おとうとの中將成給ひぬすへて此御ゆか
りのみよろこひし給へるいとめてたく此御世にのみ

成はてぬ大納言の御おほえいみしかるまゝにしうとの（源）中納言いとおもたゝしくうれしと思へり七月のうちには（朝家）おほやけの事いとあはたゝしくいとまなきうちにも此御八かうのことたゆみ給はす八月廿一日にとなむさためける我御殿にてし給はむとおほせとまま母君たちたはやすくわたらしとおほして中納言殿に渡り給ふへしとなむ定給ひて中納言殿をいみしう（修理）すりせさせすなこしかせ給ふあたらしく御みすたれたゝみなと用意せさせ給ふ中の君の御男の左少辨越前守なともみな此殿の（家司衆）けいしかけたれはやかて是等を行事にさしておこなはせ給しむ殿をはらひしつらひて大納言殿の御局は北のひさしかけたり君達北方のつほねにはぬりこめの西のはしをしたりあす事はしめてむとてよさり渡し奉り給ひつせはからむをとて人々は参りかよひつゝ聞とてとゝめ給ひて車むつ七つして渡り給ひぬ此たひそ北方君達なとにも對面有けるこきあやのうちきをみなめし色のほそなか着給へり色よりはしめてめてたけれは彼縫ものゝろくにえ給ひしきぬのをりを思ひ出る人有へしあるしの北の方三四の君たちの中に昔物語し給ふむかしおちくほと云しときもおとろへすをかしけなりと見しを今はもの〳〵しく北方ともさへねひてけはひことにすくれて聞え（源大納言の）君たち（着）き給へるものこよなくおごりて見ゆ北方いかゝはせむと思ひ成て物かたりしてまた（女君は）をさなくておのかもとにわたり給ひにしかはわか子となむ思ひ聞えしを（北方自云）おのか心本性たちはらに侍りて思ひやりなく物いふ事もなむ侍るをさ様にてもやもし（いとほしき物のやうにもなり）ものしきさまに御らんせられけむと限りなくいとほしくなんといへは君は（大納言心裏）したには少しをかしく思ふ事有と何かさらに物しき事やは侍りけむ思ひおくこと侍らずたゝいかて思ふさまに心さしを見え奉りにしかなとて思ひおくことこそ侍しとなむの給へは北方うれしくも侍るかなよからぬものともおほく侍るなれは思ふさまにも侍ぬにかくておはするをなむ誰も〳〵よろこひ申侍るめりと申給ひぬ明ぬれはつとめてより事とくはしめ給ふ上達部いとおほかりまして四位五位數しらすおほかり年頃しれかひまとひ給へ

る

○しれかひ　前四丁ォにおのか君のしひまとひ給へるは口をしう思ひて云々　直案に此しひまとひもしれまとひの誤なるへしさてしれかひはおろかなるを云詞也　本朝文粋に白物をシレモノと訓し萬葉に愚人をシレタルヒトと訓りかひはちりかひあらかひなとのかひにて其さまをいふ詞なるへし

中納言いかてかく時の人をむこにてもたりけむさい（しあはせよき）はひ人にてこそありけれと云あさむ

○あさむ　うつほ俊蔭源氏若菜下水鏡中なとに見えて欺誑にて則あさむくの省り言にてたぶらかし又はおとしめそしる様の意に用ゆこゝは餘りしき迄うらやみほむる意にいへりいみしきといふ詞のよきかたにもあしき方にもつよくいふ時に通はし用ると同し新撰字鏡に謫また譏また謗また譚をあさむくとよみ和名鈔に嗤をよめり

此大納言はましてはたち餘にていときよけにてもの（何事なもしありき給ふなり）ものしくて出入ことにおこなひありき給へは中納言（面目ありけになり）いとおもたゝしくうれしくて老心ちになみたを打落してよろこひ居たり御おとうと（大納言の）の宰相中將三の君の（宰中將三の）男の中納言いときよけにさうそきつゝ參り給へり三の君中納言をみるにたえたりし昔おもひ出られていとかなしうてめをつけて見れは裝そくよりはしめていときよけにてゐたるを見るにいと心うくつらし我身のさいはひあらましかはかく打つゝきてありき給はましもこよなき程ならて（我人からを思ひしみて云なるべし）いかによからましと思ふにわか身のいと心うくて人しれす打なきて「思ひ出つやと見れは人はつれなくて心よわきはわか身なりけり　と人しれすいはることはしまりぬ（八講）阿闍梨律師なといとやむことなき人多くてあはれにたうとき經ともとて經一部を一日にあて丶九部なむし始たりけ（昔寫しはしめたるなるへし）る無量義經阿彌陀經なとそへ（添）ひたる一日にあてたる成けり一日に佛一はしらをくやうせむと始め給へりけれは

○一はしら　宣長云書紀に佛像一軀二軀なとあるを一はしら二はしらと訓り又文粋前中書王の文に白檀観世音菩薩一柱とあり漢文にはのつらしえたよの常の人の事にも云り三代實錄十一清和天皇の

大命に太政大臣一柱と詔給ひうつほの物語（藤原君巻）に大將なる人の女等の事を云に今一柱はといへり柱はあまた並居る物なる故にもと皇子なとを數多立並を賀て幾柱と譬申しにやあらむ（古事記傳節略）

合て佛九のはしら今日九部なむかゝせ給ひける淸けなること限りなし四部には色々の色紙にこかねしろかねのでい（泥）ませて書せ給ふてぢくにはいとくろう（黒）かう（香）はしきぢむ（沈木）をしておき口の經箱に一部つゝ入たり

○おき口　榮花物語あさみどりの巻云御帳御几帳御屛風のしさま厨子から櫃のまきゑおきくちめつらかなるまてつかうまつれる云々うつほ菊宴巻に兵衛の君にまきゑのおき口の箱一よろひにおやきぬたゝみ入云々榮花（もとのしつく）こかねのすぢをおき口にせさせ給へり同（御賀）しろかねこかねのおきくち同（御もき）おき口らてんをしうつほ（開藏）まきゑの　おき口の衣箱に挾衣三下るりをのへしろかねこかねのおき口をしまきゑらてんをし云々是等を合せ見るに箱の口へりに鍮懸をしたるを云なるへし

今五部はこむ（紺）の紙にこがねのでいして書て軸にはすゐしやうしてまきゑの箱まきゑには經のもむのさるへき所々の心はへをして一部つゝ入たりたゝ此經佛みなおほろけの物はいらしとみえたり　朝座夕座のかうし（講師）にに（鈍）ひ色のあはせのきぬ共かつけ給ふすへて（大納言の心）心もとなきことなくしつくさむと思ひ給へり日のふるまゝにたうとさ增れはする（総に成ては）には（大よその）人々も上達部も參りこむ中に五の巻のほうもつ（法華　捧物）の日はよろしき人よりはしめ（大納言より消息して招給へは）消息を聞え給へりければ所いさせはけなりけさやずゞやうの物は多くもて集りたるに

○けさやずゝ　和名抄（僧房具）袈裟　東宮切韻釋氏曰袈裟（二音俗云介佐）天竺語也此曰無垢衣又功德衣孫愐曰傳法師沙門之服也　念珠　内典有念珠經今按念珠一曰數珠見千殊經　以上共ニ和名抄

こりて奉らむとする程に左のおほい殿の御ふみ大納言殿に有今日たにとふら（訪）ひに物せむと思ひつれともあしのけおこりて裝束する事のくるしけれはこれはしるし計さゝけさせ給へとてなむと有青きるりのつ

ほにこかねの橘入て青き袋に入五葉の枝に付たり北
方女君の御もとに御ふみありいそき給ふことありと
は承りしかとの給ふこともなかりしかはもろ心なる
さまもえ見給はすや有けむ是は女はまめやかなる
物を引出けるとちりをむすふと
○女はまめやかなる物を引出けると塵をむすふ
濱臣云今俗に心はかりわさと丶云意なり
聞えて侍れはと有からのうすもの丶くちはむらこな
る一かさねにいとけうらなるあけの糸五兩はかりつ
丶をみなへしに付給へりす丶の緒とおほしたるなる
へし御かへり聞え給ふ程に中納言殿よりとて藏人の
少將の中の君の御文有見給へはいとたうときことお
ほしたちけるをかくなむとものたまはさりけるはよろ
こふくとくに入させ給はしとにやと心うくなむとて
こかねしてひらけたるはちすの花を一枝つくりて少
し青く色とりなしてしろかねをおほきやかなる露に
しなしたり又中宮よりとて宮のすけ御つかひにて御

ふみもて參りたり是はけいめいして御つかひけさう
ならぬかたにすゑて
○けさうならぬかたに　玉鬘巻（玉かつら巻の引證し給はん御方を御覽する）
（玉の條に）すみ給ふへき御かた御らんするに南の町にはい
たつらなる對ともしなしいきほひ殊にすみ丶ち給
へれはけさう人しても有へからす云々また寄生
（山寺のあさりに八の宮の住給ひし跡を寺にせんとかたり給ふ條）に今は兵部卿の北の方こ
そはしり給ふへけれはかの宮の御りやうともいひ
つへく或にたりされはこ丶なから寺になさんこと
はひんなかるへし心にまかせてさもえせし所のさ
まもあまりに川づらちかくけせうにもあれはなほ
しんでんをうしなひて殊さまにも作りかへむのこ
丶ろにてなむとの給へは云々けさうはやかて此け
せうと同し語にて氣晴の字を音にて心のはれ〱
敷を云かと源語梯にいへれといとおほつかなし契
沖は顯證にてはれ〱しきなりと云れたりこは源
氏の目案によられたるなるへし直廬案に上にいへ
る説どもいとおぼつかなし喧噪の字音なとにはあ
らぬか宣長はなほ契沖のいはれしかことくなるへ

しといへり
越前守大夫なといひし此殿の御給はりにて左衛門の
佐に成たるなとさかつきさしあるしす御文にはけふ
はさわかしきやうに聞は何事もと〻めつ是はけちえ
むの爲にと有こかねのす〻箱にほたいすのをなむ入
させ給ひたりける
○ほたいすのをなむ　此を文字は助詞にて菩提珠
のす〻をなんといふへきを上にす〻箱とあるにゆ
つりて省きたる文なるを秋成本にをなんのを文字
のかたはらに緒の字を傍譯して詞落たりと書しは
餘りしき事なりけ
はらからも人々見るに男方のやむ事なき人のかくも
ちひて我も〳〵とし給ふこよなきさいはひとみゆ中
（大納言殿より）宮の御かへりにまつ聞え給ふいとも〳〵（文詞）かしこまり
てうけ給ぬ今日の事は只此おほせをなむ身つからさ
さけてなむかしこまりて聞えさせはへる萬は此事
はて〻みつから參り侍りて又々かしこまりもけいす（啓）
へきと聞え給ふ御つかひにはあやのひとへかさねは
かまくちはのからきぬ

○からきぬ　和名抄（衣服類）　背子辨色立成云――（和名加良岐沼）
形如半臂無腰襴之袷衣也楊氏漢語抄――婦人表衣
以錦爲之
うす物のかさねのもをかつけ給つみな事（八講）はしまりて
かむたちめ君たちさ〻（捧物）けてめくり給ふ（阿闍梨律師なとの座なとへくるなり）しろかねこか
ねのはちすのひらけたるをなむ人々おほくしたりけ
る中納言（三の君の御男）のみなむしろかねをふてのかたにつくりて
おなし軸に色とりなしてうすもの（羅にて張たる箱なとに入たる成へし）にすかし給へりけ
るけさなとやうの物は數もしらすとりつみてなむお
きたりけるたき〻（薪）にはすはうをわりて少しいろくろ
めてくみしてゆひたりけり日頃の中に今日なむいと
まうに物いりたらむと見えけるやむことなき上達部
のもちてめくり給を見る人々いみしう老（中納言）のさいはひ
あむほく有ける人かなとほむなほ人はよからむ娘を
こそ
○なほ人は　伊勢物語に云むかし男むさしの國ま
てまとひありきけりさて其國にある女をよはひけ
り父はこと人にあはせむといひけるに母なんあて

なる人にとこゝろ付たりける父はなほ人にて母な
ん藤原なりける云々湖月御本には父はたゞ人にて
とあり　毛詩定之方中に匪直也人をタヾノ人ナラ
ズと訓りさて直人とはよのつねの人といふ程の詞
としられたり○よからん女をこそ　長恨歌終使天
下父母心不重生男重生女といへりし心はえなり
神佛に申てもたらめと云あへりかくて九日いと〳〵
いかめしうしはて給ふ三の君中納言（もとの夫）を今日や〳〵と
思ひ出給ふにさもあらてやみぬいみしう心うしと思
ひ出る玉しひや行てそゝのかしけむ（中納言）
○思ひ出るたましひ　和泉式部「ものおもへは澤
の螢もわかみよりあくかれいつる玉かとみる
ことはてゝ出給ふにしはし立とまりて左衛門の佐（太夫）の
あるをよひ給ひてなとかうとくはみるとの給へはと（見）（わすれたれはかくいらふるなり）
なとてかむつましからむといらふれは昔は忘れ給ふ（中納言）
かいかにそおはすやとの給へは誰ときこゆれはたれ（左衛門のすけ）（中納言）
とか我は聞えむ三の君と聞えしよとの給へは知らす

（さにて侍りけりやさなり）
侍りやすらむといらふれはかくきこえよ「いにしへ
にたかはぬ君か宿見れは戀しきこともかはらさりけ
り　世中はといひて出給へは
○世の中は　六帖「世の中は有てむなしきにはた
すみおのか引々わかれぬる身は　新勅撰　詠人し
らす　「世中はなとやまとなるみなれ川見なれそ
めすてあるへかりける　後撰雑二　題しらす　つ
らゆき「世の中はうき物なれや人ことのとにもか
くにも聞えくるしき　古今十八「世中は何れかさ
してわかならん行とまるをそ宿とさたむる　い
へる一首こゝによくかなひぬへし
すけ返事をたにきかむとおほせかし名殘なくもある
御心かなと見る入てかう〳〵（三の君の方へ）の給ひて出給ひぬとか
たれは三の君しはし立とまり給へかし中々何しに音
信給つらむといと心うしと思ひてかへりこともいふ
へきにしあらねはさてやみぬ大納言殿御としみのこ（共まゝにて）（精進落の事）
となといといかめしうし給ひて歸り給ぬされは今（二條の殿へ）
一日二日計たにおはしませと申給へとせはくてをさ（源大納言の殿は）

なき者共人々むつかしうて侍れは今これらとゝめて（とゝめ置て也）參りこむとてしひて大納言殿わたし奉り給へは（遣らせ給ふ也）おと（中納言）こいとたうとく哀に侍りつることをはさる物にて中宮左大臣殿よりはしめ奉りてかしこき御心はへを見奉つるに命のひて老のめむほくとはおろかなり翁の（源中納言）爲には（自云）佛經一卷をくやうし給はなむいみしき事に侍るへきかくまう（猛）なる事をせさせ給へることゝなくなくよろこへは大納言も女君もさらにもいはすかひ有てうれしとおほす是翁のいとかしこき物と思給へて（大切のものそと思ひて）誰にかつたへ置（在）むと年頃かくし置（藏）て中納言のいまし（君）かよひし時にもとめ（乞求しなるへし）給ひしかとゝり出す成にしはあ（親しむ詞）か君の御料にて物し置給ひけるにこそ有けれわか君（若）に奉らむとていとをかしけなるにしきの袋に入て奉り給へはわか君しりかほに（稚なくたはすきまなり）うちゑみてとり給ひつ笛いとうつくしとおほす音もかしこしさて殿（二條）へよふけて渡り給ふ大納言中納言（父源中ならん）のいみしくうれしと思ひ給へりしかな何事を又して見せ奉らむとの給ふかゝる

程に左のおとゝの給ふ老もて行まゝにゑふつかさ（衛府）たへすわかうはなやかなるわかをとこのそく（職）にてなむたへたるとてかけ（兼）給つる大將大納言（御子）にゆつり給ふ御心にかなへりける世成けれは誰かはさまたけむいとはなやき增り給ふ事限なし中納言（源）いよ／＼うれしうよろこふいと大事にはあらねとおきふしなやみ給ふを大將殿の（大納言の）北方聞給ひて哀にの給ひしを今少しつかうまつらむと思ふに今しはしたにおはせ（ながらへて）なむとねむし給ふ今年なむ七十に成給ひけると聞たまひて大納言のおほしける行さき遠く又もしてむとおほゆる人（世人）ならはこそのとかになとも思はめ人はしきりたるや（何かと打つゞき）うに思ふとも七十の賀せむ我せむと思ひしほい（本意）とけむて（懲）うずへき限はあまたゝひしてきうれしとおほゆる事はたゝ一度にてやみなはいとかひなし死て後には萬のことすとも誰か見はやしうれしと思はむとするこたみ計のことちからのたへむ限せむとおもほし立ていそき給ふ國々の守ともたゝみけしき（大將殿の仰あるなり）のまゝに（みけしきにかなはゝや／＼と）つかうまつりいかて／＼と思ひたれは一つゝ物

の給へといとやすく人々のおまへのきやうのことを
なんあて給へりける右衛門尉（帯刀）はかうふりえて三河守
に成けれは衛門はたゝ七月か程いとま申てゐて（将）下り
けるに女君（落君）旅の具しろかねのかなまり一具
○しろかねのかなまり　和名抄（瓦器類）説文云盌（烏管反字又作椀）（[illegible]色立成云末里俗云毛比）小盂也又（鋺金器）金椀日本靈異記云其器皆（[illegible]）竹取物語に天人の
よそひしたるをうな山の中よりいてきて白かねの
かなまりを持て水をくみありく云々
さうそくよりはしめてくはしくなんしてくたし給ひ
けるそかもとにもかう〳〵のいそきをなむするきぬ
少しとめしにはしらせつかはしたりけれは則かみは
男君の御もとにも（百四）ゝむら奉り女衛門は北方の御もと
にあかねに染たるきぬ廿疋奉りえひすへき（譯）人の子
供のことなと召おほせなとし給ふ御てうとつくらせ
給こかねのみなむおほく入ける父おとゝ（左大臣殿）なとかくし
きりてまうなる（[illegible]）ことはすとの給はすとはあれと（左はの給ひつれと源）後の

よはひいくはくもあらしいけるときうれしとおもほ（中納言の幾許）
えさせよこゝなる子（元服御裳着なとのことなるへし）のことはちからなくとも我せむ
とのたまひてもろ心にいそき給ふ大将（大将殿のこと）をいみしくか
なしくし（憫怜）給ふ御心に入給ふことなれは成けり十一月
十一日になむし（賀を）給けるこたみは大納言殿我とのに皆
引つれてむかへ奉りてなむくはしく（し給ふと云詞を含ませたり）はうるさけれは
かゝす例の人の（事あれはつとへる人々の）たゝいかめかしうまう成ける屏風の
繪こともいと多かれと書するし計にたゝはしの
ひら一ひら
○はしの一ひら秋成云此下正月をもうしゝか
「朝ほらけ霞て見ゆるよしの山春やよのまにこえて
きつらむ　二月さくらの散をあふきて立り「櫻花ち
るてふことはことしより忘れて匂へ千代のためしに
○櫻花ちるてふことは　古今に人の家にうゑたり
ける櫻の咲はしめたりけるを見てよめる　つらゆ
き「今年より春しりそむるさくら花ちるといふ事
はならはさらなん　これによりてよめり
三月三日桃のはな咲たるを人をれり「三千とせにな

るてふもゝの花咲りをりてかさらむ君かたくひに
○三千とせに　拾遺賀部　みつね「みちとせにな
るてふ桃のことしより花さく春にあひにけるかな
朗詠集にはあふそうれしきとあり
四月（秋成云詞たらす有箇には萬葉集にほとゝきすなきてゐる所と有）「ほとゝきすまちつる（ぬる歟）
宵のしのひねはまとろまねともおとろかれけり　五
月さうふ〻く家に時鳥なけり「こゑたてゝ今日しも鳴
は時鳥あやめしるへきつまやなからん　六月はらへ
したり（る所歟）「みそきする河せのそこの清けれはちとせの
かけをうつしてそみる　七月七日に星まつれる家あ
り「雲もなく空すみ渡る天の河いまやひこほし舟わ（寀または渡にや）
たすらん　八月さかのに所のすともせむさいほりに
「打むれてほるにさかのゝ女郎花露に心をおかてひか
れよ　九月白菊多く咲たる家を見る「時ならぬ雪さ
や人の思ふらむまかきに咲るしら菊の花　十月紅葉
いとおもしろき中を行に散かゝれはあふきてたてり
○あふきて立り　秋成云此下に十一月云々の詞あ
るへし
旅人のこゝに手向るぬさなれや、、、、、、、、

○旅人の　秋成云下を洩せり
、、、、、、、、、萬代をへて君につかへむ
○萬代をへて　秋成云上をもらせり神あそひにひ
なめなとの歌なるへし
十二月山に雪積高く降る家に女なかめて居たり「雪
ふかく積りて後は山里にふりはへてくる人のなきか（猿に降る歟）
な　御つゐの「やそ坂を越よときれるつゐなれはつ
きてをのほれくらゐ山にも　なとなむ有ける廣くお
もしろき池のかゝみのやうなるにりようとうけきす
から人共舟にのりて
○から人とも　源氏胡蝶の巻によれはわさとから
人の出立せさせたるなるへし　紫日記に云其日あ
たらしくつくられたる舟ともさしよせさせてりや
うとうけきしゆのいけるかたちおもひやられてあ
さやかにうるはし　源氏胡蝶巻に龍頭鷁首をから
のよそひにこと〳〵しうしつらひてかち取さほさ
すわらはへみなみつらゆひてもろこしたゝせてさ
るおほきなる池の中にさし出たれはまことのしら
ぬ國に來たらむ心ちして云々　榮花物語初花巻
（御幸殿へ御幸の所）に神無月勝日の事さなんかくてこたみの料

とて作らせ給へる舟ともよせて御覧すりやうとうけきしゆのいけるかたち思ひやられてあさやかにうるはし　淮南子本經訓龍舟鷁首浮吹以娛此遊於水也高誘曰龍舟大舟也刻爲龍文以爲飾也鷁大鳥也畫其象著船頭故曰鷁首舟中吹籟與竽以爲樂故曰浮吹以娛

奏樂
遊び居たるはいみしうおもしろし上達部殿上人は舟中にみ餘るまて多かり左のたほい殿おはしたりかつけ物なむ數しらす有ける中宮よりもおほうちき十かさね中納言とのよりかつけもの十かさねさま〳〵に奉り給ふ宮のこたち藏人もみな物見むとて船中の舞樂を云まうてぬ源中納言たちまちに御心ちもやみてめてたし日一日遊び暮してことはてよふけてまかて給ふにおの〳〵物かつけ給はぬ人なしやむ事なきには御送物そへてし給へり左のおほいとの中納言殿に實いとかしこき馬二つ世に名高きさ筆うのこと二つ奉り給ふ御前の人々にしたかひてものかつけ給ひこしさしせさせ給

○こしさし　榮花物語きよも下つかへまてかつけものこしさしほと〳〵につけてさま〳〵し給ふ同卯花

おほうちきふすまこしさしなと例のおほやけさまなるへし。うつほ祭の使もの〻ふしらにこしきぬさしなとす源氏こてふ物の師ともにしろきひとへかさねこしさしなとつき〳〵に給ふ　河海に腰差疋絹　花鳥に云疋絹を腰にさしはさむものなれはなり　うつほ國讓御まへにはみなこしさしたまふ下人にはわたなと給ひて云々　源語梯にこしさしは絹のまき物なり人に給はる時は其人こしにさす故なりといへり然るに秋成か本に佩刀の字を傍譯せしは何とや

大將殿に詞
越前守に此事計は我思ふやうにせよと十分にせよとなりてあて給けれはいとめやすくしたり二三日計實中納言をとゝめ奉給ひてわたし奉給ける女君落君かくし給ふことをいとうれしとおもひ聞え給大將いとかひ有とおほす

落窪物語證解卷之六

かくてやう〳〵中（源）納言おもくなやみ給へは大將殿（大納言の）いとほしくおほし歎きてすほう（修法）などあまたせさせたまへば中納言何かは今は思ふことも侍らねばいのちをしくも侍らずわつらはしく（こさしにくなり）何かは祈りせさせ給ふと申給ふよわるやうに成給へば猶しぬべきなめり（もはやなさいふ程の詞）今しばしいきてあらばやと思ふは我年頃しづみて

〇我とし頃しづみて　箒木卷に本のしな高く生れながら身はしづみ位みじかくて人げなき云々

昨日けふのわかうどゝもにおほくこえられてなりお（位のなり上らぬを云）とりつるなむはぢに思ひける我君の（大將殿をさす）かばかりかへりみ給ふ御世にいのちたにあらは成ぬと思ひつるに又（最）かく（加此）しぬ（死）れば我身の大納言になるまじきほうにてこそ有けれど是のみそあかずおほゆる事とては（其外には）老のはてしに（死）のはてのおもたゝしさ（面目）は

〇おもたゝしさは　直應案になへての說にはおもたゝしは面正しの意にてとくめれとこはおもてふせに對して面おこしなといふに同しく面立しにてはあらぬか今もむねとする事を面立てするなどいへはなり

おのれにまさる人よもあらしとの給ふを大將（大納言の）聞給ひて哀におほゆる事限りなし女君いかて大納言をかな一度なし奉りてあかぬ事なしと思はせ奉らむとの給ふを聞給ひて（大將）けにさせはやと（左樣にせはやさなり）おほせと數（員）より外の大納言になさむことはかたし人の（他人の大納言を）はたさるへきにあらすわか（大將な）ゆつらむの御心つきてちゝおとゝ（左大臣の）の御もとにまうで給ひてかくなむ思ひ給へるをとゝ（大將殿のみこ達）さなき者ともおほく侍れど夫がとくを（祖父中納言殿へ）見すへき行する有へきことにもあらぬかはりには此事を（大納言をゆつり奉らんことを）なむし侍らむと思ひ侍る御けしきよろしう定させ給へと申させ給ふ（左大臣）何かは（大將との丶）さおもはむを（其望のごとく）はやうさるへきやうにそうし（奏）奉らせよ（大將殿に）大納言はなくてもあしくもあらしとわか（おほしめすまゝなる）心なる世な

事なりれば〻おぼしてのたまへは限りなくよろこひ給ひて申給ひてそう奉らせ給ひて中納言大納言に成し給ふせむしくたし給ひつ是をきゝて大納言わつらふ心ちになく〳〵よろこひ給ふさま親にかくよろこはれ給ふよくさくならむと見ゆよろこひにおきたちて願立さすてやうこふのいのちにてものべ給へと人にも心にもくはむ立さするけにや少しおこたりて思ひつより起ゐてうちへ参るへき

○けにや　けはからの約にて故にやと云意なり竹取物語（大伴大納言船中にて風吹かみなるをおち給ふ條に）よこ〻をはなちてよはひ給ふ事千度はかり申給ふけにやあらんやう〳〵神なりやみぬ明石巻に（朱雀院の御ゆめに桐壺帝見えさせ給ひて未の所に）にらみ給ひしに見合給ふけにや御目わつらひ給ひて堪かたうなやみ給ふ云々うつほ藏開上（宰相中將藤つほにまうて源宰相の事語る條）かの君は物を思ひしけにやあらん身のくるしきことのみ見え給ふとの給へは云々大鏡五伊尹公の傳にいとわかくて天祿三年十一月一日にうせ給ひにき御とし四十九御いみな謙徳公と申きいとわかくておはしましたる事は九條殿の御遺言をたかへさせ給へるけにやと申ける云々

日見をとかくせさすへきことあておこなふとても我子とも七八有とかくけむせ後世うれしきめ見せつるや有つるか〻りける御佛を少しにてもおろか成けむばわか身のふかうなるめを見むとてこそ有けれ子二三人にむことりたれと今に我にか〻りてこそ有つめれあまさへ

○あまさへ　直應案にあまさへはあましそへにてかて〻くはへてと云意なり

うきはちのかきりこそ見せつれ此殿にちりばかりもつかうまつる事もなけれと御かへりみをかくこよなく見るかへりてははつかしき心ちしてなむわれしなはかはかりにはをのこゝにまれをむなこにまれ君につかうまつれといさゝかしういひいますか〻れは北方に〳〵しとくしねかしと思ふ

○さかしう　さかしうはもとかしてうと云詞にて榮えしうといへるより出たれどこゝにはけはしき意なり賄賂をさかしき道なといふにて心得べし

其日に成て(参内の日なり)いと清げに(大納言)さうぞきて男君女君一所におはする程にてをがみ(禮をなすなり)奉り給へはいとかしこし(女君拝し給ふは最可畏となり)と聞え給へばおのれは(大納言の詞)おほやけ(朝廷)もかしこく(おそろしさもなしとなり)もおはしまさすたゝあか君(大将殿を云)のみこそうれしくかたしけなくおほえ給へば此世につかうまつらてしぬ(死)とも大かたまもり(守護神)とも成侍りてなとねむし侍ると申給ふ(餘りの忝さにせめての給ふなり)それよりまかて給ひて左のおほい殿に参り給ひて又うち(内裡)に参り給ふ人々にろくたまふ事も同じ様にてまうなる事ともなれはかゝす大納言は其日よりふして又おもくゝるしうし給ふ今はちりはかりおもふことなけれはしなむいのちもをしからすといひふし給へりいとよわく成給ふと聞給ひて大将殿の北方わたり給へりおとゝかたしけなくうれしと思ひ給へり御むすめ五人つとひてつかうまつり歎給ふおとゝこと御子供のつかうまつり給ふは物ともおほさす大将殿の北方のそひおはするをうれしといみしうめてたきことにおほしてものもてひまゐり給ふゆつけをなむまゐり給ひけるた(さ)のもしけなく(ても生へくもなく成行なり)なりはて給ひていける(存生)時そうふん

○そうふん　直麿按に秋成か本に莊分の字を傍譯せしはいみしき誤なりこはまさしく所分の字にして音便にてそうなんと呼るなり密宗にて理趣經を讀誦するに所謂をソウヰとよむも音便なり榮花物語にも御所分なりなとしはしは見えたり

してむ子供の心見るにはらから思ひせす女ともの中にもうとうとしくあめれはろなう(勿論)恨ことゝも出きなむとて

○女とち　宣長曰とちは俗言にどうしと云事なりと直麿按に伊幾志知仁の通音なれはどちは則どしなり同志などの字なるべし常には同士とかけり

越前守をおまへによひすゑて所々のさうの券おひなと取出てえらせ給ふに少しよろしきは只大將殿の北方にのみ奉り給てこと子供これうらやましとたに思ふへからす

○うらやまし　直麿按にうみやむは羨の字を書り

うらは心にてうらさひしうらめつらしなとのうら
と同しやむは病なり他人のよろしき事有を見て我
もさあらまほしくてとさまかうさまに心病しく思
ふをいふ
同し様にちからいりおやにけう(孝)したるたに少し人々
しきになむよろしき物とらするいはむやこゝら(多)の年
頃かへりみるをおむ(思)にやと思へといさゝかしう(けはしうなり)の給
ふをきむたち(側に侍る)はことわりとおほしたり此家もふりて
こそ侍めれとひろうよろしき家なりこゝ大將殿の北
方に奉り給へは北方(源大納言の)きゝてなきぬ
○北方きゝて云々　源大納言の大將との〻北のか
たの事をこゝらのとし月かへりみるを思にやと思
へなとの給へるにむかへて大納言の北の方のかく
こと〳〵しうの給ふなり
(大納言)の給ふことゝもはさもの給ぬへけれとまたいかゝう
らやみ聞えさらむさし頃わかう(若)よりあひなれ奉りて
六七十に成まて見奉りたのみ奉る事えたなかりつる(外にはなかりつると也)

子供も七人もたりなと此家をおのれに給はらさらむ
子供をこそ我に孝することなかりきとておほしもす
てめ世の人(なへての)の親はもはらさいはひなき(無幸不供なこそなり)をなむなから(親のなきゝ)
む時(なりたらんときには)にいかにせむこはおもうなる大將殿におい奉り
ては此家はえ給はすともいとよく有なむ男君もいと
たのもしう此とのはみつはよつはもまうけ給ひてむ
三條もさはかり玉のやうに造りて奉りたり
○三つはよつは　此とのはうへもとみけりさき草
のみつ葉よつはにとの作りして
いとよし爰に置てはをとこ(夫婿)ある子供はかく〳〵しく
家もたるもなかめりよしそれはいひ(いふて見れは)もていけはとて
とかくても有なむおのか身此二人の子供(三四の君を云なるへし)はこゝたち(此家)
ねとてうせられむ(せめらるゝなり)折はいつこにかあらむとするそおほ(大)
ち(路)にたてとや(乞食するを云)いとたうりなく物なの給そといひつ
つけてなけは子供おもひすつるにはあらねとうるは
しくこそはせめてなくとも大路にもたち給はし年頃(目に立ほさ)
の榮花はせめなく共なり

のくらゐには子ともを見給へ（養育せよとなり）さりとも（十分にはなくとも）つかうまつりてん

○うるわしくこそ　神代紀に光華明彩をヒカリウルハシとよめりうるほひしの義なるへし物の潤澤あるはつや〳〵しう見事なるより云詞にてこゝなるは榮耀榮花なといふ意に聞えたり

越前守我かはり（代）取そへてつかうまつれ三條の家はわか家かは本より彼（落君の）御りやうなり大將殿も見給ふに少（落君へ）しはか〳〵敷物え奉らてしな（死）はいふかひなきもの（我を）とおほすへし天下にの給ふとも（詞の限をつくしての給ふ共と云事）こゝは（北の方には）え奉らし今日明日とも（生死）しらぬ身をな恨給そ　○

○天下にの給ふ共　天下にと云詞また三巻にかむのきみいとうつくしけなる男君をいたきてくは御覧せよ心なんいとうつくしく侍る天下に北のかたもえにくみ給はしとなむ思ひ給へるとの給へは云々と有事の限を極盡したる詞と聞ゆ今も極てなき事なりといはんとしては天下にさる事はなしなと云にや

物ないはせ給ひそいとくるしとのたまへは北方またうちいつれと（いにんとして）子供あつまりて又いはせす大將殿の北（落君）方これを聞給ひていとほしく哀におほして北のかた（母）の聞え給ふ事いとことわりなりこゝには只何もかもなたひ（莫）そきむ（賜）たちに（はらからの）あまねく（のこらすなり）奉らせ給へましてこゝに誰も〳〵仕付給へるを思はぬかたにたまはらむいと見くるしなほ早う奉らせ給へとせめ申給へはおと（父）ゝおのれはえとらすましおのれ（北の方には）しに侍らむ時ともかくも心とし（思ひのまゝになり）給へとて更に聞給はすよきおひなとたまさかに有けるなともみな大將殿に奉り給ふ

○よきおひ　おひは即大帯なりしかるを秋成か本は佩刀の字を傍譯せしはいみしきひか事なり

越前かみなとけにすこし物し（とかう）と思へれと（あまりしくなり）親のみけしきえ給ふ人の（大納言の遺言なり）御有樣いふへきにあらねはうちも出す（心にかのふを云）有へきことゝもよくしたゝめて大將殿の北の方を萬にうれしく御とくによりめむほくあるめを見侍りつ

るをかへす〳〵申給てはか〳〵しからぬ女こどもの（三四の君なと云）いとあまた侍つるよく〳〵かへりみ給へと申給へ（落葉）はうけ給りぬ身のたへむかきりはいかてかつかうまつらさらむとの給へはいとうれしき事との給ふ猶こも此御言にしたかへ君を思ひ奉れなとさかしくの給ふまゝにいとよわく成給へは誰も〳〵いみしくおほし歎くつひに七日にきえ入給ひぬ十一月の事成けりいとをしむとしにもあらすことわりとはおほしなから御子供（女男）集りてをしみなき給ふさまいと哀なり大将殿は我君たち（御子）にそひ給ひてわか御とのにおはすに立なからおはしつゝなきあはれかりかつは後の御事あるへき様の御さたも身つからも入ゐ（こなたに）なむとし給ひけれこちゝおとゝ（左大臣殿）あたらしき御門のゐ給ひ（即位）て程なくなかく〳〵とあらむいとまはいとあしかるへしとせちにの給ふ女君もをさなき人々こゝに迎へむは物いみなとするにゆゝし（いまはしきなり）かしこめ（服）おきたらむに殿さへ（女君のましまさぬ）おはせす（みならず）はいとうしろめたなしなゐ給そ（ないり居給ひそとなり）と聞え給ひければ

我御殿にならはぬ獨すみにて君たちうち詠めあそはして（遊はしむるなり）さう〳〵しくおほさるかくと（源大納言の）くうせ給ひぬるを見給に付て（寂寥）もよくそ思ふことをいそきしてけるとおほすかの殿には御いみなき日（おしき日ならねはさなり）とて三日といふにをさめ（收葬）奉り給ふ大将殿御おくりに四位五位いと多くあゆみつゝきたりけにの給ひしやうにしに（死）のさいはひ限りなしといふ御いみのほとは誰も〳〵君たちれい（例）ならぬやのひきゝ（侍廊）に移り給ひてしむ殿（今俗に云書院）には大徳たちいとおほくこもれり大将とのおはせぬ日なし立なから（こゝへ）對面し（女君に）給ひつくすへき（後の事なと次々に）やうなと聞え給ふ

○こもれり　こもるは籠居の字にしてこみをるの約りたるなり

女君の御ふく（服）のいと（純色）てきにさうし（精進）のけに少し青み（顔色の）給へるか哀に見え給へは男君打泣て「なみた河わか泪さへおちそひてきみか袂そふちと見えける　との給へは女君「袖くたすなみたの河のふかけれはふち

の衣といふにそ有ける
○なみた川の歌　此末の句ふちと見えけるは藤と
みえけるをかねたり服衣は藤をもて織は名つく忌
中の色衣なり三年か間此衣をきて服はてゝぬくな
り古今にちゝかおもひにてよめるたゝ岑「ふち衣
はつるゝ糸はわひ人の泪の玉のをとそ成ける　拾
遺に服ぬき侍て（よみ人しらす）「ふち衣はらへてすつる泪
川きしにもまさる水そなかるゝ　又恒德公の服ぬ
きはへりて藤原道信朝臣「限あれはけふぬきすて
つふち衣はてなきものは泪なりけり　宮内卿集に
母におくれたる七夕によみける「藤衣いみもやす
るとたなはたにかさねにつけてぬるゝそてかな
和名抄（葬送具）　縗衣　唐韻云縗（倉回反與催同和名不知古路毛）
なと聞え給ひつゝ行かへりありき（や）給ふ程に三十日の（今俗にたち日といふ）
御いみはてぬれは今は（大將殿詞）かしこにわたり（渡り）給ね子供の戀
聞ゆとのたまへは（落君）今いくはくにもあらす御四十九日（なゝなぬか）
はてゝわたらむとの給へは（大將殿）愛になむよろはおはしけ
るはかなくて御四十九日に成ぬ此殿にて（御はての事）なむし給け

るこたみこそはての事なれはとて大將殿最いかめ（嚴日本紀）
しうおきて（掟）給ひけり子供（故大納言殿の）我も〳〵と程々にしたかひ
てし給ひけれは（はての事）いとまうに（猛）きら〳〵しきほう事にな
む有けることはてゝ大將殿今はいさ給へへやにもそ（母北のかたの）
こむるとの給へはけ（落君）しからす今はかけてもかゝる事
なの給ひそ忘れさりけりと聞給はゝおほしつゝむ事（恨を含なり）
出きなむかしなき（亡）人の御かはりにはよろしうおほさ（母北のかたも中々に）
れにしかなとこそ思はめとの給へはさらなる事女君（大將殿）（はらからの）
たちにも君こそはとひ給はめとの給ふ越前守かく歸
り給ふと聞て彼おと（亡父）ゝの奉れ（落君へ）とてそうふむしわつめ
給ひし物共所々のさう（莊）の劵取いてゝもて參りてあや
しう侍れとも昔人のいひおき給ひしかはなむとて奉
り給へは大將殿見給ひけれはおひみつ一つは我さら
せしなり今一つはさすかにわろしさう（莊）の劵こゝのつ
なむ有ける
○さうの劵こゝのつ　こゝのつは九箇とゝけるは

いかゝ秋成か本にはこゝのつなとなんと有て爰圖と傍譯したり是にしたがふへしいかにと云に下に大將殿のこと所の有かと問せ給ひしを落君の答にさもなしとの給へるにて外に莊なき事しるけれはさうのけむ九通まてあるへきことわりなけれはなり

大將殿けしうは(さ有へき程の)あらぬ所々をこそ領し給けれ此家は(別業)なときんたち(子達)北方(後室)の御中には奉り給はさりしことところの有かとの給へは女君(落君)さもなしこゝはかう久しう年頃住給へれはえじ北方に奉りてんとなむ思ふとの給へは男君(大將殿)いとよき事これは替え給はすともおのれあれは(それへ)おはしなむみなうらみの心ともあらむとうちかたらひ給ひて越前守近うよひよせてそこに(其許)そ此事ともはしらんなさいとこゝかちには(落君の方にのみ所分多きな云)見ゆるそかうけとわつらはしかりて有かと打わらひ給へはかみ(守)さらにさも侍らす

○かうけとわつらはしかりて　直隱按にかうけは豪家の字なり白氏文集云庫車軟轝貴公主香衫細馬豪家郎(牡丹芳)に見えたり莢蒼にも此詞有て源語梯に高家の字をあてられしはいまたしこゝなるは豪富の家をいへりそもよく云詞なり

もと(元來分所し給ひける時)物した(仕)まひし時見なしおき(置)あつけられたるなりと申せはさかしうもし給ひけるかなこゝには(此殿には)たれも誰も住つき給ふめるを何しにかは(いかてあたし人にゆつらふへしやと落君の宣ふめれは領し給ふへしとなり)とこゝにの給ふめれはなむ北方(母北方)しり給ふへし此おひ二つは衛門の督とそこにと(爰には)一つつゝ三つのなりところ(別莊)の券とおひ一つととめつるむけにとゝ置き給けむ(左様に仕置給ひしなり)御心はへのよひたきやうなれはとなむの給へは越前のかみいとふびんな(不便)る事身つから(亡父大納言の)しおき侍らぬことも殿(大將殿)にのみなむしろしめすへき況やさらにわかゝ(斯)くしおく(仕置)なといひ置侍りにしたかひては誰も／＼みな少しつゝわかたれ侍める物をとてとらねは大將あやしくもいふかな

○いはんや更に云々　舊本の句讀にしたかはゝ況や更にわかかくしおき侍にし句たかひては何云々

と讀て亡父大納言のし置侍らぬ事なりとも大將殿のみなん思ひのまゝに領し給ふへし況や亡父のかく所分し置なと云置侍りしを其言にたかひてはいかゝ殊に誰も／＼皆少しつゝはわかたれたる物を更に貪らしとてとく不取なり今按にはいはんやさらに我かくし置なといひ置侍るに句したかひては句たれも／＼皆少しつゝわかたれ侍る物をとて取らねはと讀てまして亡父の更に我かく所分し置といひ置侍しに隨ひては誰も／＼皆さう分は少しつゝは請たる物をとて取らぬなり二説の內いつらにや侍らん世人のさためにまかす

身つからの心ひかさま（僻樣なるへし）にしおかはこそあらめかく見給へは父（大將殿自云）はえ給ふ同しこと此君（落君）はおのれあらむかきりはさて（いかにも）ものし給てんうちつゝきをさなき人々あれはたのもしうかうてはやう四の君なむ思ふ人すくなきやうにものし給ふなるをおのれいかう（一向）にしり聞えむと思ふ其君たちのえ給はむにそへられよ今二所をは御男たちになむつけてつかうまつるへきとの給へは越前守かしこまりよろこふ先かくなむとものし侍らむとてたてはもしかへし（大將）なとしたまはんとりて物し給ふなむつかし同しことをのみいへはとの給ふおひ（守か詞）は猶かくて人に給はせつかはせ給はむと申給へは今ようならむをりは物せむ（大將殿）うとき人たちにしあらねはとてしひてとらせ給ふ聟北方（御二所の）君達（このとのゝ）にかう／＼なんの給へるといへは北方此家はいとをし（惜）かりつるにいとうれしくの給へと猶我はりやうしかへらるゝ（何くれといひもて行しになといふ詞な）と思ふにいとねたけれはおちくほの君のかくし給ふか（こめて見るへし）いてあなうれはしのことやといふに越前守たゝはら立にはら立てつまはしきをしてうつし（現）心にてはおはせぬかさき／＼はいとほしくはつかしことの有けるにおもていたき（無面目）心ちす人の（人たるへき人の）云へきことかまろをいたつらになし給はむとやものしとおほしける程はいか計のはちをかみて（懲）うせられ給ひしひきかへてかくねむころにかへりみ給ふ御德をたにかつ見てかくの給ふましてむかしいかなるさまに人きゝもわか身も

物くるをしやおちくほ何くほとのたまふといへは北方なに計のさくか我は見侍るおとゝはちゝなれはせしにこそあめれさりはつしておちくほといひたらむ何かひかみたらむといへは越前の守あはれの御心や物思ひしり給はぬそかしさくは見すと御心にこそさしあたりておほすらめ太夫左衛門佐に成たるは誰かし給ふにかかけすみは此殿のけいしに成てかゝいせしはたかせしそ今にても見給へ又をのこら人々しくならむ事は只此御徳まつは家もえ給はぬに此家領し給はましかはいつこに引つゝきておはせましまつたたおほし合せよめのまへなるこことも見れは嬉しく哀におほえ給はすやあるかけすみも聞をゝさめてさくなきにしあらねとめをまつ思ふとて母へはえ奉らす今にてもえ奉るましきは子の心さしのうすきそかしおのかうみたらむ子供たにかくおろかにてつかうまつらぬ御身はかく哀なる御心はへをなく〳〵こそよろこひ聞え給はめとにかくにいひしらすれはけにと思ひていらへもせす御かへりいかゝ聞えむ

といへはいさ物いへはひかみたりとかしかましういへは聞えにくしよき事しりものゝ心しりたらむ人おしはかりて申せかしといへはかみ人の爲に申にも侍らす御身のための事なり三四の君のおまへをもいかゝにもつかうまつらむと大將殿の給ふは北方の御心にしたかひ給にこそひとつはらからの御心たにかくやはあるとあめれはかく此御かたのゝ給ふ事まろはいかに心うしわれえたらむたんはのさうはとしによね一ッとたに出くへきにあらす今一ッはゑちうにてたはやすく物もはかるへきにあらす辨のとののえ給へるは三百石の物出くなりかく遠くあしくはかけすみかえりくれたるなりといみしくさいなみければ誰も〳〵おとゝのし置給ひしをみな見給てかくやはの給へき只是にておほせ隔なくかたみにかへり見るへき人たにかゝる心をもたまへるといへは北方あなかしかましいたくないひそししつめそたれもたれもみなまつしけれはいふにこそあらめと云程に左衛門佐のきあひて心にもあらすおほえ身まつしけれ

さよき人はかたみにみさを（節操有て）にをかしうそ有先北方（大將殿の北方）の
爰におはせし程はきい奉り（ねもころなる御事）給へしかさいさゝか（落君の給へる事は）のた
（しもこさわり聞え給はぬかさなり）まへる事聞えさりしかしかく心くるしき御物いひも
哀にしたかひて心やはらかなりとこそはみそかにの（落君の御方には）
給ふめりしかとの給へは北方いかて我しなむにくみ
あしきものにの給へはつみもあらんとの給へは左衛
門越前守あなかしこよし〳〵聞えさせ（御かへり）しとて二人な
からかいつゝきてたてはさすかにやゝ（北方）此御かへりこ
と申せさまねき給へと聞入ぬやうにていぬ左衛門佐
なとかくあしき親をもち奉りけむいかて御心よう成
へからむといのりをたにかせむわれらか爲にも大事
なりといひて御かへりことはもろともにいひ合せて
大將殿へ聞え給ふかしこ（文詞）まりてうけ給ぬ爰にも今は
殿一人をなむたのもしきものに思ひ聞えさする給は
せたる所々の劵（三四の君なと）はわかき人々昔人（亡父大納言の）の御ほいたかはむ
はいかてとつゝみ（心に含思ふなり）侍るを（今さらいなみ侍るも父北方の）御心さしのかひなき樣にや
はとて爰になむ給はりとゝめつる此殿の御事はいと

心はへふかう奉らるめりしを所をあたに物をさせ給
はゝものしくやなき御かけ（故大納言の）にもといこほしく侍るを
劵は猶おかせ給ひねとて歸し奉る此けむを（是迄もろ共に言あはせて聞えんとする詞）この越前
守の取て立けれは北方かへし奉るにやあらむといと
あやしくて夫はなともていくさの給ひつらむものを
もてこ〳〵とよひかへしけれはあな物（守）くるほし大事
の物をおろかにもいふかなときゝけり
○ときゝけり　活字板さわきけりと有直麿按にさ
わきの三字よひかへしの下に有てさてこゝは聞け
りとあるへし
（越前守大將殿へかくと御返り申けれは）大將殿聞給ひてよそ人のもとへいかはこそものしと
も思ひ給はめ北の方（母）の御世のかきりはおはして後に
は三四の君に奉り給はゝ同し事はや置給へ（春は）れとてみ
（大將殿北方）なわたり給ひぬ女君は今又も參りこむかしこにもわ
たり給へとことの（父大納言）ゝ御かはりにはきんたち北方をこ
そは見奉りつかうまつらめ何事もおほつかなからす（きつかひなく出給へとなり）
の給へ隔なくおほしたらむをのみなむうれしかるへ

きなと哀にかたらひ置給ひてなむおはしにけるおと
ゝのおはせし時よりもをかしきものは日ことにをこ
たらす君たちにもまめなるものは北方にと夜中曉に
もはこひ奉り給へは北方けに我子供男女あれとその
こらはすゝろなるにわか爲はらからのためするいと
有かたしとやう〳〵思ひ成ぬる程に年かへりぬ
○すゝろなる　直應按にみたりなる意なり遊仙窟
に漫行の字をスヽロアリキとよめり轉して左ある
ましき意にもいへり大和物語にすゝろなるものに
何そ物多く給はらんといへるはさはあるましき者
と云意なりこゝは男子はみたりなるにと云事にて
やかてさは有ましき義と成なり
つかさめしに左大臣との太政大臣に大將殿左大臣に
成給ぬつき〳〵の御をとうとも成あかり給へれと一
所の御うへをかきいたすあいなけれはかゝす
○あいなけれはかゝす　下の廿八のひらの裏いと
まなくてかゝす
左大臣どのゝ北方の御はひはひを人々も御はらから
たちもめてたうらやむ中の君の御男の左少辨身い
とまつしとてすりやうのそまむと左大臣殿の北方に
つきて申けれはみのにいたはりなし給ひつ
○いたはりなし給ひぬ　源氏葵卷に秋のつかさめ
し有へき定にて大殿も參り給へは君達といたはり
望給ふ事有てとのゝ御あたりはなれ給はねは皆引
つゝき出給ひぬ云々と有て推擧の勞を望奉る事な
りこゝは美濃に推擧し給ふと云事なり
越前守（景純）ことしなむかはりけれと國の事いとよくなし
たりけれは引たてよくて頓てはりまになしつ左衞門
佐は少將に成ぬ誰も〳〵此御とくにてとあつまりて
北方によろこひ聞せ是やは御とく見給はぬ今よりは
猶口にまかせて物なの給そといへはけにことわりと
いひてけり此度のつかさめしは此そう（族）のよろこひな
りけりと人世にいふかく（左大臣）心にまかせてし給へはちゝ
おとゝのせむとおほすことも先此とのにの給ひ合す
るをあしかりなむなしたまひそと有事はせまほしと
おほしなからえし給はすわか（太政大臣殿の）御心にいなとおほす事
も此との二たひ三たひとしきりて申給ふ事はえ聞給
はてはあらねはつかさめし給ふにも數ならぬ人此
殿の御とくにてそ成ける御門の御をちにて限りなく

おほしたる御身は左大臣はかりにて（無上詞）御さえはかきりなくかしこくおしはりての給はむことをいひかへすへきかむたちめもおはさすちゝおとゝ（太政大臣殿）はた同し御子といへとせめてかなしき餘りにかたしけなくおそろしき物におほしたりなか〳〵御子なむ親の心はへには見えける世の人もかくしりておほいとのよりは左大臣殿にこそつかうまつらめそれをそおほい殿もよしとおほしたるとて少しの物のそみたるは參りつかうまつらぬなけれはみなはなやかにて出入給ふ左のおほい殿の北方うまのはなむけ（右少辨みのへ下る馬のはなむけなるへし）さま〳〵いかめしうし給ふ殿の人なるうちに御よういがきりなしうまくらてうし人くして給へりかく委しうすることは（左大臣の心）愛にのそへし給ふなるへし給ふ事あれはなりかく（左大臣）たりてあかぬことなくよくつかうまつれはおろかなりときかはさらにかへりみしとの給ふみのゝかみかしこまりうれしくめてたき女かたなりと思ひてかう〳〵なむの給ふなとまかて語るよくつかうまつれと申給へは御徳にかゝりたる身にこそあれといへは中の君もいとうれしとおほしたり（左大臣）今はいかて三四の君によき人あはせむと人しれす見るにさるへき人のなきこそ口おしけれとの給ひわたる北方三四の君に夏冬の御こ御ものなと故殿のいきて奉り給ひしにもまさりていとゆたかに御位の増るまゝには萬をしり給ひ心もとなきことなし御子う（大將の北方）み御（落君）はまか着給ふ事共もいとまなくてかゝす

○いとまなくてかゝす　上廿五のひら表あいなければかゝす

初の男君も十二にていとおほきにおはすれは宮つかへすこもあやまちすへからすかしこくおはすれは東宮の殿上せさせ給ふふみをよみ給ふにもさとくらうらうしく心からもいとかしこけれはわかうおはしける御門におはしませはあそひかたきにめしつかひをかしきものにおほしてさうの笛ふかせ給ふ時をしへさせ給ひけれはちゝ大臣いとかなしとおほしたりおほち（太政大臣）大臣の御殿にやしなはれ給ふ君は九になむおはしける此兄君の殿上し給ふをうらやましけにおほして我もうちにいかて參らむと申給へは

○うらやましけに　羨の字をよめり心ねたく思ふ

詞なり日本紀には嫉をウラヤムと訓し新撰字鏡には怏の字をよめり靈異記には妬忌をウラヤマシとも云へり共に裏病の義なり裏は心なりすへてよろしかるを見て我もさしたく思へとかなはぬを心苦しく思ふをうらやましといへり轉りて俗に云けなるひと云こゝろになれり

（祖父）おとゝうつくしかりてなとか今迄はいはさりつるとて俄に殿上せさせ給へは（祖父大臣）ちゝおとゝまたいとをさなく侍るものをと申給へと何かその（弟）太郎には增りてかしこくなむあるをとまさりなりとの給へは父おとゝわらひ給ぬうちに參りてそうし給ふ是なむ（祖父）おきなの限りなくかなしとおほえ侍るおほしめしてかへりみさせ給へ兄のわらはにおほしませつかさをえさす共あにゝは增らんとすへて此子を太郎にはせさせ給へとつねにの給ひて御名もをと太郎となむつけ給へりける此御をとうとの女君は八にていみしうをかしけになむおはしけれは今よりふたつなくかしつき給ふ其御をとうとも六ッをのこゝ四にておはしける又此頃もうみ給ふへしかゝるまゝに（左大臣殿の）おろかならす思ひ聞え給へることわりなりおほき大臣ことしなむ六十に成給ひけれは左のおほいとの賀の事つかうまつり給ふことのさほふいとめてたし只思ひやるへしまひは（弟太郎殿と妹君と）この二所せさせ奉り給ふおこらすをかしく二所なから舞給ひけれはおほち大臣泪をおとしてなむ見侍り給ひけるかくすへき事はすこさすいかめしうし給へは御德はいやまさりなりはかなくて月日過て女君ふくぬき給ふ何れも〳〵子供あひさかゆる程にて御はてのことなとしつくし給ひけりまゝ母（北方）かく子供のよろこひをしけるを御とくとよろこひけれはいとうれしとなむおほしける左の大臣いかてこの君たちによきむことりせむとおほして見るにさるへきかなきことおほしわたる程におほやけのえらひにて中納言のつくしの帥にて下るかにはかに（妻）めうせたりけるを聞給て人からもいとよき人なりとおほし（兆）きさしてうちに（內裡）參りあひたるにも心とゞめてかたらひ給ひてさるべきをりに此事のすちをほのめかし給ひけれは（中納言）いとよきことゝ思ひていとよきことに侍るなりと申（約束する寄り）契りて

けり左のおほいとの北方（落君）に申給ふしかく＼／の人をな
（・聟にとらんと）むいひ契りたるかむたちめ（上達部）にも有人からもいとよし
となむ思ふ三の君にやあはすへき四のきみにやあは（婚）
すへき何れにかとの給へば北方いざ御心（左大臣の）にさだめ給
へまろは四の君にとなむ思ふいとほしきこと（おもしろの駒に婿せし事）有しか
は思ひもなほし給計にとの給へば此つこもりに下り（中納言は筑紫の帥に成て）
ぬへかなり（乘）とくしてむ北方にさの給へよろし（侍）う思し
たらは爰（左大臣殿）にてあはせむ（婿にするなり）との給へは文（落君）にてはいかゝな
かく＼／ともかゝむ身つからにわたらむとすれは所せ（遠慮有なり）
し少將（左大臣の 四の君の弟）はりまの守などにくはしくの給へなど聞え給
ふ

○所せし　上三十のひらの裏に又此頃もうみ給ふ
へしと有て身こもりて居給へはなり直麿按に此下
なとの給へはなと有し詞落たるなるへし

つとめて少將を北方（播磨守落君）よび給てみそかにの給ふみづか
らわたりて聞えむと思へとかみさしたる事（かゝつらひて去かたきを云）有てなむ

（左大臣の）かう＼／のことをの給いかなるべきことにかあらむ
心にくゝ（よろしきことゝは思へと）はあれど一人有女には（通ひわたる男なきも有なら）思ひの外なる事も有
此人（中納言を云）いとよさ人なめり（ひなれはなほつかなく思ふなり）誰も＼／よろしと思ひ給へる
事ならば爰にむかへ奉りてともかくもせむとなむの
給ふめるとなんの給へば少將（四の君の弟）いともかしこきおほせ
にこそ侍なれあしき事にても殿（左大臣殿）のしかの給はせむは
いなみ聞えさすべきにもあらすましていとめてたき
事にこそ侍なれかくなむと物し侍らむ（いひつき侍らんとてなり）とて親の御も（母北の方の）
とにいきてしか（左大臣）＼／なむの給ふいみしうよき事なり
いかなる人成とも只今の時の大臣ばかり（ほとゝ云詞）の御娘のや
うにての給あはせ（聟取の事なと）給はんをおろかには思はしおもし
ろの駒（おもしろの駒故になり）にいふかひなくわらはれそしられ（世人に）給ひしを是
にてはちかくし給へとしかおほしたるなめり年は四（中納言）
十よになむある故（こ）おとゝおはして（存生）はじめてし（とり立てなと云心か）給ふと
もかばかりのこと（是程のむことりはなり）えし給はし親（左大臣）に増りて哀にとさま

からさまにいたくよろしうなさんとおぼしたる限りなく

○とさまかうさま　源氏夕顔巻にとさまかうさまにつけてと有とに付かくに付と云事なり日本紀に東西ヒトサマカウサマと訓りと契冲師いへり

うれしき事早う四の君彼とのにまゐらせ給へとの給へば北方わがなからむ跡にかくてのみ有をうしろめたなしたゞすれうのよからむをがなとこそ思ひつるにさしてかむだちめにもあなりいと〳〵うれしきことなゝり

○こそ思ひつるに　月詣集正月平經正「春をこそて人もとひけり梅花鶯をこそさそふと思ふに　是はこそをにゝてうけたりこゝと同し例なり

かくこまかにうしろみ給ふあはれなる事をぞ女君よりは殿こそ御心ばへ哀なれといへは殿も北方をいみじうおもひ聞え給ふ餘りのまゐらまではくるそと聞侍る時も有まゐらをおぼさは此はらからの君たちを男も女もおもほせとこそ申給へばいみじきといはひおはしける數ならぬかけまさらだに女は見まほしくしらまほしくたむ有を此殿はすべて此北方より外に女はなしとおぼしたるうちに參り給ても后宮の女房たちのきよげなるにたはふれにもめ見入給はず夜中にも曉にもかきたとりてぞまかで給ふ女の男に思はれ給ふためしには此北方をし奉るべし

○かきたとりてぞ　源氏若菜上「夕やみは道たと〳〵しつき待て歸りわかせこ其間にも見む

など云ていかゞの給ふとさうじみに聞せ奉り給へとの給へは四君わたり給へとよべはおはしたりかうかうの事なむ彼おほいとのゝの給ふなるをゝこに人のおぼしたりし御身をいともよき事となむうれしくおもふ

○をこに人の思し　をこは愚なるを云三代實錄に烏滸と書り語意いまだ詳ならず愚の義より云といへるは假名たかへり或説に後漢書南蠻傳に烏滸といふ國人のをかしきさまを載せたり是より出たる語なりといへり

いかゞおほすとの給へば四の君おもてあかめていと

よきこさに侍るなれごかゝる身をしらぬ（おろかなるを云）さまにやな（侍らん）なさの詞をこひのこせり
でうさる事か侍べき人のおぼさんもかつは彼殿の（今さら中納言の）御
（妻に成ても）はぢならむいさ見ぐるしからむ心うき身なれはあま
に成なむさ思へごおはせむ（母北方）限りはれいの（故大納言殿の）かたみに見
奉るをだに（せめて子の職と思ひしみて）つかうまつるに思ひ給へてなん今迄だに
侍さてなき給ひぬれは思ひしり（少將）給へりけりさ哀にう
ち涙ぐみて居たり北方（母）あなまが〳〵しなでうあまに
か成給ふへき

○まが〳〵し　忌々しなさ云に同し日本紀に禍の
字をマガさ訓し延喜式に麻我許登さ見え萬葉に枉
言さかけり何れもあしき事をいへり枕草紙（卯杖の事いへる條）にいかなる心にかあらん打つる人をのろひなきは
ら立まが〳〵しういふもおかし

しばしにても猶花やかなるめみ給はむぞ人もかくも（けに左樣にも）
有けりさ思ふべきおのが（母北のかた自云）言にしたがひ（左大臣の北の方へ）給うさ思ひて
此事し給へさの給ふ少將御かへりはいかゞ申さむさ
いへば此君（四の君）はかくなむの給へさこゝにはなむいさう
れしき事只さもかくも御心しておほさむかたにしな
し給へさの給へ（母北方）はをさて（少將）立ぬ殿（左大臣）に參りてしか〳〵な
む申さ有つる事を申給へば北方四の君（落君）のゝ給ひける
事を哀がりてさもおぼすべき（いさみくろしからんなさ）ことなれご世に有人は
かゝるたぐひおほかなりさおぼしなすべくさの給ふ
殿きゝ給て北方（母）だにさの給ばさうじみ（四の君）ものしこおほ（うしろめたしなさ）
すさも（思ふなり）只して（爲）むいさよき人なり（帥はよき人からなり）此月つごもりに下る（筑紫へ）
へし（帥も）同じくはさく（疾）さの給ひきはや四君こゝにわたし
給へさ少將にの給へばこよみさりにやりて見給ふに
此七日いさよかりけり

○こよみ　暦をこよみさ訓するは日讀の義日をカ
さよむは常の事なりカさコさ通す今いふ日讀の酉
日讀の戌なさ云も暦に用る酉の字戌の字さ云こさ
にて常に用る鳥犬の字にまきれぬ名目なり

何事にかさはらん（障）人々のさうぞくは爰にし（左大臣殿より）おかれた
らむまうけ（儲）の物して西の對にてせむさおもほして西
のたいしつらはせ給ひて四の君はや（早）わたり給へさ聞

え給へは早々（かしこにても）といそがし給へごほいなき事（四の君）なれば
○しつらふ　補理の字を訓りしつくらふの省語なる羅夫を約れは留となりてつくるといふ義なりされど今時は修復することをのみ云詞のごとくなれり

いとうたて物うく（かされ〳〵やうの心）覺えて今々といひてさらに思ひもたゝねば此事（少將詞）ならずともわたり給へと（左大臣の）有とあらむにはおはすまじく（帥に嫁し給ふ事ならず共）やあらむあなひが〳〵しといひてわたし奉りつおとな（にうしろの駒か生せたる子なり）二人わらは一人御供（母君とゝもに）には有ける御身は十一にていとをかしげなり（人々）いかゞほしと（四の君）おぼしたえを見ぐるしからむとてとゞむるをいとかなしくうちなかれぬ（四の君わたり給ひぬれは）左の大い殿待うけ給ひて對面し給て有べき事（帥と婚禮の事なり）とも申給へど中々始よりもはしたなくはづかしう（四の君は）おぼして御いらへもをさ〳〵聞え給はず此北のかたの三つが（落君には三つなさり給ふを云）をとゝにて廿五になんおはしけるおもしろのこまは十四にてむことりて十五にて子うみ給へりける此北方廿八になむおはしける三日四日の（わつかに三つか）程に（四つかのたかひなから）此君（四の君）をいたはりかしつき給ふこと限りなし七日に成て西のたいにわれもろともにわたり給ひぬ御供の人々なへ（萎）たるは（見ぐるしげに成たるなり）さうぞく一具づゝ給ふ人ずくなゝりとてわか（落君の）御人わらは一人をとな三人しもづかへ二人とわたし給ふさうぞくともしつらひたるけしきいとめやすし母（異母）北方こそはらから（兄弟）たち只愛になむきける暮行まゝに出入（人々いて入て何くれの事）いそき給ふせうと（兄）の少將（大夫と云しが事なり）かたじけなくうれしと思ふ夜うちふけて帥いましける（わたらるゝなり）少將し（四の君の心に思ふなり）るべしてみち引入つ四の君人も（たれも〳〵）いふかひもなく（いなひても）もわらす此殿（左大臣殿）もかくゐたちてしたまへはかなふましかりけりと思ひなしてなむ出給けるてあたり（帥の事）けはひなどのをかしければうれしと思ひけり聞え給ひけむことはきかねばかゝず明ぬれば出（帥）給ぬ北のかた（落君）いかに思ふらむとなけき給へば（左大臣の[illegible]の世のうへな[illegible]給ふなり）ふみはたび〳〵やらねど心ながきたぐひなむ
○ふみはたび〳〵　左大臣の北方に語り給ふは大

凡の世間をみるに男の文はたび〳〵女のもとへやらぬと心長くそひとくる類なんあるものをまして大臣のかくせさせ給ひたれは帥も世にもおろかにはおもはしをこなたよりももとかしけに心に合ぬけしきなとしたるはよろしくもあらぬ事なりとをしへてむかしのことなとよそへ語給ふなり四の君にかくの給へとの下心なるへし

有（帥も）世にもおろかには思はじかたげに（難氣なるへし）心にあはぬけしきしたるこそかしこくもあらぬ（よくもあらしさなり）ことぞまづ君をれい（左大臣北の方を思ひ初しむかしを語給ふなり）のけそうのやうにやは（なか〳〵の懸想のやうにやは）佗いられ（思ひわひ心いられして聞え渡りしはな）聞えし思ひ出て時々聞えしかとみそめ奉りてし後なんなほざりにてやみ（みし〳〵ならすさなり）なましかはとくやし（悔）かりしむかしさおぼゆるとをかしきなとかたらひ給ひて二所なからおきてこなたに（彼方なり四の君のかたなり）おはしぬ四の君また帳のうちにね給へり

○帳のうちに云々　和名抄（屏障具）釋名云帳（猪高反　音長）張也施帳於床上也小帳曰斗（俗云斗張　一云屏帳）形如覆斗也今按帳屬有几帳名所出未詳と見え類聚雜要抄（巻四）に帳の圖を載せたり方八尺高さ七尺一寸土居をおき杜十二本（一角に三本）立桁四本をかく（天井也）金銅の金物をもて飾り鏡二面をかく枕のかた足のかたに帷をかけ兩脇几帳をたつ中に疊二帖を敷たり聞なり委しくはここに云かたし

北方（落君帳の内に入て）おき給へとおこし給ふ程にそち（帥）のふみ（四の君への）もて來たり男君（左大臣殿）とり給ひてまつ見侍らまほしけれどかくさむとおぼす事（是人のふみなさむさと見ましき數なり）も書たらむとてなん後にはかならず見せ給へとて几帳のうちにさし入給へば北方とりて奉り給へゝごふとしも取給はずさば（四の君）よみ聞えむとて（落君）引明給ふ四君かのはじめのおもしろが書出したりしふみを思ふに又さもやあらむと

○文を思ふに「世の人のけふのけさには戀すとも聞しにたかふこゝちこそすれ　と有し文の事也むねつぶれて思ふによみ給をきけば「あふことのふりその濱の眞砂をばけふきみ思ふ數にこそとれ　いつのまに戀のとなむ有ける

○いつのまに　古今六帖深養父「いつのまに戀しきことのつもるらん別てのちはほともへなくに

同　閑院左大臣「いつのまに戀しかるらんしら露

のけさこそおきてかへり來にしか　此うた後撰戀三には人のもとより曉かへりてとはしかき有て「いつのまに戀しかるらんから衣ぬれにし袖のひるまはかりに　と有

（落窪詞）御返りはや聞え給へとあれどいらへ（四の君）もし給はずおと（左大臣）ゞ其ふみしばしとせめての給へば何のゆかしう（落窪）おぼすならむとてふみさし出し給へればいたう（左大臣かくさんと書きむこ）書こそへた（こも書たらんと思ひし甲斐なり　見さして見給はおなしへし）めるはとて御かへり給へとて又さし入給へればはや（落窪）〳〵とすゝりかみぐしてせめ給ふ四の君かへり事も此殿み給つべかりといとはづかしくてとみにも（頓）書給はずおなみだぐみ（落窪）るしはや〳〵との給へば物もおぼえで（心もそらなるさまなり）かく「我ならぬ戀ちもおほくありそうふのはまのまさごはとりつきにけむ

○我ならぬ　我にあらぬなり彼伊勢物語にみだれんと思ふわれならなくにと有同じ詞なり

とて引むすびて出し給へればおとゞあなゆかしのわ（おとゞの心つかひ深き事なり）ざや今日のかへり事みでやみぬることゝ口をしけれど云る給へるさまいとをかしつかひにものかつげさせ給ふそち（帥）は此廿八日になむ舟（筑紫へ下るへきふれ）にのるべき日とりたりければいて立更にいと近しかくて左の大いどのには三日のよのこと（四の君）今は（今始て聟取しみし）しめたるやうにまうけ給へり

○日とりたりければ　今いふ日取の意かさらはなりければといふへしたゝしとるはえらむなと云意にや

人は（我か姉妹にまれ娘にまれ）たゞかしつきいたはるになむ男の（婿とうる）心としもかゝるものをといとほしき事そはりて思ふなることまかに（何事も）と口入給へ家にてことはしめたる事なればおろかな（疎きならんには）らむいと（いとほしさなり）ほしとの給へは（落窪）女君むかし我（左大臣殿の）を見はじめ給ひしこといおもひ出られていかに（君は）おもほしけむあこき（其折から）は心うきめはみきかしこおぼしていかに（落窪の下心におはしながら）まろ見はじめたまひし折はじめてやむ事なく（君の）のみおもほし増りけむとの給へは

○やむ事なく　直隠按に此やむことなきはいとやむことなきゝはにはあらぬかなといへるとは自別にして俗に云やむ事をえすなと云に同しくより所

なきわさとのみ思しまさりけんといへるなるへし
殿いとよくほゝゑみてさてそらごとぞとの給ひてち
かう寄て落くぼと云たてられてさいなまれ給ひしよ（夜）
こそいみしき心ざしは増りしか其夜思ひふし（伏）たりし
ほい（本意）のみなかなひたるかな是がたう（答）にいみじうてう（懲）
じふせて後にはよろこびまどふ（歡にたへぬさまを云）ばかりかへりみばや
となむ思ひしかば四の君の事もかくするぞ北方（母）はう
れしと思ひたりやかけずみ（越前守）などは思ひしりためりな
どのたまへは女君かしこにもうれしとの給ふ時おほ
かめりとの給ふ暮ぬればそち（帥）いましぬ御供の人々に
物かつげきやう（饗）などさせ給ふ四日よりは日たけつゝ
なむ出けるものへしく清けにめやすしおもしろの
こまと一つ口に云へきにあらすそち（帥は）のいふまかり下（帥　筑紫へ）
るへき程いと近ししたゝむへき事共のいとおほかる（十六夜日記に歌の草紙ともえりしたゝめと有）
をあくれはまかりくるれは參るにおこたりてなむあ（も取しらへするな云　何くれしたゝむへき事共に）
しきにかしこ（帥のかた）に人もなしわたり給ひて

○したゝむへぎこと　源氏松風卷其こども今くは
しく認めなんと云にも云々とあるしたゝむにて吟
味してしらふるをいへり太平記に認（シタヽムル）の字をよめり
下認の義なるへしといへり
また下らむといはむ人めし集ておもほしたて日はた
ゝ十日よになむ有との給へは女君とほかなる所にた
のもしき人々（母北方はらからなと）を置奉りてはいかてとの給へは
○たのもしき人　蜻蛉日記（父の倫寧朝臣の陸奥へ下る條）とあるほ
どにわかたのもしき人みちの國へ立ぬときけはい
と哀なる程なり
そち（帥）さは一人まかり下れとやたゝかく一二日見給ひ
てやみ給ひなむとやとおほしゝとうちわらひ給ふさ
まいとやすらかなり女君をそちかたちはをかしけな（帥の思ひ給ふ心中に）
めり心やいかゝあらむとあかす思ひけれとかゝるや（無覺束なと云かことも左大臣とのな）
さんことなき人のわさとし給へるに今日明日下るへき（取こしらへ給へるになり）
にすつへきにあらすと思ひてもろ心に何事もし給へ（女君を）
とて俄にむかふれはけしうはあらぬむことりいとゝ（引さるなり　左大臣）
くむかふるはとわらひ給ひて御おくりさるべき人々（四の君の）

むつましき
○けしうはあらぬ　人なみなるなと云意にて不足にも思はぬ詞なり萬葉に殊異なとの字をケと訓てあやしくことなる事を云へはあやしからねは尋常にして何事もなきを云さて不足にも思はぬ詞となれり
御せむにわざし給へる車三つして渡り給ひぬ殿より（わささてうし出しなるへし）（落君の御方より西の對に來りて居る御達なり　四の君につきて御さいゝ方へは）有けるごたち今さへ何しにか参らむなど云ければ
○こたち　秋成本子達の字を傍譯せしは僻事なりこは御達の字にして前に人すくなりとてわか御人をとな三人わらはは一人下つかへ二人とわたし給ふといひまた殿に侍る人々もわかうのみ有ていひ合すへき人もなし云々といへる是なり
北方猶参れとしひてやり給ひつ我そひてありき給ふ（落君）（在来）所にも有ければもとのこたちいつしかともかはりゐ給かな御心いかならむ
○我そひて云々　邦子云わかそひてと云よりもとの御達も迄は草子地にて我か故北の方にそひて在來たる所にも有ける故もとの御達四の君のわたり給ひしをみて安からす思ひて云あへるはいつしかともなくこゝにかはり居給ふことかな今の北方御心はいかにやあらん御まゝの事なれは御子達の御爲あしういみしき事も有へき歟まして左大臣は只今時めき給ふ人なれは北の方は其御族なりとて御達なともおし立たるふるまひありもやせんとおのかしゝさゝめきあへるをいへり
君たちの御ためあしういみしうも有へきかな只今の時の人の御そう（族）とておし立てあらんかしなどおいかとちいひあへり
○時の人　五巻（五十五丁オ）年ころしれまとひ給へる中納君はいかゝ斯時の人をむこにてもたりけん空穂たゝこそ（侍從の御息所の御うへを）この御息所はたゝ今のときの人なり同藤原君巻（式部せうの人の事な）かくていとかしこき時の人にて春宮にもうへゆるされて源氏若菜下まことや右衛門督は中納言に成にきかし今の御代にはいとしたく思されていと時の人なり古今雑下時なりける人のにはかにときなくなりて歎くを見て大和物語に深草のみかとゝ申ける御とき良少將といふ人いみしき時にて有けりなど見えて時をえたる

を云へり
（中納言の帥の初の妻の）はしめのはらにて太郎は何かしのこむの督次郎は藏
人よりかうふり給りてある此頭しにたるはらの女子
十二ふたつなるをのこゝなむ有ける是二人をなむ父
かなしくすとはおろかなりと云ける（或本四字なし）こんの守も式部
大夫もおくりせむとていとまおほやけにまうして皆
下るにそちかつけもの共し給へば人々のさうぞく（裝束し出へき料）と
（にてなり）てきぬ二百疋そめくさ共みなあづけ給たれば四の君
（活）そうそうとならへて取（手にとりふれん）ふれむかたなししやらむ（せんすへもなくて）やう
（なり）もおほえで母北方に云やるかう〳〵の物どもせよと
て絹どもあのれどいかゞはし侍らむ殿（左大臣殿）より侍る人々（落君の）
（しひて參れとて參らせし人々なり）もわかうのみ有ていひ合すへき人（裝束ともてうし出んわざ）もなしいと戀しく（母北）
（の方の御事を）もおぼえさせ給ふををさなき人も見まほしく侍るを
忍びてわたり給へと云やりければ北方（母）少將をよびで
かくなむ云たるよさりしのびてわたらむ車しばしと
の給へは忍びてとおぼすとも人はまさにしらじやま

た旅だちたるきら〳〵敷道にもたまへるをひきさげ
てゐたらむいとみぐるしからむうせにける（前にうせ給ひし帥の妻の子）あの子た
ちとて十ばかりなる有をそちはよび出てつかひ給ふ
めればいと哀なめりわが（少將）左の大い殿のうへに申給ふ
てよかなりとの給はゞわたり給へといへば北方いと
（おなはじと）あたはず思ひてあの殿のゆるしなくば親子のおもて
も見で下してむずるかとてたゞひそみにひそみ給ひ
ひて

○たゝひそみに　ひそむ顰の字なり眉をしはめて
愁るを云

何事もくそも人も此殿おはせむ限（限）りはえやす（易）くすま
じかめり

○くそも人も　母北の方の極て人わろき所を見せ
て屎も人もと書るなるへし此等自ら此もの語の筆
勢なり今いふ猫もしやくしもなと云に似り　直麿
按に是誤解なりくそはこその轉にて人の名の下へ
付てよふ詞にて當世殿といひ樣と云に似りされと
自稱にも云時は丸といふに同しき歟大和物語にこ
やくしくそといふ人見えまた貫之童名阿古屎なと

有くそまるといふことあれは卑下して云なるへし
こゝのくそも自稱にて我も人もといふ事なるへく
見ゆ

我こそ人をはしたがへしか（自由にせしと云事）人にしたかふ身と成にたるか悲しき事又我云事同し心にいらへたる子こそなけれとの給へは少將例のはら立給ひぬとみて何しにかはいひあはせ給ふ（假に云合せ給ふは）

○何しにかは　直應按にはかにの誤にや下文にふと物し給ひなんひんなかるへしといへは云々

ひむ（便）なければしか申侍ふにかくさいなむはいとこそくるしけれとて立ぬうれしとよるひるよろこへとは（母北方）らだにたちぬれば猶々せめてかくなむ有ける少將左（落君を云）の大い殿に參りて北方にかう／＼なむ侍つるそのことくはいはて戀しく見まほしくし給ふと語れば北方（左大臣）（少將詞）ことわりにこそはあなれはやわたし奉り給へかし少（殿の）（母北方）將そちも（帥）わたれとも思ひ給はざらむにふと物し給ひなむびんなかるべきといへは北方それもさるべき事（落君）

さらば御身づからおはしてそちの（少將）聞む折に御せうそ（母北方の）こそていと戀しくなむおぼえ給ふをあからさまにも（俗にちよと〻云詞）れわたり給へとほくおはすべき程もいと殘りすくな（筑紫への事）う成にたればいと哀に心ぼそうなむこれよりまれ出（今より直に）立給へ京におはせむ限りは見奉らむとの給ふと聞え（四の君のみやこに居給はん内は）給はむにつけてそこに（少將に）おのづからいふけしき見えな（帥）む夫にしたかひてわたりもむかへもし給へそのちい（母君のかたへわたり給ふ共四の君の方へむか）さき君は其事とはな知らせさせ給ひそ御供にてゐて（へ給ふ共なり）（帥に）下り給ふ共ひとりおはせむが心ほそきにとて北方の（四の君の）（母）そひ奉らせ給にて有なむどの給へは少將いと思ふやうに思ひやり有てめて度その給ふうれしうあらまほ（落君）しき御心かなわか親のひたうに只はらたちにはらたち給ふこそ物云かひなけれと思ひていとよくの給は（是より詞）せたりさらはしか物し侍らむとてとのへ行もくるし（帥の殿へ）けれど戀しとおもひ給ふにこそあらめと思ひて女君（四の君の）も同し所におはすいかでもの聞えさせむといへばそ（少將）（帥）

ちこゝにて聞え給むにも有ぬへき事(さも有ぬへきことゝおほすならはこなり)ならはさく入て聞え給へといへは少將入てしかなむといへは女(四の君)きみけにいかて對面せむ爰にもいと戀しくなむおほえ給へはいかて參りこむ(まゐり來給はんやうに)となむ昨日(母北方へ)聞えたりしとの給へは(帥の詞)そちかしこへ渡り給はゝ二所(夫婦ながら也)かよひせむほとに物しくおのか爲になむあしかるへきをかたしけな(俗に云はばかりなからなり)くとも爰にわたらせ給ふへし人侍らはこそつゝましくもおほさめをさなき人(側なる人は)計なむ夫をびんなかるべくははなれたるかたに置侍りなむ京に物し給ふべき程はげに今日あす計なり對面なくてはいかでかはとの給へば定めしもしるく(少將かれて思ひ定めしもしるくなり)其事をなむかしこに(母北方)もいといみしく歎かめるといへば(帥)そちはやよろしうさだめてこなたにわたし奉り給へそちらに(其地)參り給はむ事は若あしくなむ有といへば少將さらばかくなむものし侍らむとて立ば四の君かならず/\よくそゝのかし給へとのたまへばうけ(少將)給ぬとて出ぬ(少將)母北方の御もとに來りてはらたゝせ給ひつるおそろしさに有つる樣にか

う/\左の大い殿のうへの(落君)ゝ給へる事しか/\と云てはかなきことなれど(取立たる程の事にはあらねど)人におとるまじくゆゑ有てかしこくこその給ひしか心にさいはひ(さとくたはするた云)有物成けりといふ北方(母)いく(往)へきことを限りなくよろこびてげに/\よくもおもぼしよりけるかな三の君もいさ給へよさりにてもと思ふとの給へは(少將)いとにわかならむあすなどやよろしう侍らむといふ明ぬればわたらむのいそぎし給ふすぐよかなるきぬのなきそいと/\いとほしきかくしの方にやあらむとの云ふ

○かくしの方云々　秋成云此一章脱文あるへし直まろ按にかくしの方より車をよせたる事落たるなるへしかくしの事清水詣の條に註せり

左の大い殿わたり給と聞て御そなどはあさやかにもあらじとおぼしよりていと清げにしおきたる御ぞ一くまだ姬君の御れうなる一くだりちいさき人によせ奉り給へたびにはあらはなる事(はれ/\しきなり)も有物ぞとて奉り給ふ北方(母)よろこぶ事さすか限りなし人はうみたる子よりもまゝ子のさくをこそ見るべけれ我子七人有どか

くこまかに心のしらびかへり見るやはある物のはじめに此子のなりのなえ（萎）たりつるを思ひつる（いかゝさ）に限りなくもうれしくも有かなと例よりも心ゆきよろこふもそち殿へいけとはからひたるか限りなくうれしき成けり

○わか子七人あれと　毛詩凱風云有レ子七人莫レ慰二母心一傳云慰安也

暮ぬれは車二つして渡り給ひぬ（帥の方へ）四の君いとうれしきと思ひて日頃の有さまかたる娘は此頃の程にいとおほきにをかしうさうそきて参れば先かきなでゝいとかなしとおぼゆ是をいかにしてゐて下ら（筑紫へ）ましと思ひなむみたれ侍るまろが子ともしらせむはづかしき事といへば北方（母）左の大いどのゝうへ（落君）はしか〳〵の給ひけるいとよき事なりまろがきたる物この子のきたるものあの殿より給へるといへばかく（四の君）いみじくの給おぼしける人（落君の事）をなどてむかしおろかに思ひ聞えけむまろがうへをなむなか〳〵親たちに増りてとのゝ御ご（盒）き（器）をなむ一く給へる人々のそうぞく几帳屏風より初てたゞおぼしやれ

○御こきをなん　直鷹按に御ごきをさへかすへ舉ていさゝかなる品まて行とゝかさる所なきを云

是（これらの品々）かくし給はざらましかば父のこたちもいかゞ見ましとなむうれしくといへば北のかた彌まゝ子のとくをなむ見るとしり給へ此あむなる子供（前妻の）ゆめ〳〵にくみ給ふなおのか子供よりもかなしうし給へおのれかむかしにくま（落君を）ざらましかばはし〳〵にてもはちをみいたきめはみさらましとの給へは四の君誠にことわりといふ母北方見るにそち（帥）は最もの〳〵しく有さまもよけれはさいへとも（さすかになといふ詞と同しかるへし俗に何と云てもといふに當る）やむことなき人のし給へることはこよなかりけりとよろこふかくていとそかし（左大臣殿大饗の事）今参り共その日に二三人まゐりぬいとはなやかなり少將是を見るにも左の大いとのをいみしうおもふはりま（前播磨守景純）の守は國にてえしらさりけれは人をなむやりける左の大いとのゝ北方此君にかう〳〵のことしいて給へり此月廿八日になむふねにのり給ふ其國（播磨）につき

給はむあるしまうけ給へといひたれば守（播磨）よろこび思ふ事限りなしひとつはらの我だにむこどりせむとは思ひよらざりつるを此君は猶われらをたすけ給はむとて佛神のし給ふと思ふ國の守のゝしりて大貮のつくべきまうけし給ふ此かみ母（はゝ北方）にもにでいとよくなむ有ける

○國の守のゝしりて　直麿按に和訓栞に云のゝしる文選に喤呷又軿訇をよめり眞名伊勢物語に訇訇と塡り廣韵に大聲なりと見ゆ今の俗高聲といふ意也罵知の義にや新撰字鏡に聒もよめり或は喠字をよめとも字書に見えす蒼海に喠熊虎聲也と見えたれは是なるへし或は詬をよめりと見えて打まかせてかしかましく人のことをおとしむる事をいへとまたよき方にもいへるはたゝ賑はゝしきかたよりいへるなるへし此もの語一の巻（五十四丁ウ）石山の人ののゝしりてかへりおはしねと有もこゝのゝのしりと同しつかひさまなりこはまさしくいみしといふ詞を善にも惡にもかよはして用ると同し類と見えたり

左の大い殿（落君のことを云）よりわたりしごたち（帥のかたへ御達）今は歸り參りなむと申たれと京におはさむかぎりはつかうまつりはてよ又下らむと思はむ人は參もせよといはせ給へれば是（筑紫に下らんも）もいとくるしき事はあるまじかめれどもしばしの程（四の君）も見るにわか君（左大臣殿の北方）に似奉るへくもあらざめり初よりごたちのみ（宮つかへしてなり）奉りそめて下りなむはいかゞせむ同じ程の殿にだに御心よからむ方にこそつかうまつらめいはむやさらにこよなう萬の事じやうど（淨土）の心ちするわが殿をうちすてゝまからむこそ物くるをしけれとしも（上に）づかへ（下つかへ二人と有）（つくしへ）迄思ひて一人も下らずおとな三十人（左のおほい殿より參らせし人）わらは四人（をのぞきて）下仕へ四人なむゐて（四の君）下るかす（員）に定めたりける日の（下向の）近う成まゝにはらからたちみな渡り集り給ひて今は別をしみ哀なる事をの給ふ人々參り集てさうぞき（四の君の）はなめきたるを見れば大いどの（北の方を云）にうちつぎ奉ては此君（四の君）ぞさいはひおはしましけるといへばこれも誰し奉るぞ御さいはひ（落君の）のゆかりぞかしと口々に云あへりあさ（明後日）

て下り給ふとて左の大いごのに對面し奉らではいかでかとて參り給ふ車のおほからむは所せしとて三つ計してなむうちわたしける北方對面して聞え給へる事共はかゝず思ひやるべし誰も〳〵御供に下る人々に北方いとよくしたるあふぎ甘かひ(螺)すりたるくし(櫛)まきゐの箱に白い(紛)もの入てこゝの人(落君の方の)のかたらひける(御供に下る人)してかたみにみ給へとてさらす御たち(左大臣殿の)もいとおもふ(母君の)やうに心ばせ有て人に思はるゝさうれしくそおぼゆる人(御供に下る人も落君を)もめでたういみじと思ひておの〳〵かたらひ契り(かへり)てかへりて此殿をよしと思へれど彼殿(左大臣殿の)をみつればきしきよりはじめてけはいことに見侍に心こそ移りぬれあはれつかうまつらばやと忍ひつゝ云あへりつとめて御ふみ有(左大臣殿北方)よべは程經ん年のつもりを取そへて聞えむと思ひ給へしを夜みじかき心ちしてはかなう身を知らぬこそ實に思ひ給ふれ「はる〳〵と峰のしら雪立のきてきたかへり逢む程のはるけき　誠に道の程見給へとてまきゐの御そ櫃一よろひにかたつまにはかつげもの一かさねにはかまぐしつゝ今かたつかたにはさうしみ(正身)の御さうぞく三くだり色々のおり物のうちきかさなりたりうへにはからひつの大きさにみちたるぬさぶくろ中にあふぎ百入て打おほひ給へり又ちいさき衣箱一よろひ有此御櫛(四の君)におこせ給へる成へしかたつ方にはこかねの箱に白い物入てすゑちいさき御くしの箱入たりくはしく書べけれどむづかし姫君(左大臣殿の)の御ふみには今日のみと聞侍は何こゝちせむとなむ「をしめともしひて行だにうき物をわが心さへなどかおくれぬ　と有そち見ていとおほくの物共成やいと(是ほど迄になり)かくしも給はで有なむものをといふ御使どもに物かつぐ四の君さらに聞えさせむ(御かへり)かたなくて「しら雲の立空もなくかなしくて別行べきかたもおほえず

給はせたるもの共を人々見るもうれしといみじうものさわがしうてとなむあるむすめの君(四の君)の御かへり是よりも近き程にたに聞えさせむと思ひ給へる程になむおくれぬものはこゝにも「身を分て君にしそふる物ならばゆくもとまるも思はざらまし

となむ有ける北方（落君）へのこよひ（四の君へ）の御かへりをみて母北方なくとはおろかなりかなしうする娘になむ有ける七十に我は成なむとするいかでか六七年いけらむこするあひ見でしなむこと〻なけば四の君いみじうかなしうてされぱこそいかゞとは聞え侍りしひて御（母北のかたの）心さつかはす（筑紫へ）にこそ侍るめれ今はとまり侍るべきにもあらず心つくし（筑紫を兼たり）になおぼしそさり共あひ見侍らではやみ侍らじといへば母北方我やは此事はせし左の大いどのゝし給しかばかなしきめを見せ給はむとてはらぎたなきわざをし給へる成けり何かうれしと思ひけむとの給へば四のきみ今はいふかひなししばしの程にても御手はなるべきすくせこそは侍りけめと云なぐさむ

○御手はなるへき　俗に云手許をはなる〻なり箒木巻にうきふしを心一つにはなれきてこや君かてをはなるへき折

少將世にかく計親子の別はすれどかゝることいひつゞけてなかずかし聞にくしやとせいし居たりそち（帥）は左の大いどのにまかり申（いとま乞に）に參り給へりおとゞ對面し給ひて物語し給ふよそにても心ざし侍りしを今は（今かくか）またらひ侍てはしてなむ

○よそにても　帥の事を大い殿のよそにてたにおろかならすこゝろさし侍りしを今かく聟にとり參らせてはましてもの事なりといふなるへし

其ちひさき人の下り侍らむをらうたくせさせ給へ故おほちどの（父大納言なり父なきとこいへるは四の君の妹のやうにいひなし給ふなり）ゝいみじうかなしうし給ひしかば爰にてもおふしたてん（令生立）と物し侍れど彼母北方一人下るをせめて心ぐるしがりてそへらるゝなめればえとゞめでなむとの給へはそち（帥）たへむ心の限りはつかうまつ（任）らむと云暮方にまう出れば御さうぞく一くだりかづけ給ひかしこき御馬二つ奉り給ふいとこまかにし給へり歸り給て帥四の君にかう〳〵（大いとのゝ）なむの給へるちひさくおはする君はいくつぞとゝへば四の君十一ばかりといらへ給へば老たりと見しおとゝ（帥の詞）（源中納言）のいかにをさなき子をもたまへりけるといふもをかしそち殿（左大臣）の御達

賢くりかり給へる御妻なり
のかへらむには何か給へたるとゝへば四の君何かと
らせむとるべき物もなければといらへ給へばそち(帥)い
といふかひなきことの給ふ此日頃ありく(例につかひて)てただに
歸し奉らむとおぼしけるよとはづかしげにいひて是
はおろかなる心(筆者になされる事天地なるへし)そかしとそちは思ひて殘る物ありけ
るを取いでゝおとな三人にはきぬ四疋あや一疋すは(蘇枋)
う一斤わらは(童女)にはきぬ三びきすはう下づかへにはき
ぬ二ひきすはうそへてとらすればそち(帥)はなさけ有け
りとおもふさて時とりて(日取時取なと云)譲にはいそぎ立ていとさわ
がし北方(母)なくく歸りなむ事(つくしより)を思ひ侘て四の君をさ
らへてなきゐたる程にこがねしてすき箱をころも箱
のおほきさに結べるにくちばのうすもの(羅)のつゝみ(包袱)に
つゝみて入たり(入たるなもてきたりなといへる詞有しなるへし直磨)いづこよりとゝへばたゞおのづか
ら北方御覽ずべきなりと申て
○すき箱　或曰黄金の金織もて中に入たる物の見
え透篋にくみ結たる箱なるへし源氏若葉にすきた
る袋といふ事見えたり契冲綱に結ひたる袋かとい
へり　又曰むすふは即造る心なり花むすひの結に
同し枕草紙十八さしくしむすはせてをかしけなる
もまたうれし
つかひまかりぬと申せばあやしくて見れは(ひらきて)うす物(薄)う
みのいろにそめてしきには敷たりこがねのすはま(四の君)中
に有
○すはま　天徳歌合右方洲濱沈机淺香下机淺縹浮
文織物地敷と見ゆ類聚雜要に圖を載す水次に洲と
濱とある象を造れりまた源氏繪合卷に
ぢん(沈香)の舟ともうけて島に木どもおほくうゑてすさき(洲)
いとをかし物や書たると見れば白きしきしにいとち
ひさくて舟のうきたる所におしつけ(結著)たりはなちて見
れはかく書り「今はとて島こぎはなれ行舟にひれふ
る袖を見るぞかなしき
○今はとての歌　是は萬葉集五に見えたる山上憶
良か松浦佐用嬪かことを詠し得保都必等麻通良佐
用比米都麻胡非爾比例布利之用利於返流夜麻能奈
といへるうたの心をとれり歌林良材これを注して

右欽明天皇御時大伴佐提比古遣唐使にてもろこしへ渡りける時其妻さよひめ名殘をゝしみて松浦山にのほりてきぬのひれをふり其舟をまねきしによりてそれより其山を領巾振山と名付侍り其事をよめる歌なりといへり（是は萬葉此歌漢文の小序をかなに譯さし物なり）直麿按に下に子なと有はと思ひてたゞにやはとてしたる成けりといへるにむかへて見れは四の君のはらに出來たるおもしろの駒かむすめを筑紫へはえつれくたるへくもあらねは行舟をしたひてひれふるそてを見るかゝなしきと詠りしなるへしさらすはこゝにふさはしき歌とも聞えねはなり

聞ゆるからに人わろしよしく〳〵（何かと聞ゆるからに中々人めわろきと云事なり）聞えじと書たりおもしろの駒の手なればおぼえなく（思かけなくて）淺まし誰がしつらむと北方（母）も見て驚あやしがる四の君あはれに云契り（おもしろの駒と）なども例のやうにもせざりしかば（よの常の樣にもなり）思ひ出る事はなけれど是を見るにぞさすがに思ひ出らるゝ少將は是を左の大いどのゝ姫君に奉り給へといへば母北方をかし（此すはまは）きものにこそあめれ猶も給へれどいふめれども四の君も猶萬に（おほいとのゝ姫君は）し給ふめる物をとおもひてより成といふ（奉らんと云なり）少將も猶々（我とは）といひて我奉らむとて取てけりおもしろ（此すはまの事）の駒は思ひ寄さりけれどいもうとゝもの心有ければ子など（四の君のはらに）有ばと思ひてたゞにやはとてしたる成けり夜更てなむ母北のかた歸りけるとらの時にみなくだり（帥の人々）ぬ車十よなむ有けるおほやけのとくまかれと重ねてせむじ下りければ山ざきにもゐたらでやかていそぎ下りけり

○山崎にもゐたらで　土佐日記十六日けふの夕つかた京へ上るついでに見れは山崎の店なる小櫃のゑもまかりのほらのかたもかはらさりけりうる人の心をそしらぬとぞ云なるなと有を見れは任國に下る人の便よければ都いてゝ先こゝにていこへるなるへしこゝにゐたらでといへる俗に云立やすみなどにて居もやらでと云なり

おくりの人々もみなそち（帥）物かづけてなむかへしける殿（左大臣）のごたちみな歸り參りて日頃の物がたり（左大臣との四の君の）我やはせ（かくすへき）じと（事なさは）の給ふことを語ればわらひ（あらはに）になむわらひ給ひけ

る（母）北の方しばしは見ぐるしきまで戀なきけれど日頃
過にければ打わすれにけりそち（帥）ははりまの守待うけ
ていみじういたはり（勞）ける事はかゝず左の大いどの一
所（四の君）はめやすくなしつ今一所（三の君）だにしたてばやとなむの
給ひけるかくて年月ふるにめでたき事どもなん増り
たりける大貳（帥）はたひらかに下りつき（つくしへ）て左の大いどの
に物いと多く奉り給へり左の大いどのゝ太郎十四に
て御かうふり姫君十三にて御裳きせ奉り給ふおほぢ
おとゞ二郎の君をもおとさじとせさせ奉り給ふにち
ゝ大臣かくいごませ給ふとわらひ給ふ年かへりては
姫君うちに參り（入內し給ふなり）給はむとて限りなくかしづき給ふ程
にはかなくて年もかへりぬ二月に參らせ給ふかゝず
共ぎしき有さまおもひやれかぎり（儀式）なくをかしげ（うるはしき也云）にお
はすればいとゝときめき給ふにいとゞ后宮思ひ聞え給
ひつればはじめより侍らひ給ふ人々よりもこよなく
はなやぎ給ふはりまの守は辨に成給ひにけり彼衞門
が男の三河守は左少辨にてなむ有ける衞門は辨の北
方にてあまたの子うみ出ていとおもたゞしくて參り

まかでしけるかゝる程におほき大い殿御心ちなやみ
給て太政大臣かへし（致）奉り給へど御門さらにもちひ給
ねはいといたう老て侍れどおほやけを見奉り侍らざ
らむが悲しさに今迄參り侍りつるなり（內に參り勤給ふと云）今年なむつゝ
しむべき年に侍ればこもり侍らむと思ひ給うるに
○つゝしむへき年 拾芥抄（八卦部）厄年十三 廿五 卅七 四十九 六十一 七十三 八十五 九十九 源氏薄雲卷にことしはのかるましき
としとおもふ給へつれど（中略）三十七にそおはしまし
けるされどいとわかくさかりにおはしますさまを
ゝしくかなしと見奉らせ給ふつゝしませ給ふへき
御としなるにはれ〲しからて月頃過させ給ふ事
たになけき渡り侍りつるに御つゝしみなとをも常
よりも殊にせさせ給はさりけることゝいみしう思
しめしたり同椎下（八宮のことさ）宮はおもくつゝしみ給ふ
へきとしなりけり物心ほそうおほして御行つねよ
りもたゆみなくし給ふ續世繼鳥羽御賀にかくてつ
きのとし御くしおろさせ給ひき御とし四十にたに
みてさせ給はねどもとしの御はいも又つゝしみの
としにて云々後拾遺恭上つゝしむへきとしなれ

はありくるしきよしいひ侍りけれさなど見え　霊枢十八に凡年忌下上之大忌常加七歳十六歳二十五歳三十四歳四十三歳五十二歳六十一歳皆人之大忌不レ可レ不二自愼一也犯則病行失則憂など一定の説ある事なし

（蔵）此そくにてはおほやけのやむ事なからむまつり事に参らては最びんなかるへし辭し奉らむかはりには左大臣（御子 太政大臣に）をなさせ給へ（なさせても不足にもあらしかしさなり）せてけしうは侍らざめりされは翁よりも御うしろみ（おほまつり事の）はいとよくし侍りなむと后宮してもせめて申させ給ひければ（さはかりの事何かは許さらん）御門何かはいきて物し給（いさぶ老たる大臣の）はむこそうれしからめとて左のおとゞを太政大臣にはなし奉り給ふよ人（世）また四十（左大臣）には成給はて位をさだめ奉り給へることよとおとろきあへり御むすめの女御后にゐ給ひぬ宮（后宮）のすけ（亮）に少將（落君の弟）を中將になしてなむせさせ給ひける兵衛のすけたちみなよろこびし（昇進）給ふ太郎兵衛のすけ左近衛少將に成給ひぬ

○左近衛の督　篠崎維章か不問談上に左近衛中將右近衛中將文字の通り讀へからす左近衛はサコンヱとよみ右近衛はウコンヱと讀て右の字をよます平生唱るも皆しかり左衛門右衛門左兵衛右兵衛も皆右の字を唱へす今何右衛門を何ウヱモンとはいはす昔よりの習なるへし

おほぢおとゞわか兵衛の督をおそくなし給ふとの給（太政大臣に昇進）へはいとわりなき事（太政大臣詞 ことわりなきこゝろ）おのれが子の限りをことのはしめ（し給へる初）にはいかゞし侍らむと申給へば是は（祖父 大臣の詞）御子かは翁の太郎に侍れば何かは人のそしり侍らむさきには御太郎の左近衛のつかさに成にしかばこたみ右近衛の少將になせをぢ（伯父）にておひ（甥）に成おとるやうやはあるとの給てよし〳〵しぶ〳〵に思ひ給ふめりとうちにそうせさせ給ひて

○しふ〳〵　此詞源氏若紫巻にまた夜ふかういてたまふ女君例のしふ〳〵に心もとけすものし給ふと有今もよくいふ詞にて氣にそまぬ事をふせうぶせうにする事なりしふは澁の音の轉せしなりといへれど猶澁柿などの澁にて滯る樣なる意なるへし襖障子などのうまく動かぬをもしぶきといふにや

右近衛の少將になし給てかうで（是にてよしとなり）こそ見め此ごとく生

れたらましかば

○此ごとく生れたらましかは　かくのごとく生れたらんには是にこそ我太政大臣もゆづらめとの給ふは此孫の君をかなしう思すの餘りにめてゝの給ふ御戲言なり

是にぞわがつかさかうふりもゆづらましとぞの給けるかなしうし給ふとはよの常なりやおほいどのゝ北方の御さいはひをめでたしとはふるめかしや落くぼにひとへの御はかまの程はかく

○ふるめかしや　直麿按にいふもさらなりなどと有へきをふるめかしやなどかけるかふるめかしからていとをかしき筆勢なり

太政大臣の御北方后の御母と見え給はざりきぞこて猶むかしの人々はみそかごとも云けり三の君を中宮のみくしげどのになむなし奉り給へりける

○みくしげ殿　源氏帚木巻　此子をまつはし給ひて内にもゐて參りなどし給ふわかみくしげどのにの給ひてさうぞくなどもせさせ給ふ河海に御匣殿内裏禁外御服など裁縫する所也順徳院御抄匣人裝束調ずる人を云也

帥そちは任はてゝいとたひらかに四の君のきたるを北のかたうれしとおほしたることわりぞかしかくさかえ給ふをよくみよとや神佛もおぼしけむとみにもしなで七十餘までなむいましけるおほい殿の北方いといたく老給ふめりくどくをおもほせとの給てあまにいとめでたくてなし給へりけるをよろこびの給ていますかりけり世にあらむ人まゝ子にくむなまゝ子なむうれしき物に有けるはとの給ひて又うちはらだち給ふ時はいをのほしきにわれをあまになし給へるうまぬ子はかくはらぎたなかりけりとなむの給ひける死に給ひて後の御わざも只大い殿のいかめしうし給ける衛門は后の内侍に成にけり後々のことは次々に出く〳〵し此少將の君たち一よろこびになむなりあがり給ひけるおほちおとゞうせ給ひにければわれ思はゞならしおとしそとかへす〳〵の給ひければわづらはしくやむ事なき物になむをとうとの君をば思ひ給

ひける左大將右大將にてそつゝきてなりあかり給ける（落君）母北方の御さいはひいはずともけにと見えたりそ（直）（殊）（師）ちは此殿の御德に大納言に成給へりおもしろはやまひおもくてほうし（僧）に成にければおとにも聞えぬ成べし彼てんやくのすけ（助）はけ（蹴）られたりしをやまひにて死にけりこれかくておはするをみず成ぬるぞ口をしき（落君の今は北方にて　てん薬に見せず）なさて餘りけ（蹴）させけむしばしいけて置べかりける物をとぞ男君の給ひける女御の御けいし（家司）にいづみのかみ成て御とくいみじう見ければむかしのあこぎいまは侍内のすけ成べし此内侍のすけは二百まていけるとかや

おちくほの物語四巻何人のつくりたるを知らずある人のいへるはこや貞信公のきん達實頼師輔の御はらからのいとわかうおはすよりきそひたちてなりのほり給へる事を此御はらからのわか君たちのおとらずつかさ位すゝろき給ふにもてつけてかきたる成けりとなむそはさる事にしもあらめど其わたりの事のみをもておぼしかむがうべくもあらず

かゝるふみは人ひとりのうへをらうたうかたじけなきものにいひはやさむとする程にいにしへ今にもをちこちにもあるは人の國のかしこきためしをさへ取まじへて云あへるなれはいつの世の事誰御うへともさだ／＼とはいひあつまじきそれなむかうやうのふみつくる人のをさ／＼しうかごあるものとこそ聞えたれからのふみにもかゝりとぞ聞ゆさはしひごとしてまさしげにことわりたるぞかへりてはしれがましきぞとものしりの翁たちはいはれたる此おちくぼの君のひとゝなりをはじめをはりつぶ／＼とよみかへして見ればあないみじあなめでた是よりさきの物語にも後なるさかしぶみにもかゝる人なむあらぬとおほしきはまづよごゝろつかぬより身幸ひなきをふかうおほしおきてし御まゝ母の世にたぐひなくさがなき御心ざまのあからさまなるをもかたへの人のいふなるをさへとかくにいひけちつゝなよびかにおほせごとつゆたがはじとものし給ふには身のよるべも何もすくせとのみおぼしのどめていさゝかもえむじ給ふけしきなく見ゆめるも岩ほの中のすみかもとめまくひさ

りごたるゝにこそ人をも身をもつらしとおぼさぬにはあらざめれ御男に思はれそめてよりぬすまれ奉り引かへかしづかれ給ふはよきむくいとこそみゆれなさかは昔の事恨しうも思し出べきを御男のいみじきあたがたきして御心の限りあきたくし出給ひかつは女君の御心をもとりてましとおぼしはかる成べきをかへりてものしとのみ思しなげきつゝ父の中納言殿御まゝ母三四の君の御方々のいかに侘しうない給ふらむなどいとせめて思し歎き給ふ年月も久しかりけり三條の家とりかへし給ひて後はよきむくいのみしつゝ御方々の御心をなぐさめをのこ女子はらからの限りつかふる者のすゑの末々までも立をどりゑみさかゆべきことをのみなむして代のそしりをも口ふたがせ給ふ御ふるまひをことなううれしとおぼししみたるいとめでたき御ほむじやう成けり又かたのゝ少將のたばかり寄れるをも大空の風に聞なして御男ひとりをあながちにうちたのみ給ふ御心ばへなどはくらぶるかたも有へきを右のおとゞの御むすめのうち／＼なる事聞知りても人をつらしともいさゝかもおぼしよらぬさまのいみじさよ野邊のをみなへしの只一時くねりざまなるそれあらずは女にては見奉るまじきあて人とこそいふべかりけれさるはらうたげにごめいて御みさをのすぐ／＼しき計かはたなばたづめの手わざたつ田姫のいそしさをも取ぐして世のほまれとらせ給ふなむいと有がたかりける人の御物語成けり其御かたち心ばへをもおしはかり奉らするに彼ほうげづきなき吉祥天女をむかへ取たりとや御男君はおしいたゞきもてかしづき給うなるべき此御男君も君より外には秋のゝの花々に御心うつらずして此御心をのみとり給ふにかたみにじねむにをさめられて女君のいみじうめでたきほまれを取給ふよと思へば此二かたの御心をなむ河渕の鳥の遊したるかしこき君の御たぐひ成けるをよくよみてよく心得ば高き御あたりをはかけていふまじく民草のとものおのかあやしきゝざみ／＼までをしへかしこきまめぶみともあふくべかんめりける伊勢源氏の物語共の文にも歌にもくらふものなくさかしきは有れどよくよみてよく心えずはむげにうたてきわざもおほかりなむむかし此物語

なむひとりひじりだちたるふみのつらにもとりく
はへてむにやくなき物ぞとはかしこき人もいふま
じかりけりあないみじあなめでた南禪寺の山内何
がしの庵のやどりにてかうがへしるしぬ

難波人みなもとの秋成

室松岩雄
保持照次
井上頼圀
校

明治四十二年八月廿五日印刷
明治四十二年八月三十日發行

定價金參圓

著作權所有
不許翻刻複製

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里半七
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷者　遠藤廉治
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所　公木社

東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行所　國學院大學出版部

電話番町五百五十八番